

気持ちのいいバカ（偽物）をブチ込んでみた

王勇を示す者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゆゆゆなんか暗くね？暗いよね?!眩しいやつブチ込んだろ!と
なって思いついた話です。完全に自己満作品です。

※尚、作者はゆゆゆにわか&初投稿とする。

それでも良かったら読んでいって下さい。

ツイッター始めました。▼<https://twitter.com/gfsBlkBhCZwOjv4?tmxckitl5k2>
| OEOWk3lzQ5Q&sll09

質問箱作りました。私の活動報告からどうぞ

本編は完結しましたが、これからも更新していきます。

目次

鷲尾須美は勇者である

プロローグ 1

目覚め 4

転校生 8

印象 13

常識 16

友情 23

当然 31

御役目 37

対策 48

違和感 51

最善の結果を 60

いつも通り 64

休日 69

帰還 78

????
は勇者である

記憶 85

頂点 88

親密 93

不和 99

髪飾り【閑話】 105

対話 113

作戦会議 121

特訓 125

オンリーワン	320
連携	314
家凸は連絡してから	303
誰かの誕生日【閑話】	297
事情説明	291
愚者の剣	286
アスレチックスガチ勢	278
▼情報が更新されました。	275
ある日の一コマ	269
誓いを此処に【番外】	261
暖かな	247
アンカーへ	243
王道踏破	
託す	228
終着	215
この一時だけでも	206
価値	196
歪み	190
狂宴	182
誇り	174
真価	165
勇者王	158
シオン	149
遠征	141
持久戦	134

無茶苦茶

331

耐久テスト

334

夏休み

339

新システム

354

オニユリ

362

度し難い怒り

374

▼情報が更新されました。

383

これから

385

奇跡の始まり【エイプリルフール】

394

友達がない日々

403

違う道

407

結城友奈は勇者である

勇者部発足

411

仲良くするのが一番

416

灯火√【1】

421

お花見

429

造花

434

バカに見えて実は頭いい奴

438

放送部出身。あれ？

445

めでたい日には美味しいものを

450

志

456

人形劇

460

非日常へと

466

優しい嘘

470

仲良し三人組

475

勉強会

根は良い子なんです。

うどんは控えよう！【番外】

厳しいより緩いほうがいいよな

真意

にぼにぼく

一人で立ち上がらずとも

世を輝かせる者

代償

行動開始

曖昧な答え

譲れないもの

偉大なる皇帝

覚悟を示す

目一杯の花束を貴方に

凱旋

愉快的同居人

男女比率おかしくない？

いつかの景色

王たる風格

お祭り

先代からの洗礼

勇者王決定戦【番外】前編

勇者王決定戦【番外】後編

勇者王決定戦【番外】後編2

481

485

489

496

504

515

525

535

549

558

567

575

582

590

597

603

607

620

632

639

647

653

660

673

勇者王決定戦【番外】後編3	686
星を眺めながら	697
聖騎士帝	704
違和感	712
称号剥奪【閑話】	720
天の神打倒RTA【100話記念】	728
幻想を宿した勇者【100話記念・その他の部】	751
忘却を禁じる	757
伝言	766
正義の味方	769
人としての願いを【番外】	782
空は巡らず	789
地は巡る	797
崇りの真髄	801
夢現	807
暗闇の中でさえも	816
決断	823
真偽	829
排斥された者	836
役を羽織る者	843
勇者の剣	846
夢の続き	854
輝かしい空	859
目一杯の花束を貴方に	865
設定資料集	878

いつまでも続く喜び

灯火√【2】

花結いのきらめき【1】

花結いのきらめき【2】

花結いのきらめき【3】

花結いのきらめき【4】

花結いのきらめき【5】

花結いのきらめき【6】

花結いのきらめき【7】

担い手は此処に独り【i f√】

花結いのきらめき【8】

花結いのきらめき【9】

花結いのきらめき【10】

花結いのきらめき【11】

花結いのきらめき【12】

手の鳴る方へ【蛇足】

託された者達のお話【閑話】

花結いのきらめき【13】

花結いのきらめき【14】

花結いのきらめき【15】

夏祭り【ひなた√】

私だけの色彩【園子√】

贖罪と共に【タマ√】

花結いのきらめき【16】

花結いのきらめき【17】

花結いのきらめき	【18】
花結いのきらめき	【19】
花結いのきらめき	【20】
その運命を【杏√】	
Material book	【一周年記念】
花結いのきらめき	【21】
花結いのきらめき	【22】
最期ぐらい【閑話】	
花結いのきらめき	【23】
花結いのきらめき	【24】
花結いのきらめき	【25】
ハッピーハロウィン！【謎時空】	
未だ青空は遠く【if√】	
花結いのきらめき	【26】
幻想の騎士へ【銀√】	
花結いのきらめき	【27】
花結いのきらめき	【28】
花結いのきらめき	【29】
鳴子百合が咲く時期になりましたね【樹√】	
美しき舞う花と黒き勇者【上】	
美しき舞う花と黒き勇者【中】	
美しき舞う花と黒き勇者【下】	
花結いのきらめき	【30】
花結いのきらめき	【31】
意匠を凝らした火鉢【番外編】	

愛しき貴方達へ【閑話】	—
神代の夜明け【蛇足】	—
愛されたいと願うのは【高嶋✓】	—
花結いのきらめき【32】	—
愛の渡し方【千景✓】	—
花結いのきらめき【33】	—
甘ったるい【番外編】	—
花結いのきらめき【34】	—
笑顔で昔の話を【蛇足】	—
花結いのきらめき【35】	—
友達だからこそ【友奈✓】	—
花結いのきらめき【36】	—
花結いのきらめき【37】	—
花結いのきらめき【38】	—
花結いのきらめき【39】	—
カツコつけたがり屋の——【東郷✓】	—

鷲尾須美は勇者である プロローグ

「ん、う？」

何だ、この一面真っ白な空間。ってか何でこんなところで俺は寝てたんだ？記憶がねえな。別に謎の黒組織を尾行してたとかじゃないしな。

「やっとな来たか」

「うおっ！」

さっきまで俺以外誰もいなかったが、何処からか話しかけられた。

「そう驚くな」

「そう言われましても」

突如出現したお爺さんのような人、警戒しない訳がなく。

「別に取って食ったりはせん」

「じゃあ、いいです。」

とりあえず、このお爺さんから敵意は感じない。警戒する必要はないだろう

「貴方は此処がどこかわかりますか？」

「さあ？」

「????」

なに、この人。此処の住人だよ的な感じで出てきたのに知らないって。このお爺さんボケてんな。

※良い子の皆は、高齢者を敬おう！

「まあ、言うならば、精神と時の部屋のような場所だ。」

「精神と時の部屋？」

「ドラゴンボール知ってるか？」

「知りませんけど。」

ドラゴンボールというアニメがあるのは知っているが、どんな内容

かはわからない。技名も聞いたことはあると思うが覚えていない。

「アニメはfateしか知りませんね。」

「偏ってんな」

なんだこのお爺さん。アニメ類に詳しくすぎないか？ちよつと、正体を探ってみたくなってきた。

「貴方は誰なんですか？」

「通りすがりのお爺さんです。」

「アニメに詳しい？」

「アニメに詳しい通りすがりのお爺さんです。」

なるほどな。絶対ただのお爺さんじゃないわ。

「はいはい。無駄話終了。本題に入るぞ」

「通りすがりのお爺さんに本題があるんですか？」

「たまたま本題がある。よく聞けよ」

「了解です。」

先程までのおちやらけた雰囲気が一変したため、聞く体勢を作る。

「お前は死んだ？[?]よつて、第二の人生に行つてもらおう。」

「は、はあく。」

待つて、俺死んだの？死んだ記憶ないんだけど？

いや、このお爺さんが嘘をついている可能性がある。そもそも、これが夢の可能性がある。

「その際になにかお前にギフトをやろう。なにがいい？」

「ギフトとは？」

贈り物。中身はなんだろうか。

「特典と言つたほうがいいか？」

「？」

特典とギフトになにか違いがあるのか？

「はあく、じゃあ、憧れの者はいるか？」

「憧れ。」

なんだこの、面接に聞かれそうな内容は。

憧れ、憧れか。特にそういつた奴は――

『もんじよわくくくく!!!』

「——シャルルマーニュ」

「ふっ。であれば、それがお前への着名だ。精々足掻け。」

「ギフトって・まさか!？」

まさか、モルガンがした着名のことなのか!？」

「では、さらばだ。」

「急になに、を・はアアアアア!？」

お爺さんが指を鳴らした瞬間、俺が立っていた床が抜け重力に従い落ちる。間抜けな叫び声と共に。

「それではな、?? ??。貴様の旅路に縁と奇跡があることを願っているよ。」

これから語るはシャルルマーニュが巡る冒険譚ではなく、英雄譚でもない。されど、勇者達の物語でもない——とは言い切れないが、これは最高にカッコイイ物語である。

目覚め

ジリリリリリ

「静かに——しろっ！」

鳴り響く目覚まし時計をいつもと同じように少し力を入れ、停止ボタンを押す。今度は鈍い音が部屋に響いた。

「ん、んくっ！」

布団から立ち上がり、体を伸ば——そうとした瞬間足に痛みが走る。どうやら、足でナニかを踏んだようだ。足を上げ、踏んだナニかを確認する。

「機械の部品、か？」

地面に落ちている一つの欠片を拾い、目元まで運び観察する。見た感じ機械の部品。それも針というところから時計の部品だと推測する。

更に周りを見渡す。どうやら、この一つだけでなく何個も落ちていようだ。そして、発生源である一箇所を見つけた。

「時計がぶっ壊れてる。」

推測通りこの部品達は時計の一部のようだ。このぶっ壊れた時計のな・いや、なんで？」

「俺が？ いやいや、そんな力込めてないし。」

そもそもこの腕にそんな力ある訳、ない。俺の腕、ですよね？

いつものヘニョヘニョしている腕ではなく、がっちりしている腕がついている。時計を壊したと言われても納得出来るほどの力強さだ。

「顔洗お」

しばらく壊れた時計を見て思考するが、どうすることも出来ないため、顔を洗うことを選択する。

そして、扉を開けて廊下に出て肝心なことに気づく。

「洗面所どこ？」

洗面所は寝てた部屋と同じ一階にあった。まだ確認はしていないが、この家には二階もあるようだ。

「んっ？」

顔を洗おうと洗面台の前に立つ。洗面台には当然、鏡があつて自分の顔を見ることになる。

明らかに違う。これは俺の顔ではない。

「シャルルマーニュ、だな。」

どういうことだ？なにが起こっている？

まずは状況を理解しよう。朝、目が覚めると体がシャルルマーニュになつていた。字面やばいな。

「んっ、んっ、これは」

歩きながら頭を唸らせていると、いつの間にかリビングのような場所に來ていた。そして、一通の手紙が机に置かれていることに気づく。？

「んっと、どれどれ。」

封を開け、手紙に書かれている文字を読んでいく。

シャルルマーニュへ

急で悪いが、君にはその世界でシャルルマーニュとして頑張つてもらう。衣食住は心配せずとも、その家に全てがある。何処かのダンスに通帳もある。

今の君は神樹館に今日から転校する小学六年生だ。どのように生活しようとも私は構わない。存分に人生を謳歌してくれ。

偉大な者より

「色々聞きたいことあるけど、どうせ、質問出来ないんだらうな。」

仕事押し付けて先に帰る上司みたいなことしやがって。まあ、俺に

とつても得だし素直に受け止めよう。

俺が人生で後悔してること——即ち、青春！

勉強尽くしの俺は高校まで親しい友達を作らず、恋人も出来なかった。出来ない、ではなく出来なかっただ。そうだと俺は信じてる。

第二の人生？である、この機会を無駄には出来ない！目一杯楽しむぞ！

「つとその前に」

神樹館とはなんだ？文面から小学校だということは理解出来る。だが、何処にあるのかは知らない。よって、迷子にならないために調べないといけない。

どうやって？そりゃあもちろん、スマホで。スマホがないな。いや、そんな筈はない。こんな現代でスマホを所持してない訳がない。思い出せ、これまで歩いてきた経路にスマホがありそうな場所は「つー！」

「寝室！そう、寝室だ！」

寝室に置いてあったスマホを起動する。ロックはないようで、スライドするとホーム画面へと移る。

「神樹館、つと」

Googleで検索エンジンをかけ、神樹館への経路を探す。そんな中、不可解な一点を見つけてしまった。

「四国、だけ。」

日本が四国以外存在しない。いや、もしかしたらそういう設定がなされているだけ。だと思ひ込む。今は神樹館への経路を探すのが優先だ。

「おっ、こっから真っ直ぐでいけんのか」

最短十五分。一直線に進むだけの道を発見した。

この地域の土地勘がない俺にとって、一直線というのはとても有り

難い。ここは近道をせず、一直線で神樹館へと向かうことにする。
道を決めた所で次だ。

朝起きて取ることを言えば、そう、朝ご飯だな。腹が減っては戦は
できないと言うしな。まっ、俺はそこまでお腹減ってないけど
そんなことを思いつつ、リビングに隣接していたキッチンへと向か
う。

「空だど!?」

キッチンに置いてある冷蔵庫の中身は空っぽだった。食料品に限
らず、飲料水すらも置いてない。

「しようがない、な。」

朝抜いただけじゃ、死にはしないし問題ないだろ。ここは制服を着
て、早めに出発しよう。転校初日に遅刻なんて嫌だからな。

ガス栓オツケー。コンセントオツケー。鍵オツケー！指差し確認
完了。それじゃ――

「――出発！」

ここから俺の新たな人生が幕を開ける。今度こそ、青春というもの
を謳歌してみせる。

転校生

「迷った」
!?

「あつれえ？確認してきた道を歩いて来たと思うんだけどな。土地勘がないってのはこれ程までに恐ろしいことだったのか」

「やつべえ、五十分だ」

「いやあーない、人に聞くか。三十歳近くになって迷子になるなんてな。人生は予想できないもんだ。」

「んっ？小学生（推測）で制服」

「もしかして神樹館の子か。いっちょ聞いてみるか。これで中学生だったら謝ればいいし、当たって砕けてやるぜ！」

「なあ、そのアンタ。ちよつといいか？」

「アタシか？」

「ああ、これ？完全に事案やん。何かシャルルマーニュの言葉に翻訳されたんだが、こういう時はもつと丁寧にしてくれよ、王様。」

「神樹館に行きたいんだが、迷つちまつてな」

「ああ、それならこのまま真つ直ぐ行けば、すぐだぞ」

「おお、マジか」

「道は一応、あつてたのか。ただ、ちよつと俺にGoogle先生を信じる心が足りなかった、うてことか。」

「心配なら一緒に行くぞ？」
「いや、そこまでしなくても大丈夫だぜ！」

「うーん、この元氣ハツラツ感。ヤバいな（主に羞恥心）。この先ずつとこのテンションで行くなら、必ずいつか俺が羞恥心で破裂する。」

「じゃ、俺はここで」

「おう、気をつけてな！」

「この恩、忘れねえからな！」

「こんな優しい子に会えるなんて運がいい。まあ、シャルルマーニュ

は幸運Aだから当然だな。

「そこまでしなくとも」

何か後ろから聞こえたような気がしたけど気にしな—い。

当たり前のように良いことをする奴は好きだが、そいつになんの対価もないのは気に食わん。いつか絶対に返すさ。

「こりゃあ—、驚いた」

う—ん、デカイ！説明不要。まさかここまでデカイとは想像つかなかったな。

「確か、職員室に行けばいいんだっけな」

ランドセルに入っていた学校の見取り図を見ながら進んでいく。顔が顔を為か視線を集めながら、在校生と共に校舎へと入る。

「……か」

いやあ—久しぶりだな、職員室に来るの。まあ俺は優等生だったから来る回数は少なかったがな！来る理由としては家族関連とか奨学金関連だったけな？

「失礼しま—す！」

「入っ—ていいですよ。」

頼む、頼むぞ、シャルルマーニュ。王様は礼節もしつかりしてるとんだよな!?

「今日、転校してきたシャルルマーニュです。」

よしっ、よしっ。いいぞっ！これなら、セーフだな。シャルルマー

ニユはやれば出来る子だと信じてました！

「貴方が」

「？」

何だ。もしかしてセーフじゃなかった？通知表に礼儀がなっていない生徒とか書かれちゃうか？

「いや何でもないわ、ごめんなさいね。」

「それなら、良かったです！」

「自己紹介がまだだったわね。私は6年2組を担当する安芸よ、よろしくね」

「よろしくします、安芸先生！」

厳しそうな人だけど、生徒の話を真摯に聞いてくれそうな先生で安心したわ。これなら、何とか第二の学業もやっていける。

「そろそろ時間ね。シャルルマーニュ君、行きましようか」

「了解です。」

シャルルマーニュ君って、めっちゃ違和感あるな。もうちよいフランクに話してくれたら、俺も気分的に楽なんだが。

そう思いながら先生の後をついていく。

「私が入っていいわよって言ったら、入って来てね。」

「了解です。」

そんなこんなしてたら、いつの間にか着いてた。安芸先生は俺を残して教室に入ってたし、ここで俺が帰ってもバレなくね？まあ、流石にしないけどな。

一人で廊下で立っている間、どれが一番カッコよく自己紹介を考えしておく。

へ入っていいわよー！

よし、来た！俺が考えた最高にカッコイイ自己紹介見せてやんよ！

「教室に入ると「おおー」「イケメン」とか聞こえるけど、全部無視。少し恥ずかしいな。」

「自己紹介してもらえない？」

「了解です。」

「聞いて驚け！見て驚け！そして一生忘れないでくれ！あと友達にもなってくれ！」

「オレの名前はシャルルマーニュ！」

「気軽にシャルって呼んでくれ！」

笑顔を忘れずに！そしてここで魔力放出（光）を発動する！
教室が光に包まれる。

「うわっ！」

「きゃっ！」

「眩しすぎるっ！」

よしっ！これで孤立は防げれる。やべっ少しやりすぎたか？

「ギリギリセーフ！——つてか眩しっ！」

「おおっと。すまない」

慌てて魔力放出を止める？

「んっ。どこかで見たような。」

「ん。あ、あぁー！」

あれ？この子は。もしかして、さっき会った。

「朝？道尋ねてきたやつじゃんか！転校生だったのかよ」

「おうともよ！」

「やっば、そうだよね！朝の子だよな。いや待て、何でこの子、遅刻してんだ？あそこからなら余裕を持って着ける筈なんだけどな。」

「えーつと、名前。何だっけ？」

「そーいやあ、自己紹介まだだったな」

「アタシの名前は三ノ輪 銀！」

「オレはシャルルマーニュ！気軽にシャルって読んでくれ！」

「今度は光抑えめで。目眩ますが本来の用途ではあるけれど、今はそれが目的じゃない。」

「シャル、よろしくな！」

「おう！銀、よろしくな！」

うおー！友達みたいでいいなこれ、いいなこれ！

「仲良くしてるとこ悪いけど、三ノ輪さん遅刻よ」

「あいてっ」

まあ遅刻は遅刻だし、しょうがないな。明日は気をつけましょう！

「あとシャルルマーニュ君、あの光るのもうしないだね」

「アツハイ」

まあ正直、やりすぎたよね。反省します。でも、後悔はないです。

てことで、俺はシャルルマーニュとして無事神樹館と言われる結構なお坊ちゃんお嬢様学校に通うことになった。俺はここで友達10

0人作ってみせる！

印象

「なあちよつといか？」

朝、いつも通り学校へ登校していると、突然話しかけられた。

ああ、いつものか、と思いつつ声のした方に振り返ると――

「――!？」

――整った顔立ち、空のように青い目、髪は黒いが一部分だけ白のメッシュが入っている。一瞬、心がトキメキかけたが、人を見た目だけで決めるのはいけないと思い、踏み留まる。

「アタシか？」

心を一旦落ち着かせる。

「神樹館に行きたいんだが、迷っちゃまってな。」

「ああ、それならこのまま真っ直ぐ行けば、すぐだぞ」

「おお、マジか。」

制服、質問内容を考えると神樹館への転校生かな。?

「心配なら一緒に行つてやろうか？」

「いや、そこまでしなくても大丈夫だぜ！」

うっ、眩しい！

「じゃ、俺はここで」

「おう！気をつけてな！」

「この恩、忘れねえからな！」

「そこまでしなくても。」

この火の玉ガールのアタシに負けず劣らずの活発さだ。これはアタシも負けてられない。火の玉ガールとしての力を見せねば。

朝。今日行かう社会の小テストを作っていた。

「失礼しまーす！」

扉が開き、元気な挨拶が職員室に響く。

「入っていいですよ。」

「今日、転校してきたシャルルマーニュです。」

・シャルルマーニュカロルス・マグヌス・神世紀以前の外国の名前

・経歴が全て謎に包まれている。

「貴方が。」

神樹様が『御役目に取り込むべし』と先日、神託が大赦の巫女に降りた。彼には当然、勇者適正値はない。なのに何故……

「？」

「いや何でもないわ、ごめんなさいね。」

「それなら良かったです。」

「自己紹介がまだだったわね。私は6年2組を担当する安芸よ、よろしくね」

「よろしくします、安芸先生！」

左の席の乃木さんは寝ていて、右前の席には誰も座っていない。そんないつも通りの朝のHR——

「——今日は転校生がいます。」

——どうやら、今日は少し違うようだ。

「入っていいわよー！」

「。」

そこら中から歓声上がる。特に女子から。

「自己紹介してもらえらるっ！」

「了解です！」

「オレの名前はシャルルマーニュ！気軽にシャルって呼んでくれ！」

そう言い、笑う彼は太陽のように明るかった——瞬間、教室が光に包まれた。

「きゃっ！」

何これ!?目が開けられない!

「ギリギリセーフ！——つてか眩しっ！」

「おおつとすまない。」

少しずつだが、目が開けるようになってきた。先の光は何だったの
だろうか。・ 比喻でもなく、あれは完全に輝いていた。

「んっ?」

「あぁー！」

・ 何かあったのだろうか。

「さつき、道尋ねてきたやつじゃんか！転校生だったのかよ」
「おうともよ！」

話の内容からして、既に会ってたということかしら？

「えーつと、名前。何だっけ？」

「そーいやあ、自己紹介まだだったな」

「アタシは三ノ輪 銀！」

「オレはシャルルマーニュ！気軽にシャルつて読んでくれ！」

また、あの眩しいのが来ると予想して、目を瞑っていたが、今度は
ポカポカするような光だった。

「シャル、よろしくな！」

「おう！銀、よろしくな！」

今度は歓声ではなく、怨念じみた視線がシャルルマーニュ君へと向
けられている。

「仲良くしてるとこ悪いけど、三ノ輪さん遅刻よ」

「あいてっ」

「あとシャルルマーニュ君、あの光るのもうしないだね」

「アツハイ」

どつと笑いが起きる。騒がしくなるなぁーと、隣でまだ寝ている
乃木さんを見ながらそう思う。

「ぐえっ！」

「「」」

「すげえスピードで当たったけど大丈夫か、あれ？」

「「えええ!!」」

「——うるっさ！」

「すげえなシャル！」

「どうやって投げたんだよ!？」

「何かスポーツ習ってんのか？」

「ええーい！一人ずつ喋ってくれ！」

その後、ちゃんと一人ずつ質疑応答していった。

「ふうー、やっと終わった。」

ただただ暇だった、社会はあの後普通に、弥生時代からしたし、他の授業は何も変わりなかった。知ってる事をやってもただ退屈だった。

「さてと」

ええつと買う物は、時計、食料、世界地図、歴史の参考書、ぐらいか？店は家出た時、見えたドデカイショッピングモールにするか。「さっさと帰るか」

バッグを肩に掛け、帰る支度をする。

「シャル、ちよつといいか？」

「んっ、銀じゃんか、どうしたんだ？」

「この神樹館の案内をしようと思ってるな」

「そりゃあ、有難いけどいいのか？」

学校全体を完全に暗記してるけど、断るのも悪いしな

「おう！友達だからな！」

「じゃあ、頼んでいいか？」

「アタシに任せなさい！」

いやあ、最近の子は優しいな〜！

「ここが音楽室。ここが調理室。ここが図書室。ここが2つ目の音楽室。」

「なあ銀」

「なんだ？」

「もう5時になるが、大丈夫か？」

「私は平気だけど、もしかして用事あつた？」

「いや、そろそろ悪い気がしてきてな。」

「気にしないでいいぞ。」

「いいーや！オレが気にする。」

「そうか。」

ちよつと、しょんぼりしてるけど、これはなんもかんもこのドデカイ学校が悪い。

「後はオレ一人で見て回るから、銀は先に帰っていてくれ」

「そういうことなら。」

「いつか、必ずお礼するからな！」

「うん！楽しみにしとく！」

走り去っていく三ノ輪さんの後ろ姿を見つつ、絶対に喜ぶ物を準備しなきゃな。

「さて、適当に探索するか。」

十分ぐらいしてから、帰ろ。

「やっぱ、でけえな。」

俺はシヨツピングモール『イネス』へと来ていた。うーん、でかい

な！

「さて電化製品はつと。」

お金は余るぐらいには持って来し、ささつと買って帰ろう。

「2Fか。電池、忘れねえようにしなきゃな」

このシヨッピングモール、迷子になるぐらい広いな。まあ、流石に
もう迷子にはならないけどな。

「時計、時計つと」

めつちや種類豊富だな、どれにしようか迷うな。

「まあこれでいいか」

二千円程度の物を買ひ、どの電池がいいか箱の後ろにある小さい文
字を読む。

「アルカリ乾電池。単2形か」

これもちやちやつと買ひ、次は、本屋が近いし、参考書とあれば世
界地図を買ひに行くか。

「おつ、あつた。」

参考書と言うよりは辞書だな。めつちや分厚い百科事典だな。こ
れ、全部で14冊か。重いだろうが、まあこの肉体なら大丈夫だろ。

「よい、しよつと」

樂ちんだな、この肉体。

「あとは。」

世界地図だけだな。一周してみるか。

「ないな」

世界地図は置いてないか。しゃーないお会計して次に行くか。
いや、一旦帰るか。手荷物が多すぎて、食料を持ってないだろうしな。

「よしつ、行くか。」

一度帰り、荷物を全て置いて、再出発だ。

「今日の献立は、カレーでいいか。」

献立も決まった事だし、ささっと買ってくるか。

「イネスじゃなくても別にいいか。」

今の時間だとショッピングモールみたいなデカイ店は大行列だから、
な、小さい目の店で買うことにするか。

「ふうー、食った食った。」

食ったはいいものの、何故か腹が満たされない。うーん、もしかして俺、霊体か？

「まあ、そっちの方が便利か！」

つまり、霊体化も出来る。これで幽霊屋敷で働けるな。
途違うな、これ。絶対

「あつそうだ。」

シャルルマーニュなら、この剣だよな！

「——ジュワユーズ！」

そう叫ぶと手にジュワユーズが現れる。

「おおっ！カッコいいな！」

何故だか、めっちゃ手に馴染むな。

「よおーし！それなら集え、——十二勇士よ！」

シーン

「あつれえー？」

今度は何も反応しない。あの擬似勇士が見たかったんだがな

「まあ、しゃあないか。」

俺は本物じゃないしな。ガワだけが本物なだけだから

「さてと。」

次は、この世界について調べてみるか。あつちゃんと片付けしたよ。そのままだったらやばいからな、いろいろと。

「変わりなしか」

その後、百科事典全14冊を読んだが俺の世界とやら変わりはなかった。

「こうなったら」

最後の手段を使う時が来たようだな、俺の秘密兵器。その名も――

――Google先生!

「まずは神世紀についてだな。」

神世紀について調べて分かったこと、今が神世紀でいう298年であり、2317年であるということ。

「つまり、2019年から元号が変わったのか」

元号が変わっているのはいいが、何で『神世紀』なんだ。f a t e
で言う、神代に戻っちゃったのか?

「次は四国しかない理由だな」

検索してみると、そこには――

「コレは、事実なのか?」

ウェブには未知のウイルスが四国以外で満ち溢れていて、人類はウイルスから守ってくれる神樹様の中で生活している。そして、神樹様に仕えているのが大赦だという。

「本当に神代になっちゃまってるじゃねえか!」

こりゃあ凄いな。レアメタルとか外国に頼りきりだった資源はどうしてんだろ。めっちゃ気になる。

「今日はもう寝るか」

明日も学校だしささっと寝て明日に備えるか。

友情

神樹館に到着したのが7時30分、まだ教室には誰もいない。ちよつと早すぎたか。

「暇だな。」

「こういう時、何してたっけ。ああ、勉強か。」

「」

「俺はシャルルマーニュ。俺はシャルルマーニュ。よし！何かカツコイイ事するか！」

「こういう時は」

「テラリンクのマイルーム（みたいなもの）の時みたいに姿勢ピシッ！って待機しとくか。」

「おはよう！北野！水野！」

最初に来たのは今日、日直の北野君と水野さん。いやあー、真面目ですなあー。俺なんてただただ勉強の邪魔だと思つて、嫌がつてたなあー。

「おはよう！鷺尾！」

「ええ、おはよう」

この人が、このクラスの委員長ポジションの鷺尾さんですか。何にもないのにこの早さで来るのは流石としか言いようがない。

その後も来た人に挨拶して、暇を潰していいいた。やつぱ最初の交流は挨拶からだな。昔、買った『友達の作り方』を讀んどいて良かった。

「まあ、友達は一人しか出来なかったけどな。」

「おはよう！乃木！」

「そう挨拶した瞬間、何故か教室がシーンとした。」

「おはよう、なんよ〜」

「皆、ハラハラしたようにこつちチラチラ見てるけど、何かいけなかつたか？」

「シャルは朝から元気だね〜」

「いつも明るくを心情にしているからな。」

「授業中とか眠くならない？」

「うーん・ないな。」

内申点確保のために授業は真面目に受けてた。

「私、授業中うとうとしゃうんよ〜、何かコツとかあるん？」

「コツかあ〜」

コツと言われても、内申点がめっちゃ欲しくてやってみました。って言うっても小学生には内申点分かんないだろし。あっそうだ！

「俺だったら、ずーっと、円の面積求めているな。」

「どんな感じに？」

「半径設定して、3. 14 にかま〜くつてる。」

「例えば、例えば！」

「半径2. と設定して、12. 56. とかな！」

「まあ、中学になってπがでて意味なくなったんだけどな。」

「シャルはすごいね〜」

「」

「危ない、危ない何か目覚める所だった。なんというか、ゆつたりしてる子だな。」

「またね〜」

「おう！」

乃木さんが席に戻り出した瞬間、また教室がガヤガヤし始めた。

「何だ？もしかして乃木さん、裏番長？」

「いや、ないな。」

その後も挨拶し続けていると、登校時間は終わり、安芸先生が教室に入ってきた。

「皆さん、おはようございます。」

「「おはようございます。」」

「それでは出欠をと——」

ん。何か、廊下からめっちゃ走る音が聞こえる。

「ギリギリセーフ！」

「いえ、遅刻ですよ。三ノ輪さん」

「あいてっ」

どつと、教室中が笑いに包まれる。これが定番ネタなのか？

「それでは出欠をとります。」

毎回、遅刻してるのか。そんな不真面目には見えないけどな。もしかして、何かトラブルに巻き込まれている。俺の唯一無二の親友を見習って尾行するしかないな。まあただのストーリーカーなんですけどね。

「——シャルルマーニュ君」

？

「はい！元気です。」

おおつと危ない危ない。ちよつと考え過ぎだったな。気をつけねえと。

「ふうー、やっと終わった。」

特に何事もなく、授業は終わった。ちなみに乃木さんは5時間目をウトウトして、6時間目に爆睡を決めた。まあ、頑張った方だと思うよ。

「あの、シャル君？」

「ん、何だ？」

おっ、北野君が喋りかけて来てくれた。ほら、やっぱ挨拶は大事だろ。

「この後、釣りしない？」

「おっいいいな、それ！」

釣り、初めてだが折角だからやってみるか。

「じゃあこの後、釣り道具持って校門集合で」

「おっと、ちよつと待ってくれ」

「なに？」

「オレ、釣りやったことなくてな、道具持ってないんだ。」

「それなら、僕の貸すよ。」

「おお！それは助かる。ありがとな！」

いいやあく最近の子は皆、親切やなあく。

その後、家にあつたクーラーボックスを持って、校門に走って行った。やっぱ便利だな。家から神樹館まで全力で走っても呼吸が乱れないな。

「やっべ、早く来すぎちまったな。」

なんなら学校を出てまだ7分しかたってない。まあしやあない待つか。

「あっ、早いね。」

「走ってきたからな！」

待っていると、釣り道具一式を持った北野が来た。

「さっ、行こ。」

「そういや、どこで釣りすんだ？」

「すぐそこの川だよ。」

北野について行って、しばらく歩いていると川に辿り着いた。

「暗くなる前に始めようか。」

「そうだな。」

北野から釣り竿を借り、餌をつけ、糸を垂らす。まあ、流石にここは分かる。

「シャル君と一緒に出来て嬉しいよ。」

「いつもは一人なのか？」

「誘っても誰も来ないんだ。」

「まあ、釣りはいろいろ面倒くさくからな」

「毎日ここでやってんのか？」

「うん、平日はほぼ毎日。でも休日とかは大橋付近で釣りしてるんだ」

「釣り、好きなんだな」

「最近、妹が産まれてね」

「おっ、それはめでたいな！」

「じゃあ、お兄ちゃんってことか。」

「お父さんもお母さんも毎日忙しくて、僕の相手をしてくれなくて」

「」

「なんか、どんどん話が暗くなっていくんだけど」

「でも、僕はお兄ちゃんになるんだから我慢しないと。あつ、ごめん」

「急にこんな話しちゃって」

「——カッコイイじゃねえか」

謝ることなんてどこにもなかった。むしろ、自慢していいと思う

ぞ。俺は。

「え？」

「家族の為に我慢する。俺は最高にカッコイイと思うぜ！」

「これはきつとシャルルマーニュが言うカッコイイ事の内に入ってる筈だ。」

「そうかな。」

「おう。」

「これで少しでも、元気になったら、なんでもいいか。」

「おっ！掛かった！」

「あつ、待って待って！」

力一杯に釣ろうとしたら、待ったがかかる。

「網を使うんだよ。」

「おお、助かった！」

「プロがいて助かったぜ。」

「ちっちゃいな。」

「ここで釣れるのは殆どそんな感じだよ。」

「捌けるか、これ。」

「こんな小さいの捌けるかなあー。最悪、油で揚げるか。」

「シャル君って魚捌けるの!？」

「おう。フグ以外ならいけるぜ。」

「それでも、凄いよ！」

「お、おう。」

「めっちゃ近い。」

「僕にも教えてくれる？」

「うーん。」

小学六年生に魚捌くの教えて大丈夫だろうか。危ないだろうし

なあー。

「中学生になってからな。」

「ええー」

「いろいろと危険だからな。」

「シャル君、同い年でしょ。」

「うぐっ！」

それ言われるとお兄さん何も言えなくなっちゃう。

「じいー」

「あー！分かった分かった！教えてやるから、そんな見ないでくれ！」

なんか、背中がムズムズする。

「やったあ！」

はあー、しょうがないか

あの後、北野君が一匹釣って、俺も追加でもう一匹釣って今回は終わりとなった。釣り道具を片付け北野君とは別れて帰った。

「これは・難しいな。」

家に帰り、釣った魚を捌こうとしている。小さくて、めっちゃくちゃに難しい。捌いて両面焼きにして食おうと思う。

「」。

集中、集中——よし、出来た。

「ほいほい・っと」

両面をキツチンペーパーで水分を取り、塩を振りかけ、フライパンで焼いていく。

「よし、今のうちに。」

カレーを温め、冷蔵庫に入れていた米をレンチでチンする。カレーに魚って・食いきれるか？

・

「ふいー・何か変な感じだな。」

お腹一杯の感じはするんだけど、まだ食えると思う。これは・受肉してるのか？

「謎、満載だな・この体」

・貫った身としては文句言えないけど・せめて説明が欲しかったな。

「片づけるか。」

・考えるのを中断し、皿を洗いに行く。

「」

「これからどうすっかなあー・まあ今は前出来なかった、青春を謳歌するとして・問題はその後だよなー」

「まだ時間は一杯あるし、今は考えなくて大丈夫か。」

最悪、収入が安定した所で働けばいいか。
「よしっ、これで最後だな。寝るか。」

使った皿と道具を洗い終わり、歯を磨いて、日頃の勉強をして、眠りについた。

当然

さて、今日は三ノ輪さんが何で遅刻するのかを探るために尾行（ストーキング）するか。まだ警察のお世話になりたくないし、程々にするけどな。ストーカーに程々ってあつたっけ？

「ここら辺をウロウロすれば会えるか。」

当然、三ノ輪さんの家は知らないから最初、会った場所をウロウロするしかないか。

へうえ〜ん！

「んっ？」

誰か泣いてるのか？

「行ってみるか。」

心配だし様子を見に行ってみるか。

「うう、ひつぐ、ズビ」

「どうしたんだい？」

泣いてる女の子を見つけた。小さい子と話すときは屈んで目線を合わせて、優しく話しかける。

「ママが。」

「そっか、ママとはぐれちゃったか。」

「うん。」

「大丈夫、兄ちゃんも一緒にさがしてあげるからさ。」

「ほんと？」

「勿論。さっ、行こうか。」

「うん！」

「迷子のお知らせです！梨花ちゃんママはいますかー！」

「お兄ちゃん、次こつち」

「おっけー」

梨花ちゃん（名札に書いてあった）が通って来た道を戻りながら母親を探す事にした。

〈梨花ちゃん！どこおー！〉

「おっ！」

「やっぱ、母親も探しているよね。探してなかったらキレルとこだったわ。あれ？この声、聞いた事あるな。」

「ママの声じゃない。」

「うーん。」

「そう言われても、行ってみないと何も分からないしなあー」

「大丈夫、大丈夫、オレと一緒にだから」

「うん！」

「あれ、銀じゃねえか」

「あつ、シヤル！」

まさかのここで三ノ輪さん。

「どうしたんだ、その子？」

「ああ、今、この子のママ探してんだ」

「もしかして、梨花ちゃん！」

「ち」

「おおつと」

「あつ、ごめん。」

「急な大きな声にびっくりしたのか、肩から降り、背中にくっついて、俺の後ろに隠れた。」

「梨花ちゃん、悪気は全くないんだ。だから出てきてくれないか？」

「うん」

「洪々、また俺の肩に上がった。地味に凄いな。」

「ほんつと、ごめんね？」

「」

少し隠れて、顔をひよこつと出し、チラチラ三ノ輪さんを見ている。

「それで、梨花ちゃんママはどこにいるんだ？」

「あつ、うん、こつちにいるぞ。」

「よしつ、行こう。」

！

「梨花。」

「ママあー！」

梨花ちゃんを肩から下ろす。

「良かった。」

「あのお兄ちゃんがたすけてくれたの。」

こつちに指を指して、そう言う母親がこつちを見てきたのでお辞儀を一回しとく。

「梨花を助けて下さり、本当にありがとうございます！」

「どうつてことないですよ。」

「何かお礼を。」

「お礼なんていいですよ。」

お礼貰う程の事なんかしてないからな。

「じゃあアタシ達、学校があるので」

「お兄ちゃん！」

「んっ、どうした？」

「また、会える？」

「おう、当然だろ。」

「ほんと？」

「おう！」

「そっか。」

「じゃ、またな」

「うん！お兄ちゃん、お姉ちゃんありがとう！」

力一杯、手を振ってくるので俺と三ノ輪さんも力一杯に手を振り返す。

「——シャル！あと何分!？」

「あと3分ぐらい！このペースならいけるぞ！」

現在、俺達は全力疾走していた（三ノ輪さん合わせて）。

「こんじよおー!!」

「気合だ気合だ！気合だあつー!!」

お互いに叫んで体力を持たせて走る。まあ根性論なんだけどな。多分俺に体力切れなんてないけどな。

「はあー、危なかったあー。」

「マジでギリギリだな。」

三ノ輪さんは息が絶え絶えになりながらもなんとか遅刻せずに辿り着いた。

「じゃ、またね。」

「おう。」

安芸先生が来る前に席に座り、教科書を引き出しに入れていく。

「皆さん、おはようございます。」

「おはようございます。」

今日もまた、授業が始まる。

「銀、ちよつといいか?」

「何だ、シャル?」

6限の授業も終わり、放課後。三ノ輪さんに朝の事について聞いてみる。

「いつも遅刻してる理由って、朝あったような事が毎日、出くわしてるのか?」

「まあ、ぶつちやけそうだな。」

「巻き込まれ体質ってことか。それとも不幸なだけか」

「三ノ輪さんが遅刻しない為にはどうするか。」

「シャル？」

「よしづー！」

「わわっ」

「おっと、すまねえ。」

「いや、全然大丈夫だけど、急にどうしたんだ？」

「銀が遅刻しないようにするためには、何をしたらいいか考えてたんだ。」

「そこまでしなくとも。」

「そこでだ！」

「う、うん」

「これから朝、一緒に登校する事にするぜ」

「これなら、遅刻せずに学校に行けるでしょ。まあ、全力疾走は確定だろうけどな。」

「——はあ！」

「うおー！」

「もしかして、俺嫌われてる。幸い教室には誰もいなく、一斉にこつちに視線が集まることはなかった。」

「あつごめん。」

「どうしたんだ、そんな驚いて？」

「いや、驚くだろ。急にそんな事、言われたら。」

「そうか？」

「男女で朝、一緒に登校するって、それはまるで」

「友達同士だし、当然だろ？」

「まあ、それは確かに、いや、それでも毎日なんて、シャルも迷惑だろ？」

「オレから言ったのに、迷惑な訳ないだろ？」

「それなら、いいんだけどさ。」

友達だし、こんぐらいは普通ってアイツは言ってたし、それに小学生

ぐらいならいいだろ、こんぐらい。えっいいよね？

「じゃ銀の家、教えてくれるか？」

「いいけど、どうしてだ？」

「そりゃあ、毎朝迎えに行くんだから当然だろ？」

「んっ？もう一回言ってくれるか？」

「毎朝迎えに行くんだから当然だろ？」

「聞き間違いじゃないかー」

「なんかおかしな事言ったか、俺？」

「本当にいいのか」

「大丈夫、大丈夫！」

「なんかいろいろとありがたいな。」

「友達なんだから、当然だろ！」

この後、三ノ輪さんに案内されて、家までの道を教えてくれた。

めっちゃ大きかったです。その後、三ノ輪さんとは別れて家に帰り、支度をしてイネスへと釣り道具一式を買い揃えた。今日もまた、一日が終わる。

御役目

あれから、何日かたった。毎朝、三ノ輪さんと登校してトラブルに巻き込まられ、解決していく。昼休みに乃木さんとふざけたり、たまにクラス巻き込んでバカして、鷺尾さんに怒られたりした。放課後は北野君と釣りして、とても楽しい日常を過ごしていた。

「全力疾走にも慣れちまったな。」

「毎朝、思うん、だけ、どき、ふう、シャルは何かスポーツとかやってんのか？」

「ちよつと鍛えてるぐらいだぞ。」

「あれで、ちよつとつて、アタシも鍛えてんだけどな。」

「ん、どうした？」

「ンンや、何でもない。」

「皆さん、おはようございます。」

「あ、やべ」

「？」

安芸先生が教室に入った瞬間に三ノ輪さんと別れて、瞬時に席に座る。三ノ輪さんも遅れて席に座る。

「「おはようございます。」」

「はぐっ」

「？」

ランドセル開けた銀がなんか、驚いてんな。非常事態か？

「教科書、忘れた。」

なにやっつてんだよ。

「それでは今日、日直の人」

「はい。起立」

今日の日直は鷺尾さんか

「礼」

先生に一礼をし、後ろを向いて手を合わせる。

「神樹様のおかげで今日も私達があります。」
「神棚に礼」

「これはやっぱり何日たっても慣れないな。」

「着席 あっ」

「んっ？？」

「これは」

「何かおかしい。鷲尾さん、三ノ輪さん、乃木さんと俺以外、時間が止まったみたいに動かなくなった。」

「」

「なにか嫌な感じがする。俺の第六感がそう確信している。とりあえず、霊体化して離れるか。」

「これって」

「！」

「チリン、チリン」

「はっ」

「何処からか鈴の音がした。」

「来たんだわ、私達が御役目を果たす時が」

「この三人はどうしてこうなってるのか、知ってるのか。今は様子見に徹するか。」

「」

「突如、世界が光で包まれる。目を開けるとそこには——大きな木の根？みたいな物がいくつも分かれたようなところに出た。言葉にするの難しいな。」

「うおお」

「ほああ！初めて見た、これが」

「神樹様の結界」

「神樹様の結界。どういうことだ。固有結界か、それとも宝具の座標の書き換えみたいなのもんなか？」

「神樹様で作った結界の世界？」

「何か姿隠す霊基ないかなー。おっ、いいのがあった！」

「樹海。教えられた通りね」

「すごいねえ、全部木だねえ」

樹海つて言うのか。奈良の樹海はヤバかったな

「おお、あれが大橋かな？」

「うん、多分あれだね！」

「こちらと壁の外を繋ぐ橋。あそこから敵が渡って来るのね。」

「くうう！アタシ達が勇者なんて、興奮するう！」

勇者つて何だ？よく、アニメのタイトルで見るヤツか？

「三ノ輪さん！遊びじゃないのよ」

「分かってるって！」

銀は平常運転だな。こういう時は元気一杯の友達がいれば前向きになれる。つーもんだよ。

「あつ！あそこ見て」

「」

乃木さんが指さした方向をよく目を凝らして見てみると、何かがかつちに近づいてきている。デカいな。

「あれが敵かあ」

三ノ輪さんが素早くスマホを取り出し、写真を取る。

「アイツが橋を渡り、神樹様に辿り着いた時、世界がなくなる。」

はあつ！？———そんな規模デカいの！！？

「ああ、分かってるって」

「私達で止めないとだね。」

「御役目を果たしましょう。」

「うん。」

さつきから言ってる御役目って。まさかあのデカい敵を倒すことか？小学生3人でかつ！？危険過ぎだろ。———捨て身をさせる気か！

何故か、3人はスマホを取り出し、何か操作した。瞬間、スマホから花卉と共に光が放たれ、3人の体を包んだ。光が消えると3人の服装がさつきまでの制服とは違い、それぞれ別の色合いの服を着用していた。鷺尾さんは薄紫、乃木さんは濃い紫、三ノ輪さんは赤をベースとしている。

「敵は未知の部分が多いわ。まずはある程度接近して、そこから牽制を。」

「よおーし、行くぞおー！」

「——待て！」

「「!?」」

流石に何も情報がない状態で突っ込むの無謀に等しい。霊体化を解き、三ノ輪さんを止める。

「誰ですか、貴方。」

「ここには勇者しか入れない筈だよな。」

「その筈、なんだけど。」

まあ、急に知らない人がいたら驚くよな。鷲尾さんが弓に矢を番えてこちらを見る。

「おおっと、別にオレはアンタらを害すつもりはないぜ」

「まずはそのフードを外して、顔を見せて下さい。」

「それは出来ない」

「ならこの矢を放ちます。」

「断言出来るのは、アンタらの味方って事だけだ」

「それがどうしたんですか。」

今の俺の格好はf g oのドラオムでのシートンの格好をしている。つてか鷲尾さん、マジで矢を放とうとしている。俺の人生もここまですか。

「まあ、待ってって」

「そうだよ。敵意はないみたいだしさ」

「でも。」

「それより、いいのか。敵が来てるみたいだが」

敵が近づいて来たこととその姿が見えてきた。なんか、ソーダ飴を2つ持った。何だあれ？言葉にするの難しすぎる。なんか、ソーダ飴を

「貴方はそこから動かないで下さいね。」

「善処する。」

まあ、本当に危なくなったら動くが。

「よおーし！今度こそ、一番槍をこの銀様が——」

「待て待て！」

「何だよ・シートン・さん？」

「無闇矢鱈に突撃するのはいけないぞ」

「ええー」

「アレがどんな攻撃手段をするか分かんねえのに行くのは危険だ。」

「まあ・確かに。」

「めっっちゃ不服そう。」

「それにこつちには遠距離武器があるしな！」

「分かりました。」

「こちらから一方的に攻撃出来るんなら、それでいいし。出来なければ、敵の出方に応じてどうするか考えればいい。」

「驚尾さんが放った矢は命中、敵の外装(?)が少し崩れた。だが、崩れた部分は瞬時に再生した。」

「今度は続けて何発も撃ってみてくれ。」

「分かりました。」

「今度は数で攻める。」

「何だあれ・水の塊？」

「シャボン玉みたいだねえー」

「どっから出してんだ？」

敵が出した水の塊みたいな物に全て、威力を殺され、矢が落ちていく。

「これは接近するしかないみたいだな。」

「そう、甘くはいかねえか。」

「やっど、出番だな！」

「ミノさん、一緒に頑張ろうね。」

「乃木か銀、どっちか盾みたいなモン持つてるか？」

「アタシはこの双斧しかないな。」

「あっ！そういうえば、私の槍、盾にもなるんよ。」

「よし、それを使って乃木は銀を守ってやってくれ。」

「銀は敵の攻撃が途切れた瞬間に反撃してくれ。」

「鷲尾は矢で掩護だな。」

「私はそれでいいよー」

「連携プレイ、いいな！」

「分かりました。」

「作戦は出来たけど、心配だな。」

「よおーし！行くぞお！」

「うん、ミノさん！」

「俺も行っていいか？」

「貴方はそこから動かないで下さい。」

「はぁーい。」

正体、言っちゃってもいいとは思うが、絶対、後で面倒くさい事になるな。

「園子、頼んだ！」

「まっかせて！」

乃木さんが持つてる槍の穂先が傘状になり、水の塊を弾いていく。

よし、これなら

「ミノさん！」

「これなら、おりゃあ！」

「浅い。」

三ノ輪さんの一撃が入るが、致命傷にならず、瞬く間に直ってしま

う。

「ちよつと、貴方！」

今、走らないと間に合わない。

「危ない！ミノさん！」

「うおっ！」

敵が反撃とばかりと水の塊を乃木さんと三ノ輪さんの二人に放つ。三ノ輪さんは体を反らして避けたものの、姿勢を崩し、落下してしま

う。乃木さんは槍の穂先で受け止める。

「大丈夫！ミノさん！」

「つてて、こっちは大丈夫——ぶ、って園子!!」

「乃木さん！そこから——」

敵が何かチャージし始めた。何かヤバい
「えっ——」

この距離なら俺がギリ間に合う

「——園子!!」

敵から水のレーザーのようなモノが放たれた。

「——ふうー、間髪髪って感じだな！」

「えっ——えっ!?!」

何とか間に合った。心臓に悪いぜ。

「良かった。」

「ヒヤヒヤさせやがって。このっ！」

「銀！一旦下がれ！」

銀がこちらに注意が引いてるうちに何度も攻撃を入れる。だが、決定打にはならず直ぐに再生する。

「——うおっ！」

水の塊が銀の顔に命中した。

「銀！」

「あっ。」

乃木さんを降ろして直ぐに三ノ輪さんの元に向かう。

「大丈夫か!?!」

「んん——」

「今、助ける！」

「三ノ輪さん！」

頭がスッポリと水に覆われている。このままじゃ窒息する。何だ
コレ、弾力が凄いな!

「なかなか割れない。」

「——ハッ!」

「どうしした。」

突如、目をかっぴらいたと思ったら、ゴクゴクと飲み始めた。
めるのか、コレ?
..... 飲

「——ふはあ！」

「ミノさん、大丈夫?」

「飲んで大丈夫なの?」

「発想がぶっ飛んでんな」

「神の力を得た勇者に不可能はないのだ。ウツキモチワルイ」

「どんな味だった?」

「最初、ソーダ味で途中からウーロン茶になった。うう。」

「絶対に飲みたくない味だね。」

絶対不味い (確信)

「水のビームに水の塊か」

水の塊をガードしていると、水のビームが来て、盾が崩される。最悪、乃木さんの腕が折れる。うーん、どうしたもんか。

「出口に近づいてる。」

「ヤベエ。速くやらねえと!」

「落ち着けて、銀」

「でも」

「時間はまだあんだから、一旦落ち着け。それとも、なんか時間制限でもあるのか?」

「長引く程、侵食と言って、現実世界に不幸や事故といった形で影響がでます。」

あるのか。それはキツイな。まあ、俺は正義の味方じゃないし、この子たちの命が最優先だ。

「それでもだ。今ここで慌てて行って返り討ちにあつて、全員死んで、世界滅んじやいましたー。じゃ目も当てられないぞ。」

「それは」

「隙を作つてくれれば、オレがドデカイのをお見舞いする。」

「うーん」

銀はこういうの苦手そうだな。

「あつ!」

「ぴっかーんと閃いた!」

「ナイス!」

乃木さんは頭が柔軟だからな。

柔らかすぎだと思っけどな。

「作戦通りに頼んだぞ！」

「まっかせて！」

「最後は任せます。」

「気合い入れてくぞお！」

実質、初対面の俺に頼るのは不安だとは思うけど、こういうのは信頼が全てだからな。

「っ！」

最初は鷲尾さんが矢で攻撃し、アレの注意を引く

「こつち見たよ！」

「須美はそのまま！」

「分かったわ」

俺はこの間、敵の背後へと猛ダツシユである。

「アレが来るぞ！」

「乃木さん！」

「よおーし、行くよー！」

「ッ——ッ！」

あれなら、大丈夫そうだな。後は俺がドデカイのをお見舞いするだけ。宝具は発動するか怪しい。今は他ので代用するしかない。

「——！」

助走をつけ、アレの天辺ぐらいまで、一飛びして武器を構える。

「——エリユプシオン!!」

手に大きな棍棒のような物を出現させ、火のエーテルを纏い、全力で叩く。これは流石に効いたのか、大きく前に傾いた。

「大剣機能発動！」

間髪入れずにジユワユーズに持ち替える。刀身に五大元素を纏わせ、大剣程の大きさまで伸びる。

「うおおおらああっ!!」

「すげえ」

今の二撃で、体の八割が消失した。再生はなく、花卉となつて天に昇つていく。倒せたか。

「ふうーこれで安心だな。おつ！これはすげえな」

「おおー」

「わあー！綺麗」

「これが鎮花の儀」

鎮花の儀って言うのか。

「うおつとー」

勢いよく花卉が舞つたと思つたら、辺り一面が光に包まれる。

「ここは」

元いた学校ではなく、大橋のすぐ近くの祠のような物の近くにでた。

「よおーし！お前ら怪我はないな」

「ないです！」

「私もないよー」

「私もないです」

「よしつ、じゃあオレは帰るから。お前らも気をつけて帰るんだぞ」

怪我なしで終わったのはデカい。

「待つて下さい」

「どうした、まだ何かあったか？」

「貴方は誰ですか？」

「それならさつき！自己紹介したろ？」

「そうじゃなくて」

「シートンさんは勇者なんですか？」

「うーん。そもそも勇者って何だ？」

「神樹様選ばれて御役目をする人」

「じゃあオレは勇者じゃないぜ」

俺は勇者じゃないし、正義の味方でもない。ましてや王でもない。シャルルマーニュの贋作にもなれない。何しんでだろ俺。

「ゲームで言う所の助っ人キャラだと思ってくりあい。」
「すけつときやら。」

助っ人キャラを存知ない？

「鷲尾さん、助っ人キャラっていうのわね——」

「——えつ、そうなの。コホン」

「分かったか？」

「ええ、つまり大赦から派遣されたということですよね？」

「うーん、それも違うな。」

大赦と勇者は何かしら繋がってんのか。魔術協会みたいな立ち位

置か？

「じゃあなんなんですか？」

「さあ？」

「ズコッー」

ズコッーって口で言うもんなのか。

「オレこの後、用事があるからじゃあな」

「あつちよつと待ちなさい！」

早く学校に戻らないと

「シャルルマーニュ、戻りましたー！」

「二二二」

あれ？

「シャルルマーニュ君、今までどこにいたの？」

「あつちよつとトイレ行ってました。」

「そう、休み時間以外にトイレに行く時は先生に声を掛けてから行っ

て下さいね。」

「はい、すみません。」

対策

あの後、乃木さん、鷺尾さん、三ノ輪さんが戻ってきてきて、安芸先生が何故、急にいなくなっただのかの説明があった。こちらに一瞬、視線を向けられたような気がしたが、バレてはない。筈。

そんなこんなで今日も授業が終わった。今日は北野と釣りする約束をしている。

「北野ー、釣り行こうぜ！」

「あっうん、前の場所で待ってるよ。」

「分かった。」

家に帰り、釣り道具一式を肩に掛けて、前一緒に釣った場所に急ぐ。餌は途中で買って行く。

「おっ、速いな北野」

「荷物が少なかつたからね」

「あっそっか。」

前は俺に貸すような釣り道具も持って来たのか。

「よし、早速釣るか。」

「そうだね。」

その後、俺が三匹、北野が五匹と結構釣れた。夕飯が焼き魚に決定した。

「じゃ、また明日な！」

「うん！」

また、一日が終わる。

「シートンという人物に心当たりはありますか？」

「う〜う〜ん」

「ないです。」

放課後、誰もいない教室で安芸先生と3人の勇者が集まっている。内容は勿論、シートンについてだ。

「何か…特徴はなかった？」

「特徴」

「例えば、太っていたとか、ムキムキだったりしなかった？」

「太ってはないしなー。あつ、園子は顔見えたんじゃないか？」

「何かあったの？」

「乃木さんは、バーテックスからの攻撃から助けられたんです。」

「お姫様抱っこの形で助けられたため、見上げるとフードの中が見える。筈だが。」

「フードの中・真っ黒で見えなかったんよ〜」

「どういう、原理なのかしら。」

シートンが着ているフードには認識阻害の魔術が込められており、中身は隠されている。

「あつ、でもお目々が空みたいに綺麗だったよ〜」

「目が空色。」

「何か、シャルに似てなかったか？」

「そう。」

「言われてみれば、そんな感じがしたかも。」

「。」

声の大きさ、身長など違いはあれど喋り方、雰囲気はシャルルマーニュと合致する。

「戦闘中の様子を見る限り、御役目の邪魔をしよう、といった感じはしないわね。もし襲ってきたなら、全員殺されてたかもしれないわ。」

「バーテックスに放ったあの技で。」

「炎がぼわあつて出てカツコ良かったな、あれ！」

「ばあつて輝いたの綺麗だったね〜」

実際、背後からエリユプシオンを放てば、いくら神の力を得た勇者

でも即死だろう。だが、背後から闇討ちすれば彼の王勇に背く事になる。

「あつ、シートンさんってシャルのお兄さんかもしれないな。」

「いえ、彼に兄弟はいないわ」

「じゃあ、お父さん？」

「両親は既に亡くなつてゐるわ」

「じゃあシャルって家に一人なのか」

「私達と同じ歳で家に一人」

「想像できないんよ」

小学六年生といえど、まだまだ親に甘えないといけない年頃の子だ。

「今後の方針だけれど、協力という形を取ります。」

「正体は探らないんですか？」

「正体は大赦で探るわ」

「私達は今日と同じってことだな」

「敵対しなくて良かったんよ」

「鷲尾さんは戦闘中、シートンを監視してくれる？」

「はい、任せて下さい！」

「それじゃあ、ここまでにしましょう。」

「さようなら、先生」

「気をつけて帰るように」

「はくい、それじゃあまたね先生！」

「ありがとうございます。」

「はい、さようなら」

皆、それぞれ別れて帰っていく。

「ふうー」

最初、まとまりがないあの子達で大丈夫か正直心配だった。予想外の乱入があったけれど、全員無事に明日を迎える事が出来る。これ程、嬉しい事はないだろう。

「神樹様、どうかあの子達を——」

違和感

「はあ」

最近、何だか視線を感じる。家の中では感じないが、一步でも外に出れば四六時中とは言わないがほとんどの時間見られている。まあ正体分かってただけだな。

「よっー！」

「きやつー！」

この肉体での全力の速さで尾行している人物の後ろに回る。

「奇遇だな、鷺尾」

「え、ええ」

何故だか、最近よく鷺尾さんが俺の後を着けるようになった。たまたま、という事も考えれるが五日続けは確信犯だろ。

「今日もお使いか？」

「そう、なのよ」

「鷺尾は偉いな」

「これ、ぐらい、当然よ」

嘘の罪悪感か、少し顔を引き釣っている。根はいい子なんです。

「オレもこれから買い物だから一緒にいいか？」

「ええ、構わないわ。」

少し間があったけど、もしかして俺の事、嫌い？いや、そこまで親しい関係じゃないし、この反応は妥当か？

「どっから行く？」

「昨日と同じく、八百屋から行くわ」

「おっけー」

今日は肉じゃがでも作ろうかな。人参3本、じゃがいもをだいたいい、5個ぐらい入ってるやつを2袋買えば足りるか。

「おっ！今日も来たな小僧！つと鷺尾ちゃん」

「今日も新鮮なの頼むぜ、親父！」

「こんにちは。」

「ここは、この世界に来てからずっとお世話になってる八百屋さんだ。夫婦で経営していて、活気が溢れていて、雰囲気が好きで、野菜買う時はいつもここに來てる。」

「なに買いに來たんだい？」

「今日は人参とじゃがいもだな。いいのはあるかい？」

「おう！それならこっちにいいのがあるぞ。」

「どうやらこの世界、神樹様の加護とがであらゆる栽培作物をどの季節にも育てる事が出来るみたいだ。これで地理のグラフ問題出たら解ける気しないんだが？」

「おつ、じゃあこのじゃがいもで」

「人参はどうだい？」

「うーん、少し傷んでるな。」

「少し傷んでる。じゃあない、これにするか。」

「じゃあこの人参で。」

「肉じゃがに入れるの牛肉、じゃがいも、人参、玉ねぎ！」

「玉ねぎはいいのあるか？」

「勿論あるぞ！」

その後、会計をしていつも通りの夫婦漫才を見て、空気が一段と下がったのを認識してそこから離れた。

「どうしたんだ、そんな考え込んで？」

「このたけのこ、どっちがいいのかしら」

「うーん、こっちな」

鷲尾さんが右手に持っているたけのこの方が鮮度がいいな。

「どうして？」

「たけのこは皮の色が薄いほど、鮮度がいいんだ。」

「物知りね、もしかして、そういうの全部覚えているの？」

「おう。こういうの知り得だからな！」

同じ値段なら美味しい方を買った方がお得だろ。

「確かに。」

「じゃ、オレは隣の精肉店にいるから」

「分かったわ」

鷺尾さんと別れて俺は隣にある精肉店に行き、人殺つちやいましたーっていう服を着てる店員から牛肉を買い、鷺尾さんが来るのを待つ。

「おっ、買い終えたか。」

「待たしちやってごめんなさい。」

「全然大丈夫だぞ」

「」

「ん・どうした？」

「元気がないように見えるけど、何か気に触るような事言ったかな？」

「どこか悪いのか？」

「あっ・そういうのじゃないの」

「ほっ。」

「？」

「えっと・その」

「何でも言っつていいぞ！」

「さあ、ばっちこい！」

「質問、何だけど」

「おう」

「シャルルマーニュ君は一人で平気なの？」

「」——どういう意味だ？」

・友達と思ってるのは俺だけ・ってこと（突然のちいかわ）？

「家に帰ったら、いつも一人なのよね」

「なーんだ、そっちな」

・馴れ馴れしいんだよ、このぼつちが・って事じゃなくて良かった

。

「それでその・不安じゃないかと思って」

「鷺尾は優しいな。」

「」——友達なんだから、心配して当然よ。」

「それでもだ。俺はカツコイイと思うぞ。」

友達をそこまですべて心配して、行動に移すのは簡単に出来ない。

「カツコイイ。って今はこんな話しじゃなくて！」

「ん。ああそうだったな。」

「そういや、そうだった。」

「いつもの感じから見ると、平気そうね。」

「おう！オレにはお前らがいるからな。何か困ったらすぐに相談するぜ。」

「ええ。その時は任せてちょうだい。」

「鷺尾も困ったらすぐに相談してくれよな！」

「うん。」

友達とは、助け合いだからな。

「それじゃあね。」

「おう。気をつけて帰るんだぞ。」

「うん。また明日ね。」

「学校でな」

鷺尾と別れて、一人で家までの帰路を歩く。

「家族かあー」

「????の父さんは物心つく頃にはいなかったし、母さんはいい思い出はないな。——あれ？何で俺は他人事みたいに自分の事だろ。」

速く家に帰ろう。

家に着き、買ってきた野菜と肉を冷蔵庫に入れテレビの電源を入れる。

『——先日起きた土砂崩れの要因は前の大雨だと思われます。』

テレビでは敵が襲撃してきた日に起きた、土砂崩れについて専門家が話し合っている。

「万人を救うか。」

俺に万人を救うなんて、崇高な意志なんてモノはない。俺は出来る限りの人々を救う。せめて友達だけでも救おうと考えていた。

だが——シャルルマーニュの、カール大帝の力を使うには、より多くの人々を救ってみせる。

「それがオレの王勇だ。」

聖騎士帝、王道踏破は発動できない。当然、聖騎士帝が発動出来ないということはジユワユーズの真価を発揮する事はどうあがいても不可能。今の時点での最高効率は敵の動きを見て、勇者と協力して瞬時に殺す。それで被害は最小限に抑えられる。

「——もう、こんな時間か」

いつのまにか、日が落ちていた。腰を上げ、キッチンへと向かう。

「ちやちやつと作るか。」

冷蔵庫からじゃがいも、人参を取り出し、皮を剥いていく。皮を剥き終えたら、水で洗い、大き目に乱切りをする。切ったのはポウルに入れておく。次に玉ねぎを取り出し、皮を剥き、くし切りにしていく。

「よし。」

中華鍋をコンロの上に置き、油を敷きその上に牛肉をどーんっと出す。強火にかけ、焦げないように火を通していく。

「そろそろだな。」

肉がいい感じ（適当）になったらじゃがいも、人参、玉ねぎを入れていく。俺は白滝を使わない派だ。その後、水を400cc程入れて、酒、醤油、砂糖、みりんを大きじ4杯入れていく。ついでに和風だしの素も入れておく。

沸騰してきたら、強火のまま押し蓋をして二十分タイマーをセットしておく。俺はその間、教科書を読んで明日の授業の予習しておく。

分数の割り算か、ケアレミスに気をつければ問題ないな。理科は呼吸、社会は縄文時代か、小学校以降も出てきたらかな、理科と社会は。国語は漢字だし問題はないな。

「おっ、時間か」

二十分がたち、タイマーが鳴っている。タイマーを止め、押し蓋を外す。

「あとちよつとだな。」

更に味を染み込ませるために、押し蓋をもう一度し、十分タイマーをセットする。

「よし」

タイマーを止め、押し蓋を外すといい匂いが漂ってくる。

「うまく出来たな」

皿に盛り付け、米と一緒にテーブルへと持っていく。

「いただきます。」

一人で食べるのは中学生の時だから、寂しいとはなかつんだがなあ。

鷺尾さんに言われて、再認識した。俺には、家族ならどこでもしている家族団欒の時間を経験したことがないんだな。

電気を消し、布団の中に入る。勉強の質を上げるにはよく寝る事が大切だ。健康な生活を心がけていのがなあ。最期は寝よう。

また、一日が終わる。

——懐かしい夢を見た。

『母さん、ずっと働いてるけど、体は大丈夫なの？』

『ええ、大丈夫よ。貴方は今まで通り勉強して、良い高校に行くのよ。』

『うん。』

中学校に上がったぐらいに母さんは目に見える程、パートを増やした。明らかに体に負担をかけていた。分かったわかってたんだ。それでも、過去の事はもう変えられない。いくら今、後悔しても何も変わらない。後悔してる時間があつたら次の事に目を向けた方が有意義だ。

『——母さん！見て！五教科合計498点だったよ！』

『次は満点を目指して頑張るのよ。』

『うん、分かった。』

ただ、母さんに笑って欲しかっただけなんだ。そんな辛そうな顔をして欲しくなかったなんだ。満点。満点を取ればきつと。結果は変わらなかった。

——中学3年生の冬、母さんが倒れた。無茶のしすぎで身体を壊したみたいだ。

『——私の事は心配しなくていいわ。——勉強に専念してちょうだい。』

『それじゃあ、母さんは——』

——独りになってしまう。

『いいのよ。貴方にいい人生を送ってほしいの。賢い貴方なら分かるわよね？』

『これが母さんからの最後のお願いなの。親孝行だと思つて』

『分かったよ。絶対合格するから、待つててね。』

『優しい子を持ってて私は幸せよ。』

その後、俺は死物狂いで勉強した。そのお陰か、見事第一希望の高校に合格した。——母さんは合格発表を聞かずに逝ってしまった。

『母さん、合格したよ。』

葬儀が終わった翌日、母さんがっている墓石に行った。

泣いたらいけない。泣く事は俺にとってはただの現実逃避だ。ここで泣いたらいけない。しつかり母さんと決別しないといけない。『また来るよ、母さん。』

母さんが死んだ後、母さんの財産は全て俺の物になった。通帳を見て、その金額に驚愕した。

『こんな物が欲しくて俺は俺は——っっ！』
頑張ったんじゃない。母さんを笑顔にしようと思って俺は頑張ったんだ——。

その後、勉強は続けたが、内心メチャクチャだった。何で俺は勉強なんかしてるのかを常に考えていた。

『——なあ』

『おーい』

『もしもーし！聞こえてますかー！』

『うるさい。』

最初、会った時は俺の邪魔をするお邪魔虫だと思ってんだけど今の俺達を見た人は想像出来ないだろうな。

『おっ、聞こえてた。』

『何か、俺に用か？さっさとしてくれ。』

『うーんと』

『あっそうだ。』

『？』

『クレープ食うに行こうぜ！』

『はあ？』

懐かしいな。最初はマジで意味が分からなかった。俺と同じぐらいの学力を持った、アイツが馬鹿にでもなったのかと疑った。

『いつも??は勉強してるだろ?』

『それはクレープ食う事に関係あるか？』

『関係大ありなんだなー。これが！』

『。』

『いい勉強は、いい息抜きからってな！』

『で、どうだ、食いに行くか？』

『——はあー、分かった。』

『よしっ！』

断ったとしても何度でもアイツならしつこく来てただろう。

『早速行こうぜ！』

『はいはい。』

ここから、俺の人生は始まった。

最善の結果を

「よーっしー」
何で今になってこんな夢を。完全に見切りをつけた筈だ。

「よーっしー」
頬を叩き、切り替える。シャルルマーニュはいつだってカッコよくないとな。ウジウジしてたらカッコ悪い。

「今日も一日、ガンバっていこー！」
今日も青春を全力で謳歌してやる。

明日も会える。明日を迎えられる。明日も何事なく一日を終えられる。なんてものは確定しない。事故で、病気で、殺意で、寿命で——理由は様々だ。俺達の場合は鈴の音が合図だったようだ。

「天秤みたいな形だな。」

「天秤が浮いてるね〜」

「よし！ここはアタシが」

「待て待て！何度このくんだりやるつもりだ。」

二回目の襲撃。今回も初手は鷺尾さんに頼むか。

「鷺尾、今回も頼めるか？」

「分かりました。」

「弓に三本の矢をつがえ、アレ目掛けて一直線に放たれる。」

「」

「吸われたか。いや、刺さってはいるのか。」

矢は突如として、軌道を曲げ天秤にぶら下がっている分銅に吸われる。刺さってはいるからこのまま撃ち続けられれば壊れるな。

「速射してみてくれ」

「了解です。」

今度は間髪入れずに矢を放っていく。このまま刺されば分銅を砕くことが出来るのだが、まあ、そう簡単にはいかないわな。

真ん中の棒を軸にし、回転しだす。当然左右の分銅もだ。

「あれは、ストップだ。」

「回転している。」

分銅のせいで竜巻みたくなってるんだ、どうすんだ、アレ？

「あの巨体で回転するとは、ってこっち来てる来てる！」

「こりあヤバいな」

「当たったら痛そうだね」

「絶対痛いだけじゃすまないぞ！」

「三人共、速く離れないと！」

あの近くは暴風でまともに立ってられないだろう。勢いを弱めるにはどうするか、分銅を斬るか。

「銀！」

「ようやく、アタシの出番ですね！」

「おう！オレがああ両方の分銅を斬り落としたり、トドメを刺してくれ。」

「任せてください！」

「よーっし、行くぜえ！」

あの暴風の中に入れば普通なら体がぐちゃぐちゃになるだろう。だが、この体は英霊としての肉体だ。不可能を可能にする。

「ハアアッ！」

分銅に繋がっている鎖のようなモノをジュワユーズで斬る。これで再生するまで、勢いがなくなる。ダメ押しにもう片方も――

「らああッ！」

迫りくる分銅をジャンプで回避して鎖を斬る。これでほとんど勢いを殺した。

「――銀！」

「うおおおお!!」

三ノ輪さんに応えるように双斧から火が溢れ出る。

「うりやうりやうりやうりや!!!」

再生する間もなく斬られ、ドンドン短くなっていく。

「はああ、はっ!」

怒涛の連撃を喰らった、敵は再生することなく花卉となつて天に昇っていく。

「ふう」

「や、——やったあー!」

自分の攻撃で倒せたのが嬉しいのか、大はしゃぎしている。無事終わられて良かった。

「凄くカッコ良かったよミノさん!」

「凄いわ、三ノ輪さん。」

「えへへ〜それほどでも〜♪」

まだ鷲尾さんは完全には打ち解けられてないな。まあ、時間の問題だろうし、深く考えなくてもいいか。

「そろそろだな。」

そろそろ鎮花の儀が終わる。これでいつも通りの日常に戻る。

「——!」

——体が引つ張れるような気がした。

「……はっ!」

気がつくとき大きな樹の前に立っていた。

「でっけえ樹だな。」

これが神樹様か。ただデカイ樹って感じじゃあないな。

神樹・人間達をあの化け物から守護する存在。人類が滅亡しない未来へと繋げる存在——

「——ああ、なるほど」

そういう事か。人類はそれほど滅びたくなかったのか。人々の死にたくないという願いの集合体。守護者達を通して介入

する人理の修正力。

「抑止力が働かなかったのはこのせいか。」

「ようやく合点がいった。これなら、謎としていたことへの証明になる。」

「あれ、どうやって帰るんだ？」

「どうしたもんか。」

「試しに神樹様にお願ひしてみるか。」

「——ツツ！」

神樹に触った瞬間、ナニかのパスが繋がった。

「戻って……これたのか？」

神樹に触った時のあの感触……俺とナニが繋がった？

「さて、帰るとするか」

「既に勇者3人はいなかった。見た所、怪我もなかったし大丈夫だろう。」

「……霊基は戻さず全力で帰る。念のために、一応な……」

いつも通り

二度目の襲撃から2週間程経過した。

「おはよう、シャル君」

「おう、おはよう。」

北野に挨拶を返し、席に着く。今日も三ノ輪さんと登校したが問題が早めに解決したため今日は余裕を持って学校に着くことができた。

「鷺尾、おはよう。」

「ええ、おはよう。」

いつも通り、鷺尾さんに挨拶して席に着く。

「いつも元気ね」

「おう！それが取り柄なんでね」

いつも明るくを心情にしたんでな。

「シャル、おはよう」

「おはよう。今日も朝から眠そうだな」

眼が半分閉じかけてますよ。乃木さん。

「前から気になってたんだけど」

「んっ、どうした？」

眠そうな感じだったのが一瞬で切り替わり、面白い事を思いついた時の顔になる。目がシイタケ

「ミノさんとシャルって付き合ってる？」

「——ツツ!!」

「どうしてそうなった」

隣で鷺尾さんがメツチャ驚いてる。

「だって、毎日朝一緒に登校してくるでしょ？」

「まあ・確かに」

「しよ、小学生で、で、っ、付き合うなんてハ破廉恥だわ！」

まず鷺尾さんは落ち着け。ここは三ノ輪さんの名誉のためにしっ

かりと誤解を解いておかないと。

「結論から言うが——」

「ゴクリ。」

「はわわわ。」

ゴクリ。つて自分で言う人、初めて見たよ。いや、そもそも何故、擬音を自分で言ってるんだ？

「オレと銀は付き合ってるよ。」

「そうなんだよ。」

「私は信じていたわ。」

何を??何処にそんな真剣な顔で信じる場面があったんだろうか。

「シャルはミノさんの事、どう思ってるの?。」

「カツコイイと思ってるよ。」

「カツコイイ?。」

初対面の俺を助けてくれたし、いろんな人の助けにも入っている。それだけでもうカツコイイってな。シャルルマーニュならそう言うさ。

「人の為に動ける人は誰だってカツコイイだよ。当然お前らもな。」

そんな小さな体であんなバケモン達に勇猛果敢に挑むつてのは中々出来ない。俺だって、シャルルマーニュじゃなきゃ尻尾巻いて逃げる自信がある。

そんなお前らを俺はカツコイイと思ってるよ。

「えへへ。」

「あ、ありがとう。」

「おう。」

俺もさいつこうにカツコよくならないな。そうすればジュワユーズの真価も発揮出来る筈だ。

「おっと、もうそろ時間だぜ。」

「そうね、席に戻るわ。」

「ええくもつと話したかったのに。」

「まあまあ、後でも話せるだろ?。」

「うくん、そうだけど。」

「ほら乃木さん、戻りましょ。」

「うん、分かった。」

■ 鷺尾さんに連れられ乃木さんは席に戻っていった。

「——皆さん、おはようございます。」

「「おはようございます。」」

視界に蹲ってプルプル震えている三ノ輪さんを納めて、不思議に思
いながら、挨拶を返す。今日も学校頑張ろう。

「——ふうー、終わった。」

6 限全てが終わり、皆それぞれ下校していく。

「シャル君、今日どう？」

「おっ行くか！」

今日は暇だし、釣りに行くか。

「今日こそ大物釣ってやるぜ！」

「あそこの川にデカイのいるかなあー？」

まあ、いないでしょうね。

「現地集合でいい？」

「おっけー」

「それじゃあ、また」

「おう。」

北野とは別れ、家へと急ぐ。

「よし、じゃんじゃん釣るか。」

「うん、そうだね。」

いつも通り釣り糸を垂らす。この作業には慣れたもんだ。大人
になっても、趣味としてやってもいいかもしれないな。

「シャル君ってよく仲良さ三人組といえるよね。」

「んー。まあそうだな。」

学校内でよく喋ってる部類に入るな。

「それで、シャル君はどの子が好きなの？」

「ぶふっ！」

「だ、大丈夫！」

「お、おう。」

まさか、北野からそんな事聞かれるとは思いませんでした。かたがた。

「それで、その、えっ」と

「オレはアイツらを人として好きだけど、そっちの好きじゃないな。」

「あれ、そうなの？」

「おう。」

当然だろ。小学生好きとかロリコンじゃないんだから。まあ

一人、発育が高校生並みの奴いるけどな。

「あの三人は男子の中で有名だよ。」

「そうだな」

あの三人は美少女の類に入るだろう。特に鷺尾さんはアレがデカ

いから視線がいつちやうだろう。まあ、俺は鍛えてるから。

「北野は誰か好きな奴いるのか？」

「いや、ええーっと、好きとかよく分からなくて。」

「まあ、まだ時間はたっぷりあるんだからじっくり考えていこうぜ。」

「うん、そうだね。」

そう、まだ時間はたくさんあるんだ。世界が減びない限り……

「おっ、引っ張ってるぞ！」

「あつ本当だね。」

「おっ、力強いな！」

「もしかして、本当に。」

「よしこい！デカいのこい！」

今回こそデカいの釣ってやる。

「おらっ——！」

「本当にいいの？」

「おう、俺は昨日の残りのシチューがあるからな。」

「いや、でも——」

「まあまあ！貰つとけて」

「う、うん、ありがとう。」

釣った、結構デカイ魚（名前は知らない）を渡す。俺は昨日の余りだけで十分だからな。

「あつそうだ。」

「どうした？」

「日曜日、大橋付近で釣りするんだけど、シャル君も一緒にどう？」

「おっいいな、それ！」

「じゃあ一時に現地集合ね」

「分かった。絶対行くぜ！」

明後日が楽しみだな。

「それじゃあ日曜日ね」

「おっけー！またな。」

神樹館前で北野と別れて家路に着く。

「ふうー、今日も楽しかったな。」

家に帰ったら、シチューを温めて食べて、勉強して、それから
にやる事はないし、早めに寝るか。また、今日が終わる。
特

休日

今日は待ちに待った休日。日曜に遊ぶために今日中に全て終わらさないといけないな。

「まずはキッチンだな」

コンロ周り、冷蔵庫の中身の整頓&中を空っぽにしてからの清掃。

一人暮らしは基本的に冷蔵庫の中身はガラガラだからこういう時は便利だよなー。

「次に水周り」

排水溝に少し溜まっている生ゴミを袋に入れて、ゴミ袋へと入れる。

「」

トイレはまだ一回も使っていないから、床や壁の掃除だけでいい。排泄しなくていいのは普通に嬉しいな。水道代も浮くしな、まあトイレトペーパーは念のため、準備はしている。

「あとは使っていない部屋だけだな。」

俺が使っている部屋は起きて早々に掃除して、布団はベランダに干している。

「果たしてこの部屋達は使うときがくるのか？」

一階、二階に二部屋ずつある。一階の一室は俺が使っている。

「よし、今日は念入りにやるか！」

今日までしなかった、押入れも掃除しちゃうぜ。まず、床と窓を雑巾で拭いて、押入れの扉を外して中を雑巾で拭く。

「埃ヤバいな」

毎回するべきだな。

「あと一部屋だな」

二階の端にある部屋がラストとなる。ここも前と同じように掃除していく。

「よいしょっと」

押入れの扉を外して、中を見る。

「これは箱か？」

隅っこに埃を被った箱が置いてある。とりあえず吹いてみる。

「めっちゃ古いな。」

一目で分かる程のボロボロさ：

「何が入ってたんだ？」

箱の蓋を開けると中には一冊の本が入っている。

「ええーつと、『勇者御記』？」

何だコレ？ペラペラとめくったが、見た感じ古代文字とかでなく、普通に日本語だな。

「勇者か」

勇者とついてる以上、御役目に関係している事という事は分かる。

「後でじっくり読むか。」

何で此処にあるのか、中身は何についてなのか、とかいろいろ気になるが、掃除の途中だからここはぐつとこらえて中に仕舞う。

「ふうー、終わったー。」

全ての場所の掃除が終わった。あの箱は忘れないように俺の部屋に置いてある。

「あとは消耗品の補充だな。」

午後はイネスに行って、消耗品を買う。ついでに昼も済ませるか。

「さて、何処で食うか。」

こんな時にはフードコートで美味しそうなものを食べるに限るな。

「そうと決まれば、早速」

「ん、あれは」

「なんか、見覚えある二人が見えたが」

「なにやってんだ、アイツら」

「観葉植物で身を隠して誰かを監視してんのか？二人の頭の向きを辿って何を見ているのかを確認する。」

「銀か」

「三ノ輪さんを監視してるのか？どういふことが、さっぱり分からん」

「あつ」

「偶然、通りかかった女性の鞆の中から蜜柑や林檎などの果物が溢れ落ちる。ここでもか。」

「手伝いますよ。」

「すみません、ありがとうございます。」

「あの量を二人じゃ時間かかるし、俺も行くか。ついでにあの二人も」

「オレ達も手伝いますよ。」

「ありが——ってシャル！」

「よっ」

「よっじゃなくて、今、俺達って」

「おう！乃木、鷲尾、手伝ってくれー！」

「うん！」

「え、ええ！」

「須美も園子もいるのか」

「まっ、とりあえず拾おうぜ。」

「う、うん。」

「一気に人数が増えたし、これで一瞬で終わるな。」

「うえ、朝から全部見られてたのか。それは恥ずいな」

「ううん、ミノさんカツコよかつたんよ」

「そうね。」

「銀はカツコイイぞ！」

あの後、成り行きでお昼を一緒にする事になった。俺はハンバーグ定食を頼んだ。つてか朝から尾行してたのか、俺よりヤバいな。

「うううく」

「それで、シャルルマーニュ君はどうして此処に？」

「オレは買い物だな。いつも土日になにに消耗品を買いに来てんだ。」

「イネスはいいぞ。」

「お、おう。」

何かもう、うん。何も言えない。どこぞの主人公より不幸体質してんな。いや、あつちはそのあれとしてるだけか。

「元気出して、ミノさん。私のうどん、残り食べていいから」

「マジ！」

復活、はつや！

四国の人やうどんが大好きと聞いていたが、ここまでとは恐れ入ります。

「やつぱ、うどんは美味しいな！」

「そんな、急いだら喉に詰まっちゃうわよ。」

「じっ」

乃木さんがめっちゃ俺のハンバーグ見てんだけど。

「ハンバーグ食うか？」

「うん」

まあ、もう米はないしいいか。

「あゝん」

「」

「ツツ!!」

——ハッ！危ねえ一瞬、思考が停止したわ。これはやるのが正解か？いやでもこれやったら完全に事案なんだけど！

「はい、あゝん」

「んっ」

シャルルマーニュ!!これ完全に俺、牢屋行きなんだけど!

くそっ、体が勝手に甘やかしてしまっ。なんか、そういう雰囲気
乃木さんから出てるな、これは。

「んんんん!美味しい。」

「そりやあ良かった。」

「な、な、なな!」

「今のって、間接キス?」

「ぎ、ぎ、K.I.S.U!」

とりあえず、鷲尾さんは落ち着け。なかなか力オスだな。まあ
当事者は幸せそうにハンバーグ食べてるけどな。もうどうでもい

いや

「!」

言い知れない感覚が背筋をなぞる。これが第六感というものだろ
うか。とりあえず、こっから離れないと

「落ち着けよ須美」

「え、ええ、ごめんなさい。」

「あれ、どうしたのシャル?」

「ちよつとオレ、水注いでくるな」

席から速く立たねえと

「うん、いってらしゃい」

「すぐに戻るな。」

よし!席から立てた。後は三人から見えない所まで――

――チリン、チリン

「――っ!」

全然、離れなかった

「ああ、休日気分が台無しだな」

「シャル、動いてないね。」

「確かにそうね」

「まだ、勘ぐってたのかよ」

「これで彼は容疑者から外せるわね」

「容疑者って……」

呼吸を止めろ、音を出すな。死人みたく動くな。この一瞬だけは死ぬんだ。

「さっ、今日もガンバロー！」

「おう、そうだな！」

「ええ、御役目を果たすわ。」

変身してる今のうちに霊体化して、ここを離れる。これでひとま
ず、ばれる事はないな。あとは樹海化を待つだけだ。

「――」

視界が花卉一杯になる。

世界が一転した。

「――ここは、何処だ？」

見渡すが、いつもの樹海ではなく中世あたりのドラマで出てきそ
うな城(?)の中にいった。

「――つてか、この体は。」

シャルルマーニュの肉体ではなく、昔、前世の肉体に戻っている。
どうなってんだ。これ、全く理解が出来ない。

「進むか」

「ここで頭抱えても意味ないし、とりあえず前に進むことにする。

「すごいな。」

歩きながら、壁や天井を見るが、どこの部分も細部まで丁寧に装飾
をつけられている。

「おっ、あれは。」

そのうち、広間のように出た。玉座がある。

……誰かいる……

「――おっ、来たみたいだな！」

「まさか、本物の。」

本物なのか？――いや、俺が見間違う訳がない。

「おうともさ。正真正銘本物だよ！」

「俺の真名なはシャルルマーニュ——」
「フランス、フランク国の国王である。なーんてなっ！」

間違いない。彼が正真正銘のシャルルマーニュ。つてことは此処は英霊の座なのか。でもシャルルマーニュは英霊の座にいないはず

「アンタを呼んだのは他でもない俺だ。」

「どうしてオレなんかを呼んだんですか？」

俺の体を勝手に使いやがって殺す。とかならないよな。
「まだ、使えないスキルがあるだろ？」

「はい、あります。」

「それについてのアドバイスをしてやろうと思ってな」

「おおく！それはどうも」

今、俺がシャルルマーニュとして使えないスキルは『聖騎士帝』『王道踏破』が発動出来ない。

「最初に言っておくぞ」

「今のままじゃ、絶対に使えない。」

「——それは、オレが偽物だからですか？」

「いや、アンタの今の状態は俺の分霊に魂が入って活動している。」

「入ってるモノが違うだけで、スペックは俺が分霊になって召喚された時と完全に同じだ。」

「じゃあ、俺がスキルを発動出来ないのは他に理由があるのか
「発動出来ない理由はいたってシンプルだ。」

「ハッキリ言うぞ。」

「はい。」

「——カッコよくない!!」

「——え?。」

「今のアンタは俺に縋りついてるだけだ！」

「俺を憧れにしてくれるのは正直、めちゃくちゃ嬉しい！」

「でもな、結局行動するのは自分自身なんだ。自分の足で前に進むんだ。俺じゃなく、アンタが自分の足でだ。」

「王勇は何だ？」

「それは万人を救う——」

「違う！違う！ちがーう！」

「っ！」

「アンタの心から出た言葉を聞きたいんだ、俺は！」

「俺の王勇それは——」

「守りたい。」

「もっとハキハキと！」

「世界を平和にできなくても——」

「万人を救えなくても——」

「オレは俺は——！」

「せめて——せめて友達だけでも——守らせてくれ!!」

「——いいじゃねえか。今のアンタ、最高にカッコよかつたぜ！」

何か、喉につかかっていた小骨が取れた感じがするな。

「ああ、俺は——そうだったのか」

こんな簡単な事に何で気づかなかつたのか。

「その気持ちをゼツタイ忘れるなよ」

「この気持ちだけは絶対に忘れませんよ。」

「あとは、十二勇士だが俺から言ってみとくから安心してくれ。」

「それはありがたいんですけど、こっからどうやって、帰ればいいですか？」

「ここに来るまでの道を戻れば帰れるぞ。」

「ただ、あつちじや何日か進んでんだよな」

「何日ぐらいですか？」

「もう3日ぐらい進んでる。」

つまり、あつちじゃもう火曜日か。やべえ、北野の約束、ばっくれ
たみたいじゃねえか。

「それじゃあ、俺は帰りますね」

「そっか。それじゃあな！」

「いろいろとありがとうございます！」

「アンタの旅路に希望があることを願ってるよ。」

速く戻らねえと——！

帰還

「戻って……これたのか？」

もう、太陽が落ちてきている。時間てきには夕方か。あとはここがどこかな。

「墓地か？」

周りを見渡すと沢山の墓があった。それにしても凄く綺麗にされている。どっかの偉い人の墓か？

「英霊之牌？」

大岩に『英霊之牌』と刻まれている。英霊って、まさかアーサ王とかギルガメッシュみたいなのがちもんの英雄じゃないよな？

「この絵」

大岩の側にガラスケースがあり、その中に大和絵が飾られている。勇者のような服を着て、武器を構えている。ナニかと対峙してるような感じに描かれている。

「昔の勇者ってことか」

戦っているのは、あの変な生物だろう。あれ、つてことは、この墓は全部、昔の勇者ってことか。パッと見千以上の墓がある。

「女性しか描かれてないな」

大和絵を回って見たが、女性しか描かれていない。ん？

「ちゃんと男性もいんのか」

一枚だけだが、描かれている六人の勇者の中に一人だけ、男性が紛れ込んでいる。

何故だろう。この黒髪の男を見ていると無性にイライラしてくる。どんな人物かも分からない筈なのに……

「帰ろう。」

学校は休んでる事になってるのだろうか。まあ、これから取り返していくか。

「よおーし！今日も一日頑張っていくかー！」

心機一転して、俺として一日一日を楽しんでいくか。今の時間は7時、今から家を出れば余裕で7時30分には銀の家に着く。

「ガス栓よし、忘れ物なし、鍵よし！」

声出し確認OK！行くとするか。これから俺はシャルルマーニュの皮を被った別人になる訳だが。しっかり戦えるかなあー。まあ、心配事ばかり抱えても良い事ねえからポジティブに行くか。

「おはよう、銀！」

「え」

いつも通り、銀と一緒に登校するために家の前で待機していた。

「どうしたんだ？」

「それはこっちのセリフだわっ！」

「??」

「三日間学校に来ずに何してたんだよ？」

「まあまあ、まずは学校に行こうぜ！」

「あつ、ちよ押すなつて！」

とりあえず、学校に向かわないと間に合わない。

「行く途中で話すからさ」

「ああーもう分かったよ」

さて、どう言い訳したもんか。馬鹿正直に英霊の座でシャルルマーニュと話してましたー、とか言う絶対頭のおかしい奴だと思われる。ここは適当にはぐらかすか。

「それで、何で来なかったんだ？」

「ええーつとあつそうだ！実は親戚の人に急に呼ばれちゃつてな

「絶対嘘だろ」
「何で分かったんだ。俺の嘘は完璧な筈」
「じゃあ——」

「じゃあとか言ってる時点でアウトだろ！」
「銀、嘘を見抜く天才だな」
「シヤルって案外、バカなんだな」

「俺はバカじゃない！——気持ちのいいバカだ！」
「そこ、間違わないでもらて」

「バカはかわらないんじゃ」
「それで今日のテストの話だっけか」

「違う違う！学校休んだ理由！」
「くそ、上手く話を反らせなかったか」

「うーん、今考えるからな？」
「一番ありえる理由は？」

「本当の事、言ってくれないのか」
「すまねえ。」

「言った所で理解できないだろうしな」
「いつか言ってくれる？」

「その時が来たらな」

「本当に信用してくれた時に話してもいいかもしれない。
「うん、じゃあ待つよー」

「——！」
「そういえば、そういう奴だったな。銀は。」

「ありがとな、銀」
「どういたしまして！」

「この後無事、問題に巻き込まれてダツシユで学校に向かいましたと
や。」

「銀さきに入っ•ていいぞ」

「分•かつた。」

「ここは俺がドーンと登場して元氣ですよつと伝えないとな
?」

勢いよく扉を開ける。

「二•三」

「シャルルマーニュ! 帰還しましたっ!」

決まった。

「シャルらしいな」

なんか、銀がジト目で見てくるんだが?

「シャル君、この三日間なにしてたの?」

「ズル休み?」

「怪我したの?」

「まあまあ、落ち着け」

一気に押しよして来やがったか。まあしやあないな。

「それでなんで休んだの?」

「それはな——世界を救ってたんだ」

「すごい!」

「いや、嘘でしょ!」

「おっ、鷲尾おはよう!」

「ええ、おはよう。」

「よく、嘘だと分かったな。」

「いや、誰でもわかるでしょ。」

くそ。俺の周りに嘘を見破る天才が多すぎる。

「えっ! 嘘だったの。」

「園子は変わらないなあ。」

「そのうち。」

「普通はわからないよな! 乃木」

鷲尾と銀が嘘を見破る天才なだけで他の人はわからないよな。

「だって、シャルなら世界救えそうだな。くっと思って思ったんだ。」

「確かに。そんな感じがするわね。何故かしら?」

「あれじゃないか。シャルがアニメの主人公みたい顔してるからじゃないか？」

まあ、確かにシャルルマーニユは主人公みたいな容姿だけれども、白髪があつて特徴的だしね」

「これ白髪じゃないからな！メツシユだからな。自毛だからな」

「ほら、もう時間よ。」

「はーい」

そろそろ安芸先生が来るし、席に座るか。

「銀も」

「はあーい」

鷲尾が名前呼びになつてるな。無事、打ち明けられたのならよかつた。

「」

席に着き、教科書を引き出しに入れていく。さて、北野に謝罪を伝えないといけないが、どうしたもんか。授業後の休み時間に行くか

。。

キーンコーンカーンコーン

「それでは終わります。直の人お願いします。」

「はい。起立、気をつけ。礼。」

「二ありがとうございます。」

「よし、終わった。」

早速、北野のここに行くか。北野の席は前の扉のすぐ側だ。

「ちよつといいか、北野？」

「なに？」

いつも通りの北野だが、きつと内心はぶつ殺すぞテメエつてなつてる筈だ。ここは誠心誠意を籠めて謝らないと

「日曜日、バックレちまつてすまねえ。」

「それはいいんだけど、体調は大丈夫なの？」

「それはもう、バリバリ元気だぜ」

「そっか。それだったら、今週の日曜日に行く？」

「おう！今度こそ大物釣り上げてやるぜ！」

北野に天使の羽がついてるように見える。いやあ、俺だったら殴り飛ばす自信があるけど、許してくれるなんて控えめに女神様だな。

まあ、俺が知ってる女神にいい奴はいなかったような気がするけど

「それじゃあ、俺は戻るな。」

「うん。」

次の授業の準備をするため、席に戻る。次は社会だから俺にとっちやあ復習みたいなもんだな（得意教科）。社会の考査で満点以外、取ったことないから。ドヤア。まあ、なんか、俺の知らない約三百年間があるけどな。

「ふう。」

やっと授業が終わった。今回も全理解できたし、このまま帰るか。そういえば、予想外の出来事があったから消耗品が買えなかったのか。まあ今週の土曜に行けば問題ないな。

「シャル君、今日どう？」

今日は帰ってあの本を読まないといけなから無理だな。心苦し
いがここは断るか。

「あー。すまねえ、今日は用事があるんだ。」

「それじゃあ仕方ないね。」

「また、誘ってくれるか？」

「もちろん。」

「ありがとなー！」

やっぱ北野は最高だぜ！

「じゃ、また明日な」

「うん。」

北野と別れ、教室を後にする。

「よしっ、読むか」

家に帰り、俺の部屋に置いておいた古ぼけた箱から『勇者御記』と書かれた一冊の本を手にする。

「埃ヤバいな」

「だ・い・ぶ・年・季・が・入・っ・て・る・た・め、荒く使うと破けそうだな。優しく扱わないと」

「」

「そつと捲る。どんな事が書いているのか——」

????は勇者である
記憶

?月?日

今日から、日記をつけようと思う。また、記憶がなくなつたとしてもこの日記が記憶を取り戻す手がかりになつてくれたらいいと思う。記憶がないと言っても、三年前のあの日、自分が愛知県名古屋市熱田神社にいたことは覚えている。だが、何故そこにいたのか、この三年間何をしていたのかは覚えていない。名前すら覚えていなかった。二日前、壁付近で倒れている所を見つけられたらしい。その後、大社に保護され病院に入院させられた。名前がないと不便という事で、今は大社から貰った『御影士郎』という名を使っている。

「すーはーよしっ」

俺は今、丸亀城の中にある教室のような所の扉の前に立っている。今日から俺はここで授業を受ける事になる。総人数七人、か友達出来るかなー

「——おはようございます?」

「記憶消失中の御影士郎です」

「おお」

あれ?なんか人数少ないな。五人しかいかない。しかも全員女子。ぼっち確定か

「おっ、偉い人が今日来るって言ってた、御影士郎だな!」

「はい士郎です。」

「宜しくな、士郎!」

!?

「タマツち先輩」

「宜しく願います。」

「よそよそしいぞ、もつと気楽にしタマえ」

「は、はあー」

す、凄いな。勇者ってのは

「タマツち先輩がグイグイ行き過ぎなんだよ」

「これから一緒に戦う仲間なんだぞ？」

「それはそうだけど」

「確かに」

それはまあ、そうなんだけどさ

「じゃあ、これから宜しくな土居、伊予島」

「タマツち先輩でいいぞ！」

「タマツち先輩、土郎さんは三年生ですよ」

「ええ〜！」

逆に俺は土——タマツちが二年生つてことにビックリだけどな

「土郎は先輩なのか」

「」

何かこつちを睨んできている人がいんだけど

「若葉ちゃん、また怖がられてますよ。」

「なっ、私は別に」

「男性への話しかけ方に困ってる若葉ちゃん。若葉ちゃん秘蔵画像コレクションがまた一枚増えました♪」

「そんなもの集めるな！消せ！」

「これは私のです」

めつちや仲良いな。あの二人

「ええーつと。乃木さんと上里さんであってるか？」

「ああ、私が乃木若葉だ」

「私が上里ひなたです。」

「これから宜しく頼む」

「ああ、こちらこそ」

乃木と握手をする。隣でパシヤパシヤうるさいが、関わったらヤバ

いと思うのでここはスルー。どんだけ撮るんだよ。

「あと友奈と千景がいるが、今日は休みだ。」

「ああ、だからか」

後日、来たときに挨拶しないとな

「なあなあ土郎」

「ん、何だタマっち」

「土郎はどんな武器を使うんだ？」

「俺は日本刀みたいなもんだな」

「土郎が持っていたのは草薙剣と聞いているが」

「いやあー、何か変身すると消えるんだよな」

前、大社に言われて変身したら持っていた草薙剣は消えた。という

より身体の中に入っていたと言ったほうが正しいか？

「若葉達はどんな武器を使うんだ？」

「私は生太刀と言う、日本刀だ」

「タマは盾だな」

「私はクロスボウガンです。」

「ここにいない、友奈さんがガントレット、千景さんが鎌ですね。」

「おお、結構、バランスいいな。っていうかガントレットってまさか

殴るのか？」

「じゃあ、俺は前線に出て戦えばいいんだな」

「ああ共に戦おう。」

「おう。」

「タマもだからな！」

馴染めるか心配だったが、これなら大丈夫だな。あとは高嶋友奈さんと郡千景さんがどんな人によるがだけど、この人達を見ると安心そうだな。

頂点

?月?日

今日、敵が攻めて来た。天の神が造り出した怪物、パーテックス頂点。初めて見たのに、説明出来ない怒りが湧いてきた。にしても、本当に殴りかかるやつがいるとは、ビックリだわ。

「これが樹海か。」

警報がスマホから鳴ったと思ったら、世界が一変した。現実味がない景色だな。

「そういえば士郎は初めてだったな」

「若葉はもう変身してんのか」

「ああ、常在戦場だからな。」

「流石だな。さて、俺も変身するか」

スマホを取り出し、画面に出されているボタンを押す。背中に担いでいた草薙剣は身体の中に入っていく、どういう原理かは知らない。

「何だ。その戦装束。」

「俺が聞きたい。」

何だこの。大河ドラマでもあまり見ない昔の格好は（f g oでの千子村正第二再臨の格好）。

「合流してから始めるか?」

「いや、ここは私達で数を減らしておこう。進化体が発生しても厄介だ」

「りよーかい。」

武器が必要だな。手に抜き身刀が握られる。

「どうやって出したんだ?」

「何か念じたら出た。」

「謎が多すぎないか」

「まあ今は目の前の事に集中しようぜ」

「それもそうだな」

星屑へと武器を向ける。名前詐欺だろ

「この刀が折れても、俺の事は心配しないでいいからな。」

「分かった。」

「よし、行くぞ！」

「ああ！」

二手に別れて直進する。ここからは手探りで最適解を探せねえと

「はあっ！」

刀の全てを引き出す。星屑は跡形もなくぶっ飛んだ。刀はもちろん折れた。それだったら次は二分の一で

「ふっ！」

続けざまに二体斬る。これも跡形もなくぶっ飛んだ。また刀が折れた。次は三分の一

「せい！」

続けざまに三体斬る。これも跡形もなくぶっ飛んだ。また刀が折れた。次は四分の一

「——ッ！」

今度は命を刈り取れなかった。反撃をくらいそうになるが、即座に斬る。三分の一が最適か

「まあ上々だな」

神性が籠もってない武器でこれならまあいいほうだろう。

「こっからペース上げていくか」

「何かおかしい」

星屑の動きがおかしい。何処かに向かっているような気がする。

「士郎！」

「なんだあ！」

「進化体と千景達が交戦している！援護に行ってくれ！」

「分かった！」

進化体・大社からは何か強い奴としか言われてないからな
全速力で向かうか
まあ、

「もう倒したのか。」

行った頃には進化体はいなくなっており、同じ人物が七人いるとい
う奇妙な場面に出くわしてしまった。

「アンタが郡千景か？」

「ええ、そうよ。そういう貴方は御影士郎ね」

「あつ、私は高嶋友奈、宜しくね！」

「おう！」

良かった

「それでその千景は七姉妹なのか？」

「さっきのは切り札の影響で分身が出てただけよ」

「なるほど。つまり、千景は切り札を使うと忍者になると」

「違うわよ。」

切り札・何かドーンと強くなるヤツ、でもデメリットとして身体へ
の負担がデカい。

「おっ、樹海化が終わったな。」

「そうだね。」

「高嶋さんは病院抜け出して来たんでしょ、戻らなくていいの？」

「うくん、折角だから皆とご飯食べて行こうかな」

「確かに腹が減ったな。」

ずっと、動きはなしたのは腹が空くな。

「じゃ行こプルルルちよつと待てて」

電話を取り出し、俺達から離れた所で何やら会話をしている。見て
いると段々と友奈の明るさが減退していく。

「病院を抜け出して来たのバレちゃって、すぐ戻って来いって」

「そう。」

「まあ、また別の機会に飯食おうぜ」

「うん。」

手をブンブン振りながら、走っていく。元気ハツラツな子だったな。

「さっ、飯食いに行こうぜ」

「そうね」

「千景さん、士郎君こっちです。」

「士郎と千景も来たか」

「遅いぞ、二人共！」

「まあまあ落ち着いて下さい、タマっち先輩」

「四人とも早いな。」

「ここの料理は美味しいからね」

「へえー」

「これがリストです。」

「ありがとうございます。」

ひなたから貰ったリストをペラペラ捲っていく。

「蕎麦はないのか」

「蕎麦!」

「うおっ、どうした?」

タマと若葉がガタツと音を立てて立った。そんなに驚く事言ったか?

「そばより、うどんのほうが美味しいぞ!」

「四国県民は黙ってうどんだろ!」

「そんなに」

「うんうん!」

「じゃあうどん食ってみるか。」

「よし」

「これでまた一人救った」
「タマつち先輩」
「うどんを熱弁する若葉ちゃん
これがうどんガチ勢か

「良いですね。」

親密

?月?日

あの教室にいる人数は俺含めて七人。つまり二人ペアを作る時、必ず一人残る事に今日気がついた。訓練は今の所、走り込みや腕立てとかだからいいけど。柔道みたいなやつもあるんだよね。どうしたもんか。まあその時が来たら考えるか。にしても皆、うどん大好き過ぎだろ。一日三食うどんは絶対に体に悪い。

「——って事があつたんです♪」

「だから、そんな仲が良かったんだな」

「全部話すヤツがあるかぁー!」

事の発端は俺が、何故そんなに仲が良いのかをタマと杏に聞いた事が始まりだ。そこから、杏が細かく丁寧に話してくれた。タマは暴れ出したので友奈が抑えている。

「もうそんなに仲が良かったら一緒に暮せばいいのに」

「フツフツフツ・タマと杏は部屋が隣同士で、入り浸ってるからほとんど同居してるようなものだ!」

「若葉ちゃんだつてよく私の部屋にきます。膝枕で耳掃除してほし
いって」

「わぁーわぁー!」

「若葉ちゃんって甘えん坊さんなんだね」

「ぐぐぐっ。ひなただって夜によく来るじゃないか」

「私は若葉ちゃんがしつかり明日の準備が出来てるか確認しに行つて
るだけです。」

「完全にお母さんだな。」

「ぐんちゃん、今度遊び行つていい?」

「もちろん、歓迎するわ」

「まあ、俺は一人寂しくTV見とくから気にしないでいいぞ。ウウ

「やべつ、そろそろ授業始まるな」

「むっ。そうだな、この話しはここで終了だな。」

出来れば、一生しないしてほしい。まあ、俺が言い出しつぺなただけ
どな

「さて。来やがったか」

「ああ」

「士郎の服。どうなってるんだ?」

「分からん」

「正に和つて感じですね。」

そういやあ、前の戦闘の時、タマ達に会つてなかつたな。

「壁の向こうからバーテックスの群れが近づいて来てる。」

「マップによれば。百体強といったところか。」

「前の戦いよりも。ずっと多いわね。」

「つてことは一人。だいたい十六体ぐらい倒せばいいつてことか」

「十六体、かあ。うう、私には簡単じゃないかも。」

「タマが三十二体倒すから大丈夫だぞっ!タマに任せタマえ!」

一人十六体倒しても四体残るんだけどな。まあ、そこら辺は俺や若
葉が殺るだろし、考えなくてもいいか。

「やっぱり。楽にはいけなさそうね。」

「だが、私達ちも戦いに慣れ、強くなっている。恐れることはない。」

「その歳で戦いに慣れるの果たして良い事なのか。」

「。何事もポジティブに行こう!」

「それもそうだな」

「よおし!みんな、うかうかしてしたらタマが三十体でも四十体でも
持つてくから、そのつもりでな!」

「私も、頑張る。」

「よし、じゃあタマちゃんが四十体っていうなら、私は五十体、倒しちゃおうよ！」

「あつ、友奈！張り合おうってのか！」

「何、張り合ってたんだ。そんなやつてたら全部俺が倒しとくぞ」

「私が、一番多く倒す。」

「みんな、意気込みは十分だな。」

「ただ意地張ってるだけに見えるんだが。」

全員集まってるときはいつもこうなのか。賑やかすぎだろ。

「では、行くぞ。四国勇者、出陣だ！」

「先陣は俺が行く。」

「ぐつ、先を越された。」

先頭取られただけで落ち込みすぎだろ。切り込み隊長に命かけてんのか？

「んっ？」

「どうしたの若葉ちゃん？」

「異常事態か？」

「マップに表示されたバーテックスの中で圧倒的にスピードが速い者がいる。」

「あれか。二足歩行の進化体か」

人間みたいに猛ダツシユしてこちらに向かって来ている。大きさは俺達と同じくらいだな。

「へ。変態さん!？」

「あれは食えんな。」

「いやいやいや、食べれるかどうかじゃないですよ！」

「そもそも、よくあれが食べれると思うな。」

絶対に不味いだろ。

「ふっふっふっ。」

「どうしたのタマちゃん？」

「何だその変な笑い方？」

「今回は秘密兵器を持ってきたのだ。」

タマだけに、うどんタマだあ

「ああっ！」

『最高級！打ち立て！』のうどん王？」

「どうしてそんなモノを持つてんだ？」

「それを・どうするつもり？」

「バーテックスには知性があるんだろ？で、あの姿・もしかしたら人間に近いかも！」

「まあ・似ているちゃあ似てるな」

「そっか！だったら、うどんに反応して隙ができるはずだね！」

「その通り！この最高級讃岐うどんを前に、人なら冷静ではいられないに決まってるっ！」

「決まっではないだろ」

「はいそこ静かに」

「てやあああ！文字通りっ、食らえくっくっ！」

ぽふっ、と進化体のそばに落ちたが、進化体はスルーしてそのままダッシュは継続。

「!!?」

「うどんに・何の反応も示さないだど」

「まさか、釜揚げじゃなかったからかよっ!!」

「そこは絶対に関係ないだろ」

「そうだとしても・最高級うどんを無視するなんて」

絶対、そんな驚くことじゃない。っていうか分かりきった事だろ。

アイツらはただ人を殺すだけのマシーンなんだから。

「やはりバーテックスには人間性など欠片もない・奴らとわかり合うなど、できない!!」

「最高級うどんの仇っ！あいつはタマが倒す！」

まあ、やる気が上がってるし、万々歳か。

「てやあああ！」

「投げた!？」

盾って投げるもんだっけ？

「くっ、かわされた！じゃあ、これならどうだっ！」

今度は回転をかけて投げる。あのバーテックス・身のこなしが軽

いな。あつ、また躲された。

「当たらない！なんだよこいつ、すばしっこすぎるっ！」

「タマっち先輩！援護するよ！」

「わ、わわっ。こ、来ないでっ！」

「あんに——触れるなあっ！」

「うあっ!？」

進化体の攻撃から杏を守るため、前に出て盾で防ぐタマ。当然、受けきれぬ訳がなく体勢を崩す。

「そこだ——」

タンクが相手を引き付けてるうちにアタッカーが倒す。よく、ゲムで見える役割分担だろ。

「これで——」

左手に持っている刀で刺し、動けないようにする。そして右手に持っている刀で——

「——終いだっ!!」

真つ二つと。まあ柔らかい部類だったな。

「タマっち先輩、私をかばって。」

「うう。あんに、無事か。よかった。」

「よくないよ!私をかばったから。」

「いいんだよ。あんにを守れば、それだけでいい。」

仲が良いってのは羨ましいな。あの二人を引き裂く事は誰にも絶対に不可能だな。

「どこか怪我したのか？」

「左肩をちよつとな。」

「あとは小さい奴らだけだから、タマは休んどいていいぞ。」

「大丈夫だったの。このタマが負けるわけないだろ。」

「負傷したなら下がっている！」

「大したことはない、まだ戦えるっ！」

「分かった!頼むぞ、球子！」

「ああっ！」

「俺も負けてられないな」

スピード上げて行くかあー！

「脱臼ですんで良かったな。」

アームホルダーを付け、杏に世話をされているタマ。左腕が使えないのにはかわりないからな。

「窮屈すぎてタマらん。もうこれ、取っちまいたいっ！」

「ダメ！怪我が長引いちやうよ！はい、うどん食べて！」

「ずずずつ。さすが最高級讃岐うどん、コシも歯ごたえもサイコーだー！」

「ごちそうさま。」

「士郎、もう終わりなのか？」

「ああ。」

「ダメだよ、育ち盛りの男の子なんだから」

「いやあー、朝食べ過ぎちやつてな。」

「それならしょうがないね」

「じゃ、俺は教室に戻っとくな。」

「ああ、わかった。」

食欲がないとか言えば、あの優しさの権化に心配されるからこころは黙っところ。夜、たくさん食えば問題ないね。

不和

？月？日

温泉から半月か。男一人つてのは肩身が狭いな。もう一人ぐらいいてもいいと思うんだけどな。まあ、あの広い風呂を一人で独占するつても悪くなかった。蟹も美味かったし、機会があればもう一度行ってみたいぜ。にしても今日の戦闘は数が多かったな。若葉はバーサーカーって事が分かった事が今日の一番の収穫だな。一人でも戦える強さをしてるが、それでもまだまだ一騎当千の強さじゃないし、精神も何かに縋っているように見える。復讐とかか？まあ、これから変わるならいいんだけどな。

「多すぎる。」

「そうだね。マップを見る限り、今までの十倍。ううん、もつというかも。」

「今回はどう見ても千以上はいる。」

「こりゃあ、集合体恐怖症の人は注意が必要だな。」

うじゃうじゃいて、正直言って、気色悪いな。」

「大丈夫！タマたちだって場数を踏んできたんだ！どうってことはないっ！」

「タマたち先輩、無理はしすぎないでね。」

経験を積んで、倒しやすくなっているが、相手がいとも通り挑んでくるとは限らない。戦場ではいつも予想外が起きる。

「ここは時間をかけてでも安全策を取っていく、それでいいか、若葉？」

「」

「若葉」

何か考えてるのか？

「私が先陣を切ろう。はあっ——！」

「おまつ、話を——」

「待ってください、若葉さ——」

「アイツ」

「ナニかに駆り立てられてんのか？どうしてあんなに死に急ぐ必要があんだか」

「私たちも若葉ちゃんと連携して、迎え撃とう！」

「だ、だけど、乃木さん、完全に取り囲まれてしまったわ」

「っ！」

アイツ、なに考えてやがる。仲間を危険に晒す気か！

「どういうことだよっ！バーテックスのやつら、タマたちの方へ来ないぞー！」

「まさか、バトテックスは、まず若葉さんを集中して潰す気です」

「若葉ちゃん」

「すう——若葉——っ!!戻って来い！」

「！」

まだ、取囲みが甘い今なら脱出できる可能性がある。だが、ありやあ完全に聞こえてないな。ああ、仕方ねえ。

「乃木さん、反応しないわ。」

「ちよっぴと危険だが、俺が行って連れ戻してくるしかないな。」

「なら、助けに行かないと！」

「待って、バーテックスの一部が神樹の方へ向かっていくわ」

「だったら、タマたちが二手に別れて——」

「ダメだ。」

「なんでだよっ！」

「今、分かれると若葉みたいになるぞ」

「そうだよ、タマっち先輩、今回は敵の数が桁違いなんだから！」

「うっ、確かに、若葉抜きの今だと、戦力を二つに別けたら、きつと負

ける。」

「神樹が倒されでもしたら、四国が滅ぶわ。乃木さんより神樹の防衛を優先しないと。」

それは正しい。馬鹿して突っ込んで行った一人より、知らない大多数の人達。まあ、俺は前者を取るんですけどね。

「俺が若葉を連れ戻して来る！お前たちは神樹を守っていてくれ！」
「でも、それだと。」

「そうだぞっ！一人で分かれたら危険ってさき自分で言ってたろ！」

「そうです。ここはバーテックスを片付けてから。」

「その間に若葉が死んだらどうする？」

「っ——！」

「っ——！で行ってくる。俺に任せろ！」

「わかった！神樹は私たちが絶対に守ってみせるから！」

「おう！」
「ここは最短であの馬鹿のとこまで行って、救出。なんだ、簡単な事じゃないか。さっさと帰って、お説教しねえとな。」

「——邪魔だ」

こちらに来る、星屑を少ない動作で斬り伏せていく。少しでも最高スピードを維持する時間を伸ばしていく。

「見えた。」

うーん、あれはピンチだな。今にもボロを出して殺られそうな雰囲気だ、よく耐えれたもんだ。

「——しゃらくせえ！」

大剣を取り出し、全てを引き出し振るう。振るった先の数十匹がぶっ飛んだ。

「若葉！」

「——士郎!？」

若葉を肩に担ぎ、飛翔してあの場を去る。

「説教したい所だが時間がねえ。とりあえず若葉はアイツらと合流しろ。」

「わかった！わかったから降ろしてくれ！」

「今から投げるから、着地は自分でしてくれ」

「えっ、今なんて——」

「おらあつ！」

「——うあああああ！」

「よし！いい感じに送れたな。」

俺も後を追わないといけないが、そんな簡単にいくわけがないな。

「さて、押し通るか」

ゴリ押しで通るしかないみたいだな。

「お前らにこの刃は勿体ねえよ。だから、存分と味わって逝けよ」

「幸い、武器の貯蔵は——充分だツ！」

進行方向にいるヤツだけ斬っていく、後ろから迫ってきているヤツもいるが、このスピードで前進し続ければ追いつかれることはない。

「おーい、戻って来たぞー！」

「おおー！土——って後ろのやつらはどうしたっ!？」

「うわあ、大量だね！」

「ヤバいと思うのだけれど」

「士郎は凄いな」

「悪い意味ですよね？」

絶賛、俺は大量の星屑共に追われている。前だけ倒したら、後ろが凄い事になってた。ハハッ、皆とならきつとこの危機も乗り越えられるよ！

「コレ倒すの手伝ってくれー！」

「行くぞっ！」

「そうだね！」

「ええ」

「タマが来たからには、もう安心しタマえ！」

「タマっち先輩、油断しないでくださいね。」

俺も数を減らそうとしたが、なかなか減らない。これももう害虫駆除となんら変わらないな。

「やっと終わった。」

「流石に疲れたわね。」

「もう腕が上がらん。」

「そうですね。」

「みんな、お疲れ様！」

流石にあの量が来ると進化体と戦った時とおんなじぐらい疲れるな。

「さて、いろいろ言いたい事があるが、まずは、どうして一人で突っ込んだりしたんだ。若葉？」

「それは。」

「なにをそんなに急いでんだ？」

「今回は無事に終われたが、次はこう上手くはいかないぞ。」

「ああ。」

「戦場はいつでもどこで誰が死ぬかわかったもんじゃやない。常に冷静にして頭を回すんだ。」

「このままじゃ会話が成立しないな。もしかして、自分でもなんですうしたのか分かってないのか？」

「黙りこくつてもなにもわからないぞ。」

「気まずい。こうやって人を怒るのは初だから、こっからどうするかかわからねえな。」

「私は——」

「！」

「ヤツらに必ず報いを受けさせる」

「報い・か」

「あの日、大勢の罪なき人々を殺戮したヤツらに——！」

「それで、周りが見えなくなつてんなら、そんな思想は捨てろ」

「なに・っ！」

「死んでしまった人達のために怒る事は決して間違つてない、むしろ、正しいと思つている。」

「それなら——」

「でもな、若葉。もし、それで若葉が死んじまつたら俺は絶対に泣く。

俺だけじゃない、ひなただつて泣くだろうよ。」

「っ！」

「お前は一回、過去じゃなくて今に目を向けたほうがいい」

「わかつた。」

「これで麥わつてくれるんならいいんだが。言いたい事は言え、

いいだろう。」

「この話はここで終わり、腹が減つたし、飯食いに行こうぜ！」

「おつ、やっと終わったか！」

「若葉さん、あんまり気負いすぎないようにしてくださいね。」

「すまない、心配をかけた」

「これから、一緒に頑張つて行こうね！」

「ああ！」

「貴方は、こういう事をしないタイプに見えたわ」

「んっ、こういうのは言えるうちに言わないといけないからな、手遅

れになる前に」

「。」

「きつと、お互いに後悔する事になる。」

「まっ、食堂にさつさと行こうぜ。」

「。」

髪飾り【閑話】

12月31日大晦日。本来なら新年に向けて準備をする日(だらける日)なのだが、ここに一人、農作業をしている者がいる。

「よいしょ、よいしょ。」

「よっ歌野」

「あれ、じゃない、大掃除するとか言っただけじゃなかったっけ？」

「こっちはもう終わったぞ。これで新年への準備は完了だ。」

「それはベリーグットね。」

「えーつと、ここら辺耕せば良いのか？」

「そうね。でもここら辺はだいぶ放置してた場所だからハードよ」

ここ数日、雨が降ってないためか土が硬そうだ。

「俺を舐めてもらっちゃあ困るな。最初の頃からレベルアップしたのを見せてやるぜ！」

「ふう〜畑耕した後のお茶は別格だなあ〜」

「??もだいぶレベルアップしたわね〜。最初は鍬の耕すところ逆だったもんね。」

「ぐっ畑耕すとか人生初だったんだからしょうがないだろ」

「一人でやってた時に急に近づいて来て、黙ってクールに耕し始めたと思ったら、逆だったもんね〜！」

「もう止めてくれ。その攻撃が一番効く。」

ずーつと一人でやっていて、いつ倒れるか気が気じゃなかったよ。俺がいてもいなくても結果は変わらなかっただろうけどな。それに水都もいるしな

「さて、俺はもう戻るぞ」

「あら、もう戻っちゃうの？」

「ああ、年越し蕎麦を作り始めないといけないからな」

「??の手打ち!？」

「もちろん」

「よっほほい！元気が漲ってくる〜！」

「あまり無理すんなよ」

「オフコース！」

そこまで喜んでくれるのは嬉しいのだが、怪我はしないでほしいな。

「準備は順調かあ〜？」

「あっ、さん。」

「戻ったぞ。」

「まずは手を洗って下さい。」

「はい、すみません。」

農作業をしたせいか手には土がついている。前、壁に手を置いて土をつけてしまい、怒られてしまった。怖かった。

「で、どうだ？」

「飾り付けは順調なんですけど、ケーキが」

「失敗したのか？」

「クリーム塗る所までは出来たんですけど、飾り付けが上手く出来なくて。」

「後で一緒にしてやるから待っててくれ」

「わかりました。」

「俺は今から蕎麦を作るから、水都は続けて作業しておいてくれ。」
「任せて下さい。」

さて、前作った蕎麦より上手いのを作らないとな。気合入れていくぜ！

「ただいまー！」

「あれ、誰もいないのー？」

「みーちゃ——」

「パアン？パアン！」

「お誕生日おめでとうー！」

「わわっ！」

「どうだ、驚いたろ」

「すっ、凄いサプライズね。」

「ケーキもあるよ♪」

「やったあー！早速みんなで食べましょ」

喜んで貰って何よりだ。一番頑張ってたんだから、誰よりも幸せになってもらいたいもんだ。

「っとその前に、ほら、プレゼントだ」

「あ、開けていい？」

「おう」

「これは、ワンピース？」

俺お手性の水色のシンプルなワンピースだ。

「歌野、こういうった服持ってなかったろ。だから、その服着て一日ぐらい遊んできてもいいんだぜ？」

「全てが終わったら、一緒に遊びましょ！」

「ああ、そうだな。」

●農作業の事なのか、それとも

「うたのん、私のも受け取って貰える？」

「うん！みーちゃんはいつでも大歓迎だよ」

「はいうたのん、お誕生日おめでとう」

「開けていいよね？」

「うん」

「金糸梅の髪飾り、綺麗」

「それ、私がお用意し——！」

「」

「言うなよ〜言うなよ〜」 (念を送る)

「どうしたの？」

「な、なんでもないよ。」

ふう〜、アイツが渡す事に意味があるからな。まあ、クリスマスプレゼント用意するより疲れた。

「ケーキ切るぞー」

「あつ、ちよつと待ってー！」

「主役が行ってないですよー」

「みーちゃん、ありがとね♪」

「よしつ、切ったぞ。ほい、ほいっと」

切ったケーキを皿に盛り付けていく。

「あれ、??の小さくない？」

「そうですね。私のより小さいですね。」

「今日の主役はどーんつと食えー！水都の手作りだからな。」

「それじゃあ遠慮なく。んっ〜〜美味い！」

「良かったな。」

この日のためにサトウキビをなんとかして育てて、鶏を飼育し、イチゴを育てた。くう〜、全てはこの日のためつてな。

「よしつ、それじゃあ蕎麦湯がいてくるな」

「あつ、手伝います。」

「私もいる？」

「歌野は休んどいていいぞ」

「大丈夫だよ、うたのん」

「はい。」

毎日、そんなぐらい落ち着いていたらいいんだけどな。

「水都、水を沸かしておいてくれ」

「わかりました。」

その間に俺は蕎麦を等間隔に切るか。

「」

トントンとリズムよく切っていく。人数は三人だが、一人何杯も食べるヤツがいるから多めに作っている。

「沸きました。」

「離れてろ、お湯が跳ねるからな」

「はい」

「後は俺が見とくから水都も休んどいていいぞ」

「あの」

「どうした？」

「髪飾り・私が渡しちやってよかったですか？」

「言つたら、水都が渡す事に意味があるんだよ。」

「でも」

「いいから、いいから」

「はい。」

さて、そろそろだな。

「ほら出来たぞ」

「おおく美味しそう！」

「うたのん、熱いからね」

「——！」

温感がないのか一気に食べていく。舌火傷しないのか心配だな。

「うくん、デリシヤス！」

「作りがいがあるもんだ」

「前より美味しいです！」

「良し……！」

「ふうーお腹一杯」

「よく五杯も食えるもんだ」

「うたのんは凄いね」

ほとんど食いやがった俺も二杯食ったが、五杯は意味分からんな。

「さて、じゃあ俺は部屋に戻るな。」

「ええー、年明けまでトークしようよお」

「まあ、それも有りだな」

「ダメだようたのん、夜ふかしは肌に悪いんだから」

「ううー、わかった、寝るよ。」

「フフ、じゃあ俺は戻るからな。」

「??」

「んっ？」

「今日は楽しかったね」

「おう、来年もしような」

「約束ね」

「おう、水都も」

「来年もこの三人でやりましょう」

「約束だ——」

「ちっ、今回はしつこいな」

「前よりハードね」

「気合入れて行くぞ！」

「ええ！」

刀を手に取り出し、バーテックスを倒していく。一瞬でも気を抜けば即死、感覚を研ぎ澄ます。そして五秒後の生存を勝ち取るんだ。

「ッ！——歌野！」

「えっ——」

歌野が一匹倒し損ねた。マズイマズイマズイ——！！

「おらあつ！」

「助かったわ！」

「気を抜くなよ」

「ノープロブレム、次はないわ」

「なら良いんだが？」

肝を冷やしたぞ。一人でも負傷すれば前線は崩壊する。

「なんだあのデカいの」

「親玉？」

「ヤバいな」

他のバーテックスとは違うな。分かるのは絶対ヤバいということだけ。どう戦ったもんか

「アレさえ倒せば後は楽勝ってことね！」

「そうだな。アレ倒して蕎麦食いに行こうぜ」

「??の奢りね」

「しょうがねえなー。何杯でも奢ってやるよ」

「その言葉、覚えたからね！」

「遠慮してくれよ」

軽口を叩きながら、バーテックスを殲滅していく。ついにデカいのが動き出した。火の玉が飛んでくる。当たれば即死だろう。

「——回避!!」

「ここで回避したら諏訪に人達が危険だわ。アレはココで止める。」

「ああ、言葉を間違えた。歌野、離れてろ」

「はどうするの!?!」

「アレは俺が斬る」

「??には何か策があるの!?!」

「フツ——奥の手はねえのかって? 阿呆。んなモンあるに決まってるんだろ。」

一度はこのセリフ言ってみたかったんだよなあ——!

「来い————草薙剣」

「!————待ってそれじゃあ、??が!」

「アイツは俺が倒す。後のヤツらは歌野、頼んだぞ。」

「待って! 待って! まだやりたい事が——!」

「——あああああああ!」

火の玉をみじん切りにして火の粉程度にする。そしてあのデカ物まで一直線に走る。途中の雑魚どもは無視だ。アイツさえ倒せば、後は歌野がやってくれる。俺の頼れる相棒が——

「さっ、一緒に逝こうぜ——怪物」

一刀両断————真つ二つにして更に溢れてくるバーテックスを斬り刻んでいく。再生はさせない、此処で全て殺す。一ミリたりとも残さない。

「ふう、これで仕事納めだ。」

心残りは沢山ある。数えれない程に.....ああでも一番の心残りは——

「今年は祝ってやれなかったなあ————」

————そこで俺の意識は落ちた。

対話

?月?日

全く、年頃の女の娘が男の部屋に迂闊に入るのは危険だと言われないのか。それとも、俺が男として見られてないのか。信用されてるならそれはそれで嬉しいんだが。にしても、杏は人の感情に敏感というか。寄り添いが上手いというか。流石としか言えないな。後は若葉次第って所か。まっ、うちの頼れるリーダーだからな。大丈夫だろう。今、一番心配なのは千景だな。友奈が怪我でもしたら一瞬で精神不安定になりそうだな。どうしたもんか。

「うーん。まだ出るには時間があるな。」

今日は早く起きてしまい、準備が終わってもまだまだ時間がある。今から学校に行けば、若葉あたりはいるとは思うが。いや、昨日の事もあつたし分からないな。

ピンポーン

「誰だこんな朝っぱらから。はい、今出ます。」

「おはよう。士郎。」

「うおっ、若葉か。どうした?」

「ちよつと話しをしたいんだが。いいか?」

「分かった。入っていいぞ。」

俺の部屋に移動して、俺はベット、若葉は椅子に座る。個室に男女二人。まあ、何も起きないんだが。つてかこれ、ひなたが知ったら殺しに来そうなんだけど。大丈夫だよな?

「それで、何について話したいんだ?」

「士郎の戦う理由はなんだ?」

「唐突だな。」

戦う理由ねえ。強いて言えば――

「お前達が死なないようにするためだな。」

「私達のため。ということか？」

「お前達のためでもあるが、俺のためでもある。」

「」

「前にも言った通り、お前達の中で一人でも死んじまったら、絶対に俺は泣く。一生塞ぎこんでやる。」

そんな中で、知らねえ人達のことなんて考えていれるか。俺は俺の事です。一杯だ。」

「だが、必ず別れはある。」

「寿命ならしょうがない。でも、僅かでも可能性があれば俺は絶対に諦めない。そいつが死にたいと思っていなくても死なせてやらない。」

「なかなか重いな。」

「口だけならなんとでも言えるぞ。」

果たしてこれが実行出来るかは、そういう場面に出会った時しか分からない。

「それで、若葉の戦う理由は何だ？」

「私は、何で戦っているんだ？」

「昨日言ってたのは違ったのか？」

「ここで質問で返してくるか。こういう相談はどう対処すればいいんだ。」

「昨日の夜、考えてみたんだ。この思想はただの復讐なんじゃないかと。」

「やっとなんか。そう、あれはただ報いだの苦しんだ人々の苦しみを味わせるとか。ただただ耳障りのいい言葉で飾り付けた、ただの復讐だ。」

「死んだ人々の事を思うと怒りが湧いてくる。」

「それで視野が狭くなったと。」

無関係の人が死んだだけで、ここまで怒れるのは凄いなことだと思う。他人の痛みが分かる人は強いつて聞いた事があつたけ？」

「私は・私は何のために戦えばいい!?」
「ちよつ目が怖いって、少し落ち着け。」

「すまない。」
「相当追い込まれてんのか。ひなたはなにしてる。若葉命のアイツがよくこれ見て耐えれたもんだ。特に良心とか」

「若葉は頭が硬いな」

「頭が・硬い?」

「そうだ。若葉は物事を難しく考えすぎだ。もっと簡単に、シンプルに考えていいんだぞ。」

「シンプルに。」

「褒められたいとか、モテたいとか。そんな自分本位でいいんだぞ。」

「私はリーダーとして皆を引っ張らないといけない。」

「リーダーだろうとなかろうと自分の意志は間違いじゃないと思う限り、張り通していいんだぞ。」

「もうそろそろ時間だな。しょうがない中途半端だがここで終わるしかないな。」

「時間だし、学校行こうぜ。」

「わかった。」

「きつと若葉ならいい答えが見つかるから安心しろ。」

「若葉ちゃん。大丈夫かな?」

「心ここにあらず。って感じね。」

「朝からあの調子は流石にヤバくないか?」

「ひなたさんはいせませんし、どうしましょう。」

ひなたはどうやら大社に呼ばれて今日はいないらしい。さつき杏に聞いた。

「士郎が発端だろ。どうにかしろよ」

「出来る限りの事はしたんだがな。お手上げ状態だ」

うどんで機嫌を戻そうと最高級のやつを渡したんだが、受け取ってくれたものの機嫌は戻らなかつた。チームプレイでの中違いは一番ヤバいと知識にあるからな。早く復帰してもらわねえと。

「――」

「――」

「杏?」

急に杏が若葉に近づき始めた。何か考えがあるのか?

「若葉さん、ちよつと出かけましょう!」

「――え。お、おい杏、ちよつと待つてくれ!」

杏に手を引かれ教室から出ていった。行動力凄いな。

「大丈夫か、あれ。」

「ついていつてみよう!」

「そうだな!」

「はい?つてそのマスクはどっから――もういない。」

友奈とタマはどこから取り出したサングラスと変なマスクをつけて追いかけていった。

「貴方はどうするの?」

「そうだな。俺は必殺技を完成させたいから特訓しとくよ」

「そう。」

そう言うのと千景も教室を出ていった。

「さて、俺も始めるか。」

合同訓練は午前で終了していて、今からは自由時間だ。だらけるもよし、特訓するもよし。

グラウンドに立ち考える。俺の戦闘方法でどこまで通用するのか。そこらの星屑程度なら遅れをとることはない。だが進化体はどうだ?初の戦闘で進化体は現れたが千景の切り札で倒された。

つまり、切り札を使わないと危険ということ。俺も切り札使えばいいじゃんと思っていたが、どうやら俺に精霊はついておらず、切り札は使用出来ない。そのせいか、俺の変身時の身体能力は若葉を超える。

そして俺は気づいた。あれ、進化体はどうすんの？つと、切り札がないならどう倒せばいい？刀の全てを引き出した所で決定打にならない。すぐに修復されるだろう。ならば――

「目指すは絶対破壊の一撃。即ち、究極の一振りだな。」

そのためにはどうするか。草薙剣を使うか。いや、あれは駄目だ。何かいけないような気がする。本当にヤバいと思った時にしよう。

「一振りに全てをかけるか。」

何故か毎回増えていく刀。それを一本に束ねる。いい案だと思うが、どうやって束ねる？

「投影、開始」

とりあえず刀を出して考えてみる。柄はない抜き身刀。こういうのはイメージが大切って友奈が言ってたな。

「破却――」

小さな結晶になって碎ける。

「収束――」

また、一本の刀に戻った。

「これだな。」

追加で三本取り出す。

「破却――」

四本の刀全てが、結晶になって碎ける。

「収束――」

結晶が手に集まってきて、一本の刀になる。

「見た目は、変わらないな。」

問題は破壊力だな。ちゃんと四本分あるのか。試しに3分の1引き出して振るう。

「――ッ！」

「こりやあすげえな。地面に亀裂が入ってやがる。整備が大変だな。」

「とりあえず完成だな。」

「これを俺の切り札にするとして、実際に通用するかは進化体に会わないとわからないな。」

「亀裂って地面均したら隠せるかな。」

「ふいー。疲れた」

整備を終わらせ、寮に帰る途中 あれは

「若葉達か。」

「おーい、士郎ーっ！」

「やべっ、見つかった。とりあえず手は振り返しとく。」

「こつちこいよー！」

俺をご指名らしい。行くしかないだろな

「なんだ？」

「これからみんなでうどん食いに行くんだ。士郎も行くだろ？」

「うどんか。——」

まず、男女比を考えてみよう。若葉、友奈、千景、タマ、杏、この時点で5:1。おかしいですね。絶対きまづくくなる。いや、分かっている。アイツらはそういう事を気にしないということも。だが、俺には大ダメージだ。

「——そうだな、食いに行くか。」

「士郎も行くってー！」

「よし、私の一押しのおどん屋に連れ行ってやる。」

「楽しみだね、郡ちゃん！」

「ええ、そうね、高嶋さん。」

「杏、どういふ裏技を使ったんだ？」

「裏技じゃないですよ。ただ、お出かけしただけですから。」
なるほど。百聞は一見にしかずって言うしな。言葉より実際に見
せたらよかつたのか。

「今日も楽しかったな。」

その後、何故か全額俺持ちだったのが納得いかないが（大社につけ
といた）まあ、いいか。

「寝よう。」

日記もつけたし、早めに寝るか。明日もいい日になりますように

カン

カン

カン

カン

何だこの音は。鉄を打つ音か？どこから

『あそこか』

近づくとつれ段々と温度が高くなる。

『誰だ』

やっと見えてきた。遠目から見てもあれはおじいちゃんだな。

「爺で悪かったな！」

『！』

「そんな遠くからみんな気が散る。みるんなら近くで見やがれ」

『あっはい』

急いで駆け寄る。めっちゃ暑いな。

「」

「？」
刀を打ってるから刀鍛冶でいいんだよな。つまり俺が使っている
刀はこの人が打ったので、いいんだよな？」

「」

「」
なんだろう。見ていると、刀に引き込まれるというか、魅了される
というか——

「はっ！」

——夢、か。凄いいリアルな夢だったな。暑さを感じるとは
記に忘れないうちに書いてくか。日

「これじゃあ、夢日記だな。」

作戦会議

?月?日

白い部屋でお爺さんが刀を打っている夢を見た。やべえこれだけしか思い出せない。しょうがない、これだけ書いとくか。日記の続きは一日の終わりにまた書くとする。

ここから今日の出来事について書く。ひなたが戻って来たと思ったら、めつちや重要な事を言ってきた。まもなくバーテックスの総攻撃があるらしい。それで、杏と俺で作戦をたてたが、皆理解できなかった。にしても、四国以外に生存者がいるのか。何故だろう。頭に諏訪が思い浮かんだ。

「まもなく、バーテックスの総攻撃がきます。」

「『総攻撃』」

「今回の神託で明らかになりました。」

「総攻撃か。」

「それもかかってない規模で。」

持久戦が一番だが、これはしっかり連携をとらないと不味いな。

「心配ないさ、タマにまかせタマえ！」

「私も頑張る。」

「勇者の力を見せてあげるわ。」

「これさえ乗り切れば、しばらくは来ないって事だよね！」

「凄いポジティブだな。」

「皆で力を合わせれば、きつと大丈夫だ。」

「そうですね。」

暗い雰囲気じゃ勝てるのも勝てないし、明るくいくしかないな。当たって砕けろ、だな！

「あ、いいニュースもあるんですけど。安芸さんが教えてくれたんですけど。」

「安芸さん？」

聞いた事ない人だな。巫女の人か？

「勇者の力に目覚めた日、タマにあんずの場所を教えてくださいました巫女さんだ。」

「真鈴さんがいなかったら私は今ここにいませんでした。」

「元気してた？」

「二人を心配してましたよ。」

それで、いいニュースとは……

「ひなた、いいニュースってのは結局なんなんだ？」

「それはですね。四国以外から生存者がいるみたいなんです。」

「諏訪——」

「どうした、士郎？」

「——んっ、いや何でもないぞ」

！今、俺なんて言った？

「？」

「そ、そうだ、作戦をたてないか？」

「そうだな。今回はいつもとは違うからな、無策という訳にはいかないだろう。」

「なんかいい案あるか？」

「殴る！」

「とりあえず倒す！」

「……」

頭痛くなってきた。脳筋が二人つと……千景は何か考えてくれるけど

「あ！陣形を組むのはどうですか？」

「おっ！それいいな！」

陣形か……やっと作戦。ぼいやつが出たな。後はどういう陣形を組むかだな。俺含めて六人、杏は後ろから掩護でいいとして、余り五人……その……

「どうした？」

「出来れば簡単な方がいいなあ〜って」

「私も難しいと頭こんがらがるかもじれないから」

「OK とりあえず黒板に書いていくぞ」

とりあえず、神樹を守ればいいから正面からくる敵を全て倒せばいいな。

「杏は動かさずにこっから皆の掩護、倒し損ねたヤツを倒して行ってくれ。」

「わかりました。」

「正面以外にどこ配置すればいいと思う？」

左右に一人ずつか いやそれだと二人余るな。右斜め左斜めにも配置するか？

「東西に一人ずつ置いて余りの二人は休憩するのはどうでしょう？」

「ああ 替えか 確かに長期戦を見越しての休憩は必要だな。でも替え二人もいるか？」

同時に疲れたヤツが二人いないとサボりになるぞ。

「はい。自由行動がいいと思います！」

「それ、陣形崩れちゃ—— いや、それも有りだな。」

「いや、なしだろ。」

自由行動なら一人が危機的状況になったとしても、自分の持ち場を考えずにぶっ飛んでいける。だが、無尽蔵の体力が必要だな。じゃあ俺が行くしかないよな——

「よし出来た。これでどうだ！」

正面が若葉、東が友奈、西がタマ、最初の替えが千景そして——

——自由行動の俺！

「なに!? 自由行動をタマに譲れ、士郎！」

「タマっち先輩落ち着いて——」

「自由行動に替えは使えない。つまり、一時間ここの外周を全力疾走するのと同じぐらいキツイがやるか？」

「なんだか西の方がいいと思えてきた——」

「士郎」

「なんだ、何か問題あったか？」

「いや、それはない。いい作戦だと思う。だが、いいのか？」

自由行動についてか？

「常に脳をフル回転にして頑張るよ。最悪、俺が倒れても無視してくれていいぞ。」

「私が言えた口ではないが、無茶するなよ。」

「わかった。適度に休むから心配するな」

「若葉ちゃん」

「うおっ！ひなた。なんか怖いぞ？」

「いえ、いつも通りですよ。」

「あつ俺、用事思い出したんで帰りますね。」

「タママも用事思い出す気がするから帰るな。元気でな若葉」

「お先に失礼します。」

「え、ちよつとはつ、友奈！」

「なつ、いつのまに」

「若葉ちゃん」

「ジリジリ詰めてくるな！待て！話せば分かる！」

「うふふふ」

「うふふふ」

「——うあああ！」

※この先はぐ想像に任せます。

特訓

?月?日

今日から毎日弁当を持っておきたいと思う。いつ総攻撃がくるか分かれればいいんだが、まあ高望みしても意味ねえな。今日は昼に皆で食べたから余りは少なかったが、明日はどうなるだろう。一応、皆美味しいと言って食べてくれたが塩おにぎりだけだと飽きるだろうし、レパートリーを増やさきやな。

「ふっ!」

「うおっと」

今回の合同訓練は模擬戦だ。何故か俺VS若葉になってるがそこはご愛嬌ってな。

「こうやって士郎と戦うのは初めてだな」

「そもそも模擬戦が初めてだから、な!」

さて、どう攻めるか。若葉は確か居合が得意技だった筈。雑に攻めたらカウンターがくるな。ただ、あっちが来ないならこっちから行くしかないよな。

「来る——ッ!」

行くと見せかけてのフェイント。そして居合を潰すための投擲——これで俺は無防備だが、弾かれた木刀をキャッチすれば問題ない。

「勝負あり。ってな」

「ああ、私の負けだな」。

「え、えええええ!」

うおっ、耳が……！

「乃木さんが、負けるなんて……」

「いや、まだ負けちゃいねえだろ」

「あつ、そつか二本先取だもんね」

「ぎっ！次やるか」

「ああ……」

「これも勝つて、俺が勝つ」

「いいや、ここから私が逆転だ」

負けず嫌い同士だからな。さっきの手はもう効かない。なら、新し

い作戦を考えるまで——

「行くぞ」

「ああ——！」

この後の結果だけ言ってしまうえば、引き分け、負けで結局勝負はつかなかった。

引き分け（互いの喉に木刀を同時に寸止めした）

「疲れた。精神擦り減らしたぞ」

「士郎は誰かから教わったのか？」

「うーん。どうなんだろうな。そういうった記憶は俺にはないな……」

「我流ということか。私ももつと磨けなければいけないな。」

「俺としては、ただぶつた斬るだけでいいから技とかを使うことがほ

ぼないんだよな……」

「ずっと気になっていたんだが。あれはどういう原理で斬っているん

だ？ 毎度毎度折れてるように見えるが……」

「あー、あれは……」

どう説明したもんか……

「そもそも俺が使っている武器は若葉が使うのとは違い、神性が籠もっていない。」

「じゃあ、あれは普通の武器なのか!？」

「ああ、それをバーテックスを倒すために刀の力を最大限引き出している。だから、よく刀が折れるんだ」

「???」

「え〜つと」

「百聞は一見にしかずだったな。」

「ここに刀があるだろ。この刀の耐久値を十とする。」

「ああ」

「この十が零になったらどうなる？」

「壊れる。なるほどそういう事か」

「そういう事だ」

理解してもらえて良かった。

「刀は無限にあるのか？」

「いや、無限じゃない。」

「限りがあるのか？」

「そこらへんは上手くやりくりするさ」

「草薙剣は使わないのか？」

「あれは俺の奥の手ってもんだ。本当にヤバくなったら使うようにしている。」

「なら、今後使うことは一切ないな」

「——ああ、それが一番だ。」

あの剣は絶対に使うなと本能が言っている。そもそもあれは、俺が使うような武器じゃない。本当に立派なヤツが使う武器だ。なのに何で俺が持つてるんだらう。

「士郎は一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

「そのデカイ箱はなんなんだ」

「ああ、これは弁当箱だぞ。」

「士郎が一人で食べるのか？」

「流石にこんな量、一人で食べるか。ほら、昨日ひなたが総攻撃が来るって言ったろ。だから、いつ来てもいいように準備してんだよ。」

「ああ、なるほど。今日来なかったらどうするんだ？」

「そりゃあ、食べるしかないだろ」

「一人でか？」

「夜、お前達に配りに行くよ。一人一段で作ってある。」

「中身はなんなんだ？」

「塩おにぎりだ。昼だし皆を呼んで食べるか？」

流石にこの量は作りすぎたと思うし、ちよつとここで減らしとくか。

「おーい！お前らー！昼ご飯だぞーっ！」

「昼ご飯!？」

「うおっ！はえな。そんなお腹すいてんのか」

「うん。もうお腹ペコペコだよ」

「この量。士郎が作ったのか？」

「ああ。まあ、おにぎりだけだからな」

「これ全部おにぎり。凄い量ですね。」

「なんかおかず買ってこようか？」

「おにぎりだけで充分だ。わざわざ買いに行く必要はないだろう。」

「それならいいだが。」

おかずも作つといたほうがいいかな。目玉焼きとかウインナーとか簡単なやつ入れようかな。

「それじゃあ早速——」

「——先に手洗いだろ？」

「はっはいッ！」

「あつ。高嶋さん、私も。」

ちよつと注意したつもりだったんだが。そんな怖い顔してたか？

「じゃ、じゃあタマも手洗い行つてきまーす！」

「私も行つてきますね。」

「俺、そんな怖かったか？」

「圧が。戦つてる時みたいだったぞ。」

「そんなにか。俺達も手洗いに行くか。」

「そうだな。」

「んんん!!うまいなっ!」

「そりゃあよかった。」

「タマっち先輩、よく噛んでから食べないと——」

「んぐっ!」

「お水お水!」

「くくぷはあ、死ぬかと思った。」

「沢山あんだからゆっくり食べるよ。」

「いやあく、このおにぎりが絶品でなく」

「おにぎりで窒息死とか笑えないからなく」

そこまで言われると嬉しいが、落ち着いて食ってもらいたいもんだ。

「んっ!本当だ、美味しい!」

「今まで食べた、おにぎりのどれよりも美味しいわね。」

「どうやって作ったの!」

「一般的な作り方なんだが。」

「手から何か、美味しくなる成分でも出てるのかしら。」

「出てる訳ないだろ」

本当に、出ないよな。自分の手を見ても他の人と変わらないしな。

「これなら、いくらでも食べれるな」

「これから続きするんだろ。食いすぎるとキツくなるぞ。」

「って何名かも手遅れなヤツがいるな。そんなに美味しいのか

試しに一つ食ってみる。

「特につて感じだな。」

「? 絶品って言うほど美味しい訳じゃないな。」

「自分が作ったから、そう思えるんだよ。他の人が作ったのは美味しく思えるという話を聞いたことがある。」

「ああ、なるほど。」

「ふいーくったくったあー」

「はしたないよ、タマっち先輩」

「よく食うな」

一段丸々食いやがった。あの小さい体のどこに入ってたんだ。

「すごく美味しかったよ！」

「そりゃあよかった。」

「ええ、そうね。」

「体が資本だからな。」

「そうだね。ぐんちゃん、もつと食べていいんだよ？」

「わ、私はもうお腹一杯だから。」

「無理強いするつもりはないから大丈夫だぞ。自分のペースで食べていいからな。」

さて、どうするか。この状態で再開すると気分悪くなるだけだし、食後休憩が必要か。

「どうする若葉」

「――」

「若葉？」

「これってまさか。」

「Zzzzz、Zzzzz――」

「寝てやがる。しょうがない、休憩してから再開するか。」

「あはは。そうだね。」

「乃木さんって寝るのね」

「何だと思ってるんだ」

同じ種族やぞ。

「よし、じゃあやるか。タマ」

「ふっふっ、いいだろう。このタマが相手してやるっ！」

タマの戦い方をあまり見てないからここで見ておくか。

「盾か」

どう崩すか。守りに集中される前に倒すか。

「ふっ！」

「ぐうっ！」

「——ちよつと待て」

受け流されるの前提に切り込んだんだが、真っ正面から受けやがった。

「ど、どうしたんだ？」

「タマは、受け流すとかしないのか？」

「うけながす？」

「よく、腕がぶっ壊れなかったな。」

「ちよつとそれ貸してくれ」

「ほい」

「よし・若葉ー！」

「どうした？」

「打ち込んでみてくれ」

「分かった。」

「えーつと、どうやってやるんだっけ？確か——滑らせるイメージ

「よつと出来た。」

案外出きるもんだな。

「今のは、受け流しか？」

「まあ、そんなもんだな。タマ、今の分かったか？」

「ばっちしだ！」

「よおーし、次は実践だ！ほらっ」

盾をタマに返す。

「行くぞ。」

「いつでもいいぞ。」

タマは考えるより感じるタイプだからな。何とか初手で

「はい」

「へい・おっ」

やっぱりな。

「出来たな。」

「よおーし！みたか、これがタマの力だアー！」

「よし、スピード上げていくぞ」

「えっ」

「構えろ」

「どんと来い！全部受け流してやるっ！」

「はあーはあー、どう、だ、これ、がタマのちか、ら」

「すげえな、予定ならもつとかかかると思ったんだが」

「タマは天才、ガクツ」

流石にぶっ通しでやるのはキツかったか

「本番でやる時は、受け流す方向に誰もいない事を確認してからやってくれよ。」

「ふう、じゃあ本番でやる事はないな。なぜなら、タマの近くにはあんすがいつもいるからな！」

「まあ、一人の時に俺達が来るまでの時間稼ぎように覚えていてくれ。」

「わかったぞ。」

果たしてこの技術は盾を投げ飛ばしているヤツに必要なだったかは考えないようしよう。

「もう、五時か」

「朝の八時からやってるし、そろそろ終わりでいいだろう。若葉に申請しに行くか。」

「おーい！若葉ー！」

「——んっ、なんだ？」

「五時だし、そろそろ終わりにしないか？」

「もうそんな時間か、そうだな、終わりにするか。」

無理にやっつて体壊したら目も当てられないからな。

「みんな、集まってくれ！」

「どうしたの若葉ちゃん？」

「」

「どうしたんですか、若葉さん。」

「タマをお呼びか？」

「今日の訓練はこれで終わりだ。明日は午前と午後どっちがいい？」

「午前の方がいいんじゃないか？攻めてくるのが朝から来るかもしれないしな。」

「午後から始める予定にして、皆バラバラに行動している午前ぐらいに攻めて来たら、陣形もクソもない。」

「それだったら、ずっと固まっていたほうが良くないか？」

「ああー確かにいや、でもそれはなんか逆に気を張りすぎちゃうし、いつも通りでいいんじゃないか？」

「それもそうだな。という事で明日は午前訓練して午後は自由行動にしよう。」

「はい！」

「分かったわ。」

「集合時間は今日と同じですか？」

「ああ。」

「あんずー！うどん食いに行こうぜー！」

「その前にストレッチしろ？」

「は、はい！」

運動した後は絶対にストレッチをしないとイケない。マジで体が壊れるからな。

持久戦

?月??日

今日はもう疲れた。明日は休むって若葉に言ったし、明日一日ずっと寝よう。何なら明後日まで一回も起きずに寝れる自信がある。まっ、特に被害がなくて良かった。

「やっと来やがったか。」

「気を引き締めていくぞ、みんな」

「はい。」

「タマの一騎当千の活躍をしかと目に焼き付かせてやるっ！」

「私もと、とにかく頑張る！」

「ええ。」

「皆、意気込み充分。これなら陣形を使っても問題ないな。」

「おっとその前に、ちよつといいか」

「どうした。何か問題があったか？」

「腹壊したのか」

「いや、そうじゃなくてな。今回から折れそうになった刀を地面に刺していくから気をつけてな。」

「どうして刺すの？」

「奥の手に必要だからな。」

「吹き飛ばされて自分に刺さりそうになったらどうするの？」

「叫ぶなりして俺に伝えてくれ。」

「わかりました。吹き飛ばされたら地面を確認するようにしましょう。」

「了解だ！」

「わかった。」

「楽しみにしとくね！」

「奥の手・ロマンがあるわね。」

「使うかは状況によるがな。」

使わないなら使わないでいいんだが。備えあれば憂いなしっていうしな。俺は手数が最大の武器だし、どんどん奥の手を増やしている。これは奥の手って言うのか？

「そろそろ敵が近づいてくる。みんな、配置に向かうぞ。」

「タマは西だな。西ってどっちだ？」

「左だ！」

「よ、よおーし、タマ出撃ー！」

「心配になってきた。」

「ぐんちゃん、行ってくるね！」

「頑張ってるね。高嶋さん。」

「ビッシバッシ倒してくるね！」

とりあえず、ここまではいいとして。問題は敵がどういう感じに攻めてくるかだな。一点集中で来たなら、集合して戦うしかないが。見た感じ、バラバラだな。

「よし、俺も行くか。弁当箱ここに置いとくぞ」

「なんだか前より、大きくなってるんですか？」

「みんな、よく食うと分かったからな。特にタマが。」

「ああなるほど」

。会話はこのままで。後は敵が撤退するまで脳みそフル回転で行くぞ

。刀を握る。今回は全部使い切ったら駄目だ。粉々になる寸前で止めないといけない。四分の一を三回でいこう。それなら、ギリギリ倒し切る。

「残数は419本。なくなる前に終わらせねえとな」

。終わるかは敵の気分次第だし。なくなった時は草薙剣を出すか。

「正面からだな」

見た感じ、敵の数が多いのは正面。若葉がいる所だな。若葉ならい
けそうだが加勢しとくか。

「加勢するぞ、若葉」

「それは心強い、頼むぞ士郎。」

「任せろ。」

ここで注意しないといけないのは、ここに掛かりつきりになつて
うちに友奈かタマの方に行かれて突破されるのが不味い。だから、敵
を倒しながら動きにも注意を割かないといけない。

「フツ、ハツ、セイ！」

「ふっ！はっ！」

若葉と共に敵を薙ぎ倒していく。倒していくたび刺さっていく刀
が増えていく。

「——移動するぞ。」

「わかった！後は私が一人でやってみせる。」

ここを突破するのを諦めたのか左右に別れていく。若干右の方に
行くのが多いか。

「友奈！力を貸すぞ」

「士郎くん、一緒に頑張ろう！」

「はいしよお！」

「ハア、せいっ！」

格闘技で戦うという事は、拳と足が武器ということだ。つまり、俺
達の中でリーチが一番短いという事になる。リーチが短いという事
は一番、敵に近づかなければいけない。それにどれだけの勇気があるの
か、戦っているからこそよく分かる。

「友奈はすげえな！」

「士郎くんこそ！」

シンプルに戦い方が上手いな。今まで目立った負傷がないのは
ヒットアンドアウェイをしてると思っていたが、なるほど、一発で倒
すor反撃が来ないように戦ってたのか。

「あれは。」

「どうしたの？」

タマと若葉の間。よく考えたもんだ。敵が固まって行ってるな。あれなら、若葉とタマに多数は倒されるが倒し損ねた奴らが通過していく。あの量は流石に杏一人じゃ捌けないな。それに少しずつだが若葉とタマ、お互いに近づいていつてる。このままじゃ更にスペースが空いちまう。

「抜けるぞ」

「わかった。後は私が」

「任せた。」

こっから単騎で戦わないといけないな。まあ、数は少ないから問題はないな。この往復地味にキツイな。

「さてと。若葉！タマ！間を通っていく奴らは無視していいぞ！」

「わかった！」

「任せたぞ士郎！」

これで陣形が崩れるのは防げた。後は。コイツらを倒すだけだな。意地の見せ所ってな！」

瞬く間に敵の数が減り、刺さっていく刀の数が増えていく。届かない程、上にいるヤツら杏の矢で射抜かれていく。

「貰っていきな！」

今んところ、使った刀の数は八十本刀程。この段階で今まで一番使っている。だいたい二倍だな。

「——今度はタマか！」

殲滅能力が一番低いタマの方に行きやがったか。距離的には楽だが、それでも結構キツイな。疲れはないけど体的にキツイから止めて欲しいぜ。

「タマ、一緒にやるぞ！」

「もちろんだ。——タマにつづけえーっ！」

「猪みてえだな。まあ、今は心強いばかりだよ。」

「どりゃあああ！」

「いい投げっぷりだなあ！」

「どうだ見たか！これがタマの力だああ！」

最初、盾投げて倒すのはどうかと思ったが、結構いけるモンなんだ

な。

「まだ来るぞ！気を引き締めろ！」

「士郎こそ！」

俺達二人ならゴリ押せば行けると思ってたやがるな。その考えが甘いという事を知らしめてやる。

「おら、よっ！」

「ナイスパス！」

なんか、偶然にも斬りつけたヤツがタマの方に行って連携みたいになつた。

「まだまだあ！」

めっちゃ来るな。随分と舐められたもんだ。

「大丈夫か、タマ？」

「はあ。はあ、流石に疲れた。」

やっと落ち着いたがタマの体力も尽きたな。そろそろ千景が到着すると思うし、休ませとくか。

「交代しに来たわよ。」

「おおー！千景、後はたのんだぞ。」

「言われるまでもないわ。」

よし、これでタマは休憩に入れるな。俺もそろそろ移動しよう。

「千景、ここは頼んだぞ。俺は移動すつから。」

「残らず、塵殺してあげるわ。」

「そりゃあ頼もしい。」

この感じなら大丈夫だな。

「——次はあつちか」

あれから。だいたい一時間ぐらいか。もう、体が汗でベトベトだわ。速くお風呂に入りたい。あと糖を摂取したい。頭痛くなってきた。

「邪魔だぞ——どけ」

どかなくても、斬り殺すんですけどね。

「おらあ！」

使った本数はだいたい二百本後半ぐらいだな。今の所奥の手を使う予定はない。

「——なにか様子が」

急に引き始めたな。この感じは進化体か。使う予定出来ちゃったかあ——。

「向うか」

タマがデツカイ盾みたいなものに範囲攻撃してはいるが決定打に届かないな。しかも分裂している。つまり、一発で跡形もなく消さなといけないか。俺の出番だな。

「よいしょっと」

進化体の足元に到着つと。俺の奥の手を見せてやんよ

「破却——」

求めるは究極の一振り——

「——収束」

究極の一、ご覧あれ——！

「とつとと——成仏していきなああああ!!!」

ドゴオオオオオ!!

総二百九十六本。四本で亀裂を作る程だったんだ。果たしてどれ程の威力になるのか——!

「——こいつは凄え」

真正面、全てが綺麗さっぱり殺風景になってやがる。前にいた奴ら全て跡形もなくぶっ飛んだな。これは取り扱い注意だな。

「これで終わりだと有り難いんだがおっ！」

花卉が舞い始めた。これで終わりと。皆ポカーンとしているうちに帰って、すぐさま風呂入って甘い者食べに行こー

遠征

?月??日

生存者は確認出来なかった。最初で最後の遠征は無駄足になった。いや、確かに得る物はしつかりあった。白鳥歌野からのバトンはちやんと若葉に届いた。後は俺達がやらなくちやあな。一人で三年間も耐えたんだ。六人もいれば無敵だ。次の襲撃も楽勝だ。油断せず誰も欠けずにこの戦いを終わらせてやる。

「こりやあ。ひでえな。」

「倉敷の景観が見る影も。」

「行こう。次の街にはきつと生存者がいるさ。」

今、俺達は大侵攻の隙を利用して壁の外側の調査に来ていた。四国から瀬戸大橋を通過して一路北へ行く予定だ。

「ここが、神戸か。」

高層ビルはボロボロになっているものの何とか形を保っている。

「ここは広い、二手に分かれよう。」

「俺は高い所から、ここら一帯を見渡してくる。」

「単体行動は危険だぞ！」

「じゃ、そういうことで」

「あっ！待て！」

何かおかしい。腹の底からグツグツとドス黒いモノが。気持ち悪いな。前までこんな事はなかったんだが。

「すうー、はあー。」

一旦深呼吸で落ち着こう。左から来てるな。

「——死ね。」

この程度じゃ、もう何も驚かねえな。

「誰もいねえな」

「高層ビルの屋上までジャンプで上がって来たが、見渡しても誰もいねえな。」

「戻るか。」

「屋内に立て籠もっている可能性があるし、戻りながら確認するか。」

「よっ、戻ったぜ」

「生存者はいたか？」

「残念ながら」

「そうか」

「ここも全滅ね」

「まだ決まったわけじゃない。」

「気休めを」

「ここまで来て、成果なしは流石に気が滅入るな。」

「——ッ！」

「どうした千景!？」

「千景!？」

「路地に入って行きやがった。すぐに追いかけるか。」

「お前たちがッ!!」

「星屑がいやがったのか、既に終わってるな。」

「千景、もうそいつらは」

「」

「ふー、行きましょう。」

「気分は晴れたか？」

「少しわね」

「千景」

「やっぱり千景に友奈を近くに置いとかないといけないかな。」

「みんなよく聞けっ今晚はここをキャンプ地とするっ！」

「おお、キャンプか」

「ここ」は兵庫県南部に位置する六甲山、豊かな自然が取り柄だった筈。そう知識にある。

「それで、何する？」

「みんなで火を囲むぞ！」

「ご飯でしょ？」

「うどんか？」

「正解♪」

クソっ！すっかり常備してやがる！ずっとうどんしか食べてないんだが!?

「あ〜〜美味しかった。外で食べるうどんは格別だね！」

「うん。」

「外で食べると美味しくなる現象だな。」

「タマ大活躍だな！」

「流石だな。」

「さすがアウトドア好き」

「もっと褒めタマえ〜」

「めっちゃ天狗になってる。」

「タマっち先輩が本当に先輩に見える。」

「あ〜〜ん〜〜ず〜〜？」

「いたたたた！」

「やっぱあの二人は仲が良いな」

「そうですね」

「そ、そうなのか？」

ああやって本音を互いに言い合える仲ってのいいもんだ。

「それにしても良かったですね。キャンプ場の倉庫にテントが残って

て」

「そうだな。屋根の下で寝れるのはありがたいな。」

「お前らの日頃の行いがいいからだろうな。」

「土郎さんもですよ。」

「ああ、そうだな。」

「そうか。」

「そう言われると俺がした事が正しいと思えるよ。本当に正しいかわからないがな。」

「生存者、いると思うか？」

「いる」と言いたい可能性は低いな。そもそも、あれから三年がたつてんだろ。食料が持つとは思えねえな。」

「そうか。」

「。」

「生きていたとしても、病気になつてる可能性もある。無傷で生きるやつなんていねえだろ。今の所、一番可能性があるのは諏訪か。若葉から聞いたが、三年間は持ったらしい。」

「若葉ちゃん、土郎さん、しんみりしすぎですよ」

「まだ一日目だぞっ！無事な地域はきつとあるっ！」

「そうだな。」

「よしっ、切り替えていくか」

考えるより先に体を動かした方がいいな。暗い方向に行っちゃまう。

「はいはい！暗い気分は水浴びで流そう!!」

「ちよつと寒くないですか？」

「賛成！廃墟の探索で体が埃っぽいし！」

肌寒い季節なのに水浴びて、風邪引かなきゃいいけど

「それにキャンプ感が高まるしな!!」

「野営にここを推したのはタマっちがキャンプしたかっただけ。」

「そ、そんな事ないぞ!?!ここなら水もあるし！焚き火の木枝もあるし!」

「はいはい、水浴びに行くんでしょタマっち」

「先輩をつけろー!!」

内心、大爆笑だ。 さて、俺一人で火を見とくか

「士郎さん」

「何だ、ひなた？」

「若葉ちゃんを覗きに來たら分かってますね？」

「は、ハイ！分かっていきます！」

「それなら良かったです。」

ひえ。 あのお姉さん怖い。 覗きに行ったら殺される。 まあ、するつもりはないけどな。

「ひなた、行かないのか？」

「あつ、今行きます。」

「行つてらー」

こうやって焚き火を見るのって、なんか落ち着くな。

バチバチ

「んっ、アイツらか」

喋り声が段々と近くなってくる。 あつという間に時間が過ぎたな。

「余計に疲れたな」

「楽しかったな！」

「明日もしたいな」

「勘弁して下さい」

「元気が有り余ってますね」

「」

「何したんだ？」

タマと友奈はめっちゃイキイキしてんな。 杏と若葉 ドンマイ。

「みんな水掛けしたんだ」

「めっちゃ白熱したな！」

「そりゃあ、良かったな」

楽しそうだなによりだ。この二人は暗い言葉を知らなさそうだな。

「じゃ、俺もちよっくら浴びてくるか。」

「ゆっくりしてこいよー」

「肩まで浸かるんだぞ」

「はいはい」

オカンみたいな奴が一人いたが、ここは流しておくか。体温が奪われる前にささっと浴びよう。

「思ったより冷てえな。」

「爪先をちよこつと入れてみたが、冷たくて体がブルツときたね。」

「早めに上がったほうが良いそうだな。」

体の汚れをさっさと落として、水から上がる。当然、地面に足をつけるんだから足がまた汚れる。これに関しちやあしようがないな。

「よし、戻るか。」

「早く焚き火に当たりてえー。小走りで戻るか。」

「千景じゃねえか。こんな所でどうした？」

「散歩よ。」

ここからテントまで結構遠いが、一人になりたいとかそういう所か。それかワンチャン覗き、んなわけ絶対ないな。

「まあ、あまり遠くに行くなよ。危険だからな」

「わかってるわよ。」

「あと、相談は出来るだけ早めにしとけよ」

「別に、悩みなんて。」

「鬱憤があるなら友奈、アドバイスが欲しいならひなたか杏にな」

友奈は聞き上手だから例え鬱憤を言っても肯定して聞いてくれるだろう。このメンバーで一番の聞き上手だからな。その分、自分の事について話さないけどな。

「余計なお世話よ。」

「そっか。それじゃあな」

か
千景に背を向け、歩き出す。なんの進捗はなしと。どうしたもん

「ふうー、さみいー」

焚き火にあたって、体を温めねえとな。こんな寒い中、水の掛け合
いとかよく出来たもんだ。若葉と友奈に焚き火前が占拠されてる

「なに話してんだ？」

「あつ、士郎くん」

「士郎も一緒に話さないか？」

「そうだな。」

「ささ、ここに座りなよ。」

「おう、ありがとな」

「どういたしまして」

あつたけえー

「それで、なに話してたんだ？」

「今後の話だ。士郎は平和になったら何がしたい？」

「平和になったらかうーん、そうだな」

記憶を戻すとかダラダラしたいとかいろいろあるが、やっぱり――

「世界一周を試してみたいな」

「いいね、それ！」

「確かに胸が踊るな」

「何故か記憶に行った覚えのない各地の光景がはつきりと残ってたんだ
よな。とても綺麗で、心が安らぐ記憶だ。」

ああ、本当にとっても懐かしくて、何故だか泣きたくなる思い出だ。

「そっか、実現出来るように一緒に頑張ろうね」

「ああ、絶対に世界を取り戻してみせる。」

「そうだな。精一杯努力しよう。」

天の神が直々に来れば楽なんだがな。草薙剣で真つ二つに出来るのに。

「見張りは俺がしとくから二人は寝てきていいぞ。」

「えっでも、今は私が。」

「俺は寝なくても平気だからさ」

「友奈。こうなった士郎は手強いぞ」

「うくん。わかった。お願いしていい？」

「任せとけて」

「ありがとう、それじゃあおやすみ。」

「おう。」

「なにかあったらすぐ私達を起こすんだぞ。」

「分かってる分かってる。若葉はゆっくり休んどけて」

「ああ」

今はアイツらに少しでも休む事が大事だ。気を張りパツなしはあの年代には心身共にキツイだろうに。人の心配をしやがって

「ほんといい仲間だよ。千景もそう思うだろう？」

「気づいてたの？」

「ぼりゃあ友奈に集中する視線があったら、お前だって誰でも気づけるぞ。」

「そう。」

「千景もなんか話すか？」

「私は、いいわ。おやすみなさい。」

「いい夢見ろよ。」

「ありがとう」

「」

全く素直じゃねえな。何で勇者に選ばれた奴らはあんな。だからこそ勇者なんだろうな。俺は——

シオン

「どうだった？」

「生存者は確認できなかった。」

「そうか。」

「二日間。現在俺達は六甲山から移動し、着いた街の探索中だ。効率を上げるためタマと杏以外は単独で街中を走り回っている。」

「。」

「おつ、千景。そつちはどうだった？」

「何もなかったわ。」

「そうか。」

あとはタマ&杏ペアと友奈が戻って来てないな。あれは友奈か

「そつちはどうだった？」

「ダメだったよ。」

「ここも駄目か。タマと杏が戻って来たらさっさと移動した方がいいな。長い間同じ場所に留まっていたら星屑共が集まってくる。」

「へみなさーん！ちよつとここつちにきてみてくださいくださーい！」

「この声は杏か。」

「なにかあったのかな？」

「考えるのは後にして、速く合流しよう。」

「それもそうだな」

なにかの一大事かもしれない。全速力で向かうか。

「これは地下街か。」

「ここならあるいとは思いますが。」

「タマがちよつと覗いたが結構広かったぞ。」

「確かにここなら。」

「でも、危険じゃない？」

「インフラは動いてない。中は真っ暗。知性がないとはいええ、かなり危険だ。全滅もありえる。」

「ここで立ち往生してもしょうがない。考えるより行動だ。」

「そうだね。何もしないよりはそっちの方が断然いいね。」

「それもそうだな。俺が先頭に立つから後ろは若葉、真ん中にひなたで行こう。」

ここでグダグダするよりはいいか。最悪、俺が時間を稼ぐしな。

「わかりました。みなさんのお世話になりますね。」

「守るのはタマに任せタマえっ！」

「。」

「ぐんちゃん大丈夫？」

「ええ、心配ないわ。」

「なら良かった。」

さて、入るか。地下街か、初めて入るな。最初はもつとちゃんとした所に入りたかったな。

「じゃあ入るか。準備はいいな？」

「大丈夫です。」

「ああ。問題ない」

「私も大丈夫です。」

「タマも準備OKだっ！」

「私も！」

「いいわよ。」

「よし。」

ライトを持って前を照らしながら入る。特に俺達以外の物音はないな。シーンとしている。

「ゴミがいたる所に落ちてるな。」

「人がいた形跡はあるみたいだな。」

「ここだったら。」

「生存者がいるかもしれませんね。」

可能性はかなり高い。地下街には店が沢山ある。つまり、その分食料が沢山あるという事だ。まあ、一人だったらという場合だけだが、大きな音をたてないようにして行こう。」

「そうだな、奴らに音が聞こえないという情報はないからな。」
「わかりました。」

「特にタマと友奈は声のボリユームを半分ぐらいに下げてくれ。」

「ええ〜〜」

「まあまあタマっち先輩。」

「うん。了解」

「足元にも気をつけて行くぞ。」

星屑に五感があるかは知らんが用心する事にこしたことはないだろう。安全第一で進んでいこう。

「この臭いは腐敗臭か」

「何の腐敗臭だ。匂ったことない臭いだ。ライトで前方を照らす。すぐさまライトをずらす。」

「ツ!!お前ら!目を閉じろお!!」

「なんだ。これは」

「ツ!」

「ああ!クソつ!遅かったか!」

「ここで何が起きたんだ」

「はあー俺の注意不足だな」

見られたんならしようがない。原因を探るか。星屑共がやったんなら骨は残らない。つまり、生存者同士での殺し合いか、食料が尽きての餓死か。

「衛生上ここは悪い。さっさと出るぞ」

「でも、まだ生存者が」

「ここにはいない。」

「つ……！」

「士郎の言うとおりで。いち早くここを出よう。」

「殿は俺が務める。」

「ひなた、抱えるぞ。」

「はい。お願いしますね若葉ちゃん」

「先頭はタマが行こう。」

「。」

「次の町に行くぞ」

「ああ、そうだな。」

「みんな、暗いぞっ！」

「そうだよ。気分変えて行こう！エイエイオー！」

「——それもそうだな。頑張つて行くかあ！」

空元氣でもいいんだ。生者は全力で生きていくしかないんだ。

「まだ、道のりは長いぞ。疲れないようにな」

「そうですよ。みなさん。特に友奈さんは」

「えへへ」

「誰も褒めてないぞ」

「ふふ。」

「さて、千景も笑ったことだし、移動するか。」

「ここらかなら諏訪が近いですね。」

「諏訪か。どうする、先に熱田神社に寄るか？」

「いや、俺の事は気にしないでいいぞ。そこに行った所で記憶は戻らない。」

「わかった。諏訪に向かうぞ。」

諏訪の方がいいと不思議にそう思えてくる。それに愛知に行くよりすぐだからな。

「ここが諏訪か」

記憶にある景色とは大分違うな。ここまで来た中で一番、徹底的に壊されているな。

「別れて探索しよう。」

「若葉ちゃん」

「町の方に行ってくる。」

「ここになら生存者がいるかもしれない。ここが墜ちてからまだ何ヶ月しかたてしていない。きつとここなら——！」

「誰かあー！返事してくれえー！！」

俺の声だけが響き渡る。俺以外の人間はここにはいないみたいだな。

「お前達がコレをやったのか？」

ワラワラと・気色悪いなあ・惨めに惨たらしくコロしてやるよ

「アハ、——アハハハハハ！楽しいなあ！愉しいなあ！」

最っつ高の気分だあ！もつとだ！もつと——

「はあ・やつぱつまらねえな」

折角上がってきたつうのに、もう終いか。

「アイツらの前でしないようにしなきゃな」

絶対にドン引きされる。アドレナリンは出さないようにする方法って何かあつたけなあー

「んっ？ここは蕎麦屋か」

勝手に体が動いてみたいだな。にしてもなんだか懐かしい感じがするな。入ってみるか。

「自店ってところか。よく内装が凝ってるな」

壊されてなければ、もっと良かったんだろうな——

『この蕎麦美味しいでしょ！なんとたつて私のイチオシだからね。うどんは邪道——蕎麦こそジャスティス！』

「！」
「何だ今の知らない子だな。」
「移動するか」

「広い畑だな」

何を育てたかはグチャグチャにされていて分からないが、ここで育てた野菜で自給自足してたんだろうな。

「鍬か」

「苦しい状況ですが、活路はあります。人間は何度でも立ち上がれます！今はみんなで力を合わせて、暮らしていきましよう！」
「結界の中で暮らしを保つためには、自活が必要です。畑を耕し、魚を捕りましよう！生き抜いていくために！」

「！アナタは」

「アハハ！逆！逆だよ！」

「鍬はこうやって土を掘り返して、そして石とかを取り除いてあとは鍬で押し固めて、ハイ完成！わかった？」

「知らない！知らない！俺の記憶じゃない！」

俺が見ているものじゃない！こんな暖かな記憶は——何だ、雨が降ってきやがったのか？早く雨宿りしねえといけねえんだけどなあ——しばらくはここから動けそうにないな。

「よつと、戻ったぞ。」

「何か良い事でもあったのか？まさか生存者がいたのか？」

「いや、生存者はいなかった。町もメチャクチャに壊されてたよ。」

「こちらも似たようなものだ。」

「ここは神社か。跡形もなく壊されているな。ここが結界の要つていうことか。」

「若葉——こつち来てくれえー！」

「タマか。ほら、ご指名だぞ若葉」

「わかってる。士郎も行くぞ。」

「わーってる。」

「小さい畑だな。」

「さつき見た畑の十分の一ぐらいの大きさだな。ここはまだ何とか形を残しているな。」

「充分の大きさだと思うが。」

「あつちにこれの十倍ぐらいの畑があるから見てこいよ。」

「それは凄いな。」

「あつ、士郎くんも見たんだ！すごく広がったよね！」

「ああ。全部実った時の光景を見たかったな」

一面麦の金色の畑を見たかったなあ

「若葉ちゃん、これが落ちてましたよ。」

「これは。鍬。」

「手紙も入ってるな。読むか？」

「ああ。——」

静かに、集中して、一文字一文字噛み締めて読んでいる。あの手紙を書いたのはきつと。ここで戦った勇者なんだろう。若葉と友達だと聞いた。

「白鳥——さん——」

「若葉ちゃん、大丈夫ですか？」

「心配は、ない。」

「大丈夫だよ、若葉ちゃん。白鳥さんからのバトンはしつかりここに
あるんだから——」

「友奈。そうだな。——やっと会えたような気がするよ。」

「んっ？袋が入ってるな」

「見せてくれないか？」

「ほいつ」

「これは種か」

袋には信州そばと書いてある。やっぱり——変わらねえなあ

歌野は——

「みんな——」

「植えるんだろ？力仕事は俺に任せろ！」

「ああ！」

「私も私も！」

「タマは農家の天辺に立つ者だからな。こんぐらいは朝飯前だぞつ
！」

「タマつち・農家の人に失礼だよ。」

「なにい！」

先輩がついてない・タマ頑張れ

「確か種植えはこうやるのよね。」

「ああ。土を被せる時は力を入れすぎないように、固く被せたら芽
が出ないからな。」

「郡ちゃん、すごい！私も負けられないな。」

皆樂しそうにやってくれてるな。コレで全員蕎麦派に墮ちたな。

「土郎は手慣れてるな。経験したことがあるのか？」

「んくく、ないかな。なんとというか体が覚えてる？って感じだな。」

「そうか。」

「ふうー、これで全部だな。」

「芽が出るかな？」

「そんな早く出ねえよ。短くても十日以上はかかるぞ。」

「そんなに、長居はできませんね。」

進まねえとな。過去は置き去りにして未来に行かなくちやいきや
なかないからな。

「よし。次のま——」

「——うっ！」

「大丈夫か！ひなた!?」

「どうした!」

「ひなたが頭を抱えて倒れている。何だ何だ。原因は——」

「神託が降りました。四国が再び危機に晒されます。」

「体は何ともないんだな?」

「はい。私は大丈夫です。それよりも、速く四国へ戻らないと」

「わかった。」

「毎回思うが、もうちよい詳しく教えてくれもいいと思うんだがなあ。。」

「そうも言ってもらえない。事前に教えてくれるだけ有り難いと思うぞ。」

「まあ、そうなんだがな。取り敢えず今は急ぐか。」

「そうだな。ひなた抱えるぞ。」

「お願いしますね。若葉ちゃん」

「お土産は俺が持つていくから気にすんな。」

「助かる。」

白鳥歌野からのバトンはしっかりと俺が傷一つつけずに持つて帰る。この命の代わりにも——

勇者王

?月??日

いやあー今日は楽しかった。毎日こんぐらい面白おかしければ退屈しないんだけどな。まあ、人生そこまで楽しやねえな。次の襲撃も誰も欠けずに終わらせてやる。そしてまた今日みたいに

「レクリエーションをしよう!!」

「れくりえーしょん?」

「それって何をするんですか?」

急に集められたと思ったら

「ずばり模擬戦だ」

「模擬戦か」

トーナメントかバトルロイヤルのどっちかだな

「戦場は丸亀城の敷地全体。勝ち残った者は他のメンバーへ自由に命令できて敗者はそれに必ず従う」

「それ俺が優勝したら不味くないか」

「土郎さん、ですからねえ」

「私達の嫌な事は言わないだろ?」

「そりゃあそうだが危機感をもっと感じてくれ」

将来、悪い男に騙されないか心配だよ。

「それに優勝するのは私だからな」

「言ったな?その自信、叩き潰してやるよ。」

「望む所だ。」

「いいや、優勝するのはタマだっ!」

「ふふ、楽しそうだね。ぐんちゃん」

「ええ、そうね。」

「それじゃあ、みなさん——」

「——勇者王決定戦開催ですっ」

バラバラに位置につきスタートの合図が出る。さて、ここで最初に警戒するのは杏の矢だな。いつどこから飛んでくるかわからない分、充分に注意しねえと

「！——友奈か」

「手加減なしで行くよ。」

「いいぜ。俺も全力でやるからな」

木刀を地面に突き刺し、無手になる。

「使わないんだ」

「ああ。折角だし、俺も素手でやってやるよ」

「それは流石に——甘く見すぎじゃないかなーっ！」

猛スピードで俺に近づき蹴りを放ってくる。俺はそれを友奈の太ももに膝を入れる事で止める。

「——！甘く見る訳ないだろ」

「うっ」

勇者の中で一番警戒してるぞ。だからこそ同じ土俵で戦ってたんだ。

「さて、続けるか？」

「もちろん！」

そうでなくっちゃなあ！

「せいっ！」

「ほいっ」

友奈は手に籠手をつけてる。俺は何もつけていない。拳同士で殴り合えば俺の負けは絶対だ。ここはカウンターに全てをかける。

「ほらっ足元がお留守だぞっ！」

「わかってるよー！」

隙を突いたつもりだったんだけどな。これでも駄目か

「やっぱ強いな。」

「士郎くんこそ。」

「さて、そろそろか。」

「えっ、今なんて——ッ！」

体を右に逸らす。二本の矢が俺が元いた所を通過していく。友奈もギリギリ防いだか。これで落ちてくれたらよかったんだが。まあ上手く行かないよね。

「そこか——」

木刀を持ち、矢の軌道を辿って杏の場所まで走る。

「——！」

「とつた！」

「あんずは取らせないぞっ！」

タマか。この二人は基本ペアだし驚きはしねえが。杏は次、どう動く？

「タマつち先輩ありがとう！」

「どうってもんよ！」

ちっ、姿を隠したか。視界に納めていたかったが。ここは俺も引くか。

「一旦引かせて貰うぞ。」

「あっコラ！」

瞬時に飛翔してその場を離れる。収穫はなしか。

「逃さないぞっ！」

「！」

そうだった。盾を投げれるんだったな。この速度なら——

「！——杏か!？」

矢で軌道を反らしやがった!——空中にいる俺じゃあ矢と盾、両方を防ぐには。大丈夫だな。

「利用させて貰うぜ」

盾に繋がってるワイヤーを引っ張り軌道を反らし矢を盾で弾く。結構上手くいくもんだな。

「すごいな！」

「つーことでタマはこれで終わりだな」

「——なっ!?!」

逃亡を中止してすぐさまタマに近づき木刀をコツンッと当てる。

「負けた。」

「。」

杏からの射撃はないな。俺を諦めて姿を隠す事に集中したか。状況が動くまで俺も隠れるか。

「やっぱ、若葉は強えな」

友奈と千景を倒しやがった。居合。俺も習おうかな。

「。」

残ってるのは俺ど若葉と杏か。杏は動かない。若葉とやっておびき出すしかないな。

「よっ」

「士郎。出てきたという事は——」

「おう。戦うか」

「!——ああ。」

「飛ばしていくぞ」

!?

「ツ！以前より速くなってないか」

「俺も強くなってるんでね」

「だが!——私も日々強くなっている！」

居合をするつもりか。なら鞘を貰うか

「あつ、これ貰っていくぞ」

「なっ、鞘を——!」

「二天一流、——貰つときなっ!」

「!——まだまだあ!」

怒涛の四連撃——若葉は体を捻り、木刀で反らして全部防ぎやがった。どうやって倒すんだよコイツ。

「居合はな。鞘がなくても出来るんだ。——ぞつ！」

視認出来るスピードだ。防いでカウンターを入れる余裕もある。

——後ろからくる矢を無視すればな。

「ふっ!!」

「——手で!」

右手の木刀で矢を弾き、左手で居合の出だしを掴む。掴めた方がいいがこの後どうするか。投げるか。

「お、——らああああ!!」

「——うああああああ!」

杏には。当たらなかつたか。残りは杏と俺だけ。どうしたもんか

「!タマの盾か。避けるか」

杏が投げたんだろう。かなり遅い。ここは弾かずに避けるか

「二本程度じゃ無駄だぞ」

走りながら射撃してるのか、狙いがブレブレだ。さて、杏のスタミナが切れるまぜ——いや、杏がそんな蛮勇を示す訳がない。何か考えがあるのか。

「まさか!——ぐっ!」

クソっ! 気付くのが遅かつたか。

「勝者は杏さんです!」

「や、やった。」

「すごいぞっ! あんず!」

「矢と盾で。あんな事が。」

「本当に凄いよ!」

「予想外の結果だったか?」

「そりゃあな。結構ガチだったんだけどな。完敗だよ。」

矢で盾の方向を180度回転。いや違うか。俺の後ろにあった壁に当たったのか。壁に弾かれた盾を矢でさらに軌道を変えて俺に当てる。神業だな。

「それで。杏の命令はなんだ? 何でも聞くぞ」

「ふつふつ——それはですね——」
「「「「」」」」
「「「「」」」」

「珠子、私のモノになれ。」

「わ、私には他に好きな人が。」

「止めなよ！珠子さんが嫌がってる！」

「高嶋くん、ドキ」

突如として始まったこのラブコメの行方はいったいどうなるんだ

!?

「——つてなんだコレはああー!!」

「ああー！いい所だったのにー！」

なんだコレ

「恋愛小説の再現がこんなキツイものだったのか！」

「士郎はなにもやってないだらろっ！」

「良かったぞタマ！」

「くう〜」

タマがすっかり制服着てるの初めて見たかもしれんにしても若

葉達、男性用の制服、俺より似合ってるね？

「士郎さんと千景さんは——」

「おおっと。（逃げる準備をする）」

「待ちなさい、逃さないわよ。」

「ぐっ！離すんだ千景え！」

「そんな、暴れないで大丈夫ですよ。二人にはこれを受け取って欲しいんです。」

「——コレは。」

「卒業証書。」

めっちゃ字が綺麗だな、機械で打ち込んだのか。

「私お手制だ。どうだ？」

「達筆だな、それより何で卒業証書？」

「まあ、形だけでも思ってたな。」

「来年も場所は変わらないけどな」

「士郎くん、ぐんちゃん！卒業おめでとうっ！」

「ああ———そうか。これが、俺の——」

「ああ、ありがとなっ！」

「ありがとう。」

「———さっ、続きをしましょう！」

「まだ、やるのか!?!」

「満足するまでやりますよおっ！」

「もう、勘弁してくれえ〜！」

真価

?月?日

今回も誰も欠けなかった。無傷とはいかなかったが、まあ良しとしよう。タマと杏はもう戦えない。俺も以前のようには戦えない。草薙剣はあと何回使用出来るのかは分からない。だが残り少ないと思う。これからは温存して天の神を倒すために使おう。例えば、俺がそれで死んだとしても。

目前に広がる白い点々。数はわからないが凄まじい物量だ。大侵攻よりかは幾分マシだが、これに進化体が加わると話は別。死闘を覚悟しなければいけない。

「今回も多いな。」
「だな」

若葉のボヤキに頷きながら、いつもの抜き身刀を握る。刀身の輝きに一切の曇りはない。

「今回は切り札の使用を控えて戦う。それでいいな杏?」

「はい。切り札の影響でどんな変化が起きてるか、今はわかりませんが、でも、何だか嫌な感じがするんです」

「変化か。そういえば、士郎は最初の頃から大分変わってるような気がするな。」

「俺か?」

俺は切り札使った事ないんだけどな。そもそも精霊もないし。もしかして勇者システム壊れてる?」

そんな事を思いつつ過去を振り返る。が、自分としては変化はないように思える。

「うん。最初は『ハッ!』『セイッ!』って感じだったのが『おらあ!』みたいな叫んでる。怒ってる感じがするな。」

「うーん。そういうのは意識しねえからなあ」

高嶋の答えを聞き、戦闘中を思い出そうとするが、あまり記憶はない。我武者羅にしていると中々記憶は残らないものだ。

「たしかに戦ってる時の士郎は近寄りにくいぞ」

「すまんが、慣れてくれ」

そんな風に見られてたのか。諏訪の時みたいにならなかつたら駄目だな、こりゃあ。

「話しはここまでしておくか」

「そうだな。——つ、構えろ！」

意識を切り替える時間など与えないとばかりの星屑による一斉攻撃。一心不乱に突撃していき、神樹へと走る。

「ッ——！」

「言われなくともっ！」

星屑共がラツシユをかけてくるか。同タイミングで仕掛ける量は過去一だな。

正面から来る星屑を刀で仕留める。限界になってしまった刀は地面に突き刺し、次を取り出す。

「一匹も通さないっ！」

「うじやうじやと、気色わりいな」

通り過ぎていったものは無視しろ。前だけに集中しなければ終わる。杏とタマを信じ、そして負担を減らすために正面からの星屑を潰せ。

「うおっ！」

「きやっ！」

「寒っ！」

「この冷気は」

「あんず!？」

「みなさん！あまり動かないで下さいね！」

吹き荒れる風——いや、最早これは吹雪。星屑を氷像とし、地面へと落下させる。もちろん脆い氷が落下の衝撃に耐えられる訳がなく砕け散ってしまう。

杏の切り札か。使わないようにって言った本人が使うとは。だが、これで数を減らせればいいんだが。

「使ってよかったのか!？」

「これが初めての切り札なのでみなさんより危険は少ない。筈です」

「それなら良いんだが。」

視界を確保出来ないからあまり使い勝手がいいとは言えないな。

だが、これで今来てる星屑共は——

「よし、これでっ!!？」

吹雪が明けた先には進化体が三体。吹雪から身を守るため、同族達で一つの塊として形を成したのだろう。何たる生命の尊さ。でも、それはお前達が魅せるものではない。

「進化体か」

「それも三体っ、切り札を使うぞ！」

「あっ！待ってく——」

「私も！」

「殲滅する」

進化体、それも三体いるというのに切り札を使わない。それは自殺行為である。なら、明日を迎えるためにも切るしかない。それで、例え何かを失ったとしても。

「短期決戦でいくぞ」

「私に続け！——ハアーツ！」

「うん！」

「——ッ！」

全員で進化体へと攻撃を仕掛けていく。向こうでタマも切り札を使用し、進化体へと向かっている。この調子なら——

ドゴッ

——墮ちた。タマの輸入道が落とされた。コレは不味い。どうする!?俺が援助に向かってこつちが負けたら?!

——考えろ。最善の手、最善、最善を

へシロー!!刀ああ!!!

「破却、——収束」

全てはこのために。たった一刀、だがそれは全てを裂く一撃を放つ至高の一刀である。即ち、――

「さっさと、くたばりやがれええ!!」

ドガアツ

「俺がタマの方に行く! 若葉達もそいつ倒したらすぐに来てくれ!」

「わかった! 無理するなよっ!」

「わーってる!」

あの一撃じゃ完全に倒しきれないだろう。そこは若葉達が何とかすると思うから。あと二体。タマ達が危険だ。どちらか片方が受け身が取れない状態で落ちている。速く向かわないと――!

「タマ―っ! 杏―っ!」

見えた! あれが。タマ達を落としたヤツか。こつちに狙いを変えさせねえと。

「――うお、おらああ!!」

手に俺の身長程の大剣を出し、奥歯が砕けるぐらに噛み締めて振るう。これで終わればいいんだが。無理だよな。

一分やそこらを稼げる程の損害を与えることは出来た。だが、それまでだ。仕留めるには届かなかった。

「タマ! 杏! 無事か!」

「ああ。タマは無事だ。でも、杏が気を失ってる」

「良し。それなら、タマは杏を抱えて後退するんだ。分かったな?」

「無理だ。足がもう、士郎が杏を抱えて逃げてくれ。」

「はああ!?! 何言ってるんだ!?! 意地で走れ!! 杏を守るんだろ!?!」

いつも言っている言葉は結局口だけなのか。いや、違う。あの言葉はタマの全てだ。例え、自身が骨になったとしてもやり遂げる。

「ッ」

「タマ!!」!

ヤバイ。そろそろ進化体が起き上がってくる。

もう時間はない。ここで三人死ぬか、それともタマと杏が逃げ切り

俺が――

「ゆっくりでいい。這ってでもいい。杏を連れて逃げるんだ。タマ。

俺が絶対に時間を稼ぐからさあ!!」

少女は知ってしまった。元から知っていたのかもしれない。目の前で叫ぶ少年が誰よりもバカであることに。

ここで二人を逃がすために一人で足止めをする。その行為が意味することなど誰にとっても明白。必ず彼は死に絶える。

「っ、士郎あの棘には毒がある。絶対に当たるなよ。」

「ああ!——ああ!!あんなヤツに俺が負ける訳ないだろうっ!」

「頼んだ、士郎」

少年は決断した。自身の失敗の代償を彼に預ける。たった一欠片であっても、彼が生き残ることにかかることを。

杏を肩に抱え、右足を引き摺りながらもゆっくり進んでいる。——

——後は俺もいい感じに離脱するだけだな。

「——?」

ようやく、体を起こしきれた進化体へと目を向ける。

・何か違和感がある。何か矛盾点があるような、何か——

・くそつたれ!!!

「ッ!」

間に合え、間に合え!!もつと足を回せ!!

タマの近くの地面がボコツと盛り上がっている。まるで何か突き破ろとしているような。——進化体の一部、1mm掠るだけ

でも麻痺させる猛毒の棘が少女達へ迫る。確実にタマと杏の命を奪う軌道だ。

「タマアアアあ、!!」

叫んだとしても距離は埋まらない。足を動かさなければ距離は埋まらない。——知ってる。だから間に合ったんだ。

「——うっ!」

よし!これでタマと杏は無事だな。後は俺が腕を引っ込めるだけ——ああ、間に合うわけもねえか。

「ぐう、う、あ、あ、!!——う、あああ、あ!!」

棘が左腕を貫通する。この棘には毒がある。この接する面積からして致死量の毒が入る。

——ここで俺がすべきは、毒が回る前に腕を落とすツ、くくくく
くつ!!!

自身の手によって切り離された腕が宙を舞い、地面へと落ちる。たったそれだけの動作だったと言うのに永遠にも思える時間が流れたような気がした。

「ハアー・ハアー・っ！」

痛みで視界が揺れる。疲れる筈のない肉体が酸素を欲する。考えるまでもなく異常事態。これが欠損による痛みなのだろうか。

「士郎!!」

「なにやってる!!! さっさと杏を連れてけ!!」

「でも——!」

「いいからっ!」

「ツツ・うああああ!!」

それでいい。左腕は肘から先を失ったが、まだ右腕がある。負けているが、まだ負けちやいねえ。

右腕の裾を破り左腕の出血口を口と右腕を使って強く縛っていく。これで失血死の心配はなくなった。だが長くは持たない。なら一瞬で終わらせる。

——胸の内から取り出す。

「この剣で死ぬる事、誇りに思えよ——怪物」

草薙剣——出した瞬間、俺の勝利が決定した。

「はいっ逆転——」

この剣の真価は負けてる時に発揮する。特性は逆転。——どんなに負けてようが勝ちになる。どうして勝ったとかどうして負けたのか。そんな原因はいらない。逆転する。それだけだ。

「俺の——勝ち——だ——な」

後は——若葉——達が——なんとか——してくれ——る。

「はっ！」

一定間隔を刻むピツピツという音が聞こえる。病院か。俺は意識を落としてたのか。

「！——士郎、起きたか。痛い所はあるか？」

「タマと杏は!？」

「二人共無事です。今は寝ています。」

「そりやあ良かった。」

「こんな時でも変わらないな。まずは自分の心配をしてくれ。」

「ん。ああ、左腕ね。まあ利き腕じゃないからセーフの部類だろ。」

「欠損にセーフもアウトもありあますか？」

「はあー。何か必要な物はあるか？」

「そうだな。俺の部屋から勇者御記を持ってきてくれないか？机の上に置いてるからさ。あつ、中身は絶対に読まないでくれよ。」

「それぐらいはお安い御用だ。すぐ戻る。」

「おう。気をつけてな。」

「さて。タマと杏の状態は？」

「タマさんの右足は複雑骨折です。完治するかはわかりませんが。もし、完治したとしても元のように歩けるかどうかは本人の覚悟次第です。」

「じゃあタマは大丈夫だな。杏は？」

「ほとんど無傷です。ですが精神面が。」

「そこはタマがいるから大丈夫だな。」

「何で、大丈夫だと言えるんですか。」

「何で、か、そんなもん決まってるんですか。」

「——アイツらが勇者で、最高に格好いい奴らだからに決まってるんだ。」

ろ？」

「そうでしたね。それなら大丈夫ですね」

「それで？ここにいない友奈と千景はどうした？」

「千景さんは検査を受けた後、寮に戻りました。友奈さんはその付き添いです。大分衰弱してたように見えたので」

「それはいい判断だな。」

千景は恐怖に勝てるだろうか。いや、大丈夫だ。

「戻ったぞ！」

「速いな。あと、病院では静かにな」

「ああ。すまない。つい。そしてこれが頼まれた品だ。」

「おつ、助かるよ。ありがとな」

「さて、今日の分を書くとするか。」

「覗かないでくれよ？」

「わかった。」

「もちろんです。」

片腕で書くの初めてだからな。こりや時間がかかる。ゆつくりと書いていくしかないな。

「よし。それで若葉は俺に何か用があるのか？」

「あれ？」

「若葉ちゃん。寝ちやいましたよ。」

「Zzzzz、Zzzzz」。――」

デジャブを感じる。

「なんか用があったとかじゃないのか。何のために俺が起きるのを待てたんだ？」

「心配だったんですよ。」

ひなたがそつと若葉に毛布をかける。

「それだけの理由でか。」

「そ・う・です・よ。嫉妬しちやいそうです。」

「そ・う・か。」

仲間思いだな。流石、勇者のリーダーだな。

「あ・っ。そうだひなた、一つ頼めるか？」

「はい。なんですか？」

「もし、俺が死んだら——」

「嫌です。」

「——まだ、何も言っていないんだが？」

「冗談でもそんな事、言わないで下さいね。」

「冗談じゃねえんだけどな——」

「いいですね？」

「あ、ああ。わかった。」

「士郎さん、今は体を休めるべきです。すぐに寝て下さい。」

「そ・う・だな。じゃ俺は寝るから。おやすみ。」

「はい。おやすみなさい。」

動けるようにまで早く回復しねえとな。よく食って、よく食べる。

これが一番の近道だ——

誇り

?月?日

幸い俺は、片腕を失った事による貧血だけだったので数日程度で退院する事が出来た。退院する前にタマの病室に行ったのはいいものの心労をかけただけのように思える。伝えたかったことは伝えたし良いんだけどさ。杏はいつも通りで安心した。あと残っている問題と言えば、千景だけだな。俺の退院中ずーと寮から出てないらしい。そのため、心の救療をとるため、俺と入れ替わりで実家に帰ったらしい。ここで友奈と離すのは違うと思うんだが。明日、ダツシユで追いかけるか。そうと決まれば、早く寝よう。

「よし、これで片付けは終了だな。」

「片付けと言っても、俺の荷物なんて着替えと勇者御記ぐらいしかないんだけどな。」

「早く退院出来てよかったな。」

「そりやそうだが、体力が随分と落ちちまったな。」

「その程度、ここからいくらでも蒔き直せるだろ?」

「もちろん。つーことで特訓付き合ってくれよな。若葉」

「ああ。何度でも付き合うさ」

「まあ、まずは走り込みからだけだな。そつから片腕の動作確認をして、長くかかりそうだな。」

「さて、俺はタマに会いに行くから、若葉は先に帰っていいぞ。」

「ああ。わかった」

「ちよつと喝入れてくるだけだからな?」

俺は病人に止めを刺すヤバい奴じゃないからな!?

「タマの病室はこの病室を出て、右に進めば見つかると思う。」

「おーけー、分かった。自分で見つけろって事だな。」

「いや！そうじゃなくてな。番号を覚えてないというか。すまん。」

「誰も責めちやいねえさ。まっ、自分で見つけるから心配すんなって」

果たして、若葉はこの数日間タマの病室に何度行ったのか

「じゃ、また後でな」

「ああ。」

若葉と別れて病室を出る。右だな。表札の名前を確認しながら進んでいく。おっ！

「ここだな。」

ここはノックをしてから入ったほうがいいのか。親しい仲にも礼儀ありつていうしな、ここはノックするか。

コンコンコン

「御影士郎だ！」

あれ？返事がねえ。無視されてる？い、いや驚いて、ポカーンとしてるだけに違いない。だよな。待って。たんに無視されてるだけだったら二週間は凹む自信がある。待て、落ち着け。もう一回やればきつと。

コンコンコン

「聞こえてるかー!？」

へすみません！今、開けます！

良かったあ~~~~！まだ、俺は泣かなくていいんだ！

「すいません。驚きでワタワタしてました。」

「今は反応してくれただけで嬉しいんで。」

「立ち話もあれなので入って下さい。」

「おう。」

タマは元気してるかな。まあ、タマの性格考えると元気してはな
い。だろな。

「ツ・士郎。」

「まっ！元気そう。じゃないな。まっ、今は。久しぶり、タマ！」

「うん。久しぶり。」

タマが千景化しやがった。

「杏、タマと二人で話したいからちよつと席を外してくれ。」

「わかり、ましたっ。」

「あ、あんず！——いつツ！」

「あんまり急に動くな。怪我が悪化したらどうすんだよ。別に取って食ったりしねえから安心しろ。」

「うん。」

「こんなんじや完治が夢の話になっちまうな。」

「。」

「。」

「こういう時ってどう切り出せばいいんだろうな？」

「士郎はさ——」

「んっ？」

「タマに怒ってないのか？」

「何でだ？」

「俺がタマに怒る？どうしてだ。考えたが、俺がタマに怒る理由はないな。」

「タマのせいで士郎の左腕がっつ」

「——ああ！それね！」

「ツ！」

「あつ、すまねえ。急に大声出しちまって。」

何の事かと思えば、そんな事か。タマは優しいな。

「い、いや。いいんだけど。」

「まあ、そんなビクビクすんなって、いつも通り元気一杯で行こうぜ！」

「。」

「んっ？」

「また、だんまりになっちまった。はあー、しょうがない。ちよつと照れ臭いが喋るか。」

「俺はな、タマ——！？」お前に感謝してるんだぞ？」

「はあ!? な、なんで。」

「あの時、俺は、お前達を見捨てて逃げたかった。正直、敵が怖かった。」

「でも——俺よりちっちゃなヤツが立ち上がって、前を向いて歩いたんだぜ——そんなモン魅せられたら、カッコ悪いとこ魅せられねえだろ？」

あそこでタマが立ち上がらなかつたら、俺は二人を見捨てて逃げていただろう。草薙剣を出すことも考えず——ただ無様に尻尾巻いて逃げてた。

「——で、でも！元と言えば、タマがバカしちやっただせいで——！！」

「タマは馬鹿なんかじゃねえよ。あの時だつて、気を失った杏を見る事が出来たから、俺に伝える事が出来たんだ。お前が杏を救ったと言っても同義だ。」

「それでも、士郎が治らない怪我を負った事は変わりないだろ!？」
「こんぐらいどうつて事はない。」

「!——どう、して、士郎は、タマに、優しくするんだ。」

ああ、顔がぐちゃぐちゃじゃねえか。

「そんなもん決まってるんだろ——お前が、お前達が——俺の誇り、だからな！」

若葉、ひなた、千景、友奈、杏、タマ、全員が俺にとっての誇りであり、俺が絶対に未来へと進ませようとしている奴らだ。未来は暗いモノなんかじゃない、未来は明るいものじゃないと駄目なんだ。

「ほら、鼻水出てるぞ。」

「んっ。」

「自分でしてくれろと助かるんだが。」

流れでやつちやっただけど、これ犯罪ムーブがするな。

「元氣出たか？」

「——もちろん！タマ、完・全・復・活!!!」

「そりゃあ良かった。じゃ、俺は帰るな。」

「おう。いつでも来ていいからな！」

「毎日来てやるから覚悟しとけよ〜 まっ出来たらだかな。」

「楽しみに待つとくからなあ〜！」

「。」

手を振りながら、病室から出る。これでタマは安心だな。

「黒歴史決定だな はあく。」

「あの」

「うおっ 杏か。急に声をかけないでくれ 心臓が止まりかけるから

！」

「私もちよつと話したいんですが 大丈夫ですか？」

「大丈夫だが どうしたんだ？」

「ここでは話せないので場所を変えましょう。」

「。」

杏からの相談 あ杏から俺の頭で理解出来るかな。

「ここに座りましょう。」

「わかった。」

場所は変わり、中庭のような所に来た。周りでは入院している子供やお年寄りなどの人達が知り合いと和気あいあいと過ごしている。

「タマっち先輩はどうでしたか？」

「もう大丈夫 だと言いたいな。」

まあ、自分で完全復活とか言ってたし大丈夫だろ。

「タマっち先輩、この数日間 上の空って時が多くて とても心配だったんです。」

「タマは 凄く良い子だと、この件で再認識させられたよ。」

「そうなんですよ。でもその分、今回の事を自分の責任だと考え込んじやって。」

「ああ 一瞬、何を言ってるのか理解出来なかったよ 面白いや、ひなたから杏は精神面がボロボロって聞いたが。」

「はい。最初、タマっち先輩の姿を見たら このまま死んでしまうん

じゃないかと思つて、慌ててしまい、みつともない姿をみなさんに見せてしまいました。」

「俺は見えてないからセーフで」

「ふふっ、わかりました。士郎さんはセーフにしときますね。」

「そりやあ助かる。」

「私、士郎さんが病室に来た時、怖くなちやっただんです。」

「えっ、俺そんな怖かった？」

「怖い顔して向かったつもりはないんだけど、今度から気をつけよう。？」

「いえ、そうじゃなくてですね。士郎さんが怒つてタマっち先輩を傷つけに来たんじゃないかと疑つてしまつたんです。」

「待つて、俺はそんな鬼畜な奴に見えるのか。後で皆に聞いてみよう。最悪、友奈に愚痴を言いに行こう。最後のは流石に冗談だ。そんな最低な彼氏みたいな事するかよ。でも、何だか最近、俺の沸点下がつて来てるような気がする。一回リラックスしにどっか行くのも悪くないな。」

「でも、士郎さんの顔がいつも通りで、心配して損した気分です。」

「俺はそんなに怒らねえよ、むしろ、今回の事に関しちやあ感謝しているかな。」

「そうですか。」

「よし。そろそろ本題だろ？」

「気づいてたんですか？」

「そりやあなあ。ずっと何か言いたそうにしてたからな。」

「流石ですね。」

「喋つてて違和感半端なかったぞ。」

「実は、もう戦いたくないんです。」

「おう、わかつた、俺から若葉に言つとくよ。」

「——私はまだもう戦わなくていいんですか？」

「戦いたくないんだろ？」

「自分で言つておいて、どうして不思議に思つてんだ？」

「タマっち先輩も戦えませんか。二人と抜けるんですよ?」

「杏は戦いたくないんだろ?」

「はい。」

「それなら戦わなくていいんだぞ。そもそも俺はお前らが戦うのはどうかと思うんだ。」

「。」

「杏ぐらいの年代だったら武器なんか持たずに、戦う事なんか考えなくていい。友達と笑って、喋って、買い物して、日々を楽しんでるだろうからな。」

「そもそも、若者が何も考えずに遊べないこの時代が間違ってるんだ。」

「。」

「。」

「杏は何も心配しなくていいぞ。あつ、大社にも話しを通しとくから。」

杏とタマの生活保護と楽出来る程の金を巻き上げてやる。首洗つてまっつけよ大社。」

「大丈夫です。私から若葉さんに言います。」

「そうか。でも大社には俺も用があるからついでに言つとくな。」

「あつはい。お願いします。」

「これで、話しは終わり。俺はもう帰るが、まだ、用はあるか?」

「大丈夫です。改めて、タマっち先輩の事、本当にありがとうございました。」

「おう。杏もタマにしつかりと寄り添ってくれ。」

「もちろんです。タマっち先輩は私がしつかりと見守つていきますねっ。」

「。」

「あの元気の塊のようなヤツをか、キツイけど頑張れよ。」

「無理かもしれません。」

「そこは嘘でも『うん』って言ってくれ。」

「精一杯やってみます。それではまた。」

「おう。俺も時間あったら様子見に来るから。」

「いつでも歓迎します。」

ふうー、これで心配事を二つ片付けられた。順調だな。さて、千景の様子を見に行かなきゃな。その前に荷物を置きに行かないとだな

「外で出会うなんて珍しいな。」

「ええ、そうね。」

「ここで問題の千景に出会うとはな」

「友奈は一緒じゃないのか？」

「今から実家に帰るの、流石に高嶋さんは一緒じゃないわ。」

「こんな時間帯から行くのか。着くのは朝ぐらいか？」

もう、日が沈み始めている。にしても今日はよく喋るな。気分がいいのか。いや、ストレスか恐怖のどっちからか自己を守るためにおかしくなってるだけか。こりゃあ、友奈を置くのは失敗だったかもしれねえ。

「それで、さつきから地面を見てるが、何か落ちてるか？」

「ツツ。」

「地面を確認しても何も落ちていない。」

「気分が悪いなら、寮で休む事をオススメするぞ。」

「貴方には関係ないっ。」

「そうか。じゃ気をつけてな。」

情緒不安定だな。杏が言ってた切り札の影響か

「ええ。」

もっと早くに対策するべきだったか。いや、きつと家族と過ごせば、少しは和らぐ筈だ。

「。」

今は、そう願うしかないな。

狂宴

?月?日

元々、俺は人類のためだとか世界のだとか正直どうでもいい。俺はそんな聖人じゃねえ、アイツらさえ生きてれば心底どうでもいい。それなのに——ここから破けていて読めない——

「若葉、起きてるかな」

俺一人でいつたとしても、どうにもならない。あの感じからして、大分病んでる。今の時間は五時。若葉ならわんちゃん起きてる。起きてないなら起きるまでドアを叩く。

「よし。若葉——起きてるかあ！」

近所に住むお爺さん並みに規則正しい生活をしている若葉の事だ。五時でもワンちゃんお！

「——こんな朝早くからどうした」

「ちよつと、友奈起こして来てくれないか？」

流石、若葉だな。今回は素直に合掌だ。じゃなくて要件をさつさと伝えるか。

「何でだ？」

「今から千景の実家に突撃しようと思つてな。それで若葉と友奈に付いてきて貰いたくてな。」

「友奈は分かるが私もか」

「念の為にな」

「わかった。友奈を起こしてくる。士郎は準備しててくれ。」

「スマホを忘れずにな」

「わかっている」

変身して、全速力で追いかければ追いつける筈だ。こんな事なら交通機関に細工すればよかつたっ！

「変身する。服装が変わったな。由緒正しき屋敷に生まれた人が着るような左側の裾はブラブラしてるな。ってかこつからめつちや冷気が入ってくるんだが結んだ方がいいかもな。」

「——お待たせー！」

「士郎、その格好は着替えてきたのか？」

「この服をこの短時間で着れるかよ。変身したんだよ」

「服装が変わるなんてあるのか」

「もしかしたら、私のもへーんしんっ！いつも通りだ。」

「私もだ。」

「俺だけって事か。所で若葉、左の裾を結んで絞めてくれねえか？寒くてたまったもんじゃねえからな。」

「わかった。よし、出来たぞ。」

「おう。ありがとな」

「それじゃあ向かおうか。それで、そのーぐんちやの実家ってどこ？」

「私もわからない。士郎！わかるか？」

「ふっふっ。大社から聞いているから安心しろ。」

あつぶねえ。昨日、大社に聞いておいてよかったぜ。

『千景の実家の位置を知りたいんだが？』

『ですから、プライバシーの権利が——』

『もし、言わなかったら草薙剣を手から滑らせて本部を真つ二つにしちやいそうだな〜♪』

『！——わかりましたっ！言います！言います！』

~~~~~

「俺が前を走るから、頑張っついてきてくれ。」

「入院で体力が落ちてるんじゃないかなかったのか？」

「安心しろ。体力がなくなる前に着くから。」

「ここは、無理せずゆっくり行かない？」

「いや、大丈夫だ。急いで行くぞ。遅れるなよ——」

「なっ——！」

「速い！」

うおおー！すげえ！まるで風になったみたいで気分が良いなあ！若葉達はしつかり後ろを着いて来てるし、このまま行けば何とか追いつけるな。

「ここか。」

なんとか。高知にある千景の実家に着けたな。あれ、若葉達がい

ねえな。置いてきちまったか。

「ちよつと待つか。」

千景の家の屋根に立ち、周りを見渡す。豆粒みたいに小さいが若葉と友奈が家と家を渡りながらこっちらに來ている。変身は解除しといたほうが良さそうだな。

町を見渡す。この町に千景がああいう性格になった原因があると思っただが、特に変わりはないな。皆、それぞれ自分が行くべき所に出勤してるだけだ。朝ならではの光景だな。何か妙だな——

誰かが怒鳴ってる。何処からだ。ああ、なるほど——原因はすぐそばにあったな。探す手間が省けた。

屋根から飛び降り、最短距離で家の中に入る。不法侵入なんてもんはない。

「この役立たつ、——ぐえッ！」

？

「えっ——なんで」

「——口を開けるなよ、愚者」

千景の父親だろうが関係ねえ。ぶち殺してやる

「な、なんだ君は!？」

「聞こえなかつたか？俺は口を開けるなど言つたんだ」

「け、警察を——」

「話しが通じねえなあ。はあ、」

——刀を取り出す。

「ひ、ひいい!!」

「!——ま、待って!この人は私のお父さんで」

「——逃げ」

「だからあ。この人は私のお父さんなの!!」

「それがどうした？お前を侮辱したのに変わりはない。だから殺す。

千景なら退いてくれるよな？退かねえなら——」

諦めるしかないよな。退いてくれねえかなあ。出来ればここで、こ

の愚者は殺しておきたいんだが。

「ツツ」

「そうか。それならしようがねえ——」

ゴホツゴホツ

「誰か他にいるのか？」

「。。」

。言わないなら、自分で探すからいいよ。

「こつちか。こつち側か。おっ」

この人は。千景のお母さんか。この袋は。なるほど天空恐怖症

か。

「ゴホツゴホツ!」

「こりやあまじいな。設備が整った病院に早く連れていかねえと」

症状がかなり進んでいる。このままじゃ衰弱死してしまう。千景

の母親はきつと優しに決まっている。母親つーもんはそうならな

くちやいけえねえ。

「おい。」

「ふうー——ふうー——」

ちつ・こんぐらいで呼吸困難に陥りやがった。なんだこの・子どもが大人になったようなヤツは・これが千景の父親・母親似なんだろうな。

「千景。」

?

「今から病院に電話するから、ちよつとそいつら見といてくれ」

「貴方は何がしたいの。」

「ちよつと腹が立つちよつとな。すまねえ。」

「」

千景との仲直りの方法・友奈に聞いたら分かるかなー

「」

最寄りの病院に電話をかける。

『はい、こちら高知病院です。緊急ですか?』

「はい・天空恐怖症の患者が様態が急変しました。あと、呼吸困難になつてる人もいます。」

『分かりました。すぐ救急車を手配します。住所を言って下さい。』

「ええー市??区?番??ー??ー?です。」

『待っていて下さい。』

よし、これでいいな。正直、父親はどうでもいいけどな。

「若葉達に説明しねえとんっ?」

グシヤ

玄関を出て、足を前に出した。なにか紙を踏んだ。

「何の紙だ——ツツ——!!!」

『死ぬ』『ゴミクス』『最底辺勇者が』『この町から出てけ』——

様々な罵倒が書かれている。きつとこれが毎日だったのだろう

郵便入れから溢れかえて地面に落ちている。

「ふうー、決めた。この街の奴ら全員クロス。」

赤ん坊だろうが老人だろが全員クロス。千景を馬鹿にしやがって

地獄に叩き落としてやる。生きてる事に後悔させてやる。

「何だテメエら?」

この人ばかりは——まさか……コイツらが……!

「欠陥勇者だ……」

「片腕がない……キモっ」

随分と辛辣だな。あと、二人目は自分になったらどうすんだろ。気になるし、試してみようかな。

「税金を無駄使いしやがって……」

「お前のせいで何人死んだと思ってるんだ……」

有象無象共がなに言っても俺の心には響かないぞ。こういうのは反応するから調子に乗るんだ。無視無視——

「どうせ、重症を負った二人も欠陥勇者だったんだろな」

「——」

「確か・土居球子と・伊予島杏だっけ？」

「そうそう。ほんと、ゴミみたいな名——あれ？俺の腕が……あ……」

ああ、あああ……!!!

——きやああああ……!!!

「俺とお揃いだな。——ほら、喜べよ。」

「あああ!——こんな事して許されるとでも思ってるのか!!?」

「ぷっ、ハハハ!——こりゃあ傑作だな!今の状況が理解出来てねえのか?」

「勇者だろ!俺の——市民様の命を守るのがお前らの仕事だろ!?!」

「俺は基本——お前が死のうがどこのどいつが死のうと……心底どうでもいい。何とも思わねえよ……ってことでお前もさっさと逃げたらどうだ?」

「はっ……ナニ言ってる?」

「逃げていいって言ったんだ。ほら、這ってでも逃げろよ。出来なきゃ、お前はゴミ以下だぞ。」

「ツ!俺を馬鹿にしやがって……っ!」

「ほら、さっさと立て——よっ!」

「うっ!」

立つ手伝いで腹を蹴飛ばす。これで立てるだろ

「う、うええええええ……」

「汚ねえな。こんぐらいでこたれるなよ。」

「うう、俺は。まだ生きる。生きるんだ。」

「おっ！いいぞ！はい、いっちに、いっちに」

「うおおおおお——！！」

この調子なら俺から逃げれるな。俺が何もしなければだけどな。

「まっ——無駄でした。」と

刀を首へと——

「——士郎！！！！」

「ちっ！運がいいな。ほら、今から救急車が来るから眠ってな。」

「うぐっ。」

刀の逆刃で打ち気絶させる。ついでに止血もしておく。

「——士郎くん。何しようとしたの？」

「なにして。殺そうとただけぞ。」！??

「その意味を分かっているのか。士郎。」

「きつと。若葉の考える意味と俺の考える意味は違うんだろな。」

前ならもつと上手く出来たんだがなあ。ブランクを感じまうな。

「身柄を拘束させて貰うぞ。士郎。」

「いいぞ。ほら。あつ、片手しかないから縛れねえな。切り落とすか？」

「——しろ。う。ああ——あ——！」

「どうした？どこか痛むのか。見せてみる」

「——違う！」

「若葉ちゃん。」

「あつそうだ、千景は家の中にいるから」

「うん、わかった。」

言い訳はしない。言ったところで何も変わりはない

自分という存在がわからなくなってきた。ああ

「。」

——という事で謹慎をくらいました。まあ、謹慎だけで済んだことにびつくりだ。ついでにスマホも没収されました。俺には  
いらぬいし、いいんだけど千景が心配だな。

「暇だな。ゲームでもするか。」

「謹慎は二週間。その間は千景にオススメされたゲームをすることにする。」

「埃被ってんな。」

押入れからカサット、媒体を取り出す。

「コントローラーを諦めるか。」

コントローラーを持って気づいた。片腕無理じゃね。寝よう。

「おっと、日記日記」

?

## 歪み

?月?日

千景から相当恨まれてたんだな。どうしたら仲直り出来る?素直に謝る?腹を切って詫びる?うくん、全部駄目そうだな。やっぱりこは腹を割って話すしかないな。明日は傷が痛みませんように。

「んっ。来たか」

「謹慎を喰らって一週間、鈴の音が鳴り響いた。

「よしっ、やるか。」

「変身をし、戦闘準備を整える。また、草薙剣が体内に入っていく。」

「。」

「皆、元気してっかなあ?」

「久しぶりだな。元気してたか?」

「若葉、友奈!千景はいないのか。」

「うん。久しぶり!」

「士郎、スマホ、返されたのか?」

「?!いや、返されてないけど。」

「じゃあ、どうやって変身したんだ?」

「どうってそりゃあばつとしたに決まってるだろ。」

「スマホを使わずにか?」

「ああ。」

「何だ?スマホに何かあるのか?」

「士郎 私達はスマホを使わないと変身は出来ない。」



「友奈もか？」

「うん。私もスマホがないと変身出来ないかなー。」

「。」

「そうだったのか。皆、スマホがなくても変身出来ると思ってた。見栄えのために毎回、スマホを使って変身してると思ってたわ。一手間挟むなあ。って見てた。」

「今はこの件は置いておこう。力を貸してくれるだろ、士郎？」

「もちろん。なんなら俺一人でやってやろうか？」

「大丈夫だよ。私達三人で頑張ろう！」

ふう。友奈の明るさに助けられた。ここで俺が無害ですよー、という事を伝えないと。

「じゃ、先行く。」

「ああ。征くぞ！」

「うん！」

今回は最初から進化体が来ている。先に進化体を三人でリンチするか。多分これが一番速い。

「ふっ。ッ！」

「ハァーッ！」

「セイッ！」

何だこの。壺みてえな形をした進化体は。まあ、この数に全力で殴られれば。――

「――溢れるぞ！」

「分かってる！」

「了解ッ！」

星屑共が溢れ出した。これを放置するとまた復活してくる事になる。一匹も逃さない。ッ！

「貫って逝きなっ！」

「士郎！そっちに行ったぞ！」

「おうっ！」

背後から来る星屑にも対応しながら、刀を逐一取り出していく。手数が減って、刀を地面に刺す余裕がなくなった。奥の手は草薙剣だけ

になつたな。

「ふいー。あらかた片付いたな。」

「そうだな。」

「そろそろ戻るかな？」

「いや。まだ、少し残ってるな。」

まだ、空中に星屑どもが溜まっている。刀投げつけるしか倒す方法がないんだが？

「ちやちやつと倒して、うどん食べに行こう！」

「出来たらな。」

「士郎は謹慎中だろ？終わったら部屋に戻るんだぞ」

「分かつてる。分かつてる。まっ、油断せず行くぞ」

「百も承知だ。ここは私の切り札で——」

「待て。切り札は使わないでもあんぐらいは倒せるだろ？」

「士郎くんの言うとおりだよ。若葉ちゃん」

「そうだな。時間をかけて行くか。」

「それが、一番だ。」

「まずは私が——」

「凄い飛躍力だな。私も負けてないぞ。」

「何張り合って——ゴフツ」

「——士郎（くん）!!?」

何だ——コレ。俺の腹を貫通してんのは。これは——千景の

「貴方が——貴方が悪いの。だから——死んで頂戴——」

「——千景、か。久しぶり、だな。——ちやんと、飯、食ってん、  
のか。——顔色、が悪い、ぞ。」

意識を強く保つんだ。まだ倒れるな

「ッ!——五月蠅い!早く!——早く!——死んでっ!」

「うぐっ——ッ!!」

鎌を俺から抜き、大雑把に、雑に振っていく。こんぐらいは大丈夫だ。自分で腕を切り落とした時よりは——痛くない。

「——千景ええ!!」

「ぐんちゃんっ!!」

「高鳴さ、ん。邪魔、しないですよ。」

「ヒュー——ヒュー——!!」

「まだ、まだまだ——」

「どうしてこんな事を——!?!」

「コイツが——!コイツのせいで——私はあ——!!」

「確かに士郎がやった事は褒めれる事ではない。——だが!士郎は誰よりも私達——勇者のために怒ってくれたんだぞ!!千景もその事をわかつてるだろ!?!」

「ツッ——そんな事、知らない。私には関係ないっ!!」

「ダメだよ!ぐんちゃん。人殺しなんて。」

「——私は、私は!!みんなに認めて貰うんだっ!価値があるんだって——言つて貰うんだっ!」

「何を言つ——」

「それが、本心なんだな——ああ、聞けて良かった。」

「いいぜ??。」

「——えっ?」

「士郎??」

「士郎くん。」

重たい体を意地と根性で立たせる。千景の目を見る。

「それが——本当にお前がしたい事なら俺を殺していいぞ。」

ズルズルと体をひきつづりながら千景に近づく。千景って驚いた時、こんな顔するのか。

「あつ、えつ、——」

「ほら、あと少し力を込めれば殺せるぞ。」

「士郎——」

「ぐんちゃん!」

額のすぐそばに千景が使う鎌を持つてくる。力を込めるだけで、俺

の頭は真つ二つになる。

遺言書書くべきだったかなあー。

「い、——いや。」

「そっか。」

嫌ならそれでいいんだ。俺も命拾いしたよ。

「——。」

やべっ、意識が——

「——士郎（くん）!?!」

「ごめん、なさい。ごめんなさい。ゴメンナサイ。ゴメンナサイ。」

「——」

「んんっっ!」

——痛みで目が覚める。最悪の目覚めだな。今回は誰もいねえのか。勇者御記と着替えが置いてある。

「んしよ——ぐうっ!」

起き上がろうとすると体を激痛が襲った。よく見たら、服の下は包帯で巻かれている。少し血が滲み出てるな。気持ち悪いつたらありやねえぜ。

「。」

千景は大丈夫だろうか。ああ、もつと本音を聞きたかったな。

だが、千景が何を理由に戦わせたのかようやく解った。承認欲求だ。

千景はずっと皆から愛して貰いたくて頑張ってたのか。ああ、く

そっ——巫山戯やがって

「俺は間違えたみたいだな。」

友奈を近くに置いとけば問題ないと信じ込んでいた——いや他人任せにしてしまったんだ。

「ちゃんと話さねえと。」

今日はもう遅い。日記を書いて、寝て。千景が今、何処にいるのか誰かに聞かねえといけないな。

「——気持ちを入れ替えろ。」

俺の行動が千景の負担になってるんだ。全部、俺が悪い。そりゃあ殺されても文句言えねえわな。謝ろう。赦されるまで何度も——

## 価値

?月?日

全く、変な勘違いしやがって。千景が無価値?はっ、例え勇者じやなくても千景は千景だ。そこに替えは存在しない。自分の上位互換が世界にうじやうじやいるのは普通だ。だが、その人の替えは絶対にない。絶対どこかで違いがある。故に人類史とは戦争の歴史になっただ。いつもいつも人は他人を貶め、傷つける。だから、世界平和なんて夢のまた夢の話になってしまったんだ。世界を取り戻した所で平和になるなんて確証はないんだ。

?

何か腹に違和感。なんか乗ってんのか?

「すうすう」  
「タマか」

椅子に座ったまま、頭を俺のお腹に置いたまま寝ている。

「どうしたもんか」

時刻は朝の六時。体の痛みは大分減った。これなら少しの間だけだが全力ダッシュ出来るな。あとは千景が何処にいるかだな。

ガラガラアゝ

「んっ?」

「こんな朝早くに誰だ?

「あつ、士郎さん。起きたんですね」

「杏か。こんな朝早くからどうした?」

「タマっち先輩と一緒に世話をすると思っただけですが寝ちゃいましたか」

「まあ、よく寝る子は育つって言うしな。いっぱい寝て、早く完治してほしいもんだ」

「ぶふっ、やっぱり、士郎さんはいつも通りですね。」

「何か笑う所あったか？」

「一般人を斬った」と聞きましたが、何か、士郎さんが怒るような事を言われたんですか？」

「ああ。まあ、そんな感じだな。」

そんな事もあったな。あれに関しちゃう、俺の判断ミスだな。千景の負担になるなんて考えもしなかった？。

「千景さんを、馬鹿にされたんですか？」

「調べたのか？」

「はい。大社にお願いして千景さんが通っていた学校の同級生、近所の人、父親の仕事仲間、母親の不倫相手、全て調べて貰いました。」

「それで、どうだった？」

「酷い、ものでした。学校では、両親の評判からいじめられ、家では常に両親の罵声の声を聞く、千景さんがあんな優しい性格に育ったのが不思議に思える程でした。」

「そうか。やっぱり、潰してくる——」

「落ち着いで下さい。また、千景さんに負担をかける気ですか？」

「そうだ、これも千景のため、深呼吸、深呼吸——」

「——ん、ん、士郎。」

「おはよう、タマ。」

「——士郎!？」

「それ以外の誰に見るんだ？」

全く、寝起きから元気だな。

「ほら、タマ、うち先輩顔洗いに行く？」

「う、うん。」

松葉杖をつきながら退室していく。杏もタマに付き添って退室していく。千景の場所を聞き忘れた。

「ちよっと待つか。」

「お待たせしました。」

「気にしてないぞ。」

あれから数分程度で帰ってきた。

「士郎・体は大丈夫なのか？」

「ああ。ある程度は動けるようになったさ。」

腕を上げてへっちらかな事を伝える。

「それで一つ聞きたいんだが。」

「はい。私ができる範囲で答えますよ。」

「ドンツと来い！全部あんずが答えるぞっ！」

「タマっち!?!」

よし、ここは杏のスリーサイズを——じゃなくて

「今、千景が何処にいるか分かるか？」

「千景さんですか。今は謹慎を貰い、寮の自室にいると思います。」

「行くんですか？」

「もちろん。」

「千景も士郎の誇り、だからか？」

「そうに決まってんだろ。」

「そっか。」

それが、俺の行動原理であり俺の王勇だ。

「つてことで今から脱走します！」

「凄い行動力ですね。」

「士郎らしいなっ！」

「二人にはお留守番頼むぞ。」

「わかりました。誰も入れなければいいんですね。」

「タマにまかせタマえっ！」

「そりゃあ頼もしいじゃ、そういうことで」

窓から飛び降りながら変身をし、地面にいたら再度飛翔  
.....  
全速力で寮に向かう。



「。。。」

「若葉の声だ。」

それに、ドアを叩く音もする。

「千景えーっ！聞いているんだろ!?開けてくれえ！一緒に謝りに行くう!!きつと士郎も赦してくれる!!」

「ええーつと。若葉さーん?」

「んっ?——しっ、士郎!どうしてここに!」

「抜け出して来ちゃった♪——じゃなくて。今、若葉なにしてた?」

茶目っ気たっぷりっつてな。本題はそこじゃないんだ。

「私は千景を連れて病院に行こうと。」

「それで怒鳴ってたと。逆効果じゃねえか。」

「じゃあ。どうしたら。」

「ふっ、ここは俺に任せろ。」

「わかった。」

俺の奥義を見せてやる。これを使えば、千景は絶対に出てくる。

「ん。ん。っ!——ぐんちやー——ぐふっ!!」

扉が開いたと思った!?目覚まし時計が飛んできやがった!!

「何がいけなかったんだ。」

「士郎。正直、気持ち悪かったぞ。」

「そうだ!——友奈だ!友奈を連れて来い!」

「友奈も。駄目だった。」

「どうすることも出来ないツツ——!」

「だが、友奈が助っ人を連れて来ると言っていた。」

「マジか。ここは一旦待つか。」

「そうするしかないさそうだ。」

助っ人。ひなたか。いや。でもそこまで親しいという感じじゃないし。他の誰かだな?。

プルプルプルプル

「私だ。はい、乃木若——」

『——若葉さん！近くに士郎さんがいたら早く代わって下さい！』

「わ、わかった！」

杏か、何かあったのか？

「代わったぞ」

『士郎さん！友奈さんに何したんですか!? ひっきりなしに扉を叩いてるんですが!!』

「友奈、そっちにいるのか？」

あれ？友奈は助っ人を呼びに行ったんじゃないか？ あつ。

『言ってるじゃないですか!』

「あー、ええーつと」とりあえず、扉開けて戻って来るように伝えてくれ。」 ↑助っ人

『ええー、わかりました。』

「すまん。頼んだ」

杏達にはあとで何かお土産でも買っていくか。

「ふうー、ほいつ、返す。」

「ああ。友奈が言う助っ人とは士郎の事だったのか」

「入れ違いになっちまったみたいだな。」

助っ人が俺って、千景特攻を持つてるのは友奈だろうに、友奈と話してる時が心から笑ってるように見える。

「。」

待つしかないな。

「——ごめんね！遅れちゃって。」

「大丈夫だ。まだ時間は沢山ある。」 と思いたい。」

「それよりも、作戦を立てよう。」

「うん！」

まずは現状を知らないが始まらないな。

「最初に状況をまとめよう。俺が来るまで何があったか。若葉、教えてくれるか？」

「わかった。朝、私と友奈は千景が心配になり声をかけた。だが、反応はなく扉が開かなかった。」

「そこで、私が助っ人として士郎くんを呼びに行ったんだ。」

「俺は病室を杏達に任せて脱出し、ここに来た。そこで俺も千景に声をかけた。結果は目覚まし時計が飛んできただけ。手詰まりだな。」

「えっ、飛んできたって何処から？」

「?——部屋から決まっでんだろ。」

「じゃあ扉が開いたってこと？」

「そうなるな。」

「そうだな。——！」

「えっ!何したの!?!」

「俺が友奈の声真似をしたただけだぞ。」

完璧だと思っただが友奈愛好家にはバレるか。

「士郎くん、もう一回してみて！」

「わっ!た。ん。ん。ん。っ!——ぐんちやーン♪扉を開け——  
フツ、二度目はなぐえっ！」

次はTVのリモコンが投げられたが難なくキャッチ。だが第二投目のコントローラーが顔面にクリーンヒット。上手いじゃねえかぐっ。

「——今だ!!」

「ぐんちやん!!」

「そこだ。」

扉が少し入った瞬間——若葉と友奈がこじ開けた。その隙間を狙い、俺だけ部屋に入る。

「なっ——士郎!？」

「コレは俺の問題だ。」

「ぐんちやんをお願いね。」

「任せろ。友奈並に元気にしてやるよ。」

扉を閉め鍵をかける。さて

「朝飯は食ったか？」

「えっ、急に何を――」

「いや、だから、朝ご飯は食べたのか？その顔ぶりを見るとどうせ食べないんだろ？」

折角の綺麗な髪がボサボサになってやがる。しかも目の下にクマをつけて、まったく、世話がかかる奴だ。

「食べてない。」

「そうか。じゃ、キッチン借りるぞ」

「。」

部屋の造りは俺の部屋と同じで安心したよ。さっとキッチンに行けた。冷蔵庫の中身を見る。あるのは水と俺が以前渡した米ぐらいだ。結構前だが、まだ食べれるな。

「おにぎりでもいいか？」

「なんでもいい。」

「じゃあ、ちよつと待っててくれ。」

タツパに入れたまま米をレンジでチンをし、熱いうちに片手で素早く握っていく。その前に手をしっかり洗うのは忘れずに

「ほいつ、よく噛んで食べるよ。」

「うん。」

今ん所は安定しているな。このままでいて欲しいんだけどな。

「ごちそうさまでした。」

「どうだ、美味しかったか？」

「美味しかった。」

「そりゃあよかった。」

米がまだ使えてよかったぜ。あとはゆっくりとしとくか。

「。」

「。」

「ねえ。」

「んっ、何だ？」

「おっ、やっと喋る気になったか？」

「貴方は、此処になにしに来たの？」

「なにしに来たって言われてもな」

正直な所・飯食わせに来たぐらいしかないぞ。

「私を外に出すとか・元気づけるとか」

「外に出たいのか？」

「やだ。」

「俺に励まされたいのか？」

「それもなんかやだ。」

何かそれは傷つくな・ぐすつ。

「じゃあいいじゃねえか。ゆっくりしていこうぜ」

「貴方には帰って欲しいのだけれど。」

「酷くねえか!？」

「ふふつ。」

ああ、——やっと笑ってくれた。

「その顔止めなさい。」

「まあまあ」

「はあー」

「ため息ついたら、幸せが逃げるぞ。」

「そんなの迷信よ。」

「そういうのは気持ちの有り様だぞ。」

またの名をプラシーボ効果という。

「ごめんなさい。」

「突然に言うな。」

「私は、貴方を・殺そうとした。」

「ゆっくりでいいぞ。」

「貴方を殺せば・きつと・村の人達は、私をまた見てくれる。」

「私を、価値ある存在として、見てくれる。」

「ほんと、私は馬鹿ね。」

「そんな事をして、誰も私を見てくれな」

「ほんと、私は馬鹿ね。そんな事をして、誰も私を見てくれな」

い・わ・か・つ・て・た・の・に・

誰も見えてくれないか。何か勘違いしてるな。

「何言ってるんだ？」

「——！」

「お前の事は皆見てるよ。若葉だって、千景の事を心配して声をかけてたろ？」

「私を怒鳴ってると思ってたわ。」

「ん〜！そこは気にしないでくれ。」

「うん。」

「俺が言いたいののは、ええーつと。」

若葉のせいでないに言おうか忘れちまったじゃねえか。

「シヤツキとしなさいよ。」

「あつ、そうだった。千景は千景であり、それ以外の誰でもない。勇者の千景も千景だし、精神が不安定の千景も千景だ。」

「私の名前を連呼しないほしいのだけど。」

「おおつと、すまねえ。とりあえず、俺が言いたいののは——」

「そこまで、言われたら私でもわかるわよ。」

「——そうか。それで、どうする？なんかしたい事はあるか？」

「そうね。一緒にゲームしましょ。」

「いいぜ。つとその前に、ほら後ろ向け。」

「いいけど、変な事はしないでね。」

「俺をなんだと思ってるやがる。じつとしとけよ。」

「——！！」

櫛を使い、髪を梳いていく。優しく、少しでも触ったら壊れる物を扱うようにゆっくりとしていく。

「結構上手ね。妹でもいたの？」

「う〜ん。いなかったと思うぞ。」

「そう。」

俺は、感覚的に一人っ子だと思いが、実際は分からない。

「——よし、出来たぞ。」

「んっ、ありがとう。」

「おう。さして、ゲームやるか」

「ええでも、貴方ゲーム出来るの？」

「ふっ。舐めると痛い目みるぜ。」

「望む所よ。」

片手というハンデがあつて五分という事を見せてやる。――

―この後、白熱した戦いが続いた事は言うまでもない。

「士郎。遅いな。」

「士郎くんとぐんちゃんなら大丈夫だよ。待つとこうよ」

「ああ。しかし冷えるな。」

「だね。私、二つホツカイロ持つてるから一つあげるよ。」

「それはありがたい。――温かいな。」

「うん。」

――この二時間後に士郎が二人の事を思い出し、千景と一緒に出てきたのは言うまでもない。

この一時だけでも

?月?日

今日は皆の事について知れてよかった。俺の事についてはあまり喋れなかったが、まあそれでも楽しい一時だった。にしても男女比率6対1っておかしくねえか。歩いてる時、めっちゃ視線を感じたんだけど。

「大手一の門だったけな」

友奈に言われた場所はたしかこの筈。そもそも大手一の門ってというのが分からん。とりあえず一番デカイ門の前に立っておく。これで誰もこなければ、電話かけるしかないな。

「——— 土郎さん。早いですね」

「おっ、ひなたか。若葉と一緒にやないんだな。」

「ずうーっと、一緒にいていう訳にはいきませんね。ずっと一緒にいたいんですけどね。」

「そ、そうか。」

今のは、触れたらヤバイ。無視無視と。

「——— ひなたー、土郎———」

「おっ、若———」

「若葉ちや——— ん?」

「どうしたんだ?」

完全、不審者スタイル止めてもろて

「こっちのセリフだ。何でそんな格好になってる?」

「これじゃあ、不審者ですよ。」

「有名人の変装は——— 基本っ!」



「誰だよ、その誤った知識教えたヤツ」

「はあ・ちよつと目眩がしてきました。」

ドンマイ、ひなた。

「——ひなちゃん、大丈夫？」

「この声は友奈さ——」

「——デジャブツ！」

友奈は何だよその仮面みたいなマジで誰だよ、この二人に変な知識覚えさせたヤツは。

「やっぱり、変装するのが普通だな。」

「うん。そうだね♪」

「二人とも早く着替えてきて下さい。」

「えっ、なんで？」

「いいから。」

「は、はい！友奈行くぞっ！」

「う、うん！」

怒らせたらいけないのはひなた。つと、しつかりメモしとく。

「な、なに？今の。乃木さんと高嶋さん？」

「千景は普通で安心したよ。そのままできてくれよ。」

「千景さんはあんな風になつたらいけないよ。」

「ど、どういうこと!?まったく意味がわからないのだけど。」

千景はいつも通りだった。やっぱ、安定の千景だな。

「じゃ、行こっか。」

「まずはタマと杏に合流しないとだな。」

「ここから徒歩だと。こつちからの方が近いな。」

あれから四ヶ月ぐらいだな。タマの足もそろそろ完治するらしい。完治したら、次はキツイリハビリが待ってるだろうが。タマの事だし、絶対に諦めないだろうな。

「。こつちやって皆で出かけるのは久しぶりだね。」

「前回揃ったのは、うどん食べに行った時か？」

「その時もひなたがいなかったからな。」

「あっそうか。」

「私を除け者にしないで下さい。」

「すみません。」

「フフ、そんなに怒ってませんよ。」

「全員で集まったの、一回もなくねえか。だいたい俺かひなた、千景がいねえからな。」

「喋りながら歩くのついていいよね、ぐんちゃん。」

「ええ、そうね。」

「時間かけすぎると、タマが『退屈だあー！』って騒ぎだすと思うぞ。」

「その姿がはつきり目に浮かぶな。」

「足をバタつかせて、杏になだめられている。そんな姿を想像出来るな。」

「速歩きにしますか？」

「いや、ゆっくりでいいだろ。予定の時間にはまだ余裕があるしな。」

杏がどうにかしてくれる。

「そうだな。」

「まあ、最初、ふざけて変な格好してきた問題児のせいで時間が押してるんだがな。」

「——ん（ぐ）っ!!」

笑いを堪えるのに苦労したぞ。

「みんなあー!!こつちだぞーっ!!」

「相変わらず元気だな。」

「アハハ。」

病院に「づいた」と思ったら、タマの熱烈な歓迎をうける。アイツ本当に病人か。隣で杏が苦笑いしてますけど。

「みなさん、早かったですね。」

「千景！久しぶりだなあー！」

「うん。久しぶり。」

「暗いぞっ！もつと元気に行こおおー！」

「う、うん。」

「タマちゃん、凄い元気だね。」

「本当にな。めっちゃ千景にグイグイ行くな。」

「元気な事はいいことですよ。」

「そうだな。これで全員集まったな。」

「どこ行く予定なんだ、友奈？」

「——海に行こう!!」

「海??？」

「泳ぐのか!？」

季節的にはちょうどいいが、水着とか誰も持ってきてないぞ。

あと、俺はパスするからな。

「いや、ええーつと話しがしたいんだ。」

「わかった。海に行くかあ!!」

「ああ。そうだな」

「たまには、何も考えなくてもいいですもんね。」

「タマにはっ!？」

「タマっち。」

「っ、つい、出来心で。」

あー、うん、まあ気持ちはわからなくはない。

「千景もそれでいいか？」

「この空気で嫌とは言えないでしょ。」

「嫌なら嫌でいいぞ?」

「そうだよ、ぐんちゃん。」

「うう、大丈夫よ。海は嫌いじゃないし。」

ここには嫌って言って、責める人間なんて一人もいないんだかな。

「——レッツゴー!」

「このポスター。」

「おっ、今年も夏祭りをするんだな。」

「今年も行きたいな。」

「そうですね。今年はみんなで行きたいですね。」

「前回は行っていないというか、記憶が失くなって日が浅かったから、そういう余裕はなかったな。あつ、ちなみにタマは俺が背負って歩いています。力仕事は俺に任せい！片腕だけどな。」

「夏祭りといえば、浴衣ですね！」

「ツ——！」

若葉が途端に嫌な顔になったな。

「い、今はその時じゃないしなっ？」

「そう、ですね。夏祭りの時に堪能しましょう♪」

「結局か。」

「若葉、ドンマイ。」

「何を言ってるんですか？ 土郎さんも着るんですよ？」

「うええ、俺この日に予定が出るから——」

「土郎さんって、私達以外に友達いるんですか？」

「ぐううツツ——！！！」

男友達が欲しい（切実）

「つてことで、決定ですね。」

「若葉、ひなたの手綱をしっかりと握ってくれ。」

「無理だ！ 諦めるしかない。」

「ううっ」

「そんなに凹まなくても。」

「——ここは皆で着よう！」

「そうですね。ここまで来たならみんなで浴衣を着ますか。」

「なっ！ タマもか!？」

「もちろんです♪」

「タマっち先輩、ここは諦めるしかないよ。」

「なんで、私も。」

「ぐんちゃんの浴衣姿、楽しみだなー♪」

千景からの視線が痛い。ここは無視。これで全員巻き込めたな。

「涼しいな。」

「ちようどいいくらいの風ですね。」

「ぎあー、ぎあーと波の音が聞こえる。ああ、心が落ち着くな。」

「タマ、座るか?」

「んーこのままで」

「わかった。」

そろそろ、片腕がつりそうだが気合で耐えるか。

「友奈、話したのは」

「。」

「私の事を話したくて」

「友奈のことか。そうだな。友奈の事、あんまり知らないな。」

「そうですね。友奈さんは聞き上手で詳しい、私の話しをしてくれます。」

「ああ。いつも友奈には助けられてるな。」

「高嶋さん。」

「。」

「出身地ぐらいしか聞いてないですね。」

「やっと、友奈について聞けるのか。よかった。」

「最近、士郎くんがよく怪我するよね。」

「俺え!？」

「ああ。怪我といえば士郎だな。」

「怪我は俺じゃないからな!？」

変な勘違いしないでくれよ。痛みに興奮するようなヤツじゃないからな!？」

「つつ。」

「別にお前らを責めてる訳じゃないぞ。」

「うん。」

「わかってる。」

「もしかしたら、次、誰かが、死ぬんじゃないかと思って、そしたら、私は誰にも覚えられないじやと思っちゃうと怖くて」

「そんなことはない。」

誰の記憶にも残らない。それ程怖い事はない。

「これが、私の勘違いだって、それでも、やっぱり怖くて、だから、私について知って欲しいの」

「うん。高嶋さんの事ならなんでも」

「聞くよ。どんな事でも」

「———ありがとう。」

高嶋友奈について、勇者じゃない彼女のこと

「私は———高嶋友奈。勇者、高知県出身、好きな食べ物はうどん。身長は154cm、1月11日生まれの中二学生。」

「小さい頃は、山とか森で遊び回ってて、よく男の子に間違われたの。」友奈らしいったら友奈らしいな。

「格闘技が得意で、空手、ボクシング、あとカンフーとかやってます。」

「———こんな感じでいいのかな?」

「充分、友奈について知れたよ。」

「ええ、そうね。」

内容は短かったが、それでも話すのが得意じゃない友奈が精一杯考えて話したんだ。しっかりと伝わる。

「じゃあ次は私だな。」

「あれ?待ってくれ。」

「———なんだ?」

「全員する流れか？」

「そうだが。」

「俺も？」

「当然だ。」

「何も話す事ないんだが？」

「気合だぞ、士郎！」

「行ってみよおー！」

「なんか、やけになつてないか？」

「しょうがない、捻りだすか。」

「よし、話すぞ。私は——」

「はい！これで私も終わりです。次、士郎さんですよ。」  
「ぐっ。」

「気楽に行こう！」

若葉、千景、タマ、杏、ひなたが終わり、次は俺の番になった。——  
ああ、もう！当たって砕けてやる！

「俺は御影士郎。勇者。多分。ええー、出身地はわからん。生まれ  
た日も知らねえな。」

「好きな食べ物は、焼き芋と干し柿だな。趣味は料理と日記を書く  
ことだな。」

「嫌いな食べ物はないな。特にないな。出されたもんは何でも食べてるよう  
にしている。こんぐらいだな。なんか質問はあるか？」

「自己紹介ぼっくやったが不明な点が多いな。」

「誕生日はないの？」

「ないな。」

「。」

「そんな顔すんなって。うくん、そうだな。3月11日を俺の誕生日  
にするか。」

大社に保護されて、一度起きたがすぐ寝て。次、起きて大社の人に聞いた時は3月12日だったから3月11日。ってことにしよう。

「そんな適当でいいんですか？」

「覚えてないんだからしょうがないだろ。」

「もう、過ぎてるな。」

「来年はペアってやるからなっ！」

「おう。楽しみにしとくな。」

「俺に来年があるのかなあ！」

「まずは夏祭りだな。」

「イベントはたくさんありますからね。」

「思い出をたつくさん！——作ろうね！」

「ええ、そうね。」

「——だな。」

この一時だけでも、何もかも忘れて未来を語る。例え、確定しない未来だとしても——



## 終着

?月?日

何ヶ月前かの襲撃で俺は全てを出し切った。なのに、俺はまだ生きて  
いる。記憶はちゃんとある。おかしい。確かに俺は草薙剣を使っ  
て、友奈の負けを逆転させて勝利にした。なのに、俺という存在がま  
だ息をしている。いくら考えても何故こうなったのかはわからない。  
でも、これだけは言える。全員無事に生きて終える事ができて良かつ  
た。

「初っ端から進化体六体か。」

「これは、出し惜しみ出来ないな。」

「ええ、そうね。」

「全力で行くよ!」

視認出来るのはこちらに近づいてくる進化体六体。いつも通りす  
るだけじゃ絶対に勝てない。命を削る覚悟で挑まなければいけない。

「降りよ——!」

「力を貸して——!」

「来い——!」

ここで俺が切り札を使えないのが悔やまれるな。俺が切り札使え  
たら一人でぶっ倒しに行けるんだが。

「大天狗——!!」

「玉藻前——!!」

「酒吞童子——!!」

いつものとは違う精霊での切り札。日本の三代悪妖怪——故に、  
体への負担はいつもの並ではない。短期決着で済まさない。先に

体が朽ちるだろうな。

「絶対に生きて帰るぞっ!!」

「うんっ!」

「もちろん!」

「当たり前前に決まってるだろ!!」

一斉に進化体へと向かう。それを感知したのか迎撃の動作を入れる。何体か猛スピードでこちらに向かってくる。

「こっちは私が!」

「俺もこつちを片付ける!!」

「わかったっ!前は私と千景で抑える!」

「任せて——!」

前に出てきたヤツを相手していたら、後ろのヤツらも来て、挟み撃ちにあうのが一番ヤバイ。ここは二手に別れるしかない。

「う——あ、ああ!!」

「ナイスだっ!——おら、——よっ!!」

友奈が地中に潜ったヤツを引つ張り出し、無防備に出てきた所を大剣程の大きさの刀でぶった斬る。溢れはないからこれで終了。

「まず一体!!」

「あと、二体いるよ!」

「わかってる。次いくぞっ!」

「りょーかい!」

あとは天秤みたいなヤツと.....なんだあれ?——いや、考えるな。倒す事だけを考えろ。.....

「——天秤は俺がやる!」

「じゃあ、私はよくわからない方っ!」

やっば、そうだよな。よくわからないよな.....

「お前の相手は——俺なっ!!」

とりあえず、片方の棒部分を斬り落とす。バランスを崩し、転倒する。

「——あつぶねえなあ!!」

——何か、顔目掛けて飛んできた。少しでも気づくのが遅れればそ

のままお陀仏だったろう。避けられはしたが、頭から血が流れる。左目に血が入り、視界が真っ赤になる。

「お返し、——ダツ!!」

あれが、最後の抵抗だったのか無抵抗だった。これでコイツは終わりだな。友奈の方に行かねえと——

「よし。次だ——」

「あ、あ——あああああ!!」

「友奈ツ!!」

盾のような物を粉碎しながらも敵を砕く。正に破壊の権化だな。

——だが、体が負担に耐えられないのか血を垂れ流しながら戦っている。

「ラス——トオオオ!!」

「これで、こっちは片付いたな。」

「ハア——ハア——ぐんちゃん、達の手、伝いに行か、なきや——」

「俺が行くから友奈は休んどけ。その体で行っても足手まといだ。」

「でも——うん、わかった。ありがとう——。」

「。」

きつと、砦葉達も体の負担を無視して戦っている。速く——速く、行かねえと——

「——千景！手伝うぞっ!」

友奈程ではないが、血を流し、白無垢を紅く染めている。だが、敵からの攻撃は受けていないのか破れていたり、擦り傷が出来ていたりはない。

「——私が惹きつける。」

「わかった。俺が止めを刺す。」

進化体についてる口(?)が開き、弾丸のような物が千景の命を奪

おうと迫る——千景の体がボヤけた。

「——こっちよ。」

——今は千景を見るのが優先じゃない。先にヤツを倒す。視界に映らないように側面に回り込む。手には刀を打つ時に使う金槌を握る——まず、その口を——

「——打ち直すツ!!」

口の形が変形し、思うように放射を出来ないようにする。これでコイツはもう攻撃出来ない。

「そこよ、朽ちなさい。」

そこを千景の九つの尾が貫く。抜くと同時に紫色の炎が勢いよく燃え立つ。——跡形もなく焼け消えた。

「次。」

「これが、玉藻前か。」

鎌を持たずに戦うのは邪魔だから……いや、必要ないのか。

「——ハアアーツツ!!」

「!？」

「若葉!？」

若葉の声が聞こえたと思ったら……敵を押しながら通っていたんだが、アイツが単騎最強じゃね。

「ハアアアハアア。」

「これで、あと一体……一番デカイやつだな。」

「ええ、そうね。」

ゆっくりとこちらに近づいて来ている。他のヤツらを先に行かせたのは何でだ——まとめて俺達に始末させない気か……面倒臭いヤツがいるもんだな。——!!?

「——千景っ！土郎！退避するぞっ!!」

「いや、——やるしかない。」

「何してるの!!早く避けるわよ!」

あの火球を避けるのは容易い。——だが、あれを避けると——

「後ろに友奈がいる。——避けるわけにはいかない。」

「なっ……高嶋さんっ!!」

「出来るか？」

「もちろん。そのための俺だ」

手に刀を出しては適当に投げる。ここは一本でも多く出さなきゃいけない。あの火球を無力化するには今までで出した事のない、一撃が必要だ。

「危ないから離れてろよ。」

「わかった——奴は私が斬る。」

「任せた。」

ここで、止めないと友奈と千景が死ぬだろう。それだけは阻止しないといけない。俺が死んだとしても、絶対にアレは通さない

——放たれた。樹海の根を燃やしながらこちらに迫る。まだまだだ。ギリギリになるまで刀を出し続ける。熱気がここまで伝わる。

「破却、」

——求めるは一振り、宿業、縁、定め——自分すらをも断つ、究極の一振り。

「収束。」

総数四百本程度——刀から脈を打つように炎が噴出する。何かが燃えていく——大切なナニかが

「う、あ——う、お、おおらあ!!!」

ボガアアアアン

火球に亀裂が入り爆発四散した。これで——

「ぐッ」

右腕に激痛が入る。歯が軋むほど食いしぼり、なんとか耐える。ここで倒れるのだけは駄目だ。

残り本数は二百本程度。若葉に早く合流しねえと。右腕の痛みは無視しろ。第二射が放たれる前にアイツを倒さないと俺達に未来はない。次、来たらもう防げない。

「ッ！」

小さい火球を出せるのか。いや、あのスピードなら避けれる。若葉

!?

にとつては止まって見えるだろう。

「!——追尾出来るのか?!——若葉、後ろだっ!!!」

若葉が躲した火球は軌道を曲げ、若葉の背中を捉えた。

「!——ツ、甘い!」

即座に振り向き、全部まとめて薙ぎ払う。 。

射神経どうなってるんだ。

「士郎、助かった。」

「あの火球、厄介だな。」

「ああ。処理を怠ると不味い事になるな。」

自動追尾でも厄介なのに、それをポンポン出してくるのがダルいな。

「——あの火球を対処すればいいのね?」

「おつ、千景じゃねえか。」

「!千景、何か策があるということだな?」

「ええ、もちろん。」

どういつた策で、どれだけの成功率があるかもわからない。だが、今はそれに乗るしかないな。

「わかった。俺と若葉で奴を削る。千景、火球は任せた」

「任せて頂戴」

「——作戦開始だッ!」

。千景を先頭に駆け出す。 。

。頼んだ!」

火球が飛んでくる。 ————だが、何もいない方向に飛んでいつて

いる。 。

「ハアアア——!」

「——————セイツ!!」

「おらっ、————よっ!!」

————かかってえな!全力で振り下ろしたのにちよつとヒビが入っただけか!!若葉の一撃も俺よりちよつとデカいヒビが出来ているだ

け。このままじゃ不味いな。

「若葉ああ!! 気合入れていくぞっ!!」

「ああ!!」

——若葉と千景の体から際限なく血が流れていつている。このままだと多量出血で死んでしまう。それだけは絶対に避けられないのだが

「——う。おおおおおおお!!!!」

一撃一撃が必殺——それでも倒れない。どうなっていやがる。という耐久をしてやがるってんだ!?

「——ゴフツ。」

「千景ツ!!——ぐっ!」

「速く!速く!倒れやがれ!!!」

不味い——このままだと全員死ぬ!それだけは——それだけは

「勇者ああああ——!!」

この声は——

「——パアアアンチツツ!!!」

「友奈!!」

ピクリともしなかった、巨体が傾く。——ここで決めきる!

「う。ああああああ——!!!」

「あああ。ああ。ああ——!!!」

若葉と千景の努力は絶対に無駄にしな——い?」

「はっ?」

日輪の輝きが頭上から降り注ぐ。

——いつの間に準備してやがったんだ!?そんな動作。一度もなかったぞ?!ああ!!クソっ!

「破却、——収束。」

砕け散ったのを再利用するのは初だが、案外いけるもんだな。集中中。

「消えろオオオ!!!」

——せめて威力を少しでも下げる

「オオ、おおおおおお」  
「!!!」

煙で周りが全く見えない中、傷がない場所の方が少ない体で周りを  
見渡す。が、それではわからないが故に死に体の体を引き摺り歩く。

「ハア―ハア―若葉、―千景、―友奈!」

誰でもいい、誰か返事を―返事をしてくれ。

「―若葉―千景―」

若葉と千景が仰向けに倒れているのを見つけた。急いで駆け寄り  
口の前に手を当てる。

「!」  
「!」  
「!」

微かにだが二人共息をしている。でも、かなり衰弱している。  
このままだと死んでしまう事は考えずとも解る。

「ツッッ」

体を起こすということだけで激痛が体全体を襲う。だが、あと一人  
―あと一人を見つけるまで止まる訳にはいかない。

「まだ」

「!」

弱々しく、今にも消えそうな――だけど、燻る熱が未だ上がり続  
けるような声が微かに聞こえた。すぐさま声がした方向へ足を運ぶ。

「みんなを、守るんだ」

「―友奈っ!!」

這いながらも敵へと向かっている。まだ、友奈の意志は死んでな  
い。――でも、これ以上戦うと友奈は

「! よかった! 士郎くん、肩を―」

「」



「——え？」

「もういいんだ。友奈はもう戦わなくていい。——あとは俺に任せ  
て、友奈は休んどいてくれ」

「なに、言ってるの？」

「じゃ、俺は行くよ」

「あつ——えっ、まつ——」

壊れていく音と共にその場から飛翔。あと数秒もあれば獅子座に  
辿り着けるだろう。

——痛いし、怖いし、寒い。だけど撤退はない。逃げることなん  
て出来ない。ココで、奴には死んでもらう。

「これで、三連敗かあ」

最初は、勝つてんだけどなあ。どっから負け続けたっけな。まあ、今  
はそんな事考えなくていいな。考えるのは目の前の事だけだ。

敗者として獅子座の前に立ち塞がる。

「俺達、勇者の完全敗北だ。」

見上げる、神が創り出した怪物を。嘗て人々の天井であった存在  
を。

「まあ、でも勝ったからって——」  
取り出す。

「——『生きれる』なんて保証はないんだけどな」

怪物の体が崩れていく。ボロボロと。アイツらにとって負けとは  
死を意味する。

——何かが途切れた。

「——意識が落ちていく。深い水の底へと落ちていく。」

⊠ああ。ここまでかあ——

神様が使うような剣を振るってたんだ。ここまで来れた方がす  
げえか。

⊠眠いし、もう寝よう。おやすみなさい。⊠

そこで、俺の意識は完全に落ちた。

——手を引つ張られるような感覚がした。

『——もう、行くのかい？』

『ああ。ここが私の潮時らしい』

——誰かが話している。いや、片方のお爺さんみたいな人はわかる。刀を打っていた人だ。

『そうかい。片付けは儂オレがしといてやるよ。』

『ふっ。それは頼もしい限りだ。最後に一つ仕事を頼まれてくれな  
いか？』

『どんな内容だ？』

『この体の主——少年の行く末を見てやってはくれないか？』

『言われるまでもねえよ。だが、その仕事——この千子村正が承つ  
た。』

『対価は必ず——』

『逝きやがったか。何もまだ解決してねえだろうに——』

「ハッ！」

「起きた。——士郎が起きたぞーっ!!」

「士郎さん、私かわかりますか？」

「えっ、あ、ああ。もちろん。杏だろ。」

「記憶は問題なしっ」と

「——それは本当か——よかつたくく！」

「騒いで、どうしたの——ああ、そういうことね。」

「士郎くん起きたんだ！」

「コラコラみなさん、ここは病院ですよ。静かにして下さい。」

「二は（ー）い。」

「えっ、あれ。俺はあの時。確かに——」

草薙剣を使つて。なのに何で。俺は——

「どうしたんですか？」

「どこか痛いのか？」

「なに!? すぐに医者を——」

「待て待て! 大丈夫! 大丈夫だから!」

「そうか。」

「つてか。若葉達、怪我はもう大丈夫なのか？」

「ああ。私達は士郎よりも二ヶ月早く起きて、治療に専念していたからな。」

「ちなみに、今何月？」

「12月よ。」

「五ヶ月たってやがる。」

「起きるのは士郎くんが最後だよ。」

「寝坊しちまったか。」

「寝坊ではないと思いますが。」

「寝る子は育つっ!」

「育ったか？」

「うるさい! タマはこれからだっ!」

「タマっち先輩。」

「そんな目でタマを見るなああ!!」

「ふふ。」

「あつ! 士郎くんが笑った!」

「士郎さんが笑うなんて珍しいですね。」

「ああ、そうだな。」

「笑わない人と思ってたわ。」

「俺を何だと思ってるんだ。」

俺だって、面白いことがあつたら笑うわ。

「士郎うう!!」

「うわっ! ちよ! 杏! タマを剥がしてくれ!」

「。」

「嫉妬してないで早く剥がしてくれ! 頼む!」

「がるるる!!」

「獣化してるって!」

噛み付いてきそうな感じになってるんだが?

「球子、病人を噛んだらいけないぞ。」

「はい。」

子太みたいにシュンってなった。若葉が飼いなのか?

「ふう。助かった。ありがとな若葉。」

「お安い御用だ。」

若葉がいつもより数段頼もしく見える。幻想か。

「それじゃあ、私達は帰りますね。しっかり体を休めて下さい。」

「おう。一瞬で退院してやるよ。」

「それは頼もしいですね。でも、無茶はダメですよ。」

「わかってる? わかっている。」

「絶対ですよ。」

「は、はい!」

「それは良かったです。それではまた明日」

やっぱり、ひなたが一番怖いな。若葉もビクツってなったしな。

「士郎! よく食べて、よく寝れば、全て治る!」

「凄い説得力だな。」

「もうそろそろで元通りになるそうなんですよ。」

「やっぱり、タマには勝てそうにないな。」

「キツイリハビリを何度も耐えるなんて、やっぱりタマはすげえよ。」

「じゃあなあー！」

「ああ。」

最後のタマと杏が退室した。これで病室には俺一人。

「生き延びたんだな。」

自分が何故かはわからないが全員生きてる事には変わらない、それだけでも――

「――良かった。」

あの時の俺の判断は正しかったんだと言えるよ。

## 託す

?月??日

今日で日記を書くのも終わりか。いや、戦うのが俺一人だとしても神を倒せる算段は何個もある。まっ、ここはさくつと倒して、世界救っちゃうかあー。こんな妄言を吐くようになったのか俺は。はつきり言つて俺の勝利はない。相打ち、もしくは痛手を与えるぐらいだな。草薙剣はもう真価を発揮出来ない。そんな気がする。一応ダメ元でやってみようと思うが。無理だろう。はあ。世界の命運をアイツらに託すなんて本当に嫌だ。出来るなら、アイツらが好きな事を思うがままにさせてやりたかったな。

「。」

あれから一ヶ月。病院を退院し、いつも通りの日常を送っていた。今日は休日なんだが。何故かひなたから電話がかかってきて、教室に来てほしいと言われ。現在向かっている途中だ。

「おっ、全員いんのか。」

まだ、休養中のタマもいる。なんだ、緊急事態でも起きたっていうのか。なんか雰囲気暗いな。特に友奈、千景、若葉。前、外の様子を調査しにいったヤツらだな。取り敢えず席に座っとくか。

「これで、全員揃いましたね。」

「ああ。」

「それで話してなんなんだ?」

「。」

「昨日、外の調査をしました。今日はそのことについてです。」  
「何かあったのか？」

「良いお知らせじゃないだろうな。」  
「今、映します。」

モニターが出され、それに映像が映し出される。そこには――

「――！！！」

「これが外の風景なのか？」

一面、炎の海。世界が壊されていくのか。！！

「はい。」

「出す写真間違えてるじゃないか？」

「いいえ。これが現実です。」

「天の神の仕業。そう考えていいか？」

「十中八九そうでしょう。」

「そうか。――負け、だな。」

完全に詰んだ。相手から見たら、もう俺達はただ無駄に足掻く害虫にしか見えないんだろうな。

「！――いやっ、まだだ。まだ、私達は負けてないっ！」

「そうだよ！私達はまだ戦える！」

「っ。」

「今は負けてる――」

「だから私は――！」

「――でも絶対に相手が油断する時がある。」

「――！」

「そこを狙う。もうそれしか俺達に勝ち筋は残ってない。」

「そのとおりだ。」

「まだ勝ち筋はある。どんなに小さい確率でもそれに賭けるしか俺達。人類に希望はない。」

「話しを続けます。」

「わかった。」

「。」

あのタマが黙って話しを聞くななんて珍しいな。

「私達、人類は存続の危機に陥ってます。大社はこれを打開するため奉火際を決行——失敗しました。」

「そのほうかさい？ってのはなんなんだ？」

「太古の時代において、人々が神に土地を持つ事を赦して貰うために様々な物を供物として捧げる。それが奉火際です。」

「何を供物として捧げたんだ。」

「——巫女六人です。」

「それで失敗したと。」

人の命を六つも捧げたのに神様は納得いかねえと強欲な神さんだ。

「そして、天の神はこう言いました。『草薙剣保有者を寄越せ』——  
——と」

「草薙剣保有者って——」

「俺だな。」

そうきたか。確かに草薙剣を持つ俺を一番危険視するよな馬鹿でも分かる。

「供物って言っても絶対に死ぬって決まってるんだろ。」

「捧げられた巫女六人は帰って来ませんでした。」

「——！！！！」

千景が教室から出て行っちゃった。こりゃあ確定演出だな。はっ。

「まあまあ、そう落ち込——わふっ」

「いやだぞっ！士郎は絶対に渡さないっ！！」

がっちり腕で首抑えられてんだけど、捧げる前に俺を殺しに来てる？

「球子。」

「ちよ！ギブギブ！！」

そんなしんみりするより早く俺を助けてくれ！このままじゃ窒息死するから！！

「タマっち先輩、落ち着いて。士郎さんが死んじゃいますよ。」



!!

「ううっ」  
「ほら、泣くなっ」

最近はよくタマが泣くようになったな。もっと元気ハツラツって  
感じだったんだがな。

「——あつ、そうだ！ 士郎くんの草薙剣を他の人に渡せばいいんだ  
よ！」

「——それだ！」

「無理だぞ。」

「っ！——試さなきやわからないよ！」

「じゃあ試してみるか。ほら」

体内から草薙剣を取り出し、机に置く。

「剣を持つぐらい誰だつて——!!!」

友奈が柄を握り、持ち上げようとするがピクリとも動かない。

「なに、コレ——ッッ??」

「。！」

「ハァーハァー！ 全然上がらない」

「友奈、今度は二人でやるぞ。」

「！ 若葉ちゃん。うんっ！」

今度は二人でか。結果は変わらないだろうな。

「——ッッ!!!」

さつきと同様、ピクリともしない。

「タマもやるぞっ!!」

「私も」

「——ッッ!!!」

「。」

四人になってもピクリともしない。草薙剣。本当になんで俺が使  
えるのかが不思議だな。

「ほら、もういいだろ？」

「うわっ!!」

急に持ち上げたせいか、全員後ろに倒れ込んだ。そして、草薙剣は  
再び体内へと入っていった。

「わかったろ？草薙剣はどういう原理か俺以外が持ち上げられねえ」

「どうすることも出来ないのか」

「タマは絶対に諦めないからなっ。絶対になんか方法がある筈なんだ

！

！

「ハァーハァー」

「なんか勘違いされてるな。」

「おいおいいつ、誰が死に行くって言った？」

！

「多分、天の神は直々に俺を殺しに来るだろう。だから、俺はそこを狙ってたたつ斬る。世界も救えて完全勝利ってな！」

「そうか！なら、私も一緒に——」

「ダメです。土郎さん一人で行くようになってます。」

「」

「まあ、任せろって俺一人でぶっ倒して来てやるよ！」

「ああ。」

「そうだよね！土郎くんはいつとも負けそうって時に逆転してたからね！」

「そうか。やっぱりそうだよな！土郎が死ぬわけないもんな！」

「確かに想像出来ませんね。」

「これで、さつきまでの暗い雰囲気は吹っ飛んだな。あとはこれを現実にするだけだな。」

「じゃ、俺はちよつと千景の様子見てくるな。」

「わかった。」

「土郎さん。」

「んっ、どうした？」

「決行は明日の朝です。しっかり準備しておいて下さいね。」

「りょーかいですっ。」

教室から出て、寮へと向かう。

「千景えー！入るぞおー！」

鍵は開いてる。靴が並べられてないな。慌てて入ったって感じするな。

「。」

「何で、そんな端っこで体育座りしてんだよ。」

「貴方は怖くないの？」

「怖いって何が？」

「なにがっで死ぬのかもしれないのよ!？」

「うーん、そうだな。まあ、ぶっちゃけ怖いな。即座に逃げ出したいな。」

まだ、死にたくないなくもっと生きていたいな。

「ならなんで——そんな平然としてるの!？」

「俺を誰だと思ってるんだ。何回死にかけてと思ってるんだ。」

「っ。」

「まあ、安心しろって神とかやらをぶっ倒して帰ってくるからさ。」

「はあー。」

「何でため息!？」

「心配した私が馬鹿だったわ。早く帰って頂戴。」

唐突に辛辣すぎないか？いい事言っただけだと思っただけだな。何かいけなかったか？

「へいへい。お望みのままにっってことでじゃあな。」

「ええ。また今度——。」

千景の部屋から出て、空を見上げる。——まだ、太陽は天辺にある。まだまだ時間はたっぷりあるな。

「おっ、今日もやってるな。」

丸亀城まで戻ってきた。ひなたに用があつて来たんだが、若葉と一緒にやらないならここにはいないな。

「——士郎か。」

「あつ、士郎くん。ぐんちゃん、大丈夫だった？」

「おう。いつも通りだったぞ。」

「良かったあ〜！」

友奈はやっぱり千景が一番大事だな。

「ところで、ひなたが何処にいるか知ってるか？」

「ひなたならさつき、大社の本部に行ったぞ。何か用事があつたか？」

「いや、いないならいいんだが。」

「そうか。あつ、球子達なら体力作りで外周を走ってるぞ。」

「なるほど。」

体動かさないともやもやしちまう人種だからな。まあ、基本全員だ  
と思うが。

「士郎くんも一緒にやってく？」

「そうだな。ここまで来たんだ一緒にやるだろ？」

「ほぼ強制みたいなもんじゃねえか。いいぜ、やってやる。」

「そう来なくっちゃ！」

「まずは私から征くぞ——」

「ふうー。疲れたー！」

まさか、最終的に三人で戦い合う事になるとは。まあ、なんとか勝つ事が出来たし。いつか。久しぶりの勝ちだな。次も勝つけどな。

「タマ達は確か外周してると言ってたっけ」

「おっ、いたいた」  
「タマと杏だな？杏も走ってんのか。めっちゃ、ゼエゼエ言ってる。大丈夫かあれ」

「よっ！」

「士郎じゃないか！どうした？」

「士郎、さん・ゼエ・どう、しましたか？」

「ちよつと様子を見にな。」

「つまり、士郎も一緒に走りたいって事だな！」

「えっ！まだ走るの!？」

「ここはお前が驚くところじゃねえだろ」

「ここは一旦、休もうぜ。杏が倒れちまうぞ。」

「むっ、そうか。じゃあ休憩タイム！」

近くのベンチに座り、スポーツドリンクをゴクゴクと飲み干していき。

「ぶはあく！やつぱり運動後の水分補給は最高だなー！」

「うん。そうだね。」

「タマも大分、体力戻ってきたな。」

「もちろんだとも！タマには怪我なんて重枷にもならない！」

「おお。」

流石、タマって感じだな。にしてもタマが重枷っていう言葉を知ってる事に驚いたよ。

「。」

「どうしたんですか？」

「いや、小さい頃から筋肉をつけると背が伸びないって話を聞いたような気がしたな。」

「——なにっ！それは本当かつ!!」

「大丈夫ですよ！迷信ですから！士郎さんもそんな事言わないで下さい！」

「すまん、すまん。確か迷信だった筈。」

身長は八割が遺伝だったような気がする。これは言わないよ  
うな気がするな。

「ほっ、そうだよな！そうだよな！」

「そうですよ。タマっち先輩はこれからです。」

「そうそう」

「よおーし、見とけよ！タマが士郎よりもビッグに成長してもぶつタ  
マげるなよっ！楽しみにしとけ！」

「——おう、楽しみにしとくよ。」

「士郎さん。」

「アハハハ!!」

「じゃ、俺は寮に戻るな。」

「おう。気をつけてなっ！」

「わかりました。また明日か明後日。いつか会いましょう。」

「分かってる。」

寮に帰って荷物の整理をしなくちやな。ひなたに言いたい事が  
あったが。まあ、明日も会うし問題ないな。

「——もう、こんな時間か。」

いらぬ物といる物で別けてただけなんだけどな。すっかり陽が  
落ちちまつたか。

コンコン

「んっ。こんな時間に誰だ？」

もう九時だぞ

「はい。」

「今、時間ありますか？」

巫女の正装だろうか。白を基調とした服を着ている。

「ひなたか、どうした？」

「中、入っていいですか？」

「おう。」

若葉もだったが、どうして、お前らは異性の部屋に入るのに戸惑いとか見せないんだ？

「茶淹れるか？」

「いや、大丈夫です。すぐ終わります。」

「そうか。」

「明日、奉火際の決行は朝八時、六時にはここに大社からの役人が来て、車で壁付近に向かいます。車から降りたらそこから土郎さん一人で壁の上まで行ってもらいます。ここまではいいですか？」

「六時か、結構な早起きだな。」

「すいません。大社の方で勝手に決めたので。」

「いや、責めてる訳じゃねえんだ。」

独り言のつもりだったんだけどな。

「話しを続けます。壁の外に出たら、そこでじっとし天の神が来るのを待ちます。そこから——」

「戦闘開始だな。」

そこで天の神を打つ。

「本気で言ってたんですか？」

「そりゃあもちろん。」

俺は誰だと思ってるんだ。最後の一瞬でも諦める訳ねえだろが。

「そうですか、ご自由になさってください。」

「ああ。所で冷酷なひなたに頼みがあるが、いいか？」

「はい。私が出る範囲なら。」

「これを預かってくれないか？」

「箱、ですか。何が入ってるんですか？」

「中身は俺の勇者御記と宝物だ。」

勇者御記はしつかり今日の分まで書いたし、あれもしつかり額縁に入れたし、問題ないな。

「わかりました。私がずっと持つとききます。」

「いや、そうじゃなくなてな。未来にさ、俺みたいなイレギュラー？つか、他とは違うヤツに渡して欲しいんだ。」

「勇者にですか？」

「うゝゝん。多分そうだろうな。」

もしかしたら勇者じゃないかもしれないけどな。他の何か。その時にならないとわからないな。

「わかりました。私か若葉ちゃんの一族でずっと管理しますね。」

「おう。そうしてくれ」

「それでは、私は戻ります。」

「夜なんだから気をつけてな」

「はい。」

よし、これで大分片付いたな。もうやる事もないし、あとは明日出し切るだけだな。

「勝ってみせる。絶対に——」

「——さあ、やろうか！」

天を見上げる。そこには、太陽を象ったかのようないくつもの球体が浮かんでいる。

「最初から全力で征くぞ。」

草薙剣を取り出す。真価を發揮出来なくてもこの剣は切れ味、耐久

——どれをとつても業物だ。

「まずは、地に落としてやるよっ！」

浮遊出来ない俺にとつては空にいる。それだけでも戦い難い。同じ土俵に持ち込まねえと。

「おら、——よっ!!」



少しだけだが傾いた。よし！攻撃は通じる！このまま——

「——ちっ！」

なるほど、全進化体の能力が使えるのか。まずは、そこを潰しておいた方がいいな。！！

「時間をかけて殺してやるよ。」

時間はたっぷりとあるんだ。冷静に行くぞ。

「ツ——あめえ！」

飛んでくる弾丸を掻い潜りながら接近する。アレを最優先に——

！！

「うぐっ！！——反射か!？」

後ろから矢が帰ってきた——友奈がぶっ壊してた盾に反射させたのか。

「しやらくせえな!!」

盾を一気に薙ぎ払い、射撃口に向かう。

「う——おおおらあ——!!!」

斬り落とす。これで射撃の心配はない。次。

「ほら、お前も消えやがれっ!!」

盾が補充されてる所を盾ごとぶった斬る。——っ!!

「ぐっ！毒かっ!？」

これはあの時のくそっ、少し掠った。!

「痺れか。こんぐらい——あがつ!!」

横から凄い勢いで殴られた。天秤みてえなヤツか。

「——あ。アア。アあ!!!」

まだ、——まだあ!!

「お返し、——だっ!!」

迫りくる棘を斬り落とし、天秤を斬り裂く。三つ目え!

「ハァー。ハァー。」

視界が真っ赤になってきやがった。ああ、クソ。これじゃあよか見えねえ!

「次、だ。」

毒が厄介だ。さっさと潰しておくに限るな。

「!?火球も出せるのかっ!」

一番デカい太陽から火球が放たれる。

「邪魔を——する、なあ、あ、!!!」

火球は無視、被弾前提で駆ける。

「——そこだっ」

——これで、毒はもう警戒しなくていいな。

「ぐふっ——」

まあ、もう体内に入ってるんだがな。キツツイなあ

「ダリイ——」

もう考えるのはやめだ。手当たり次第全部。斬ってやる。

「があ、ああああ、!!!」

斬って、斬って、斬りまくる。これが俺だ。——御影士郎だっ!

「ハア——ハア——」

——大分相手も弱ってる筈だ。このまま攻めてやる

「はっ——なんで矢が」

俺の腹をナニかが貫いた。出血が多すぎる。このままじゃ出血死するな。

「俺の負け、だな——だが、お前も道連れにしてやるよ」

一か八か、全ては草薙剣に賭ける。

「——ッ!」

何も起こらない——ゆっくりと太陽が口を開けて近づいて来る。

「輝けよ!輝きを示してくれっ!!」

「ここで輝かないなら、何処で輝くんだよ!??」

「はあ」

「ここまでかあ…… 実に残念だな。もうちよつとぐらいアイツらと

「いや、そうだな」

太陽の口がゆつくりと俺を囲んでいく。

「へえー、中つてこんな感——」

——丸呑みにされた。

「——天の神の体は八割が消失。今は回復に努めている。数百年は襲撃は来ない。という神託が降りました。」

「士郎は!? 士郎はどうしたんだ!!?」

「士郎さんは・生存確認は出来てません。」

「つつ。」

「そつかでも、士郎くんは最後まで戦い抜いたんだよね」

「はい。これがこの結果です。本当に凄い人です。」

「うんっ。士郎は凄い。一人で、最後まで諦めないで戦ったんだ。タ

マは・タマはあ——!」

「はい。士郎さんは私達の誰よりも勇者でした。」

「士郎が作った時間は絶対に無駄にはしない。絶対に天の神は私

達——これからの人達で倒す。」

「皆さんにはコレを見てほしいんです。」

「それは・士郎の勇者御記」

「はい。私が昨日、士郎さんから託されました。」

「でも、士郎が読むなって。」

「いえ、私に渡された時はそんな事言われませんでした。なので

……み

んなで読んでみましょう。」

「ええ・本当にいいの？」

「いいんですよ・きつと、自分を残したかったんでしようから  
.....」

「タマつち先輩・涙拭いて。」

「う、うんっ。」

「捲りますよ——」

## 王道踏破 アンカーへ

「。」。  
一通り読み終わった。これが、——これが前の勇者。いや、西暦の次が神世紀に移ったのならこれは三百年前の出来事になる。まだ、人類史が終わってないのは勇者が命を削って戦ってくれたからなんだな。

「おつ、まだ何かあるな。」

勇者御記の下に。これは写真か——

「——俺じゃん。」

七人が映ってる写真。集合写真みたいなもんか。その中に一人の男性が映ってる。この人が御影士郎なんだろうけど。俺だな。どう見ても俺だ。身長は中学三年の時のもんだな。

「ん~~~~！」

頭痛くなってきた。あとあるのは卒業証書？なんだコレ。日記にはこんな物、書いてなかったな。でも額縁に入ってるし、大切な物なんだろうな。これで全部か。ノートにまとめるか。

「。」。  
新品のノートを開きシャーペンを握る。

「そうだな——」

箇条書きで書いていくか。

・敵の名は頂ポイント点

？天の神（十中八九ガイア）が造り出した怪物

・御影士郎は謎（勇者じゃない可能性アリ）

？もしかしたら記憶喪失中のサーヴァント

- ・ 勇者は基本、女性（御影士郎を勇者じゃないと仮定した場合）
- ・ 他の場所を守ってた勇者がいる。
- ・ 草薙剣は使うのに代償がある。
- ・ 御影士郎＝俺（可能性大）
- ・ 男性勇者（仮定）は肩身が狭い

「——こんぐらいか？」

記憶喪失中のサーヴァントなんて聞いた事ないが、例外は必ずある。

「草薙剣か。」

日本の三種の神器。日記に書いてる熱田神社に確かに埋蔵されている。だが、アレは壇ノ浦の戦いで亡くなって今はレプリカが置かれていた筈だ。代償を伴う程の力はないと思うんだが。

「う~~~~ん！全くわからん！」

現在の時刻は朝の四時。あと三時間後には家を出る用意をしなくちゃな。取り敢えずこの問題はじっくり考えて行こう。

「——」  
 そういえば、風呂入ってないな。臭いって言われたら立ち直れる自信ないな。先に風呂に入るとするか。

「よおーしっ！今日も明るく行ってみよおー！」

今日も昨日と変わらず銀の家に直行する。指差し確認したからガス栓の心配もない。——元気をお届けに参りまーす！

「——」

テンションがヤバイな。これが深夜テンション。いや、違うな。やっぱ耐性がない俺にとっつて寝ずに考え放しはキツイな。研究で貫徹をすることはあったが、それも休みアリでやった事だし。

「——おっと」

考えてたらいつの間にか着いてた。思考を切り替えねえと。呼び

鈴を押し叫ぶ――

「銀の友達のシャルルマーニュですっ！」

へはーいっ！

ちよつと待つか

「よっすー！」

「おう！きつ、学校行こうぜ。」

「だなー！」

この後、道に迷ってるおばちゃんを道案内して迷子になってる子と一緒に親を探したりしたあと学校に全力疾走で向かった。

「――おはよー!!」

「ちいーすっ！」

挨拶と共に教室に入る。何名からか返事がある。

「おつ、北野じゃねえか。よっ！」

「よ、よっ。シャル君はいつも元気だね。」

「おう。いづも暗いよか明るい方がいいだろ？」

「それはそうなんだけど。」

前はお前のせいで雰囲気下がってるってよく言われたっけなー。その言葉の方が雰囲気下げるぞって言ったたらキレ出して対処が面倒くさかったな。

「まっ、北野は北野らしくやればいいさ。」

「うん、そうする。」

「さっ、席に着こうぜ。」

「じゃあ、後でね。」

「おう。」

北野と別れ席に着く。ランドセルから教科書を机に入れていく。

「――皆さん、おはようございます。」

安芸先生が教室に入ってきて、教卓の前に立つ。

「それでは今日、日直の人」

「はい、起立。」

今日もいつもと変わらない一日が始まる。



暖かな

「土曜日。この前、買えなかった消耗品を買いにイネスへと向かっている。朝八時だけどスパーは開いてるし問題はないだろう。何だあのリムジンはこつちに来てるな。」

「——へーい！」  
「うおっ！って園子か。どうしたんだ？」

リムジンの窓から顔を出して声をかけていた。いつもに増してハイテンションだな。

「まあまあ！早く乗りな少年。」

「お、おう？」  
サングラスをつけて、ハードボイルド。っていうのか？やっぱ園子は予測できないな。これされたら正直、一瞬思考が停止するつもりなんだ。

「——ヤツタカターヤツタカタツタツタヤカッター——!?!」

「おっ、シャルじゃん！」

「——。」

「えー、コホン。おはよう、シャルルマーニュ君。」

「あー。おう。おはよう、鷲尾」

「今日のスペシャルゲストのシャルでくすっ！どんどんぱふぱふ！」

「いえーいつ！」

「ど、どんどんぱふぱふ？」

「どゆこと？」

「待って、脳が追いついてない。状況を整理しろ。結論、わからん。いや、ちょうどシャルを見かけたから一緒にどうかなって話しに

なってるね。」

「そうそう。」

「えっ！全く聞いてないのだけれど!？」

「須美は音楽に夢中だったからなく。」

「なるほどな。」

どうしてこうなったかはわかった。やっぱりわからん。

「ってか、この車はどこに向かってるんだ？」

「それはね〜——」

。。

「園子ってお嬢様だったのか」

「びっくりした？」

「ああ。過去一びっくりした。」

車が着いた場所は園子の家——めっちゃデカイお屋敷だった。

「来たはいいんだけどさ。ここでなににするんだ？」

「話す前に、まずはこれを見てほしいんだ〜」

壁の一部が鏡になっており、バレーをするような部屋に來た。そし

て、園子がデカイ扉の前に立つ。

「——じゃじゃ〜んっ！」

「おお〜!!」

「凄いわね。」

「すんげえ量だな。」

クローゼットだったのか、大量の服が出てきた。これ全部、園子

の服か？

「じゃあ、ミノさん！」

「なに？」

「いつてみよ〜!」

「はあ〜!?!——わわっ!ちよ園子!?!」

「。」

すぐさま部屋を出て、扉を閉める。よし、これで俺は無実だ。ま

だ、刑務所に行かないで済む。

「入っっていいよ〜！」

「」

「果たしてこれは本当に入っっていいのか。まっ、入るんですけどね。失礼しまーす。」

「~~~~~！」

「——清楚間溢れる黒と白を基調としたワンピースを着ている。

「これは——」

「どう、どう!? ミノさんすっごくかわいいでしょ!」

「おう! めっちゃ似合ってるぞっ!」

「ふはあー!!」

「鷲尾!」

上を向きながら、ずっと鼻血を噴水みたいに出してるヤツいるんだが。えっ、このまま死なないよね?」

「人? っってこんな風に鼻血出せるんだ〜」

「普通は違うと思うんだが。」

「いい! いいわよ銀!」

スマホからめっちゃパシヤパシヤ聞こえるんだが。何枚撮る気なんだ。

「まだ、たくさんあるよ〜!」

「まだやるのか!?!」

「これも・これも・似合うと思うんよ〜♪」

「なっ・そんな動きにくい服。」

「さあ、さあ!」

「銀、観念して全部着るのよ。」

「うっ〜!——はっ! シヤル!!」

「まあまあ、二人共落ち着けて、銀も嫌がってるしさ。」

「——シヤルはかわいいいいミノさんを見たくないの?」

「こっわ!! 真顔で急に近づいてくるな!」

「そうよ。いつもとは違う銀を見たくないの!？」

「そりやお前・見たいに決まってるだろ」

「ちよっ! シャルろう!!？」

・素材がいいからな。着飾ったバージョンも見たいよね。

「でも、流石にその量は勘弁してやってくれ」

「うくん・そうだね。ちよっと残念だけど」

「ほっ」

「じゃあ・まずはこの服からで！」

「――」

即座に部屋から退室する。頑張ってくれ

・

「」

「怒っちゃった」

あその後、様々な服を着せられ鷲尾にめっちゃ写真を撮られたせいかわすっーとして部屋の隅で丸まってしまった。

「よかったわよ、銀！」

満ち足りた表情で倒れ伏せながら、カメラを握りしめている。いつの間にかスマホから本格的なカメラに持ち替えたんだ？

「なにがだよー！」

「まあまあ、落ち着けて」

いやあく、目の保養になりました。ありがとうございます。

「次はわっしーだね。」

「――えっ! 私!？」

「どれにしようかな」

「なっ、私がそんな非国民が着るような洋服」

「須美さーくん？」

「ひ、ひい」

銀が水を得た魚のように、あのジリジリ寄るの若干ホラーだな。

.....  
まあ、俺はさつきと同じように退出するんですけどね。

へどうぞ〜！

「は〜い！」

扉を開け、中に入る。

「お姫様わっしーで〜すっ！」

「凄い破壊力だろ〜！」

「.....」

.....いろいろなとヤバいな。どうして、発育がいい鷲尾にこの服を着させようと思ったんだ.....

「ど、.....どう？」

「いや、似合ってるんだけどさ.....ちよつと露出が多すぎじゃねえか？」

「~~~~っ！」

あつ、湯気出しながら倒れた。

「大丈夫か!？」

「ああ! わっし〜！」

「消火! 早く消火しないと!」

目がくるくる回ってんだが!?! どういう原理なんだ!?

「.....」ぴっかーんと閃いた!

「なんか思いついたのか!？」

.....!

「須美を助ける方法があるんですかっ.....」

「ええ、あります。眠りのお姫様は王子様のキスで目を覚ますので

すっ.....」

「シャル王子!」

「任せてくれ.....」つて、やるかあ!!」

.....  
危ない危ない、雰囲気にも飲まれる所だった.....  
.....  
恐ろしいヤツらだ!.....  
.....  
なんとという演技力.....  
.....  
未

「くっ、惜しい〜.....」

「あと、ちよつとだったのに〜」

「危うく騙されるところだったぜ。」

一応、王子ではあるんだけどな。」

「——はっ！」

「あっ起きた。」

「おはよう。鷲尾」

「きゆう。」

「また倒れた。」

「戻るな！戻るな！」

なんでえく!??

「それじゃあまたね〜♪」

「おう。送ってくれてありがとな」

「お安い御用つてもんよ！」

あの後も鷲尾のファッションショーは続き、夕方頃に俺達は開放された。皆それぞれの家にリムジンで送られ、俺も元いた場所に帰ってきた。

「楽しかった？」

「もちろん！いい一日だったぞ。」

大人数・かはわからないが、初めて四人で遊んで楽しかった。それだけは胸を張って言える。

「そっか〜♪」

「何かいい事あったのか？」

「ひゃ〜♪じゃあ、また学校でね〜！」

「おう！」

園子が見えなくなるまで手を振り続ける。

「」

さて、買い物続きをしねえとな。もうこんな時間だし、食材も一緒に買お。

「よおっしやあー！釣るぞおー！」  
「そうだね。」

翌朝七時、俺と北野は大橋付近にいた。あつ、しつかり滑りにくい靴を履いてます。

「餌よーしっ！釣り竿よーしっ！」

「餌買ってきたんだ。」

「おう。あつ、北野も使うか？」

「えっ、いいの？」

「もちろん。俺一人じゃ使い切れないからな。」

昨日、適当にいい感じの買ったんだが、まさか、こんなに沢山入っていたとは。

「何が釣れるとか書いてある？」

「あるぞ。えーっと、アジ、サバ、コイ、フナ……だな。」

「ここだったらアジとサバは釣れると思うよ。」

アジとサバか、いいな。

「じゃ、早速」

寄り餌も撒いたことだし、帽子を被つてと。

「あれ、シヤル君は椅子持ってきてきてないの？」

「おう。俺はずつと立ってやるから大丈夫だ。」

北野、完全にお前、休日のお父さんスタイルじゃん。

「足が棒にならないようにね。」

「心配すんなって」

一応、サーヴァントだからな。

「。」  
「。」

「来ないな」

「うん」

「まだ、来ないな」

「うん」

「まだまだ、来ないな」

「うん」

「まだまだまだ、来ないな」

「うん」

「まだまだまだ——おっ！」

よしっ来た！

「落ち着いて、ゆっくりと」

「ほっ、ほっ、とっ！」

レールを巻きながら、魚をこっちに近づけていく。

「入ったよ」

「ナイス！」

いつもより一回り長い網を使い、魚を掬う。

「サバだね」

「おー、美味しそうだな。」

鯖か fateでこういう話しあったな。

「よーっし、次も釣るぞー！」

「僕も負けてられないな」

なんか、北野から歴戦の猛者感を感じるんだけど  
最近の小学生は

怖い

「今日はここまでにしてようか。」



「んー。そうだな。人も多くなってきたしな。」  
あれから三時間。日曜日ということもあり、どんどん人が増えていく。

「くうー！負けたあー！」

「まだまだ、シャル君には負けないよ。」

俺はあれからサバ二匹、アジ一匹、計三匹。北野はアジ五匹で、俺より二匹多く釣っている。

「帰ろうか。」

「おう。」

荷物と出たゴミをまとめ、クーラーボックスを肩に提げる。ここまで徒歩で来ているから当然帰りも徒歩だ。まあ、言っても距離はないけどな。だいたい二十分ぐらい

「じゃ、俺こっちだから」

「うん。また明日」

「なんか、忘れてるような気がする。」

「あつ、そうだ。北野ー！」

「どうしたの？」

「いやな。前、魚の捌き方を教えてほしいって言ってたろ？」

「！——教えてくれるの!?!」

「おう。さつ、俺んち行こうぜ。」

「うん！」

約束は約束だからな。まだまだ時間あるし、ちようどいいだろ。

「まずは基本の三枚下ろしから教えていくぞ。俺が手本を見せるから

よく見といてくれ。」

「お願いします。」

クーラーボックスから取り出したアジをドンツとまな板に乗せる。

「最初に鱗の落とし方だ。」

「鱗引きで鱗を落とすんだよね。」

「そのとおり。頭を左手で抑えてこうザツザツと」

アジを洗面台に置き、鱗を落としていく。

「鱗が残ってないか包丁で確認するんだが、腹ら辺は包丁の真ん中でこの色がついてる所は刃先でこうシュツシュツと撫でるようにな。」

アジをまな板の上に戻し、包丁で鱗が残っているかの確認をしていく。

「次は頭を落とすんだが、その前に腹を切っておく。だいたいここから、この腹びれぐらいまでだな。」

「なんで？」

「頭を落とす時のためだな。」

すつすつと包丁を入れていく。

「で、頭だな。この胸びれを左手で持って、こんな感じに腹びれまで切る。もちろん反対側も」

「うんうん」

「したら包丁の顎で体を抑えて左手で頭を奥に押す。内蔵が出ますよー」

「うわあー」

まあ、最初はそうなるよね。俺もうわあーってなったな。懐かしい。

「血合いを抜いていく時に使う道具あるんだが、俺は持ってないから素手でやっていく。」

「えっ、それって手が臭くならない？」

「そういう時はな、シンクを触ればいいんだ。」

「へえー」

水で流しながら血合いを抜いていく。ここで手を抜くとまな板が

血塗れになる。あれは地獄絵図だったな。

「タオルでしっかり拭き取ってつとよし、こっからが本番だからな。」

「ゴクリ。」

「尾びれのちよい上のちよつと溝になつてるところから包丁ですうー！つとラインを入れる。ここは早さが大事だからな。反対側も」

「おお〜」

「ラインを入れた所から包丁を背骨に当たるぐらい入れていく。」

きさて 気合入れてやりますか。

「返し包丁でぐさつとさして、向き替えて ざあく！つと」

「うあく〜」

目が輝いてらつしやる。

「これを後二回するだけだな。まあ、その二回目がかつそ難しいんだよな。」

「僕も出来るかな？」

「もちろんだ。何度も練習する羽目にはなるけどな。まっ、根気強くやっつていこうぜー」

「うん！」

「ふう〜 あとは皮を引くだけだな。」

やっば、魚を捌くのは気力を使うな。

「皮を ひく〜？」

「ああト ひくつてのは剥くつてことだな。」

「なるほど。」

これが気持ちいいんだよなあー。

「皮を切らずに身だけを切つて 包丁を入れて、皮を引っ張るイメージで ざつ！つとな。」

やっばいいな。コレだけで飯二杯はいける。

「ほいつと、これで全部だな。」

「コレは凄いな。」

「語彙力どうした。」

切断面も白いし、完璧だな。

「じゃ、北野もやってみるか。」

「う、うん。」

「そんな緊張すんなって、しっかり見といてやるから」

「わかった。」

もう一匹のアジをクーラーボックスから出してまな板に置く。

「えつと、最初は鱗を」

「うんうん」

「つ」

「。」

せつせつと鱗を落としていく。

「包丁で」

「そうそう」

包丁で鱗の確認をしつかりとな。

「血合いも抜いて」

「いいぞ」

「切り込みを入れて、頭を落とす。」

「順調だな。」

すすすすっていくな。俺いるか、これ？

「。」

「。」

集中してらっしゃる。さて、北野は綺麗に三枚下ろしができるの

か。

「っ——！」

ガッ

「んっ？ちよい待ち。」

「う、うん。」

包丁を預かり、何に当たったのか確認する。これは背骨だな。

「こういう時は、刃先をちよつと上に向けてやるんだ。ほいっ」  
「わかった。」

「おつ、出来たな。」

今度はちやんと通ったな。

「出来た。」

「まずは一枚だな。この調子で行ってみようぜ」  
「うん！」

「っ！どう？」

「ちよつと身がついてるな。」

皮を引くまではきたんだが、やっぱ完璧まではいかないな。

「はあー、疲れた。」

「最初にしては上手く出来たな。」

「シヤル君の教え方が上手いんだよ。」

「そりやあ良かった。じゃ、あとは盛り付けるだけだな。」

「えつ、生で食べるの？」

「おう。折角だし、お刺身で食べようぜ。」

「それって大丈夫なの？」

「大丈夫。大丈夫。俺は一回もあたって事ないからな。」

「ええ。」

「まあ、待つとけつて」

「うん。」

ちやちやつと盛り付けるか。お腹も空いてるだろうしな。

「へいお待ち！」

「凄く綺麗だね。」

「自信の出来だ。」

いい皿があつてよかつたぜ。

「さつ、早く食べようぜ。」

「そうだね。」

「いただきます。」

誓いを此処に【番外】

現在、俺は勇者部としての活動を終え、寮に帰ろうとしていた所を若葉に呼ばれたため体育館裏に向かっていた。

「。」

「相談か？いや、それだとわざわざ体育館裏に呼ぶ必要がない。」

「マジで分からね。なんか怒らせるような事したっけな。」

「んっ？全員いんのか。」

「ああ。ここに居るのは士郎に大切な話しがある者だけだ。」

「大切な話。」

怖いつて、ここで全員から『キモいのでこれから半径10mに入らないで下さい』とか言われたら一生立ち直れない。なんならこの世界から戻ったとしても魂に刻まれて忘れてなさそうだな。

「大切な話というのは、えっと、そうだな。」

「？」

いつも堂々として、リーダーシップがある若葉がこんなに赤くなるとは、ひなたに耳掃除されてる時ぐらいじゃないか？

「——やっぱり無理だ！友奈、頼んだ！」

「若葉ちゃん!？」

「私には、恥ずかしすぎて言えない。」

「????」

「もう訳がわからなくなってきた。」

「まだ、まだいけるよ！」

「ぐうぐう」

「もう、若葉ちゃんたら、しょうがないですね。ここは私が言います。」

「ひなた。」

めっちゃパシヤパシヤ聞こえるんだけど、いつも通りでなにより

です。

「さてと、若葉ちゃんの撮影はこれぐらいにして。士郎さん。本題に入りますよう。」

「お、おう。」

「すげえ。スツと何事もなかったように戻しやがった。」

「ここに士郎さんと呼んだのは私達の気持ちを伝えるためです。」

「気持ち？」

「はい。みなさんが士郎さんを好きって思ってる事です。あつ、勿論私もですよ。」

「――！」

「あんず!？」

「それって――。勿論likeの方ですよね？」

「杏が頭から煙だして倒れているのは今は無視しよう。」

「勿論loveです。」

「――！」

「ぐんちゃん!？」

「ちよつと、待ってくれ。」

「わからねえ。これは一体どういう事なんだ!？」

「罰ゲームとかじゃないよな？」

「違います。」

「ドッキリとかか？」

「巫山戯てるんですか？」

「いや!。そうじゃなくて。すいません。」

「圧が。」

「それで士郎さんは誰を選ぶんですか？」

「――はい?。」

「私達の気持ちは伝えました。次は士郎さんの番ですよ。」

「――」

「急にそう言われても。俺にはそういう知識がゼロなんだが!？」

「ちよつと時間をくれ。」

「解りました。明日も今日と同じようにここに来てくださいね。」



「わかった」

「それで？何で俺に相談しようと思っただんだ？」

「いやー俺の記憶ありバージョンだったら何か打開策を持つてるかなーって思ってる」

「俺は席を外した方がいいようだな。」

「お前は逃げたいだけだろ。」

あの後、俺は勇者部の部室に戻った。丁度そこにいた??に相談する事にした。シャルルも部室にいたが、何故かそそくさと退室していった。

「元、敵の俺に相談する時点で間違えてるだろ」

「今は味方だし関係なくねえか？」

「くそつ。無駄に主人公気質を持ってやがる。」

ガラガラ

「んっ。どうした、忘れ物か？」

「いや、少し。外に用事があるのを思い出したのでな。」

「それだったら普通に出来——」

「?——窓から飛び降りて行きやがった。」

「まあ。気持ちはわかる。」

「なんで？」

「いや、なんでもない。それで、造反神についてだったか？」

「違う！違う！話を反らさないで貰えるか!？」

「勘がいいヤツだ。」

何なんだ。コイツ。イマイチわからん。

「さて。恋愛相談だったな。」

「普通に覚えてるじゃねえか。」

「俺の脳はまだまだ現役だぞ。」

「ああ〜! そうじゃなくて。」

今はそういう話しをしてるんじゃないかって!

「分かってる分かってる。大人から一斉に告白されたんだろ?」

「おう。」

「六人。って事は郡とかひなたもか。意外だな。」

「それは俺も思った。」

「若葉なら分かる。俺が変装した時、一番最初に見抜いてたからな。」

「もう、変装しないでくれよ?」

「するわけないだろ。」

あれはやばかったな。危うくシャルルを殺されところだった。

「??はあるのか?」

「なにが?」

「いや。大勢から告白されたこととか。」

「あるわけないだろ。そもそも、一回も告白なんてされた事ないぞ。」

「言ってる泣きたくなってきた。」

「あー、うん。ドンマイ。」

「そもそも二人同時に告白される時点で奇跡なのに、六人って。お前、

ヤバいな。」

「俺はめっちゃ困ってるんだが?」

「普通にお前が好きなヤツと付き合えばいいだけじゃねえか。」

「それはそうなんだが。」

「だろ? それで、お前が好きなヤツは誰なんだ?」

ニヤニヤしやがって。

「いないな。アイツらをそういう目で見たことがない。」

「はあー。じゃあ一番信頼出来るヤツは?」

「皆、だな。」

皆、頼れる仲間であり、大切な親友だ。

「お前。シャルルマーニュより主人公してないか?」

「どういう意味だ?」

主人公・どういう意味だ？

「ああ、こっちの話した。気にしないでくれ」

「おう。」

「じゃあ、付き合わないっていう選択肢は？」

「それはないな。勇気を振り絞って言ってくれたんだ、それに応えないのは違うと思う。嫌いじゃないのに断るのはダメだ。」

「なんだその無駄なことわり」

「無駄じゃない」

「あーはいはい。それじゃあ、顔が好きなヤツは？」

「顔の好み」

「なんで、付き合うかで顔の好みが出てくるんだ？」

「マジか。俺が元とは思えないヤツだな。」

「逆に??は考えるのか？」

「考える訳ないだろ。つまんねえ事になるに決まってるからな。」

「やっぱそうだよな。」

「何も思いつかねえな。」

「。」

「行き詰まっちゃった。」

「もういつその事、全員と付きあっちゃったら？」

「それは常識的にどうなんだ？」

「そこは、ほら。大赦がなんとかすんだろ。」

「他人任せな。」

「それに此処にいるのもあとちよつとだしな。」

「それは、そうなんだが。」

あとは造反神をぶちのめすだけ。それで、俺達は元の時間軸に戻る。その際、ここでの記憶は消去される。

「よしっ、それじゃあ決まりだな。」

「はあ!?マジで言ってたのか!？」

「俺がマジじゃない時あったか？」

「あつたろ。」

「聞こえなトい。つてことで、入っていいぞおー!!」

「誰に そうきたか。」

急に叫んだと思つたら 全員待機してたのか。

「俺は退室するから後は頼んだ！」

「お、おう っってお前もか！」

アイツも窓から飛び降りて行きやがった 流行つてんのか

「え、えと どこから聞いてたんだ？」

「全部だ。」

「ずっと後ろを着けてましたから」

「それってストーリー——」

「尾行よ。」

「それは言い方を変えただけじゃあー いえ、なんでもないです。」

俺は何も聞いてない。俺は何も聞いてない。よしっ

「つい 士郎くんの本音が聞きたくて」

「出来心だったんです。」

「反省はしてないっ！後悔もしてないぞっ！」

「せめて反省はしてくれ。」

平常運転で安心だ じゃなくて

「それで 士郎。」

「わかつてる。俺の気持ちなんだが」

「無理に言わないで言いんですよ。」

「。」

「そうだよ！」

「そうだぞっ！」

「本当なら明日にする予定でしたし」

「大丈夫だ。」

ここで撤退はない。この勢いのまま行かないと明日も逃げるよう

な予感がする。

「すうく はあく。」

落ち着け いつも通りでいいんだ。

「俺は、皆が大切に そこに優劣なんかないんだ。一人を選ぶなんて

事は出来ない。」

「っ、それは。」

「——だから、皆が良ければその——全員でって思ったんだが駄目か？」

「——ダメじゃないぞ！」

「そうくるかなーって思ってたし、全然大丈夫ですよ。」

「私も、それでいいわ。」

「やっぱり、皆でが一番だよね！」

「タマもさんせえー！」

「確かにみなさんとなら悪くないですね。」

皆、優しすぎないか!?罵倒言われる覚悟で言ったんだけど  
まっ、  
いいか。結果良ければ全てよしっ!

「ありがとな。」

「むしろ、こっちが感謝したいぐらいだ。」

「無理を言ってしまったってすみません。」

「いや、そんな事は。ないぞ。うん。」

ふうー。めっちゃ疲れた。精神的にも脳的にも

「よおーっし！早速カラオケに行こー！」

「初デートってことね。」

「確かに。カップルが生きそうな場所だよね。」

「いつも行ってるような気がしますが。」

「そうだな。折角だし行くか。」

「すつと着地。」

「降りてきたか。」

「おう。あの場にいるのは控え目に言って地獄だからな。」

「そうか。しかし、恋愛騒動が起きるとはな。」

「マジかあ、って感じだな。」

「人数が増え、余裕が出てきた事も理由の一点と挙げられるが、士郎の性格だろうな。」

「主人公しててびっくりだよ。本当に元が俺達なのか疑うレベルだぜ。」

「そうだな。」

「あつ、先に釘を刺しとくが。お前が告白されても俺んここに相談しに来るなよ。」

「される訳なからう。」

「お前、シャルルマーニュってことを忘れるなよ。」

「今はこの姿だ。堅苦しいくて誰も好く奴などいないだろう。」

「そうとは限らないぜ？」

「戯言を。俺は寮に戻る。」

「そうかい。俺はちよつと様子を見守ってから戻るよ。」

「そうか。」

「まっ、落ちてない所を見ると成功したんだろうな。」

「風に話しのネタにされるのが目に見えるな。」

「確かにな」

## ある日の一コマ

ある日の昼休み。今日はとても暑いということもあり、外に遊びに行く人数が少なかったため俺も教室でひんやり涼しく過ごしていた。

「それはー・瑞鶴か？」

「ええ、そうよ。よくわかったわね。」

「そんな細部まで描かれてんだ。特徴さえ知っていれば誰でもわかる。」

「ずいかく、ってなに？」

「翔鶴型航空母艦の二番艦瑞鶴よ！ 旧世紀、昭和の時代に数々の戦いで活躍した我が国の空母よ！ 困になって最後の最後まで頑張ったの……!!」

「お、おおく。」

「詳しくすぎねえか。だいたい三百年前の出来事なんだけど」

「色々ガチ過ぎないか。てか、よくシヤルはわかったな」

「ちよつと前にな、そういう映画を見たんだ。」

「なるほど」

「それつでどんな映画!？」

「あぁー・タイトルまでは流石に覚えてないな。」

「そう。」

「ちよつと前」ではないがまだ覚えてる。記憶力はいいほうだからな。言わなかったのはこの世界にその映画がないという可能性があるからだ。

「わっしーはそういうの好きだもんね」

「前も熱弁してたもんな」

「そうなのか」

「ええ！夢は歴史学者さんだから」

「おお〜！」

「凄いな。小学生で将来の夢をここまで胸を張って言えるとは。俺はー。特になんも考えてなかったな。」

「三人は何か夢はあるの？」

「私はね〜、小説家とかいいな〜って思ってた。時々、サイトとかに投稿してるんだ〜」

「あー。なんか納得。」

「独特の感性だものね。」

「乃木にピツタリだな。」

乃木が描いた絵。一言で言えば、わからない。だな。

「銀の夢は？」

「幼稚園の頃は家族を守る美少女戦士になりたかったな」

「分かるわ!?!お国を守る正義の味方は少女の憧れよね!!」

「お、おう。」

正義の味方か。赤髪の少年が真っ先に頭に思い浮かぶな。大人になると名乗り難くなってるいくんだよな。

「今の夢はなんなんだ？」

「家族って、いいもんだからさ。普通に家庭を持つのも悪くないかなって。だから、今の夢は。お嫁さんかな。って。」

「っ——！」

「ミレさん！」

「銀。」

「おわっ！」

これがギャップ萌。ってやつか。危うく持ってかれる所だっただぜ。「なんだよ〜くっわくなよ〜。」

「カメラがないっ。」

学校ということもあり、カメラ類を一つも持ってないのが悔やまれるな。この光景を脳裏に刻みつけとくか

「ところで、シャルの夢は何なんだよ？」

「俺？う〜ん、そうだな〜。」

夢。夢かあ〜。特に考えたことないな。前の人生を全人類に誇れ



るぐらい全力で生きたしな。あつ、そうだ！

「大人になつたらさ。」

「うんうん。」

「大人になつたら。」

「仲いいやつらで集まつて、昔の事を笑い合つて話してみたいもんだ。」

「今ん所、これが俺の夢だな。」

「同窓会みたいなものかしら？」

「まあ、そんな感じだな！」

俺の一生で出来た友人の数は驚きの一人！という事だね。そういうのに憧れるんだよな〜！

「おお、いいなソレ！皆でうどん食べながら生活の愚痴を愚痴るとかよくテレビで見るし」

「ん？それは、なんか違う感じがすんだけど」

哀愁漂う背中がくつきり目に浮かんだわ。上司がうざいとか聞

こえてきそうだな。

「ミノさん、それは誤った知識だと思う」

「銀、私が推薦するからアニメ、一緒に見ましょ？」

「え、えっ？どうしんだよ三人共？」

「俺は平常運転だぞ」

「気のせいだよ」

「いつにする？私はいつでも空いてるわ。」

「ほんとに見るのか。時間があつたら連絡するわ。」

「いつでも待つてるわ。」

ガチで言つてたのか。鷺尾は嘘と本当かわからないんだよな。冗談を言わないような感じがするし

「ほいつ、出来たぞ。」

また別の日。この前、鷺尾に頼まれた品がようやく出来た。案外時間がかかったな。まあ、やりがいがある仕事だったぜ。

「もう出来たの？」

「おう。さくつと完成させたぜ」

「なんだなんだ?？」

「これは、楽譜」

国防体操・だったけな。歌詞を聞いた時は耳が壊れたのかと疑ったぞ。

「ええ。私がこの前、シャルルマーニュ君に頼んだの」

「へえ、つてシャル楽譜書けるの!？」

「簡単なヤツなら書けるぞ。これもラジオ体操を少し低くしただけだしな。」

「うん、読めない。」

「読めはするんだけど、作るまでは出来ないかな」

「三人なら基本を抑えれば、ちやちやつと作れるようになると思うぞ。」

特に園子はセンスがピカ一だからな。有名人になりそうだな。

「アタシはパース。音楽作りの予定はないかな」

「私もいいかな。わっしーは？」

「いいわね。音楽の力で我が国の素晴らしさを知らしめるの。」

「よしつ、任せろ。明日、まとめたプリントを持ってくるから」

その意気込みはよしつ。ちよつと、理解出来ないけど

「で?結局、この楽譜はなんのために用意したんだ?」

「それは聞いてないな。鷺尾、何に使うんだ?」

「今度のレクリエーションで使うの。」

ああ、来週ある低学年に向けたやつか。俺もなんか用意したほうがいいかな?まあ、困ったらマジックでもするか。

「もしかして、前のか?」

「そうよ。」

「どゆこと?」

「前ね、夢でわっしーがこういう服を着てたんだ」

園子のスケッチブックを前に出される。そこには軍服のような服を着た鷺尾が描かれている。

「おおー!カッコいいな!」

「そうでしょ!シャルルマーニュ君も一緒にどうぞ?」

「やるやる!」

「じゃあまずは振り付けからね」

「はい!ビシバシ鍛えてください!」

この後、全てを完璧にした。そして本番も無事成功。だったが、子供達を洗の、ン、っ!思想を染めてしまった。その結果、俺達は安芸先生にこっ酷く叱られてしまった。まあ、楽しかったし。いつか!

「明日のおやつ、何持ってく?」

「うーん。そうだな。駄菓子屋に行つてから決めるか」

またまた別の日。学校も終わり、今日も釣りに行こー!とはならなかった。明日の遠足(みたいなもの)に持っていくおやつを北野と共に駄菓子屋に向かっている。

「三百円以内だから、十個以上は買えるね。」

「そんな買つてもなー、食いきれるかって問題が出てくるんだよな」

「あぁ、確かに」

「だろ。ってことで、軽めのヤツをパツパツと買つて早めに帰ろうぜ。」

「そうだね。明日、遅刻したら台無しだもんね」

「降水確率は0%だったし、中止の心配はない。目一杯楽しむとしよう。」

▼情報が更新されました。

御影士郎

・筋力B ・耐久C ・俊敏C ・魔力E― ・幸運A ・宝具E

X

保有スキル

情報なし。

プロフィール

・のわゆ編での主人公ポジション。だと思おう。

・所有武器は草薙剣。壇ノ浦の戦いで消失した後、用意されたレプリカではなく、ガチモンの草薙剣。疑似サーヴァントとして抑止力によつて召喚されている。ゆゆゆに沿つて言えば、御影士郎の精霊ということになる。

・切り札は使えないが、ずっと精霊を体内に入れているため精神への影響が誰よりもデカい。にも関わらず、若葉達に対しての接し方は最初の頃と全く変わらない。よな？沸点がるなどの影響が見られた。

・仲間絶対守るマンであり、若葉達西暦勇者を自身の誇りとして敬っている。それを貶すなら誰であろうと殺しにかかる。

・皆と並んで戦いたかったが、何故か常に前に出て独りで戦った男。

・イメージ花は『シオン』

花言葉は『追憶』『君を忘れない』

最後に本人から一言

☒☒四連敗からが本番だからな？☒☒

????

・筋力E― ・耐久E― ・俊敏E― (A) ・魔力E― ・幸運E

・宝具A+

※( )内のランクは判断、反射神経についてのランクになっていません。

保有スキル

・停滞打破C

戦闘、思考などのあらゆる停滞を破る。彼が生前、何百年も進歩がなかった分野において奇跡の大進歩をさせたことにより、世界に星の开拓者として登録されたことでついたスキル。

・称号剥奪E

研究の際、彼ともう一人いたのだが、そちらの方が優秀だったため、彼の発表は自身の発表ではなく、もう一人が書いた論文だと世間で噂された。彼は一切気に留めなかったが、もう一人友人がそれを許さず、彼の死後、それを完全に否定した。そのためランクがEになっている。効果はシンプル。殺した者の称号を剥奪する。人を殺せば『人』という称号を得る。そのため、御影士郎が序盤に食欲がないと言っていたのは『人』という称号が???の消滅により効力がなくなっただけである。

・人理の防人A

そりゃあ人類の危機だし、抑止力が慌てちゃうよね。余裕がないミスしちゃうし、衛宮士郎を依代とした千子村正を召喚して、天の禰をさくつと都牟刈村正すれば済む話だったと思うんだけどなく、は情が勝っちゃったよね。本来なら諏訪を無視して、四国に行く予定(抑止力の命令)だったのにコレを無視。やべえわコイツ。

プロフィール

・所有武器は御影士郎と同じ草薙剣。ただし、真価を發揮出来ない。?????は?????という英雄で存在が確立しており、付け足しの宝具は使えない。だが、?????は建速須佐之男命とある契約をし、その結果、閑話で書いたように死亡(?)した。

・農業王のファン。仕方ないよね。ちょっと様子見するだけだったのに。あんな堂々と住民の前で演説出来る子が中学生？カツコよすぎだろ！コレで見捨てて四国行ってみろ！カツコ悪いたらありやないぜ!!ちなみに農業は人生初でした。(ーH☆)キラツ！

・年上として、前に立って戦いたかったが戦力的な問題で並んで戦うしかなかった男。

・イメージ花は『エキザカム』

花言葉は『貴方の夢は美しい』他に『愛の囁き』『貴方を愛します』があるが今回は無視でお願いします。

最後に本人から一言

☒☒文句は一切受け付けませーん☒☒

## アスレチックスガチ勢

遠足当日、バスで移動して少し遠くの有名な観光地に来ていた。アスレチックスコースや庭園が人気らしいが、全く知らなかった。それはさておき、今は全力で遊ぶか！

「——いやっふう!!」

「凄いテンションだね。」

「ここまで来たのに遊ばないっていう選択肢はないぜ。さあ、北野もアスレチックスに挑戦だっ！」

「そうだね。僕もたまにはやってみようかな」

「じゃ、俺は先行つとくぞ」

「あつ、う——ってもういない。」

確か、ここから反時計回りにやっていって最後に鐘を鳴らせば終了だったけな。つまりコレは、巡礼の旅ってことか。あつすみません、巫山戯すぎました。

「まずはこっからだな！」

タイヤがぶら下がっている。名称は不明、皆を見る限りタイヤの穴を通っていくゲームなんだろうな。ここは序盤だし、さくつと行っちゃうか。

「よっ、——と！」

「おお〜！」

「すごっ！」

タイヤに体を通したら後は簡単。勢いよく、穴をスツといくだけ。はい、次。

「猿渡か」

楽勝楽勝。

「ほいほいほいほい、よし。」

「猿がいる。」

はい、次！



「ほうほう、なるほどなるほど……？」

ジャンプしていくやつか。球体つてのが厄介だな。さてどうしたもんか。あの吊り下げている棒を掴んで離してを繰り返すのが一番いいな。

「ほっ、ほっ、ほっ、ほっ！」

棒いらなかったなよ。英霊の肉体つてすげえんだな。改めてそう思うよ。ってかここに来てるのは俺だけか。一位取っちゃうか。

「これでラストか？」

垂直な壁に綱が吊るされているだけだな。普通に登るのもありだが。ジャンプでいいか。

「はっ！うおっと、あつぶねえ〜」

一瞬、体のバランスを崩して落ちそうになったが無事着地。これでアスレチックスは全部制覇したな。鐘鳴らしに行こー

「いっちばんのりー!!」

鐘の音が響く。初めて聞く音だし、俺が一番だろう。まあ、一応シャルルマーニュなんですね、こんぐらいはしないとな。

「もうクリアしたの!?!」

「おうとも！」

「すごーい！」

「だろ！」

シャルルマーニュは凄いだろ〜♪

「よっと」

ジャングルジムのような所から降りる。さてと……残りの時間は何しようかなー

「う〜ん」

とりあえずスタートに戻るか。北野がいるかもしれねえしな。

「おっ、いたいた。」

「シャル君。さっきの鐘って、もしかして」

「俺が鳴らしたぞ。良い音だったろ？」

「そうだけど、もう制覇したの？」

「もちろんっ！」

親指を立てグツジョブドヤツ。

「北野も制覇目指して頑張ろうぜ。」

「そうだね。まずはここなんだけど、前が詰まって」

「前、ああ、なるほど」

一番前を見た感じ、園子だな。めっちゃぶるぶるしてる。ここ最

序盤なんだけどなー

「どうだ？進めそうか園子？」

「あつ、シャルだ。いえーい！」

「イエーイ！」

何で今、ハイタッチした？

「どやなくてだな園子。ちよつとスピードアップ出来るか？」

「無理かも」

「よし！こうしよう。俺が手を引っ張るから園子は足を通して行っ

てくれ。」

「——うん！わかった！」

これなら行けるだろ。園子は運動神経いいと思っただけだな。

「しっかり掴んどいてくれよ」

「任せて〜♪」

やっぱ、足の回りはいいんだけどな。なんで進めなかったのか

これが解らない。

「ゴ〜ル♪」

「やったな！」

「やったわね、そのうち」

「よおーし！次へゴー！」

「わわ、ミノさんちよつと待って〜」

「ちよつと銀!？」

行つちまつたか。まあ、北野がゴールしたら俺も行くし、また会えるか。

「ねえねえシヤル君。」

「ん、どうした？」

「私も手、引つ張つてくれない？」

「おう。いいぞ」

「この子も進めないのか？得意不得意があるからな、しょうがねえ。

「わ、私もいいかな？」

「いいぞー、この次な」

「あつ、えつと私も」

「順番にやつていくからな、ちよつと待っててくれ」

増えた。言うて三人だし大丈——

「私もー!」

「シヤル君!」

——夫。じゃなそうだな。

「さて、次がラストだな。」

「ほとんど飛ばしちやつたからね」

猿渡は途中でギブアップ。ジャンプしていくやつは滑って脱落。

う〜ん。まあ、しゃあないな。

「今は銀がしてるのか」

「三ノ輪さんは体育の授業でも凄いからね。あれ？片手だけじゃない

？」

「おつ、本当だな。ちよつと危なそうだな。」

よく目を凝らしたらアイツ、片腕で登ってるな。勇者であろうとミスは絶対に起こるってことを知らねえのか？

「でもあと少しで——あつ」

「ツ——！」

「言わんこつちやない」

「よつ、——と！」

「うわっ!？」

銀をキヤツチし、壁を蹴り後方に跳ぶ。バックステップの形になる。

「ふうー焦ったあ」

「シャ、シャル」

「銀!？」

「ミノさん！大丈夫、怪我はない？」

「案外出来るもんなんだな。今はそうじゃないな。」

「銀」

「な、なに」

「なんで片手だけで登ってたんだ？」

「いや、ソレはえつと」

「楽しむのはいいんだが、それで怪我したら元も子もないからな。」

「はい、すみません。」

「そうよ銀。ちよつと浮ついてるわよ？」

「反省します。ところでシャル？」

「ん、どうした？」

「そろそろ降ろしてくれない」

「おつと、そうだったな。」

「すっかり忘れてたわ。そつと地面に銀の足を着ける。」

「よつと、改めてありがとな、シャル」

「次がないようにな」

「気をつけるよ」

「ファイアー!!」

ぼうぼうと俺の首ぐらゐまで炎が立つ。俺の焼きそばを見せてやる!

「燃えてる!燃えてるよ!シャル君!!」

「大丈夫だ!」

「麺が炭になっちゃうよ!」

「いけるいける!」

「いやダメでしょ!?!」

「うおおお!!!」

「うおおお!じゃないよ!?!」

もつとだもつと

「うん、美味いな!」

「どうして」

「なっ?大丈夫だったろ」

「あそこからどうやってコレが出来たのか不思議だよ。」

「そうか?」

結構、こうやってする人いるんだけどな。俺とアイツと二人しかいなかったわ。

「ま、美味いんだし問題ナシだな」

「そう、なのかな」

「そうそう!」

いやあー、美味しいなあ。外で食うご飯ってものはどうしてこう、美味しいのか。それが解らない。

「よし、続き行くか」

「えっ、もう?」

「おう。あと二時間しかないからな」

「それもそうだね。」

「本当に楽しい時間ってのは早く過ぎるな。本当に——」

「それじゃあまたな——!」

「うん。また来週!」

「午後四時、遠足は終わった。いやあ——!本当に良い一日だったなあ」

「また、行きたいな。」

「」

「家に帰ったら何をしようか。まずは今日の晩御飯の食材を買いに行つて」

「いや、昨日の余りがあるしいいか。今日はゆっくりしようかな」

「ん?」

「」

「この感じ。樹海化か。さて、今回も——待て。今、俺は銀達と離れてる。」

「この場合、俺はどこに出る?銀達の近く?——現実で」

「の座標と同じ樹海の座標に出るんだろうな。早く合流するしかないな」

な

——花弁が舞う。

「さて、やるか。」

擬態の靈基はもうない。あるのは『シャルルマーニュ』としての靈基。俺としての靈基しかない。あとは俺が王勇を示すだけだ。なに、やる事はいつも通り、変に意識しなくていい。

「集え、十二勇士よ！」

——十二の輝劍が顕現する。静かにフワフワと浮いている。何かを待っている。なら、俺はそれに応えるまで

「百戦錬磨の英雄達よ！俺の王勇に命尽きるまで力を貸してくれ!!」

これで貫かれてもしょうがない。十二勇士から見れば俺は、忠誠を誓った王の姿を被った不届き者、なんだからな。

「俺に付き合ってくれるのならば——」

「——最期まで走り抜くぞ!!!」

これが俺だ。世界最高の愚者、裏切り者。なんとも呼んで貰って構わない。だが、王勇は貫いて貰わせるぞ。

## 愚者の剣

——翔ける。音のする方へ、一秒でも速く。

「——！」  
黄色の塊が降り出した。だが、あれぐらいならアイツらだけでも防げる。

「三体か!？」

雨が止むと三体目が姿を表した。どうやら、交戦していた二体のどちらからかの攻撃だと思っていたが、この矢の雨は今現れた奴の攻撃。即ち、交戦していた二体は今フリーな状態だ。

——不味い。攻撃が止めばあの子達は絶対に気が緩む。そこを相手が見逃す筈がない。

「くっ——!!」

海老のようなバーテックスの尾によって鷺尾と園子が打ち上げられる——足の回転スピードを上げる。鷺尾と園子に第二撃が迫る。

「——。」

鞘から剣を抜く——

敵からの遠距離攻撃が終わった。安心して一息つこうと——前方からの強襲。私とそのつちは為す術もなく上空へと弾き飛ばされる。

「っ——！」

「須美! 園子!」

追撃——これを受ければ、臍物まで響くだろう。



尾が目の前に迫る。痛みを耐えるため歯を食いしばる。だが、一向に痛みはこない。

「!?!」

誰かに体を引っ張られる。どうなっているのか目を開ける。――  
――眩い光が溢れていた。

「どうして――」

「シートンさんの正体って――」

そのっちと銀の音が聞こえる。今、どうなっているのかを早く知らないとい

「!?!」

「三人共、無事そうで何よりだ!」

「「シャル（ルマーニュ君）!?!」」

「おうともよ!」

目を開けた先には大人のような姿になったシャルルマーニュ君が立っていた。

警戒せず、ジュワユーズを構える。

以前、敵は健在。やろうと思えば矢によって狙い撃ちされる。

「なんで大人になってんだ!?!」

「まあまあ、今はそこらへんは置いてさ!」

霊基の影響です。?とか言っても訳分からんってことになるだろうな。

「本当にシャルなの――」

「真正正銘シャルルマーニュだよ。ってか鷲尾と園子、怪我してるじゃねえか!大丈夫なのか!?!」

「最初、打ち上げられた時のかっくそっ、俺がもうちよい早く来ればっ!」

「え、ええ。大丈夫よ。それより、まずは――」

「ああ。分かっている。銀と俺で倒すから二人は休んどいてくれ」  
「でも——！」

「大丈夫だよ、須美。なんとってアタシとシャルだぞ？負けるなんてありえないっての！」

「だな！」

ああ！猪突猛進ペアとしてぶっ倒してやるぜ！！

「わっしー、ここは二人を信じよう。私達が行っても足手まといになっちゃうかもだし」

「っ・わかつたわ。でも、絶対に戻ってきてね」

「わかってるって！」

「二人は離れててくれ。」

「ミノさん、シャル。また後でね」

「回復したらすぐ戻るわ。」

「その前に倒しとくよ」

「よしっ、行くぞ！」

銀と視線を合わせる。倒すは人間の常識では考えられないような化け物。だか、俺と銀ならば倒せる。倒さなければいけない。

勇者と足を揃える。愚者である俺に並べる銀には申し訳ないが、この一時だけを志を一緒にして欲しい。

友を傷つけた奴を穿つ——ッ！

「俺に続いてくれ！」

「おっけー！」

黄色の塊——矢が俺達二人に迫る。それをダツシユで避けていく。

「凍つときな！」

水の元素を乗せ、矢を放っている口を凍らせる。

「おお！凄いな！」

「今のうちに畳み掛けるぞ!!」

「——うん！」

次は海老みたいなのに迫る。

「掩护頼む！」

「わかっ——てええ!!?」

十二勇士を召喚する。これで手数が倍増する。

「ふっ！はっ！せいっ！」

「何がなんだかわからんけど、——うおおおお！」

よし、あと少しで——かてえな!!

「楯か!？」

「かつつったツ!!」

「一旦下がるぞ！」

「~~~~!わかった！」

あの楯をどうにかしねえとな。やるか。

「銀、俺がどデカい一撃を準備する。その間、俺を守ってくれねえか？」

「りよーかい！」

「準備が整ったらすぐ離れてくれ！」

至高の十三連撃をお見舞いしてやるよ。!

「化け物共、受けるがいい。我が宝具、我が聖剣の輝きを——!!」

聖剣つても担い手のせいで今は愚者の剣だろうけどな。

「永続不変の輝き、千変無限の彩り！」

十二の剣のオーラが翼のように広がる。

「万夫不当の騎士達よ、我が王勇を指し示せ!!」

レンジー人——それは、コレが自分自身への宝具だから。俺がどれだけ王勇カッを示せているかで輝コきが変わる。

「王勇ジュを示せ、遍スく世スを巡オる十二ドの輝ル剣!!」

赤青緑黄黒——様々な色が虹のように駆けていく。

「——綺麗。」

この光景が誰かの支えとなれば万々歳だ。記憶にずうーと残るな

らなおよし。残らなくても見ていてくれたのならそれだけでいいんだ。だって、コレは俺の独り善がりなもんだからな！

」。

——花卉が舞う。

「よおしっ！勝ったあ!!」

「今のなんだよ、シャル!?」

「凄いだろー!」

見たか！コレがシャルルマーニユの真骨頂だ！

「うんうん！凄く綺麗で」

「——カッコ良かったか？」

「もちろん!」

「そっかそっか！そりゃあ良かった!」

「格好良くあれたんだな。十二勇士の皆がこんな俺に付き合ってくれたんだ——絶対に守り通すさ。」

「さっ、戻ろうぜ!」

「そうだな。きつと須美と園子が待ちくたびれてるぞー♪」

「だな。」

やっぱり俺は、こうやって笑い合いながら一緒に歩いて行きたいな

——そう、銀の横を歩きながら思った。

## 事情説明

「須美と園子、大丈夫かな？」

「意識はハッキリしてんだから大丈夫だろ。つてか銀も手首痛めてんだからゆつくり休んどけ」

「わかつてるつて」

樹海化が解けた後、鷺尾と園子は病院へと搬送された。俺と銀は診察室の前のイスに座っている。

「——シャルルマーニュ君？」

「あつ、先生！」

「どうしました？」

安芸先生か・逃げるつてのも一つの手だが、まあいいか。

「話があるわ。着いて来てくれない？」

「わかった。」

取り敢えず着いていくしかないな。

「シャルルマーニュ君、貴方は何者なの？」

「何言つてんだ？俺は俺だ。シャルルマーニュだよ」

「そう、よね。ごめんなさい。ちよつと気が動転してたわ」

ちよつと心身不安定なんじゃないか・生徒想いの良い先生だからこそつてことか。

「シートンは貴方なの？」

「まあ、そうなるな。」

「どうして姿を隠してたの？」

「それは深い訳がありまして。」

「深い訳？」

「ちよつと情報収集をと。」

突然、変な場所に出れば誰でもそうするよね。情報が全てなんだからな。

「どんな情報が欲しかったの？」

「勇者がなんなのかーとか戦う理由とかかな。」

「それが解ったから出てきたってこと？」

「まあ、ある程度は知れたからな。」

「そうじゃあ、貴方は味方ということでもいいのね？」

「勿論！」

「わかったわ。なら、コレを渡しておくわ。」

「スマホ。」

「今までどう戦っていたか解らないけど、勇者システムがあればより楽に戦えるようになるわ。」

「なるほど。コレが。」

コレで俺も変身出来るってわけか。する予定ないけど、ってか、いつ用意したんだろ？

「そろそろ戻りましょう。」

「そうだな。」

結構、短かったな。もっと質問攻めを喰らうと思っただけだな。

「——つてことで御役目に参加することになったシャルルマーニュでーすっ！」

「???」

「これから一緒に頑張ろうね♪」

「おう！」

「待って、ちよつと脳が追いつかない。」

「まあ、そうなるかな。つて思ってたけどさ。」

「安芸先生は怪我の状態を聞いたあと帰って行つた。もう夜だしな。」

「あれ、俺達は帰りはどうすればいいんだ？」

「はあ、色々言いたいことはあるけど、これから宜しくねシャルル。」

「マーニユ君。」

「ちよつと長いな。」

「だな。」

「え、えっ? どういうこと?」

「シャルルマーニユは流石に長いと思うんよ、わっし。」

「カール大帝君か。笑つた。」

「でも、シャルルマーニユ君も私を驚尾つて。」

「あー、確かに。」

「えっ!? 俺のせい!?!」

「わかつたわかつた。須美、今後とも宜しく！」

「シャルル君、宜しく。」

「マーニユがなくなつた！」

「びゅおおくくくく!!!」

「なんか反応がおかしい人がいたんだけど?」

「ところで、シャルル君は携帯電話を貰つたのよね?」

「ああ、貰つたぞ。ほれ」

「何の変哲もないスマホだと思つたが、帰つたら分解してみよー」

「じゃあ、連絡先交換しようよ！」

「そうね。そつちのほうが色々と便利ものね」

「はい、どうぞ」

「じゃあ、ありがたくつと」

「二台持ち!?!」

「これは前から使つてるやつだからな」

いつも使う方のスマホを出し、登録していく。日の丸、幼い男の子、ぬいぐるみ・個性的なアイコンだな。

「凄いアイコンだな。」

「家の弟、可愛いだろ。」

「サンチヨだよ。」

「日本国民として当然よ」

ちよつと一人だけ理解出来ないけど……人それぞれだしな。いいと思っよ、うん。

「よし、帰るか。」

「ええ、もう少し話していようよ。」

「そのうち、我儘はダメよ。もうこんな時間なんだから」

「お土産を持っていかないとだしな！」

「銀達は迎えが来るのか？」

「うん。待機してくれてるよ。」

「私も車ね」

「アタシは徒歩かなー」

「この時間帯での独り歩きは不味い！」

「それじゃあ銀、一緒に帰るか」

「——はい？」

「私も！」

「そのっちは待つて貰ってるんでしょ？」

「そうだった。しよぼくん。」

「まあまあ、次があるだろしさ」

「ちよつと待て!？」

「どうした?そんな大声出して」

「どうしたの銀？」

「なんか、シャルと一緒に帰ることになってないか？」

「違うのか？」

何か変な事言ったけ？」

「違、くはないけどさ。その」

「夜道は危険なのよ?それに銀は可愛いし……とても危険なの」



「そうだよ」

「ボディーガードのシャルルマーニュです。」

横文字やバいな。

「うう、わかったよ。」

「それじゃあ、解散しましょうか」

「おう。また来週な」

「またね」

「またね。」

「ちやんとエスコートしてくれよ？」

「任せろ。なんなら変身してやるか？」

「いや！そこまでしなくていいつて！」

いい案だと思ったんだけどな。試運転にもなるし

あれ

ん、どうした？」

「シャルワてこれまで変身どうやってしてたんだ？」

「そこはパパっとな」

「これも秘密なの？」

」

話すか いや、話さない方がいいのか わからねえ つ！

嫌ならいいや」

「ありがとな」

「お安い御用だよ」

「そっか」

くそう、カツコいいじゃねえか

「またね、シャル。」

「おう。またな」

銀と別れ独り、歩いた道に戻る。

「」。

絶対に今まで秘密にしてたことを話す。全てが終わった後で  
応、なんかを書いとくか。俺が死んだ時ように

.....

.....

一

## 誰かの誕生日【閑話】

」。

三月十一日。土曜日ということもあり、俺は家で勉強していた。

／＼ピンポーン／

「——ん、はい！」

アイツらか

／＼ピンポーン／＼ピンポーン／

「うるっせえ!!」

「そう、カリカリしなさんなって」

「家の兄がすいません」

「このバカのせいだから、気にすんな」

やっぱり・はあー、なんで普通に來れないのか。とりあえず家に上げリビングに移動する。

「それで？今日は何しに來たんだ」

「ふっふっ」

「キモいな」

「ど辛辣だな！」

「笑い方がキモいよ、兄さん。」

「ぐうっ」

クリーンヒットだな。これからはこの録音した音声で煽るか

「結局、何に來たんだよ」

「ふっふっ」

「それはもういい。さっさと見え」

「今日、??さんの誕生日でしたよね？」

「あー、そういえばそうだったな。」

完全に忘れてた。誕生日と関係することってなんだ

「っつてことで、ドーン！」

「この箱は？」

「この白い正方形の箱は、中からなんか飛んでくるとかかないよな？」

「ケーキですよ。私とお母さんで作りました。」

「美味しかったぞ」

「兄さんは味見するという体でつまみ食いしてきたので木に吊るしました。」

「寒かったんだからなー！」

「お前の自業自得じゃねえか」

「味見だから！」

「なるほど、で、何でここに持ってきたんだ？」

「甘党だしな、大抵のスイーツは美味しかったです。って言ってるイメージがある。」

「バースデーケーキですよ。常識備わってますか？」

「常識ってのは、偏見だから。」

「一理ある」

「ないです。」

「何事も決めつけるのはよくない。うんうん」

「そこ、納得しないでください」

「よーし、早く食べよー！」

「お前は食いたいだけだろ。ちよつと待つとけ」

折角だし、紅茶でも入れるか。確か、前買ったのが奥のほうにあった筈だ。

「兄さんは食べなくてもいいんですよ？」

「除け者にするなんて、兄さんはそんな子に育てた覚えはありません！」

「育てられた覚えもありません。」

「はい、そこ静かに」

「あ、俺のに砂糖入れといてー」

「私もお願いします。」

「おーけ、わかった。」

知ってたって感じだな。あの二人はブラックコーヒーにドバドバ

角砂糖を入れてるイメージがある。

「はい、紅茶」

「あざっす」

「ありがとうございます。」

「じゃ、ケーキ食うか」

「三等分してあるし、ちやちやつと皿に別けてくれ」

「兄さんがすればいいじゃないですか？」

「ふっ、俺がすれば絶対にケーキが倒れるぞ」

「あー、はいはい俺がやるよ」

そんな自信満々に言わることか？

「さて、まずは一口、あむっ」

「どうだ、美味いだろ？」

これは――

「程良い甘みだな。」

「つまり？」

「美味しいな」

「それは良かったです。」

シンプルに美味しい。これなら金取れるな  
..... は！まさか、俺から金を  
筆り取る気か!?

「はい、次はこれだな！」

「また箱か、またケーキか？」

「違いますよ、プレゼントです。」

「へえープレゼントかあ、誰に？」

「お前にだよ！ほれ、受け取れ」

「お、おう、ありがとな」

雑に投げられたのをなんとかキャッチ。危ねえなまったく

「はい、私のです。泣いて喜んでください」

「う、うう、嬉しいです。」

「へったくそな嘘泣きヤメロ」

「名演技だったな」

「んなわけあるか」

過去一で最高のできだった。どうやら不評だったらしい。

「中身は？」

「自分で確認してくれ」

「お楽しみです」

「ほー・じゃあ遠慮なく」

「まずは俺のご友人から。どれどれ。これはー」

「ゲーム機？」

「プレステ4だ。まだ入ってるからよく探しな」

「プレステ・なんだっけ」

「なんかのCDか？」

「俺のオススメのゲーム、その名も—— fate extell

a linkだあー!!」

「うるさいです」

「あつはい、すみません。」

fate・CMで聞いた事あるな。

「さつ、私のを開けてみてください」

「俺は配線をしとくからー」

「おう、助かる。」

さて、妹ちゃんのプレゼントは—— コレは

「——私のグラビア画像です。」

「ツツコミどころが多すぎんだろ」

驚いて投げた俺は悪くない筈だ。

「ちゃんと使用用、保管用、観賞用の三つが入ってます。」

「使用用ってなんだよ」

「それはもちろん——」

「いい、その先は言わなくていい。」

「そうですか」

頭痛くなってきた

「つてかコレ。自分で撮ったのか？」

「私は??さんとは違いたくさん友達がいるので」

「ぐう！」

大ダメージだな

「まあとりあえずコレは返しとく」

「いりませんけど」

「ええー俺もいらないんだけど」

「酷いです折角準備したのに」

「ちょ——」

「——なに家の妹、泣かせてんだ」

「ああー！わかったわかった！貰うから!!」

「よかったです。」

「やったな！」

「くうーこの兄妹」

「コンピネーションが上手すぎる。」

「配線は出来たからあとは起動するだけだぜ」

「仕事が早いな。」

「何年やってると思ってるんだ」

「兄さんは小学一年の頃からずっとゲームしてます。」

「お前、マジでその才能を俺に寄越せ」

「いやあー、人生楽だわあー」

「殺すか」

「そうですね、木の下に埋めましょう」

ちよつとこの才能人には死んでもらおう。なんなら復活出来ないようにしてやる。

「ジョーダン、ジョーダン!!人生、マジハードだから！」

「ちつ・今日は見逃してやる」

「次はないですよ?」

「はっ、はいいい」

「ほら、起動すんだろ」

「そうだったな」

「早くしてください」

「そう急かささない。よく見とけよー」

「はいいい」

結果だけ言えば俺はこの後、f a t e にハマった。毎日無理矢理時間を作り、少しの時間だけでも f a t e をしていた。その中でもシャルマーニユというキャラに憧れを抱き、俺もこんな風にカツコよくなりたいと思った。

まあ、現実是非常で俺一人がおかしい事をおかしいと言っても誰も理解せず、同じ過ちを繰り返す。それならどうするか。簡単だ。間違った認識を徹底的に潰せばいい。基本から否定し、今も進んでいる認識を正す。

キツかったなー。本当に――

????の死後。遺品整理をしている時に未使用のグラビア画像が出てきて妹ちゃんが泣きし、親友がブチ切れたのは別のお話。



## 家凸は連絡してから

「？」  
銀を見送り家に帰って来た後、俺はスマホを分解することにした。  
もちろん安芸先生から貰ったヤツ

「」  
がカッと開け、中身をじっくり見ていく。バッテリーなどのいつも  
通りのメンツが揃ってるな。ん。なんだコレ

「木」  
木だな。はあ???

?

「見なかつたことにしよう。うん、それがいい。」

元の位置に戻してそつと閉じる。これが巷で聞くそつ閉じですか。  
よし、今日は寝よう。きつと俺も疲れてんだわ、うんうん、そうだよ。  
アスレチックスして、宝具の真名開放までしたもんな！疲れないわけ  
がない！

「おやすみー！」

「はい、おはようー！」

.....

「」

「」  
独りでなにやってんだろ、俺はあー

今日は土曜日。時刻は午前八時。小学生が外に出るには早い時間

だが、暇だしいいや。それに俺しか買い物出来る人はここにはいないからな。

「キャベツ、玉ねぎ、ジャガイモ、人参、牛蒡、白菜、レタスはーい  
いか。後は安い肉でいいかな」

「買うものが多いな。買い出しサボってたのが回ってきたか。まあ、  
行くしかないな。」

「ふいー、よいしょつと」

買ってきた食材を冷蔵庫に入れ、ソファーに座り一息つく。

「もうお昼かあー」

昼飯はどうしようかな。別に食わなくてもいいんだが、やっぱりご飯  
食べないと生きてる感じしねえしなあ。

「適当に作るか」

米はあるし、適当に野菜炒めでも――

／＼ピンポーン／

「んっ?」

あれ。今日は誰も来ない筈なんだけどな。北野とも約束は入れて  
ないし。誰だ?

「はい、今開けまーす!」

警戒しつつ、少し扉を開ける。

「来ちゃっ――ガチャ

「もー、酷いよ。急に閉めるなんて」

「よっす、シャル!」

「こんにちは、シャルル君」

「全員いんのか。まあ、入ってくれ」

とりあえず、家に上げるが。なんか不味い感じがするけど。いいや

「今日はどういったご用件で？」

「遊びに！」

「違うでしょ、銀。今日は親睦を深めに来たの」

「そうだよ」

「遊びに、であつてんじゃん」

「よし、じゃあ遊ぶか！」

「遊ぶ、と言つてもなにをするの？」

「う〜ん」

「確かに、鬼ごっこだつたら俺無双が始まつちやうしな

「あつ、そうだ！」

「お、なんか思いついたか?！」

「シャルつて料理出来る？」

「おう。定番どころは抑えてるぞ」

「それじゃあ——」

.....

「シャルルマーニュのー!!」

「お料理教室ー！」

「わあ〜！パチパチ〜」

どうしてこうなった

「いえ〜い！」

「い、いえ〜い」

それが普通の「反応」だよな。ちよつと脳が追いつかないが、テンションで誤魔化す。

「シャル先生！今日はなにを作るんですか?！」

「ええー、今日は料理家初心者の園子のために焼きそばを作つていきたいと思います」

「乃木さんちの園子だよ、どうも」

まあ、丁度昼時だしな。うん。そこは問題ないんだが、何故にお料理教室なのか。まあ、教えて欲しいんなら徹底的に教えるか。

「助手の銀くん、まずは食材を冷蔵庫から出してくれ」

「了解です」

使う食材は中華麺、キャベツ、玉ねぎ、もやし、ニンジン、生姜になる。ここに更に調味料が加わるが今は一旦置いておこう。

「私はなにをすればいいかしら？」

「須美は救急箱を持って待機しておいてくれ」

「怪我する前提!？」

「念の為だよ」

「料理ってそんなに怖いのか」

「油断すると大怪我しちゃうかもだぞ」

「ひえ」

「恐怖心植え付けてどうすんだよ。ま、気楽にしていこうぜ園子」

「プロがついてんだ、手取り足取り教えていくぞ」

緊張しすぎも良くないしな。いつも通りが丁度いい

「早速教えていくんだが」

「なにか問題が？」

「いやあー、俺の作り方でよかつたかなーと思つてな」

「それだったらアタシの、三ノ輪さんちの作り方でやる？」

「そのつちに決めてもらつたらどう？」

「私？」

「それもそうだな」

それが一番だな。銀がいいなら銀に指導してもらつた方がいいだろうし。

「じゃあ、シャルの作り方でお願いしようかな」

「よし、任せろ！」

「じゃ、アタシはこのままシャルの助手だな」

「宜しく頼むぞ」

「バリバリ働くぞー」

さて、助手が出来た事だし早速やっていくか

「じゃあまずは肉に下味をつけていくぞ。つてことで麵つゆ取ってくれ」

「はい、先生」

「ありがとな。よし、園子やっていくぞ」

園子に麵つゆを渡す。

「コレを注いでお肉を浸せばいいの?」

「おう、それでばっちりだ」

ストレートな麵つゆなら水で薄めるが、今回は普通のなのでそのまま浸すだけだ。

「肉は放置して、野菜を切っていくぞ」

「はい、キャベツ」

「ありがとな。まずは四枚、皮を剥がしてくれ」

なんで俺を経由するのかわからないが、とりあえず園子に渡す。

「ペリペリ」

「剥がしたら一枚に重ねてくれ」

「重ねたよ」

「そしたら手の平で一回押して」

「うんうん」

「包丁で一口サイズに切っていく」

「一口サイズ?」

「ああ、えつーと、そうだな。とりあえず縦に切って横に等間隔で切っていくか」

「やつぱ、一口サイズって最初はわからないよな」

「ほとんど感覚みたいなものだしな。初心者か誰しも通る道だと思  
う。」

「。」

「おっと、包丁使う時は猫の手でな」

「猫の手?」

「こうやって——」

「!？」

「おおー。これは」

園子の手を取り、猫の手を作っていく。

「指の関節が指先より先に包丁に当たるように出来てればいいんだ」

「――」

「園子？」

「！――あ、うん。」

「よし、じゃあ切ってみてくれ」

「今のどうですか、須美さん？」

「どうって、なにがよ？」

「あの園子が一瞬固まったんだぞ」

「確かにそうね。どうしたのかしら？」

「かあー、今のがわからないなんて須美はまだまだお子ちゃまだな」

「むっ、どういう意味よ」

「須美にはまだまだ早い話しなこった」

なんか銀がおじさんが話すような喋り方になってんだけど

「ゆっくりでいいからな」

「うん」

「慎重に、慎重に」

指を切ったら、俺が腹を切って詫びないといけなくなるからな

「いい感じに切れたな。次はニンジンいってみようか」

「はい、ニンジン」

「ありがとな。ニンジンは半分を使うから、まずは半分に切ってくれ」

「わかった」

スパッと切る。力は大丈夫そうだな

「そしたら、櫛切りにしていつてくれ」

「くし」

「ちよつと包丁貸してくれ。こうやって細くな」

包丁を受け取り、ニンジンを櫛切りにしていく。

「うわあ〜♪」

「よし、やってみてくれ」

「うん！」

今まで、園子がとてつもない才能人という事がわかったし、これも  
ちやちやつとやるだろ

「いいぞ、その調子だ。」

「」

次は玉ねぎのみじん切りだな 一番危険だな。

みじん切りする

←

指をぎつくりきる

←

俺が腹を切る

←

無事死亡

玉ねぎはなくてもいいか。

「出来た」

「上手いな！」

「次は？」

「もう切るのではないな。さつ、次の工程に移るぞ」

「焼く？」

「いや、油通しをな」

「油通し」

「ま、見とけて」

鍋に結構多めに水を入れ火をかける。

「この間にソースを作るか」

ウスターソース、中濃ソース、オイスターソースだな。

「大きじー、大きじー、小さじーでいれていってくれ」

「大きい方のスプーン？」

「おう。それ一杯になるまで注いでいれるんだ」

「」

「味濃いめなんだな」

「今回使う麺が太めだからな」

ってかこの中華麺しかない。

「じゃあいつもは違うの？」

「うん、どうだったけな。久々に家で焼きそばを作るからな」

■ 最近は日持ちがいいヤツしか作ってないからな。

■ 出来たよ」

「よし、それじゃあ油通しを説明するぞ」

沸騰してるし丁度いいな。

「まず、塩を二つまみ入れて油を少し入れる。」

「うんうん、それで？」

「ざるを使つて野菜を茹でていく」

「茹でる事で彩りが鮮やかになって焼く時間も少なくなる、ってことか？」

「その通り。野菜が終わったら残ったお湯で麺も茹でる。」

「凄いわね。お金とれる腕じゃない？」

「こんぐらいは練習したら須美も出来るようになるよ」

俺はこのレベルになるまでに一年かかっているからな。

「こんぐらいだな」

油通しはだいたい出来たな。いい色だ

「今度こそ焼くぞ」

「いえーい！」

「準備しましたぜい、シャルの旦那」

「お、準備が早いな」

既に油をひかれ火が通ってる。流石だな

「最初は麺だな。しっかりと両面を焼いていく」

「がががあくってしないの？」

「それはソースと絡ませる時だな。焼けた匂いがしたらひっくり返してくれ」

「ぐんくん」

「ぐんくん」

「ぐんくん」

「お、焼けてきたな」

「ひっくり返すよ」



流石だな。くくん言う必要はなかったような気がするけど

「肉を投下してくれ」

「どかくん！」

「肉が白くなってきたら野菜も」

「どっかくん！」

「いい感じだと思ったらソースを投入」

「ぎぼくん！」

「よく混ぜて、食材に馴染ませてくれ」

「がががあ〜！」

「あの効果音なんだと思う？」

「わからないわ」

突っ込まないでそつとしたのに！

「お、馴染んできたな」

「ふうー」

「いい匂いね」

「美味しそうだな」

「じゃ、皿に盛り付けてみてくれ」

「うん」

この出来ならもう心配はしないでいいかな。

「できた〜！」

「味見係ー！」

やべ、そういえば味見係作るの忘れてた

「やっぱ、最初はシャルだろ」

「俺!?!」

「はい、あくん」

流石に二度は――

「んっ、美味しいな！」

お前、本当にそういう所だぞ。シャルルマーニュあ、普通に美味しかったです。

「ミノさんも」

「て、照れるなあむっ、ん、美味しい」

「わっし〜」

「そのうち?? 私は一人で食べれるから」

「わっし〜」

「あむっ... 美味しいわね」

「今のは逃げられないな ドンマイ。」

「シャルのおかげだよ、ありがと〜」

「一人で作る時は怪我に気をつけてな」

「シャルって何年間独り暮らししてるんだ?」

「ずっと——」

待て、十年とか言ったら絶対におかしい奴だと思われる  
おかしくない範囲で

「——二年だな。」

「それからずっと自分でご飯を作ってるの?」

「いや、一年たった後から作り出したな」

「それまでは外で?」

「そうだな。今考えると体に悪い食生活だったな」

ラーメンだったり、蕎麦だったり、偏りすぎだろ

「シャルは誰に料理教わったの?」

「俺は独学だな。」

「独学!? この知識で!」

「母さんが作ってたの思い出しながら作ったもんだよ  
最初はあるけどもない〜でもないって味付けに時間がかかったよ」

「確かあれは最終的に砂糖を塩にしてたんだっけな  
今でも笑えてくるな。」

「。」

「すまん、湿っぽい空気になっちゃったな。さ、昼飯食べようぜ」

「平気なの?」

「見ての通り、俺は元気一杯だよ」

友達も新しく出来たしな やっぱ顔なのか!?

「あ、そうだ!」

「急にどうした?」

「シャルの作った料理食べてみたいなー」

「確かに！」

「そうね。」

「・しょうがないなー！俺の作った料理は美味しすぎるって巷で有名だからな、覚悟して待つとけ！」

「うん、待ってる」

「首を長くする前に作ってね〜」

「和風よね？」

「ふっ、いいだろう。和風一式を作ってやる」

あー・・また買い出しに行かないといけないかなー

## 連携

「よしっ、やるか」

お料理教室の翌日。いつもの鈴の音が聞こえ世界が樹海一面と化した。つまり、バーテックスの襲来だな。

「前回とは違って一体だけだね」

「隠れてる可能性があるわ。充分に警戒しましょう」

「だな。痛い思いは少ないほうがいいもんな」

「じゃ早速、須美は様子見の攻撃を与えてくれ」

「わかったわ」

バーテックスってのは仲良しグループとぼっちグループに別れてんのか？

「普通に効いてるな」

「それならこのまま——！！」

「なんか飛んできた〜！」

「爆弾ぽいな」

「まあ、間違いなく攻撃だろうな。」

飛ばした所はよく見えなかったが、爆弾みたいなもんだろ。それなら——

「ローラン！落とせ！！」

赤い輝剣が翔けていき爆弾を斬り伏せた。

「須美！どデカイ一撃で奴を怯ませてくれ！」

「了解！」

「そこを俺達で叩くぞ！」

「うん！」

「わかった！」

前衛三人なら反撃させる隙を与えずに倒す事が出来る筈だ。

「っ——！！」

「今だっ!!」

須美の矢で傾いたのを確認。ここで決めきる

「突撃いー!!」

「はぁー、せいっ!」

「落ちてこいッ!!」

十二勇士を一斉に投下する。爆音を轟かせながらバーテックスの体を削っていく。

「シャル、大きいの!」

「了解!」

ジュワユーズを棍棒に持ち替える。地の元素を纏わせバーテックス目掛けて振るう。

「——エリユプシオン!!」

「ひゅ〜♪」

——花卉が舞う。

「シャルはど派手だな」

「一人で完結してるわね」

「いい指示だったぜ、園子!」

「伝わってよかったよ」

完全にエリユプシオンの存在を忘れてたよ。技を確認しねえとな

「須美もナイスアシスト!」

「それは良かった」

「アタシは?」

「銀もいい突っ込みだったぞ!」

「イエーイ!」

今の。褒めてる。銀が喜んでるなら問題ないか。

「二——かんぱーいつ！」

「か、乾杯。」

ここに至るまでの経緯をざっくり話すと、銀が祝勝会を開くと言い出し、場所はとうしようとなつたが、その後なんやかんやあつて俺の家ですることになった。

「今日は楽勝でしたなー！」

「油断しちゃ駄目よ、銀」

「わかってるって」

そこらへんはすっかりしてるから大丈夫だろ。須美もいるし

「気になつただけけど、シャルの武器って何個あるの？」

「えーつと・十三個だな」

十二勇士、一人ひとりの武器が使えるなら単純計算で十三個あるな。今判明してるのはアストルフオの馬上槍ぐらいじゃないか。いや、デュランダルと目映く閃光の魔盾もあるな。判明してないのは、エリユプシオンで使う棍棒、トルナードで突きだす斧みたいな武器だな。

「十三・かなりの手数ね」

「かあー！アタシもカッコいい武器が欲しいー！」

「銀が使う双斧もカッコいいと思うぞ」

「そうだよ、ミノさん」

「そ、そうかな」

あれだけ大きければ盾として使えるし、雑に投げても刺さる。いい所づくめだな。

「私的にはシャルの必殺技？が気になるんよっ」

「あー、あれは」

シャルルマーニユの宝具か。ランクEXの結構凄いやつなんだよな。まあ、ある意味規格外だからな。特にカッコよさとかない！

「アタシも出来るようになる!？」

「残念だが、銀・あれは俺にしか出来ないんだ」

「ちえー。アタシもシャルみたいにドカンとデカい一撃が欲しいー

！」

「銀、駄々をこねても駄目よ。」

「わかってるけどさー。ああいうのに憧れちゃうんだよねー」

「その気持ちよーくわかるっ」

「だよね、だよね！」

俺も最初見たときはうおー！ってなったからな。

「だからさ、十三個の中の一つぐらい貰えたりしないかな？」

「それはー。」

「どうなんだろう。約束された勝利の剣みたいな人を選ぶ武器じゃないし。ワンチャン、銀にジュワユーズ渡したら俺より使い熟しましたーってなったら俺、泣いちゃうかも」

「ミノさん、それは流石に無理なんじゃないかな？」

「そうよ、銀。人が嫌がる事言ったら駄目でしょ」

「はい、すみませんでした。」

「いや、渡すのはいいんだけど、物理的に難しいだろうな」

「物理的に。」

「十三個の武器はあるはあるんだが、ジュワユーズ。俺の使う剣が入れ替わって出てる状態なんだ」

「つまり？」

「同時には使えない。」

「実質一つしか使えないってこと？」

「まあ、そんな感じだ」

・多分。昔読んだマテリアルを俺が間違えずに覚えていればあつてる。それにジュワユーズには貸したという伝承はないしな。継承という伝承はあるが、そこらへんはさっぱり解らん。

「いい事だけじゃないのね」

「使い分けが重要、ってことだ」

「なるほど。」

全然わかってない時のなるほどだな。

「戦う時はガンガン俺を頼ってくれていいからな！」

「なくに独り占めしようとしてんだ。アタシにも見せ場を寄越してく

れよー！」

「そうよ。シャルル君も勇者の一員よ」

「みんなで力を合わせてえいえいおー！」

「おー！」？

「お、おー」

「それもそうだな。皆で頑張るか」

「勇者ーうん。カッコいい称号だな。俺が名乗る事は一生なさそう  
だけどな」

「おっと、もうこんな時間か」

「あつという間ね。日が暮れる前に帰りましょうか」

「しょうがないか。ってことでシャル、また明日な！」

「おう。」

銀と須美は持ってきた荷物を片付け玄関へと向かって行った。

「。」

「ほら、園子も」

「私ねー」

「ん？」

「シャルに隠し事してたんだ」

「言えるタイプの隠し事か？」

「うん。だから聞いてくれる？」

「もちろん。何だって聞いてやるぞ」

隠し事。隠し事かあー。俺の隠していたお菓子を食べたとかか？

ハロウィン用に残してたんだけどなー。結構お高めのやつ。

「私の家。乃木家は大社においてスゴイ家柄なんだ。」

「。」

「ここでお菓子の線は消えたな。いや、最初からないか。」

「だから大社との縁が強くなって」

「だから、あの豪邸か。不自由なく暮らせてるのならそれでおいけ  
す。」

「それで前、大社の方からある依頼が私にきてね。」  
「依頼？」



「シャルの情報聞き出して欲しい、って……その時は保留にしても  
らったんだけど。」

「ふむふむ、俺か……」

「なんでー？俺ですら曖昧なシャルルマーニュの情報を渡せと？↑  
シャルルマーニュの推し辞めろ」

「なんか裏でコソコソするのはいやだなー、って思って打ち明けたん  
だ。シャルはどう思う？」

「どうって言われてもな。園子が考える必要はないだろ。もし、園子  
が得をするならそれを受けて俺の情報をバンバン流して貰って構わ  
ない。でも、園子が損するなら辞めとけ。」

「――」  
損得勘定で動く。これが一番、社会で生きれる方法だ。まっ、人間  
には引けない状況つてのが必ずしもどこかにあるんだよな。俺だっ  
たら基本を否定する時かなー。粘り強くやってやったぜーふう！！

「さっ、銀と須美が待ってるぞ。早く行ってこい」

「――あつ、うん。」

「気をつけてな」

「園子の背中を見送る。」

「――」  
ああいう、損得感情で動かない人間の方が人生楽しく生きれるん  
だろな。はあーほんと、歪んでるよな。この世界。

## オンリーワン

とある平日の放課後。俺は安芸先生に連れられどこかの道場に来た。車に乗ってほしい十分ぐらいか？

「今日からシャルルマーニュ君も訓練に参加してもらおうことになりました。」

「シャルルマーニュですっ！ども！」

「どうも〜♪」

「安芸先生、シャルル君も訓練に参加するってことですか？」

「そうよ。特に連携の訓練を中心にやってもらいます。」

「連携の訓練ってことはもしかして？」

「いえ、夏の合宿でしたメニューはしないわ。」

「ほっ。」

夏の合宿でのメニュー。なんだそれ

「今回はまた新しいメニューでやってもらいます。」

「新しい。」

「メニュー？」

またまた場所は変わり、今度は無人のグラウンドに来た。どこかの学校。ぽいや、廃校舎か。

「前々回の戦闘での失敗が今後またあった場合に備え、撤退の訓練をします。」

「撤退か。」

確かに撤退は戦いにおいて二番目に重要な事だ。あ、一番は生存

ね。

「シャルルマーニュ君の掩護があつて軽症で済んだのは本当に良かったわ。」

「びっくりの登場だったんよ」

「もつと早くに行けたらよかつたんだけどな」

「まあまあ！間に合つたし、結果オーライつてやつ！」

「そうね。助けて貰つたのに叱るのは御門違いだもの」

俺が早ければ全員無傷で終われたんだけどな

「そこで今回は、あの時よりも重い怪我を負つた場合の撤退方法について教えます。」

「重い怪我」

「痛いのは嫌だな」

「二人とも心配すんなつて、アタシ達が守つてやるからさ。なつ、シャル！」

「おう！任せとけ！」

「それじゃあ、簡単にルートを説明するわよ。」

「はくい。」

「負傷者を一人、それを担ぐのが一人、バーテックスからの攻撃を防ぐのが二人という配員でやっていきます。そして、重症者をここからゆっくりと歩いて50メートル先のコーンまで連れて行ったらゴールです。」

「前やった逆バージョンか」

「先生ー！」

「はい、シャルルマーニュ君」

「実戦で負傷者が二人出た時の訓練はしないんですかー？」

前の負傷者は園子と須美の二人だった。なのに何故、今回は一人という前提でするのか

「二人にすると攻撃を防ぐのが一人になってしまふでしょ。そうすると今回の連携訓練が意味を失くしてしまうわ。もちろん、二人の場合も訓練の最後にします。」

「わかりましたー」

連携訓練だししょうがないか。ん？一人で防ぐ？それっていや、考えるのは止めておこう。

「最初の負傷者は乃木さん。乃木さんを担ぐのを鷲尾さんにしてもらいます。」

「宜しくねわっし〜」

「ええ。大切に運ぶわね」

園子は攻撃を受け止めるからな。この中で一番怪我する可能性が高いし妥当な判断か

「鷲尾さんは乃木さんをおんぶしてちょうだい」

「わっし〜、いい？」

「いいわよ。んっ、と」

「乃木さんは手を鷲尾さんの前に持ってきてこのブロックをそつと持って」

「持ったよ〜」

「このブロックは少しでも力が入ったり、振動を感じるとブザーがなる仕組みになってるわ。ブザーが鳴ったら失敗でまた最初からスタートからにします。」

「うえ〜」

「防ぐ人はシンプル。あの機械から飛んでくるボールを負傷者に当たらないようにするだけよ」

「めっちゃシンプル。」

メモが必要ない程の内容だったな

「シンプルなぶん難易度がヤバいんだよ」

「なるほど。じゃあ俺はちよつと前で防ぐから銀は俺が逃したやつをデカイ双斧で叩き落としていつてくれ」

「叩き落とし。アタシの双斧で？」

「おう。斧の側面で」

「ああ〜！そういう使い方あるんだ！」

ちよつと不安になってきた。

「さっ、位置について。私がブザーの電源をONにしたらスタートよ」  
「よーしっ！気合入れていくぞ！」

「後ろは頼んだからな！」

「二人共頼んだわよ！」

「二人共がんばれ！」

「3・2・1・スタ——」

「び——！！」

「ん？」

「どうしたー！」

「流石に早くね！まだスタートすらしてないんだけど

「私、まだ一步も機械の不良？」

「」

「そんな形跡はどこにも 乃木さんわかる？」

「今、このブザーがわっしくの胸に当たって そのくなんというか

「」

「え、え！！？」

「」

「あー うん。ちよつとの振動で作動するんだったな

「設定を変えるわ。ちよつと待ってて」

「」

「気を取り直して 3・2・1・スタート！！」

「今度は鳴らないな。よしっ、こっからが本番だ。」

「十二勇士よ——！迎え撃てッ！」

「十二勇士を召喚し、迫りくるボールを全て 全て

「暇だなー」

「——ストップっ！！」

「攻撃止めッ！」

「ハハ、これがヌルゲーってやつか。」

「シャルルマーニュ君、その剣はなしにしましょう。実戦では使って

いいけど今回はなしで。」

「わかりました。」

「それじゃあ再開するわ。——スタート!!」

今度は手持ちの武器だけが——なら!

「アストルフオの槍!」

「おおう。」

ジュワユーズをアストルフオの馬上槍にし、風の元素を纏わせ振るう。たったそれだけの動作で小さな竜巻が生じボールの軌道をずらししていく。

「ストップ!ストップ!」

「はいっ!」

今度はなんだ。」

「それも禁止でお願い。というより最初持ってた武器だけにしてちやうだい。」

「はい。」

「再開するわ——」

「ハァ——!!」

五大元素をジュワユーズに纏わせる。刀身が輝き伸びていく。

「——スタート!!」

「——リュミエール・デュ・ソレイユツ!!」

薙ぎ払う——というよりは固まったものを爆発させるといふ表現の方が正しいな。ボールに当たらなくても余波だけで軌道を狂わせる。」

「頭が痛くなってきた。」

「銀!左斜上はスルーでいい!」

「!——わかった!」

負傷者に当たらなければそれでいい。何個かあらぬ方向に飛んでるのがある。それは無視でいい。

「はっ、せい!右斜下スルー!」

「せや!ふっ!でりやああ!!」

ボールを斬りながら銀に指示を飛ばす。これが最速だと思います。

あとは作業だな。

「——止めッ!!」

「——ふいー、疲れたー」

「お疲れ、銀。」

「シャルこそ。アタシはシャルのお陰で大分楽ができたよ。サンキューな」

「それは良かった」

あの大きさの双斧をブンブンしてただけあって体力を結構消耗してるな。

「シャルく、ミノさくん！」

「おつ、園子だ。おっい！」

「いえっい！」

「イエーイ！」

「シャルもシャルも！」

「お、おう」

ジュワユーズを鞘に直し、目線が合うところまで屈む。

「いえっい！」

「イエーイ！」

「私は？」

「わわっ！わっしっもいえっい！」

「いえっい♪」

須美が園子にめづちや影響されてる感じあるな。いい傾向なんだが。いや、うくん。どうなんだろう？

「それじゃあ次は、二人の場合の訓練をします。二人の負傷者は乃木さんと三ノ輪さんにしてもらいます。」

「え、アタシく？」

「三ノ輪さんは鷺尾さんより怪我する頻度が高いの。だから今回は三ノ輪さんを負傷者に入れました。」

「ドリル、受け止めたもんね〜」

ドリル？そんな攻撃してきたヤツいたっけな。 . . .

「うっ、あれはー。現実の影響とかーを考えた結果でしてー」

「もちろん、わかってるわ。でも、無茶はしないでね？」

「はいッ！」

「無茶は俺に任せろ！」

「無茶はしないでね？」

「はい。」

怖い。。

「三ノ輪さんの勇氣ある行動によって現実への被害が最低限に収まってる事は確かだよ。本当にありがとう。」

「は、はい。」

あの銀がむず痒そうな顔してるな。にしても、この言い方。ちよつとイラツとくるな。 . . .

「どうしたのシャル？」

「いや、なんでもないぞ。」

「それならいいんだけど。」

「コホンっ、説明に戻るわ。」

「。」

「負傷者を担ぐのはさつきと同じ、鷺尾さんにしてもらいます。」

「はい。」

「攻撃を防ぐのがシャルルマーニュ君。今度は一人だから、最初禁止にした剣以外を使っていいわ。」

「よしっ！」

風元素連打でいいな。

「先生ー！」

「はい、三ノ輪さん」

「負傷者二人をどうやって運ぶんですかー？」

「今から説明するわ。乃木さんと三ノ輪さんは鷺尾さんを挟んで立つ



てちょうだい」

「は〜い」

「立ちまじたー!!」

「はうっ」

おいおい、感極まってる人いるって

「そしたら、乃木さんと三ノ輪さんは鷺尾さんの首に手を回して鷺尾さんは二人の脇に手を置いて支えるの。そしたら乃木さんと三ノ輪さんの空いてる手でブロックを持っていく。わかった?」

「なるほど〜」

「つ〜〜〜!!」

いつか爆発して弾けるんじゃないか?

「ゴールはさつきと同じよ。それじゃあ位置について」

「じゃ、シャル頼んだ!」

「頑張ってるね〜」

「わ、わたししもが、がんばるわね!」

「お、おう。頑張れ」

めつちや満ち足りてる表情してんだけど、小学六年がする顔じゃない

「3・2・1・スタートツ!!」

「アストルフオの槍ツ!!」

さつきより力強く振るう。竜巻も先程より大きく長い時間動いてる。この間に次を――

「――」

圧縮、圧縮。五大元素を圧縮。

「まとめて薙ぎ払うツ――!!」

はい、次。

「術式発動!弾き飛ばせ――!!」

魔力放出つてのこういう使い方もあるんだぜ?まあ、こんぐらいの弱っちい攻撃しか防げないけどな。

「アストルフオの槍ツ!!」

そしてまた、最初に戻るつと、これが俺が編み出した無限ループコ

ンボ。ちよつと見栄えがアレだが、仲間の危機だ。しょうがない  
ん、しょうがない。 . . . . . う

「——止めッ!!」

「これ、訓練になってる? ただの作業じゃねえか  
お疲れ様」 . . . . .

「こういうのをオンリーワン性能って言うのか」

「流石ね」

「王様は一番強くなちやな!」

「王様」

「ほら、俺、シャルルマーニュ、カール大帝だろ?」

「お菓子の?」

「ん?」

「カール大帝をご存知ないだと、そうか、四国だけになったから世界  
史をする必要がないのか。 . . . . .

「今のなし! 忘れてくれ!」

「」

「うん?」

「安芸先生に聞かれたのは不味かったか . . . . .

「今日の訓練はこれで終了です。」

「今日は運ばれてばかりだったな」

「それを言うなら、私は運んでただけよ」

「アタシは一回だけだったけど、シャルはぶつ通しで防いでたから  
な。シャルが一番疲れてんじゃないか?」

「いや、俺はそこまで疲れてないぞ」

「ほへえ、凄い体力だな」

英霊だしな。甘く見てもらったら困る。

「解散する前に皆のスマホを集めるわ。」

「なんでですかー?」

「勇者システムのアップデートをするためよ。本来ならもう少し後だったのだけど、予定を変更して急遽今日からになったわ」

「先生」

「はい、鷲尾さん」

「これからバーテックスが攻めてきたらどう対処するんですか?」

「神樹様の神託ではこれからしばらくの間は来ないことになってるわ。でも、もし来た場合はシャルルマーニュ君一人で対処してもらいます。」

「シャル一人で!?!」

「そっか、シャルはシステムなしで変身出来るから。」

「それは危険じゃないですか?」

「危険性は充分理解してるわ」

「まあ、それが適任だろうな。」

「任せとけて!それに、そもそも来るとは限らないしな!」

「」

「よし!頼んだ!」

「任された!」

「撃破、或いは撤退させればいいわ。」

「とりあえずぶん殴ればオツケーってことだな!」

最悪、目映く閃光の魔盾を使って持久戦するしかないか。聖騎士帝の能力で神性を持つ武器の適正がつくしある程度は使えるようになる。なんなら盾で殴り殺すか

「これで連絡は終了です。シャルルマーニュ君は車を用意してるのでそれに乗って帰宅してください。」

「メルシー!」

「メルシ〜♪」?

「メ、メルシー。」

「めるしー、ってどういう意味なの?」

「フランス語でありがとうって意味だぞ」

「外来語!？」

「ただ愛国心溢れてんだよ」

「へへへ、そうなんだ」

「知らないで使ってたのか!？」

「えへへ」

「褒めてるのか」

「褒めてない、褒めてない!」

「うう」

「大丈夫よそのうち!そのうちは凄いから!」

「ほんと?」

「おう!園子はカッコいいぜ!」

「——やったぜ!イヤッホー!!」

「????」

「やっぱ、園子上がり幅はわからないな」

「マジか」

「初めて見るタイプの人だな」

「話しはここまでにしましょう。システムがなくても今後も訓練は続きます。しっかりと体調を整えて次に備えましょう。それじゃあ、今日は解散!」

「日は解散!」

「失礼します!」

「失礼します!」

「先生、さようなら」

「ええ。さようなら」

「——」

「そうだよな。アンタは生徒想いのいい先生なんから、ちよつと口」

「下手だけど、じっくり——」

「先生——さようなら!」

「——はい、さようなら。」

## 無茶苦茶

「来ちゃったかー。」

今回は俺独り。敵も独り。ぼっち同士の戦いつてことか。

「我が名シャルルマーニュッ——！」

「いざ尋常に勝負ッ!!」

ジュワユーズをアストルフオの馬上槍に持ち替え真名を口にする。

「——トランプ・オブ・アルガリア触れれば転倒！」

四本ある脚の一本を一時的に霊体化する。その巨体を少しの間動けないようにする。

「——ッ！」

耳がやられた——！原因はあの鐘かッ！

「——！」

十二勇士達に鐘を壊すように指示を送る。くそつ、自分がなに言ってるか解らん！

「——」

対象は一体。であれば単体宝具の宝具がいい。デュランダル——  
——不朽不滅の剣。十二勇士最強と謳われた騎士の力を見せてやる

！

「——ッ！」

この一撃で終わらせる——！

「——ッッ!!」

これがデュランダル。絶世の剣、壊れずの絶世か。すげえな。俺の  
語彙が消失したよ。

——花卉が舞う。

「病院に行かぬ——！」

「耳が治ってる、だと……どういふことだ？」

「……」

「魔力補給が潤沢だからか？アニメでどんな描写されてたっけな  
令呪で直してたようない、違ったようない。覚えてねえな。」

「よし、授業に戻るか」

今日は平日。当然学校がある。つまり、俺は授業を抜け出して来ま  
した。不良生徒にはなりたくないな——

「ふッ——！」

全力疾走で戻る。これなら学校が終わる前に戻れる筈だ

「シャルルマーニュ、ただいま戻りましたー！」

「——！？」

時刻は10:21。二限目の途中か。セーフだな。

「怪我はない？」

「はい！無傷ですっ」

「それじゃあ、席に着いて」

「はい」

「授業に戻ります。シャルルマーニュ君は社会の教科書の139ペー  
ジを開けてください。」

「バッチシです。」

「やっぱ、授業は出ねえとな。今ん所は単位とか気にしなくてもいい  
けど、次受けた時に先生が説明する意味が解らないとそっからドンド  
ンなし崩し的に内容が解らなくなっていくからな。」

「——シャル！」

「うおっ、どうした？」

二限目が終わり、次の授業までの十分間の準備時間。机でボーッとしていたら銀が押しかけてきた。多少周りから視線が集まるが、気にしない気にしない。

「えっと、その、大丈夫だったのか？」

「おう。サクッと倒しといたぞ」

「ほ、ほんと？」

「おうともよ。ちよつとデカいだけのヤツだったよ」

「それならいいんだけど」

「ほら、次の授業始まつちやうぜ。席に戻りな」

「う、うん。」

落ち着きようがないな。園子みたく机に突っ伏して寝るぐらい落ち着いて欲しいぜ。須美からはチラチラと視線を感じる。監視でもされてんのか？

## 耐久テスト

「シャル君、ここは？」

「んー、ここは。こっちから解いた方が簡単だぞ」

「あつ、本当だ。ありがと」

夏休み一日目。俺の家で北野と共に宿題を進めていた。ちなみに勇者システムはまだアップデート中だ。

／ピンポン／

「ん？」

「お客さん？」

「いやー、今日は誰も来ない筈なんだが。ちよつと見てくる。」

「うん、気をつけて」

今日は北野以外と約束してないぞ。また連絡なし家凸か？

「はーい、今開けまーす」

一応、身構えて扉を開ける。

「――」

「シャルルマーニュ様でしょうか？」

扉を開けた先には変な仮面を着けた、全身白装束の格好をした人が立っている。

「そうだが。アンタはなんだ？」

少し威圧するように低い声で喋る。

「私は大赦の者です。」

「――」

大赦・園子の所か。

「それで？大赦の人が俺になんのようだ？」

「恐れ多きながら、今日はシャルルマーニュ様に来てもらいたい場所があります。」

「場所は？」

「ここからすぐそこです。少しばかり時間をくださらないでしょうか」



「？」

「ここで断つて後々面倒臭い事になったら嫌だしな。ここは素直に行くか。」

「ちよつと待っててくれ」

「はい。」

北野に伝えないといけないな。

「あ、どうだった？」

「すまん、北野。ちよつと今から行く所が出来た」

「そうなんだ。帰った方がいい？」

「少しの時間言ってくるだけだから、ここで勉強しててもいいぞ。あ、家に帰ってもいいぞ」

「それじゃあ、僕はここで勉強しとくよ。家じゃクーラないしね」

「そっか。それじゃあ留守番頼めるか？」

「うん、いいよ。その代わりと言ってはなんだけどクーラつけとくね」

「ああ、いいぞ。でも、これ以上温度を下げないようにな」

「もちろん。」

知らない人を一人にするのはちよつと怖いが、北野だし真面目に勉強しとくだろうな。ちよつと電気代がかかるが別にいいか。

「じゃ、行ってくる」

「気をつけてー」

荷物指定はなかったし、持っていくのは鍵ぐらいでいいか。

「準備出来ましたか？」

「ああ。」

「それでは、この車に乗ってください。」

「わかった」

またまたでかいリムジンだな。園子もそうだったし、大赦はリムジンばかり使ってたのか？

「発進します」

「」

警戒は怠らない。いつ襲われても殺す準備は出来ている。

「着きました？ お降りください。」

「ここは」

あれから数十分程度。道場のような場所に着いた。

「ここは普段、勇者様達が訓練をされている場所になります。」

「へえー」

「今回はこの先にシャルルマーニュ様を呼んだ理由があります。」

「進め、ってことか。」

「はい。ここからは私は着いていきませんので、お一人で」

「わかった」

とりあえずここは従うしかないな。道場かー。そーいやあ一回も来た事ないな。

「」

内装は綺麗だといいな

「」

「こんにちは、シャルルマーニュ君。」

「こんにちは、安芸先生。」

挨拶は大事だからな。大赦関係の人だよな、やっぱり。

「シャルルマーニュ君には耐久テストに付き合ってもらいたいの」

「耐久テスト・なんのですか？」

俺、って言うなよ。一瞬で逃げてやるかな、覚悟しとけ

「勇者システムに新しく『精霊』という存在がつけられるわ」

「精霊・その耐久テストですか？」

「簡単に言えばそうね。」

「厳密には？」

「この精霊は勇者を守るための『バリア』を出す機能があるわ。それがどれだけの攻撃に耐えられるのかのテストよ。」

「なるほど。俺の全力をぶつけなければいいんですね」

「ええ。今から精霊を出すわ」

・あのスマホは俺が渡されたヤツだな。一回も使った事ないけど

・

・

「この精霊は命婦みょうぶと言って、狐の精霊よ。」

マジか。スマホから生物が出てくる時代になったのか

「命婦に向かって、エリユプシオン」と言うのかしら、それを打ってくれない？」

「わかりました。離れてください」

・霊基を変え、ジユワユーズを棍棒に持ち替える。

「——エリユプシオンッ！」

念のため一撃目で止めておく。ここで薙ぎ払いの二撃目をする、最悪安芸先生に当たる。

「——なかなかの耐久性ね」

「ちよつと罅が入るぐらいか。結構硬いな」

命婦には傷一つついてない。王勇でステータスが上がっていないとはいえ、エリユプシオンを耐えるのはなかなか凄いな。

「ありがとう。いい結果が出たわ」

「これがあれば怪我也減りますね」

「そうね」

・なにかデメリットがあるのか？

「今日はこれで終わりです。もう帰って大丈夫ですよ」

「わかりました。それじゃあこれで」

「ええ。気をつけて帰ってください」

・さっさと帰るか。

「」

・

「さっ、お乗りください。」

「ああ。」

「それでは発進します。」

「」

新しい勇者システム。いい事だけじゃなさそうだな。精霊か？それともバリアの方になんかあるのか。それか、別の機能に

「」

場合によっちゃあ、大赦を潰さないといけなくなるな。いや、落ちて着け。園子の家が潰れちゃうからそこは我慢するか。

## 夏休み

「はあー、あと一週間で終わりかー。」

何故こうも夏休みというものは一瞬で終わるのか。北野と勉強して、釣り行つて、週三で訓練があるし、まあ楽しかったしいいか。

「明日も訓練か。寝るか。」

明日も訓練が朝からあるし、さっさと寝るか。

「おやすみー」

誰もいないが、言うことに意味がある。

「ふっ！はっ！せいっ！」

翌日、俺はこの前来た道場に来ていた。ジュウユーズをフランベルジュ、アルマス、カーテナに持ち替えながら振るう。持ち替えた時の重量感の違いを確認する。

「ふう。」

ほとんど変わりないな。ただ、真名開放が出来ないのが問題だな。フランベルジュはデイルムツドの必滅の黄薔薇と同じような能力を持つてるから結構使い勝手はいいと思う。アルマスとカーテナの能力はわからない。

「やっぱ、シャルの武器は派手だな」

「だろ！俺の誇れる勇士達の剣だからな！」

俺の、ではなくカール大帝の精鋭だけだな。

「シャルのじゃないの？」

「ああ。ジュウユーズ以外の武器はもともと十二勇士達の武器ってこ

とになるな」

「前から思ってたのだけれど、シャルル君が言う十二勇士というのはあの浮いてる剣のことよね？」

「そうだぞ。」

「もしかして、もとは人つてこと？」

「おう。」

「つまり、闇の錬金術?!」

「違う違う!魂が剣の中に入ってるだけだから!」

「それはそれはでホラーだな。」

「確かに、言葉にすると若干ホラーだな。まあ、そこはしようがない。」

「さ、訓練を再開しようぜ」

「それなんだけど、ちよつとコレ見てくれないか」

「これは。」

「夏祭り?」

銀が持っているチラシにはデカデカと夏祭りという文字が書かれている。

「へえ、今日あるんだ」

「そう、そうなんだよ!」

「でも、この時間じゃあ間に合わなくないか?」

「みんな行きたいよな!」

「それは、そうだけど。」

「行きたい!行きたい!」

「いや、俺は——」

「よしっ!じゃあ先生に交渉してくる!」

「あ、ちよ——行っちゃった。」

行動が早いな、流石、銀だ。

「ワクワク!」

「そのつち、落ち着いて」

「ハハ。」

これで交渉決裂したら落胆がヤバいだろうな——

「あ！戻ってくる！ミノさくん！」

「どうだった？」

「あと一時間で終わりだった！」

「おおう！てことは?!」

「夏祭り行くぞー！」

「おおう！」

すげえはしゃいでるな。

「じゃあ、あと一時間頑張りましょ」

「うん！」

「任せろ！」

「怪我には気をつけろよ？」

「わかってる、わかってる！」

「それならいいんだが。」

銀は前科持ちだからな。それに浮かれてる時が一番危ないって言われてるからな。あの須美さんまでちよつと口角が上がってるし年相応の反応で安心してる自分がいるんだよな。

「じゃあ六時に浴衣で集合ね」

訓練が終わり、解散しようとしていた所を園子に捕まり、しっかりと集合場所を指定されてしまった。

「浴衣!？」

「どうしたの？」

「いやー、須美さん。アタシ、浴衣持ってないので私服ってことにー」

「俺も持ってないぞ？」

「駄目よ。日本国民たるもの浴衣を着ないと」

「みんなで浴衣着て夏祭りを満喫するんよっ」

「ぐうぐう」

「私の家に何着かあるわ。それを貸すから着てくれる？」

「ぐぬぬぐうぐう」

「銀。ここは諦めて浴衣を着るしかないぞ」

「しょうがない。降参します」

「浴衣か。着たことあつたけな。そもそも夏祭りに行ったことがないような」

「じゃあ、銀とシャルル君は私についてきて」

「はい。」

「まあ、元気出せって」

「そんなに嫌なのか。まあ、銀は動きやすい服の方が好きそうだな。」

「動きにくい」

「まあまあ、似合ってるんだしいじやねえか」

銀が着ている浴衣には赤い牡丹の花弁が所々描かれている。

「いいわよ銀！こっち向いて！」

「ちよ、須美！」

「おっ、俺も撮つとくか」

「シャルも!？」

持ってきたカメラを使い、記念にパシヤリ。

「うん。よく撮れてるな」

「なにになにく？」

「園子も見るか？」

「うん♪」

もう集合の時間か。まあ、丁度いいし園子にも見せておこう。

「ミノさんかわい〜！」



「だろ。めっちゃ似合ってるよな」

「うんうん。それでミノさんは何処に？」

「それならそこにあれ？」

「いないね」

さつきまでいた場所にいない。もう遊びに行ったか？いや、須美も一緒にいたし自由行動は出来ない筈だ。最悪の場合が頭に過る。

「園子、スマホ持ってるか？」

「うん。ミノさんにかけてみるね」

「頼んだ」

「かからない。わっしくもかからない」

「走れるか？」

「わかった。私はあっち探すね」

「見つけたら俺が見つけるまで適当にブラブラしといてくれ」

「シャルが見つけたら連絡してね」

「おう」

さて、この人混みだ、このまま探すのは無理そうだな。ならば、霊体化して探すまで

「——こんな所で何やってんだ、銀？」

「んっぐー！シャ、シャル!？」

あれから数分後。焼きそばの屋台の前で焼きそばを頼いっばいに詰めた銀を見つけた。

「いろいろ言いたい事があるが、無事ならそれでいいか。」

「スマホで園子に電話かけてくれねえか？」

「いいけど、あれ、不在着信。園子からだ」

いやー、今回はガチで焦った。テスト中に腹壊した並に焦った

ん？

「そーいや、須美はどうした？」

「それなら、さつきリングお買いにあつちの屋台に行ったぞ。あ、もしもし。園子？」

「ちよつと様子見てくる」

須美もお祭りを満喫してるようだなによりだ。銀の手綱はしっかりと握って欲しかったけどな。

「なんか騒がしいな」

「言い争いみたいだな。嫌な予感がしたんだが？」

「——離してください！」

「まあまあ」

よし、木の下に埋めるか。

「なにやってんだ、そこのお兄さん」

全く、最近の若者ときたら

「シャルル君」

「なんだ？優男気取りか」

「とりあえず、この手は離そうな。お兄さん」

「いッ——！」

このままこの手を潰してもいいが、ここじゃあ目立つな。

「ここじゃあなんだし、あつちの方で話そうぜ。」

「あ、いや、大丈夫で——」

「まあまあ！俺達の仲だろ！」

そう言い、肩に腕を回す。絶対に逃げれないからな？筋力Aを舐めるなよ。

「ご迷惑をおかけして誠にすみませんでしたっ——！」

「ごめんなさい。」

「わつしとミノさんが無事で良かったんよ」

「きつ！屋台巡りに行こうぜ！」

「やっぱ最初は焼き鳥だよな。次は焼きそばで、いや、近いし最初は焼きそばにするか？うーうん」

「シャルル君、あの後大丈夫だった？」

「ん？ああ、大丈夫だったぞ。きつちり話し合って相手もわかってくれたよ」

「良かった。改めてありがとね。」

「どういたしまして」

「くうー！アタシがいればそんなヤツ、ボツコボコにしてやったのにいー！」

「そうだよね。私がいたら受けたことがない苦しみをあげられたのにな」

「落ち着けて、今頃は自然の中で寝てるからさ」

「睡眠は苦しくないよ？」

「いや、園子。それ寝てるんじゃないよ。なんでもないです。」

「？」

腹パン一発で気絶するとは情けないな。まあ、結構ガチで殴ったから内蔵が破裂して、死んじゃってるかもだけどな。ハハッ

「お、焼き鳥。」

「おじさん！焼き鳥お二つちよーだい♪」

「へいつ、お待ち！二百円になるよ」

「わあ、ありがと♪」

「おやじ！一つくれ！」

「へいつ、お待ち！百円だよ」

「あながとな！」

すげえいい匂い。食欲を注がれるな。

「んっ。美味いっ！」

「そんなにゴクリ」

「一口食うか？」

「いいの?!」

「おう。」

「じゃ、ありがたく。あむっ……ん〜!」

「」

「わっし〜もあ〜ん」

「あ〜ん、んっ。本当だ、美味しい。」

「俺が作る焼き鳥より美味しいってのは本当だったのか。ぐっ、負け  
た。」

「たこ焼き〜!」

「あ、園子!」

「アタシも〜!」

「あ、ちよつと待って!」

「たこ焼きに引力でも発生してんのか?」

「お姉さん!一パツク下さいなっ!」

「いいわよ。はい、五百円ね」

「はいっ!」

「熱いから食べる時、気をつけてね」

「は〜い!ありがとうございます♪」

「ふふっ」

「俺も一パツク下さい!」

「!——はい、五百円ね」

「どうぞっ」

「熱いから気をつけてね」

「は〜いっ!」

「今ん所、六百円か。まあまあ、食事代の範囲だな。焼きそばもいけるな。」

「んっ!はふっ!」

「お姉さんの話も聞いてた!」

「あふっ、はう〜ん、美味しい〜♪」

「やつぱ、熱いうちに食べるのがルールだよな」

「うんうん!ってことでわっし〜、ミノさん」

「そ——ッ！あっひゅい！」

「あづっ！」

「はい、水！」

「あ、ありがと。ふうー」

「んつく。はあトはあー！」

「ね、美味しいでしょ？」

「園子（そのうち）　　〜！！」

「ご、ごめんなさい〜！」

「ちよつと焼きそば買ってくるなー！」

園子が追いかけてるうちに焼きそば買いに行こー

「園子を作ったやつの方が美味かったな。」

やはり、園子は料理人の才能があるな。

「あれ。」

園子達だ。さっきまで追いかけてたのにもう和解したのか。

やっぱ、超がつくほどの仲良しだな

「射的か。」

「シャルル君。」

「あ、シャル〜」

「焼きそば買えた？」

「おう。園子の焼きそばの方が美味しかったぞ」

「えへへ〜」

「それで、なに狙ってるんだ？」

凄い量のコルク弾だな。

「さっきからあのぬいぐるみを狙ってるんだけどなかなか落ちなくてな〜。」

「あのデカいのか？」

「当たってはいるんだけど。」

「一向に落ちる気がしないんだよな」

「だろうな。こういう屋台じゃ絶対には落ちないの。一つや二つあるんだよ。そういう話しを親友アイツからよく聞いたもんだ。」

「うう〜」

「須美、いけるか？」

「やってみるわ」

「お、番長のお出ましだな」

「静かに。」

「あ、はい。すみません」

集中モードに入っちゃったか

「」

「」

「一応、俺も周りから見えないぐらいの風元素の塊を手に作り出しとく。もし、落ちなかったら」

「——今！」

「おっ！」

「あとは気合！」

「よしっ！気合！」

「アタシの十八番！ん〜！気合！」

「気合〜！」

馬鹿正直に付き合うか。落ちろ落ちろ落ちろ落ちろ

「あ、落ちた。」

「やった〜！」

「やったな、須美！」

「ふうー。任務完了。」

「——あんな弾で落ちるなんて」

「なんだったって、おやじ？」

「なんか聞き捨てられない言葉が聞こえたような気がするんだが聞き間違いだよな？」

「あいや、なにもほれ、嬢ちゃん。」

「んっ！」

「？」

「アレと交換してちょうだいな♪」

園子が指差した方向にら四つの小さなぬいぐるみが置いてあった。

「まあー。いいが」

「ありがとう♪」

「なあ園子、このコルク弾は使わないのか？」

「うん。もうお目当ては取れたしね」

「じゃあ、俺が使つていいか？」

「いいよ」

「よし。狙うか。」

「こんだけあれば落とせるだろ。」

「なに狙う気なんだ？」

「そりゃあもちろん、一等賞だろ」

「もしかして」

「もう一回落とすの？」

「おうともよ。」

「コルク銃を持つ。重量確認オツケー。位置はここで固定。まずは練習——」

「ハズレ。今ので風の影響でどれくらいズレるのか把握した。二撃

目——

「ハズレ。落ち始める時間を把握。よし、狙うか。三撃目——」

「右前足部分に命中。少し右後ろに下がった。四撃目——」

「左前足部分に命中。少し左後ろに下がった。五撃目——」

「もしかして」

「須美はもう気づいたか。案外早くにネタがばれたな。ちよつと時

間がかかるとはこれが一番確実に取れる筈だ。初心者だけど  
「よし。」

最後の十二撃目を放つ。これで落ちるだろ。落ちなかつたらまた  
位置取りやり直さないといけない。それだけは勘弁してくれ

「――」  
おやじがフリーズしちまった

「落ちた。」

「凄いわね。」

「どうやってやったの？」

「ん、秘密で」

いやあー、案外上手くいくもんだな。

「おやじー！落としたんだし、ぬいぐるみくれないか？」

「あ、ああ。ほれ、坊主。」

「つてことで、どうぞ」

「――私に？」

「欲しかったんだろ？」

「うん。」

「じゃあ受け取ってくれ。もともとは園子の弾だったんだしき！あ、  
もしかして俺からは嫌だったか？」

「凄い流れになつてきましたねー、須美さん？」

「ただ、友達にプレゼントしてるだけじゃないの？」

「かあー！須美さんはわかつてないなー！」

やべっ、自意識過剰ダサダサシャルルになっちゃう。それだけは防  
がないと

「ううん！凄く嬉しい。大切にするね！」

「おう。そうしてくれ」

ぬいぐるみも俺より園子に使ってもらったほうが嬉しいだろうし  
な。

「そろそろ花火の時間だし移動しようぜ」

「もうそんな時間かー。やっぱ楽しい時間はあつと言う間だなー」

「花火がよく見える場所。確かこつちよ。」



「流石、わっし〜。頼りになる〜」  
事前に調べてくるとは、流石だな。

「ごごよ。」

「確かにこつからだとよく見えそうだなー」

「偉いぞー、須美」

「」

「めっちゃ緩みまくってる。」

「わっし〜、嬉しそ〜」

ちよつとダジャレっぽいな。

「ほれ、園子も」

「わふう〜♪」

「シャルもどう?」

「俺は気にしなくていいぞ」

中身はもう三十になろうとしてるからな。

「あ、そうだ!」

「どうした、園子?」

「これ、忘れてたんよ〜」

そう言い、園子を取り出したのは先程、射的で貰った四つのぬいぐるみ。

「シャル、ミノさん、わっし〜。どうぞ〜♪」

「マジ!？」

「本当だよ。ミノさんにはこの赤いの。わっし〜には青いの。シャルには〜。この黄色のを受け取って欲しいんだ〜」

「アタシとお揃いだ。ありがと園子!」

「そのつち、ありがと。」

「ありがとな園子。家宝にするわ」

「シャルだけ関連性がない色だけど」

「大丈夫、大丈夫。黄色の鎧もあるからさ」

黄色とういうよりは黄金の方があつてるな。それに魔力放出（光）を持つてるし。どっちかと言うと白か？

ひゅーひゅー、ドカアーン！

「お」

「わあ」

「綺麗」

「たまやー！」

たまやー、か懐かしいな。

「よっと」

記念にパシヤリ。

「よし、ブレなし。だな。」

映った花火も綺麗だな。

「また。みんなで来ようね」

「ええ。来年も来ましょ」

「来年は中学生かあー。時間が流れるのは早いな」

「そういうもんだよ。中学もあつという間だぞ」

「部活に勉強。それに恋とか？」

「恋は知らんが、そうだな。高校は別々になるんかなー」

案外、同じだったりな。高校の数なんて数える程度しかないしな

「別れる。うう」

「大丈夫よ、そのうち。私達はずっと友達だから」

「ズツ友？」

「ああ。ズツ友だよ」

「アタシ達の友情は誰にも切り裂けないよ。なっ！」

「そうね。なにがあつてもズツ友よ。」

「てことでパシヤリ」

仲良い三人組。うん、いいな。

「シャルも一緒に撮ろ？」

「わかった。そこに並んどいてくれ」

「須美真ん中で行こうぜ」

「え、私!？」

「はい、ぎゅ〜♪」

「ぎゅ〜」

「あう」

「俺が行くまでに昇天するんじゃないか

「よし。はい、チーズ!」

.....

。

## 新システム

「。。」  
滝を浴びる。なんでも、神樹様に会う前に体を清めるためだとか。神樹。抑止力が呼んだ日本の八百万の神っていう説が今ん所一番有力だな。そうすると全て繋がる。

「いや待て。それだったら俺を呼んだ神様は誰だ？過去に御影士郎俺を呼んだのは抑止力だろう。だが俺を呼んだのは。」  
「考えてもしょうがない。進むか」

滝から出て水の中を進む。

「あ、シャ——あれ。シャルはアタシ達と服違うのか」

「俺としちゃあこっちの方が正装だからな。ちよつとは威厳があるだろ？」

シャルルマーニュが王としての威厳を出す姿。Fgoで言う第二再臨の服装だな。

「威厳。うくん？」

「威厳は感じられないわね」

「ありや」

「やつぱ、威厳を出すのは第三再臨かなーでも、あの霊基はないんだよな。あの姿も結構好きなぶんシヨックだ。」  
「揃ったわね。」

「はい。」

「スマホを受け取ってちょうだい。」

大赦の人がスマホを平瓦に乗せそれぞれの前に立つ。これを受け

取れってことか

「形は変わらないな。んっ?」

「スマホを持ち、全体を見るが変わりはない。なんか輝き出したな。」

「命婦か」

「わあ〜」

「うわっ!」

「これは」

「それは新システムの精霊というものよ。貴方達を敵の攻撃から守ってくれるわ」

まあ、俺は一回会ってるからな。攻撃ぶちかましてるけど。もしかして、嫌われてんじゃね?」

「こんなにちっこいのが」

「俺の攻撃を防ぐぐらい頑丈だぞ」

「ええ〜!」

「こんなに小さいのに凄いわね」

銀の精霊は人形、園子のは鴉、須美のは卵みたいのか。バラバラなんだな。

「それに加え満開というシステムが追加されたわ」

「それになにかあるんですか?」

「シヤル」

「っ。満開とは簡単に言えば勇者の強化よ。武装も変化するわ。」

「そうですか」

これで決まりだな。満開になんらかのデメリットがある。どうしたもんか

...

「――満開を使うな?」

「ああ。」

「どうして？勇者を強化するのに必要じゃないの？」

「安芸先生の顔を見る限り、満開になんらかのデメリットあるいは副作用がある。」

「例えば？」

「例えば？えーっと？」

「そんな返しが存在するとは？」

「性別が逆転したり？」

「女になつたシャル見てみたいかも？」

「確かに？」

「――」

「止める止める！園子は妄想するなっ！」

女版シャルルマーニュ。どつかのラボでそんなのがあったな。

「まあ、とりあえず俺が一回やるから。そっから自分がするか考えてくれ」

「シャル、初めては一緒に。だろ？」

「ええ。みんなで挑戦しまじよ」

「みんなで渡れば怖くないっ！だね」

「それはちよつと違うと思うぞ」

「頼もしい限りだよ」

■性転換でも犬化でも、なんでも来やがれ！受けて立つ――

「――シャルルマーニュ君のシステムには満開の機能はないわ。」

「はあ？」

「なんでー?!」

「それはちよつとおかしくないですか、先生！」

「そうです！シャルル君も勇者の一員の筈ですっ！」

「やべえー、園子の圧が一番怖い」

「シャルルマーニ丘君は以前見せた技があるから、大赦の判断で見送りになりました。」

「言い返せないっ」

確かに宝具があれば満開という新システムは必要ないのかもしれない。そもそも勇者システムをまだ一回も使っていないのがありし。俺のせい？

「あれって制限とかないのか!？」

「ちよつと発動に時間がかかるぐらいだ」

あと、魔力を凄く大量に使うぐらいだな。

「大丈夫。ちよつとの時間なら私達で補うんよっ」

「欠点がないわね。」

その通りです、須美さん。カッコよくて強いとか完璧すぎだろ。

「今日の訓練内容を説明するわ。」

「はい。」

くそ、う、弁解の余地なしか

「最初に新しい武器に慣れてもらおうわ」

「俺はなし、つと」

「まずは変身してみてちょうだい」

「わかりました。」

各々、スマホを操作し花卉に包まれていく。俺も一応霊基を変えておく。

「少し変わってるな」

「ほんとだ」

「色合いだけかしら」

銀は赤色の部分が更に濃ゆく、須美は紫色中心から青色中心に、園子は濃い紫中心から薄い紫と白中心になった。

「もつと、シャルみたいに鎧とか欲しかったな」

「あー、わかる。アタシももつと強そうになりたかったなー！」

「そのぶんでも、結構強そうだけだな」

赤服のヤツはだいたい、この赤は返り血だとかなんとか言うからな。

「次は武器を出してみてもちようだい」

「これは」

「おおく！」

「穂先が一つになった」

須美の弓は狙撃銃に、銀の斧は手元が更に細くなり開いていた丸が塞がりそのぶん細くなっている。園子の沢山あつた穂先が一つになっている。

「この後、ずっとその武器を使って訓練してもらいます。」

「わかりました」

「俺はいつも通り、っと」

満開がない腹いせで宝具連打してやろうか。

その後、俺達（俺以外）は武器の習熟訓練に努めた。俺は隅っこで技を連打しといた。

「シャル君、明日どう？」

金曜日放課後。

「あー、明日は先約がいてな。日曜日にできないか？」

明日は銀達と遊びに行く約束をしてんだよな。ハロウィンだからお菓子買いに行こう！ってな。

「そうだね。それじゃあ日曜日にしようか。」

「おう。ありがとな」

「それじゃあまた日曜日」

「気をつけてな」



「そつちこそ」

北野も言うようになったな。

日曜日にお菓子をあげればいいか。

「トリック・オ——」

「ほい、お菓子。」

「準備はやつ！」

そうくるのはわかってたからな。こなくてもあげてたし

「これ、結構高いのじゃない？」

「あ、ほんとだ〜」

「折角の記念日だしな」

イネスにあつた、高級そうなお店で買ったチョコだ。お菓子作りはあまり知識がないから今回は買った。次回までには作れるようになりたいな。

「トリック・オア・トリート！」

「お菓子はあげたぞ」

「言いつ切る前に貰ったからセーフ！」

「確かにそうね。銀の言葉に被せる形で渡されたわ」

「そうきたか〜ん、もう手持ちはないな」

「てことは〜♪」

「それじゃあ、これ着けといて！」

「これは〜」

犬耳だな、くそう、嵌められた。

「似合ってる、似合ってる！」

「絶対、これ着けたかっただけだろ!？」

「よくわかったな」

「こつち向いて〜」

「向きませんっ！」

園子と須美が銀に可愛い服を着させた時並にハイテンションになつてやがる。

「よし、そのままイネス行こうぜ！」

「はあ！正気か!？」

「さんせくいつ！」

「イネス？なにか買うの？」

「買うものがなくてもイネスさ。ってことでゴー！」

「酷い目にあつた。」

いろいろな場所からパシャパシャ聞こえたんだが

「予想以上だったな。」

「犬耳の破壊力が凄かったわね。」

「明日も着けない？」

「絶対に嫌だからな!？」

「ちえー」

「そんな顔しても駄目だぞ」

駄目なものは駄目です。この犬耳は一生着けません。

「じゃあ次は猫耳で。」

「犬耳じゃなくても着けないからな」

被りもんはこれから着けないようにしよう。

「んっ」

「わかるようになつちやつたね」

「よおーし、いっちよやったりしますか!？」

「みんなで生きて帰ってきましょ」

「当たり前だろ。絶対に勝つき」

どんな敵が来たって返り討ちにしてやるよ。

「シャル一人だけにカツコつけさせないぞ」

「なに。これだけは譲れないぞ」

「じゃあ？ 今回のカツコいいは私が貰うね」

「え、え。じゃあ私も狙うわ」

「強敵参戦だな。どうするシャル？」

「そんなん決まってるだろ。俺は貫き通すだけだ」

——花卉が舞う。

オニユリ

「三体か。」

「奥のヤツ。デツカイなあ。」

「これだけ離れていてあの大ききさということは半端ない大ききさだな。」

「見て見て。」

「どうした？」

「これは。牡牛座、獅子座、魚座？」

「獅子座はあの大きいので、牡牛座はあのフワフワしてるヤツで魚座はどこにいるんだ？」

「凄く速く移動してる、みたいだけど見えないわね。」

「魚座は他の二体と違い動き回っているな。だが、それが理由で見えないなんてありえない。絶対になにか裏があるはずだ。」

「とりあえず、見える牡牛座を倒そう。」

「よおーし！一番槍はこの銀様がっ！」

「まあ、落ち着け。」

「ええー。」

銀の肩を掴む。いつも通りで安心するよ。行動はよくないけど

「頼んだ、須美。」

「わかつたわッ！」

「おおー！わつしく、凄くいい！」

「威力が上がってるわね。」

「つまり、アタシのも！」

「銀、園子！突っ込んできたら叩くぞっ！」

「おうっ！」

「りよーかいっ！」

弓の時と比べ物にならないぐらい威力が上がってるな。

「——征くぞ！」

「突撃イイ!!」

「うおお!!——なっ?!」

「分裂した?!」

銀の攻撃で一刀両断——までは良かった。牡牛座は切断した所から分裂した。

「下がれッ!俺が斬る!」

「——!わかった!」

「任せたよ!シヤル!」

「我が勇士の剣よ!」

ジュワユーズをフランベルジュに持ち替える。

「リナルドの名において貴様を討つッ!」

連撃を斬り込んでいく。フランベルジュ。炎を意味する刀身。炎のように波立っており、この剣で斬った傷は焼きただれ化膿すると言われている。

「ハアツ——!」

今度は分裂することなく、天に昇っていく。

「よし。」

「シヤル——!」

「なん——ぐうっ——!」

コイツが魚座か——!見えなかった理由は地中に潜ってたからか!

「はあー、——せいッ!」

「せりやああ!」

出てきた所を銀と園子に叩かれ天へと昇っていった。

「大丈夫?!」

「お、おう。精霊バリアでなんとかな」

「早速、精霊が活躍したな」

「まだ、気は抜かないで」

「わかっている。あのデカいのがどう動くか。」

「海の上じゃなあ。」

「こつちからは手出し出来ないもんね」

「だな。どっちみちこつちに来てもらわないと」

シャルルマーニュには水よけの加護とかないからな。

「須美、こつから狙えるか？」

「駄目ね。射程外にいるわ」

「手詰まりだな」

「もしかして」

「どうしたの、ミノさん？」

「満開・ここで使うんじゃないか？」

「っ、」

「……そうね。武装の中に大和のようなものがあるかもしれない」

「それはないんじゃない——！」

「なんかしてるぞ！」

「火球」

「喰らったらひとたまりもないねっ」

「でも・避けたら現実に被害が」

「あれは、俺が迎え撃つ」

ジュウユーズの真名開放をする。それしかない

「その間にアタシ達で倒せばオツケーってことだな！」

「……そうね。行きましよう」

「気合入れていくよー！」

「頼んだぞ、お前ら！」

「うん。行くよみんなー！」

「「満開ッ!!」」

大きい花弁が展開されたの見届け、目線を前に戻す。あの大きさの火球だ。宝具で相殺までいけばいいってもんだ。ましてや突破して届かせるのは不可能に等しい。

「永続不変の輝き、千変無限の彩り——」

我が王勇を示すため、この刃に我らが伝説を刻み給え！

王勇を示せ、遍く世を巡る十二の輝剣!!」

ゴオオオ

「あぐつ、があゝ あああゝ!!!」

熱い、熱い熱い!!!

「あ、ああゝ!——うおおお!!」

意識を意地で引き戻す。ここで負けるわけにはいかないんだ

「?!——ぐつ、ぐう!!」

押し負ける。あと一押し。一押しが足りない——

「ちくしょう。俺じゃ駄目なのか!？」

やっぱり、ジャルルマーニユじゃないから駄目なのか。本物のシヤルルマーニユならきつと——いや、違う。スベックは同じなんだ。

俺にはまだなにか足りないモノがある筈なんだ。

「ぐううう——!!!」

弾き出される。火球は大橋の中央程で軌道を反らし彼方へと飛んでいった。だが、大橋は中央まで上にありえない角度で折れ曲がってしまった。

「ハアー。ハアー。銀達は。」

急いで立ち上がり周りを見渡す。かすかにだが戦ってる姿が見える。

「ふう。俺もやらねえと。」

息を整えジユワユーズを構える。

「永続不——んっ?」

光が一つ消えた。

「まさか——いや、時間切れか。」

二つの光がこちらに戻ってくる。近づくにつれてその全容がよく見えてきた。方舟のようなものとロボットののような形をしている。色合いからして方舟が園子でロボットが銀だろう。

「——ッ!」

満開が解除され銀と園子、須美が落下する。全力で落下地点に入る。

「——ふうー、危ねえ。大丈夫か?」

抱えた三人を降ろす。

「足に力が。」

「?」

「う、うん。——あれ、右目が。」

「左腕が、しびれてんのか?」

「っ、まさかデメリットって。」

「ああ——解った。満開の代償は体の機能なのか。」

「お前ら、よく聞いてくれ。」

「。」

「満開を使うと体のどこかしらの機能が奪われる。」

「決まったわけじゃないよな?」

「。」

「ミノさん。私達三人だけが機能不全に陥ってるってことはシャルの考えは合ってる、ってことだよ。」

「私達がもう一回満開したらっ!」

「ッ——!!!」

可笑しい。本当に可笑しい話だ。世界を守るために自身を生贄にする?はっ、笑わせんなよ。

「また、来るぞ」

「っ」

「——!後は俺がしとくからお前達は下がってくれ!」

「シャル。」

「なに、言って。」

「なあーに任せとけてっ!この命尽きても戦いぬくさ」

「正気なの?」

「俺は至ってマジだよ。お前達を守るためにいつもガチだよ。」

ジュワユーズを盾に持ち替える。さっきのでわかった。俺はまだなにか足りてない。だが、それを探するのは今じゃない。今は奴を倒すことだけを考えろ。

「光よ、螺旋となりて!」

盾を掲げる。シャルルマーニュ十二勇士のブラダマンテに恥じめ王勇を示す。

「全力で征くぞッ!!」

熱気は精霊バリアで防がれるから後ろのことは考えるな。銀達は



精霊が守ってくれる。

「目映きは閃光の魔盾オオオ!!」

突進する。だが、今回は十と十のぶつかり合いではなく、十と一のぶつかり合いだ。どっちが通りやすいかと言えば、当然数が小さい一の方だよな。

「——見えた!」

獅子座をようやく手が届く範囲に入った。盾をフランベルジュに持ち替える。この剣なら掠り傷でも悪化させることができる。

「そこ、だああ!!」

刺さった。このまま落下と共に切り裂けば——

「ぐっ——!!」

横から途轍もない衝撃がきた。まともに受けた俺は体をくの字に変え、飛ばされる。

「くう」

「こ」までなのか! ちよつとの傷しかつけられなかった。無駄死にな。カツコわりいな。

「シャル!」

「うおっ!」

本来、海に落ちるはずの俺は落ちずになにか。硬い物に掴まれた。

「——銀!」

「心配だったから掩護しにきたぞ!」

「みんなで戦うんよっ!」

「みんなで生きて帰るんでしょ!?!」

「お前ら。熱い展開になってきたなあ!」

諦めかけていた心に火が灯る。

「シャル、これ!」

「おっ、これは?」

「足場に使って!」

「助かる!」

園子の方舟についている、オールのようなものに乗る獅子座へと接近する。

「さあ、集えよ勇士！ここが意地の見せ所だぞ！」

「火球は私が防ぐから、シャルル君は前へ！」

「頼んだっ！」

獅子座から小さい火球がいくつも放たれるが全て須美の精密な狙撃で落とされていく。

「一気に畳み掛けるぞ、シャル！」

「ラツシュ、ってやつだな！」

「気合い入れてけよ！」

「そんなぐらゐ最初っから充分すぎるほど分けて貰ってるさ」

「それじゃあ心配はないな」

シャルルマーニユからはカツコよさを貰ったしな。百人力ってやつだよ。今の俺は

「行くぞ！」

「遅れるなよ！」

「そっちこそ！」

「うおおおお！！！」

銀は巨大なロボットアームが持つ双斧、俺はフランベルジュと十二勇士達で斬りつけていく。

「園子！」

「まっかせて〜！」

下まで斬りつけていったら、同時に上空へと打ち上げる。その先には園子が待機している。

「串刺しっ！」

園子がパチンつと音を鳴らすと槍についていた穂先のような物がいくつも刺さる。

「わっしー！」

「ここで仕留める！」

須美の巨大戦艦のような船には左右四つ、計八つの主砲がついている。その全てが獅子座へと標準を向け放たれる。

「うっ」

「須美っ！」

須美の満開が終わる。武装が失くなり、重力に従い海へと落ちていく。が、その前に銀のロボットアームにより回収される。

「ハァー——!!」

煙で見えないが、奴はまだ生きています。ここでダメ押しを加える。五大元素をジウワユーズへと収束していく。

「リユミエール・デュ・ソレイユツ!!」

一閃。空気をも裂く一撃を打ち込む。

「なんか出たふ!?」?

「なんだこれ・あ、待て!」

三角のブロック・なんなんだあれは。

「乗って!」

「おう!」

園子の方舟に飛び乗り、三角を追いかける。三角はやがて壁を這い上がり、外へと出た。

「逃さ——うっ!」

「!——っ、園子」

満開が解除され、空中へと身を放り出される。慌てて園子を抱きかかえ着地する。

「ハァー・ハァー!」

「園子?! だいじよ!」

背中を擦ろうと背中に手を置く。——すぐに異変に気づいた。

「ちよつと触るぞ」

「え、え! シャ、シャル!」

園子を抱き寄せ胸——心臓に耳を当てる。

「——」

「。」

「。」

「聞こえない。」

「え?」

「園子の・心臓の鼓動が聞こえない。」

心臓の鼓動するのは血液を循環するのに必要不可欠なんだ。一瞬

でも機能が止まれば———そうか、機能だったな。

「話しは後だ。奴を追うぞ」

「うん。そうだね」

壁の上を進んでゆく。

「うおっ」

「んっ」

———景色が一転した。先程まで地平線だったのが炎が燃え上がる大地・大地でもない。一面が火の海という表現が優しく感じるほどの景色が広がっている。

「シャル、あれ」

？

「あれは合体、してんのか」

三角のブロックのようなものに白いマシユマロのような生物が集まり、形を成していく。

「ああ、私、わかつちやったかも」

「———」  
そうか。勇者御記に書かれていた天の神が造り出した怪物、つてのはこういう意味だったのか。

「！———園子！」

「きゃっ！」

白いマシユマロが口を開け園子に迫る。

「ここはヤバイ！銀達に合流するぞ！」

「う、うん」

園子を抱え、地獄から抜け出す。その後、壁をつたい大橋付近に戻った。

「銀！須美！」

「ミノさん！わっしー！」

「！———園子！シャル！早く来てくれ！」

「急ぐぞ！」

「うん！」

なにか胸騒ぎがする。

「どうした！」

「シャル・須美が、須美がああ！」

「落ち着け、な？一旦落ち着ぐんだ、銀。」

「わっしーがどう、した、の。」

視線の先には満開が解除され、更には勇者での武装も解除された制服姿の鷲尾 須美が異様なナニかを見るような目で俺達を見ていた。

「どうした、どこか痛むのか？」

「貴方は、誰。」

「ああ、そうきたか。」

「わっしー、っ。」

記憶 記憶かあ、ああ、く!!!

「ここは何処！町はどうなってるの!？」

「大丈夫だ。安心してくれ。ここは安全だから」

「うん。ここにはなにも通さないから。」

「だから、よく聞いてほしい。」

「はい。」

「よしっ。俺の名前はシャルルマーニュ。気軽にシャルって呼んでくれ。前は須美。君の友人だったんだ」

「私は乃木 園子。私も友達だったんだ。だから、こうやって贈り物しやおうかな。」

そう言い、園子は自身の髪を結いていたリボンを解き、須美の手首に優しくリボン結びで巻いた。

「アタシは三ノ輪 銀。二人と一緒に友達だったんだぜ？信じられないだろ。それでいいんだ。今じゃなくても、いつか思い出せたらそれで。」

「さてと。これで俺達の自己紹介は終わり！須美はここでじっと出来るか？」

「はい。」

「流石、須美だ。あ、そうだ。ここら辺は冷えるからなこのマントで温まっといてくれ」

「でも、これ、貴方のじゃ。」

「いいって！次会った時にでも返してくれたらそれでいいからさー！」

さっきのでちよつと焦げてるし、温かいには温かいだろうしな。

「シャル、来るよ。」

「わかった。それじゃ俺達行くから」

「またねっ」

前だけを向いて飛翔する。何体ものバーテックスが来ようとは通さない。

「満開ッ！！」

「集え、十二勇士よ！」

戦闘開始ッ！どつちかが命尽きるまでやり合おうじゃねえか！

「うりやああ——うぐっ！」

「ミノさ——きやつ！」

「銀！園子！——邪魔だあ！！」

銀と園子を抱え、壁へと登る。これで七度目

「シャル、そこにいるか？」

「ゴホッ！ゲホツゲホツ！！ハア——ハア——今度は肺かな」

「ああ、つ、く——！」

銀は目から光を失い、園子は徐々に体を蝕まれいく。耐えられない。こんな光景を見るのをただ見とくだけ？くそっ！こんなカツコ悪いこと、我慢出来るか！

「最後の作戦を伝えるからよく聞いてほしい。」

「お！一発逆転の作戦だな！」

「わかった。」

「俺がジユワユーズを放った後——」

「突撃だな！」

「。」

「銀と園子は撤退。残った敵は俺が全部受け持つ。」

「はっ？——はあ!？」

「。」

「園子、頼めるか。」

「帰ってくると約束したらいいよ。」

「もちろん。うざいぐらいの元気で帰って行ってやるよ」

「それはちよつと。」

「待てよ！シャルまで失うなんてアタシには我慢出来ないぞ！」

「まあまあ、帰ってくるからさ」

「こんな時になに言ってるんだよ、シャル！園子からも言ってくれよ！」

「ミノさん、ごめんね。」

「ちよ、園子！まだ、話があるんだよ！」

■園子が銀を強引に担いだのを見届けたと同時に宝具を発動する。

「じゃじゃくん！どうだい見てくれよ俺の武器。」

これこそは世界で最も陽気な聖剣、即ちジユワユーズ!!

もんじよわく！って感じだぜっ！」

ここまで来たなら馬鹿になってやんよ！そして勝鬨もんじよわを盛大にぶち

上げてやるさ！

五度目の輝きが終わった後——花卉が舞った。

## 度し難い怒り

とある病院の一室。なのだが、この空間だけ異様な雰囲気をつけている。一面に御札のような物が貼られ、小さい窓が一つ。しかし、この窓も締め切っており、室内には電子機器から発せられるピツという音だけが響いている。

「園子様、銀様。以上が今回の襲撃での被害です。」

異様な雰囲気を放つ理由の一つはこれだろう。大人が子供に対して、まるで、天皇陛下に話しているような感覚を受ける。話すこと事態が恐れ多いことのように姿勢を低くして言葉を発する。

「死者が三名。」

「はい。大赦の関係者が二名、釣りをしていた少年が亡くなりました。」

「それで、シャルは？」

「今尚、搜索が続けていますが、まだ生存は確認出来ておりません。」

「つか。じゃあ、生存が確認出来たら報告して」

「解りました。」

「出ていっていいよ」

「失礼ながら、園子様。私は——」

「私は出ていっていいよ、って言ったんよ。」

「！——解りました。すぐ退出します。」

ドタドタと退出する。まるで獅子に睨まれ腰を抜かしたように。

「ふう〜」

「大丈夫か、園子？」

「うん、平気だよ。ちよつと疲れちゃっただけだから」

「それならいいんだけどさ。」

「.....」

「.....」



沈黙。いつもならそんな時間はなかった。いつもいつも馬鹿話を  
して、大爆笑したり、滑ったり。こんな空気で馬鹿出来るヤツがいた  
ら尊敬するよ。

「園子はさ。」

「ん？？」

「帰ってくると思う。」

「帰ってくるよ。」

即答だった。普段なら問い掛けた方の少女が自信たつぷりに行動  
して、皆を導いていていた。だが、今回は流石にキツイのだろう。目  
の前で友を二人失う——想像出来ない辛さの筈だ。

「だって、シャルは帰ってくる、って私と約束したからね。」

「うん、うん。きつとそうだよな。シャルなら何気ない顔でスツと  
登場しそうだもん。」

「うん。シャルだったらど派手にカツコよく登場しそうだな。」

「あ、確かに。シャルはそういう所あるもん。」

シャルルマーニュの消息が断ち二日。いまだ、シャルルマーニュの  
生存を疑わない。疑わないようにしているかは不明。

「ど派手の方が良かったか？」

「——」

「アタシはどっちかと言うと派手の方が？」

「やっちゃまった！壁ぶつ壊して来れば良かった！」

「園子・アタシ、とうとう幻聴が聞こえ始めたんだけど。前の方から  
シャルの声が。」

「ううん。ミノさん、幻聴なんかじゃないよ。」

「ああ、そっか。」

「えっ！ほんと——わわっ！」

見えないナニカの正体を確かめるために、まだ動く右腕を使って前  
方を探すが、視力を失って日が浅いためか体勢を崩し、前に倒れ——  
ず、暖かいナニカに包まれる。

「おっと。大丈夫か？」

「シャル。本当にシャルなの？」

「おう。お前の友達のシャルルマーニュだよ、銀。」

「!!——シャル！」

「よしよし。」

「ミノさんつてば。」

友達との会話により保たれていた感情が壊れてしまった。これが普通なんだ。ここにいるのは勇者ではなく、ただ友達が大好き女の子なんだから。

「園子様！銀様！どうかされま——」

「んっ？」

「えっぐ、ひっぐ——」

「間が悪いな。」

「貴様ツ！なにをしている!!」

「なにつて。ただ——」

「すぐ離れ。」

「シャルに何かしたら許さないよ」

「しかし、園子様！」

「銀、ちよつと待つててくれ。」

「あ——うん。」

「シャル？」

「その神官の人、質問に答えてくれないか？」

「貴様はどれだけの無礼をしたと——」

「質問を変える。死ぬか生きるかどっちがいい？」

「ひい——!!」

先程までいた好青年はいない。ここにいるのは王としてのシャルルマーニュ——だが、本来の姿と一点だけ変わる部分がある。目が紅いのだ。空のように青い瞳ではなく、紅い瞳へと変容している。

「どちらだ？」

「いつ——いつ——!」

——生きたい。その一言が出てこない程の重圧がのしかかる。

「早く答えよ」

「い、いき、——生きたいですツ!!」

「そうか。」

「これで生きれる。重圧から開放される——そんな上手い話だが、これまでにあったか？」

「——であれば何故、満開を使わせた？」

「そ、それは——」

「返答次第では貴様の首を落とす。言葉には気をつけろ。」

「は、はいッ！」

「よし、話せ」

手には王剣が握られている。シャルルマーニュは本当に斬る気なんだ、と思わせれる。

「シャルルマーニュ様が反旗を翻して勇者様達が無抵抗に殺されるのを防ぐためです！」

「満開の機能は必要だったか。精霊の守りだけで充分ではないのか？」

「シャルルマーニュ様を倒す事を考え、神の力をその身に宿すことが必要だったですっ！」

「そうか。では次の質問だ」

シャルルマーニュはもとより勇者、銀、園子、須美には勝てない。王道踏破とはそういうものだ。破ればステータス的に一ランク下がる。その時点で守りを突破する術はなくなる。

「何故、満開の代償を伝えなかった？」

「勇者様達への心身の負担にならないようにです！伝えれば迷いが生じ発動出来ないと思ったからです！」

「それがこの結果だ。どうだ、満足か？」

「失われた機能は神樹様への供物となります！故に勇者様達は神に近い現人神となられ——」

「もういい、今から首を落とす。そこで動くな」

「なっ——、何故ですか!?!現人神になれたことは喜ばしいことの筈です！」

「喋るな。そもそもの解釈が違う。俺達は友を守るため、世界を守るため戦ったんだ。もともと現人神なぞに興味ない。」

「我が王剣で首を断たれることを誇りに思え。」

静かに、着実に距離を縮めていく。このまま行けば本当に首を断つだろう。それが大罪人への罰なのだから。

「シャル」

「――、なんだ？」

「もういいよ。シャルは人殺しなんかしないでいい。」

「そうだよ、気持ちは充分伝わったからさ！」

「そうか。その神官、幸運だな。その首を繋げて退出する事を許す。」

「は、はい!!」

幸運・まさしく奇跡に等しい。ブチ切れたシャルルマーニユの前から生存して帰還出来たのは奇跡だ。

「ありがとな、止めてくれて。」

「お安い御用だよ」

「私達は友達だからね」

紅い瞳が青い瞳へと戻る。

「さて、どうする？」

「どうする、つてなにが？」

「お前達がこんな場所嫌だと思ってるなら、俺が連れて行くことが出来るぞ？」

「う〜ん。とても魅力的な提案だけど、その後を考えるとシャルに迷惑が掛かっちゃうな〜」

「アニメとかだと、最終的にバットエンドになりやすいからな。止めとく？」

「そうだね。ここ、ちよつと不気味だけど望めばなんでも出てくるんだよ」

「それじゃあ心配ないな。でも、どこか行きたいって思ったらすぐ行ってくれ」

「うん、ありがとね〜」

「アタシの弟はもう立派なヤツだから心配ないさ。」

「そっか・やっぱ、お前らは本当にカツコイイよ」  
「シャルもね」

「だな。シャルには敵わないな」

「お、おう。ちよつと照れるな」。

「シャルが照れてるよ」

「どんな感じ!?!」

「頬が真っ赤で——」

「いい！伝えなくていいから！」

「ちえー」

「ほら、もう夜だ。良い子の皆は寝る時間だぞ」

「はーい、つてかシャルも子供だろ！」

「シャルも一緒に寝よう？」

「わかったよ。俺は椅子の上で寝るから」

「みんなで手繋いで寝ようぜ」

「ナイスアイデアだよ、ミノさん。」

「はいはい。」

シャルルマーニユを真ん中にして右が園子、左が銀。もう一人の子  
が。い。れ。ば。苦。言。を。申。し。て。た。だ。ろ。う。

「今度はいなくならないでね」

「いなくならないから安心して寝ろよ」

「うん、おや、す——み——」

「うん、おやすみ。」

少し時間を巻き戻す。そうだな。だいたい三時間前ぐらいの出来  
事だな。

「どうして——お前が——」

目の前にあるのは中ぐらいの棺。子供が入るような棺だろう。

「北野。」

棺の中には俺の友達。北野が静かに横たわっている。下半身の損傷が大きいのか布で隠されている。

「君が、シャルルマーニュ君かな？」

「はい、そうですが、なんですか？」

「君のことは息子から聞いてるよ。いつも私の息子と仲良くしてくれて本当にありがとう。」

「いえいえ、お互い様です。俺も仲良くしてもらいましたから。」

「そうか。私の息子は家ではなかなか友達の話しをしなくてね。でも、君の話しはよくしていたよ。本当に——ほんとうに——っ、すまないね、こんな形で挨拶することになっしまった。」

「妹さんがいるんですよね？」

「よく知ってるね。ようやく歩けるようになったんだ。立派なお兄ちゃんになれたのに。」

「大切にしてくださいね。」

「ええ。精一杯の愛を注いでいきたいと思ってるよ。」

「それでは、俺はここで。」

「気をつけて。うっ——」

泣けなかった。友達の死で俺は泣けなかった。進むんだ——前に進むんだ。じゃないと——

「シャルルマーニュ君ね？」

「——安芸先生。」

「着いてきてちょうだい。」

次に行く場所も決まっていな。ここは従うしかない。  
「乗って」

「？」

「安芸先生の車だろうか。」

「貴方がこの葬式に来ることはわかっていたわ。でも、それまでは何

処にいたの?」

「さつきまで海泳いでました。」

「なるほどね」

「」

「」

「何処に行くのだろうか。俺は銀達を見つけないといけないんだが、さつき電話をかけたが出ることはなかった。」

「——さあ、着いたわよ。」

「病院?」

「あれから数十分。車は病院のような場所に着いた。」

「ここに乃木さん達がいるわ。」

「——!」

「私が出れることはここまで、後は貴方が行動しないといけない。わかるわね?」

「もちろん。安芸先生、ここまでありがとうございます!」

「すぐさま車を降り、霊体化して病院に入る。」

「せめてもの罪滅ぼし。それは話しが良すぎるわね。」

そして、今に至る。須美も確認出来た。ただ、寝ていたから話して

はいないが、俺のことは覚えてないんだろうな。

「シャル。」

「どうした?」

「無理してない?」

「なに言ってるんだよ。俺は元気だよ」

「だって、疲れてるような顔してるよ?」

「——ああ。そうだな。ちよつと疲れちゃってな」

バレバレか。俺でもわかる。さつきから魔力がダダ漏れだ。制御  
が出来ないほど消耗している。

「じゃあ、早く寝ないと」

「それもそうだな。園子も早く寝ろよ?」

目を瞑ったら一瞬で、眠気——が——。

「もちろん♪シャルの寝顔見てから寝るね」

「?」

「シャル」

「」

「もう寝ちやったか」

「」

「ありがとね、約束守ってくれて」



▼情報が更新されました。

シャルルマーニュ(???)

筋力A 耐久C 俊敏B 魔力A 幸運A 宝具A+

パラメーターは本来のシャルルマーニュと同じになっている。

保有スキル

・聖騎士帝EX

聖騎士である十二勇士を統率する者に与えられる称号スキル。絶大なカリスマ、魔性への特攻、神性への特防、聖性を持つ武器への適応など。頂<sup>パーテックス</sup>点は魔性、神性どちらも属しており、効果が発動しているが本人は気づいていない。そして、このスキルにより宝具の発動を可能にする。

・魔力放出(光)A

聖人・聖女・聖騎士にのみ許される亜種魔力放出。悪属性に対しアドバンテージを有する。これも頂<sup>パーテックス</sup>点に有効だ。

・王道踏破C-

何かしらの主義を貫くことにより、ステータスの向上を行う自戒系のスキル。それを破るような真似をすると、弱体化するという欠点を持つ。

今作のシャルルマーニュの場合は「友を守る」ということを第一にしている。だが、「自分のにカッコいいことをする」ということでもステータスは上げることが出来る。しかし、前者の方が上がり幅は大きい。

・プロフィール

シャルルマーニュではなく、全くの別人。スペックは同じだが、彼が王勇と示すものは違う。もし、本来のシャルルマーニュが彼を見ても「カッコいいじゃねえか！俺にもそのカッコ良さ分けてくれよ！」としか言わないだろうが、彼としては自分本位でカッコ悪いと思っ

ている。

シャルルマーニュが十二勇士へと頼むと、十二勇士達は「ああ、いつもの無茶ぶりだな」と思いつつ、快く承諾している。オリヴィエは自分の仕える者として相応しくないのなら殺そうと思っていたが、いざ呼ばれて見てみるとシャルルマーニュに仕えるよりかは後始末などの面倒事が少なくて済むと一瞬で判断し、仕える事にした。

彼がシャルルマーニュとして現界した理由の一つとして、????が建速須佐之男命とした契約が出てくるが、まあ、それはまた別のお話で。

シャルルマーニュよりは王様に向いている半面、冒険者・馬鹿に向いていない。それ故にカッコいいか、カッコ悪いか（自分的に）で瞬時に判断が出来ず、効率がいいか悪いかで物事を判断してしまう。王道踏破があるため前者の方を優先すべきなのだが、それが唯一の欠点だろう。

常に前に出て戦ったが、たまに後ろを振り返っていた中途半端な男。

イメージ花は『オニユリ』

花言葉は『賢者』『陽気』

まさにこのシャルルマーニュを表す言葉になっている。

最後に本人から一言

☒子供を犠牲にしないと維持出来ない世界なんて滅んじまった方がいいんじゃないか？”

これから

「んっ、うう。」

眠い目を擦りながら立つ。

「あ、起きた？」

「おはよう♪」

「——ああ。おはよう、園子、銀。」

園子と銀の姿を見て気を引き締める。

「よく寝てたね〜」

「もう、十時。だっけ？」

「十時だな。そう考えると十二時間寝てたのか。」

久しぶりに十二時間とか寝てたな。まあ、そのおかげかいつも通りの調子に戻れたし、いいか。

「てか、今日学校だけど。」

「遅刻だね。」

「学校は休む。今は、お前らが最優先だ」

安芸先生ならわかってくれる。わかってくれ！

「そんなこと言って、本当は学校に行きたくないだけだろ〜？」

「三割わな。」

「残り七割は〜？」

「お前らだよ」

「凄い、極端な割合だな。」

「二つだけつてのが、シャルらしいというか。」

「そんぐらいが丁度いい。やる事が解りやすいだろ？」

「確かに。いや、それでもだろー！」

「あはは。」

と、そんな事より早く本題に入らないと。

「さて、一旦俺は帰るか」

「え、帰るの?!」

「」

「おう、風呂に入りたいしな。それに飯も食べないとだからな。あ、銀と園子は飯食ったか?」

「あ、うん・食べたけど」

「それじゃあ行ってきまーす!」

「いってらっしやくい♪」

「いってらく」

大赦のヤツらは銀と園子にはなにも出来ない。たくつ、偶像崇拜も大概にしろよ。

「——作戦会議を始めますっ!」

「いえ〜い♪」

「イエーイ・それでなににするんだ?」

・唐突に始めた作戦会議だし、解らなくて当然か。

「どりあえず、今後についてだ」

「」

「アタシ達、ずっとこのまんまなんかなー」

「心配すんな。絶対に俺が治す。」

「なにか策が?」

「今ん所三つある。」

「おお〜!」

「どんな内容?」

「天の神を倒す。神樹を伐採する。奇跡を起こす。この三つが考えうる策だ。」

「天の神・他の二つもよくわかんないけど・それ以上に天の神ってな

に?」

「神の打倒」

「それをこれから説明する。」

外の大赦関係者は全員、気絶している(させた)から問題はないな。

「天の神を簡単にすると、そうだな、世界をこうした原因だな。園子は見ただろ、あの外の光景を。」

「うん?。」

「外」

「ミツさん、落ち着いて聞いてね。」

「お、おう。」

「世界は此処、四国しか残ってない状況なんだ。」

「———はあ!?!」

「この境界内しか生物の生存は不可能な状況だ」

「で、でもさ!壁の外の光景は続いでるんだぞ!」

「あれは多分、そう見えるようにしてるだけだ。」

なんなら、宇宙にこの惑星以外ないかもしれない。まさしくゲーティアが言った独りぼっちの星ってやつか。

「信じられないな。」

「説明に戻るぞ。」

「あ、どうぞ」

「少し前、俺は勇者御記っていう日記を家で見つけた。」

「御記・それって、昔の勇者の」

「?」

「ああ。何故か俺の家に置いてあった。内容は『御影士郎』という勇者の日記だった。」

「ええ〜!」

「ビッグネームだな」

「知ってるのか?」

「この四国じゃ知らない人はいないぞ」

「うんうん。私のお婆ちゃんからよく話を聞いてたんだ。なんでも、お婆ちゃんもよく子供の頃に聞いて〜、って」

「ほへえ〜」

勇者になつたらこんだけ有名になるのか？

「それは置いといて、この日記にこんな事が書かれてたんだ。バーテックスは天の神が造り出した怪物、ってな」

「あれを造つた、つまり、親玉的な存在ってことか」

「それは解つてたけど、どうしてだろう？」

「こつからが俺の考察なんだが、」

「聞かせて、聞かせて〜♪」

「ここからは完全に俺の推理になる。違つてたら顔真っ赤だがまあ、話しとくか。」

「天の神は元々、ガイアっていう地球の防衛システムだと思う。」

「地球の防衛システムがなんで、地球ぶつ壊してるんだ？」

「」

「地球にとって不要な人を滅ぼすために地球を破壊した。それが、第三者に操られているのか、どっちかは解らない。」

「シャルはなんでそんな事を知ってるの？」

「」

「これを語ると、俺の正体もばれる。それでいいや。今は情報を共有することのほうが重要だ。」

「ガイアともう一つ、アラヤという人類の防衛システムがある。こつちは人類の滅亡を防ぐために介入する。」

「介入、もしかして、」

「ん〜？」

「園子が考えてる事と多分同じだ。俺、シャルルマーニユはアラヤによつて召喚された、と思う。」

「俺を呼んだのはアラヤじゃないと思うが、今はアラヤに呼ばれたとということにしておく。そつちのほうの説明しやすい。」

「召喚された。」

「抑止力、アラヤとガイアを合わせてそう呼ぶんだが、その中に過去、現在、未来の英雄達が記録されている。」

「英雄、過去の勇者みたいなの？」

「まあ、そんな感じだな。」

「じゃあ、シャルつて昔の人？」

「そうなるな。」

「凄い人なんだな。どんな事をした人なんだ？」

「馴染みがないだろうが、フランスつて国で王様してたんだぜ？」

「俺がシャルルマーニュとして語るのは烏滸がましい行為なんだが

まあ、神世紀に入つて約三百年経つてるからな。

「シャルが王様・想像出来ないな」

「だから王剣、つて言つてただよ」

「俺はシャルルマーニュ十二勇士つていう物語のシャルルマーニュだからな。王様するよか冒険者してる方が似合つてるさ。」

「物語・現実にいるのにな？」

「どういうこと？」

「英雄は実在した奴、実在していない奴がいるんだ。シャルルマーニュは現実と幻想に両方いたんだ。現実では堅物の、幻想では面白可笑しいシャルルマーニュが」

「シャルは面白可笑しいシャルルマーニュつてこと？」

「そうなるな。」

「なるほど」

「本来、俺が召喚される時は現実と幻想が混ざつたのになるんだが何故か幻想100%が召喚された。」

「エラー？」

「いや、多分現実100%はガイアの方にいるんだろう。そうじゃないと説明が出来ない。」

「敵つてことか。ん？ガイアにも英雄がいるの？」

「いる。答。」

あれ。じゃあなんで、ガイアは英霊を召喚しない？

「じゃあ、なんで天の神は英雄を召喚しないんだろ」

「パーテックスだけで充分とか考えてるんじゃないか？」

「いや、きつと英雄達が拒否してるんだと思う。」

「それか、ガイアもアラヤと同じくどつかの神々を召喚して力尽きた

のかもしれない。バーテックスを造るためにティアマト神でも呼んだか？

「拒否い!? 召喚って拒否出来るの!？」

「一応出来る。それに拒否した英雄を無理矢理呼んでも何もしないと思うぞ。我が強い奴らの集まりだからな」

なんなら自死すると思う。令呪とか使われる前に

「召喚されたのはシャルの一人だけ？」

「俺が確認出来るのは俺だけだ。可能性が高いのは御影士郎かな」

「その人も英雄!？」

「どうして?？」

「勇者御記に写真が挟んでたんだが」

「シャルの知り合い？」

「ん」

まあ、これも言っつていいか。

「俺自身というか、俺に似まくってるんだよな」

「三百年前にシャルがいたつてこと?？」

「いや、この俺じゃなくて、ええと、ちよつと待ってくれ」

「?」

ちよつとややこしい話しになってくるな。

「よし。まず、俺はシャルルマーニュじゃない。」

「さつきシャルルマーニュつて」

「あついや、そうじゃなくて、中身が違うんだ」

「体じゃなくて心がつてこと?？」

「そう! つまり、そういうことだ。」

「ん」

「ミノさんはあんまり深く考えないでいいよ」

「そうします。」

「元々俺は普通に生きてたんだが、なんやかんやあってこうなった。」

「なんやかんや、つて」

だつてしょうがないじゃ〜ん、本当にそうなんだもん。

「ん〜! つまりツ! シャルはシャルつてことだな!」



「だね〜♪」

「——そうだな。俺は俺だ。そこは胸張って言えるよ」

だからこそ、俺は俺の王勇を張り通すしかない。

「今のを要約すると〜シャルの元々の姿が御影士郎ってことになるね。」

「おう。」

「だいたいわかった！」

「よし、それじゃあ本題に戻るぞ」

「本題」

「まあ、長い説明だったからな。しょうがない、しょうがない。

「私達の体の治し方についてだよ、ミノさん。」

「ああ、そっか、そっか！」

「それじゃあ続けるぞ。俺、または誰かが天の神を倒すことにより、アラヤが銀と園子に供物を返してあげようと思うんじゃないかと思っただ。」

「なんで、ここでアラヤ？」

「おっと、説明し忘れてた。神樹様は元々アラヤの可能性が大だ。」

「ええ〜!？」

「それか、アラヤが呼んだ八百万の神か。どっちかだな。今はまとめてアラヤで説明しとくから聞いてくれ」

「う、うん。」

「まあ、この策は無理だと思う。その理由として二つ。天の神が姿を表さない。そもそも俺一人じゃあ勝てない。だな」

「シャルが勝てない!？」

「」

「神様とか概念はそういうもんだ。」

「シャルマーニユに神殺しの伝説はないしな。」

「それじゃあ、二つ目の策を——」

「却下だね。」

「流石に神樹様を伐採するのはなく」

「だろうな。そう言われると思ってたよ」

神樹が結界を維持しているのは解っている。もし、神樹を伐採すれば結果も維持出来ず人類はそこで終了を迎える。

「それじゃあ、三つ目は？」

「奇跡を起こす、だったけ？」

「ああ。これはそのまんまだな。」

「具体的には？」

「十二勇士の武器にデュランダルっていう武器がある。その柄の中には凄い物が入っててな、それを使って奇跡を起こす。」

「おお！じゃあ早速やってみよう！」

「——だな！じゃあ試しにやってみるか！」

「ねえ、シャル？」

「ん、どうした？」

「そんな美味しい話しあつたっけ」

「——」

「もしかして、シャル」

「全部お見通ししてことか、流石だな。」

「奇跡を起こすってことはそういうことなんだよ。」

「なにを払う気なの？」

「最悪の場合、俺自身だ。」

「——っ！」

あの時、ローランがした事を俺もしようとした。誰の記憶にも残らない。それでも、仲間を取った。そんなカッコいい最期あるかよ。

「それだつたらしくなくていいよ。」

「そうだよ！シャルがいなくなるなら、アタシ達はこのままでいいからさっ！」

「そっか。でも、俺はお前らを治すのを絶対に諦めない。なにか方法がある筈なんだ。」

「そこはみんなでじっくり考えていこう、ね？」

「そうだよ！みんな幸せの方法で治す方法を見つけよう！」

「——ああ。」

みんな幸せか。そんな方法あるのだろうか。いや、なくても作る。

それを今後の目標として置く。何年後になってもいい、また四人で笑える日がくれば、それだけでいい。

## 奇跡の始まり【エイプリルフール】

「——という訳で微小特異点だ。」

特異点・本来は存在しない過去。何らかの歴史介入により発生し、後の人類史に影響を与える。今回は微小特異点であるため一人二人の運命を狂わせる程度だが、魔力リソースを確保するためカルデアは解決に向かう。

「ふむ。大きさや場所は？」

「それはこれを観てもらった方が早い。」

「これは——」

そう言い、モニターに映し出されたのは——

「ほとんど真つ赤だな。」

「日本？」

「ああ。今回の微小特異点は日本全域で発生している。特に中部地方での反応が強い。従って、今回は諏訪へとレイシフトし、聖杯を探索、回収することを目標にする。」

「ちよつといいかな、ダヴィンチちゃん？」

「なにかな、藤丸くん。」

「日本全域で発生してるのに微小特異点なの？」

「・・・そう言われるとそうですね。」

「トリスメギストスIIはそう判断した。この特異点は後の人類史には一切影響を与えない。私もこれには疑問を持ったけど、念の為、シオンが調査してるよ。」

トリスメギストスII。簡単に説明すると、未来を予測したり、レイシフトを可能にする装置となる。

「さて、今回の同行サーヴァントを発表しよう。入ってきていいよ——！」

「よう。」

「冒険か、マスター!？」

「おお〜！」

「村正さんにシャルルマーニュさんまで！」

「この二人のみしかレイシフト適正はなかったけど〜 戦力を考えると充分と言えるだろう。」

「それより、シャルルマーニュが背負ってるバツクはなんだ？」

「これか？これはブラダマンテが詰めてくれたんだ。え〜っと、中身は 弁当とお菓子だな〜！」

「遠足気分——！！」

「この騎士様はわかるが、なんで儂なんだい？儂は刀鍛冶だぞ」

「今回はレイシフト適正が少ない。だから、こちらも猫の手を借りたい状況なんだ」

「しようがねえか あんま戦場での働きは期待しねえでくれよ？」

「不安になつてきた」

「説明はこれぐらいにして早速レイシフトしてもらおう。準備が終わり次第向かってもらう、いいね？」

「了解っ！」

「ダメだ、繋がらない。」

「バラバラにならずレイシフト出来たのはよかった。だが、カルデアとの通信が困難になってしまった。」

「う〜ん それは困ったな。」

「とりあえず現地人でも探そうぜ。まずは現状を知らねえとな」

「それもそうだね。」

状況把握 ．それが一番重要だと、これまでの旅で理解している。

「丁度よく、農作業してる人がいるな。話しかけてこいよ、儂達は霊体化して近くに控えとくから心配すんな」

「ええ、霊体化すんのかあ」

「お前さんは自分の格好見てから言いやがれ。逃げられたら責任取れんのか？」

「すみません。」

「あはは、それじゃあ行ってくるね。」

「ああ。」

「なんかあつたらすぐ実体化するからな。」

そう言い、二人は粒子になって姿を消した。厳密にはそこにいるが見えないだけの状態だ。

「あのー！すみませーん！」

「んっ？」

「ちよつと話しいですかー!?!」

「——へえ、そう来たか。」

ゆっくりとこちらを振り向き、藤丸の顔を見て何か納得しているような表情を取る青年。

「どうしましたかー!?!」

「いや、なんでもない。」

鍬を地面に刺し、藤丸に近づいていく。

「それで、何のようだ。人類最後のマスター？」

「っ、なんで俺の事を知ってるんですか。」

「とりあえず移動するぞ。あ、サーヴァントは実体化するなよ、ここじゃあ騒ぎになる。」

「解りました。」

「着いてきてくれ」

「。」

「。。。。」

「。。。。」

「諏訪大社神宮。」

「ちよつと待つててくれ」

「あ、はい。」

藤丸達を鳥居で待たせ、彼は神宮の中に入っていく。

「どうする、マスター？」

「ただの農民じゃないな。あの立ち姿は騎士のそれだ」

「殺意とか感じないし、大丈夫じゃないかな？」

「姿は見えないが声だけを発する。」

「そうか。」

「マスターがそう言うなら、俺達はそれに従うだけだからな。」

「うん、ありがとう。」

そうこうしている内に青年が戻ってくる。

「人よけは終わったから入っていいぞ。」

「はい。」

「さて、何を聞きたい？」

「なんで、俺のことを知ってたんですか？」

「そうだな。俺もサーヴァントだからだな。」

「?!」

「俺は抑止力から召喚されたサーヴァントだ。この特異点。いや、この世界を救うために現界した。」

「ここを特異点ではなく、世界と表現したのが気になるが今はそこを  
考える時間じゃない。」

「じゃあ、協力してくれるってことですか？」

「ああ。まあ、聖杯を回収するまでだけだな」

「それでも嬉しいです！え〜つと。お名前なんでしたっけ？」

「おっと、自己紹介がまだだったな。」

「あ、はい。俺は藤丸 立香って言います。」

「俺は、つとその前に藤丸が連れてるサーヴァントを見せてくれないか?」

「いいですよ。」

「千子 村正だ。」

「俺はシャルルマーニュ! アンタの真名はなんだい?」

「おおく マジか。」

「おい?」

これが普通の反応だろう。だって、ねえ? 一番推しているサーヴァントであるシャルルマーニュが目の前にくれば思考が停止するってもんよ。

「おつと、すまん。俺の真名だったな。俺は?? ??だ。千子村正の疑似サーヴァントとして此度は現界した。」

「村正の疑似サーヴァント。え、いやだって村正は。え?」

「一本、打ってみろ」

「俺は打てないぞ。俺はただ、千子村正に刀を打ってもらってるだけだ。基本的に表面に出てるのは俺だ。ほれ、これが刀だ」

何処からか手に刀が現れる。エミヤの投影魔術のような現れかただ。

「おおく」

「確かに俺が打った刀だ。」

「これで解ったか?」

「おう。」

「じゃあ、敵について話そう。」

「魔術師ですか?」

「いや、それはない。魔術師は俺が全員殺した。」

「殺した」

さらっと、とんでもない発言をする。それがコイツの欠点だろう。村正に影響を受けてるのか、それとも最初からこうだったのかは解らない。

「ああ。最近辻褄が合わなくなってな、特異点になる前にと思ったが



失敗だったな。」

「その口ぶりからして、別のがいんのか？」

「この世界を簡単に説明すると、神代の時代に戻った。この一言に  
尽きるだろうな。」

「神代。つまり、神がいるのか？」

「そうだな。まあ、コイツが十中八九聖杯を持ってるだろうな。」

「何処にいるんですか？」

「解らん。」

「解らん、つて。」

「とりあえず俺が出来る説明は終わりだ。次にこの町を案内しよう——  
——ちよつと隠れてくれ」

「う、うん！」

先程とは違う、険しい顔をしてそう言う彼に従い身を隠す。サー  
ヴァント達は霊体化する。

「——??いる!？」

「攻めてきたか？」

「イエス!さあ、行くわよ！」

「わかった！」

突然の出来事で意味が解らなかったが、一つ解ったことがある。??  
は自分達と話していた時とは違い、とても優しい声で喋っていた。そ  
こから考えると、今来た娘は彼の家族か、それとも——

「追いかけるぞ、マスター。」

「そうだね。」

「マスターは儂が担ぐ。」

「つまり、俺が先行しろってことだな！」

「物わかりがよくて助かる。」

そして、彼らは遭遇する。どの時代、どの異聞帯にもいなかった生  
物に。

「ふツ、はツ、せいツ!!」

「掩護するぞ!」

「——ああ!頼んだ!」

「誰!?!」

「掩護しに来ました!」

「白いブクブクしたヤツが敵か。しょうがねえ、七どぐらいぶった斬るか!」

「ちよつと?!?! 一体全体どうなってるの!?!」

「話しは後だ、歌野。さくつと倒すぞ」

「——そうね。今は目の前のことにフルパワーで行こう!」

「マスターは死にたくないならサーヴァントから離れるな!」

「は、はい!」

「マスターは儂が護衛する。悪いが頼んだぞ!」

「おう!任された!」

王剣が輝きを放つ。

「!——歌野!一旦下がれ!」

「オツケー!」

「ナイスアシスト!」

これでお構いなしに放つことが出来る。

「永続不変の輝き、千変無限の輝き——!」

万夫不当の騎士達よ、我が王勇を指し示せ!

——王勇<sup>ジュ</sup>を<sup>ワ</sup>示<sup>ユ</sup>せ、<sup>ズ</sup>遍<sup>オ</sup>く<sup>ル</sup>世<sup>ド</sup>を<sup>ル</sup>巡<sup>ル</sup>る十二の輝剣!」

「ひゅ〜♪」

「——。」

至高の十三撃により、あらかたのバーテックスは倒された。

「よし、戻るぞ。」

「うん。」

「しっかりと説明してね。」

「はい。わかってます。」

将来、絶対に尻に敷かれるなど全員が思った。

「ふむふむ、なるほど。つまり、新しい仲間ってことね！」  
「うたのん、本当にわかってる？」

「だいたいそんな感じだな。」

「反応からして最初の内容しかわかってないような。」

「それで、藤丸くんはうどん派？そば派？」

「うくん、そば？」

「そう！それじゃあ私達はベストフレンドね！」

「ど、どうも。」

「いつも通りだから馴れてくれ。」

「あはは。」

「??が作ったそばを食べて行きなさい！友好の証よ！ってことで、今日はそばにしましょう？」

「あー、はいはい。今日は蕎麦にしますよ。」

「ありがとうございます。」

「ちよつと待っててくれ。」

「お茶、出しますね」

一気にかっ飛ばして決戦。

「遅せえ！」

「こちら最弱の依代なんだ！大目に見ろ！」

シャルルマーニュが作ってくれ道を二人で爆速で走る。

「よし、ここまで来たら——」

草薙剣を出すだけだ——それで終わる。

「貸しな。儂が使う」

「はあ!?——あ、ちよ!」

「此処に至るは数多の研鑽」

世界が一変する。燃え盛る大地に無数に刺さる刀。

「築きに築いた刀塚」

刀が粒子となり村正の手に集まっていく。草薙剣も同じように――

「縁起を持って宿業を断つ」

そして、一つの剣となす。

「八重垣造るは千子の刃」

振りかざす。究極の一にも負けず劣らずの刀を天の神へと――

「——村正アア!!!令呪をツ!!!」

「フツ——ちったあ成仏していきなああ!!!」

「ぐう、——ぐああ!!!」

熱風により、立っていられず吹き飛ばされてしまう。だが、微かに

——笑顔が見えた。

## 友達がいらない日々

「おはようー！」

土日を含めたら、五日間学校に来てなかったからな。皆の反応が怖いが元気よく挨拶して入室する。

「シャル君、大丈夫だった。」

「辛かったら言ってるね？」

「何でも相談になるからな？」

「——」

解ってる。悪気がない言葉だつて解ってる。俺を気遣った言葉だつて解ってる。——ああ、吐き気がする。

「シャル君。」

「あ、ああ、ありがとな。」

無邪気な悪がここまでキツイものだとはいミリも思いもしなかった。

「——さようなら。」

「「さようなら（ー）！」」

「気をつけて帰ってくださいね。」

「ふう。」

やっと終わった。全員、俺を腫れ物みたいに接してきやがって

「シャルルマーニュ君、ちよつといい？」

「わかりました。」

安芸先生が呼び止める。御役目関係、だな。

「それで、話してなんですか？」

全クラスの生徒達が下校し、この学校にいるのは学校職員と俺達のみになった。

「今日、鷲尾さんが目を覚ましたわ。」

「記憶はありましたか？」

「いいえ、二年分の記憶が抜け落ちてました。」

「先生は満開の代償を知ってましたか？」

「ごめんなさい。」

「——いいでしょう。それを貴方の誠意として受け取るよ。きっとアイツらもそこまで怒ってないよ」

生徒想いの先生が理由なしに黙ってるわけがない。どうせ大赦関係がなんかしたんだろ。それを理由に謝ったら正直キレてた。

「——あり、が、とうっ、」

「」

どんなに大人になっても泣く時は泣く。俺は、それが出来る人を本当に羨ましいと思うよ。

「——見苦しい所を見せたわね。」

「いいですよ。話しに戻りましょう」

「そうね。現状、勇者三人がダウンして戦えるのはシャルルマーニュ君だけになったわ。」

「」

俺一人でも、なんとか出来るだろう。前の総攻撃は俺も死を覚悟して挑まないと負けるかもだが

「大赦はお家柄を重視して、一般からは勇者を出さなかった。出たとしても、その子を有力な家の養子にしていたわ。」

「——そこまで。大赦は馬鹿なのか」

世界の危機なお家柄とか考えてる場合かよ。俺が指揮した方がまだ良さそうだぞ

「バーテックスの侵攻はこれだけでは終わらない。つまり——」

「新しい勇者を補充する。」

「そして、まず一人は鷲尾さんに決まりました。」

「はあ!？」

「ここまで来ると、俺の世界最高の愚者の称号を渡したいぐらいだ！」

「今は鷲尾 須美ではなく、東郷 美森になってるわ。」

「名前を変える必要は？」

「鷲尾さんは元々、東郷の性だったのげけど勇者適正があつたことから鷲尾家の養子になったの」

「なるほど。」

有力なお家柄。そう考えると銀も須美もお嬢様だったのか。

「大赦は次の勇者を探すために全国の少女に血液検査を施します。そして、適正値が高かった者をいくつかのグループにしてまとめます。」

血液検査で勇者の適正値がわかるのか。

「そして、シャルルマーニュ君と東郷さんには一番選ばれる可能性が高いグループに入ってもらおうわ。」

「了解です。」

「そこで、大赦からの忠告よ。満開と外に——」

「それは了解出来ません。」

「それでいいわ。」

「いいんですか？」

「大赦は貴方を縛れる力を持ってないわ。勇者システムなしで戦える程強くないものだから、貴方が最善だと思いう行動をしてほしい。」

「——当然だ。大赦は最初っから当てにしない。」

「頼もしい限りね。それじゃあ、決まり次第連絡するわ。その間、自由に過ごしてちょうだい。学校に来るもよし、あの子達と遊ぶのもよし」

「俺はいつも通りですよ。いつも通りが丁度いい。」

「そう。それじゃあまた明日。」

「ええ。さようなら」

「はい、さようなら。」

教室を後にする。正直、学校には来たくないが、目の前に行きたくても行けない友達がいるからな、ちゃんと笑顔で行かないといけな  
い。

ああ、下校がこんな静かのも久々だな。



## 違う道

「ふう、これで一段落ついたな。」

勇者として一番選ばれる可能性が高い讃州中学校に入学するため、人生初めてのお引越しをすることになった。ちなみにこの家は大叔が用意してました。後でお礼として殴り込みに行こー。

「さて、と。」

「こころへんに馴れないとだし、ちよつと歩くか。」

「よし」

鍵が閉まったことをしつかり確認して、と。

「——こんにちは——」

「こんにちは。えつと、君は？」

赤い髪。どこかで見たような気がする。

「隣に住んでる、結城友奈ですつ！」

「お隣さんか。挨拶行き忘れてたな、すまねえ。」

「ううん、全然大丈夫だよ。それより、あなたのお名前は？」

「おつと、そうだった。俺の名前はシャルルマーニユ！気軽にシャルって呼んでくれ！」

あの時したように、そう自己紹介する。これがやっぱり定番だな。

「うん！宜しくねシャルくん！」

「おう。宜しく友奈——あ、すまん。」

「大丈夫、好きなように呼んでいいよ。」

「それじゃあ、友奈って呼ばせてもらうぜ。」

何故か、ポロツと口から溢れてしまった。

「うん。あ、お近づきのしるしに押し花上げるよ。好きなを選んでいよ。」

「おう、どれも綺麗だな。友奈が作ったのか？」

「えへへ」

「へえ、凄いな。ん、これは？」

「それはガザニアだよ。これにする？」

「そうだな。これにするよ」

「はいっ！」

「ありがとな。大切にするよ」

「うんっ！それじゃあね〜！」

「おう。」

「・・・ 凄いな。娘だったな。友奈・勇者御記に書かれてたのを思い出した。同じ名前なだけか。それとも何か繋がりがあるのか。」

「・・・にしても本当に綺麗だな。このまま散策して落としたら申し訳ないから仕舞ってから行くか。」

あれから数日が経ち、やつとこの街に馴れてきた。そろそろ銀達に会いに行かないとだな。

／ピンポーン／

「んっ。はい！」

「誰だ？大赦関係者か。そうだったらこの家のお礼として殴り飛ばそう。」

「あ、シャルくん。」

「友奈か。どうした？」

「私のお隣にお引越して来た娘がいるんだ。一緒に挨拶しに行かない？」

「俺以外に。わかった。ちょっと待っていてくれ」

前はなにも渡せなかったが、今日はしっかり用意している。だいたいいこういうのってお菓子でいいんだよな？

「よし、行くか。」

「うん。」

「「こんにちはは〜！」」

「えっ?」

「――。」

その姿を見て、思わず声がでなくなる。

「あながこの家に住むの?」

「え、ええ。そうだけど。」

「やったー!またまたお隣さんが増えたー!私の名前は結城 友奈!  
ほら、シャル君も!」

「お、おう。俺の名前はシャルルマーニュ!気軽にシャルって呼んでくれ!」

やべ、不審がられないようにしないと。

「私は・東郷 美森。」

「東郷さん!カツコイイ名前だねー」

「そ、そう?」

「おう!めっちゃカツコイイぜ!」

本当にカツコイイよ。。

「そうだ!お近づきのしるしに押し花あげる!好きなを選んでいいよ。」

「あ、ありがとう。」

やっぱ、友奈が作った押し花は綺麗だな。

「これは?」

「この花はオニユリって言ってね。見たことない花だったから一輪だけ持って帰って調べたんだ。花言葉は『愉快』『陽気』『華麗』『賢者』だよ。これにする?」

凄いな・愉快、陽気、華麗は一まとまりだけど、賢者って。。。どっから来たんだよ。

「これに、する。」

「はいっ！」

「じゃ、俺からも。」はい」

「あ、ありがとう。」

俺も残るやつに「し」といた方がよかつたかなー。

「これから宜しくな！東郷。」

「宜しく！」

「う、うん。宜しく。」

## 結城友奈は勇者である 勇者部発足

今日は入学式。中学校二回目だからなんとも言えないが、他の生徒達はワクワクドキドキだろうな。まあ、俺は別の案件で精神が休まらないからな。特に大赦関係で

「部活か？」

今、何をしているかというところ、学校を散策しています。入学式は終わり、クラス発表が終わった。後は各自解散か、部活を見るかになっている。

「なしだな。」

正直、部活をやる余裕なんてない。野球するにせよサッカーをするにせよお金がかかる。今は安定した収入がない以上、無駄遣いは出来ない。

「？」

青春を満喫する、かあゝ最初立てた目標なんて今じゃ実現不可能だな。はあゝ折角の二度目が。

「ねえ、ちよつといい？」

「なんだい？」

肩に手を乗せられたら逃げることすら出来ないからな。無視するっていう選択肢はない。

「君・シャルルマーニュ、っていう名前だったりする？」

「そうだけど」

「何だこの、黄色の髪の女性はどっかで会ったけな。」

「まだ、どこに入部するか決めてないわよね？」

「決めてないな」

部活勧誘か。

「アタシが部長してる部に入らない？」

「なんて言う部なんだ？」

文芸部なら

「勇者部よ」

「——大赦関係者か？」

俺の思い違いならごめんだけど

「まあ——ざっくり言うとならうね。」

「入部します。」

「それじゃあ、部室に行つて！」

「あ、ちよ——」

「場所は家庭科準備室よ——」

「行つちまつた。」

「最近活発な女子が多いな。いい傾向だとは思うが

「よし、ここだな。」

入学式に配られた学校の案内図を見ながら到着。

「失礼します。誰もいないのか」

もしかして、今年から始まる部なのか？

「まあ、いいか。」

大赦関係者。つまり、この部は勇者適正値が高いやつらのまとまりつてことだな。安芸先生から聞いた情報だと過去一で高い適正値が出たとか。適正値高い＝強い、なのか？そこらへん聞いとけばよかった。

銀と園子が中学生になってたらどの部に入ってたかなー。銀は運動部とか。いや、弟さん達のお世話あるだろうし。園子はー。寝てる所しか想像出来ん。

「んっ？」

扉が結構な勢いで開く。物は大切に扱いましょう。

「——お、ちゃんというわね。」

「シャルくんも入部したの!？」

「おう。」

「シャルルマーニュ君は運動部とばかり思ってたわ。」

「シャルルでいいぞ、東郷。」

懐かしいな。結局、あれは俺のせいだったのだろうか。

「あら、お知り合いだったの?」

「お隣さんなんです。」

「あらまあ。」

「そのニヤニヤ止めてもらっていいか?」

面白いものを見つけた子供並に笑顔になりやがって。

「まあいいわ。とりあえず、三人には入部届を書いてもらわ

「はい。」

「わかった。」

「保護者氏名はいいんですか?」

「そんなの気にせず書いちゃって」

「は、はい。」

自分の名前を書く所だけしかないな。判子とかはいいみたいだ。

「書き終わってたぞ」

「終わりましたー!」

「どうぞ。」

「じゃ、これで入部ね。」

「はやっ!」

流石に早すぎないか。先生に渡してから入部じゃないっけ?

「まずは、アタシの自己紹介からね。アタシはこの部活の部長! 犬吠

埼 風よ。アタシのことは尊敬を込めて部長と呼びなさい!」

「はい、部長!」

「わかりました、部長。」

「この場合は犬吠埼部長、風部長どっちだ?」

「どっちでもいいわ。ただし、尊敬をしつかり込めなさい!」

「わかりました！風先輩！」

「それもありね。」

「しっかり尊敬の念を込めたからセーフだな。」

「犬吠埼先輩。これから何するんですか？」

「よくぞ聞いてくれた、東郷よ。」

先輩でもおーけー、っと。

「この部、勇者部の内容を一言で言うならば――」

「」

「なにか黒板に書いていく。」

「――世のため人のため行動する。これよ！」

「おおう！」

「具体的にはなにをするんですか？」

「ボランティア活動でもするののか？」

「まあ、そうね。あとは――他の部の助っ人とか？」

「なんか、あやふやな部だな。」

「いいですね、人助け！」

つまり、この部は慈善行動みたいなことをする部ってことか。

「まず、この部を認知させるためにホームページみたいなの作りたいんだけど、誰か機械に詳しいのいる？」

「私、スマホ使うので精一杯です。」

「俺もだな。」

「じゃあ、私が」

「助かるわ、東郷。明日、みんなで作っていきましょ」

「わかった。知識ぶち込んでくるな。」

「私も調べてきます！」

ホームページの作り方ってなんだけ……いつもは使う側だからな。  
気にしたこともない。

「それじゃあ今日は解散。帰っていいわよ」

「じゃ、帰ろっか東郷さん。」

「そうね。それじゃあまた明日、犬吠埼先輩。」

「さようなら〜！」



「さようなら。」

「気をつけてな。」

友奈は東郷の車椅子を押して退出していく。

「言わないのか？」

「まあね。まだ決まった訳じゃないし」

「そっか。それじゃあ、俺も帰る。」

もし、ここが選ばれなかったらまた転校するだけだからな。

「また明日」

「さようなら」

さて、どうするべきか。この一年は襲撃は来ないと確定しているが、心構えはしないといけない。来ないと思って心構えをしていないと来た時に負けるしな。

「」

そもそも戦わせたくないな。それが実現出来たらどれだけいいか。いや、そうするために戦うんだ。そして、俺に足りないナニかもついでに見つけよう。

## 仲良くするのが一番

ホームページ作りを終えた次の日の放課後。今日も今日とて昨日と同じく部室に集まっていた。

「今日は親睦を深めていくわよー!」

「わあー!」

「イエーイ!」

とりあえず友奈に合わせて拍手しとく。

「やっぱり、いい関係作りは相手を知ることから始まるもんね。ってことで、じゃんじゃん自分のこと話していきましょー!」

「確かに、犬吠埼先輩の言うとおりですね。」

「でしよ〜?」

「はいはい!私の自己紹介します。」

「おっ、いいわね〜」

「自己紹介タイプか。」

昨日のクラスの学活でやったことをすればいいな。

「私は結城 友奈、一年三組です。趣味は押し花ですっ」

「ふむふむ。なかなか女子力が高いわね。」

「そう。だ。な?」

待って、女子力ってなに?そして東郷は凄い勢いでなに書いてやがる。

「よし。それじゃあ次は私ですね。」

「行ってみよー」

「私は東郷 美森、一年三組です。趣味は菓子作りです。――」

「なんか聞こえたわね。」

「ああ。」

ボソッと聞こえた、『友奈ちゃんの観察』はあまり触れないでおう。

「次はシャルくんだね」

「え、次俺?」

「アタシは部長だから、最後を締め括らないといけないからね。」  
「それじゃあしようがない。」

「そうね。犬吠埼先輩の素晴らしい自己紹介で締め括るためにシャルル君にやってもらいましょ。」

「うんうん！」

「ちよつとお！なんかプレッシャーかけてない!？」

ちなみに俺の呼び名に関しては昨日、そういう約束をした。やっぱ、マーニユの部分まで入れると長いからな。

「さて、じゃあやるか。俺はシャルルマーニユ、一年四組だ。」

「あら、シャルはお二人と同じじゃないのね。」

「まあ、それはしゃあない。」

「でもシャル君の噂は聞くよ。」

「そうね。」

「二年の所まで伝わってるのが恐ろしいわね。」

「はい？俺の噂ってなんだ？」

そんな目立った行動はしてないんだが？

「数学の授業、シャル君がしてるって。」

「私の所には凄いイケメンがくっついて。」

「一つ目は確かに俺がしたけど。」

数学の授業で隣の人に教えてたら、先生からやらされただけなんだが。二つ目はシャルルマーニユだからしようがない。

「てか、アンタそんなに頭いいの？」

「シャルル君は馬鹿っぽく見えて凄く頭いいですよ。」

「バカっぽいつて。」

ちよつと傷ついた。

「自己紹介の続きしていいか？」

「どうぞ、どうぞ。」

「いいよ。」

「えくつと、趣味はく料理、だな。」

前まではf a t eしたりしてたけど、この世界にはないからな。なにもする事がない。

「へえ、料理出来るのね。なんか以外ね」

「ですわ。」

「お前らは遠慮って言葉知ってる？」

今日だけで、心に穴があいたよ。

「それでは犬吠埼先輩。締め括りの自己紹介を」

「ふっふっ。いいわ。アタシのありがた〜い自己紹介をしてあげる。」

「よし、きた。」

スマホを取り出す。

「録画は許可してませんっ！」

「ダメかあ〜！」

「一語一句覚えないと。」

「友奈ちゃん。」

怖い怖い！めっちゃ隣の人が怖いんだけど！

「アタシはっ！犬吠埼 風、二年一組よ。趣味はうどん！好きな食べ

物も、うどん！」

「うどんっ！いいですよね！」

「私もうどん、好きです。」

「俺は、どっちかと言われると好きの部類だな。」

「うどんは女子力を上げる食べ物っ！」

「？」

「ん〜??？」

「あれ。」

それはちよつと意味がわかんないですね。

「まあ、それは置いといて。どう？締め括りの自己紹介になったで

しょっ。」

「勢いだけなら。」

「とても覚えやすい自己紹介だったです。」

「うどんが大好きなんだなって♪」

「うくん。まあ、いいわ。」

自己紹介で締め括るってのが無茶だったな。

「じゃあ、明日の事だけ。」

「明日は学校ないですし、早速依頼を——」

「来てないの。」

「えっ？」

「まだ、依頼が来てないの。」

「まだ出来て二日目だしな。そう早く認知される訳じゃないし、しようがない。」

「そうよ、友奈ちゃん。元気出して。」

「うう。」

「そこまで落ち込まなくても。」

「てことで、明日はお花見しに行きましょう！」

「——お花見っ！」

「立ち直り早ッ!!」

「流石ね、友奈ちゃん。」

「え？」

「びつくりの立ち直りスピードだよ。」

「ま、まあいいわ。明日は朝十時に現地集合、それともここに集合してからにする？」

「何処でする予定なんだ？」

「名前が出てこないのよ。ほら、え〜つと、あの桜並木が凄いいところ。」

「そう言われても。」

「あ！私わかります！」

「ナイス！それじゃあシャルと東郷は友奈に案内してもらって」

「宜しくね、友奈ちゃん。」

「頼んだ、友奈。」

「うん、任せて」

「それじゃあ今日は解散。帰りましょ」

「は〜い。」

「自己紹介しかしてないような。」

「まあまあ、深いことは考えずに」

「まあ、いつか。」

「まだ入部して三日だしな。つとか言ったらあつという間に中学

終わっちゃうけど  
ぐすつ。

## 灯火√【1】

遠足からの帰り道、四人で下校していると鈴の音が鳴り響いた。その直後、世界一面が花卉で覆われていく。次に目を開ければ樹海と呼ばれる神樹の結界へと変貌している。

「今回は二体か・どうする、リーダー。」

「そーきたか。」

視界の先、犬橋の方から二体の異型な怪物が進行してきている。珠のようなものが何個も繋がっているバーテックスと周りに六枚の板を浮かしているバーテックス。どちらも形容し辛い姿になっている。

「シャルは二体にドデカイの同時に叩き込んでくれる？」

「了解。」

「そういう時はエリユプシオンだな。」

「その後はミノさんと私で片方ずつ相手するから場合場合によって掩护でいい〜？」

「なかなかハードだな。」

「そのうち、私は？」

「わっしーは後方から掩护しといて〜」

「よし、決まり！シャル！」

「オツケー！」

銀達より少し速いスピードでバーテックスへと近づく。ジュウユーズを棍棒へと持ち替え土の元素を纏わせる。

「エリユプシオンッ！」

「まず一撃目で大地を隆起させ——」

「はあー、——せやッ!!」

火の元素を纏わせた二撃目で隆起した岩をバーテックス目掛け放つ。炎を纏った岩が二体のバーテックスに当たり、体勢を崩す。

「園子！アタシは気持ち悪い方を叩く！」

「どつちも気持ち悪いと思うんよ。」

銀が珠珠、園子が板を浮かせてる方へと攻撃を仕掛ける。

「お、——りゃあ!!」

「ッ——!」

銀の攻撃は通り、園子の攻撃は板に防がれる。あの板。厄介だな。

「トルナード!」

水の元素を纏わせたジュワユーズで斬り、風を纏わせたアストルフオの馬上槍で突く。氷共々砕け散る。

「これで一枚。」

「盾の排除をお願い!」

「任された!」

よしよし順調だな。珠珠の方も須美と銀で押している。

「まとめて薙ぎ——ぐッ!!」

盾で攻撃も出来るのか!?

「大丈夫、シャル!」

「おう!」

空中で受けたため、かなり距離を離されてしまった。

「!——矢がくるぞお!!」

「矢!?!」

「っ!」

「みんな!この下にッ!」

「オレはこつちで避ける!」

矢が降る範囲を見ると、俺は端のほうにいる。真ん中にいる園子の下へと行くより範囲外に出た方が速い。

「どつから!」

矢を振らせている要因を探す。珠珠に盾にもそんな能力はなかった。つまり、三体目がいるということ。

「いた。あれが三体目か。」

次の矢がこない内に奴を倒さないとジリ貧になる。射出口のようなバーテックスへと駆け——

「きゃああ!」



「っ！」

「——須美！園子！」

背後で悲鳴が聞こえた。目を向けた頃には須美と園子へバーテックスの無慈悲な追撃が迫る。

「大丈夫——っ、アストルフオの槍!!」

須美と園子に駆け寄り、様態を確認しようとするが第二射が放たれる。完全に須美と園子の命を奪う軌道だ。

「ハァー、セイッ！」

槍に風の元気を纏わせ振るう。小さな竜巻が吹き、矢の軌道をずらす。

「銀！二人を連れて此処を離れろ！」

「っ——、わかった！」

とりあえず、これで二人は助かる。後は。俺だな。

「ふう——我が名シャルルマーニュ！此処に汝らを打ち倒すものである！」

啖呵を切り出し走り出す。目標は射出口。それ以外は無視だ。

「邪魔だッ！」

途中、珠珠に邪魔されそうになるが水の元素を纏わせたジュワユーズで斬りつけ凍らせる。これで少しの間動けない筈だ。

「何処撃つかわかってる矢なんて怖かねえぜ！」

射出口に粒子のようなものが集まり、俺へと放たれる。だが、さつと横にずれることで避ける。

「喰らい——ッ、はあ?!」

さつき避けた筈の矢が俺の左足を貫通して通っていった。

「反射も出来んのか！便利だなあ！」

あの板か。まあ、まずは——

「お前は倒れてろ！」

ジュワユーズをフランベルジュに持ち替え射出口を一閃。これでコイツはもう矢を放てない。

「ふう、——ふう。」

一旦距離を取り、呼吸を整える。

「この程度なら大丈夫だな。」

左足はまだ繋がってるし、まだ動く。これなら心配はいらないな。「うおっと。」

珠珠の薙ぎ払いが来るがジャンプして回避。

「ぐっ——、うおらあー！」

盾で叩き落されそうになるが、持ち堪え水の元素を纏わせたジユワユーズで斬りつけ凍らせる。

「おらあー！二枚目え！」

先程同様、氷共々砕け散る。

「——っ、ちっ、掠ったか！」

珠珠の先についた針が頭を狙い、迫るがこれを回避——失敗。右足を掠っていった。

「っ！——神経毒か！」

地面に着地し、立とうとするが右足に力が入らず体勢を崩し地面に手をつく。

「くっ！」

その隙を相手が見逃すわけがなく、珠珠の振り降ろしが迫る。なんとか片足で横に回避する。

「ぐう——！！！」

今度は盾が俺を押し潰そうとしてくる。今度は避けられず、なんとか両腕で盾を受け止める。

「はあっ！」

五大元素を圧縮し、至近距離で爆発させる。その爆風で盾から逃れる。

「やばくなってきたな。」

毒が治る気配がしない。このままだと負ける。一か八かに賭けるか。

「ジユワユーズ、力を貸してくれるか？」

王剣はなんの反応も示さない。

「この一度きりでいい！頼むから力を貸してくれ！」  
なんの反応も示さない。

「このままじゃ全員死ぬ！それだけは——それだけは絶対に避けな  
いとイケないっ!!」

微かにだが輝いた。

「!——トリガー、セツト！行くぞ、ジユワユーズ！」

これが決定打になることを信じて放つ。

「永続<sup>??</sup>の輝き、??無限の彩り——!

万夫不当の騎士達よ、我が??を指し示せ!

——??<sup>ジュ</sup>を示せ、遍<sup>ユ</sup>く世を巡<sup>オ</sup>る十二の輝<sup>ド</sup>剣<sup>ル</sup>」

ジユワユーズは俺が持つ一本限り。無理矢理発動したためか、それ  
ともシャルルマーニユの王勇が示せてないのかはわからない。

「うおおおお!!」

だが、この一本で倒さなければいけない。例え、盾が四枚立ち塞  
がっても——

.....  
「」

二体の撃退を確認。

「何処にいやがる」

いくら周りを探しても三体目が見つからない。

「っ」

奇襲をしてこようが関係ない、出てきた瞬間に決めるだけだ。

「——シャルうう！」

「——!」

振り向いた瞬間、理解した。三体目は俺を殺すことを諦め手頃の方  
に矛先を向けたのだと。

「——ッ！」

右足で地面を蹴る。

「銀ッ!!」

「シャ——!?!」

銀を突き飛ばすということは、銀が元々いた場所に俺がいることになる。つまり、銀が受ける筈だった攻撃をなんとかしないとイケないが。

「……ッ、リユミ、エール・デュ・ソレイユッ!!」

腹を針が貫通し、腹から突き出る。丁度心臓あたりだろうか。だが、これでヤツは動けない。そこに全力を叩き込む。

「……」。

「シャルッ!」

もう無理。

「なんで……どうして……!」

意味がわからなかった。目の前で腹を貫かれるシャルの姿を見て頭が働かなかなくなった。

「……」

「あと少しで樹海化が解ける!そしたら病院……に……」

シャルの手がアタシの頭の上に置かれる。まるで、泣いてる子をあやすように優しく、ゆっくりと。!!

「ダメだ、ダメだ!死んじゃダメだ……」

止めどなく血が溢れ出す。目や口からも流れてくる。

「あ……」

「シャル!!」

なにか言おうとしている。

「あ、——後、頼ん、だ。」

「はあ!?何言ってるんだよ!!」

段々とシャルの瞼が下がっていく。

「起きろ!起きるんだ、シャル!起きてくれ……」

どんなに呼び掛けてもシャルの瞼は上がらない。

「あ、あああ!!!」

——花卉が舞う。

「——塞がってる、塞がってる！」

シャルの傷が塞がっていて、元の綺麗な状態になっていた。どうしてとか、なんでとかどうでも良かった。これでシャルが起きるかもしれないと希望ができた。

「シャル！」

体を揺さぶり、起こそうとするが一向に目を開けない。

「シャル、シャル。」

いくら叩こうが揺さぶろうが目を開けない。

「アタシのせいだ。」

とある病院の二室。

「大丈夫だよ、ミノさん。お医者さんも命に別状はないって言ったし。」

「そうよ、銀。シャルル君が起きた時のために私達は私達ができることをしないと。」

「須美。そうだよな。こんなのはアタシらしくないっ。」

「そうだよ、元気一杯じゃないとミノさんじゃないもんね。」

「今日は一旦帰って体を休めましょ。」

「そう、しよつか。」

「そうだな。またね、シャル。」

もうそこに誰もいない。あるのは崩れかけの霊基だけ。どんなに呼びかけても目を覚ますことはない。奇跡でも起こらない限りは――

## お花見

翌日、友奈に案内され琴弾公園に着いた。桜の木々は枯れかけだが、それでもしつかりと咲き誇っている。

「お、来たわね。」

「どうも、風先輩と。」

風先輩の隣には小学生ぐらいの女の子が座っている。

「妹さんですか？」

「あ、はい。妹の犬吠埼 樹、です。」

「かわいい妹さんですね。」

「でしよ。シャルは一目惚れしちゃった？」

「お姉ちゃん!？」

「しました。もう目が釘付けです。」

「え、ええく!!」

「シャルくん!？」

「シャルル君は小さい子が好み。」

「東郷がなんかメモしているが、いつものことだからスルー。」

「あげないわよ。」

「まあ、それは置いてお花見始めるか。俺も料理作ってきたぞ。」

持ってきた包みから弁当を出す。中身は唐揚げ、今が旬の鱈の味噌

漬け、いろいろな具のおにぎり、卵とカツのサンドイッチ。

「わあ、美味しそう！」

「私はぼた餅を持ってきたわ。」

「わあーい♪東郷さんのぼた餅〜！」

「あらら、シャルと被っちゃったわね。」

「まあ、それはしようがない。打ち合わせなんかしてなかったしな。」

風先輩の弁当を見ると、被ってないのが鱈の味噌漬けぐらいだな。

「それでそっちの箱はなに？」

「こっちはケーキだ。」

「お花見なのですか？」

「いや、今日は東郷の誕生日だろ？」

「そうなの、東郷さん？」

「ええ。でもシャルル君はよく知ってたわね。」

「ほら、ホームページに書いたプロフィールに生年月日あったら。そっからだよ」

本当は前に須美に聞いたことがあったただけだけだな。

「切り分けてるから持って帰っててくれ。」

「もしかしてこれ、アンタの手作り？」

「おう。久々のケーキ作りだったが、案外上手く出来たよ。」

「凄いわね・あら？」

「あれ、シャルくんはいいの？」

「俺はもう家で食ったからいいぞ。気にせず貰ってくれ」

「」

四人と思ったら五人目がいたもんだからな。これに関しちや、サブライズにした俺が悪い。

「どうしよう・私、なにも用意してない。」

「大丈夫よ、友奈ちゃん。気持ちだけでも嬉しいわ。」

「え、えと・私はー・これをどうぞ！」

自身の髪についていた髪飾りを外してプレゼントするとは  
.....  
んな意味でカッコいいな。

「だ、大丈夫よ、樹ちゃん。そんなに無理しなくても。」

「そうよ、樹。大切な髪飾りなんでしょ？」

「う、そうだけど。」

「まあまあ、今回が初対面なんだからプレゼント用意してないのが当然だ。来年、渡せばそれでオッケー！ってな。」

「ぐう！」 ↑初対面じゃないのにプレゼント用意してない二人

「ま、まあ、まだ一日始まったばかりだから落ち着け」

「そうですね。それに誕生日だからと言ってプレゼントを絶対に渡す決まりはないですから。」

「そ、そうね。今は食べましょ」



「う、うん。そうしょつか」

風先輩は俺の唐揚げを、友奈は風先輩の唐揚げを頬張る。

「——ん、アタシのより美味しいわね。」

「ん〜♪」

「友奈ちゃん。」

東郷はすぐさまカメラを取り出し、友奈を収めていく。

「東郷さんっていつもあんな感じなんですか？」

「馴れてくれ。」

「それしか言えない。」

「この唐揚げ、なんか隠し味入ってる？」

「一般的な作り方だと思うぞ。」

「い〜やっ、これはなんか入ってるでしょ？」

「強いて言えば、愛情か？」

「私の樹への愛情が負けてるって言ってるの?!」

「言っていないだろ!？」

どっからその発想が出てきたんだ!?

「ちよ、お姉ちゃん落ち着いて。」

「樹への愛情なら誰にも負けないわ!」

「誰と張り合ってるんだよ?!」

「ん〜、この魚も美味しい〜♪」

「友奈ちゃん、ぼた餅もあるわよ。」

「ありがとう、東郷さん。ん〜♪」

「ハアー、ハアー、友奈ちゃん。」

もう〜これでいいかな、って。

「凄いですね、勇者部って。」

「いつもはまともなんだがな〜」

まあ、楽しそうだし問題ないか。

「あらかた片付いたわね。」

「ほとんど、アンタが食ったろ。」

あんだけあった料理もなくなっている。その七割は風先輩が食ってます。ぼた餅は気づいたらなくなっていた。多分、東郷が友奈に餌付けしたんだと思う。

「来年もお花見したいな〜」

「そうね。来年もしましょうか」

「来年には樹も中学生、か・妹の成長は早いわね。」

「お姉ちゃん・おばさん臭いよ。」

「ぐっ。」

結構なのけぞりだな。

「風先輩、明日はどうするんですか？」

「明日はく・うくん、そうね。」

「あ、俺は日曜日予定があります。なんなら毎週日曜日は部活参加出来ません。」

「あら、なんで？」

「いや、前の学校での友達と会う約束してるんで。」

「じゃあしようがないわね。」

銀と園子に会いに行かないといけない。だいたい不法侵入して入室するんだけどな。なんもかんも嚴重に警備してる大赦が悪い。24時間警備するよりシステムの改良をしてほしいんだが？

「じゃあ、日曜日は部活活動はなしにします。」

「依頼はくるのかしら。」

「大丈夫だよ、東郷さん。きつとくる！」

「ゆっくり待とうぜ。」

それはないほうがいいだろ。困りごとなんてなくていい。

「それじゃあ、今日は解散っ！」

「さようなら、風先輩、樹ちゃん！」

「また今度。」

「ケーキ、美味しかった報告待ってるぞ〜」

「はいはい。学校で伝えるわよ。」

「あ、はい。さようなら。」

「それじゃ、樹。帰りましょ。」

「うん、お姉ちゃん。」

二手に別れて帰り道を進む。家が反対方向だからしようがないが、  
なんか悲しいような。

## 造花

「とある何処かの病室。この一室——あ、これ前にも書いたな。」

「誰もいないよ。」

「よつ、今週も来たぜ。」

「霊体化を解き、姿を表す。」

「シャル、来た？」

「おう。しつかりいるぞ。」

銀の手を両手で包み、俺の存在を確かめさせる。

「今日はなににする？」

「今日は、シャルの話しを聞きたいな。」

「中学校での話ししてくれよ。」

「まだ入学してから三日しか経ってないぞ？」

「なんの部活に入部したの？」

「勇者部。つていう部に入部したぞ。今年から出来た部なんだ。」

「勇者部。それって」

「ああ。適正が高い奴らの集まりだな。」

「楽しい？」

「もちろん。個性豊かな部員でな。」

「シャルを筆頭に、だろ？」

「おい。」

まあ、あながち間違いじゃないのが悲しいな。

「どんな子達なの？」

「まずは風先輩から喋るか。この人は女子力であつて、って言って昨日のお花見でめつちやご飯食べてたな。」

「パワフルな人だな。」

「太らないか心配だな。」

「何故か太らねえんだよな。」

本当に不思議でたまらない。

「次は次は〜？」

「じゃあ、友奈について話すか。とても元気だな、銀と気が合いそうだな。」

「アタシ〜？」

「それに、他人のために全力で行動出来る子だよ。」

「ミノさんにそっくりだ〜」

「い、いやアタシは巻き込まれてるだけーだし？」

そう言いながら助けるのが銀だからな。本当に勝てないよ。

「須美はなんか友奈が大好きになったのかストーカーになりかけてる。」

「え、ええ〜」

「それだけは聞きたくなかった。」

「ま、まあ元気にやってるよ。」

「それならいつか。」

「わっし〜が元気そうで良かったんよ。」

あれだけ、目を瞑れば元気にしてると言えるだろう。

「お花見か。まだ、桜咲いてる？」

「ばっちしだ。」

「わっし〜にプレゼント贈りたかったな。」

「園子があげたりボン、しっかり使われてたぜ。」

「そっか。」

「あ〜、止め止め、こんなのアタシらしくない。次、なにする？」

「お昼寝♪」

「お昼寝!？」

まあ、確かにお昼寝の時間だけどき。

「シャルの膝枕、堪能したいな〜」

「お、いいねそれ。」

「固くて寝づらいと思うんだが？」

「いいから、いいから」

「はいはい。わかりましたよ」

二人のベットの間隔は狭い。そこに椅子を振じ込み座る。

「ゴツゴツしてる〜」

「お、どれどれん〜」

「ほれ、こつちだぞ」

銀の頭を膝へと保ってくる。

「サンキューーガツチリとしてるな」

「だから言つたろ」

全く、こんな枕で誰が寝れるのか

「なんだかポカポカしてZzz〜」

「あ、ほんと、だ——」

「。」

もう、寝ちやつたか。さて、俺は何時間耐久出来るのか。ここで意地を見せてやるよ

「お〜い、お二人さ〜ん。」

「Zzz〜」

「——んっどうした〜?」

「もう時間だ。俺は帰らないと」

「もうそんな時間か園子〜、お別れの時間だぞ〜」

「。」

顔を伏せ、右腕で俺の足にがっちりとしがみつく。

「ほら、また来週も来るからさ。」

「やつぱ、やだ」

「銀もかあと少しだけだぞ?」

俺は寝なくても大丈夫だから、朝に帰って学校に行けばいいが、友奈とかに不審がられる可能性がある。

寂しかっただろうな。こんな空間に一人じゃないとしてもずっ

といるってのは、本当に強い奴らだよ。ゆつくりと優しく頭を撫でる。

「.....」

「満足したか？」

「全然。」

「あと三時間ぐらいしたかったな。」

「ね〜♪」

「そっか。」

「ま、時間だししようがないな。てことでシャル、これ。」

「また、同じ所にいれとけばいいよな？」

「うん。宜しく〜」

何通かの手紙。家族宛への手紙らしい。園子に書いてもらって俺が届ける。大赦にお願いしないのは、他人に内容読まれるのはちよつととのこと。

「それじゃあ、また来週〜」

「またね〜」

「またね。」

今度は窓から退出する。窓から退出する理由としては、霊体化すると手紙が消えず、宙に浮いてるように見えるからだ。これに関しちやー、しようがないとしか言いようがない。

バカに見えて実は頭いい奴

「.....」

「全国学力調査テストの点数が返ってきた。」

「お、シヤルはどうだった？」

後ろの席の鈴木が覗き込んでくる。

「ん、俺はくまあまあだな。」

「またまたあ、天下のシヤルルマーニユ様がなに言ってるんだ。どうせ、全部八十点超えだろ？」

「そうだな。」

「中学では英語はなく、代わりに神道というものがある。まあ、英単語覚えるより簡単だな。ちなみに、一つ百点満点である。」

「俺は五教科で362だった。母さんに怒られちまう。」

「いいじゃねえか。まだ、一年だし。こつからこつから」

「そうなんだけど、母さんが380は取れってうるさくて」

「あらら」

それについてはドンマイとしか言えないな。

「はい。点数を見るのを終わって席に着いてください。」

「ちえーんじゃ、またな。」

「おう。」

「身を乗り出すのを止め席へと戻っていった。」

「今のうちにもう一度、用紙を確認する。」

「変わんねえな。」

「1604/1、五教科合計498点。うくん、いつもなら一ミスしたら、だいたい三十位ぐらゐまで下がるんだがな。」

「えー、今回のテストで驚くことにうちのクラスから一位ができました。」

「「ええー!?!」」



「誰ですかー?」

言うな、言うな!絶対に面倒臭いことになる!

「シャルルマーニュ君です。みんな、拍手っ!」

「すげえ!」

「やるなー!」

「おう!」

「はあく やつてくれたな」

「疲れたく」

「まさか、勇者部への依頼をこんな形で使われるとはね」

「一躍有名人だもんね」

「シャルル君はもとから目立つもの、しょうがないわ。」

新聞部は許さない。あんな質問攻め初めてだぞ ジャーナリストの才能あるよ。

「ま、うどん食べて元気出さない」

「そうだな。食べに行くか」

「あ、私もー!」

「私も行きます。」

「いつもどおりってことね。」

「だな。」

昨日も食いに行ってるけど まあ、いいか。本場のうどんは絶品だからな。

翌日。いつものように数学の授業したり、難しい問題を教えたりして授業を過ごした放課後。

「それで、今日はなににするんだ？」

「今日はこの猫ちゃんの探索をするわ。」

「黒猫だあく♪」

「探す場所は？」

「だいたいここら辺ね。いつもこの辺りでブラブラしてるらしいわ。」

「よし、手分けして探すか。俺は上ら辺を探す。」

「じゃあ、私は東郷さんと下を探すね。」

「それだったら私はシャルと行けばいいのかしら？」

「まあ、そうなるな。」

上下に別けるとそうなるな。三等分すればいいかもだが、安全性を考えないといけない。

「日が暮れ始めたら終了して、各自解散にしましょう。」

「了解ですつ。」

「見つけたら連絡します。」

「こつちも見つけたら連絡するよ。」

「それじゃ、始めましょ」

「猫ちゃくん、どっこいるの〜」

「お猫様〜」

路地裏、塀の間、公園の土管の中……様々な場所を探すが見つからな  
い。

「なによ、お猫様って?」

「それより、名前はなんて言う猫なんだ。絶対そっちのほうで呼んだほうがいいだろ」

「それが、ないらしいのよね〜。飼ってまだ一日目なんだって」

「厄介だなく」

飼って一日目って 余程嫌だったのか。

「ん？今のって」

「追いかけてみるか」

「ええ。」

一瞬だが黒い尻尾が見えた。

「お、いたな」

「動かないわね」

俺達に気づいたのか、動きを止めジツと見つめてくる。

「ちよつとずつ進むぞ」

「アタシはいつも慎重よ」

「慎重じゃないから言ってるんだ」

「なにー！」

「しっー！」

「あ、はい、すみません」

ジリジリと猫へと歩んでいく。

「あれ、なんか」

「怯えてる、のか？」

さつきからずつと、体が震えてる。

「ちよつと待ってくれ」

「何する気？」

風先輩の進行を止める。俺はジリジリとした動きをせず、普通に歩いて近づく。猫は逃げもせずジツとこちらを見つめてくる。

「はいはい、大丈夫だぞ」

猫を抱きかかえると、少し暴れるがなんとかして落ち着かせる。

「爪が」

「まあ、しょうがない。」

猫の爪で何ヶ所からか血が出る。

「ぎ、飼い主の所に届けようぜ。」

「そうね。」

とりあえず、少しは落ち着いたのか暴れなくなった。ちよつと痛い

が根性で我慢だな。

「良かったあ〜！」

飼い主に猫を渡すと安堵の表情を浮かべ、涙を流していた。

「あの、その猫は」

「この猫は一昨日、保護した子でね。前の飼い主のせいで人間に恐怖心が植え付けられてんたんだ。」

「そうなんですか」

「恥ずかしながら、この子の名前を考えていたらいつの間にかいなくなっていてね。探そうにも歳には勝てず、君達がいてくれて本当に有り難いよ。」

「それは良かったです。」

・ 気味が悪いな。

「これはお礼として受け取ってくれないかい？今はお菓子ぐらいしかなくてね」

「あ、いえいえお構いな——」

「本当ですか！ありがとうございます！」

「ちよつと」

「ここは貰っどけ」

「それじゃあ、気をつけて。」

「はい、ありがとうございますー。」

家の中に入って行っただのを確認し、すぐさま風先輩の腕を掴み離れる。

「ちよ、どうしたの？」

「あの飼い主、なんかヤバい。」

「ヤバい？何処がよ、とても優しそうに見えたわよ。」

「庭を見たか？何個もボコツとしたのがあったぞ。」

「それって」

・

「一応、警察に連絡しておく。風先輩は友奈達に連絡してくれ」「う、うん。」

あの人の見た目はだいたい三十歳ぐらい。猫の一生は最低十三年程。あのボコツとした場所はチラツと見ただけでも十個以上あった。数えたらもつとあるだろう。

「あ、もしもし、警察ですか？」

勘違いなら謝ればいい。疑ってすみませんってな。最悪俺だけの責任にする。

「ゾワツとする事件だったな。」

あの後、警察が来て飼い主（偽）に話を聞いた所、急に慌てだし、自らポロツとネタを出した。あのボコツとした所を掘ってみると、まだ白骨化していない腐った猫の死体が出てきた。首が千切れてたり、胸になにか刺さったり、いろいろだ。

「本当に怖いわね。」

「にしても、よく気がついたわね」

「猫ちゃん。」

「やっぱ、人間が一番怖いな。」

人は平然と嘘をつきやがる。あんな人当たりが良さそうな見た目でもヤバい奴はヤバい。

「同感だわ。それで、あの猫はどうするの？」

「俺が飼うよ。丁度一人で寂しかったし」

「あら、一人なの？」

「そういうえば、シャルくんのご両親見たことないな。」

「両親は大分前に他界したよ。」

「。」

「ま、今は一人で楽しくやってるよ。」

「。」「。」

「そっか。」

「それなら、いいのだけど。」

風先輩が黙りこくってるのに違和感を覚えるが、なにか触れてはいけないような気がした。

「じゃ、俺はこつちに用があるから」

「それじゃあまた明日〜！」

「また、学校でね。」

「おう。」

猫を飼うためにはいろいろな物が必要なんだよな。節約を意識しないといけないか。

「じゃ、風先輩も」

「あ、うん。さようなら〜」

「おう。」

あの事件が余程ショックだったのか？いや、そんなヤワな人じゃない。

「わかんないな」

## 放送部出身 あれ？

ある日の放課後。俺は放送室にいた。

「じゃあ、シャル君始めていいですか？」

「おう。いつでもいいぞ」

何故、こんなことになったのかというところ、勇者部の依頼にあっただよな。自己紹介をしてほしいと、うくん、やっぱ、意味わからん。では、まず自己紹介をしてください。」

「ああ。俺の名前はシャルルマーニユ、気軽にシャルって呼んでくれ。」

この会話を録音し、給食時間に流すらしい。俺はその日休みます。

「前のテストで全国一位を取ったのは本当ですか？」

「まあ、採点が間違ってたければ、そうだな。」

「取ったときの気持ちは？」

「マジかあ〜」

あれについてはマジで不思議でたまらん。

「シャルさんは勇者部で活動していると聞きますが、何故入部したのですか？」

「勇者部って、なんかカッコよくないか？」

「はい？」

「いや、なんかカッコいいと思ったから入部しただけだぞ？」

本当は大赦が関係するが、喋れないしな。まあ、カッコいいと思っただのも本当だし、あながち間違ってたない。

「は、はあ〜。えっと、次は学校の皆さんからの質問です。」

「よし、ドンと来い。」

「勇者部のどなたかとお付き合いされてるっての本当ですか？」

「ブフー！」

「だ、大丈夫ですか？」

「お、おう。ちよつと驚いただけだ。」

なんだその質問。何処情報だよ。

「それで、お付き合い合いられてるんですか？」

「いや、誰とも付き合っていないぞ。」

「それじゃあ次の質問です。好きなことはなんですか？」

「それはもちろん、カッコいいことだ。あ、ここで勘違いしてほしくないのは、カッコいいとは言っても外見のことじゃないぜ。生き方とか在り方とか。何かに真摯に打ち込んでる姿は誰であれカッコいいと思ってるよ、俺は。」

「な、なるほど。凄い熱量ですね。」

つい熱弁してしまった。

「では、次の質問です。好きな女性のタイプはなんですか？」

「これはさつきと同じだな。カッコいい人だな。」

「勇者部の方々にはいますか？」

「アイツらに。全員だな。誰かのために行動する。簡単そうに見えてなかなか出来ることじゃない。勇気が足りなかったり、判断を迷ったりしてな。」？

それを当然のようにする。さいつこうにカッコいい奴らだよ。

「それでは、最後に一言どうぞ」

「これが放送する日は休——」

「はい！ありがとうございますー！次も宜しくお願いします。」

「え！次もあるのか!？」

待って、その話は聞いてない。

「録画終了しました。」

「これ、いつ放送されるんだ？」

「企業秘密です。」

「おいおい。」

「それじゃあ、出ていってくださいね。」

「ちよま！」

放送部員、総出で退出される。



「よし、風先輩。」

「なに？」

「ちよつと明日から休み続けるんで後は頼んます。」

「理由は？」

「自分の放送、聞くのつて恥ずかしくない？」

「却下。しつかり登校しなさい。」

「そこをなんとか！」

「友奈く」

「はい！友奈ですつ。」

「これから毎日、シャルを引きずつても登校させてちよつたいな。」

「え、シャルくん不登校になつちやうの。」

「あく！ならない！ならないから泣くな！」

泣くのは反則だろ。あの涙に勝てるやつはいない。

「まあまあ、友奈ちゃんも落ち着いて。それと、シャルル君は後でお灸をすえます。」

「へへ、東郷。そうくることは既に予測している。」

「な・そのカバン・まさか！」

「ああ！帰宅の用意は既に出ていて！つてことですかいならく！」

「コラ、待ちなさい！」

今日やる依頼はもう全て終わらせている。つまり、俺を縛るものは最早なにもない！俺は帰宅する！

「みんな、俺の扱いに手馴れてきてるんだよな。どう思う、クロ？」

「んみやく」

「そうだよな。」

全くわからん。猫語を習得するべきだったな。あ、ちなみに名前は黒かったんでクロにしました。

「ほれ、今日の晩御飯だ。よ〜く食え〜。」

最初の方は部屋の隅っこでジツと俺を見つめてたが、なんとか撫でられるようになった。

「う〜む、かわいい。」

何時間でも見てられる。ご飯三杯はいるな。食おうと思えば百杯でもいけるんだけどな。

「じゃあ、お風呂入ろうな〜」

猫は水を嫌がるって聞いたが、クロは普通に俺と一緒に風呂に入ってくれてる。清潔感は大事だからな。

「気持ちいいか〜?」

「にや〜。」

「そうか、そうか。」

猫が家にいるっただけで、こんなにも孤独感を消せるとわな。

「勉強しなきゃだから、ゆっくりし〜といてな〜。」

「にやっ。」

神道は未知の領域だから、しっかりと予習をしないと意味がわからない。にしても、天照大御神とか伊邪那美命みたいな有名所はいるのに、建速須佐之男命がいらないんだよな〜。

「御影士郎となんか関わりでもあんのか?」

過去に行って、御影士郎に聞かないとわかんねえな。つまり、タイムマシーンを作れっ〜ことだな。

「よし、寝るか。クロは寝所に戻っ〜てな〜」

「〜」

「ん。一緒に寝るのか?」

そう聞くと、布団の中に潜っ〜ていった。  
「しよ〜がないにや〜。」

あ〜、もう!かわいいなあ!

「——シャルくっくん!!!」

「本当に来たのか」

「あ、クロちゃんだあ。よしよし」  
「にやあ。」

俺以外にも懐いてくれて嬉しいよ。

「じゃ、お留守番頼んだぞ。」

「にや。」

「おう、賢い。」

扉を閉め、鍵を締める。

「お、東郷も来たのか。」

「ええ。お灸をすえにね。」

「なるほどな。」

すぐさま、走る体勢をとる。

「嘘よ、だから逃げるようとするのを止めなさい。」

「ふう。よし、それじゃあ行くか。」

今日放送されるかもだが、それも勇者部の活動だ。逃げることはない、ただし俺がめっちゃ恥ずかしくなる。覚悟を決めて行きます。

「ぐうっ。っ!」

なんだ、この地獄のような時間。さっさと終われ!

めでたい日には美味しいものを

「ハッピークリスマス！」

「いえ〜い！」

クリスマス！ということで皆、よく見る赤い服を着てクラッカーを鳴らす。ここは俺の家だが、お構いなしにクラッカーを鳴らす。後片付けなんかしるか！

「いいわ。いいわよ、友奈ちゃん。」

東郷はいつも通りですね。安心します。

「じゃんじゃん食べましょー！」

「張り切ってるね、お姉ちゃん。」

「年に一度のクリスマスよ！楽しみなきや、損よ、損！」

そう言いながら肉を口一杯に詰めていく。

「ほら、お高めのやつだぞ〜」

クロにはお高めの猫缶をあげる。約二千円だったような気がする。

「すっかり懐いてるわね」

「だろだろ？」

「かわいいですね〜♪」

「にや〜♪」

「あ、樹にも懐いた」

「懐きやすいだけだから！」

「きつとそうだ。そうに違いない！」

「そろそろだな。」

「はいが〜？」

「友奈、口の中の物飲み込んでから喋ろうな。」

「友奈ちゃん、お米がついてるわよ。」

「ん、ありがと〜、東郷さん。」

お母さんしてる東郷を見届け、俺はキッチンに行く。

「お、いい感じだな。」

アルミホイルを外し、ラップを外すと美味しそうな牛もも肉が姿を表す。

「よし。」

まな板に移し、等間隔で切っていく。そうすると、だいたい三十二枚出来る。俺は余りでいいとして、アイツらも含めて六人で分けるから一人五枚だな。

「はくい、ローストビーフだぞ。」

「ローストビーフ！」

「一人五枚だからな。」

「立派なお肉ね。どうしたの、これ？」

「知り合いから貰ったんだ。」

知り合い・安芸先生からだけだな。

「ん！美味しい。」

「ん♪凄く美味しいよ！」

「アンタ、本当に凄いわね。」

「舐めてもらっちゃあ困るぜ。」

「友奈ちゃん、私のも食べていいわよ♪」

「え、でも。」

「はい、そこ。友奈を甘やかさない！自分のは自分で食べないと、ケーキなしにするぞ。」

「はい。すみません。」

たく、隙を見て甘やかそうとするんだから。友奈バカなんだから  
なんか字面が酷いな。

「ってことで、ケーキだぞ。今回はチョコにしてみた」

あれから数十分。料理のほうも尽きかけてきたので冷蔵庫からケーキを取り出す。

「女子として負けてる気がします」

「なかなかの女子力ね」

「今回も美味しいね！」

「流石、シャルル君ね」

「今回のも好評みたいでよかった。」

「それは良かった。」

「パティシエにでもなるの？」

「趣味程度だよ。そこまでは流石に無理だ」

「凄腕のパティシエが作ったのを食べたことあったけど、あれは再現不可能だったな」

「これが趣味」

「案外、自然と身に付くもんだ」

「まあ、そうね」

「風先輩も最初は失敗ばっかだったろ？」

「そうねー。生焼けだったり、舌触りが最悪だったり」

「そんぐらいいはマシだろ。俺なんか食えたもんじゃなかったからな」

「何度、無の境地に至っと思っただやがる。あ、しっかり全部完食してるので許してください。」

「料理って。大変なんだね」

「俺達の場合は独学だから、更に地獄だぞ。ま、友奈はしっかりと教えて貰いな。」

「そうします」

「大丈夫よ、友奈ちゃん。私が手取り足取り教えてあげるから。」

「わ、私も。いいかな、お姉ちゃん？」

「いいわよー！ドンっ！ドンっ！アタシを頼りなさい！」

料理の上達のコツは、誰かのために作るのが一番だ。俺は一年かかったが、風先輩はもっと早かったんだらうな。樹が笑顔で頼んでるのを見て、しみじみそう思うよ。

「ふいー。」

クリスマスパーティーが終わり、今日は解散となった。時刻は二時  
そろそろだな。

／＼ピンポン／

「はーい、今行きまーす！」

ケーキとローストビーフが入った容器とアルミホイルを紙袋に入  
れ、持っていく。あと、ついでに小さめのクーラーボックスも

「こんにちは、安芸先生。」

「ええ。さ、乗ってちょうだい。」

「わかりました。」

安芸先生が運転する車に乗る。安芸先生の服装はいつものではな  
く、大赦の神官が着ていた服を着ている。

「出発するわよ。シートベルトつけた？」

「つけましたよ。」

「それならいいわ。」

向かう先はもちろん、園子と銀がいる病院。ここから行けば、だい  
たい二時間程度で着く。

「頼みます。」

「任せてちょうだい」

今回の作戦は簡単。安芸先生が見張りを退かして俺が通るだけだ。  
退かし次第、俺に電話がかかる。

ブルブル

「よし。」

合図だ。荷物を持ち車を出る。置土産を忘れずにな。

「私の交代時間は七時よ」

「了解ですっ」

あと、だいたい二時間半か。まあ、そんなぐらいあれば充分楽しめるな。病室の扉を開ける。

「ハッピークリスマス」

「ん〜？」

「あ、シヤル？」

「おう。シヤルだよ〜」

「サプライズ失敗か？思ってた反応と違うな。もうちよいわあ〜  
！とかくると思ってたんだけどな。」

「でことで、ケーキとローストビーフ持ってきたぞ」

「ケーキ?!」

「やったぜ、ヤッホー！」

「早速食べるか」

「そうだね。」

「え、えくとシヤル？」

「任せろ。俺があくんしてやるから」

それに関しちやしようがない。

「はい！あくん」

「んっ。めっちゃ美味しいな！」

「私も私も〜」

「はいはい。」

箸を持ち替え、ローストビーフを園子の口へと運ぶ。



「あむっ　ん　♪ほっぺが落ちる　♪」

「お気に召したようで良かったよ。」

「シャル、お店を開こう。」

「開きません。はい、銀。」

「んっ　ん　♪」

「あ　ん」

「わかってる、わかってる」

「あむっ　♪」

なんか　いけないことしてる感じがするんだが

.....

「いや、久しぶりにこんな美味しいもん食ったな」

「とても美味しかったよ」

「そっかそっか」

ふう　いろいろと危なかったな。

「さて、もう時間だから俺は帰るな。」

「え　」

「　」

「まあまあ、明日も来るからさ」

明日は日曜日だから勇者部の活動はない。それに冬休みだし、来れる日は学校がある日よりは多く来れるだろう。

「また、明日」

「またね」

「またね。」

今回も窓から退出する。クリスマスの夜ということもあり、カップルがチラホラ。リア充爆発しろ！

「なんかドジッとした部にしたいの！」

「は、はあ。」

唐突に立ち上がり、机をバンツと勢いMAXで言われても  
急にどうしたんですか、風先輩？」  
.....なあ？

「ほら、この一年でこの部も有名になったでしょ？」

「最初とは比べ程にないほど認知されましたね。」

「でしょ。」

確かに。今じゃあ、保育園とかの公共施設からも依頼きてるから  
な。

「てことでッ！勇者部の改革をしたいと思いますわ！」

「それはいいと思うが、なにをするんだ？」

「それを決めるために聞いてるんでしようが」

「改革。」

改革。うむ。戦後改革てきな感じか？

「ルール。掟を作るってのはどうだ？」

「それいいわね。」

「悪い子にはお灸をすえます。」

「いい加減追いかけるのは止めてくれ。」

今ん所、俺は十四回東郷から逃走しています。車椅子とは思えない  
スピード出しやがって。

「シャルル君がいい子になったらね」

「こないいい子、他にはいないだろ」

特になにもしてなくてもお灸をすえに来るからな。前は  
と恋バナしてたらスツと現れたからな。  
.....男友達

「挨拶はきちんと！」

「まあ、それならいいか。」

「そうね。挨拶はどんなに歳を取っても大事なもの」  
「友奈ちゃんらしいわね」

なるほど。生活系か。なら

「よく寝て、よく食べる。とかか？」

「ちよつと、それは——」

「いいね、それ！」

「素晴らしいわ。」

「東郷さん?!」

凄いスピードの手のひら返しだな。東郷が怖くなってきたよ。

「じゃあ、それもオツケーね。」

「睡眠と食事は成長に大事よ。」

「あ、だから。」

「おい、誰見て納得してやがる」

「大丈夫、これからだよ。きつと」

「いいんです。俺は最終的に176cmになるんで」

「ほんとかしらねえ？」

「なんなら来年にはなってますっだっ！」

制服新しく注文したろか！（お金は大赦持ち）

「はい、次」

「カツコよく！」

「却下。」

「なんで。」

完璧な即落ちニコマだったな。

「うくん」

「思いつかないわね。」

「もう、この二つでいいんじゃないか？」

「今出たの勇者部関係ないでしょ。もっとこう勇者部的な」

「あつ！悩んだら相談！」

「はい、採用！」

「んな、雑に決めていいのかよ。」

「いいの、いいの。あとは」

「カツコよく！」

「なるべく諦めないっ！」

「いいですね。」

「これぞ、勇者って感じがしますっ！」

「あれ、風先輩？」

流石に聞こえてるよな？結構大きめの声で言ったんだが

「ここまで来たら、切りよく五個にしましょ」

「あと一つ。」

「悩んだらう・どん！」

「流石にそれはく・ありね。」

「落ち着け」

「悩んだら相談と被っちゃうわね。」

流石にそれはないだろ。ただう・どんが食いたいだけの部活と勘違

いされちまう。

「う・くん、それだったら。」

「・為さねばならぬ何事も」

「お・！カツコいいよ、東郷さん！」

「そ、そう？」

「だなっ！カツコいいぜ、東郷！」

「ええ、ありがと」

なんか友奈の時と反応が違うな。

「いいんだけど、ちよつと型苦しいわね。」

「じゃあ、なせば大抵なんとかなる！」

「流石よ、友奈ちゃん」

「そうだな。そんぐらい砕けてたほうがいいか」

「よしっ！勇者部五箇条決まり！」

「勇者部五箇条」

「いつの間にそんな名前つけたんだ？」

「今思いついた！」

「・いいと思います。勇者部五箇条」

「で、しよ、でしよ？」

反応がちよつとうざいが、確かにいい感じだ。

「これをモットーにこれからも頑張っっていくわよよ〜！」

「はいっ！」

「頑張りますっ！」

「もちろんです。」

「つてことで、うどん食べに行きましょ！」

「行きましょ！」

「またく!？」

「シャルル君、いつものことよ。」

「それはそうなんだけど。」

「つい昨日も行つたら、よくあの体型を維持出来るな、心底不思議だよ。」

## 人形劇

中学校二年目の四月。俺、友奈、東郷は二年に、風先輩は三年、樹が一年に進級した。風先輩はめでたく受験生へと勉強頑張つてね。

「——王様！」

「なんだい？」

所変わって異世界へと。俺は二度目の異世界転生(?)を致しました。そして、何故か王様になったみたいだ。

「私はなにをすればいいのですか？」

「勇者である君には魔王を倒してほしいんだ。さくつとやっちゃってくれー！」?

「は、はい。」

目の前に友奈にめっちゃ似ている勇者がいるが、まあ、世界に瓜二つの人間は三人いるって聞くし、異世界なら当然いるよね。

「俺はフランクな王様で通ってるんだ。ま、気軽にやってくれ」

「わかりました。」

「あ、お土産にこの剣あげるよ。この剣、なんか凄いらしいから役に立つと思うぜ！」

「おお、ありがとうございますっ！」

スツと、何処からか剣を取り出し友奈に渡す。確か、この王家に伝わる宝剣とか、まあ、俺が持つても宝の持ち腐れだからな。

「じゃ、頑張つてきてな〜！」

「はいっ！」

あとは魔王が倒された報告を待つだけだな。裏方に回るよ。

そして、ついに勇者は魔王の城へと辿り着いた。後は魔王を打ち倒すのみ

「やっそここまで辿り着いたぞ、魔王！もう悪さは止めるんだ！」

「儂を怖がって悪者扱いたしたのは村人達のほうではないか！」

「だからと言って嫌がらせはよくない。話し合えばわかるよ！」

「話し合えば、また悪者にされる！」

友奈と風先輩が台本通りに喋っていく。テンプレのストーリーだな。あ、ちなみに俺が渡したら剣は序盤で失くなりました。いろいろあったんや。あの展開は涙なしでは見られない

「君を悪者になんか——しないっ！」

「！」

台詞と共に役者を隠していた板が倒れる。園児に当たることにはなかつたが、役者の姿が露わになる。

「え、えとー」

どうする。魔力放出で目暗まししてその間に板を立て直すか？ いや、体の機能が完成してない園児には危険だ。それじゃあ霊体化か？ それだと、怖がらせる可能性がある。一体どうすれば

※この間3秒

「——勇者キーツク！」

「ええー!?」

まさかの続行!? どうか。ここで止めれば中途半端でキリが悪い。であれば、無理にでも続けていい感じに締めくくる。そういうことだな、友奈ア!

「や、やったなく! 話し合いは終わりだ。まずは儂を倒してみせろ!」  
「うわ〜!」

魔王の反撃。勇者に大ダメージだな

「大変! このままでは勇者が負けちゃうわ。皆で勇者を応援して力を送りましたよ! がーんばれ! がーんばれ! がーんばれ!」

「がーんばれ! がーんばれ!」

東郷が小さな日本国旗をパタパタしてるのが不思議だが、いい感

じに進んでいる。俺はこういう展開は好きじゃないが、まあいいか。  
「子供達の応援が力をくれる。行くぞ魔王！勇者パーンチツ！」  
「ぐわあああ!!」

勇者の攻撃を受け、魔王は悶え苦しみながら倒れた。これにて茶番  
——人形劇は終了。

「こうして勇者に倒された魔王は勇者との話し合いの末に和解し、祖  
国は守られました。めでたし、めでたし。」

「皆のおかげだよ！」

「ばんざーい！」

いやあ、イイハナシだなく。

月曜の放課後。計五名の勇者部は今日も今日とて勇者部は元気に  
活動しています。

「結果良ければ全て良しっ！」

「だね〜」

「結構ギリギリだったわよ。てか、アンタは裏方にいたでしょ！」

「細かいことは気にすんな」

「絶対いないような王様だったわね」

「友達感覚で話しかけてる王様。確かにいませんね。」

「まあまあ、そこも気にせず」

ちなみに台本は風先輩が書いて、王様の部分だけ俺が書いた。

「それで、今日はなにをするんですか？」

「ふっふっ、よくぞ聞いてくれた。まずはこれを見てちょうだい！」

黒板をバァーンと叩く。そこにはかわいい猫達の写真が多く貼ら  
れている。

「かわいいい〜♪」

「ええ、そうね。凄くかわいいわね」

「お前はまず、写真の方を向けよ」



東郷はいつも通り、つと。

「この子達は飼い主探してきた依頼よ。劇の練習とかで消化出来なかったぶん、溜まっちゃったの。」

「これ全部。」

ざっと見ただけでも十枚以上はある。

「ということ、今月からは強化月間。この子達のためにも飼い主探すわよ！東郷にはホームページの強化、任せたわ。」

「了解！携帯からもアクセス出来るようにモバイル版も作ります。」

「私達は・海岸のお掃除に行くから、そこで聞いてみよつか！」

「いいですね！」

「俺はとりあえず、猫飼ってる人達に総当たりで聞いてみるよ。」

総当たり・考えるだけでも、疲れるな。まあ、総当たりは俺じやないと思えないしな。もし、友奈達がヤバい人に会ったらと思うと

「——終わりました！」

「「速っ!?!」」

「おお！凄いな、しつかり出来てる！」

「これで、シャルル君を超えたわね」

そう言い胸を張る。気合と根性で視線を上につ張る。

「前から超えてるだろ。」

「そう？」

「おう。」

俺は基本の基本しかおさえてないからな。流石に応用まではいけなかった。

「よし、それじゃあ行動しようぜ。」

「ええ、そうね。東郷並のスピードで行くわよ！」

「それは流石に無理なんじゃないかな、お姉ちゃん。」

「はいっ。東郷さんのスピードを超えて海岸を掃除してきます！」

そう言い、猛ダッシュで部室を退出し——

「その意気よ、友奈！」

「廊下は走りませんッ!!」

「すいませくん!!」

先生の怒鳴り声が聞こえた。まあ、うん。

「俺達も行くか」

「はい。」

「そうね。走らないようにね？」

「もちろんです。友奈ちゃんは私達に大事なことを教えてくれましたっ！」

「なんか友奈を故人にしようしてない？」

「やっぱ、部活終わりのうどんは最高ね〜！」

「それにしてもだろ!」

風先輩の側にドンドンと皿が積み上がっていき、今では四枚も重なっている。

「アンタも食いなさい。うどんは女子力の源よ」

「俺はバリバリの男なんだが？」

「女子力ってなに？」

「友奈ちゃん、深く考えては駄目よ。」

「すいません、うちの姉が。」

一年の付き合いだ、今だ女子力がなにか理解出来ない。

「そんなこと言ってるとそのエビフライ貫うわよ〜？」

「食いたいならやるぞ。いるか？」

「私もそこまでがめつくさないわよ。」

「このうどんはシンプルに美味しいからな。エビフライがなくても完食できる。」

「」

「どうしたんだ、友奈？」

「さつきから箸が止まってるわ。どこか痛いのか？」

「え、ううん！そんなことないよ！」

「なら、なんだ？」

「いや、なんだか、風先輩とシャルくんが似てるなあ、って」

「俺と」

「アタシが？」

むむっ、何処か似てる場所でもあったか？

「んんん、似てるか？」

「いや、全然。性別から体型まで全て違うわ」

あ、ちなみに俺の身長はグンと伸びて178cmになってます。へへ、あの時の風先輩の表情は大爆笑もんだったぜ。

「いや、えっと、なんというか、雰囲気？がなんか似てると思って」

「雰囲気、雰囲気ねえ」

「さっぱり、わかんねえな。」

「雰囲気と言われても、自分の雰囲気は自分じゃわからないし、何とも言えないな。」

「樹ちゃん、わかる？」

「私も何となく似てると思いますけど、説明は、ちよつと」

「樹も!？」

「よし、この話しは止めてさっさとうどんを食べよう！流石にそろそろ夜になっちまうからな」

もうそろそろで夕日が落ちる。そうだったら、女の子だけで家に帰すのは心配だ。

「そうね、そうしましょ。ってことで、おかわりいいですかー!」

「まだ食べるの!？」

それで六杯目だぞ、胃の中どんなってるんだ。

## 非日常へと

ある日の授業時間。

「とりあえず、▲ABCと▲CDA合同つてのは問題文からわかるだろ？▲ABDと▲CBDを合同と証明するにはこの四角形がなんなのかを先に見つけて解くと簡単に出来るぞ。」

「ふむふむ。」

なんで俺が数学の授業してんだろ。俺の席には数学の先生が座ってる。

「つてことで、友奈！この四角形はなに四角形だ？」

「わ、私!？」

「おう。」

「え、えとく。平行四辺形!」

「お、いいぞ。てことはこの辺DBは平行四辺形のく？」

「対角線っ!」

「うくん。天才っ!」

「えへへ。」

ここに関しちゃー、初歩の初歩だからここで躓くと全てがわからなくなるからな。

「――」

この感じ

テロリン♪テロリン♪

「誰だく？」

「あ、私です!」

「授業では携帯を切っておこうね」

またかあく

「梶原先生!あと頼みます!」

「急にどうし――」

世界が止まる。

「あ、あれ?」

「これは。」

「東郷さんも!？」

「さて、どうしたもんか。」

「シャルくんも!？」

「なんのバ・ー・テックスがくる？ 三体組であればジュワユーズを放つ  
しかないが、単体なら俺一人でやるしかないな。」

「友奈と東郷はそこから動くな。」

「え、え?!」

「シャルル君はこの状況がわかってるの？」

「ああ。今は詳しく説明できないが、俺を信じてくれ。」

「もちろん。シャルくんを信じるよ」

「わかったわ。」

「俺がなんとかする。だから——」

——花卉が舞う。

「乙女座か。」

スマホを見る。そこにはこちらへと近づいてくる一つの点があり、  
乙女座と書かれている。前、戦った時は爆弾が攻撃手段だった筈だ。

「ならば、十二勇士よ!」

十二勇士を展開し、自身も霊基を再臨させる。第一再臨のマントが  
ないため、現在は第二再臨を使っている。

「ブラダマンテ! レナルド! 爆弾を一個も通すなッ!」

後ろにはアイツらがいる。

「我が名シャルルマーニユ! ここから先には通さないッ!」

久しぶりの戦闘だが、コイツを倒すなんて英霊であれば誰でも  
出来ないな。どこぞの最弱英雄を思い出す。

「おら、——よっ!」

乙女座を蹴り飛ばし、体勢を崩す。

「爆撃開始イ!!」

十の輝剣が降り注ぎ、乙女座を削っていく。

「そこだッ!リユミエール・デュ・ソレ——ぐう!」

トドメの一撃を——帯により弾き飛ばされる。

「チィ。」

「シャル!」

「シャル先輩!」

「風先輩と樹か。」

その格好・そっか。

「大丈夫ですか?」

「おう。それよりヤツを先に仕留めるぞ」

「!——任せなさい!アタシ達で力を合わせるわよ!」

「俺がサポートする!臆せず進め!」

爆弾はブラダマンテとレナルドが、帯は俺が弾いていく。

「わかりました!」

「ガッテン!」

攻撃手段は爆弾と帯だけだな。それだけならば、俺だけで対処出来る。

「エリユプシオンッ!」

「てやあああ!!」

「えいっ!」

風先輩は大剣、樹はワイヤーで削る。だが、それでも再生していく。

「これでもか。」

「再生しちゃつた。どうすれば」

「バーテックスは『封印の儀』っていう儀式じゃないと倒せない。」

「ん?なんだそれ?」

俺、そんなこと聞いてないんだが?

「まず、取り囲んで!」

「わかった!」

「う、うん!」

十二勇士で錯乱して、その間に取り囲んでいく。

「俺が注意を引く！その間に！」

「ナイスよ、シャル！さ、樹！」

「ええ〜！これが祝詞?!」

「どうしたあ！」

なんか戸惑っているが、大丈夫だよな？

「かくりよのおおかみ。あわれみたまい。」

「——大人しく、しろおお!!」

「ええ〜!?それでいいの?!」

「魂込めればなんでもいいのよ！」

乙女座の動きが止まり、三角錐の塊が出てきた。

「コレはなんだ？」

「これは御霊！言わばコイツの心臓！つ・ま・り、これを碎けばこつちの勝ち！」

「よし！俺が碎く。」

五大元素を収束。

「リュミエール・デュ・ソレイユツ!!」

発散。轟音を響かせながら爆発する。

「これで駄目か」

宝具を解放するしかないか。

「永続不変の輝き、千変無限の——」

「おおおお——！」

「！」

この声は——

「——勇者ペアアンチツ!!」

「友奈!?!」

「凄い。」

俺の攻撃でデカ目のヒビが入る程度だったが、友奈のパンチによって碎かれる。

「勇者部の活動はみんなのためになることを勇んでやる——」

「私は讃州中学勇者部、結城友奈。私は勇者になるっ！」

堂々とした立ち振る舞いで彼女はそう宣言した。

## 優しい嘘

「あれ、ここって」

「戻ってきたな。」

友奈の一撃によってバーテックスは倒された。防衛戦は終わり、学校へと戻ってきた。

「東郷さん！大丈夫だった？」

「友奈ちゃん、ええ、私は大丈夫よ。友奈ちゃんこそどこも怪我はない？」

「うんっ。どこも怪我してないよ。」

とりあえず全員無事、つと。

「こっちはなにも起きてないんだ。」

「そうね。あつちでなにかあったかは私達しか知らない。みんな、いつもの木曜日を過ごしてるわ。」

いつもの、いつものか。代わりにこの子達が非日常へと足を突っ込んだけどな。

「うん、うん、〜！」

「よしよし。」

「怖かったよ。」

菌痒い。俺一人で出来ると思った敵の強さへの楽観。そのせいで負ける所だった。それは本当にカッコ悪い。気を引き締めていかないとな。

「頑張ったわね、樹。冷蔵庫のプリン、半分食べていいわよ」

「元は私のだよ」

「自分のプリンには名前書いとけよ」

カッコいいお姉ちゃん像がぶっ壊れたぞ。てか半分て、あげるなら全部あげろ。



翌日の放課後。俺達はいつも通り勇者部の部室にいた。

「牛鬼っていうのか。」

「うん。ビーフジャーキーが好物なんだ。」

「ふむふむ。俺はビーフジャーキーじゃないんだが？」

さつきから頭をガブガブと噛んでくる。我慢してるが、結構痛い。

「アンタがビーフジャーキーに見えるんでしょ」

「失礼だよ、お姉ちゃん。」

「そうだぞ、風先輩。そういう風先輩だってうどんに見えるときある

からな」

「女子力の塊ってことね！」

「あーうん、ソウダナー」

「諦めないでください！」

皮肉で言ったのにな。なんでその発想が出てくるのか不思議でしかない。

「風先輩、本題に入ってくれますか？」

「ああ、ごめんごめん。うちのシャルがうるさくて」

「おい。」

流れるように擦り付けてきやがった。

「さてと、みんな元気でもよかったわ。早速だけど、昨日のことについていろいろ説明していくわ。」

「よろしく願います。」

「戦い方とかはアプリに書いてあるから、今は何故戦うかについての話しをするわね。」

何故戦うか

「コイツ、バーテックス。人類の敵があつちから壁を越えて十二体攻めてくるのが神樹様からの神託でわかったの。」

「十二体じゃない、十二種類だ。」

十二種類のバーテックス全て見たわけじゃないが、アイツらはまた

生誕して襲来し、倒され、また生誕するを繰り返している。

「十二体と十二種類。なんか違うの？」

「同じのように聞こえるのだけど。」

「例えば、俺達が十二体倒したとしてもバーテックスの襲来は逃れられない。永遠と戦い続けることになる。」

「アンタ・大赦が、嘘を。ついてるって言いたいの？」

「大赦は嘘つき集団だ。信じすぎると酷い目にあっちまう。」

「お金だけ巻き上げて潰してやろうか。」

「シャルくんは、なんでそんな事を知ってるの？」

「俺は前の勇者と共に戦い、この世界の真実についてほしい把握した。」

「真実。それって」

「この世界は壁の中以外は燃え盛る大地になっている。当然、そんな場所に生物は生存出来ない。」

「私たちが最後、ってことですか？」

「ああ。」

今は、ガイアとアラヤについては黙っておこう。

「そんなことを。っ！」

「どうした、東郷？」

「どうして、風先輩とシャルル君はそんな大切なことを黙ってたんですか？」

「アタシたちが勇者として戦う可能性は100%とは言えなかったし、戦わない可能性だってあった。」

「もしかしたら、友奈ちゃんも死んでたかもしれないですよ！」

「誰も死なせない。俺がいる限り、俺の友達は死なせない。」

「もちろん、俺が先に死ぬぜ。ってことなんだがな。」

「なら、シャルル君はなんで。私たちに言ってくれなかったの？」

「言いたくなかった。これに尽きるな。勇者部での活動は凄く楽しくて、今でも色褪せない思い出だ。そんな楽しい時間を壊したくなかった。そんな、自己中心的理由だ。」

軽蔑されても、こんな理由じゃあしょうがない。俺という人間は自

己中心的な馬鹿だ。どうしようもない馬鹿だ。

「っ、もういいです。」

車椅子を自身で動かし部室を退出する。ここで追うという選択肢は俺にない。俺が行っても解決にならない。

「あ、待って！東郷さん！」

「」

「アンタは追わなくていいの？」

「火に油は注ぎたくないからな。」

さらに関係が拗れたら——まだ、修復可能だと思ってるのか？本  
当に救いようがないな。

「はあー」

「シャル先輩が溜め息を」

「俺だつて、溜め息ぐらいするよ」

どうしたもんか

「ねえ」

「なんだー」

「アンタが言った壁の外の話してほんと？」

「大マジだよ。これ関係で嘘はつかないからな」

つく必要がない。

「そつか。よし、まずは東郷に謝る練習をするわよー！シャルも当然、やるわよね？」

「だ。やるか」

「誠心誠意謝れば許してもらえと思うよ」

誠心誠意、か。俺が誠心誠意謝ったことあつたけな。周りに恵まれた環境だったから——いや、あつたな。懐かしい。まさか結構着痩せするタイプだったとは。

「じゃ、まずはシャルが東郷役ね」

「そういう感じ？」

「ええ。とことんやるわよ」

「いいぜ。辛口評価でやってやる。ドンと来——！」

テロリン♪テロリン♪

「——お前はド・ンと来るなー!!」

「こんな時に。」

「まったく、空気が読まないわねえ。」

ああ、クソ。本当にタイミングが悪い。コンディションは最悪だが、やるしかないな。

——花卉が舞う。

## 仲良し三人組

「アイツらは厄介だな。」

前方には蠍座、射手座、蟹座の三人組（？）が浮遊している。いくら、あの頃とは違い精霊の守りがあるとしても危険なことには変わらない。

「シャルはアイツらのこと知ってるの？」

「ああ。射手座は矢の雨を降らしてくる。それを防いだあとの隙を蠍座が突く。蟹座の盾も厄介だ。矢の軌道をずらすことも可能だから、避けたからといって気を抜かないでくれ」

「詳しいですね。」

「まず、俺はあの射手座を攻撃する。風先輩は蠍を、樹は友奈が来たらさっきの説明をして、こっちに来るように言ってくれ」

「アンタ、アタシより部長してない？」

「今はそんなこと気にしてる場合じゃないぞ。」

「いや、そうだけどうくん。」

「じゃ、俺は行くから。そっちは頼んだ」

「わ、わかりましたっ！」

昨日、俺のアプリを確認したが封印の義というものはなかった。つまり、俺一人だとバーテックスを倒すことは出来ない。

「射手座へいつもの感じで走る。だが、いつもよりスピードが出ない。なんだ。」

「シャルくんっ！」

「友奈か。説明は聞いたか？」

「うん。私とシャルくんであの矢飛ばしてくるの倒せばいいんでしょ？」

「おう。てことで、俺が——回避ッ！」

「わわ！」

会話の途中だったのに

「ふうー」

「友奈！後ろだッ！」

盾の反射。友奈を突き飛ばし、射程外へと弾く。俺は十二勇士を展開して矢を弾いていく。

「シャルク——うー！」

空中で弾き飛ばしたせいで回避も受け身もとれない状況の友奈を蠍が見逃すわけがなく、尾によって一撃を入れられる。

「友奈ア!!」

精霊で守ったとしても衝撃は本体にいく。衝撃を受け身なしに受けてしまい、身動きが取れない友奈をなんとか抱え、その場を離脱—

——出来ず、第二撃が迫る。

「ぐう」

横に入れられたこともあり、地面に叩き落されることはなかったが、遠くへと飛ばされてしまう。

「友奈！起きろ！」

「う、ううっ」

意識が完全に起きていない。そこへ蠍の棘が迫る。完全に友奈の命を取りにきている。

「耐えるッ！」

命婦と牛鬼の精霊バリアで受け止め、衝撃はジュワユーズで受け止める。腕がビリビリするが意地でも友奈は守る。!

「アス、トルフォ、ロー、ラン、テュル、パン、オリヴィエ、オジエ、は風先輩、の掩護、を」

十二勇士の五人を風先輩達の掩護へと向かわせる。これで一先ず安心だが、この状況がいつまで続くかはわからない。早くここを脱しなければいけない。

「」

リュミエール、却下。友奈にもダメージがいく。エリュプシオンも当然、却下。アストルフオの槍も駄目だな。足が何処かわからない。残りの十二勇士は友奈のもののためにも残して置きたい。

「一か八か、でっ！」

一度失敗したとしても精霊の守りで友奈は守られる。なにもせず、助けを待つよりかは生き残る可能性は高い。

「ハァー、——!?!」

力を込め、一撃を——何者かの攻撃で蠍座が傾く。

「セイツ！」

そこに棍棒での一撃をいれ、蠍を後退させる。

「大丈夫、シャルル君。」

「ああ。助かったよ、東郷。」

やっぱり、あの一撃は東郷の射撃だったか。

「まだ、終わってないわ」

「わかっている。掩護・頼めるか？」

「もちろん。」

「よし。」

いつもいつも東郷の射撃には助けられてきた。後ろからの掩護つてのは本当にありがたい。？

「——あ、ね、東郷、さん。」

「友奈ちゃん、良かった。」

「大丈夫か、友奈？」

「う、うん。大丈夫だけど、敵は？」

「まだ健在だ。起きて早々悪いが力を貸してくれ」

「うんっ！」

「俺と友奈で突っ込む！東郷は体勢を崩すことに集中してくれ！」

「了解。」

友奈と共に蠍へと翔ける。動き出そうと起き上がった所を青い閃光により、体勢を崩す。

「エリユプシオンツ!!」

轟音を響かせ、炎上する。致命傷となり、起き上がる様子はない。

「封印開始っ！」

友奈の言葉と共に蠍から御霊が飛び出る。一つだったものがいくつも増殖し、数え切れない程の量になる。

「まとめて薙ぎ払う——!!」

何個あろうが関係ない。同時に潰すだけだ。

「うお、らあああ!!」

一つ残らず潰れ、蠍が消滅していく。

「風先輩達の掩護に向かうぞ!」

「わかった!」

まだ、射手座と蟹座が残っている。蠍がいなくとも、あの二体だけで厄介だ。十二勇士を向かわせると言っても危険なことには変わらない。急いで向かう。

着いた頃には風先輩と樹の戦いは終わっていた。蟹座はおらず、射手座が十二勇士達に翻弄されている。

「蟹座は倒したのか?」

「さくつと倒しちやったわよ。ってもほとんどアンタの精霊のおかげだけだね」

「はい。ほんつつと!に凄かったです!」

「精霊じゃないんだけどな」

シャルルマーニュ十二勇士。カール大帝の精鋭。まあ、いろいろとあるがクツソ強い戦友だな。

「じゃあ、アレはなんのなよ?」

「まあ、その説明は後でするとして」

「そうね。まずは——」

「風せんぱーいっ!樹ちゃん!」

「友ー、東郷!」

「東郷先輩」

やっと、友奈と東郷が追いついてきたか。

「私も戦います」

「東郷。わかったわ。国防に励みましょ!」



「国防・はいっ！」

なるほど、その単語を持つてくればよかったんだな。あんなキラキラした目、久しぶりに見たよ。

「よおーしっ！早速行動開始だ！俺と十二勇士で動きを止めるから封印頼んだ！」

「オツケー！」

「わかりました。」

「頑張つてね、シャルくん！」

「了解。私はここから掩護するわ」

東郷を除く俺達は一斉に射手座目掛けて走り出す。東郷は自身の身長程の銃を取り出し、その場にしゃがみ、構える。

「——トルナード！」

間合いに入った瞬間。ジュワユーズに水の元素を纏わせ、振るう。斬りつけられた場所は氷に覆われ動きが止まる。

「刺し穿てッ！」

その部分を十二勇士達に突貫させる。

「今だっ！」

思惑通り、射手座の体に人一人通れる穴が出来る。余程、大ダメージなのか射出を止めぐったりと体が傾く。

「さっさと御霊出しなさいっ！」

「あ、出まし、た、よ?!」

「速い！」

御霊が出た所まではよかったが、出たと同時に頭部(?)付近で高速回転をし始めた。

「がむしゃらに振るうひかないのか?!」

「時間がないってのに！」

空中で回転しているせいで、エリユプシオンもリユミエールも踏み込みが足りずに威力が激減するだろう。そんな状況で当たったとしても碎けはしないだろう。

「どうすれば——?!」

突如として御霊が碎けた。

「今のつて 東郷さん!？」

「今のをあそこから 流石ね。」

「凄い。」

「やっぱ、達人だな。」

エミヤ並の射撃制度してんな。だいたいこつから1km離れてるんだよな。次は4kmに挑戦してみてくれないかなー。

——花卉が舞う。

## 勉強会

二度目の襲撃から何日か経った土曜日。俺と友奈は東郷の家へと集合していた。

目的は二つ。友奈の課題を終わらせる事と定期考査の対策だ。

「うえ〜」

始めて一時間。そろそろ限界だろう。

東郷へ目線を送る。俺の目線に気づくと、キッチンの方に移動し、ぼた餅を載せたお盆を持ってきた。

「はい、ぼた餅よ。」

「わあ〜い♪」

さつきまで机にぐでえ〜、としていたのが嘘のように元気一杯までに復活する。

友奈が疲れたら東郷のぼた餅、そう記憶にメモしておく。

「じゃあ再開するぞ。」

「はいっ。」

友奈の得意教科は数学と国語。毎回八十点を超える。

東郷の得意教科は神道と社会。特に歴史に関してには常に満点を取っている。

「シャルくん、ここは？」

「地層か。まず、地層を比べる時はどの方向に傾いてるかを確認したら楽に解けるぞ。」

「ふむふむ。」

「この場合だと、全部の地層にれきがあるだろ。れきの層が上に行ってるて事は上の層がなくなってる。つまり、一番上が低くなってるってことだ。」

「あ〜なるほど〜！」

現時点で友奈の課題は消化出来た。目的2に着手している。

友奈は理科、東郷は数学をしている。俺は先生になってる。

うん、完璧な形だな。

「共通してる層を探して、その層がどう移動してるかを考えるんだ。」

「うん。ありがとう、シャルくん。」

「おう。」

東郷の方にも視線を向ける。

「どうやら、東郷はスラスラと解いてるようだ。これなら心配はいらないな。」

ハチマキを巻いてるのが不思議でたまらないが、東郷だしな。スルーしておこう。

「今日はここまでにしとくか。」

「やったー!」

昼の一時から集合して五時間ぶっ通しで勉強は流石にキツイだろう。ぼた餅という回復アイテムがあったとしてもだ。

友奈は余程嬉しいのか大の字になって畳に倒れ込む。

「今日教えたことを忘れないようにな。」

「うっ。」

「木金がテストだからね。一年生の時みたいに赤点取りたくないでしょ?」

「それはそうだけど。」

「赤点取つたら、東郷のぼた餅一週間禁止な。」

「なっ、それは!」

「シャルル君!」

「東郷、ここは友奈のために心を鬼にしてくれ!」  
「ぐ、ぐっ、ぐう。」

「なんで、東郷の方がダメージでかいんだ。」

「頑張ってくれ。友奈ならできるよ。」

「その間なに!」

よっぽどの事がない限り赤点なんてないだろう。

テスト前日に遊びに行かない限りは。

「さ、今日は帰ろう。」

「不安になってきた。」

「それじゃあ、友奈ちゃん。明日も私と一緒に勉強しましょ？」

「はい。そうします。」

「良かったな。」

俺は明日、園子と銀に会いに行かないといけない。当然、友奈の勉強を見れない。でも、東郷が見てくれんなら安心だな。

「じゃ、またな。」

「またね、東郷さん。」

「うん。気をつけてね」

靴を履き外へ出る。

お隣同士ということもあり、友奈と東郷、たまに俺で遊ぶことがある。

ぼた餅食ったり、ぼた餅食ったり。そして月に一回程は買い物に行く。俺は荷物持ちで。

「それじゃあ、シャルくん。また学校で」

「おう。体調を崩さないようにな」

友奈とも別れ、少しの距離を歩く。一分もせず、自分の家の玄関へと辿り着く。

扉を開ければクロが待ってましたと言わんばかりに飛びついてくる。

「うおっ、と。」

それを難なくキャッチする。

クロがたまに猫ではなく、犬かと思う時が時々ある。この元気さは犬そのものだろう。

「手洗うから降りてな」

クロを降ろし、洗面所へと向かう。

外出した際は必ず手を洗うことにしている。英霊になっても前からの習慣は中々落ちない。

「」

俺に足りないナニか。

あの日からずつと考えてるが全然思いつかない。

強さではない。きつと精神的な何かなのだろう。

「はあー」

また一日が終わる。

ご飯食べて、勉強して、またご飯食べて、お風呂入って、そして就寝。それだけで一日が終わる。

何一つとして、問題は解決しない。

戦いも終わらない。園子と銀も治らない。

何が勇者だ。何が聖騎士だ。ただの愚者じゃないか。巫山戯やがって

」

根は良い子なんです。

勉強会から半月程だろうか。

またまた例の如く、アラームを鳴り響かせながら、視界一面を花卉に覆われる。つまり、三度目の襲来だ。

「久々だけど、みんな大丈夫よね？」

「が、頑張る！」

「おう。いつでもいけるぞ」

「大丈夫です。毎日、説明のテキストを読みましたから！」

「テキストの内容は全部、頭の中に入れました。」

スマホで今回の敵を確認する。画面には山羊座と表示されている。

山羊…どいつだったけな。こう数が多いと姿と名前が一直線しない。前回のような、記憶に強く残ってる三人組のようなバーテックスはあまりいない。強いて言うなら…獅子座とかか？

「そんじゃ、今回も勝つわよ！」

「お、円陣か…あ、俺も？」

俺以外でやると思い、棒立ちしていると風先輩がこちらを睨んできた。

あれ…一応俺、男なんだが。

「勇者部五箇条一おおつ！なせば大抵なんとかなるっ！えいえい——」

「「「おおおおお!!」」」

気合、やる気共に充分。戦闘前の士気としては最高だな。

「んじや、早速——!?!」

「えっ…東郷さんが？」

「いいえ、私じゃないわ。」

何処からか剣が飛んできて、山羊座の頭部らしき所に刺さる。一瞬、剣が光ったと思えば爆発し、大ダメージを与える。

「シャル先輩ですか。」

「俺は爆発なんて出来ないぞ」

剣の爆発。一番最初に浮かぶのは赤い弓兵だな。

投影した武器の魔力を火薬とした壊れた幻想<sup>ブローケン・ファンタズム</sup>。俺も出来はするが、一生することはないだろう。

「——ちよろいつー！」

「上か！」

声が出た方向を向く？。一瞬だけだが、赤いヒラヒラが見えた。

本当に赤い弓兵か。

いや、声の高さは女のものだった。あの弓兵は紛れもなく男だ。女になるなんて、そんなご都合主義。あるかもだな。

「封印開始っー！」

「一人で!？」

封印は一人でも出来るが、した場合御霊を壊す役目の人がいない。つまり、事実上の敗北だ。

しかし、この女性は剣に祝詞<sup>気持</sup>を乗せることで封印に割く人員を省いた。

「毒ガスか!？」

「前が。」

「目暗まし!？」

御霊からガスが噴出する。

これまでの戦いで御霊にそれぞれの自己防衛機能がついてることは予測していたが、なんの機能があるかわからない。

対策の立てようがない。臨機応変に対応するのが最善策だ。

「アストルフオの槍ツ!!」

ジュワユーズをアストルフオの馬上槍に持ち替える。そして、風の元素を乗せ振るう。

少しの動作で竜巻ができ、ガスを晴らしていく。

ほんっと、五大元素ってのは便利だ。

「ナイスアシストオー——そこ、だああ!!」

落下で勢いをつけ、刀を振るう。

当然ながら、御霊は砕け散った。砕け散ったと同時に山羊座の体も



崩れていく。

これで、今回の襲来は無事終了。

「殲滅！」

「諸行無常」

綺麗に着地し、そう呟いた。それに合わせて彼女の精霊も決め台詞。

俺もああいうのを仕込もうかな。後ろで爆発しながらポーズ。最高だな。

「はあ」

「えーっと誰？」

啞然としていた友奈達の前に来たと思えば、深々と溜息を落とした。

なんだ、コイツ。失礼極まりない。

そんな事気にせず友奈が問いかける。

「揃いも揃ってポーズとした顔をしてんのね」

「え。」

「こんな連中が神樹様選ばれた勇者ですって。本当なの？」

「ほう。」

「!!?」

「待て、よ。シャルル君」

「わかっている」

流石に十個下の女の娘に手を出すわけないだろ。俺を誰だと思っ  
てんだ。だが、次はない。

「それで、貴様の名は？」

「わ、わ私は三好 花凜！た、タタ大赦から派遣された真正正銘の正式な勇者よ！」

「シャルは圧を抑えなさい。」

「ふむ。そういうなら」

「しゃーなし。ここは素直に聞いとくか。」

「え、えとー。あー！もう！とりあえず！私が来たからには安心しな  
さい！どんな戦いもこの完成型勇者がいれば余裕よ！」

「それは心強いな」

「うん、そうだね。これからよろしくね、夏凜ちゃん！」

「呼び捨て・ま、まあいいわ。」

友奈の人間たらしが発動したか。それなら、もう安心だな。

ちよつと自尊心が強い娘なのかな？

そうこうしてる内に樹海化が終わろうとしている。

「それじゃあ、また今度」

「今日はありがとうございました」

「次、楽しみにしてるわね」

「じゃあね、夏凜ちゃん」

「また今度、会いましょ」

「え、ええ。」

ちよつと戸惑いつつもしっかりと手を振り返してくれている所を見ると、礼儀はしっかりしてるんだな。

——花卉が舞う。

うどんは控えよう！【番外】

5月1日。我らが部長の誕生日。  
そんな日にも関わらず、俺と風先輩は学校の校門前に集まっていた。

まあ、俺が呼び出したんだけどな。

理由は簡単。俺以外の部員が誕生日会の準備を終わらせるまでの時間稼ぎだ。

場所は犬吠埼家。提供者は樹です。

とりま夕方五時まで遊んどけと言われた。計画は自分で考えろだ  
そうです。

「それで？何処行くの？」

「ふむ、そうだな。手始めにショッピングモールにでも行くとする  
か。」

「なんか買う物でもあるの？」

「いいや、ない。」

「本当に無計画なのね。」

「たまには良かろう？」

「まあ、そうね。」

何もかんも<sup>村正</sup>が悪い。

自分自身だろ、って言われても無視します。アイツは俺とは別人  
だ。根本的な所が同じでも俺は認めない。アイツも認めない。

そんな関係だ。エミヤと衛宮士郎みたいな関係ではないがな。

「さあ行こう。時間は有限だぞ」

「エスコート頼んだわよ」

「ふっ。誰に言っている。」

余程のことがない限り、安心安全の旅をお届けするぞ。

「何か食べたい物でもあるか?」

「うどんっ!」

「それ以外でだ。」

「全く、この女子力マシマシ部長は。」

「んく、それじゃああのクレープでも食べましょうか」

「そうするか。」

丁度いい所に屋台を開いてるな。このクレープ屋のおかげでうどんにならずに済んだよ。

心から感謝。

「選んだか?」

「イチゴで」

「了解。」

店員にチョコ一つとイチゴ一つを注文する。

「660円です。」

「そうか。」

料金を渡し、クレープを受け取る。

このお金は大赦からのお小遣い、と見せかけて、村正が渡してきたお金だ。

「受け取れ」

イチゴのクレープを風先輩に渡す。

「あら、奢ってくれるの?」

「遠慮せず食べる。」

「ありがとね。じゃあ、遠慮なくんく♪」

「んっ・美味しいな。」

ちよつと甘すぎな感じがするが、ちゃんと美味しいな。俺としては苦い方が好みだな。

「美味しいわね!」

パクパクと凄い勢いで食べていく。見る見るうちに減っていき、包みのみになってしまった。

「俺のも食べていいぞ。」

「クレープ嫌いなのか？」

「いや、好きだぞ。」

「じゃあなんで？」

理由・理由か。特に考えてないな。ここは適当に作っとくか。

「風の食べっぷりを見ていたら、お腹が一杯になつてな」

「食が細すぎじゃない。毎日しつかり食べてるの？」

「心配するな。気にせず食べておけ」

「それならいいんだけど」

クレープ・クレープかあ。懐かしいな。

アイツらは今、何してんだろ。園子並に予想が出来ないな。

クレープを食べ終え、ブラブラしていると一枚のチラシが視界に入った。!?

「特売・だど」

「やるわよ」

「もちろんだ。」

お一人様一個のみ。品は卵。

卵はいろんな料理に使う。いくらあっても足りない。つまり、ここで狙わない理由はない。

「一個だけだぞ。誤って二個取るなよ？」

「あつたりまえよ。」

一応注意しておくが、風先輩がそんなことをするとは思わない。

「うおおお!!」

絶対に勝ち取るツ！シャルルマーニユの名にかけて！

「ふいー。」

「期限は一週間か」

そんなぐらいいれば、八個全部使い切るか。

「むっ。もうこんな時間か」

腕時計を確認すると針が五時を指している。

村正からは五時ぐらいには帰ってこいと言われている。

「今日は終わりにする?」

「そうだな。日が暮れる前に帰るとしよう。」

帰る、というメールを一瞬で送る。

「送っていこう。」

「帰るまでが遠足だものね」

「遠足ではないんだがな」

たったの三時間だったが結構楽しめたな。

クレープも美味しかったし、一人で食いに来てもいいかもしれない。

「樹いー!お姉ちゃんが帰ったわよー!」

「誰もいないな。」

扉を開けたことで中の様子が見えるが、何も音がしない。生活音すらも聞こえない。

「あら。樹い?」

靴を脱ぎ、玄関を上がる。

風先輩を先頭にリビングへと進む。

「いな——」

電気をつけようと手を伸ばした瞬間だった。

「二風（先輩）（部長）、お誕生日おめでとう（ございます）っ!!」

「勢いよくクラッカーがなる。少し耳がキーンとするが我慢。」

「お姉ちゃん、誕生日おめでとう♪。ってあれ?」

「風。」

「先程から反応がない。いつもなら樹に抱きついてるのに。まさか。」

「これ。気絶してるんじゃないか?」

「士郎、流石にそんな訳。」

「立ったまま気絶しているだ。」

「おいおい! 主役気絶させたら意味ねえだろ!!」

「あんず、見ろよ。こんな幸せな顔で逝ってるヤツはなかなか見れないぞ。」

「まだ生きてるからね!?!」

「起こさないと不味いんじゃないの?」

「そうですね。どうしましょうか」

上から御影、若葉、俺、村正、珠子、杏、千景、ひなたとなっている。こうも大人数になると少しややこしくなってくるな。

「起きてください!」

「駄目よ。友奈ちゃん。既に風先輩はっ!」

「アンタらはすぐ殺そうとするわね!!」

「まあまあ、夏凜さん。」

「というかこれ。どうやって起こしたらいいんだ?」

上から結城友奈、東郷、夏凜、樹、小学生銀となっております。

「遂に王子様のキスが見れる!!」

「もうドーンとやっちゃって!」

「園子と園子は静粛にな」

中学生と小学生の園子を呼ぶときは声のトーンを変えている。

小学生園子は明るく、中学生園子はちよつと威圧をかける。他はわからないようだが、園子はわかるみたいだ。何故かは現時点ではわからない。

「よし、ドンと来てみてくれ!」

「確信犯だな。」

「通報は俺がしとくから、ドンと行ってこい」

「お前達は巫山戯すぎだ。」

中学生銀は何言ってるんだ。俺を刑務所にぶち込みたいのか？

「——ハッ！」

「あ、起きた。」

「大丈夫、お姉ちゃん？」

「はあ、はあー。なんかシャルに似てる人がいた。」

「ほう。」

「何か言ってたか？」

「ごっちゃんなー、って叫んでたわ。」

なるほど。風先輩、完全に英霊の座に行きかけたな。

「まあ、無事でなによりだ。」

「え、ええ。それより、なんで家に集まっているの？」

「記憶が飛んでやがる。」

「記憶が消える所を初めて見てしまった。」

「風先輩の誕生日会ですよ。」

記憶が消えてるといふよりは、衝撃的な事が起きて一時的にフォルダからだせなくなっただけと思うが。

「ケーキもうどんもあるぞ」

「もちろん、そばもあるわよ！」

「食べるのうたのんだけじゃないかな。」

「ま、それより誕生日会なんだから当然、プレゼントを受け取ってもらうぞ。」

「アンタら？」

「泣いてるの。」

「バカ。汗よ、汗。」

各々が風先輩にプレゼントを渡していく。最高級うどんだったり、エプロンなどの料理器具が送られていく。

一名、打ち立てのそばを渡しているヤツがいたが、難なく吹き飛ばされていった。



「そら、大トリ行つてこいよ」

「了解。もう一回、座に飛ばしてやろう」

「マジで洒落にならんから止めろ。」

・徐ろに袋からプレゼントを取り出す。

「。」

「参考書とノートだ。」

・風先輩はこれでも受験生だ。勉強を疎かにして欲しくはない。

「あつ、あれ〜」

「ぶーぶー!!」

・「そんなの受け取っても喜ぶヤツなんていないぞー!」

「。」↑結構嬉しいヤツ

・珠子と小学生銀からブーイングが飛ぶ。そして、何故か村正がしょんぼりしているのを俺は見逃さない。

「というのは冗談だ。本命はこちらだ」

またまた袋から一冊のノートを取り出す。

「俺直筆のレシピブックだ。」

「おお〜!」

お、いい反応。これも冗談で出したんだけどな。俺より風先輩の方が料理上手いな。

「これも冗談で。」

またまた袋から取り出す。今度はさつきとは違いノートでも参考書でもない。

「受け取ってくれ」

「。これは?」

「前髪留めだ。料理中とかに使ってくれ」  
? シンプルな出来の髪留めだが、風先輩には何でも似合う。

「。———ありがとね♪」

「お気に召したようで」

サプライズは大成功だな。あ、参考書とノートはしっかりと使ってください。

厳しいより緩いほうがいいよな

襲撃があった日の放課後。俺達はいつもと同じく、部室に集合していた。

「シャルはどう思う?」

「まあ、いいんじゃないか。ちよつと自尊心が強いだけの娘だろ。」

議題はもちろん、今日出会った三好 夏凜について。逆にそれ以外話すことがないのは内緒。

「そうね。特に警戒する必要はないと思うわ。」

「私は良い子だと思うなく。今度はしっかり自己紹介するんだ。」

「仲良くなりたいですね。」

今の所は無警戒が全会一致だな。そもそもこの部には人を警戒しようとする選択がない。

歪と言うべきか。聖人と称えるべきか。この答えは出さないでこう。

これが俺の最善策だ。

「うくん。じゃ、友好的にでいいわね。」

「ああ。」

「わかりました。」

「やったく♪」

「うんっ。」

「。」

これからの行動次第では斬ることになるかもしれないが。そんなときはそんなときだ。

風先輩はちよつと眉が寄ってるが、理由がわからん。皆目検討もつかない。

「それじゃあ、俺は里親探しに行ってくるな」

「あ、うん。」

「私と東郷さんは河川敷のお掃除に行つてきます」

「風先輩と樹ちゃんはお料理教室のお手伝いに行くのよね？」

「はい。予定の時間までに着けるように出ます」

「んじや、俺は行くぜ。なんかあったら連絡くれ。すぐ駆けつける」  
勇者部の活動を開始する。

里親が見つかつてない、仔猫が三匹程いる。俺が飼つてもいいが  
クロが拒否するからなく。

なんで仲良く出来ないのか。猫の言葉はわからない。

「今日から皆さんのクラスメイトになる三好 夏凜さんです。」

「はわあー」

・それが妥当か。

・勇者は一つの場合に集めたいのか。それとも、チームワークの向上  
を重視したのか。まあ、考えてもしようがないな。

「三好さんはご両親の都合でこちらに引っ越したのよね？」

「はい。」

「編入試験もほぼ満点だったんですよ。」

「いえ。」

「さ、三好さん。みなさんに挨拶を」

「三好 夏凜です。宜しく願います。」

クラスメイトになった以上、ある程度は仲良くなりたいな。

いつもの放課後。勇者部部室にて

「私が来たからにはもう安心ね。完全勝利よっ！」

「何故このタイミングで?」

「そうだな。なんで最初つから来なかったんだ?」

何故、一回目の襲撃から一ヶ月経った今なのか。やるなら、最初の戦闘からで良かったと思うがな。俺も不快にならずに済んだ。

「私だつてすぐ出撃したかったわよ。でも、大赦は二重三重に万全を期しているの」

笑った。

常に楽観している奴らが万全を期してる訳ないだろ。いつまで、過去の栄光に縋っている。

訂正、過去の栄光もなにもなかったわ。

「最強の勇者を完成させるためにね」

「最強の勇者」

「そつ。貴方達の戦闘データを得て、完璧に調整された完成型勇者。それが私」

戦闘データを。なるほど。三好にデータを埋め込んだのか。科学の進歩は早いな。

「私の勇者システムは対バーテックス用に最新の改良を施されているわ。」

おいおいおい。俺の勇者システム、二年前のアップデートからなにも変わらないんだが?」

封印システム欲しい。

「んっ」

「なによ?」

「そのスマホ」

「私の最新型システムがどうかした?」

見覚えがあるな。

「そうか、そう来たか!」

「それ、何処で手に入れたんだ?」

「大赦からだけど」

「そうか。」

「?」

銀のスマホを改良して三好に渡したのか。

「つまり、銀は戦わなくてよくなったのか。それは喜ばしい。」

「ふん・まあ、いいわ。とにかく、大船に乗ったつもりでいなさい。」

「そっか。よろしくね、夏凜ちゃん♪」

「宜しく。」

「ようこそ、勇者部へ！」

「は・誰が？」

「夏凜ちゃん」

「部員になるなんて一言もしてないわよ！」

「え、違うの？」

これには皆苦笑い。

まあまあ、これが友奈の真骨頂だから。どんなに相手が警戒しても、友奈の方へと引つ張ってくる。回避も防御も許さない。

「違うわ。私は貴方達を監視するために来ただけよ。」

「もう来ないの？」

「また来るわよ。御役目だからね」

「じゃあ、部員になっちゃった方が話が早いよね」

「確かに」

「まあ、いいわ。そういうことにおきましようか」

▼夏凜が仲間になった。

「その方がアナ達を監視しやすいでしょうしね」

「監視監視ってアンタねえ、見張ってないとアタシ達がサボるみたいな言い方止めてくれない？」

「偶然適当に選ばれたトーションローが大きな顔するんじゃないわよ」

「むっ」

「偶然じゃない、必然だ。そこ、履き間違えるなよ」

勇者適正。

これがなんの数值を示してるのか現状ではわからない。神樹様がアラヤと推測するに、「成長する人類」成長度数ってか？

「ふん。まあいいわ。ま、御役目はおままごとじゃ——ギヤアアアア!!」

夏凜の精霊、義輝が牛鬼に齧られている。心なしか義輝が痛みで泣いているように見える。

「何すんのよ！この腐れ畜生！」

「外道メ」

「外道じゃないよ、牛鬼だよ。ちよつと食いしん坊なんだ」

「牛鬼に齧られちゃうから皆、精霊を出せないのよ」

「ちゃんと躡けなさいよ！」

まあ、何も食うものがなくなったら俺を齧りに来んだよな。結構ガチで食べに来るから要注意精霊だよ。

「諸行無常」

「夏凜ちゃんの精霊は喋るんだね」

「当然よ。なんたつて完成型勇者の精霊だもの」

「でも、シャルくんは十二体もいるよ？」

「俺のは精霊じゃないがほい。」

十二勇士と命婦を出す。十二勇士は出るなり、部室を縦横無尽に翔ける。

「全軍、止まれッ！」

ピシツと音がる程の速さで整列する。

「え、えく。アンタ、これどうなってるのよ」

「右から順に、アストルフオ、レナルド、ブラダマンテ、ローラン、オージェル・ダノワ——」

「名前じゃなくて！」

「ん？」

まあ、名前はこれから覚えてもらえばいいか。

「単独で戦闘出来る精霊なんていないわよ、フツ——」

「普通じゃないからしょうがないだろ。」

「つくづく規格外ね。」

規格外で俺が規格外ならマジモンの英雄はどうなんだよ。

「アンタ、本当に一般人？」

「どうだろうな〜？」

茶目っ気たつぷりで許して下さい。

「あれ・牛鬼？」

牛鬼はナニかに怯えているのか友奈の後ろに隠れてしまった。

「精霊って怯えるんですね。」

「とりあえず、シャルは精霊を仕舞いなさい。」

「了解ですつ。」

十二勇士と命婦を戻す。命婦はスマホに、十二勇士は霊体化する。

十二勇士の姿が消えると、牛鬼が友奈の後ろから出てきた。

「シャルくんの精霊に怯えてたのかな？」

ビーフジャーキーを与えながら、友奈がそう言う。

十二勇士に怯える・なんでだ？

「東郷、精霊出してみてくれ」

「わかったわ。」

東郷の精霊。藍坊主がスマホから出される。

「アストルフオ、うざ絡みしてこい」

アストルフオの霊体化を解き、藍坊主にけしかける。

「ちよつと嫌がつてる。」

「うざ絡みされたら嫌がるでしょ」

「じゃあ、牛鬼にうざ絡みしてきてくれ」

今度は牛鬼にけしかける。

すると、牛鬼は猛スピードで友奈のスマホに入ってしまった。

「近づきも出来ないのか。」

ちよつとシヨンポリしているアストルフオを霊体化にする。

「あ、出てきた」

恐る恐るだが、ゆっくりとスマホから牛鬼が出てきた。

「ん〜？」

「牛鬼だけがシャル先輩の精霊を避けますね」

「精霊にも好き嫌いがあるのかしたら？夏凜は何か知ってる？」

「なにも知らないわ。そもそも、精霊会わせるの今日が初めてだし」

牛鬼だけが、か。他の精霊とは違う？

友奈の過去最高の勇者適正値となんか関係ないがあるのか。それとも――

？

「なんでだ。」

「齧られてるわよ」

「私も齧っていいかしら？」

「東郷はシヤラップ。」

「シヤルくんは大好きなのにな」

「あれで好かれてんの？」

「そう。だと思えます。」

「さっぱりわからん。」

「そもそも精霊とはなんだ？日本の伝説に登場する名前だが、その根本は絶対に違う。同じであれば、こんなおとなしい訳がない。」

「中身か。中身が違うのか？」

「――。」

「思考タイムに入っちゃったわね。」

「今回は何時間だろ。」

「前は三時間だったかしら」

「はあ？！なに考えてたのよ？！」

「確か・数学の問題でしたね」

「ああ、あつたわね。」

「先生の印刷ミスで答えが凄いいことになったんだよね。」

「知らない記号がいっぱいでした。」

「牛鬼は非常に残忍な性格で人殺しを楽しむ妖怪だ。だが、一部の地域では悪霊を祓う神として崇められている。」

「この牛鬼は神の一面を持った精霊ということか？」

「英霊にもよくいる。シヤルルマーニユを筆頭にな。別側面として呼ばれる者もいる。」

「だが、それが理由で十二勇士を嫌がる理由にはならない。日本とフランスでは全く関係がない。歴史的にはあつても伝説では一切ない筈だ。」

「んじや、今日はいさくん。各自帰っていいわよ」

「あ、私はシヤルくんを待つときます。」



「私も残つときます。今回は短めだと思うので」

「わかったわ。鍵閉めしつかりとね」

「わかりました。」

「私は帰ろうかな」

「今日もうどん食べに行きましょ」

「また？？」

「はあく・なんなのよ、この部は」

「夏凜もうどん食べに行きたいのね？」

「言つてない！」

牛鬼がただ、十二勇士を怖がっただけか？

いや、それだとどちらの牛鬼伝説にも当てはまらない。やっぱり中身か？

神樹がなんか弄ってる可能性が高そうだな。だが、なんの為に？

この後、三十分程思考の海に浸かっていたが答えは出なかった。

## 真意

「シャルを止めろー!」

「俺はそんな簡単に止まらないぞっ!」

サッカー部の猛者達をドリブルとは言えないただの力技で抜いていく。いくら運動神経バツグンだとしても技術は一朝一夕では身につかない。

「よしっ! シュートだ、川端!」

ゴール前でパス。ここで俺が入れてもつまらないからな。

「え、えっ!」

「思いつ切り蹴れ!」

「止めろ、キーパー!」

「せ、セイツ!」

サッカー部のキーパーはうちのクラスにはいない。当然、やるのはキーパー初心者になるわけで

「あ、やべ」

ボールがネットを押す。

「イエーイ! ゴール!!」

1—0。こっちのチームが1だ。

先制点はやっぱり嬉しいもんだな。

「やっ・た・な! 川端っ!」

「う・うん。」

「いいシュートだったなー!」

俺以外のチームメンバーも称賛の言葉を述べていく。

「シャルは手加減してくれ!」

「意識しますっ!」

「絶対意識しないやつ!」

俺は一度も点を入れてないんだけどな。

「シャルはサッカー部に来いっ！」

「俺、勇者部に永久入部してるんだ」

「くそっ・羨ましいぜ」

拳を握り、血涙を流しているのが半数を占めている。

まあ、その気持ちはよくわかる。ただでさえかわいいのに性格もいいときた。モテない訳がないよな。

昨日と同じく夏凜を含めての勇者部ミーティング。

「仕方ないから情報交換と共有よ。」

そう言いながら煮干しをパクリ。

「煮干し？」

「何よ。ビタミン、ミネラル、カルシウム、タウリン、EPA、DHA

・煮干しは完全食よっ！」

「へえ、詳しいんだな。」

「当然よ。」

俺のシャルルマーニュ愛に負けないにかがあるな。

「あげないわよ。」

「お、おう。」

「じゃあ私のぼた餅と交換しましょう？」

「なによ、それ？」

「さっきの家庭科の授業で作ったの」

「また密入したのか」

「合法よ」

合法のぼた餅だったか。ん？

「東郷さんはお菓子作りの天才なんだよ」

「いかがですか？」

「い、いらないわよ」

ちょっと欲しそうにしてるな。これがぼた餅パワーですか。

「いい?」

話しは変わり、情報共有へと。

「バーテックスの出現は周期的なものと考えられたけど、相当に乱れている。これは異常事態よ。帳尻を合わせるため、今後は混戦が予想されるわ。」

「確かに、一ヶ月前も複数体出現したりしましたしね」

「私は不測な事態が起きても大丈夫だけど、アナタ達は気をつけなさい。命を落とすわよ」

もちろん俺が先に死ぬぜ、だけどな。

「他に戦闘経験値を溜めることで勇者はレベルが上がり、より強くなる。」

「レベル? 大赦もゲームシステムを入れ始めたか。」

「それを満開と呼んでいるわ。」

「」

「あ、そつち?」

「いや、まあ精霊の数は増えるけど、うん。」

「そうだったんだ」

「アプリの説明にも書いてるよ」

「そうなんだ!」

流石友奈。俺の想像の更の上に行くとは、恐ろしい子。

「満開を繰り返すことでより強力になる。これが大赦の勇者システム。」

「へえ、すごい。」

「三好さんは満開経験積みなんですか?」

「いや、まだ」

「なくんだ。アンタもレベル1なんじゃ、私達と変わらないじゃない。」

「言つてやんな。」

「基礎戦闘力が桁違いに違うわよ！一緒にしないでもらえる！」

「そこは私達も努力次第、つてことね。」

基礎戦闘力・確かに銀達は元々運動神経良かったもんな。俺の場合にはステータス高いし

「じゃあじゃあ！これから体を鍛えるために朝練しましょうか。運動部みたいー！」

「あ、いいですね！」

「いいとは思うが、樹と友奈は朝起きれるか？」

「あつ。」

樹は風先輩、友奈は東郷かお母さんに起こされてそうだな。

「はあ。なんでこんな連中が神樹様の勇者に。」

「なせば大抵なんとななるっ！」

「なにそれ？」

「勇者部五箇条。大丈夫だよ、みんなで力を合わせれば大抵なんとななるよ。」

カツコよく、がどうして入らなかったか疑問でしょうがない。

「なるべくとか、大抵とか、アンタ達らしい見通しの甘いフワツとしたスローガンね。」

「文字通りフランクなんだよ、俺達勇者部は」

「いや、アンタだけでしょ」

「おおっと、風先輩？」

食い違いが起きてるようだ。

「さてと、俺からの情報共有もしなくちゃな。」

「アンタから？もう私が粗方説明したわよ。」

「まあ、ちよつとした注意点だよ」

本当にちよつとだよ。注意点と訂正箇所を言うだけ。それだけだ。

「まず最初に訂正から入ろう。」

「私の完璧な説明のどこに訂正が。」

「パーテックスの残りは七体ではなく不明だ。」

「はあ!？」

適当にインフイニテイでも書いてくか。

「親玉が存命してる限りウジャウジャと湧いてきやがる。それが  
バーテックス  
頂点だ。」

「そんなこと大赦から一言も。」

「親玉つてなに〜?」

「神樹の対となる存在、天の神だ。」

「神つて大きく出たわね」

「確証はあるんですか?」

「ある。西暦・三百年前戦った勇者、御影士郎の勇者御記にそう書いてあった。」

御影 士郎。この名を出すだけで疑いは確信に変わる。なんとつて彼は四国の大英雄なのだから。

これがエイプリルフルネタならどれほど良かったか。

「勇者御記。」

「勇者の活動記録初みたいな物よ」

「最初の勇者でも、どうしてシャルル君が勇者御記を持つてるの?」

「それがさっぱりわかんねえんだよな。」

「シャルのご先祖さまだったたり?」

「いや、それは絶対じゃない。」

俺がシャルルマーニュとして現界したのは二年前。影法師として現界している。受肉はしていない。

「まあ、バーテックスについてはこんぐらいにして」

「まだあるの?」

「これで最後だから安心してくれ」

「メモ必須?」

「ああ。しっかり聞いてくれ」

メモ帳を持ち身を乗り出す素直な友奈。かわいいと思います。

「満開は使うな。以上!」

「それだけ?」

「おう。」

「メモいらなかったね〜♪」

メモ必須級の内容だったんだが？

「満開を使うな。勇者の強化システムなのよね？」

「そうよ。強化なしでこの先戦えると思ってるの？」

「満開ってのは咲き誇ることだ。咲き誇った花はいつか枯れる。自然の摂理であり、地球の循環には必要不可欠なことだ。」

「えーっと。もう少し簡単をお願いします。」

あ、はい、すみません。ちょっとカッコつけちゃいました。

「満開を使うと体のどこかしらの機能が止まる。」

「!!?!」

「大赦はそんな、こと。私には。っ！」

「くっッ!!」

「先代勇者は満開の代償により戦闘不能になっている。」

自身を炉に焚べて炎を強くする。そんな所だろ。

「満開は使わない。それでいいわね？」

「はい。それがいいと思います」

「うん。」

「もしもの時は。」

「俺が命を賭ける。満開はなくとも必殺技があるんでね」

「必殺技？」

「ピッカピッカの色彩を見せてやるよ」

獅子座の火球に競り勝てないとしても、なんとかかしてやる。しないといけない。

使える宝具全部使ってみるか。我がシャルル・パトリキウスがプロークン・ファンタズム儂き栄光よを壊れた幻想するしかないな。最終手段だ。

結構の威力になると思う。なってくれ（願望）

「はい、情報共有は終わり。次の話し行こうぜ。あるんだろ、風先輩？」

「ええ、そうね。樹」

「あ、うん。」

一枚のプリントが配られる。内容は日曜日にある子供会のレクリエーションについてだ。

「日曜日だけどシヤル、来れる?」

「あく・土曜日休んでいいか?」

「土曜日は・そうね。休んでいいわよ。」

「あざっす!」

土曜日は俺いなくても出来るしな。なんなら日曜日も俺いなくてもいけると思うが・まあ、そこは気にせず。

「アンタら・さっきの話し聞いてたの!」

「さっきの話しがどうしたの?」

「満開が使えないのよ!強化がなくなった以上、どうにかしないいけない!こんな事やってる暇——」

「こういうときだからこそ・だろ?」

「三好さんの言いたいことはわかるわ・でも」

夏凜の言ってることはわかる。俺達が負ければ世界は終わる。子供会も学校も、なにかも終わってしまう。

「夏凜の言うとおり、この部はフワツとした部だからな。その時にならないとわからないんだ。」

「それだったら私が教えて上げるわ。今のまんまじゃ負ける。それか、満開を使うことになる。もし、アンタの言うことが正しければ、ここにいる全員戦闘不能になるわ。わかった?」

「わかってるさ。」

そんなことはわかっている。いくらシステムが強くなろうともこの結果は変わらない。

「でも、俺達は子供だぞ?」

まあ、俺は子供じゃないんだけどな。

「それがなんなのよ・私達は勇者。神樹様を選んだ勇者。」

余程勇者を誇りに思っているのか眉間にシワを寄せ射殺さんと睨んでくる。

「勇者だろうが関係ない。本来擁護されるべき子供がどうして命を張らないといけない?」

「アナタには勇者としての誇りが無いの?!」

「ないね。」



「くっくっ！」

そもそも勇者じゃないのは黙っておこう。

「勇者様ー！って言ってる奴らにでも命張らせとけ。子供は全力で今を楽しめ。こんな窮屈な世界で楽しめつつの無理があるが」

「なにがっ、言いたいのはッ！」

「世界の終わりなんて考えずに今を楽しもうぜっ！」

これなら伝わるだろ。

「——、はあくもういいわ。」

「あ、夏凜ちゃん」

諦めたのか部室から退出していった。

「空気が悪いな。俺も退出したほうが良さそうだ。」

「あら、今回は追いかけるのね」

「私のときは来なかったのに」

「アイツは打てば響くタイプだからな。打たなければ響かない。ならば、響くしかあるまい。」

夏凜の性格はだいたい把握した。

完成型勇者。まさにその通りだ。大赦の勇者像そのものだろう。

夏凜を探し始めて一時間。

壁を一望出来る砂浜。そこで二本の木刀を振り回している夏凜の姿を見つけた。

「ッ、——！」

動作確認のための素振りだろうか。どれもバーテックスとの実戦で使うことはなさそうだ。

「熱心だな。」

「なによ、冷やかしに来たの？」

「いいや。ただ、ちよつと話しをな！」

「アンタと話すことはないわ。帰りなさい」  
「うん。」

「ぎて、どうしたのか。どう打つ？」

「よし、俺も混ぜてくれ」

「はあ!? アンタなに言ってるの?!」

「まあまあ。片方の木刀を貸してくれよ」

「人の話しを聞かないヤツねほら。」

投げられた木刀を受け取る。一目見ただけで夏凜がどれほどの時間を鍛錬に費やしているのかがわかる。素人の俺でもな。

「それで？ 打ち合いでもするの？」

「おう、いいぜ。」

互いに距離を取る。

「初手はあげるわ」

「お、いいのか？ 初手で終わっちゃうぞ」

「言ってなさい」

どう攻めるべきか。人生初の対人。木刀握ったのなんていつぶりだろうか。高校生での修学旅行が最後だな。

ここは無難に振り下ろすか。

「ハッ！」

「っ。」

夏凜の守りを崩す一撃にはならなかった。

「ふっ！」

俺の喉元を狙った突き。

えっ、こーいうときは切り上げか？

「へえ。」

「まだまだ」

木刀を振り上げた状態から振り下ろすが受け流される。予想済み。そこから更に追撃として薙ぎ払いを加える。

「中々やるじゃない。」

「夏凜もなー。」

夏凜の左、右からの二撃を防ぐ。

今のままでは絶対に守りを崩せない。少しスピードをあげるか。

「くっ」

「セイッ！」

怒涛のラツシュ。例え、鉄壁の守りを持っていようが関係ない。対応しきれない程のスピードで攻撃するのみ。

「！?そこだッ！」

「なっ」

夏凜の木刀が宙を舞う。

「俺の勝ちだな！」

「とても癪だわ。アナタ。手加減してたわね？」

「悪かったな。」

俺と同じようなタイプだ。何事も真剣で本気。相手にもそれを求める。まあ、俺は自分に甘いかな。

「まさか。女だからって手加減したわけじゃないわよね？」

「そんな訳ないだろ。」

「じゃあなんでよ？」

そりゃあお前。

「お前が勇者部であり、俺達の仲間だからだ。」

「形式上わね。まあ、いいわ。今日はこのぐらいにしてあげる」

「それ、俺の台詞じゃね？」

勝った方の台詞だと思うんだが？

「もう帰るわ」

「おっと、その前に。ほれ。」

バックから一枚のプリントを取り出し、夏凜に渡す。

「子供の。これがなに？」

「来いよ。って話しだ。」

「ふんっ。気が向いたらね。」

こちらに背を向け立ち去っていく。自転車に跨りこの場をあとにする。

「ふいっ、なんかあったな。」

丸く収まってよかった。あとは日曜日がどうなるかだが

.....

んとかなるな。

にぼにぼ

夏凜と決闘をした翌日。俺は部活動を休み、いつもの病室いた。  
「へえ、ミノさんのスマホを。」

「勇者システムって引き継げるんだな。」  
「俺も予想外だったぜ。」

会話の内容は銀のスマホについて。

俺の見間違いでなければ、夏凜が使っていたスマホは銀のだった。  
俺が覚えてる限りの傷の位置全てが一致した。

「いや、ちよつと待てよ。」

「どうした？」

「どうしたの？」

「アタシのじゃなくなっただってことは初期化されてる!？」

「ああ、フラッシュメモリとSIMカードを差し替えてるだけなら  
ワンちゃんある。」

もし、なにも考えずに初期化しているのなら銀のデータはないな。  
墓を建てよう。

「SIMカード？」

「個人情報とか契約の内容が入ってるカードだ。」

「うくん、勇者システムって詳しい所説明されてないよな。」

「まあ、子供に機械類の事を話しても理解出来ないしな。」

「それになんか変な木も入ってたしな。神樹の枝だとは思うが」  
「ミノさんがまた戦うことになったら、どう変身するんだろ」

「それはスマホで、あ、そっか。」

「これで銀は戦わなくてよくなつたな。」

銀がもう傷つかなくて済む。そう安堵してしまった。

銀の顔が少し曇ったのに俺は気づかなかった。だからこそ、こんな  
的外れの事を思ってしまったのだろう。

「ミノさん。」

「さて、それじゃあ今日もなんかするか。」

「あ、うん。それでなににするんだ？」

「えーっと。今日はこのパソコンを使って相性診断をしたいと思うんですよ。」

「なんの相性だ？」

「いろいろ」

パソコンに映っているタブ全てに目を通す。そこには、結婚相性、恋愛相性、性格相性、その他もろもろがあった。

「あとはシャルが記入するだけだから、じゃんじゃん打ち込みじゃつて〜♪」

「アタシのは？」

「ミノさんの用意してるよ。はいっ」

「ナイスッ！」

俺はどういう顔して打てばいいんだよ。

翌日。八時に家を出て公民館へと向かう。自転車とかなないから、当然徒歩で行くしかない。俺が寄り道しない限り、三十分で着く予定だ。

「どうやら、先客がいるみたいだな。」

「おっ、夏凜じゃんか。ちゃんと来てくれたんだな。」

「たまたまよ。丁度暇だったの」

一応、集合三十分前なんだけどな。気合充分って感じで嬉しいよ。

「さ、中に入ろうぜ。」

「まだ時間じゃないのに入っているの？」

「おう。中に入って準備でもしてた方がいいだろ？十分前ぐらいになったら友奈達も来るだろうしさ。」

「そっ。」

素っ気ないな。

この後、机や椅子を運び、それぞれの机に折り紙を置いたりして友奈達の到着を待った。

数分かすると友奈と東郷が到着した。東郷は車椅子のため車で来るが、だいたいそこに友奈も一緒に乗車している。今回もそうだったようだ。

「あー夏凜ちゃん！」

「な、なによ。」

「来てくれたんだ♪すつごく嬉しいよっ。」

「そ、そう。」

「あ、ちよつと口角が上がった。」

「やっぱり友奈ちゃんは天使・っ！」

「まあ、それは俺も同意するが、とりあえずそのカメラを仕舞いなさい。子供達が凄い目で見てるぞ。」

「構わないわ。友奈ちゃんのために私は。」

カメラのメモリを瞬く間に埋め尽くしながら友奈を収めていく。

あと五分、風先輩と樹が来ないな。

「んっ？」

外から誰かが走ってくるような音がする。そんなことを思っていると勢いよく扉が開けられる。

「セーブっ！」

「はあ、はあ、お姉ちゃん、早いっ。」

勇者部部长と息が絶え絶えの樹が入室してきた。

「どした、どした？なんかトラブったか？」

樹に水が入ったコップを渡して風先輩に問いかける。

「いやあ、ちよいとね。」

「すみません、私が寝坊しました。」

「なにやってんのよ。」

「すいません。」

「まあまあ、」応間に合ってたんだからいいだろ。」

「五分前だからセーフだよっ!」

「そうですよ風先輩。セーフです。」

「アンタはセーフじゃないけどね。」

めっちゃいい事言ってるのに行動で台無しにするタイプ  
じゃないぜ。  
嫌い

「ほら、園児達が待ってるぞ。部長」

「私に任せんしやいっ!」

「おおく・カツコいいですっ!」

「なにっ!?!」!

なん・だと・シャルルマーニュが負けた  
ぐわああああ!!!

「顔が騒がしいねよ。」

「顔が騒がしいね。」

「どういう意味だ、コラ。煮干し犬好き娘」

「その不名誉な称号やめてくれる。」

「はい、すみません。」

ガチギレ間近だから素直に謝罪します。誠に申し訳。

「一瞬でしたね。」

「にぼっしー、シャルをいじめすぎらだめよ。」

「誰かにぼっしーよ!」

「いいネーミングセンスだ。」

さっすが、部長。俺達に出来ない事を平然とやってのける。シビレ  
はしないが、尊敬します。

勇者部の自己紹介が終わった後、早速折り紙教室が始まった。

「お兄ちゃん、出来たよ。見て見て〜!」

「おお〜! 良く出来てるな!」



最近の子は手先が器用だな。覚え込みも早いし、俺いらなくね？

「ほんとっ?!」

「おう。世界」の出来栄えだ」

「それじゃあ・あげるっ!」

「ありがとな。家宝にするよ」

アルバムに差し込んだくか。そうふれば紛失する心配もない。

「かほう?」

「宝物ってことだ。」

「やった〜!」

喜んで貰えてよかった、よかった。

さて、そろそろ準備に取り掛かるか。

「にぼっしーお姉ちゃん。」

「にぼっしーじゃない!夏凜よ!」

「にぼしお姉ちゃん。」

「煮干しじゃない!にぼっしーよ!」

「ちよつといいか、にぼっしー?」

「にぼっしー言うな!!」

あれ、さっき自分でにぼっしーって

「アンタらが煮干し煮干しって言うからこの子達までにぼっしーって

言うようになったじゃない!」

「すみません。」

可愛そうなにぼっしー。同情せずにはいられない。

「はあー。それでなんなのよ?」

「友奈が手伝って欲しいことがあるってよ。」

「そう。それで?友奈は何処にいるの?」

「ほら、あそだ。」

友奈の方に視線を向ける。そこには大勢の子供に囲まれた友奈が折り紙ではなく押し花を教えていた。

「なんでや。折り紙教室じゃなかったっけ。あ、東郷が真面目にしてる。やるときはやる子なんです。」

「アンタはその子の面倒見ててちょうだい。」

「ういっす。」

夏凜が友奈の方に向かっていている間に友奈へとメツセンジャーを送る。

「」

メツセンジャーだけじゃ駄目か。なら、ジャスチャーも一緒に

「狐？」

「違うっ！」

首をブンブンと振り、再度ジェスチャーを送る。

「んんんんん？」

「どうしたの友奈ちゃん？」

「あ、東郷さん。さっきからシヤルくんが私になにか伝えようとしてるんだけど意味がわからなくて」

「私に任せてちょうだい。」

お、頼れる東郷さんが来た。勝ったな。

「私は狐だと思ってるんだ。」

「あれは猫じゃない？」

「確かに猫かも。」

動物系統から離れろ！

「やべえ、夏凜が友奈に到着する。」

「あ！見て、東郷さん。風先輩が」

「」

風先輩のアシストか！ナイスだ、風先——

『うどんじゃない？』

「うどんな訳あるかー!!」

アンタは全てがうどんに見えるだけだろ！

「うどん、ありえるわね。」

「この三択からどうやって選べば、あ、樹ちゃんもなにか」

「」

樹のことだ。しっかり覚えてる筈っ！

『サプライズですっ!』

「ああく！」

「すっかり忘れてたわ。」

あつ・ボケないんですね。

「っ！」

友奈は承諾したのか親指を立て、グッジョブを送ってきた。

「時間稼ぎのコツはゆっくり歩くことよ、友奈ちゃん。」

「そうなんだっ！」

待って・不安になってきたんだけど。だが、ここは友奈に託すしかない。このメンバーで一番仲がいいのは友奈なんだから。

「どうしたのよ、友奈。」

「あつ、あ・えつと。」

? 急にコミ・ユ障みたいになっちゃったって!

「子供達の保護者が呼んでたよ。」

「!——子供達の保護者が呼んでたよ!」

東郷の口が少しだけ動いた。なにか助言をしたのだろう。

「保護者が・なんでかしら? まあ、とりあえず行くわよ」

「う、うんっ!」

友奈と夏凜<sup>?</sup>が退出したのを見届けた瞬間、全員動き出す。子供達もだ。

笹食ってる場合じゃねえ!

「シャル! そっちを持って!」

「俺一人でいけるから他を頼む!」

「安全第一よ! さっさ持ちなさい!」

「っ、了解ですっ!」

飾り付けをドンドンとやっていく。友奈がどれだけ持つかかわからない。よって、俺達は最速で準備する他ない。

「なにもなかったじゃない。聞き間違い?」

「あはは・そうかも。」

当然だ。東郷の作り話なんだから。保護者の方におきましては迷惑をおかけして誠に申し訳ありません。

「あら、真っ暗ね。」

「あれ、ほんとだ。どうしんだろ？」

「帰った？」

「ん？ちよつと夏凜ちゃん、様子見てくれない？」

自然な流れの誘導。友奈が嘘をつかないという信頼を利用した誘導だ。これにかからない奴はいない。

「仕方ないわね。」

夏凜が中に入り、一歩二歩、三歩目を出した瞬間——  
パアアン！

盛大にクラツカーが鳴る。子供達には悪影響かもしれないため、耳を塞ぐように指示してます。心配しないで下さい。

「夏凜お姉ちゃん、お誕生日おめでとう!!」

「——は。」

「サプライズ大成功だなっ！」

「にぼしお姉ちゃん、おめでと〜」

「煮干し、って言うなあ。」

「あらあら、もじかして泣いてる。」

「うっさい！汗よ、汗！」

目元から出ている汗を拭き、いつもの睨みがお返しとしてくる。

「友奈さんが見つけたんです。今日が夏凜さんの誕生日だって」

「えっへん。」

さつきまで大ボケかましてたのは黙っておこう。

「ケーキ切るぞお！見たい人ー！」

「はいーはいー！」

「ぼた餅もあるわよー！欲しい人ー！」

「はーいー！」

くっ、半々か。決着つかずってか。

「ほら、夏凜も見るだろ？」

「いいわ、見てあげる。」

今回ののはデカいからな。なんたつてキッチンで作れなかつたぐら  
いだから。リビングで作りました。

「二刀目えー!」

まずは半分に。そこから更に半分、半分、半分、半分。繰り返すに  
数十回。だいたい三十等分になる。

「二人一個あるからな。慌てずに並んでくれ。保護者の方々もありま  
すから子供の後に並んでください。」

「はい!」

「風先輩、ケーキを皿に載せていってくれないか?」

「いいわよ。さっさと載せていいくから、シャルもさっさと渡し  
てちょうだい。」

「合点承知。」

子供が十二名。その保護者が八名。勇者部部員が俺含め六名。  
ケーキの個数を見ると余裕で足りる。なんなら、二つ余る。俺はしつ  
かり人数分切っている。つまり、今日なんらかの事情で来れなかった  
人がいるということ。後で渡しに行くか。

配膳を終え、フォークも配り終えた。後は食べるだけになった。

「いただきます。」

「いただきますーす!」

俺の後に続いていただきますを言う。最近の子は偉いな。

「あむっ。」

「どうだ、美味いだろ?」

「まあ、美味しいわね。何処で買ったの?」

「俺のお手製だ。」

「多才ね。パティシエでも目指してるの?」

「いや、全然。」

「それで、これってヤバいわね。」

「褒め言葉として受け取っとくぞ。」

ずっと、練習してよかったな。

ケーキ作りに関しちゃう、モテるからっていう動機で始めたんだけどな。まあ、結果オーライってな。

「ケーキ食ったから、これから毎日勇者部に来てくれよ。」

「はあ!? そんなの聞いてないわよ!」

「あ、休みの日は休んでいいぞ。」

「そこじゃなくて、ああ、もうわかったわよ。」

「これから宜しくな。」

「はいはい。精々私の足手まといにならないようにね」

そっぽを向きながらも承諾してくれたようだ。これから仲良くなればおーけーだ。

「あ、にぼしお姉ちゃんうれしそ〜♪」

「う、う嬉しくないしっ!」

一人で立ち上がらずとも

夏凜の誕生会から約二週間経ったある日。俺達はいつも通り部室に集まっていた。

「うっし。それじゃ俺は犬探しに行ってくる。」

「いつてら〜」

今日は犬探しだけしか依頼がきていない。よって、犬探しに割く一名以外は部室でダラ〜としている。その一名が俺なんだけだな。

風先輩の声援を受け部室を退出する。部長とは思えない、気が抜けた声だったがいつものことだからスルーする。犬探しガンバロー！

犬探しを終えた日の夜。俺は食事やお風呂を済ませ寝る準備をしていた。

猫か犬を探した日はクロと一緒に寝ようと俺の寝室に来る。今回も変わらず、トテトテと布団に入ってきた。

「全く、甘えん坊さんだな〜。」

甘えているのか頬ずりをしてくる。

ああ〜、心が浄化されていく。この勢いで覚者へと至るか。

「もう遅いから寝ちま〜。」

突如としてスマホが鳴る。

なんだ。こんな時間に。どっかからの広告か？

スマホを充電器から外し起動する。どうやら、風先輩からのチャットが来たようだ。

『シャル起きてるー？』

『起きてますよー』

既読無視してもいいが、ここはしっかり返しておく。もし、大事

な内容だったら後日大変なことになるからな。

『悪い子ね』

『風先輩もでしょ』

『アタシはスーパー良い子だから問題ナシ』

なにその、スーパーサイヤ人みたいの。ってか問題大アリだろ。い  
ろんな意味で

『どうしたんですか?』

こんな会話のためにチャットをしてきた筈がない。

『今日、シャルが犬探しに行つた後いろいろあつたのよ』

『ふむふむ』

寝てませんよアピールの相槌を打ちながら風先輩の話しを読む。

『樹のクラスで歌のテストがそろそろあるみたい』

『歌のテストかー』

なんで皆の前で歌う必要があるのか謎なヤツね。

『樹って人見知りな所あるじゃない?』

『あるな』

お花見で会ったときも俺との会話、ほとんどなかったもんな。

『歌のテストって皆の前で歌うでしょ?』

『だいたいわかった』

つまり、歌のテストがヤバいつてことだな。

『シャルにもどうやったら樹の歌のテストが成功するか考えて欲しい  
の』

『了解です』

歌のテスト対策か。俺の場合は楽譜を見ることしかやってなかつ  
たな。別段、恥ずかしくて歌えないとかなかったし。

『じゃ、明日の放課後聞いわね』

『はい』

『おやすみー』

『おやすみでーす』

スマホの電源を切り、充電器を刺し込む。充電開始の音を聞き、  
テーブルの上に置く。



「じゃ、寝るか。」

「にやっ」

布団を被り目を閉じる。それだけでスツと眠りにつける。本当に英霊の体は便利だとつくづく思う。

翌日の放課後。今日の勇者部の活動は停止して作戦会議となっている。

「作戦決行は明後日。みんな、いい案持ってきた？」

「自信たっぷりですっ！」

「一つだけあります。」

「考えてやってきたわ」

「ばっちしだ。」

「お姉ちゃん、そこまでしなくても。」

「樹は安心してなさい。歌のテストなんて吹っ飛ばしやるから」

「吹っ飛ばしちやダメだよー！」

作戦決行は明後日か。たっぷり時間を取れるのは今日のみ。ここで決まらなければ不味い。

「まずは友奈から」

「はい。私が持ってきた作戦は。なせば大抵なんとかな——」

「却下。次、東郷お願い」

「なんで。」

作戦で根性論持ってきたら駄目だろ。無茶な作戦を根性で補うのまだしも、作戦自体を根性にしちやーな。

「ご褒美作戦はどうでしょう。」

「続けて」

「飴と鞭。歌のテストが終わったら樹ちゃんが大好きな物をあげる。これをする事によって歌のテストを頑張れると思うんです。」

「採用。次、夏凜お願い」

やっとマトモなのがきたな。

東郷の作戦結構いいな。キツイ仕事でも割に合う給料を貰えれば頑張れるってもんだ。だからこそトラック運転手の給料をもっとあげていいと思う。

「サプリよ。」

「具体的には」

「喉の調子を整えるサプリ。肺を整えるサプリ。いろんなサプリがあるわ。それらを用いて樹をパワーアップ・ミッションコンプリートよ。」

「保留。次、シャルお願い」

「保留!?サプリをキメなさいよっ!」

ヤバいって。言動がヤバいって。

さて、俺の番だな。この日のために俺は授業中の時間ずっとマルチタスクしたんだ。情熱が違うぜ。

「まず樹にはα波を習——」

「ごめん。それももうやった」

「なん・だと」

「やっぱりα波よね。シャルル君ならわかってくれると思ってたわ。」

この思考に至った奴がいるとは。恐ろしいぜ。

「次行つていい?」

「まだまだ。まだ、俺のターンは続いている。二つ目の作戦を発表してやるよ。」

「二つあるのね」

「流石、シャルくんっ!」

ふっ。策士の俺に弱点はない。甘く見てもらっちゃあ困る。

「片っ端から緊張を和らげる行動をする。」

「例えば?」

「笑顔だ。作り笑いでもヘラヘラするんだ」

「樹。」

「え、え?」

「笑顔よ。」

即実践か。流石だな、風先輩。

「に、ニコッ！」

ニヘーとした顔っていうのはああいうヤツか。勉強になります。

「どう？」

「どうって言われても」

「こんな短時間で効果出るわけないでしょ」

「笑顔で緊張をほぐす。だから友奈ちゃんは」

「どうしたの？」

「なんでもないわ、友奈ちゃん。」

確かに。友奈が緊張してるところを見たことが。夏凜の誕生会でしてたな。いや、あれは咄嗟の嘘がつけなくて動揺しただけか？

「シヤル、他ある？」

「おう、あるぞ。深呼吸をするだな。おっと、これは本番前でするヤツだった。」

「本番っ。」

本番って言葉を聞くのも嫌とは。重症だな。先達としてなんとかしてやらないとだが

「これで最後だ。」

「とっっておきのよね？」

「もちろん。そして簡単だ。」

メモなんて必要ないほどのな。

「樹、弱い自分を想像するじゃない。想像するのは常に最強の自分だ。失敗とか敗北とかを想像するな。勝った姿だけを思い浮かべるんだ。」

「最強の自分。」

エミヤ先輩あざっす。

「まあ、心の持ちようだな。」

「やっぱ精神的な部分になるかしら」

緊張するのは自分に自信がない表れだからな。自分に自信たっぷりの方が緊張してるところなんて見たことがない。

「じゃ、次は風先輩だな。」

「練習あるのみっ！カラオケに行くわよ！」

「は？あ、ちよ待ちなさい！」

猛スピードで部室を出て行った。目的地はたまに行くカラオケだろう。

「よし、俺達も行くか。」

「そうだね。」

「そうね。」

「ほら、樹も行くだろ？」

「あ、はいっ！」

■主役が来なきや意味ないからな。

■エミヤ先輩の名言があれば少しは前を向ける筈だ。そこからは簡単、ちよつとずつ自分に自信がついていく。勝ったな。

この後、カラオケで歌い明かしたが樹の声は聞けなかった。

翌日。歌のテストまであと一日。流石に二日連続活動を止めることが出来ないため、泣く泣く活動しています。主に風先輩が

「ここを右だったかしら」

「どれどれ。ここは直進だな。」

「うくん、ややこしいわねここら辺」

「だな。」

■樹、風先輩と猫を引き取りに行っている。一昨日里親がやっと見つけたため、猫を預かっている人から受け取りに向かっている。

「。」

「これなら海沿いを歩いた方が良かったな。」

「そうね。まさか、ここまで入り組んでるとは」

「まあ、それはしょうがない。まだまだ、ここらの地理を完全に覚えきっていないからな。な、樹？」

さつきからボーツとしている樹に話しを振る。

「……?」  
「樹。」

「え、あつ！な、なにお姉ちゃん？」

「完全に自分の世界に入ってたそれですね。」

「大丈夫か、樹？」

「体調悪いの？」

「う、うん。大丈夫だよ。」

「それならいいんだけど。」

「ちよつと心配だが、樹が大丈夫って言ったんだ。なら大丈夫だろ。」

「……ここだな。」

「駄弁りながらも目的地に到着した。風先輩がチャイムに近づき押す。」

「勇者部でーすっ！猫を引き取りに来ましたー！」

「……んっ？」

「家の中から子供とお母さんの言い合いが聞こえる。どうやら、預かっているうちに情が出来たらしい。」

「あちやくもつと聞いとくべきだった」

「しゃーない。交渉しにいくか。どっちの味方する？」

「子供で」

「りよーかい。」

「俺の説得術第一番を使うときがきたな。」

「樹はここで持っていてくれ」

「あ、わた——、うん。」

あの後交渉は成功し、猫を飼う方針になった。お母さんも納得する形になって良かった、良かった。

「なんとかなったわね。」

「良い形で収まって良かったよ。」

「そうですね。」

「経験者がいて助かったわ」

「猫はいいぞ」

猫アレルギーの人がいるとかの理由で飼えなかったら流石に交渉出来なかつたけどな。子供も俺と約束してくれたし心配しないでいだろう。

「じゃ、俺はこっちだから」

「また明日ね」

「今日はありがとうございました。」

「おっと忘れるところだった」

「なんか忘れ物？」

「おう。」

ポケットから一つの紙を取り出し、風先輩に近づいていく。

「風先輩これ、お願いします。」

樹に聞こえないように風先輩の耳元で伝える。紙をスツと風先輩のポケットに滑らせる。

「ひゃ!？」

「ど、どうしたのお姉ちゃん？」

「い、いや、なんでもないわよ。その声で囁かないの!」

「すまん、すまん。」

初めて風先輩の乙女ボイス聞いたわ。なんかいけないことをしてる感じで、ヤバいな。

「またな。」

そそくさとその場を後にする。明日の歌のテストが心配だが、あの紙があれば大丈夫だ。樹なら大丈夫。

翌日の放課後。ホームルームが終わった瞬間部室に全力疾走で向かう。

「早すぎだろ風先輩」

「最短最速で来たにも関わらず既に先客がいた。妹好き好きお姉さんがいつもの席に座っている。」

「沈黙。いつもなら風先輩と俺だけでも馬鹿騒ぎしているが、今回はなにも喋らず、なにもせずじつと座っている。」

「扉が開く音がした。瞬時に扉の方を向く馬鹿二人。」

「結城 友奈来ました！」

「失礼します。」

「東郷 友奈。」

「風先輩は樹じゃないと知った瞬間ガクツとなった。」

「樹ちゃん成功しましたでしょうか。」

「うくん 樹ちゃんなら大丈夫だよ。」

「そんな話しをしているとまた扉が開いた。」

「失礼するわよ。」

「なんだ にぼっしーか。」

「なんだとはなによっ！」

風先輩は一と百しかないというのをメモしとくか。

「失礼します。」

「！——樹いい!!」

「うわっ！」

樹が入ってきたと共に凄い動きで樹に抱きつく風先輩。

「ちょっと待ってくれ。今、どうやって座ってる状態から抱きついた？関節を完全に無視してる動きだった。」

「どうだった、樹？」

「ばっちしですっ♪」

「でかしたっ！」

「これがサプリの力よ」

「やったね、樹ちゃん！」

「ぼた餅よ、樹ちゃん。」

「さっすが！アタシの樹！」

「ちよ、お姉ちゃん、止めて。」

めっっちゃ嫌がられてますけど。

「祝杯をあげるわよー！」

「イエーイ!!」

お祭り騒ぎだな。樹の人望がよくわかる。↑お祭り騒ぎにしてる  
張本人

ありがとうございます、エミヤ先輩。



## 世を輝かせる者

いつもいつも最悪の事態を予測していた。獅子座単体も獅子座&二体の状況も。

最大でも三体だけだと思った。それが一度に結界を抜けれる上限。そうだと思いついていた。

「七体、か。」

「予想は絶対じゃない。だいたい破られる。今回も例に漏れずそのようだ。」

「だけど——だけど、これは……っ！」

「——」  
考える。模索しろ。考案しろ。最も被害の少ない作戦を——誰にも傷つかない理想の作戦を。

他の皆は俺よりも緊張している。しているのにも関わらず互いを思いやり、緊張を解いている。そんなことに気づかずただ一人脳味噌を回していく。

「——よう。」

一番成功の確立が高く、最小の被害で収める作戦を作った。封印というシステムが出来たからこそその作戦だ。

「シャルも戻ってきたわね。」

「ああ。作戦を考えててな」

「作戦…内容は？」

「一応わかりやすく説明するからよく聞いてくれ」

「はい。」

「うん。」

「。」

### 作戦概要

1. 牡羊座を瞬殺する。

2. 次に備える。獅子座が来た場合は一時撤退。来ずに他のが来

た場合、来たそいつを瞬殺。これを獅子座が来るまで繰り返す。

3. 撤退後 or 殲滅後、獅子座が来たら俺が必殺技で怯ませるから即座に封印。

4. 御霊を砕く。

5. 完全勝利！

「どうだ！」

「いやあ、久しぶりに策戦考えたけどこれは力作だ。孔明と名乗ってもいや、無理だな。多分あの人外なら完封する。」

「瞬殺つて大丈夫なの？」

「おう。集中攻撃すれば割といけるぞ。ただし、牡羊座は俺以外が攻撃したら駄目だ。分裂する特性を持つてゐるからな」

「それにも策があるってこと？」

「もちろん」

フランベルジュで斬れば分裂しない。分裂がアイツの強さだ。それを潰せば一番弱いまである。

「樹か東郷は牡牛座の鐘みたいなのを壊すか鳴らないようにしてくれ」

「鐘、ですか」

「見ればわかる。」

「了解。撃ち抜いてみせるわ」

前、あれで鼓膜が持つてかれたからな。あのときは一人だったが、今回はパーティーだ。意思疎通が出来ないと困る。

「それじゃあアレしましよー！」

「アレ？」

アレって言われても知らないが？

「はい、集まってー」

「円陣ですわね！」

「最初っからそれを言いなさいよ。」

風先輩を基点に円を作っていく。前、俺も強制で入れられたことを思い出し、俺も円の中に入る。

「これ勝つて、無事に帰るわよ。」

「当然だ。俺を盾にしても生きてくれよ」

「私が盾になるねっ！」

「友奈ちゃんは私が守るわ。」

「友奈は下がってくれ」

それだけは本当にやめてくれよ。なんのために戦ってんのかわからなくなる。

「盾なんて私には必要ないわ。アンタらは自分のことだけ考えてなきい。」

「は、はい！」

夏凜なりの優しさだろうな。

「じゃ、行くわよ。勇者部うう!!」

待って待ってその次なに!?

「「「「ワアイトオオ!!」」」」

ふう。危なかった。なんとか合わせれた。こういう時、一人だけ違うこと言うと士気がガタ下がりだからな。

「ローラン、オリヴィエは東郷を守ってくれ」

・獅子座は遠距離攻撃が出来る。しかも一撃必殺級のをポンポンと  
・厄介極まりない。一応目映くは閃光の魔盾を使えば防げるが、その後がなあ。

そんなことを愚痴りながら十二勇士を展開。十二勇士最強と冷静沈着な奴らのコンビだから安心だぜ。

「いいの？」

「おう。ヤバいって思ってもそいつらが守ってくれるから射撃に集中してくれ。」

「必ず成果をあげてみせるわ。」

真名開放するときには集合させないといけませんが、それ以外のときは東郷を完璧に守ってくれる筈だ。

「俺が先頭を行くっ！お前らについてこい！」

「ええ！」

「言われるまでもないわ！」

「追い越してもいいー?!」

「追いかけてっこじゃないんですから！」

牡羊座目掛けて翔ける。東郷はその場にしゃがみ込むスコープを覗く。

「——フランベルジュ！」

ジュウユーズをフランベルジュに持ち替え、牡羊座へと連撃を叩き込む。分裂はせず、バラバラになる。

「封印を！」

「封印開始っ！」

バラバラになった頭部から御霊が現れる。

「トルナードッ！」

御霊を凍らせ、戦斧で突きだす。氷諸共砕け散る。

まず、一体。

「本当に瞬殺だったわね。」

「次、来るわよ！」

「——！」

あの苔じみた脚は

「樹！」

「っ、わかりました！」

鐘が鳴る前に樹のワイヤーによって雁字搦めにされる。

一安心した次の瞬間には東郷の射撃によって鐘が破壊される。

「夏凜！天秤を回転させるな！」

「たたっ斬る！」

牡牛座の背後から迫る天秤座を忘れずに対処する。

夏凜の投擲により天秤の重りが落とされる。

「水瓶座は俺が抑える！その間に封印を！」

フランベルジュを閃光の魔盾にし、水瓶座のレーザーを耐える。

「封印開——！」

「なにか様子が浮いてる？」

「何処に移動を！」

三体共、何処かへと浮いて移動している。

一体何処へ。全員同じ方——まさか！

「東郷！一旦十二勇士をこちらに戻すっ！いない間なんとか耐えてくれ！」

『了解！』

スマホを操作し、東郷に連絡する。一刻を争う。すぐさま獅子座を倒さないと不味いことになる。

ジユワユーズが光を放つ。

「この身佩刀こそ天下無双の聖剣。」

降臨するたび世を輝かせるもの也！」

計十三本のジユワユーズが悪を焼き尽くさんとばかりに輝く。

「——この輝きで焼き尽くすッ！」

王勇<sup>ジュ</sup>を示せ、<sup>ユ</sup>遍く世を巡る十二<sup>ル</sup>の輝剣<sup>ド</sup>!!」

世界が轟音と共に光で包まれる。

今だ健在の獅子座に目をやる。

ジユワユーズは確かにあたった。その証拠に小さな傷がそこら中にある。あと数秒で完治されてしまうが

「十二勇士達よ、俺の掩護はしなくていい。アイツらの掩護をしてくれ」

手応えはあったが、致命傷にはなっていない。封印を開始するほどの隙は出来なかった。

さて、どう攻めたものか。

「一旦引くぞっ！」

「わかった！」

「こつちにアンタの精霊来たんだけど！」

「こき使ってやってくれ！」

「今は撤退しよう、夏凜ちゃん！」

「合体した」

牡牛座、水瓶座、天秤座が獅子座に融合した。多分、御霊を取り込

んだのだろう。

今まで通りにはいかない筈だ。一度、作戦を練り直さないといけ  
いな。

「っ！」

獅子座からいくつもの火球が俺達目掛けて放たれる。

撤退をそう簡単に許してくれないよな。

「追尾するぞっ！勇士と共に迎撃してくれ！」

「え、えいつ！」

「わわっ！ふうー、助かったよー。」

樹はワイヤーで火球を爆発し、友奈のは勇士が全て斬り伏せた。

友奈の所の奴ら・レナルドとテュルパンか。そりゃあ楽勝だな。

「ていつ！」

「ちよろいつ！」

風先輩は大剣の面で潰し、夏凜は刀の投擲で誘爆する。東郷の方に  
行ったのも青い閃光によつて落とされる。

皆、大丈夫そうだな。後は俺だけだが。

「エリユプシオン！」

一撃目で土の壁を出現させ、火球を遮る。二つ程避けてくるが、残  
りは土に当たり爆発した。

「フッ！」

二撃目で土をばら撒き火球を呑む。それによつて誘爆。これで火  
球を全対処完了だ。

「また来るわよっ！」

「っ？」

第二波が放たれる。

俺より前にいた友奈をスルーした。

「まさか・シャル！」

「一人狙いか！」

約二十個の火球が俺目掛けて近づいてくる。

「ならば！」

五大元素をジュウユーズへと集束していく。

一度に来るならまとめて薙ぎ払うだけだ  
「リュミエール・デュ・ソ——!?」

軌道がズレた。数をバラけさせ全方位から迫る。

「シャルくんっ!!」

友奈がこちらに向かってくるがもう手遅れだろう。あと数秒で俺に着弾する。例え、精霊のバリアがあっても致命傷は逃れない。

「甘く見るなよ!」

五大元素の集束を雑にする。

俺は魔術関係においては初心者だ。いつもいつも集束するのに全神経を研ぎ澄まさないといけない。一瞬でも気を抜けばどうなるかなんてわかりきっている。

「ッ——!!」

集束していた五大元素が背後で爆ぜる。爆風で後ろ側からくる火球の軌道を逸らし、体を前へと飛ばす。前方の数が一番少ない。それなら、精霊のバリアで防ぎきれぬ。

「アストルフオの槍ッ!」

前を突破し、すぐさまアストルフオの槍に持ち替える。風元素を纏わせ振るう。数十個の火球を俺から離す。

「氷よ!」

水元素で氷を生成し、思いツきし殴る。氷の破片が火球に当たり、次々に誘爆していく。

「ふいー、焦——」

「上!!」

「な——ゴボゴボッ!」

頭を水ですっぽりと包まれる。当然、水の中では呼吸出来ず、酸素がドンドンと不足していつている。

「シャルっ!——ちい!邪魔すんなっ!」

夏凜達が助けに来ようとしたが、火球がそうはさせない。

確実に俺を殺しに来ている。この状況は本当に不味い!ナニか!

ナニかないのか?!

「ちよっと!アンタ、シャルの精霊なんでしょ!助けに行きなさいよ

！」

十二勇士は知らんばかりに夏凜に迫る火球を斬り伏せる。

ここで十二勇士は動かない。シャルルマーニュが死のうとも動かない。なにがあっても動かない。

自分より勇者部のメンバーが大切だからそう指示したのだと受け取っている。例え、ここでシャルルマーニュが死んでも、その程度として素直に退去するだろう。

よって、ここはシャルルマーニュが自分の力で抜け出さなければいけない。

「――！」

いや、一つ策がある。

全く、銀にはいつも助けられてるよ。

「んっ、んっ、んっ。」

「飲んでる!?!」

うえ、なんだこの味。キモチワルイ。

「ふつかあーっ！」

火球を斬り伏せながら声高らかに叫ぶ。

いやあ、今回は結構マジで危なかった。

「攻撃が止まった？」

休む暇なく放たれていた火球が来なくなった。

「アレはっ！」

獅子座から炎が絶え間なく出ている。段々とその炎が球の形を作っていく。

「デツカ」

「デカいね」

「そうね、じゃなくて！速く回避を――！」

夏凜が叫んだ瞬間には時既に遅く、デカい球体が放たれる。

「あっ――」

「風ッ!!」

球体の一番近くにいた風先輩を押し退け、ジュワユーズを構える。俺の全力と精霊の守りでここは耐える！



「ぐっ——、おおお!!!」

精霊の守りで燃えることはないが、球体の重みによって腕が軋む。

「シャル!」

「封印をおお!!」

「このときしかない!」

「っ、了解っ!」

「あ、あつ、あ、ああア!!」

東郷の掩護か、火球へといくつもの弾丸が当たる。だが、それでも勢いは少しも落ちない。

「封印開始ッ!」

「っ!」

「速く・っ!」

「よしっ!でかし——がつ!!」

封印が始まった瞬間、球体が弾けた。それにより精霊のバリアが割れたのか熱風を直に当たってしまった。

「シャル!」

「シャルくんっ!!」

「シャル先輩っ!」

「ケホッ、——御霊を砕けッ!!!」

焼けた喉を意地で堪えさせ、酷使用する。今潰れようが関係ない。アイツ、ら、——の、——ため——。

「——」。

「ここで俺の意識は消えた。」

「——はッ!」

意識を自覚したと同時に体を起こし、辺りを見回す。さっきまでい

た樹海ではなく、生活している現実の世界でもない。目の前にポツンと椅子だけ置かれた真つ白な空間。まるで、最初神様と出会った場所のような印象をうける。

「おっ、やっとな起きたか。」

「！」

「そんなに警戒しないでくれよ。」

何処からか声が聞こえたと思えば、次の瞬間には目の前の椅子に霧が立ち込めていた。どうやら、この霧から声が聞こえるようだ。

「三人目のイレギュラー、シャルルマーニュ。ま、イレギュラー同士、仲良くしようぜ。」

「イレギュラー。」

「おっと、シャルルマーニュより?? ?と呼んだ方が良かったか？」

「ッ!？」

何者なんだ。いや、まずこれは人なのか？

「お前は何者なんだ？」

ここは素直に聞いた方がいいだろう。

「俺は一人目のイレギュラー、?? ?だ。お前がこの世界に来る展開を作った張本人。」

「どうしてお前が俺を喚んだんだ？」

「多分、コイツの言ってることは事実だ。俺の名前を知っているという理由で判断するのは浅はかかもしれないが、それだけで充分。今は出せるだけ情報を出してもらおう。」

「まず、俺は抑止力。といってもアラヤの方だが。そいつによって三百年前に召喚された。村正の疑似サーヴァントとしてな。」

「村正の。本来は衛宮。士郎が依り代の筈だ。」

村正の頑固に負けず劣らずの士郎が本来の依り代だ。なのに何故、俺が依り代に選ばれている。

「衛宮。士郎はこの世界に存在しない。よって、依り代とする素材が不足した。」

「元々俺も存在しないだろ。」

「英霊の座に過去も未来も存在しない。」

「つまり、未来にこの世界の俺が英雄として座に記録されることになるのか？」

「ここが元いた世界じゃない世界だとしても、この世界にとっての俺がいるということか？」

「いや、それは違う。」

「じゃあどういうことだ？」

「ちよつとややこしくなるから聞いてくれ。」

「わかった。」

「まず前提として俺が召喚される。」

「ふむふむ。」

「そして、俺は気づくわけだ。辻褃が合わないと。そしたら俺はどうすると思う？」

「辻褃を合わせにいくだろうな。だが、どうやって？」

「そこで俺はアラヤから貰った一基召喚券を使い、建速須佐之男命の疑似サーヴァントを召喚した。そこで俺は建速須佐之男命とある契約をしたわけだ。」

「内容は？」

「神霊級のサーヴァントを召喚したことにも驚きだが、今はそこじゃない。」

「俺という存在をやるから何処かの未来で俺をこの世界に連れてこいってな。」

「俺という存在。それはどこまでだ？」

「俺が退去した後の世界から俺という存在の記憶を消す。そして俺を神樹の一部にする、だな。」

「なるほどな。」

「ちよつとややこしいが、だいたい把握した。」

「でも、これには一点問題があつてな。」

「問題。」

「そつ。俺だけの存在を使ったとしても少しだけ絶対成功っていうラインまで届かなかったんだ。」

「運ゲーをしたということか？」

「いや。そんなことするわけないだろ。」

「それじゃあ、どうしたんだよ。」

「なんと、建速須佐之男命が手助けしてくれたんだな。」

「ほお。」

荒々しいって聞いていたが、中々優しい神様だったんだな。

「そして俺は最後の戦いで獅子座に対して草薙剣を使って退去したわけだ。」

「神の剣を使った代償ってことか。」

「そうゆうことだ。まあ、こつからさらなるイレギュラーが発生して御影 士郎って奴が誕生したが、そこは省こう。」

「おい待て、そこもメツチャ気になるんだが？」

「いやー、コイツは強かったね。真名がなかったからか村正と建速須佐之男命のステータスに近づいていったからな。あと一年草薙剣を体内に入れて戦い続ければ完全に建速須佐之男命のステータスになって、天の神を倒してたろうな。」

「真名の置換か。」

勇者御記から薄々思っていたが、やっぱり、天の神と戦って死んだのか。

「俺から話すことは以上だ。なんか質問はあるか？」

「。」

質問。質問か。そんなの考えるまでない。

「満開の代償を治す方法はあるか？」

「今の所はないな。だが、神様は気まぐれだ。なにかがキツカケで返すことがあるかもしれん。それまで耐えてくれ。」

「お前から提案するこは出来ないのか？」

「出来ないな。俺はただ、此処で勇者を待つだけだ。死した勇者は必ず此処を通る。それを道案内するのが俺の仕事。本当に嫌で嫌でしようがない。」

「死した勇者。待ってくれ、もしかして俺。死んだのか？」

「仮死状態だが、死んではない。病院で寝てると思うぞ。」

病院で寝てる。戦いは終わったのか。

「他の奴らのことはわかるか？」

「満開したのが三人だな。友奈と黒髪と小さい子だな。」

「満開しちまったのか。」

友奈、東郷、樹が満開したのか。出来るだけ生活に支障ない部位ならいいんだが。

「誇つてもいいぞ。本来なら全員が満開して勝てる相手なんだが、お前の尽力で三人で抑えられている。」

「それならいいんだがいや、よくない。」

なに自分を甘やかしてんだ。先にお前だけぶつ倒れて楽しやがって。

「他に質問は？」

「天の神を倒せる手段は？」

「今の所100%で倒す手段はない。」

「100%にするには？」

「お前が一回御影 士郎に会わないといけない。」

「はあ？御影 士郎は死んだんだろ。どうやって会うんだよ。」

「今も天の神の体内で生きてるぞ。刀打ちながら。」

「ちよつと待て。ツツコミどころが多すぎんだろ。どうして刀打つてんだよ。」

「そりやあ天の神を倒すためにだろ。」

「じゃあ生きてる理由は？」

「そもそも御影 士郎の体は俺のだぞ。つまり、英霊の体ってことだ。魔力補給があれば消滅することはない。」

「でも、天の神に殺されたんだろ？」

「ガイアが最後の抵抗で噛み砕かず丸呑みにしてくれたお陰で生きながらえてるよ。」

「なるほど。それで、どうやって俺は会いに行けばいいんだ？」

俺が会うべき人物は天の神の腹の中。いつペン食われに行けっか？

「それがわかってたら100%だよ。ったく」

「」

このまま100%に到達してない状況で博打に賭けるしかないみたいだな。

「それで次——おっと、もうこんな時間か。」

「なんだよ、時間って」

「ほら、足元見てみな」

「足元・うおっ！」

足元へと視線をやると、段々足先から粒子になっている光景を目にする。まるで、退去するときみたいだ。

「んじや、精々足掻きまくってくれ。」

「んな、雑に！」

「あ、あと先達から一つアドバイスだ。」

「最後の最後にか!？」

そういうのは余裕あるときにして欲しかったなー!

「馬鹿に成り切れ。中途半端な馬鹿はいらねえんだ。」

「は!?!それってどういう——」

口が粒子となり言葉が続くことはなかった。そして、完全に粒子となりこの空間から?? ??という存在がいなくなった。残るは一人のみ。

「全く、どうして気づかねえのか。シャルルマーニュに凝りすぎてるな。いや、最初よりは大分マシになったけどさー。まったく、世話のかる野郎だぜ。」

一人愚痴る。誰にも聞こえない今だからこそ愚痴れる。こんな所を農業王に見られたら幻滅させられる可能性があるが。いや、彼女はもう彼についてなにも覚えてないのだったな。

## 代償

目を開け、周りを見回す。どうやら、病院のようだ。

まさか、人生初の入院がこんな形になるとはな。思いもしなかったよ。

『あ、シャル起きた〜?』

「ああ、起きたよ。ん?」

ここは個人部屋だ。俺以外には誰もいない。にも関わらず声が近くから聞こえた。

『こつちだよ〜』

「ん〜、これか?」

声のした方向へと振り向く。そこにはスマホのような物が設置されている。

『だっせいせいかい!』

「まさかとは思うが、ずっと見てたのか?」

『いや〜? ずっとじゃないよ〜。』

「じゃあいつからだ?」

『五時間前ぐらいかな〜? 最初はミノさんもいたんだけど、寝ちゃってね〜』

「思わず天を仰いだ俺は悪くない筈だ。

いつから園子は東郷みたいなことをし始めたんだ。

「ふうー、それで、なんか用か?」

『話しが早くて助かるんよ。単刀直入に聞くね。わっしー達に満開の代償を話した?』

「ああ。ガイアとアラヤ以外は全て話した。」

『そっか。私はいい選択だと思うよ。』

きっと園子は全部話すのは良くないと思っっている。俺だってそうだ。外の話しはせず、満開の代償について話せば良かったと思っっている。

俺は隠し事を出来るだけしたくない。アイツらが人に騙された時の絶望を味わって欲しくないと思う。

何も悪い事はしてないんだ。誰も悪い事はしてないんだ。なのに！なのに！何故だ？！

「よし。俺は行ってくる。」

『会いほ？』

「これは俺のミスだ。俺が不甲斐ないばかりに、満開させちまった。カッコ悪いったらありやねえぜ。」

ベットから身を起こし、スリッパに足を通す。立ち上がり、扉へと歩を進める。

『シャル』

「」

ドアノブに手をかけたところで止まり、園子の声に耳を傾ける。

『シャルがいつも前を走ってくれお陰で私達は生きてるんだよ。』

『シャルの行動で救われた人達が大勢いることを忘れないでね』

「」

俺がお前らの前を走つちまったせいで生き地獄を味わせつてしまった。俺がいなくとも銀と園子、そして須美ならもっと上手く出来ていただろう。

元より俺はイレギュラー。俺がいなくとも世界は回る。逆に俺がいるせいで世界が歪んでいってるように感じる。

でも俺は進み続ける。俺にはそれしか残されていないのだから。



自分の病室を出て病院の受付場へと向かう。そこで皆の病室を聞き出し、向かうことにする。

「あ」

受付場に行くと、俺以外のメンバーが揃っていた。

とりあえず、全員怪我はないようだが

「い」

「え」

「私はやらないわよ。お。」

「私がかでいいのかしら?」

何故かあ行の連鎖が始まったが、待て、うが聞こえなかった。今の声が聞こえなかったのは、樹か!

「いつ——き」

手にはいつもは持たないスケッチブックを持っている。だが、なんの為に?

「どうしたんだ、そのスケッチブック?」

絵描きの才能に気づいた、っていうんなら心配はない。いろいろツッコミどころはあるがな。

「」

「えっとー」

風先輩は顔を怖くして、友奈からは歯切りが悪い返答が返ってくる。その間樹がなにかスケッチブックに書いている。

『私満開しちやいました。それで声が出なくなっただと思えます。』

「っ」

声。声だど? そんなピンポイントで来るものなのか?! くそっ。巫山戯やがつて? っ!

「すは」

「風、先輩」

聞き取れない声量でなにか呟いている。

「——治す方法は?!」

「ッ！」

「風!？」

胸ぐらを捕まれ壁に勢いよく叩きつけられる。

68kgあるが、風先輩の女子力によって足が地面についていない。流石の女子力だと称えておこう。

「？」

「アンタなら知ってるんでしょ。」

「現時点ではない。だが、神樹の気まぐれで戻してくれる可能性がある。」

「神様の気まぐれを待って言うの!!」

「ぐっ——！」

胸ぐらを掴む力が強まり、少し息苦しくなってきた。

「風先輩！ダメですよっ！」

「アンタ、なに考えてんの!？」

「風先輩、シャルル君。」

誰が静止しようが風先輩の力は弱まらない。

抜け出そうと思えば抜け出せる。だけど、これは元々俺が悪い。風

先輩が怒る理由は俺のせいだ。

「——。」

「!いつき。」

『ダメだよ、おねえちゃん』

急いで書いたのか所々拙い文字で少ない文だが、その目でなにを言いたいのかよく伝わる。最早、いつも姉の影に隠れていた臆病な子はいない。

「~~~~!——はっ。」

胸ぐらを掴んでいた両手がなくなり、床に激突しかけたがなんとか着地出来た。

「ごめんね、シャル。」

「いや、いいんだよ。元を辿れば俺が原因だ。」

風先輩が気に病むことはないし、思い詰める必要もない。俺が全部悪い。弱い俺が。

「誰も悪くない。誰も悪くないよ、シャルくん。世界を守るためには仕方なかったんだよ。」

「友奈。仕方なかった、なんて言わないでくれ。こんな事、いつも通りの日常なら起きなかった。俺が非日常に巻き込んだせいだ。」

一年生の頃は笑って、遊んで、勉強するだけでよかったんだ。世界の命運とか終末を回避する方法だとかは考えないでよかったんだよ。

俺一人では勝てなかった。俺一人では何も出来なかった。俺一人じゃあっ！

「なーに。アンタはグズグズしてんのよっ！」

塞ぎ込んでいた顔を無理矢理前に向かせられた。

「私達は勝ったのよ!？」

勝った。確かに俺達は絶望的な戦力差を覆し、勝利した。だが、その結果がこれだ。どうやら神樹様はハッピーエンドはお好みじゃないらしい。

「フワツとした部なんですよー！この先考えずに、今のことしか考えない部じゃないの?!喜びなさいよ!さあ!さあ!!」

「落ち着けよ、夏凜。完成型勇者なんだろ?こんぐらいのことで自分を見失うなよ。」

「夏凜らしくない。俺が知らないだけで、情熱的な奴だったのか?」

「どの口が——ツ。はあー。馬鹿馬鹿しい。私はもう帰るわね」

「おう、気をつけてな。」

「言われなくてもわかってるわよ。それじゃ。」

俺達に背を向け出口へと歩いていく。

「あ——、夏凜ちゃん!」

「なに?」

友奈が夏凜を引き留める。

「また明日!」

「ええ、そうね。」

そう短く返事をする、先程よりも速歩きで病院を出ていった。

「もう暗いし、風先輩も帰った方がいいんじゃないか?」

「樹を置いて帰れないわ。服とかは大赦が送ってくれるから何泊も出

来るわよ。」

学校の事とかを考えると帰ったほうがいいんだろうが、風先輩は樹のためなら意地でも動かなそうだな。

『ちよ、お姉ちゃん!』

「ほんと嬉しくせに〜♪」

「風先輩は樹ちゃん大好きですね♪」

「あつたりまえよ!」

「私も友奈ちゃん大好きよ!」

「わ〜♪ありがと〜、東郷さん♪」

団欒している友奈達を眺めながら今後を考える。

皆を戦闘から遠ざける。これが出来ればいいんだが、性格上無理だろうな。下手に首突っ込まれて事態がこんがらがるよりは一緒に戦ったほうがいいのはわかってる。

また俺は繰り返すのか?

目の前で満開して散華していく友達の姿を。徐々に体が言うことを聞かなくなっていく様を。

嫌だ。目玉を潰してでもそんな光景は見たくない。

天の神を殺すか。壁の外で暴れとけば来るかもしれない。だが、それで殺せず俺が殺られれば、どうすることも出来なくなってしまう。

「俺は病室に戻るな。お前らも早いうちに病室に戻って寝ろよ!」

「あ、うん。シャルくんもいい夢を〜」

「夜更ししすぎちゃダメよ?」

「わかってる、わかってる。」

思考を一旦止め、この続きは病室でゆっくりと考えよう。幸い、俺は寝ずに起きていることが出来る。朝までぶっ通しでやってやらあ。

「シャルル君、後で私の病室に」

「!——わかった。」

密会のお誘いか。いや、あの目からすると重要なことについてだろう。

あれから一時間後。俺は誰にも気づかれないうちに霊体化して東郷の病室に来ていた。

「よっす。」

「シャルル君。忘れられたかと思つて冷や冷やしたわよ。」  
「すまんすまん。どの時間に行けばわからなくてな。」

女性の話しは長いってよく聞くからな。あれから一時間喋り続けたも不思議じゃなかったし、それに合わせるように一時間置いてから来ました！

「それで、なんか話があるのか？」

「ええ。少し質問をしたくて」

「俺が答えれる範囲なら、なんでも聞いてくれ。」

あの場で質問出来ない内容だろう。勇者システムについてか、世界の現状についてか。どちらも俺が把握していることは少ない。

「答えたくないならいいのだけど」

「なんだ？」

「先代勇者が散華した部位は何処なの？」

「――」

「あつ、ごめんなさい。嫌な質問だったわね」

「――いや、答えるよ。」

何故、つて思つたが。そこになんかあるのか。東郷は無駄な質問はしない。それも、こんな相手を傷つけるかもしれない質問を興味本位で聞くような奴じゃない。

「満開回数は合計で十四回。わかっている部位は両目、両足、片耳、心臓だな。もしかしたら他の内蔵もやられてるかもしれない。」

「心臓。それは、生きてるの？」

「ああ、生きてる。」

「んっ？」

「人口ポンプを繋げてるの?」

「そんなのは繋げてないな。待てどういうことだ?」

何故、園子と銀は生きている?

いや、生きてること自体は喜ばしいことなのはわかっている。だからこそ俺はその疑問から目を離してたんだろうな。

東郷の質問でやっと疑問を持てた。確かに心臓を止めて生きていける生物はこの世にいない。体の構造上血液を送り出す心臓がなければ生物は死んでしまう。

園子の手に触れたときも、銀の手に触れたときも、脈はなかった。心臓が止まっているのに生きていたんだ。これまでずっと。

「勇者は死ねない。」

「満開の代償では死ねない。はっ、よく考えられたシステムだな。バーテックスに殺されたくなければ、満開使ってねく、ってか?」

需要と供給学び直してこいっ! 均衡価格で設定すんだよ! もっと安値で売りやがれってんだ!!

「もし、次もアレが来たらう!」

「大丈夫か、東郷。」

吐き気を催したのか口元を抑え顔を下げる。急いで駆け寄り、背中を擦る。

「私達はただ日常を守りたかっただけなのに。どうして、こんな苦しみを。」

「。」

東郷の頭を寄せ、ゆっくりとその細やかな髪を撫でていく。落ち着かせるように、泣き止ませるように。

「こんな世界。ツ。」

「それは駄目だ、東郷。世界がなければ、俺達は消えてしまう。一生笑い合うことが出来なくなる。」

俺はどんなときでも友達と笑い合っていたい。馬鹿話して、大袈裟に笑って。そんな毎日を過ごしたい。

「でも。でも。これじゃあ——!」

「俺がなんとかする。俺がなんとかするから、東郷はいつもどおり、

皆と笑って、食べて、遊んで、目一杯一日を謳歌しといてくれ。じゃなきや損だろ？」

「でも、それじゃあシャルル君は」

「いいんだよ。世界のことは俺が考えとくから。東郷は世界の命運だとかは考えずに待っておいでくれ。」

俺一人ではなにも出来はしないが、責任を俺が全部担うことは出来る。

「ぎ、もう遅いから早く寝な。夜更しは美容の敵なんだろ？」

「うん。」

「それじゃ、また明日な。」

東郷が布団を被ったのを確認して退出する。

さて、最早俺に学校に通ってる暇はない。今できる限りの情報を集めて天の神打倒へと向かわなければ。

皆の日常のためにも。

## 行動開始

俺達は異常なしという判断を受け、入院生活二日目に退院した。そして、友奈と東郷の散華部位が判明した。

友奈は味覚。東郷は左耳。両名・というよりは友奈、東郷、樹は満開回数是一回のため一箇所のみしか散華していなかった。

「頼めるか？」

「まあ、いいけど。」

場所は変わり、俺は犬吠埼家に来ていた。

一旦、現状を説明しよう。急展開すぎたもんな。

俺は病院から家に帰宅して、荷物を瞬時に片付け。そして、一つのダンボールとキャリーケースを持ち呼び鈴を鳴らして今に至る。

「餌とか猫砂とかはこのダンボールの中に入ってるから。あつ、あと説明書も」

「わかったわ。」

「餌は余裕を持って一ヶ月分あるけど、容量を守ってくれよ。再開したとき、変わり果てたら泣いちゃうから」

「それは大丈夫だけど、アンタ、一ヶ月も何処に行く気？」

「まー、いろいろとな。」

情報収集。これに尽きるな。

俺がしようとしてることは至ってシンプル。安芸先生と協力して大赦のデータベースから昔の戦闘記録&天の神についての情報を入力する。

だが、この作戦には一つ問題点があった。

そう、クロだ。俺の唯一無二の家族。

もう一年経つんだよな。クロを保護して、お世話して.....クロがいない生活とか考えられないぜ。

「んじゃ、俺は行くから。」

「風邪引かないようにね。」



家には帰らず、このまま大赦本部がある剣山に向かう。そこで、安芸先生と合流して突入という手筈となる。今から向かえば、だいたい四時ぐらいには着くだろう。

「行くわよ。」

「了解です。」

無事到着し、安芸先生と合流できた。あとはデータをコピーして盗むだけとなる。勝ったな。

俺は霊体化し、安芸先生は周囲に気を配りながら進んでいく。いくら、安芸先生と言えど持ち場を離れデータベースへと行くのは不審がられるらしい。

安芸先生がどんな役職を持ってるかは知らないが。

「……」

進み続けて二十分程だろうか。俺と安芸先生は巨大な鉄の扉の前に立っていた。

「本来これは数十人で開ける扉なの。でも、シャルルマーニュ君なら、一人でいけると思うわ。」

「わかりました。ここからは俺一人で行きます。安芸先生は不審がられないようにすぐ持ち場に戻ってください。」

「無理はしないように。」

「もちろんです。」

安芸先生の背中が見えなくなったところで、霊体化を解き扉と相対する。開けたときにデツカい音がしそうだが、ここに来た以上戻れな

い。最悪、目撃者全員を殺して逃げるか。

「よし、ふっ！」

片手を扉につけ、力を込める。予想していた音は鳴らず、スツと扉が開かれる。

「妙だ。安芸先生の話しと違う。」

「これなら成人男性二人で開けられる重さだ。数十人は必要ない。」

「恐る恐る中を確認しながら入る。見た感じ、中には機械類がぎつちりと置かれているようだ。光はなく、少し薄暗い。そして寒い。」

「だが、右のほうから光が届いている。日光か？」

「お客さんですか？」

「!？」

「なんだ、このゾクつとする感じは。関わるなど全身が訴えている。」

「どうする？ 斬り殺すか？ 幸い一人だ。いや、落ち着け。そんな野蛮な作戦は置いておこう。最初はまず交渉だ。何事も交渉からだよな。」

「俺の名前はシャルルマーニュ。アンタの名前は？」

「あらあら。ふっ、シャルルマーニュ様でしたか。」

「俺のことを知ってることは大救関係者なのは絶対だ。」

「では、次は私の自己紹介を」

「そう言い、椅子から立ちこちらへと近づいてくる。それによって、段々と全容が明らかになってくる。」

「歳はだいたい高校生ぐらいだろう。性別は女性。この気品の高さから察するにどこかのお嬢様の可能性が高い。そして、東郷と同じく黒髪美少女の類いだな。」

「そして、一瞬目がいつてしまったが、あのく、そのく大きいですね。何処がとは言いませんが。」

「此処で情報を整理している上里 柚葉と申します。誇り高き勇者であるシャルルマーニュ様にお会いできて光栄です。」

「いろいろと聞きたいことがあるが、まず様は止めてくれ。」

上里の姓とか、情報整理だとかを聞きたいが、今はよそう。まずはフレンドリーに接しなければ。

「ではなんとお呼びすればいいでしょうか？」

「気軽にシャルでいいぜ。」

「それではシャル君とお呼びしますね。」

「おう。」

最初のゾクツとした感覚はなんだったのだろう。普通に良い子じゃないか。なにも警戒しないでもいいと思うが、念には念を入れて五大元素を右手に集めとこう。

「此度は如何様で？」

「ちよつとデータを貰いにな。」

盗みに、ではなく貰うだけだから。許可は貰ってないけど

「どのようなデータを？」

「バーテックスとの全戦闘記録と天の神についての情報だな。」

「それでしたら、こちらを受け取りください。」

一つのメモリースティックを受け取る。

「そちらにシャル君が欲しているデータが入っています。どの機種のパソコンでも接続可能ですので、ご自宅でお試し下さい。」

「おう、ありがとな！」

「畏、だろうか。なにかのウイルスとかじゃないよな？」

「それとこれを」

「今度はなんだ？」

「私のスマホIDです。確か、シャル君が御利用なされているチャットツールはスマホIDで登録可能でしたよね？」

「お、おう。そうだな。」

解った。なんで最初、ゾクツとした原因が。

この人、親友の妹と同じタイプだ。どういうタイプか説明出来ないが、間違いなく同類だ。なんとというか、未来を見ているかのような目がそっくりだ。

「話しはここまでにしましょう。もうすぐ、警備の者が巡回してきます。その前にご退室お願いします。」

「そうか。それじゃ」

「ええ。チャット、お待ちしています。」

鉄の扉を閉め、霊体化して大赦本部から抜ける。

あの扉・女性の力、それも一人では到底開けられない重さだった。なのに何故、あの場で一人情報整理していたんだ？

怖すぎる。

「.....」

パソコンを持たないため、情報をまとめるまで安芸先生の家泊まり続けることになる。ほんつと、安芸先生には頭が上がらん。

「西暦、か。」

神世紀になる前の戦闘記録か。話しによると勇者システムには映像を記録できるようになっているらしい。

「.....」

御影 士郎のもあるが.....あるが.....これはー。村正ですね。完全に村正が入ってんな。

いや、そうか。??が村正の疑似サーヴァントなら、当然御影も村正の疑似サーヴァントってことになるな。

「なっ、これは.....」

左腕を切り落とし蠍座と相対したと思えば、何処からか剣を取り出した。俺の見間違いでなければ、体内から出てきていた。

つまり、これが??が言っていた草薙剣か。

「.....はあ？」

蠍座が崩れていく。

今、なにをした？草薙剣を振るつたのも見えなかった。村正の宝具『無間の剣製』でもない。これは.....草薙剣の真名開放によって生じた結果か？

「そして生存、と。」

大赦の記録によると、大量出血による貧血で入院したと記されている。欠損部位は止血が上手かったこともあり、なんとか一命を取り留めた。

これ以降、伊予島 杏と土居 珠子が戦線を離脱。珠子の足完治が翌年11月。戦線復帰が2月の予定だったらしい。しかし、復帰する前に天の神との戦闘が終了した。

「切り札・精霊を体内につて、ヤバいな。」

精霊と言えども本質は悪のヤツが多い。大元は日本で言う妖怪。または悪霊の類いだ。それを体内に入れるとか、ちよつと考えれないですね。

「心身への影響、そりやあそうなるわ。」

切り札使用中は筋肉が千切れ、内蔵へのダメージ。そして凶暴性が増す。

なんだこれ。これなら普通に持久戦した方がいいぞ。

「ん・御影 士郎の精霊について？」

御影 士郎が保有する草薙剣は神樹様によって再構築されたものではない。他の勇者様が持つ神性を伴う武器の数百倍の神性を有しており、生命反応がある。

巫女が言うには、コレは人が扱う武器ではなく神様が振るう武器に等しい。そして、生命反応については精霊同様だが、何処か少し違うナニかのようだ。

これから推測するに、御影 士郎が草薙剣を体内に入れてる状況は切り札と同様の状態である。しかし、御影 士郎には心身への影響は見られない。

以降、大社ではこの状態を研究、解明し、勇者システムに応用したと思う。(一部抜粋)

「常時切り札ってことか。中々のチート性能だな。」

大社 昔の大赦か。名前はもうでもいいや。次に行こう。

「草薙剣・よし、来た。」

一番欲しい情報キターー!!

高知県にある郡 千景様のご自宅周辺で御影 士郎が一般人に暴行。被害者は左腕を欠損。しかし、応急手当が迅速で丁寧だったため一命を取り留めることができた。この事件により、御影 士郎から勇者システムを一ヶ月の間没収。

しかし、事件の一週間後に来た襲撃で勇者システムを使わず戦闘可能なことがわかった。よって勇者システムは一ヶ月を待たず解禁。

スマホを受け取る際に草薙剣を取り出そうと巫女数名が祝詞を唱えたが、一向に出ることはなかった。これを見かねた御影 士郎が草薙剣を取り出し、床に置いた。

この時点で草薙剣は戦闘以外の時でも御影 士郎の体内に入っており、一体化し始めている。

取り出された草薙剣を巫女数名が運ぶため持ち上げようとしたが、ビクともしなかった。そこに男性神官が加わり、計二十名で持ち上げようとするが結果は変わらなかった。

しかし、御影 士郎が持つと先程のことが嘘のように軽々と持ち上げ、寮へと戻っていった。

「人を選ぶ。エクスカリバーみたいだな。」

って、次のフォルダで最後か。今ん所、天の神についてないが大丈夫か、これ？とりあえず、続きを読む。

今回の襲撃によって、バーテックスの完成体が襲来し、想像を絶する程の戦いが繰り広げられた。現実にも被害が出ており、各地で竜巻、地震、津波が発生し、死者は百を越える。

御影 士郎様は前回と比べ物にならない程の傷を負い、五ヶ月の間昏睡状態に陥った。

此度の活躍によって、大社内部で御影 士郎様を英雄視するものが大半を占めてきた。そのせいか、優秀な遺伝子を残すため乃木 若葉様と御影 士郎様を結婚させようと目論む者もいたが、上里 ひなた様の力によって潰えた。実に残念だ。

この戦いにより、天の神への大打撃を与えたとお祭り騒ぎになったが、そんなことはなかった。我々がぬか喜びしている束の間に結界の外は天の神の結界で塗り替えられ、火の海へと変貌した。

今、人類は窮地に立っている。残された選択肢は二つ。負けると承知で戦うか、負けを認め許しを請うか。内部で抗争があったが意見はまとまり、負けを認め許しを請う方針になった。

太古の日本で神に土地を使うことを赦してもらうために行っていた奉火際を真似し、巫女六人を生け贄として火の海へと落とした。

結界は失敗。だが、天の神から神託が降りた。

「草薙剣保有者を寄越せ」というものだった。よって、翌日御影士郎様を火の海へと落とす。

最後まで謎は残るばかりだった。何故、壁の外で倒れていたのか。草薙剣とはなんなのか。だが、もうなにも考えなくていい。

奉火際を決行。しかし、御影 士郎様は最後まで天の神に抗った。その結果、天の神の八割が消失。神樹様の神託によるとあと何百年は襲撃は来ないようだ。

以降、御影 士郎様を英雄と記し。後の世に伝えていきたいと思う。

「もしかして 天の神、弱い?」

この場合、御影が強いのか? なんなら、今の俺より強いかもしれん。なるほど 御影に会えば100%ってことはこういうことか。

「奉火際、か。俺も一回食われに行くか?」

それぐらいしかないような感じがする。それとも草薙剣を保有するか? いや、これは無理だな。現時点ではどうにもならない。

「はあー 手詰まりだな。」

大の字のになり倒れる。綺麗な天井だなく。

ん? なんか、ポケットに

「あの人のか。」

完全に上里 柚葉の存在を忘れていた。

一つの紙切れに目をやる。

「貰っているのは考えねえしな。」

意を決し、紙切れを開ける。すると、一つのペンダントのような物が落ちてくる。

「石?」

ペンダントには石のような黒い物体がついている。

「一旦置いておいて、ふむふむ。」

ペンダントを机に置き、紙切れに書いてある文に目を通す。書かれているのは言っていた通り、スマホのIDらしきものと、ペンダントの説明。どうやら、この石は草薙剣の欠片のようだ。

「へえ、草薙剣のん?!」

待て待て、俺、疲れてんのかな。二徹目だし、ちよつと目がぼやけてきたかな。

もう一度文章を読むが、先程と内容は変わらない。

「マジモンか。」

そして、文の最後には肌見離さず着けといて下さいと書かれている。

「一応着けとくか。なんか役に立つかもだし」

草薙剣の欠片をどう使うのかはわからないが、なんかの時に使えるかもしれない。

「あとはこれだが」

スマホのIDを見る。これをチャット相手に登録するか、しないかは俺の自由だ。

相手は知らないヤバい人。ここで登録しないという選択肢を選んだほうがいいだろう。よって、この紙切れは一生封印しておきます。

「南無三。」



## 曖昧な答え

あれから四日が経ち、土曜日になった。俺はいつもの如く銀達がいる病室に来ていた。

まあ、やることがないということでのこの一週間の出来事について話してたんだが。

「——てことがあったんだ。」

「ちよつと待て。ツツコミどころが多すぎじゃないか？」

「安芸先生と二人つきり。なにもされなかつたよね？」

「なんかされる訳ないだろ。だから、その真顔をやめてくれ。」

安芸先生のことを何だと思つてやがる。あの人、一応俺と同じぐらいの歳だからな。年齢知らんけど

「にしても、須美と同じぐらいの大きさか。ふむ。」

「お前は男の前で胸の大きさを確認すんな。」

「流石のシャルさんもちよつとドキツとしちやつた？」

「おう。めつちやドキドキした。だから出来るだけしないようにな。」

「お、おう。」

さて、冗談はここまでにして本題に入ろう。

「今回手に入れた情報だが、ほとんど天の神と関係ないな。」

「ほとんど、つてこはく？」

「ああ。一個だけが新情報を手に入れた。」

「一個かあー。大赦の方も天の神についてあんまり知らないのかな。」

「まあ、十中八九そうだろうな。」

相手は腐つても神じゃなくても概念に近い存在だ。地球の生存本能によつて生まれた存在。それがガイア。

「それで、その内容はなに？」

「西暦。神世紀になる前の話だ。バーテックスが空より落ちてきて

人類を絶滅寸前まで追い込んだ後のことについて、詳しく記録されていた。当然、初代勇者についてもな。」

「初代勇者って言うのと・御影 士郎についても?」

「ああ。と言っても天の神に関係ない話しばっかだったけどな。」

まあ、俺が個人的に知りたかった草薙剣について知れたからいいか。

「こっから天の神についてだ。」

「わかりやすく頼みます。」

「了解。」

「一旦情報をまとめる。そこから簡単な感じにアレンジを加えていく。」

よし。

「結界の外は神世紀になる前は元の景色だった。それが獅子座を打倒した何ヶ月後に天の神の結界によって火の海となった。」

「あのデカいの昔もいたんだな。」

「きつと、昔のと変わんないと思うよ。バーテックスは生物としての頂点だからね。」

「生物としての完成形ってことか。」

それがただの人殺しマシン、とはな。結構興味深いな。一回解剖して、中身をじっくりと観察してみたいもんだ。

「火の海になった後、大赦は負けを認め奉火祭を決行。巫女六人を火の海に落とす。おっと、奉火祭ってのは、神様に許しを請う儀式みたいもんだ。」

「つまり、巫女六人を神様への供物としたってことか?」

「そういうことになるな。」

供物ってのは適切じゃないが、まあ、あつてるしいいか。

「それで戦いは終わったの?」

「いや?これだけじゃ天の神は満足しなかった。てことで御影 士郎が次に火の海に落とされた。」

「あれ。」

「どうしたの、ミノさん?」

ちよつと雑にしすぎたかな。

「御影 土郎の最期つて、絵本とかだとだいたい『幸せに暮らしました』で終わってるんだけど。」

「それは多分、描いてる人がハッピーエンド好きなんだじゃないか？」  
「時代が経つと誇張されて書かれてることもあるしね。」

確かにそう書きたい気持ちはわかる。

御影 土郎の一生には一度も救いはない。仲間を庇い左腕を失い、他の仲間から斬り殺されそうになったり。一年しか生きてない男とは思えない人生だ。

でも、本当に幸せな一年だったんだろうな。憶測でしかないが、いつも彼は仲間を大切にしていた。戦い方と行動にそれが顕著として表れている。

「ここでとびっきりのニュースを言つてやろう。」

「とびっきり。」

「なににない。」

「実は・御影 土郎は生きてますっ！」

「マジっ!？」

「三百何歳だろっ?！」

「いや、そこじゃないだろ！」

流石、園子。俺の予想を遥かに超えていくな。

「でも、なんでっ?！」

「火の海に落とされたんだろ?！」

「御影 土郎は最後まで戦い続けてな。天の神の八割を消失させた。」

「おおお〜!！」

そうだよな、そうだよな。やっぱ、そういう反応するよな。

自分が好きなキャラが活躍すると、どんなシーンでも大はしやぎしちまう。いやあく・トラオム最高だった。

「それで天の神が——」

ブーツ!ブーツ!

スマホが鳴る。

「ん〜?！」

「どうやら、メールのようだ。送ってきたのは。」

「大赦からか。あれ、ブロックしたんだけどな。」

「ブロックしてんの!？」

「違うのからだっただけ。いくらでもメールできちゃうもんね。」

「さて、内容だが。」

『犬吠埼 風が勇者システムを悪用しています。他の勇者様はいち早く無力化、又は打倒してください。』

「シャル。」

「ちよつと行ってくる。園子と銀は絶対にこつから出るなよ。」

「りようかいい。」

「了解ですっ!」

風先輩の現在位置を考えると、こつから全速力で向かってても三分かかる。俺以外に風先輩を無力化出来るのは誰もいない。そもそも精霊の守りを破れない。そんな瞬発火力を出せるのは友奈だが、性格的に無理だ。

俺がやらないと俺がしないといけない。

「銀、もしもの時は俺のスマホを使って変身してくれ。多分違う人でも変身できると思う。精霊もこき使ってやってくれ。」

「それだとシャルを守るのが。」

「大丈夫、大丈夫。」

霊基を戦闘時のものにする。

例え、精霊の守りがなくても鎧があるから一定の攻撃は耐えられるだろ。

「帰ってきてね、シャル。」

「もちろん。」

霊体化し、窓から飛び降りる。地面に着くと同時に飛翔し、大橋方面へと向かう。会話している間に誰かと接敵したのだろう。剣山から大分離されている。

見えてきた。どうやら、夏凜が接敵したのか。

やはり、少し夏凜が押されている。殺す気がある風先輩と殺す気がない夏凜。迷いが無いな。

「よつとー!」

「——なっ!?!」

「シャル!?!」

風先輩が振るう大剣をジュワユーズで受け止め、蹴りを入れて距離を取る。

「一週間ぶりだな、風先輩。それで? 何処に向かおうとしてたんだ?」

「大赦を潰すの。それを、邪魔するなら。例え、アンタでも!」

「そうか。」

大赦を潰す、か。いい判断だと思うが。今、やられると不味い。潰すなら天の神を倒してからだ。

「——それじゃあ、やろうか。俺を殺してから大赦に行きな」

「そうするわ。」

「ちよ、待ちなさいよつ!」

お互いに矛先を向ける。確実に殺りにいく。

俺は一撃でも喰らえば終了。神樹のバックアップにより、風先輩の身体能力は俺に近い。手加減すれば本当に死ぬ。

「アアア!!」

「甘いつ!」

「ツ——!」

縦に振り落とされた大剣をジュワユーズで打ち上げ、すぐさま振り下ろす。ジュワユーズの面と地面で挟み込む動けないようにする。

「潰す理由は?」

「アイツらはアタシ達を騙した! 樹の声は一生、——戻らないツ!」

「ツ!」

大剣から手を離れたと思えば、地面を蹴り俺に体当たりしてきた。大剣を抑えるためにジュワユーズを使っていたが故に避ける術はなくモロに喰らい、後方へと飛ばされる。

「……？」

「さつきから体が重い。思うように動かない。」

「先程の体当たりだって、横に回避することも出来た。なのに、出来なかった。体が思考に追いついてない。いつもなら、難なく回避出来ていた。」

「わからん。」

「……うああア!!」

「グツ——！」

「考え込んでいたためか反応が遅れる。が、なんとか振り下ろされた大剣をジュワユーズで受け止める。しかし、膝が地面についており、完全に不利な状態になった。」

「負けを認めなさいっ！」

「いや、だね。」

「っ！この——チツ！」

「ふっ。」

「全力で力を込めていた右手から力を抜く。当然、風先輩は振り下ろしきり、隙が出来る。」

「瞬時に身を屈め、ジュワユーズを手放し風先輩との距離を縮める。」

「らああ!!」

「——ッ」

「筋力Aの一撃だ。精霊の守りで勢いは落ちるだろうが、風先輩の意識を刈り取る程度は出来る。」

「——!!?」

「罅が入る。その程度だった。」

「精霊のバリアは健在。風先輩には一ミリたりとも触れていない。俺の一撃は届かなかった。」

「で、——りゃああ!!」

「あがつ——！」

「大剣の面によって弾き飛ばされる。飛ばされた方向には台座がある。この勢いで当たれば致命傷は免れない。しかも、受け身が取れない。大丈夫だ、俺は耐久Cあるから。」

ドゴツ

鈍い音が響いたと共に頭に激痛が走る。

「~~~~ツ!!」

「いてえ!!過去一痛いかもしれん。」

頭から出血した血が左目に入り、視界を真っ赤に染めていく。

「あ、じゃあね。」

「ちよづとアンタ！待ちなさいよっ！」

「はあ、はあ、いってえなあ〜」

「アンタはそこでジツとしてなさい！下手に動くとならぬと本当に死ぬわよっ！」

意地で立ち上がる。

最早、勝敗は決した。それでも、立ち上がらないといけない。

ああ——馬鹿つてのはこういうことか。

やっとわかった。俺に足りないモノ、くそっ、カッコ悪いったら、

ありやねえな。

「汚名返上しねえとな。」

「まだ、やるの？そんなふらついた体で。」

「いいや？俺の完敗だよ。殺したいのであれば殺してもらって構わない。」

「あと何秒立つてられるかわらない。だが、ギリギリまで堪えないと倒れるのは全部伝えてからだ。」

「大赦を潰す理由も、独りで突っ走る理由も俺にはわからない。」

「時間稼ぎのつもり？」

「———だけど、きつと！お前にとっては譲れないモノ、なんだろう？」

「っ、知ったふうな口で。」

わかる、わかるさ。俺と風先輩は根本的な部分で似ている。まあ、俺に関しちゃう、中途半端で、見ている気持ち悪いだろうがな。

「俺はもう、止めろとかすんなどは言わない。だけど、少し落ち着いて考えてくれ。そうだな〜俺が起きるまで考えてみてくれないか？」

「」

「もし、俺が起きた後も大赦を潰したいと思うのなら、俺も協力しよ

う。二人でグチャグチャにしてやろうぜっ！」

誰かの味方をするということは誰かの味方をしないということだ。そんな簡単なことも忘れていたとはな。

ああ・本当に、俺は――

「――」

「うっ！」

夏凜が何か叫んで駆け寄ってくる。

なにも心配しないでもいい。風先輩には皆がいる。誇れる勇者部の皆だ。きつと、なにもかも上手くいくよ。

だから、俺は安心して倒れることが出来る。

風先輩なら大丈夫。だって、風先輩はカッコいいからなっ！



譲れないもの

「……っ。」

重たい瞼を開け、周囲を見渡す。

「樹海・やっぱ、空気をよまない奴らだな。」

バーテックスが来たのならやることは一つ。さっさと御霊砕いて二度寝するんだ。

「っっん、これは。」

どうやら、あの後誰かが応急手当をしたのだろう。左目から頭の天辺まで布が巻かれている。元々がなんの色かわからない程、真っ赤に染まっている。

「!あの輝きは——」

満開だ。二年前見た、輝きと一致する。

「急がねえと。」

輝きがした方向へと全速力で向かう。

満開する程の敵。獅子座か、それとも複数体か。どちらにせよ、これ以上満開はさせない。

「——ッ!」

二度目の満開。仕留めきれなかったのか。だが、もうすぐそこまで来れた。着いたと同時にジュワユーズを放ち一掃する。それしかない。体のことは考えるな。

なせば大抵なんとかなる、ってな!

「——夏凜ッ!」

銀の満開時の武装に似ている。巨大な腕に見合った巨大な刀。夏凜が持つ刀を合わせると三対、計六本の刀で縦横無尽にバーテックス

と白いマシユマロのような敵を斬り伏せていく。

「！——アンタは休んでなさいっ！此処は私がッ！」

それで今の俺を止めれるとでも思ってたんのかよ。

「永続不変の輝き、千変無限の彩り！」

我が王勇を示すため、この刃に我らが伝説を刻み給え！

——王勇ジュウフを示せ、遍く世スを巡る十二ドの輝剣ユル！」

十三本のジュウフユーズが八体のバーテックスを跡形もなく灼き尽くしていく。御霊は出現することなく、天へと昇っていった。

「ぐっ——！」

■ 体勢を保つことが出来ず、その場に膝をつく。

■ 「言わんこっちゃやないわよ、なんか透けてない？」

■ 「そうだな。」

■ 退去が始まったか。だが、この樹海化が解けるまでは根性で踏み留まろう。

■ 「大丈夫なの。」

■ 「心配すんな。それより、現状を教えてください。壁に穴が開いてるように見えるんだが？」

■ 「ああ、それ東郷が開けたやつね。」

■ 「おお、やることが派手だな。」

■ やることの規模がデカイ。思い切りがいいな。

■ 「迷惑しでるわ。」

■ 「他の奴らは？」

■ 「友奈はあっちにいるわ。風と樹は散り散りになったからわかんないわね。東郷は壁の上でこの光景を眺めてると思うわよ。」

■ 顎で後ろの方向を指す。友奈は後方にいるのか。

■ 「じゃ夏凜は満開中に風先輩達を探しに行ってくれ。俺は東郷と話しに行ってくる。」

■ 「手荒なことはしないようにね」

■ 「しねえよ。」

■ 黒歴史を掘り返さないでくれ。言うてついさっきの出来事だとは思うが。

今は東郷の所に行くことに専念しよう。

「また、お前かよ。邪魔すんな。」

まだ、体が完成してないのか白いマシユマロが集まっている。

「その状態でも打てるのか」

完成してないにも関わらず、炎が収束し火球を成していく。あと数秒もあれば放たれるだろう。

「ならば——」

やることは決まってる。

最高火力を保ったまま打てるのは最低二発。三発目を打てば、問答無用で退去するだろう。

「この身佩刀こそ天下無双の聖剣！

降臨するたび、世を輝かせるもの也！

——この輝きで灼き尽くすッ!!」

火球が放たれる。狙いは神樹、ここで通せば世界が終わるな。

まあ、終わったら終わったでいいや。

「——王勇<sup>ジュウ</sup>を示せ、遍<sup>ユウ</sup>く世<sup>ス</sup>を巡<sup>オ</sup>る十二<sup>ド</sup>の輝<sup>ル</sup>剣！」

「!!」

火球を貫き、ジュウユーズを放った勢いそのまま壁の上に着地する。

「ふうー、なんとか着いたな。」

よし、まだいけるな。

体の状況を確認し、東郷へと体を向ける。

「よっ、東郷。元気してたか？」

「ええ。シャルル君こそ元気にしてた？」

「うーん、どつちかと言われると。元気だった、の部類になると思うけど。おっと、今はこんな話してる場合じゃなかったな。」

流石、東郷。話しを逸らすのが上手い。俺が目的を忘れて無駄話するとはな。中々やりおる。

？

「話、なんの話しをすると言うの？」

「そりゃあ、お前。この壁に空いた大穴についてだろ。それとも、友奈のカワイイところでも語り合うか。」

「後者でお願いします。」

「そつちに食いつくな。全く変わんねえな。」

友奈の話題になると、すぐ食いつくんだから。

「そういうシャルル君は何処が変わった？」

「おう。風先輩に大切なことを教えてもらったよ。」

「詳しく」

友奈並みに食いつくなよ。ちよつと怖いから

「これまでずつと難しく考えちまってな。今思えば凄く簡単なことだったよ。」

よく、この問題を二年間考えてたなつて思うレベルだよ。まっ、俺は元々頭悪いからしょうがないかもだが。

「簡単な、こと。」

「いつもいつも、俺は一旦立ち止まっていた。これからする行動は本当に正しいのか、ってな。」

「」

「行動に絶対正しいってことはない。その時正しいと思っても、どうせ後からもつとこうしとけば、とか考え込むのが人間だ。だから俺は考えるのを止める。他人からの評価なんて気にしてる場合じゃない。」

風先輩は樹のために突つ走った。他人の目には馬鹿だ、単細胞だと映るだろう。でも、俺にはカツコよく見えた。

誰かのために全力で怒る。誰かのために全力で行動する。もう、それだけで最ツ高にカツコいいんだよ。

「さて、それじゃあ東郷も話してくれよ。どうして、壁に大穴を開けたのかを」

「そんなの決まってるじゃない。——この生き地獄を終わらせるためよ。」

生き地獄、確かにそうだろうな。死ぬまでバーテックスと戦い続

ける地獄。しかも満開を繰り返すたびに体の機能を取られていく。地獄という言葉でも、まだ優しいほうかもしれん。

「一生皆と笑いあえなくなると分かってもやるのか？」

「ええ。例え、目の前でシャルル君が死んでも止める気はないわ。」

「よしっ！それじゃあ俺が最後まで防衛しきったら考え直してくれないか？」

「そんな体で？」

「もちろん。」

「この戦いが終わり次第退去するのはわかってたんだ。それなら、最後の最後まで眩いまでの輝きを見せてやらあ！」

「どうして、そこまでするの？」

「何故戦うか。そんなの決まってる。」

「友達を守るためだよ。それ以外に戦う理由なんてないだろう？」

「っっ」

東郷に背を向け、樹海へと飛翔——する前に一つ忘れ物。

「——東郷。勇者部での活動は本当に楽しかったよな。」

「あ——」

「この世界を悲劇だと嘆いていい。地獄だと叫んでもいい。でも、これまででの思い出をなかつたことにしないでくれ。それは——本当に悲しいことなんだ。」

「駄目。待って。」

今度こそ壁から飛翔する。

さっきのジュワユーズによって、神樹に迫っていたバーテックスは粗方片付いた。だが、一体だけまだ残っている。

「第二球を用意するよな。そりゃあ——」

先程貫いた火球の二回り程大きくなっている。まあ、大きさが変わろうが関係ない。やることは同じだ。また、貫いてやるよ。

「清光で遍く全てを照らし出せッ!!」

所々、体が粒子となり空气中に溶けていく。この一撃で火球を貫き、二撃目で獅子座を倒す。うくん、完璧な作戦だ。

「じゃじゃ〜ん！どうだい見てくれよ俺の武器。

これこそ世界で最も陽気な聖剣、即ちジユワユーズ！  
もんじよわ〜!! って感じだぜっ！」

火球と衝突し、拮抗する。

「うゝ、おおおおゝ——!!!」

轟音が鼓膜を打つ。熱風によって鎧が溶けていく。

先程とは桁違いだ。一球目はこの時点で形を崩していた。だが、コレはまだまだ健在。崩れる予兆すら見せない。

「ぐう〜っ！」

弾き飛ばされ、樹海を転がる。

火球を見ると、ジユワユーズが効いたのか小さくなっている。それでも、先程貫いた火球と同じ程度だが

「やってくれたな——うおっ」

立ち上がろうと力を込めるが、立ち上がれずまた両手を地面につける。

「まだ、まだあゝっ！」

火球が迫る。早く立ち上がって移動しなければ、火球に吞まれる。今、当たれば即死だろう。

体は動かない。どんなに立とうとしても立てない。どうやら、ここが限界のようだ。

「ああ——くそっ、これで終わりか。締まんねえな。」

最後がもんじよわかよ。もつとカッコいいのにしとけばよかったな。

「カッコ良かったかな俺——」

それだけが気がかりだ。

まあ、でもこんな中途半端野郎をカッコいいとか言う物好きはいねえか。ははっ。

手足が震える。冷風が心の奥底から吹く。

「これが、死か。やっぱ怖いな。」

後は皆に託すしかないのか。最後までカッコわりいな、ほんとに。

「 さよなら、  
ぐらいは言いたかったな  
。」

## 偉大なる皇帝

「何もない空間でぼーっと空を見上げる。空と言っても、変な模様の天井のようなものであり、いつも見る空とは決定的に違う。」

「俺、勇者じゃないんだけどなー。」

「此処に来るのは三回目だ。一度目はこの世界に来た時。二度目は??に会った時。」

「??が言うには、死後の勇者が来る場所のようだ。」

「自分の体を見る。前は確認してないからわからないが、今回はシャルルマーニュとして来たようだ。」

「まあ、体はスケスケだけどな。」

「この、音、鳥か?」

「翼が羽ばたく音がする。集中して聞くと、どうやらこちらに近づいて来ているようだ。」

「なんか俺の頭上辺りでくるくる回転し始めたんだが? 仲間にはあることでも伝えてんのか?」

「突如として目の前に魔法陣のようなものが表れ、青く光り輝く。妙な既視感を覚える。」

「この感じ、まさか?!」

「生前、俺が何度も見た輝きだ。いつも俺にドキドキとワクワクを与えてくれた。虹回転ですり抜けた時の絶望感を今だに覚えている。」

「ぐっ——!」

「目を開けない程の輝きがこの空間を満たす。」

「——いやあ、なんとか来れたな。」

「。」



この声、この姿、間違いない。

「アンタがシャルル・マーニユつうー奴で間違いないか？」

「そういうアンタは御影 士郎で合ってるか？」

「おっ、俺を知ってるか。なら、話しは早え。ちよいと着いてきて貰うぜ。」

四国の大英雄、御影 士郎。写真で見た通りだ。生前の俺、だいたいでい中学三年の時の体格だな。違うところと言うと、服装だろうか。袴のようなものを着ている。

「つと、その前に、おーい！降りてきてくれ！」

空を飛んでいる青い鳥へと叫ぶ。人の言葉がわかるのか素直に下降し、御影の肩に停まる。

「んん？なんか、どっかで見たような。」

青い鳥をじつと見つめ頭を悩ませる。それを見た鳥がクチバシを使い御影を攻撃する。

「嘘！嘘！冗談だつて！だからツンツンすんな！地味にいてえから。つたく。久しぶり、若葉。いつの間にかちつくくなつてんな。」

若葉!?乃木 若葉のことだろうか。いや、俺が知る乃木 若葉は人間だ。鳥じゃない。

園子の先祖は鳥だったつと。メモメモ

「幸せな人生を送れたか。それは結構。ん？友奈が。まあ、友奈の性格だしな。じつとは出来ねえだろ。その後、千景は大丈夫だったか。そりゃあ良かった。」

どうやって鳥と意思疎通してるのか気になるが。ここは割り込まないようしよう。きつと、三百年ぶりの再開なのだろう。積もる話がたくさんあるだろうしな。

「へえ、ひなたが。アイツはお前のためならなんだつてするしな。いつも通り、いつも通り。タマと杏はどうだ？」

上里 ひなた。あの上里 柚葉の先祖か。なにをした人なのかイマイチわからない。情報が隠されたかのように見つからない。わかるのは一点のみ。巫女だった、それだけだ。

「ハハっ！やっぱ、俺より大きくならなかつたか！おっと、タマに怒られちまうから笑ったのは黙つといてくれよ？」

神樹の内部、それが英霊の座に勇者の魂でも集められんてのか？そんな感じの言い回しが多いな。

杏は変わりなし、っと。まっ、杏らしいな。次会ったら外に引つ張り出してやるよ。そう伝えといてくれ」

本当に・楽しそうだな。

「おおー！そいつはめでたいな。いやいや！俺じゃないって！そんな仲じゃなかつたし。神樹がなんか細工したんじゃねえか？」

今度はなんの話しをしてるのだろうか。神樹関連についてだとは思うが。

「二本か。これからも若葉が管理しといてくれ。まっ、どうせ使えるのは、そのシャルルマーニュぐらいだろうがな。」

「」

俺が使う・なんかの武器か？

「よし、話しはこれぐらいにして。すまねえ、待たせたな。」

「俺は大丈夫だぞ。いくらでも喋っといてくれ」

「そうはいかねえよ。俺は一時的に顕現してるだけだからな。さっさと要件片付けて戻んねえと。」

まさかこれ・単独顕現じゃね？いや、今考えるのはよそう。

「このままバビュンとアンタを連れて戻りたいところだが。どうやら、迷子の奴がいるみてえだな。まずはそこに行くぞ。」

「わかった。」

こんな場所で迷子するって・どういう奴だよ。

「やっほ、そっくりだな。土台が同じってだけでここまで似るもんかねえ。」

「迷子って、友奈かよ。」

「まだこちらには気づいていない。俺みたいにすけすけではないが  
なんか、フヨフヨしてんな。」

「アンタはあっちからは見えない。だからって、変なことはすんな  
よ。」

「りようか——えっ?」

ちよつと待て、なんで、俺は見えないんだ?

「アンタは完璧に死人だが、あの友奈は言わば幽体離脱してる状態だ。  
体が生きてるにも関わらず、死んだと誤認して魂がここに来た。だか  
ら、本当の死人であるアンタは見えない。」

「そーいやー、死んでたな俺。」

完全に忘れてた。ついつい、夫婦漫才で和んであやふやにしちまっ  
てたな。

「おーい!そこの友奈ツ!」

「えっ——あ、はいっ!」

高嶋 友奈と結城・友奈。名前が同じという共通点しかわからな  
いが、土台が同じのようだ。土台がなにかわからんけど。

「ここはお前みたいなきでる奴が来る場所じゃねえよ。さっさと帰  
りな。」

「私も帰りたいんですけど、どうやって帰るかがわからなくて。」

「この青い鳥が道案内してくれるってよ。帰りたかったら、必死につ  
いていくんだな。」

そう言うと、青い鳥は御影の肩から羽ばたき、俺達が来た道に戻っ  
ていく。

「あつ、待って!」

青い鳥を追い、俺の横を走り抜けていく。

「よしっ。これで此処での要件は済んだ。次に行くぞ。」

「次。」

場所を変えるのか?でも、ここ以外に俺が行ける場所って

「手を」

「おう。」

差し出された手を掴む。

景色が一変する。

先程いた殺風景が王宮かのような場所に変わる。

「おつ、それがアンタの本当の姿か。聞いてた通り俺にそっくりだな」

「いつものに戻ってる。」

自身の格好を見ると、シャルルマーニュの霊基ではなくなり生前の姿になっている。身長は俺の方が何cmか高い。と言っても2、3cm程度だが、グスン。

「てかここは何処なんだよ?」

「天の神の中だ。又はガイアとか言う、よくわかんねえヤツの英霊の座?っていう場所らしい。俺はあんまここには詳しくねえよ。多分、アンタの方が知ってるんだろ。」

「あゝ、オツケー。だいたい把握した。」

俺の推測は正解だったな。

此処は多分、カール大帝の座なんだろう。そして、此処に俺を呼んだ理由は、

「んじゃ、ここからは一人で進んでくれ。」

「わかった。」

「饞別になるかもだが、この一刀を持っていつてくれ。献上品にしてもよし、戦闘に使ってもよしの最高品だぜ。俺の自信作だ。」

何処からか刀を取り出し、手に握られている。エミヤの投影魔術が頭に浮かぶが、違う類いのものだ。

「ありがたく使わせて貰う」

「健闘を祈るぜ」

御影に背を向け、一人で黄金に輝く扉の前に立つ。これを開けた先にはあの人がいる。考えるまでない。

「!」

両手に力を込め、扉をゆっくりと開けていく。

「っ」

・

一步踏みしめると同時に重圧がかかる。だが、負けじと歩を進める。

誰か立っている。黄金の肩当。たなびく白髪。そして、この王たる風格。やはり――」

「――カール大帝。っ。」  
ゆっくりとこちらに振り向く。それだけのちよつとした動きなのに目が引き寄せられる。

「いかにも。余がカール大帝である。」

対面すると、先程の数十倍の圧がのしかかる。目線を反らしそうそうになるが、なんとか維持する。

「我が栄光の前に膝を屈せ、歓喜の涙を流せ。それとも、恐れをなして逃げるか？」

「いやだね。俺は屈服するために此処に来たんじゃない。そして、俺はアンタに恐怖なんてない。」

「ほう。それではなにがあると言うのだ？」

「敬意と尊敬、それだけだよ。」

それ以上もそれ以下もない。

カール大帝の栄光を前にして、目を細めることはあっても、それに恐怖を抱くことはない。俺は心の底から凄い人。いや、これでも表せないな。言うならば、俺が目指すべき星、つてどこか？

「フツ――ハツハツハ!!」

「なんか笑えるところでもあったか？」

急に笑い始めたんだけど、情緒不安定か？

「いや、すまない。少々勘違いしていたようだ。」

「勘違い。」

「大帝の名を引きずる不屈き者と思っていたが、余の早計のようだったな。」

「あー、まあ、実際そうだしな。」

カール大帝の言ってることは正しい。大帝の名を名乗りながらも、このザマだ。なにも成し得ていない。

「いいや、違う。貴様は大帝でなくともこの場に辿り着いたであろう。」

そう思える程の度量と器が貴様にはある。」

「でも、此処に来るには多くの出会いと奇跡がなければ不可能だった。」

「奇跡と出会いは、その者が正しき道を歩んだ証拠である。全て貴様の行動あつてのものだ。」

「正しき道。例え、俺が間違つても皆が戻してくれる。だから俺は正しい道を選べたんだ。」

「ふむ。良い仲間、良い友人に恵まれたようだな。」

「ああ。ほんとうに、そう思うよ。」

二年間とは思えない程の人生だったな。後悔はあれど、間違いとは思わない。そんな幸せな人生だった。

「戯れはここまでにしておこう。さあ、述べよ。貴様が此処に立つ理由を」

立つ理由。今話すには曖昧だ。意思を固めなければ、即座に見抜かれる。それだけは阻止しなければいけない。

「カール大帝。アンタはこの世界についてどう思う？」

「世界かみの導きだ。もう時期人類は潰える。」

「それを、良しとするのか？」

カール大帝の言葉からは悔しみや怒りを感じられない。王、故の言動かもしれないが、俺は本心が知りたい。

「元より戦争に良いも悪いもない。そも、結界の中でのうのうと暮らしている人々を見たか？誰一人として、救済を求める者はいない。」

「維持のために俺達より一回りも小さい子達が命をかけて戦つてるのか？」

「誰かが強制しているのか？誰かを人質にされているのか。違うだろう。あの力を使えば結界を壊すなど容易い。事実、此度の戦いの要因は、勇者による壁破壊が原因だろうか？」

「？」

「カール大帝の言ってることは全て正しい。だけど、なにか足りない。本当に大切なナニかが。」

「貴様は最初から全て理解しているだろう。人類に未来はない。生贄を出し続け、早三百年。成長せず、ただ衰退していくのみだ。」

「勇者は、人間なんだ。凹むし、泣くし、怒るんだ。でも、大切な人のために、いつも、全力、なんだよ。」

「御影 士郎という勇者を超える者は今だ誕生していない。そればかりか、人々は自身が助かるために御影 士郎を火の海へと落とした。貴様はコレを看過出来るか？」

「看過する。」

「ほう。」

「三百年前のことなんて俺は知らない。今を生きる俺には一切関係ないことだ。」

そんなこと考えてる暇あったら、違うことについて考えてたほうが有意義だろう。

悲劇だと思おうし、感謝もする。だが、それとこれとは話しは別だ。

「そもそも、カール大帝も知ってんだろ。人間は善悪両方を孕むものだ。どちらか片方に吹っ切れてる奴、どっちもどっちの奴、様々な奴がいる。だからこそ、戦い続けるんだよ。いつの時代もな。」

「ああ、そのとおりだ。だが、人間は脆弱で悪に染まりやすい。いつの時代も善人が地獄を見る。世界はそのようになっている。」

「俺はそれを認めない。努力したのに報われないなんて悲しすぎるだろう?」

「尊い志だな。しかし、貴様の手が届く距離は限られている。」

「そこが問題だよなく。俺一人じゃなにも出来ないし、行動出来ない。完全に力不足だ。」

「であればどうする?」

「そんなの決まってる。」

俺一人で無理ならば、言うことは一つ。

「俺に力を貸してくれ、カール大帝」

## 覚悟を示す

「力を貸してくれ、か。貴様は力を得てなにをなす？」

「天の神を打倒する。」

天の神は必ず打倒しないとイケない。出来なければ、これからも地獄を見ることになる。それだけは避ける。

「打倒し、どうする？最早、星喰らいの生物達によって地球の資源は尽きた。打倒したところで、敵が人間になるだけだぞ。」

「そんなのは百も承知だ。だが、なにもせずただじつと待っているのは、どうあれ、カツコ悪い！」

「それ程までに執着する理由は？」

「人間てのは、いずれ死ぬとわかっていながら、自分は死なないと思ひ込むようになってる。アンタもそうだったろ？」

「我が臣下達には迷惑をかけたと思ってる。」

カール大帝は死ぬ間際まで自身の死を信じず、何処に埋葬するかを伝えずに逝ってしまった。そのため、臣下や神官達が頭を悩ました、と俺が読んだ本に書かれていた。

「でもな、アイツらは違う。今日、明日死ぬかもしれないという恐怖と隣り合わせに生きてる。だから、俺は証明したい。今日は悪くても、明日はいい日になる。そんな定番な考え方を！」

「100人中100が知ってる、この定番フレーズをアイツらに定着させたいなく。」

「いいだろう。力を貸そう」

「ほん——」

「ただしッ！」

「!?」

「それ相応の覚悟を示してもらおう。」

「覚悟」



おいおい、まさかこの流れは

「余に負けを認めさせろ。簡単なルールだろう？」

「簡単なルール半端ない難易度。つてのを知ってますか？」

「初耳だなあ。なに、心配するな。余は武具も魔力も使わない。我が肉体のみで戦つてやろう。」

「俺、一般人なんだが!？」

サーヴァントの肉体は優に人間の身体能力を超越している。ある最弱サーヴァント以外は、だがな。

「であれば、余の攻撃はカウンターのみにしてやろう。それで文句はないな。」

「一撃でも喰らえば即死、か。まあ、そんなぐらいのハンデはいつも通りだな。」

最近相手は優位な状況で勝ってきたんだ。これぐらいは楽勝だな。ははっ。大丈夫かな、これ。

「いつでも始めるがいい。」

「それじゃあ。遠慮、なくッ!!」

足に力を込め、地を蹴る。瞬く間にカール大帝との距離を詰め、俺自身にカウンターがこない位置から刀を振るう。

「甘いつー!」

「ッ——、なっ?!」

一撃目で刀の側面を叩き、軌道を反らした。そして、距離を詰められ、二撃目が顔面に向けて放たれる。それを紙一重で躲し、距離を取るため後ろへとバックステップする。

「あつぶねえな。」

「今のを避けるとは。殺す気だったのだがな。」

今のがカール大帝の現段階での最高スピードと考えていいだろう。

今のままでは確実に殺られる。

作戦を変えるか。

「フツッ！」

「むッ。これは。」

先程の直に首を取りにくる一撃ではなく、相手の防御を崩すような一撃に変化した。

「なるほど。そうくるか。」

二撃目に對して構えていると、予想に反し奴は徹底を選んだ。

この戦い方を知っている。生前、我が手で降した者の戦い方に似ている。いや、それ以上のものだ。

「貴様、サクソン人の英雄ヴィドウキントを知っているな？」

「さあ？」

「しらを切るつもりか。フツッ。それも戦略のうちということか」

攻撃したかと思えば、予想出来ない所で撤退する。勇敢であると同時に優れた頭脳を持つことで可能になる戦闘方法。

本来ならば追撃する場面で退避する。本来ならば退避する場面で追撃する。正に神出鬼没だ。

「その勇気と賢明さは讃えよう。」

「ハッ！」

「だが——」

「——ッ!?!」

繰り返すに六回。刀は側面を叩くとすぐ折れる。例え、鍛えた者が一を生み出すものでもそれは変わらない。

「刀は保たなかったようだな？」

「まだまだあ!!」

「なっ——!?!」

折れて飛び散った破片を瞬時に掴み、我が首へと迫る。

「ぐう!!」

「うおおおおお!!!」

両腕を重ね、首を守る。だが、勢いは落ちない。このままでは腕を貫き首に刺さるだろう。

「ぬう。」

「あがつ——！」

空いている脚を使い、無防備な腹を蹴り上げる。

「っ」

ポタポタと血の雫が落ちる音がする。

今の攻防で両者共に負傷した。あやつは破片によって右手が、余は防衛した右腕が。最早、双方使い物にならない。

「さあ、続けようぜ。王様あ。」

「よい。負けを認めよう。」

「はあ？」

え、今なんて？俺の聞き間違いでなければ負けを認める、ってこのままではどちらかが死ぬまで続くだろう。余はそれを避けた。我が身が朽ちるとこれ以降召喚されることはなくなる。」

「アンタ、分霊とかじゃないのか？」

「いや。此処にいる余が真正銘本物のカール大帝である。」

「マジか。」

あつぶねえ。相打ち覚悟で挑んでたんだけど。だってさあ、目の前にいるのが本体とは思わないじゃん？

「それでは、お望み通り力を貸してやる。それ」

「うおっ。んっ？」

眩い光の塊が投げられ、俺の体に入っていった。

「一部のみであるが、貴様の助けになるだろう。」

「おおく！ありがとうございますっ！」

よっしゃあ！これで天の神打倒に近づいた！

「一発限りだ。我が王剣の輝きを再現するのは」

「一発限り。全てがかかってんな。」

打つのはもちろん、天の神にだが。絶対に当たるって時を見逃さな

いようにしたいと。

「そして忘れるな。勝利とは永遠のものでなく、一時の状態を表すものである。肝に銘じておけ」

「わかつてますよ。」

果たして俺は復活出来るのかっていう疑問が出てくるが、今は無視しておこう。

「それで？誰を娶るのだ？」

「はい？」

「娶る？誰を？」

「子とは良いものだ。貴様も一人二人拵えないか。」

「だから、アンタはなにを言ってるんだ。」

先程までの偉大な皇帝はどこにいったんだ？

「あの中で貴様が好んでいる者は？」

「——ぶふっー！ゴホツゴホツ。」

親戚のおじさんみたいなこと言いやがって……この親バカは。

「どうなのだ？」

「アイツらは友達だ。それ以上もそれ以下もあるもんか。」

「ふうむ。まあ、良い。いずれわかることだ。」

そもそも俺が生きてる保証なんてないしな。

「それでは下がれ。御影 士郎が貴様を待っているぞ。あやつと協力して天の神を打倒するがいい。」

「当然だ。」

天の神は必ず仕留める。例え、それで俺が死ぬとしてもだ。

「世界の導きが汝の背中を押すことを祈る。」

カール大帝に背を向け、来た道に戻る。そして、扉を開け外に——

「おつ、無事に帰ってこれたみたいだな。」

「お陰様でな。」

あの刀がなければ普通に負けていた。俺が殴ったところで致命傷にはならなかっただろう。

「それじゃ、天の神打倒の作戦を伝える。」

「つと、その前に俺から言うことが一つ」

「なんだ？」

「全力で放てるのは一発のみだ。」

「なあに、一発あれば問題ねえ。一瞬で片がつく。」

一気に畳み掛けるってことか。まあ、それが一番可能性としてはデカイな。

「アンタの宝具で天の神の目を惹きつけてくれ。そこで、俺が究極の一を振るう。」

「作戦決行は？」

「神樹の結界がなくなった瞬間だ。この時であれば、天の神は姿を表す。」

「結界がなくなるのはいつだ？」

「この一年間で確実になくなる。それまで準備しといてくれ。」

「了解した。所で、俺って復活出来るの？」

「出来る。神樹の苗木を一本使うことになるが、しょうがない。必要経費だ。」

「苗木。」

乃木 若葉との会話中に出た二本のナニかのことか？

「わかるように言くと、魔力の塊のようなものだ。三百年で二本しか出来なかつたが、その分、凄い魔力量を秘めている。」

「令呪みたいなものか。」

「れいじゆ。まっ、多分そんな感じだ。あ、復活後は神樹にパスを通して貰いな。触れるだけでいい。」

「わかつてる。」

一度触った時にパスが通ったのか。まあ、なんかと繋がった感触は

あつたしな。

「それじゃあ、これで話しは終わりだ。今から、アンタを元の世界に戻す。」

「おう。」

「何処に出るかはわからない。現世に戻ったらすぐさま神樹に向かえ。」

「――御影」

「なんだ？」

「絶対に打ち倒すぞ。」

「ああ。当然だ」

例え、倒した先が地獄だとしても。明るい未来を切り拓いて、そこで俺は死ぬ。それまで常に前進して行こう。

それが、俺みたいなのしようもない先達に出来ることだ。

## 目一杯の花束を貴方に 凱旋

あの戦いから一ヶ月が経った。今だ、捜索は続けられているが一つもアイツに繋がる情報は出ていない。

友奈は一週間後に無事目を覚まし、リハビリを経て完全復帰を果たした。それでも、シャルは戻って来なかった。

勇者部に先代勇者が加わった。それでも、シャルは戻って来ない。

「にや〜」

「ダメよ〜、さつき食べたばかりでしょ」

私に預けてくれた、シャルの大切な家族兼癒やし枠のクロが足に頬擦りしてくる。餌を求めるときの合図だが、心を鉄にしてなんとか堪える。

「そろそろ買い足さないといけないかな〜」

シャルが持つてきた餌の底が見え始めている。毎日、メモに書かれていた適量を食べさせていたから長持ちはしたが、流石に一ヶ月を過ぎると不味くなってくる。

「にやっ」

「あら、どうしたの?」

ずっと擦り寄っていたが、突如として玄関の方へと走っていった。いつもは玄関に近づきすらしないのに、玄関になにかあるのかしら?」

いつもはしない行動に不思議に思い、クロの後を追いかけていく。

「にや〜、にや〜」

「?」

懸命に玄関へと鳴き始めた。

「誰かいるの?」

「にや〜、にや〜」

猫が玄関に鳴く理由　もしかして！

「わっ！」

玄関をゆっくりと開けると、クロが隙間を通り外へと走り出す。

「ハハっ、元気そうだな。おっと、髪を引っ張らないでくれよ」

「っ！」

この声　くっつ！

「久しぶりだな、風。むっ、些か細くなったか？すっかり朝昼晩食べているか？」

「——っ、朝昼晩うどんよっ！女子力高めるためにね！」

シャルだ　よく目にする制服姿のシャルだ。雰囲気はフワツとしたものからキリツとしたもの変わっているが、それ以外はシャルのまんまだ。

でも、何故だろうか　よく顔が見えない。なんだか、視界がぼやける。

「栄養バランスを考えるのも女子力のうちだぞ。仕方ない、俺の料理を振る舞ってやろう。」

「てか、アンタは今まで何処にいたのよ。」

「イメチェンをな　随分と遠い所まで行つたよ。」

「イメチェンく？どつか変わった？」

シャルの爪先から頭まで見るが、視界がぼやけていて何処が変わったかわからない。

「そのように泣いていてはわからないだろう。これで拭くといい。」

「泣いてなんかないわよ　あんがと」

差し伸べされたハンカチを受け取り、目元の汗を拭き取る。ぼやけがなくなつた目でシャルを見る。

「紅い　カラコン？」

「そのような物だと思ってくれていい。」

瞳が紅く染まっている。それに、髪の毛が少し伸びた

「カラコンに一ヶ月かけたの？」

「ああ。超高性能のカラコンだな。服を透過してくれる。」



「冗談よね？」

「冗談だ。だから、俺の目を潰そうと準備するのは止せ。」  
ピースの形にした手を解く。

「さて、上がっていいか？」

「ん、あく、いいわよ。」

ずっと立ち話するのもあれだし、家に上げる。クロはシャルの頭に  
乗っかっている。

「それでは、作ろうか。樹はいるか？」

「樹は友達とカラオケに行ったわよ。そろそろ帰ってくるんじゃない  
かしら。」

そんな会話をしてるうちにテキパキと冷蔵庫の中身を確認し、料理  
の準備をしていく。

「ふむ。回鍋肉でも作るか。」

「ここからではなにも聞こえないが、なにかブツブツと喋っている。

「ごめんね、シャル。」

「なにがだ？」

「なにかを炒めながら、こちらを見つめてくる。

「いや、その、いろいろと酷いことしたじゃない？」

「覚えていないな。」

大きじと小さじを測りながら、見え見えの嘘をつく。

「頭から一杯血が出て、それで。」

「あれは俺がすっ転んで負傷した傷だ。思い出すだけでも屈辱であ  
る。」

更に具材を追加し、香ばしい匂いがしてきた。

「アタシが突っ走ったせいで、っ、アンタは。」

「泣くな、誇れ。」

皿に盛り付けて私の隣に置く。食欲をそそる匂いを漂わせている。

「風、お前がとった行動は間違いかもしれない。だが、俺はお前の行動  
を讚え、賞賛しよう。あの行動は蛮勇などではなく、勇敢なる行動だ  
とな。」

「~~~~っ。」

シャルに抱きつきながら声を殺し、涙を流す。赤子をあやすように優しく背中を擦る手が、本当にシャルが帰ってきたことを証明している。

「さあ、冷めてしまう前に——」

パシヤ

何処からかシャッター音が鳴った。シャルと一緒に玄関の方へと顔を向ける。

「あっ」

「樹、帰っていたのか。樹も食べるだろう、回鍋肉」

樹の手にはスマホが握られている。そして、さっきのシャッター音

「樹！撮った写真を消しなさい！」

「もうグループにあげちゃった」

「樹、声が治ったのか？」

さっきまで私の近くにいたシャルがいつの間にか樹との距離を縮め問いかける。樹とシャルの身長差は大きいため、樹にとっては結構な怖さがあるだろう。

「う、うん。」

「他の皆もか？」

「そうよ。あの戦いの後、みんなの捧げた体に戻ってきたの。多分、ア  
ンタが言った神様のきまぐれ、じゃないかしら」

「そうか。それは良かった。本当に良かった。」

／ピンポーン／／ピンポーン／／ピンポーン／

呼び鈴が鬼のように押される。

「俺が出よう。」

樹から離れ、玄関へと向かう。そして、呼び鈴が鳴り止まない扉を開ける。

「どちら様——うおっ、と。」

扉が開いた瞬間、誰かがシャルに抱きつく。というよりはしがみついている。シャルの背中に足をクロスさせている。

あの金髪の髪は園子だろう。

「まだ、チャットしてから一分も経ってないのに……」  
「ほんっと、末恐ろしいわね。」

どのような手段でここに来たのかはわからない。きつと、一生わかんないだろう。いや、知らない方が幸せの類の手段でここに来たんだと思う。

「」

「園子？」

シャルの肩に顔を埋めたままにも喋らない。微かに荒い呼吸音が聞こえる程度だろうか。

「回鍋肉、食べよっか」

「ならば、降りてくれ」

「このまま運んで欲しいな」

「しようがないな。」

しがみついたままの状態でリビングまで運ばれ、椅子に降ろされる。

「うわあ〜♪一杯作ったね〜」

「風が食べる量を想定して作ったからな。」

「アタシ一人じゃ、こんな量食べきれないわよ」

「でも、うどんだったら？」

「うどんは女子力だからいくらでも食べれるわよ。」

うどんは食べた瞬間、女子力に還元されるから胃には貯まんないのよ。そして、私の女子力は更に増加する。これぞ完璧なシステムね。

「でも、これだけじゃ足りないかもね。」

「そうか？ 四人分ならこれで足りると思うが。」

「これから、勇者部の皆が来ると思うよ。」

「今日は誰かの記念日か？」

「うんっ。シャルが戻ってきた記念日〜♪」

「ハハっ、それだけのことで皆が集まる訳——」

／ピンポン／／ピンポン／／ピンポン／

「」

「ね？」

・この後、園子の言うとおりで吠吠家に勇者部の面々が集結し、夕暮れ時まで喋り明かしたのは語るまでない。  
・その間、シャルはずっとキッチンに立ち様々な料理を振る舞った。  
・無事、冷蔵庫の中身が空になりました。

.....

讃州中学勇者部（8）

樹：（風とシャルが抱き合ってる写真）

園子：すぐ行くね

東郷：向かうわ

銀：いろいろ聞きたいけど、まずはそっちに行くわ

友奈：わあく♪美味しそうな回鍋肉だね！

夏凜：そこっ!?!もっと右見なさい！

友奈：右？あ、シャルくんだ！

夏凜：はあく、私も行くから待ってなさいよ

友奈：お菓子買ってから行くね

## 愉快的同居人

食事会も日が暮れ始めたため解散となった。クロは頭に乗り、眠っているためそのまま運んでいる。

そして、帰り道。なのだが。

「友奈と東郷はわかる。だが、園子と銀は何故こちらに？」

「だって、銀ちゃんとそのちゃんは——」

「しっ—」

なにかあるのか？俺に隠すようなこと。いや、ただたんに家と同じ方面にあるだけだろな。

「アタシ達もこっちなんだよな—」

「そうよ。銀とそのっちは最近こっちに引越してきたの」

「荷物の持ち運びがまだ終わってないけどね」

「園子は荷物が多いんだよ」

「取捨選択はしっかりとな」

「全部必要なんだ」

多分、サンチョとかサンチョとかサンチョのことだろう。

「それじゃあ、私はここまでね」

「そうか。また明日」

「ええ。急になくならないでね」

「耳が痛い。」

「そうだぞ、せめて一言欲しかったな」

「俺も予想外だったのだ。すっ転んで怪我をしたのがキツかったな。」

そして、多量の出血で魔力消費をしたせいでジュワューズ一発で退去が始まってしまった。そっからは根性で耐えていたが、流石に限界だったな。

「地面ツルツルだった？」

「おう。皆も気をつけるといい、大橋付近の地面はツルツルだ。行くときは滑らない靴を履くといい」

「そうね。注意しなくちゃ」

「大橋付近に行く機会はないかな。」

「大橋って。」

俺のせいで大橋付近が魔境になってる気がするが、気にしないでおこう。

「ちよつと話し過ぎたわね。」

「ハハっ、すまない。風邪を引かないようにな」

「シャルル君もね」

「じゃあねー、わっしー♪」

「またね、須美」

「東郷さん、また明日〜♪」

「ええ、またね。」

そう言い戸を開け、家へと入っていく。

「それじゃあ、私も。またね〜♪」

「じゃあねー、ゆーゆ♪」

「寝坊しないようにな、友奈」

「早寝早起きだぞ。」

「もちろんっ。」

友奈もまた自身の家に入っていく。残るは俺と園子と銀のみになつた。

「それじゃあ、ミノさんと私も〜」

「お先失礼するぞ」

「あぁん？」

待て、今入っていった家って俺んちなんだけどな。あつれ〜？どうなっている。俺がいない間に買取されたんかな。

「いやいやふうむ。」

「まあ、入るしかないか。」

「」

扉を開け、一歩を出す。

「おかえり〜！」

「」

頭を抱える。どうしてこうなった

「ほら、早く入らないと」

「ここ、俺の家だよな」

「そうだよ」

「何故、園子と銀が？」

眠っているクロをそつと降ろし、靴を脱ぎ家にかかる。

「居候、つて形になるんかな？」

「引越し先考えるのが大変だったからね。それに、シャルがいな  
い間掃除とかしないといけなかったから」

「疑問形で締めくくるな」

掃除してくれるのはありがたいんだけど、せめて俺に確認を取って  
欲しかったな。

「まあまあ、部屋はまだ二つも余ってるんだし」

「そういう問題ではなく、お前達は自身の身を案じてくれ」

「なんで？」

「俺、男だからな？ 真正正銘の男だからな？」

俺を男だと認識してない？ ちよつとそれは心配なんだけど。

「だって、ほら、シャルはヘタレだし」

「おいコラ。放り出してやろうか」

「違うよ、ミノさん。シャルは眺めるのが好きなタイプなんよ」

「なんだ、そのタイプは？」

眺めるのが好きなタイプとか聞いたことないが？ てかナニを眺め  
るんだよ。

「まあ、いいか。」

家族が増えたと思えばいいや。クロも構ってくれるのが増えて嬉  
しいだらうしな。

「あ、まだ私の荷物が届ききつてないんだよね」

「どれくらいだ？」

「部屋一個分くらい」

「減らせ」

部屋一個分って、どれだけのサンチヨを見ればいいんだ。そもそも

もサンチョとはなんだ？

「え、でも」

「でももへったくれもあるものか。今度、いるものといらないものを  
区別しに行くぞ」

「一回、あつちに帰るってこと？」

「そうなるな。丁度、俺も忘れ物を取りに行きたいと思つてたところ  
だ。」

「それじゃあ、アタシもお供しようかな。」

「それならば、東郷にも声をかけておこう。」

「おつ、いいね！」

「神樹館同窓会、だ〜！」

銀も来るのであれば、東郷に伝えなくとも来るだろう。

神樹館、か。懐かしい響きだな。釣りでもしようか。

。 。 。



男女比率おかしくない？

俺達勇者部は土日を利用して海に来てます。しかも、旅館付きの。まあ、どっちも大赦が用意したヤツなんだけどな。

「よし、ここらでいいだろう。」

「うん、バッチシだよ〜！」

パラソルを砂浜に刺し、二つの椅子、そして椅子に囲まれる形で小さなテーブルを設置する。

「でっかいパラソルね。」

「まつ、今日はアタシ達の貸し切りなんだし問題ないでしょ」

「いやあく〜！海を独り占めできるなんて最高ですな〜！」

「早速泳ぎに行こうよ〜！」

「駄目よ、友奈ちゃん。しっかり体を解さなきゃ。だから、こっちに」

「本当に体を解すだけですよね!？」

各自持参の水着を着ることになったのだが、まあ、当然俺が持つてるわけなく。昨日、学校帰りに急いで買ったのを覚えている。

黒色のサーフ型パンツと表が白色、裏が黒色のラッシュガードを着ている。他の皆も水着を着ているのだが、正直言つてヤバい。砂浜にずっと埋まっていいだろうか。

「さあ、とことん遊ぶか。」

「ちよいちよい」

「むっ、どうした？ゴーグルを忘れたか？」

ゴーグルを忘れるのは重大事だぞ。海水が目に入ると大ダメージだからな。特に俺は

「私の姿に一言あるでしょ?」

「ん、ああ。そうだな、よく似合っているぞ。」

「でしょ〜♪」

たつたの一言で上機嫌になれるとは、羨ましいな。俺でなくとも、?

友奈も褒めてくれるだろうに。

「じゃじゃーん♪」

何故か、今度は園子が目の前で水着を見せびらかすように一回転した。所々についているフリルが揺れ動くのがわかる。

「園子も似合っているぞ。」

「えへへ♪」

園子についてはいつものことなので慣れてはいるが、水着は流石に慣れないな。

● 男手確保のために、御影でもあつから連れて来ればよかった。いや、無理なのはわかつているが、そう思う程、男女比率がおかしい。

「さあ、シャルル君！私にも！」

「すまないが、直視出来ないな。」

● ある一点のせいで。

「須美は発育が良すぎるもんな」

「」

「大丈夫よ、樹。アンタはこつからこつから！」

「一体、私達となにが違うのかしら。サプリ？」

「構わないわ、シャルル君。飽きるまで見ていいのよ？」

「俺が構う。東郷はこれでも羽織ってくれ」

俺が着ていたラツシユガードを裏返し東郷に渡す。正直言つて、今の肉体には毒でしかない。

誤解しないでほしい。成長することが悪だとは言っていない。ただ、ちよつと俺が社会的に死ぬ可能性があるから、過剰に防御しているだけだ。

「これはこれで」

「ムキムキだ〜！」

「触っていい〜？」

「アンタ、どうやって鍛えてんのよ？」

「いろいろだ。そして、園子はペタペタするな。許可は出していないぞ。」

「ええ〜」

ちよつとくすぐつたい。

「さて、気を取り直して泳ぐか」

「競争する？」

「いいだろう。」

「あの浮いているボールに触れて、ここに帰ってくる。それでいいわね？」

「了解した。」

圧倒的なスピードの違いを見せてやろう。

「ふふつ、この私を差し置いて競争なんて私も参加するわ。」

「最初っからそう言え」

危うく出発するところだったぞ。

「友奈、合図を頼む。」

「いいよ。それじゃあ——」

夏凜、風、俺で横に並び構える。後は友奈の合図を待つだけ。

「もらったあ!!」

「あ、ちよ！」

「——スタート!!」

「ふっ！」

「——、もう！」

風先輩はフライングするが、そのまま続行。夏凜は不服そうだが、海に飛び込み風先輩を追う。

!!

「ハア・ハア」

「フライング、したって、のに、最下位、ってなによ——」

「勝利である！」

荒い呼吸を繰り返し、砂浜に横たわっている二人を見ながら勝鬨を上げる。

俺が一位、夏凜が二位、フライング先輩が三位です。なんでだろうね？

「罰として埋まってなさい！」

「ちよつとー!!」

「フハハッ!!」

埋まってる人を見るのは面白いな。頭だけ出して吠えるのが、更に面白さを引き立てている。

「アンタもウザいから埋まってなさい！」

「おーい！俺は完全なとぼっちりだろ!!」

瞬時に立っている場所の下を掘られ、落とされ、砂をかけられ埋められてしまった。とんでもない早業だった。

「ちよつとアンタ、あのブワーツとするヤツで砂を弾きなさいよ。」

「風、それをするとうなるかわかるか？」

「どうなるのよ？」

「近くにいる者の目が死ぬ。」

「止めなさい。」

この距離だ。吹き飛ばした砂が確実に目に入るだろう。想像を絶する痛みになると思う。

「銀ちやーん！一緒に城作ろー！」

「お、いいね！とびっきりの作ろう！」

「おいおい。城作る前に――、っておい！目の前に城を建てようとするなー！」

おもむろに土を盛り上げ、形を整えていく。無視しているのか、またまた見えてないだけなのか。きつと、前者だろう。

「樹ー！お姉ちゃんがピンチよー！」

「いいね！、いっつん♪私の専属マッサージ師にならない？」

「遠慮しときます。」

ヤバい。誰一人として味方がいない！

「うふふ。お困りのようね。」

「この声。まさか!？」

「東郷ー！さっすが、頼れるエンジニアだわ！」

俺がさつき渡したラツシユガードを着て、なんとか直視出来るようになっている。

「つと、その前にシャルル君さあ！」

「、綺麗だぞ、東郷」

「はうっ——！」

「東郷——!!!」

感極まって気絶しちゃった。どうしよ、コレ。

「気絶させたら意味ないでしょーがっ！」

「気絶させる気はなかったのだがな。」

「東郷よ！あの！東郷なのよ!!アンタが褒めたらこうなるでしょ！」

「ハハっ」

ちよつと軽くジョブみたいに褒めたんだけどなく不思議だね。

「誰かく!!!」

「たまにはこういうのも良いか。」

この後、城作りを終えた友奈と銀に助けられました。それが、約二時間後の出来事でした。東郷はその一時間後に目を覚ましたとさ。

日が暮れ始めたため、砂浜から撤収し今日泊まる旅館に来ていた。しかも、この旅館は温泉付き。入らないという選択肢はない。

「ふう〜」

久方ぶりに温泉に入ったが、やはり気持ちいいな。全身に染み渡る。

あ、そうだ。

「勇士達よ」

十二勇士達の霊体化を解き、出現させる。

「さあ、勇士達よ。疲れを存分に——おおっと、すまない。ブラダマ

ンテはあの壁を越えていくといい。」

やべ、ブラダマンテは女湯だったな。すつと出してしまった。

「そちらにブラダマンテ、俺の精霊が行くぞ！」

くりようか〜い！

「良し。おい、アストルフォ。何処に行こうとしている？」

そんなバレないように行くのは逆に怪しいぞ。

「貴様は男だろう。静かに浸っている」

・アストルフォを掴み、湯に無理矢理浸からせる。

「」

・温泉はいいな。一人でもまた来たいぐらいだ。あと二十分程のんびりしていこう。

湯から上がり、用意されている浴衣に袖を通し料理が用意されている部屋に向かう。

「失礼する。」

「やつと、ご到着したわね」

「長風呂だなく」

「久方ぶりの温泉であつたからな、ついな。」

「それじゃあ食べよう！」

「ゆ〜ゆは蟹さんが好きだね〜」

「どれも美味しそうですねっ。」

長机の上には様々な海鮮料理が置かれている。食いしん坊筆頭の友奈は早く食べたいのか目をキラキラとしてウズウズしている。

「はい、それじゃあ手を合わせてー！」

「了解ですっ！」

すつと手を合わせる。

「」「」「いただきまーすっ！」「」

「うんっ、美味しい！」

友奈は一目散に箸を握り、蟹さんを食べる。シンプルな感想だが、全てがアレに詰まっている。

「俺のも食べるといい」

「さっ、友奈ちゃん。」

「えっ？」

「アンタらは友奈は甘やかさない！」

くっ、風先輩め。俺と東郷の友奈への餌付——お裾分けを邪魔しやがって。

「シャル、シャル。あ〜ん♪」

「はいはい。」

「ん〜♪」

慣れてしまった俺が怖い、これに関しちや〜しようがないな。毎日毎日ねだってくるもん。

「アンタは自分で食べなさいよ」

「あ、にぼっしーも〜？」

「違うわよ！」

「園子は家でもあんな感じだからなー」

「え、ええ〜」

「シャルが甘やかしすぎなんじゃない？」

「そんなことはないが」

蟹さんを箸で摘み、園子の口に運ぶ。

「ん〜♪」

「無意識つてのが、一番怖いわね」

「だね〜」

「それじゃあ、私がシャルル君に食べさせるわね。」

「それは止せ」

それは絵面的に不味いことになる。

「遠慮しないのでいいのよ。さっ、あ〜ん」

「あむっ。ふむ、美味しいな」

「ふふ。それじゃあ、これも」

「もう勘弁してくれ。」

「想像以上に恥ずかしい。これ以上すると俺が爆発四散してしまう。」

「シャル先輩が顔真っ赤にするの珍しいですね」

「」

「よしてきた！」

「園子と銀は写真を撮るな！」

顔を手で隠し、背を向ける。だが、シヤダー音は鳴り止まない。いつもの東郷みたいなことし出しやがった。

夕食も終わり、後は寝るのみになった。にも関わらず、俺は勇者部の面々がいる場所にいた。

「まさか、普通に寝れるとは思ってないわよね？」

「思ってる。」

「電気消すわよー」

「明日起きれないよ、お姉ちゃん？」

「————。」

「いいわよ、友奈ちゃん。」

どうやら、俺だけでなく全員普通に寝れると思ってるな。てか友奈と園子はもうウトウトしている。そして、小声でなにか呟きながらシヤダーを押す東郷。なかなか力オスなんだが？

「ちよとー！こういう日は恋バナするのが定石でしょー！」

「ふみゃー！」

「——ツッ！」

「東郷先輩!？」

「須美。」

「ソイツはなにもしなくても復活するからスルーでいいわよ。」  
「zzzz、zzzz。」



友奈の可愛さに東郷がダウンしたか。そして、園子は変わらず寝ている。そして、恋バナか。

「それでは、俺は自室に戻——ッ！」

立ち上がるうとすると、誰かの手によって倒される。

「これで戻れないね〜」

「園子か。あまり驚かさないでくれ。そして、俺の上から退いてくれるか?」

「無理かな〜」

先程まで寝ていた園子が突如として俺を倒し馬乗りになる。正直言ってホラーだ。

「吐くんだ!どんな女の子がタイプなのか!」

「逃げ場はないぞ!」

銀と風先輩がどつかの探偵系のドラマのセリフを言いながら詰め寄ってくる。

「なにやってんのよ!」

「確かにシャルクんの好きな人、知りたいな」

「——!」

「わっ!」

「あ、起きた。」

友奈の言葉に反応したのか凄い勢いで復活する。それに驚いたのか樹が腰を抜かす。

「吐かないなら、こちよこちよしちやおうかな〜?」

それは不味い。てかなんで、園子は俺の弱点をこんな知ってるんだ?」

はあ。しょうがない。アレをやるか。

「聖なる哉、か。」

魔力放出(光)を発動し、全員の目を一時的によく見えないようにする。

「なにを——? きゃー!」

「眩しっ!」

「この光は」

。。

「園子、しっかりと抑えなさい。」

「わかってるけど、もういないね。」

目がよく見えるようになった頃には、既にシャルルマーニュの姿はどこにもなかった。

「逃げ足はやっ！」

「今の輝き・懐かしいわね。」

「だな。シャルの転校してきた日を思い出すな。」

「ん〜？こんな輝きあったけ？」

「そのつちは寝てたでしょ？」

「そうかも〜」

「なにになに〜？神樹館の思い出？」

「聞きたい？」

「はいっ。凄く気になります！」

「それじゃあ、ちよつと話そうか」

神樹館での学び、遊び、御役目を果たしていった日々。最初はシートンと名を偽り、戦っていた英雄の話。そして、驚きの正体。

一日なければ、満足に語れないだろう。そんな、温かくも辛かった思い出。

一人、月の光によって照らされる海を眺める。所々キラキラと光輝いている。

「夜遅くに誰だ？」

「人の気配を感じ、戸の向こう側にいる誰かに声をかける。」

「シャルル君は鋭いわね」

「東郷か、どうした？」

戸を開け、入ってきたのは友奈大好きエンジニアのようだ。

「ちよつと話をと思つて」

「そうか。それではそこに座れ。いい景色だぞ」

「二つのテラス席に座り、先程まで眺めていた景色を一緒に一望する。」

「綺麗ね」

「ああ。」

「やはり、どれだけ見ても綺麗だと感じれる。夜明けの光景も見ようと思う。」

「シャルル君は」

「」

「私に会ったとき、どんな気持ちだった？」

「東郷 美森それとも鷺尾 須美、どちらだ？」

「どっちもかしら」

「ふむ」

「どんな気持ち、いろいろと思うことはあるが、一言にまとめとくか。」

「須美は規則に准じた者だと思つた。別の言葉で表すならば、堅苦しいイメージを受けたな。とはいえ、今では俺の方が堅苦しくなつたようだが」

「堅苦しい、確かに融通が効かなかつたものね。それで、東郷 美森については」

「懐かしいな。須美との出会いの方が古い出来事なのに、東郷との出会いの方が懐かしく感じる。」

「やはり根本は変わらない。周りの人々に影響され、変質しようが俺がよく知る須美と大差なかつた。」

「シャルル君的にはどっちがいい？」

「どちらでも構わない。いずれも鷺尾 須美であり、東郷 美森だ。そこに差はあるだろうが、俺にとっては同一人物である。」

「どちらが良いかとか聞かれても、甲乙付けがたいだろ。てか付ける必要がない。」

「忘れられて悲しかった」

「悲しかったな。銀と園子も同じ気持ちだったろう。そうであろう？」

戸に耳をくつつけて盗み聞きしている二人に問いかける。

「やつほく」

「ありやりや、ばれちやってたか」

「銀、そのつち私っ！」

盗み聞きを止め、戸を開け入室してくる。園子はいつも通りに銀は少し反省しながら

東郷は涙を浮かべながら二人を見る。

「あー、もう泣くなつて大丈夫だから」

「今こうして、話せてるだけでも嬉しいんだよ」

「でも、私、皆のことを忘れて」

「でも思い出した。それだけで充分だ。さあ、今日は寝ろ。明日には帰らないといけないんだからな。」

記憶が戻って、今こうやって話せるだけ奇跡ってもんだ。それだけで満ち足りている。

「ここで寝る。」

「駄——」

「おつ、いいね！四人で寝よう、寝よう。」

「だから、駄——」

「おやすみく Z z z z、Z z z z。」

抗議する暇もなく、一瞬で夢の中に入りやがった。はあ、諦めるか。

「皆で寝るならもう少し詰めてくれ」

「ほら、園子。もつとそつちに」

「あーい——」

「失礼します。」

園子、銀、東郷、俺の順で床につく。

「」

ほとんど布団が被れてない。まあ、俺は寒くても眠れるから大丈夫なのだが。隣の女性が寝ているのは心臓に悪い。本当に。

「Z z z z、Z z z z。」  
「ふふっ。」  
「本当にこの三人は」

.....

## いつかの景色

海で遊んだ日から一週間が経過したある土曜日。今日は風先輩に無理を言って休みを貰い、元々暮らしていた町に戻ってきた。

「いやあー！久しぶりに帰ってきたな！」

「そうだな。一ヶ月ぶりぐらいだろうか？」

「。」

「どうしたのわっし〜？」

「何処か痛いのか？」

「もしかして、腹壊したか？」

目を大きく開け、なにも喋らずに石像になっている東郷に三人一緒に顔を覗く。俺達に気づいたのか、ハツとしたような顔をし、首を凄いい勢いで横に振る。

「いいえ、なんでもないわ。さ、そのつちの家に行きましょう」

「そうするとしよう。」

「だね。」

「いや、どうや——ッ！」

園子がそう言った瞬間、目の前に黒いリズムジンを停まる。

「乗って乗って〜」

「うむ。」

「失礼します。」

「そういや、園子はこんな感じだったわ。すっかり忘れてた。」

全員が乗り込むと、扉が閉められ発進する。行き先は乃木家だろう。

「なにする〜？」

「なにがあるの〜？」

「トランプと〜、オセロだよ〜。」

不思議なチョイスだな。てか、なんでそんな物がリズムジンに置いてんだよ。もっと〜。なんか高そうな物が置いてるイメージがある

んだけど。名前は知らない。

「ここは皆が出来るトランプ一択でしょ」

「将棋はないの?」

「ん、ないかな。この二つだけ」

「東郷、将棋の発祥は北インドだぞ。決して日本発祥の物ではない。」  
「そうなの!」

「まあ、漢字が使われてるからそう思うだろうが、北インド発祥の物だ。俺も最初は耳を疑った。」

「北インドってどこ?」

「西暦の時代にあつた海外の国、だと思ふんよ。」

「ん、わからん。」

インドすらもかちよつと悲しいな。カレー美味しかったのに。

...

あれから三十分程経った。俺達は何事もなく乃木家に到着した。

そして、早速分別を始めたのだが

「じゃじゃくん♪」

「前より増えてる気が」

「駄目だ。服は最低でもクローゼットに納まる量にしてくれ」

ただでさえだだっ広いこの部屋が一杯になる服の量なんだぞ。どうやって俺ん家に収納すんだよ。

「おねが〜い?」

「上目遣いしても駄目なものは駄目だ。よく着る服だけを持ってきてくれ。」

俺が許可すれば、余っている二つの部屋と俺の部屋が潰れることになる。それだけは避けなければ。

「さあ、銀!」

「嫌だからなっ!」

「ミノさんの服も持って行っちゃおう！」

「最初に来たときもこんなのがあったな。最終的には銀が拗ねて、須美へと矛先が向いて。何故か倒れて。懐かしいな。」

「須美、今日はそれが目的で来たのではないぞ？」

「えっ。あつ、そうね。」

「どうかしたか？」

いつものように語りかたけただけだが、何かに驚いたのかハツとしたように答える。それだけでなく、銀と園子も俺の顔を見てなにか言いたげな顔をしている。

「今、須美って言ってたぞ」

「うんうん。」

「!いや、すまない。つい口に出てしまった。」

無意識に出ていたようだ。全く見に覚えがない。

ちよつと昔に浸りすぎたな。気をつけないと。

「大丈夫よ、急なことに驚いただけだから。さ、再開しましよ——」

「そうだな。」

「銀の着せ替え会。」

「はあ!？」

「じゃあ、まずはコレ！」

園子の手には真っ赤なドレスが握られている。まるで、舞踏会で着るような服だ。

「そんなの絶対に着ないからな！」

「わっし〜」

「銀、大人しくするのよ。」

東郷が瞬時に銀の後ろに回り込み、逃げられないように両腕をがっちしと捕らえる。

「ぐっ!う〜シャル！」

「銀、何事もチャレンジだ。」

「ん〜!!!」

ジタバタする銀を視界外にし、部屋の外に出る。



あの真つ赤なドレス。銀になら似合うと思うんだよな。それに、いい経験になる。

「ふうむ。」

「そういや、三ノ輪家って、大赦内でどんな位置にいらんのだろ。」

乃木と上里のツートップと聞くが、そこらへん曖昧だ。いや、考える必要はないか。いずれにしろ、大赦には釘を指す予定だし。

「シャルルマーニュ様。少し宜しいでしょうか？」

「要件はなんだ？」

ここに仕える人だろうか。まあ、こんなデカイ家だし、お手伝いさんがいるのも当然だな。

「当主様が貴方様にお会いしたいと申しております。」

「いいだろう。案内してくれ。」

「こちらへ。」

「すみません、上から目線で。勝手になっちゃうんです。」

「こちらです。」

「お手伝いさんの後ろを着いていき約十分。ようやく着いたようだ。」

「」

「ノックを四回。礼儀作法に詳しくないが、この程度は知っている。」

「入ってくれ。」

「失礼する。」

扉を開け、中に入る。圧迫感を感じられない。寧ろ歓迎されているような雰囲気を受ける。

「君がシャルルマーニュ君で合ってるかな？」

「合っている。」

「それは良かった。君とは一度話してみたいと思っていたんだ。」

「話、とは？」

勇者関連か、それとも俺の正体関連か。はたまた、ただの親バカ発

症中。この中のいずれかだな。

「君には園子がお世話になつてゐるね。相手ばかりか、居候までさせてもらつて、本当にありがたいよ。」

「警戒心がないのではないか？」

「ははつ。君に全幅の信頼を寄せているんだろう。」

そんな感じはしないが。まあ、園子だしな。俺が予想できる訳がない。

「そんな君に提案がある。いいかな？」

「聞こう。」

「園子の婚約者になつて欲しいんだ。」

「本人の意思はどうする？」

「園子も君を好いている。よく話すが、内容全てが君についてだ。」

なんだろう。そこまでが園子の計画的犯行そうだな。いや、この件で園子が得することははない。であれば、なにが目的だ。全く思いつかない。

天才の思考を俺のような一般人が読める訳もないか？

「どうだろう？君にとつても悪い話ではないと思う。」

「寸重にお断りしよう。」

「理由を聞こう。」

「園子がよく思つてない可能性がある。故に、この頼みは断るしかあるまい。」

「それじゃあ、しょうがないか。」

園子の事だ。なにか、俺が理解出来ない計画を立ててるに違いない。計画を成功させてやりたい気持ちもあるが、そんなことのために自分を犠牲にする必要はないだろう。

「それでは、俺からも一ついいだろうか？」

「なにかな？私が可能な範囲で叶えるとも」

「明日の正午。剣山にある大赦本部に俺が行く、つと伝えておいてくれ。」

「できる限り人を集めておくよ。」

出る杭は先に埋めておこう。二度と外の空気を吸えないようにな。

「これで話は終わりだな。俺は戻らせてもらおうぞ。」

「すまないね。時間を取らせてもらって」

「お互い様だ。」

大赦にアポが取れたが、園子への疑問が深まるばかりだったな。

どういった要件で婚約の話を持ってこようとしたのか、一度聞いてみよう。

「失礼した。」

「ああ。」

開けられた扉を抜け、来た道を進んでいく。

銀の着せ替え会が続いている可能性があるな。きっと、東郷のことだ。床を血の海にしているだろう。

何故、こうもこの屋敷は広いんだ。

往復二十分だぞ!? 絶対におかしい! 使っていない部屋あんだろ!

まあ、いいや。人ん家に文句言うとか何様だよって話だよな。これは胸の内に秘めておこう。

「戻っ——」

「シャル〜!!」

「おっと」

飛びついてきた銀を受け止める。

やはりというか何というか、うん、やっぱり銀は何でも似合うな。

上が赤のレディス。下がシンプルなジーンズ。多分、園子が着させただろうな。

「原点にして頂点」

「銀、今日から貴方は金よっ!」

二人がなんか意味不明な事を叫んでいるが、ここはスルーしても問題ないだろう。それより、まずは銀だ。

「よく似合っているぞ、銀。その服、貰ってはどうか?」

「うん、そうする。」

顔を上げず、俺の胸あたりに顔を埋めたままそう同意する。どうやら、銀もこの服が気に入ったようだ。

さてと、本題から大分ズレてしまったな。何故、銀の着せ替え会になったのか。俺にもわからない。

「園子、今日中に終わらせるのだろうか？急がなければ、間に合わないぞ。」

「ちよつと余韻に浸らせて〜」

「なんの余韻だ。」

「モジモジ恥ずかしながらも、視線をこっちに送る姿 GOOD!!」  
「なにつ、俺も見なかった。ではなく。」

くそつ。招待を蹴ればよかった。

まあ、東郷が写真撮ってるだろうし、後で送信してもらおう。

「起きなければ、俺が勝手に選ぶぞ。」

「それはそれでアリ。」

「ナシだろ。」

駄目だこのお嬢様。手綱を握れる人を呼ばなければ いや、いないわ。ダメ元で東郷に一回――

「はあく〜」

「」

駄目ですねアレ。完全に自分だけの世界に入ってるソレです。

「ほら、なんか買ってやるから」

完全に小さい子供に言うことだがしょうがない。てか待てよ お嬢様にこんなこと言っても駄目か。

「ん〜、じゃあく〜」

あるのか。頼めばなんでも出てくるだろうに それともあれか？  
メッチャ高級な物でも要求されるのか？

「私との婚約、考えて欲しいな〜」

「!!?」

「盗聴器でもつけてたのか？」

東郷が自分の世界から復帰する。銀もまた体操座りから勢いよく

立ち上がる。まあ、誰であれ婚約なんて言葉が出れば驚くだろうな。

「使用人さんに頼んでおいたんだ〜」

「なるほど」

全員がグルだったか。流石、用意周到だな。

だが、何故だ？俺との婚約になんの価値がある？その一点のみが謎だ。

「もしかして、さっきまでいなかったのって」

「乃木家現当主に会っていただけだ。」

「こっ、こんっ、こんこん！婚約なんて駄目よ！私が許しませんっ！」

「誰目線なんだよ。アタシも断固反対だからな！」

「当然だ。だからこそ断っておいた」

そもそも園子は中学二年生だぞ。人生の墓場に行くには早すぎる。

「シャルは私が嫌い？」

「嫌いなわけないだろう。」

嫌いななら居候なんて許可しないだろ。誰が好き好んで嫌いな奴を家上げるかよ。

「じゃあ、なんで断ったの？」

「こっとういうのは親が決めるものではない。」

カール大帝みたいに娘を嫁に行かせないような、親バカの典型的なタイプはいるがな。

「私はシャルのこと、好きだよ」

嘘、じゃないな。

ここで俺が取れる行動は何個かあるが、無責任なことは言いたくないし、しようがない。

「天の神を打倒してから考えよう。」

「うんっ！」

逃げる。一先ずこの場では答えは出さない。

ああーうん。ヘタレだな。

あれから三時間で包装し、引越し業者に荷物を預けた。運び出し云々は使用人さん達がやってくれるとのことらしい。素直に感謝。

そして、俺達は来たとき同様リムジンに乗り移動していた。

「なんとか収まったな。」

「そうね。あれだけの量を取捨選択するのは大変だったわ。」

「サンチョは五匹だっけ？」

「あと十匹は持っていきたかつたなく」

「止めてくれ」

サンチョのパーカが二着。枕が一個。外用が二個。これだけでも結構場所をとる。それに、服が三十着。ここまで抑えられたことが逆に凄いと思う。

「それで？次は何処に行くんだ？」

「忘れ物を取りに行く。」

行き先は俺が住んでいた元の家。引越した際に持って生き忘れた物だ。 . . .

「忘れ物 . . . そうは言うけど、結局なんなんだよ？」

「西暦勇者の思い出。御影 土郎の勇者御記を置き去りにしていた . . . が、今必要になった。」

あれはただの日記ではなかった。御影 土郎に会ったことで確信した。

なにか俺に伝えたいから、あそこにあつたんだ。俺の家にあつたのは偶然じゃない。誰かが仕組んだか . . . それとも、何かの運命か。

「勇者御記 . . . それってこんな感じ〜？」

「ああ。そんな、感じ . . . ちよつと待て」

園子の手には古ぼけた一冊の本が握られている。その本には勇者御記と書かれている。

一瞬、流れがいつも通りすぎて見逃す所だったが、何故園子は勇者御記を持っている？

「そのつちのも勇者御記。これも御影。士郎さんのなの？」  
「いや。コレは家にあつたのだから。多分、私のご先祖様のかな。」

「乃木 若葉のか。」

「アタシん家も探せばあるかな。」

乃木 若葉 御影と話していた青い鳥になっていた人か。

「読む？」

「後で読もう。もうそろそろ着いてしまうからな。」

雑談をしているうちに俺の家が近い。ささつと要件を済ませて帰ろう。

無事、旧俺ん家に到着した。当然だが、なにも変わりはない。

「いや、久しぶりだな。シャルの家に来るの」

「お料理教室と祝勝会、だったかしら？」

「何故、此処がセレクトされたのか不思議で堪らなかったよ。」

「焼きそば美味しかったね♪」

各々、以前来た時の記憶を思い出しながら家へと入っていく。ここに皆が来たのは二回のみだが、それでも記憶にしっかりと残っている。

事前連絡なしで来るのは止めて欲しかったな。

「あれ。思ってたより綺麗だ。」

「そうね。物はないけど。」

「ああ。安芸先生が管理しているからな。」

「なるほど。」

ほんと、あの人には頭が上がりません。あざっす！つと、無駄話  
はここまでにしよう。

確か一階にある俺の部屋に置いてたな。勇者御記と釣り道具  
が。

「ここだ。」

「いざ鎌倉！」

「ちよつと、銀!？」

「わあー！」

銀と園子が勢いよく部屋に入っていく後ろを俺と東郷が遅れて入る。

「あつ！もしかして、コレ？」

「そうだ。」

部屋の中にはポツンと机が二つ置かれている。その上に御影の勇者御記が入っていた箱を置いておいた。

「そのつちのと同様古いわね。」

「あれ？この下にあるの……写真？」

「西暦の勇者達、なのか……」

「そんなところだろう。そして、唯一男なのが御影 士郎本人だ。」

なにかの記念で集合写真を撮ったのだろう。皆楽しそうだ。

「へえ、この人がシャルの——」

「ミノさん」

「ご、ご先祖さま?？」

「いや、違う。俺とは血の繋がりを感しない。」

「」

少し、東郷に怪しまれているが問題はない。それにバレたらバレたで話せばいいしな。

「それでは帰ろう。もう此処に用はない。」

「だな。夜になつちやうし、早く帰らないと」

銀の言うとおり、もう日が隠れ始めている。帰る頃には完全に夜になるだろう。

「シャル？」

「む、どうした？」

「あの釣り具ってシャルの?？」

そう言い園子が部屋の隅に置かれている釣り具を指差す。あれは他とは違い、二年分の汚れがついている。



「ああ、ちよつとした俺の趣味だ。」

「今はしないの？」

「いろいろと忙しくてな。」

何もかも上手くいったら、またやる機会があるだろうか。いや、そんな上手い話はないな。

「さあ、帰ろう。今日はハンバーグでも作ろうか」

「やったー！」

「おっ、いいね！」

「私もご馳走してもらっていいかしら？」

「構わない。材料はたくさん買っているからな」

いつも園子のために余分に買っている。ちよいとデカイ出費だが、あんな美味しそうに食べてくれるなら何個でも作ろう。

勇者御記が入っている箱を抱え部屋を出る。できる限り、コレから御影について少しでも知っておきたい。作戦成功には相互理解が必須だ。

絶対に天の神は倒す。俺と御影の命に変えても。

## 王たる風格

荷物を分別した翌日。俺達は勇者部の部室に集まっていた。総勢八名。一つの机を囲うように座り、対面する。

「シャルはアドリブで、友奈もそれに合わせるわようにアドリブで返答する。それでいいわね？」

「問題ない。」

「大丈夫だよ。」

話している内容は文化祭でする劇についてだ。以前、子供達の前でやった人形劇をちよつといじつたものをする事になった。友奈の提案で

「友奈さん、アドリブ以外の台本です。」

「ありがとう、樹ちゃん」

俺の場合は常に王様みたいな口調だから、変に台本を作るよりはアドリブの方がいいだろうということになり、俺の台本はない。

「園子は攫われるお姫様役で、銀は勇者のお母さん役ね。」

「お姫様だぜ〜」

「なんでアタシがお母さん？てか台本薄っす！」

園子と銀の台本は一枚の紙になっている。まあ、園子に関しちゃうセリフが五個しかないんだが。

「そして照明の夏凜！」

「シャルは一人で輝くの禁止ね」

「フリか？」

「フリじゃないっ！」

お望みであれば、ずっと魔力放出しといてやるぞ。

「BGM担当の樹！」

「任せてください！」

「元氣充分だね〜、いっつん。ところで、お姫様救出の際のBGMはコレで。」

「だ、ダメですよ！もう決まってるんですから」

「ええ〜」

「あまり、樹を困らせるな。」

「は〜い。」

全く、園子は。音楽関連は樹に任せておけば、問題はない。絶対の信頼がある。

てか、園子はなんのBGMを『ラブロマンス』。ん〜、見なかったことにしよう。

「最後に効果音担当の東郷！」

ドンガラガツシャン！

「効果音で返事するな。」

「よくある効果音だね！」

「やはり定番が耳に馴染むと思うの。観客を困惑させないためにも、これで全て終わらせましょ。」

「それは流石にダメだろ。」

大丈夫か？この効果音担当。殴る演出の時にさっきの流れたら笑う自信あるけど。

「次に衣装だけどどうする？」

「俺はコレで良いだろう。」

席を立ち、皆から距離を取る。そして、霊基を変更する。

黄金と銀の鎧を身に纏い、赤と黒のマントを羽織る。これこそ、王たるシャルルマーニユだ。

「なんか、また変わった？」

「そういえば、アンタはシステムなしでも変身出来るんだったわね。」

「このマント、温かい」

「ほんとだ〜。Zzzzzzzzzzz。」

友奈と園子がマントに包まってぬくぬくしている。離すことも出来るが、まあ、いいか。

「それ、動き辛くないの？」

「如何なる鎧であれ、それを着こなすのが騎士たる努め。」  
「なるほど。」

「それって、結局動き辛いってことじゃないの？」  
「ハハっ。」

「身を護るのに動き辛い、って鎧としてどうなのよ。」

正直言っただけです。歩いたら転けそうなくらいに

「俺の衣装はコレで良からう。他の者はどうするのだ？」

「私達のは作るしかないわね。」

「私はドレス」

「アタシはエプロン的なヤツだな。」

「それは持つてくれば良いだろ？」

エプロンとかドレスは普通に持つてるだろ。いつも銀はエプロン  
着て手伝ってくれてるし、園子はお嬢様だし。

「問題は友奈の衣装ね」

「勇者の衣装。シャルはどう思う？」

「どう、とは？」

「カッコイイ系かカワイイ系」

「当然、カッコいい系だ」

やはりカッコいい系しかないだろう。ジュワユーズ持たせよう。

ついでに勇士達も

「友奈ちゃんはかわいい系がいいわよね？」

「う、うんっ！」

「圧をかける。」

東郷。カメラを仕舞えば完璧だったな。

「ここはゆーゆに決めてもらおうよ。」

「私!？」

「それが一番ですね。」

「それもそうだな。友奈、決めてくれ」

「えーつと。」

ここは着る本人に決めてもらうのがいいか。友奈も着たいのがあ  
るだろうし。

「うーん。両方で！」

「カッコ可愛いつてことか。ふむ、いいな。そうしよう」

つまりアストルフオつてことだな。

「簡単に言ってるけど、どうすんのよ？なんか宛でもあるの？」

「あるとも。東郷、アレを」

「ああ、あれね」

「カッコいい感じにするには、やっぱりマントだ。それか、村正みたいに背負うか。もうそれだけでカッコよくなる。」

東郷の鞆から白のマントが取り出される。

「これって、シャルの」

「コレを羽織るといい。」

「わあ、カッコイイね！」

「そうであらう。」

第一再臨時につけているマント。あれ以降ずっと東郷に預けていたが、どうやら鞆にいられたみたいだな。

「さて、それでは、一旦俺は席を立つ。」

「なんか予定？」

「そんなところだ。できる限り早く戻る。」

時刻11時前。ここから全力で走れば11時を少し過ぎた頃には着くだろう。

部室を退出し、独りで歩く。グラウンドの方からは運動部の声が聞こえる。夏の大会が近いが、声の大きさはいつもと同じだ。

目標、か。全国制覇。十高程度でか。やる気も出ないよな、そりゃあ。

11時3分。正午まで一時間あるが、集合かけた奴が一番最後に来るのはちよつとな。人間として疑われる。

「こつちか」

前来た時に安芸先生から貰った地図を見ながら進む。場所指定はしていないが、この『本宮』ってどこに行けば何人かいるだろう。

薄暗い廊下を歩いていると、中庭のような場所に出る。どうやら、ここは山の自然によって開けられた空間に建てられている。

地震か土砂崩れかは解らないが、多分それで作られた空間だろう。

「むむ」

本宮へと続く砂利道に誰か立っている。見たところ黒髪ロング、の上里 柚葉か。

やべっ 二度と会うことはない、チャットに登録してないのにな場所であつたとは かなり不味い。

「お久しぶりでございます、シャル君。本日はどういったご要件で？」話をしに来ただけだ。場合によっては斬るがな」

顔の表情からはなにを思っているのか全く読めない。チャットに登録されていないことに怒って、うん、わからん。

「それではご案内します。こちらへ」  
「ああ。」

今は義務的な感じだな。つまり、話を終えた後すぐ帰れば絡まれることない。勝ったな。

「——」

白い画面を着け、白無垢のような服を着てずらりと並んで座っている。石像のように一ミリたりとも動かず、顔だけを動かし、こちらに視線を向ける。

「シャルルマーニュカロルス・マグヌス。此度は貴様達に命令を降すために参った。」

聖騎士帝。十二勇士。聖騎士達を束ねる者へと贈られる称号。そ

れ故、絶大のカリスマを誇る。

「二つ。満開の代償を失くせ。どんな形であれ、体を供物とする機構を修正しろ。回数制限、発動条件、なんでもいい。」

バーテックス共が体勢を整えている内にこちらも次の段階に進まなければいけない。停滞だけは打ち破らなければ

「二つ。これ以降、天の神への対策は全て俺が受け持つ。貴様達はなにもするな。いつも通り保身だけ考えればいい。」

俺と御影の作戦に横槍入れられと面倒だ。天の神との決着は一瞬なんだから。

「三つ。隠すな。偽るな。勇者への隠蔽は赦さない。もちろん俺にもだ。」

隠蔽が正直一番苛つく。何故、命賭けて守って貰ってる奴らが命賭けてる奴らに対して隠し事してる？意味がわからん。

「四つ。負けを認めるな。俺がいる限り天の神への勝機はある。勝手に諦めて、逃げることは認めない。死ぬまで戦ってもらおう。」

奉火祭なぞ認めん。一蓮托生で俺達は天の神に挑む。

「もし、これらを破った際は、その貴様を輪切りにする。」

「——ッ、!!?」

真ん中に座っている奴を指差す。輪切りとまではいかないが、割とガチで殺す。やり方が気に食わなければ、本当に輪切りにする。

「これにて俺は退出する。」

背を向け退出する。奇襲されても即座に反応出来るように手の形を作りながら本宮の外へと出る。

「よし。」

霊体化し、飛翔しようとした瞬間——

「少しいいでしょうか？」

「なんだ。」

くそ、引っ掛かったか。あと少しだったというのに……!

「シャル君の家へお手紙送ったのですが、お読みになりましたか？」

「手紙、いいや、そんな物は届いていないな。」

毎日ポストを確認しているが、そんな物は入っていたことはない

な。

「そうでしたか。それでは何故、チャットに登録なさってないんですか？」

「すまない。必要ないと思ってな」

「必要です。ご帰宅なさったらすぐさまご登録なさってください。」

「そうするとしよう。」

「しょうがないか。ここは素直に登録しておこう。」

「それにしても、手紙とはなんだ？誤発送ってことはないだろう。俺がいない時期に送ってきたのであれば、確認出来るのは園子と銀だな。帰ったら確認してみよう。」

「此処で聞くが、手紙の内容とはなんだ？」

「私と結婚しましょう。」

「」

もうやだ〜

俺の悩みの種を増やさないでくれ！ほんとと頼むから！

「友達からでいいな？」

「はい。今はそれだけで結構です。」

大赦のツートップってこんななの？人に会ったら求婚しないといけないのか？この人に関しちや、会って二度目なだけだ。

「それでは」

「お気をつけて」

今度こそ霊体化して、この場を離れる。

マジである人はなにもんなんだ？不思議過ぎて考えるの嫌なんだけど

この後部室に戻り、文化祭への準備を進めた。



## お祭り

霊基を再臨させ鎧を纏う。衣装です、と言い張ればバレないだろう。それに園子もいるし、お金をたくさんかけました。流石、園子！で済むしな。

ちなみにジュウユーズは置いてきた。最初は友奈に持たせる予定だったのが、魔王役の風先輩が死ぬわ！となり、没になった。ちよつと悲しい。

「おうさまー！」  
よしきた。

舞台裏から上がり、王座（ピアノの椅子）へと進む。王座の手前に来たら、マントをバサツとして少し圧をかける。

「フランク国の国王シャルルマーニュである。此度は何用で参った？」

フランスはつけない。そもそも此処はフランスじゃない。ホニヤホニヤした空間だからな。フランクならワンちゃん許されるだろ。

「魔王への助力を！」

助力・助力かあ。よし、？風先輩にもアドリブでもらうか。

「いいだろう。余が直々に裁定を降してみせよう。」

「ありがとうございます。」

王座から立ち上がり、友奈の後ろにつく。

「さあ、共に戦おう。魔王を討ち滅ぼすぞ」

「お、おおー！」

舞台裏にいる風先輩が頭を抱えているが、問題はないだろう。園子と銀に聞いたら笑い堪えてるし、展開的にはいい筈だ。うんうん。

舞台は変わり、魔王城へと移る。友奈の横に並び魔王たる風先輩を見る。アドリブ頼みました。

「よくぞ此処まで辿り着いたな。勇者！そして王！」

「裁断の時だ、魔王。此処を貴様の死地としよう。」

さて、どうしようか。俺の場合は王道を破ると弱体化する。つまり、友奈が戦わなければいけない。友奈が戦っている間、俺はなんかしてますよ感を出しとけばいいということだな。

「ダメですよ、王様！私は魔王を倒しに来たんじゃないんですっ！」

「むっ。ならば、何をするためにこの場に立っている？」

やべっ、台本読んでないんだよな。後、友奈頼んだ。

「私は魔王と仲良くなりたいです！」

「ほう。」

風先輩と重なってしまった。ちゃんと観客に聞こえたかな。

「魔王は悪だ。これまでに我が国の民達は何千人と死んでいった。これからも犠牲者は増えるだろう。それでも仲良くなると言うのか？」

「はい！」

「何故だ？」

最終ゴールがわからん。魔王と勇者が和解するのがこの物語のゴールなのか？とりあえず、友奈に問いかけよう。

「なんというか。この人は悪い感じがしななんです。好きで魔王をやってるんじゃないと思います。」

それは演じてる人だろ。まあ、ここが引き時か。

「であれば、俺から言うことはない。好きにせよ」

照らされている場所から立ち去り、舞台裏に入っていく。これで本筋に戻るだろ。

この後、無事魔王と和解し姫様を救出した。危ない所はあったが、いい感じに終われて良かった、良かった。

「良くないっ！アンタのアドリブに付き合わされた身にもなんなさい！」

「終わり良ければ全て良し、という言葉があるだろう？」

舞台終わりの挨拶。この劇に携わった勇者部全員が舞台上がり、観客から拍手を貰うたげだったのが、何故かお説教になっている。

「シャルル君は相変わらずね」

「当然だ。」

「誰も褒めてないわよ」

夏凜から定番ネタを受けながら、友奈へと視線を向ける。少し、体がふらついてるのがわかる。

「さて、俺はこの後文化祭を回る予定があるのでな。ここで終わりとしよう。」

「ちよっ、待ちなさい！」

「またね〜」

「また来週！」

「ありがとうございますー」

「これにて勇者部の出し物を終わります。」

カーテンが閉まっていき、劇の終わりを報せていく。勇者部の出し物が最後なため、この後片付けをしなくてはいけないが

「大丈夫か、友奈？」

「あっ・うん。ちよつとフラついちゃって」

「ほら、座んなさい」

夏凜が運んできた椅子に座らせ、一息つかせる。にしても、流石夏凜だな。準備が早い。

「ありがとう、夏凜ちゃん」

「どうてことないわよ」

「友奈ちゃん！お薬よっ！」

「落ち着け、東郷。その量は毒になる。」

「アハハ」

呼吸を荒くしながら、東郷が戻ってきた。どうやら最後のアナウンスをした後急いで保健室に行っていたようだ。

「とりま、冷えピタだな。んくよしっ。」

「ひんやり〜」

銀がそつと友奈の額に冷えピタを貼る。熱中症の可能性もあるた

め、冷やすのは正解だろう。

「とりあえず保健室に行きましょう。私が背負っていくわ」

「そ、そんな大げさですよ」

「ゆーゆ、何かあった後だと手後れなんだよ。だからここは安静にしよう。」

「うっ、うん。」

か。園子の言葉には重みがある。これまでの経験からくるものだろうか。

「風のおんぶが嫌なら、椅子ごと運んでやろう。ぐらつきは我慢してもらうがな。」

「ちよつとー!?」

「友奈ちゃん！私が——」

「はい、須美は片付けに行こうねー」

「大丈夫ですよ、友奈さん。お姉ちゃんの背中ほとんど揺れませんか」

「ふふんっ！」

「じゃあ、お願いします。」

「任せんじやい！」

風先輩におぶられ運ばれていく。東郷がなんか叫んでいるが、いつものことなのでスルー。残された俺達はせつせと舞台の片付けを進めていく。

文化祭が終了した。俺達勇者部は身につけていた衣装と背景用のダンボールを解体していく。

「貧血程度で良かったな、友奈。」

「危うく文化祭回れなくなるところだったよ」

「健康維持も学生の努めよ。これからは早寝早起きをするために私が  
お供するわ。」

「お供、とは？」

「もちろん私が一緒に床——」

「もういい。」

「アハハ。」

保健室の先生からは軽い貧血だと言われ、一時間後に復帰した。その後は出し物を勇者部の面々で見回った。

「肝を冷やしたわ。」

「やっぱり心配してんじゃない」

「違うわい！」

「ありがとう、夏凜ちゃんっ♪」

「べ、別に。」

夏凜の背中を小突きながらニヤニヤとした顔でおちよくる風先輩。  
満面の笑みで応える友奈。そして、それに照れ顔で応える夏凜。ちよ  
ろい。

「ほら、早くしないとうどん食いに行けないぞ」

「私はもう終わったよ」

「私も音楽室に返して来ました。」

「だそうだ。」

俺達四人は既に担当していた解体を終わらせ、残すは友奈達の解体のみだ。

「えつと、シャルル先輩、ですよね？」

「そうだが？どうかしたか、樹」

なんか変な所でもあっただろうか。俺としてはいつもと変わらな  
いと思うが。

「その付け髭と眼鏡は。」

「良いだろう？樹も付けるか？」

「いや、大丈夫です。」

売店に並んでたから買っておいた。やはり、楽しむのは形からだか  
らな。

「風船の被り物は私が作ったんだ」

「あ、やっぱり園子の？」

「世界で一つの冠だぞ。」

園子のクラスが風船での店だったからな。顔を出すと同時に作ってもらった。結構お気に入りです。

「園ちゃん、私にもいいかな？」

「任せな」

ポケットから一つの風船を取り出し、膨らませ、キュッキュツと形を成していく。そして、ほんの数分で俺が被っている冠のような物が出来る。

「はい、どうぞ」

「わあー」

「っ！」

見事に友奈の頭に収まり、冠の役割を果たす。東郷は悶え苦しみながらも友奈を写真を収めていく。

「さて——」

そろそろ解体が終わってない奴らも終わるだろう。完全に夜になる前にうどん食いに行くためにも帰る準備をしようと席を立つ。

「んっ？なんか落ちたぞ。プラスチックのバラ？」

「マジック用だ。」

バラがパカリと真つ二つに割れ、中から小さい兎のぬいぐるみが出てくる。マジック初心者の方向けのだ。

「マジックでもするの？」

「いいや、する予定はないな。」

「もしかしてアンタ、これ以外にも使わないの買ってんじやない？」

「買っているが？」

ポケットの中身を全て取り出す。

メモ帳、シャーペン、消しゴム、可愛くされたバツク、飴ちゃん、ガムなどなど。

机一個埋める量がポケットから溢れてくる。

「凄い量。あ、お菓子もある。」

「どうなってんのよ、そのポケット」

「四次元ポケット？」

「どこでもド——」

「それ以上はいけないわ。」

危ないネタを園子がしようとするが、東郷の手により阻止される。てか、ドラえもんネタって今でもあるんだな。

「アンタは文化祭を満喫しすぎよ。」

「ついな。」

つつい、目についた物を買ってしまった。去年はそんなことなかったんだけどな。

「じゃ、シャルは片付けといてね。私達はうどん食いに行ってくるから」

「了解した。」

一瞬で机に広げた荷物をポケットにしまう。

「はやっ！」

「それでは、行こうか。」

「どんだけうどん食いたいんだよ」

「うどんは女子力よ」

「なるほど、とはなりませんよ？」

おおく、あの銀がツツコミをやるとは。今日を記念日にしておう。

やっぱ、ご飯は大人数で食べた方が美味しいからな。そして楽しい。

「あまり無駄話をしていると置いていかれるぞ。」

俺達が会話しているうちに樹、夏凜、友奈、東郷、園子は部室を出て行っていた。

「なっ、いつの間になっ！」

「部長を置いていくとは」

「追いかけるとしよう。」

俺、風先輩、銀は急いで荷物を持ち部室を出る。鍵閉めは忘れずに。やっぱ、この部は退屈しないな。一人一人の個性が強すぎる。勇

者は十人十色だが、一点だけは共通している。その気高い精神はな。  
カール大帝だったら求婚してたな。



## 先代からの洗礼

文化祭から数日が経ったある日。依頼が来てないということもあり、部室で扇風機に当たりながらぐでぐでとしていた風先輩、樹、友奈。夏凜と東郷はホームページについてなにやら話しているが、専門外なのでスルー。

そんな平和な勇者部に突如として危機が訪れる。

「元氣してるか〜いっ!!」

「!!」

扉が凄いい勢いで開けられたためか、バンツ!と大きな音をたてる。そして、まるでDJのような快活な声が響く。

「急にどうしたの、そのっち?」

「なによ、そのサングラス」

「にぼ、にぼ、にぼにぼ〜」

「それ止めなさい!」

「わあ、本物のDJさんみたいだねっ。」

「どこがよ!」

妙なりズムでにぼにぼ言っているが、園子だからな。いつも通りだ。うん。

「お〜つと!アタシを忘れて貰っては困るぜ!」

「もしかして、銀先輩も」

「神樹館の火の玉ガールとはアタシっ!今日は讃州中学の火の玉ガールに勝負を挑みにきた!」

「火の玉ガール。もしかして」

「えっ、ここに火の玉ガールいるの!?!誰々?」

風先輩はわかったようだな。まあ、本人は自覚がないようだが。

「結城 友奈! いぎ、尋常に勝負っ!」

「えっ、私?!」

「そうね。友奈ちゃんは火の玉ガールに相応しいと思うわ」

「火の玉というよりは太陽という言葉が合うとは思いますが、ここは黙っておこう。」

「勝負、具体的にはなにをするんですか？」

「ちよつとタイム」

「無計画とは」

「あつ、戻ってきた。」

「どうする、シャル？」

「ジャンケンでいいんじゃないか？」

「なんか決める時はジャンケンだろ。お菓子の取合い、グラウンドの取合い。様々な場面でジャンケンは大活躍している。」

「そういうのじゃなくて、こう、なんというか、ちゃんとした勝負事のやつ！」

「ふうむ。であれば、オセロはどうだ？ 丁度持っている。」

「鞆の中からオセロ盤を取り出す。駒はしっかりと盤の中に収納されています。」

「よしつ、それだ！」

「オセロ盤を受け取り教室へと入っていく。俺は登場の機会を伺いながら教室を眺める。」

「友奈、オセロで勝負だっ！」

「いいよっ！」

「シャルは一人でなにしてんのかしら？」

「さあ？」

「勝負ではなく、最早遊びとかしているが問題はないだろう。本人達が勝負と思えば、それは勝負なのだ。」

「アタシが黒駒でいいか？」

「いいよ。」

「銀が黒駒。友奈が白駒となった。そして、ジャンケンにより先攻が銀、後攻が友奈になり、一つの白駒を黒駒へとひっくり返す。」

「えくつと、ここっ！」

「ん、ここかな。」

「ガンバレ、ミノさん」

「友奈ちゃん、頑張つて！」

オセロに声援は必要なのか疑問だが、ここは口出しせず見守つておこう。

その後、もひっくり返し、返されを続け、着実に盤面が埋まっていくな。若干銀が有利だ。

「うくん」

「友奈ちゃん、あそこが」

「あつ、ほんとだ！ありがとう、東郷さん！」

「なっ！」

東郷のアシストにより、ようやく角が埋まる。これで銀の優勢な状況が崩れるだろう。

「アシストありなら、シャル！」

「どうした？」

銀の呼び出したに、応え、オセロをしている銀の隣に行く。

「シャルル君、これは手強いわね。ここは、夏凜ちゃん」

「任せなさい。」

「あつれ、アタシは？」

さて、俺はオセロやったことがないのだが、まあ、角を取れば勝つて聞いたことあるから取れるようにアシストするか。

「銀、そこだ」

「おつ、やつり〜！」

こちらにも角を取れた。この調子で残りの二つも取ろう。

「やるわね」

「ここは堅実に行きましょう」

「守る、つてことだね。」

角から離れたか。それなら、引き戻すまで

「引き戻すぞ」

「了解」

角周辺に駒を置く。この位置なら相手に角を取られる心配はない。逆に相手がこれを白にしてきたなら、こちらは角が取れる。

「友奈ちゃん、絶対あそこに置いたら駄目よ。」

「うん。」

数枚を白に染め、友奈のターンは終了。こちらに戻る。

「置く場所を潰していくか」

「置かせる、ってことだな。」

置いてくれないなら置かせるまで。まっ、ゆっくりやっていこう。

あれから一時間弱が経った。残り二つの角を取り、盤面を黒く染めた。

「イエーイ！」

「やったね、ミノさん！」

「ふう。」

案外面白いな。とりあえず、行動制限して角を取ればいってことはわかった。

「負けた。」

「ぼた餅よ、友奈ちゃん」

「シヤル禁止っ！シヤルはオセロ禁止！」

「すまない。俺が強すぎたようだ」

正直すまんかった。申し訳ないと思ってます。

「ここはアタシが仇を取るわ」

「風先輩。」

「お姉ちゃん、流石にやめたほうが。」

「部長には引けない戦いってものがあるのよ。見てなさい」

「フーミン先輩がやるなら、私がやろうかな」

「そのつちが駄目です、風先輩！勝ち目は——」

「黙って見てなさい」

「っ。」

相手、あんな覚悟決めてんのになこつち側はめっちゃ落ち着いてん

な。温度差で風邪引いちゃうぜ。

「さあ、やるわよ」

「じゃあ、私は白駒」

「私が黒駒ね」

さて、リーダー同士の戦いだが、こんな、結末がわかる戦い初めて見るな。

「うおおおお!!」

「ぐふう」

「いえ、いい、勝ったよ」

「お、おう。おめでどう」

「流石だな。」

見ていて酷かったな。最後の方なんて風先輩、駒置いてないもん。これが圧倒的な力の差か

「言わんこつちやない」

「風せんぱーいっ!!」

「お姉ちゃん」

「犬吠埼 風、勇者部部屋にて散る。」

「まだ生きてるわいっ!」

あつ、生き返った。

「てか、アンタらは急にどうしたのよ?」

「いや、先代の意地でも見せようかなってね。」

「うんうん。先代は凄いだぜ?」

「あ、そういう集まりだったのね」

俺達を眺め、納得したようだ。先代、つまり神樹館組ということになるが、本当は四人なんだよね。

「私は?」

「須美は うん。そっちの方がいいかなと思つて」

「友奈もそちら側だからな。」

東郷は友奈いる方がいいかな、と思いました。決して連絡が面倒く  
て伝えてないだけじゃないよ？

「ほんとは連絡し忘れてたんだ〜」

「今日からシャルル君の家に居候するわね」

「止せ。それだけは勘弁してくれ。俺の肩身が狭くなる」

マジで止めてくれ。更に俺の肩身が小さくなる。なんなら、なくな  
る。

「アンタも苦勞するわね」

「一人預けていいか？」

「アタシは樹で手一杯だから」

くつ、速攻で逃げられた。真面目にいつか家の主が変わつちやうよ  
？いや、もう変わってるか。ハハッ。

「ほら、元氣出しなさいよ。」

「元氣を出す。うどん食べに行こう！」

「うどんは元氣を出す究極食ではないが？」

「出るよ？」

「うどんはソウルフード！」

「うどんは女子力！」

「お姉ちゃん！それはちよつとわからないかな」

「なん・だと」

うどんとはなんなのか。その真意を知るためアマゾンの奥地へと  
向かわない。そもそもアマゾンはない。悲しいな。

## 勇者王決定戦【番外】前編

六月に入り、暑さが夏に近づいている。のは別にどうでもよくて、どんなに暑くならうとも勇者部の活動はある。もちろん今日も

「さて、今日の議題だが。」

「わかつてる、わかつてる。つて、何度も確認しなくていいわよ。」

この小さな部室に夏凜と若葉を除く、計二十人がいるという時点で物理法則を無視しているが、ここはあえてのスルーを選択。今はそれが本題ではない。

「二人が喜びそうなもの。」

「若葉はく・うどんか？」

「食べ物のような消耗品ではなく、形や思い出として残るのがいいと思いますよ。」

「やつぱ、それが一番だよな。全く思いつかないんだが？」

高嶋が頭を悩ませる間に御影が案を出す、ひなたに反対を受け断念。再度思考するが、いい案は浮かばず

「こういうときは、好きな物を渡すのが一番じゃないかしら？」

「夏凜ちゃんの好きな物・煮干しとサプリ？」

「若葉はうどんと骨付鳥だな。」

「どっちも食べ物系じゃねえか。」

郡が名案を出す、結城と珠子が二人の好きな物をあげると、どちらも食べ物だった。それに、村正が苦言を呈する。

「私からは海の恵みを、と思ったがこれも食べ物だな。止めておこう」

「釣りならば俺も同行しよう。行くときは声をかけてくれ」

「わかった。」

「ちよい、ちよい。話が脱線しちゃてる」

「おっと、すまない。」

棗が海の恵み・海産物を贈るという案を出す、これも食べ物なので中止。そんな言葉にシャルルが釣りならば俺、と言わんばかりにど

こからな取り出した帽子を被る。そんな二人を本題に戻すために雪花が修整する。

「こうなったら、二人に聞いた方がいいんじゃないですか？」

「そうだね。結局思いつかなくて何もあげれない、ってことになるよりはそっちの方が良いかも」

「これまで告知なしだったけれど、今回ぐらいは事前に知られても良いかもね。」

一つもいい案が出ないのを見計らって小銀が直接二人に聞こうと席を立つ。

確かに、プレゼントを用意出来ずに誕生会を迎えるよりは断然いい。そう思い、小学生組は銀の意見に賛同する。

「であれば、早速向かうとしよう。」

「若葉ちゃんの驚く顔を見たかったです、しようがないですね。」

「それじゃあ行こうかつ。何処に？」

「高嶋先輩。」

「二人は剣道場にいる筈よ、高嶋さん。」

「そ、そうだよねっ！」

小銀の意見を採用し、各々席を立ちドアへと向かう。その際、一番ドア二近かった高嶋が元氣一杯に号令をかけるが、ドアを開けた瞬間動きを停止した。どうやら、行き先がわからなかったようだ。

後ろに続いていた赤嶺が恩人を思わず、呆れた表情で見る。えへへ、と照れてる高嶋に郡が助け舟を出す。

「剣道場、鍛錬。ちよつと待ってくれ」

「はいっ。」

「どうかしましたか、土郎さん？」

気を取り直し剣道場へと向かう高嶋に御影から待ったがかかる。そんな彼にいつの間にか隣にいた杏が問いかける。

「二人の誕生会はレクリエーションをしないか？」

「レクリエーション。内容は？」

「もしかして。」

何故、剣道場と鍛錬からレクリエーションが出たのか。気になり過



ぎて夜眠れなくなるため、内容を御影から聞き出すことにする。どうやら、西暦組はなにか解っているようだ。

「勇者王決定戦・息抜きって形で若葉が提案したんだ。ルールは・ひなた、説明頼む。」

「勇者王・」

「未来の農業王はここにいるわよ。」

シャルルと村正は勇者王と聞き、ある蜘蛛殺しの蝙蝠を思い出すが胸の内に収めておく。

「わかりました。」

説明を聞くため、席から立っていた皆が先程まで座っていた席に再度座る。それを確認した後ひなたが黒板に内容を箇条書きで書いていく。

「勇者王決定戦とは、言わば王様ゲームとバトルロワイヤルを合わせたようなものです。以前行ったときは丸亀城全体をフィールドとして使いました。」

「王様ゲーム!!」

「王様ゲーム・ってなに？」

ひなたの説明を聞き、息を荒くすら園子s。そして、王様ゲームという単語に聞き覚えがない友奈。

「簡単に言うと勝者が敗者に命令する、というゲームです。」

「命令って？」

「それはもちろん——」

「はい、静かにしてねー」

「??」

「友奈ちゃんは知らなくて大丈夫よ。」

いらん情報を友奈へと伝えようとしたため、ひなたは風先輩の手によって場外へと押し出される。

「バトルロイヤル・ということとは戦い合うんですか？」

「このメンツだと御影の一人勝ちになっちまわねえか？」

「そう上手くいかねえよ。前の結果は杏が優勝だったからな」

「「「ええ〜!!」」」

「ほう。」

若葉か御影と思ったが、杏は予想外だな。それとも、まだ御影が速須佐之男命に置換されて全然時間が経ってなかったのか。いずれにせよ、強敵だとは思うが

「杏も隅に置けません。それで？なにを命令したの？」

「ちよつと、好きな小説の再現を。」

雪花が杏に近づき命令の内容を聞きに行く。それを少しもじもじしながらもボソボソと喋る。

「どんな、どんな？」

「壁ドンを。」

「ビュオオオオ!!」

小園子が畳み掛けるように杏を問い詰める。杏が俺達に聞こえない程度の声量でなにか言ったかと思えば、中園子が奇声を発する。

「士郎、まさか。アンタ。」

「違う！違う！俺と千景は卒業証書貰っただけだから!!」

「卒業証書。なるほどな」

あの箱の中に入ってた卒業証書はそういうことか。ようやく、合点がいった。

「ルールはわかったが、結局どうするんだ？やるのか？」

「誕生会にバトルロワイヤル。喜ぶ、わけ。」

各自二人の戦闘時の姿を思い浮かべる。

「まあ、うん。」

「やろうか。」

全員が頷いた。

あの会議から一週間が経過した。俺達勇者部は土日を利用して、小学生組が訓練の時に利用していた廃校舎に来ていた。

「こんな所来てなにすんのかしら。掃除？」

「この規模を一日で済ませるだろうか。」

「さあ、今回のターゲットが来ました。早速仕掛けて行きたいと思いません。」

御影と共に二人の前に向かう。

「着いたようだな。」

「よっ。」

「士郎か。他のみんなは何処だ？」

「アンタらがいるってことはみんなもいるってことよね？」

「それはすぐわかるとして。まずは誕生日おめでとう。」

「むっ。そうか。もう六月だったな」

「私達の誕生日とこの廃校舎、なんか関係あるの？」

まあ、そう言われるのは予想していた。こんな場所で誕生を祝うとか正気の沙汰じゃないもんな。

「二人のために今回は、『勇者王決定戦』！これをやろう!!」

「はあ？」

「それは。まさか!？」

運んで来ていたホワイトボードにデカデカと書かれている文字を手のひらでバンツと叩く。

「ルール説明はシャルに任せる」

「了解した。」

ホワイトボードをひっくり返し、書かれている注意点とルールを読んでいく。

「舞台は此処、廃校舎だ。しかし、廃校舎の中で戦闘することは禁止とする。当然、故意の破壊行動もだ。」

「結構広いわね。」

「勝利条件は最後の一人になること。負けを認めるor本来の武器で致命傷となる攻撃を受けると失格だ。」

「本来の武器。レプリカを使うのか？」

「ああ。若葉と夏凜はこの木刀だな。勇者服へと移行してくれ」「わかった。」

「変身してからやるのね」

御影から木刀を受け取り、スマホを操作する。すると、二人は花弁に包まれいつもの戦装束になる。

「その木刀が折れたとしても、負けを認めなければ戦闘を続行してもいい。」

「それ、村正ぐらいじゃない？続行するの」

「大丈夫だ。私も友奈程とは言わないがある程度は修めている。」

アイツは絶対に負けを認めないだろうな。まあ、俺もだが。最終的にはfate顔負けの殴り合いするわ。

「そして最後だが、これは俺と村正だけの規則だな。俺は勇士、魔力放出、宝具を一切使用出来ない。村正はオンオフ可能のスキルは使用しない。」

言うて、アイツがオンオフ出来るスキルって称号剥奪ぐらいだから意味ねえんだよな。オフにしても、人間が霊的存在に戻るだけだし

俺は魔力放出以外出っ放しだからな。

「まあ、流石にアレされたら厳しいしね。」

「スタート開始はいつだ？」

「それはひなたが合図する。」

「今、合図送ったぞ」

「そうか・んっ？」

今、合図送ったって——

<勇者王決定戦開始ですっつ!!!

古びたスピーカーによって開始の宣言がされる。それと同時に御影の服装が袴になり、その手には木刀が握られている。

俺が霊基を変更している間に迫り、胴体目掛けて木刀を振るう。

「ハッ——！」

「惜しいな。些か速度が足りなかったようだ」

近くに置いてあった木刀を持ち、紙一重で防ぐ。だが、この場にはあと二人——

「こういうのは厄介な奴を真っ先に落とすのが重責ってね！」

「同感だッ！」

「三人だとしても結果は変わらない。」

ほぼ同時に放たれる二刀と一刀の渾身の一振るいを弾き、距離を取る。

「最初からトップスプヌピードだな」

「それでもしなきや倒せないわよ」

「わかっている、が、そろそろ皆が来る時間だな。俺は一旦引く」

どうやら御影は撤退するようだ。正直めっちゃ有り難い。このままやれば100%負けていただろう。

「士郎、私から逃げられるとでも?」

「もちろん。てことで——ッ!」

後ろに飛んだ瞬間、若葉の居合が御影を襲う。辛うじて防ぐが、あの状態で撤退は出来そうにないな。じゃ、俺はここらへんで——

「」

「アンタもよ。」

足元に木刀が突き刺さる。どうやら、夏凜のようだ。

さて、非常に不味いことになった。俺では夏凜に勝てない。負けることもないが、出来れば戦闘は避けたい。

「さあ、やりましょ。とことん付き合ってもらうわ」

「いいだろう。どちらか一方が欠けるまでやろうではないか。」

誰か、助けて。

## 勇者王決定戦【番外】後編

御影 side

「えーっと、若葉さん。逃げたいんですけど?」

「駄目だ。ここで決着をつけるぞ」

居合を受け止めたままでは良かった。だが、一向に撤退するタイミングが見つかからない。もし、ここで撤退する素振りでも見せれば、一瞬で仕留めにくるだろう。開始早々脱落はなんとも阻止したい。

「士郎なら私をここから倒すのも容易だろう?」

「んなわけ、ねえ!」

「ッ——!」

片手に全力で力を込め、若葉を前方に押し出す。これにより、鏢迫り合いの形からなんとか抜け出せた。ついでに距離も取れたが、若葉の居合の範囲内だ。

「まったく。お前はうちのリーダーなんだから、もっとドシツと構えといてくれよ」

自分を過小評価し過ぎだ。俺らのリーダーは誰よりも強いんだから。

「ふっ。すまない。ならば、ドシツと倒そう」

「いや、逃して欲し——ッ!」

背後から迫る二刀を横に飛ぶことで避ける。

今のは夏凜か。

「ちっ、避けられた」

「むっ、そちらの標的はどうした?」

「逃げられたわ。」

アイツ。人に擦り付けて逃げやがった!逃げるなんて人として恥ずかしくないのか!?

「助けいる?」

「いや、結構だ。士郎とは一対一で戦いたい。」

「そつ。それなら、私はシャルを追うわ」

そう言い、夏凜は木が生い茂ってる方へ向かった。

一先ず、負ける可能性は減った。こつからは、どうやって若葉を撒くかという点を考えるべきだが、どうしよ。真面目に思いつかない。

「さて、始めよう。早くしなれば、友奈達が来るぞ」

「そうだな。ここまできたら、とことんやってやるよ。」

高嶋が来ての混戦だけは避けたい。正直、木刀でどう捌くのかかわからん。最悪折られる。

「」  
「」

静寂。両者ともに動かず、相手の出方を伺う。

片や極地に片足突っ込んだ勇者。もう一方は神霊になりかけている勇者。どちらも人間か疑わられる技術と身体能力を持っている。この勝負に頭突っ込めるのは、シャルルマーニュか村正程度だろう。まあ、後者は数分もすればボロ雑巾になって戻ってくるだろうが。

「セイツー！」

「フツ！」

「ぐっ——！」

居合によって放たれる光速にも届き得る一撃を難なく切り上げによつて弾く。木刀につられ両腕も上へと上がり、万歳の形になる。よつて、胴体はガラ空きになり無防備な状況。そんなチャンスを御影が逃すことはなく、追撃を入れようと木刀を振るう。

「ハア！」

「ッ、——でやああ!!」

瞬時に体勢を戻し、御影の一太刀を弾く。弾かれた木刀に合わせ、バックステップをし距離を取る。

「今でも駄目か」

「そう簡単にはやられないぞ」

若葉がそう簡単にやられないことは百も承知。いくら、隙を作つても寸前のところで防がれる。人間離れした所業だ。

「ンじゃ、気を取り直して」

「ああ。いつでもかかってこい」

先程の居合の構えではなく、矛先を俺へと向ける構えを取る。どうやら、若葉も隙を作るやり方にシフトチェンジしたようだ。

「遠慮はしねえから、なっ！」

「ぐっ。」

いくら剣術を極めようが、必ずしも自力の差が出る。究極の一となれば話は別だが、片足突っ込んだ程度では半分神霊の一撃を受け止めるには至らなかつた。

「そこだッ！」

「なっ!？」

力を込めていた両腕が抛り所を失くしたかのように、すつと前に倒れる。当然、体勢も崩れる。

一瞬。ほんの僅かな時間だったが、この域になるとその僅かな時間で勝敗が決する。

「――」

「俺の、勝ちだな。」

若葉の腹部には精霊である義経が佇んでいる。それは致命傷となる攻撃を受けたという証明だ。

「ああ。士郎は強いな。いくら鍛錬しようが、肩を並べそうにない。」

なにか堪えるように空を見上げ、懺悔のように言葉を紡ぐ。

「なあに言ってるんだ。俺の肩なんてとつくの昔に超えてんだろ。いつも追いかけるのに苦労したぜ」

「不甲斐ない、リーダーで。すまない。」

ポロポロと地面へと雫が落ちていく。

赤嶺から聞いた俺の結末。英雄として喚ばれた俺から聞いた最期の言葉。色々きつかけはあるだろうが、それらが今となってようやく溢れてしまった。

「お前が悔やむことはねえよ。そういう運命だった、っていうだけだろうが。俺の終着がそこだった。そんだけだ。」

それに、決して無駄ではなかつた。そう目の前の光景が教えてくれ



る。

「ああ、やはり、士郎だな。」

「？俺にもわかるように喋ってくれ」

腕の裾で雫を拭き取り、ずっと上げていた顔をようやくやく下げる。

何故か圧縮言語を話すが俺には意味がわからない。士郎、という言葉葉になに圧縮してんだ。

「いや、こちらの話だ。」

「まあ、いいか。話も終わったし、俺はもう行くぞ」

「引き留めてしまつて悪かったな。」

「構わねえよ。」

これ以上同じ場所に留まることは出来ない。騒ぎに敏感な風辺りが来るだろう。

「士郎」

「ん？」

飛翔しようと力を込めていた足を止める。

「次は私が勝つ」

「いや、俺が勝つ。」

いつかの日を思い出す。

確か、俺が訓練に加わつて初めての一対一だったけな。二一で俺の負けだったつけ、本当に懐かしい。

そんな古い記憶を思い浮かべながらその場を後にする。

?? side

「水都からだな」

スマホの着信音が出たため、電源を付け内容を確認する。

予定では脱落者が出た場合、ひなたが連絡することになっている。

だが、その本人は現在泣き崩れています。

「若葉がダウン。なにやってんだ、アイツら……本日の主役倒してどうすんだよ」

若葉を倒せるのは御影かシャルルマーニュだろう。それ以外は手も足も出ない。

極地に至りかけてんだぞ。半分神霊か大帝並じゃないと戦いになるかすらも怪しい。そんなレベルだ。

「まあ、それよりもだな」

スマホを直し、木刀を握り締める。

近くに居るのは二人。一人は小さい方の銀。もう片方はわからん。だが、園子か須美ということとはわかる。まあ、十中八九園子だろう。遠距離がこんな近くに居るわけがない。

「ッ！」

「大雑把」

木の枝に登っていた銀が頭上から双斧を俺目掛けて振りかざす。だが、あまりにも雑。狙いがバラバラだ。

双斧、それぞれの側面を叩き当たらないように反らす。反らされた双斧は俺の足スレスレに落ちる。

「てやああー！」

「ハッ！」

「ッ——！」

やはり、もう一人は園子だったようだ。

銀を遮蔽物として俺の死角から槍の射程範囲に入り、切っ先を胴体に向けて突出させる。それを切り上げ、続け様に振り下ろす。これで槍は動かせない。

「まずは一人——」

槍を抑えたと同時に振り下ろしていた木刀を上げ、園子が体勢を立て直す前に突きを繰り出そうとするが

「須美!!」

「フッ……そりゃあ、当然いるよな」

後ろから矢が迫ってきたため、園子への攻撃を中止し、矢を弾く。

その間に銀と園子は体勢を立て直し、俺から一定の距離を取る。

「一旦引くぞー！」

「でったーいっ！」

「マジか。」

「ここで撤退するのか。それはちよつと予想外だな。」

うぶん・多分、シャルルマーニュだな。アイツらに助言したの。内容は不意打ちで仕留めきれなかったらすぐさま撤退しろ、かな？だいたいこんな感じだろ。

「逃しても問題は無いな。」

ここで追えば、須美の射撃が俺を邪魔するだろう。それは難なく防げる。だが、機転を効かせた園子がかすれば負ける自信がある。

ほんつと、読めない。アイツとは別ベクトルの天才だ。一生理解出来そうにない。

「チームか」

さっきの小学生チームを思い出す。

小学生とは思えない、連携の精度。危険から仲間を守るカバー力&視野の広さ。正直言って隙がない。

このままでは絶対に負けるな。このまま、ならぬ。

「へいへい、そのボーイ！暇してるー?!」

「おっ、歌野か。いい所に来たな」

「へっ？」

久しぶりにいい働きをしたな。毎回毎回いらんところで発動すんだから、オンオフ機能が欲しいです。運営さん。

「俺と手を組んでくれ」

「さて、蒔けたはしたが」

夏凜の持つ木刀を弾いた瞬間に全力で逃げたまでは良かった。だが、このエリアに入るのは悪手だったな。二人いる。

「敵ならば構えよ。味方ならば退けよ。王の剣受けてみるか？」

願望としては退いて欲しい。

俺は大半の奴らとの勝負は負ける可能性が非常に高い。特に神世紀組

王道踏破の影響もあるが、気分的にのらない。夏凜とやった時もそうだった。倒す未来が頭の中で作れない。そんな感じだ。

「ッ——、銀か！」

木刀が勢いよく回転して飛んでくる。それを見極めて弾く。

武器を投げる、という行動をするのは珠子、銀、夏凜。剣を使うのは銀と夏凜がいるが、夏凜はまだ追いついてない筈だ。つまり、剣を投げてきたの銀ということになる。

「てやつー！」

「この程度で俺を倒せるとは思ってないだろうな？」

背後から迫る槍を流し、一度二人から距離を取る。

「ここで考えるのは一つ。どうやって逃げよう？」

「もちろんっ！」

先程投げた木刀を拾い終えた銀が、俺目掛けて突進かと思わせる程の勢いで剣を掲げ、迫る。

「ッ、随分と使い慣れたようだな。」

「おかげさまでっ！」

振り下ろされる木刀をこちらも木刀で受け止める。あまりの重さに踏み留まっていた地面に亀裂が奔る。

今の銀の姿を少し説明しよう。本来、俺が使う筈のスマホで変身している銀は赤を基調とした戦装束だったものが、白と青を基調としたものになっている。ついでに武器も双斧から剣へと変質している。

そして何故か、目が元の俺のように水色になっている。一時的なもので身体に害はないようで、変身を解けば元に戻る。

「ここからどうする？このまま力比べしても意味ないぞ。」

「わかってる、ての。それに、本命は私じゃなく——」

「ああ、もちろん知ってる。」

もちろん、把握している。先程流した後に木の影に隠れているのは確認済みだ。そして、木を伝い背後へと移動してるのも足音で丸わかり。

「ッ——！」

予想と反し、園子は俺の目の前から出てきた。後ろの足音はもう一人いるのか、それとも何か小細工したのか。

まんまと騙されてしまった。だが、それは問題ではない。問題なのは、園子が攻撃しようとしているのが銀ということ。仲間割れ、第三者。どちらも可能性があるが——

「ぐっ——!!」

「うん、やっぱりそうだよね」

銀を押し退け、園子の槍から守る。当然そんなことをすれば、防げずに喰らうことになる。

「俺、敗退ですっ！」

「ありがとう、シャル」

「ごめんね、シャル。善意を利用するような形になっちゃって」

「どのような形であれ、お前達の勝利だ。敗者は敗者らしく身を引くとうしよう。」

まあ、うん。ちよつと悔しいがしょうがない。園子と銀のお願いに對する執着に俺が負けたというだけだ。

「それではな。」

「。」

霊体化し、その場を離れる。向かう先は廃校舎の屋上。そこが脱落者と巫女の待機場所となっている。

御影 side

「全速力で身を隠せる木々が生い茂っている森へと移動する。元いた位置から行くと、どうしてもグラウンドを通ることになる。ここは見晴らしが良く、遠距離組としては格好の的だろう。」

このまま攻撃されず、移動したい所だが、無理だよな。

「士郎くーんっ!」

「おっ、高嶋じゃねえか。」

だいぶ離れているが、あの勇者服と髪の色は高嶋だろう。

友奈が三人になったことで見分けが難しいが、所々相違点がある。それが解れば見ることは簡単だ。と言っても、遠目から見たら誰が誰かわかんないんだけどな。

ちなみに、東郷と千景はどんな場面でもわかるらしい。正直言つて怖い。

「戦おっか!」

「別の機会だな。」

今は身を隠すことが最優先だ。

高嶋に背を向け、森へ一目散に走る。そんな時、森の方から発泡音がした。

「ツ——、東郷か!」

迫りくるコルク弾を木刀で弾き、弾道を辿る。どうやら、正面から撃たれたようだ。

それなら話が早い。次弾が撃たれる前に東郷を打ち倒す。

「うおっ!」

今度は背後から矢のような物が頬を掠っていった。完全にまぐれで避けれたが、次はない。警戒しなければ

矢・杏か鷲尾だな。

「今度はタマか!」

タマが使う旋刃盤が弧を描き、俺の胴体目掛けて飛翔する。それを木刀で軌道を反らす。次の瞬間には持ち主の元へと戻っていく。多分、糸とかでくつつけてんだろ。

「まずは——！」

すぐさま前へと回避する。その直後に俺が元いた場所にデカイ木刀・大剣が叩きつけられる。

「今のを避けるって・凄いい反射神経ね」

「乗り越えてきた壁が違うんでな」

女子力先——間違えた。勇者部部長の風先輩が、大剣を肩に担ぎこちらを見据える。

風先輩単体なら対処は一番楽だが、それにアシストが入ると話は別だ。

「えいつ！」

「よっ、と」

そうそうこんな感じに。

前後から迫る糸を右に飛ぶことで避ける。だが、俺を攻撃対象としてるのは何人もいる。

「かったりいなあ!!」

流石にこの量を防ぐのは気が滅入る。どうにかして、この包囲網から抜け出さなければいけない。一人では当然無理だ。なら——

「高嶋！手を貸せっ！」

「!!——うんっ！」

すぐそこまで来ていた高嶋に救援要請をする。少し間があったものの、加勢してくれるようだ。

「背中は頼んだ」

「任せて！」

高嶋に背を任せ、風先輩へと駆ける。

風先輩は担いでいた大剣を両手で握り締め、矛先を俺に向ける。

「でっ、——りゃああ!!」

途轍もなく力を込め、大振りに横斬りした。だが、悲しくも誰にも当たらず空を斬るのみ。

「いい一撃、だっ！」

「ッ——！」

横に振り下ろされた大剣を飛翔して躲し、風先輩の背後へと回る。

そこから、精霊の守りが発動する程度の威力で突きを背中へと繰り出す。

見事に精霊の守りを発動し、風先輩は脱落となった。

「よし——」

突きの体勢から立ち直ろうとした瞬間、左側に人影が目映る。

「もらったよ！」

「くそっ」

赤嶺が拳を握り、今にも放とうとしている。

この体勢、赤嶺の位置。どうすることもできない。

左足での蹴りを放ったとしても、充分に力が込めれず赤嶺の攻撃を阻止することは出来ないだろう。左腕はないから、防御も出来ない。

「赤嶺ちゃん!!」

「フッ！」

高嶋が駆けつけようが時すでに遅し、つてな。ここで俺は敗退つてことで後宜しく!

「なっ!?!」

「!?——助かった!・タマ！」

旋刃盤が赤嶺の腕に直撃する。精霊の守りが発動しているため、赤嶺は脱落となった。

どうしてタマが俺を助けたのか、理解出来ないが。ラッキーということにしておこう。

「タマちゃん、そうだよね」

「今の意図がわかったのか?」

「どうやら、高嶋にはタマがした行動の理由についてわかるようだ。

「いや、なんでもないよ。それより、始めよっか」

「この矢と弾丸が行き交う場所か?」

樹も脱落しているが、遠距離組は誰一人として脱落していない。以前変わりなく矢と弾丸は俺を仕留めに来ている。

「士郎くんには、ハンデでもないでしょ?」

「まあ、そりやそうだが」

大分距離が離れているからか、俺の所に来るまでに手で弾ける程に



減速している。タマの旋刃盤は例外だが

「それじゃあやろうよ！」

「しょうがねえ。」

木刀を地面に刺し、拳を握る。前の時同様、高嶋と同じ土俵に立つ。

「いっくよっ！」

「っ。」

怒涛の連打を見を捻り、弾き、流し、相殺しながら防いでいく。だが、いくら上手く防ごうとも着実に友奈が優勢になってくる。

この間、コルク弾や矢が飛んでくるが難なく回避。タマは攻撃してこない。

「やっぱり、士郎くんは強いね！」

「——」

会話してる余裕なんてこちらにはない。精神を研ぎ澄まさなければ、一瞬で崩れる。

打開策を・打開策を早く出さねばっ！

「!!」

「タマちゃん!？」

旋刃盤が俺から見て、左側からくる。

ん？この角度は、俺に・いや、誰にも当たらない軌道だ。なんのためか——そうか！

「ありがたく使わせて貰う！」

「左で——ッ!？」

左腕の上腕でワイヤーを巻取り、軌道を修整する。高嶋へと当たるようにな。

それを高嶋はなんとか籠手を使い、防ぐ。だが、その一瞬の間を見逃す程俺は甘くない。

「ハッ!!」

「きゃっ！」

ワイヤーを左腕から離し、高嶋へと近づく。そして、無防備な胴体へと発射をお見舞する。

衝撃によつて軽く後ろに飛ぶ。発剄を当てた胴体には高嶋の精霊、一目連が浮かんでいる。

「負けちゃったかく・今回こそ、つて思ったんだけどな。」

「ほんつと、高嶋は強いな。タマの掩護がなければ負けてたよ」

「タマちゃんも・うん。きつと、こうなるだろうなつて考えてたんだけど・対応できなかつたよ。それより、左腕大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。ワイヤー巻き付けただけだからな」

高嶋はタマの行動の意味がわかつてるんだよな。俺には全く解らないが。

「それじゃ、私行くね。ガンバってね、士郎くんっ！」

「最後までやってやんよ」

高嶋の背中を見届け、木刀を手にする。まだ戦いは終わっていない。次に警戒するのは、弾丸と矢だけだ。タマが俺に敵対しているのかわからないが、一先ず保留にしておこう。

## 勇者王決定戦【番外】後編2

村正 side

「二人グラウンドの方へと進む。

「現段階で脱落しているのは風、樹、赤嶺、高嶋、若葉。そして驚きのシャルルマーニュ。なにやってんだ、アイツ。」

「来たわね」

「あつ、今日の主役さん」

木の陰から本日の主役である、夏凜が登場。何故、俺を標的としたのか謎だが、当事者としては大迷惑だ。ほんと、止めてほしいぜ。

「村正。アンタとは一度、やってみたいと思ってたのよ」

「俺、御影です。」

「そんなバレバレの嘘初めて見たわ。」

ちっ、駄目か。これでなんとかなると思ったが、どうやら、真剣勝負をしないといけんらしい。

「はあ、じゃ、やるわよっ!」

「相手してやるよ」

俺は一刀、夏凜は二刀。この時点で手数勝負としては敗北だろう。ここで勘違いしないで欲しい。手数が多い≡勝ちではない。つまり、俺に敗北はない。

右から迫る木刀を初速で潰し、左から迫る木刀を地面に叩きつけ足で折ろうと試みるが折れる前に抜け出されてしまう。

「チイツ、面倒ね、その戦法!」

「面倒臭いが売りだからな」

俺の戦法は単純、初速で潰す&武器破壊。まあ、人それぞれに対策として何個か作戦があるが、夏凜についての策はない。だからこそ、早めに武器を壊したいがこの状況じゃ無理だな。

「なら、反応出来ないスピードでッ!」

「ほいっ」

「くっ——！」

俺が反応出来ないスピードを出せるのは御影のみだ。それ以外は反応出来るし、カウンターも割といける。

今回は潰した後、手元から離れるように上へと弾き飛ばす。目論見通り夏凜の手から離れ、上空へと放り出される。

「早く回収を——、はあ!?!」

韌やかな鞭のような物が弾き飛ばされた夏凜の木刀を回収していった。

「今の・歌野ね」

「そんな所だ。どうする？続けるか？それとも降参するか？」

「寝言は寝てから言いなさい！まだ、負けてなんかないわよ！」

やる気充分つてところか。だが、いくらやる気があっても状況は変わらない。

「ハア——！」

「甘い」

苦し紛れに放たれたような横斬りを先程同様、勢いを完全に殺し上空へと弾き飛ばす。これも歌野の鞭によって回収される。これで夏凜は無手、武器はなくなった。

「そこね！」

「へえ・そう来るか。歌野！そっちに夏凜が行ったぞ！」

「やや!?!」

夏凜の全力ダッシュに俺はどうやっても追いつけない。勇者のステータスに一般人のスペックで勝てる訳がなく。

「返して貰うわよ！」

「この農業王に死角なしっ！」

「投げた!?!」

「ナイスパスっ！そしてくっ・フンッ！」

歌野から夏凜の木刀を受け取り、瞬時に折る。これで夏凜の武器はない。つまり、脱落だな。

「まだまだあー！」

「お前もかよ!!」

真つ二つに折れた木片を掴み、こちらに突っ込んでくる。

この前のお祭りを思い出しながらも防ぐ。だが、一般人が勇者に力で勝てる訳がなく、防御を突破され腕に突き刺さる。

「ぐうっ!」

守りを突破され、突き立てられる。俺には精霊の守りがなかったため、普通に刺さる。

「あつ、あく、ダメよ。そっちは——」

「歌野! 落ち着けつ!!!」

「ちよっ——いつツ! 歌野?!」

歌野を静止しようとした夏凜が目視不能の鞭によって攻撃される。これで夏凜も脱落だ。まあ、今はそんなこと言ってる場合じゃねえんだけどな。

くそっ、完全にやらかした。こんなことなら、敵側に行かなきゃ良かったな。流石にあの光景は見せるべきではなかった。

「はあ・しょうがねえ。ルール無視だが、目を瞑ってくれよ」

「何か策でもあんの? 私的には落ち着くまで様子を見たほうが、ってアンタ!」

木刀を握りしめ、鞭を見る。だらりと下がっており、地面に擦られている。だからと言って油断は出来ない。すれば、先程のように目視不可の一撃で意識を刈り取られる。

ここで俺に出来るのは一つ、近づくことだ。例え、勇者のスペックで振ろうとも必ず穴がある。そこを走り抜くしかないだろう。問題はその後・当たって碎けようか。

「よっ——うお、つとと。」

一撃目を何とか回避するも、二撃目で木刀が彼方へとぶっ飛ばされてしまう。だが、その間に歌野に近づけた。

「すんなり。」

今回の敗因としては、俺が血を流した事と長時間土を触れなかった二点だろう。後者の方が割合デカいと思うが、ここは無視。いつものことだ。

「んじや、お疲れ。ちょっと休んどけ」  
「あつ・うん、ごめん——」

静かにゆっくりと鞭を握り締める手を包む。歌野は俺に気づいたのかハッとした表情をし、元に戻る。疲れたのか瞼を閉じ、ぐったりと体を預けてくる。

「よしっ、帰るぞ」

「こうなった理由、わかる？」

「ああ。今度からは農用の土を持参しよう。」

「絶対違うでしょ!？」

歌野を抱き抱え、夏凜と共に待機場所へと向かう。

さて、水都にどう説明しよっかな。

「脱落しましたー」

屋上の扉を開け、意気揚々に脱落を宣言する。こちらに気づき、何人が振り向く。その中にはシャルルマーニュと水都がいた。

「うたのん!」

「歌野はどうした? なにかアクシデントでもあったか?」

「ちよいとな。てことでこっちに来い」

シャルルマーニュを呼び出し、皆から見られない所で話がしたいため屋上を出る。

あ、歌野は水都に預けている。

「話とはなんだ?」

「お前がジュウユーズを俺に撃った時のことだ。」

「覚えている」

「あの時、歌野が駆け寄ってきたろ?」

「トラウマになった、ということか?」

「そんな感じだとは思うが、それか土に触れてないからか。どっちか

だ」

あれはR18Gだな。いや、それ以上かもしれない。いずれにせよ、まだ中学生である歌野に見せるべきではなかった。

精神がいくら強かろうが、死体同然の物を見せてはいけなかった。俺は見慣れてはいるが、歌野はそうではない。完全に俺の配慮不足だ。

「後者も有り得るな。む、その出血は？」

「これは夏凜の攻撃で受けた、傷、だ。まさか」

「これ以降歌野の前で血を流すな。造阪神を倒すまでの辛抱だ。やり抜いてみせよ」

「善処します」

結構な無理難題を押し付けてきやがった。俺のスペックをなんだと思つてやがる。アンリマユに負けちゃうかも俺だぞ？

歌野のために頑張りますっ！

.....

御影 side

弾き、折り、避けながら前進する。狙うは東郷。

森に入ってしまったえば、タマの旋刃盤も自由自在な動きは出来なくなる。よって、タマはスルーで問題ない。

「捉えたっ！」

「やはり、一筋縄ではいかないようね」

ようやく、東郷を視認出来た。東郷も俺に見つかったことに気づいたのか、銃を持ちその場を離れようとする。

「遅いッ！」

素のスピードが違うんだ。そう簡単には俺から逃げられない。

このまま追いついて木刀を――

「やああ!!」

「くっ、やつぱ、いるよな。そりゃあ。」

木の幹から突如として、桜のような少女が降り立つ。降り立つ、というよりは飛び蹴りのようなものだったが然程差はないだろう。

「ありがとう、友奈ちゃん!」

「東郷さんは私が守るっ!」

「こりゃあ手強そうだな。」

さて、どうしようか。

結城 友奈。高嶋にそっくりな勇者。姿だけでなく戦い方、性格すらも姉妹のように似ている。最初見たときは俺達に隠していた妹かと思っただ。

「勇者——パアアンチっ!」

「っ——、甘え!」

「わわっ!」

木刀を地面に刺し、応戦する。体を半身にすることで避け、結城の手首を掴む。抵抗される前に東郷がいる方向へとぶん投げる。

空中へと放り投げられた結城はなんとか体勢を治し、東郷にぶつからないように踏み留まる。

「友奈ちゃん!」

「!——うんっ!」

結城が姿勢を低くしたかと思えば、背後の東郷からコルク弾が俺目掛けて射出される。

すぐさま刺していた木刀を手に持ち、コルク弾を斬り伏せる。その間に結城が俺へと迫る。

「まずは掩護を潰す」

手に持っていた木刀を東郷へと投げる。東郷の武器はスナイパーライフルのようなもの。一発装填なのは確認済みだ。それで投擲物をどう捌くか。まあ、なにをしても終わりだ。

「!？」

「東郷さん!」

東郷はスナイパーライフルでなんとか直撃を免れる。だが、結城の



集中が俺から外れた。その瞬間に近づき――

「わっしー！」

「須美っ！」

「ツ――!？」

槍と木刀によって行く手を阻まれる。後ろに飛ぶことで、反撃を喰らわないようにする。

「形勢逆転だなっ！」

「ミノさん、油断しないで。全力で行くよ」

「銀ちゃん！そのちゃん！」

「助かったわ、ありがとう。」

「目の前の敵に集中して二人共。無手だとしても油断しちや負けるよ」

園子の言う通り、今の俺は無手だ。木刀はどっかいった。探そうにもこの状況では探せない。

んく・結構詰んでる。

「わかつて――来るぞっ！」

「っ。」

「隙を作って。私が仕留めるわ」

「任せたよ、わっしー」

一先ず錯乱して、その間に木刀を探そう。それしか策はない。

「手加減しませんよっ！」

「だな。俺も全力で行く」

手加減はもう出来ない。精霊の守りを信じて打ち込むしか、俺に勝算はない。

「ていつ！」

「これで！」

「ふっ、はっ！」

右斜め下から切り上げられる木刀を足で側面を叩くことで弾く。今度は左側から迫る槍を身を捻り、躲す。そして、右手で棒の部分を掴み――

「捕まえたっ！」

「ッ——、そうくるか!!」

姿が見えなかった結城がいつの間にか俺の背後に来ていた。棒を掴んでいた右手を掴まれる。そこに銀が加わり、足も固定されてしまう。これで俺はこっから移動出来ない。

「今だよ! わっしー!!」

「この程度の足止めッ!!」

いくら振りほどこうとしても、外れない。足が固定されているため、上手く体を使えず力が込めれない。

「——」  
コルク弾が来る。回避も防御も出来ない。当たってしまう。

うん、まあ、ここまでこれたし、いいか。

「諦めるには早いんじゃない?」

「!」

「きゃっ!」

「千景さ——あつぶなっ!」

「っ! 友奈ちゃんをよくも」

鎌によつてコルク弾が防がれる。同時に結城と銀が鎌によつて攻撃される。両手が防がれていた結城は当たり、脱落。銀は後一步の所で避ける。

「受け取りなさい」

「おっ、サンキュー。助かったぜ、千景」

「別に、見ている見苦しかっただけよ」

千景から投げられた木刀を受け取る。

「つて、それアタシのー!!」

「これ、銀のかよ」

「落ちてたから拾っただけよ。それに、武器がなくて困ってたでしょ?」

「まあ、そりやそうだが」

脱落した結城は少し離れた場所から、この戦いの行く末を見守っている。

「ミノさん! あつちに木刀が落ちてる!」

「オツケー！すぐ戻る！」

「行かせると思おうか？」

「行かせる」

銀を止めようと後を追おうとするが、目の前に園子が立ちほだかる。だが、千景が――

「誰も行かせないよ」

「それなら、突破するまでだ」

「そうするしかなさそうね。」

コルク弾を弾き、園子へと二人同時に駆ける。

「セイッ！」

「ハア。」

俺は前から、千景は背後から各々の武器を振るう。

俺は穂先で、千景は柄の部分で弾かれる。

この感じ。ここで入るか。面倒なことになりやがった。

「千景！手を止めるなっ！」

「わかってわよ。でも、これは！」

全て切り離してやがる。防御に集中してる分、若葉より倒すのに時間がかかるかもしれない。

コルク弾を叩き落とす。

「くっ――、千景！鎌を俺に！」

「っ！」

木刀を空中に一旦投げ、鎌を手にする。この動作の間にも木刀は重力に従い、地面へと落ちていく。地面に落ちるスレスレに足を使って園子へと蹴り上げる。

もちろん弾かれる。だが、槍が横になった。

「そこだっ！」

「なっ!？」

鎌で槍を引っ掛け、上空へと運ぶ。これにより、園子は万歳の形に

なる。そこで鎌を手放し拳を握る。

「終わりだっ！」

「っ。」

園子の精霊、烏天狗が出現する。これにより、園子は脱落となる。

「ふっ！」

鎌を再度握り、コルク弾を防ぐ。

「ほら、返すぞ」

「あと二人。」

銀はまだ戻っていない。俺の木刀はそんな遠くに飛んでいつてんのか。

てか、また俺は無手になってしまった。早く武器を手に入れなければ、東郷に狙撃・んっ？

「走ってきてる？」

「私もそう見えるわ。どうする？」

「どうする、って。迎撃するしかないだろ。」

何故、遠距離が近づいてきているのか不思議でたまらないが、ここは迎撃するしかない。

「私がやるわ。アナタは武器でも——っ!!」

「はっ——？」

千景がこちらに振り向くと同時に表情が一変し、俺を押し飛ばす。

次の瞬間に木がぶっつき合う音がした。

「中々やるじゃないっ！」

「くう、惜しいっ!!」

銀による不意打ち。千景が気づいたのはタマタマだろうが、そのタマタマに助けられた。

ここで忘れてはいけない人物が一人、千景の背後で構えている。

「千景！その場から離れろ！」

「っ、私だつてねえ。さっきの出来るんだから!!」

「あつ、武器が。」

先程俺が園子にしたように鎌を銀の木刀に引っ掛け、上空へと飛ばす。だが、既にコルク弾は撃たれた。もうじき千景に当たる。銀にト

ドメを刺せない。

コルク弾が千景に命中した。これにより、千景は脱落。

「いい繋ぎだ、千景。ありがとな」

「つゝ」

上空へと放り出された元俺の木刀を掴み、近くにいた銀を攻撃する。銀の精霊である鈴鹿御前が出現した。これにより、銀は脱落。

「さあ、まだやるか？」

「もちろん。降参するぐらいなら、腹を切るわ」

コルク弾が放たれる。他のお邪魔要素がなくなれば、当たる可能性はない。だから、走りながら避けるのも簡単だ。

「勝負あり、だな。」

「ええ、完敗ね。」

木刀を突き立てる。東郷の精霊、藍坊主が出現する。

はあ・疲れた。

「やっぱ、御影さんは強いな」

「当然よ」

「誇らしげだね、ぐんちゃん」

「い、いや、そんなことないわよ」

激戦続きで本当に疲れた。どっかで休みたいが、無理そうだな。

「」

「そ、そのうち」

「どうした、何処か痛むのか？」

体育座りで木に寄りかかっている園子へと問いかける。どうやら、痛い所はなく首を横に振る。

「ああ、もしかして」

「銀、なにか知ってるの？」

「ここに来るまでにシャルを倒したんだけどさ」

「倒した!?あのシャルを二人でか!」

「えっ!」

「凄いわね」

待って、それはスルー出来ない。あの面倒臭い村正を単騎でぶっ倒

したシャルをどうやって倒したんだよ。

「ある作戦で倒したんだけど、そのやり方がちよつと」

「まさか、色仕掛け?!」

「違う! 違う! そういうのじゃなくて、シャルの善意を踏みにじると  
いうか、なんとというか」

「ああ、なるほど、確かにそれなら倒せるな。」

えくつと、なんだっけ。王道踏破? だっけな。それを破ると弱体化  
するとは聞いているが、その内容は推測するに、仲間を守る的なやつ  
だろう。

「絶対嫌われた」

「ここに来るまでもずつとこんな感じで」

「だ、大丈夫だよ! そのちゃん、シャルくんなら許してくれるよ!」

さて、一旦シャルの性格について考えよう。

俺同様、仲間絶対守るマンと村正に評されているアイツのことだ  
し、そんな気にはしていないと思うが

「アタシも一緒に謝るからさ、屋上に行こうかな?」

「だって、だって、あのシャルが一言で帰っていったんだよ?」

「東郷はわかるか? 一言の意図について」

「ここは専門家に聞こう。」

「そうね、シャルル君はいつも二言ぐらい追加してから帰るものね。  
一言・悔しかった、或いはその一言に全てが詰まっているのか。」

「悔し、かった、ううう。」

「きつと、全てが詰まってるんだよ! シャルくんならカツコつけて  
いう時があるから」

やべつ、更にダメージが入った。

まあ、シャルも人間だもんな。悔しかったとかは思うと思うが、流  
石に自分の弱さを人のせいにするやつじゃないだろ。王道踏破つて  
のがなくてもな。

「ねえ」

「ん、なんだ?」

「アナタなら、私達に負けた時どう思う?」

負けた時、結構負け続けた俺だぞ。そんなの決まってる。

「俺が弱かったからしょうがない。でも、次は俺が勝つ」

「シャルルマーニュと性質が似てる士郎が言うんだから、あっちの方もそう思っでると思うわよ」

「確かにそうかもですね。シャルル君と御影さんは雰囲気似てますもんね」

「だってよ、園子。そんなシャルも怒ってないよ」

「性質が似てる。うん。村正が言ったことが正しいなら似てるだろうな。俺は信じないけど」

「ガンバル」

「なんとか立ち上がり、片言ながらも意思表示が出来たようだな。」

「それじゃあ、お疲れ様でしたー！御影さんも頑張ってくださいね！」

「ありがとうございますー！」

「おう。」

「次は絶対に当てますね。覚悟しておいてください。」

「今回はたまたま仲間になっただけよ。次はないわ」

「お、おう。」

俺以外の全員が廃校舎へと飛翔する。

「さて、行くか」

そろそろ人数も減ってきた。以前と同じように杏が勝利しないためにも、先に倒しに行くか。グラウンド沿いの木を走っつけば見つかるだろう。

考えをまとめ、一人走る。

## 勇者王決定戦【番外】後編3

タマ&杏 side

「グラウンドが一望出来るこの場所から、士郎が森に入っていく所を視認したのが十分前。その間グラウンドに出る者は一人もいない。」

「タマっち先輩、本当に良かったの？」

「すまん、絶好のチャンスを逃しちゃって。」

「本当はあそこで士郎を倒さなければいかなかった。なのに、タマは出来なかった。士郎を脱落させることが出来なかった。」

「大丈夫だよ、タマっち先輩。次、チャンスが来るのを待とう」

「あんがとな、杏」

「あの時、何故士郎を助けたと聞かれても答えられる自信がない。上手く説明出来ないが、強いて言えば士郎が倒される所なんて見たくなかったのかもしれない。」

「そんな時、杏の背中に影が映った。」

「——杏！」

「えっ——、きやつ！」

グラウンドを眺めていた杏を押し退け、上からの奇襲を盾で防ぐ。

「さすが、珠子先輩！」

「奇襲。頭いいな、銀！」

「でしよ、うちのリーダーは凄く頭いいんすよ！」

盾越しに銀と話す。その間に杏が姿を隠し、タマの援護に移る。

「ダメだよ、杏先輩」

「園子ちゃん!？」

しかし、姿を隠す前に園子に見つかってしまった。

「あん——ッ！」

杏を守ろうと銀の双斧を弾き、走り出そうとするが遠くから矢が飛来する。



「ぐぬぬ」

完全に手詰まりだ。銀達が総攻撃を開始すれば、タマ達は一瞬で脱落するだろう。その前になんとか打開を——  
くきやつ!?

「!?須美!!」

「わっしー!」

何故か、遠くにいる須美の悲鳴が聞こえた。

「よっ、タマ。恩を返しに来たぞ」

「士郎!?」

「士郎さん!」

「ここでかやるぞ、園子」

「うん、もちろんっ!」

あっち側から出てきたということは須美は士郎が倒したのだろう。そして、口ぶりからこちらの味方をするということだ。めっちゃ心強い。

御影 side

「人数で勝つてると言っても油断すんなよ。」

「士郎もだぞー!」

「任せとけ」

おっと、痛い所を突かれてしまった。俺も人のこと言えないし、気を張りなおすか。

「杏!園子は俺に任せて下がれ!」

「わかりました!」

「御影先輩の相手は骨が折れるなく」

園子と杏の間に立ち、木刀を構える。まだ入ってない小学生の園子なら、さっきの戦いよりはキツくならない筈だ。もう、集中力が途切れ始めている。

「やあ！」

「」

「っ！」

切り上げ、園子の体勢を崩す。その無防備な胴体へと一閃。園子の精霊である、烏天狗が出現。これで園子は脱落。

「次——」

タマが戦っている銀を標的とし、駆ける。

「ミノさん！」

「!!——アタシの魂、とくと見せてやんよ！」

「見せてみる！」

片方の斧をこちららに向け、もう片方は自身の前で盾のように立てる。

カウンター狙い。いい作戦だ。

「——だが！」

「タマのことをお忘れのようだな！」

「あ、やべっ——」

「とった！」

タマの旋刃盤を防いだことによって防御を潰される。そこを突く。銀は反応出来ずに防ぐことなく、突き刺さる。

銀の精霊である鈴鹿御前が出現。これで小学生組は全員脱落だな。

「ぐわあー、負けたー!!」

「負けちゃったね。」

「ごめんなさい、二人共。私が周囲の警戒を怠ったばかりに。」

「しょうがない。御影先輩来たらどうしようもない」

「そうそう」

「おい、俺をなんだと思ってやがる」

「いや、まあ。士郎だし」

なんだ、その天変地異みたいな対応は。いつから俺は防げないものとなった。

この間、後ろからの警戒は怠らない。

「さて、どうするっ？」

「ん、そうだな。勝ち目なさそうだしな。」

「降参か？」

「あ、そっか。士郎先輩はただの助っ人でしたね」

「ほら、銀。待機場所に行くわよ」

「ええ」

小学生組は待機場所へと移動を始めた。

小学生組。小学生時代のシャルルマーニュ。何故呼ばれてないのか不思議だな。話のよると、シートンという謎の人物がいたようだ。詳細はわからない。

「いいや？タマは逆転が大好きだからなっ！」

「俺もだ。」

お互い武器を構える。

杏も警戒の内に入れるが、攻撃してくるかは不明。そもそもこの場にいるかも不明。

「先制攻撃！」

「最初からぶっ放すな」

タマの腕から旋刃盤が射出される。それを横に飛ぶことで回避する。さて、ここでタマに近づいて仕留めることは出来るが――

「まっ、後ろからくることは予想している。」

「やっぱり、通じないよなっ！」

「今度はこっちから、――だっ！」

地を蹴り、タマに急接近する。タマの寸前で止まり、しっかりと体を固定し、振るう。

「ほいっ」

「タマの受け流しとか初めて見たぞ！」

「士郎直伝のだぞ！」

受け流しすることはわかっていた。だからこそ、体を地面に固定して振るったんだ。

受け流された位置から木刀を振り上げる。そして振り下ろす。

「っ。ゴリ押し、だなっ！」

「そんなぐらいい、しか、突破方、知らねえ、からなっ！」

盾を使う奴がタマしかいないということもあり、盾使いの対応の仕方がわからない。ここは早期決戦のため、猛攻撃を与えるしかない。

「あつ——」

盾が砕け散った。流石に耐えれなかったようだ。

「！———終いだ！」

無防備なタマへと木刀を振り下ろす。当然、防がれることはなく精霊の守りによつて阻まれる。

「——うん。やっぱ、士郎は強いなっ！」

「ああ、お疲れ様。タマは本当に強くなったな。」

「うん、くっ、うんっ！」

盾が砕け散った。俺が来た時も砕け散った盾と一刀の刀が置かれていた。あれは、誰が置いていったものだろうか。

「じゃっ。」

タマに背を向け、その場を離れる。

周囲に人がいないことを確認した後、スマホを起動し残りは誰が残っているのか確認する。

「残るは俺と棗、雪花、杏だけ。いつの間に村正は脱落したんだよ。」

あの村正が誰に負けたのかめっちゃ気になるが、ここは考えるのは止めよう。

「とりあえず、探すか。」

きつと、棗と雪花も俺を探しているだろう。そろそろマジで集中力がなくなってきたから、早く終わらせたい。

「」  
やっと、見つけた。てか、なんで棗の場所は神々しきが出てんだよ。辺りが草木に覆われているにも関わらず、何故か棗の場所だけ日光が指している。まるでアニメのワンシーンみたいだ。

「ん、来たか。」

目を閉じ、瞑想していたのだろう。俺が来たことを察知したのか目を開け、こちらを見る。一応、隠れてんだが？

「士郎とは一度本気で戦ってみたいと思っていた」

「俺とか？」

俺と戦っても景品は出ねえんだけどな。金でも巻き上げる気か。

「四国の大英雄と評される力を見てみたいんだ」

「そんな大それた者じゃねえよ。てか、棗は結構な頻度で戦ってたんだろ」

「模擬戦は模擬戦だ。私は実戦に近い、今回のような戦いがしたいと思っていたんだ」

誰だよ、四国の大英雄っていう称号を俺につけた奴は。見つけたらぶん殴りに行ってやるからな、覚悟しとけ。

「話はここまでにして始めよう」

「それもそうだな」

棗はヌンチャク、俺は木刀を構える。正直言ってヌンチャクは苦手だ。軌道を読みにくい。模擬戦では読み間違えて何度も痛い目に遭っている。

「」  
「ッー、！」

ヤバイっ！集中力が切れる！

棗は最高なコンディションだ。それに、俺のガタガタなコンディションで挑んだとしても勝機はないだろう。よって、この戦いは短期決戦で終わらせないといけない。

幾度なく迫るヌンチャクを弾きながら隙を伺う。そんな時、木刀から嫌な音が聞こえた。

嫌な音がしてもお構いなしにヌンチャクを振るう。それを木刀で弾——

「あっ」

折れた。俺が手に持つ木刀が柄の上から先が折れ、後方へと飛んでいった。!

「もらった。」

確実に俺を倒すため、さつきとは比べ物にならない程大振りに振るう。

「ヌンチャクってのは俺からも軌道を変えられる。そう、こんな風にな」  
ヌンチャクは二本の棒が鎖によって繋がられた武器だ。この鎖の部分を引き張るとどうなるかわかってんだらうな。

「っ。」

「自分で喰らってみな」

棗が振るうスピードより速いスピードでヌンチャクを避け、通りぎあのヌンチャクの鎖を引き張る。引き張られたヌンチャクは緩やかに戻る予定を急に戻る予定に変更し、棗へと迫る。

「。」

「ヌンチャクは棗の体まで届かず、もう片方の棒と当たり、カツン、という音を出すだけだった。

ああ、はいはい。薄々わかってた。だって、ヌンチャクってどっちも同じ長さだよ。そりゃあ、棗の体まで届かねえわ。

——あ、もう、どうとでもなれ!

「勇者パンチっ!」

「ぐっ——、この威力は、ッ!」

友奈同様にただのパンチを打つ。それをヌンチャクを縦に伸ばして防ぐが勢いが止まらず、そのまま後ろの木まで飛ばされる。

木に衝突する前に棗の精霊である水虎が背中側から姿を表す。

「殴ったほうが早いかな。」

木刀使うより殴った方が強かったのか、俺、ちよつと泣きそう。真面目に若葉から居合でも習おうか。

そんなことを考えていると空気を裂きながら、こちらにナニか飛んでくる。直撃を免れようとして、何故か手でナニかを掴んでしまった。

「――」

「ひゅー。今のスピードを掴むなんて、中々人外ね。」

「ンじゃ、俺は帰るわ」

木刀の破片を回収し、帰る準備を始める。ついでに意識朦朧としている棗も回収する。

「え？ちよ、待って待って。なんで帰ろうとしてんの？」

「おいおい、ルール忘れたか？」

「ルール」

「〃負けを認める or 本来の武器で致命傷となる攻撃を受けると失格だったろ。」

「あ、そっかそっか！」

さつき、勢いで飛んできた槍を掴んだけど、本来なら掴めずに腕を裂けるチーズみたいに突き進んでいったろうな。想像するだけでゾツとする。

「じゃ、後はガンバってくれ」

「残すは後一人」

まあ、結果はわかってただけだな。

「脱落してきましたー！」

「私も脱落だ」

勢いよく、屋上への扉を開ける。全員が一斉にこちらに視線を向ける。

「木刀が保たなかったですね。次やる時はもっと硬いのを用意しますます」

「えっ、次あんの？」

ひなたから衝撃の言葉を聞く。

こんなキツイのをまたやるのか？

そんな感情を込め、シャルの方へと視線を向ける。すると、肩を竦めてお手上げだと言わんばかりに首を横に振る。

「残すは杏と雪花か。どちらも策士だが、士郎はどう思う？」

「もちろん、杏だろ。元チャンピオンだぞ。」

「そういや、そうだったな。前回の戦い方はどんなだったんだ？」

「確か・タマの盾で不意を突かれたな。」

あと少し気づくのが早ければ、勝てただけだな。

「つまり、タマと杏の絆の勝利だなっ！」

「おおう！」

タマがピースし、それを小学生銀が輝いた目で見ると、うん、いつも通りだな。

「まっ、オセロでもしてようぜ。多分、後一時間ぐらいはなにも起きねえだろうし」

「いいだろう。俺が相手をしよう」

「「あっ」「」」

シャルが名乗り出た瞬間、神世紀組から察したような声が聞こえた。ちなみに、中学生園子は前見た負のオーラから一転し、花のエフェクトが見える程の幸せオーラを出しながらにへにへしてる。

「さあ、始めるとしよう。」

「いいぜ。人生初オセロを見せてやるよ。」

この後、ボコボコにされた。

舞台は変わり、この学校の正門前。

「ほら、若葉遅れちまうぞ。」



「すま——、ごめんなさい。私ってほんとにドジで」

いつもの若葉からは想像出来ない、弱々しい声が聞こえる。

「つたく、しょうがねえな。」

「あつ、士郎くん。」

若葉の左手を掴み、教室まで走っていく。周りからの視線を気にせず、気にせず——

「——なにやっつてんだああ!!!」

若葉の手を離し、少し離れた位置で叫ぶ。この茶番の中で叫ばなかった俺を褒めてほしいぐらいだ。

「弱々しい若葉ちゃん。アリですね。」

「~~~~っ!」

見る。あの若葉がプルプルと小刻みに体を震わせてやがる。これで、どれ程この行為が悪かわかるだろう。俺達はこの悪を許してはいけないっ!

「弱々しい少女と強気な少年。正反対の位置にいる二人がゆっくりと信頼しあっていく。最後には桜の木の下で愛の告白を。ああ〜♪」

「タマはどこで育て方を間違えたのだろうか。」

「安心しろ、タマ。お前のせいじゃない。あれが本来の杏なんだ。」

くそっ。こんなことなら、ズルをしてでも杏を先に落とすべきだった。いつまで経っても俺は学習しねえな!

「それでは、次は園子先生とシャルさんです。」

「待ってましたっ!」

「。」

「シャル、お前。」

「ガンバ、シャルルマーニユ。お前ならなんとかなる筈だ。」

シャルのこんな嫌そうにした顔、初めて見たぞ。てか、表情筋あったんだな。

「ふっ、安心しろ。台詞は全部覚えてある」

「そういうガンバじゃないからな?なに、この茶番劇に全力かけてんだよ」

「まあ、何事も楽しむのは重要だが。お前は違うベクトルに行っ

な」

何故かドヤ顔で台詞覚えてることを自慢してきやがった。そんなの俺だって覚えてるわい。

昨日、杏が優勝した後今日はもう遅いということになり、その日は解散した。しかし、その数時間後にチャットを通して百枚超えの台本が送られてきた。そして、杏から一言。「明日これを実演するので覚えて来てくださいいね♪」ご丁寧に音符まで付けやがって。

「はい！次出る土郎さんとタマっち先輩は衣装に着替えてきてくださいいね♪」

「ぐう」

「乗り切るぞ、土郎。ここは踏ん張るしかない」

「やるしかないな。気合入れていくぞ」

「この地獄をなんとしてでも乗り切らなければ俺達に明日はない。勇者としての意地を見せなければっ！」

## 星を眺めながら

久しぶりの一人の時間。園子と銀が居候し始めてから中々一人だけの時間が取れず読めずにいた。よって、今日はゆっくりと勇者御記を読んでいきたいと思う。

俺が読む前に園子と銀は読んでいるようで、ここまで読んでいいという付箋が付けられている。なにやら付箋の後ろからは乙女の秘密らしい。

まあまあ、勇者であつても中学生の女の子だからな。そういう類の話しも出てくるだろう。なら、男の俺は読まずに必要な部分を読むとしよう。それが一番平和的に解決する方法だ。何を解決するのか知らないがな。

「――」  
表紙を捲り、勇者御記と書かれている扉絵的なものも捲る。二頁を捲ると、ようやく人が書いた文字が見えてくる。

「二〇一八年、二年後か。」

俺には二〇一六年までの記憶しかない。この世界に来る前に出会った神様。建速須佐之男命が言うことが正しければ、俺は死んでいく。

脳梗塞、心筋梗塞、他殺。様々な要因が考えうるが、今はそこが問題点ではない。

「っ・検閲、か」

大赦は勇者をなんだと思つてやがる。なんの為に命をかけて戦つてると思つてんだ。

友、家族、恋人。掛け替えのない者のために戦つてんだよ。それを消す？ 巫山戯んのも大概にしとけ。

落ちて着け。何故。御影の勇者御記は検閲されていない？

「心底嫌だが、しようがない。」

一勇者御記を閉じ、スマホを手にする。そして、ある電話番号にか

ける。

『はい、上里 柚葉です。』

「シャルルマーニュだ。少し時間いいか？」

『もちろんです。本日はどういったご用件で？』

上里 柚葉、大赦のツートップである上里の次期当主。そんな彼女なら、御影の勇者御記について知っているだろう。

「御影 士郎の勇者御記について知っているか？」

『はい。代々上里家が保管し、継承していた物です。そして、二年前シャル君のご自宅に私が置きました。』

「何故だ？」

●後で不法侵入で訴えておこう。

『それが言い伝えであるからです。』

「誰のだ」

『御影 士郎様です。』

「なるほど、了解した。これで話は終わりだ、それではな。」

『はい。いい一日を』

即座に通話を終了させ、スマホを降りたんだ布団の上に投げる。

正直、あの人に対して苦手意識がある。そもそも、出会って二回目で求婚されたら誰でも恐怖を抱くもんだ。

「さて、続きを」

再度捲る。一日、また一日捲っていく。

大赦で見た情報、御影の御記から得た情報とやら変わりはなかった。ただ一つ、わかったとするとするならば

「余程信頼されていたのか」

乃木 若葉からの御影への想い。

『リーダーは彼の方が適任ではないだろうか？』

『士郎への負担が多くなってきている。今度、息抜きに一緒にうどんを食べに行こうと思う。』

『欠損どれ程の苦しきなのだろうか。本人は何ともないような顔をしていたが、相当な不便を感じている筈だ。私達でサポートしなければ』

『信じたくない。士郎が私達の誰よりも気高い精神を持っている士郎が一般人に？を向けるなどある筈がない。』

『真意を知った。士郎は私達の為に激高し、我を忘れたようだ。だが、私達は勇者だ。護るべき一般人へ？を向けるなどあつてはならない。今度、会ったときは注意しておこう。』

『千景によつて士郎が負傷した。明日することは千景を頭ごなしに怒ることではない。共に罪を背負い、士郎へと謝りにいかなければ。きつと士郎ならそうする筈だ。』

『やはり、士郎がリーダーに向いている気がする。しかし、二時間待たされたのは許さないからな。』

『今日は楽しかった。おっと、気が緩んできている。しっかりと張り直さなければ。それにしても、士郎について私達はなにも知らないな。今日初めて好物を聞いた。以外にもうどんではなかった。今度、誘うためにも焼き芋と干し柿が美味しい店を探さなければ』

『士郎が保有する草薙剣とは一体なんなのだろうか。今回の戦いは私達の完敗だった。手も足も出ず蹂躪された。だが、士郎が逆転勝利を収め、なんとか四国の平穩は守られている。その代償は大きかったがな。早く目を覚ましてくれ』

『明日???が決行される。私達には祈ることしかできない。だが、士郎なら大丈夫だ。四国の大英雄なのだから。』

最近ひなたとあまり喋れていない。昨日今日は大社の方にずっと行っているが、ついさつき階段で少し会話出来た。どうやら、士郎と話すつもりだったが寝ていて駄目だったと言っていた。少し汗をかいていたが、慌てて来たのだろうか？』

『今日は書く気力が湧かない。』  
(以上勇者御記より一部抜粋)

「いや、これは信頼と言うよりは」

これ以上はやめておこう。恋愛経験ゼロの俺が勝手に決めつけるのはよくない。それに、友愛の可能性の方が高い。

「これ以上は駄目か」

後五十頁以上続いているが、付箋がついている。これ以降は乙女の

秘密なので俺が読むことはできない。

メツチャ気になる。」

「むっ、もうこんな時間か。」

時計を見ると針が五時を指している。もう時期、園子と銀が帰ってくる。その前に買い出しに行かなければいけない。

御記を机に置き、席を立つ。エコバックと財布を持ち、部屋を出て玄関へと進む。

「ただいまー。あつ、シャル」

「銀か。今から買い物に行ってくる。お留守番を頼むぞ」

「おつ、それならアタシもついていくよ。荷物持ちは多い方がいいもんな」

確かに。銀が言うことは一理ある。ここは素直に甘えよう。

「では行こうか。」

「レッツゴー！」

鍵を締め、近くの八百屋に向かう。

園子が帰ってきたとしても、鍵は持っているから安心だ。もし、持ってなかったらチャットでくるか、友奈か東郷の家にお邪魔するだろうからな。

「今日はなに作る予定なんだ？」

「ふうむ、そうだな」

八百屋に置かれてる野菜を見ながら、今日の献立を考える。

夏の旬を、と思ったがこの世界に旬などない。一年を通して売られている野菜の種類は変わらない。それでも、季節感ある料理に出来るだけしている。その方が、なんか日々を過ごしている感じがする。

「冷やし中華でも作ろうか」

「最近暑くなってきたもんなー。最高気温更新だったよ」

「留まるところを知らないな。熱中症に気をつけてな」

「わかってるって！」

いつもの香川がどれ程暑いかはわからないが、今日の気温は俺の知る全国を見ても異常だ。地球温暖化の言葉知らないこの世界でこの気温は普通ではない。明らかに世界が歪み始めている。

「よし、いい出来だ」

あれから一時間後。買ってきた食材の使うもの以外は冷蔵に仕舞い、冷やし中華を余裕を持って八人前作った。

「それでは、俺は夏凜に配達してくる。お腹が空いてるなら先に食べておいてくれ」

「おっけー、テレビ見とく」

「うん、待つとくね」

「無理はしないようにな」

冷やし中華二人前を保冷バックに入れ、夏凜の家に向かう。ここからだいたい二十分程だ。チャットで行くことは伝えているから、先にご飯を済ませるというアクシデントは起きないだろう。

「」

夏だからかまだ日が暮れず、まだ周辺で子供とその親が並んで歩いている。きつと、遊びから帰ってきているのだろう。

俺にはない記憶だ。そもそも父親の顔なんて覚えてすらない。周りが両親に甘やかされるのを羨ましいと思ったことはなかったが、疑問があつた。

何故、俺の隣には誰も立っていない？

母さんはいつも俺の前に立って、道標となっていてくれた。俺が目標とする輝き。

誰よりも尊敬していた。カール大帝よりもだ。そんな人が俺の為

が故に死んだ。そこまでする必要はあったのか聞きたかった。

今なら理解出来る。母さんは俺に幸せになって欲しかったんだ。俺が幸せになるなら何だっつてする覚悟があった。命を差し出す価値があるものだったから、あそこまで頑張れたのだと。

母さんには悪いが、俺はもう幸せにはならなくていい。その代わりにアイツらが幸せになってくれたらと思う。今まで誰かの為に命をかけて頑張ったアイツらが幸せなら、俺はどうなってもいいと思う。そう、思えたんだ。

「ああ——親不孝者だな、俺」

日が完全に落ち、夜空が広がっていく。何物にも負けまいと星々が輝いてくる。

「穢れはなく、汚れもない神々の聖域」

何も無い場所で独り言を続ける。誰に言うまでもなく、ただ気が狂うのを防ぐために言葉を紡ぐ。

「神秘が満ちていた神代に神は身近のものとして君臨していた。試練を与え、過酷な道を与え、絶望を与えた。時には、救済もあつた。一つの時代も神とはそういうものだ。姿を隠した今でさえもだが、コレはなんだ？」

救いの手を差し伸ばし人々を守っていた神樹。人を試さず、ただ守護している神樹。

何十年、何百年思考しようが答えは出ない。

「人々は茨を越え、神々に迫る。ついには天井神を越える者もいた。それが英雄——人としての天井を超えた者。」



人間に不可能であつても、それは英雄に当てはまらない。

「勇者——勇氣ある者に贈られる称号。神の試練に勇ましく挑んだ者。試練を超えれず、死した者であつても勇者だ。」

勇者とは自身で叫ぶのではなく、他者が叫ぶものだ。自身で自身を勇者と叫んだとしてもそれは勇者ではない。ただの愚者だ。

「いつもいつも!!人々の欲望、怠惰、執着、穢れを一人で受け止めて来やがる。」

いつもそうだった。

死した勇者が浴びている穢れは、常人とは比べ物にならない。時には全身が真っ黒なものもいた。

ここは穢れはなく、汚れもない神々の聖域。そのような者の通行は許可されていない。

「ふうー。まあいい。それが俺の役目だ。神々がいなくなり、人の時代に戻るまで待つとくさ。だから頑張ってくれよ、勇者」

白い天井を見上げる。所々、亀裂が入っており今にも割れて破片が落ちてきそうだ。

なにもしなければ、後二ヶ月。それが人類滅亡の開始までの時間だ。

「——それともなんだ？また、世界を騙すか？」

## 聖騎士帝

翌日、朝ご飯を作ろうと銀と園子よりも早く起きた朝。いつもの習慣で郵便箱を確認しに、外へ出た。昨日の朝に比べれば幾分か気温も下がったようだ。

そんなことを思いながら、郵便箱を開ける。中には一枚の写真が入っている。

「ふむ・大赦に行くか」

写真には輪切りにされた男の姿が写っている。銀達の目に触れないように即座に火の元素で燃やす。

この写真についてわかることは二つ。俺が前言ったことを守らず、大赦がなんかしでかした。そしてもう一つは、大赦の連中は俺に来てもらいたくないようだ。

「子供がすることに似ている。」

「良し。ほら、クロもだ」

朝ご飯を作り終え、机に並べて置いていく。そろそろ銀か園子が起きてくるだろう。

そんなことを思いつつクロの皿に餌を入れていく。ゆっくりながらも、着実に量が減っていく。

うん、カワイイ。見てて癒やされる。

「ふあゝ・シャル、おはよ〜」

「ああ、おはよう。朝ご飯用意出来ているから、早く顔を洗ってくるといい。」

「りようか〜い・ん〜っ。」

眠たい目を擦りながらも、洗面所へと向かっていった。

正直心配だ。この前、洗面所までの廊下で立ったまま眠っていたかな。その時は、銀が洗面所へと連れていった。

「おっはよー！今日もいい朝ですなー！」

「おはよう。今日も元気でなによりだ」

銀は先に洗面所に行つてからここに来る。

最初、銀も俺と同じように起きて朝ご飯を作っていたが授業中に寝ていたため、充分に睡眠を取らせることにした。

「やっぱ、シャルの朝ご飯は美味しそうだな」

「さあ、冷める前に頂くといい」

「うん、そうする」

「うおっ、園子。いつの間に」

いつ帰ってきたのかわからなかったが、気づいたら園子が席に座っていた。それに続き、俺と銀も席に座る。

全員が席に座ったことを確認して手を合わせる。

「いただきます」

やはり、これがなければ食事は始まらない。世界がどんなに変わろうともだ。

「うんっ！美味しい！」

「我が家の専属シェフに」

「却下だ。それよりも話がある」

どこぞの各国を歩いてきた赤い弓兵にお願いするといいい。良い環境なら、喜んで働くと思うぞ。多分

つとそれよりもだ。銀と園子に今日、俺が休むことを伝えなければ

「なに？」

「相談事か？出来る範囲で受け付けるぞ」

「今日、俺は学校を休んで大赦に行く」

「一人の箸が止まる。」

「呼び出し？」

「いや。少し用ができただけだ。」

「アタシ達も——」

「お前達は普段通りに過せ。他の皆が心配するぞ」

流星に三人抜けるとなると部活の活動に支障をきたす。それだけは避けないといけない。

「ぐちそうさまでした。」

啞然としている銀を尻目に皿を流しへと運ぶ。ささつと洗い、手を

拭って玄関へと向かう。

「それでは行ってくる。もし、ご飯時に帰ってこなかった場合は出前を取るなり風の家に行くなりするがいい。」

風先輩なら温かい料理を出してくれるだろう。それに、銀も料理出来るし心配はしないがいい。俺は俺がすべきことをしなければ

「いってらっしゃい」

「いってら」

「ああ。」

扉を開け、霊体化する。そのままの状態で飛翔する。目指すは大赦本部がある剣山。

話し合いで終わらせたいが、あの写真を俺に送ってくるということ  
は誓いを破ったということだ。しかも、赦して貰うが故に自分達の手  
で同士を輪切りにした。

一人二人は指先から徐々に輪切りにして行ってやろう。

あれから数十分かけて剣山に到着した。

「さて、むっ、この感覚は」

早速本宮へと参ろうとするが、何か妙な感じがする。念のため霊基  
を変え、ジュウユーズを構える。

「——アナタがシャルルマーニュね？」

突如として木の影から一人の少女が出てきた。勇者服のような服  
装でだ。

「ああ、俺がシャルルマーニュだ。貴様は？」

「防人の楠 芽吹。」

防人 ほーん、なるほどな。やっぱ、大赦は一回潰しとくか。

「楠、俺はこの先に用がある。通してくれるか？」

「それは出来ない相談ね。」

おおっと、このパターンは。

「ではれば、戦うか？」

「もちろん」

「ルールは？」

「何でもアリ。そう、こんな感じに」

ジュワユーズで背後から迫る弾丸をたたつ斬る。そして、上空からの鞭のような物での攻撃も弾く。

「いいだろう、その勝負に乗ってやろう。ただし、骨のいち二本折れる覚悟はしておけ」

俺の命狙いなら、手加減する必要はない。というか、そんな余裕ない。もちろん殺さないように力は抜くがな。

この数、そして遠近両方いけるときた。正直言つてかなりキツイ。一瞬でも気を抜けば、俺の頭から脳髓が出ることになるだろう。

「っ」

そんなことを考えていると、楠が俺へと接近してくる。手にはカッターのような刃。当たればスパッと斬れそうだ。

「言っただろう。骨のいち二本折れる、となっ！」

「あぐっ——！」

「メブっ!!」

ジュワユーズで刃を受け、空いている左手で楠の鳩尾当たりを殴る。殺さないように力は抜いてはいるものの、想像を絶する痛みだろう。

吹き飛ばされた楠は砂利の上を転がり、荒い呼吸を繰り返して倒れている。そんな彼女に一人の防人が近づいていく。

「よくも芽吹さんを」

「ハアーツ!!」

「二人だろうが結果は変わらない。」

銀髪と金髪の少女が鞭と双剣で攻撃してくるが、些か連携力が弱いな。

金髪の方は連携を意識しているが、銀髪が全て乱している。正に猪突猛進ガールってな。

「これで三人——」

「チイツ。」

「やばっ！」

ジュワユーズで武器を粉々にする。真の神造兵装に劣るがジュワユーズも名刀だ。神樹の力を内容しているとしても、どちらが頑丈かは比べるまではないだろう。

これで一度に二人持つていける。後何人いるかは不明だが、これの主戦力は終わりだろう。

「ッ！」

二人の前に透明な盾のような物が出現する。

これは・宝具か？トロイア戦争で大英雄の投擲を防いだアイアスの盾に似ている。

「これ以上は誰もやらせないっ！」

「助かりましたわ！雀さん！」

「恩に着るぜ！」

一旦二人から距離を置き、誰を最初に倒すか考える。倒しやすさなら、銀髪の子だろう。だが、雀と呼ばれるあの子がそうはさせないだろう。

狙うは盾役だな。

「耐えてみせよ」

「ッ！」

「雀さん！」

瞬時に三つの盾が出現する。

あの硬さの盾を三つとは・ちよつと面倒だな。

ジュワユーズを地面に刺し、体を固定する。

「我が栄光の輝きをッ！」

俺から半径10mが輝きに満ちる。まあ、ただの輝きではないがな。

濃密な五大元素を俺から放っただけだ。濃密であるが故に質量を

持ち、当たった全ての物を破壊する。

「あつ——」

轟音に紛れてナニかが砕け散る音がした。

「生きているな」

倒れ伏す少女の脈を測り、生存確認。目立った外傷はないから、吹っ飛んだ際に何処か打ったのだろう。

「お前えええ!!!」

「感情任せはオススメしないな」

「がっ」

武器も持たず、素手で俺へと迫る銀髪の子を蹴り飛ばす。これで後一人

「射撃戦か。それもまた一興」

乱発される弾丸を斬りながら、相手の出方を伺う。どのような行動をしようが、叩き伏せる。

「躊躇するな。」

「っ——!」

俺の背後へとバレずに近づいてきている楠に語りかける。

「悪だと認識したのなら、殺せ。そうでなければ俺が全員の息の根を止める」

そういう戦いをしているんだ。まあ、俺は誰も殺さないんだけどね。

「っ——、ハアーツ!!」

鞭と刃によって逃げ場のない攻撃を繰り返す。そこに弾丸が加わるとマジでどうしようもない。

しよぅがない、使いたくはなかったが出すしかないだろう。

「我が勇士達よっ!」

「なっ」

「デタラメですわね。っ!」

アストルフオが弾丸を斬り落とし、ローランとレナルドが楠の攻撃を防ぎ、そのままの勢いで武器を破壊した。

「どうする、まだやるか？」

「……」

「芽吹さん、ここは負けを認めましょう。どこからどう見ても私達の負けですわ。」

「凄いい形相で俺を睨んでくる楠とは正反対に金髪の子は素直に負けを認めてくれた。」

「……そうね。早く負傷者の手当をしないと」

「負傷者の手当は此処から離れた場所でするといい。」

「俺の言葉に頷き、雀という子と銀髪の子を担ぎ離れていった。」

「さて、やるか。」

もう話し合いはなしだ。

子供のような事をした挙げ句、自分達は少女達の後ろで安全に過ごしているなど論外だ……

一応、安芸先生と上里 柚葉にチャットで大赦本部にいるか聞く。

安芸先生からは別の場所にいるという返信を受け、上里 柚葉からは家にいるという返信があった。両親の挨拶がなんとかかんとか言っているが無視。本宮へと視線を向ける。

「全開門固定ッ！」

十二勇士の矛先を頂点あたりの本宮へと向ける。中にいる人は無視。死のうが俺には関係ないことだ。

矛先に五大元素を圧縮、収束していく。

「——放てー！」

色とりどりのレーザーのような物が放たれ、本宮へと命中した。凄く罰当たりなような気がするが、大赦が悪いので赦されるだろう。

木が折れていく音と共に建物が崩壊していく。

「帰るか」

踵を返し、本宮を後にする。

予定より数百倍早く帰れたな。これなら、学校に行けるな。まあ、



なにも情報は得れてないんだけど。

## 違和感

剣山から家へと一直線に戻る。当然、霊体化した状態だ。行った時同様、数十分で帰ってこれた。鍵を開け、家へと入る。

入った瞬間、玄関があるべき状態ではないことに気づいた。靴が七——六足ある。しかも、通学用の

「まさかな。」

今の時間は授業があつてる時間だ。銀と園子は既に学校に行つて、授業を受けているだろう。

その筈、なんだけど。うん、完全にいますね。楽しそうな話し声が聞こえるもん。この感じ、多分勇者部全員集合してますね。いや、なんで？

「今帰った」

「おつ、シャルじゃん。おかえり」

「おかえり〜」

「あつ、シャルくん。お邪魔してるね」

「お邪魔してます」

「不良部員が帰ってきたわねえ。あ、この煎餅中々良いわね」

「お邪魔してるわよ。この家、煮干しとサプリが置いてないけど栄養足りてんの？」

前四人は丁寧挨拶してきてんのに、後二人で台無しなんだが？

「風と夏凜は勝手に漁るな。」

「銀に許可貰ったんだからセーフでしょ」

「私はただ、必需品があんのか確認しただけよ」

「煮干しは必需品かもしれないが、サプリは必需品ではない。」

家庭によっては煮干しを味噌汁作るときに使うかもだが、俺は使わない。うちは昆布とかつお節が主流だ。銀は使っていたようだがな。

「そんなことよりもだ。何故、学校に行かず俺の家で現を抜かしている？」

「学校に向かっ・てる途中に銀先輩と園子先輩が集合、つてチャットで送ってきて。」

「それで、アタシ達は方向転換してここまで来たってこと」

「私もそんな感じね」

「私はそのちゃんに連れられてかな」

なるほど、なるほど。つまり、銀と園子だな。

「弁解を述べよ」

「え、え〜つと園子、頼んだ！」

「ふっふっ、任せ給えよミノさんくん。ということで、じゃじゃくん！」

「ミノさんくん」

多分、最近放送されてる探偵系に影響されたんかな？そんなことよりもだ。

園子がじゃじゃーんとした方向に目を向ける。そこには一つのアタッシュケースが置かれている。

「私達が来たときからあるけど、中身はなんなの？」

「それじゃあ開けるね。」

そう言い、園子がアタッシュケースについているロックを外している。そして、遂に開かれる。その中身は――

「ふうむ」

「これっで、私達のスマホだよね？」

「勇者システムが入ってるヤツね」

「これがあるってことは」

「」

七つつの窪みに俺達が以前使っていたスマホが置かれていない。一つだけ既に抜き取られている。

皆、それぞれの反応をしているが、銀一人だけは歯痒そうにスマホを見つめている。

「安芸先生に頼んで持ってきてもらったんだ〜」

「でも、なんか一つだけ空いてるわよ？設計ミス？」

「ん〜？私もこれはわからないかな〜」

七個のスマホ。それは勇者システムが七個必要だったことを意味している。夏凜と銀で一つと考えると、勇者は八人いたということになる。

「今から名を呼び上げる。」

「急にどうしたのよ？」

「シャル先輩。」

この家に入ってきた時もそうだった。俺は六足の靴を見て、七足ではないと思った。それはつまり、普段は七人だったことを俺の深層心意が伝えようとしているということ。

粗捜しになるかもだが、なにも行動しないよりは断然良い。

「風」

「え、えっ？なに、私試されてる？」

いつもと変わらない。

「友奈」

「はいっ！」

いつもと変わらない。つまり、いつも友奈は元気ということだな。

「っ、樹」

「え、あ、はいっ！」

言葉が詰まってから、樹の名前が出た。ここだな。

友奈の隣に誰かいた筈なんだ。誰か。誰なんだ？

「神樹館組いくぞ」

「ばっちこーいー！」

「間違い探しなら任せて」

少しでも枠を狭める。にしても、この違和感。人がいないことに対してのものではない感じがする。

もっと遠く。絶対に手が届かない位置から感じる。

「園子」

「はくはいっ！」

「銀」

「ちっす！」

「シャルルマーニュ」

.....

違和感は常にあつた。神樹館組は四人の筈だ。  
遠く・遠く・オツケー、理解した。

「一旦俺から離れろ」

「?わかつたわ」

風先輩に続き、ドンドンと皆が離れていく。なんだか、俺が臭いみたいになつてているが、決してそうではない。そうではない。うん。

「――聖なるかな、か」

「二つ 二つ」

全てのスキルを限界まで引き伸ばす。そう、全てだ。

魔力放出、聖騎士帝、王道踏破はく。上がってる感じはしないな。

これで、天の神か神樹からの影響は――ツ!?

「ツ」

「二「シャル（くん）!?!」」

「ちまっとアンタ!?!」

「大丈夫ですか!?!」

突如として頭に猛烈な痛みと共に記憶が流れる。

ああ――そうだったな。つたく、カツコ悪いつたらありやしねえぜ。

「東郷 美森、 鷲尾 須美」

「二「!!?!」」

「あれっ、なんで私っ」

友達の名前を忘れるとは、俺も墜ちたもんだな。そしてようやく、あの写真について理解出来た。

東郷に何かしやがったなあ

「もう一度大赦に行つてくる。」

今度は跡形もなく消し飛ばしてやる。芥のようにな。

「シャル、今はわっしーを探すことを優先しよう。そんなのに構つてる時間はないと思うよ」

「それもそうか。」

確かに園子の言う通りだ。少し落ち着いて考えれば、時間の無駄だと理解出来る。ここで優先すべきは東郷を探すことだ。

「んじや、アタシは須美んち行ってくる！」

「待て、銀。」

物凄いスピードで部屋から出ようとする銀の肩をなんとか掴む。

「うおっ、と。どうしたんだよ、シャル？今は一秒の無駄すら許されな  
いんだろ？」

「一先ず落ち着け。友奈もなんとか立ち直ってくれ」

「う、うん。」

「この煎餅食べて元気出さない」

「サプリもあるわよ」

「煎餅とサプリじゃ、流石の友奈さんでも」

「わぁー♪ありがとう！」

「え、ええ〜」

時間がないかもしれないのは百も承知だが、ここで下手に動くとな  
員死ぬ可能性がある。もちろん、俺含めてだ。

「一先ず現状解ってることを話す。」

「東郷が私達の記憶から消えた。人の手では出来ない芸当ね」

「ああ、その通りだ。今回の原因は天の神か神樹にある。」

「もちろん、確証はあるのよね？」

「もちろんだ。俺が神からの影響を弾いたら、記憶が戻ってきた。そ  
して、そこから伝播。きっかけを作ったことにより、この場の者は全  
員記憶が戻った。」

神性への特防があつて本当に良かった。今回は心底そう思うよ。

「天の神からの影響、つてことでいいのかな？」

「それはわからない。だが、もしこのまま東郷の探索に出て神々の怒  
りを買うと不味いことになる。」

「どうなるんですか？」

「惨たらしい結末が待っているだろう。」

「ここで一番に警戒すべきは天の神。今回の諸悪の根源に位置する  
なら、東郷の探索で最悪一人死ぬ。まあ、もちろんその一人は俺なん  
だけどな。」

「でも、シャルは行くんだよな？」

「当然だ。この場でなにもしないのは何よりもカッコ悪いからな。」

「この程度で東郷を見捨てるなら、俺はここまで来れてないだろう。それじゃあ、アタシ達もやらなくちゃね。後輩に格好良い所、全部持ってかれるのは先輩としては三流以下よ」

「それは誰目線なの、お姉ちゃん。あつ、もちろん私も東郷先輩を探しますっ！」

「とーぜん、私もよ。東郷が吹っ切れまくってることなんて皆知ってるわよ。どうせ、今回も私達が想像すら出来ない場所にいるんだろうし、人数多い方が手っ取り早いわよ。」

「もちろん、アタシも須美を探す。こんな形でのお別れはもうコリゴリだかんっ！」

「わっしーは私のズツ友。神に怯えて、見捨てるなんてズツ友じゃない。それに、友達を助けるのは当たり前だもんね〜」

「守る、って約束したんだ。東郷さんとまた笑い合うんだ。だから、絶対に東郷さんを見つける！」

「待つて、待つてくれ。どうして、こんな皆は覚悟決まりまくってたんだ？ いや、気持ちはわかるよ。わかるんだけども。風先輩はテヘペロすんな。」

「ならば、東郷を搜索しに出よう。各自、勇者システムを手にしてくれ」

「うんっ。」

「いやあ、久しぶりの再開ね。戻って欲しいとは思ったことないけど」

「前と同じなんでしょうか？」

「そうじゃない？ 形とかも変わらないし」

「。」

「あつ、安芸先生から説明書貰ってるよ〜」

「説明書？」

「アツプデートか？」

流石、安芸先生。他の大赦の奴らより百倍働いてる人は違うな。

「うん。それじゃあ、読むね」

## 勇者システム変更点

・満開の際の代償を失くせるようにしましたが、エネルギーを全て消費することになります。

・エネルギーとは新たに勇者システムに蓄えられた神樹様の力であり、精霊の守りを発動させた際にも消費します。

・再度蓄えることは不可能です。

※シャルルマーニユの勇者システムは変化ありません。

「ようやく修整されたか。」

「また、シャルのは変わってないね」

「満開は一回限りってことね」

「精霊のアシストがなくなるのは結構な痛手ね。」

まあまあ、代償がなくなっただことに意味がある。これで悲劇が繰り返されることはなくなった。

「満開使用は各自の判断に任せる。使う使わないは個人の自由。精霊で自身を守るのも個人の自由。ただし、必ず生き残る方を選択するんだ。」

「うんっ。絶対に生きて帰ってくるんだ」

「わかりました。」

「誰に言ってるのよ」

物語のゴールはここではない。必ず東郷は取り戻す。例え、神が邪魔しようともだ。

・天の神が出てきた場合、御影との作戦通りジュウユーズを放つ。そこから御影が受け持ちだ。アイツなら終わらせてくれるだろう。

「」

「銀」

「ぼーっとしている銀を呼びかけるが、反応がないため頬を伸ばす。ふむ、柔らかい。」

「あえ、なっ、なに!？」

「銀、これを使うがいい。満開はないが、きつと助けになってくれるだろう。」

「こ、これってシャルのうん、わかった。この三ノ輪 銀に任せな」



これは俺が持つていても必要ない。勇者システムなど俺には不似合いだ。それなら、勇者である銀に託すのがベストだろう。

「それでは征くぞ。皆は東郷が行きそうな場所を。俺は全国を探す。」

「勇者システムにあるリーダーを使えば、東郷のスマホの反応を拾ってくれるわ。活用していきましょ」

「了解ですっ！」

各自、俺の家から飛び出し東郷の行きそうな場所へと駆ける。俺は最後に家を出て、鍵を閉める。

霊体化し、屋根の上をつたって移動する。

## 称号剥奪【閑話】

俺と親友で導き明かした研究が世界に発表され、一ヶ月が経ったある日。俺は自室にあるベットに寝転がっていた。

「ふうー。」

ようやく一息つけた。

この頃、TVとか記者からのオファーが多すぎて休みなんて全然取れなかった。なんなら、一日中思考してる時より疲れた。

「次、だな。」

今、ぐでぐつとしているが本当はそんな時間はない。

研究の成果として、ある程度お金は貰ったが一生楽して過ごせる程の大金ではない。よって、俺は次の職を手に入れなければいけない。

俺の親友はと言うと、普通に医者に復帰しました。まあ、今回の協力は俺が無理言つて頼んだ事なだけだな。ほんつと、アイツには頭が上がらん。

「中学教諭、管理栄養士、市役所勤務。ん〜。」

高校と大学で暇な時間に勉強して取った、歴史の中学教諭と管理栄養士の資格。そして、一応有利になるような資格を取っている公務員。

俺的には中学教諭がやりがいあると思うが、世間の反応を見るに一番大変そうだな。

考えてみればわかる話だ。生徒の進路を考えたり、部活の顧問したりで大変だもんな。しかも、顧問は給料出ないらしいし（多分）。

「ん〜〜〜。こうなったら、ルーレットで決めるしかないか。」

スマホを起動し、手頃なルーレットを探す。使いやすくて、スツと設定出来る感じの――

「ピンポン／

「んっ?。」

誰だ?

俺が思い当たる二人は、どっちも今日は忙しい筈だ。俺んちに来れる余裕なんてない。

「出るか」

「しばらく考えた後、俺は歓迎することに決めた。」

「はい、何方様で——」

「勇斗か?! 勇斗だよな!」

扉を開けた瞬間、知らない中年ぐらいのおじさんに迫られる。正直言って、すぐさま扉を閉めて警察に通報したい所だが、暴力などはなため思い留まる。

「勇斗ですが、貴女は?」

「ほら! 俺だよ、俺っ!」

「?」

そんなオレオレ詐欺みたいなことを言われても俺には全く心当たりはない。

相手から隠している左手でスマホを握る。

「やっぱ、覚えてねえよな。まだちっちゃかったもんな。」

この口ぶり、まさかいや、そんな訳があるもんか。本当にそうなら、なんで今まで——

「お前の父ちゃんだよ。」

「お茶」

「おっ、気が利くな。」

一先ず、自称俺の父親を家に上げリビングへと通した。そして、社交辞令でもあるお茶を出す。

自称俺の、面倒臭いな。自称父でいいや。

自称父は俺が差し出したお茶を一気に喉へと流す。そして、空になったコップをテーブルへと戻す。

「いろいろ聞きたいことはありますが、まず、貴女は本当に私の父ですか？」

「もちろん。DNA検査でもやるか？」

自信たっぷり、と。嘘をついている感じはしないな。まあ、俺の勘はそこまで鋭くないけど。

「じゃあ次の質問です。なんで今なんですか？母さんが死んだ時に来ればよかったんじゃないんですか？」

「それに関しては本当に申し訳ない。」

はいダウト。

申し訳ないと思ってる人の抑揚ではない。それともなんだ？感情の起伏が全くない人種か？

「母さんの死については、つい最近知ってな。TVでお前が出演してる時の質問で初めて知ったんだ。」

なんだ、この人。

本当にこの人は俺の父親なのか？もし、そうだったとしたら心底虫唾が走る。一滴でもこの人の血が入ってるなんて考えたくない。

「それじゃあ、最後の質問だ。今日はどんな要件で来たんだ？」

さっさと話を終わらせて、この家から出て行って貰おう。ここは俺と母さんの家だ。部外者はお引取り願います。

「もし、勇斗がいいって言うんならまた一緒に——」

「アンタとの『また』なんてない。上辺を棄てて、さっさと要件言ったらどうだ？」

「うっ、上辺なんて、そんなこと。」

「なんかたじろいでんな。どうやら、演劇家のようなだ。」

「正直、お父ちゃん最近困っててな。物価高のせいでお金が底を尽きたんだ。ちよつとだけでいいから、お金を貸してくれないか？」

「マジで殺そうかな。きつと、世のため人のためになると思うんだ。」

まあ、困ってるのは本当みたいだな。はあ。

「今は手持ちがこれだけだ。」

「おお、ほんつと、助かったよ！いつか絶対に返すからな!!」

財布から2万円を取り出し、自称父へと渡す。返されないので重々承知だが、こうでもしないと帰らないだろう。この場にずっと居座って貰ってはいつか殺してしまいそうだ。

「ただし、お金の貸し借りはこれまでだ。アンタと俺は他人同士。父と子の関係じゃない。だから、一生ここに来るな。次来れば問答無用で警察に通報する。」

「わかつたよ。無理言っただけで上げてもらったのはこっちだもんな。あつ、でもこのお金を返すとき——」

「返さなくていい。だから、一生この家に近づくな」

どうせ、返すのを理由にまた来て、また金借りていくんだろ。そしてその繰り返し。

「そっか、それじゃあな、勇斗。元気で」

「一応、家から出ていくまで目線は外さない。まあ、俺んちに金目の物は置かれてないけどな。」

そして、ゆっくりとしたペースで外へと出ていった自称父を確認した後、一人ため息をつく。

「吐き気がする。母さんはなんであんな奴と結婚なんかしたんだ。」

母さんがあんな奴と結婚するなんて思えない。

嘘が見抜けなかった、或るいはなにか秘密を握られていたのか。どちらにせよ、アイツとは今後一切関わらない。それが懸命な判断だろう。

「はあ。」

自称父が口をつけたコップを見る。

DNA検査。いや、止めておこう。もし、本当の父だったら殺しに行く自信がある。ここは不明にしておこう。

スマホをつけ、先程設定したルーレットを回す。緩やかに遅くなっていき、針が指し示す。

「中学教諭、か」

これからすることは決まった。なら、後はこれに全力ダッシュするだけだ。

確か、教員採用試験が二ヶ月にあるからそこまで総復習してとけば問題ないだろう。

「また勉強だな。」

何処までも付いてきそうな感じだな。

あれから二日。食事、風呂、睡眠以外の時間は机に向かっていた。今日も今日とて、机に向かおうとした時だった。

／ピンポーン／  
「んっ？」

まさか、アイツじゃないよな？アイツだったら通報しなきゃ(使命感)

「はい、ど——」

「勇斗！なんで、電話出ねえんだ!？」

「うおっ、どうした。そんな慌てて」

自称父に負けず劣らずの勢いで扉を開けてきたのは、俺の親友。名前は、いいや。

今まで見たことない程の剣幕で家の中に入ってくる。

「大変なことになってんぞ！いい加減、ニュース見る癖つけやがれ！」

「他人の死なんて見て、なんになるって言うんだ」

ドタドタとリビングへと二人揃って行き、TVをつける。丁度何かの特番をやっているようだ。内容は——

「」

「なんでか解らんがお前の成果が元々俺の成果だったっていうデマが流れてる。」

「デカデカと俺の名前と大嘘憑きというロゴが出ている。

んく、ちよつと心当たりないな。」

「まっ、一ヶ月もすれば落ち着くだろう」

「それは甘チャンだぞ。こういうのは徹底的にくる。今だって、家の前記者だらけだぞ。俺ん所もそうだ。全くいい迷惑、いや普通に迷惑だ。」

「めんどくせえ。どうせ、またインターネットからの情報なんだろう。情報リテラシーの授業受けてる？あとモラルも」

「とりあえず、俺はお前がやった証拠の資料を整理する。その間、お前は。どうする？」

「俺も整理を手伝おう」

「それは絶対に駄目だ。また、そつから叩かれる。」

「つまり、俺はアリバイを作ればいいんだな？」

「ああ。」

「オツケー、了解した。青森行ってくる」

「お土産はりんごで頼んだ」

「妹ちゃんもか？」

「もちろん。お前からの物なら、なんでも受け取ると思うがな」

「親友に迷惑かけるが、林檎でチャラにしてもらおう。」

その後、記者達がいなくなった深夜までに身支度を済ませ、車を使い家を出た。

それから酷い日々だった。

少し、町を歩けば馬尾雑言を浴びせられ、効果がないとわかったのか暴力へと変わった。

石を投げられた。

カッターナイフを投げられた。

タツクルかまされた。

殴られた。

車に何箇所もの凹みがあった。

警察は見て見ぬ振りをした。

入店拒否をされた。

全て、俺の心には届かなかった。どうでも良かった。

なんだ、一致団結出来るじゃねえか。としか思わなかった。やはり、人類には倒すべきが悪が必要なんだと確信した。だが、それは俺ではない。倒されるべき悪は俺ではない。

この程度で死ぬわけにはいかない。  
シャルルマーニユの言葉を借りるなら、俺に無抵抗は許されていない。

怒りを、憎悪を、復讐心を抑え込む。例え、どんなことをされても俺が正義を語る奴らを倒してはいけない。

誰も悪くないんだ。  
俺だって、他の奴らだって。ただ、自分の正義を振りかざしてるだけなんだ。

ただ、皆がそうしてるからだとかの理由ではない筈だ。  
——いや、解ってる。

自分の行いは正しい。世界の汚点を消せる。そう思うのは最高に気持ち良いもんな。

正義の味方に誰だって憧れるのは当然だ。

青森で林檎を二箱買い、帰路につく。ここから、また一週間かけて家へと帰る。

帰ってすることはもう決めてある。



「はは  
」

椅子の上に立つ。首は縄に括り付けて。椅子を退かす。

これで俺の人生は終了。一生、あんなキモチワルイ生物に会わなくて済む。それだけでも、少し嬉しかった。

縄が軋む音が聞こえた。

## 天の神打倒RTA【100話記念】

俺、黒耀 勇斗は何故か英霊の座に名を記録された。そんな偉大なことはしていないんだけどな。

最期は自分でもカツコ悪いと思うし。なにが、無抵抗は許されないだ。無抵抗に諦めてんじゃねえか。

そんなことを考える時間はない。後悔先に立たずって言うしな。現状を把握しよう。

英霊の座に登録され、自分のスキルとか諸々を確認したまで良かった。クラスは突っ込み所が多いが、今はスルーしかない。

そして今はなんだコレ？という状況だ？

抑止力に召喚されたまでは理解出来る。だが、この流れてくる情報はなんだ？

世界の危機？天の神？頂<sup>バーテックス</sup>点？どれも知らない、知りたくない単語だ。

そして、一番理解出来ない光景が目の前に広がっている。

「ふッ！はッ！セイッ！」

「王の威光を受けるがいい！」

視界一杯に広がるマシユマロのような生物。そして、それを一瞬で片付ける俺と瓜二つの英霊&感覚で違うとわかるシャルルマーニユの偽物。

「――、加勢するしかねえな。」

理解するのを諦め、この危機を打破することに集中する。

ステータスは貧弱だが、一応村正の疑似サーヴァントということになっていてそのため刀を取り出せる。

三つある中の一つを発動する。

「うおらあー！」

マシユマロを真っ二つにしたと同時に刀が粉々となり、空気中に溶

けていく。

村正が保有する「様物」、或るいは試し切りとも言えるもの。武器の力を自由自在に引き出せる。一撃で壊れる程の力を振り絞ることも可能だ。そんなスキルを俺のクラスとスキルで真似たのが今の一撃だ。

無事成功、つと。

「時間がねえぞ！シャル！」

「この場でいくら倒そうが無駄だ。よって、俺は東北地方へと向かう。」

「了解した。ンじゃ、俺は九州と中国四国を担当する！」

この二人、面識があるのかサクサクと話を進めていく。しかも、今の状況に正確に対応してやがる。正直、なにを知っているのか聞き出したいが、そんな時間はないように見える。

「お前は近畿と中部を担当してくれ！」

「はあ？俺が？」

この担当という言葉はその地域の人々を守れということだろう。いや、まあ、俺は担当しないけどな？

「言つとくが、俺は世界を守る戦いだから召喚に応じたただけだ。人間がどうなるうが知ったこっちゃねえ。」

「安全地域は四国、諏訪、北海道、沖縄だ！護衛しながら運んでくれ！」

「あっおい！俺の話聞いてたか!？」

「護衛終了次第、この場で待機する。お前達も自身の役目が一段落したら此処に来るがいい。」

シャルルマーニュが言う此処とは、熱田神社のことだろう。俺が召喚されたのもここだった。

というか、俺の話全く聞かねえ奴らだな。全無視で自身の担当地域へと行きやがった。既に追いつけない距離が出来ている。

「つたく、俺は——」

『平和を求める心が同じであれば、皆いつかは分かり会える。』

脳裏にシャルルマーニュの言葉を思い出す。

「はあ、しょうがねえ。」

重い足を上げ、悲鳴がする方向へと全力で走る。二人程のスピードは出ねえが、一般人よりは速いぐらいのスピードで走る。

「い、いや、来ないで。」

「八重垣。」

両手で力一杯振るう。地に亀裂を作る程の斬撃を生み出し、女性へと迫るマシユマロを斬り裂く。

「おい、女。立てるなら立って、諏訪に走れ。」

「——は、はいっ！ありがとうございます！」

目の前の光景が余程信じれなかったのか、数秒思考が停止していた。再起動した後に俺の言葉に従い、諏訪方面へと走っていった。

「次」

この後もマシユマロに襲われている人々を近畿から諏訪へと向かう道中で助けていった。

誰も彼もがマシユマロに対して恐怖し絶望して命を請っていた。だが、一人だけ違う者もいた。

「こつちか」

諏訪に近づいてきた頃。少女のような泣き声がした方へと向かう。そして、今までとは違う光景を見た。

「——私が時間稼ぐから速く逃げて!!」

「で、でも足が震えて。」

「えっぐ、ひっく。」

「ハリーアップ!!」

マシユマロの前に仁王立ちしている少女と泣いている子供を守るように立っている少女。察するに、泣いている子供を守るまでは良かったが、恐怖で足が震えて逃げれないのだろう。

・あの仁王立ちしている少女はなんだ？

・諦めを知らないような瞳。最期まで汚れを弾くであろう崇高な精神。

・カツコイイな。そう思ってしまった。

「嬢ちゃん、離れな！」

「っ——!?!」

俺の声に反応したのか、後ろへと飛ぶ。マシユマロから数歩離れた瞬間、劍群がマシユマロをズタズタにしていく。そして、活動終了。「ほら、さっさと諏訪に走んな。」

「あ、アナタは。」

「そんなことはどうでもいい。さっさと走りやがれ。次はこう上手くいかねえぞ。」

勇敢な少女からは憧れを抱いているような瞳で見られるが無視無視。今はそんなことをしている余、裕はない。

「わ、わかりました。え、えつと。ありがとうございます！」

「ぜったいにまた会いましょう！」

泣いている子供を担ぎ、諏訪へと走っていった。

それにしても、あの少女カツコ良かったな。いや、なに十歳ぐらい歳下の少女にこんなことを考えてんだ。早く次に行かなければ

あれから、日を跨いだ早朝。俺は生存者がこれ以上いないことを確認した後、言われた通り熱田神社へと向かった。

「おつ、来たな。」

「それでは、作戦会議といこうか。」

俺が来た頃には、あの二人は神宮の中で寛いでいた。まあ、俺より強いのは戦い方からしてすぐ解る。状況把握能力も

そんな彼達なら、現状について俺より知っているだろう。ここは素直に作戦会議に参加しておこう。

「その前に質問いいか？」

「何でもするといいい。」

「先に自己紹介だろ。ちなみに俺は御影 士郎だ。」

「俺は見ての通り、シャルルマーニュだ。と言っても中身は別物だがな。」

「俺は黒耀 勇斗だ。」

俺に瓜二つなのが御影 士郎。そして、中身が別らしいシャルルマーニュ。ん、クソデカ情報がまた入ってきやがった。

「一つずつ疑問点を消していく。だから、俺の質問には正直に答えてくれ」

「了解」

「いいだろう。」

現状把握は何事よりも大切だ。生前の行動を振り返って、だがな。

「まず一つ。御影は英霊、サーヴァントか？」

「おう。別世界では五年後に英雄として名を遺すことになってるぞ。」

未来からの英雄か。少ない部類だが、ありえる話だろう。

あの強さからすると、ハイサーヴァントに分類されるのではないだろうか。両腕ならシャルルマーニュといい戦いをしそうだ。

「俺に瓜二つなのは？」

「お前が元だからだ。」

「もう少し詳しく説明してくれ」

「お前の霊基が空っぽになった後に俺という自我が産まれただけだ。記憶喪失みたいなものなんだな。」

「あ、だいたいわかった。」

五年の間になんらかの原因で俺が記憶消失して、その後に御影が産まれた。多分そんな感じ。

「じゃあ次、シャルルマーニュに質問するぞ。」

「シャルルマーニュのスペックとガワが同じだけの別人だ。なにを王勇と示すかすらも違う。」

「おい、俺の質問内容を先読みすんな」

なんだこの王様。未来予知並の正確さで俺が言おうとした質問の答えを言ってるんだが？千里眼でもついてんのか？

「はあ、じゃあ次だ。」

この後二時間程質疑応答を繰り返した。内容をまとめると

・今、人類は天の神という元ガイアに攻撃されている。目的は人類滅亡。

？対抗するため、アラヤが俺達を召喚し、人々を守るための壁を築

いた。

・本来ならば、勇者がバーテックスに対抗するために誕生するのだが、俺達に勇者へと充てるリソースを全て割いたせいで勇者は誕生しないそうだ。しかし、沖繩と北海道はアラヤ以外からのバックアップで勇者に近い者が誕生しているようだ。

・俺達がすべきことは二つ。天の神を討ち滅ぼし、人類史を存続させる。

・天の神は中々姿を表さない。よって、ずっとバーテックスを殺すことでおびき寄せる必要がある。

・これから俺達がすることは防衛。御影が四国、諏訪が俺、北海道がシャルルマーニュだ。そして、最も重要な英霊召喚。喚び出す英雄は建速須佐之男命。そうでなければ、勝ち目がちよつと低くなる、らしい。

「よし」

シャルルマーニュと御影は触媒にならないよう外へと出る。触媒は此処、熱田神社だ。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。」

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ

閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

—— 告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者、

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

轟音と共に大気の流れが中心へと向かう。思わず、体が持つていかれそうになったがなんとか堪える。

そして、何者かがその場に立っている。何者・物？

「——セイバー、建速須佐之男命。世界の危機を感じ参陣した。このような形での現界に申し訳ないと思うが、存分に振るつてくれ。幾らでも力を貸そう。」

「草薙剣」

「どうやら、疑似サーヴァント的な現界のようだ。いや、それでも神霊であることは変わりない。」

「無事召喚出来たみたいだな」

「ふむ、これが草薙剣か」

召喚が終了したのを感じ取ったのか、御影とシャルルマーニュが入室してきた。

「パスは神樹に繋がっているようだな」

「ああ。私はその者に喚ばれたしたが、応じたのは神々へだ。つと言っても、力は貸す。心配せず、存分に振るえ。」

「俺はもう宝具に登録されてるし、お前が使えよ。すげえ役に立つぜ」

「わかった。俺が振るおう」

「正直、俺には荷が重いと思うがしようがない。それより、御影の宝具に・なんで登録されてんの？」

「それでは、各々位置に向かうぞ。俺は連絡時以外北海道を離れない。もし、完成しているバーテックスが攻めて来た場合はそちらで対処しろ。」

「了解」

「気乗りしねえが、わかった。」

「ここは素直に防衛しておこう。さっさと天の神倒して英霊の座に戻って、一生寝よう。いや、分霊だから本体の方は今頃ぬくぬくしてるのか？してたら、一発殴ろう。」



あれから数十分。道中のマシユマロを駆除しながらも、諏訪に無事到着した。

壁を乗り越え、壁内に入る。そして、住宅街が見える場所へと移動する最中のことだった。

「んつとこしよ、どつこいしよ」

一人の少女が鍬で大地を耕していた。どんな時代錯誤だと思ったが、少女は至つて真剣に農作業していた。

ん、ちよつと待て、なんか見覚えがあるな。

「ふうーんく？」

少女が鍬を地面に刺し、手から離して一息つく。顔を上げた為か、集中を解いた為かは知らないが、どうやら俺に気づいたようだ。

あちらも俺に見覚えがあるのか、首を傾けながら唸る。

俺は少女の顔を見て、つい昨日のことを思い出す。

「あ〜!!!」

やべつ、バレた。

バレる前に離れようとした瞬間、少女が思い出したのか俺へと猛スピードで近づいてくる。正直ちよつと怖い。

「んつんつ。エクスキューズミー、アナタのお名前は？」

喉を何故鳴らしたのかは不明。一応意味があっているが、何故ここで英語を使ったのかも不明。

結構個性が強い子みたいだな。

「俺の名前は黒耀 勇斗だ。」

「勇斗、昨日はほんとに助かったわ。ありがとね！」

いきなり呼び捨てなことが気になるが、今はスルーしよう。

「たまたま通りがかっただけだ。感謝すんなら、自分の運にしな」

「私の運、サンキュー！」

素直でよろしい。

今の時代、状況でここまで気持ちのいい馬鹿は初めて見る。周りの人達からすると、凄く有り難いだろうな。

「それでお前の名前はなんて言うんだ？」

「あ、自己紹介がまだだったわね。私は白鳥 歌野！フレンドリーな関係を築いていきましょー！」

そう言い放つと左手を俺の方へと差し出してきた。

「まあ、いいか。一先ず、暇な時間はコイツを手伝うことにしてやろう。」

「ああ、いいぜ。お前を支援しよう」

「しえん・つまり、私と農作業を?!」

鼻息を荒くしながら、顔を近づけてくる。顔がいたため、直視出来ず視線を歌野から外す。

「なんでも手伝ってやるぞ。」

「や——」

「？」

俺から距離を取り、拳を握りワナワナしている。

「——やったあ!!」

余程嬉しかったのか、小ジャンプを繰り返しばよんぴよんしている。目の保養になって、心が浄化されていくのを感じながら畑に目をやる。

見た感じ、先程まで歌野はよく畑で見るボコツとしている部分を作っていたようだ。畑の半分程が完成している。

「喜ぶの良いが、早く行動しないと日が暮れちまうぞ。」

「えっ? あー! こうしちやいられないわね。それじゃあ、早速始めましょ。」

歌野から鍬を渡された。そして、歌野は鍬を渡した後、すぐ畑に置いてある自身の鍬へと歩いていった。

あれ、作業の説明は? 一応、俺は農作業初心者なだけだな。ここは、歌野のやり方を見て学ぶしかないようだ。

「んつとごしよ、どつごいしよ」

鍬でボコツとする予定の周りの土を砂浜で城を作るかのように盛る。そして、それを鍬で押し固める。

よし、やり方は解った。こつからは俺の農家としての才能がどれ程

なの。かにかかっている。

「っ、っ」

既に解されている土を盛り、鍬で押し固める。歌野はスツスツとやっていたが、あの綺麗なボコツを作るのは初心者には厳しい。

「うっし」

歌野の三倍の時間を使い、ようやく納得いく形が出来た。後はこれを歌野が作っているボコツに繋げればいいだけだ。まあ、歌野の方が先に来るだろうが

ふうー頑張ろ。

.....

「.....」

夜。壁の上に登り、マシユマロ共の行動を観察する。

死ぬということは理解不能の怪物ではなく、行動理念がある生物とすることは昨日把握している。つまり、なんらかの弱点がある筈なんだ。

観察し始めて早二時間。ずっと、そこらを漂っている。標的である俺を無視するということは、索敵範囲を狭いということを意味する。

昨日のことを思い出す。ずっと追いかけていた人々。あれは人の走力では見つかった後、索敵範囲外に出ることは不可能だということ。英霊ならば可能だが、人間には無理だろう。俺はギリギリ可能だ。

「はぁー、成果なしか。」

村正製の刀を射出し、視認している全てのマシユマロを殺している。殲滅したのを確認し、壁を伝いながら降りる。もし、飛んで降りると足がバキバキになるため絶対にしない。

安全確保は終了した。次は人が密集している市街地へと足を運ぶ。人の数が減少しようと犯罪は起こる。なんなら、以前よりも高い確

率で起きる。犯罪を起こした人間は対処が面倒なので見つけ次第殺し、マシユマロに投げ入れることにしている。その後、マシユマロも殺す。

「称号剥奪、つと」

称号剥奪。俺が保有しているスキルの一つ。これによって村正のスキルを擬似的に発動させることが可能だ。まあ、クラスの影響もあるがな。

効果は至ってシンプル。殺した者の称号を自身につけれる。この称号つてのが曖昧だが、つい先日人を殺した時は「人間」という称号を。マシユマロを殺した時は「天蓋」という称号を得た。

天蓋、仏の威信の象徴。何故そんな称号をマシユマロが持っている？これに関しては本当にわからない。今ある情報では答えには辿り着けない。

「.....」

ゴミ出しの帰り道。俺は結界の基点である諏訪大社に訪れていた。ここには神樹の一部が露出している。これを壊されると壁が崩れ、全員死ぬだろう。よって、俺は念の為寝るときはこの場所で寝ることにしている。

「先客か」

数名の子供達が神樹に寄りかかり寝息を立てて眠っている。多分、身寄りが無い子供達だろう。

別にここで寝るのは問題ないんだが、このままでは風邪を引いてしまうだろう。

俺が着ていた黒の羽織を脱ぎ、全員にかかるように被せる。

「.....」

俺がこの子達の親を救えなかったことに負い目を感じてる訳ではない。そうあるべき運命だったんだ。これで俺に責任を問われても知らぬ存ぜぬを繰り返すだけだ。

子供達から離れ、全体が見えるように隅へと移動する。どうやら、今日は寝れないらしい。

朝になった。子供達は今だ寝ている。それ程疲れ、休息を必要としているのだろう。

俺は見るのを止め、外へと出ようとした時だった。扉が外から開けられる。

「」

「」

少女が大きな鍋を持ち、入ってきた。俺の存在に気づいたのか、視線が子供達と俺の顔を行き来している。

この子、またまた見覚えが泣いてた子を守ってた子か。

「怪しい者じゃねえよ。もう出ていくからそんな警戒すんな」

「え、あ、い、いえ大丈夫、です。」

めっちゃ警戒してる。これはさっさと出ていった方がいいな。

少女の横を通り抜け、外へと歩を進める。

「あ、——あの！」

「んっ？」

丁度、外へと出た時だった。後ろから大声で引き留められた。

「ご飯、一緒に。」

「気持ちだけ貰つとくよ。あんがとな」

羽織は布団代わりに預けておくか。

通り抜ける際、少女の腕を見たが骨が薄っすらと見えた。最近満足に食べてないのだろう。

ダメ元で歌野に相談してみるか。

今日も今日とて畑で作業している歌野を見つけた。農作業を中断させ、今朝見た光景について歌野に話す。そして、ここで採れた作物をそういつた子達に上げれないか聞いてみた。

「ふふっ。勇斗って人に勘違いされやすいでしょ。」

「急にどうした?」

話の論点からずれ、何故か俺の弱点を的確についてくる。この話で、どうして俺の弱点がバレたのか。

「顔、すっごく怖いのに他人にはすっごく甘い。中々友達出来ないタイプでしょ?」

「ぐう。」

その攻撃は俺に刺さる。生涯の親友は一人しか出来なかったな。くそ。

「もう少しムツとしてなければね〜」

「そういう質なんだよ。」

いつの間にか、この顔が定着してんだ。表情筋はどっかに旅行行っただんだと思う。

「ほら、スマイルスマイル!」

「こ、こうか?」

なんか自分なりの笑顔を作る。やってる自分でもわかるがとてもぎこちない。

「ぶっ——アハハ!」

「笑うんじゃねえ。」

一度堪えたが、堪え切れなかったのか腹を抱えて大爆笑している。正直言つて殴り飛ばしたいが、大人なので我慢します。

「こっ、これからよぶふっ。」

「いつまで笑ってやがる。ほら、さっさと続きすんぞ」

「お、オツケー。はあ、はあ。」

笑い過ぎたのか呼吸が乱れている。俺を笑った罰だ、罰。

食料危機問題か。今は少ない漁業の人達しか海に行っておらず、

漁獲量もぼちぼちだ。その程度の量では諏訪全域の人々をお腹一杯にするには不可能だろう。

そこで、歌野がしてる通り栽培植物でなんとか補うとしているが実るまでに時間がかかるし、完全に人手不足だ。

滅気ずに行っている人もいれば、自身の田畑を放棄し恐怖に打ちのめされている人達もいる。

歌野はまだ小学生だ。そんな身体で無理をすれば、ぼっくりと逝ってしまうだろう。そうなってしまうては本当に詰むような気がする。

まあ、俺の前ではいつも通りは必ず来ない。それが停滞打破。俺のスキルの中で一番使い勝手が悪いが、影響力が凄い。最悪の状態からでも、なんとか復帰出来る可能性を持っている。

だが、なんにも行動しないのは違うな。さくつと説得してやるか。↑  
説得に二日かかった。

説得から一週間が経ったある日。いつものように壁からマシユマロを眺めていたら、二人から聞いていたバーテックスに酷似している生物が向かって来ているのを発見した。

先制攻撃で刀を射出すると、突き刺さり破損させる。だが、マシユマロが集まっていき、破損部位が瞬く間に治った。

「修復機能持つてんのか。めんどくせえな。」  
壁を伝いながら壁外へと降りる。

推測するに、バーテックスがここに辿り着くのは後四分程度。まあ、妨害しなければの話だがな。

「草薙剣、受けてみやがれ」

体内から草薙剣を取り出し、バーテックスへと駆ける。針のような部位からの攻撃を草薙剣で迎撃し、真つ二つにする。

「———終いだッ！」

草薙剣を思いつきり振り上げる。振り上げた軌道と同じように斜めに割かれる。

バーテックスに異変が生じる。突如として膨れ上がり、爆発した。そして、マシユマロが溢れ出てくる。

「ちっ・逃がさねえぞ！」

刀を射出し、マシユマロを殲滅していく。溢れ出たマシユマロを一匹残らず殺していく。

「よし、戻るか」

他の場所からマシユマロが来る前に壁を登り、壁内に入る。あれだけ、マシユマロを消せば天の神とやらも来るだろう。まあ、来るとしても農作業は続けるがな。

草薙剣を体内に戻し、さつきまで農作業していた畑へと帰ってきた。だが、先程と違い歌野だけでなくもう一人少女がいる。どうやら、歌野となにやら話しているようだ。

「あ、勇斗。この子、みーちゃん！私の専属商売相手よ！」

「へえ、遂に専属の——あれ？」

「この子、諏訪大社で会った子&泣いてた子を守ってた子じゃねえか。どういう巡り合わせだよ。」

「ど、どうも。藤森 水都、です。よっ、よろしくお願いします！」

「大丈夫よ、みーちゃん。こんな顔してるけど、良い人よ」

「こんな顔ってどういう意味だ、こら。」

「がっちがっちだが、お辞儀して挨拶してくる。歌野と違い、しつかりとした子だな。」

水都の手にはここで収穫されたであろう野菜が籠一杯に入っている。結構な重さなのか腕がプルプルしている。

「ほら、持つぞ。」



「い、いえ、大丈夫ですっ！」

「落として無駄にしたくなきや、さっさと渡しな」

「は、はい」

渋々といった感じだが、籠を渡してくれていた。

「んで？何処に運べばいいんだ？」

「あつ、今案内します」

「どうどう？優しいでしょ？」

「うっ、うん」

なんか二人がコソコソ話しているが、上手く聞き取れない。にしても、コレ結構重いな。早くしねえと腕がプルプルし始めるぞ。

「んじゃ、前歩いてくれ」

「わかりました」

「私は農作業しとくわ」

どうやら、歌野は農作業を続けるようだ。そんな歌野を置いていき、水都が歩く後ろをついていく。

この後、俺が料理したり羽織を返して貰ったりしたがそれはまた別のお話で。

あれから二日後。俺は壁外に立っていた。

「デツケえ」

目の前に佇んでいるバーテックスを見る。以前来たバーテックスに比べ物にならない程大きい。だいたい壁と同じぐらいの大きさだろうか。

「火球か」

小さな火球がいつも俺へと放たれるが、刀を射出することで全て誘爆させる。ついでに何本か本体へと飛ばす。

「かつてえ」

射出では少しも傷がつかなかった。今度は草薙剣を持ち、接近する。その間、火球が飛んでくるが刀を飛ばして誘爆。

「うお、——らあ!!」

草薙剣を振り上げる。切断とまではいかなかったが、深い溝を作る。マシユマロが傷口へと向かうが、刀の射出で阻止。

「もう、いっぱあつ!!」

草薙剣を振り上げた位置から振り下ろす。今度は切断出来た。そして、マシユマロが溢れ出てくるのは予測済みだ。刀の射出で殲滅していく。

「おつ、倒れたな」

左半分が消えたことにより、体勢を崩したようだ。右側に寄つていき、最終的には地面へと倒れ伏す。

「ほら、トドメだ。」

草薙剣を使い、バラバラに解体していく。溢れ出るマシユマロは刀の射出で殲滅。これにて処理完了。

「今回はちよつと強かったな。」

以前に増して硬度も技の威力も段違いだった。もし、火球が直撃すれば即死は免れないだろう。それに、あれを壁へと放たれば壁は壊され、そこから突破される。それだけは避けられないいけない。

「よし、戻——」

「——。よつ、もう終わっちまったか?」

「御影か。どうした?」

壁内に戻ろうとした瞬間、轟音と共に御影が到着した。周りを見渡した後、先程まで纏っていた歴戦の戦士のような圧を消し、俺へと話しかけてきた。

「いやあ、獅子座がこっちに来たもんでな。もしかしたらこっちにも、と思って急いで来たんだが、心配無用だったな。」

「獅子座・火球飛ばしてくる奴か?」

「おう。アレが天の神の奥の手だ。」

「つまり、結構余裕がなくなってきたってことか。」

「そうだな。所で、そっちにめっちゃ明るい中学一年ぐらいの少女い

る?」

「どういう流れでそうなった?」

「なんで真剣な話から人探しの話になってんの?しかも、犯罪臭がするぞ。」

「まあまあ。それでいるのか?」

「中一じゃねえが、歳が近い奴ならいるぞ。」

「おっ、そりゃあいい。天の神倒したら、高知県に住んでる郡 千景つて奴に会ってくれよう言っといってくれ。」

「わかった。」

「ンじゃ、俺はシャルの様子見に行ってくる。アンタは俺が戻ってくるまで警戒を解かないでくれ」

「そう言い放ち、目で追いかけれない程のスピードで飛翔した。」

にしても、犯罪じゃなくて良かった。まあ、御影のことだし何か理由があんだらうな。詮索は止めておこう。

御影に言われた通り、警戒は解かず壁の上で周囲を見渡す。

——空が紅く染まった。

あれから数十分の出来事だった。突如として空が北の方から紅く染まっていった。

北海道でナニかが起きている。そう思い、壁から降り北海道へと全速力で向かう。

宮城を通過した後からだろうか。空に太陽を象った物?が浮かんでいる。それへ無限の色彩で輝くビームのような物が向かうが盾のような物に防がられる。どうやら、もう応戦しているようだ。

場所は青森と北海道の県境。ここからなら、後一時間で行ける。だが、それでは遅い。

草薙剣にある称号を俺に一時的に付与。身体能力が飛躍的に上がる。これで一時間を数十分まで縮める。

「——遅れた！」

「これで集合だな。」

「時間稼ぎは終わりだ。今度はこちらから打って出るぞ」

俺は草薙剣、御影は刀、シャルルマーニュはジュワユーズを構える。目標は天の神。コイツを墮とせば、俺の役目は終了だ。さっさとやっちまおう。

「俺は遠距離を潰す」

「ならば、俺は盾と針を」

「んじや、俺は鋏をやろう。」

各々標的を決める。これで混戦を少しでも軽減出来るだろう。

「全軍、——戦闘開始ッ、!!!」

「——！」

「刀は——投げるもんだああ!!!」

シャルルマーニュの合図と共に天の神へと飛翔する。射出した刀を踏み台に更に飛ぶ。そして、鋏へと草薙剣を振るう。鋏は別れ目から真つ二つになる。

俺が飛翔した瞬間、御影が矢を射出している口へと刀を投げる。矢を碎き、御影がまたも見えないスピードで口へと迫り、手に持っている草薙剣で跡形もなく斬り刻む。

「碎け散れッ！」

シャルルマーニュの左腕に五大元素が集束していく。そして、盾目掛けて放たれる。盾は一枚では防ぐのが不可能と理解し、視界にある全ての盾を束ねる。だが、いとも容易く全て碎け散る。

「勇士達よ！」

シャルルマーニュの背後に擬似勇士が出現し、針へと向かう。次の瞬間には何十もの針が全て切り落とされていた。

「とつた!!」

「！——御影！一旦下がれ！」

「ッ——!?!」

御影が天の神へと草薙剣を振り下ろそうとするが、シャルルマーニュが後少しの所で制止を呼びかける。それに反応し、草薙剣を止め下がるうとするが——

「ぐうっ！」

弾き飛ばされた。

俺には何も見えなかった。天の神からは何も放たれていない。

弾き飛ばされた御影は空中で体勢を整え、俺達がいる地上へと戻ってくる。

「重みを感じた。」

「なんだ、今の？」

「目視不可の全体攻撃だ。俺が一度喰らった感覚としては、重力の塊のような物だった。致命傷にはならないとしても、アレを突破しなければ奴へとは攻撃出来ない。」

重力の塊突破するには、並大抵の攻撃では届かないな。此処が使いた時なのかもだ。お別れは、いいか。

「いや、お前ではない。此処は俺の見せ場だ。」

「シャルルマーニュ。わかった。ここは頼んだ」

「自信は？」

「必ず道を切り拓く。その間に貴様達は——」

「わかった。俺と御影で必ず仕留める」

俺の言葉を聞き、静かに頷く。そして、御影へと視線を向けた。御影もナニかを承諾したのか、静かに頷く。

——ジュワユーズが光り輝く。

「千変万化の我が剣を此処に」

その言葉と共に俺達も準備を始める。

「——真髓、解明

——完成理念、収束

——鍛造技法、臨界」

固有結界は出来ずとも、体内で剣を収束させるなんて朝飯前だ。

ん、この感じ・御影の中からも――

「幻想の色彩、幻想の物語

されど――」

シャルルマーニュから悪を滅つさんと世界を照らす程の輝きが溢れ出る。

「――其処に至るは数多の研鑽

――此処に至るはあらゆる収斂

築きに築いた刀塚――」

――刀を打つ音が聞こえる。

「縁を切り、定めを切り、業を切り、我をも断たん都牟刈村正。

――縁起を持って宿業を断つ。」

「我が剣、我が勇士は君臨する！」

十三の聖剣が天の神へと向けられる。今こそ我らが王勇を示さんとばかりに昂ぶっている。

「即ち――！」

停滞していた時間が進む。

俺達は英雄ではないけれど、今を全力で歩く人々の背中を押す者だ。であれば、命を賭ける価値がある！

「――宿業からの解放なりッ！」

全てを炉に入れ、俺の手に一つの刀が握られる。

「王勇<sup>ジュワユ</sup>を示せ、遍<sup>ユ</sup>く世<sup>ズ</sup>を巡<sup>オル</sup>る十二<sup>ド</sup>の輝<sup>ル</sup>剣<sup>ツ</sup>!!」

十三の聖剣が重力の塊を切り裂きながら突き進む。

これが色変わりの聖剣――ジュワユーズの真骨頂。

そして、遂に天の神へと届く。こっからは俺の仕事だ。

「――この「振り」で仕事納めだッ!!」

コレを振るえば、俺は死ぬ。

草薙剣を束ねたこの剣は神剣の域を既に超えている。そんな代物を振るえば死は免れない。でも、いいんだ。

――好きになったんだ。しょうがねえよな。

「いや、アンタの仕事はこゝまでだ。」

「はっ――？」

さつきまであった刀がいつの間にか御影の手にある。

「破却、——収束」

地面に刺されている御影の草薙剣が粒子となり、俺が創り出した刀へと入っていく。

その瞬間、先程とは比べ物にならない程の炎が吹き出す。それにより、御影の身体が右腕から焼き爛れていく。

「コレが、俺の——」

「待て！御影 士郎ツ!!!」

駄目だ、駄目だ！御影は死んじや駄目なんだ！

お前が死んだら、誰が皆を——

「——都牟刈、村正だああああ!!!」

「ぐっ——！」

振り下ろす。たったそれだけの動作で立つのが困難な程の突風が吹き付ける。

「——セイヴァー!!!」

あと数秒で途切れるであろう意識の中、叫ぶ。

この後の世界に御影が救世主が必要なんだ。なのに、なんで俺、なんかの——ために——!

突風に飛ばされ意識を失ってしまったが、ようやく御影を見つけることが出来た。

崩れかけな肉体で、静かに佇んでいる。

「——シャルは先に逝っちまったか。最高にカッコ良かったぜ」

「御影、お前」

俺に気づいたのか、ゆっくりと確実に言葉を紡ぐ。

「これで俺達の役目は終わった。後はアンタが皆を導いてくれ」  
「ソレは、お前がしろ。俺は人なんてどうでもいい。」

それは俺の仕事ではない。救世主たる御影の仕事だろ。

「それでも」

「！」

「人に失望しながらも、アンタは来てくれた。それは、アンタが『それでも』と言えたからなんじゃないか？」

「俺は、召喚に応じた。綺麗なこの世界を救おうと。でも、その時俺は人々を——」

「俺はもうすぐいなくなる。こっからはアンタが決めることだ。」

「俺が無茶苦茶にするとは考えないのか？」

「しないだろ。だって、アンタは——」

自信満々な子供のように口を開く。

「カッコイイからな！」

その一言を最期に肉体が完全に粒子となり、風に乗って飛んでいった。遺された俺はただ、そこに立っただけしか出来なかった。

青い空を見上げる。溜め息をつき、歩き出す。

「——カッコイイじゃねえか。ちくしょう。」



## 幻想を宿した勇者【100話記念・その他の部】

「ふうー。今回の特異点は大変だったな。」

つい先日までの微小特異点を思い出す。

ある青年、勇者、そして巫女との思い出。別れが名残惜しく感じる程楽しかった。だが、自分はこの世界の為に他の世界を滅ぼしてきたマスター。そんな自分勝手な理由で止まる訳にはいかない。

もう時期、ノウムカルデアの冒険が終わる。それでも万が一の時の為に休息を取っておく。じゃないと、新所長やマシユに怒られてしまう。

そんな時だった。緊急事態が発生したことを伝えるアナウンスが鳴り響いたのは

『藤丸君！休息中悪いけど、すぐ召喚室に来てくれ！』

「わかった！」

ベットから飛び上がり、魔術的保護がされている礼装へと着替える。

緊急事態による招集はあまり珍しくない。そのため、慣れたように礼装を素早く着、最短ルートを走ることが出来る。

自室から召喚室までは最短ルートで十五分前後。もちろん着替えの時間も含めてだ。

「藤丸、到着しました！」

今回もまだ最速で来れた。どんな緊急事態なのかダ・ヴィンチちゃんに聞こうと周りを見渡す。すると、ある一点が目止まる。

「シャルル」

召喚陣の上に第三再臨となっているシャルルが立っている。いつもは堅苦しいのは嫌だということ、第一再臨を好んで霊基としている。そんな彼が第三再臨にするとは思えない。明らかに不自然だ。

「来たかい、藤丸くん。今回の緊急事態はこのシャルルマーニュについてだ。」

「緊急事態になっているシャルルマーニュだ。宜しく頼む」

「えっ。あつ、こちらこそ宜しく頼みます。」

「おかしい返答に思わず、思考が停止するがなんとか立て直す。そして、羞じ出された右手を左手で掴む。」

「藤丸くんもご存知の通り、英霊は一基しか喚べない。だが、ここにシャルルマーニュの二基目がある。これにご本人はどう思う？」

「俺はシャルルマーニュではあるが、中身は別物だ。そのため、今回のような珍事が発生したのであろう。」

「なるほど。つまり、君はシャルルマーニュではなく別の英雄ということかい？」

「その解釈で問題ない。」

「なんとというか、この二人。仕事させたら倍の量&改善点を見つけて提出してきそうなタイプだ。頼られはするけど、少しずつ孤立する。そんな感じ」

「実際は仕事を振られる前に全てを終わらせている。しかも、他の人の問題点をサクツと訂正して助言までするだろう。」

「では、実際の真名はなんと言うんだい？」

「俺は今、シャルルマーニュという真名がギフト着名されている状態だし、本来の真名を言われると殻が崩れる。」

「妖精騎士達と同じ状態か。それでも、我々は君の正体を暴かなければいけない。真名を明かして欲しいんだ。」

「使える執事と使えない執事、どちらがいい？」

「そりゃあもちろん使える執事。もしかして君、本来の姿になったらメツチャクチャ弱い？」

「ああ。最弱の英雄と言われても反論は出来ない」

「なるほど。それじゃあ、君の真名についてヒントをくれないかい？」

それだったら君の着名を外すことにはならない筈だ。」

「ヒント、そうだな。俺の記憶にはないが、彼と共闘した記録がある。」

「俺!？」

「記憶に当て嵌まる英霊はいる?」

「う、うくん。」

これまでの旅を振り返る。だが、いくら探そうとも雰囲気が合致するような英霊は思い浮かばない。

「場所は。諏訪だったな。」

「諏訪、諏訪。あつ!もしかして?——!」

「止せ。セントを出した意味がなからう」

「そうだよ、藤丸くん。所で今二文字、漢字で一文字の言葉が聞こえたんだけど、上手く聞き取れなかったな。後で私だけに言ってくれるかい?」

「あつ、はい。了解ですつ!」

「。」

シャルルの反応からして諏訪で一緒に天の神を倒した?? ??ということが判明した。

三週間程の共闘だったが、つい先日 of 出来事ということもあり、すぐに思い出せた。彼が来たことに驚き、口から真名がポロツと出そうになったがなんとか制止の声に従い閉じれた。

「それじゃあ、藤丸くん。シャルルマーニュに此処を案内して貰いたい。彼と面識がある君なら心配はないだろう。」

「もちろんですつ。」

「この場でマスターを襲おう等は考えれんな。」

この場には数百に及ぶ古今東西問わず英雄達がいる。もし、マスターに危害を加えようものなら即刻マスター親衛隊によって死よりも惨たらしい結末を迎えるだろう。

「こつちが靈基保存庫で——こつちが食堂で——」  
「ふむふむ。」

人類最後のマスター、藤丸 立香。元一般人という情報しか明かされていない f g o 界最大の謎。

毒無効、運命力、善性 EX。様々な特徴を持つが、最たる物を挙げれば英霊達からの信頼だろう。案内の最中にも子供系統の英霊が彼に遊びの誘いをしに来てたしな。

何百といえる英霊達と仲良くするなど俺には不可能だ。我が強すぎるんだ、皆。

「おつ、マスター！奇遇だな。これから飯食いにでも——ドツペルゲンガー！」

反応が遅すぎますよ、王様。

俺が平行世界の記録を保持しているのなら、王様も保持しているに違いない。ここは、それを使って説明しよう。

「あつ、シャルル。こつちは——えつと、どう説明すればいいんだろ。」

考え込んでいるマスターの前に出て、シャルルマーニュと対面する。今だシャルルマーニュはどういうった状況なのか首を傾げながら、唸っている。

「友を守るため貴方から力を借りた者だ。この武勇、そして幻想——此等は全て貴方が持つべき証。もし、退去せよと言うのならばそれに従おう。」

「友を守る——あ、ああ！！！」

「えつ。えつ？」

今のが伝わって良かった。俺でもなに言ってるか解んないもん。ほら、藤丸だつて解ってない。

俺が言おうとしたのは、感謝とこれからの選択についてなんだから。  
な。

「なるほどーアンタか！いやあく、ごめんごめん！ドツペルゲンガー

じゃなくて、アンタはアンタだもん。所でアンタの友達に来てないのか？」

「どうやら、俺一人の現界のようだ。」

「そっかそっか。まっ、ここは良い所だからな。ゆっくりしていつてくれ。他の連中には俺から説明しとくからさっ！」

「というか、何故此処にいるのか俺でもわからない。何か気づいたら、別の俺の記憶と共に現界してた。」

「じゃっ！」

「またね〜！」

ノリが軽いな。

「一先ず、俺の現界は許されたが、こっからなにしたらいいんだろ。特にこれから出る幕はないだろうし、それに俺を喚ぶなら本来のシャルルマーニュ喚べばいいだろうしな。」

「どうしたの、シャルル？」

「あつちもシャルルでこっちもシャルルだと少しややこしいな。そうだ。」

「マスター。これからはシートンと呼んでくれ。これならば、区別がつきやすいだろう。」

「シートン、って動物記の？」

「ああ。名を借りるのは申し訳ないと思うが、今回限りなら問題はないだろう。」

「シートンさんには申し訳ないけど、一時だけだから許してくれるだろう。許して下さい。動物記読んでないけど、座に還ったら読みます。」

「えっ？今回って、もしかして、もう帰っちゃうの？」

「これだけの英雄達がいるのだ。俺がいなくとも、十分だろう。」

「というか、こっから何が起きるのか俺ですら把握していない。」

「世界を復元したのか、それとも新たな困難に直面したかは進まないとはわからないだろう。だが、藤丸にはカツコイイ英雄達がいる。心配はない。」

「シートンも英雄だよ？」

」

藤丸がここまで来れた意味がわかった気がする。

我が強い英雄が付き従っているのは、人類の危機だからではない。

一重に藤丸を助けたいと心の底から思ったからだ。なら、俺も――

「藤丸 立香――今日から俺は君のサーヴァントだ。如何なる危

機、困難が訪れようとも跳ね除けよう。いくらでも頼ってくれ」

「うん。頼りにしてるよ、シートン」

友達という関係ではないとしても、これからは彼を守っていこう。

この、勇気ある者を

## 忘却を禁じる

——いない。

全ての店、住宅、公共施設。あらゆる建物の中を隅々と探索したが、東郷の髪の毛一本すらも見つけられなかった。

「ッ。」

どうなっている。俺達は知らぬうちに東郷がいない平行世界に転移したとでも言うのか!?

それとも、東郷は俺達の幻覚。いや、そんなことは断じてない。東郷がいなければ、俺はとつくの昔に死んでいる。

「むっ」

スマホが震える。誰かからチャットが来たことを意味する。ポケットから取り出し、内容を確認する。

園子からだ。えくつと、何々。わっしー見つかったよ。マジ!?

場所は。オツケー。全て理解した。全速力で向かうわ。?

山を越え、海を渡り、壁を登る。これが新しいトライアスロンですか。こんな誰がクリア出来るんだよ。人間辞めないとクリア出来んぞ。

「シャルルマーニュ、到着した。」

「来たわね。そんじや早速——」

「待ってフーミン先輩。やっぱりまずは現状把握をした方がいいと思うんよ。」

鎧を纏いながら皆が揃っている場所に到着する。俺が来たことを知るやいなや風先輩が飛び出そうとするが、園子によって待ったが掛

かる。

「何か問題が生じたか？」

「うん、つてことでミノさん！」

「わ、わかった！」

「銀がどうし——」

他の皆が変身している中、唯一変身していない銀が登場する。そして、元俺のスマホを操作し勇者システムを起動した。

そこから問題だった。

ノイズが走る。空間が歪むような感覚、明らかに異常事態が発生している。

ゼラニウムの花卉が舞いながら換装が進んでいく。元々の赤を基調としたものではなく、青と白、シャルルマーニュ第一再臨のような鎧を身に纏っていく。

特筆すべき点が二点。

銀の手に握られている武器が双斧ではなく、ジュワユーズのような波打った刃になっている。そしてもう一点。瞳が青へと変色している。

明らかなバグだ。だが、敢えて言おう——

「カッコイイな！」

俺より銀の方が似合ってる。誰がどう見てもカッコイイ。もし、カッコ悪いと言ったなら首を断とう。

「賭けは私の勝ちね」

「くう〜っ！夏凜に負けるなんて……」

「当然の勝利よ」

はいそこ賭け事しない。

さて、私情は一旦置いといて思考を切り替えよう。

「銀ちゃんが使ってるのってシャルくんのだよね。こうなったのも、そのせいかな？」

「十中八九そうだろう。銀、変身を解いてくれ」

「お、おう。」

鎧が粒子となり、空気中に溶けていく。



「この消え方は――」

「ふむ・瞳は戻っているな。」

「シャル先輩が来る前に検証した感じでは、一時的なものだと思います」

変身中のみ、ということか。それなら、問題は「いや、もしかしたらシャルルマーニュへと置換されている可能性がある。ここは無理矢理にでも辞めさせるべきか？」

「銀、今――むっ」

「あ、牛鬼」

なんだろう。牛鬼に会うたび頭を齧られてるような気がする。俺の頭には蜂蜜でも塗られているのだろうか？

その間に銀が再度変身する。

「シャル、お願いだ。アタシは傍観者には絶対にならないぞ」

「わかった。だが、決して無理はするな」

「無茶しないといけないときは？」

「するな。無理無茶無謀は俺達、シャルルマーニュ十二勇士の特権だ。」

「その勇士に殴られてるけど大丈夫？」

十二勇士を展開する。全員フフンっと自信満々に登場するが変身した銀の姿を見て停止する。

アストルフオとブラダマンテは銀の周りを飛び回り、オリヴィエとリナルドからは剣の側面で頭を打たれる。ちなみに、牛鬼はまだ齧ってる。

「さて、超えるぞ」

決意は固まった。必ず、東郷は取り戻す。来るならば、天の神すらも地へと叩き落してやるよ。

燃え盛る大地。炎の渦が何個も発生している。俺達が人間を越えてなければ、即座に熱気で死ぬだろう。

「久しぶりに会った友人がブラックホールになってた、ってよく聞くしね。」

「聞かないわよ」

「須美も大きくなつたな」

「違うベクトルでは大きくなっているな」

「流石、わっしーだね」

「だねっ！」

「え、えくつと」

ツツコミ役を困らせた所で、早速問題について考えよう。

園子のスマホを一緒に見ているが、どうやらあのブラックホールに東郷の反応があるようだ。つまり、ブラックホールが閉じ込める檻の役割をしているのだろう。

「っ、来たわよ！」

「っ」

「待て、ここは俺が一掃しよう。」

何千ものマシユマロが俺達へと迫る。だが、この程度の量なら俺だけでいける。皆は出来る限り温存させておこう。てか、戦うな。

「王の威光を受けるがいいッ!!」

左手から黒い帯状の元素を出す。元々ウイルスのような物ではあったが、形だけなら五大元素をゴネゴネして再現可能だ。まあ、修得に二週間かかったことは秘密にしよう。

「ふう、さて、どうする？」

「アンタ、やっぱ無茶苦茶ね」

「パワーアップした俺に不可能はない。不可能はない、んだけどなっ。」

「——満開ッ!!」

「園子!？」

「そのちゃん!？」

「っ」

光が満ちたと思えば、方舟が姿を現す。これは、園子の満開時の武装だ。

「皆！乗って！」

「——、了解した！」

「う、うんっ！」

「あく、もう！」

「任せたわよ、園子！」

「お願いしますっ！」

「頼んだ！」

「まっかせて〜！」

園子の合図と共に方舟へと飛び乗る。俺達が乗ったと同時にブラックホールへと猛スピードで向かう。

「星屑は我が勇士達が仕留める」

近づいてくるマシユマロを一匹残らず仕留めていく。

園子の満開はこの舟に攻撃された分、早く解けるだろう。空中で解ければ一貫の終わりだろう。それだけは避けねばなるまい。

マシユマロを逐次殲滅しながらも、ブラックホールの真上へと来れた。  
た。

「これ以上つ、近づくのは無理かも。っ！」

ブラックホール。惑星が自重によつて潰れた後に出来る光すら通さない物体？多分そんな感じだったような気がする。俺もそこまで詳しくない。

ここで問題なのは、どうすれば東郷を救えるかだ。ジュワユーズを放つ？いや、光を通さないのであれば無意味に終わるだろう。

手始めにどでかいのを撃ち込んでやろう。

左手に五大元素を収束、——放出。

「碎け散れッ!!」

「ロケットパンチ!?!」

ブラックホールに接触した瞬間、形を崩し消えていった。

これで駄目なら、一か八かでジュワユーズを放つしかないな。

「今からジュワユーズを放つ。その間、援護を——」

「いいの、シャル?」

「なにがだ」

「それで最後なんですよ?」

「」

「なんで、知ってんの?」

「まだ誰にも話してないんだけどな。エスパーの方ですか?」

「ちよ、最後つてどういうことよ」

「そのまんまの意味だ。ジュワユーズを放つのは一度限り。」

「その一発の予定は?」

「天の神へと放つ。だが、必要とあれば今放つ」

天の神は頑張るしかない。最悪、御影に全てを託す。

「必要、じゃなかったら今撃たないでいいよね?」

「ああ、待て、何をしようとしている。」

「友奈さん、もしかして」

方舟についている穂先の上に友奈が立っている。解釈違いならい

いが、飛ぶ態勢のようなものをとっている。

「私が東郷さんを助ける。」

「自信が、あるのだな?」

「うんっ!だから、私に任せて欲しいな」

危険だ。重力の塊に入るのは勇者のスペックであつても危険なこ

とに、いや最悪死ぬ。原型を残さずグチャグチャになるだろう。

止めるべきだが、これしか方法はっ!

「大丈夫だよ、シャルくん。牛鬼が守ってくれる。それに、もしもの時

はシャルくんが助けてくれる!よね?」

「——ッ、ああ!俺がなんとしても助けよう。」

絶対に誰も失わない。俺が重責を背負う。それが、俺に出来る先達

としての唯一のことだ。

「五分で戻らなければ、ジュワユーズを放つ。もし、無理と感じれば五分経つまで耐えてくれ」

「うんっ！それでは、結城 友奈行ってきます！」

「頑張つてきなさいよ！」

「死んだら許さないわよ！」

「友奈さん！絶対に戻ってきてくださいね！」

「ゆーゆ、わっしーのこと頼んだよ」

「友奈！須美の目を引つ叩いても覚ましてこい！」

皆の言葉を受け、飛び立つ。

正直言つて心配だ。だが、ここは友奈が戻ってくるまでの心房  
胃  
が痛い。

「ヤバっ！友奈にバーテックスが！」

「勇士達よ、友奈に近づけさせるな」

「流星に精霊だけじゃ——」

バーテックス、形から乙女座だろう。それに、接近した十二勇士達が再生不可能な状態まで切り刻む。無事、体が崩壊し天へと昇っていく。

「十二勇士とは、我が精鋭ぞ」

「ひゅ〜♪」

あまり舐められると困る。

「——あれ、私は.....」

こんな殺風景な空間でなにをしていたのか。寝ぼけている頭を起こし、ここに至るまでの自分の行動を思い出す。

「確か・思い出した。」

自身、東郷 美森は大赦から申し出された奉火祭という壁の外の炎の勢いを弱める儀式を承諾した。そして、これがその結果。

皆に会えなくなってしまうのは非常に悲しい。でも、これは私の咎。一時の感情だけで壁を壊し、多くの人々に迷惑をかけた罰なのだ。だから、こんな結末になってしまふのはしょうがない。そう自分を納得させる。

「——しょうがなかねえよ」

「！」

ここには私一人の筈なのに、何処からか声がした。

「お前がそう思うのも無理ねえ。こんな理不尽な世界はあの日潰れた方が良かったんじゃないかねえかと今も思うさ。」

「それは違います。こんな理不尽な世界でも、私は友奈ちゃんやシャルル君に会えた。救いがあった——貴方もですよ、御影さん？」

「——」。こりや驚いた。千景の血が少し混ざってるってのも頷ける。」

自身の名を当てられたばかりか、真意すらも見抜かれたことに驚きを隠せず、ポロツと関係ないことが出てしまっている。

「まっ、お前さんの言う通りだ。思い出つてのは幾星霜経とうが色褪せない宝物。300年間、俺が俺であるための支えでもあった。忘れることも出来たが、なんというか、うくん。」

「思い出を忘れてしまったら、それは自分ではなくなる。そう無意識に理解してたんだと思います。」

「或いは俺の薄っぺらいプライド、かな。いや、そんな大層なもんでもねえな。」

プライド、それは誇り。御影にとつては西暦勇者とはそういうものだ。それがなければ、彼は御影 土郎ではない。

「お前もあるんだろ？これから何十年経とうが色褪せない思い出が」「はい。1000年経とうがこの思い出は絶対に色褪せません。」

「そりや結構。それがあれば、奇跡の一つ二つは起きるもんだ。つてことでお迎えだ」

「!」

殺風景な世界に罅が入っていく。徐々に大きくなっていく

「ここでの記憶、俺との記憶。忘れてしまっても構わない。でも、一つだけ伝言を頼まれてくれ」

「わかりました。必ず届けます」

「シャルルマーニュに一言。『天の神が目をつけた』」

その言葉と同時に世界が輝く。目の前に立っているであろう彼の姿すら見えないまでに白く染まっていく。

——東郷さん!!

## 伝言

あの後、崩壊したブラックホールから出てきた友奈と東郷を園子が方舟で回収し、結界内へと戻った。その後、勇者のスペックをフルに活用した風先輩が友奈と東郷を担ぎ、大赦の息がかかった病院へと運んだ。

東郷は体力の消耗で寝ているようで、体に異常はないらしい。念の為、友奈と銀も検査したが健康そのものだと言われた。

そんな中、俺と銀は空いている病室にいた。

「力が強くなった。前までならどうやっても出来ない事が出来るようになった。これらの症状はあるか？」

「ふんっ！っていつ、いつも通りだぞ」

銀が腕に力を込め、力瘤を作るが少し盛り上がる程度。次にジャンプしてみるが、一般的な飛躍力だった。

「ならば、心配せずとも良い。これからも、身の危険を感じた際は躊躇せず変身するといい」

「よしっ！」

あのノイズは無理矢理使用者以外が使った時に出るものだろう。なにか身体に影響が出るものではない。

そんな時、病室の扉が勢いよく開いた。

「——ミノさん！シャル！」

「んっ？」

「どうした、園子？」

扉を開けたのは、息を荒くした園子だった。なにやら、急を要する事が起きたようだ。

「わっしーが起きた！」

すぐさま席から立ち上がり、東郷が眠っている病室へと向かう。



病室の扉を開け、ベットに目を向ける。そこには、友奈達と話している東郷の姿があった。こちらに気づいたのか、目を見開け俺の目を見ている。

「あ、シャルル君」

「東郷・どこも痛む所はないな？」

「う、うん。どこも痛い所はないわ」

「そうか、それは良かった」

「やっ」と一息つけた。

肩の力が抜け、感じる筈がない疲労感を感じる。

「アンタは心配し過ぎなのよ」

「そうそう。アタシみたいにドシツと構えてなさい」

「それはドシツとし過ぎだよ、お姉ちゃん」

煮干しを齧ってる夏凜と椅子二つを占拠している風先輩を無視し、東郷を見る。

見たところ、少し痩せている。そして肌色が薄い。いや、いつものことか？

「シャルル君」

「どうした？」

「誰からか忘れてしまったけど、シャルル君に伝言があるの」

「伝言」

あの場にいる可能性が一番高いのは御影だな。つまり、この伝言は御影からだと考えた方がいい。

「天の神が目をつけた」って言ったような気がするの」

「?!?!」

「っ」

天の神という単語に全員が東郷へ視線を向ける。ただ一人友奈だけは難しい顔をしている。

「」

御影からの伝言は理解した、したんだが、ここで一つ問題が出てく

る。

「誰に目をつけたのか？」

という疑問が残る。

俺の予想は友奈と東郷だが、どちらかはわからない。そもそも確かめようがない。なんなら、二人共という案も出てくる。

「天の神については置いておこう。今は体力を戻すことを意識しておけ」

「そうするわ」

皆、それぞれ思考している。風先輩と銀は一瞬で答えを出すのを諦め、置いてあるクッキーへ手を伸ばす。夏凜と樹も少しした後諦め、クッキーを貰っている。

最後まで考え込んでいたのは園子とふわく筆頭の友奈。

とりあえず、俺は様子見を選択する。ここで下手に天の神を刺激するよりはこうした方が最善だろう。そう願うしかない。

## 正義の味方

東郷が無事学校に復帰した週の土曜日。勇者部での活動も終わり、家に帰っている途中。銀と園子と今日の出来事を振り返る。

「今日も大変だったな」

「まさかあんな事になるなんてっ！」

「ああ、予想外の結末だったな」

「ただ、家にいただけだからな……そんな含みある言い方止めてくれない？」

話しの内容は依頼で来ていた猫探しについてだ。

勇者部一同で依頼主から聞いたよく行く場所を二時間程探したのだが、一向に見つからず途方に暮れていると依頼主から電話がきた。内容は探していた猫が帰ってきたというものだった。

そりや、見つからないわな。

「まっ、無事だったしいいんだけどさ」

「結果オーライ♪」

「そうだな」

■無駄骨ではあったものの、猫の無事は確認出来た。それだけでも大金星というものだ。

「ちよつと、友奈の様子がおかしくなかった？」

「なにか悩んでいる様子だったな。」

「ミノさん、ミノさん」

「ん？」

園子が俺から少し離れた場所で銀を手招きする。少し不思議にしつつも駆け足で向かう。俺は一旦この場で待機しておこう。

「ゆーゆ、今日があの日かもだからシャルの前じゃね？」

「あ、そっか。わかった」

ゴニヨゴニヨ話している二人を置いておき、今日の友奈の様子について思い出す。

猫探しが終わった後、俺達は部室へと戻った。荷物をまとめ帰ろうとした時、友奈が思い切つて十二かを言おうとしたが、ハツとした顔をし中断してしまった。

確信に変わった。天の神に目をつけられたのは友奈だ。そして、なんらかの理由で俺達に喋れない状況になっている。

俺が手探りで探るしかないようだな。

そんな事を考えたていると銀と園子が戻ってきた。

「さっきのなしで」

「？」

なし・友奈が可笑しいという話をなかつたことにする、つてことか。まあ、それは問題ないし別にいいか。

「今日の晩ご飯、どうする？」

「今の所は麻婆豆腐をと思っている」

「こんな暑い日に!？」

「ちっ、ちっ、こんな暑い日、だからこそだよ。ミノさん」

何処からか取り出したサングラスをつけ、ハードボイルド的な感じに言っているが俺は知っている。

園子は辛いものがそこまで得意ではない。以前、俺が食べてた激辛ラーメンを一口食べた時は何故か顔真っ赤にしながら俺の耳たぶを触ってきた。今思い出しても不思議だ。

「ねえねえ、シャル。私のはちよつと辛くないのにしてくれる？」

「把握した」

「？」

耳元で銀に聞こえない程の音量で話しかけてくる。

園子の麻婆豆腐の辛さ成分は全て二分の一にしておくか。

家に着き、各々自身の部屋に行く。ちなみに、洗濯はきっちり別け

てます。干すとき？ははっ。いろいろあるんだ。あまり首を突っ込まないことをオススメするよ。

クロを頭の上から落とさないように気をつけながら、制服に手をかける。

へあゝ!!

「むっ。」

「にやっ。」

銀の叫び声と共に扉が勢いよく開けられた音がした。何があつたのか聞くために俺も扉を開け、玄関で靴を履いている銀に声をかける。クロはリビングの方へと歩いていった。

「どうした？」

「どうしたの？」

どうやら、園子も部屋から出てきたようだ。

「筆箱学校に忘れた！今からちやちやと取りに行ってくる！」

あたふたと靴を履きながら俺達の問いに答える。そんな銀に待たをかける。

「もう暗い。今日は諦め、明日取りに行つた方がいいだろう。」

「走っていけばまだ間に合う！てこと——うおっ！」

玄関の扉を開け、外へ飛び出そうとする銀の肩を掴む。

「それ程重要ならば、俺が行こう。銀は待つておけ」

「え？あつ、ちよ——！」

肩を引っ張り、中に戻す。その代わりに俺が外へ出て、玄関を閉める。ついでに鍵も締めておこう。

霊体化し、全速力で学校へと向かう。この時間帯なら、まだ先生がいるだろう。忘れ物を取りに来ましたと言えば、鍵を渡してくれる筈だ。

あれから数十分後。無事、俺は家庭科準備室もとい勇者部部室から銀の筆箱を回収した。その後、すっかり鍵を施錠し、職員室に返した。「それでは気をつけて帰って下さいね」

「先生もあまり無理をせず、頑張ってください」

「ははっ」

乾いた笑みが全てを物語っている。

この人は社会担当の野原先生。サッカー部の顧問でもある。真面目で堅実な人だ。冗談が通じない、という点があるが皆に好かれている。

まあ、うん。教員つてのは大変だと聞いてるし、この人なら尚更だ。一円にもならない顧問をして、しかも学生の進路を考える。シンプルに言つてヤバいな。素直に尊敬します。

俺もこの人同様教師をやれるが、やらないだろうな。というか、今の俺は資格を持ってないから当然出来ない。以前の俺はやろうと思つたことはないな。

そんなことを思いつつ、校門を抜けて学校を出る。ある程度離れたら行き同様霊体化して――

「何処にいったかしら」

一人のお婆ちゃんが歩道で捜し物をしているようだ。こんな暗い中、一人で探すと相当時間がかかる。ということを手伝おう。

お婆ちゃんへと歩を進めた瞬間、カツコイイ格好をした一人の女性が手を差し伸べる。

「お探しのものはこれですか？」

手には指輪のような物が見える。どうやら、指輪を探していたようだ。

「あら、見つけてくれたの？ご親切にどうも」

「いえいえ、当然のことをしたまです。」

「お礼にお饅頭あげる」

「お気持ちだけ受け取ります。ですから、お饅頭は仕舞ってください。」

「あら、そう？うくん、これ以外の物は今持つてなくてねえ」

「大丈夫ですよ。それでは、お気をつけて」

「貴女も気をつけてねえ」

お辞儀をし、離れていく。

さて、このカツコイイ正義の味方に話しかけてみるか。正体はわかりきっているが念の為な。

「東郷、なにをしている?」

「!?——私は東郷ではありません。国防仮面です」

「国防仮面、懐かしいな」

確か小学生の頃に、来年少生になる子達に向けてのレクリエーションでやった。それで、須美の富国強兵思想を子供達に植え付けすぎて安芸先生に怒られたな。

いや、懐かし過ぎだろ。

「ここで長話は出来ないな。近くの公園にでも行こうか」

「いえ、結構です。私は次の所に——」

「東郷」

「もう、シャルル君には適わないわね」

「正義の味方は贖罪でやるべき行為ではない。ある男の最期を知っているが故に友であろうがこれだけは看過出来ないな。」

近くの小さな公園に移動し、設置されているベンチに二人で腰掛ける。些か距離が近い感じがするが、東郷にとっては普通なのだろう。

「その衣装は園子からか?」

「ええ。この前そのつちの家に行った時に貰ったの」

なるほど、サンチョ選別のときか。俺がいないとき、または帰りがけに貰ったのだろう。

「さて、本題に入ろう。何故このような行動をしている?」

「」

「国防仮面の衣装である帽子を深く被り、黙りこくる。この反応から俺の予想があたっていることが確定した。」

「罪滅ぼし、だろう?」

「っ・これが罪滅ぼしにならないことなんて重々承知よ。でも、私にはこれしか。」

「東郷。お前は何か勘違いしているな」

俺の言葉が理解出来ないのかお目々を点にして、こちらを見つめてくる。

「ちよつと良い子過ぎないか?」

確かに東郷がしたことによって、何名か死者が出た。俺も一回死んだ。いや、俺の場合は自業自得なのでノーカンにしておこう。

「だいぶ柔らかくなつたと思つたが、もう少し必要のようだな。」  
「えつと。」

東郷の頭を両手でコネコネしていく。

園子や友奈の影響でふぎける程頭が柔らかくなつたが、それでもまだ固い部分があるようだ。これからも園子と友奈には頑張ってもらおう。

「これまで東郷は国防に励んだのだろうか?」

「我が祖国にあだなす敵を倒してきたわ。でも、結局私は。」

「頑張つたなら少しの我が儘も赦されるさ。一杯一杯苦しんで精一杯頑張ってきたもんな、俺達」

本来ならやらなくていい事をやってきたんだ。皆、折れず曲がらずの精神でな。感謝されはしても、罵声を浴びることはない。

「子供がお母さんに頑張つたから、アレ買つて!つて言うもんだ。そんな事で赦されない一生の罪が降り掛かるか?降り掛かんねえよ。だから、「罪滅ぼしなんてしなくていい。」

「でもっ。私は、皆に迷惑を。」

「誰も東郷が悪い、とか思つてねえよ。思つてるのは自分だけだ。だからさ、これまで頑張つてきた自分のことを赦してやってくれ」

自身を悪だと思う。それ程辛いことはない。

自分は正しい。自分が正義だ。そんなぐらいが丁度いい。ただし、間違つてゐるならしつかり謝らないとな!

「そんな自分に都合がいい話しに、乗つていいのかな。」



「乗っていいとも。」

「こんな私でも?」

「お前だからこそだよ、東郷」

定員は一名までとなっています。ただし、既にご予約のお客様がい  
らっしゃいますので、他の待機している客は全員速やかに帰宅するよ  
うに

「さてと、帰るぞ東郷。こんな時間に一人で出歩いちゃ駄目だからな。  
もし、次するときには俺を呼ぶように」

「シャルル君」

ベンチから立ち上がり、帰路につこうとした俺に待ったがかかる。  
「ん?」

「口調、戻ってるわよ?」

「あ、やべつ。俺の威厳が」

いつの間に、くそう、王たる威厳が台無しになってしまった。だ  
が、俺は学習する男。一度やってしまったことは一生起こらない。こ  
こから挽回していこう。

「ふふつ。やっぱり、シャルル君はカツコイイわね」

「褒めても飽しか出ないぞ」

ポケットからぶどう味の飴を取り出し、東郷へと渡す。いつも俺は  
銀と登校している者だ。泣いている子供と何回出くわしたか、どう  
なってるんだ、本当に。

「有り難く貰うわね。」

「さつ、帰ろう」

「ごめんなさいね、私の我が儘に付き合わせてしまって」  
「慣れっこだよ。」

毎日我が儘言ってる子が家にいるんでな。この程度の我が儘は優  
しい方だ。

そんなことを思いつつ、東郷と共に帰路を歩いていく。少ない会話  
だったが、これ以上の心配は必要ないだろう。それに、今度するとき  
は俺を呼ぶようについて言っておいたし、100%安心だな。

この後、家に帰宅した俺は回収した筆箱を銀に渡し、晩ご飯作りを開

始した。もちろん、園子の辛さ成分は半分にかットしてな。まあ、また耳たぶ触られたけど。

一人の男が真っ白の空間を進んでゆく。

「ギリギリセーフだったな」

御影 士郎ではなく?? ??。左腕がないからと言って、御影だと決めつけるのは早計だ。この男なら座に不法侵入が可能、と言つても縁がある英霊の座のみだが。

「神樹よりで助かったぜ。これで詰みポイントを外せたが、いや、それはシャルルマーニュ次第か。しっかり理解出来たかが心配だ。」

独り言多いなコイツ。

三百年生きているうちに出来た癖だろうか。ただ、気が狂わないように一人で喋っていたのが仇となったのだろう。

「さっさと御影に返さねえと」

英霊の座に接触出来るのは、この空間の中心部分だ。そこからならば、こちらにいる英霊の座を閲覧することが出来る。ただし、大半は閉ざして見えないようにしているが。

「なるほど、やっぱりそうなるよな」

■ 目前に誰かが立っている。人の形。言うならば??の姿に酷似している。

■ 静かに佇んでいる。呼吸しているかも怪しい。そんなモノが――

「ああ――気持ち悪い。」

「そんなら、さっさと出ていってくれ――よっ!」

突如として手に現れた一刀で真っ二つにする。確実に命を潰した。だが、彼は警戒することなく即座に後ろへと飛ぶ。

「うえ〜」

体内からドロドロとした液体が出てきて、切断部分をくっつけていく。やがて、切断跡が見る影もなく修整された。

「これが三百年の穢れ。よくもまあ、人間の身で保持していたな？」

「それが俺の役目なもんでな。てことで二回目」

再生なぞお構いなしに、再度たたつ斬る。今度は真つ二つではなく、みじん切りにしていく。本来の肉体では無理だが、御影の肉体を使うことによって可能になる。

「アハツ——ハツハツハツ!!!」

「うるせえ、静かに死んどけ」

金槌で頭を潰す。大剣で体の上と下を別ける。ダルマにしてから殺す。

どんな方法、手段、策を試そうが死なない。瞬く間にドロドロの液体によって再生される。

「面倒くせえ。」

「もう終いか。いやはや、ここまで舐められたのも久しぶりだ。」

「喋るな、臆病——ッ！」

腸が抉られ、小腸が飛び出る。

御影の反射神経を持つてしても躲すことが不可能。いや、本来の御影ならば可能だろう。だが、まだ慣れていない??では目視すら無理だ。

「なにか言ったか？」

「ったく、耳が遠いならそう言えよ。臆病——甘い」

「ガツ——!?!」

顔面目掛けて迫っていた奴の右腕が宙を舞い、地面に落ちる。

先程までとは違い痛みを感じたのか顔を歪め、??から距離を取る。

「貴様、キサマア——!!その剣、草薙剣——ヤマトタケルウウ!!!」

「やっと真名がわかってきたな。」

本来なら草薙剣を見て、最初に出てくる言葉は建速須佐之男命だ。

だが、奴はヤマトタケル。日本武尊の名を口にした。それ即ち、コイツの真名は——

「お前は穴海に隠れ棲んでるのがお似合いだぜ。どうせ、何もできやしねえんだから」

「ガアア——ッ!!!」

「魚風情がしやしやり出んな」

先程よりも速い左腕での大振りな一撃が??の胴体を裂き、臓物を露出する。しかし、??は一切表情を変えることなく、草薙剣を振るう。残っていた左腕を断ち、その勢いのまま心の臓すらも断ち切る。ドロドロの液体での再生はない。

「ぐっ、がああ、この我を、神たる我を侮りやがって、赦さん。赦さん。赦さん。赦さん赦さん赦さん赦さん赦さん——」

「??の体が粒子となり散っていく。この現象は——退去が始まった。」

今だ敵は機能を停止していない。心の臓がなくとも奴は生きていく。つまり、この戦いは??の勝ち逃げだ。

「貴様、そうか!そうかそうか!!アハハハ!!」

「脆弱な身であったが故に貴様は負けたのだ!人間として生まれ落ちたことに恥を知れ!我の勝ちだ!我はヤマトタケルに勝ったのだ!!」  
何を言っているのだろう、この悪神は。

全てにおいて敗北している。しかも、コイツはヤマトタケルじゃないし。

「??はニヤケた顔のまま粒子となり、体が消えてい——」

「?——何故だ、貴様、ソレは、二重構造、いや、そんな筈があるものか!」

二重構造、あながち間違いではない。

「??のクラスは世界すらも騙す。自身の霊基を御影 士郎とし、少し天の神側に寄っている檻に入ることも可能だ。」

「俺の負け?笑えねえ冗談はやめろよ、臆病者なお前が勝てる相手なんて此処に一人もいねえぞ。ただし、敗者はお前一人だと決まってるがな」

御影にはない、左腕がある。その瞬間、世界への偽装工作は終了した。ここからは??だけの独壇場。いや、もう一人いるな。

「——ひなたが迷惑をかけたのならば、私が方を付けよう。」

青い鳥、ではなく綺麗な髪を靡かせながら女性が歩いてきた。時代錯誤な袴をきつちり着こなし、腰に帯刀している。紛れもない、西暦勇者のリーダー。

「乃木 若葉か。斬り刻むの構わねえが、あの泥に触れるなよ。俺は別として、大抵の人間には猛毒だ。激痛だぞ」

「問題ない。ある程度はこちらでなんとかする」

「つまり、あとは弾けと」

■靈基からヒネ曲がっている??が、いくらあの泥に触れようが問題はない。そもそもアレは自身が受け持っていた物だ。だが、穢れを持たない勇者には猛毒。例え、一滴だとしても靈基に侵食する。

「弱者がいくら来ようが関係ない——ナア!!」

「自己紹介ご苦労」

「遅いな」

若葉にとつては遅いだろうが、??からは目視不可能だ。ただ、標的が自分ではなく若葉であるということしかわからない。

「——」

鞘に収まった状態の柄を握る。

放たれるは究極の一として昇華された居合——回避不可、防御不可。絶対破壊の一刀を此処に——

「はっ——?」

「めちやくちやだな」

誰の目にも止まらない連撃。迫りくる敵を細切れにし、地に伏せる。その際に飛び散った泥もいくつか斬るが、対処しきれない。まあ、そこん所は??が刀を射出して防ぐだろう。

「ふむ、思ったより斬りづらないな」

「おいおい。あれは御影じゃねえぞ。てか、今のでも完璧じゃないのか」

あれは士郎ではない。そうは認識しているとしても、姿形が酷似し

ているため無意識に力を抜いてしまう。

その中で放たれたのが、アレ？冗談キツイ。

「御影 士郎、アイツは傑作だった！」

「お喋りが好きな奴だな。」

細切れにされた体が泥によって組み立てられていく。口が生成されたと共に言葉を発する。どうやら、御影 士郎と面識があるようだ。

「無謀にも天へと挑んだ愚者。最期の表情。ああ！実に愉快！理解出来ず、取り込まれる様は何よりも見応えがあつた!!つい、手が出てしまったが。ククっ。いや、すまない。笑みが溢れて——」

「死ね」

細切れ。最早粉状に切り刻まれ散っていく。しかし、粉状にしたとしても機能は停止しない。またもや、泥によって体が形成されていく。

「ただの雑魚じゃねえか。魚だけに」

「貴様もお喋りだな。目障りだ」

若葉の始末を諦めたのか、今度は??へと駆ける。もちろん??には見えていない。若葉は次の居合を放つため、精神を研ぎ澄ましている。

「焼き魚って美味しいよな」

そう言った瞬間、奴の頭上から数千にも及ぶ刀が降り注ぐ。見えていないにも関わらず、全ての刀が突き刺さる。

「貴様あ。脆弱な人間の分際で我を地に這いつくばらせるなど——」

「あつ、すまん。水の上がよかったよな？」

「ガアアアアアア」

「ピチピチうるせえな。ほら、終いだ。」

手に持っている草薙剣で首を断つ。これで伝承通り、この悪神は退治された。

「これで終わりか？」

「いや、終わらん。この空間が一つの世界としてある事が裏目に出た

な。」

この空間は神樹によって造られた勇者のための死者世界だ。この空間は浮世と離れた、一つの新しい世界として形を保っている。故に伝承通りに倒したとしても、影響力は少ないだろう。

「ならば、これからどうする?」

「一先ずここは放棄する。コイツは現世で草薙剣を用いて首を断たねば死なない。乃木はこんな面倒くせえ奴と戦いたいか?」

「戦えるだろうが、いずれ泥を浴びることになるだろうな。」

「そうゆうことだ。まっ、俺は座に戻る。乃木は鳥になってアイツらのバックアップをしてくれ。枝もお前の判断で使っていい。」

「了解した。なんとかしてみせよう」

??は粒子となり、座へと還元される。若葉は青い鳥となり、この場を後にする。残されたのは、一時的に機能を停止した生首と首がない胴体だけ

この悪神・何処に転がっても面倒な事になるのは変わりない。

そもそも何故、このような悪神が神樹の一部となった??の体に巣食っていたのかは知らない。

## 人としての願いを【番外】

“自分はこの世界に必要なのか”

一人、自問自答をする。

天の神を打倒した日から一年が経過した。その間、人々は消えていた闘志を再度立たせ復興へと尽力していった。これが、人間の底力というものだ。

そう、人間に俺という存在は必要ない。であれば、魔力のパスを外し退去するのが定石だろう。だが、俺はその選択肢を選ばなかった。

——死にたくないから？

——違う。

そもそも俺は死者だ。いつ死のうが、結末は同じだ。

——救世主セイツアに背中を押されたから？

——それも違う。

アレは御影にとって当たり前の行動だったのだろう。人を導く英雄として定められた在り方だったのだ。そこに、御影本人の意志は介入しない。

——であれば、何故？

その答えが目の前に広がっている。

「うたのーん！そろそろ行かないと遅刻しちゃうよー！」

「りようかーい！」

夏であっても、登り始めの太陽は暑い。まあ、そんな中であっても歌野は平常運転だけだな。朝早くから農作業するとか、マジモンの農家か？

そんな歌野であっても、学校に行かなくてはいけない。以前のように、歌野だけで農作業してる訳ではないのだ。学習させるぐらいの余裕はある。

「それじゃ、後頼んだわよー！」

「おう、任せとけ」



「行ってきます、勇斗さん。」

「気をつけてな〜」

一度、家に帰り制服に着替えてきた歌野が学校へと登校する。その際に残りの手入れを俺に任せて行った。これが毎日のルーティンなので、然程問題はないが、中学生が心配することではないと思うのは俺だけではない筈だ。

「さて、と」

俺も俺でやることがあるため、一度家へと帰る。まあ、家と云つても町の人達のご厚意で空き家を使わせて貰っているだけだが。

「つたく、まだ寝てんのか」

家に入るが、生活音は聞こえない。どうやら、俺の同居人はまだ寝ているようだ。

廊下を歩き、一番奥にある部屋へと進んでいく。時刻は遅刻確定二十分前。今起こせば余裕をもって行けるだろう。

ちなみに、歌野達はかなり遠くにある畑方面から通っているため、今頃出ないと間に合わない。

「 。」

長く綺麗な黒髪を布団からはみ出してすやすやと夢の中に引き籠もっている女性が寝ている。

起こしてやりたくない。とは思うが、ここは鬼になるしかないだろう。それがお互いのためだ。

「ほら、千景。起きやがれ」

夏用の掛け布団を引つ剥がし、夢の世界から引き起こす。

「ん、ん〜っ」

「さっさと顔洗つてきな」

「ん〜」

眠たい目を擦りながらも、なんとか布団から立ち上がり洗面所へと向かっていった。

彼女は郡千景。御影との約束を守るため、高知へ歌野と赴き彼女を探した。一言で言うならば、酷かった。

あの村では駄目だ。あの両親では駄目だ。あの環境では駄目だ。

攫いました。

そして今に至る。結果だけ見れば、まあまあ上手くいったんじゃないか？警察に捕まっちゃうけどな。そこはご愛嬌で

「行ってき——」

「待て待て！朝ご飯食ってねえだろ!？」

制服を着こなし、登校しようとする彼女を引き留める。毎日毎日、リビングを素通りし玄関へと一直線に行く癖を治して欲しいぜ。

「朝弱くても、食えるだけ食っとけ。じゃねえと昼まで持たねえぞ」

「うん。」

完成一步手前まで作っておいた料理を作り上げ、机へと運んでいく。ついでに弁当も千景の近くに置く。

「いただきます」

あれから一年が経過しても物価は高いままだ。調味料は驚きの万超えだからな。どうやって買えと？そのため、どれも薄味なものだ。流石に塩はある。

「いつか醤油作りに挑戦しよう。」

「行ってきます。」

「友達作ってこいよ〜」

むず痒そうな顔をしながら、靴を履き登校していった。これで、朝の仕事は終了。次は畑に行かねば。

「問題なし、と」

歌野が終えれなかった、畑の点検を済ませます。点検と言っても、ただ野菜に虫食いとか病気があるかかないかだけだな。

「ふうー。」

木を背として寄りかかる。

次の仕事まで幾分か時間がある。ここで少し休んでも大丈夫だろ

う。

青い空を見る。

紅く染まった空が青くなつた瞬きの間を今も思い出す。二人の英雄が命をかけた空を、何よりも眩しかった色彩を。

御影は未来の英雄だ。それも、この世界とは違う末路を辿つた世界の。何を思つて俺に託したのかはアイツにしかわからない。だが、託されたには俺にも責務がある。今はそれに準じておこう。

日が暮れ、俺の仕事も終了した。今日の晩ご飯何にしようかな、と思いつつ帰路を進む。何人もの笑顔で走っていく子供達とすれ違ひながら、家に着いた。

——靴が多い。お客さんか？

「ただいまー」

ドタドタと奥から走ってくる音がする。この喧しきは歌野だろ。

「おつかえりー！」

「ぐおっ、と。」

走つたままの勢いでホールドされてしまった。あまりの勢いに後ろに倒れそうになるが、なんとか耐える。

「つたく、猪みてえだな」

歌野を降ろし、体勢を立て直す。

「そんなこと言つて、本当は嬉しいくせに」

「もうちよい大きくなってから出直してこい」

めつつつちや嬉しかったです。そんな茶番をしていると、水都と千景がゆつくりとやってきた。

「ダメだよ、うたのん。あまり困らせちゃ」

「帰ってきて早々騒がしいわね」

「原因は俺じゃねえけどな？」

とぼつちりなんだけど。というか、何で歌野と水都がこの家にいるのかの方が気になるんだけどな。

「まあまあ！そんなことは置いといて、早く行きましょー！」

「わかったわかった。行くから、手を引つ張んな」

歌野に筋力で負けるとは、普通に泣きそう。英霊の体に筋トレって意味あるんかな？あるなら、筋トレしよ。

・

歌野達に連れられ、俺はこの家についている庭に来ていた。庭には洗濯物を干すための物干し棒が突き刺さっているだけの筈だが――

「七夕、だったな。」

一本の竹が刺さっている。てか、いつの間に俺んちに竹を刺した？

「勇斗さん、この紙に」

「願い事、か。うくん？」

全く思いつかないな。ここは皆のを見て参考にするか。

既に竹にぶら下がっている短冊に目を通していく。

『農業王になるっ！』

著作権がヤバイからこれは破いとくか。いや、流石にそこまではしねえぞ？

『皆、病気になりませんように』

流石、水都。職場で貰った飴を上げよう。

何故って顔をしながら飴をじっと見つめている水都を無視して最後の短冊に目をやる。

『友達が増えますように』

思わず千景の頭を撫でてしまった俺は悪くない。すぐに手を弾かれたがな。

さして、書く内容は決まったな。

「よし、と」

俺が書いた短冊を竹に括り付ける。

「どれどね、勇斗が書いたのは？」

「えっと、『物価が戻りますように』？」

「勇斗らしいわね」

「これが一番だろ」

調味料がないとこのままずっと薄味を出し続けることになるぞ。

それは料理人としての意地が許さん。

「てことで、ほらっ」

「えっあー！」

ポケットから取り出したモノを水都へと放り投げる。それをアタフタしながらなんとかキャッチ。

「これ、シオンの飾り、ですか？」

「俺も手先器用なことを証明したくてな。……ってのはどうでもよくて、誕生日プレゼントよだ」

「みーちゃん、良かったね！」

「シオン、それは」

「——なんでだっけな」

あれ、どうしてシオンの花にしたんだっけな。考えたことなかったな。まあ、いいか。水都も喜んでるみたいだし。

「まっ、付けても付けなくてもいいからな。とりあえず、受け取ってくれ」

「飾りますー！」

「そりゃあ結構」

村正に習ったかいがあった。渋々といった感じだったがな。それでも、きつちり教えてくれたことに感謝。

「みーちゃん、みーちゃん」

「なに？うたのん？」

歌野の行動を千景と共に見守る。水都からシオンの飾りを受け取り、水都の頭をジゅつと見つめている。と思つたら、花飾りを——

「うたのん、これ」

「グッドツ！」

「凄く似合ってるわよ」

思わず、歌野と重なってしまうがこれはしようがない。我ながらいい出来だ。作ったかいがあった。

「誕生日おめでとー！みーちゃん！」

「——うんっ！」

——自分はこの世界に必要なのか。

——必要ではない。でも、俺はコイツらの人生を見届けたい。見届けたいと思ってしまう。よって、俺は生きる。意地汚く生きてやるとも。それが俺の答えだ。

## 空は巡らず

あれから何日か東郷の手伝いをしていたが、無事勇者部の皆にバレ、説教を喰らった。

園子からは私も混ぜてく、と。もれなく園子も説教に追加された。銀からは呆れた表情で見られました。グスン

「アンタらのブレーキぶつ壊れてじゃないの?」

「夏凜、ブレーキとは踏み間違えるためにあるものだ。」

「なんのための安全装置なのよ!」

「うんうん。ブレーキは踏み間違えるものなんよ」

「え、そうなの!」

「ああもう!少し黙んなさい!そして、友奈は簡単に信じない!」

「そうだぞ、友奈。世間にはこういう嘘つく大人が沢山いるからな」

「今日も今日とて夏凜は元気だ。そして、友奈はもう少し人を疑うことを知りなさい。マジで将来心配だから」

「夏凜は今日も元気ねえ」

「だいたいアンタらのせいよ!」

「えっ、夏凜はアタシ達と過ごすことで元気になる、ってこと」

「どうしたらその考えに至るの!」

確かに今の否定の仕方だと、俺達のお陰で元気になってるような言い方だ。ほんと日本語って難しい。

「えっ、夏凜ちゃん、元気じゃないの」

「うっ」

全力で否定する夏凜に友奈の心へ訴えかける攻撃が炸裂する。余程効いたのか体を仰け反らせて少し後ろへと下がる。

「夏凜さん、大丈夫ですか?」

「こんぐらいへっっちゃらよっ、っ、っ。」

「その割には随分と体が震えているようだが?」





東郷と園子に視線が集まっているうちに俺と友奈は部室から離脱し、皆から距離を離していく。だいたい体育館裏まで行けば問題ないだろう。

まだまだ夏ということもあり、少し暑いかもだが友奈には我慢してもらうしかない。ここが最適の筈だ。

そんなことはさて置き、<sup>？</sup>本題に入る。友奈の目を見る。

「さて、友奈。俺達にナニか隠し事をしているな？」

「っ！そんなこと、ないよ。」

嘘が下手いな、この子は。これで十割八分は俺の推測が当たっていることを確信した。

「天の神からの影響。そして、ナニかの理由で俺達に言えない。そんな状況か？」

「っ。」

「辛い？痛い？悲しいか？」

「天の神の影響などは正直どうでもいい。問題はそれで友奈がキツイ思いをしているかしてないかだ。」

「う、ん、っ！」

「そうか——ッ！」

友奈の涙を拭おうと手を伸ばした瞬間、突如として悪寒に襲われる。途轍もなく嫌な感じがする。これ以上は踏み入るな、と本能が警告してくる。だが、俺は——

「——友奈ちゃん!？」

「東郷、さん。」

東郷が猛スピードで友奈に駆け寄ったのを見て、右手を引っ込める。そして、東郷に続き続々と勇者部の皆が集まってくる。

これ以上は駄目だな。今回はここまでにしよう。

「シャル、なんの話を、してんだ……？」

「ただたどしく銀が会話の内容について聞いてくるが、こればかりは話せない。俺ははぐらかすことを選択するぜ。」

「うどんかそばかで議論してただけだ」  
「うどんでしょ」

流石、風先輩。決してうどん派から動かないな。

園子にはなんの話をしたかはバレているだろう。完全にあれはわかってるときの目だ。だからこそ、敢えて俺を無視し東郷と共に健康を連呼しているんだろう。

「それでアンタが友奈を泣かせたと……いいわ、ボコボコにしてあげる。ちよつと顔貸しなさい」

「夏凜さん落ち着いて！」

額から嫌な汗が出る。

マジギレですね、コレ。ちよつと不味いな……いや、ここは素直に受けなきゃいけないか？

「夏凜ちゃん、私は、大丈夫だよ。ただ、ちよつと、目に砂埃が入っちゃただけだから」

「……そっ」

「なんか怒りの矛先を仕舞ってくれたみたいだ。俺が夏凜とやり合っても負けるのは俺だからな。痛い思いは出来るだけ勘弁したい。」

「園子、何故この場に？」

「ん、私達はミノさんについてきただけだよ」

「いや、友奈とシャルが二人で出ていく所を見てさ。それで……」  
「ついてきたと」

静かに頷く。

ぐつ、俺の完璧な隠密行動を見破るとは中々だな。

「銀ちゃん、どこから聞いてたの……」

「恐る恐る」という感じに友奈が銀へと聞く。

「えくつと、だいたい友奈が泣いた所から？」

「そ、つか、うん、それなら……」

銀の言葉を聞き、胸を撫で下ろす。どうやら、話せない状況つての

は天の神関連だけか。友奈の言葉全てになんか発動してる訳ではない、って感じだな。」

あれから今日の活動は終了ということとで解散した。そして、その後の下校中の出来事。俺はいつものように園子と銀と共に帰路を進んでいた。

「シャル、もし私達の中で誰か一人を犠牲にしないといけないつて時がきたら、どうする？」

「俺が引き受けよう。」

そこに迷いはない。それが俺の王勇であり、自身に対する戒めだ。その刃は俺が貰い受けよう。

「急にどうしたんだよ、園子？」

「前さ、シャルが奇跡を起こすって言ってたでしょ？」

「うん、言ってた。でも、それは代償があつて駄目つてなったよな？」  
デュランダルを用いた奇跡。それにはそれ相応の覚悟と代償がいる。この世界に純度100%の奇跡は起きない。

「私達の散華した部分が戻ってきたのつて、シャルが奇跡を起こしたからじゃないかな？」

「だから、一ヶ月間ぐらいいなかったのか？そこん所どうなんだ、シャル？」

「いや、俺は奇跡を起こす間もなく退去した。その後、御影と会い、現実100%のシャルルマーニユと対話した。そして、力を借り受け此処に再度顕現した。」

「現実100%、ってことはシャルは天の神の内部にいたの？」  
「そうなるな」

天の神側から英霊の座を強制的に見る権限がなければ、俺の存在は見えないだろう。だが、もし見られていたとするならば、それは――

「それって大丈夫——」

全力でアクセルを踏んでるかのようなスピードでトラックが銀へと迫る。当たれば即死は免れない。

「——銀ッ！」

「ミノさん！」

「えっ——」

即座に霊基を換装。銀の前に立ち、トラックを左手で勢いを殺す。その間に園子が思考停止している銀を引っ張り、トラックの走行上から外れる。

「よしっ、二人共、無事、だなっ！」

「シャル！」

トラックの運転席に目をやる。そこに運転手が座っている筈なのだ。いない。それは絶対に有り得ない。だとしたら、これは何故スピードが落ちない!?

「シャル！それはなにか可笑しい！早く離れないと——！」

「わかっている、が、これは、勇士達よッ！」

俺一人では対処不可能と断定し、十二勇士の霊体化を解き顕在化する。

「リナルド、ブラダマンテは銀と園子の護衛を！他は走行不可能までトラックを切り刻めッ！タイヤは破裂させな！」

もし、この場でタイヤを破裂すると間違いなく全員鼓膜がやられる。最悪、脳まで影響をもたらす。

俺の号令と共に勇士達が飛び回る。護り、攻めていく。

「銀、園子をもっと離れておけっ！」

「で、でも——！」

「これは命令だ！」

「ミノさん、下がるよ！」

銀と園子に視線をやった瞬間だった。左手から重みが消えた。直ぐ様視線を戻す。が——

「なっ——!?!」

「——！」

二人の声が遙か遠くに聞こえる。ほんの瞬きの間も何時間にも感じる。それ程までに俺は今、死を身近に感じている。

——星屑が大きく口を開けている。

「グツ、オオオオ——!!」

左腕が星屑の口へと入った。噛み千切られはしないものの、鋭い歯が噛み千切らんと力強く立ててくる。

「——ツ!」

銀と園子が共に勇者システムを起動する。

この状態は非常に不味い!十二勇士の刃ですら通らないこの異常な星屑に挑むのは蛮勇に等しい。ナニか!ナニか、コイツを倒す方法を——よおし!やってやらあ!!

「——王の威光を受けよツ!!」

左腕と共に五大元素を星屑の内部で破裂させる。これこそ、外から駄目なら内から大作戦。犠牲は俺の左腕一本だけだ!痛いぜ、ちくしょう!

作戦は見事に成功し、星屑は体内から爆発して塵となった。

「——ふうー、難は逃れたな」

既に消え去った左腕から血を垂らしながら、周囲を警戒するが増援はないようだ。これにて難を退けた。一件落着いてな。

「シャル、早く病院に——」

「大丈夫だよ、シャル。いなくなるならいよね。」

「この程度で俺が死ぬわけなからう。だから、泣くな。」

左腕が欠損した。この状態ではジュワユーズは放てない。放てたとしても威力は激減だろうな。どうすつか、コレん?

「青い、鳥。」

「枝、それをどう——!?!」

「ツ!?!」

青い鳥兼乃木 若葉が啣えていた枝を俺の左腕の切断面に刺す。すると、徐々に腕の形となり俺の左腕となった。ちよつと透けてるけど

「治った。治った!!」

「シャル、動く？」

「ああ、問題ない。元通りのように自由自在に動く」

グツパしながら動作確認をする。その間、青い鳥は園子をじっと見ている。自分の子孫になにか思うことがあるのだろうか。

「ありがとな、鳥さん」

「ありがと〜！」

「助かった」

『——それで最後だ。これ以降の無茶は控えるんだな』

コイツ、直接脳内にっ!?

これで最後とは、この枝についてだろう。御影の言葉通りなら、これは令呪に似たような魔力の塊。作るのにとても時間があるようだ。

「わ〜♪」

「おう、好かれてんな園子」

翼を飛ばたかせ、飛んだと思いきや園子の頭に一度停まる。

ちよつと若葉さん!? 子孫がカワイイのは解りますが、アピールし過ぎでは!?

「あつ。またね〜♪」

「元気でなく〜！」

銀と園子と共に青い鳥へ手を振る。

流石だな、あの人。にしても、こういう時以外、何処でなにしているだろ? ちよつと気になる。

## 地は巡る

翌日、俺は何事もなかったように登校し、授業を乗り越えた。そして、放課後はいつも通り勇者部の活動へ

「っ、シャルくん、それって？」

「その包帯どうしたの？あ、もしかしてそういう時期？」

「それは風の方だろう。」

「アタシはとつくの昔に卒業してるわよ」

そう反論し、腕を組みドヤ顔を披露しているが、風先輩にもそういう時期があつたと告白しているようなもんだけどな。

さて、この包帯について語っておこう。まあ、別段凄い物ではない。聖骸布、ではなくただの包帯だ。未だ透けている腕を隠すためのな。ちなみに、手までは巻いてない。どうやって巻くのかわからなかったからな。

「怪我したんですか？」

「そんな所だ。この程度は数日すれば治るだろうから、心配せずともいい」

「昨日、クーちゃんに引つ搔かれたんだよね」

クーちゃん。いつの間にか園子がクロにあだ名をつけていた。まっ、クロちゃんにするとある人が頭ん中に出てくるからな。そっちが妥当だろう。

「クロに引つ搔かれるなんて、なにしたのよ？」

「おやつ見せびらかした」

「アンタが百パー悪い」

適当に嘘を作ったが、これなら有り得るだろう。よって、皆は引つ掛かるしかない。

「シャルル君、こっちへ」

「なにをやる気だ？」

「その手に持つてる縄はなんですか、東郷さん？」

「お級を据えます」

「あ、逃げた」

即座に部室の扉を開け、離脱する。そして、念の為全力ダッシュでグラウンドへと出る。これで東郷からは逃げれただろう。

今日の依頼終わらせてないじゃん。

この後、部室に戻った俺は東郷の手により吊るし上げられた。

.....

俺、東郷、友奈は迷子のカトリーヌちゃんを見つけたため、住宅街を歩いていた。あ、もちろんペットの犬の名前だぞ。人じゃないからな？

「酷い目にあつた」

「あはは」

「シャルル君、ペットと言つても家族なんだから。あまりおいたが過ぎるとまた吊るしますからね」

「わかつているとも」

それにクロはおやつ好きじゃないからな。実際にする機会なんて一生来ないだろう。

「さて、ここいらだな」

「うん。最後の目撃情報だところを右に、つて」  
「扉、ね」

右側に人が通れる道など存在しない。あるのは家を隔てるための扉だけだ。つまり、カトリーヌちゃんはこの上を行つたつてことになる。

「迂回しましょうか」

「そうだね」

「それならば、こちらだな」

この扉が途切れる場所をなんとか地図で確認し、そこを目標点とする。  
.....



る。

俺を先頭とし、目標点へと歩いていく。

「ねえ、シャルル君、手繋ぎましよう」

「手を繋ぐのは構わないが、何故だ？」

「シャルル君が迷子にならないようにね」

「迷子などならん」

「ふふっ。」

東郷は俺を何だと思ってるんだ。

差し出された左手を右手で掴み、共に歩む。

「うん、すべすべお肌だな。こどもすべすべだと、俺の手が汚くないか心配になってくるな。」

「？」

「友奈もどうだ？」

「いいの。」

「もちろんだとも」

空いている左手を友奈へと差し出す。流石に友奈だけ省くのは嫌だからな。ここは皆仲良く手を繋ごう。ただし、俺は羞恥心で死ぬ。

「えっと、失礼、します？」

またまた俺の本能がアラームを鳴らしている。喧しい音だ。そのような警告音を出そうが、俺の行動は変わらない。困っているなら、手を差し伸べるまで——

「ッ——!!?」

——全身に激痛と熱が迸る。

そんな中俺は激痛が気にならない程の幸福感に満たされる。痛みに興奮する変態ではありませんのであしからず。

俺の妄想に過ぎない、当たって欲しい推測が当たった！

天の神が目をつけたのは友奈ではなく、俺。それ即ち、友奈への異常は俺が本来引き受けるモノだった。つまり、コレは俺へと移動が可能。友奈から取り除ける可能性があるとなると俺は考えた。予想は的中。これで友奈が楽になる。勝ったな。っ。

「あ、あれ、体が——って、シャルくん!?!」

「凄い汗ね。病院にすぐ行きましょ」

「い、いや、何ともない。ただ」

「ただ？」

頭を高速で回す。ここで二人を騙すいい感じの嘘をちっぽけな脳で構造する。

なにか、なにか――！

「左腕が疼いただけだ」

「え、えくつと・そうなんだ？」

「シャルル君、そこまでっ！」

やっべく、二人からの視線で今にも倒れそうだ。結果的には上手くいったんだけども、代償がなによりも大きかったな。

「さ、探索の続きをしましょう」

「う、うんっ！ そうだね！」

さて、聖騎士帝を最大まで発動しているが、中々の痛みだ。もし、これで神性への特防なしで受けるとなると想像を絶する痛みが全身を襲うだろう。しかも、一日中な。

友奈、お前、いや、今考えるのはよそう。後で美味しいスイーツ持っていこう。

そして一つ、一番重要な問題にきづいた。

――魔力消費早くね？

## 崇りの真髓

最近、シャルの様子がおかしい。まあ、おかしいと言ってもただ寝ている時間が増えたっただけだけど。なにもないなら部室でも寝ている。

寝不足いや、そんな感じじゃない。シャルは早寝早起きを毎日している。そんなシャルに限って寝不足なんてありえない。

正直、心配だ。

「あら、またシャル寝てんの？」

「依頼あったら起こしてくれー、って言っていましたよ」

机に突っ伏し、静かに寝ている。そんなシャルに寄り掛かりながら、園子も居心地良さそうに寝ている。ちよつと、羨ましい。

「まっ、今日は海岸掃除だけだしね。」

「えくつと友奈と夏凜が行ったんですつけ？」

海岸のゴミ拾いが勇者部への依頼できていたが、定員二名まで。そこで立候補した友奈、それに続いて夏凜が海岸掃除へ行った。須美の目が恐ろしいことになっていたのは心の底に仕舞っておこう。

「そつ。だからアタシ達はだらくつとときましょ」

「駄目ですよ、風先輩。ホームページの更新がまだです」

「そうだよ、お姉ちゃん。あとお姉ちゃんが書く所だけなんだから」

「アンタら仕事が早いわねえ」

「お姉ちゃんが遅いんだよ」

「ぐっ。」

樹による攻撃を受けながらも、パソコンの前へと座りキーボードを打っていく。

たまに、他の部へと出張すると何で風先輩が部長なのか聞かれる。シャルルマーニュ君の方がいいんじゃないか、と。

アタシは風先輩が部長であるべきだと確信している。シャルだつてそうだ。だから、アタシはその問いにシャルの前では言わないで

ね、と言う。シャルが怒ると怖いぞ、って。実際、なによりも怖い。

「結城 友奈、ただいま戻りましたー！」

「片付けてきたわよ」

「お疲れー」

「お疲れ様、友奈ちゃん。ぼた餅あるわよ」

「やったー♪」

「まーた、須美が友奈を餌付けしてるよ。どこで育て方が間違えちゃったかなー」。

「てか、シャルはまだ寝てんの？」

「夏凜達が行って、からずつと寝てるぞ」

「園子はわかるけど、シャルは明らかに異常事態ね。病気じゃないの？」

「病院の先生には大丈夫って言われたしな。それに、ちよつと体温高いだけ」

「ふーん。ちなみに何℃？」

「39.5」

「瀕死じゃない!？」

この間、園子がせがんで体温を測ってもらうと驚きの39℃台が出て心臓が止まりかけた。でも、どこにも異常なくて病院でも大丈夫です、と言われてしまった。

「一体全体どうなってるの。体温計ぶっ壊れてんじや」

「新品新品。園子を買ってきたヤツだよ」

「機械なんて信じないわ。直接——」

夏凜がシャルの額へと手を近づける。そんな時、シャルの体が少し動いた。

「——どうした、夏凜？」

「!いいいや、なんでもないわ」

「そうか。さて、起きたいのだが、園子を起こしてくれないか？」

園子はシャルの背中に頭を置くように寝ている。ここで、シャルが無理に起きると園子が落ちて頭を打つことになるだろう。

「園子ー、起きろー」

「ん、——んにゆ〜」

園子を揺さぶりながら夢の世界から引つ張りあげる。

「あ、シャルだあ〜。おはよう〜」

「ああ、おはよう。起きて早々悪いが、俺の背中から頭を退けてくれるか?」

「いいよ〜」

シャルの言葉に素直に従い、頭を背中から上げる。それに続き、シャルは上体を起こした。

「終わったー」

「これで更新ですね」

「どうやら、ホームページの更新も終わったようだ。」

「そんじゃ、今日は——うわっ!シャルが起きてる!?!」

「何事もなかったようだな。」

風先輩がシャルが起きていることに驚き、ギョツとするが全員知ってたのでスルー。そそくさと帰る支度をしていく。

「まつ、いいわ。暗くなる前に帰っちゃいませよ」

「そうするでしょうか」

「だね〜」

「東郷さんのぼた餅美味しいね〜」

「まだあるわよ」

う〜ん、このハチャメチャ感、ヤバいな。

視点も場所も変わり、翌日へ。

現在、俺はあるお屋敷へと出向いていた。園子の実家に負けず劣らずのデカさだ。

「シャルルマーニュ様ですね。要件は既に承知しています。どうぞ、こちらへ」

この屋敷の使用人らしき人によって、大きな庭園の方へと案内される。その庭園には種類、色、全てが異なる花々が咲いている。実直な感想として、綺麗だと思える程の景色だ。

そんなことを考えているうちにドンドンと奥へと進んでいく。数分程歩くと、周りに花がない開けた空間に出る。そこには、テーブルとイスが用意されている。

「お久しぶりでございます、シャル君」

「久しぶりだな、柚葉」

俺としては会いたくなかったが、送られてきたチャットの内容は無視出来ない。

俺が席に着くと同時に周りにいる使用人全てがこの場を後にする。この状態で俺が剣握ったらどうすんだろ。

「それでは話して貰おうか。天の神について」

未だ謎多き天の神について、と彼女は送ってきた。それだけで来る価値はある。

「シャル君、上里 ひなた様についてご存知ですか？」

「もちろんだとも。西暦の勇者と共に歩んだ巫女だろう？」

「はい、その解釈で問題ありません。それでは、シャル君、勇者適正の遺伝率を聞いたことありますか？」

「いや、ないな」

そんな話は一度も聞いたことはない。ただ、大赦から情報を持っていった時に御影と乃木 若葉の遺伝子を混ぜようとした、という記事があったな。

「勇者適正は子へと高確率で引き継がれます。それは、巫女も変わりません」

「それが、どう—— 柚葉は巫女か？」

「いえ、私は巫女ではありません。」

高確率と言っても、必ず引き継がれるわけではないってことか？だが、この含みある言い方はナニかあるな。

「上里 ひなた様以降、勇者適正を持った者もいましたが、巫女を排出したことは一度もありません。」

「それが天の神にどう関連する？」

「私は役職の影響もあり、大赦のあらゆる情報を網羅しています。ある時、上里 ひなた様の情報を閲覧しました。そして、一つの記録を見つけました。幾重にもロックが掛かっており、解除するのに随分とかかりましたが、私は解除に成功しました。」

「内容は？」

上里 ひなたの記録。それもとても重要な。それは天の神関連だろうか。そうでなくとも、ヒントになる筈だ。

「悪神、悪樓<sup>あくる</sup>」。吉備国の穴海に隠れ潜み、いづつもの船を海底へと沈めた魚の形容をした神。最終的には日本武尊<sup>ヤマトタケル</sup>によって退治されました。」

「ふむ、悪樓か。聞いたことがない神だな。」

吉備国、古い呼び名の岡山県か。香川県から瀬戸大橋を渡った場所に位置する県だな。

「この悪神についてはあまり調べませんでした。本題はこの次です。」

「聞こう」

何故、上里 ひなたの記録に悪神の名が刻まれているのか。今はそれが一番重要だ。

「上里 ひなた様はこの悪神と契約しました。どのような契約内容かはわかりませんが、代償はハッキリとしています。」

「巫女への適正を消す、か？」

「あながち間違いではありません。ですが、根本が違います。私達には巫女適正は十分な程にあります。」

「つまり？」

「巫女適正はある、にも関わらず巫女ではない。そこから叩き出される答えは——」

「私達、上里家は神々から見えませんが。」

「なるほど、存在を漂白されているのか。」

「漂白、言い得て妙ですね。その解釈で問題ありません。」

「簡単に表すならば、マーリンから見たオベロンって感じだな。」

今、現在を天の神が見るとするならば、俺はただ独り言を呟くヤバイ奴だと映るだろう。

「シャル君、天の神からの崇りに引つ掛るような事を私へ喋ってみてください。」

「俺は天の神から崇りを受けている。全て正しいようだな」

俺がどんなことを呟こうと柚葉への崇りは起きない。それはつまり、柚葉の言葉が正しいことを意味する。

「もし、天の神への暗躍がお望みならどうぞなんなりと。」

「ああ、必要になったら手伝って貰おう」

「そして、この紙に名前と印鑑を」

「いいだろ——」

差し出された紙を見ると、そこには婚約届と書かれている。すぐさま、紙を持ち——

「」

「ビリビリに破いていく。これで危機は退けたな。」

「大丈夫ですよ、シャル君。もう一枚あります」

「それでは」

即座に霊体化し、その場から飛翔する。

このままこの茶番を続けてたらいつか書かされる。ソレだけは絶対に避けますっ！







「ッ——!?!」

パツと視界が明るくなる。

目の前には園子がいて、銀がいて、クロが寝てて……いつもの光景だ。それだけでどつと安心感がくる。

「はあーッ、はあーッ!」

荒い呼吸を繰り返しながらも、自分の首に手を当てる。

ある・ちゃん・とある。縄は巻き付いてない。アレは夢だったんだ。ただの心底胸糞悪い夢だ。一生見たくない。

俺の膝に乗っていた園子が泣きそうにしながら顔を覗き込んでくる。その間、銀は冷蔵庫から冷えた飲み物を注いでいる。

「大丈夫? なにか、怖い夢でも見た?」

「——ああ、そのようなものだ」

なんとか呼吸を平常へと戻し、返答する。

怖い夢・あれが、本当に俺の最期ではないことを祈る。

「我慢しなくていいんだよ」

そつと優しく包まれる。

いや、ヤバイぞこれ。園子の体勢のせいかは知らんが顔にえつと、その・とにかく当たってる。

「我慢なんてしてないさ」

「よし、よし。シャルは良い子だね」

「お、シャルを愛でる会! アタシも混ざろ〜!」

ちよつ、更に事態をややこしくしないでくれ。今、結構精神がグラついののに情報処理量を増やさない。これ以上増えると爆発するか  
らな、頭が。

翌日。俺達は勇者部での活動を終えた後、最寄りにあるカラオケへ

と来ていた。

風先輩がドンドン食べ物注文し、時間の限り歌っていく。

「！、ッ！」

「——、どうした、夏凜？」

「やっと気づいた、なにボケつとしてんのよ。次、アンタが歌う番でしょ。」

「ああ、そうだったな。」

意識を覚醒させ、夏凜からのマイクを受け取る。モニターを見ると、俺が選択した「Mrs. グリーンアップルさんの愛情と矛先」が表示されている。

いやあ、この世界にもあつてよかった。前世通じて一生好きな曲だからな。

「っ」

「そうだな。ただ、歌うのも味気がない、ということまで友奈、デューエイトでもしようか」

「う、うん。いいよ」

二つ目のマイクを座っている友奈へと渡す。その次の瞬間には、先程まで一つだった東郷のカメラが二つになっていた。

「あれ？それ、デイエイト曲だっけ？」

「多分、問題ないだろう」

風先輩、ここはお口チャックをお願いします。

この後、無事歌えたものの点数がいつもの時より二点下がった。

場所も視点も変わり、一週間後の土曜日。

今日はある事情で勇者部の活動は休みとなり、シャルくん以外は風先輩のお家にご招待された。その理由は——

「ぜえ〜っつたい！なんか隠してる！」

銀ちゃんがそう言い、勢いよく机を叩かず、席に座る。

「そうよねえ。でも、悪いことじゃないとは思うけど？」

「それは、そうなんだろうけど。一人で悩むなら、アタシ達にも言ってくれたら。」

ここ最近、明らかにシャルくんの行動がおかしい。こうやって皆で集まって話し合う程に。

この中で私だけが知っている。シャルくんがどうしてそうなったのかを。それが、どれだけ彼の負担になっているかも。

「ここはシャルル君を吊るしてでも。」

「それは最終手段だよ、わっしー。それまで、みんなで模索しよ？」

「わかったわ。」

強硬手段。それをしても、きっとシャルくんは言わない。

一度やり抜くと決めたシャルくんはこの中の誰よりも頑固で努力する。そして、誰もが驚く事をしてがす。それこそ、シャルくんクオリティー。

「天の神が目をつけた。それがシャル先輩だと思います。」

天の神が目をつけたのが最初からシャルくんだとしても、最後の最後で橋渡ししてしまったのは私なんだ。私が一人で抱えとけば！

「天の神、ね。神世紀が始まった要因、って言っても結局なんなのよ。」

「地球の防衛システム、またの名をガイア。それが天の神の大元だよ。」

「何処情報？」

「シャル情報〜♪」

シャルくんは物知りだ。いつだってわからないところを教えてくれた。

「ちよ、園子。言っつてよかったのか？」

「もうここまで来ちゃったしね〜それに、シャルだったら言っつたと思っつから」

銀ちゃんとそのちゃんがゴニョゴニョ話してる。秘密、だったのか

な。

「ちよい待ち。なんで防衛システムが四国以外滅ぼしてんの？」

「シャルの推測だと、人間が世界から不要になった、って」

世界から人間がいや、実際そうかもしれない。自然を破壊していく人々が地球にとつての悪に見えたんだろう。でも、みんながみんなそうではないことを知ってる。自然を守ろうとしている人々を知ってる。だから、こんな間違ってる。

「うゝむ、そうねえ。なんか、こう。納得いかないわね」

「うわつ、アンタと同じ考え。」

「遂にこの偉大な先輩に追いついたわね。」

「あゝ、ハイハイ」

「ツツコミを放棄しないでください！」

やっぱり、風先輩とシャルくんは似てる。この、ズバツとみんなの前に立って道を作る所が。私に出来るかな。

「天の神をシャルと協力して倒す。でも、これが成功しちゃうと。」

「しちゃうと、なんだよ？」

そのちゃんが珍しく歯切り悪くしている。それだけで、なんとも言えない重い空気が漂う。

「シャルがいなくなる。」

「「「ツ——!?!」」」

「止めましょう。この作戦はなかったことにします。」

一番早く判断したのは東郷さん。世界とシャルくんの命を天秤にかけるなら、シャルくんを取る。それはみんなも同じの筈だ。

「わっしー、私も賛成だけど、シャルの口ぶりからして、あんまり時間がないと思うんよ」

「ちよつと待ちなさい、園子。そもそもどうしてシャルがいなくなるって結論になったの？」

あつそつか。そのちゃんがそう思ってるだけで本当はならない可能性だって——

「にぼつしー、シャルが必殺技使ったの見たことある？」

「必殺技。あの眩しいヤツ？」

シャルクんの必殺技、えっと……あ、獅子座にやったのかな？

そんなことを思い出していると、そのちゃんが一つのノートを取り出しペー지를捲っていく。

「王勇ジュウワウを示せ、遍く世ズオを巡る十二ドの輝劍ル」

レンジ不明。最大補足一人。ランクEX。

最大補足一人となっているのは、自身への自戒のため。よって本来の最大補足は対軍宝具並となっている。

自身が王勇を示した度合いによってジュウウーズが一本加担され、最大は自身が手にするものと合わせて十三本となる。

大英雄にも真似できない至高の十三連撃。」

頭がパンクした。

あまりの量の情報量によって、頭がぐわんぐわんってなつて最初のジュウウーズオールドルだけしか覚えてない。

「はい、友奈ちゃん。糖分補給のぼた餅よ」

「ありがと、東郷さん。頭がぐわんぐわんなっちゃって……ん〜♪」  
やっぱり東郷さんのぼた餅が一番美味しい。何回食べても飽きない。もう、ず〜つと食べてたいと思えちゃう。

「その概要をどう、ってアンター！そのノート『秘密』って書いてんじゃない！」

「シャルの引き出しの奥に入ってたんだ〜」

「怒られるんじゃない？」

「へーきへーき、シャルは今も寝てるだろうし」

ノートにはぐ丁寧ゴテウに秘密、と書かれている。覗いてはいけないタイプのメモ張だと確信した。

「どうなっても知らないわよ……それで？その情報からなにが言いたいわけ？」

「これ、本当はバンバン撃っちゃいけない技だと思ふんよ」

「確かにそうね。準備時間も他とは比べ物にならない程長いもの」

「でも、シャルはそんなのお構いなしに撃ってたけど？」

「私が見ただけでも四発は撃ってる。でも、その後にシャルくんは行方不明になつて……あ！」

きつと、アレにはなにか払う物があるんだ。そして、それがなくなつたから一ヶ月もの間いなくなつた。これでえつと、これであ、辻褄が合う!

「うん、シャルはお構いなしにヤバイと思つたら撃つてた。でも、そんなシャルがあの時躊躇してた」

「それつてつまり園子の考察で合つてる、つてこと?」

「今の所わね、フーミン先輩」

「やっぱり、そのちゃんは凄い。私じゃ考えられない答えをさつと出していく。それも、しつかりとした理由をつけて」

「ここから推測。これからある天の神を倒す作戦。これつて、シャル一人でやるつもりなんじゃないかな?」

「はあ!?」

「真つ先に声を上げたのは銀ちゃんと夏凜ちゃんだった。大きな声で反応したからか、近くにいた樹ちゃんは目を点にしてる。」

「シャル一人じゃないといけない。或るいはシャル一人の方が成功率が高い。多分そんな感じ?」

「それつてつまり。私達がシャル先輩にとって足手まとい、つてことですか」

「シャルくんは強い。私達の中だと頭二つ分ぐらい抜きん出てると思う。でも、無敵じゃない。いつも私達の誰かを庇つて。うん、そう

だ。いつも、シャルくんの怪我の要因は私達。足手まとい、つて言うか。危険から離れたら感じてと思うよ。そのために勇者システムがあるんだらうし」

「護身用、つてことね。これは中々」

「部長たるアタシを舐めてるわね」

風先輩と夏凜ちゃんがこめかみ辺りをヒクヒクしながら、拳を強く握る。

「カチコミ行くわよ!」

「お姉ちゃん、一旦落ち着いて」

「私も同行します、風先輩。一緒にシャルル君を吊るしましょう」

「折角の機会だし、私もやっちゃおうよ」



「確かに。よしっ、アタシもシャルを聞いたですっ！」

ドタドタと外に出て行った風先輩に続き、みんな外に向かう。私も、と思つて席から立とうとした時後ろから呼び止められる声があった。

「友奈、なんか悩んでる？」

「い、いや、そんなことないよ、夏凜ちゃん。どうして、そう思ったの？」

「いつもうつさいアンタが口数少ないことなんて、全員不思議に思つてるわよ」

「あはは。今日は、ちよつと。お昼ごはん食べ過ぎちゃつて。」

「程々にもなさいよ」

「あ、うん。」

「そう言う」と夏凜ちゃんも外へと出て行つた。今度こそ私も立ち上がり、小走りで外へ向かう。

## 暗闇の中でさえも

今日は勇者部の活動が突如として休みとなり、俺以外のメンバーは風先輩宅へ集合となっている。当然、銀と園子もだ。つまり、今家にいるのは俺とクロだけ。寝放題だなっ！

布団に入り、寝る体勢をとる。後は目を瞑るだけで終了だ。おやすみなさい——。

今日の夢はどうやら樹海のような。ここに良い思い出ないんだけど、待て、この違和感は——。

「夢、いや、違うな。」

この前の夢が俺本来の体であったのに、今回はシャルルマーニュとして来てる。その時点でこれが夢ではないナニかだと確信する。

うーん、この感じ的に、俺自身と会った時に似てる。ということは今の俺は仮死状態？なんかかな。

「——初めまして、かな」

この声は——！

声が出た後ろへ体を振り向き、発声源を見る。そこには友奈——とそっくりな人物が立っていた。

「友奈、高嶋、友奈か」

微妙に雰囲気と髪につけている飾りが違う。そこから、俺の記憶に合致する人物を検索する。一つだけ当て嵌まる人物を見つけた。

御影 士郎の勇者御記に載っていた高嶋 友奈。友奈と瓜二つな彼女しかないだろう。

「びっくりしないんだね」

「死者と会う機会が何度もあったのでな。今更、というわけだ」

「士郎くんにも会ったんだよね。どうだった？」

「御影の普段を知らない俺に聞かれてもな」

「あ、そうだよね。ごめん」

「そんな顔しないでくださいよ。罪悪感で胸がズタズタにされてしまおう。」

「元気そうだったぞ」

「そっか、それは良かった」

「元気そうだった、というよりははしゃいでたな。久しぶりのシヤバの空気を吸えたからだろうか。というか、あの顕現の仕方の謎が解けてないな。」

「何故、この場に俺を呼んだ？」

「天の神の祟り、受けてるよね？」

「把握済みってことか。ということは、此処に呼んだ理由は——」

「対抗策でもあるのか？」

「うん、あった」

「過去形やめてください。それ、今はもうないっていう意味ですよ。ね。」

「今は？」

「ごめんね。結城ちゃんにしか出来ない策だったから」

「それならばしようがない、か」

「出しゃばってしまったのは俺だからな。それに痛みは承知の上だ。」

「雫が高嶋の手の甲に落ちる。」

「——あ、れ」

「どうした？」

「なにか涙線に刺激を与えるようなことをしただろうか。もし、これで俺が原因だとすると御影に刺される。起きた瞬間殺される可能性がある。」

「俺から指摘され、ようやく自覚したのかいそいそと涙を袖で拭う。」

「ごめんね。ちよっと、昔を思い出しちゃって」

「ここはどうするべきか。話を聞いた方がいいのだろうか。いや、でも話したくないのなら無理に聞くのもあゝ、もうやっつたれ！」

「話を聞こう。無理ならばそれでいい」

「それじゃあ、ちよつといい?」

「夢が醒めるまでな」

ふう〜、なんとかなったな。今度御影に会った時に村正の刀要求しとくか。

300年間生きるということはどれ程の苦行なのかは俺は知らない。以前600万年間を独りで生きていた男は知っている。その男は記憶を忘却することで生きながらえていた。

この話はもうよそう。

「土郎くんは本当に強くて、優しくて、カツコよくて、私の憧れ、だったんだ。」

少し照れながらも御影 土郎という男の生きていた証を語っている。一言紡ぐだけでも、思い出が頭の中を駆ける。

よし、村正の刀に付け足してカツコよさの伝授も要求しよう。これで俺もカツコよさをグレードアップしないとな。

「若葉ちゃんがみんなを引っ張ってくれるリーダーで、土郎くんは私達の道を作ってくれるもう一人のリーダーだったんだと思う。二人のお陰で頑張れた。どんな強大な敵にも立ち向かえた。でも負けちゃった。」

乃木 若葉、西暦勇者達のリーダー。

自身の勇者御記では、御影の方がリーダーに向いていると書いていたが皆からは相応しいと認められてたんだな。

「そんな窮地をいつも土郎くんが逆転してくれた。えつと君の首にかかっている物の元である剣でね」

「草薙剣か。あれは正に規格外の代物と言う他ない」

俺の首にかけている草薙剣の欠片を握る。

推測だが、この剣には因果逆転のような効果がある。真価を発揮した瞬間にナニかが決定される。そのナニかはわからないが刺し穿つ死棘の槍同様途轍もないモノだろう。

「だから、安心してた。きつと、今回も何事もなかったみたいに戻ってくるって。でもっ。ふっ。」

帰ってこなかったか。

元々承知の上で天の神へと挑んだのか。それとも、ただの蛮勇だったのか俺にはわからない。だが、俺は信じている。蛮勇でも愚策でもない、誰にも譲れない誓いの為に命を賭けたのだと。それが御影 士郎という男だと。

「みんな、辛かった、苦しかった、泣きそうだった、それでも、強くつて、いつの間にか、前向いて、私だけ向けなくて、何十年経っても忘れることが出来なくて、私、ほんとにバカだなく、うて、あ、くっ。」  
一人泣いている彼女から目を逸し、何も無い空を見上げる。星がいせいか、本当に真つ暗で一寸の光もない。でも、こんな空でも綺麗だと感じる。それだけの雄大さがこの空にはある。

何人もの勇者達の勇姿を見届けた空。覚悟の末を見届けた空。涙流した者も怒りで我を忘れた者も——でも、皆勇者で最高にカツコイイ奴らで、ああ、本当に眩しいぐらいの色彩を放っていたとも。「忘れる、ということとは自身の思い出をなかったことにすることだ。弱さも強さも醜さも正しさも、酷い記憶もあつただろう。喜びに満ちた思い出もあつただろう。」  
「でも、どれも自分にとつては宝物で替えない唯一の物だった。だから、忘れることも逃げることも出来なかった。」

俺は母さんを憶えている。

誰よりも頼れる背中を、優しい声も、温かい手の感触でさえも憶えている。そして、冷たくなってしまった手も

この数十年間。アイツらとの楽しい記憶も勇者である皆との記憶——どれも母さんとの思い出に負けない程のものだった。でも、俺は忘れなかった。いくら、それ以上のものを与えられようが、手放さなかった。

「生きづらい、それで結構。この記憶を忘れるなら死んだ方がマシだ。何十、何百経とうが俺は忘れない。また、新しい思い出を作っていく。」

「それが俺だ。シャルルマーニュという英雄に憧れ、思い焦がれた者だ。」

これだけは何年経とうが変わらないだろうな。そう思うほど、俺はどうしようもない馬鹿でどうしようもない愚者だ。

「私の宝物。うん、ちゃんどこにある。誰にも負けない。誰にも譲れない。私だけの宝物。」

そつと胸に手を置く。そして、確かめるようにゆつくりと遥か昔の記憶を噛み締めていく。

何もかも過ぎ去ってしまった今を生きるとはこういうことなのだろう。

なんともない日々を幸福感に浸りながら思い出す。誰とどのうような話をして、どう思ったのか。そんな他愛もない記憶を

「うん、うん。ありがとね。関係ない話しちゃって」

「構わないとも。どうさすぐ醒める夢なのだから」

ただ、醒めるのをじつと待つよりかはこうやって人と話しておくほうが楽だからな。

「これで、ようやく士郎くんに前向いて会えると思う。」

「それでこそだ」

御影もそつちの方が嬉しいだろうしな。これで要求するグレードを更に上げれる。へへ、村正の刀飾るの準備しなくっちゃな。

「多分これからは齧ることはないと思うから安心してね」

「ああ、ん、齧る？」

あれ、高嶋 友奈に以前会ったけ？しかも齧られるなんて。そんな記憶はないな。

「それじゃあ、またね。次はないと思うけど、いつも応援してるよ。」

「そちらこそ、御影への挨拶を考えていろ」

絶対に終わらせる。天の神は必ず俺と御影で仕留めてやるとも。それが俺にできる最後の役目だ。

暗くなっていく視界で覚悟を決める。どのような状況であったとしてもやりきらなければいけない。この後走る者達の為に――

「齧らない。でも、物を投げられるのは慣れないや。ごめんね」

いつも彼を見ていると、土郎くんを思い出してしまふ。そのせいか、牛鬼という精霊に身を降ろした私は、彼に齧りついてしまふ。牛鬼の本能による影響だと思ふ。

彼が従える十二勇士の方々は、ある記憶が呼び起こされてしまひ、つい目を背けてしまふ。

あの日のように――

会場に放り投げられた爆弾。その場にあの子もいた。

帯刀していた若葉ちゃんがいくつも起爆しないように斬つたが、それじゃ全然足りなかつた。どうすることも出来なかつた。

また、誰かが死ぬ――

嫌だ、嫌だ。誰も失いたくない、誰も死なせない。そう思つても体は動かなかつた。歳のせいでは絶対違ふ。そんな言い訳赦されぬ、赦さない。

そんな時、あの子だけが動いた。

残り数秒で爆発するという爆弾を集め、自身で覆つて――次の瞬間には会場は真っ赤になつていた。

意味が解らなかつた。理解したくなかつた。その場にいる誰もがそう思つていた。

誰かの泣き声が聞こえる。誰かの絶叫が聞こえる。そんな中、私はただ呆然と爆発の中心部を眺めることしか出来なかつた。

孫が出来たと喜んでいた彼が。

結婚記念35年目だとはしゃいでいた彼が。

ひなちゃんが愛情たつぷりで育てた彼が。

生徒達に愛されていた彼が。

士郎くんそつくりな彼が。

テロリスト共はそんな私たちのことなんて考えない。無慈悲にも一つの爆弾が投げられた。そして、私の近くに落ちる。

避けようなんて思わなかった。ここで死んでいいと思った。きつと、それは士郎くんに怒られるだろう。でも、私は――

後ろで怯えている私と同じ名前をした子が視界に映った。人の死なんて、人生で初めて見るだろう。それも、こんな残酷なものを

あれは意識してした行動だったのだろうか。いつの間にか私はその子を力一杯押し退けた。爆発が当たらないぐらいまで力一杯、と。

「士郎くんなら、みんな、生きて――」  
そんな妄想をいつもしてしまう。

士郎くんなら、誰も死なずにあの場を切り抜けられたのではないかと。

やっぱり、私はバカだ。



## 決断

夢から醒める。

使い魔は夢を見ないと言った手前、こんな高頻度で夢を見るなんてな。正直、予想外だった。一度目のような悪夢は一生見たくない。

ありえん、ありんえん。あれは俺ではないと確信している。精神的苦痛があのような形で出たもの、ただそれだけだ。

「むっ。」

なんか部屋の外が騒がしいな。今日はこの家にいるのは俺とクロだけなんだけどな。

布団を退け、立ち上がる。寝巻きからいつもの外用の服に着替え部屋を出る。出力を最大にすることを忘れずに

「あつ、おはよー」

「シャル先輩、お邪魔してます」

「お邪魔してるわよー」

「煮干し置いとくわね」

このデジャヴ感はいや、関係ないな。それよりもだ。

この四人はふわ〜つとしていますが、残りの三人が凄く険しい顔をしている。特に東郷。なんか悪いことしただろうか？友奈はそんな思い詰めんな。

「シャルル君、そこに正座」

「ふむ。まあ、いいか」

素直にここは東郷の前に正座する。次の瞬間には園子が俺の膝に頭を乗つけて寝始めた。

さつきまで結構離れた位置にいたような気がすんだけどな。これが巷で聞く瞬間移動というものだろうか。

「今から何個か質問するわ。素直に答えて」

「答えられる範囲で。わかった」

怖い。東郷さん、怖いです。

ハムスター顔をして、東郷と相對する。へけっ……あ、コラ写真撮らない。

「シャルル君は一人で天の神を倒すつもりなの？」

「一人ではない。御影 士郎との共闘によって墮とす」

この助っ人心強すぎだろ。今ん所は俺より瞬間火力ありそうだな。

「作戦概要は？」

「俺がジユワユーズを放ち、天の神の視線をこちらに向ける。その後、御影 士郎が仕留める。」

多分、無間の劍製みたいなことをするんだろう。詳しくは聞いていないが、俺がジユワユーズで良い感じにすれば勝ちだ。そして、決まらなければ敗北。ふう、プレッシャーヤバイな。

「その後。っ。」

東郷がその続きを言う前に口を閉じる。なにか、言い難くしている。そんな東郷を見かねてか風先輩が口を開く。

「アಂತ、消えるの？」

・園子か。

膝で寝ている園子を見る。流石、愚者の考えなんてお見通しか。本当に勝てないな。

「ああ、消えるとも。」

俺はジユワユーズを放ったら退去するだろう。天の神の祟りなど関係なしにな。なんせ、全てを賭けるのだ。

魔力、だけではない。全身を動力としてジユワユーズを放つ。それでようやく、天の神の目を釘付けに出来るだろう。御影 士郎から目を離す程に

「私たちが、その囹役をすとしたら？」

「片手間に対処されるだろう。もし、成功したとしても御影の一撃が決まるどうかの瀬戸際だな」

あれには結構時間がある。だいたい一分ぐらいか？つまり、囹役は一分間天の神の視線を向けさせる程の継続火力が必要になる。

「他の策は？」

「ないな。この戦いは一度切りだ。これで成功しなければ、人類に未

来はない。であれば、俺一人の犠牲で——」

頬にじんわりと痛みが走る。

目の前には顔を真っ赤にして、腕を振り切った東郷がいる。誰が平手打ちしたかなんていう疑問はない。

「ちよつ、須——」

「いつもそうやって、一人で、我武者羅に走って、人の心配なんて考えないでっつー！」

「東郷、さん。」

誰かが言ったな。強くて正しくて、世界創造の大偉業を成そうとした男が。

終わりが決定する物語は不要だと。この世界は間違っていると。狂っているとも。

正にその通りだ。このような結末しか迎えられない世界は全くの無意味で無価値だ。頑張った報酬すらない。

それでも俺は守る。大好きな奴らが生きていけるならそれで問題はない。ほんの少し、ほんの少しだけ贅沢を言うなら——

「俺だってお前らと生きていたいさ。馬鹿みたいに大笑いしたいさ。でもな、そんな幻想はないんだ。それに俺はもういっぱい貰った。それで十分——」

全てはこの中に。宝物はこの中に。決して忘れることのない思い出はしっかりと俺を作っている。

「じゃ、アンタは諦めるのね？」

頭から冷水をぶっかけられた感覚がした。

——俺が、諦める。

『強大な力には大きな責任が伴う。そんな俺に無抵抗など赦されていない。なにより、抵抗する俺はカツコイイ！』

シャルルマーニユの言葉が脳裏でフラッシュバックする。

そうだと。いつだってシャルルマーニユは最高にカツコよくて、俺の憧れだとも。

俺もこうあれたら——そんな幻想を夢見る程に好きだったよ。だから、愚直にも俺はアンタに成り切ろうとした。まつ、本人から怒

られたけどな。

「俺には無抵抗なんて赦されない。全力で最後まで抵抗してやる。それが、きつと——『生きる』ってことなんだ。」

終わりがあるとわかっていても馬鹿みたいに足掻くのが人間だ。それでこそ人間だ。！！

——なら、俺も最後まで足掻かせて貰おう。

「シャルル君、それって。」

「俺は絶対に生きる。だから、一緒に模索してくれ」

俺では無理かもしれないが、皆とならきつと思いつく。そう思えるぐらい勇者部の皆はカツコイイからな！

「それじゃっ、作戦会議始めるよっ！」

「園子さん、その服と眼鏡は一体。」

「んん、雰囲気？」

てか、いつの間にか起きてたんだよ。全く気づかなかったんだけど。。。

「やっぱ、最初は情報共有からだよなっ！ってことでシャル！」

「わかった。俺が知り得る限りの情報を話そう」

話していけない内容は崇りのみ。それ以外は全て話そう。本当に全てだ。

大赦から入手した情報。俺という存在について。抑止力について。

御影 士郎との邂逅すらも。あらゆる内容を伝えよう。

俺は生きる。なんとしても生きる。そして、皆といつもの日常に戻る。必ずだ。

あの後、夕方になるまでみんなで頭を悩ました。でも、絶対成功するという作戦は出なかった。

絶対にシャルくんは死なせない。

この気持ち・はみんな同じだ。シャルくんは勇者部の一員で、学校の人気者で、・そんなの関係なしにカッコイイ。

もし、シャルくんが消える理由に私が移してしまった祟りのことが入ってたらと思うと私は・私は・ッ！

一人、ベットに横たわり天井を眺める。

明日は勇者部部屋に集合となり、今日と同じようにみんなで知恵を振り絞る。私は頭良くないけど・頑張る。

そんな時だった。不意にインターホンが鳴る。

両親が帰ってきてないことを思い出して、すぐベットから飛び起き、階段を降っていく。そして、扉を開ける。

「結城 友奈様、ですね。」

白装束を着て、仮面を着けている。大救関係の人だとすぐ思い至った。

「あつ、はい。結城 友奈、です。えつと、今日はどんな用件で来、お越しになったんですか？」

学校で習った丁寧語？だったろうか。それを思い出しながら質問する。

※謙譲語です。

「話しやすい口調で構いません。此度は結城様に御用がありました。伺った次第です。」

「あ、はい。それだったらどうぞ。」

家上げるか一瞬迷うが、声質から女性だとわかるので家上げる。玄関の前で長話はよくないと思っただからでもある。

「すみません、お茶しかなくて。」

「いえ、お構いせず。無理を言っつてしまい申し訳ありません。」

「あつ、頭を上げて下さい。」

人に頭を下げられるなんて人生初めて。しかも、こんな深々とされるのはちよつと・なにか悪いことしてるみたいで落ち着かない。

「えつと、その御用というのは？」

「『神婚』についてで御座います」

「しん、こん」

話された神婚という儀式。それは御姿である私が神樹様と結婚することとで人類を神の位に押し上げるといふものだった。

これをするだけで、天の神を怯えて過ごすこともせず、安心して暮らすことが出来るみたいでも、そこに自由意志はない。ただ生きるという結果のみしか残らないらしい。

私はその内容を聞いて——頷いた。

翌日。勇者部の部室へ向かうため、東郷さんと一緒に通学路を進む。

「あと四日で夏休みね。友奈ちゃんは何処かに行くの？」

東郷さんの声が遠い。全く内容が頭に入らない。

私の頭の中には昨日の出来事が駆け巡っている。自分で頷いた神婚という儀式について

これをすればみんな無事。誰も傷つかない。でも、みんなと会えなくなる。

思わず歩を進めていた足が止まる。

「友奈ちゃん？」

東郷さんが立ち止まって、心配そうに私を見る。

言わなくちや、お別れをせめて、お別れだけでも——

「私、結婚するんだ」

## 真偽

最初？友奈がなにを言ったのか理解出来なかった。

友奈が神樹と結婚することで皆救われる。天の神なんて考えなくていい。

それはお前——

「友奈ちゃんはそのでいいの。」

「うんっ、これは私しか出来ないことだから」

そんな笑みをするな。そんな何もかも諦めたような顔をするな。

人類の総上げ。それは机上の空論に過ぎない。そんなものが実現していれば、俺達はこのままで悩んでいない。文字通り悩んでいない。

「ゆーゆ、まだ時間はあるから皆で模索しよ？」

「っ、こうすれば、もう誰も苦しまなくていいんだ」

「ッ——？」

ノイズまみれの記憶が走る。

目の前にぶら下げられている縄。ちょうど頭を通せるように輪っかが作られている。絞首刑でも実行されるかのように立っている。

「友奈、ちよつと落ち着きなさい。どうせ、また大赦がいい嘘ついでるだけよ」

「そうそう。大赦の提案なんて全て蹴っていいからさ」

「でも、これしかもうっ！」

誰かのすらわからない記憶を振り切り、状況を再度整理する。いや、やっぱ意味わからん。それに中学生で結婚。相手は神様の存在。どういうことだ？

「アンター人が無理しなくてもいいの」

「私、わたしは——っ」

この状況は不味い。多対一は非常に不味い。

友奈の性格から考えるにこの討論はほとんど意味がない。友奈は正しいと思った方向に全力ダッシュを続けるような頑固者だ。どこ

ぞの正義の味方同様そこに自分の意志は介入しない。

人類の総意。生きたいという人間のエゴを掻き集めて作られた人形。実に厄介極まりない。

「勇者は勇んで、進んで、困ってるみんなを助けるんだっ！」

「結城 友奈」

「ッ」

「——っ、シャル先輩」

余程俺の介入が予想外だったのか全員口を閉じる。これまで目を閉じていた樹も思わず目を開く。

流石にそれは聞き捨てならん。これ以上の様子見はない。昨日まで死ぬ気だった俺が説得するってのも不思議な感覚だが、皆赦してくれるだろう。

「神婚というものをすれば、それが最期であろう。本当にそれで良いのか？」

「なるべく諦めないっ！」

「それをしてしまえば、なにも残らない。それでもするということなのか？」

「なせば大抵なんとかなるっ！」

その上辺は棄ててくれないみたいだな。であれば、しょうがない。暴拳に出よう。

風先輩に視線を合わせる。

「今日、この時をもって勇者部を解散する。構わないな、風」

「は、えっ？」

「打ち上げをアンタの奢りで出来るならいいわよ」

「おかわりはなしだぞ」

あつ、目逸しやがったコイツ。俺の財布が悲鳴を上げることが確定した。明日から園子のヒモとして生きていきます。

「さて、これで縛るものはないな。」

目逸した風先輩から友奈へ視線を移す。なんか、キョドキョドしてんな。まるで信じ難い行動を見たかのような。誰がそんな暴拳を取ったんだ。

「結城 友奈。誰でもないお前の本心を聞きたい」



友奈の眉間のシワが吊り上がっていく。相当精神に來ているだろうが、こうでもしなければ本心は聞けないだろう。

「くっ——！」

「友奈ちゃん！」

俺の問いに答えることなく走り去ってしまった。

やべっ、勇者部終わらせたのになんも成果得てないんだけど？

「逃げられちゃったね、シャル」

「これならば、と思ったのだが」

園子とのほほんとしながら、安芸先生の電話番号に電話をかける。

数コール程して反応があった。

「シャルルマーニュだ」

『用件は把握してるわ。神婚についてよね？』

「ああ、話が早くて助かる。貴様が提案したのではないな？」

『それについては私はなんとも言えないわ。大赦という組織に加担しているという点を見れば、私が提案したという見方も出来るのだから』

これ以上はよそう。本題はそこではない。

大赦はあとで潰そうと決め、安芸先生に問いかける。

「神婚は何時、何処で実行する？」

『今日、劍山にある本宮の更に奥に位置する滝。貴方が一度訪れたことがある場所よ。勇者システムのアップデートの時、と言った方がいいかしら』

「わかった。これで電話を——」

『もし、貴方が天の神を討ったなら、その先は安心な日常を送れることを絶対に保証する。だから何としても生——』

電話を切る。それ以上聞いたのなら、俺は確実に迷う。覚悟は既に決まっている。

次に上里 柚葉の電話番号を打っていく。かけた瞬間、反応があった。ずっと待機してた並の速さだな。

「シャルルマーニュだ。」

『神婚の阻止ですか？天の神への暗躍ですか？どちらでも構いません

よ』

「何故、草薙剣の欠片を持っていた?」

「ずっと後回しにしていた謎だが、今答えが必要だ。」

『御影 士郎が遺した最後の遺産です。天の神への絶対的なカウンター。私には全く意味が解りませんが、きっとシャル君なら解ると思えます。』

「ああ、そういうことか」

「絶対的なカウンターなるほど、確かにどちらが来ようが絶対的なカウンターになり得る。」

「最後に一つ、暗躍を頼まれてくれるか?」

『勿論です。どのようなものでも遂行してみせます』

「それは助かる。それでは、剣山の本宮前に立っていてくれ。内容はそこでじっくりと説明する。」

『承知しました。』

「俺もこの後すぐ向かう。」

電話を切る。これで友奈は必ず取り戻せる。

そして、この後だが、皆の目が怖い。これが俗に言う圧迫面接というものだろう。

「俺はこのまま剣山へ向かう。お前達はここで待機。打ち上げに行く準備をしておけ」

「ちよい待ち」

「なんだ?」

早速部室から出ようとした俺に風先輩の声によって待ったがかかる。

「勇者部は続けるわ。さっきのは形だけよ」

「ん?そんなことはわかっているとも打ち上げというのは友奈奪還成功の难道ぞ?」

「あ、そっちコホン。」

勘違いが解けて良かったです。それでは、俺はここで失礼させてもらいます。

「一人で行くと言わないよな?」

「昨日、団体戦を仕掛けるとか言ったご本人が一人で行くわけないわよね？」

ぬるりと現れた銀と夏凜によって両肩を凄まじい力で掴まれる。

怖いよ、この二人。そして、両肩からミシミシという何か軋む音がしてくる。

「団体戦だとも。俺は友奈を奪還する。その間、お前達は打ち上げの準備をする。分担だ」

「片方だけ負担凄いですけど。」

樹からの言葉が一番耳に痛いのが、ここは我慢。

まあ、正直言うところの奪還に多数で行ったとしても、先程同様の状況になるだけだからな。

「シャルル君、私は引かないわよ」

「ヤバイ、東郷を撒く策がない。二人だし、問題ないか？ここは素直に折れとこう。」

「わかった。しかし、俺の作戦に従ってもらおう」

園子が何か言いたそうな顔をしているが、これ以上は時間をかけてられない。園子には悪いが、スルーさせてもらおう。

東郷と共に部屋を出て、屋上へと出る。

「変身した方がいい？」

「そうだな。最速で向かわなわなければいけないからな」

俺は霊基を換装し、東郷は勇者システムを起動する。

神秘の秘匿だとかは気にしない。今、友奈が最優先だ。

「目標地点は剣山。俺が先頭を走る」

「了解」

俺達なら数十分もあれば到着出来る。そこで柚葉と合流し、作戦内容伝える。

勝ったな。

十三分後。無事、俺達は剣山に位置する大赦の本宮についた。本宮前には、綺麗な黒髪を腰まで伸ばした女性が立っている。

「お待ちしていました。シャル君と、東郷様」

「」

「ああ。早速だが、腕を触らせてくれ」

「?はい、構いませんよ」

・ 険悪な雰囲気を漂わせている柚葉と東郷の間に入り、柚葉の腕を触る。

目を閉じ、神経——更にその奥底まで集中する。そして、ちよっぴりとだけ魔力を流す。閉じていたであろう、魔力回路をこじ開けておく。

「んっ」

うえっ。凄いなコレ。

この人、f a t eの世界にいたなら、冠位に行けそうな感じだな。属性まではわからないが、適当にガンド撃つだけでそこらの英霊は倒せるだろう。尚、妨害の有無は考えないものとする。

遠坂の魔術刻印つけてみたい。

「これがお前の魔術回路だ。全て把握しろ。」

また、魔力を流す。

いやあ、結構な運頼みだったけど成功してよかった。あとは聖杯なしで召喚出来るかどうかだが、そこは無理矢理にでも喚んでやる。

「んっ、は、はい」

「起動の仕方は自身で見つけるしかない。どんなイメージの仕方でも構わない」

俺の場合は輝く物を握り潰すイメージで起動している。一応、遠坂とか衛宮の仕方でもやってみたが、起動することはなかった。

「よし、これで問題はないな。」

「問題大あります。シャルル君、帰ったらじっくり話し合ひましょう」

「いや、これは至って真面目な行動で、はい、すみません。」

また吊るされちゃう。友奈から減刑を言ってもらおう。そうすれば、俺の明日が来る筈だ。

「柚葉、この紙を持っておけ」

ノートから破いて持ってきた紙を柚葉に渡す。これに、召喚用の長つたらしい言葉が書かれている。

「シャル君、これは」

「俺が合図したら上から読んでくれ。さすれば、応えてくれる」

どちらが来ようが勝利は絶対だ。どのような敵でも打倒してくれるだろう。そして、そのまま天の神もいや、それは虫が良すぎる話だな。

「さて、行動開始とい——」

突如としてアラームが東郷の又マホから流れる。

この、アラーム。聞き覚えがまさか!?

「樹海化。なんで、今っ!」

「柚葉、樹海に入り込むことは可能か?」

「はい、可能です。その為にも手を」

「了解した」

「むっ」

一般人?である柚葉が樹海に入れるか心配だったが、どうやら可能なようだ。

差し伸ばされた手を握る。そして、俺の空いた手を東郷が握る。

——世界が花弁に満ちる。

## 排斥された者

目を開ける。どうやら、無事柚葉も樹海に入り込めたようだ。いやあく、久しぶりだな。だいたい一ヶ月ぶりぐらいだろうか。まあ、嬉しくないけどな。

「シャルル君、スマホに」

「ふむ、この先にか」

東郷のスマホを柚葉と共に覗く。そこには、友奈のスマホのGPSを拾っている。丁度、このまま直進。即ち、神樹周辺だ。

「時間が迫っているかもしれん。ここは、全速力で向かうぞ」  
「わかったわ」

っと、ここで問題があるな。俺達二人は人間の身体能力を超えているが、柚葉は人間だ。このまま走れば置いてけぼりにしてしまうだろう。

そんなことを考えていると、柚葉が俺のマントを引っ張ってきた。

「シャル君、お姫様抱っこでお願いします」

「シャルル君はもしもの時に手を開けてた方がいいです。ですから、私がお姫様抱っこしてあげますね？」

「はい、お願いします」

「話は済んだな。であれば、征くぞ」

「渋々といった感じだが、これで移動面の心配事はなくなった。後ろは気にせず、全力で走り切ろう。」

「————ッ！」

このスピードで移動すれば、二、三分程で友奈に追いつける。だが、警戒は怠らない。いつでも応戦出来るように右手は構えとく。

ここは樹海。言うなれば、神樹の結界内。つまり、神樹の胃の中という認識で違いない。俺達がすることはお見通し。まっ、邪魔しないっていう選択肢はないな。

「——ッ、甘い！」

東郷と俺の足目掛けて射出された刀をジュワユーズを以て折る。神秘が宿っていない武器ならば、いとも容易くジュワユーズで折れる。

体勢を整える為に、近場の根のような物に降り立つ。東郷も辺りを警戒するために降り立ち、抱えていた柚葉を降ろす。

「——二人だと聞いてたんだがな。通達ミスか？」

一人目のイレギュラー、??。??。

やはり来たか。神樹の一部になった、と言っていたからな。このよ  
うな状況になれば、当然あちらの戦力として俺と相対することなど誰  
でも予測出来る。

「貴方は・御影、士郎。」

「いや、違うぞ。というか、御影について知ってんのか。ああ、なるほどな。お前が上里の子孫か。そりゃあ通達ミスが起きるもんだ」  
柚葉の姿を見て、一人納得したようにうんうんと頷く。

それにしても、何故かコイツからは敵意が微塵も感じられない。そういう戦法なのか、はたまた本当に敵意がないのか。全く読めない。

東郷の手にスナイパーライフルが握られる。スコープを覗き込み、  
確実に命を奪おうとしている。そんな東郷を手で制する。

「貴様は傍観者だと思っていたが違ったようだな。」

「俺も最後まで傍観者だと思ってたんだがなあ。神樹から鬼のように  
招集がかかったからな。嫌でも来ないといけなくなっちゃった」

「ならば通せ。貴様に用などない」

こんな奴に構ってる時間はない。一刻も速く友奈の元へ行かなければいけない。

「お前こそさっさと持ち場に戻れ。結城 友奈を今のまま奪還するこ  
とは諦めろ。」

「なんですってっ！」

引き金に指を置く東郷をまた手で制する。今、気になる単語を吐いたコイツをここで殺すのは駄目だ。

「持ち場に戻れ、と言ったのか？」

「ああ。もうそろそろ来るんじやねえか。おっ、噂をすればってヤツか」

——真つ黒だった空が紅く染まる。

「ほら、お出ませませ。コレが人類史滅亡へと追いやった元地球の防衛システム、天の神だ」

「ぐッ——！」

抑えていた祟りが神性への特防などなかったように俺の体を蝕み始める。それに伴い全身に耐え難い痛みが奔る。

「シャル君、大丈夫ですか？」

「シャルル、君。」

倒れそうな体を意地で立たせる。今は倒れるなど論外だ。絶対に維持してみせるとも。

「最悪の状態に陥っちゃいるが、ジユワユーズぐらいは撃てるだろ。それ撃つて、さっさと御影に託しな。それで人の時代がまた訪れる。」

まあ、それが最善策なことはわかっている。わかっている。が、それが出来ないのが俺クオリティー。

「東郷、は皆の所に、柚葉、は安全だと、思える程に、離れている。っ！」

「くっくっ、わかったわ。シャルル君、これを」

「十二勇士達も、頼んだぞ。っ！」

東郷の手には、東郷の武器である二丁拳銃、その一丁が俺へと差し出されている。迷わずそれを受け取る。きつとなにか意味がある筈だ。

長い思考があつたが、納得してくれたみたいだ。東郷に十二勇士をくっつけ戦闘場所まで運んで貰おう。その間に柚葉はこの場から走り去っていく。

「身一つで俺とやるのか。まあいいか。」

奴は刀を。俺はジユワユーズを構え相対する。どのような戦法をするかはわからない。だが、ここで怖じ気づくつもりはない。攻めきるとも。

自分自身との戦い。



一見とても魅力的な勝負ではあるが、この勝負は前哨戦な要素が強い。

崇りによって本来の力の半分も出せないシャルルマーニュ。それに対するは汚れが落ちた??. どちらが最高のコンディションかと言われれば、??だろう。だが、そんな状況であったとしても実力はシャルルマーニュが上だ。

どのような戦法、策を用いようが実力差は埋まらない。それ程までに圧倒的な差がこの二人にはある。つまり、この勝負は――

「裁断の時であるッ！」

「がふッ――」

シャルルマーニュの勝ちだ。

肩から引き裂かれた胴体から止めどなく血が流れ落ちる。それと同時に??の体が粒子となって消えていく。

「やっば、シャルルマーニュには勝てねえなあ――」

負けたとは思えないような表情で消えていく。彼の心には確かに満足感があつた。

自身が憧れた者、ではなくともその力を宿した者に真つ向勝負仕掛けて負けたのだ。それだけで俺とアイツは満足だ。

「次、だ。」

死に体である筈の体を前へ前へと運ぶ。俺にはまだやることがある。こんな所では倒れていられない。早く、友奈の所に――

あれからどれ程歩いただろうか。意識朦朧としているせいか、どれだけ神樹に近づいたのかわからない。距離感覚が全くとって使えない。だが、確かに俺は近づいている。その証拠にあそこに誰か座つて――

「――第二グラウンドだ、シャルルマーニュ」

何故だ。コイツはさつき俺が殺した筈だ。なのに、何故コイツがこの場で座っている。

先程は感じなかった敵意を感じる。明らかに俺を殺しに来ている。

東郷から受け取った銃に五大元素を圧縮――

「貴様に、最早、興味など――ないッ！」

——放出する。

奴の頭蓋を貫通、破裂させ脳髓を。なんだ、コレは？脳髓では断じて違う。この黒く、ドス黒いドロドロした液体は。まさか、貴様。

「貴様は、誰だ。」

「何を言っている？俺は俺だとも。今から貴様を殺す者だ。無様に地へ這いつくらはせる者——ダッ!!」

「ッ。」

俺の首目掛けて振るわれる刀をジュワユーズで受ける。

奴の頭部を見ると泥によって修復されていつている。まだ修復しきれいていないのか、泥がうねりながら頭部へと収まっていく。

「くっ、——ハッ！」

泥に触れないように足で蹴り飛ばし、距離を取る。

「ハア・ッ、ハア・ッ！」

はつきり言っている状況は不味い。祟りによる痛みもそうだが、あの泥が更に俺の状況を悪くしている。

シャルルマーニユは秩序に寄っているサーヴァントだ。もし、そんな彼があつた泥に触れてしまえば激痛は免れない。つまり、今の俺はあれに触れたらゲームオーバーだ。

一触したら死ぬ。これ、なんつていうクソゲーム？

まあいい。触れさえしなければ無害だ。ならば、俺はとことん遠距離から奴を削る。そうすれば、いつかは殺せる筈だ。

「今度は銃撃戦かあ？いいぞ、とことん殺し合おう。どっちかが絶望に満ちるまでなあ！」

「二人で満ちている」

東郷の銃に様々な五大元素を込めながら、場合によって使い分ける。そして、ヤバイと思つたら五大元素全てを圧縮した弾丸で弾き飛ばす。

何度も、何度も、何度も——

「痛い、痛い、イタイなあ。酷いなあ、悲しいなあ、苦しいなあ。こんな一方的に、蹂躪的に痛めつけられるなんて」

「であれば、潔く、死ぬがいいッ！」

殺すたび泥によって傷を治し、立ち上がってくる。コイツはどうやったら倒せるんだ？泥の制限はないのか？

——突如として突風が吹き荒れる。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。」

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ

閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

なっ、召喚陣もマスター権もないままやるというのか!? やっぱ、アイツ無茶苦茶だな！だが、それでこそだ！

「なんだ、コレは。女の声だ。めめめそと隠れ潜んでいる女の声だあ！」

「行かせると、思っているのか！」

俺から標的を変え、柚葉へと奴が迫る。それを俺が赦すとも思っただのか。全く、ただ再生力だけあるバケモンが。

「——告げる。」

「邪魔だ、邪魔だッ！」

「貴様が、邪魔なのだ——ッ、我が栄光の輝きを!!」

俺の半径8m程が光に満ちる。ただの光ではなく、超圧縮された五大元素だ。これを受けて、その場に立ってられた者は未だいない。それは人外であっても同じだ。

ボロボロになった体で神樹の幹に叩きつけられる。次の瞬間には泥によって体は修復されている。だが、いい時間稼ぎになった。召喚は終了した。

静かにその場に立っている。武人のような形姿。使用された触媒は草薙剣の欠片。つまり、この英霊は——

「貴様、——キサマはアアアアアア!!!」

突如として奴は怒り狂い、立ち上がり、柚葉へ迫ろうとするが十二かに阻まれる。よく見ると、奴の足に鞭のような物が巻き付かれてい

る。

「ツ——、我々の恩情を忘れたか！白鳥 歌野！」

「下卑た声でその名を語るな」

何故か無性に腹が立つ。今すぐ奴の喉を裂きたいと思う程に

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。」

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。」

召喚は未だ終わっていないのか!?ならば、あそこに立っているのは——

「貴様もそうだ！何故、貴様は生きています？何故、現界を赦されている？——そうだ！全て！全て！！我々の恩情あつての——」

「貴様のではない。人々を愛し、可能性を信じた神々の恩情だ。断じて——断じて、貴様のではないツ！」

銀直伝の根性で自身を奮い立たせる。まだ、勝負の行方はわからない。

あそこに立っている正体不明の英霊が何を目的としているのかわからない。どういった召喚なのかわからない。

「汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

その言葉が放たれた瞬間、この空間全てが圧倒的な重圧によって支配される。シャルルマーニュの霊基である俺でさえも身動き一つも満足に出来ない。

「——セイバー、ヤマトタケル日本武尊。嘗て、打ち損ねた悪神の首を頂戴しに参った。」

## 役を羽織る者

セイバー、ヤマトタケル。これは凄いな。雰囲気、そしてこの重圧。たったこれだけでも英雄として最高位にすることがわかる。

もしかしたら、知名度補正によってここまで本領発揮しているだけかもしれないが、この状況においてはとても有り難い。

発言からすると、俺の味方で違いない。奴を倒した後はわからないが、ここは一先ず共闘を――

「シャルルマーニュ、汝は先に進むがいい。」

「!?!」

「真名看破か!? ってかなんで俺の目的を知ってんだよ。柚葉の情報が共有でもされてんのか?」

「ここは任せよう。俺もあまり時間がない。」

「抜かるなよ」

「警戒しながらも背を向け、この場を後に――」

「躊躇するな。汝は汝が信じることを成すがいい」

「了解した」

「意味がさっぱりわからないが、重要なことの筈だ。しっかりと心に秘めておく。」

未だ満足に動かせない体で飛翔する。

友奈が何処にいるのかは不明だが、この先へ進めばきっとわかるはずだ。痛みなど無視して突き進め。

草薙剣を握り、嘗て葬り去った記憶がある悪神と対峙する。まあ、本当に記憶があるだけなのだが。

「ふうー、やっと肩の荷が降りたぜ」

先程まで発せられていた重圧が息を潜める。まるで最初からそんなものはなかったかのように時が正常に動き出す。

「貴様 いや、そのような偽造 偽造とすら言えない なんだ、ソレは？」

「おいおい。てめえに見せるのは二度目だろうが これだから魚の脳味噌は高が知れてんだよ」

「あ」

偽造というよりは、それそのものだ。もちろん、性格、技量、精神性 いくつかが相違点があるにしても、それ以外のものは全て真のもの。ただの上辺のものでは断じて違う。

クラス【ブリテンダー役を羽織る者】

人類史から詐称した者としての烙印を押され、全ての生きとし生けるものを敵に回す英雄。それこそが?? ??という男の正体だ。

「さあ、第二グラウンドを始めよう」

「いいだろう！ 貴様を落とし、墮とし、貶し、嚇し——一塵の芥に変えてみせよう！ アハハハ——ッ!!」

両者ともに嗤う。

自身の力ですらないモノを我が物で扱う悪神を。憎き武人を羽織ったそこに転がる石を。

見下すように。嘲笑うように。死した瞬間の顔を想像するように。

「さて、いい加減この拘束も飽きたな 清純たる身を凌辱されながら魂ごと尽きるが——」

自身の足を切断し、そこから溢れる泥を用い汚染しようとするが時既に遅し。手を少し挙げた次の瞬間には全身を細切れにされ、上空へと散っている。

「白鳥 歌野。さつきと引つ込んでろ 助力感謝する」

最早、自身の事など誰も覚えていない。共に諏訪を守った戦友だとしてもそれは同じだ。そういう契約をしたのだから当然の結果 それはあまりにも——

「——温い、なア!!」

「黙って死んどけ」

泥によつて修復された体を再度断ち切る。だが、いくら再生し難い程に斬り刻もうと次の瞬間には原型の姿へと戻る。

絶対に有り得ない光景だ。

「ん〜。」

攻撃を中止し、距離を取る。未だ繰り返される修復機能について思考する。

悪神【悪樓】

日本武尊の自慢の刀で退治された穴海に潜む魚のような形容をした神。上里 ひなたの泥を引き受けた際に俺の体内へ入った臆病者。

「ああ、なるほど。お前、本当に臆病だな。」

「貴様は臆病者以下ということだあ！」

「認めてんじやねえか」

誰かですらない顔で迫りくる臆病者を四分割に斬る。

??の体ではなく上里 ひなたの体に巢食っていれば、このような蹂躪にはならなかったであろうに。もう少し先を見通す力があれば、誰も敵わない怪物が誕生していただろう。

「あく、ダル・飽きたな」

攻撃の手を止め腕をダラリと脱力する。そのようなチャンスを敵が見逃してくれるわけがなく

「抜かったな。貴様が最底辺の蛮人だあ——ッ！」

??の胸を悪樓の右腕が貫く。誰がどう見ても勝敗は決した。だが、

??は一切表情を変えず口から血を流している。

悪樓の体を草薙剣が貫く。

「これが最底辺の叫びかあ。いい加減学習したらどうだ？」

「は——？」

その言葉が言い放れた瞬間、世界が轟音と共に光に包まれる。1km程離れていた柚葉さえも衝撃で飛ばされ、壁へ衝突する。

「壊れた幻想」

## 勇者の剣

——あつた！

あれから数分程走っていると神樹の根本にひとり一人入れそうな穴を発見した。鎧を解き、体を穴へと滑らせる。

穴はとても狭く息苦しさを感じる。通行するには更に時間を要する。そうなってしまうたら本当に手遅れになってしまう。ならば――

「息苦しい——なッ！」

圧縮した五大元素を体全体から解き放つ。いくら神樹の一部といえ破壊の塊を受け、原型を留めることは不可能だ。

体の周辺にあつた神樹の一部は消し飛び、大きな空洞と化す。当然そうなつてしまえば、今まで体を支えていた物も共になくなる。落ちる、それが摂理だろう。

「ぐっ。」

凹凸を感じない地面へと落ちる。筋肉に力を上手く込めれないためか受け身も出来ず、衝撃を全身で受ける。目を開くのに幾分か掛かってしまった。

体勢を立て直し、ようやく瞳を開く。辺りは一面真っ暗だが自身の立つ下から光が差している。無意識的にそちらへと目を向ける。

「——友、奈。」

目線の先には何十もの白蛇に体を拘束された友奈の姿があつた。

白蛇・神の化身、神の使い——！

「友——ッ、この程度の障害など。」

友奈へ手を伸ばそうとするが目視出来ない壁によって阻まれる。阻むなら壊すまで・鎧へ換装する。

左腕に五大元素を収束、圧縮していく。

「碎け散れ——ッ!!」

音速すらも超える速度で壁に衝突する。轟音を鳴らすすが、傷一つと



してつくことはなかった。

五大元素を収束、圧縮し放つ。ジュワユーズの真名解放には劣るがそれでも現時点での最高打点。それが通用しないとなると当然他の攻撃では突破出来ないだろう。だが、その程度で諦める者は此処にいない

「ハア——ッ！」

斬り、突き、燃やし、凍らせ、吹き飛ばし、砕き、輝き——どれも決定打に届き得なかった。

「あぐっ」

未だ侵食が止まらない天の祟りを受けながらもこの男は止まらない、止まらない。

先に天の神を打つ。

救出された時点でそれは結城 友奈ではなくなっている。概念と化した置物に成り下がっている。よって、今やらなければ全てが駄目になる。

詰んでいる。この局面でシャルルマーニュはどこん詰んでいる。友を見捨てれば天の神打倒は成し得ない。ここで友を救えば、天の神へとジュワユーズは放てない。どちらにせよ結末は視えている。

戦犯を探すならば、すぐに見つかるだろう。

敗北を認め、自身達だけでもと思つた愚者。命懸けで戦う者達の意見など見ないただのバカ共。

ここに馬鹿がもう一人。

「輝かしい未来を我が手に」

ジュワユーズが光り輝く。誰もが欲する程の色彩を真つ暗闇の空間を照らし出す。

ここまで来たならば意地だ。誰にも譲らない。例え神様が欲していようが、俺の友達だ。それを、こんな、生贄のような結末を認めない。お別れはもう少し後にとっておくもんだ。

「無限の色彩よ。我が王剣よ。」

三対、計六個の翼を羽ばたかせる。

「全て——」

十二勇士は此処へ集わない。誰もが勇往邁進し、おのが信念、誓いを果たすため剣を振るう。であれば、俺は一人で果たさなければいけない。

「全てこの輝きに屈せよ——ッ！」

アンタらに感謝はしている。だが、友奈は返して貰うぞ。誰が来ようとも絶対——

「——王勇ジュウを示せ、遍く世ユを巡る十二の輝劍ド！」

——ナニか割れた音がした。

「——あれ？」

結城 友奈は目を開く。

先程まで一寸の光もない真つ暗だったのが、明るいばかりの世界に移り変わった。神婚が終わったのかと周りを見渡す。

「樹海 なんて、だって私——」

信じ難い光景に頭を抱え、途方もない絶望感を味わう。

「おっ、友奈、やっと起きたか」

「！シャルくん、体が——」

助け舟と思つた友奈は既に死に体。体を粒子にしながら根に背を預けている。そこに王たる威厳など存在せず、ただのシャルルマーニユだけが静かに存在している。

「どこも、痛く、ないか——」

「なん、で、っ、私なんかのために——」

訂正しよう。馬鹿野郎と言つた方が正しいな。

友奈の言葉に少しむっとした後、ゆつくりと重い口を開く。

「お前、だからだよ。ほら、そんな顔しないでさ。笑顔、笑顔」

「っつ——！」

私よりキツくて苦しいのに無理矢理指で頬を上げて笑顔を作る。

今にも弱音を吐きたいのに、必死に抑え込んで私を気づかっている。それだけで、もう――

「起きて、早々悪いん、だけどき・みんなの、援護に行つて、くれねえか？俺も、すぐ追いかける、からさ」

「――う、うんっ！」

シャルくんが私を頼ってくれた。いつも追いかけてた人が私を頼ってくれている。それだけでダメだった。こんな状況なのに、涙が溢れ出す。堪えていたのが一気に溢れ出す。

「頼ん、だ――」

勇者システムを起動し、後ろを振り向かず走り出す。頬を伝い、雫が口に入る。水にしてはちよつと、しよっぱかった。

心臓が鼓動する。血液が体中を巡る。まだ、俺は生きている。なら、諦める訳にいかねえな。

残っている力を振り絞る。輝かしい未来の為に俺は立つ。皆の為に俺は立たなければいけない。

「ぐっ、オオオオ――!!!」

喉から音が聞こえる。諦めが悪い患者の声。何者にもなれなかつた患者の妄執が。

「――シャルルマーニュ」

掠れた声が聞こえた。俺ではない。

水溜まりを歩いているような音と共にこちらへ近づいてくる。そちらへと視線を向ける。

「あ――」

思わず変な声が出た。それ程までに目を伏せなくなるような風貌

両腕は肩まで破裂したかのようになくなっている。足は原型を留

めているものの骨が露出している部分がいくつもある。

胴体に関しては本当に惨たらしい。肉が千切れかけており、臓器が全て空気に接している。顔は火傷のような損傷の仕方です。左目が潰れている。誰かもわからない。

全身から血を流し、血溜まりを作りながら歩いてきている。足音はそれらを踏みながら歩いてきた音だろう。

「戦いは終わらない。まだ、お前の冒険は続く。立ちやがれ、勇者」  
「そんなぐらいい、わかってんだよっ！」

それが出来れば俺は困ってない。いくら力を込めようが立てないから雄叫び挙げて奮い立とうとしてんだよ。

「もうお前しかいない。過去の影法師は最早いない。今を生きるお前が最後の砦だ」

「俺だって、影法師、だろっ、とつくの昔に、俺は死んでんだよっ！」

俺だってわかってんだよ。あの最期が俺のだって。誰でもない俺の最期が首吊りだってことぐらい夢を見た日からわかってんだよ！俺がどうしようもない愚者だってことも——

「じゃあ確かめてやんよ」

大気の流れが奴へと集中する。

「うおっ」

「この感じ…宝具か——!？」

「御影 士郎の生きた証を此処に——さあ、集えよ勇者。誰よりも気高き者達よ、我等が希望の灯火に篝火を」

祝詞と共に溢れんばかりの輝きが満ちる。

御影 士郎を英雄たらしめる宝具。人類史を存続させた救世主への鎮魂歌。誰もが夢見た空虚な物語。

この宝具を一言で表すならば、勇者への大号令。

人類史を支え続けた者達を一時的にであるが、精霊として現世へ引っ張る。ただそれだけだ。だが、この宝具の真骨頂はそこにある。

【継受】と【誓い】

勇者達総意で認められた者へ志と巨大な魔力リソースを継受する。

そして、その者は勇者達へ揺るぎない誓いを立てなければいけない。もし、虚偽の誓いを立てれば、文字通り破裂することになるだろう。「もう一度言うぜ。——立て、シャルルマーニュ。お前の王勇はそんなものだったのか？」

「そんな、もの——」

俺の王勇とはこの程度のものだったのか、だって、舐めやがってカツコイイ友への侮辱と受け取ってやんよ——っ！  
ジュワユーズを地面に刺し、握り潰さんどばかりに柄を握り締める。

「俺は、世界だとか、っ、神々だとかはどうでもいいんだ、だがな。これだけは譲れない、バカにされたくない——」

そうだと、俺は——

「友達が悩んでいるなら一緒に悩む。苦しんでいるなら一緒に苦しむ。どんな時だって支えになってやりたい。アイツらの助けになつてやりたい。」

世界を守っていた勇者達には酷く滑稽に見えるだろう。だが、それで結構。どんなに強大な力を有していたとしても俺はバカな奴だ。どうしようもないバカ野郎だ。

「それが俺だ。シャルルマーニュなんかじゃない俺だ。見届けてくれよ？ 誰にも覚えてられないのは悲しいからなっ！」

体中は完全に崇りに侵されている。にも関わらず、ソイツは立っている。へっちやらかのように笑っている。

目を瞑る程の輝かしい色彩を放っている。その姿は正に——

「お前は、立派な勇者だよ。誰がどう見ても——」

そう言い切るや否やその場に崩れ落ちる。それを皮切りに光輝く精霊達がシャルルマーニュが手に持つジュワユーズへと吸い込まれていく。

「——」

それと同時にいくつもの感情が流れってくる。

彼女等は戦った。

今を守るために。友を守るために。この日常を守るために。色彩

を与えてくれた人を愛すために。妹姉のような存在を守るために。

誰も彼もが自身の譲れないものを振るい、自己を鼓舞し、仲間と共にいくつもの戦場を超えてきた。

「これ、は——」

自分のこの思いは持つてもいいものだ。間違えてなどいなかつた。静かに彼女達はそう教えてくれる。それと同時に体の奥底から感じたこともない程の勇気が湧いてくる。

「友を守る——この一瞬だけでも構わない。この一瞬だけは気持ちを重ねてくれ。この一撃に全て載せる。」

ありとあらゆる気持ち。そして——自身の命すらも炉に焚べる。

「一夜一時の幻と言えど此処に我は楔を穿つ！」

チャンスはこの一度きり。これで果たさなければ、全てが水の泡に消えるだろう。だが、不思議と失敗は思い浮かばない。

「伝説よ甦れッ！」

十二勇士を含め、何百ものジュウユーズが加算される。これは勇者達の気持ち。何ものにも変えられない掛け替えのない思い。だからこそ俺は天を仰ぎ見る。

「我が剣に彼らの力を——！」

天へと飛び立つ。全ては友を守るため。いつもの日常を過ごすために俺は全てをかける。

「——王勇ジュウを示せ、遍ユウく世スを巡ルる十二ドの輝ル剣！」

誰も彼もがその輝きを見ていた。目に焼き付けるように。最期を見届けようと。泣き顔を晒しながらいつまでも眺めていた。

何者にも負けない色彩は天を穿たんとあらゆる障害を突破していく。

天の神は見惚れていた。どんな宝石よりも価値がある。どんな輝きよりも眩しい男の最期を。勇者たる者の剣を。

「——」

笑っていた。

体はどうに果てようとしている男は笑っていた。これから自分が死ぬことがわかつているというのに笑っていた。

徐々に天の神を守る障壁に罅が入っていく。だが、そこまでだ。あれ程輝いていた色彩はもう風前の灯火だ。後数秒で重力に従い落ちていくだろう。

「——ッ、ああ」

全てを出し切り、彼は落ちる。体が粒子となり、空へ散っていくの眺めながら地面へと近づいていく。

未だ天の神は健在。だが——

「都牟刈、村正だあ——!!」

——空が割れた。

天の神がバラバラに崩れていき、地へと墮ちる。それは、神代が終わったことを示していた。

「やっぱ、すげえや」

最早、此処にはいない男へ賞賛の声を——いや、そうじゃないな。

未だ機能する口を開く。

「最後の勇者から最初の勇者へ、心よりの敬服を。アンタは誰よりもカッコ良か——」

——もう、その場には誰もいない。

彼は地に落ちることなく世界から消えた。誰にも弱い所を見せず、誰よりも気高いままその生に幕を降ろす。

願わくば、彼女たちの未来に幸福を——

## 夢の続き

今、この時を以って天の神は打倒された。天の神の天蓋——星屑  
や頂パレットクス点が消滅していく。それに伴い燃え盛る大地が元の光景へと  
戻っていく。

世界が修復されていく様を揺れ動く地面に立ち、眺める男が一人  
いや、二人。 . . .

「どうだっ！」

「いい刃紋だ。まあ、及第点つー所だな。」

300年間築き上げた刀を束ねた一刀を見定めるように様々な角  
度で査定していく。どうやら、お目に召さなかったようだ。だが、見  
つめるその顔はそうとは思っていないような気がする。

「ぐう。これでも駄目かあ！」

「ふっ。コレは御駄賃として貰っていくぜ。次はもうちつとマシなも  
ん作れるようにしときやがれ」

もう時期、千子 村正は座に還る。長かった . . . 本当に長かった一仕  
事を終える。

「村正、本当に助かった。ありがとな」

「いい、いい。さっさと仲間さんの所に行きな。待たせてんだろ？」

手でしっしっ、としているが実際は泣きそうで仕方ない。300年  
間見守った弟子のような者の門出なのだ。素人以下な弟子がこんな  
立派な一刀作り出した時点で涙線に大分来ている。

「ンじゃ、またなっ！」

「——ああ、風邪引くなよ」

「誰に言っただよ！」

ドンドンと背中が遠くなっていく。

村正の脳裏にこれまでの記憶が駆ける。自分に負けず劣らずの頑  
固者が七難八苦しながら刀を打つ姿はとても見応えがあった。少し  
ずつだが、着実に上達していく様が特に。



「これで、見納めか。」

手に握られている刀を見る。

この一刀にアイツの全てが詰まっている。鍛錬の結果がコレだ。本物の草薙剣に見劣りしない美しき。そして鋭き。

「どうだい、神さん。人間の力も捨てたもんじゃねえだろ——？」

千子 村正であったであろう粒子が空へ昇っていく。彼にとって輝かしい日々は終わりを迎えた。

「——ン、ああ。」

心地良い日の光を浴び、目を開く。その先には満点な青空が広がっている。

左手で体を支え、上体を起こす。

「ん〜。」

体を思いつきし伸ばす。ふわふわな草むらの上と言っても地面の上に変わりない。寝る場所としては適していないだろう。

「起きましたか、士郎さん？」

「ん〜つ、ああ。」

未だ眠っている脳味噌を起こしながら返事をする。眠気など感じない筈なのだが、久方振りの睡眠でつい熟睡してしまっ  
久方、振り  
?。

「さあ、士郎。勝負の続きといこう」

「おっ、いいぜ。今度こそ勝ってやんよ」

隣の木に立てかけられている木刀を手にし、若葉と相対する。側に座っていたひなたは微笑ましそうに俺達を見守っている。

「たくま、じゃなくて。また、若葉と士郎は勝負すんのか。タマも〜

！」

「マタつち先輩が木の盾を手に装着し、駆け出そうとするが肩を掴まれる。その場から動けなくなる程の力で

「ダメでしょ、タマつち先輩。あれは真剣勝負なんだから」

「うええ〜 あ、はい、スミマセン」

反抗気味だったタマつち先輩も杏さんの圧力には敵わない。尻尾を丸め、その場に体操座りで座る。

「二人共ガンバレ〜！」

赤髪が特徴的な活発そうな子が二人へ声援を送る。その声援を受け、士郎は口角を上げ、若葉はやや照れるように目を逸らす。

「あ、あ、あ。」

なにか言おうとするも自身を制するかのように口を閉じる。顔を顰め、視線を下に降ろす。

「俺が勝つからなく〜！」

何を思ったのか、千景へ体を向け全力で腕をブンブンする士郎。相対していた若葉ですら少しの間、目を見開き士郎を見て納得する。

「〜〜〜」

「良かったね、ぐんちゃん♪」

反応があったのを確認すると体勢を戻し、再び若葉へと視線を戻す。

木刀を両手で持ち、下段の構えをとる。

「それでは、私が始めの合図をしますね」

「いつでも構わない」

若葉は木刀を腰に添え、居合の構えをとる。両者ともに準備は既に終わっている。

「——始めっ！」

「——」

先に仕掛けたのは若葉。音速すら超えた居合が士郎の胴体へと吸い込まれていく。周りから見れいや、見えただけ良いだろう。これはそれ程の技なのだ。

「——ッ、ハッ！」

横に払われる一閃を空へと弾き、そのままの勢いで若葉へと木刀を振り下ろす。

「甘いっ！」

「はあ!？」

木刀から手を離れたと思えば、人とは思えない程のスピードで攻撃を避け、未だ落下していない木刀を再度手中に収める。そんなことをされれば、素っ頓狂な声の一つや二つ出るだろう。

「そこだ——ッ！」

木刀を振り下ろし、無防備になっている腕へと木刀を振るう。まず、常人では対処すら出来ないだろうが、彼は——

「まだまだあー！」

「なっ——!？」

人を超えた英雄だ。不可能なことは限りなく少ない。

迫る木刀を逆手持ちに切り替えた木刀で一撃目と同じように空へと逸らす。予想外のことだったからか、数秒程の空白が生まれる。当然、そこを見逃す訳がない。

「終いだ！」

「ぐう。」

——木刀が宙を舞い地面へと落ちる。

「俺の、勝ちだなっ！」

そう子供のような笑顔で言い放つ。とても明るくて誰よりも眩しい笑顔で。

「獲ったと思ったのだがな。やはり、士郎は強いな」

「若葉もだろ。最初のとか反応出来なかったぞ」

お互いにお互いを称賛しながら、握手を交わす。互いに全力を出し合った結果だからこそ、そこに後腐れなど入る余地はない。

「タマもびつくりだぞ。若葉があんな速い居合をするなんてなく」

「士郎さん。反応出来ない、って。それなら、何で弾けたんですか？」

「んく。なんか、こう。今っ！って感覚でわかったと言うか。まあ、ほとんど勘みたいなものだ」

勘、ではなく彼が積み上げだ研鑽による賜物だろう。そこだけは彼

にどれだけ誇って貰って構わないが、気づかないのならそれでいいか。

「勘、ってあやふやね」

「そういう所が士郎くんらしいね」

「勘、俺なのか!?!」

凄く不服そうにしながらも優しく木刀を木へと立てかける。

勘、士郎、確かに、と全員がそう思った。

「はい、若葉ちゃん、士郎さん。水分補給は大事ですよ」

「おお、助かるよ、ひなた。」

「おっ、ありがとな。」

ひなたが差し出した紙コップを受け取り、一気に飲み干す。それ程までに今の少しの勝負で両者ともに消耗している。

「さてと。」

空の紙コップをひなたへ渡し、皆に背を向ける。

「ちよつと忘れもんしちゃった。てことでちよつくら行ってくる」

「私も、ああ、気をつけてな」

伸ばしかけた手を引つ込め、笑顔で士郎を見送る。

左腕は消え、若葉と士郎以外の者達は風に乗って消えていく。

「次も俺が勝つからな」

「っ、いいや私だ。今度は私が勝つとも」

もし、若葉の企てでなければ彼は誇りの侮辱と受け取り暴れていただろう。

風に靡かれる草むらを歩く。

この先に士郎が望む光景はない。だが、忘れ物をしてしまった。それだけで進む価値はある。だってそれは――

## 輝かしい空

天へと無限の色彩が昇っていく。ただその光景を死に体同然の体で眺める。

「ああ、綺麗だな。」

潰れていない右目で辛うじて視界に収める。最後の瞬間まで、と思ったがそこまで自身に時間は残されていない。もう時期、彼は消える。どんなに偽装したとしてもとうに体は限界だ。

そんな彼に二つの輝く精霊が近づく。先程、御影の宝具で招集した勇者——

「はあ、諏訪の勇者と巫女。それ以上近づくなよ。てめえらにこの泥は劇毒だ」

これ程までの泥を浴びれば、清純たる勇者は即刻全身へと回るだろう。だからこそ、彼女たちには近づいてきて欲しくない。

わかっているのか定かではないが、??の忠告を無視し一つの精霊が駆け寄る。

—— 劍群が降り注ぐ

「駄目だ。お前らにこれ以上の苦痛を味わせることは出来ねえ」

この泥は俺一人で地獄まで持っていく。草薙剣を炸裂させた時にそう決めた。誰にんと言われようと変えることは出来ない。

「それじゃあな歌野、水都。お前らとの生活は案外、悪くなかったよ——」

誰に看取られることなく彼がいた痕跡は世界から消えた。こうして世界救済の影の立役者は第二の人生に幕を降ろす。

彼には譲れない覚悟や思い出はなかったが、一時の感情に任せ全力を尽くした。ただ、好きな子の為に。だが、報われることはなく。その気持ちを返さられることはなかった。

それが何もかもを詐称した者の末路なのだ。

——真つ暗闇の道をただ一人歩く。

怖い。先すら見えない道を歩くということがこれ程怖かったものだっただろうか。以前までは然程恐怖は感じなかった。なんなら、楽しいとまで思っていた。なのに何故？そんなの決まってる。

「一人は、怖いなあ。」

シャルルマーニュとして皆と過ごした日々はとても楽しかった。大変だった記憶もあつたが、それ以上に幸福感に満ちていた。誰よりも幸せだと思っていた。

それが今はどうだ？

一人身を縮めながら恐怖に怯えている。どうやら、俺は一人じゃなにも出来なかつたようだ。

友を守ると言いながら結局助けられていたのは俺。いつも迷惑をかけていたのは俺。本当に迷惑極まりない。

ならいつそのまま——

「——えっ？」

左手を掴まれる。俺と同じぐらいの大きさだろうか。感触としては女性の手のようだ。

誰が、と思ひ繋がられている手から視線を這い上げ、顔を——

「——大きくなったわね。ちよつと前まで私の半分ぐらいだったのに。」

「えっ、あ。」

ありえない。だって、この人はこんな場所にいるわけがないんだ。これは俺が都合のいい夢を見てるだけ——

「どうしたの、??？」

「かあ、さん。」

心配そうに俺の顔を覗くのは誰でもない母さんだった。その表情。声の抑揚。どれもが俺に記憶の中にあるものと合致する。つまり、この人は。

「それ以外の誰に見えるのよ？」

「あ、いや、そうじゃなくて、どうしてここに？」  
変な質問をしてしまった。

自分ですらここが何処かわからない。もしかしたら、ここがよく議題に上がる死者の国なのかもしれない。なら、母さんがここにいるのも頷ける。

「私の自慢の子が泣いているもの。母として駆けつけるのは当然よっ」

「泣いてなんかない」

ああ、母さんだ。元気だった頃の母さんだ。

少しおちやらけているけどやるときは凄くカッコイイ。でも、一人で抱え込み過ぎなんだ。この人は。

「ああ、私に嘘なんて通じないわよ。十五年貴方のお母さんしてたんだから、なんでもお見通しよ」

「だ・か・ら、俺は泣いて、なんか、っ！」

頬から水滴が流れ落ちる。もう何年も流していないモノが止めどなく流れてくる。どうしようが止めることは出来ない。

何度も何度も裾で拭いながら、母さんの顔を見る。頬を上げ、見守るように微笑んでいる母さんの顔を。

「泣き虫さんね、でも、それ以上に優しい子で、本当にお母さん誇らしいわ。」

「ごめんっ、ごめんっ、おれはっ！」

自分でもなんに對してかの謝罪かわからなかった。でも、母さんの笑顔を見ていると勝手に出てくる。

「ありがとね、??。ずっと私のこと想ってくれて、本当にありがと。でもね、辛いなら私のことなんて忘れていい。貴方が幸せならそれでいい。だからね、泣かないで」

頭を包まれ、とても穏やかに優しく頭を撫でられる。何故かはわか??

らないがぐちやぐちやになっていた頭の中がすつと楽になった。

泣き腫らした顔で母さんの顔を見上げる。

「笑顔よ、笑顔。どんな時でも笑顔でいれば、誰かが貴方を見つけてくれる。手を引つ張つてくれる。」

「——うんっ！」

「それよそれっ！さっすが私の子ね！」

「ちよっ、母さん苦しっ」

首が・首締められてるから！結構苦しめにかかっているから！

「あら、ごめんなさい。」

「勘弁してくれ。」

もう一回死ぬなんて嫌だからな。

首締めから開放され一息つく。その際久し振りに泣いたせいも猛烈な睡魔に襲われ、少しふらつとしてしまう。

「私の膝貸してあげる。しっかり眠って休みなさい」

「ああ、助かるよ——」

恥ずかしさが少しあるが、眠気には勝てなかった。素直に横となり頭を母さんの膝に乗せる。ものの数秒で夢の世界へ——

「立派に育つてくれてありがとね。これからも見守ってるわ。私の大切な子。」

眠っている我が子を起こさないようにゆっくりと頭を撫でる。小さい時もこうしてたって、と昔を思い出し笑う。

・コツコツと暗闇の中誰かがこちらへと歩く音がする。

「——すまねえな。親子水入らずを邪魔する感じになっちゃまって」

・本来、左腕が通るであろう袴の袖を靡かせながら??に瓜二つな少年が申し訳なさそうに頭を下げる。

「貴方も寝ていくか。」

「いや、いいさ。結構複雑だな」

御影には珍しく視線を右往左往させ、頭を悩ます。流石にいくつもの修羅場を超えた御影であっても初めて自身の産みの親と会うというのは複雑を通り越して意味不明だろう。



「俺の用件はシャルルマーニュだが、連れて行くぞ」

「起こさないようにね？」

「いいのか？」

親から子への愛を知らない、受け取ったことのない御影にはわからないだろう。これ程までに愛している子を連れて行かれそうになっているというのに彼女は抵抗もせず、差し伸べている。

「この子が幸せなら、そこに私がいなくとも、貴方もいつかわかるわ」「こりや、勝てそうにないな」

肩を竦め、やれやれといった感じに首を振る。

シャルルマーニュを右肩に担ぎ、もと来た道へと戻る。

「母さんも幸せにな——」

その言葉と同時に彼の背中は見えなくなる。ここは死者の間ではあるが、彼が来るには早すぎる。まだ、彼の冒険は続く。

「あらあら、子が増えちゃった」

一人、子達の背中を見送る。そこに未練などはない。ただ、子達の笑顔しか想像出来ない親馬鹿の姿がそこにあった。

「ほら、送っていくぞ」

今度はこれから進むであろう道からまたまた??と酷似している少年が優しい口調で話しかける。

「ふふっ。それじゃあ、甘えちやおうかな」

??と彼女は隣り合って暗闇へと進んでいく。これが、最後の親孝行であるのを悟りながらも涙はない。ただ平然としながら手を引いていく。

「友達出来た？」

「二人だけな」

「奥さんは？」

「いねえよ」

「じゃあじゃあ、彼女は？」

「できねえよ」

顔を真っ赤にしながらも返答する??の反応が面白いのかついつい沢山の質問をしていく。他愛もない会話だけでも、二人は笑顔で歩い

ていく。

「帰り道は一人だけど大丈夫？ 行って行こうか？」

「いらねえ。送った意味がなくなんだろうが」

「ここはさつきも言ったが死者の場だ。座に登録されているであろう彼が本来来ることはない場所。当然、帰らなくてはけない。」

「首吊りなんて駄目よ？ キツかったら好きな子に甘えに行きなさい」

「好き、って・いや、そうだな。」

一瞬、顔を真つ赤にするがすぐにいつもの顔へと戻る。どこか安心したように空を見上げる。

「安心してくれ。もう首を吊ることはないからな」

「ふふっ、そう。それじゃ、私は安心して逝けるわね」

これは彼・彼達にとつての最後の夢。自身の罪へと向き合う時間だ。お別れはあるけれど、そこに悲しみはない。誰も彼もが幸福感を胸にして進んでいく。

## 目一杯の花束を貴方に

壁が消失して五ヶ月が経過した。最初は未来への恐怖であたふたしていた人々も大赦の援助や地域間の助け合いで収まった。だけど、問題は次に移った。

神樹様が消失したのだ。

壁がなくなつて三週間程だつたらうか。突如として神樹様が姿を消し、四国への恩恵がなくなった。今まで育っていた農作物の不作が続いた。

大赦はもう大パニック。安芸先生から聞いた内容としては内部分裂が起こりそうだったとか。そして、その一週間後大赦が世界の真実を語った。勇者を除く事柄全てを

そりやもう四国中大混乱。

作り話だ、与太話だと騒いでいた人々も証拠動画や写真を提示することで少数派になつていった。これにて一件落着とはいかなかつた。

夏休みを越え、二学期すら終わった今でもシャルルマーニュの席に座る者はいない。

朝早く目が覚める。今日は学校はないけれど、いつもの癖というものだろうか。ただ、布団が離してくれない。お外、寒い。

「やんこっ」

体を震わせながら布団から出て、洗面所へと歩く。その際、園子の部屋を通るがまだ寝ているようだ。

シャルがいなくなつてから園子は寝る時間が倍になつた。不思議に思つて園子に一度聞いたことがある。

『園子、最近寝てる時間多くないか？』

『ん〜つとね、それは〜夢ならシャルに会えるんだ〜』

そこにいつものほほんとしている園子はいなかつた。現実には打ちのめされ、幻想へ。いや、アタシだって。多分みんなも隠しているだけで相当辛い筈だ。それ程までにシャルルマーニユという存在をアタシ達は必要としている。

シャルがどんな思いでアレを放つたのかはわからない。でも、こんな結果は望んでない。いつも見てきた彼の在り方はそうだった。

誰にも屈せず、自分を貫き通した。きつとその道はアタシの想像出来ないぐらいキツかつたと思う。そんな中、シャルはアタシ達を思いやつてくれて。本当にカツコイイなあ。

「はっ。いけない、いけない。」

思考の海から意識を引っ張り出し、顔を冷たい水で洗う。冷たすぎて眠気は彼方へとぶつ飛んでいった。さあ、次は朝ご飯を――

／ピンポーン／

「あつ、はーいー！」

調理しようしていた食材を置き、玄関へと急ぐ。きつと今回も安芸先生が美味しい食材を持ってきたのだと思う。毎度毎度断るけど、強引に渡されてしまうからつい甘えてしまう。今日こそ断らないと

玄関を開くとそこには――

「あれっ？」

誰もいない。ピンポンドアッシュユかな、と思い扉を閉めようとするがクロから待ったがかかる。正確にはアタシの足にクロが手を置いただけだ。

「――ドゴオオオンッ!!」

空からマントを靡かせながら誰かが落ちてきた。丁寧に擬音を自分で言いながら。両足片手で着地する。いわゆるスパーヒーロー着地とういものだろう。

いや、そんな事より。もしかして――

「〜っ！いつてえ!!」

シャルだ。アタシ達がよく知るシャルだっ！

言葉が出ない。いろんな感情がぐちゃぐちゃに駆け巡っていく。そんなアタシのことなんて知らずに当の本人は着地した際に地面につけた手を痛がっている。そんな彼の頭の上にクロが登る。

「うおっ、と。久し振りだな、クロ」

クロを落とさないように体勢を正し、頭を撫でる。嬉しそうにしながら体を丸め、数秒後には夢の世界へ。まさか、猫に嫉妬する日が来るなんて。

「銀も久し振りだな。」

「!？」

アタシの頭にぽんつとシャルの手が置かれる。ゴツゴツしてて、とても暖かくて――!

「あ、――あゝ。」

ナニかが弾けた。誰にも言えず抱え込んでいたものが溢れていく。どんどんとそれはシャルの服を汚していく。

「ごめんな、辛い思いさせちゃまって。」

あやすようにしてそつとアタシを抱きしめてくれる。頭を撫でてくれる。それだけでこれまでの苦しいことを忘れられる。出来れば、この時間が永遠に続いてほしい。

「さつ、家に入ろうぜ。ご飯、まだなんだろう？」

「あ・うん」

しがみついていた顔を剥がされ、顔を上げられる。そのお陰でシャルの顔を正面から見れた。

瞳は赤から青へ戻っており、伸びていた一部の髪の毛もいつも通りになっていた。前のも好きだったが、アタシとしては見慣れたこっちの方が好きだ。

玄関を閉め、中に入る。その際靴をと思ったのだが、シャルは鎧を着ていたため免除となった。というかなんで鎧？

「じゃっ、俺は一旦部屋に行くから」

「それじゃあ、アタシがご飯作つとくぞ」

「おう、頼んだ」

床が傷つかないようにすごくゆっくりと歩いていく。ちよつと見  
ていて面白い。そして不思議に思う。なんで鎧？

順調に進んでいったシャルだが、丁度園子の部屋を通りかかった所  
だった。

「どしたの、ミ——」

「あつ、やべつ」

突如として開かれた扉がシャルに当たりバランスを崩す。なんと  
か壁に手をつけて倒れるのは免れるが、靴が水平ではなく斜めになっ  
てしまった。クロも落ちそうになり、必死にシャルの頭にしがみつい  
ている。

「大丈夫か、床、あく、これはやったな」

「——」

体勢を戻し、歩進んでから先程までいた床の状態をしゃがんで確  
認する。どうやら、アウトの部類に入ったようだ。額に手を当て深刻  
そうにしている。

園子は扉を開けた状態で固まり、動かない。なんか、色々とてんや  
わんやしてる。

「夢？」

長い思考の果てに夢という結論が出たようだ。それを確かめるた  
めに頬を引っ張ったり、腕をつねったりしている。

「いたい、えっ？」

痛かったが、あまりにも現実離れしている光景に脳が否定している  
ようだ。だって、これはアタシ達に都合が良すぎるんだから。

さてと、アタシはご飯作るー。

シャルside

ちよつと溝が出来た床を見る。事故だったとは言え、傷が出来たの  
は事実。さて、どうしようか。尖った所をヤスリがけすれば大丈夫か

？最悪業者に頼むしかないな。

体勢を起こし、思考が停止している園子を見る。

今の時間は七時半。いつもの園子なら休日は八時を超えた後起きてくる。

「早寝早起き頑張ってるな、園子」

俺がいない間に園子も成長したみたいだな。流石、園子だ。

銀の時みたく手を頭に乗せ撫でる。何故かクロも真似しようと猫球を伸ばしているが、ギリギリ届いてない。今日もうちの猫はカワイイ。

「――」

ポロポロと静かに涙だけが落ちる。どうやら、銀同様相当な心労を与えてしまったようだ。皆なら、と思っていたがそれは大間違いだったようだな。

「――うん。私、いっぱいかんばったんだく。大赦まとめたり引き継ぎしたり。かんばったんだよ。」

「園子は頑張り屋さんだな。半端なくカツコイイよ」

五ヶ月もちんたらしてる場合じゃなかったな。いや、ある程度予想してたんだが、これは完全に俺の落ち度だ。後で安芸先生に状況を聞きにいかないと。

園子の手を取り、蹲っている顔を見えるぐらいまで姿勢を低くする。

「これからは俺が園子の分まで頑張るよ。だから、園子はいつもみたいに――」

「それは嫌だよ、シャル。もう嫌なんよ、シャルと会えないのは。だから、みんなでがんばろ？」

「――ああ、そうだな。皆で力を合わせるか」

何度俺は同じこと過ちを繰り返そうとしてんだ。いつも皆に教えて貰ってばっかじゃねえか。

御影からのアドバイス思い出しながら頑張るしかないな。

「園子ー、シャルー。ご飯出――シャルは早く服を着替えてきなさいっ」

「おっと、忘れてた。」

やべっ、完全に忘れてた。早く部屋に入らないと

「どうして鎧なの〜?」

「あ、確かに。帰ってきた時もそうだったよな。なんか事情があるのか?」

「え、え〜つと、これはその〜」

確かに不自然だよな。だが、これを言ってもいいものなのか。最悪セクハラで訴えられる。

「じ〜つ」

あ、これ言わないと逃げれないタイプのじ〜つですね。ここは観念して吐くしかないな。訴えるのはやめてくれ?

「いやあ〜。実はこの下になにも着てないから、この鎧を解くと素っ裸になるというかなんというか。てことで俺は自分の部屋に——」

自分の部屋へ方向転換した瞬間、左腕を園子によって掴まれる。俺がどんなに振り解こうとするが、ビクツともしない。

「シャル、私の部屋の方が近いよ? 着替えもあるし、ここで着替えていい?」

「つ——、ぎーんっ! 園子が怖い! なんか目が怖い! なんとかして助けてくださいっ!」

俺はローランみたくに露出狂じゃないからな! そして、なんで園子の部屋に俺の着替えがあんだよ!?

「はいはい。園子は一緒に待ってこうねー」

「あ、ミノさん! あと少しでシャルのはだ——」

最強助っ人の銀によつて園子はリビングへと押し出されていった。流石銀だ。びくともしなかった園子をスイーっとなんか押し出すなんてな。これからも銀に助けて貰おう。

「よしっ、今のうちに」

床に傷がつかないようにそ〜つと足を上げて、降ろす。その繰り返しで久し振りのマイルームへと向かう。その間にクロは満喫したのか俺の頭から降り、リビングへと向かっていった。



勇者部部室の扉に手をかける。先に入った銀と園子によって告知はしているが、ちよつと不安だ。これで皆が望んでなかったら俺は扉を開け、一步を踏み――

「シャル（ル）君!!」

「ぐおっ!」

前方からの強烈な衝撃により、体勢を維持出来ず尻餅をつく。なんとか倒れることはなく、突っ込んできた二人は無事だ。

「よかたあゝ!」

「良かった。本当に、良かったっ!」

どうやら、俺の考えは杞憂だうたみたいだな。人の為に涙を流せるコイツらを疑うなんてバカみたいだったよ。

「ごめん、ごめんね、シャルくん。っ、私が、私のせいで――」

「ありがとな、友奈。やっぱ、友奈はカツコイイな」

「――うんっ!」

やっぱり、友奈の笑顔が眩しい。誰よりも輝かしい色彩だよ。でも、何故か目は瞑れない。

「シャルル君、もう、何処にも行かないでね」

「おう、こっから俺も頑張っていくぜ。しっかりと見といてくれ」

俺の仕事は終わった。

もう戦いのことなんて考えなくていい、って御影が言っていた。なら、俺はただ青春を謳歌するだけだ。誰でもないコイツらと。

「さっ、立とうぜ」

「あ、うん。ごめんね、急にぶつかっちゃって」

「ごめんなさい」

「いいって。良いタツクルだったぜ!」

「」

あれ?ちよつと空気が重くなったな。

友奈、東郷、俺の順に立ち上がり、部室へと入る。あ、風先輩が眼鏡かけてる。

背中に強烈な一撃が入る。

「いっ!?!」

結構な痛み! くそう、いい音出しやがって。誰だ、誰だ!?

「アンタはいつつも遅いのよ。早く帰ってきなさいよ、バカ。」

「夏凜」

顔真っ赤にしながらい口を尖らせながらそう弱々しい声で呟く。

痛みが一瞬で引いた。夏凜のそんな顔なんて初めて見たよ。

「ほらっ、部長に挨拶してきなさいよ」

「あ、ああ」

ちよつと調子狂うな。全くの予想外だよ、夏凜。予想だったら、にぼっしーっついてもみたいに呼ぼうと思っただけどな。

皆に見守られながら、座っている風先輩の前まで行く。

「え、えと。帰還しました、シャルルマーニュですっ!」

そう宣言すると風先輩は眼鏡を外し、席を立ち俺の隣まで歩いてきた。そして、俺の両肩に手が置かれる。顔を伏せながら言葉が紡ぐ。

「——アンタは無茶し過ぎなのよ。いつも、いつも」

「す、すんません」

徐々に風先輩の手に力が入っていく。だが、これは俺の咎だ。きつちり払うとも。

だが、以外にも肩から手が外された。思考が停止した次の瞬間には風先輩にそつと優しく包まれていた。

「えっ——?」

「無茶禁止よ、もう」

ヤバイ、風先輩から母性を感じる。っ! このままじゃ、なんかヤバイっ!

その後、なんとか解放され一息つけた。

「シャル先輩」

「おっ、樹。久し振りだな」

やっぱり、樹が最初の頃からの成長が一番デカイな。正直、最後まで

で風先輩と並んでくるか思ってたよ。そんな樹がここまで　さいつ  
こうにカツコイイな。

「おかえりなさい」

「——ああ、ただいま」

俺、帰ってこれたんだな。皆とまだ一緒に生きていけるんだ。

ああ、ほんとに——

「頑張つて、良かったっ！」

顔を伏せながら涙を流す。

そこに誰よりも気高く、勇敢に戦った勇者はいない。ただの少年が  
いるだけだ。

「シャル先輩」

「わわっ、シャルくん!？」

「よしよし」

「シャルは頑張ったもんな」

「部長として誇らしいわよっ！」

「抱え込み過ぎなのよ、アンタは」

「シャル君はカツコイイわよ」

皆に励まされながら涙を流す。何故か説明出来ない安堵感を覚え  
るが、然程気に留めずシャルルマーニユを慰めていく。

これで最初で最後だろう。シャルルマーニユが誰かに弱いところ  
を見せるのは。そういう奴なんだよ、コイツという存在は。

とある海辺のカフェで男女が話している。どちらも金色の瞳を  
持っており、見るもの全員が目を惹かれる。男性はある意味目を惹

く。だって左腕が肘先からないもん。

「お疲れ様です、士郎さん」

「称赞はシャルルマーニュにでも送つといてくれ。俺はただぶつた斬っただけだからよ」

300年振りのアイスを堪能しながら話しているのは、後数分で退去するという所まで来ている御影 士郎。そして、それに対面するのは――

「それで、ひなた。大赦の方はどうだ？」

上里 ひなた。西暦の時代、勇者達を最も身近でサポートした巫女。ただそれしかわからない人物。そのせいでシャルルマーニュが頭を悩ましていたのを思い出す。

「今の所は安定してます。ただ、未だ染まりきってないご老人が多数いるので何時崩壊するかはわかりません。」

「えくつと、なんだっけ。上里周辺の奴らか？」

「八割型そうですね。」

上里周辺、と言ってもその中心である上里はまだマシの方だろう。だが、上里はツートップの片割れだ。そのせいか群がる虫が多い。

「なんとかかなりそうか？」

「任せてください。次期当主は私で決定してますので」

「そりゃ心強い。だが、あんま敵を増やすなよ？」

「心がけます」

こりや増やすな、と密かに思いつつアイスを完食する。そして、会話はここまでと言わんばかりに席を立つ。

「本当に、行ってしまふんですね」

「ああ、もう俺はとっくに寿命迎えてんだよ。やることは全文終わつたし、寝かせて貰うぞ」

いくら英霊の体をしていると言えど、300年間生きるといのは魂が腐る。ないとは思うが、最悪下衆へと墜ちる。

「夫婦生活を、と思ったんですけどね。」

「ははっ。シャルルマーニュを利用するなら、しっかり寄り添ってやれよ。アイツは一人ですーぐ抱え込むからな」

冗談と思いつつひなたの目を見るが、どうやらガチのようだ。気不味くなつたために話を逸し、難を逃れる。

「あの人なら大赦の根幹を支えられると思います。だからこそ私は乃木家の引つ張りが失敗した時のバックアップを用意してるだけです」

「はあく、お前なあ、ひなた、最後のお願いだ」

「嫌です。聞きたくありません」

こうなつた時のひなたは強情だが、しっかりと話を聞いてくれる。どんな時でも面倒見がいいんだよ、うちの巫女は。

「いい死に方をしてくれ」

ここで死ぬなどは言えない。それはひなたの覚悟を否定することになる。だから、せめて笑顔で最期を向かえて欲しい。そんな、わがまま。

「じゃあな、ひなた。もし次会うことがあつてもそれは俺じゃないからな。でも、いつもみたく接してくれ。それだけで嬉しいよ」

「はい。いつでも待ってます」

その言葉を聞き、少し頬を緩める。その時、彼が何を思ったのかは誰もわからない。だけど、きつと満たさっていると願いたい。

崩れかけな体でその場から飛翔する。行き先は聞いていない。聞いてしまえば、追いかけてやうとするから必死に抑えた。

未だ残っている自身のアイスを口に運ぶ。砂糖と塩を間違えのかちよつとしようばかった。

瀬戸内海。今日は珍しく波が激しく、雲雷が漂っている。そんな中、一匹の巨大な魚が泳いでいた。

「——我は、生きる、のだ。っ！なんと、してでも。っ！」

樹海で草薙剣の壊れた幻想を受けても尚、生存しているのは一重にコイツが臆病だからだ。生に執着しているからだ。

悪棲は草薙剣で退治すれば、死ぬ。だが、あのと時死ななかつた。それはコイツが??の奥へ侵食し、??として戦っていたからだ。それ故、壊れた幻想も耐えれた。

「——おい、お前」

一つの小舟が悪神の近くに辿り着く。船主だろうか。その者が悪神へと声をかける。それと同時に日本武尊に引けを取らない程の重圧が場を支配する。

「——」

魚が餌を求めるように口をパクパクすることしか出来ない。まっ、魚だから当然だけど

「お前だな。ひなたに粉ふっかけた奴は？」

「——ッ！」

すぐさま海中へと潜り、距離を取ろうとするが——

「逃げんな」

海が割れた。まるでモーセがしたように海が真つ二つとなり、擬似的に陸へと打ち上げられたようになる。

「く、——来るなアアア!!」

突如として周囲の波が怒り狂い、雷がいくつも落ちる。その何個かは御影へ——

「雲雷鼓撃電」

観音経の一節。雷を防ぐとされる言葉。

ただの人間が言えば祈りに過ぎないが、神性に満ちている御影が唱えれば、それだけで効力がある。

雷は御影を避け、海へと落ちていく。

「此処で——」

あまりの光景に呆然としてしていると次の瞬間には御影が目の前に立っている。そして草薙剣を——

「——死んでいきな」

視界が反転する。悪棲にはなにが理解出来なかつた。なににも理解

したくなかった。このような悪夢――

## 設定資料集

### ◆オリキャラの追加補足

御影 士郎 クラス【救世主】セイヴァー

・四国の大英雄として祀られた後世において様々な絵本、小説、漫画で書かれたことよって座へと昇華された。全人類の想像の塊。よって、御影が死んでいない104話の時点でも座に??が接続することが出来た。

・御影ではあるが、御影ではない。正に誰もが夢見た空虚な物語。(115話から抜粋)西暦組は違和感を感じるが、それ以外は御影だと思っている。

・あつ、ちなみにシャルルマーニュが五ヶ月の間行方知らずだったのは御影と共に迷子になってたから。その間、カツコよさとか村正の刀とかの会話が あったが全部カット。

・御影 士郎という存在は世界から一ミリ残らず消滅した。この後、召喚によって喚び出されてもそれは本来の御影ではなく、空想によって練り上げられた御影 士郎という存在だ。だからこそその118話のセリフです。

?? ?? クラス【プリテンダー役を羽織る者】

・名前が伏せ字になっているのはそもそもその存在が世界から漂白されたため。

・他のどのプリテンダーよりもプリテンダー。称号剥奪というスキルと相まって偽装関連なら彼に勝てる者は今の所いない。戦闘力だけ見れば誰よりも弱い。

・117話では歌野と水都に抱き着きたい欲を抑えて、泥全てを抱えて死ぬことを決意し決行した。どんな損傷でも顔一つ変えない。作中一精神が強い。

・神樹内部の少世界において死後の勇者を導く存在。もし、勇者が穢れを持っているのなら自身が受け持つ。穢れがなくなった勇者は



神樹内部に待機しといてください。その際にひなたの体内に巢食っていた悪棲が??の体内へと移った。そしてそれを必死に抑え込む。

シャルルマーニュ クラス【騎士<sup>セイバー</sup>】

・御影によって手を引かれ、なんとか現世に戻ってこれた。魔力のパスは御影に繋がっていた抑止力からのパスを繋げている。元々は神樹から。(神樹と抑止力は同一の存在だが、それぞれで成立している存在)

・現時点では118話で放ったジュウユーズが最高火力。にも関わらず天の神の障壁には罅のみだったのは、それ程までに硬かったということです。友奈と比較しては駄目です。あの子は天への逆手持ちなんでね。えっ、それじゃあなんで神樹の障壁突き破けたんですか?そりゃあ、死にかけの神樹が張った障壁だからな。

・多分、御影と??と比べると精神力が一番弱い。勇者達は除きます。最終話時点のシャルルが北野の墓行くと人目も気にせず蹲って泣くと思います。

上里 柚葉 (上里 ひなた)

・悪棲との契約によって第二の人生歩んでる人です。その際に神々から見えなくなるというデメリットを喰らいますが、メリットだと思ってるのでなにも痛手はないです。

・あつ、ちなみに上里の勇者適正持ちの子は御影との子供です。8話で若葉から鳥語で責められてますが、当の本人は全く自覚ないみたいですね。薬を盛ったな?そしてエツツツツなことをしたんだなほな、刑務所行こか。

・悪棲を使い勝手のいい傀儡だと思ってます。まあ、そのせいでどっかの馬鹿が迷惑被ってますがね。あれさえなければ歌野と水都に抱き着けてたのになー。

・シャルルマーニュも手駒にしようとしてますが、御影の言葉でどうしようか迷ってます。乃木家に発破をかけるぐらいにしようか

結構悩んでいます。

・シャルルマーニユは完全に苦手なタイプと感じ取ってるので柚葉√は政略結婚以外にないです。やったね！

・本来死後の勇者しか行けない神樹内部の少世界に行けたのは神々から見えない&悪棲の手招きですね。そして、穢れが多すぎて??が勇者か巫女か判断出来なかった点が最高に打点高いポイントです。そして、魂の浄化作業が早く終わったので結構早めに第二の人生を始められました。(約300百年後)

### 悪棲

・一番不憫な奴。ひなたには最後まで利用される。??からは一瞬で真名バレし、煽り倒され最終的には大爆発を受ける。ガチギレした御影に理解出来ないまま瞬殺される。本当に同情するよ。

・息子の無惨過ぎる死に様に絶望していたひなたを見かねて心の隙に入ろうとするが、逆に利用される。だが、利用されているのは最後まで気づけなかった。

・目的は神樹の破壊。内部から入ってぶっ壊そうとするが??の体内で抑え込められる。どう足掻いても体の主導権が取れず寝ていたが、中身がなくなった所をこれ幸いとして奪い取った。まあ、最弱の依代だから問題は然程なかった。歌野と水都に抱き着けるか否かってだけですね。

・ほんと、ドンマイ。

※このキャラ補足しで欲しいー、つてのがあつたら感想で教えてください。すぐ、ここに追加します。

### 疑問点(完全に自己の見解)

#### 世界の繋がり

・このゆゆゆ世界は??が元いた世界では断じてありません。96話でシャルルが二年後か、とか紛らわしい言葉を呟いているのでこの場

を使って否定しときます。

・世界を超えた英霊召喚は不可能だと思ってます。なら、なんでゆゆ世界に??が召喚されたのか・そこに一番の謎があります。その後のシャルルマーニユは??が矛盾点を失くすために建速須佐之男命と契約したことにより呼び出された男です。(シャルルマーニユの霊基を与えたのは完全に建速須佐之男命の気まぐれ)

・??を喚んだ者、それはガイアです。地球を防衛するガイアならば、他世界の地球をゼルレツチみたいに見れると勝手に思ってます。ちなみにガイアもガイアで天の神にあらがってます。御影を丸呑みにしたのもそれのおかげ。

天の神の正体(完全に妄想)

・ガイアを利用し、顕現した神が石柱。日本神話において破壊の神としての一面を持つ建速須佐之男命です。アルターエゴとしての顕現ですが、それでも充分な程に強いですよ、コイツ。まあ英雄としての建速須佐之男命には劣ります。だからこそその34話での要求です。

・ちなみに星屑共は八岐の大蛇の死体が腐敗したものから産まれ出たものです。だからこそその天蓋。一番建速須佐之男命を代表する威信の知らしめです。

いつまでも続く喜び

## 灯火√【2】

——人の身で聖騎士帝を打倒した。

本来ならば常人では現実不可な結果だ。当然、それ相応の代償を払った。

誰でもない俺の記憶を切り売りした。

偉大な大帝は視界に映す価値がないと。四国の大英雄は託す価値がないと。最早そこに誰よりも気高い男はいない。ただ、自分ではない誰かが立っていた。

空は紅く、太陽を象った模様のようなものが佇んでいる。そこからこれまで戦ってきたバーテックスを模した一部が生えてきている。

蟹座ならば鋏。射手座ならば射出口。天秤座ならば分銅が——  
正に天の長と言うに相応しい。

戦闘経験のない人間であれば、生命の危機を感じ取り一目散に逃げるだろう。だが、これに相對するのは勇者。何事も勇んでやる者達だ。

「——行くよっ、ミノさん！」

「アタシがカチこむ！」

降り注ぐ矢の雨を園子が盾で弾き、開かれた道を銀がマントを靡かせ進む。その際、迫りくる鋏は樹のワイヤーと夏凜の投擲により防がられる。

「銀さんっ！」

「ブチかましなさいッ！銀！」

天の神への障害は退けた。後はぶっ叩くだけ。それは銀が一番得意なことだ。

「満開——ッ！」

その言葉を皮切りに銀が纏っていた鎧が換装していく。金と銀を基調とした鎧。そして、赤と黒のマントを羽織る。

園子や須美のような巨大な兵装はないにしても、それを優に超える身体強化。これなら、と思い最後の勝負に出る。

「ッ——！」

足に力を込め、飛翔する。たった少しの動作だというのにロケット噴射のように目にも止まらないスピードで天へと昇っていく。当然、天の神も無抵抗ではない。

銀へと体がひしやげる程の重圧がかかる。

「ぐっ、があ——ッ!!」

体が軋む。意識が毎秒ごとに飛かける。このままでは到底天の神へとは届かない。

『相手が一人なら、こっちはチームワークで行くぞっ！』

——誰かの声が脳裏を駆ける。

「伸ばして、伸ばして〜！」

「これが、限界、ですっ！」

樹のワイヤーをネット状に広げ、中心地点に園子の槍を置く。そして、その中心地点へ——

「これで——どうだああ!!」

夏凜が落下の力と共に力一杯ネットへと落ちる。当然そんなことをすれば、ネットは下へと引っ張られ、強力な弾性力で元に戻ろうとする。

槍が何もかも裂きながら突き進んでいく。

「——ッ、う、りやああ!!」

勇者は根性。どんな苦境でも進む。

体を襲う激痛などなんのその。光り輝く剣が天の神へと迫る。

「あつ——」

体から力が抜けていく。鎧もそれと同様に元のものへと換装していく。

無力感に打ちのめされながらただ落ちることしか出来ない。皆がこんなに頑張ったのに無駄にしてしまった。もう次はない。本当にこれで最後だったのにアタシは

視界が真っ白になる。

「うわっ!?!」

目の前を全てを呑み込む極光が過ぎ去っていき、天の神を砕かんと衝突するが数秒程経過すると消えていった。だが、未だ天の神は傷一つ負っていない。

「都牟刈、村正だあ——!!」

——世界が割れた。

そう思える程の斬撃によって天の神が真っ二つとなりボロボロと崩れていく。目の前で起こった出来事だというのにアタシは何一つ理解出来ず、啞然とするしかなかった。

手からジュワユーズがずり落ちる。最早この男には剣を握る余力すらない。立つてることすら奇跡に等しいだろう。

「がふっ」

口から溢れ出るように血が出る。口だけではない、体中から血が出ている。それもその筈。この男には十一もの刃が刺さっているのだから。

「——」

彼の視線の先には何処かで見たとような少女達。なんとも言えない既視感があるが、そのような記憶は何処にもない。

体が粒子へと変わっていく。

理解出来ない幸福感に満たされながら、空を眺める。

自分のような男が幸福感を感じれるならば、まだ世界に希望はある。だが、そんな世界に自分は不要だ。だから、なにも思い残すことはない。彼女等に任せて死のう。

「ははっ——」

あの日のような乾いた笑みが聞こえた。

## 花結いのきらめき【1】

先代勇者でカチコミした翌日。俺達勇者部はいつものように部室に集合していた。

風先輩と樹がいそいそと写真を黒板へと貼っていく中、手が空いている俺達は談笑していた。

「またオセロしたいね〜」

「ふむ、中々いい息抜きだったな」

「次はみんなでやってみたいねっ」

「園子とシヤル無双になりそうだな」

とりあえず角を取ればいけるってことがわかったからな。次は全ての角を取りに行くとも。

※後日、しつかり園子にボコボコにされた。

「思ったりより奥が深そうね」

「なにアンタは調べてんのよ」

興味深そうに液晶を眺める東郷を不思議に思い、夏凜が煮干しを啜えたまま覗き込む。そこには、オセロの全てというwebサイトが開かれている。

「盤上遊戯を調べているの。昨日のように友奈ちゃんが負けるようなことは阻止しなきゃっ!」

「な、並々ならぬ執念ね」

有利状況へと進むテクニク。相手が置きにくくなる置き方。思考の読み方などを猛スピードでメモ用紙へ羅列していく。ついでにテクニクを技術とする誤字報告をする。

「アンタらく、今日の活動内容発表するわよ〜」

「プリントです」

「ありがと〜、樹ちゃん♪」

樹からプリントを受け取り、黒板前に椅子などを移動する。一通り目を通すと、どうやら海岸掃除についてのようだ。



「そんじゃ、始——っ!?!」

「わっ!?!」?

ほんの一瞬目を無意識に瞑る程の光が部室を満たす。

「なんだ、今の。」

「シャル、なんかやった?」

「いや、なにもしていないが」

視線が一斉に俺へと向けられるが、俺は無実だ。魔力放出でさっきのようなことは出来る。だが、ほんの数秒となると話は別だ。

——樹海化アラムが鳴り響く

「二——!?!」

「全員構えろ」

霊基を換装し、ジュウユーズを握る。

頭はパンク寸前だが、なんとか冷静に判断する。ここで一番していけないのはパニックの伝播だ。一人でも保てればなんとか立て直せる。

「構えろ、って言われてもアタシ達にはスマホないわよ?」

思わず額を結構な勢いで叩く。

それは盲点だった。だが、スマホがないということは樹海化に巻き込まれるのは俺のみ。流星に神樹もそこまでバカじゃない。

——花卉が舞う。

■ 世界が一変し、神樹の結界内へと

「あれあれ、みんなはく?」

「消えちゃったな」

「どうなっている」

■ 変わらず俺、銀、園子は教室にいる。

■ 確かに樹海へと移る合図である花卉は舞った。にも関わらず俺達は教室にいる。はつきり言って意味がわからない。なら、行動するしかないな。

「——え、あつ、シャルルマーニュさん?」

いつの間にか立っていた巫女のような女性を無視し、扉へと歩く。そして、扉を開けようとするが——

「硬いな。ならば——」

ジユワユーズに五大元素を収束していく。

絶対破壊の一撃を扉に放つのはやり過ぎとは思うが、今回ばかりはしようがない。ぶっ壊してでも出るぞ。

「ハ——ッ！」

轟音と共に扉へ衝撃が走る。だが、傷一つもついておらず、開く気配は全くない。

「かつつっ、たっ！部室の扉ってこんな硬かったっけ？」

「うくん、扉も日々生き残るために成長してるのかな〜？」

「コレはその範疇を超えているぞ」

全員巫女のような女性をスルーして扉の様態を確認する。

絶対破壊って信じてた一撃を防がられるのはちよつと悲しいな。

「あのー、皆さん？出来れば私の話を聞いて欲しいのですが」

「あつ、ハイ。すみません」

「すまない、一度試さないと気が収まらなかったのだな」

正直、無視したのは本当にすまないと思つてます。でも、それより優先することがあったからしようがないよね！

「貴方はだあれ？大赦の巫女かな？」

「正解です。やっぱり若葉ちゃんの子孫ですね」

乃木 若葉に親しい関係の巫女、まあ、該当する人物は一人だな。

「上里 ひなたか」

「ご存知でしたか？」

「ちよつ、アタシご存知ないけど!？」

ご存知ない銀には園子が説明してくれると信じてるので、俺は目前の過去の人物に質問しよう。

「この空間は神樹の結界内か？」

「はい。もつと広く言うならば、この世界全体が神樹様の結界内です」

「世界全体、俺達を呼んだ、ということか？」

「そこからは皆さんが戻ってきた時に話しましょう」

「むっ。ここにいない他の者もいるのか？」

呼んだのは俺と銀と園子だけだと思つたが、どうやら他の皆もいる

のか。俺達とは違う場所に出されたんかな？

「結城 友奈さん達は交戦中です」

「俺が出る」

その言葉を聞いた瞬間席を立ち、先程解いた鎧を纏う。銀と園子も俺が立ったのを見て、続けて立つ。

アイツらはスマホを持っていなかった。死んでしまう可能性が多いにある。

「落ち着いてください。彼女達にはスマホを返していますし、いくら戦おうとも影響はありません。」

「それって満開しても問題なしってこと〜？」

「そうです」

それなら死ぬ可能性は限りなく零に近いだろうが――

「それでもだ。俺は出るぞ」

ここでじつとは出来ない。友達が命賭けて戦うのならば、俺も命を賭けなければ。

「駄目です。シャルルマーニュさん、貴方は絶対に駄目です」

「何故だ？」

俺を名指しで言うのならば、それ程の理由がある筈だ。

「神樹様からの神託です。」

「神託、って神樹様のお告げみたいなやつ？」

神樹からか。いや、それでもだな。

足を止めず、扉へと進む。そして扉に手を――

「死にますよ」

届かなかった。俺の手は空を切り、地面に着いている。一瞬理解出来なかったが、両腕にある重みで理解することが出来た。

「先ず落ち着こう、シャル。ここはみんなを待つしかない」

「動かないでね〜」

「」

完全にキメられてる。腕力がどうこうの話ではない。どう足掻いたとしても二人が怪我するだろう。その時点で俺の負けが確定している。

「あ、おとなしくなった」

「意気消沈してるように見えるんですが？」

ジユワユーズを離し、床の温度を感じる。毎日綺麗に掃除してるからばつちいいとは思わない。流石、東郷さん！

床の偉大さを感じながら十分。黒板前が輝き出し、徐々に人の形を成していく。光が収まるとそこには樹海へと飛ばされた勇者部の面々が立っていた。

「あつ、戻ってきた。祠もない教室に戻ってくるなんて、つてシャルくん!」

「皆、無事そうだなによりだ」

「アンタは無事じゃなそうね」

ようやく銀と園子から解放され立つことが出来た。鎧を解き、いつもの制服姿に戻る。

「シャルル君には後で話があるとして、そちらの方は？」

なんで俺なんも悪いことしてないのに。

東郷の言葉によって気付いたのか、俺から視線を外し上里 ひなたに注目する。

「皆さん、お役目ご苦労さまです。私は上里 ひなたと言います」

「上里!?!大赦の中でも最高の発言力を持つっつていうあの、上里家?」

「ああ〜!言われてみればそうだった!」

「あ!本当だ、上里つてそういう苗字だ。基本的な所を見落としてたよ」

「乃木と上里が大赦のツートップでしょうに」

気付いてなかったのか、いや、まあこの年代だし、自分の家のことぐらいしか知らないのはしょうがないか。

「樹海で私たちに声を飛ばしてくださいましたのはひなたさんですよ。助かりました、ありがとうございます」

「言われた通り力を使ってもリスクはなかったわよ。色々説明してほしいんだけど？」

「はい、そのつもりなんですけど。今、少し驚いてて。声も性格も一緒なので」

風先輩に詰められてたじろいでいるのはではなく、友奈を見てたじろいでいる。声も性格も一緒。それは

「高嶋 友奈にか？」

「友奈さんもご存知でしたか。もしかして、現代では有名人なんですか？」

「御影 士郎の勇者御記を読んだだけだ」

「士郎さんの。そういうこと、ですか。」

なにかを察したのか顔を暗くし、床を見る。

やべっ、ちよつとこれは無神経だったかな。

「落ち込んでるとこ悪いけどちよつといい？」

「あ、はい。すみません、ちよつとシヨックなもので」

「いや、構わないけど。アンタらの話聞いとるとアンタが御影 士郎と面識あるみたいな物言いだから。」

おつと、盲点だったな。俺が知っているだけで、皆にとっては謎だらけだ。しっかり説明しないと、特に友奈。

「言い忘れてましたね。私は約300年昔から来たんです」

## 花結いのきらめき【2】

いやあー、びつくりだろうな。過去の人物に会うという事は。現に友奈は口開けたまま止まってるもん。

「神世紀ではなく西暦から来ました。」

「こりやまた凄いことになったわ。」

「嘘、って感じじゃないわね」

上里 ひなたが300年前の人物ということは知っている。だが、どうやって300年後である今日に存在しているのかは未だ謎だ。当然その謎の答えを知っているのは――

「西暦の時代にはタイムマシンがあつたんですか？」

「んんっー！いい、いえ、ありませんよ？」

流石にタイムマシンはないか。俺も少しその扱があるかなーって思ったんだけどな。

「神樹様に関係あることだよね？ひなタン？」

「はい、そうです。そして、ひなタン・うふふ、とても気に入りました。若葉ちゃんにも呼んでもらいたいでしょう。」

どうやら、神樹がなんかしたみたいだな。最後の方は聞き取れなかったが、謎は解けた。カチコミ行くぞお！

「神樹様に関係ある、ってどういうこと？」

おつ、友奈もしっかりついていけてるな。東郷のぼた餅ありきだけど

「ここは神樹様の内部であり、皆さんが元々暮らしていた世界を模造したものです。」

「俺達は神樹に取り込まれた、ということか？」

「魂のみを回収し、今こうやって人の形を成しています。もちろん、ここにいる間は元の世界の時間は動いていません」

「ここでどれだけ長い間暮らしても元の世界は一秒も経っていない。凄いな。一生続く夏休みみたいなものか？」

「呼んだからには理由があるんだろう?」

「はい。皆さんには造反神を鎮めて欲しいんです」

「造反神」

また神様関連か。マジで俺達を巻き込むのはやめて欲しいんだがな。

「まずはこれを見てください」

ひなたが差し出したスマホの画面を全員で覗き込む。そこには真っ赤になってる四国があった。

「わあ。真っ赤っ赤だね。青い部分はちよつとしかないよ?」

「赤は造反神に占領された土地を示しています。つまり、相当に反乱は続いています」

「俺達は赤い土地を青く染め上げれば勝ちということだな?」

「話が早くて助かります」

国盗りゲームみたいな感じか。ふつ、テラリンでシャルルマーニュ縛りした俺に死角はない。勝ったな。

「はいはいっ!」

「はい、結城さん」

「造反神ってなんですか?」

今日も元気一杯ですね。東郷さんもいつも通りで安心します。てかシャッター音がうるせえ!

「いい質問ですよ、結城さん」

「やったー!」

あ、シャッター音が加速した。

「造反神とは元天の神の一柱であり、神樹様の一部です。それが今回なにかで揉め、離反してしまったようなんです。」

「これまでは外で争ってたのが内になった。馬鹿馬鹿しいわね」

めつちや夏凜に同意する。内輪揉めするぐらいなら、さっさと天の神どうにかしてくれ。まあ、どうにかせずとも俺が殺すけど。

「位が高い神様なので完全に離反されてしまうと神樹様の力が大きく減退してしまいます。現実に影響を与える程」

「えっ、それって不味いんじゃない?」

「そうです。不味いんですっ!」

「おっ、おう。」

銀がめつちや詰め寄られてるけど大丈夫だろう。東郷が淹れてくれたお茶でも飲んどこう。うん、美味しい。

「そこで、勇者である皆さんには土地を奪還し、造反神を鎮めて欲しいんです。」

「おっけー、だいたいわかったわ。つまり、ぶっ飛ばせばいいのね!」

「お姉ちゃん、ほんとにわかってる。」

「長丁場になりそうね。サプリも増し増しよ」

やはり女子力先輩。理解が早く、なにをするのかの判断が途轍もなく早い。しかも、だいたい合ってる。

「神樹様の内部ということもあり、いくつか利点があります。」

神樹内部での利点。魔力補給が更に潤沢とか? いや、これ以上は俺が破裂するな。

「一つ。力を使ってもリスクなし」

「ジユワユーズ打ち放題か?」

「あ、え、つと、シャルルマーニュさんのは聞いてませんね。」

え、え、この姿で同じ威力打ち続けられたら造反神を直に倒せるんだが、いや、倒しちゃ駄目か。危ない危ない。

「リスクなし。ほんつとそれはデカいわ。心置きなく戦えるのはありがたいわね」

「アタシの女子力の見せ所ね。ちぎっては投げ、ちぎっては投げまくるわよ〜!」

それはただの筋力、と言いかけるがなんとか口を閉じる。もし、言ってしまったら口にうどんが詰め込まれることになるのは目に見えるている。

「二つ。時代を飛び越えて勇者や巫女をこの世界に呼び寄せることが出来ます」

「それは御影 士郎もか?」

「もちろんです」

勝ったな。いや、もうこれは勝ち以外ありえないな。そして男手も



増えるし、肩身に少しは余裕が出来るだろう。いいことづくめだな！  
「他の勇者さんたちはどこにいるんだろ？」

「まだ呼べていません。土地を解放していくことで神樹様の力が溜まり、呼べるようになります。」

「頑張れば頑張る程楽になるってことね！」

風先輩のやる気がドンドンと上がっていくな。

最初はキツイと思うが、終盤には楽勝になりそうな予感がする。なんなら、俺と御影で終わりそうだな。

——樹海化アラームが鳴り響く。

「よしっ、出るか」

即座に換装し、ジュワユーズを握る。準備万端とばかりに席を立つ。

「シャルルマーニュさんは今回もお留守番です」

そんな言葉が聞こえたかと思うと、またもや俺は床の温度を感じていた。

うーん、さつきより上手いな。

「あく、そういうコト」

「流石、銀とそのっちな。」

「ちよつとひなた。コイツ、認めたくはないけどうちの最高戦力なんだけど？」

認めてもいいんやで？あく、床に親しみを覚えてきた。

「今は絶対に駄目です。せめて土郎さんが来るまでは」

「ふーん。ま、いいわ。コイツがいなくても余裕って所を見せてやるわよ」

「シャルくん、お留守番よろしくねっ！」

「なんとか早く終わらせるので！」

いや、助けてください。そろそろ床に覚えている感情持ちさうなんだ。

「三ノ輪さん、貴方にはコレを」

そう言っつて、俺の左腕をホルドしている銀に見覚えのあるスマホを差し出す。てかあれ、俺のだな。

「これ、ってシャルの？」

「完全に俺のだな。いや、気にせずともいい。存分に振るえ」

「私にはく？」

「園子さんは切り札ですからもう少し待ってください。」

よしつ、これで俺の左腕は自由になったな。ようやく俺は自由――

「ダメだよ、シャル？」

園子、お前一人で両腕いけるってどうなってんの……しょうがない、今回も床の温度を感じとくか。

……？

あれから二十分程が経ち皆無事戻ってきた。ぼた餅を食べるなどして体力を回復させ、帰宅準備をと思ったが――

「そう言えば……って神樹様の内部よね？店とか機能してるの？」

確かに。呼ばれたのが俺達だけならば、店を運営する人はいない。それ以前に生産者もない。そんな状態で町のインフラは機能していないだろう。死活問題だ。

「大丈夫ですよ。建物だけではなく、住む方々も魂を呼び寄せていますから」

「それなら問題ない、のかな？」

「はい、問題ありません」

まあ、そうじゃないと戦う前に餓死するからな。それが妥当な判断か。

「それでは皆さん、また明日。この調子で頑張ってくださいよう」「おー！」

俺も早く復帰したいなー。まっ、今は東郷から逃げれたことに感謝しながら帰るか。

「シャルル君」

「はいっ！」

くそう、忘れてなかったのか。どうする、どうする?!この局面で俺が助かる方法は。はっ、友奈!

「え〜!てことはひなちゃん一人暮らし!」

「学校はここに明日から通うことになってるんです」

「転校生なんだ〜!一緒のクラスになれるといいね♪」

「はいっ、楽しみに待っていてください」

へえ〜、ひなたはこの学校に通うのか。これまた男子が騒ぎ出すのが簡単に想像出来るな。

「何処を見てるのかしら」

「あっ、やべ〜」

この二時間後。見回りに来ていた職員によって吊るされたシャルルマーニュが発見されたのは別のお話。

### 花結いのきらめき【3】

シャルルマーニュ吊り上げられ事件の翌日。俺達は事件の現場となった部室で何事もなかったかのように活動している。雰囲気はいつも通りだが、この中に犯人がゴクリ。

「シャルル君、ぼた餅食べる？」

「ん。ああ、一つ貰えるか」

「はい、喉に詰まらせないようにね」

「わかっている」

東郷の手作りであるぼた餅を受け取り、頬張る。喉に詰まらないようによく噛んでから飲み込む。

うん、うまい。あれ、なに探してたんだっけ？

思考を切り替え、ひなたの歓迎会をしている皆の様子を見る。どうやら、隠し芸がどうこうの話になっているようだ。

「シャルー！」

行く末を見守っていると、銀がこちらに振り向き手招きしてくる。こつちに来てってことだろう。

おおっと、これは。

「どうかしたか？」

「シャルの隠し芸を見せて欲しいなーって」

「わくわくー！」

俺の隠し芸、か．．．輝いとくか？いや、結構頻繁にやってるし、隠し芸にはならないな。てことはーよし、わかった。アレでいこう。

「ほい」

「はっ」

霊基を変換する。すると次の瞬間には目線が友奈と同じ程度になる。

余程驚いたのか、夏凜は啞えてた煮干しを落とし、風先輩はフリーズしている。そして園子と東郷はカメラを瞬時に起動する。

「ということ、これが俺の隠し芸だ」

「はー、隠し芸とは奥が深いんですね。まさか、身長すら変えられるなんて」

シャッター音で耳が壊れる前に体をいつものものに戻す。まあ、それでも十回以上のシャッター音が聞こえたけどな。

「いやいやいや!?ふつつーに可笑しいでしょ!」

「体を縮める程度が可笑しいのよ!20cm縮んでたわよ!」

いやー、だってあの霊基しかないんだもん。一応小学生の間はあれだったんだからな。一年ぐらいしか使ってないけど。

「私も小さくなれるかなー?」

「内蔵が何個か潰れるのを覚悟しとくといい」

「小さな友奈ちゃん。ぶはっ!」

東郷が急に鼻血出して倒れたな。いつものことだし、何分かしたら復活するだろう。スルー安定だな。

「シャル、シャル。帰ったらもう一回やってくれる?」

「一日一回までだ」

「明日でもいいよ?」

「一生に一回だ」

「ブーブー」

銀からは呆れた顔で見られているが、園子の撮影会から逃げるためにはこうするしかない。

「さて、俺の隠し芸は終わった。次は誰が魅せてくれる?」

丁度いいし、ここで皆の隠し芸を把握しておこう。次あつたときに誰に振るのか決めておかないと。

「樹、美声を聞かせてやんなさい!」

「ふえっ!」

おっと、風先輩が樹を第二の犠牲者に選んだようだ。まあ、確かに樹の歌は世界一上手い。異論は認めない。

「占いも得意なんだよーね?」

「え、あ、一応」

どうやらこの部の中で一番芸達者なのは樹のようだ。今度からは

樹に振ろう。

「それは素敵ですね。占っていただけれますか？」

「は、はい！歌うよりはそっちがいいです」

タロット占い。あまり良い思い出がないのは俺だけだろうか。幸運Aであるシャルルマーニユの霊基であったとしても樹の死神からは逃げれなかった。

「頑張れ、樹ー！古代の巫女に占いパワー見せつけておやり」

「古代って」

古代。まあ、確かな。300年前つてのはだいたい江戸時代ぐらいの長さだ。そんだけあってなんの進歩もない。そりゃあカール大帝も呆れるさ。

「私はいつもタロットカードを使っています。このカードをこうして並べて、捲ると」

手慣れた手付きですつすつとタロットカードを綺麗に並べていく。

そして、カードを捲る。

「はうあつー」

「え」

「あああ」

「平常運転だな」

死神の正位置。俺が毎回喰らってるやつだな。なんでや、幸運Aは飾りなんかっ！

「出た、樹名物、死神のカード」

「アタシも出されたっけなー」

「誰もが通る道なのよ。しようがないわ」

名物にしては不穩過ぎるだろ。もうちよい縁起いいものにして欲しいんだがな。

「私、死ぬんでしようか？」

「ち、違います違います！も、もう一枚っ！」

更にもう一枚のタロットカードを捲る。

「これは、戦車のカード」

「死神に戦車のカード、ということは」

「私、戦車に轢き殺されるんでしょうか？」

唐突な戦車——ッ！

この世界に来てから、日常生活で戦車とかの現代兵器は見ないな。そもそも自衛隊すら目にしない。どうなっているのかは未だ謎だ。

「え、えと。これは違って、その。ぐ、ごめんなさい！」

「冗談ですよ、樹さん。きっと解釈があるんでしょう？」

「そうなんです！よくご存知ですね」

ひなたからの助け舟だな。俺が出す手間が省けてよかったよ。

「神樹様の御神託もある意味では解釈次第なところがありますから」

解釈次第・つまり、俺のお留守番も杞憂ということも。あつ、園子が準備運動始めた。

「それでそれで？戦車のカードってどんな意味なの？」

「行動力や開拓精神、負けず嫌い。また、援軍という意味があります。」

「援軍・今の状態にはぴったりな言葉だな」

「新しい勇者、ってことかしら」

他の時代からの勇者か。結構楽しみにしてるから、ちよつとうれしいな。

「死神さんは〜？」

「終末、風前の灯火、ゲームオーバー、全滅」

「さすが、死神を毎回引き当ててる男ね」

なにその褒められてる感じがしない褒め方は。

「合わせると。援軍が来て全滅!？」

「。。」

ひなたさんもびつくりの内容だな。

強大な敵による全滅。それとも他の要因による全滅なのかによって対処の仕方が変わるが。その時が来なければわからないな。

「ちよつ、調子が悪かったのよ今日は！ね？樹、アンタ昨日食べすぎから」

「あ、そうなんです！昨日プリン三個も食べちゃってえ」

一日にプリン三個だと

なんて食生活なんだ。野菜ジュース送らなきゃ

「私もカードを引かせてもらっていいでしょうか？」

「あ、どうぞどうぞ！」

机と近づいていき、一枚のタロットカードを捲る。

「これは、恋人のカード。樹ちゃん、意味は？」

ラヴァーズのカードを恋人と読むとわな。流石、大和撫子魂が強い

東郷だ。

「えっと、誘惑と戦う、自分への信頼、情熱、絆、深い結び付き、結婚」

「まあ。」

これにはひなたさんもご満悦そうですね。いい結果に収まって良かった。

「えくつと、全部のカードを合わせると。」

「援軍が来て、風前の灯火で絆が深まつて、結婚する？」

「あ、っ、それはなんて、なんて素晴らしい結末でしょう！」

なんか一つの物語が出来そうな程に濃い占い結果になったな。俺も久し振りに一枚捲つとくか。

わいわいしている皆を邪魔しないように机と近づき、目についた一枚のタロットカードを捲る。

「塔、か。」

うわっ、死神より不吉とされるカード出た。確か、意味は崩壊、災難、悲劇だったけな。ふうー御影に助けてもらお。



## 花結いのきらめき【4】

ひなた歓迎会から一週間が経ったある日。俺達はひなたからの招集を受け、部室に集合していた。

「ひなたー、勇者部集合したわよ。で、話ってなにかしら？」

「これから戦いも激しくなってくると予想されます。新型もどんどん出てくるかと」

新型・戦闘の様子を見た感じでは魚の形容をしたバーテックスだな。厄介な固有能力はないから他と同じように対処出来ていた。

「そういえば新型。なんて呼ぼうかしら。新型バーテックス？新型？」

「もー面倒臭いから全部一括りでバーテックスでいいわ」

「固有能力を持ったバーテックスが出ない限り、別称は用意しなくともいいだろう」

「すぱっと決まったな。」

すぱっと決めて次に進んだ方がいいからな。こういうのに時間は取れない。どうせ、攻めて来るなら潰すのみだ。

「皆さんの頑張りが早速実を結びました。神樹様の力が少し戻ったようです」

「おっ、てことはー！」

「はい、援軍を呼べるようになりました。皆さんでお迎えしましょう」

おおー！遂に友奈達以外の勇者を呼べるのか！めっちゃ楽しみ。

「何人呼ぶんだ？」

「今回は四人呼びたいと思います」

あと数秒で俺は死んでしまう。そうなってしまうえば、後ろで気絶している彼女等も殺されてしまうだろう。それだけは避けられないといけ

ない。

それは誰でもない俺の王勇の為ではない。ただ彼女達には生きてほしい。幸せになって欲しい。そんな独りよがりなものだ。だが、それで十分命を賭けるに値する。

不朽不滅。壊れずの絶世。この一時に全てを賭ける。

「デュランダル——!!」

体中から血を流しながら、デュランダルを掲げる。眩しい輝きを放ちながら世界を照らしていく。

「俺の全部くれてやる！だから、——だから！奇跡を——ツ!!」

全てを賭け金にする。欲するは奇跡。この状況をひっくり返すような奇跡を——

違和感を感じた。説明は出来ないが、絶対何処かに違和感を感じるような部分がある。

なにかを探すように周りを見渡す。

「どうしたの、シャル？」

「いや、なんでもない」

周りにはいつもの勇者部の部屋。そして、樹海へと乗り込めない園子と俺。巫女であるひなたしかいない。

気のせいだったと切り替え、体勢を戻す。

「来ます」

「なにが？」

突如としてひなたが呟く。その目はいつも皆が戻って来る場所に向いている。

来る。それって、まさか——

「へえ、これが勇者部ってやつか。おっ、シャルルマーニュもいるじゃねえか」

時代錯誤な袴を着こなし、本来左腕が通るであろう裾を靡かせながらそこに立っている。

「いやあ、俺そっくりな奴に襲われてなあ。おかなびっくりつてのはこいうこもんか。初めて経験したが、案外上手くいけるもんだ」

「士郎さん・ですよね？」

「ん、その質問には答え辛いな。まっ、俺は御影 士郎ではあるぜ」  
御影 士郎。四国の大英雄がそこに立っている。だが、なにか様子が可笑しい。俺が会った御影はこんなにぺらぺら喋らない。

「はい、ややこしい話終わり。ひなた、ちよつと悪いんだけどこの子達見てくれる？」

そう言い、風先輩、夏凜、銀が抱きかかえていた少女を降ろす。どうやら、この少女達が援軍である勇者であるらしい。

えくつと、どこからどう見ても神樹館に通つた時の銀、園子、須美だな。何箇所か勇者服が赤くなっている。出血してるようだ。

「シャルルマーニュさんはあっち向いてくださいね」  
「わかっている」

ひなたが未だ気を失っている神樹館組の様態を確認しようとした瞬間顔を背ける。俺も傷口を確認したい気持ちはあるが、こればかりはしようがない。この間に事情聴取をしなければ。

「さて、御影 士郎。事情を説明しろ」

「いやあ、説明したいのは俺もなんだが、なんとというか記憶が曖昧なんだよな。気づいたら樹海にいて、後ろで気絶してるアイツらを見つけて、俺にそっくりな奴と戦っただけというか」

「そっくりな奴、というの？」

「俺の左腕があるバージョン？俺も意味がわからねえ」

御影 士郎の二人目・どういうことだ？

「倒したのか？」

「倒し損ねちまった。ほんと、上手く逃げやがる。まあ、何回か斬りはしたがな」

御影の斬撃を受けて尚上手く立ち回れる。そんな凄い奴は記憶にないな。他の皆に聞いてみるか。

「東郷、わかる範囲で教えてくれ」

「わかる範囲、と言われても私達が着いた時には敵らしき影は見えない

「かったわ。」

「敵と勘違いされて攻撃された時は焦ったぞ」

「すいません、敵かと思ってっつい」

「なんでアンタは私達六人の総攻撃受けて無傷なのよ」

ふむ・謎、か。これはまた厄介なことになった。第三勢力がいると  
考えて問題ないな。そして、やはりこの御影は可笑しい。

「検査終わりました。外傷は確認出来ませんでした」

「外傷なし？こんな血の跡あんのに？」

「返り血ってことか？」

血の跡はあるのに外傷はない。銀の案の返り血ってのがありそう  
だが・これは。。。

「私にはなんととも」

「ここは一先ず病院に——」

救急車を手配しようとするスマホの電源を入れようとした瞬間だった。  
気を失っていた園子が体を起こした。

「んく・あれ、私、なにしてたんだっけ？」

「起きましたか。園子さん、どこか痛む所はありますか？」

「ないよ。えつとく・どこかで会った？」

「自己紹介がまだでしたね。私は上里 ひなたです」

どうやら、無事のようにだ。少し記憶の混濁が見られるが、少し落ち  
着けば回復するだろう。

とりあえず今は俺も自己紹介しとくか。神樹館の時の見た目じゃ  
ないからな。

「シャルルマーニュだ」

「初めまして、乃木さんちの園子だよ」

初めまして——ああ、そういうことか。それなら合点がいくな。

「ああ、初めまして」

・  
・  
・

## 花結いのきらめき【5】

あれから一時間後。神樹館組は念の為、大赦が関わっている病院へと搬送された。保護者として園子が共に行ったようだ。そんな中、俺達は状況把握という命題で話し合っていた。

「シャルって先代組よね？」

「ええ、シャルル君は神樹館・私達の学友よ」

「アタシと遅刻回避したもんな」

「毎度二分前には着いていたな」

うわあ、懐かしいな。ダツシユ登校・今じや五分前に着けるようになった。これも成長ってことか。園子の支援を受けてるだけだけど

「でも記憶になかったみたいよ？」

「納得したような顔をしていましたが、なにか心当たりがおありですか？」

「ああ、もちろん」

友奈にサインをせがまれている御影を見ながら、いい感じに説明をまとめていく。

よしっ、まとまった。手始めにジュワユーズを取り出し、デュランダルに持ち替える。

「この剣の名はデュランダル。我が勇士ローランの武器だ」

「わあー」

「これは、凄い業物ですね」

「切れ味が鋭いからあまり触らないように。バーテックスの時みたいにスパスパ斬れちゃうからなー」

触ろうとする樹を銀が制止する。もし、デュランダルで樹が負傷した場合はローランが腹を斬ります。

「でも、これが今回の話となんの関係が？」

「この剣には聖遺物と言われる物が埋め込まれている」

「せいいぶつ、それって？」

「聖人が身につけていた物、体の一部。そんな所だ」

聖遺物の名称は判明していないが、どれも一級品の物だろう。

「その、聖遺物、ってやつになにかあんのね？」

「ああ。この聖遺物によって奇跡を起こすことが出来る。代償ありきになつてしまふがな」

「その代償が記憶消去つてこと？」

「今の所はそうだと思つている。」

奇跡の内容は全回復つてところだろうな。御影はそもそも最初から呼ぶ手筈・だったけ？やべつ、ちよつと俺も記憶が何処か飛んでんな。

「ひなた、本来呼ぶ人数は何人だった？」

「人数、ですか・すいません。神樹様の御神託ではそこまでわかりません。」

呼ぶ人数は不明か・完全にここで手詰まりだな。これ以上詮索してもなにも得るものはない。

「ここで話は終わりだ。今日は解散するでしょう」

「そうしましょうか。さつ、帰つた帰つた」

各自帰りの支度をしていく。そんな中一人あたふたしている男がいる。無論御影だ。

「俺つて何処に帰りやいいんだ？」

「士郎さんは私の家です。案内しますね」

「そりゃあ助かる。飯ぐらいなら俺が作るぜ」

片腕だけで料理出来るのだろうか。ここで直接聞くと、ひなたに刺される予感がするのでお口チャックしておこう。

街灯によって照らされている道を園子と並んで歩く。完全に日は

暮れ、辺りは真つ暗だ。流石にこんな所を園子一人で歩けさせない。ということでは迎えに来ました。

「私に話聞いても、シャルについては知らないんだって」

「そうか」

本当に忘れられたな。これで二度目か。人に忘れられるつてのは結構くるもんがある。

「これがシャルの言つてた奇跡？」

「そうだ」

「ねえ、シャル」

少し前を歩いていた園子が立ち止まり、こちらに振り向く。その顔は街灯によつて出来る影によりよく見えない。

「じたら本当に怒るからね？」

「わかつているとも」

「約束だよ？」

「ああ、約束は守るさ」

俺の言葉に満足したのかくると一回転してまた歩き出す。そんな園子に合わせて俺も歩く。

やっぱり園子が怒ると一番怖い。

忘れる、か。怒りも悲しみも葛藤もなにもない。あるのはほっかり空いた謎の穴。それを満たすなんて一生ないんだろうな。

どんな結末を辿ろうか、あるのはいつも通りではない日常だけだ。そんなものになんの価値もない。

## 花結いのきらめき【6】

翌日、俺達の自己紹介と説明をするために神樹館組を部室に招いた。御影はひなたに学校案内という名目で連れて行かれたのを確認している。

「時代を超えて、勇者や街の方々が本当にそんなことがありえるなんて。」

「神樹様は神様だからね、そういうことも可能なんじゃないかな」  
「ていうことはアレが御影 士郎ご本人?!」

さつすが四国の大英雄。カール大帝よりも有名ですね。なんでや、カール大帝もカッコイイだろ。

「少し物事を柔軟に考えていくのよ、須美ちゃん」

「ゴッドパワー！」

「後でサイン貰いに行こうな」

御影にサイン貰うっていや、凄いなのはわかってるんだがうん、なんか複雑な気分だな。

「そんじゃ、ひなたから預かってる伝言言うわよー」

そう言いポケットから一枚の紙切れを出し、広げる。そして風先輩が読み上げていく。

寄宿舎、通う小学校、勇者システム、精霊について大雑把に説明されていく。

「ベン、キョウウしなくてもよくない？」

「駄目よ、銀。勉強は毎日しなくちゃ」

「鷲尾さんちの須美さん、ちよつとよく考えて欲しい。ここは夢の世界みたいな場所だ。須美はそんなところで勉強するか？」

「そ、それは。」

負けるな、須美っ！毎日勉強してる俺が馬鹿らしく思ってしまう前に論破してくれ！

「未来のアタシもそう思ってるぞ。ですよね？」



言つたれ、銀。そんな考え込まないですつと言つてくれ。

「——確かに」

「ほら〜!」

よおし、明日から俺はだらけますつ! 夢の世界で勉強するなんて馬鹿だったんだ! ようやく目が覚めたよ。

「樹さん! 勉強はした方がいいですよね!」

「わ、私っ!」

おおつと、ここで近くにいた樹が巻き込まれたな。てか樹より年下の部員が出来るとは、勇者部は中学校の域を出たな。

「どうなんですか!」

「えつと、した方がいいんじゃないかな」

「ええ、夢の世界なのに夢がない」

まあ、勉強なんてしたくないよな。その気持ちよくわかるとも。でもしないといけないというジレンマ。

「偉いわ。樹ちゃんの勉強、私が見てあげようか?」

「当然樹もするのよね?」

「も、もちろん」

風先輩と東郷に詰め寄られ、笑顔が若干引き攣っている。

流れ弾喰らいすぎだろ。流石にちよつと可哀想に思えてくるが、後々のためになる筈だ。てことで

「銀も日々の勉強を怠るなよ?」

「げっ、わかつてますとも!」

園子は、うん、言うまでもない。紛れもない天才です、あの子は。まあ、たまに興味がそれでどっかに行くことが多いんだけどな。

——樹海化アラームが鳴り響く

「さて、出ようか」

何名かは鳴る前から準備していたが、鳴り響くことで全員意識を切り替える。

遂に俺が出る時が来たああ!! ジュワユーズぶっ放してやるぜ! いやっふう!

「油断しないようにね、みんな」

「どんな敵が来ようがこの完成型勇者にかかれば、朝飯前よ」

「油断しちやダメだよ、夏凜先輩。剣がびゅんびゅん飛んでくるからね」

小中の園子によって注意勧告・結構ガチで気引き締めるか。

剣が飛んでくる。衛宮 士郎の投影魔術か？いや、そんな訳ないな。世界がひっくり返ってもないない。

「そこまで心配しなくても大丈夫でしょ。今回はマジモンの勇者いんだから」

マジモンの勇者、ね。勇者とはなにを定義したものかは未だはつきりとしてない。俺は勇気ある者という称号に過ぎないと思う。そこに強さ、名声、富は一切関係ない。

故に俺は御影 士郎という男が本当に勇者たるのか決めかねている。勇者ですらない俺が烏澁がましいとは思いますが、そこらへんきちつとしなければ。

——花卉が舞う

## 花結いのきらめき【7】

ジユワユーズを構え、近づいてきているマシユマロ共を観察する。数は数百程度、その中にバーテックスが二体。天秤座と水瓶座のラインナップとなっている。

「星屑は俺が蹴散らそう」

「蹴散らす、ってアンタあの量をどうやって一人でやんのよ」

十二勇士の霊体化を解き、俺中心に横にきちつと整列する。矛先はもちろんマシユマロへ。

五大元素を矛先へと収束していく。大気を震わす程の轟音を響かせながら圧縮する。

「薙ぎ払え——ッ！」

凄まじい爆風と共にマシユマロを蹴散らしていく。数秒もすれば先程までいた奴らは一匹残らず消滅している。

「さて、次を——」

口を開けたまま啞然としている皆を一旦置いておき、バーテックスへと視線を移す。すると、誰かが途轍もないスピードで走っているのが見えた。考えるまでもなく、御影だろう。

「勇士達よ、彼の援護を。」

御影から視線を動かすことなく、十二勇士達へ指示を出していると何処からともなく草薙剣を取り出す。次の瞬間にはバーテックスは崩れ去っていた。

「あれが草薙剣か。ジユワユーズ以上の代物だな」

認めたくはないがジユワユーズ以上だ。それ程の神秘があれば詰まっている。

まあ、これで終わりだしさっさと部室に第二ウェーブがあんのか。とりあえず御影を下がらせるか。

「風、御影の端末に連絡を」

「おおっと、まだ意識飛んでんのか。顔近くで手ブンブンすれば流石に気づくだろう。」

「風？」

「はっ。えっ、な、なに？」

「御影の端末に連絡を。下がれ、と指示してやってくれ」

「わ、わかったわ」

無事風先輩を戻らせることに成功した。これで御影を引かせることが出来る。その間に全員意識復活させるか。

あれから数分程で全員の意識を戻す&御影を下がらせることが出来た。

「よっ、と」

草薙剣を消し、近場の根に着地する。

ジュワユーズと同じ現れ方。映像では体内から出していたが自由自在でことか。

「いやあ、派手だな。ジュワユーズってのは」

「疑似宝具のようなものだ。真の一撃は予想を遥かに超えていくぞ」「ほへえ、それは楽しみだな。いつか見てみてえもんだ」

一度きり、この世界じゃどうなんだろう。代償なしって言うてたし打つてもよさそうだな。まっ、打つ場面はしっかり選ばないと

「お話中悪いんですが、さっきの技は——」

「アタシにも出来ますか!!？」

俺への質問を小銀によって遮られる須美。ちよつとむってなってる。久し振りに見たが、やっぱリスみたいだな。

「何事もチャレンジだ。それ」

「お、おおく!!」

ジュワユーズを小銀に手渡す。十二勇者の統制は俺がするとして、ジュワユーズからビーム放てるかは小銀次第。

「構えろ。矛先は穿つべき敵へ」

「こうですか!」

「ああ。そして力を圧縮するイメージで」

十二勇士の矛先へ五大元素を先程同様収束していく。十二色の色彩つてのは見ていて絶景だな。

「ぐぬぬぬっ!」

「ふむ」

この場合溜めるのは神力か? 神樹から勇者へ渡されるものとしてはそのような物だろう。だが、扱ったことがない俺にはイメージが来ない。

ここは俺が手を添えてジュワユーズに五大元素を収束するか。それしか方法はない。

「放て」

「——ッ、いっつけえ!!」

流石に俺ではない手が混ざると威力は下がるか。いや、俺の集中力の問題か。ちよつと圧縮に淀みがあったな。

第二陣のマシユマロの数は先程の倍ではあったが、今の一撃で同じ数ぐらいにはなったな。

「できた。できた!」

「やったね、ミノさん♪」

「凄いわね」

ふう、喜んでもらえて良かった良かった。にしても、十二勇士が俺の時よりやる気に満ちてたことにツツコミたいが、まあ、不問にしておくか。

「ちよいちよい、最後アンタがやったでしょ」

「風、夢は壊さないでおくのが最善だぞ」

「それはそうだけでも」

はしやいでいる神樹館組に聞こえないように小声で喋る。

風先輩の言いたいことはわかる。だが、そんぐらいの線引は彼女達

でも出来るだろう。

「甘やかし過ぎないようにな、シャル」

「わかっている」

銀に釘を刺されてしまったグスン。

「東郷先輩、あれって」

「ええ、自分自身への嫉妬ね」

さて、気を取り直して第二波に備えるか。と言っても残りの数は先程と同じ程度なんだがな。

「御影、あの量をどう思う？」

「あー、そうだな。三振り、つてところか？」

「なるほど。試しにやってみせてくれ」

「いいぜ」

消した時と同じように草薙剣を握る。俺のジュウユーズと同じ原理のようだ。

次の瞬間には飛翔し、マシユマロへと接近していた。

「ふっ！はっ！せいっ！」

「」

「一振りするたびに途轍もない斬撃によって剣に触れてすらないマシユマロが消滅していく。」

マジかあ。あの斬撃をあの体で出すとか意味がわからんな。ほとんど遠距離攻撃みたいなもんだ。

「四国の大英雄、というのは間違いないな。人間か怪しいが」

「アンタもでしょ」

「シャルくんも凄いや？」

あれなら天の神の八割を消失させたつても領ける。あれで左腕があつたら考えるのはよそう。

——花卉が舞う

担い手は此処に独り【if√】

紅く染まった大地。閉じられることのない瞼。最早心臓は鼓動しない。ただ、そこには無慈悲な死のみがある。

杏とタマが倒れている。血を出して倒れている。手を繋ぎながら事切れている。

「は？」

頭が現実を受け入れなかった。愚かしくも俺は自身の失態を認めなかった。

未だ進化体は顕在。目の前の思考停止している勇者を見逃す訳がない。

二名の勇者を死に至らせめた針が御影の頭部へと迫る。

「」

手には砕け散った刀。誰も目視出来ず、ただ針が砕け散った。そんな結果しかわからない。

「死ね」

1km離れていた場所で戦っていた他の勇者を萎縮させる程の殺意。その場にいるだけで支配出来ると錯覚させるものが発せられる。

金色だった瞳を青く濁らせ、天の天蓋すらも砕く。常人を超越した力を振るい、暴虐の限りを尽くす。

アリのように踏み潰し、力任せに砕く。再生するたびに終わりを与えた。何十、何百と繰り返し始まりを享受させた。

「」

「土郎、くん」

いつの間にか1km程離れた場所まで移動してしまったようだ。ここまで、と思いき身長台の刀を取り出し進化体を跡形もなく消し飛ばす。

砕け散った刃の破片から目線を外し、顔を上げる。そして、後ろにいる皆に――

「っ……！」

俺の顔を見るなり、若葉と千景がくしゃつと顔を歪ませる。唯一、友奈だけは顔を歪ませず驚いているだけだ。

「どうしたんだ、お前ら。」

「士郎くん、どうして瞳が青いの？」

「っ、いや。」

鏡がなく確認できそうにないと思うが、友奈の瞳に反射している自分を見えることに気づいた。

友奈の言う通り青い瞳だ。これがどうした？

「今はどうでもいい」

もう時期樹海は解ける。そしたら、タマと杏も——

お経が聞こえる。棺にはタマと杏が入っており、瞼は閉じられていた。

俺は何もかもが見えるようになった瞳でその光景を眺めていた。やけに体が軽い。このまま死ねないだろうか。

「——」

「あ、士郎。」

「若葉ちゃん、今はやめておきましょう」

紫色の芍薬をそっと置き、部屋を後にする。死者を送る気など毛頭ない俺がいても邪魔だろう。

人の生き死になど最早なにも思わない。誰が死のうが構わない。俺はこのくそつたれな世界を作った元凶を殺すだけだ。



「士郎、——士郎！」

怒鳴り声のような呼び声で意識を水底から起こされる。どうやら、若葉が俺を呼んでいたようだ。

「どうした、若葉？」

「やっと気づいたか。士郎、今日の授業は終わりだ。」

「ああ、そうか」

若葉の言葉でようやく今日の授業が終わったことを認識出来た。それと同時に席を立ち、帰りの支度を始める。

「士郎、この後一緒に稽古でも」

「そんじゃ、俺は帰る。若葉も気をつけて帰んな」

「ああ、さようなら」

若葉の横を通り、教室を出る。

いくら鍛錬しようが今の俺には関係ない。既に俺は自身の最高地点に到達している。ここからの伸び代はない。

「士郎さん」

「んっ、ひなたか」

廊下を歩いていると後ろからひなたに話しかけられる。少し顔が暗い。

「最近よく寝れていますか？」

「話はそれだけか？ないならオレは帰るぞ」

強引に話を切り、背を向ける。帰るために一歩を——

「貴方は誰と戦っているんですか？」

止め、溜め息をつき首を回す。視線だけをひなたに向けたまま口を開く。

「——人類の敵だ」

それ以外は敵でも味方でもない。ただの置き物と同義だ。この瞳に視えるもの全てが無価値に映る。

夕暮れの中、独り階段を上がる。なにか満たされないまま日々を過ごしている御影にとっては日常のことなどどうでもいい。敵さえ殺せばいい。

自分は何処か壊れている。そう自覚しているというのに自分は目を逸している。きつと、これを見つければ俺はまた一つ失うだろう。

「なにか、大事な——」

「あつ、士郎くん。今帰り？」

「ああ、ちよつとぼーつとしててな」

思考を止め、友奈へと目線を合わせる。唯一友奈だけはこの瞳から目を逸らさない。そのためか、話していて気分的に楽だ。

「今からぐんちゃんとうどん食へに行くんだ。士郎くんも一緒に行く？」

「ここが御影にとつての最後のターニングポイント。ただし、どちらにせよ失うことになる。あの時点でその結末は決定した。」

「いや、いい。」

「そつ、か、それじゃあまたね」

階段を降り、千景の部屋へと歩いていく友奈を目で追いながらも部屋に入る。

あの場に俺は不要だ。こんな欠落人間がいても楽しめないだろう。そう自分を納得させる理由を作る。

——千景が不祥事を起こしたのは翌日のことだった。

現人神、大社が考える勇者の最高地点。実現不可能として没になった——御影 士郎という者を壁付近で見つけるまでは。

現代ではありえない神秘を宿しながら勇者適正を有している。記憶喪失という弊害はあったが、無事現人神に到達した。しかし、勇者適正はその頃から減少し続けているのは周知の事実だ。

勇者でもない。神でもない。そんな存在に段々と近づいている。以後も観察を続けることにする。

(2018. 10/27) 大社検閲済

雨が髪を濡らしていく。！それと同時に身体から流れる血も流れる。不思議なことに痛みはない。

「千景っ！目を、閉じるな。」

「ぐんちゃん、もうすぐだから！あとちよつと、だからあつ！」

焦点が定まらないまま弱々しく呼吸を繰り返す千景を若葉と友奈が鼓舞する。そんなことしたって千景はあと数秒で死ぬのには変わらない。

「私、は——」

「喋るんじゃない！」

無理に口を開く千景を若葉が制止するが、千景は止まらない。ゆつくりと手を伸ばし、座り込んでいる俺の頬に触る。

「あなた、が、だいつきらい。——」

その言葉を言い終わると同時に手が力なく落ちる。微かに聞こえていた呼吸音すらも聞こえなくなった。

「ぐんちゃん——！」

「千景、くっ。」

ああ、大嫌い。そっか。

千景の鎌によって裂かれた胸にある傷を触りながら、自身の心を探る。

「でも、俺は嫌いになれなかったよ」

この言葉は俺自身の言葉だ。水底に置いてきてしまった最後の心だが、もう取りに行くことはない。

瞳を青黒く濁らせながら歩く。敵の火球によって抉られた腹から血を流し、血の道を作りながら神樹へと向かった完全体を追う。

——けたたましい爆裂音が聞こえた。

その直後に液体が地面に叩きつけられた音が聞こえた。音のした方向へ目を向ける。

誰かの腕が落ちていいる。赤い籠手をつけていることから友奈の腕だろう。切断面は焼ききれている。

纏れそうな足を前へ引つ張り、爆裂音がした方へ急ぐ。

「友、奈」

右腕はなく、酷い火傷を全身に負っている。呼吸音すらない。既に事切れている。

今向かってもなにも出来やしない。頭で理解しながら、何故か俺は友奈の近くに寄っていた。

「お疲れ、友奈」

乱れている髪の毛をいつもの君のように正しながら、手を握る。

まだ敵が残っているのに俺はなにをしているのだろうか。人としての感情を捨てた俺が、人みたいに友人の死に悲しんでいい筈がない。

——この一時だけだ。

瞳を金色に輝かせ、草薙剣を体内から取り出す。相対するは天の天盖。そんなことはどうでもいい。ただ俺は――

「俺の友達は強かったろ。ハハっ――オレはもつと強いぞ」  
蹂躪が始まる。

激情に任せ、剣を振るう。確実に殺すように、再生など許さないように仕留めていく。誰よりも強く、鋭く、細く。

目の前で血飛沫が上がる。損傷部は胴体。この噴出量からして死は免れない。

金色の瞳を澄んだ青色にして、その光景を捉える。ゆっくりと落ちていく感覚がした。

「なに、死んでんだ」

「すまないな、士郎。先に逝く」

俺を庇う必要などなかった。あれは俺でも対処が可能な範疇だ。それを勝手に庇って死ぬ。辞めてくれよ、ほんとに。

「――」  
荒い呼吸を繰り返しながら、俺の顔を見る。何故かその顔は笑顔だった。

「やはり、私は好きだ――」

満ち足りた顔で瞳を閉じる。俺にはさっぱり意味がわからなかった。どうして、死ぬというのに笑えるのか。きっと最期までわからないのだろう。

そんな最期を俺は迎えない。

「――」  
まだ戦いは終わらない。進まなければ。

あと俺一人。俺がこの戦いを終わらせなければいけない。そんな強迫観念を感じながら空を仰ぎ見る。

巨大な魚を斬り捨て天の神へ駆ける。幾重もの攻撃を受けながら

も負けじと切り刻んでいく。

勝敗は最初からわかっていた。俺のような者が神を墮とせる訳がなかったのだ。だが、一緒に墜ちることは出来る。

既に死に体な肉体で天を睨む。次の瞬間には俺の体に何本もの矢が突き刺さる。それでも倒れない。ただ草薙剣を握る。

奴は俺に勝利し、俺は奴に敗北した。その結果だけで十分だとも。それだけで俺の勝利が決定する。

「一緒に死のうぜ、神さん」

その言葉を皮切りに天の神の体が朽ちていく。それと同時に俺の意識も遠のいていく。

草薙剣による因果逆転。俺は勝利し、奴は敗北する。

それまでの経過などどうでもいい。ただ俺が勝つのみだ。そして奴は死ぬ。その結果だけが世界に受諾される。

これで死ぬ。過ちを繰り返した人生を終えることが出来る。で

も、最初は皆に――

「みんなに、謝らないと――」

花結いのきらめき【8】

土曜日の午前中。俺達はひなたの時と同様に神樹館組と御影 土郎の歓迎会をしていた。まあ、ただ騒ぎたいという理由があつてのものだが。

「なんか昨日、大赦の役員がサイン貰いに来たんだが、この時代どうなつてんだ？」

「やってやれ」

「いやあ、俺がするつてのもあれだからな。また今度つて断つといた」  
「大赦は暇なのだろうか。そして、断わんな。だから、銀達と友奈がしよぼんつてしてたのか。」

「今度、とは？」

「西暦勇者達が来てからな」

西暦勇者 死者は御影 土郎のみ。目の前にいる御影はこの結末を知らない。少し複雑な心境だ。

「ずっと気になってたんだが」

「どうかしたか？」

なんだ、そんな改まつて。凄く大事な話かと思ひ、心構える。

「シャルはなんで園子と銀と同棲してんだ？」

毎度園子が仕掛けている盗聴器を襟から外し、握り潰す。毎朝抱きつくと同時にすつと付けるから十日目以降からは放置している。

「成り行きだ。そう言うお前もひなたと同棲のようなものをしてい  
るだろう」

「同棲 うくん。あれは同棲というより 介護されてる感じがする  
な。」

おおっと、ひなたがお菓子で噎せた。どんだけアンタは過保護なん  
だ。

「やはり片腕は不便か？」

「まあ、不便だわな。慣れはしたが、左腕があれば っと思う時もある  
。」

る。極力考えないようにしてるが。時折浮かんじまう」

「そうか」

彼の決断は正しかった。誰がなんと言おうとその勇敢さは讃えられるべきものだ。それは胸を張って言えるよ。

「まっ、これは俺がへました結果だ。弱音ばっか吐けねえよ」

へま、か。そうだな。彼がそう言うのならば、彼のへまなのだろう。今はそういうことにしておこう。

「士郎さん、こちらに美味しいぼた餅がありますよ」

「ん、ああすぐ行く」

めっちゃいい笑顔だな。いや、俺が考えることじゃないな。

最初は変な巡り合わせだと思っただが、いい出会いになった。たまには神樹のゴタゴタに巻き込まれるのもいいな。

あれから一週間。勇者部としての活動やバーテックス駆除などしていたらあつという間に過ぎていた。今日も今日とていつも通り、と思っただが。

「皆さんの活躍の♪おかげで♪新しい援軍の勇者達を呼べるんです♪」

「どうなってるの、あれ？」

「朝からこんな調子だから安心してくれ」

明らかに上機嫌だな。怖くなる程に。御影も若干いつもより距離感が遠い。

「もしかして、ひなたさんの時代からですか？」

「そうなんです！須美ちゃん鋭い！今日は西暦時代の勇者達が来るんですっ！」

おっ、ついに御影とひなた以外の援軍が来るのか。これは心強い。



だが、なんだか御影の顔が少し暗いような気がする。

「わーやったあ。未来の自分だけじゃなくて、ご先祖さまにまで会えるちゃうよ〜♪」

「ドキドキしちゃうね〜♪」

「ね〜♪」

園子は順応が早すぎるな。普通なら自分と会うなんて混乱しそうなんだけど、まあ、園子は普通じゃないから当然か。

「ねえねえ、ひなちゃん。西暦の勇者の人たちってどんな人だったの？」

「ふふっ。西暦の勇者達はシャイな人だったり、賑やかな人だったり、様々な人がいますよ。」

御影は賑やかな部類に入るんだろうな。この感じからして

「勇者部が大所帯になっていくわねえ」

「嬉しい悲鳴ってやつですよ、風先輩」

「最後はどれだけの人数になるんだろ」

今の時点で勇者部は総勢十三人。これにこれから俺が知っている人数なら四人追加されることになる。運動部のような人数になってしまうな。

——樹海化アラムが鳴り響く

「今回もこのパターンか」

霊基を換装し、ジユワユーズを握る。前回では待つことしかできなかったが、今回はその分全力で挑むとしよう。

「これ、アタシ達の時みたいになってるんじゃない」

「剣がびゅんびゅん？」

「多分」

剣がびゅんびゅん。本当に衛宮 士郎でもいるのか？それかギルガメツシユ。それだと最悪全滅の可能性が見えてくるが、その時はジユワユーズを放とう。

「皆さん、若葉ちゃん達をお願いします。」

「俺は樹海化した瞬間全力で走る。お前らも全力で追いかけて来てくれ」

「ならば、追い越そう。」

御影の全速力なら俺の魔力ブーストした全速力でなんとか追いつける筈だ。ここは最速で向かわなければいけない。

「ひなた、この完成型勇者に任せなさい。アンタは朗報を待ってればいいわ」

「夏凜さん、はい、わかりました。園子さんと一緒に待ってます」

「みんな、気をつけてね」

この人数の勇者なら余程のことがない限り、負けることはない。だが、戦場でなにが起こるかは予想出来ない。故に慢心など一ミリもない。

——花卉が舞う

## 花結いのきらめき【9】

御影と共に樹海を走る。その際に邪魔してくる星屑は御影の一振りでも粗方消滅していくため無視だ。皆を完全に置いてけぼりだが、今は少しでも早く急がなければ。

数分程ぐらい走っていると、ようやく西暦組を発見した。どうやら、マシユマロとバーテックスに囲まれているようだ。

「俺がバーテックスを斬る」

「ならば、俺は星屑を」

牡羊座は増えるから俺が、と思ったが御影ならなんとかなるか。俺はマシユマロを潰すことに専念しよう。

大きく飛翔し、刀を振るっている勇者の近くに降り立つ。スーパーヒーロー着地はこの局面じゃ出来ない。

「——誰だ！」

「助力する。説明はここを切り抜けてからだ」

警戒心マシマシだな。あ、御影が飛んだ。その勢いそのまま牡羊座を一刀両断する。

「うおらあ！——うえっ、増えた!？」

「士郎（さん）!!？」

待て。あれ、俺が行ったほうが良くなかったか？いや、もうしようがない。御影には頑張つて貰おう。

「士郎・わかった。手を貸してくれ」

呆れたって感じだな。いやまあ、牡羊座の初見はああなる。何事もチャレンジチャレンジ。

意識を切り替え、マシユマロ共を殲滅することに集中しよう。手始めに五大元素を手でゴネゴネする。そして、放つ。

「我が威光を受けるがいいッ！」

数十匹程度か。まあ、正面は空いたしいいか。後は皆が合流するのを待ちながら、ジュワユーズで斬り伏せていくのが定石かな。

「無茶苦茶なのが増えたわね。」

「頼もしい増援だね、ぐんちゃん」

わあ、似てる。そりゃあひなたも一瞬思考停止するわな。

その後他の勇者が来る前に殲滅は完了した。牡羊座はゴリ押しによつて消滅したのを確認している。？

「バーテックスってのは多種多様なもんだ。増えるとはな。」

「なにか分裂する条件でもあるのだろうか。」

「切断じゃなくて抉り取る、それが効果的じゃないかしら？」

「おっ、いいな。次があつたら試してみるか」

和気あいあいとしている話し声を聞きながら、近づいてきている勇者部に手を振る。あつ、友奈が振り返してる。

「それにしても、土郎さん。こんなにも早く合流出来るとは思ってたせんでしたよ」

「ん。どういうことだ？」

御影の位置を知つてたような口振りだな。勇者システムの探知があるにはあるが、俺達の前には障害など皆無だった。精々ちよつとマシユマロがいたぐらいだ。

「敵に囲まれてたようですが、違いましたか？」

「いや、違うな。ちよつとスマホ見せてくれ」

「どうぞ」

クロスボウガンを扱っていた勇者のスマホを御影と共に覗き込む。確かに言う通りマシユマロとバーテックスが沢山集まっている塊が一つ、ここから大分離れた場所にある。

「。」

「第二波。いや、こちらに来る様子はないな。一先ず風達と合流を優先する」

なにか深く考えている御影を置いておき、西暦勇者へ策戦を伝える。

「——あの塊は俺が向かう。」

「二人でか？」

この量はいくら御影と言えども物量で押される。一人でいくのは

蛮勇に入るぞ。

「時間がねえ。一刻を争うんだ」

「理由は？」

「言えねえから退け」

「言え」

いがみ合うように眉間に皺を寄せながら睨む。どちらも負けず劣らずの頑固者。この勝負は第三者が入らなければ、一生続くだろう。

「ちよ、ちよつと二人共！喧嘩は、あんま——」

おどおとしながらも高嶋 友奈が二人の間に入ろうとした瞬間だった。

「——士郎っ！」

甲高い金属音が聞こえた。まるで金属同士でぶつかりあったような音だ。

「タマー！無事か!？」

「勇士達よっ！」

御影は発生元である盾を扱う勇者の元に駆け寄り、俺は十二勇士を展開し周囲を警戒する。

「タマはへっちやらだ。それよりもだぞ」

「わかつてる・ッ」

どうやら怪我はないようだ。御影は刀を握り、周囲を警戒する。

「全員、背中を合わせるようにするんだっ！」

乃木 若葉の号令によって陣形を組む。これでどの方位から攻撃されようが問題ない。

奇襲を失敗したら相手はなにを考えるか。次の隙を突く。っ！

「ローラン！オリヴィエ！」

すぐさま風先輩達の所へ向かわす。その間に御影が掛けた電話を俺が受け取る。

「風、奇襲に警戒しながらこちらに辿り着け。今、勇士二人を急いで向かわしている」

『わかったわ。そっちも気をつけなさい』

必要なことを簡潔にわかりやすく伝える。この状況では一秒が命

に関わる。油断なく基盤を作らねば

「御影、第二射に備えろ」

「何処から来てるか、だろ？それなら俺より適任がいる。てことで任せたぞ、杏ー」

「任せてくださいー！」

その言葉と共に陣形から抜き出し、先程放れた方向へと駆ける。

「士郎らしからむいや、これが最善か」

御影が走っていく間、こちらの警戒は俺と勇士で固める。風先輩の方へと放たれた際は俺が探る。完璧な作戦だな。

「——、ハッ！」

突如として放たれる刀を難なく弾く。そして射出源は——

「七時の方向ですっ!!」

「——」

その言葉が発せられた瞬間、その手には草薙剣が握られる。先程とは比べものにならない程のスピードで駆け、振り上げるように振るう。

樹海の根ごと裂く程の斬撃。どのような物質だろうが、その斬撃を以てして斬れぬものはない。

「外したか」

未だ晴れない煙を睨みながら、構える。段々と晴れていき、人形のような影が薄っすらと見え、て

「やっば、こんぐらいじゃ仕留めきれねえか」

御影と同質の声。姿形すらも酷似している。唯一違う所と言えば、左腕があるか否かという所だけだろうか。即ち、コイツは——

「それじゃあ、仕切り直した。当然まだ続けるよな、四国の大英雄？」  
「アンタが俺の敵なら続ける。降参するなら今のうちだぞ」

左腕に五大元素を収束、圧縮する。照準は奴の頭部。この一撃で命を断つ。あと、3、2、——

「お前の弱点は把握済みだ。それ、守ってみろ」

降り注ぐ剣群を目にし、収束した五大元素をすぐさま散らす。

一刀一刀が宝具。数回防げば、精霊の護りなど容易く突破するだろ

う。そして、そのまま命を刈り取れる。

「全軍、撤退準備——ッ!!」

迷わずその言葉を口にする。御影もその指示に従うように奴から離れる。その際に何本か刀を投擲するが、飛来してきた刀によって弾かれた。

「シャルクーんっ!こっちい!!」

樹の系によって練られた防護壁。その後ろならば劍群から身を守れる。だが、そこまでの距離は100m程。身を守りながらの撤退では途轍もなく遠く感じる。

「俺とシャルで防ぐ!走れ!」

「守りはタマに任せタマえ!!」

猪の如く駆け、俺と御影の横に並ぶ。その手には片手盾が握られている。どうやら、彼女が西暦勇者の守りの要のようだ。

「タマっち先輩!まだ、足が——」

「走れ、杏!」

「あんちゃん!」

御影が大振りに大剣を振るい、大雑把に刀を砕く。そこを通過したものを十二勇士と共に折る。または弾く。そして抜け落ちた剣を盾で防ぐ。この作業を後ろを走る勇者が防護壁へ辿り着くまでする。

「——避難完了だ!士郎達も早く!」

後ろからの合図が聞こえた。降り止まない剣を弾きながら、その言葉に安堵する。後は御影がこの子を担いで全力で走るのみだ。

「わかっ」

他の剣とは桁違いなスピードを以てしてタマの盾に迫る刀を士郎の心眼が捉えた。だが、捉えるのみで体はその刀を弾くことは出来ない。

「え」

タマを守る盾が刀と共に砕け散る。

ようやくこの時点でシャルルマーニュが目視する。行動に移すには後一秒要するだろう。

人間離れした動体視力。先読み能力。全てが裏目に出た。たった

一秒にも満たない空白を作ってしまう。その空白は敵にとって最大の好機。見逃す訳がない。

——二刀目が放たれる。

狙いは一点。誰にとつても明白な必殺の一投。

シャルルマーニュがジユワユーズを伸ばそうが、タマが庇おうが、時すでに遅し。

「——」

心臓を貫き、背中から突き出る真つ赤な刀身。血を滴り落ちながら、静かに沈黙する。

誰もが最悪の事態が頭に浮かんだ。いや、認識した。

「デュラン、——ッ！」

「いい、それでいい」

園子との約束が通り、デュランダルを翳すことに躊躇する。再度拳げようとするも、御影によって静止させられる。

「あ、あ、あ」

降り注いでいた剣は止み、静寂となった。そんな光景をただ一人不服そうに眺める。

「ッ——、若葉あ！受け取れ！」

歯を食いしばり、タマの首根っこ掴んで防護壁の方へと放り投げる。

勇者達は全員避難済み。残るは英雄のみとなった。

「シャル、悪いが最期まで付き合ってくださいよ」

「いいだろう。とことん付き合うさ」

「——輝きが満ちる。」

『託す』『遺す』ということに関して御影 士郎という男は最大の影響力を持つ。

誰もが夢見た空虚な物語ではあったけれど、それは何処かの誰かの希望となったのだから。

「やっぱ、勝てねえな」

剣群が御影へと降り注ぐ。

ここでいくら邪魔をしようが彼が仕上げることは重々承知だ。自



身が敗北してることなど初めからわかりきっている。故に足掻く。惨めたらしく最後まで足掻く。

「――」  
鉄を打つ音がする。一回一回全てを賭けて金槌を振り下ろす。体を粒子としながらもお構いなしに振るう。

いつか誰かが笑えるようになるなら、迷わずこの命を燃やすとも。それが救世主としての役目だ。

「シャル――」

剣が折れる音、ぶつかり合う音。様々な轟音が響く中、その声は鮮明に耳に届いた。

「お先に休ませて貰うぜ！」

「ああ、存分に休め。四国の勇者よ」

二振りの刀を遺し、風に乗って消えていく。

遺されたシャルルマーニュはただその光景を眺めていた。??でさえも、苦虫を噛み潰したような顔で眺めていた。

花結いのきらめき【10】

「手元で輝く称号を見つめる。それには『四国の大英雄』と称されていた。」

「——下卑た笑い声が聞こえた。」

「なに嘲笑ってやがる、造反神。」

「何故こうも神という奴は自身の敗北を認めれないのかと舌打ちする。」

「このような策を用いてしか殺せないのなら、それは敗北と同義だ。しかも、なにか遺す猶予を与えてしまった。完全敗北だな。」

「これは俺が使うもんじゃねえな」

「称号を破棄しようとして握り潰そうとするが、既に掌から消えていた。」

「——いらねえなら、俺が使わせて貰うぞ」

「——ッ、ぐっ！」

その声が聞こえた瞬間、刀を取り出そうとするも間に合わず横腹を蹴り払われる。防御したにも関わらず、一切減速することなく樹海の根に叩きつけられる。

意識が朦朧とする中、その姿を視認した。

「ハハっ——、見てるかあ！造反神！テメエのだいつきらいな奴は生きてるぜ！」

先程死滅したのは英雄たる御影 士郎。今、此処にいるのが本来の御影 士郎だということに瞬時に悟る。

「この構図……この戦闘痕……お前が敵で間違いねえな？」

「ああ、俺が敵だ。」

「はあ、色々不思議なことが起きてて状況整理してえつてのに、問題が続々と——」

疲労感を露わにしながら刀を俺へと向ける。最早先程の策は用いれない。守るべき者はなく、ただ一人で立っているこの男に勝てる道

理はない。

勝てる道理はない。だが、それが撤退の理由にはならない。激痛がする体を起こし、刀を構える。

「——」  
当たれば即死の斬撃を見を捻り、躲す。瞬きする暇もなく、次の斬撃が目前に迫る。それを刀で砕く。当然こちらの刀も砕け散る。

躲し、逸し、砕く。決して決定打にはならず、全てを紙一重で捌いている。にも関わらず、??の体に少しづつ切り傷を増えていく。

砕け散った破片で。殺しきれなかった斬撃で。時間が経つにつれ増えていくスピードが速くなっていく。徐々に御影へと吞まれていることに感じながら、刀を振るう。

攻撃に転じれば、次の瞬間には自身の首が飛ぶことなど百も承知。だが、このままならば確実に負ける。

——花卉が舞う

「——ッ、邪魔すんな、造反神!」

??の怒号虚しく世界が移り変わっていく。御影が刀を首へと振るうが後数mm届かず、光に吞まれる。

光に吞み込まれ、次に目を開くとそこは学校の教室のような場所だった。

いつもは樹海化が解けると同じ座標に出るんだが、こんな場所に出たのは初だ。大抵は屋外に出されてるから尚更のこと。

「えーっと、それで、なにしてんだ?」

若葉は黄色の長髪が特徴的な人に羽交い締めにされていて、タマは泣きじやくってて、頭がパンクしそうだ。

「御影 士郎、で間違いはないな?」

一振りの刀を握り締めている俺より背が高い初対面な奴に話かけられる。握られている刀は一目で業物だとわかる程の代物だ。

「ああ、そうだが」

「なるほど。この刀はお前が持っておけ」?

鞘に収められず、柄すら嵌められていない! 抜身のまま手渡される。

「おお、そりゃありがたいがてえ。って、コレは」

草薙剣同様受け取ると同時に体内へと入っていく。そして、体内にある草薙剣と融合している感触がある。

「よし。じゃっ、状況説明してくれ」

「ちよ、ちよつと待つてくださいい!」

「どうした、杏?」

次に移ろうとするが、杏によって待ったがかかる。珍しく慌てた様子。

「え、えつと。士郎さんは刀が刺さってそれで」

「いや、刺さってないぞ?」

刀が体に刺さったことなんて人生で一度もない。鎌が刺さったこととはあったがな。

「い、いえ、ですが」

「ひなた、説明を頼む。御影にもだ」

「わかりました」

「一先ず現状理解が先だな。何処が噛み合っていないかを見つけてるにはそれが重要だ。」

ひなたからの説明を要約するところは神樹内部の結界で俺達は造反神とのゴタゴタを鎮めるために呼ばれたみたいだ。

「それでコイツらがこの時代の勇者って訳か。それで」

「シャルルマーニュだ。気軽にシャルでもなんでも構わない」  
「じゃあ、シャルで」

にしてもシャルルマーニュか。どっかで聞いたような名前だな。

「シャルルマーニュ。カール大帝ですか？」

「カールたいいてい。あつ！フランスの人！」

「——っ!」

あゝ、そりやあ聞き覚えがあるな。フランク国の王様であり、ヨーロッパの原型を築いた偉大な皇帝。とんでもねえビツクネームだな。

「そのような者だ。」

「ちよいちよい、ただ名前が同じだけでしょ？」

「まあ。そうだな」

めつちや含みある言い方だな。なんか裏がありそうだが。今は置いておこう。

「そ、それよりなんで士郎さんは無傷なんだ？」

急な話題転換だな。シャルの正体については触れてはいけないナニかなのだろう。気をつけないと

「それは俺が説明しよう。」

「頼む」

ひなたの話によると俺が来る前まで俺がいたらしい。意味がわからないとは思うが、俺もわからない。思わずは？って口から出たぐら이다。

「簡単に言えば御影 士郎が二人いた」

「ドツペルゲンガーってやつ？」

「いやいや、そんなオカルトチックなことがあるわけ」

「あながち間違いではない。」

「あるの!？」

へえ、俺のドツペルゲンガーかあ。そりやあ楽しみだ。これで俺のやることを分割出来る。効率二倍だな。

「二人は違う時系列の御影 士郎。今、此処にいる御影 士郎は西暦時代の者だろう。」

「???」

「14歳の士郎さんと15歳の士郎さんがいた、つてことかな？」

「そうなる、のかな？」

「つまり、左腕がある俺がいたってことか？」

友奈にそっくり奴は疑問符浮かべたまま停止している。にしても似てんな。双子か？

未来か過去かと言われたら、過去しかないだろう。未だバーテックス共がいるということはそういうことだ。

「いや、それよりも後の者だ」

「なるほどな。じゃあ、俺にそっくりな奴がいた訳は？」

「あれはお前とは別人だ。気にするな」

気にするな、と言われてもな。まあ、敵なら斬るだけだが。

「質問は以上か？」

「ん、ああ。とりあえず、自己紹介してくれないか？」

何事も自己紹介から始まる。それはどの時代、どの場所でも通ずる仲良くなる方法だ。

## 花結いのきらめき【11】

無事あの後自己紹介を終え、多少は雰囲気明るくなった。まあ、新たに問題が発生したのだが

「サインおなしやすー！」

「おなしやすー！」

キラキラと輝いた目でこちらに色紙を差し出す同一人物である二人の三ノ輪 銀。更に後ろには高嶋にそっくりな結城がニコニコして待っている。

そんな光景に思わず頭を抱え、ひなたに助けを求める。

「してあげてください。四国の大英雄さん」

「いや、俺はそんなんじゃない。あくもう、わかつたよ。サイン書くのは初だから文句は受け付けねえぞ」

ペンと色紙を受け取り、名前を書く。続け書きすれば、それっぽくなる筈。だよな？

「ほい」

「おおー！ありがとうございますっ！」

むず痒いような。小つ恥ずかしいというか。まあ、いいか。いくら書こうが減るもんじゃねえし。

「お願いしますっ！」

うーん、何処からどう見ようが。いや、髪飾りが違うな。逆を言えばそこしか違う場所がない。

先程同様にそれっぽく書き、手渡す。

「家宝にしますっ！」

「するな。押入れにでも仕舞っといてくれ」

こんなヘンテコなサインを飾られるというのは恥でしかない。そんなことされた夜は落ち落ち寝れないぞ。

よし、これで最後。おっと、まだ一人。

「お願いしますっ！」

「高嶋は貰う必要ねえだろ？」

「なにしれつと並んでんだよ。同じ時代から来ただろうが。」

「あつ、つい。」

他の人が並ぶのを見て並んじやうタイプの人だな、こりやあ。悪い方向に転ばなければいいんだが。

「それにしても、士郎くんは一躍有名人だね。」

「全く凄いことをした覚えはねえんだがなあ。」

「ただバーテックスを斬つて、ワイワイして、ブチ切れて、逆転して碌な記憶がないな。もう考えるのはよそう。」

「士郎くんは十分凄いよ。だってほら、あつちでタマちゃんが」

高嶋の視線の先には小学生組とシャルルマーニュにタマと杏がなにか言い聞かせてる。微かに聞こえる内容からして俺達の戦いのよ  
うな気が

「めつつつ。ちや恥ずかしいな。今すぐ帰っていいか？」

「駄目ですよ、士郎さん。まだまだ沢山時間がありますからね」

コレ、なんて言う地獄だ？戦場よりも救いがないような気がする。

三十分の辛抱だ、俺。耐えろ。耐えろ。

結局三十分経つまで生き地獄を味わされたが、なんとか生存することが出来た。これぞ忍耐力つてやつだな。

今日の勇者部（と言うらしい）は解散となり、俺達はひなたに案内された家でテーブルを囲んでいた。

「今日はいいお肉が届いたので今日は無礼講です」

「うおー！」

タマがいつもよりハイテンションだな。その気持ちよくわかる。

次々に下味をつけた肉が続々と焼かれていく。正直言つて、匂いだけで米が進む。



「焼き肉なんていつ振りだろ？」

「久しくやっていかなかったな。だいたい四年振りぐらいか？」

「仕方ないでしょ。領土を失った分飼育スペースも狭くなるものよ」

「若千千景もテンションが上がってんな。これがお肉パワーってやつか。」

焼き肉か。確かに初めて見る食い方だな。美味しい海鮮料理は旅館で食べたことはあるが、肉はなあ。

「300年もあれば、ここまで復旧出来るんですね」

「そりゃあな。逆に同じ状態なら命の賭け損ってヤツだ」

流石にちよつと大社に殴り込みに行かんといけなくなる。でも、貰った肉は美味しく頂きます。

ああ、美味しい。焼き肉のタレつけて食うだけで何故こうも美味しいのか。この食べ方を考えだ人は天才だな。間違いない。

「ん、どうした？焦げちまうぞ」

妙に肉の減りが遅いと思ったら、皆の手が動いていない。さっきまであんなはしやいでいたタマでさえも箸を止めている。

「土郎さんは死ぬのが怖くないんですか？」

「いや、別って感じだが」

死の恐怖は三回ぐらい感じたが、体が動かなくなる程の恐怖を持ったことはない。

腕チヨンパした時と、千景にやられそうになった時と、完成体と相對した時だな。

「いやまあ、感じるちや感じるが。こう、なんというか。次に繋げるなら命の賭け甲斐つてのがあるもんだ。事実、乃木園子って奴がいるしな」

俺がやったことに一切の間違いないってことの証明だな、アイツは。

「そして、肉が美味しい」

ほんつと命賭けて良かった。こんな美味しい肉が食えるなんてな。魚もいいが、やっぱ肉だ。

「あつ、土郎！タマのたぞ、ソレ！」

「焦がすよかいいだろ」

「ぐぬぬ 士郎のを寄越せ！」

「あつ、俺の！」

「許せん、俺の肉を取るとは、米を没収したるか!？」

「コラコラ、球子。お行儀がわ——」

「若葉のもらい！」

若葉がタマの餌食に、あ、タマが一瞬で吊るされた。

「タマっち、自業自得だよ」

「先輩をつけろー！」

南無三、タマの肉は俺が食つとくからな。安心して吊るされてくれ。

「はい、ぐんちゃん焼けたよ」

「え、ええ」

高嶋は動じないな。めっちゃ千景が助けを求めてるが無視しとこう。肉うめー

「電気消すぞ」

若葉の言葉と共に電気が落とされる。

まあ、まずは一つ突っ込んでおこう。なんで俺達は布団並べて寝んだ？俺は男なんだが、いや、もういい。さっさと寝よ。

「皆さん、明日はお引越しがあるので早く寝てくださいいね」

「はーい、おやすみなさーい」

「千景は夜更かしすんなよー」

「しないわよ。貴方こそ変な気は起こさないでね」

「起こすか。てか巻き込んだのはお前らだろうが」

リビングで寝ようとしたら強制で運び込まれたからな。被害者は俺の方だぞ。まあ、変な気を起こさないうちに寝ねえと

瞼を閉じ、羊を数える。  
羊が一匹、羊が二匹、羊が三匹

うっ、  
右腕に重みが

―  
。

## 花結いのきらめき【12】

引越しが恙無く終わり、翌日から俺達は讃州中学に通うことになった。俺と千景は三年、杏以外が二年となっている。

転校生挨拶で騒がれたが、今の所は問題ない。勇者部部長と千景がいるし、なんとかなるかあ、と思いつつクラスに馴染んどいた。ちなみに部活は強制で勇者部所属だ。

そんなこんな放課後となり、俺と千景は風に案内され、部室である家庭科準備室に向かっている。

「アンタ、義手とかつけないの？」

「義手か。アレ、戦闘の時に邪魔だからな。神経通るヤツが出来たらつけるかもだ」

「見た目だけのもつければ、人目は避けれると思うのだけれど？」

「人目はそこまで気にならねえよ」

見てんな、で終わりだからな。そこに不快感はないから、然程日常生活に支障はない。

「堂々としてるわね。あつ、もしかして西暦のリーダーってアンタ？」

「いや、若葉だ」

「あゝ、西暦にもシャルみたいのがいたのね」

あのカール大帝と同じ名前した勇者か。まあ、顔からは何を考えるかさっぱりだからなんとも言えないな。

堅物かと思えば、小学生組と一緒にタマの話聞いてたからな。一昨日で他の奴らのある程度の人間性を把握したが、アイツだけはわからない。まっ、悪い奴ではないことはわかる。

「結局、アレは誰なの？」

「まあ、シャルは秘密にしていること多いものねえ。まっ、悪い奴ではないことは確かよ。悩んだらシャルに相談しなさい。大抵のことは解決してくれるわよ」

悩んだら相談。どっかで聞いたことがあるフレーズだな。なん

だっけな。あつ。

「それが勇者部五箇条ってヤツだな？」

「そうゆうこと」

そんな会話をしていると部室に着いた。風を先頭に入室する。中に入ると、既に俺達以外は揃っている様子だ。

「——どっちの友奈でしょー？」

思わず口をポカンと開けた俺は悪くないと思うんだ。

「右が——」

「千景、ここは黙っておこう」

「仕方ないわね」

くそつ、高嶋のことならお任せの千景が抜けた俺は一体どうすれば髪飾りが違った筈だ。それで——

「髪飾りは外してますよ、士郎さん」

「ぐうっ」

ここは落ち着くんだ、俺。落ち着いてよく見ればどっちが高嶋か結城かわかる。わかる。わかるわけないだろ！

「左が高嶋か？」

「左は結城。友奈でしたー！」

「士郎くん」

「すまん、高嶋っ！」

高嶋の瞳のハイライトが消えたため即座に謝罪する。俺には人を見分ける程の目は搭載されていないんだ。

「なに馬鹿なことしてんのよ」

「あら、そう言う夏凜はわかつたの？」

「もちろんでしょ。髪が跳ねでないのが友奈よ」

それか——全くの盲点だった。髪型も同じかと思わせての癖毛が違うのか。というか本人達ですら知らなかったみたいだな。

「にぼっしーばゆーゆのことよく見てるからね」

「み、見てないわよ」

「夏凜ちゃん」

にぼっしーとはなんだ？三好 夏凜をどう約したらにぼっしーに

なるのか。

「風先輩、そろそろ依頼の話を」

「そうだったわ。須美はしっかりしてるわねえ」

「流石、須美ちゃんね」

自分自身を褒めながら撫でるって、どういう心境なのだろうか。

「止めてください」

「東郷、今の子は撫でるではなく飴を上げるのが効果的だ」

「あら、そうだったの。ごめんなさいね、須美ちゃん。はい、飴ちゃんよ」

「いりません」

あの真顔から飴取り出すの面白いな。顔が整っているから余計におもしろえ。

この後、シャルから飴を受け取っている須美を園子が目撃したらしい。

「ちよいちよい脱線しすぎ。話始めるわよ、てことで樹」

「はい、どうぞ」

「ありがとなん？」

部長の妹である樹からプリントを猫の写真だな、コレ。どういことだ？

「今日は迷子、じゃくて迷い猫の搜索よ。それじゃ、適当に別れて始めましよ」

へえ、これが勇者部か。まあ、いいもんだな。正に勇者っていうもんだ。疎外感を覚える程にな。

あの後適当にバラバラに別れた結果俺は高嶋と猫探しをすることになった。千景に睨まれたが、俺は元気です。

「こつちかなー？」

「ん、いねえな」

かれこれ二十分程探しているが猫のねすらも見つからない。野良猫などはいないのだろうか。

スマホの着信音が聞こえた。

「あ、シャルくんが見つけたんだって」

「よし、それじゃ帰るか」

踵を返し、学校へと帰ろうとするが左の裾を掴まれる。

「ねえねえ、ちよつと寄ってかない？」

高嶋へ振り返り、指差す方へ目を向ける。どうやら、カフェに寄って行きたいようだ。

「あちいしな。いいぜ」

いい休憩になるだろ。財布は持ってきてるし、なんとかなる。最悪大赦につける。

カフェに入ると店員によって窓際の席に案内された。周りを見るとほとんどがカップルで俺は居心地が悪いが、高嶋はうつきうつきな顔でメニュー表を見ている。

「なに頼む？」

「そうだな。このチョコアイスにするか」

「わあ、美味しそうだね。私は抹茶アイスにしようかな。すいませーん！」

呼び鈴あるのにな。高嶋らしいといふかなんというか。

「これとこれください」

「はい、わかりました。」

さて、後は待つだけだな。この時間はなにを話すべきか。

「士郎くんと二人つきりは初めてだね」

「ん、ああ、確かにそうだな」  
こうやって高嶋と二人つきりつてのは初だな。だいたい千景か千景か千景がいたもんな。その他もいるけど

「士郎くんってもしかして私達にあんまり関心ない？」

「関心、関心ねえ。ある方だと思うぜ。お前らは危なっかしいからな」  
「士郎くんこそ」

「たまに肝が冷えることしでかすからな。全力で走らないと間に合わないときが何度あったことか。にしてもなんでこんな話を」

「まさか、高嶋・間違ったの怒ってる？」

「いや、全然怒ってないよ？」

「あゝ、これは内心ブチ切れてるヤツですね。高嶋を怒らせる程あの間違いは罪が大きかったようだ。見や誤ったな。」

「ご注文のチョコアイスと抹茶アイスになります」

「ありがとうございます」

「チョコは俺です」

「思ったより早いご到着だな。ちよつと高嶋がご機嫌斜めだったから丁度いい。なんとかこれで良くなってくれると嬉しいんだが。」

「んっ、美味しいね」

「音符がついてねえ。結構ガチで切れてるな、こりあ。どうしたもんか。直接聞く他なさそうだ。」

「なあ、高嶋。なにしたら俺は許されるんだ？」

「んゝつとあつ、そうだ。これから結城ちゃんがない所じや前みたいだに友奈って呼んで欲しいな」

「わかった。それで満足ならそうするよ」

「結構軽い罰で済んだな。やっぱり、友奈は友奈だった。」

高嶋と御影がアイスを食べてる時の厨房では、なにやらゴタついている様子だ。主に調理担当と接客担当の者だが。

「ねえねえ村正さん、あのそっくりな子は弟さん!?話しかけていいかなー!」

「ただのそっくりさんだ、つってんだろ!客への迷惑行為はご法度だろうがよー!」



チョコレート、クリーム、フルーツを細きらびやかに盛り付けながらこの店一番人気のパフェを作っていく。尚、マスクを付けているため唾が飛ぶ心配はない。

「あの子彼女さんかな！」

「テメエは黙って配膳しとけ！ほれ、二番席だ！」

「はくい」

「つたく」

一人溜め息をつきながら、次のオーダーを確認し作業に着手する。

この男、腕前がそこらのパティシエより良いが故に本来の二倍の給料で雇われている。その結果、このカフェはスイーツ大好きな人々にとって最高の場だ。テレビ取材は昨日行われた。

誰も反応していないということはそういうことだろう。その時、女子力先輩はうどんを食べてたとかなんとか。

## 手の鳴る方へ【蛇足】

12月24日。所謂クリスマススイブというヤツだ。ちなみに俺が戻ってきた日の翌日の出来事である。

ということで俺は大赦からの招集命令を無視し、クリスマスを存分に楽しんでいるのだが

「ん〜♪」

「友奈ちゃん、ほっぺたにふへ、ふへへ〜」

「やっぱ、チキンは最高ね！」

「それにしてもアンタはがつつき過ぎよ」

「お姉ちゃん、お行儀が悪いよ？」

「なあなあ、園子。そのつけ髭つけながらって食べ難くないか？」

「ほっほっほっ。慣れると結構いけるんよ」

事の始まりをまず思い出す。

朝起きて、クリスマス気分染まろうとサンタさんの帽子被った所まではよかった。問題はそっからだ。

最初に犬吠埼姉妹が食材を結構な量持ってきた。そして次にお隣さん二人が大きな白い袋を担いで持ってきた。もう次はないと思ったら、夏凜がフライドチキン用の鶏肉を持ってきた。以上だ。

そんな謎を抱えつつ、一人台所に立ち調理していく。いつもの1.5倍程の量ならば、例え八人であったとしても全員お腹一杯に出来るだろう。

そうフードファイターバりに食べる風先輩から目を逸しながら思う。

「風せんぱーいっ?!俺の分残しといってくれよー！」

締めのおニオンスープのために玉ねぎを繊維を切るように薄切りにしながら叫ぶ。

うう。悲しみが深すぎて涙が。

「安心しなさい。アンタの分は私が確保してるわ」

「ナイスっ、にぼっしー！」

顔面目掛けて投げられたフォークをキャッチし、流しに投げ込みながらスープの味を調整していく。

ふむふむ・ちよい鶏ガラの素足すか。溶け込むように煮込んでまたペロリ・よし。

「ぎーん、持って行ってくれー！」

「呼ばれて参上！おおー、オニオンスープじゃん！」

「ご満悦そうだなにより。まあ、初めて作るからレシピ通りだけだな。その分味は保証する。」

長い戦闘を終え、ようやく俺はテーブルを囲むことが出来た。手始めにフライドチキンに齧りつく。

「んつま、んつま」

やはり肉・いい感じに味つけて焼いただけというのにここまで美味しいとは・最高だな！

そんなことを思いつつ食べ進めていると、俺の腕と足の間を掻い潜りながら園子が乱入してきた。

「あゝ」

「？」

口を開けて待機している園子を見て、疑問符を浮かべながらチキンを咀嚼する。

なんだっけな・あ、アレか。

「んっ」

右手に持っているフライドチキンを園子の口に運ぶ。

「〜♪」

頬を落としながら頬張っていく。余程、気に入っているようだ。

にしてと園子にこうするのも久し振りだな。結局村正の刀は手  
に入れれず、か。

「雰囲気変わっても相変わらずね」

「シャルル君の威厳、なくなりましたね」

「やっぱり、こつちの方が楽だな。それに今は威厳とか堅つくるしい  
の必要ないだろ？」

霊基出力は軒並み下がったが、この世界に脅威は存在しない。もう  
俺と皆が拳を握らなくてもどうにかなる。

「威厳、元からなくない？」

「ぐふう——ッ!!」

「わあ——夏凜ちゃん、そこは隠さなきゃ!」

「うぐ、うぐぐ、っ!」

友奈、それは援護じゃなくて更に傷を抉る行為なんだぜ? 知っ  
たか?

「だ、大丈夫ですよ、シャル先輩。ちゃんと威厳ありましたから  
ちよつと」

「カハ・ッ!」

「シャル——!!」

もう無理、座に還る。

「カツコ良かったよ、シャル」

「——ふっかーっ!」

カツコ良かったなら良しっ! 威厳がなくてもカツコ良ければ、他の  
ことは関係なしだからな。でもスーパーヒーロー着地は痛かった。

「うっさいのが増えた」

「アンタもそのうち慣れるわよ」

そういや、夏凜とこの姿で過ごしたのは数週間程度だったな。そう  
考えると怒涛の日々だったような気がする。

「さてと、そろそろお開きにするか」

サンタの帽子を脱ぎ、頭の上で寝ていたクロをそつとソファァーに降  
ろす。

「見ないと思ったら、そんな所にいたとは」

「料理中もいたんですね。」

「流石の平静力ね」

俺のバランス力に一点の淀みもない。頭に仔猫一匹乗っけても楽勝、楽勝。

そんな事を思いつつ、せつせと食器を流しに運び銀へと託す。骨は使う予定がないためゴミ箱へボツシユート。

「皆は暗くなる前に帰れよ〜」

未だぐで〜つとして居る皆にそう言うが、何言ってんのコイツ、というような目が俺に向けられる。

「あれ、そのちゃんが今日はお泊まり会だつて。」

「おおつと、園子さん？俺、一言もそんなこと聞いてないんですが？」

「今日はお泊まり会だよ〜」

「今言われてもなあ。」

このにへへとして居る顔。わざと俺に言わなかったな。どうやら、家主は俺から園子に変わつてたようだ。

「よおし、俺は実家に帰るから皆で仲良く——」

即座に方向転換して部屋を出ようとするも、もの凄い力で肩を掴まれる。

「逃げられないぞ、シャル。観念しな？」

おつと、銀の後ろで縄を構えてる人がいるな。言わずもがな東郷ですな、ありがとうございます(？)

「ハイ、カンネンシマス」

まあ、そんなこんなで完全に日が暮れ、お風呂の時間帯となった。適当にスパスパ入ってけー、と指示出した俺は自分の部屋で東郷、風先輩と目の前にある白い袋を覗き込んでいた。

「ここがシャルル君の部屋。叡智な本はないのね」

「すつげー。なんの躊躇もなしにベットの下の覗くなんてな」

「アンタ、服の種類少なすぎじゃない？」

「なに勝手にクローゼット漁ってんだ？」

もうやだこの人達。デリカシーってのがないわ。というより話から脱線しすぎだろ。

「ほら、白い袋もといクリスマスプレゼントをどうするか決めるぞ」

この白い袋は友奈と東郷が担いできた物だ。友奈はただ東郷の手伝いをしていたため中身は知られていない。

あの子にはもう少し警戒心を持って欲しいですね。

「樹のはしつかり私が用意してるわよ」

「銀と夏凜のは今朝親御さんから届いたぞ」

「友奈ちゃんのは私が確保してます」

樹、銀、友奈、夏凜。つまりあとないのは園子だけだな。サンチヨでもあげようか。

「そのつちが冷蔵庫に貼っていた紙がこれです」

風先輩と共に東郷が出した一枚の紙を見る。そこには『シャル』と書かれている。

「アンタがご所望のようね」

「俺はプレゼントじゃないからな。東郷、園子に代案を聞いてきてくれ」

「了解しました」

ビシッと敬礼をした後に部屋を出ていき、園子の元へと向かって行った。

「やっぱ、園子は奇想天外ね」

「風先輩、そんな難しい言葉知ってたんですね」

「はっ倒すわよ」

皆が寝静まった11時。俺達三人はサンタの格好をし、リビングで眠っている皆のどこに来ていた。

「はあ、はあ・友奈ちゃん」

「シャル、その馬鹿を抑えてなさい」

「もう抑えています」

とりあえず開始早々東郷を羽交い締めにし、友奈を守る。例え、いちニランク下がったとしても一般人程度の筋力しか持たない東郷は抑えられる。

「すう——、すう——」

「ぐうっ、我が妹ながら天使」

「アンタは妹離れしろ？」

悶えながらもそつと起こさないように樹の枕元に包装された一つの箱を置く。

「ほいっと、銀。続けざまに夏凜、っと」

はいはいハッピークリスマス、と。良い夢見といってくれよ？そして寝相が悪いな。布団はしつかり被りましょう。

「はい、園子」

あの後急いで作ったシャルルマーニュ人形で許してくれ。モデルは俺ではなく、本家のシャルルマーニュだぞ？流石に自分をモデルにするとか羞恥心で死んでしまう。

「よしっ、これで終わりだな」

全員分しつかり置いたのを確認してから、リビングから出る。ちなみに、友奈の分は落ち着いた東郷が置きました。

「それじゃ、アタシ達も寝るとしましょうか」

「そうですね。夜更かしはお肌の敵ですから」

「おう、そうだな。ささっと寝ろよ」

二人から別れ、自分の部屋に入る。俺はもう一仕事があるため寝ることは出来ない。とりあえず、風先輩と東郷が寝るのを待つ。

あれから三十分。もう寝てると確信し、白い袋を担ぎ部屋を出る。俺のサンタ業はこれで最後だ。

「つたく、神樹様ってのは変な所で律儀だな」

悪態をつきながらシャルルマーニュが眠っている部屋に不法侵入する。

「ほれ、村正印の一刀だ。崇め奉れ」

鞘に収まった刀を見つけやすいように机へと置く。その役目を果たした瞬間体が粒子へと散っていく。

「頑張った報酬だ。遠慮なく貰つとけよ」



## 託された者達のお話【閑話】

大社が大赦へ、西暦が神世紀へと移り変わり早一ヶ月。御影 士郎という勇者によって成された大偉業により、人類は一先ずの平穩を得た。

時期は冬。時間帯は早朝。冬でも特に冷える時間帯となっている。そんな環境だと言うのに、汗水流しながらも木刀を振るう者がいる。  
「っー！」

風雲児、もとい西暦勇者のリーダー。

今日も今日とて袴を着こなし、鍛錬を熟す。これは彼女の日課だ。朝晩欠かさずやっているというのだから凄いなものだ。

ここで間違わないで欲しいのは、この行動は決して強迫観念からきているものではない。そこだけは覚えて置いてほしい。

余談だが、こつから五年後ぐらいに極地へ一時的にはあるが両足突っ込むことに成功している。そして、その十年後にようやく究極の一へと至った。

「若葉ちゃん、ご飯ですよー！」

「っ、もうそんな時間か。わかった、すぐ行く」

ベンチに置いていたタオルで汗を拭い、自室へと歩いていく。ちなみに鍛錬場所は決まって寮の敷居内にある小さな庭だ。

時刻は朝七時。いつも通りの時間に出るならば、後三十分後には家を出る準備をしなければいけない。まあ、それでも朝食をしっかりと食べる時間は沢山ある。

「今日も美味しいぞ、ひなた」

「ふふっ。それは良かったです」

これは中学三年がする会話なのか。完全に熟年夫婦のそれだな。そんな疑問を抱いていると、ひなたが箸を置き一呼吸置く。

「若葉ちゃん。私、妊娠したんです」

「ふむ、それはめで、た・はあ!?!」

ん——ッ!!

おっと、失礼。第三者が心臓の急停止で死んだようだ。ここからは代わって私がしよう。

この時ひなたは15歳。確かに妊娠出来る体の成長具合ではある。ただしそれは法を無視した場合だ。15歳を妊娠させるなんて誹謗中傷待ったなし、というもの。

「そつ、それで、相手はは、だ、誰なんだ?」

幼少期からの親友であるひなたの妊娠には流石の風雲児も動揺が隠せない。飲もうと持っていた味噌汁がお椀の中で波を立てている。

「土郎さんですっ♪」

「ブフー!」

口に含んでいた味噌汁を噴水の如く吹き出す。

幼馴染が妊娠し、その相手が故人となれば味噌汁ぐらい吹き出す。なんなら、胃液も出してしまおうだろう。

「そ、そうか。それで出産は何ヶ月後なんだ?」

「先生の話ではだいたい七ヶ月後らしいです」

「九月ぐらいか」

胃が絞まる思いをしつつ、先を思案する。この七ヶ月で備える物を備えなければいけない。

流石西暦勇者のリーダー。本来なら、慌てふためくだろうが冷静沈着そのもの。まあ、足がめつちや震えているが

「「ええ!!」」

丸亀城の一室で驚嘆の声が響く。ただの今朝の繰り返しだ。これは誰であつても驚く。

「貴方達つて、そういう関係だつたの?」

「いえ、違いますよ」

この瞬間、全員の頭に疑問符が浮かんだ。そういう関係ではないのに、エツツツな事をする関係。いや、考えるのはよそう。

「くそつ、やつぱ胸かよお!!」

「ちよつ、タマつち先輩落ち着いて!」

胸の大きさは関係ないような気がするが、士郎は言われて初めて、でさえ、とか言つてそうだな。そういう奴だよ、アイツは。

「ヒナちゃん。私達にそう言つたつてことは産むんだよね?」

「命にかえても産みます」

そう言うひなたからは並々ならぬ気迫を感じた。

ここから運命の歯車が一度正常に戻る。そうは言つてもイレギュラーの介入によつて正史から反れまくっているのだが、まあ、三人目のイレギュラーが来るまでは正常に動くとも。

さて、これからについてはざっくり説明しておこう。

千景と杏は勇者システム改良の研究に携わり、若葉と友奈は次世代の育成担当、球子は警備員になっている。ちなみに大赦の統制は三年かかった。

イレギュラー、とまではいかないが多くの人の運命を狂わせるだろう。まあ、一先ず誕生おめでとう。

神世紀2年10月20日。多くの人々に囲まれて産声を上げた。

名前は勇斗。上里 勇斗。変な運命だよ、ほんとに。

上里家最初で最後の勇者適正を持った元気な男の子。彼同様金色の瞳を輝かせる。その時居合わせた勇者達は悟った。士郎似だ、この子。

ちなみに育児はひなた一人じゃキツイだろう、という事になり皆で面倒を見ることになった。その際、球子が一番可愛がってたのは内緒。

そんなこんなで五年が経過した。その間すくすくと育ち平均より少し高い程度には背も伸びた。あ、コラ、球子は隣に立ってドヤ顔しない。八年後ぐらいには抜かされんだからな。

「お邪魔するぞ」

「ほら、勇斗。若葉ちゃん来ましたよ」

若葉の愛刀である生太刀を帯刀し、大赦内にあるひなたの自室を訪れる。もちろん刀身が出ないように紐で固定している。

「あ、わかばさんだあ！」

ひなたの膝の上から立ち上がり、トテトテと自身へと歩いてくる姿に思わず頬を緩ませる。これが大赦のマスコットの力ですか。

この時代の神官は神世紀300年の神官と比べ物にならない程しっかり仕事を熟している。その激務の中、勇斗へ会うために度々ここを訪れる。

素顔は仮面の下だが、ニコニコしているのは雰囲気からでもわかる程に絆されている。一種の癒しとなってるようだ。

まあ、たまに自身の娘を紹介しようとする馬鹿者もいるが、全てひなたによって弾かれている。

「今日も勇斗は元気だな」

「うん。さつきおひるねしたんだ」

「そうかそうか。っと、いかんいかん。今日は別の要件で来たんだっ  
た」

「？」

「勇斗。お母さん、今から大事が話をするからちよつとの間一人で遊  
んどける？」

「だいじな、はなし。うん、わかった」

なにも理解していないが、空気でわかる。これは自分が関わってはいけない事だと。五歳児とは思えない、察す能力だな。

若葉から離れ、トテトテと部屋の隅にある積み木で一人時間を潰す。

「ひなた、まずはコレを見てくれ」

そう言い、一枚のチラシのような紙を机へと出す。その紙にはデカデカと『天の神を崇め奉えよ』と書かれている。

「天の神を主とした宗教ですか。廃止するよう警告しましょう。」

「警告で終わればいいが。」

この時代では様々な宗教が設立され、多くの人々が救いを求めた。ここだけ見ればよく歴史であることだ。しかし、その多くは過激な抗争の根本となることかしばしばだ。

それじゃあ、事の顛末だけを語ろう。もちろん12・24大赦襲撃事件についてだ。

大赦の神官含める役員83名が残職。この数は身元が判明した者達を数えた人数だ。不明者も含めれば優に100は超えるだろう。

襲撃者は全て乃木 若葉によって斬殺。約200名の首無し死体がそこら中に転がる地獄絵図となり果てる。

その当時大赦に滞在していた西暦勇者達と上里 ひなたは生存。勇斗は近くにいた神官が庇い、少しの火傷を喰らいはしたが無事生存した。

この事件を機に大赦本部を剣山へと移し、神樹様を祀る宗教への入信を義務付けた。

更に時が経ち、勇斗が22歳。千景以外が38歳となった。時の流れは本当に一瞬だな。

勇斗は何事もなく大学を卒業し、来月からは讃州中学で社会の教師として勤務することが決定している。

教師を志望した理由・勇斗を庇い残職した神官が元は教師だったとよく話していたからだろうか。本当の理由は勇斗だけが知る。

よし、上里。勇斗について語るのはこれまでにしよう。次に語るは黒耀。勇斗。おっと、世界から排斥された者じゃないぞ？ただ結婚で苗字が変わっただけだ。

職場で出会った黒耀。友奈という青い髪と赤い瞳が特徴的な女性に惹かれ、そのまま付き合い結婚している。ひなたへご挨拶しに行つた際には、一瞬だけひなたが思考停止していた。

友奈。この人もまた友奈科、天への逆手のようだ。いや、どんな運命だよ。仕組まれているかのような流れだな。

これで語ることも識ることもない。黒耀。勇斗についてはもう金輪際俺からはなにも語るまい。だが、黒耀家については語っておこう。

黒耀家、当主は不在。ただ大赦に名があるだけのお家柄だ。ただしそれは、勇斗の孫の代で変わる。それと同時に大赦の上層部が腐り落ちていった。

ちなみに上里家は勇斗と黒耀。友奈の子である兄妹の妹の方が引き継いでいる。ばつちし巫女適正がある。

以上！終わりっ！

焼け落ちたテープレコーダーが回る音だ。

逃げ惑う人々。時限爆弾みたいな物が床に転がる音。それを斬る若葉さん。動けない俺。

古い記憶が深層心理から蘇る。

人の手足がゴミのようにそこら中に転がっている。瓦礫を掘り返してみれば、たちまちに焦げた人の死体がボロボロと出てくる。そんな光景を朦朧とした意識で眺めていた記憶。

「ははっ。」

気づいたら俺は爆弾に覆い被さっていた。自分でも訳が分からず、変な笑い声が喉底から出た。

「勇斗——ッ!!」

母さんが怒鳴ってる。これまでの人生で初めて聞いたかもしれない。

ここで死んだら怒るだろうか。悲しんでくれるだろうか。間違はなく怒られるだろうなあ。でもまっ、俺は繋がられた命だ。そして、俺も次に繋がれないといけないよな。

——ナニかが弾けとんだ

## 花結いのきらめき【13】

猫探しの翌日。平日ということもあり、普段通り授業を受けていたのだが、敵はそんなこと気にせず襲撃してくる。

樹海の根に並び立ち、こちらへ近づいてきている星屑を遠目で見る。

「今日も多いですね。」

「この量を以前のスペックで、と考えるとゾツとするな。」

「完成体来るよかいいだろ。あんな硬え奴二度と相手したくねえよ」

西暦での戦闘風景は映像で見たことはあるが、勇者システムは現在のスペックとは雲泥の差だった。精霊バリアなし、武器は自由自在に変形しない。

例えるならば f g o 初期のようなものだろうか。あれは本当に低レアしかいなかった。星五なんて奇跡みたいなもんだ。

「それでは、今回も俺が一掃しようか」

「ちやちやつとブチかましてやんなさい」

もうこれ、完全に作業だな。まあ、これが一番安全だから文句はないんだが、周りの成長を潰してするような気がしてしまう。

そんなこと思いつつ、どかーん。

「やっぱり、シャルル君はいつ見ても綺麗ね」

「それじゃあ、シャルが綺麗ってことになるわよ?」

「? そういう意味よ?」

なんか後ろで俺にダメーシ来るような話してるな? 綺麗じゃなくてカッコイイでおなじやす。

「これで星屑共は、げっ、完成体来やがった」

煙の中から登場とは、水瓶座、中々わかっているな。でも、見分けるのに時間かかるから出来るだけしてほしくない。

「見たことない形のやつだな。よおし、ここはタマが、つて、あれ?」

なにかを投げるような動作をしたものの何も飛ばさず、自身の腕を見



入る。

「あつ、そういうえば以前の戦闘で盾が砕け散ってたな。この場合どうすんだ？素手か？いや、そんな訳ないよな？」

「そういうやそうだったな。ほれ、タマ。腕の良い鍛冶師が治しといてくれたぞ」

「よしてきた！そーちやくつー！」

体内から取り出された盾を無造作に球子へと投げる。それを危なげなくキャッチし、腕へと装着。

腕の良い鍛冶師。村正か？こういう形の疑似サトヴアントは初めて見るな。てことは毎回取り出してる刀は村正製。一本ぐらい盗んでもバレんか。

「これが本物の四次元ポケットか」

「いや、これ多分違う感じのヤツじゃないか？」

「人間技ではないわね」

これについては後でじっくり考察するとして、まずはバーテックスを倒すか。ついでに俺ではない俺も。

「どうにかしてここから倒せないかな？」

「ここから、ですか？」

高嶋の言いたいことはわかる。

前に出れば、奴から奇襲される可能性が出てくる。ならば、ここからバーテックスを倒すのが安全ではないか、そういう考えだろう。だが、あのバーテックスには

「あのバーテックスは水球によって遠距離攻撃の勢いを殺します。ここから倒すとするなら、水球ごと貫く程の一撃を放たなければ出来ません」

「あの水の味は最初ソーダ味で途中からウーロン茶になりましたっ！」

「以前戦い知ることが出来た情報を知らない西暦組へと伝える。食レポがあったような気がするが、聞き間違いだらう。」

「よし、それなら俺が斬ってやらあ」

「斬る？この距離から斬るって、どんだけ長い剣使うのよ？」

「まあ、夏凜。ここは信じて待つてくれ」

士郎の手に刀が握られ、それを根へと刺す。なにかの準備をするように何度も繰り返し根へと刺していく。

「もう帰る準備していいかしら？」

「そうですね。もう帰る準備しときましょう」

「ふむ・ならば、俺も帰る支度をするでしょう」

「ちよ、アンタら。まだ終わってないわよ？」

この感じ、西暦組が見たことある技か。なら、その破壊力も知っている筈。ここは帰る支度をするのが最善だな。

「破却、——収束」

根に刺さっていた刀達がその言葉と共に粒子となり、御影の手で一本の刀と化す。

引き込まれるような刀身。そして、何もかも斬るであろう鋭さ。正に究極の一と呼ぶに相応しい。

「うお、らあああ!!」

振るう、たつたそれだけの動作で斬撃が生じ、障害となるもの全てを両断する。バーテックスを通過しても尚、勢いは止まらず彼方へと消えていった。これには西暦組以外言葉が出ない。

「疑似宝具か」

「ほうぐ、なんだそりや？」

「いや、知らないなら良い」

無意識か、よくこの技に辿り着いたな。てか宝具を知らないってことは魔術的知識ゼロ。つまり魔力放出なしでこの身体能力か。ばけもんだな。

「また滅茶苦茶な奴が増えたな。いや、頼もしい限りんだけどさ」

「男性勇者にはなにかあるのかしら？」

「腕力、かな？」

「友奈さん、それは関係ないんじゃない？」

まあ、友奈の言う通り身体能力から違うだろうな。俺の場合はいくつかバフを盛ってはいるが、御影はこれが素の身体能力だ。存在が置換されているとは言え、流石にこれは予想外。

「さて、第二波だ。どう迎え撃つ？」

大量の星屑十射手座、蟹座、蠍座の仲良し三人組がのそのそとこちらに近づいてきている。

「蠍、蠍ねえ。確かに毒はある。厄介極まりねえな」

「蠍はタマが殺る。」

「いや、球子。蠍は私が斬る」

「わあ、ご先祖様やる気だ〜」

「いや、あれはやる気というより殺る気」

急に殺意が高まった西暦組は一先ず触れずに、作戦を練る。

俺と御影抜いて六、三、五だな。これをいい感じに別けるには。戦力的にまだシステムに慣れてない西暦に神樹館入れて、神世紀組はそのままでもいいな。

「——いや、ここで一度試すか」

「試す、ってなにをだ？」

それはもちろん——

「千変万化の我が剣を此処に」

ジュワユーズに輝きが灯る。全員の視線を釘付けにする程の眩い光と共に魔力が剣へと奔っていく。

「無限の色彩よ。我が王剣よ。」

十二本のジュワユーズが加算。三対、計六の翼を羽ばたかせる。ここまででは問題なし。

「全て——」

矛先はバーテックス共に。制御権に異常なく、正常に動いている。

「全て、この輝きに屈せよ——ッ！」

その名は——

蟹座の盾が障害として立ち塞がる。だが、その程度で止まる王勇は持ち合わせていない。

「——王勇を示せ、遍く世を巡る十二の輝剣！」

世界が轟音と共に光に包まれる。

「ふう、終わった終わったあ。」

消滅していくバーテックス共を眺めながら一息つく。そして、体の状態も確認する。どうやらこちらの世界でも一回は一回のようだ。

「降りよ、大天狗——ッ！」

「きやつ！」

「若葉さん、なにをっ!？」

突風が吹き荒れる。なにかに引っ張られるように風が俺を過ぎていく。

西暦時代の勇者が使用したとされる切り札。精霊を体内と入れ爆発的な火力を手に入れる。代償はあるが、この世界でならなしで行えるだろう。

「ハァー！」

「チツ。」

切り札によって底上げされた飛翔力を用いた圧倒的な速度。一呼吸で御影との距離を縮め、その勢いのまま太刀を振るう。それを顔を顰めながら防ぐ。

「輪入道！薙ぎ払え！」

「力を貸して、酒吞童子——ッ！」

そこへ元の大きさの倍々になった火車のような盾で追撃を入れる。今度は防がれることはなく直撃し、火車ごと樹海の奥へと——途中で抜けたのが見えた。

西暦勇者達はトドメを刺すためか、その人影へと駆けて行った。

「仲間割れ!？」

「待て、風先輩。コレはなんかありそうな感じだ」

「なんかかってなに——」

風先輩の言葉を遮るように樹海の根へと何かが叩きつけられる。段々と散っていた木片が落ちていき、その全貌が見えてきた。

叩きつけられた人物は――

「いったあ、これが四国の大英雄。人間じゃないなあ。よつと、と

」

「三人目!」

少しバランスを崩しながらもなんとか立ち、吹っ飛んできた方向を睨む。奇しくもその顔は友奈にそっくりだった。

「――火色舞うよ。そうカツコつけた割には弱っちいな。ちゃんと飯食ってんのか?」

「貴方基準なら全員弱いでしょ。西暦勇者だって貴方にとっては足枷だよな?」

「侮辱か?侮辱だな。楽に死んでいけよ」

・煽りには煽り。侮辱には腹の底から湧き上がる怒りを。

・てか御影じゃん!? てことは、さっきいたのは・ああ、なるほど。全  
て把握した。さて、次にすることは・なんだ? どうすべきだ、コレ。

「私とわっしーで土郎先輩を援護しますっ!」

「! よおし!俺達は御影のそっくりさんぶつ倒すぞ!」

切り札で手加減なしの状態だが、奴の戦い方は面倒臭い。弱点を突かれたら誰だつて負ける可能性が出てくる。

ジュワユーズを目映きは閃光の魔盾にし、走り出す。友奈そっくりな奴は御影がなんとかしてくれるだろう。まあ、絶対に全滅はありえない。

花結いのきらめき【14】

誇りを侮辱されれば、誰だってキレる。あのひなたでさえもキレるだろう。故に、俺は今からコイツを殺す。

「自己紹介の時間ぐらいはくれてやるよ。名乗れ」

「赤嶺 友奈。それじゃ——、っ!」

言葉を遮るように殴る。ガードの上からではあったが、防御しきれず最初のように根へと叩きつけられる。

名前を名乗る時間はやった。だが、それ以上の保証はしていない。それにしても今の反応するか。戦い慣れているな。

「酷いなあ。乙女の顔を殴ろうとするなんて」

流石に今のは後ろで構えていた園子と鷺尾ですら、ちよつと引くレベルだ。

「へえ、今ので無傷なあ。驚きだ。造反神からなんか貰ってんのか？」

「うくん、どうなんだろう？試してみたら？」

「ああ、そうする」

次は素手ではなく刀を握り締め、大雑把に振るう。刀は砕け散ってしまったが、前方の根は軒並み消し飛んでしまう程の威力だ。

「こりやあタマげたな。タマだけにいや、そうじゃねえよな。どういう絡繰りしてんだ、この野郎」

「やあ？」

先程の一撃を受けても尚、微動だにせず立っている。見たところ外傷は一つもついていない。

「南無八幡・大菩薩っ！」

「——っ、うわっ」と

突如として放たれた矢を紙一重で回避する。

バーテックスならば、体勢を崩す程の一矢。それは人間であれば、即死を意味する。だが、赤嶺はそれ以上の一撃を喰らっても尚死ぬことはない勇者。それはつまり――

「勇者の攻撃であれば、喰らう。それがテメエの弱点か」

「そうだとしたら？」

「欠し振りに勇者システムを起動してやるよ」

纏っていた袴が粒子となり消え、制服姿となる。そしてその手に握られているのは御影。士郎が本来使うであろう勇者システム。

――シオンの花々が舞う。

「あ、駄目だこれ。それじゃあ、先に失礼するね」

シャルルマーニュに渡された勇者システムのような上辺のものではなく、正しく勇者が使うように設計されたシステム。どんなに人の醜さを見ようが、その清純たる心は侵されていない。

「――ふう、久々だがちゃんと起動したみたいだな。逃げられちゃったが」

戦装束はなんら変わらない。だが、その身に宿す神性は桁違いに増えている。まあ、それは草薙剣の影響もあるが。

「士郎先輩、ここはみんなの所に行きましょ？」

「ん、ああ、そうだな」

昂りまくった頭を冷やし、いつもの声のトーンに戻す。三歳年下の少女に諭される自分ではないけない。そう頭に叩き込み、スマホで示されている場所へと飛翔する。

時が少し遡り、輸入道の一撃によってぶっ飛ばされた御影そっくりさん。そこへ確実に仕留める為に放たれる斬撃。

「全てを、――斬るっ！」

大天狗による機動力をフルに使い熟し、縦横無尽に駆け回りあらゆる方位から斬撃を飛ばす。その時点で人間業ではない。

「これが切り札ってヤツか。まあまあ、って所だな」

先程までなかった左腕を出現させ、避け切れるもの以外を潰していく。射出した刀で、振るった刀で難なく弾いている。

「はああ」

「この冷気、は——!?!」

突如として漂ってきた冷気に気づいた時には遅かった。次の瞬間には氷像が出来上がり、身動一つ出来ない状態へと追い込まれる。

「みなさん、今ですっ!」

杏の合図によって全員構える。この一撃に全てを載せるような気迫を感じた。

??もこれは不味いと氷像からの脱出を図るが、少し揺れ動くのみで碎けることはない。

「一閃、——緋那太ーっ!」

「ぶっ潰せ!」

「首を、落す」

「勇者あ、パァアアンチツ!!」

若葉、千景、友奈による一斉攻撃防いだとしても時間差がある輸入道によって潰される。そもそも動けない。

——氷像が碎け散った。

霧が立ち込める中、音がした方向へ魔力放出（光）を発動しながら走る。これならば逸れる心配はない。

そして、ようやく霧がない場所へと出る。

「血が見たくない奴は目閉じとけ」

「これは」



思わず走り出しそうにしている結城を手で静止し、奴の状態を確認する。

「生きているのか死んでいるのかすら怪しい男が右腕を欠損し、並々ならぬ血を流しながら立っている。」

「過剰戦力じゃねえか、くそっ。無様晒してる俺にどんだけ警戒体勢敷いてんだ」

その目を見るにまだ闘志は消えていない。俺達は何も考えず攻撃すれば、ひと一人は持つてかれるだろう。それは何としても防ぎたい。その為の手段は一つ

「降参してくれねえか？」

負けを認めてくれるなら、これ以上の戦闘は避けられる。それに戦力も増えるし、一石二鳥。後は相手の出た方次第だが

「シャルルマーニュ、私は奴の降参など認めない」

鋭い眼光を動かさず、俺へとそう言い放つ。刀は鞘に収まっているもののその手は柄をいつでも抜けるように握っている。

「アンタ、それがどう言う意味かわかってんのか？」

「ああ、ここで必ず仕留める。奴には報いは受けてもらう」

その言葉は本気だった。そこに躊躇など存在せず、ただ抑え込むことの出来ない怒りだけがある。

「なにか勘違いしてるだろ、シャルルマーニュ。悪人は正義を語る奴らに淘汰される。それが世界の循環方法だとその身で。いや、お前には関係ない話だったな」

「ソレは、——ッ!？」

真意を問おうとするが、突如として根へ赤い物体が激突する。それに伴い、木片が飛び散り先程見えていた姿を捉えることが出来なくなった。

「決着は次に持ち越した。今度は停滞すんなよ」

「ぐっ——、待て！」

「いや、ここは諦めろ。時間切れだ」

視界が回復しないまま駆け出そうとする若葉を合流した御影が止める。渋々といった感じではあるが、足を止め樹海化が解けるのを待

っ。

——  
花卉が舞う。

花結いのきらめき【15】

放課後の勇者部部室。普段のように俺達は集合していたのだが、空気が重い。まあ、そんな中でも状況整理は大事、という事もあり御影が口を開く。

「ピカピカしてるのを見てたらリアット喰らってな。それで、リアット仕返して戻ってきた」

「赤嶺 友奈と名乗ってました」

「高嶋先輩に似てたよ」

新しい友奈科か、それにしても御影のリアット受けて耐えたって、精霊バリア碎けてそう。

「そして、なんでかは解らねえが勇者以外の攻撃は通じねえみたいだ。勇者システムを起動してるか否かだな」

「てことは、俺？」

「まあ、そうなるわね」

突然の規制——ッ!!

!?

なんでだ、俺はなんにも悪いことしてないってのに

「シャルルさんは、勇者システム使わないであれなんですか？」

「シャルの勇者システムはアタシが使ってるからなく」

「信じれないと思うけど、事実よ。飲み込みなさい」

「ピースっ！」

これがシャルルマーニュの霊基ってこった。どうだ、参ったか！

まあ、それも今じゃ出力がガタ落ちだけだな。

「お前もお前でそのテンションどうした？」

「カラコン変えた？」

「髪切り行ってきたのか？」

「う、うん。あの姿が王たるシャルルマーニュと言うなら、こっちは冒険者のシャルルマーニュ。てことになるんかな？」

「「「???」」」

どう説明すべきか。初っ端から魔術関連について説明しても変人だと思われるしなあ。困った困った。

「あれだよね。なんか凄い人に力貸して貰った、っていうのがあの姿なんよ」

「おつ、そうそう！いや、待て。なんで園子は把握してんの？」

「えへへ〜♪」

「流石、そのつちね」

「それだけで済ませれそうにないぞ、この領域は」

この内容はまだ誰にも説明してないんだけどな。園子に隠し事は無理そうだな。あと東郷も。

「ん〜。そうなった理由はだいたいわかった。だが、さつきまでの重く苦しい空気はなんだ？」

「敵である土郎さんそっくりさんを殺すか殺さないかで揉めた、ですよね？」

うおつと、ひなたさん。ド直球に爆弾落としてきますね。流石です。

「あ〜。まあ、手加減なしじゃ勝てそうにないしな。一応聞いとくが、言い出さずは誰だ？」

「私だ」

何を思ったかはわからないが、額に手を当て机に肘をつく。盛大に溜め息をつきながら、唸り声を小さく上げる。

「バーテックス感覚で殺す。とか、敵だから殺す。みてえなモンじゃねえよな〜」

「ああ、もちろん。奴には必ず報いを受けてもらう」

「そうか。やっぱり、お前は人殺しすんな。向いてねえよ」

「なに？」

待って、空気が最初の十倍ぐらい重くなったんだが？悪化してないか、これ。理由つけて逃げようかな。

「人を殺すのにそんな崇高な志はいらぬ。もつと言うなら邪魔だ」

「なら、何が必要なんだ」

「目障りだから。それなら、後腐れなく殺せる」

その言葉に全員が沈黙する。

コイツ、折れねえ、曲がらねえ奴だ。ここでどんな否定するようなことを言おうが、なんにも変わらない。

徐ろに席から立ち、部室を後にする。

「アイツ、頭おかしいんじゃない？」

「頭が可笑しいだけならどれだけ良かったか」

「あれで常識が備わってるのだから、余計質が悪いわ」

めっちゃ苦勞してそうだな。まあ、御影の言いたいことはわかる。若葉達の性格を考えると、殺人について一生引き摺ってそうだからな。それでも、あの言い方はちよつと

「士郎くん、たまにこういう所あるから。あつ、普段は優しいよ？」

「一と百しかないのが士郎だからな」

「人間誰しも突き詰め過ぎたら、ああなるんでしょうか」

「なるだろうな。余分なもの全て切り離したら自然にあなる」

そうなつてくると、何処ぞの赤い弓兵が出てくるな。アレは理想の果てだが、御影は理想を持つ前に現実に打ちのめされた感じか。

「アンタ達も苦勞してそうね」

「そちらも苦勞してるのか？」

「まあね。あの状態のシャルは次から次に問題事持ってくるわよ」

「あれは不可抗力だ!」

「六割はシャル先輩が首突っ込んでますよね？」

「そ、そうだったけな」

多くて一割だったようなく、気が、しただけです。すみません。

## 夏祭り【ひなた√】

今日も今日とて神官に大半の仕事を盗られ、縁側で息子と共にぼーっとする。しかも平日の真つ昼間から。

俺を目立たせることで若葉達に危険がいかないようにしてるのはわかる。だが、ここまで囃し立てる必要あったか？

「どうしたの？」

「ん。いや、なんでもねえよ。それよか、勇斗。腹減ったろ。餅でも焼いてやっから待ってな」

「おもち！たべる、たべる！」

どうやら、正月に春いて食べた餅をえらく気に入ったようで毎日、とは言わないがほとんどの昼飯が餅になる。まっ、作りがいがあるってもんだ。

「ほれ、食いな」

「いただきますっ！」

「よく噛んでから呑み込むんだぞ」

勇斗の前に安倍川餅を一つ。そして、障子側にもう一つ。

勇斗の良い食いつぷりを眺めながら、緑茶を啜る。うん、熱い。

「——ただいま戻りました」

「あつ、おかあさん。おかえり〜」

俺とは違い、真面目に業務を熟しているひなたのご帰宅だ。ここで俺がなにもせずにダラダラしていると絶対に離婚届を出されるので先手を打ち、阿部川餅を差し出す。

「足りなかったら他のをちやちやつと作るぞ。いるか？」

「いえ、大丈夫ですよ。午後からは開けてるので」

「えっ、おかあさんいっしょ！」

「ええ、一緒ですよ」

「やったあ！」

.....俺の方が一緒にいる時間が多いってのにひな

たの方が好かれてんのは。子供は母に懐きやすいもんなのか？

「とうとうことで、コレです！」

脈絡なく、一枚のチラシを机に叩きつける。それには、花火のイラストと夏祭りという単語が書かれている。

「夏祭りか？」

「そうです。今日は折角なので家族で行きましょう！」

夏祭り、なあ。大赦の業務に追われたり（主にひなた）、育児（こっちは俺）とかで行けなかったからな。今年は行ってみたいと思っただ。

「あそびいくの〜？」

「遊び。まあ、そんなもんだ。行くか？」

「う〜ん」

「美味しい物、一杯食べれますよ」

「いくっ！」

どうやら、うちの子は美味しい食べ物に目がないらしい。あれ？好物やつてる俺よりひなたに懐いてんのは、考えるのは止めよう。

その後、俺と勇斗は半ば強制的に浴衣を着せられ写真を猛スピードで撮られたのは語るまでもない。

夕暮れ。いつもなら家に帰る子供たちが増える時間帯だが、今日はそんなのお構いなしに夏祭り開場である境内を元気よく走り回ってる。

そんな中、ひなたは勇斗と手を繋ぎながら屋台を回っていた。俺は護衛兼荷物持ちだ。なにかあったら、すぐさま荷物を放り投げ刀を手にする手筈になっている。

「〜♪」

空いている左手で持っている綿あめを鼻歌交じりに頬張りながら

次の屋台へと歩く。地味にひなたもりんご飴を齧ってる。

「あつ、士郎さんも一口どうですか？」

「有り難く貰おう」

俺の口へと近づけられるりんご飴を一齧り。食べた感じはただ、りんごをキャラメルでコーティングしただけだな。

「おいしい？」

「ああ、美味しい。勇斗もどうだ？」

「勇斗にはまだこの硬さは危険です。来年食べましょうね」

「はい」

へえ、ちっちゃい子供には食べれる硬さがあんのか。これからは気を付けねえと。

「そろそろ花火の時間ですね。移動しましょうか」

「おつ、花火上がんのか。そりゃあいい」

「はなびく？」

「綺麗なんもだぞ。見てみようぜ」

「う、ん？」

綿あめを食べきった勇斗を連れ、ひなたの後をついていく。

ひなたの話によると花火は山中から打ち上げられるようだ。立ち入り可能は本社まで。その奥は立ち入り禁止となっている。

「ん〜！」

人混みの中では勇斗がいくら背伸びしようが、空を一望することは出来ない。

こんな時は親ならどうするか。周りの親子は肩車などをして子の視線を上げている。

ひたなに視線を向ける。俺の視線に気づき、微笑みながら俺の右手から荷物を強引に奪う。

「ほれ、勇斗。これならよく見えんだろ？」

「わあー、うん、みえる！」

右手で勇斗の脇を掴み、七難八苦しながらも肩に運ぶ。なんとか乗った勇斗はご満悦の様子で元氣一杯の返事が返ってくる。

「落ちねえようにしっかりと掴んどけよ」



「良かったですね、勇斗。優しいお父さんで」「うん！」

「まったく、コイツらは。まあ、いいか。こうやってやるのも悪くないしな。」

——空一面に花が咲き誇る。

「みてみて！」

「見てる、見てる。どうだ、綺麗だろ？」

「きれ、い。うん、きれい！」

「綺麗ですね。」

記憶にある花火より百倍綺麗だな。たった一瞬のものだが、一生記憶に残るものだ。ちとそれが残念だが、また来年も見ればいい。今日のことを思い出しながら、つてのもいいかもな。

「来年も来るか」

「また、あるの？」

「来年もありますよ」

「じゃあ、いく！」

勇斗も来年で小学生か。子の成長を見守るってのがこれ程キツイものだとは思ってなかったが、これならやっていける。

以前の俺がこうやって自分の子を世話してるなんて知ったら、目玉が飛び出るだろうな。今でもあんま実感持つてねえよ。

「それじゃあ、帰りましょうか」

「え〜」

「もう美味しいもんはないぞ」

「じゃあ、かえる。」

花より団子とは正にこのことだな。まあ、少年だし当然か。

ひなたから奪われた荷物を預かり、ひなたと勇斗の後を歩いていく。

花火かあ。そういや市販の物があつたな。買ってきてやるつても悪くないだろうな。また、三人で家族で出来る時間がありやいいんだが。

私だけの色彩【園子√】

頬に雫が落ちる。

「」。

俺に跨り涙を流す園子。なにも発さず、ただ俺を見つめたまま瞳からまた一つ雫を落とす。

ああ、わかつてる。俺の怠惰が招いた結果だ。だから、園子が思い詰める必要はない。それを伝える責務は俺にある。

まだ掴まれてない右腕を園子へと伸ばす。

寒さが限界突破した1月。そう言っても英霊の体である俺にはほとんど関係はない。なんなら、半袖半ズボンで生活出来る。まあ、もれなく変人として見られるだろうが。

前置きはさておき。今、俺は勇者部の活動&風先輩の先生活動を終え、一人自室で携帯とにらめっこしていた。

「安芸先生が遅刻なんてな。」

先日送られたメールの内容では、大事な話をするから空けていくれる？といったものだった。だが、設定された時間になっても安芸先生から連絡はない。

▪ なんでかなあ ▪ なにか、あったか？大赦に突撃かましてもいいけど  
▪ ▪ ▪ ▪ ▪  
▪ 携帯が振動する。

「よし。もしもし、安芸先生ですか？」

電話に応答し、相手へ話しかける。念の為の確認だ。

相手の返事を待っていると、携帯から安芸先生の数段低い声が耳に届いた。明らかに安芸先生ではない。

『安芸さんの代理である春信です。今、安芸さんは急務に追われているので代わりに私が伝言承りました。』

「んく、それじゃあ仕方ないか。過労死しないように、と伝えといてください」

『一語一句お伝えします。』

まあ、俺がのんびり出来るのは安芸先生のお蔭だからな。でも、どこぞの王様みたいに過労死はして欲しくない。

『それでは、伝言に移ります』

「了解です」

伝言、ねえ。十中八九大赦関連だろうな。内容はさっぱりだが、察するに俺の処遇についてだろうか。

『では、まず一つ。大赦を牛耳っていた者達が毒殺或るいは事故死しました。』

「上里の当主、変わりました？」

『はい。現在では上里 柚葉様が当主となり、事態を緩和へと向け指揮を取っています。』

思わず天井を見上げる。

やっぱ、初対面の時に感じた俺の感覚が当たった。親友あの妹こと同じように目標のためなら、全てを淘汰する奴だよ。

『今回の騒動で七名の方が死亡。そして、跡継ぎがおらつしやらない赤嶺、黒耀は上里家と統合されました。』

「黒耀」

『どうかありませんでしたか？』

「あいや、なんでもありません。続けてください」

もう俺とはなんら関係ないことだ。それに、ただ苗字が同じだけ。そうに違いない。

『この七名の中には乃木家があり、当主不在となったために現当主は乃木 園子となります。』

「そういう事かよ、安芸先生え。くそつ、見境なく殺りがったな。」  
さっきの評価はなしだ、上里・柚葉。

親友の妹を侮辱する脳など俺は一切持ち合わせていない。それ程までに完璧な切り捨て能力だった。だが、柚葉にはその力は備わっていない。

俺が確認した限り、乃木家当主には汚職などの穢れはなかった。真っ白いや、満開を知っていて尚、無視したからそう言い切れないな。それでも殺す必要はない筈だ。

『それでは、二つ目です。当主が総替わりした大赦ですが、その半数が若者と言えるでしょう。それも引き継ぎも満足に出来ていない者達です。』

「だから安芸先生が引き継ぎ作業で大忙しってことか」

『八割はそうです。柚葉様も尽力していますが、それでも人の体ですべき仕事量ではありませんね』

あの人は定期的に貧乏くじ引かないといけない呪いでもついてんのか？完全なとぼちり受けてて可哀想だな。

『最後に三つ目。これが伝言の本題であり、シャルルマーニュ様に協力していただきたい事案です。』

「出来る範囲で頼みます」

この前十二勇士達は退去した。つまり、こつから俺一人で戦わなければいけない。当然届く手の範囲が狭くなる。

『貴方はこれから乃木 園子様を護衛してください。襲撃された場合は殺しても罪に問われません。私達で処理します。』

「あー了解です。」

『ご了承ありがとうございます。それでは、これで伝言は終了です。なにかありましたら連絡をお願いします。』

「ふう」

携帯をベットへ投げ、椅子の背もたれに全体重を託す。体を伸ばしながら、考えることはもちろん護衛についてだ。

もう、園子は知ってんだろうな。父親の死かあ。俺の父さんはどんな人だったんだろ。母さんと結婚出来るってことは相当なイケメン

か凄い人格者だったんだろうか。

「ん〜まっ、やることは変わらないな。」

日常を謳歌する。園子にはバレないように護衛しなきゃな。今からでも今日は東郷のそこ行くとか言ってたっけ。そろそろ帰ってくる時間やべっ！

急いで椅子から跳ね上がり、霊体化して屋根に上がる。

「うへえ、明らか怪しい車が一台あんな」

友奈の家の前に黒塗りのベンツがエンジンをかけたまま停まっている。警戒してください、と言わんばかりの怪しさだ。

「あつ、友奈いや、違和感持ってくれよ」

確か友奈は樹、夏凜、銀とカラオケ行ってくるー！って活動終わりにはしやいでたな。風先輩は勉強です。受験生だからな。

「さてと」

霊基再臨し、ちよつと威厳を出す。銀には威厳感じないと言われたが、現時点ではこれが一番威厳あるからな。

霊体化を解き、マントを靡かせながら黒ベンツの運転席横に立つ。

「もしもーしー！」

窓を叩きながら、サングラスかけた運転手に話しかける。にしてもサングラス似合ってたな。

そんなことを思っていると、窓が下がってきた。

「なん——ッ、お前は」

「その反応、黒だな」

黒ベンツだけに、つってな！あ、すみません。ちよつと、自分でも寒くなっちゃったな。

「クソッ！」

俺に向けられた拳銃の銃身を手刀で歪ませ、右脚でベンツを蹴り上げる。車体ごと空中で180度回転し、上下逆転した形で地面に叩きつけられる。

「がッー」

この程度じゃ死なねえだろ。そもそもそんな心配をする必要はない。

地響きのような音がしたためか続々と住民が出てくる。俺の姿を見られる訳にはいかない。即座に霊体化し、家に入る。そして、さも今気づいたように野次馬気分で家を出る。

「大丈夫ですか!？」

どうやら、運転手は友奈に救助されたようだ。そんなじゃ、車は俺が救助しとくぞ。

180度回転した車体をすつと起こす。住民の方々から拍手が巻き起こるが、一切無視して運転手へ近づぐ。

「ほら、立てるか?」

意識朦朧としている運転手へ手を差し伸べる。数秒程認識するまでに時間を要したが、なんとか俺に焦点を当てる。

「ひっ。」

「わっ!？」

一瞬で顔を真っ青にして、友奈にぶつかりながらも車に乗り込む。そして、エンジンをつけ走り去っていった。

「つと。大丈夫か、友奈?」

「う、うん。大丈夫、だけど。」

体勢を崩しそうにしていた友奈の腕を掴み、なんとか転ばないようにしながら、走り去る車が見えなくなるまで睨む。

「よし。ほら、友奈。体を冷やす前に家に入ってゆつくり温まれよ。

風邪引いちやうからな」

「あつ、うん。シャルくんも風邪引かないようにね」

「おう」

それは俺に不要な心配事ではあるけど、その心意はめっちゃ嬉しい。

家に入っていく友奈に手を振りながら、俺もその場を後に――

「シャルだあ〜」

「ぐおっ」

唐突な背後からのタツクル――ツ!

なんとか前に倒れないように踏ん張り、持ち堪える。犯人は声からして園子だ。後ろを確認しなくてもいい。

「一緒に帰ろ〜?」

「いいぞ、折角だしな」

園子の歩幅に合わせて、駄弁りながら家へ歩いていく。

「園子、シャル!どこも怪我不いか!」

「俺は無傷だぞ。とりあえず深呼吸、深呼吸」

「私もないよ〜」

息を荒くしながら肩で呼吸する銀を落ち着かせながら、平気なことを伝える。それにしても、さっきの音はどれぐらい大きかったのか。

。 。 。

最近、シャルがよく一緒にいてくれる。考えられる理由は二つあるけど、実質一つしかない。でも、これまでのシャルの行動を考慮するとそれも違うと思う。

一つは私への同情。父を亡くした事への、と言っても私は自分でもびっくりするぐらい何も感じなかった。どうやら、あの時に私が持っていた親族への愛情はなくなっちゃったみたい。

二つ目は〜

「んふんふん」

私の三年間の努力がやっと実になって欲しかったな。どくせ、私とシャルはズツ友ですよ〜だ。

「朴念仁、鈍感、ドンファン」

どうしてシャルはあそこまで鈍感になっちゃったのかな。緩急をつけるべきだった? いや、それでもしも嫌われたら

「うう〜」

想像しただけでダメージがもう、こうなったら乃木家の財力をフ

ルに使ってカツコイイお家を作って監禁するしか……秘密基地も作っちゃお。

「園子ー、ご飯だぞー！」

「はーいー！」

ミノさん。一番シャルと付き合いが長い。そして、カワイイ。私が持ち合わせてる形容句で言い表せられない程にカワイイ。

疲れた時はミノさんに甘えられる。あれには中毒性があると思う。シャルに甘えた時とは違う。母性、かな？

そんなことを思いつつ、ベッドから立ち部屋を後にする。

ある日の放課後。私達はいつものように部室へと――

「悪い、ちよつとこの後行かないといけない所あつから遅れる。風先輩に伝えといてくれ」

「りようかーい」

たまに見せるあたふたシャル。この謎を解く日がついに来た。シャルにばれないようにこつそりと後を追う。

そして辿り着いたのはあまり人目がない体育館裏。そこには一人の女子生徒が立っている。どうやら、この人との待ち合わせだったようだ。

「これ、って」

人目がない場所、二人の男女。そこから導き出される答えは――

「シャル君、好きです。私と付き合ってくださいっ！」

そっか。そうだよ。シャルはカツコイイし、優しくて。理想的な男性だよ。小学生の時も告白されてたもん。

シャルの答えを聞く前に急いでその場を後にする。ここで、シャル



がOKを出したらあの女性を殺す自信がある。そうならないためにも耳を塞ぎながら部屋へと走る。

——シャルが欲しい。誰にも渡したくない。シャルの特別になりたい。

醜悪で自分勝手な思いがどす黒くなっていくのを感じる。自己嫌悪感を抱きながら、ただシャルの部屋に歩を進ませる。

ノックもせず、扉を開ける。そこにはいつもと変わらず、机で勉強しているシャルの姿があった。

「おっ、園子か。どうした？」

「」

「園子？」

「なにも喋らない私に不信感を持ったのか、椅子から立ち上がり近づいてくる。そして、綺麗な青い瞳で私の顔を覗き込む。」

「どっか体調でもわる——、んっ!？」

シャルの唇に私の唇を合わせる。初めてのキスはレモンの味ということを聞いたことがあるが、全くのガセみたい。味なんかしない。

未だ現状を理解出来ずにいるシャルをベッドへと押し倒す。更に馬乗りの状態になることで起き上がれないようにする。

再度シャルの唇を——

「その、こ、こ」

「あつ、いや、ちが、これは、これじゃ、ない。私が欲しかったのは、こんな怯えた顔じゃなくて」

「」。

ポロポロと涙が流れる。頬を伝いながら落ちていき、シャルの頬を

濡らしていく。

気の迷いで済まされる行いじゃない。シャルにとつては恐怖体験だ。どう足掻いても許されない。ここは自死するしか

——そつと頬に手が置かれる。

「つ、〜」

お日様みたいに暖かい手。出来るならずつと触っていたい。でも、私にそんな資格は——

「好きだぞ、園子。誰よりもお前のことが」

「——え？」

そういつもの笑顔でシャルの声で聞こえた。いや、そんな筈は。だって、こんな状況で

「ごめんな、返事遅れちまって。お前に辛い思いさせちまった。カッコわりいな」

「そんなことない。そんなことないよ、シャル」

シャルがカッコ悪いとしたら、それは私のせいだ。シャルはどんな時だって私の憧れ。目指すべき篝火なんだから。

「それより、シャル。さっきのつて。ほんと？」

「おうとも。俺は好きだよ、園子のこと」

「友愛じゃなくてラブの方？」

「もちろん」

「〜！やった、やった！今なら、なんでも出来る気がする！あつても」

「えつと、さっきのキスは——、わっ！」

後ろに回された手によつて頭を引つ張られる。思わず目を瞑つてしまい、体に入れていると唇に柔らかい感触があった。

「——よしつ、これでお相子さまだな」

「!?!?」

心臓の鼓動がうるさい程に高鳴る。凄くドギマギしてる。顔が茹で蛸になっていくのを感じる。でも、そんなこと引つ括めて幸福感が勝ってしまう。

「ね、ねえ、もう一回して？」

「へっ？え、えつと、二回目は流石に恥ずいといふかなんといふか」

「じゃあ、私からするね」

「なっ、ちよっ、園子!？」

「ああ、私・すっごい・幸せ者だ。夢にまで見た関係にようやくなれた  
それだけで、もう。」

「私だけを照らしてね、シャル——」

## 贖罪と共に【タマ√】

今日も今日とて大赦に来るお偉いさんの護衛だ。ほとんどの場合ひなたを護衛してるが、たまに他所から来るお偉いさんの護衛もする。

ん？給料この歳でなら結構な額貰ってるぜ。使い道ないけど。

「また遅刻かあ。」

「あのお偉いさんは毎回だろ。今回は何十分だろうな」

今回のお偉いさんは政府関係者、だったけな？そこはどうでもいいとして、まあ、人間として大分終わってる奴だ。

「アイツ、だいつきらいだね。ひなたもさっさと切つてくれないかなー」

「今回はそういう話するとか言ってたぞ。見込みがなきや、スパッと切るだろうよ」

「マジっ！」

「マジだ」

「よしっ！よしっ！よおっし!!」

何回ガッツポーズしてんだ。嫌われてんなあ、あのおっさん。まあ、その気持ちは俺もわかるが。

そんな事をタマと話していると、大赦の玄関である門の前に黒いベントツが止まる。そこから護衛対象のお偉いさんとspのような黒服の人が降りてきた。

「あの黒服、たくさん武器持ってるぞ。いいのか？」

「二人で護衛する必要はねえな。タマは杏から頼まれてる方へ行つていてくれ」

「わかった」

ボディガードではなく、spか。違いは武器の保有を許されていなか、いるかだ。

この場合、俺はどつちに分類されるんだろうな。大赦直属の警備員

？

だから考えなくていいか。

一先ずタマと別れ、玄関口へと向かい待機する。帽子を深く被ることも忘れずにな。

「今日も苦労様です。そんな警備員さんに悪いんですが、今日は私の護衛がついていますので結構ですよ」

「それは出来ねえ話だ。俺がクビになっちまうんでな」

「そうですか。まあ、その体ではいてもいなくても同じでしょうね」

そういうとこやぞ、お前。それだから、千景からイケオジ詐欺とか言われてんだぞ。どういふことかはわからんがな。

視点が変わり、大赦にある研究室。そこでは、大赦所属の研究者によつて日々勇者システムの向上を目指し、睡眠時間あと諸々を削りながら研究している。

「杏く、タマが来てやったぞく」

以前、球子に杏が依頼していた聴き取り調査というものだ。長らく行けてなかったが、士郎の言葉によりやつとの思いで来ることが出来た。

「あ、タマっち先輩。お仕事終わったの？」

「いや、終わってないぞ」

「サボり、じゃないわよね？」

「サボりじゃないぞ、千景。士郎が行ってきていい、って言ったから来たんだからな」

現在、研究室に居るのは杏と千景のみ。まあ、ここは元勇者の二人だけの研究室なのだが、そこは別にどうでもいいな。

「それで聴き取り調査、するんだろ？始めないのか？」

「もちろんやるよ。でも、その前に説明聞いてね」

「うえ」

説明、という言葉に露骨に嫌がりながら席についてホワイトボードへと体を向ける。

ホワイトボードには御影 士郎とデカデカと書かれている。

「えーっと、タマつちにもわかりやすく説明すると。」

「タマつち先輩な？」

杏と球子がいづものくだりをやっているのを眺めながら、一人コーヒーを飲む千景。大赦内にある自室で過ごしているためか大分精神が安定しているようだ。これには高嶋と御影はニツコリ。

「私達の切り札は色々なデメリットがあつたのは知ってるよね？」

「体へのダメージと内面の凶暴化、だろ？」

さてまずは話の基である正暦勇者達が使用していた切り札。精霊を体内に入れることで爆発的に身体能力を上げるといふ裏技のようなものだ。当然、デメリットはそれ相応のものとなる。

「このデメリットはあまりにも戦闘に多大な影響が出るの。だから、今わたし達はこのデメリットをなくして新たな強化方法を探してるんだけど。」

「だけど？」

「手詰まり。人の手じゃ、ここが限界よ。巫女にも聞いてはいるものの良い返答はないわ」

巫女に聞く、とは神樹に聞くということだ。なにか神樹から神託はなかったのか、という質問の意味でもある。

「ということで、切り札変更は諦めたの。次に挑戦したのは勇者自身の強化」

「タマ達のか？」

「もう地力を上げるしか案が出なくて。」

ちなみに精霊の使用用途を変えるといふ案は300年後に出ることになっている。それまでは勇者システムの改良などは少数しか行っておらず、ほとんど停滞していた。

「ということ私達のこれまでの戦闘映像を見てただけど、明らかにおかしな点を一つ見つけたんだ」

「おかしな点、タマが超絶格好良くなつてたとか？」

「いや、それは同じだけど……って、そうじゃなくて」

戦闘繰り返し返すことでカツコよく!?と猛烈に反応しそうな奴がいるが今回はスルー。本題はそこではない。

「コイツの身体能力の上がり幅がおかしいのよ」

「あつ、千景さん。私が言おうと思ったのに」

「あら、ごめんなさい。グダグダしてるから、つい」

千景が楽しそうで良かったです。これからも人生謳歌してくださいね。応援してます。

つと、私情を跳ね除けホワイトボードに貼られている折れ線グラフへと目を向ける。一目見ただけでわかる。明らか、おかしいやんと。「ぐうんつと、伸びてるな」

「これは目測で示した士郎さんの時速です。もしかしたら、違うかもしれませんが、それでも、これは異常です」

「私達とはかけ離れているわ」

流石、四国の大英雄。では片付けられない問題だな。これが成長系主人公ですか。これも違うな。

「それじゃあ、聴き取り調査」というより、質問かな?」

「ドンと来いっ!」

長い前振りを終え、ようやく本題へと移る。もちろん前振りに関係あることだ。

「士郎さんと私達は何処が違うと思う?」

「タマ達と士郎。男か女?」

「出た」

「ん、ん。成長期が終わってる」

「それはタマたち先輩もでしょ?」

「いいやつ! タマは2cm伸びたぞ!」

最後の襲撃から五年が経過しているが、御影はあのとときと同じままだ。まあ、性格は似ても似つかないがな。

「それ以外にはないの?」

「ほか。記憶喪失?」

「それも出た」

?

「なんか士郎の武器が特殊だからか？」

「草薙剣、ね。あれは未だにどういものか判明してないわ。そもそも所有者が真価についてしか知らないもの。これも私達じゃ手詰まり」

しかも説明があやふやしていて要領を得ていない。何とか聞き取ったのは敗北を勝利へと問答無用で持つていくというデタラメな能力。そして、それはもう使えないということ。

「あとは、士郎だけ一回も切り札使つてないとか？」

「いや、切り札使つて。そういえば、あれは私達とは違うヤツだったわね」

「でも、それだとあの性格の変化はあっ！わかったかもです！」

士郎が言っていた切り札とは取り出した刀を一刀に収束するとう必殺技に近いものだ。精霊を体内に取り込んでの切り札とは全くの別物だ。

「士郎さんの精霊は草薙剣なんです。だから、士郎さんは私達で言う常時切り札状態なんだと思います」

「ありえるわね」

「いやいや。それだと士郎の体はぐちやぐちやだぞ？」

球子の言う通り切り札のデメリットにより、士郎の体はぐちやぐちやだろう。若葉達同様、人の体であればだがな。

「そこです。士郎さんの強さの秘密はそこにあつたんです」

「体ぐちやぐちやなのが？」

「いえ、体は正常です。切り札を使いながらも正常なんです」

正常、という言葉強調するように言い放つ。いつかの勇者王決定戦後の時のようなハイテンションだ。

「つまり、アレは精霊の力を十全に扱えるように体が出来てるって訳？」

「適応した、が一番可能性あると思います」

「ほへえ」

おめでどう、八割正解だ。それ以上は魔術関連を学ばなければ、辿り着くことはないだろう。今の状態での最高点だよ。



「ふう、終わったあ。」

「ほら、次はコレをどう活かすかよ」

「少し、ねまあす。」

余程疲れていたのか、机に突っ伏した瞬間夢の世界へ旅立ってしまった。

「それじゃあ、土居さん。警備に戻っていいわよ。サボりはここまでだから」

「よしっ、バリバリ働いちやうぞお！」

御影と別れ早三十分。どんなにこの大赦が広くても応接室には到着し、話し合いをしているだろう。

視点と時間を変え、応接室へ。ここには御影、ひなた、お偉いさん、そのspのみが入室を許可されている。それ以外は一切の入室を禁じられている。

「我々としては神樹様の御加護を受け取りたいと思っっているんですよ。ですから、どうか私にも神樹様に触れる機会を。」

「それは前にも言った通り許可出来ません。私達ですら、限られた者しか触れられない神樹様に部外者が触るとどうなるか検討もつきません。」

端的に言うと、大赦だけ勇者とか巫女とか力貰ってばかりでズルい！私にも力下さい！そんな感じだ。

ここで勘違いしないで欲しいのは、神樹様は人類の味方であっても神という点だ。基本、神様というのは気ままな。わかりやすく言うなら自分本位な者が大半だ。

もし、許可してない変なイケオジが触ってきたらどうなると思う？  
そうだね、殺すよね。

「善意には善意を、っていう言葉を知らねえのか？例え、相手が人じや

なくてもコレは共通だ。忘れんな」

「そちらの護衛は礼節がなっていないのではないですか？」

「彼は私が無理言って引き抜いたので態度がでかいんです。ご了承下さい」

礼節はなっていないが、言うことは正しい。まあ、そういう奴だ。諦めて素直に耳を傾けておけよ。

「触れることが出来ないのならば、せめて神樹様に関わる資料を頂けないでしょうか？」

「それならば、前回渡した筈ですが？」

「黒塗りなしはないんですか？」

「あれが全てです」

現時点で神樹様について知っているのはひなたのみ。それ以外は誰も知らず、ひなた専用のパソコンにしかデータはない。

「そうですか、そうですか。なら——」

その言葉を合図にs pが服の裏側にある胸ポケットへと手を入れる。

「予備動作が長い」

「は？——ぐっ！」

s pが取り出したハンドガンを銃身が見えた瞬間、手に出した刀で斬る。ついでに蹴りを腹へと叩き込み、壁へと弾き飛ばす。無論気絶だ。

「さて、——ん？」

硝子に罫が入るような音。すぐさま後ろを振り向くと、強化硝子に円を作るように四つの弾丸が当たった跡がある。

「ひなた」

「許可します」

その言葉を待ってましたと言わんばかりに右手に握っていた刀を上へ軽く投げる。回転しながら落ちてくる刀の柄目掛けて——

「急拵えだ」

——拳を振り抜く。

刀が弾丸の如く射出され、強化硝子をいとも容易く突破し、遙か先

の狙撃手の脳天を穿つ。もちろん即死だ。

「はい。」

この光景に思わずイケオジも顔面蒼白だ。君が悪くていい気味だ、ってな。

「さて、どうしますか？ここで殺害されるか牢屋に入るか。好きな方で構いませんよ」

「牢屋でお願いします」

長い沈黙の末、彼は牢屋を選んだようだ。良かったね、安全に余生を過ごせるよっ！

以上、これがタマが来る五分前の出来事でした。

イケオジ軍団がお縄になった後のお昼。他の大赦勤めの役員達とは違い、士郎達はしつかりお弁当がある。いやまあ、役員でもある人にはしつかりある。ちなみにその他は食堂があるのであしからず。

「やつと、ご飯だあ。疲れたー、燃えるー」

「ほら、さつさと食わねえと昼休憩が終わんぞ」

勇者達のお弁当は何故か毎日ひなたから渡されている。本当に何故か。ひなたの方が忙しいだろうに。ということ御影からも二つのおにぎりが渡される。

「げっ、野菜多」

「残さず食えよ」

弁当箱を開けた瞬間嫌な顔をしているのは勿論タマだ。御影には苦手な食べ物はない。食べればなんでも食う。前の自己紹介で言っていた筈だ、多分。

「そういや、士郎。今日の午前中に一人殺ったのってほんとか？」

「ン、そうだがどうかしたか？」

うくん、この命の価値が勇者へと偏りまくってんな。最近ではこ

れがひなたの一番の悩みの種になつていようだ。

「いや、なんでもないんだけどさ。」

「許可なら、しっかりひなたから取ってから大丈夫だろ」

ひなたとの契約、いや正確には約束だな。出来る限り御影に人を殺させたくないというちよつとした我が儘。

「ん、ん、。」

「そんな唸つてなに考えてんだ？」

突如として唸り声を上げ、頭を悩ます。これには御影も箸を止め、不思議そうにタマを眺める。

「あつ！キャンプ行こう！」

「おつ、キャンプ行くのか。楽しんでこいよ」

「？ 士郎もだぞ？」

「うん？」

いの間にか自身をキャンプメンバーに入れられてることに驚きを隠せず、いつかの自分が出てきてしまっている。これにはタマもきよとんとするしかない。

ということ、突如として予定された御影とタマのキャンプは無事にひなたから休みを取れたことで滞りなく開催された。

快晴、言うまでもなくキャンプ日和だ。そんな訳で御影とタマの二人は安田川アユおどる清流キャンプ場に来ていた。

最初はタマが普段キャンプするような森の中、と言っていたが御影がキャンプ初心者ということだったので悩んだ結果ここになっている。

「よし、今日はここをキャンプ地とするっ！」

伽藍堂としているキャンプ地でそう高らかに宣言する。元々ここは年中賑わっていたキャンプ場ではあったものの、あの日を堺に来るものはいなくなつた。

ここを管理する者達も軒並み四国以外にいたため、生存は考えられない。残ったのは無人となったキャンプ場のみ。

ここにはキャンプが本当に好きな者がたまに来るが、それは極稀。今日もそのようなことになっており、実質貸し切り状態だ。

「ほれ、鮎獲ってきたぞ」

一人でテントを張り終えたタマの所へバケツと網を片手で持った御影が戻ってきた。その言葉通り、バケツには鮎が四匹入っている。「本当に網だけでいったんか」

驚くことなかれ。この男、釣りが片腕で出来ないという理由だけで網を用いて鮎を四匹獲ったのだ。どんな動体視力だよ、ほんとに。

「おっ、随分立派なテントだな」

「そうだろう、そうだろう。なにせ、タマが立てた一級品だからなっ！」

流石、アウトドア派だな。これにはインドア派の杏は苦笑い。まあ、当の本人は今日も頭を悩ませているだろう。

「そんじゃ、俺は着替えてくる」

網で獲った、と言うならば川に入ったのはわかる。だが、網を振っただけで上着がそんなに濡れる訳がない。どんな力で振ったのか  
・想像出来ないな。

「タマが手伝ってやろうか？」

「いや、結構だ。一人でもできらあ」

「そう言い、テントへと入っていく。」

御影は年がら年中長袖長ズボンを着用している。たまに袴。その最たる理由は左腕の欠損部位を見せないためだ。

・夏用買わなくて良くなった、は本人談だ。笑いながら言いやがって  
・どういう神経してやがる。まあ、本人にとっては本当に笑い話だろう。  
・う。

本人にとっては、だがな。タマにとってはタマったもんじやない。杏はあまり顔には出さないようにはしているが毎回胃液を逆流させているのを皆知っている。

トラウマとはそういうものだ。何年経とうが、彼女等にとっては誰

も測り得ない罪。誰にも許してもらえないものなんだから。

「」

御影が着替えている間、一人椅子に座りボーツとする。火でもつけようと思つたが、今はその必要はない。やる気もあまりない。

「ふいー、着替え終わったぞ。次はなに。寝てんのか。」

着替え終わり、テントから出てきた頃にはタマは夢の世界へ行つてしまつたようだ。これには御影もどうすへぎかと悩む。

「しようがねえなあ。」

持つてきていた蚊取り線香に火をつけ、煙を立たせる。それをそつと地面に置き、自身もタマの隣に設置されている椅子に腰を降ろす。

「たまにはこういうのもいいか」

少し頬を緩ませ、瞼を閉じる。眠気は感じていなかったが、すぐに意識を落すことが出来た。

目の前には極々普通の開いた扉がある。だが、部屋はなく花火の絵のような物が出口を塞いでいる。これでは入れないと思い、扉を閉じる。

なにか自分ではない自分を視たような感覚を感じながら、左側にあつた扉を開く。それは先程のとは違い、出口は塞がれていない。

——右足を前へと運んだ。

「顔を上げる。バチバチといった音を聞きながら、その方向へと視線を向ける。どうやら、タマが獲ってきた鮎を焼いていたようだ。」

「おっ、御影も起きたか」

「ん、あー。つい、眠っちゃまった」

「とうに日は暮れ、辺りは真っ暗だ。電柱がないことも相まり、目を凝らさなければ周囲を見ることすらもままならない。」

「ほいつ、丁度焼けたぞ」

「おお、こりゃあいい」

タマから受け取り、齧りつく。噛み締めた瞬間、塩振って焼いただけのものとは思えない程の旨味が舌に伝わる。

「おいしいだろ？ただでさえうまいのにキャンプ効果で更においしさ倍増だっ！」

「ほへえ、キャンプにそんな効果があったとはな——驚きだ」

外で食うと美味しくなるという原理はキャンプでも同じようだよ。まあ、焼き立てだからという理由もあるだろうがな。

「なあ、士郎」

「ん？」

いつものタマとは何処かかけ離れたような声で御影へと話しかける。そんな問へと魚を食らいながら応じる。

「あつ、いや、えっとー」

しどろもどろになりながらも言葉を出そうとするタマを急かさずじっと待つ。その瞳は確かにタマを納めている。

「よしっ。士郎はあのときタマと杏を見捨てれば、って思ったことあるか？」

「正しく空気が凍りついた。これには流石のタマも冷や汗を流す。だが、それでも今の発言を取り消す気にはならなかった。」

「そうだな。最初は後悔した。左腕も痛くて意識が飛びかけたもな」

「誰を責めるでも、愚痴るでもなくただ言葉を紡ぐ。運が悪かった」

「そう言い切れる程の話ではない。それは誰の救いにもならない。前にも言った通り、アレには恐怖を抱いた。何処か少しでも狂えば死んでいた。」

草薙剣がなければ。少しでも左腕を切り落とすのに躊躇すれば。相手の再生が一秒早かったら。そんな少しで確実に死んでいた。

「まっ、それでもだ。俺はあの場に立ってた。立ってなきや駄目だった。誇り、つてのはそういうもんだ。例え死んでも後悔はしねえよ」  
誇りを抱いたまま死ねるなら、それでいい。まるで言うようにタマへと微笑む。

「そう、これが御影 士郎だ。どつかの剣のように鋭い奴に負けず劣らずの頑固者。だろうなあ。」

「でも、そのせいで士郎は左腕を失っちゃったんだぞ？」

タマとしては士郎に後悔して欲しかった。何処にも行き場のない感情を少しでも発散して欲しい。それで、どんな事をされようとも。

「良い。これで良いんだよ、タマ」

「でもそもが御門違いだ、土居 球子。御影にはそんな脆弱な感情はない。いつまで経っても本質は同じだ。呆れる程にな。」

「それに、タマのことは好きだったからな」

「」

「良くも悪くも唐突に爆弾を落すのが、コイツらしいな。これにはタマも一瞬思考が停止し、驚きを隠せない。」

「いつ、いや、タマはチビだし、女っぽくないし、ガサツだし。そのー、あれだ！」

「嫌なら、はつきり嫌って——」

「嫌じゃない！嫌じゃ、ないけど。」

「その光景を見て、またあの時感じた自身への怒りが湧いてくる。」

いくら強かろうが、いくら敵を殺そうが、目の前の少女を救うことは出来ない。もう以前のような馬鹿みたいな笑いは聞こえてこない。

そうさせたのはバーテックス。いや、自分自身だ。それを理解しながら、この手を伸ばしている。馬鹿馬鹿しいにも程があるな。

ならいつそ、この手は伸ばさない方がいいんじゃないか。そう思



い、手を――

「タマに、――土郎を救わせてくれっ！」

「」

目の前に自身より遙かに小さな手が差し伸べられる。その手は自身を救おうとしていた者の手だ。

自分には救いなど未来永劫れることはない諦めていた。だと言うのに、こうもあつさり来るとは誰も思わなかっただろう。

その瞳を見るに本気だ。そもそも彼女はこういった冗談などあまり言わない。なら、こちらも本気で応えるのが彼女のためだ。

「ああ、俺を救ってくれ」

そつと小さな手を掴む。

縫らず。祈らず。ただ、彼女を救うがためにその手を握る。

「嫌だつて言っても離してやんないからな」

「そりゃあ怖え。お手柔らかかに頼むぞ」

手を握ったまま椅子に横たわる。そこからは満天の星空が一望出来た。これもキャンブ効果というものだろうか。

「おー・星がキラキラしてるなあ」

「月も綺麗だ」

きつとこれからもタマは自身の罰を抱えるだろう。俺が知っている土居 球子という勇者はそういう奴だ。だからこそ俺はただ一重に救われて欲しいと思うのだろう。

自分勝手・まあ、そうだな。独り善がりな独善的。それでしか人を救う方法を知らねえんだ。でも、いつかは――



れようが折れまいが結末は変わらん。どうせ記憶には残らないんだから。

さて、今日は土曜日。ゆったり休みたい所ではあるが勇者部の活動がある。よって惰眠を謳歌することは許されない。早く起きて朝ご飯を作らなくては

「むっ、この感じ」

体を起こすと同時に昨日までとの相違点を見つけてしまった。

「なるほど。一日一回、制限つきということか」

「どうやら、第三再臨時の姿でジユワユーズを放てるのは一日一回のようだ。神樹内部だからか。それとも、元々そういう仕様なのかはわからない。」

「ふむ」

「スペックは元通りとは言えないが、ほとんど元の状態だ。これなら、遜色なく戦えるだろう。二回目からはどうなるのだろうか。」

「そんなことはさて置き、ベットから立ち上がる。固まった体を伸ばしながら部屋を後にし、キッチンへと歩いていく。目的はもちろんご飯。園子と銀が起きてくる前に作らなければ」

俺の朝は早い。いや、そんなことよりまず突っ込ませてくれ。どうして、俺以外女性しかいない場所に住ませられているのか。わからん。

ここに来た時はシャルルマーニュの所に転がり込もうかと思つたが、あつちにも二人いた。家族みたいな感じなのか？まあ、人様の家庭事情にちやちや入れる程俺も馬鹿じゃねえ。ここは黙つとこう。

さて、起きた後の俺の行動だが、おにぎり作つて学校へ行く。以上だ。簡単でわかりやすかつたら？

この時間帯に起きてるのはひなたと若葉ぐらいだ。若葉は自主練。ひなたは皆のご飯作りだ。だからこそのおにぎり。やっぱ米は大事。てことで今日も共有スペース兼食堂へ向かう。昨日の出来事でギクシヤクしたがそれでも普段通りおにぎりは作る。飯には絶対に影響は与えないのが俺の主義なんぞな。

「あつ、士郎さん、おはようございます。今日もおにぎりですか？」  
「ああ、おにぎりだ」

すすすつと米を炊き、熱々な米に具材や塩を馴染ませながら片手でいつもの形を作っていく。ジャグリングみたいに掌でクルクルすれば少しずつだが、三角になる。

「味は、と・まあ、いつも通りだな」  
作つたのを一つ取り、味見する。皆は美味しいと言つて食べてくれるが、俺にとってはそこまで美味しい物とは思えない。

「流石のですね。」  
「そんじゃ、俺はもう出るぞ」

やることはやつた。ちよつと早めだが、荷物を持って席を立つ。  
「はい、気をつけてくださいね」

時刻は8:30。確か、俺宛の依頼の集合時間が9:30だったけな。これなら三十分前に着く。まっ、遅れるよかいいだろ。

## 花結いのきらめき【17】

あの後、朝食を摂り、毎度の如く問題事に巻き込まれながらなんとか部室に辿り着くことが出来た。

「おっはよ〜！」

「おはようっす！」

「失礼する」

園子、銀、俺の順で部室へと入室する。どうやら、風先輩と御影以外は揃っているようだ。確か、風先輩は生徒会に呼び出されてたような気がする。

「御影はどうした？」

「士郎さんなら剣道部からの依頼に行きましたよ。10:30に終わると言っていました」

剣道部。大丈夫か？手加減ミスって相手に大怪我とかなったら、ローランに腹切らせることになっちゃうけど。

「それでは、お姉ちゃんの代わりに私が司会しますね」

「ここに風先輩いたら、前みたいに叫んでたんだろうなあ」

「あく、めっちゃわかる」

小銀と銀が以前の風先輩を思い出しながら、そう呟く。

まあ、風先輩は樹LOVEだからな。一に樹、二に樹、三に樹、四にうどん。って感じか？

「つと、その前にひなたさんから連絡があるみたいです」

配るために用意していた紙を一度置き、ひなたへと繋げる。当の本人は来ましたかと言わんばかりに胸を張る。

「実は神樹様からの神託でまた新たに勇者が来るようです」

「新戦力は大歓迎なんだけど、今回も樹海化中に合流するパターンじゃない？」

「ということはお奴も来るのか、今度こそ報いをっ！」

いつ来ようが大丈夫なように準備しとく必要があるな。てか、ここ

にいない御影と風先輩には伝えてるんだらうか。

「ひなた、この事は御影と——」

——樹海化アラムが鳴り響く

「きた」

「気を引き締めていこう！」

さて、どうすべきか。多分、この王様たる靈基なら何も思わず首を断つことが出来る。だがしかし、その行為はここからは現場で判断しよう。

「ヒナたん、ヒナたん。私は？」

「園子さんはまだ待機です」

「しよぼーん」

あれは本当にしよぼーんってしてる時のだな。俺も最初は出れなかったからな、その気持ちよくわかる。だが、俺も最後の切り札ポジションになったかった。だって、カツコイイじゃん？

「まあまあ、園子の分もアタシがやってくるからさ」

「安心して、そのうち。シャルル君が変なことしたら、私が即座に撃ち抜くから」

「そうだよ、そのちゃん。もしもの時は東郷さんがえ？」

「待て。どうして、俺が撃ち抜かれることになってる？」

おおっと、これは新手の死刑宣告か？避ける手段がない一撃で俺を捉えてやがる。ヤバいな、本当に。

——花卉が舞う。

業、縁、定め、——本来では視ることすら出来ない運命を見定めるその目が大っ嫌いだ。今すぐにでもこの刀で断ち切りたかった。「はっ。その手段じゃ、誰にもなれねえぞ。鏡写しが関の山つてもんだ」

俺を見下すかのように笑い、頼んでもないのに限界値を定める。どうしてこうもコイツは——

「まあいい。好きにやれよ。どうせ、同じ結末になるだろしな」

もう興味がないと言わんばかりに背を向け、この場を離れようとする。

「だが、これだけは忘れるな。お前は勇者と英雄を相手取るんだからな」

そう言い切ると同時に姿を消す。残されたのは俺一人。託すものは最初からいない。

「はあ」

なら、ちよつとぐらい吐き出していいな。

「妬ましい、呪わしい。見てて吐き気がする」

だからこそ、アイツらと共に歩めたんだろうな。今の俺にはそんな資格はないだろう。だが、その程度で止まれない。終わりにする。「勇者も英雄も関係ない、等しく殺す」

樹海を翔ける。

手札は揃った。賭げるべきモノも定まった。故に殺せる。

技量、実力、人数。そのどれも下回っているとしてみても必ず抜け道はある。そこを突けば誰であろうと勝利は確実だ。

「っ！ これはちよつち不味いかも。」

犬吠埼 風、勇者部部长。扱う武器は大きさ自由の大剣。力勝負となれば、俺に勝ち目はない。そもそも勇者である以上身体能力でも負けている。

俺を確認したと同時に大剣で身を隠し、護りの体勢へと移る。

「視界は大事だぞ」

「きやつ！」

側面へと回り、左手に握りしめている刀の全てを引き出す。本来なら、ここで終了だが勇者には精霊の護りがある。二撃目が必要だ。

二刀目の切っ先をその首へと――

「まずはひと――、糸。っ!？」

糸により刀が微塵切りにされたかと思えば、次の瞬間には目の前から網のような物が迫る。それを横に飛ぶことで回避する。

「大丈夫、お姉ちゃん？」

「助かったわ。さっすが、私の樹！」

犬吠埼 樹、扱う武器は変幻自在の糸。糸と侮れば、それが死際となる。俺の体など豆腐のように斬れるだろう。

まあ、いい。やり方はある。どちらか片方を殺せば、自然にもう片方も殺せる。再度、右手に刀を出現させる。

――刹那、光が満ちる。

「我が勇士の剣達よ――ッ！」

疑似勇士円陣と五大元素の収束発散を合わせた絶技。所謂シャルルマーニュのEXTRAアタック。攻守において完璧と思われるが、一点のみ弱点がある。

近づけば近づくほど攻撃は当たらない。つまり、ここで俺がすべき行動はシャルルマーニュに全力で近づくことだ。

「砂糖たっぷりとはこのことだな、シャルルマーニュ？」

後は奴の霊核を砕くのみ。その体勢からの防御など不可能だ。確実に獲った。

「フッ」



何故この場で笑みを　まさか!?

「ちよろい！」

「ツ——、余計な手間を　っ！」

三好　夏凜による投擲、この次に来るのは爆発。であれば、全て折らなければ

「させないっ！」

鷲尾　須美の正確無比な矢が左腕を貫く。貫かれた際の衝撃的により、軌道が振れ爆破物の処理は出来なかった。

「」

次に遥か先からの銃弾により、右手の甲を貫く。刀を落すことはなかったが、数秒のラグが生じる。当然、そんな状態では防御は不可能立場が逆転したな。

「いいだろう。その色彩を受けてやろう」

視界が様々な色彩によって埋め尽くされた。

花結いのきらめき【18】

「未だ晴れない煙を睨むように警戒する。」

「奴の両腕は須美と東郷の狙撃により、使い物にならない筈だ。それを考慮するなら、先程の攻撃は当たったことになるが、なにか奥の手があるかもしれない。」

「晴れてきたな。」

「警戒は怠るな。東郷、いつでも撃てるように準備してくれ」  
『了解』

迂闊に近づこうとする若葉を手で静止させながら、こっから1km離れている東郷へ風先輩の携帯で指示する。

「刀の、破片?」

「ようやく目視出来たかと思えば、刀の破片が散らばっているのみで肝心の奴の姿はどこにもいない。血の跡は俺達から離れていつている。」

「退けた。いや、これは。」  
「なにか妙だな。この血の量。俺からの攻撃は避けられた?それか、最小限に抑えたか。どちらにせよ奴はまだ動ける。」

「だが、それでも可笑しい。奴が俺と同じ思考回路ならば、ここでの撤退はない。次やるなら、それは——」

「東郷——うっつ!」

「喉元から刀が突き出る。正しく奴が扱う千子 村正の刀。それ即ち・コレは」

「俺とお前が同じ?ハッ、笑わせんなよ。シャルルマーニュ」

「シャルくんっ!」

「ッ——!」

射線が被っている以上東郷の援護は見込めない。銀と友奈は間に

合わない。

このような形での奇襲ありえるわけがない。ありえるとするなら、コイツは俺ではないナニかだ。

「貴様、は誰だ？」

「テメエに答える義理はねえ。じゃあな、大帝」<sup>マグヌス</sup>

その言葉と同時に喉元から力任せに振り下ろされる。鎧と共に臓器、そして体ごと切り裂かれていく。

死、——明確なそれが目の前にあった。

「誰でもない奴に自分を重ねちまったか。まっそれが、今回の敗因つてこった。今回のな」

安堵の溜め息をつきながら、消滅していく完成体。現在では獅子座と呼ばれるものが消滅していくのを眺める。

「勇者システムの向上つてのはこうも凄えのか。感謝しねえとな」

300百年前では三人がかりで切り札使つても勝てなかつたのを思うと時代の変化とは凄いものだ。まあ、彼はその勇者システムを問わずに倒しているのだが、気づいていない様子のようなだ。

刀を仕舞い、スマホを取り出す。画面には他の勇者の現在地が示されている。

「俺以外固まって……いや、こつちに友奈が来てんな。それなら、俺もゆつくりしとくか。」

入れ違いになったら、阿呆らしくなるのでここは待機を選択。ただポーッと真つ暗な空を眺める。

そんな時、彼のスマホに電話がかかる。不思議に思いながらも、なんの躊躇もせず応答する。

『御影 士郎だな?』

「……そうだが」

自身と全く同じの声質。そして名前を知っているとするとするなら、コイツは奴の可能性が高い。だが、敵意はないと推測ではあるが感じる。

『あー、俺はちよつとしたアドバイザーだ。警戒せず、聞いてくれ』

「アドバイザー、ねえ。いいぜ。話ぐらいは聞いてやるよ」

『うわっ、めっちゃ上から目線……』

彼かれ普通に了承した感じではあるが、聞き手にとっては上から目線と感じてしまうのが御影語。十人十色だからな。

『今からお前はある敵と戦う。』

「……そうみたいだな」

遙か彼方を走る人影を視界に納めながら、刀を取り出す。少し左へ視線を移せば、馴染みのある赤い髪が見える。

『人間と思うな、あれはある種の化け物だ。お前は絶対に理解しようとするなよ?』

「つまり、星屑共と同じ感覚で殺せってことか?」

『それでいい、それがいい。てことで、後はお前次第だ』

その言葉が最後だったのか、唐突に電話を切られる。携帯を仕舞い、赤髪の少女へと手を振る。

「士郎くんっ！構えて！」

「わかってる。とりあえず、友奈は下がってろ……一瞬で片付ける」  
「っ」

その目を見た瞬間悟った。御影はアレを人ではなくバーテックスとして見ていると。

刀が御影の握力によって軋みだす。

「まず一振り。刀が砕けると共に目前の樹海の根が割れる。奴は紙一重の所で体を逸し回避する。だが、当然体勢が崩れる。そんな隙を見逃す訳がない。」

「チッ！」

「急接近し首を断とうと追撃をいれようとするが、また回避される。だが、蹴りの一撃で根へと叩きつけられる。」

「っ」

「ちよ、ちよつと、士郎くん!?!」

「対空戦を終え、根に降り立つ。いつでも対処出来るように警戒は怠らない。逃げ、守り、攻め。どれをしようが首を断つ戦略を思考する。奴を睨む士郎の元へと友奈が追いつき、声をかける。」

「なんだ？」

「視線をそのままにして返答する。」

「私、あの人に聞きたいことがあるんだ」

「さっさとしやがれ」

「渋々といった感じではあるものの圧を下げる。」

「奴は怪我をしているが、動けない程のものではない。一瞬でも気を抜けばひっくり返される予感がする。故に警戒は解かない。」

「っ」

「尻餅をついた体勢から奴が立て直す。両腕からは少なからず血が流れており、傷が思った以上に深いことがわかる。」

「あなたは勇者なんですか？」

「勇者、ゆうしや」

「その掠れた声を聞いた瞬間、御影 士郎はこの男を理解した。してしまつた。」

「ハハ。ハハハ。ハハハハハハハハ!!」

「っ」

「身を竦め臨戦体勢に移る友奈と対照的に御影は武装を解く。ただ、心底つまらなそうに奴を見下す。」

「俺の蛮勇を嗤え！蛮人たる俺に恐怖しろ！——さあ、勇者。お前

達が正義であるのならば、悪である俺を殺せ。正義を成してみせろッ  
!!」

その言葉を皮切りに死闘が開始し、終了した。

なんの抵抗もなく、霊核が存在するであろう心の臓を刀によって貫かれる。そのような状況であつても友奈を右手で制し、口を開く。

「お前、悲しい奴だな」

「」

同情。或いは憐れんだような目で奴を視る。

「自己矛盾を赦さないが為に自身の在り方すら捻じ曲げる、つてのは俺でもしない。その先にあるのは地獄、だから、な——。」

刺さっている刀と共に樹海の根へと倒れる。間違はなくあの一刀は命を断つべき場所を斬り裂いている。あと数秒もすれば、御影 士郎は息絶える。

これにて英雄と勇者は地に沈んだ。それ即ち、悪の勝利である。

「——海原を司る天津神。出雲を統べし国津神。我らが原罪、異議申し立てられよ」

建速須佐之男命へと祈りを捧げる祝詞。何処からかはわからないが、静かに樹海を木霊する。

だが、最早それに応じる者はいない。御影が扱う草薙剣は空っぽの状態。真価は発揮され——

「なっ!?!」

突如として倒れている御影の胸が輝き出す。その中心と思われる場所から草薙剣が祝詞に応えるべく、這い出てくる。

「——そうかつ！アイツの魔力リソース……！」

アレは次へと託す一刀。それならば、限定的ではあるが真価の模倣は可能になる。だが、それでも模倣しているものに他ならない。よって因果逆転は発動しない。

「ああ、勝敗は決した。」

勝利と敗北の概念を付け替える。それが、草薙剣の真価。シャルルマーニュと御影は生存し、俺は息絶える。どのような運命が来るかはわからないが、只今をもつて決定された。

「俺の負けか。それでこそ正義つてもんだ」

負けはしたが満足だ。そもそも負け前提の戦いだったんだよ、コレは。いや、負けないといけなかったんだ。

「——それでお前は満足なのか？」

聞き馴染みのある声が背後から聞こえた。

「お前も知ってんだろ。正義は悪に勝つてな」

おびただしい量の血を流しながらもその瞳は未だ曇らず輝いている。不屈とは正にこのこと。

「俺が聞いているのはそこではない。もう一度問う——それでお前は満足なのか？」

「満足だ。ほれ、さつさと殺せよ。どうせ、勝敗は決してんだ」

刀を捨て、両腕を広げる。もう足掻く理由も必要もなくなった。それなら、さつさと死んで俺は還る。

「これが最期だぞ。本当に、それでいいのか？」

「くどい。さつさと殺せ」

何故、そんなに繰り返し返し同じ質問をするのか不思議でたまらない。隠すな、偽るな、象るな、見え透いている。それがお前の本心な訳がない」

「俺とお前が同一存在だからか？だが、残念。俺とお前は根本的な部分が違う。お前は死んだ時の記憶ねえだろ？」

「」

最初、シャルルマーニュを見た瞬間に悟った。コイツは清いまま人類史という汚物を見ていないと。

「それが決定的な違いだ。ほら、無駄話は終わり。後はわかるな」

その言葉を了承したのかはわからないが、ジュウユーズを握り締め  
ゆったりとこちらに近づいてくる。

「我が王剣を以てして断首されることを光栄に思え。安らかな」

ジュウユーズが俺の首へと――

「――ッ!?!」

靱やかな物がジュウユーズを弾き、更にはシャルルマーニュヘカウ  
ンターを入れる。直撃はしなかったものの体勢を崩し、三步後退させ  
る。

「ギリギリセーフってどこかしら!」

俺の隣に一人の少女が並び立つ。誰もが目指すべき導にして、暗闇  
を照らす篝火。

「まだまだ行けるわねっ!最後まで一緒に戦うわよ、??!」

白鳥 歌野、――諏訪の勇者が立っていた。



花結いのきらめき【19】

「アイツ」

??と並ぶ白鳥 歌野を見て溜め息をつく。

スマホの操作がわからず、アタフタしている間に終わると思っただんだが、最近の若者は呑み込みが早いな。

「あーもう仕方ない。ちょっと修整入りまーす」

お調子者かと疑われるような気の抜けた声で飛翔する。修整、と言ってもこれで三度目だ。バグだらけだな、まったく。

先程とは打って変わって形勢逆転。二対一となり、シャルルマーニュが不利なのだが、ほとんど一対一のようなものだ。

「勇者、そこを退け」

「絶対に退かないわよっ！ほら、?!そんな諦めた顔しないで武器持ってギブアップにまだ早いわよ！」

「下がれ、歌野」

「本当に、諦めたの？」

いろいろな感情がごちゃ混ぜになったかのような顔で??を見つめる。

「かふっ、そいつは、もう諦めてんぞ。だから、さっさと殺してやれっ」

「土郎くん、あんまり喋らない方が」

「??の二人目!?てか死にかけじゃない!」

口に溜まった血を吐きながら、高嶋の肩を借りながら辛うじて立っている。いくら生存が決定しようと痛いものは痛い。ここは安静にするのが優先だろう。それはシャルルマーニュにも言えることだ。

「そういうことだ。俺はもう抵抗しない」

「だ・か・ら・う・!まだ戦うのっ!そんなヘナヘナしないっ!さいっ、こ  
うにカツコ悪いわよッ!!」

・カツコ悪い。その単語に三名が過剰に反応する。

「カツコ悪い。そうだな、今の俺はカツコ悪かったな。そんな、  
訪、ジョークは辞めて本気出しますかあ!」

・さつきまでの会話が茶番だったかのように雰囲気が一転し、シャル  
ルマーニュへと啖呵を切る。

「友奈、遠くに離れるぞ」

「え?う、うん、いいけど」

未だ痛む胸の傷を歯を食いしばることで耐え、高嶋を抱き抱えて飛  
翔する。方向は知らん。遠ければどこでもいいという感じに樹海を  
翔けていく。

「あつ、ジョークだったの?ちよつと真面目で心配になっちゃったん  
だけど」

「俺のジョークは最強だからな。てことで、さっさと離れてろ」

「オツケー!」

目が据わったのを確認するとすぐさま勇者の身体能力をフルに  
使った速度で離脱する。

「悪い、待たせたな」

「問題ない。ここからは一瞬だ」

「だな」

ジュウユーズが輝き、刀が燃え出す。

「冥土の土産に拝みやがれ」

「しかとこの目に焼きつけよう」

その言葉を聞き、瞳を閉じ頬を緩ませる。そしてまた眼を開く――  
――開始の合図だ。

「過分を捨て——」

重さを捨て——

疾きを捨て、テメエを知った」

「幻想の色彩。幻想の物語。

されど——」

樹海が一変し、燃え盛る大地となる。幾千もの刀が刺さっており、戦場かと思わせる程の風景だ。だが、そのような場所でも光はある。「随分と長くかかったがな」

刮目しやがれッ！」

「我が剣、我が勇士は君臨する——ッ!!

即ち——」

名も無い刀が粒子となり、彼の手に収束——そして一本の刀と成す。これこそ全てを断ち切る究極の一。それに相対するは至高の十三連撃。

「剣の鼓動、此処にあり——ッ！」

「王勇を示せ、遍く世を巡る十二の輝剣ッ！」

宝具のぶつかり合いにより、周辺の樹海の根はボロボロ。そんな形容が生温い程に荒れている。もちろん、そんな状況であれば大穴の一つや二つ出来る。

「かはっ。あ、あー」

大穴の底で発生練習をしている者が一人。どうやら、シャルルマーニュの宝具により、両腕、左足、胴体をやられたようだ。

「ジュウユーズと真つ向から競り合った感想は？」

「ガヌロンの所を掻い潜って一閃。それなら、いけると思ったんだがなあ。」

自身と瓜二つの者と死に体で語り合う。だが、痛みは慣れている。発狂することはない。

「まっ、左腕は持っていけたんだ。誇っていいと思うぞ、俺は。それにカツコよかったしなっ！」

「自分に言われても嬉しくねえよ。」

溜め息をつきながら、肩を竦める。もうジョークなど言う余裕なんてない。

「おっ、歌野がお前を探してんぞ」

奥底でも聞こえる程の大声で自身の名を叫んでいる。

彼女が自身の名を呼ぶなんて、何百年振りだろうか。頬がニヤけてしょうがない。

「このままやり過ぎ。樹海が解けたら、後はお前がなんとかしてくれ」

「もう偽る必要はねえさ。お前の敗因は自分の本心すら騙したことだ」

樹海の根と根の間から光が差し込み始める。どうやら、彼女が力任せに掘り返しているようだ。

「確かに役を羽織る者は世界を騙す者に与えられるクラスだ。だがな、いくら自分を偽ろうと本当の物は残さないといけない。そうだろうか？」

「ああ、そうかもな。そりゃあカツコ悪いよな」

好きな子の前でカツコつけたいのはどの世代でも共通しているこ

とだ。彼であつても変わらない。そう思うと、今までの行為が黒歴史に入りそうだ。

「よし、それじゃあ、俺は帰る。ゆっくり休んどけよ」

「そう急ぐな。ほれ、俺の称号でも貰っておけ」

「うおっ、とと、自分の称号を雑に投げんな。まつ、有り難く貰つてやるよ」

「おう」

称号を受け取り、体内へと入れる。その際にこれまでの記憶が流れ込んでいるが、今は無視する。

霊体化し、彼女とすれ違いになる形で樹海へと出る。

「」

体が粒子となり、散り始める。これにて造反神からの依頼は終了。まあ、終了とは言つても完了したとは言っていない。当然、報酬など

「??っ!」

「はあ、アイツ」

木々が折れるような音と共に一人、??がいるちよつとした空間へと入り込んでくる。

「よかつたあゝ!まだ生きてるわね?!それじゃ、早く上がらないと——」

「いや、大丈夫だ。此処でいい」

??を抱えて飛ぼうとする歌野を静止し、再度座り込む。その言葉を聞き、一度は顔をくしゃつと歪めるがいつもの顔へと戻る。

「そつか、ここから私とみーちゃん頑張るわ。??はゆっくり休んでちようだい」

「歌野」

「大丈夫、安心して。絶対に私は、私達は最後の一瞬まで——」  
「歌野ッ!!」

何処を見つめているのかわからない目をこちらへと向かせる。今ので大分体力を使ったが、まだ余裕はある。話したいことは話せる。「まず落ち着け。絶対に人を攻撃するな。しっかり話を聞くんだ」

「うん」

簡単に。解り易いように簡素に伝えていく。

「気を楽しにして。自由時間を楽しめ。馬鹿騒ぎしまくれ。周りを困らせるぐらいになっ！」

「う、ん、う、うんっ！」

「大丈夫。俺は大丈夫だからな。絶対に早とちりすんなよ！」

「あつたり、まえ、くっ、」

「絶対に勝て。負けるな。俺みたいに本心を騙すな。辛いときは辛いでオツケーだ。以上っ！」

伝えたいことを伝え、粒子となり消える。遺されたのは彼女一人。彼には見せませいと我慢していた涙が滝のように流れる。

「もう、ほんとに、ズルいんだからあ」

——花卉が舞う。

「セイバー、千子 村正。召喚に応じ参上した。まあ、その なんだ。同じ顔で暴れたよしみだ。こき使ってくんろ。てことで武装を解いて欲しいんだが あつ、駄目？そりゃあ困ったな」

## 花結いのきらめき【20】

俺と御影以外で千子 村正と名乗った者へ武器を向ける。鞭を使っていた勇者と樹海ではいなかった少女が庇ってはいるものの警戒は解かれない。

「皆、武器を降ろしてくれ。コイツはさっきの奴とは別人だ」

俺の言葉を聞き、渋々といったように武器を――

「いや、俺と奴は同一人物だ」

一斉に再度武器が向けられる。

お前さあ。

「一先ずだ。一先ず、御影を病院へと搬送しよう。生存という概念は付与されているが、それも時期に消える。さつさとしねえと本当に死ぬぞ」

「ん？御影の体も俺みたく神樹の力で修復され。」

そんな訳がないと思いつつ、御影へと視線を向ける。

「ない。御影 士郎は人間だ。勝手にお前と同じ括りにするな」

椅子に座ったまま隣にいるひなたに寄りかかっている。よく見ると、その目は心なしか虚ろになっているような気がする。

「士郎、さん。」

「。」

「士郎っ！」

それに気づいたひなたが御影を揺さぶるが無反応。しまいには、机に置いていた右腕が力なく落ちる。

「救急――、いや、俺の方が速いな。俺が運ぶ」

即座に御影を抱え、廊下に出る。そして、窓からジェット噴射の如く加速する。

「やけに軽い。斬られたであろう胸からは出血がないのを見て安心していたが、本当はもう出る程の血がないんだ。」

くそつ、もつと早くに気づくべきだった。これは俺の失態だ。必ず拭わなければ。

シャルルマーニユが御影を抱え、病院へと走り出した後の勇者部。西暦組が落ち着きなく、そわそわとしているがそれ以外は先程同様だ。

「そんじや、自己紹介だ。さつきも言った通り俺は千子 村正。まあ、本当は違うんだが、もう存在しない名前なんでな」

「この状況で自己紹介続けるの!?!」

「そりやあ、なあ?」

「そうよ。自己紹介は友達を作るための最初のステップなんだから!」

なんだこの諏訪トリオ。ボケ二人とツツコミ一人。最高のコンビだな。M-1グランプリ優勝目指すか。

「ん?この声。まさか、白鳥さんか?」

「オフコース、私が白鳥 歌野よ。それにしてもアナタの声、どこかであつ、もしかして乃木 若葉さん?」

「ああ、ああ!私が乃木 若葉だ!こんな形で会えるとは」

白鳥 歌野と乃木 若葉。守護していた土地は違えど、同じ時代を生き、うどんとそばで競い合ったライバルだ。その結末は、これを言うのは無粋というものだろう。

「どうして諏訪に若葉さんがあつ、そうだ。若葉さん、彼は?? ??。通話の時に言った通り、彼は私の仲間で——」

「すまない、白鳥さん。もう一度名前を言ってくれないか?」

「?? ??」

早口過ぎたと思い、今度はゆっくりと口にする。



「すまない、もう一度頼む」

「? ? ?」

「ちよつと声が小さかったかと思い、今度は最大の音量で一文字ずつ伝える。だが、それでも若葉の顔は優れない。」

「日本語で頼む」

「日本語よ、日本語! ジャパニーズラングエイジ!」

「本来の英語であれば、日本語と言う場合 *japanese* のみでいい。言語という意味の *language* はつけない。」

「そこまでだ、歌野。言つたろ? 俺の名前はもう存在しないってな」

「それは、古代言語になったという意味ですか?」

「いや、そんなものはない。ただ、俺がそういう存在ってだけだ」

樹がそう質問するが、すぐさま?!! によって否定された。

「でも、私とうたのんは正しく言えてるよね? それって私達には適用されないの?」

「お前らは俺の名前を消される前に聞いてるからな。正しい発音さえ聞いてりゃあ、発音も正しくなる」

「なるほど?」

若干納得はしていないものの理由は大分把握出来た。歌野は感覚派なので、適当に頷いているだけだ。

「歌野と水都はーまあ、いいか。それよりもまずは状況を説明してくれ」

「およ? 私の晴れ舞台はスキップ?」

「今日のデザートはキウイにするね」

「それはほんとに勘弁してくれ。最悪吐くからな?」

この三人には勇者部の皆も苦笑い。

状況不明、敵多数という危機的状况でここまで呑気に談笑するのは世界広しと言えどこの者達のみだろう。

「まあ、良いんじゃない? ひなた、説明してやんなさい」

「いいんですか? 土郎さんとシャルルマーニユさんを瀕死に追いやつた人だと聞きましたが」

「風さん、それは流石に甘すぎないか?」

神世紀組は賛成。西暦組は反対。

御影を瀕死に追い込むというのはそういうことだ。ちなみにシャルルマーニユの事は、まあたまにしでかすよね、という感じで片付けている。

「ん、決裂してんなあ。よしつ、それなら俺が腹を斬ってやろう。それで文句はねえだろ？」

このままでは進まないと思ひ、自身の命を贖罪とすべく刀を握る。またまた冗談を、と目を向けてみれば、その目は本気だと馬鹿でも気づかせる。

「??が腹斬るなら私も腹斬るけど？」

「誰か介錯お願いしていいですか？」

「わかった、わかった。腹は斬らねえよ」

歌野と水都がそう言った瞬間、斬る動作をピタリと止め、少しの間思考を挟む。そして、諦めたかのように刀を散らす。

「土里さん、説明した方がいいんじゃないかしら？あの顔で腹切られたら夢見が悪いわ」

「そうですね。ここは一先ず情報共有をしましょうか」

その言葉に神樹館組は肩を撫で下ろす。正直、今の会話は非常に教育に悪い。シャルルマーニユがいれば、即刻部室から放り出していただろう。

説明開始から数十分後。至極丁寧な説明を聞き歌野は——  
「国盗り合戦してんのねー！」

結局、端折りまくってそこに行き着いた。

ここで勘違いしないで欲しいが、歌野は地頭はいい方だ。ただ、脳

の空きスペースが農業、そば、水都、??でパンパンに詰まっているだけだ。

「??さんが敵・え、いや、でも??さんは私達と一緒に来ましたよ?」

「御影さんと同じ状況だった、ということですか?」

「でも、村正さんには私達についての記憶があるよね。それに同一人物だって、さつき。」

ちよつとコレは魔術関連、というよりは??のスキルを知らなければややこしいな。さて、彼はコレをどう説明するか。

「俺には自分自身から記憶を受け継ぐ術があつた。ただそれだけだ」

「確かにそれなら。」

「それを習得すれば、アタシも未来のアタシから記憶を。名案じゃね? あつても引き継いだところだった」

「おいコラ」

その説明で納得するんか。まあ、正確に言うならば、彼の称号剥奪というスキルの副作用なものだ。

『犠牲者』それがアイツの世界から与えられた称号だったようだ。ちなみにこつちの彼は『人理の防人』という称号を有している。

「ん、これは中々難しい。」

「だね、簡単にまとめるなら、村正さんは何かの理由で造反神に仕えてたけど、今の村正さんは仕える必要がないから私達を攻撃してこない。そんな感じではないのかな?」

「ああ、そんな感じだ」

これには??も感嘆したように頷く。にしても、凄すぎるだろ。

園子と銀はシャルルマーニュから具体的にではないけれど、世界の真意について少しは説明されている。まあ、説明した当の本人ですら知らないことが沢山なのだが、そこはどうでもいいか。

「てことで、俺の無害性は証明した。どうする? このまま殺し合うか?」

「こらっ。約束したのを自ら破らない」

「いつっ。」

??が妙な笑みを浮かべた瞬間、歌野が制裁パンチで黙らせる。これ

には??も打たれた頭を抑える。

「まだ色々聞きたいことはあるけど、しょうがないわね。アナタもこれから勇者部の一員として頑張って貰うわ」

「ありがとうございます。是非こき使ってやってください」

「うおつと水都さん？」

「??が最初言ったでしょ」

「あー、やっぱ、あれなし。この部でこき使われるとか予想外にも甚だしい。俺じや対処しきれんぞ」

「??さんに拒否権はありませんよ？」

「ミトIIサン、あ、はい。精一杯頑張らせてい頂きます」

このやり取りで全員が悟った。この三人混ぜるな危険、だと、なんなら、シャルルマーニュよりも問題児だ。

「ああもうしょうがねえ。千子 村正の名に泥を塗らねえように頑張ってやんよ。だが、戦力面には期待するなよ？」

その最後の言葉に全員が疑問符を浮かべたのは言うまでもない。

## その運命を【杏✓】

事ことの始はじまりは杏あんが御影ごかげへと話はなを持ちかけたことだった。その内容内容とは……

「俺おれの本ほんを……」

「是非ぜひっ！」

目をシイタケ模様模様で輝きらかせながら、御影ごかげへと迫せまる。その勢いきほいに多少多少たじろぐが、すぐ立たて直ただし思案しあんする。

「んー・なんで俺おれが題材たいざいなんだ？」

「書かきたいからですっ！」

「書かきたいから、ねえ・俺おれに面白い話はなしなんてねえぞ？」

「たっくさんありますっ！」

なんとか逃にげようと画策かくさくするが、その悉ことごとくを勢いきほいで突破とくぱされる。これにはお手て上げといいった感かんじで首くびを傾かたげながら唸うなりる。

「あー……わかった。思おもう存分ぞんぶん書かいてくれ」

「っ！」

最終さいしゅう的てきには御影ごかげが根負ねふけし、題材たいざいとされることを承諾しょうだくする。それを聞きいて思おもわず、控ひかえめにガツポーズを決きめる。

「それじゃあ、再来週さいらいしゅうの日曜日にっようびに私の部屋わらのへやに来てくださいね」

「わかった。完成せいせいまでとことん付き合あってやるよ」

予定よそを取り付けられ、踵かかとを返かえす。照れ隠はにかみのようなものだが、それに気づきづく者ものはいなかった。

さて、時が流れ約束の日。御影は杏がいる大赦の自室にいた。もちろん二人つきりいや、なんで？

「じゃあ質問していきますね」

「おう」

隈が凄くと思いつつ、来る質問に備える。

リビングであろう部屋で机を間に置き、対面するように座る。杏の手元にはメモ用紙とボールペンが用意されている。

「特にこれ、と言うような好きなものは何ですか？」

「特別そういうのは・櫛。なんでかわかんねえけどアレによく目を惹かれちまう」

むず痒そうにしながら、質問に答える。

まあ、そうだな。ここでこれに対して言えるのは『奇稲田姫を髪に差し』ということだろう。何処ぞの神さんの影響受けてんな。

「その逆で嫌いなものはなんですか？」

「傍観者共」

迷いなく、すぱつと言いつつ。

特に安全圏から見下す奴が大っ嫌いだ。例であげるのならば、高知での奴らだな。

「最近心配なことはなんですか？」

「心配な・あつ、そうそう。前に若葉が怪しい奴らに連れられそうになってな。アレには肝を冷やした。てことで、若葉がいつか人に騙されないか心配だ」

「え、えく」

その件については致し方ないというか、なんというか大赦の神官の姿で御影。土郎さんが呼んでました、とか誰が見抜けたよ。その道順で御影が歩いていたのが失敗した理由だろう。

ということその騙した奴は御影の蹴りによって壁に埋まりましたとさ。

「若葉はえれえ別嬪さんになっちまったからな。そういう点でも心配

だ」

「ですね。士郎さんも気をつけてください」

「? なんぞだ?」

元々美形だったということもあり、現在では最早画風が違う。千景もすっかり大人になったのだが、鏡を見て顰めっ面になっていた。

そんな中御影は一切変わらず、あの時のままだ。童顔? と言うのだろうか。多分、そんな感じだ。

「では、次行きますね。士郎さんは自分のことをどう思ってますか?」  
ここで勝負を仕掛ける。この質問で鬼が出るか蛇が出るか。だが、これを超えなければ次の質問なんて出来ない。これは所謂線引きの為の質問。

「そうだなあ。自分勝手に悲しい奴、そんなところだろ」

「それは、なんぞですか?」

「こうもあつさりと言ってくれるとは思っていなかったこともあり、ついでに心でその先まで聞こうとしてしまう。」

「あの時、俺は激情に任せて刀を振るつた。最高に気分が良かった。感じたことのないことの高揚感だった」

あの時、とは御影。士郎が起こした不祥事のことだろう。だが、その際の御影の状態は

「あれは切り札の影響です。士郎さんは常時切り札を発動させているので、その影響です。だから、あれは——」

「いや、間違いなくあの感情は俺のものだった。建速須佐之男命のものでは断じてない。紛れもなく俺のだ」

あの感情は自分のだと言い切る。それ程までに誰かのものにならなかった。唯一あれが誰でもない自分自身のものなんだから。

御影 士郎が自分自身のものだと言っているものはない。武器も技術、しまいにはこの喋り方すらも自分ではない誰かのものだ。

だからこそ譲れない、譲らない。

「で、ですがアレは千景さんのために」

「いや、俺のためだ。俺が赦せなかったから斬つた。俺が殺したいと思つたから殺そうとした」

ここで杏は致命的な勘違いに気づいた。

御影は記憶喪失であつても常識は備わっている。だからこそ、彼は自身を定めるための一本の柱を作つたと思つていた。

順序が逆だつた。

自身を悪と見做したが故に、正義であるが故に一本の柱を作つたんだ。

——酷い自己矛盾だ。

「そら、次の質問に行こうぜ」

「うっ、うん」

御影とかれこれ五年程の付き合いにはなるが、未だ理解出来ない。友奈同様自分についてあまり語らないせいか。それとも理解させまいとしているのかはわからない。

そして、これが最後の質問だ。これだけは本当に予想が出来ない。地雷を踏み抜くか、はたまた

「土郎さんが、不要だつたものはなんですか？」

「感情」

いつもと変わらない表情で心臓あたりの服を右手でぐしやりと掴む。そして、続けざまに口を開く。

「コレさえなければ、俺は天の神を殺せていた。葛藤する必要なんてなかった」

「それはいりますっ！絶対に必要ですっ！」

異議ありっ！というカットインが出そうな勢いで異議申し立てられる。これには御影も目を点にする。

「ロボットみたいな土郎さんなんて見たくないです。それと、その言葉ぜっ・たいに皆さんの前で言わないでくださいね？」

「お、おう」

念を押すように言う杏に少し戸惑いながら、答える。まあ、約束は必ず守る奴だから心配はないだろう。

「ふうー、少し話すぎましたね。時間、大丈夫ですか？」

「おう、俺は今日一日は暇だからな」

時刻は夕方六時。夏場ということもあり、まだ日は完全に落ちては



いないが、傾き始めている。

「それじゃあ、少し買い物付き合ってください」

「へいへい」

ずっと座っていた椅子と別れ、玄関の方へと進む。エコバックも忘れず

「おつ、坊主じゃねえか！ついに嫁さん見つけたか！祝いだ、持ってけ！」

「綺麗な奥さんだねえ。大事にせんとあかんよ？もちろん自分もね。栄養バランスしつかり考えんと。ほら、この白菜で鍋でもしいな。他の具材？買っていきんしゃい」

「うわっ、土郎さん、ついに彼女さんを.....しかも、こんな美人な。羨まけしからん！おら、呪いの品だ！ありがたく持っていけえい！」

「あー！おじいちゃんだあ！おかしちようだいっ！」

夕日が弱々しくも照らす道を多い荷物をなんとか持ちながら、帰路

を歩く。

買った物、何故かのお祝い品、呪いの品。当然右手だけでは持ちきれず、杏にも持って貰ってる。

「つたく、話聞かねえ奴らだよ、全く」

「ふふつ、とてもいい人達でしたね」

「いい人？俺を無償で働かせる奴らだぞ？」

「それを引き受ける士郎さんも士郎さんですよ」

「？ 困ってんなら助けんのが普通じゃねえのか？」

愚痴を呟きながらも最後まで付き合ってくれる。しかもアフターケアもしてくれるというお節介ぶり。好かれるのも頷ける。

頭は可笑しいが常識は備わっている。それが良い方か悪い方に狂っているのかは接してみなければわからない。地雷が何個かあるが、まあ、普段の会話で踏み抜くことはないだろう。

「そういう所ですよ、士郎さん♪」

困ったように笑い、ルンルン気分で歩いていく。これには士郎も困惑気味でついていく。

「っ、なんだ？」

一瞬、夜空の絵のようなものが見えたがすぐ見えなくなってしまった。いつかのフラッシュバックのようなものだろうか。

「どうしたんですか？」

「ん、いや、なんでもねえ」

少し記憶を漁るが、それらしきものはなかった。杏から声をかけられたことで思考をやめ、歩き始める。

「今日は皆さんを呼んで鍋パーティーでもしましょうか」

「折角だしそうするか」

「場所は士郎さんの部屋でいいですね」

「おい。後片付け、全部俺にやらせようとしてんだろ」

「大丈夫ですよ。ある程度は私も付き合いますので」

もう時期完全に日が暮れようとしているが、急ぐことはない。この瞬間をもっと味わうため。少しでも彼と一緒にいる時間を長引かせるために歩を進める。

ああ、今日もまた終わる。またいつか、なんて言えない。言う資格もない。でも、いつかは胸張って言えるようになりたい。彼負けないぐらい、堂々とと言えるように――

# M a t e r i a l b o o k 【一周年記念】

真名?? ?? クラス：役を羽織る者<sup>プレイヤー</sup>

召喚

「セイバー、千子 村正。召喚に応じ参上した。

鍛冶師なんだが 疑似サーヴァントってこともあって少しは戦闘出来る。だが、あんまり期待すんなよ?」

召喚（屍山血河舞台 下総国クリア後）

「セイバー、千子 村正。召喚に応じ なんだ、もう会ったのか。

ああ、そうだよ。千子 村正じゃねえよ。おおっと、早まんな。俺はお前の味方だ。それだけは絶対だ。

謎はあるだろうが まっ、仲良くやろうぜ」

召喚（隔絶特異点 諏訪クリア後）

「よお、久し振り。知ってるだろうが、?? ??。クラスは役を羽織る者<sup>プレイヤー</sup>。

信じるのはいいが、気を赦すなよ? 気を抜いたその時がお前の死際となるだろうよ。

てことで、さっさと歌野と水都を喚びやがれ」

バトル開始1

「おいおい、俺の性能知ってて出すのかよ 。。。いいぜ。お望み通り、その雁首落としてやるよ」

バトル開始2

「さてと 勝つぞ、マスター」

バトル開始3

「言つとぐが、マスター。俺はこれで手一杯だからな? そっちはそっちでなんとかしやがれ」

スキル1

「カッコイイことするには準備が必要不可欠だ。こんな風にな」

スキル2

「草薙剣を出せって？そりやあなしだぜ、マスター」  
スキル3

「あとこれ何回打つんかなー」  
アタックカード1

「はいはい、お望みのままに」  
アタックカード2

「気を抜くな、マスター」  
アタックカード3

「ダメージは期待すんなよ？」  
宝具カード1

「しかとその目に焼き付けやがれ」  
宝具カード2

「最期ぐらい俺だけを見といてもバチは当たんねえぞ？」  
宝具カード3

「よおし、やってやらあ。高速周回だ、ゴルア！」  
ダメージボイスなし

勝利ボイス1  
「戦闘終了だな。休むのはいいが、あんま氣い抜くなよ。戦闘は終

わっても戦場なのは変わりねえからな」  
勝利ボイス2

「勝利ってのは一時の状態を表すもんだ。それを努々忘れんなよ？て  
ことで、今だけはしやぐぞお!!」

勝利ボイス3  
「ふいー、カルデアのサーヴァントってのはハードワークだな。休み

ぐらいくれよ。一年ぐらい」  
退去1

「逃げろ、マスター！逃げて逃げて逃げまくれ！アンタは死んじや絶  
対駄目だからなっ!!」

退去2  
「後頼んだぞ。そんな顔すんなって。コレは俺のミスであってお前

のミスじゃねえ。さっさと顔上げろ」

退去3

「今日は、農作業があつてその後、そば作りしねえと——いや、これで最期だったんだっけ」

絆1

「なんだ、マスター？今日はなんも予定はねえ筈だがいや、予定がなくともいつでも来ていいぜ。」

絆2

「なんだ、マスターか。」

「いやまあ、アイツらぐらいしか此処に来ねえからな。それと変わりのんのマスターぐらいだ。」

絆3 式ってなあ、お前。そもそも付き合ってもねえよ」

「今日はなんの用だ？また、飯でも集りに来たか？」

絆4 まつ、いいさ。そんなぐらいの事なら、何回でも付き合つてやんよ」

「お前なあもつと、他にカツコイイ英霊がいんのに何でこつちくんだよ。」

「寂しそう、つて。俺は兎じゃねえ。あ、いや、兎は寂しさ程度で死なねえが違つ、そういう話じゃない。」

絆5 はあ、つたく変なマスターの所に来ちまつたな、こりやあ」

「どうだ、マスター。俺を散々引き摺り回した感想は？」

「そうかい。そりやあ結構。」

「まあ、いいさ。お前が夢見れるぐらいまで付き合つてやるよ。だが、勘違いすんな。最優先は俺が決めさせて貰うからな」

レベルアップ1

「元が元だ。最強にしたきや、もつとりソース寄越しやがれ」

レベルアップ2

「安心しろよ。貰った分はしっかりと働いてやる」

霊基再臨1

「よしつ、これで上半身裸からは抜け出せたな。」

くれぐれも、歌野、水都と一緒に組むときはあの霊基にすんなよ？  
したら、一生クエストに行かねえからな」

霊基再臨2

「変化なし。まっ、順調だな。このペースで頼むぞ」

霊基再臨3

「おおー」

こりやあ、建速須佐之男命の影響か？ようやく、力貸す気になったか、アイツ。

よし、マスター。次で最後だ。ラストスパートかけてこい」

霊基再臨4

「ようやく、って感じだな。

こっからは思う存分この力を人理のために振るってやんよ。まっ、一番はアイツらの為だな。

さあ、マスター。お前のサーヴァントがどれぐらい強いか、その目でよく見定めやがれ」

ボイス1

「好きなこと？そりやあもちろん 農作業？

やべえ！歌野に侵食されてきてる！助けてくれ、マスター！」

ボイス2

「人を道具扱いしてる人間、以上だ」

ボイス3

「俺はサーヴァントで、お前はそのマスターだ。共に戦うパートナーであつてもそれは絶対に忘れるな。

俺がもし、お前へ剣を向ける時は迷わず令呪を掲げろ。一瞬の戸惑いがお前の生死を別ける。

そんなことしない、ねえ。変な信頼すんな。俺は俺の主義に殉じて生きてるだけの奴だ」

ボイス4（白鳥 歌野所持時）

「どうだ？慣れたか、こっちでの生活は？」

なに？土がまだまだ よしっ、マスター。いい土探しに付き合え。レイシフトで現代ぐらいいに行きやあいい土見つかったら。ほら、さっ

？

さど行くぞ」

ボイス5 (藤森 水都所持時)

「まだまだ慣れてないみたいだな。まっ、ここはやべえ奴らがいるからな。変な奴いや、それについては後でリスト送ってやるよ。」

ボイス6 (シャルルマーニュ所持時)

「うえ、今日も周回かあ。はいはい、やってやる、よ。今の輝き、清光はまさか——うお！マジもんのシャルルマーニュじゃねえか!? いるんなら、いるって言うてくれよ！」

「まずは深呼吸、深呼吸。よしっ、話しかけに行つてくる！」

ボイス7 (千子 村正所持時)

「ん、って村正か。どうした、俺になんの用だ？」

「草薙剣を？おう、いいぜ。心置きなく見てくれ。」

「改めて見るとやっぱ、何処ぞの主人公だなあ」

ボイス8

「聖杯、かあ。別に願うことなんてねえよ。もし、手に入れた時はお前がお前の願いを叶えるんだな。」

「ちよつと、変な夢を見ちまったな」

ボイス9

「へえ、これがイベントってヤツか。想像以上の盛り上がりだな。」

「周回？いやいや、俺じゃなくバーサーカーと行ってこいよ」

ボイス10

「ほれ。今日はお前の誕生日だったろ。その祝いだ。貰っていきな」



## 花結いのきらめき【21】

いざこぎを終わらせた後??をこき使い、その日する予定だった依頼の片付けを完了させた。その後、御影がいるであろう病院にお見舞いへと全員で向かった、のだが。

「お見舞いに来たつてのにすまねえな。入院なしで退院だ」

病室を聞き出そうと職員に聞こうとしたところに御影が普段と変わらない様子で登場。その後ろからシャルルも顔を出す。

「それは良かったが、傷の方は大丈夫なのか？」

「問題なし、だつてよ」

「激しい運動控えろつて言われたろ。大人しくしとけよ？」

へっちゃらそうにする御影に釘を刺すように言う。実際、退院出来るぐらいの状態だが傷は深い。それもまだまだ閉じかけていないものだ。当然、そんな状態で動けば再度病院にお世話になることだろう。

「シャルくんは大丈夫？」

「ん？俺？」

「アンタもアンタで左腕怪我したんでしょ？」

「あー、アレはー」

怪我、というにはあまり損失が大きい傷だったな。シャルルの左腕はあの一太刀によつて消し飛んでいる。まあ、それも神樹からの万全なバックアップで形だけは治っている。

「ほれ、この通り治ってるぜ」

「透けてない？」

「いや、気のせい気のせいだぞ？」

樹と東郷からのジトーっとした視線をなんとか耐えながら、別の話題を必死に探す。

「おつ、そうだ。村正達は今日は何処に泊まる予定なんだ？」

「」「」

その質問を喰らい、沈黙する。引き攣った笑みで顔を見合うが、なんの案も出ないようだ。

「ちよつと待て。今、記憶掘り返すから」

その言葉を言い終わるや否や、すぐさま瞼を降ろし集中する。どうにかして、野宿だけは避けまいとこの世界に来てからのアイツの記憶を探す。

「どうやら、村正さんは他に宛があるようなので歌野さんと水都さんだけ案内しますね」

さらつと省かれる??に涙を禁じえない。これはアレですね。御影を殺そうとした罰ですね。甘んじて野宿しやがれ。

これにて解散。未だ思考している??とその復帰を待っている御影とシャルルマーニュ以外は病院を後にする。

「――よしっ。行くぞ、御影、シャルルマーニュ」

「何処にだ?」

「なんか俺も入ってなかったか?」

やつと復帰したかと思えば、要領を得ない指示で困惑するシャルルマーニュ。そして、何故か自身までも指名された御影。

「そりやあもちろん、お前の家にだよ」

というこゝとで、あれから車を走らせ俺達は丸亀市に来ていた。夜遅くだが、問題ない。明日は日曜日だ。??以外は余裕がある。

「黒耀、変な巡りだな。これも運命か?」

「ただの偶然だろ」

黒耀という名前に反応するが、ただの偶然として片付けられる。初代当主の名前を聞けば、それは確信に変わるだろうが、知る余地はないな。

「てか、俺の家系なんてほんとにあんのか？」

「俺が持つ記録が正しいならある。正しくなきゃ、まあ、そこはどうでもいい。さっさと呼び鈴鳴らせ」

「わかった」

デカイ門についているインターホンを鳴らす。

御影 士郎は自身の死を知っている。300百年経った今でも壁があるのが何よりの証拠だ。だというのに自身の子孫達がいる。ど

ないなってんねん。

「はい、何方様でしょうか？」

「御影 士郎だ」

『少々お待ちください』

「どうやら、使用人が出たようだ。御影 士郎という名前を聞き、少

しの間があつたが伝わったようだ。」

「なあ？ 今日ここに来た理由ってなんなんだ？」

「そりゃあ面白そうだったからだろ」

「はあ。」

応答待ちしている御影の後ろでコソコソと話す二人はさて置き、インターホンからガチャリとなにか切り替わる音がした。

『今変わった。君が御影 士郎本人で間違いないか？』

「そうだ」

『ふむ。立ち話もなんだ、入り給え』

その言葉と共に扉が開く。遠隔操作出来るのか、と関心している後ろ二人を残し、一人入っていく。

「俺達は霊体化してウロウロしとくか」

「だなつ。てことで士郎、初めての帰省楽しんでこいよ！」

「帰省、って別にここは俺の故郷じゃねえんだがなあ。てか、お前ら自由過ぎんだろ」

勝手に連れてきて、後はお前に任しまーす。とか、大赦でもしねえ

よ、と愚痴りながら門を潜り乃木家に負けず劣らずの屋敷へと歩いていく。

その間にシャルルマーニュと??は霊体化し、屋敷に侵入。これでもた罪が増えたな。

## 花結いのきらめき【22】

シャル、御影、ついでに村正が消えて二時間後。シャル宅では、1時という真夜中であるというのに明かりがついていた。

「シャル遅いなあ」

「ね〜」

リビングにあるソファーに二人して突っ伏し、シャルの帰りを待つ。

数時間前、御影んち行ってくるー、と送られたもののそれ以降なんの連絡もない。ちなみに西暦組も銀達と同じような状況になっている。え、歌野と水都？アイツらなら、心配せずに寝てます。

そんな時、二人のスマホの着信音が鳴る。

「ん・あ、シャルからだ。御影んちをキャンプファイヤーしてる？」

「ん・あ、そっか。」

この文面『を』ではなく『で』ではないのか。と、思いつつ楽しそうだなくとぼやく。唯一黒耀家について知っている園子は合点があった、というように夢の世界へ。

さて、時を遡り御影が訪問した直後から。残りの二人は霊体化を用い不法侵入し、屋敷に入り込んだ。

「やっぱ豪邸だなー」

「人生一回ぐらいは住みたいと思うが掃除が大変そうだよなあ」

霊体化を解き、乃木家に負けず劣らずの豪邸内を散策する。いや、

マジでコイツらなんで来たんだ？完全に遠足気分だろ。

「おつ、あそこ開いてるぜ。入ってみるか？」

「不用心だな」

「確認せず入んなよ」

他の扉と違い少し開きかけの扉を発見。入るかどうか？に確認を取ろうとするが、既に扉を開き入室していた。これにはシャルルマーニュもドン引き。

「物置部屋か。いや、これは」

中は埃っぽく、いくつものダンボールが積み上げられている。他には、と探している一つの写真立てを発見した。

「写真、てか俺にそっくり。友奈じゃん」

写真には？にそっくりな男性と髪色、瞳の色違えど友奈そっくりな女性が並んで写っている。

シャルルマーニュが写真を眺めている間、他にはと思い？が写真立ての周りを見渡す。

「おおつと、これは。家系図？うおお、初めてこういうの見るな」

地面に転がっていた巻物を拾い、開く。初めての巻物に若干テンションが上がり、書かれている名前を無視して巻物をじっくり観察していく。

「黒耀 勇斗。ここまで来ると偶然じゃない気がしてきたんだが？」

巻物に熱中している？は置いておき、シャルルマーニュが一番上に書かれている名前を読み上げる。その名前を聞き、熱中していた？も名前を見る。

「運命ってやつか？」

「へんてこな運命だな。まあ、多分ほんとに偶然なんだろうな」

偶然。これに関しては本当に偶然だ。天への逆手、人理の防人、などと云った特殊な称号者に与えられるものではなく、ただ子の未来を考えた母からの贈り物だ。

巻物をダンボールの上に置き、部屋を後にしようとしたが、扉に紙切れが貼り付けられているのを発見した。

「んつと、なにになに」

セロハンテープで貼り付けられた紙切れを??が取り、その達筆な文字を読んでいく。

徐々に先程まで上がっていたテンションが下がっていき、眉間に皺をよせていく。明らかに空気が重くなっているのを感じ、シャルルマトニユも書かれている内容を察す。

「御影と合流するぞ」

「わかったが、何処いんだ？」

「？」

「？」

「——最期に言い残すことは？」

彼の金色に輝く瞳はこの行為が戯れではないと騙る。手には何人も切り裂く刀。その矛先は愚者への首元へと。

「なっ、何故だッ！」

感じたことのない殺気に一瞬尻込みをするが、流星は現黒耀家当主。すぐさま立て直し、御影へと問う。

「誇りの侮辱、死者への冒瀆、子への凌辱。逆にテメエはなんで生きてんだ？」

土居家と郡家を侮辱し、初代当主と聞いた黒耀 勇斗をなにも成さなかった無能と評し、自身の娘である者への行為。どれも人として、ひいては人類が忌避すべきことだ。

「過去の者には関係ない！」

「ああ、俺には関係ないことだ。だが、赦さん。

俺の子孫とやらが、繁栄し、富を築こうが、それはお前らのものだ。そして、この罪もお前らのものだ。故に死んでけ」

最早ここまで。根本から違う者達とはわかりあえないとこれまで

の経験で理解していたが為に、これ以上の会話は無駄とし刀を振るう。

「——駄目ですよ、士郎さん」

その声に思わず、刀を止める。そして、声が出た方向へと顔を上げる。

今の動作だけで、傷が開きかけ服に血が滲む。

「そこのお前、フードを上げてくれないか？」

先程までいなかった場所にフードを着、顔を隠している女性が立っている。ただ、聞き馴染みがある優しい声だ。

「ふふっ」

御影からの問いの返答は柔らかい笑い声。それだけの動作で誰なのか気づいたのか、刀を粒子とし普段の御影へと戻る。

「はあ、おい、その使用人。コイツの両手足をなんかで縛つといってくれ」

「いっ、いえ、ですが」

「そんなことしてみせろっ！貴様は路頭に迷うことになるぞ！」

「やれ。お前が路頭に迷うことはない」

その瞳を見ているとただのでまかせではないように感じ、使用人が着ていた服を破り、じりじりと当主へと近づいていく。

「や、やめろ！私に近づく——ぐえっ！」

「ほら、今のうちだ」

今度は傷が開かないようにゆっくりと動き、当主の背中を踏み、床へとその顔を擦り付けさせる。

■ その間に使用人が当主の両手足を縛り上げていく。

■ つ、できました」

「助かった。そんなじゃ、お前はソイツ担いで他の使用人共々外に出とけ」

「は、はいっ。」

当主を引き摺るようにして退室していく。そして、部屋に残された御影とフード女。御影が改めて相對する。

「いろいろ聞きてえことあるが、とりあえず、子供部屋に案内してく



れ」

「会うんですか？」

「もちろんだろ」

「そう、ですか」

.....

綺麗な洋服。それにつり合うような端麗なお顔。そして健康的な肉體。

自身の捌け口に使っていた母が亡くなった父のいい慰みものとして日々を過ごしてきた。

外を知らず、自分以外の子と話したことがない人生。ただ、溜まったものをぶつけられる毎日に疑問を感じなくなってしまった自分が何よりも怖い。

そしてまた今日も扉が開く。

「うおっと」

いつも通り足にしがみつき、顔を擦り付ける。こうすれば、早くこの時間が終わる。

「なに、土郎さんを誘惑してるんですか」

「——ぴっ」

恐怖で体が動けない、久し振りに体験した。前は初めてお父さんが息を荒くしながら私に跨った時だろうか。

「小さい子に大人気ねえぞ。ほら、お前は一旦離れてくれ」

その声を聞き、お父さんではないと気づいた。この部屋はお父さん以外入室不可となっており、本来ではありえないことだ。だけど、助けを求めようなんて思わなかった。

「ほへえ、えれえ別嬪さ——」

「士郎さん？」

「えつとな、今から俺達はこの家ぶつ潰すんだけどな。お前は死にたいか？」

「この家をぶつ潰す、と聞いて思わず喜びの舞をしたかった。この人が絵本で書かれる白馬の王子様かと思えた。」

そして、その問いの答えは二年前から出ている。

「生きたい、です」

「つてよ、ひなた。後頼んだ」

「フード意味ないじゃないですか。わかりました。この子は私が責任持って育てます」

上里 ひなた。今生の名は上里 柚葉。いくらフードで正体を隠そうが、御影にはバレバレだ。隠すならば、自身の本音だったな。

「そんじゃ、俺はシャルと村正と合流する。まつ、たまには顔見に行くよ」

「いつでも歓迎します」

二人に背中を向け、手を振りながら別れる。少女も力強く手を振り返すが、彼がそれに気づくことはないだろう。

その十分後。何度かすれ違いはしたもののなんとか合流することが出来た。そして、なにがあつたかの情報を伝え終わり、次の議題に。「で、この屋敷どう潰す？」

「俺がジユワユーズするか？」

「それは勿体ないだろ。そもそもこの屋敷に王の剣を振るう価値はない。」

「んじゃ、どうする？」

「燃やすか？」

「それだ！」

と、いうことで御影んちをキャンプファイヤーにした。ちなみに送ったチャットは『に』を打ち忘れていたようだ。

## 最期ぐらい【閑話】

神世紀七年。もう時期、私が理想として掲げていた大赦の土台作りが終わる頃だったろうか。

日々、激務を熟しながら勇斗の小学校を考えていく。ここは無難に近所の、と思う私と。由緒ある学校へと通わせるべきだと頭が硬い私がいる。

私服で通う勇斗。小さいながら制服を着熟す勇斗。ああ、どっちも愛くるしさが爆発してます。若葉ちゃんの服を決める時と同等の胸の高鳴りを感じますね、これは。

「ねえねえ、おかあさん」

「はい、お母さんですよ?」

机から垂れ下がっている裾をぐいぐい引つ張ってる勇斗へ視線を向ける。きよとんとしながら土郎さん譲りの金色の瞳は私だけを映している。

「トイレ行ってきていい?」

「いいですよ。ただし、知らない人には絶対についていったらいけません」

「はい」

トテトテと小走りで

ひなたッ!

ああ この声 ようやく、私 は

——ひなたッ！

「——っ、若葉、ちゃん。」

曖昧だった視界が良好になっていき、夢現から覚める。少し横に視線をずらせば炎の海。どうやら、私は死にかけていたようだ。

「テロによる爆発を喰らった！ひなたは早く避難を。待て、勇斗は何処だ？」

「勇斗・勇斗は、——ッ！」

「っ、ひなた！そっちは危険だ！」

未だ目眩がする意識を奮い起こす。今はそんなことを気にする余裕なんてない。一刻も早く勇斗を見つけないといけない。

呼吸は最低限に、炎の隙間を掻い潜りながらひた走る。大赦の内部構造は脳にある。

——大丈夫。勇斗は生きている。きっと大丈夫だ。あの子は今年で五歳、口を塞ぐ術もある。だから、この曲がり角さえ曲がってしまえば。っ！

「勇斗っ！」

丁度トイレの出入り口に倒れている勇斗。そして、それを己の肉体で守る一人の神官。ただそっと、勇斗の口にハンカチを添えている。

「——ようやく、来てくださり、ましたか。」

「勇斗は？」

「今は、頭を打ち、気を——。右腕に、火傷・神経は、——大丈夫、です。」

もう意識がはつきりしていないのか、途切れ途切れになりながら勇斗の様態を口にする。

「あと、数秒後に——敵が、きますっ。——足留めは私が——」

「、老骨では、ありますが——逃げる時間ぐらい、作りましょう」  
最早焼け落ちそうになっている右手に拳銃。焼け爛れている左手には一本のナイフを。

「わかりました。勇斗のこと、本当にありがとうございます」

「——いえいえ。これでも、嘗ては教師だったのです。子には、未来

が——、いえ、これは過ぎた話でしたね。それでは、お行きなさい  
てください」

どこか遠い目をした瞳を見届け、その場を後にする。例え、勇斗を  
抱えたとしてもスピードは落ちない。無事逃げ切れる。逃げ切らな  
ければいけない。

必要な犠牲だった。そんな筈がない。犠牲はいらぬものだ。だ  
というのに、この結末はあまりにも。

あと何秒生きれるかすらわからない体で、敵を待ち伏せる。必ず  
や、仕留める。仕留めなければ、立っている意味がない。

接敵まで、後5——4——3——2——

「1」

「ツ、キッ、サマアッ！」

ナイフで首元を一閃。残り二人に気づかれるが、すぐさま今殺した  
者を盾にし、拳銃を二人目へと向ける。

「2」

「あっ」

脳みそが壁へとぶち撒けられる。血は炎によって瞬時に蒸発。残  
り一人はあまりの出来事に体が止まっている。

「3」

「や、やめっ——」

心臓を一刺し。

残りがいないか確認した後、武器を投げ捨て血塗れになった両手を  
壁に寄りかかりながら眺める。

「どうしてこうも、望む才は与えられるなかったのか。皮肉なもので  
す。私は教師だと言うのに——」

その言葉を最期にずりずりと壁から落ちていく。  
もう一酸化中毒により、頭など回っている筈がないというのにその男は困ったように笑っていた。

重たい瞼を開け、即座に理解する。また、自分は意識を失っていたようだ。そして、近くに勇斗がいなかったということも。

「——ッ！勇！っ!？」

かかっている布団を飛ばす程の勢いで体を起こすが、胴体に奔った激痛に思わず顔を顰める。

「寝てなさい。貴方も怪我人よ」

そう隣で寝ている千景さんによって諭される。どうやら、ここは病院のようだ。

「千景さん。勇斗はどうなりましたか？」

「怪我はしてるものの無事よ。頭を打った時にいいクッションがあったんでしょうね」

「いいクッション。本当にその通りです」

あの人には感謝してもしきれない。でも、今頃あの方は。

「大赦の残りの人員は百人程。どう？立て直せる？」

「立て直します？それよりも、襲撃者の正体は」

「さあ？乃木さんが全員殺したからわからないわ」

「若葉ちゃんが」

若葉ちゃんが全員殺した。勇者システムもなしに？いや、そんなことよりも若葉ちゃんが人殺しを。そんな訳、ある筈が。

「事実よ。呑み込みなさい。」

スポーツで言う所のゾーン状態だったんじゃないかしら、あれは「そう、なんですか」

その後の会話などなく、千景さんは私に背を向けて寝てしまった。

私も回復に努めようと後を追うようにして瞼を降ろした。

観衆の声援がここまで聞こえる。それも当然、新たな時代の門出なのだから。

ああ、やっとここまで来ることが出来た。300年間を経て、ようやく形になったこの光景。例え、そこに私が立っていないくとも悔いはない。

「今日は一段と機嫌が良さそうだな」

「ふふっ。そう見えますか？」

「ああ、怖いぐらいにな」

そう話す彼は天の神打倒の立役者、シャルルマーニュ。今回は威厳を出すため、と言って堅苦しそうな鎧を身に纏っている。

「夢が叶えば、誰だって嬉しいですよ。ねえ？」

「そういうことか。それで、どうだ？数多の屍を築いて叶えた夢の光景は？」

やはり、彼は私のやり方に賛同してくれないようだ。けれど、それでいい。きっと彼はその在り方を死ぬまで変えないんだろう。

「認めたくねえが、アンタの行いは正しいものだ。だからこそ問う。」

「アンタはどうしてその夢を叶えようと思ったんだ？」

「それは貴方がこれからの人生で見るものです。きっと、貴方ならわかると思いますよ」

神の加護などなく人が手を取り合って切磋琢磨していく。本来あるべき人の姿。きっと、この先にある筈の光景。

「自分を悪者にしてまで見たかったのか？」

「はい」



「そうか」

諦めたかのように肩を竦める。そして、話はここまでとばかりに私に背を向ける。

「それでは、私はここで降ります。後のことは貴方達に全て託します」  
「ああ、託された」

その力強い声と共にシャルルマーニュも舞台へと上がる。きっと彼なら、という淡い希望があった。その希望が、彼がシャルルマーニュだからなのか。それとも土郎さんに似ていたからか。それは私にもわからない。

## 花結いのきらめき【23】

日曜日、勇者部部室。今日も今日とて勇者部は活動日であり、村正以外の者は全員集合している。

村正の所在は誰も知らず、本当に野宿したかは不明だ。

「黒耀家が全焼したみたいですね」

ひなたのその言葉に雷が落ちたかのように反応する御影。シャルルは王様状態なためか然程動揺はしていない。

「廃棄物は焼却処分に限るな」

「しつかり分別しないと駄目よ?」

「もちろん、わかっているとも」

「なんでゴミ捨てる話に?」

ゴミ捨て・まあ、あながち間違いではないな。不用品はゴミ箱に、でなければゴミが部屋に溢れかえってしまう。つまりそういうことだ。

「はいはい、物騒な話はそこまでにして話に入るわよー」

「はい」

「了解っス」

風の合図と共に各自席に着く。新たに加わった諏訪組によって勇者部総員十七名がどうやってこの狭い部室にいるかは不明だ。解き明かそうとは思わないのだろうか。

「こき使え、って言っていたヤツがいないわね」

「確かにそうだな。歌野、水都、なんか聞いてるか?」

「なにも聞いてないわ。ほんとに野宿したのかしら」

「私もです」

まさかの二日目から欠席とは。不良少年待ったなしだな。当の本人は今頃パフエでも作っているのだろうか。

「ん〜まっ、いいわ。そんじゃ、早速――」

今日の依頼であつたお婆ちゃんからの要請へと向かつた御影。散々パシられたが、傷が開く程のものはなかつたためなんとか熟せた。そして、大量のバリエーション豊富な飴を報酬として受け取つた。

「つたく、あの婆ちゃん是人使いが荒れえ」

一人、愚痴りながら夕暮れ時のあぜ道を歩く。右脇には飴が詰まつた瓶が抱えられている。そういう部なため、無駄働きでも良かったが断りきれなかつた。だからこうして、片手を塞いで持ち帰っている。本来なら一人の時にはこんなことはしない。

「——やつ。奇遇だね、四国の大英雄」

ほんの数秒前まで一緒にいたかのような気さくな挨拶。だが、当然彼女とはそんな関係ではない。なんなら殴り合う関係である。

「お前は一々俺のことを四国の大英雄だとほざいてんな。そんなにこの称号が欲しいのか？」

「いや、全然そんなのじゃないよ？ただ私は凄いな、って思つて尊敬してるんだ」

そこまでの事はしていないと本気で思つてる御影にとってはそんな大それた称号を名乗るのは心外である。実際は称号顔負けの事をしているのだが。

「へえ、そうかい。それで？今日は俺になんの用だ？」

構えは一切変わらずだというのにこの威圧。まるで頭部に銃口を突きつけられたような感覚すらある。

「今回は戦闘目的じゃないよ。してもいいけど、貴方がその体ですれば、間違いなく死ぬよ？」

「死ぬ前にテメエの首折つてやるよ」

さらに威圧が重くのしかかる。これには流石の赤嶺も肝が冷えたのか、煽りはこれまでにし本題へと入る。

「ほんとの目的は質問しに来たんだ」

「答えられる範囲で応えてやる。さつさと言いやがれ」

戦うのは得策ではないと判断し、質問を答える方へとシフトチェンジ。威圧を消し、赤嶺の言葉に耳を傾ける。

「村正さん、最期はどんな感じでした？」

「あんな奴でも芯はあった。それに殉じて死んだのであれば、後悔はねえだろうさ」

「そっか。村正さんは潔く逝っちゃったか。それは良かった、のかな」

「さあな。良し悪しは当事者のみが語れるものだ。俺達がいくら考えでも仕方ねえ」

あの時、彼が笑っていたのか。幸せだったのか。そんなことは誰にもわからない。だけど、満ち足りていたと思いたい。そうでなければ悲しすぎるだろ。

「それじゃ」

「子供は暗くなる前に帰るんだな」

「うん」

何気なく言い放った別れ際の定番フレーズに何か思う所でもあったのだろうか。目を見開き、なにか御影に別の者を重ねるかのような間があった。

まあ、そんな切り捨てた思い出はあるはずがなく。走り去っていた風と共に彼方へと飛ばされてしまった。

『子供は暗くなる前に帰るものです。さつ、帰った帰った』

とても優しい声と共に脳内を駆け巡る思い出。だが、いくら思い出そうが彼はいない。もう死んでいるのだから当然だ。だと言うのに

私は――

ずつと取れない取っ掛かりが出来た。御影が言い放ったあの言葉のせいだ。

「やっぱり、親子だなあ。」

そうボヤきながらマン・シヨンの階段を上がる。そして、角にある部屋の扉の前まで行き、鍵を開け玄関へと上がる。

ここは造反神によって用意されたこの世界での私の家。前までは同居人もいたが、とうにいななくなった。

「ご飯何にしようかなー、と考えながら靴を脱ぎ、居間へと歩いていく。当然電気などついており、おり？」

「――よっ、おかえりさん。」

「はい？」

「死んだと思っていた者が生きていた。その場面に出くわした当事者の気持ちを百文字で答えよ。」

「無理だろ。最低でも五百字はいるぞ。」

「俺は真正銘死んだが、アイツ俺は生きてる。まっ、そんな所だ」

「いやいや、そんな説明じゃ誰も解んないよ？」

「いやー、俺も家なくて困っててさ。てことで元同僚のよしみで助けてくれ」

赤嶺の疑問など全て無視。答えようとすれば、日が明けるといふこともあるが本心としては説明したくない。元々?? ??は死んでいなかった。それでいこうとゴリ押しを選択したようだ。

「あー、もう。早くご飯作って。私、肉じゃがで」

「あい、わかった。一時間ぐらい待ってろ」

「ここは甘んじてこの妄想を受け取ることを了承。というよりかはそれ以外が選択不可能であった。なんと狡い。」

「そんな狡い奴はのっそり立ち上がり、キッチンへと歩いていった。オーダー通り、肉じゃがを作るのだろう。」

「はあ。」

「そんな後ろ姿を眺めながら、溜め息を一つ零した。」

## 花結いのきらめき【24】

飽溢れかえり事件の翌日。即ち人類が忌み嫌う月曜日だ。休み明けの学校程嫌いなものはない。しかも襲撃つきというダブルパンチ。「いや、授業サボれるからアリでは？」

「なに変な事を言ってるの。御役目中よ、銀」

てことで樹海だ。敵は星屑だけしか観測されているが、どうせバテックスもくるだろう。本来なら死を覚悟して挑む程の物量だが、こちらに聖騎士帝と四国の大英雄、おまけにただの一般人がいる。うーんこの、一般人の場違い感。

「確かに、この世界だったら現実への影響ないし、過剰戦力だし。目一杯時間潰すか」

「ほら、未来のアタシもそう言ってるんだしさ」

「駄目です。駄目ったら駄目です」

「え〜」

いつもいつもシャルルと御影によってRTAしているため然程実感はないと思うが――

「そもそも樹海化中はあつちの時間止まってるよ〜？」

「あつ、そういうええばそうだった」

そういうことだ。移動時間含めても数十分程度しか授業時間は潰せない。諦めて頑張ってください。

「雑談はここまでにしよう。もう時期奴らが来るぞ」

若葉のその言葉に勇者部総員で気を引き締め、いや、なんか変な奴らしいな。

「ちよい待ち、シャル達はなにしてんの？」

「キャンプファイヤー」

「おい、シャル。もうちよい火力上げてくれ」

「了解した」

花凜の言葉に単語で返し、シャルルの火元素でさらに火力を上げ

る。もちろん火種は樹海の根だ。これには神樹内にいる神様方も大爆笑。

「わあ、温かい」

「だねえ」

「友奈sは戻ってきなさい」

火の側に行く高嶋と結城。近づき過ぎればシャルルと御影の静止が入るので安全だ。

ほのぼのしている友奈sは無情にも風先輩が引き摺りながら連れ戻していった。

「マシユマロっ、マシユマロっ」

「おっ、いい出来だ」

何処から、そもそも何故持っているのか不明なマシユマロを鞭に刺し、キャンプファイヤーで上手く焼いているのはもちろん農業王。ちなみに村正もマシユマロを焼いている。

「水都さん、やっぱり駄目でした」

いつの間にか水都と仲良くなっていた樹はがくししながら、歌野と村正の手綱を握れなかったことへの自身の未熟さを理解する。

「こっちのサボりは一応理由わかるけど、そっちの二人はなに？」

御影の肩に手を置きながら何処を眺めているかわからないシャルルとマシユマロ食べてる村正。千景でなくとも一、二箇所ツツコミたいだろう。

「マシユマロあるだろ？つまり、そういうことだ」

「敵が来るまでの時間潰しだ」

「シャルル君はわかったけど、えっど？」

「大丈夫だ、須美。アタシもわかんなかった」

マシユマロがある「さぼり、つまりどういうことだ？この答えは園子でもわからず、首を傾げる。かわっ！

「はあ」

「なにその、あつたまわりいなコイツら、みたい溜め息と目は。潰すわよ？」

「怖すぎだろ」

でつけえ溜め息をすると目を潰されるようだ。世紀末すぎだろ、この部。

「さて、出陣だ。切り替えろ」

「いつてらー」

「貴様も立て」

「よしっ、やったるかー」

「貴様は動くな」

もうめちやくちやだよ。声と顔が同じというのはややこしいな。村正と御影を見て、改めてそう思うシャルルだった。

「士郎さんは休んでいてくださいいね」

「タマに任せタマえよっ!」

「おう、頼んだ」

ここは素直に座ることにし、シャルルへと目配りをする。もしもの時はジュワユーズでも使うから心配はないとは思いが念の為だ。

「はいはい、駄々こねないでレッツラ——」

「おいおい待て待て——!」

未だ座っている村正の襟を掴み、左足を前。そして体を力一杯反らせて——

「ゴー!!」

「ああ、空が近い——」

勇者の身体能力に投げられたのだ。当然、星屑の所まで一直線。なんなら、そのままのスピードでぶつかるだろう。

「あれ、普通に死ぬんじゃない」

「フツ——!」

「お、追いかけるぞっ!」

シャルルが魔力放出をしながら全速力で飛翔。その後を若葉の号令と共に走り出す。

さて、視点を村正へと変えよう。初の戦闘なんぞな。

「ったく、やってくれたなあ・アイツ」

後数秒で星屑へと接敵する。だが、動揺はない。戦闘経験でならあのシャルルマーニュよりも上であるが故に恐怖などない。



「手始めだ」

二刀、手に一刀ずつ握り締める。その間に目前に星屑が迫る。

「——武蔵、見事なり！」

怒涛の4連撃。×に一刀を刺し込み、さらに殴りと共に深く入れる。それにより星屑が消滅する。

「つと、こっからだな」

根に降り立ち、迫りくる百もの星屑を睨む。手には身の丈程の大剣。

「おらっ、——よ！」

大雑把に全てを引き出し、振るう。これで全て消滅。であれば良かったが、これが一般人の限界だ。

十匹程度は死滅するが、残りの大半は無傷で減速などせず口を大きく開きながら迫りくる。

「馬鹿の一つ覚えだな、天蓋」

再度大剣を握り締め、地面へと刺す。そして根ごとひっくり返し、木くずと突風により星屑を弾き飛ばす。

「射出できれば良かったが、生憎魔力量が少ないんでね」

ちまちまと出てくる星屑を一匹一匹全てを引き出し、殺していく。御影であれば一刀で十体は持つていけるが、あれは例外だ。

「さて、ここいらでいいな」

述べ三十八体。消費した刀は五十六本。倒した数の倍ぐらい消費しているのに溜め息をしながら、後ろへ飛ぶ。

「こんぐらい時間稼げば——」

「——剣の前に平伏すがいいッ！」

疑似勇士と共に爆裂音響かせ星屑を蹴散らしたのはもちろんシャルルマーニユ。

やはり、ハイサーヴァントの霊基。俺のような戦闘向きではない英霊とは大違いの魔力出力だ。

その後、勇者達が到着し、星屑とバーテックスは蹂躪された。

「」

その間、御影は虚ろな目でキャンプファイヤーをずっと眺めていた

のは語るまでもない。

花結いのきらめき【25】

前回の襲撃から二日後の放課後。依頼といった依頼がないためか各自部室でだら〜つとしていて。年相応で良きかな良きかな。

「改めてこう見ると精霊ってのはバラバラなのね」

そう呟いたのは精霊が存在しない時代から来た白鳥 歌野。もちろん勇者システムがアップグレードされていることもあつて彼女にも覚という精霊は追加されている。

「牛に武士に狐に 綿毛？」

「木霊ですっ」

「剣もありますよ」

「いや、これは精霊ではないのだが ．．． まあ、それでいいか」

もう一種の百鬼夜行だな、この景色は。軽く二十体はいるだろうか。

悪霊、鬼などの不である存在が多数だが、勇者システムに納められているためかかなり可愛らしいビジュアルになっている。

「こんなちつこいのがバーテックスから守ってくれる時代になるなんてな」

「だなあ」

「誰見て言ってるんだ、士郎？」

バーテックスの攻撃から ． 特に一撃必殺級の初見殺しを防げるのは、デカイ。毒霧とか針毒、などなど。

「．．． そう言えば、士郎の精霊を見たことがないな」

「あー．．． それは」

御影 士郎の勇者システムも歌野、西暦勇者と同じくアップグレードをされている。なら、精霊の一匹は彼を守護するためつくのだが ． 一度も防いだことはないな。

「——私だ」

「!!?」

「小さい」

「おじさん?」

一斉に声がした方向へと視線を向ける。そこには机が置かれており、さらに集中して見れば、なんかちっちゃいおじさんが座っている。顎の髭が長いのが特徴的だ。

「おじさんではない。そもそも、私に歳の概念はない」

「なんか語りだしたぞ」

「だねえ。ハエ叩き取ってきた方がいいかな?」

「待って、そのうち。もしかしたらゴツ、ゴゴ、ゴキ、の親戚かもしれないわ」

「ひえ」

「待て、その勇者。私は確かに生命力は高いが、そんなものの親戚では断じてない」

こんな流暢に喋るゴキブリがいてたまるか。軽く失禁してまう。いやガチで。

「貴方はアレがなにか知ってるの?」

「知るか、あんな奴。俺も初対面だ」

「あんな奴っ!? 酷くないか!」

「お、おう、すまん」

尤もな怒りに驚きながら一応謝罪する。その謝罪を聞き入れたのかは不明だが、一つ咳払い。

「さて、大分話が逸れたな。本題にいかせて貰おう」

閑話休題、閑話休題。

「まずは名乗ろう。私の真名は建速須佐之男命、御影 士郎の精霊をやっている」

「なに」

「さっすが、士郎。ビッグネームな精霊持つてんな」

「神様、それだったら流暢に喋れるのにも納得が」

「これは偉いことになりましたね」

「」

建速須佐之男命という名に驚愕する土郎を除く西暦組。だが、それとは正反対にそれ以降の者達はピンと来ていない様子。それもその筈。なぜなら――

「スサノオノミコト。聞いたことないけど、何処の神様？」

「？ 建速須佐之男命をご存知ないんですか？」

「ないわね」

「私も〜」

「すいません、ないです」

「私も聞いたことないよ」

「私が知らない神様がいるだなんてっ！」

「どういうこと」

「まあまあ、知らないことは恥ずかしいことじゃないんだからさ。落ち着けて」

「後で一緒に勉強してやっから」

「私もする〜！」

どうやらシャルルを除く神世紀組は建速須佐之男命の伝承どころか名前すら知らないようだ。原因は勉強不足、ではない。

「そう狼狽えるな、勇者達よ。原因は私にある」

「その原因は」

恐る恐るではあるが水都が建速須佐之男命に問いかける。

「私は？、いや、千子 村正だったかアレ同様世界から名前はあるが、存在自体が消されている。何処からか与えられた知識を見るに神世紀298年か？多分そこいらだろう」

「アタシらの時代じゃん」

「貴様達はギリ範囲外だ」

ちらつとシャルルへ視線を向け、すぐさま戻す。

神世紀298年。それは?? ??がシャルルマーニュとしてこの世界に來た年だ。薄々気づいてるかもだが、シャルルが最初に会ったお爺さんの正体は建速須佐之男命ということになる。

「須佐之男。何故、今になって姿を現した？」

シャルルが問いかける。

御影は軽く二回は命に関わりそうな攻撃を受けている。その内の一回は実際に死にかけている。

「情報量が多くてな。処理に大分時間を要した」

「その情報とはなんだ？」

「現状、経緯、打開策。そして勇者を守れ、とのことだ。故に私は御影士郎を護衛する」

「その言い方。貴方は士郎さんの精霊ではないんですか？」

精霊とはどんな時でも勇者が死なないように発動する。そこに精霊の感情、勇者の意志などは関係ない。にも関わらず建速須佐之男命はまるで自分のやりたいように殺っているような感じがする。

「まあ、そうだな。私は元来剣に宿っていたものだ。御影 士郎のはなく、村正のな。」

「草薙剣に。ああ、なるほど。あれは、そういう。」

一人、納得したように目を細める御影。そんな彼に気づいたのは高嶋のみだった。

「であれば何故、村正を守護しない？」

「そんなの決まっているだろう。奴が勇者でな——」

その言葉を遮るようにして須佐之男へ鞭と共にこの場を支配するかのような殺意が向けられる。

「はいお口チャック。その先を言えば。」

「どうなる？」

「落ち着け、白鳥。それは精霊と言えども神だ。あまり軽率な行動はしない方がいい」

「、はあ」

「澁々といった感じではあるものの鞭を下げ、勇者服から制服へと戻る。それと同時に身構えていた御影も姿勢を戻す。

「クラスとは難儀なものだ。こうも勝手が違うとは」

「クラス。」

「なんのことかしら。」

「さあ？」

ちなみに建速須佐之男命のクラスは騎士セイバーとなっており、基本は紳士

的な言動や立ち振る舞いが多い。だが、勘違いするな。建速須佐之男命は荒ぶる神。

「本来ならば私に殺意を向けた者ならば、宴の慰み物と——」

シャルルは即座に換装。御影は傷を開かない速度で立ち上がり、戦装束へと。そして自身の得物を——

一刀、窓を突き破り須佐之男へと飛翔する。

窓の側に座っていた西暦組へと窓の破片が飛び散るが精霊によって守られる。ひなたへと飛び散った破片は士郎が左腕で全て防ぐ。もちろん刺さり血が出るが、気にせず須佐之男へと歩み始める。

「今回もか」

その場から一步も動かず、軽く振った右手の風圧のみで弾く。風圧で弾かれた刀は水都へと当たりそうになるもその前に粒子となり消えた。

「——俺に喧嘩売るの好き過ぎじゃないか？」

粒子が集まるようにして須佐之男の前に??が立ち塞がる。けれど、その姿を須佐之男は鼻で笑う。

「この程度で一々座から這い上がってくるな、煩わしい」

その言葉と共に??が目視出来ない速度で眼前へと近づき、その拳を振るう。その攻撃を一切の防御なく受け、廊下へと飛ばされる。

「すまん、散らかした」

殴られた後の言葉がそれでいいのか、と普段の勇者部なら誰かしらから飛んできたと思うが今回はないようだ。

たった一撃、魔力強化などないパンチ。だと言うのに、受けた本人は粒子となり散っていく。無論、退去だ。

「圧倒的までの戦力差だというのに、これでも負けを認めないか。だから、貴様とは反りが合わんだ」

「ああそうかい。だから、お前は俺に勝てねえんだよ」

「なに——、そうきたか」

薄ら笑いと共に消失。その姿に空白を開ける。それだけで須佐之

男の敗北が決定した。

須佐之男を全方位から包囲する十二勇士。ジュワユーズを首元へ突きつけるシャルルマーニュ。そしてもう時期辿り着く御影 士郎。完全に詰みだ。

「降参だ。今後一切私は危害を加えんし、許可なく喋らない。それでいいだろうか？」

「いいだろう」

「ふう」

約束を破る、闇討ちなど考え得るが須佐之男は騎士のクラスに収まっている。であればその選択肢を取る可能性は小さいと考えた結果、ここは武器を納める。だが、十二勇士は霊体化しない。もしもの時のためにもな。

「っ——！」

「あつ、うたのん！」

戦いが終わったと判断するや否や部室を飛び出し、何処かへと走り出す歌野。その後ろを水都も追いかける。

この間、実に1秒程度しか経っていない。正に怒涛の出来事に一同騒然である。

「さて、早速だが話せ。今のはどういうことだ」

「どうもこうもない。奴は以前から私が白鳥 歌野、藤森 水都に危害を与える予備動作をすれば、座から這い上がってくる。いつ何時でもな」

完全なるセコムである。ちなみに??は単独顕現を有していない。つまり、気合のみで座から這い上がっている。それ故に少しの攻撃でも退去に直結する。

「ならば、先程の村正は新しく召喚された者か」

「そうなるな」

村正の生存確認よしっ いや、死亡してるから ああもうややこしいな。

「ちよつと待て お前らはなんの話してんだ？」

そう問いかけるのは現在進行形でひなたによって左腕に刺さって



いる硝子の破片を抜いてもらっている御影。その問いにやってしまった、と思いつつ重い口を開く。

「座とは過去、現在、未来に名を遺した英雄。偉業を成した者達が記されたものだ」

「召喚つてのは？」

そこへ畳み掛ける風先輩。

「一種の降霊術だ。本来存在しない者の楔を世界へと穿つ」

影法師云々はカット。そこまで話せばさらに話がややこしくなる。もうこの時点で何人かはお茶で一服し始めている。

「貴方は本物のカール大帝シャルルマーニュ、なんですか？」

カール大帝か否か。その答えに全員が注目する。既に答えを知っている中銀、中園子は行く末を見守る。

「大帝マクスの名を借り受けた者。それが俺の正体だ」

とあるカフェ、と言うよりは以前御影と高嶋が訪れたカフェと言った方が伝わるだろう。

やはり、知名度とは凄いものだ。平日だと言うのにほぼ席は埋まっている。

「ほれ、テラス席のだ」

「了解ですっ！」

当然そうなれば厨房は大忙し。まあ、コックは一人だけなのだが。よくもまあ一人で回せるものだ。

「ふう」

これで今多されているオーダーは仕上げた。東の間の休息を、と思いい吸着性抜群の手袋を脱ぎ捨てる。

最初、この記憶を読んだ時はやべっと思つたがなんとかなるものだ。それ以外にもツツコミ所沢山だったが、まあ、いいや。

また一人扉の鈴を鳴らす。

「はあ、つ、」

「ぜえ、はあ、んっ、う、うたの、ん、」

肩で呼吸する歌野と水都。一瞬、店内の視線を釘付けにするがすぐさま視線を戻していく。

「うお、なんで此処に歌野と水都が、どうした？なんかあったか？」

異常事態か、と心配になりながらカウンター席の向こう側から身を乗り出しながら声をかける。ちなみにこの店は元々ラーメン屋のため構造がラーメン屋のそれである。

「よ、つか、た、あ、く、」

「はふう、」

「なんだなんだ？」

「村正さんの知り合い？」

「そうなんだけどなあ、どうしたもんか」

カウンター席にへたり込みながら脱力する歌野。それに続き盛大な安堵の溜め息を零す水都。まあ、傍から見れば不思議でたまらないだろ。

「はあ、しょうがねえ」

再度手袋をつけ、厨房へと入っていく。その数分後、巨大なパフエを持って出てきた。

「ほれ、二人でコレでも食って落ち着きやがれ」

ゴトツと音がする程の質量。これならば二人であったとしても充分だろう。

「わあ、」

「いつ、ただきまゝす！」

即座にかぶりつく歌野と恐る恐るスプーンを運ぶ水都。それを見守る村正。完全に――

「お孫さん？」

「随分と若作りだな、俺は。んな訳あるか」

「お金ない・・・」  
「無銭飲食しにきたんか、お前は」  
「すいませんすいません」  
「えっと」  
「俺の給料から引いといてくれ」

## ハッピーハロウィン！【謎時空】

10月31日。その日がある人は呪いが廻りそんな作品のヤバい日。または子供が大人からお菓子を集る日。まあ、簡単に言えばお菓子がヤバい日(?)である。それは何処であつても変わらない。

「トリック・オア・トリート！」

「勘弁してください。」

場所はシャルル宅。もちろんシャルルがお菓子をせびられている。せびっているのはニッコニコな園子。その手には沢山のお菓子が抱えられている。そう、シャルルは既に園子へお菓子を渡しているのだ。しかも今回はすっかり最後まで聞いてから渡している。前回と同じミスなどしない。それでは何故、こんなことになっているのか。とりあえず二時間ぐらい時を遡ろう。

事件は夕方五時に起きた。

シャルルは普段と変わらず、椅子に座り机へと向かっていたのだが園子が乱入。

「トリック・オア・トリート！」

「おうっ、すっかり用意してるぜ」

その日初のトリック・オア・トリートを喰らわされる。それを難なく対処し、再度机へと向かったのだが、その三十分後ぐらいだろうか。

「トリック・オア・トリート！」

「さつきあげたと思うんだが」

「トリック・オア・トリートは時間を置けば何回でも言っていんだよ」

もちろんそんなルールはない。何言っただ、コイツ、と普通思うだろう。だが、今回の聞き手はそういった事に疎いシャルル。どうなるかは予想出来る。

「———そうなのか!？」

簡単に騙された。

今回ばかり園子が策士だった。シャルルの知識、皆への信頼度、ギリ許容可能な捏造。それら全てを良い感じにぐねぐねしたのがコレだ。それを踏まえて言わせて貰おう。お菓子の貯蔵は十分か？

「それじゃあ〜？」

「ほんと、マジで勘弁してください。」

園子の手には以前つけたことがある犬耳。あれをつけた時の羞恥心は計り知れない。割とガチで。なんならジユワユーズ出すぐらいに怖い。

「1パシヤでいいから、ね？」

これ以上は無理そうと判断した園子は妥協案を提案。謎の単位ではあるものの1パシヤはデカイ。なにがデカイかは知らんが。

「ういっす。」

渋々、本当に渋々といった感じに犬耳を受け取り装着する。園子の指示の下ポーズを取り、パシヤリ。そしてすぐさま勇者部のチャットグループにポン。

村正大爆笑、御影苦笑い、諏訪組は心配し、西暦組は首を傾げ、神樹館組はもつともつとの催促、神世紀組は一名の変態が湧いた。ちなみに変態もとい東郷からはペットにならない？とのヤバい発言が落とされている。

シャルル犬耳事件から数十分前。寄宿舎にある共有スペースあるいは食事スペース。そこに備えつけられているオーブンレンジの前に佇む御影。もちろんお菓子作りだ。

「よっ」

良い感じに完成したのを確認した後取り出す。その際、甘い匂いが

解き放たれるが御影は甘党ではない。がつつくことはないだろう。

アルミホイールで一つ一つずつ区切っているため持ち運びやすい。さっさと皿に載せ、机へと運んでいく。

「ほれ、出来たぞ」

「「おおく」」

「パティシエ士郎さんですか」

「それは違う奴だろ」

「声と顔同じ人が謎にパティシエをしているが御影は一切そういった経験はない。なんなら今回が初でもある。」

「うん、このスイートポテト美味しいよ！」

「っ！」

「人三個までだぞ」

勢いよくかぶりつこうとするタマに先手を打っておく。人数が人数なため大量に作ったもののそれでも三個ずつとなっている。

「——たっだいまー！」

「たっだいま帰りました」

「たっだいまー」

「おう、おかえりさん」

諏訪組が到着。今回はここ住みではない村正も来たようだ。赤嶺は部屋に籠っているらしい。さてさて、なにをしているのか。

「三人は手を洗ってきてくださいね」

「スイートポテト、グッドっ！」

「早く行こうよ、うたのん。お菓子に逃げられちゃうよ」

「とんだトンチキイベントだな、そりゃあ」

本来動かない物が逃げる。走る聖杯、ジェット噴射で高速移動する聖杯、瞬間移動する聖杯、ウツ、頭が。

三人が手を洗いに行っている間にドンドンとなくなっていく、遂には三人分の9個のみとなった。ちなみに御影が食った感想は普通に焼いた方が美味しい、とのことだ。

「じく」

視線が、視線が凄すぎる。いや、確かに一つの大きさは小さいし量

は少ない。さらに欲しいのもわかる。だからと言ってそこまで視線が露骨になることなどあるだろうか。しかも園子だけでなく他の小生組もだ。

「なんだい、欲しいのか？」

「あつ、いえ、ちが——」

「はいっ！」

「二人共!？」

この堂々した返事に村正もニツコリ。清々しいまである。

「元気がいいこった。そんじゃ、ジャンケンで俺に勝ったら貰っていいぜ」

「なにー！」

「タマつち先輩は歯磨き行きますよー」

「あ、ちよま——！」

スイーつとタマを杏が押していきそのままフェードアウト。そして一世一代の戦いが始まった。

村正の幸運値はE。まあ、いいヤツだったよ。

「さつすが、??。ナチユラルに負けるの上手いわね！」

「サンプルに負けたんだよ、コンチクショー。」

「お疲れ様です。はい、あーん」

「あんがと。美味しい」

椅子があるというのに体育座りでへこたれる村正へ追い打ちをいれながらスイートポテトを頬張る歌野。それとは正反対に慰める水都。やはり水都は天使だった。

この数分後にシャルルの犬耳姿が送られ、うざいぐらいに大爆笑する村正がいたとかいないとか。

未だ青空は遠く【i f√】

——振るう

「ハ、アア、アッ！」

——放つ

「王<sup>ジュウワユーズ</sup>勇を示せ、——ッ！」

——防ぐ

「耐え、るっ！」

際限なく増えていくバーテックスへ果敢に応戦するが一向に進行を諦める気はない。それ以前にもう時期こちらが崩れる。

一人、というのによくここまで保つたものだ。

手足は既に千切れかけ、腸からは臓器がはみ出ようとしている。想像を絶する痛みだというのに剣を振るい、不可能無理な化け物を押し返す。これではどちらが化け物かわからないな。

だが、それもここまで

意識が一瞬、ほんの一瞬傾いた数秒。そこを奇跡的に十二勇士の防御網を掻い潜りシャルルマーニユの太腿を針が貫く。

「——ッ、毒か」

堪えるように顔を歪めながら、すぐさま蠍座を砕く。それに伴い針も抜け落ちるが、手遅れだ。

視界が赤に染まり、鼻血が止め処なく流れ始める。次第に血不足となり肌が青白くなっていく。

「ああ。これで最後だ——カツコよく行こうぜ、テメエら!!」



海底まで届き得る聖光が放たれる。人の最期はなによりも美しい、と狂人は言ったがどうやら彼にとつては正しいようだ。

「永続不変の輝き、千変無限の彩り

万夫不当の騎士達よ、我が王勇を指し示せ！」

誰よりも眩しく、誰よりも気高く、誰よりもカツコイイ。何者も逃さず邪を滅す至高の十三連撃。

「王勇を示せ、遍く世を巡る十二の輝剣ツ!!」

遙か彼方まで続く地平線。ただ、真っ白な空間が永遠と続く世界。そんな場所でもやが語りかけてくる。

「お前が悔む必要はねえさ。ただまっ。悲しいとは思うだろうがここで終わりだ。

「さあな。それは俺にもわからん」

結末など誰にもわからない。

300年間答えを探し求めた世界への答えはもう時期導かれるだろう。だが、それが人が謳うものなのか。神が謳うのかはいや、既に出てるか。

「シャルルマーニュ。俺が俺達が追いかけた色彩は誰の手にも握られなかった。

それでいい。夢、理想つてのはそんなぐらいが丁度いい。恋い焦がれる物なら尚良しだ」

自身に足りなかった物はなんなのか。結局辿り着けなかった。やはり、俺にはそんな資格はなかったのかもそれない。

「それはねえよ。じゃなきや、あんなピツカピツカなジュウユーズ撃てる訳あるもんか！」

——もちろん、最高にカッコ良かったとも」

ただその一言。たったそれだけの言葉が心を満たしていく。じんわりと、朗らかに。暖かい——

「じゃあな。」

人類史の行く末、見守っていてくれ」

もやへ背を向け、一人一寸の光もない道を歩く。ゴールがなくともきつと、いつかは

——私は大罪人だ——

力があつた。体があつた。武器があつた。

私は、私は戦えたんだ。満開の副作用で体の機関が機能停止になつたとしても戦えたんだ。

でも、足が竦んだ。武器を握る手に力が籠めれなかった。去りゆく背中に手を伸ばせなかった。

私は勇者。世界を守る勇者。

ああ、ほんとに——

「笑わせないですよっ！」

そう誰もいない、最早誰も住んでいない家で唇を噛み締める。

何故私は生きているのか。その答えを探すように家の中を彷徨う。これではまるで亡者だ。いや、正確にはそうなのだが。

「あ、ここにっつて」

一階にある二室のリビングに近い方の一室。確かここはシャルが使っていた部屋だ。

そつと扉を開く。どうやら、既に誰かが来たようで彼の荷物がきちんと整頓されている。

分厚い一冊がドンと机に置かれている。

「アルバム」

手に取り、表紙を捲ると私達四人で初めて撮った写真が一ページ分を使って飾られている。これから察するにアルバムのようなものだ。

「あ、プール行った時の。こっちは料理会の。ふふっ」

一枚一枚、過去を遡るようにして眺めていく。そして最後のページに――

「楽しかった!!」

「あ――、うん。っ、私も。っ、私も楽しかった、んだよ。」

咽び泣くように涙を流し、その言葉を指でなぞる。彼らしからぬ殴り書いたような文字。そんな拙い文字だというのに心が激しく揺れ動く。

もつともつと思ひ出を作りたかった。だけど、もう彼はいない。このアルバムは残りのページはずっと空白のまま。

波の音が彼らの眠りを告げる。一人、また一人と墓石を重ね世界を存続させていった。勇者だから、勇者ならば、それが当然だったのだろう。あまりに身勝手。そんな地獄を繰り返す虚しい300年を築いた。そして価値ある1年を出した。

意味はあった。絶対にあつたのだ。でなければ報われない。悲しいだけの死になってほしくない。だから、生者は胸を張って前を向け。それだけで彼らは満足だ。

今日もまた一つの墓石の前へと膝をつき両手を合わせる。天国があるかは知らないが、きつと今頃天国でワイワイしているだろう。宴は駄目です。お酒飲める歳じゃないでしょ、と彼のノリで思う。

「来年から小学校の教科書にシャルの名前載るんだってよ」

「友人として誇らしいわ。でも、あまりはしやぎ過ぎないようにね」

■世界を守って死した英雄。そんなところだろうか。

シャルルマーニュ、本来であればもう片方のメジャーな名前が載っている筈なのだが、300百年は長すぎたな。誰も彼もが忘れていく。

「それじゃあ、行くか」

「ええ、また来るわね」

「またね、シャル」

置いていた荷物を持ち、膝を上げる。

いつまでもここにいられない事は重々承知だ。彼女達を引き止めることはしないが寂しいには変わらない。

「っ、ん？」

墓石へ背を向けようとした時だった。誰かがこちらへ猛ダツシユで近づいてきている。靡く金色、あるいは栗色。どちらなのだろうか。いやいや、そんなことは今はどうでもいい。今重要なのは乃木園子がアルバム抱き抱えてこちらに走ってくることだ。

「どうしたの、そのつち？それにその本、写真帳？」

「っ、うん、シャルの家で、見つけ、なんだ。」

肩で息をしながらアルバムを差し出す。それを三人で囲み、四人で覗き込む。

「遠足の！懐かしいなあ。」

「浴衣姿のものもあるわね、あ——」

そして最後のページを開く。そこには園子が見た言葉が変わらずある。持ち主はいなくともこのアルバムは不変。一生の思い出だ。

その言葉を示すように見覚えのある指が置かれる。

「——本当に、楽しかったんだ」

とても穏やかで優しい声。でも、だと言うのに何処か泣きそうで震

えている。

「——っ！」

「シャル——、」

「シャルル君らしい現れ方ね。」

いくら周りを探そうが何処にも彼の姿はいない。まるで怪奇現象にも出くわしたかのような感覚がある。もしかしたら、先程の声は幻聴で彼は最初からいなかったのかもしれない。

「あー・アタシ、結婚できないかも」

「大丈夫よ、銀なら絶対見つかる」

「教科書に載れるような人、いるかな？」

東郷からの助言を容易くぶつ壊す園子。普段通り、ではないかもしれないが冗談を言い合える仲であれば問題ないだろう。

前を向き、ただひたすら歩む。それ程までに勇気があることはない。だが、心配はない。彼女らは勇者で——

「最高にカッコイイ奴らだよ——」

風と共に彼方へと飛んでいく。誰の耳にも届かず、ただ独り言のように消えていく。泣きそうで、挫けそうであるが彼女達が歩むのだ。そんなものは捨て去れ。ずっと願っている。

——明日もいい天気だろうなあ。

所変わり廃墟となった街。そんな中を姿形が瓜二つな者達が歩く。見分け方は左腕の有無だけだろうか。

「どこいらでいいか？」

「んく・まつ、そうだな」

瓦礫があれど、それすら無視してしまえば開けた空間。戦闘向きのフィールドではある。

「始める前に聞いておきたいんだが……どうして九州なんだ？」

「俺の産まれ故郷、それだけだ」

「そうかい。じゃ、始めるか」

……  
「そう言う彼の手には草薙剣が。もう片方の彼は抜き身刀を握る。」

天の神もその天蓋もない。であれば戦う必要はない、その筈なのだが。まあ、簡単に言えばただの消化試合である。ただし、勝敗で世界の命運が別れることにはなる。

「殺してくれよ、四国の大英雄？」

「殺してやるよ、罪なき罪人」

この後、どちらが勝ち、世界がどうなったかはわからない。ただ確かなのは良き方向に転んだのは事実だ。人の世界——その実現が近い。

花結いのきらめき【26】

「カール大帝の名を借り受けた……？」

「これまた曖昧な返しだな」

「仕方なからう。詳しく説明すると小一時間かかるぞ」

魔術関連以前に事情がややこしすぎる。元は村正でなんか転生してシャルルマーニュになりました、とか自分が解っても他人が理解出来るかどうか。

この中で小一時間に耐えたのは中園子と中銀のみ。どちらもドヤ顔しながら離れでお茶を飲んでいる。

「包み隠さず言えば良からう。貴様らは信用出来ない」とな

「発言は赦していないぞ」

「これは失敬」

そのある意味での爆弾発言に流石にドヤ顔を維持出来ず、湯呑みを机に置く中園子と中銀。

西暦組としてはシャルルと関わりを持ち三週間やそこら。だが、勇者部の面子は最長一年半。そこまでの付き合いがあつても尚シャルルの信頼はない。ただ守られているだけの存在。そう解釈出来る。

沈黙。重苦しい空気だな、と思いつつ打開策を出すために頭を絞る。御影がシャルルへとアイコンタクトを送るも返しは首を横に振るのみ。

そんな空間ではあれどいつまでもそう黙りこくってはなにも始まらない。ならば誰かが口を開くしかあるまい。

「シャルくんは私たちを信頼してないの？」

「している、とは一概に言えない。友奈達が信頼出来ないのではない。ただ、少しこの問題は難しいというだけだ」

見た目を偽っていることになにも言わないだろう。そんな者達ではないと言いつける。だが、俺が騙っていたと受け取られたのならば悲しむだろうか。

「シャルの信頼度稼ぎが重要ってことね」

「確かに信頼度で発生するシナリオはあるものね」

「そんなゲームみたいなの」

「まずは捕縛してその後じっくり」

「じっくり？じっくりなにをするのよ？」

「くすぐりを」

「拷問!？」

「っ——！」

「あ、逃げた」

その言葉が聞こえた瞬間すぐさま荷物を持ち離脱。やはり、シャルの弱点はくすぐり、とメモ帳に記す園子s。いつか使われそうで怖いな。

さて、これで重苦しい空気は払えた。と言っても事の始まりを起した者が未だ顕在ではあるが

「喜劇だったな」

「そう言うなら笑つとけ」

起伏がない声で喜劇と言われても説得力は皆無だ。それに何処ぞの蝙蝠は喜劇を笑うものとした称した。なら笑うしか他に選択肢はない。

「それで、私に聞きたいことがあるのだろうか？」

「それは、そうだが」

全員の視線が御影へと向けられる。左腕から血が出てるからとかではない。物珍しさ、だろうか。

御影はあまり空気を読めないや、読めるには読めるが、あまりにもスパスパ言う。良くも悪くもな。そんな彼が歯切れを悪くしている。それだけでももう異変だ。

「ふと思っただが、俺と村正って同一人物だったりするか？」

歯切れ悪くその質問を須佐之男へとぶつけた。質問を受けた須佐



之男は鼻で笑いながら答えを口にする。

「肉体だけ見ればYES、心だけを見ればNO、全くの同一人物かと問われればNOだ」

「あー、わかった」

そんな適当な答えで全て納得したのか追求はなかった。だが、それは彼の「み」。他の者を置き去りにしている。まあ、そんなことをすれば苦情の一つや二つ出てくるだろう。

「ふむ。やはり、御影と村正は別人のようだな」

「うおっ、シャル先輩！」

「やはり、とは？」

校内を猛ダツシユで一周してきたシャルルが荷物を置き、先程まで座っていた席へ座る。

「記憶喪失のその後は二種類ある。記憶が戻るか、新しい人格が形成されるか」

「新しい人格が形成された、ということか」

「あれ、土郎って記憶喪失してたの？」

「常識とかの記憶以外なかったな」

シャルルの言葉に若葉が納得するもその前提である記憶喪失について風先輩が問いかける。それに答える御影。人数が多すぎてややこしくなっているが、そこは「ご愛嬌」。

ちなみに常識などの記憶は抑止力から提供されているが知る由もなく。

「藤森 水都が壁付近へと命からがら運び、神樹内の神々が回収した。そこからは貴様達を知つてのとおりだ」

「水都さんは」

「さあ？ 神樹は抜け殻しか回収しなかった。それを運んでいた者など眼中にないだろう。星屑に貪られたか、やりきった後力尽きたか。どちらにせよ地に伏している」

「っ」

ひなたのその問いに表情を崩さず答える。濁された藤森 水都の結末。それは、水都とあまり仲良くない千景ですら眉間の皺を寄せる

に値する。

そこに白鳥 歌野や諏訪の人々の協力があつたとしても神々は一切の興味はない。ただ、運ばれている抜け殻のみに注視した。

「何故抜け殻のみか、だろ？」

「ああ」

何故、神樹はただの抜け殻を注視したのか。その問いへの答えは至ってシンプル。

「天の神に利用される可能性があつた。それだけだ」

「どう利用される？」

「神樹が拾えば勇者。天の神が拾えば天蓋。即ち人類の敵として勇者の前に立つことになる」

中身がない英霊の肉体。それは染めやすく、利用しやすい。つまり、あれやれこれやれと指示するとロボットのように従わせれる。そこから人格が形成されるが、それはいいや。

要約すると御影 士郎は救世主と人類悪の適正があつた。それだけだ。

「士郎が、敵」

「まあ、そうなつてしまえば人類の敗北だな」

人類の敗北。そう考えると諏訪の人々はMVPだな。捉え方としては地獄を存続させた悪魔としても考え得るが、勇者にそう考える奴はいない。

「それにしても」

「?」なんだ、まだなんかあんのか？」

「二年で良くもまあここまで狂えたな。誰の影響だ？西暦勇者か？」

「「「「「ツ!?!」」」」」

「」

以前、若葉が御影を常識を備わっている分質が悪いと言っていたがそれは誤りだ。いや、誤りとは言いきれないが、ちよつと違う。多分本人ですら自覚していない。

「悪を滅せ、正義と共に肩を並べろ、人類を存続させろ。」

そんな周りの為だけに刀を振るう。正に四国の大英雄だな」

「なにを言ってるやがる、須佐之男？」

これは俺のだ。俺の為だけのモノだ。断じて他人のモノなんかじゃない」

「だから貴様は狂っているのだ。他人のものと自身のものの区別がつかない。」

そもそも貴様は若い。人格形成から一年、一度でも社会全体を見たか？狭い囲いの中でいいように使われて満足なのか？」

御影 士郎は言わば赤児である。人の性格はその者を取り巻く環境によって形作られる。

殺人鬼は酷い家庭環境で育った者が多い。たまにバグのような存在もいるが今回は例外とさせてもらおう。

※酷い家庭環境Ⅱその子は犯罪を犯す、なんて法則はありません。偏見の目で見ないようお願いします。

そして、勇者という聖者にも似通う者達と苦楽を共にした御影は聖者。うくん、聖者、かなあ。まっ、まあ基本的には優しいしい？聖者の分類だと思い、たい。

「だから俺は親玉ぶっ倒して世界見ようと夢見てんだろ」

それは遠征調査で若葉達と語った夢。美しい景色を見てみたいと望んでいた。

「それはだだのゴールを設置しただけだ。貴様がやる必要のない事を正当化するためのな」

「ああ」

「ちよ、ちよつと二人共落ち着いて」

高嶋が仲裁に入り込もうがその程度で止まらない。もうちよい覇気と語気を強くして、御影の頭をポカリと殴れば仲裁出来るだろう。しないとは思うが。

「須佐之男、もう喋るな」

「まあ、いい。いずれわかることだ」

シャルルのその言葉を聞き届けたのかは不明だが、姿が見えなくなり何処かへと消えていった。

「なあ、シャル。村正の年齢って何歳だ？」

「肉体、精神。どちらだ？」

「どっちも」

「肉体が16、精神が28。俺の記憶が正しければな」

「28!? 同年代じゃないの?!」

「若作りねえ。秘訣でもあるのかしら？」

「衝撃の事実がさらっと」

身長は170cm手前。その後伸びたのは2cm程度  
..... 中学で成

長期が終わったとは本人談。  
..... 参ったな、こりやあ」

## 幻想の騎士へ【銀√】

他の記憶がいくら白黒になろうがその日のことを未だに鮮明に覚えてる。

いつものように神樹館へと通う道。いろんな問題、というかお節介を焼いてしまつて遅れるんだけど、まあ、そこは置いといて。

「なあ、そのアンタ、ちよつといいか？」

今日も今日とて免れないようだ。まつ、一人で駄目なら二人。その二人目にアタシが選ばれただけ。なら手伝うしかないよな。

声をかけられた方へと振り向く。

はつきり言つて心臓が止まるかと思つた。

空を模したかのような瞳。癖毛が意味わかんなくなっている髪。そして白のメツシユ。交友関係が広いアタシであつても一度も見たことがないと思う程の容姿。

多分アタシじゃなくてもフリーズすると思う。確か最初は園子もびくつてなつてたような、なかつたような、うーん？まつ、いや。

「アタシか？」

「神樹館に行きたいんだが、迷子になつちまつてな。」

少ししよぼーんとしながらそう言うシャル。今思えばシャルがしよぼーんとしてるのこの日だけだつたような気がする。スーパーレアなしよぼーんシャル、記憶に刻んどこ。

にしても他に生徒がいるのにアタシに話しかけるとは。もしかして狙つてる？いや、もちろん偶然なのはわかつてるんだけど、運命とか感じたい歳でして。アタシだつて女の子だし、普通だもーん。

と、鮮明に覚えているのはここまで。ここから先はちよつと曖昧。多分この日も学校に遅れてたと思う。

シャルが同じクラスに転校してきて、シートンとして一緒に戦つて、正体わかつて、シャルと出会つてからの人生濃過ぎない？いや、

迷惑じゃないけど、流石に、ねえ？

あ、シャルが病室通いしてくれるの。なんだかドラマチックで良かったなあ。アニメみたいで、アニメ以上か。散華で目が視えなくなっちゃってたけど、シャルの手、暖かったなあ。シャルと手握ったのつであの時が最後。あいや、中学三年の冬休みに握ったんだっけ。一回思い出してみよう。

えっと、あれは――

「38.1、風邪だな」

「うあ、折角の、っ、冬休みが。」

冬休み早々アタシは風邪を引いた。原因は前日雪の中ではしゃぎまくったことだろう。バカかと思われてもしようがないが、雪の魅力には抗えなかった。

頭がグラグラと揺さぶられるような錯覚を感じながら、天井を眺める。額に冷えピタを貼っているものあまり効力を感じられない。「一先ず午後まで様子見て、それでも下がらなかつたら病院に行くか。」

「りょーかい」

気怠げな声で返事をし、布団に包まる。何故かいくら包まろうが寒気が引かない。頭は熱いというののにな。不思議なことだ。

「朝飯はお粥、うどん、どっちがいい？」

「うどおん」

「オーダー受諾した。そんじゃ、作ってくるな」

体温計をケースに仕舞い、そのまま部屋を出ていくシャル。素うどんだと思うけど、どのうどんが来るのか想造しておく。と言ってもあまり食欲がない今は正直食いきれるかどうか。

「ミノさくん、大丈夫？」

そんなどうでもいい事を考えていると少し開いてるドアの間から園子がひよこつと顔を出し、こちらの様子を伺ってきた。

「めっちゃきちい」

「インフルエンザ？」

「多分風邪え、雪遊びかなあ。」

特段クラスでインフルは流行ってない。なら昨日の雪遊びを鑑みて風邪だろう。バカは風邪引かないとよく言われるが、アタシはバカじゃない。つまり風邪だ。

「ほら、そんなことより、園子とシャルはあ、樹に料理教え、つ、に行くんだろ？早く用意しないと」

「そうだねえ。でも行くのは私だけだよ？」

「は、え、シャルは？」

「行かない、って。きつとミノさんのためだよ」

その言葉を聞いて最初は罪悪感を感じたが、その次には嬉しきで上書きされた。風邪引くのも悪くないかも、と思ってしまう今日このごろ。

「ではでは、行ってきます。いつつんをさらなる次元へ——レッツラゴー！」

「やっぱ、園子は読めない。多分これからも、なんなら一生解んないかも。」

「とりあえず、もうすぐシャルがうどん作り終わると思うからなにしようか。とりあえずー寝ところ。」

その数分後。丼ぶりを載せたお盆を持って、シャルが入室してきた。ドアはなんとか足で開けてた。

「うどん出来たぞ」

「ういー」

重い上体を起こし、食べれるように姿勢を作る。だが、一向にお盆を渡そうとはしてこない。

「一人で食べれるか？」

「あー無理そう」

嘘です。一人で食べれます。

でもでも私もあーんしてもらいたい。園子だけズルい。いや、アタシも言えばしてくれると思うけど、恥ずかしいし、今なら合法的にやってもらえる。逃す手はない。

「ほい、熱いからな。舌火傷しないように」

「あ、あーん」

・恥ずかしさで味がわかんない。弟たちにしたことはあるけど、されたことは初めてで、まさか、こんな恥ずかしいものとは。いやでも、それ以上に幸福感が、やつぱ、園子はズルい。

まあ、そんな恥ずかしさに負けず食べ切るまでうどんを口に運んでもらった。至福の一時だった。

「それじゃ、俺は部屋に戻るな。なんかあつたら呼んでくれ」

お盆を持ち部屋を出ていこうと立ち上がるシャル。口ぶりからして午後まで部屋に籠もるようだ。だがしかし、アタシの部屋からシャルの部屋は向かい側。詰まる所――

「呼べないような」

「んあ、ちよつと待つといてくれ」

なにか思いついたのかお盆と共に部屋を出ていった。そして、一冊の本を持ってきて再入室。アタシの机に備わっている椅子をベット付近へと移動させ、ドシつと腰を下ろす。

「よし。俺はここで本読んどくから、安心して寝てくれ」

「う、うん」

逆に落ち着かない。シャルはたまにこういう事するから心臓に悪い。そして余計に好きになつてしまう。

「おやすみ、銀」

穏やかな、それでいて優しい声。子供の時によく聞くような、そんな声。母さん？それとも父さんみたいな――

――いつからだつたらうか。速まる鼓動を抑えようとしたのは。



『あの中で貴様が好いている者は？』

大帝にはお見通しだったのだろうか。いやいや、流石に大帝も人の恋路を覗き見するようなことはないだろう。違うな、恋路でもないな。

そもそも。そもそもだ。恋路とかそういう類のものを一ミリ足りとも触れてこなかった俺にとってはどれが友愛か恋心なのかが判らない。

ああ、——俺って馬鹿だな。

「銀、アンタの命が尽きるまで隣にいさせてくれないか？」

曖昧な感情で空っぽな言葉を口にする。でも、何故だか言い切った感じがするのは俺の思い込みだろう。こんな言葉言って達成感など得られる筈がないのに。

口をパクパクとなにかを言おうとしているが言葉にならず、空気に溶けていく。

まあ、こんな事言われても驚きだろうな。それか  
俺と付き合ってくれないか、銀

なにも飾らずその言葉を口にする。カッコつきたいがために回りくどいこと言うのは駄目だな。相手に意図が伝わらん。

「——マジで、ほんとに？」

「ほんとのマジだよ」

やはり可笑しかっただろうか。俺がこんなこと言うのは。後二年程愛について観察すべきだったろうか。

「アタシでえっと、そのいいの？」

「銀じゃないと駄目なんだ」

未だ自分のこの感情を言い表せないような俺だけど。この言葉に疑いはない。胸を張って言うとも。

「返事、今聞いてもいいか？」

「も、もちろんっ！」

振られるなら振られるでいい。銀が幸せになるのなら、それは俺でなくともいい。まあ、不幸にするのなら俺であったとしても断首するが。

「ふっ、不束者ですがよろしくお願いします！」

最初躓いていたが、元気一杯に言い放つ銀。流石にこれは――

「――ふっ、はは！」

「な、なんだよ。どこか、変だった？」

「あ、いや。すまんすまん。なんというか、深く考えた俺が馬鹿だったというか。ありがとな、銀。いろいろと」

そう言えば俺は馬鹿だった。馬鹿なら深く考えず当たって砕けろ並に突っ込めば良かったんだ。砕けたらまた立つ、そんな心意気でな。

「え、なにに？なんか怖いんだけど。もしかして罰ゲームとか」

「そんな訳あるわけないだろ。正真正銘俺は銀が好きで告白したんだよ。ほら、初デートでどっか行こうぜ！」

「で、デート・イネスで！」

結構距離あるイネスを御所望とは。いいぜ。ぶっ飛ばして行つてやろう。

「わわっ!？」

「ちゃんと捕まってるよ」

銀を抱き抱える。まあ所謂お姫様抱っこというやつだ。そんな体勢のまま魔力ブーストしながら飛翔する。目的地はもちろんイネス。

「ちよちよ、待って待って!!イネス却下で！」

「待ったはなしだぜっ!ハハっ！」

花結いのきらめき【27】

「んじゃ、おやすみー」

時刻十時前。そんな時間に眠りにつこうとするのはもちろん御影。お爺ちゃん並の早寝早起きだ。

ちなみに神樹館組はパジャマ会をやって、そのまま寝てしまったのを杏が確認している。諏訪組はー気づいたら寝てた。

「ああ」

「はい、おやすみなさい」

「夜更かしするなよー」

「するか。お前らも寝坊しないように寝ろよ。特に千景」

「私を何だと思ってるの？」

飛び火が凄まじいカーブを見せてるな。これは怒っても問題ないだろう。というか怒れ。

「ぐんちゃんは私が寝かしつけるね♪」

「え」

おつと、千景の胸が高鳴り出したが大丈夫か？鼓動が1秒に十回に届きそうではあるが大丈夫だろう。いつもの恒例行事だ。

談話もそこまで。共有スペースに設置されている大きな机を西暦組で囲む。その光景はさながら円卓のようだ。そして数秒間の沈黙をリーダーである乃木 若葉が破る。

「建速須佐之男命が言っていた。アレは事実なのだろうか」

「士郎さんは狂っている、それを証明するためには何処が狂っているのか探さないといけないでしょうね」

議題は御影について。でなければ彼女達が夜更かしすることはない。夜更かしはお肌の天敵、だからな。

「何処も狂ってなくないか？」

「私にもそう見えるんですが、ありえないかもしれませんが、建速須

佐之男命の勘違いって説もあるかと思えます」

「それはない。断言出来る。」

「あんな自信満々に神が言ったのであれば事実だ。事実でなければいけない。神の発言とはそれ程までに重責を伴うものだ。」

「」

「他者のもの・他者って誰かしら」

「言葉から察するに私たち。それか四国の人々、そこらだろうか」

「高嶋は沈黙を決め込み、千景と若葉で考察する。」

今出揃っている情報の中で一番有力なものは建速須佐之男命の発言。逆を言うとそれ以外の考察は意味を成さない。そもそも――

「――狂っている場所を見つける必要はねえ。まず見つめ直すのは基点だ。御影 士郎というな」

「「!!」」

「間違いなく御影の声。だが、あまりにも雰囲気が逸脱している。すぐさま振り返り、真相を確かめようと視線を向ける。」

「村正さんですか。どういったご要件で？」

「同じ背格好であったとしても左腕の有無で判断可能。あと雰囲気」ということで御影ではなく村正のご登場だ。

「家の神さんが迷惑かけたようだからな。詫びだ」

ドサッと黒いエコバックが机に置かれる。その中身をすぐそばの椅子に座っていた高嶋が覗き込む。

「ソフトクリーム？」

「近場のコンビニで買ってきた」

袋一杯に入っているソフトクリーム。置いてあったものの全部を買ってきたのだろうか。目測ではあるが一人三個はたるだろう。そんな袋をひなたが冷蔵庫へと持っていき、取り出しながら仕舞っている。

「そんじゃ、俺はこれで」

エコバックを受け取り、これで用は終わったとばかりに踵を返そうとするが――

「ちよつと待ってくれ！」

机を叩く程の勢いで立ち上がり、村正へと静止をかける。それに従うように村正は足を止めた。

「御影について話せ、ってか？」

「ああ」

「ん、まあ、いいぞ」

▼村正が仲間に加わった。

これはめっちゃ心強い。だって、男だぞ。流石に女子会で男子を徹底研究するところなんて、普通にありそうだな。これ以上はよししておこう。

「貴方がさっき言った基点って何？」

座ろうとするも椅子がなく座れない村正へ千景が問いかける。あれ程まで裏ボスみたたく登場したのであれば意味がある筈だ。なければお笑いもん。

「狂っている、ってのは他者の常識から逸脱している状態だ。やっている人は至って真面目。だが、それがどう映るかは他者の常識次第」人間は自身の常識に当て嵌まらない。もしくは理解出来ないものに恐怖を抱く。それが転じて狂っている、という表現になる。この場合、自分から狂っている奴は論外とする。

「偏見の目をなくして士郎さんを見る。まずはそこから、ということですか？」

「偏見の目とかはどうでもいい。ただ御影の常識はなんなのか、それを考えるだけだ」

「士郎くんの常識」

相手の心象を大まかに把握するのは戦闘時も重要だ。相手がどんな戦法を取り、どう武器を扱うか。それがわかるだけでも戦局は有利に進む。

「とりあえず御影について話せ。そつから俺が考えよう。あ、一応念を押しとくが誇張せず話せ。隠すのも駄目だ」

「それなら私が話します」

記録語りなら私が、とひなたが理候補し昔話方式で話し始める。

??はどのような人物がどのような行動をし、どのような影響を与え

のか。そんな簡潔な情報を神樹から伝えられている。だが、それだけでは考察は不可能。なら聞くしかないよな。

一時間後。時計の短い針が十を超えたあたりでひなたの昔話は終了。ここからは考察するのみ。

「ふーむ。最初は好青年で段々と荒く、どういう人格形成、いや、村正か須佐之男の影響か。そして左腕損失後にブースト、はーん、さては草薙剣を使ったな？真名開放とは流石だ。んで不祥事、左腕落とし、いいないいな。思い切りがいい。今らへんの性格はこの時からか。となると真名開放は一度と考えた方が、いや、でもそれだと最終決戦で獅子座に勝てねえし。ああ、そこで須佐之男退去か。タイミングばっちりだな。」

よし、質問してくぞ」

「お、おう。答えれる範囲で答えよう」

あまりの情報量に口すらも総動員で記憶に刻み込む姿は他人から見ればヤバい人だ。と、このように人の常識とはこういうものである。

「御影が不祥事を起こした時の感情は？」

初っ端からそれかあ、と思いつつ千景へとアイコンタクト。少し眉間にしわを寄せながら頷く。

「多分あれは一周回ってたわね」

「怒りが一周回ってたか」

他の皆が一周回るといふ表現に首を傾げているがそのまま進行。

「その後謹慎喰らったとか聞いたが、その時御影は大暴れしたか？」

「いいえ、してませんね。神官の指示に素直に従ってました」

「悪いことをしたと思っただか、どうでも良かったのか。だが、まあ、普段を見るにどっちもだろうな」

善悪の認識は世間一般的。それなら何故斬ったのか、という疑問が出てくる。であればそれが次の議題だ。

「なんで斬ったのか解る奴いるか？」

「千景をバカにされたから、だと思っ」

重い口をタマがなんとか開き、その問いへ答える。控えめに言っ

あの事件はクソだ。御影の行動は正しくはないが正しいものの筈だ。  
「ほーん、いいね。勇者足り得る奴だ。だがまあ、そこまでいっても  
自分を悪とするか。思い切りが良いのか悪いのか、わっかんねえ奴  
だ」

「やったのならば間違いとするな。後悔するな。するのであれば自  
身の仲間に馬尾雑言を浴びせられる光景を指を咥えて眺めてろ。」

「よしっ、大まかに出来たぞ」

「本当か?!」

「おお、仕事が早い。流星は心理戦のようなもので御影を殺した奴  
だ。と言つても、アレはほんとに初見殺しに全てをかけたものよう  
なものだ。次はない。」

「御影の常識は世間一般的なもの。それとお前らを第一とすること。  
多分そんな感じだと思う」

「常識は二つあるものなんですか?」

「いや、ないが?なに言ってるんだよ。常識が二つや三つあるわけねえ  
だろ」

「????」

常識は二つや三つない、だと言うのに御影の常識は二つ。おおつ  
と、なんだか不味い方向へ転がっている感覚がするな。

「うーん、そうだな。『ヨーロッパの火薬庫』の風刺画見たことあるか  
?」

「ありますけど」

「すいません、私まだそこまで行ってなくて」

何故唐突に歴史の勉強?と不思議に思いながら、来るであろう例え  
話に耳を傾ける。ちなみに杏は中学一年生のためまだ範囲ではない。  
「バルカンという国の名を刻まれた瓶から溢れかえる溶岩を他の国々  
が蓋の上に立って押さえつけてる風刺画だ。」

それでこつから例え話だが、瓶の中にあるのが御影と世間一般的  
常識。それをお前らが押さえつけてる。いや、瓶の中は御影一人か?  
まあ、それも何時かわかるか」

イメージし難いという方は『ヨーロッパの火薬庫』で検索をお勧め

します。

とりあえず村正がなにを言いたいかと言うと、御影 士郎という男は常に自身の行動に制限がかかっている。

「多分そこらだろうな。お前らの話を盗み聞きした感じ須佐之男が狂っている」と評したのは」

「」

「どうしたら、いいのかな」

「これに関しちゃ、お前らのせいじゃない。ただ、時間がなかった。自我を持ち一年。これが生後一年であれば言葉を発声できるようになったぐらい。それで、お前らは一歳児にないを期待している？」

「それ、っ、は」

いくら思考しようがその問いに答えなどない。そもそもお前たちが出すものではない。士郎の理解者振るな。ただ与えて貰っただけの奴らが。



花結いのきらめき【28】

木曜日、即ち翌日。授業という拷問を経て癒しの放課後。勇者部員は部室へと集合していた、のだが

「二」「二」

「なに、あれ？」

「ふうむ・あまり接点がない者達だな」

全員の視線の先には負のオーラを撒き散らしている千景、御影、風先輩。そして仲良く寝ている園子s。結構カオスな絵面である。

負のオーラを撒き散らしている三人をぱつと並べた感じ、これといった共通点はないように見える。

「あつ、三年生ー」

「ああ、なるほど」

「そこは盲点だったわ。流石、友奈ちゃんね」

「えへへ〜♪」

結城の言う通り、現在進行形で気分が落ちまくっている三人は勇者部で数少ない三年生だ。そして三年生とならば悩みごとは簡単に出てくる。

「テストで悪い点でも出したか？」

「二——ツ!?!?」

「わかり易いな」

ギクウ、という擬音が出そうな程に反応する三人。どうやらシャルが当てずっぽうで言った言葉は正しいようだ。

「風はわかるけど「なんですってえ!?!」」士郎は予想外ね」

「そうですね。お姉ちゃんはわかりますけど「いつきい!?!」御影先輩は勉強、得意だと思ってました」

ボコボコにされる風先輩を無視し、御影へと視線が集まる。きっと彼のことだ。致しがたない理由がわんさか出てくることだろう。

「俺だって苦手なことの二つや三つある。それがたまたま勉強だつ

てこともあるさ」

腹痛などの理由はなし。であれば問題か、と思ったのかシャルが御影のバックから問題用紙と答案用紙を奪い取る。

「数学、公立の過去問か。酷いな」

「村正は頭良かったけど。まっ、ドンマイ！」

「えっ、あんな巫山戯た言動で頭良いの!？」

「まあ、はい。普段はあんなですが頭は良いですよ。天才を越すために頑張った、だとか」

大問1から大問4。試験問題のため60点満点。そして自己採点で記されている点は20。だから、だいたい偏差値30後半ぐらいになるだろうか。いや、偏差値は平均点で決まるため一概には言えないが、三年の夏あたりであればそんなぐらゐの偏差値になると思われる。

「ぐんちゃんはどうだったの？」

「!? あ、いや、私は。えっと、受けてなくてエ。」

「嘘つけ。普通にいたろ」

「自身の怠惰のつけが廻ってきたただだ。甘んじて受け入れろ。さて」

「なっ、いつの間に?!」

必死に誤魔化そうとするが屍によって道連れにされてしまった。そして次の瞬間には御影との別のもう一組のプリント。説明するまでもなく千景のだ。

「28、か。」

「大丈夫だよ、ぐんちゃん。士郎くんより高いから！」

「ぐう——っ！」

「それもそうね」

「そんなわけあるか。大問題だ」

悪意ゼロの言葉が御影へと突き刺さるが誰も気にもとめず次の目標へと。

「さて、風は」

「ああー！アンタ、いつの間に?!」

もうここまで来ると超能力である。人が隠しておきたい物を抜き取る、そんな使い所がない超能力。あつたら大爆笑必至である。

「32. . . . .そこそこだな」

「あれ、案外取れてる?」

「風に負けた。だと。」

見るだけ見てそこそこ評価する。やられている側からは鬼畜の所業に等しい。そして、風先輩Ⅱボケ要因が定着している勇者部員としては驚きの点数である。

「点数の高い低いはあまりわからないんですが二人より高いということとは高得点なんですか?」

「今の時期であれば偏差値48ぐらいだ。目指す高校にもよるがまあ、何れにせよ50は越えてもらいたい」

今の時期で50ならば受験間近まで真剣に勉強すれば60後半ぐらいには辿り着ける筈だ。本つつ当に、頑張りによるが。

「ふっふっ、ようやくわかったぞ」

「? どうしたのタマっち先輩? そんな変な笑い方して」

「バカはタマ一人じゃない——っ!」

「アタシ達もいますよ! なっ、未来のアタシ!」

「アタシも!」

「もしかして俺煽られてる?」

「ううむ、これは、少なくとも馬鹿とは思われてるな」

なんとというか御影への煽りがヒートアップしまくっている。風と御影の間である。千景はノータッチという事実が不思議でたまらない。

「でも、どうしてお姉ちゃんは32点ががつくしてたの?」

「確かにそうね。少なくとも御影先輩と郡さんの点数より高いようだし。」

「い、いやあ、前より点数が下がってショックだったというかし。」

「前回の点数は?」

「41!」

「. . . . .」

「おぉー!」

前回、それがこの世界になる前にあったものとすれば七月初めか六月中盤か。どちらにせよその時期に今ドヤ顔で言った点数が取れたのならば凄い高偏差値になる。だが、それでも今回の点数は32。それは変わらない。不変の真実というものだ。

「であれば何故下がった？」

「いや、だってほら、いろいろあったじゃない？だから、ね？」

いろいろ。いろいろとはバーテックス襲撃、壁破壊（未遂）、シャル失踪、終いには異世界のような場所への誘拐。うーんこれは、致しがたないと思う。

「ふむ。風はわかった。千景は？」

「ただの勉強不足よ。少し甘く見ていたわ」

「であれば次は満点だな」

「は!?!ちよ、それは——」

「最後に御影。弁解は？」

「」

■最早公開処刑である。この沈黙の姿に涙を禁じえない。あと千景にも。

■重たい空気を跳ね除け御影が遂に言葉を発そうと口を開くが、すぐさま閉じる。

「——、いや違うな」

「違う、とは？」

「ちよつと言葉選びが軽率だった。発言する前に気づけて良かったよ」

■「どうせ死ぬんだから勉強しなくていいやと思った。」間違いく全員顔を歪める。それは好ましくない。本当に好ましくない。

「はあ。言いたくないのであればそれでいい。だが、勉強はしてもらう。俺とloniでな」

「。お手柔らかかにお願いします」

■その後二日間御影とシャルを見なかったとかなんとか。ここで勘違いしないで欲しいのはシャル達はしっかり学校に登校している。欠席記録はない。だと言うのに誰も見ていない。

なにそれ怖っ。勇者部七不思議の三つ目として登録されても不思議ではない。ちなみに他の二つは『注目人が何故か集まる』『急に運動部並に増えた部員』となっている。

花結いのきらめき【29】

シャル、御影失踪事件解決後の日曜日の夜。仕事を終えた村正は寄宿舎にある用事で訪問していた。

何処からか笑い声が聞こえてくるなか迷いなく端つこの部屋の前立つ。そして一呼吸おいた後扉を開け――

「よおーす、村正で――え？」

質素なワンルーム。掃除は行き届いており埃一つ見当たらない。男の一人暮らしとは思えない程の清潔感だ。

ただ、ただ。そんな中でどうして上半身裸な御影がひなたを押し倒しているのか。そこだけが理解出来ない。

「あ」

「ん？ああ、村正か」

「あー、あ？」

しまった、と顔に出るひなたと普段となんら変わらない御影。そして額に手を当て唸る村正。

ある程度唸った後、このままでは進まないと思った村正が復帰し、御影達へと問いかける。

「お前ら、おっ始めるならホテル行って来い。俺名義で借りていいから」

「事故です！事故なんですっ！」

「こんな時間にホテル行ってなにすんだよ」

そりゃあナニだよ、と零れそうになる口をチャックし災いの元を潰す。もし吐けば西暦組に刺されるのは明白。堪えるしかない。

「はいはい、事故な。それで？なにがどうして事故った？」

一先ず御影は見るだけで痛々しい体を隠し、淹れていた緑茶を注ぎに席を立つ。その間に事情聴取を終わらさなければ。

「傷が癒えてるか確認するために服を脱いでもらったんですが、その途中で足が纏れて」

「ドターンっと、てか……じゃあ無実で。後は俺がしとつから帰って寝な」

ひなたの言うことが本当であれば、村正が根本的な原因の可能性がある。停滞打破というスキルは本人の意志に関係なく周りで多発させる。対象が自身でなくとも。

「……医術面いけるんですか？」

「俺を誰だと思つてやがる。傷の治りぐらいなら見れるさ」

「はあ・それではお願いします」

ほんっ、とうに洩々といった感じではあるものの部屋を退出していくひなた。それと入れ違いで御影がお茶と共に着席。

「んで、なんの・その、青い眼は——」

底冷えするような感覚を覚える青い瞳。何処かで……そう、それは速須佐之男命の——

「——。いや、もう用はない。邪魔したな」

瞬き一つ。それだけで青から金色への瞳へと戻る。まるで、ただ上辺だけを移し替えているような印象を受ける。

席を立ち、扉へと歩いていく。だがドアノブへ手をかけるが何かを忘れたのか御影へと振り向き

「傷は完治だ。普段通りに戦えるだろう。だが、俺は完治のことを他の奴らには言わん。だからまあ……お前が戦おうが戦わないが構わない」

そんな言葉を置き、返答の時間すら与えず部屋を後にする。お茶が注がれた湯呑は御影とは正反対に一滴も減ってなかった。

『シャルルマーニュだが……村正か？』

「ああ、俺だ」

寄宿舎の裏手。本来なら誰も通らない場所であるからこそここを選んだ。秘密な話をするには丁度いい。

「メモを頼む。御影についてだ」

『少し待て』

現在村正はメモするような物はなにも持っていない。携帯のメモは誰かに見られる可能性があるため却下。ということでシャルに託す。

『準備完了だ』

「霊核が二つ。片方は十中八九神核だ」

霊核とは英霊の核と思ってもらって構わない。肉体と密接的な関係にあり、致命傷を与えられれば霊核にもダメージがいく。そして碎ければ英霊は強制で退去だ。

『次』

「霊核は二つとも碎けた状態で時が止まっていた。心臓も同じような状態だった」

『なに？であれば何故生きている？』

「御影は文字通り三回死んでいる。だが、草薙剣の真価によって生きている。因果逆転に近いな」

敗北を死と定義したのであれば逆転勝利は死から生でなければいけない。つまり、死ななければ発動することはない。

「御影が人間か英霊かについてはわからん。食事、睡眠は必要としていない感じだが、食べれば排泄を必要としている」

『まさか覗いたか？』

!?

「いやいや！流石にそこまではしてない！」

「おっとこれは、まさかそういう展開が、これには新しい道が、出ません。」

「はあ、そんだけだ。そんじゃ」

『ああ』

情報は全てメモさせたし、もう用はない。電話を切り、家へと――



「!?」

物陰から枝木を足で踏み折る音がした。

すぐさま音がした物陰を覗くが誰もいない。恐ろしく速い逃走。俺は見逃したね。

「気の所為か？」

気の所為とし家への帰路を進もうとするが、体からひよこりと須佐之男が現れる。

「——いいや、確かに盗人はいた。だが、私には視えなかった。ヒントはやる。答えはお前が出せ」

「あー、はいはい。また試練ね」

いつものだよ、と思いつつヒントを噛み締める。

須佐之男の眼は一言で言えば凄い。神だから凄いのか、何かのスキルなのかは現状では不明だが、ただの盗人を見逃すような瞳ではない。であれば——

「上里家の誰か、か？」

「存外早かったな。であれば報酬だ。貴様一人で怯懦な魚を葬り去る方法を——」

「いや、この世界での記憶持ち帰れないから意味ないだろ」

「むっ、それもそうか」

なんだかんだ言ってる??と須佐之男は仲が良い。勇者ではないと認識していてもその心意気は勇者と認識している。

「であれば女の口説き方を伝授してやろう」

「おっ、マジか！ここにきて年の功が出てきたな！」

「まずは八岐の大蛇へ酒を——」

「お前さあ・そもそも八岐の大蛇なんて現代にいねえんだよ」

「むむっ、であれば夜這いを——」

「ブチ殺すぞ。」

お前なあ、やっぱ結果しか見てねえだろ。どうせこの前の人畜無害宣言もそうやって歌野と水都に心労かけたろ」

やはり神様と人間、どこかズレている。過程など見向きもせず結末しか気にしていない。

「少数など知らん。あれが効率的だ」

「はいはい。そんじや、土地くれ」

「どの程度だ？」

「ここから近場の空き地なら何処でもいい」

「空き地？そんなものを探さすとも、この隣の家を蹴散らせばすぐに土地は手に入るぞ」

「空き地でいい」

「ふむ。やはり理解できんな」

「俺もだ」

その後須佐之男が世界にアクセス。と言っても、この暴挙は神樹が形成している世界だからこそ出来る力技だ。そもそも須佐之男に事象を捻じ曲げる権能などない。あるのはシンプルな力のみだ。天の神を片手でねじ切れる程の、だがな。これだから神は手におえん。

鳴子百合が咲く時期になりましたね【樹√】

あれから四年という月日が流れ、皆それぞれの道を歩み始めた。と、言ってもシャル先輩以外大社の元で働いているんだけど。あ、いや、シャル先輩が無職だとかそういう意味じゃなくて、えっとー「うおおお！樹いい!!」

樹LOVEと書いているうちわ、そして滅多に見ない西洋の鎧。

そう、シャル先輩が戦闘時の鎧を身に纏いながらうちわをぶんぶん振ってる。どういう組み合わせなんだろうか。

「うお、今日も出たよ。樹ちゃんガチ恋勢」

「あの格好、なに。」

何故か、シャル先輩は私の熱量が凄まじいファンになってます。

基本シャル先輩は本土の調査や原発復旧などをしています。私が路上ライブをすることを何処からか聞きつけ文字通り飛んできます。最初された時は笑っちゃいました。なんならお姉ちゃんも。

「きやあああ！今日も眩しすぎっ!!」

嬉しいを通り越して喧しいが勝るこの声援。私としてもこんなシャル先輩は見たくなかった。あのキラキラとしたシャル先輩は何処に。

「喧しいわー!」

「いてっ！なにすんだよ、風先輩!？」

「どうもこうもありませんっ。アンタの声で樹の美声が遮られてんの!」

「すみませんでしたっ」

お姉ちゃんの叩きで正気に戻ったのかいつもの音量で苦言を呈するも正論パンチに屈服。やっぱりお姉ちゃんはシャル先輩キラを持っているようだ。羨ま、頼もしい。

「それにほら、お迎え来てるわよ」

「はは、そんなまさか」

「お迎えに来てやったわよ」

シャル先輩が振り向いた先にはニコニコしている花凛さんがドシツと構えている。考えずともわかる、ガチギレ花凛さんだ。

そんな花凛さんに気づいたのかすぐさま撤退準備をするシャル船場だったが、次の瞬間にはヘッドロックをかまされていた。

「ぐう、そもそもうしてここにいんだよ。花凛は大社の筈」

「園子の勘、以上」

「ぐ、ぐぐ、つ、俺の人権は何処に」

「サーヴァントは使い魔なんですよ。アンタに人権はちよつぱりしかないわ」

「ちよつぱりあるのか。なら、そのちよつぱりをここで」

「今全部なくなった」

「んな殺生なあゝ！」

酷い扱いを見たような気がするが目を逸し、歌に集中する。

あのシャル先輩のことだ。きつと逃げようと思えば逃げれたんだと思う。しようしなかつたのは、あの状況を楽しんでるからかな？

——誰かが踏み締めたであろう道をなぞるようにして前へ進む。

視線を横にずらせば骨。元々は俺と同じであつたらう骨がそこら中に転がっている。肉などはついておらず、どれがどんな人なのかなどは判断出来ない。

昔話などでしか聞いたことがない300年前のあの日。何億の人が死に、天に恐怖したのか。

いや、解つてる。俺が今、そんなこと考えなくてもいいことなど戦う前から理解している。

理解しているから克服出来る。などという事はなく、この光景から言い知れぬ恐怖、或いは絶望が胸の底から這い上がってくる。

もし、もしこの中にアイツらがいたとしたら　俺は――

~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪

「」

ドロドロに混ざった心を梳かしていく歌声。ただ俺は受けそれを入れる。

波の音に負けず

海鳥たちの鳴き声に負けず

空の美しさに勝る程の歌声を瞳を閉じ、全身全霊を以て受け止める。

「~~~~~、――あれ、シャル先輩？寝ちやったんですか？」

「ああ、このまま眠ってたい」

砂浜で大の字で眠ろうとするが、あまりにも居心地悪くこのまま眠ることは出来ないだろう。凄くジャリジャリする。

「また、なにか怖い想像しちやったんですか？」

顔の表情は一切変えていないというのに樹にはバレるのだろうか。園子とは違うベクトルで鋭いのだろう。

「どうして、神樹様は勇者の力を残していつてくれなかったんだろケチだよなあ」

「神樹様に駄々こねちゃダメですよ。それにこれからは人間の力で頑張ろう、って言ったのはシャル先輩じゃないですか」

「そう、だよな。すまん、ちよつと甘えた」

「いいんですよ。シャル先輩は日頃から無茶するんですから」

本当に、いいのだからか。俺は、なにもまだ成していないというのに。こんな所で甘えて

「あ、今日もここまでですね」

どうやらもう時間のようだ。俺はまた本土の調査へ行かないといけない。樹は学校と音楽業に集中しなければいけない。四年という俺にはどうってことのない年月であろうと周りはそうはいかない。

「おう、また来週な。学業疎かにすんなよ？」

「はい。シャル先輩はあまり無理しないでくださいね？」
「当たり前だろ！」

その後、俺は程なくして北海道に到着した。そこでは信じられないことに300年前の人々がなんら変わらず生活しており、未だ元勇者が守護していた。

話を聞く限り、天の神が敷いていた結界はネロ・クラウディウスが使用する宝具のようなものであり、世界にのりでぺたりと貼るようなものらしい。その結果、結界の下は300年前の状態で保存されていたようだ。

ちなみに元勇者である者が力を失って尚も守護していたのは住民達がバーテックスが消えたことを信じなかったためらしい。

しかし、ここにもアイツらはいなかった。

「人を探してるんですか？」

「ああ、俺の親友でな。天才なんけどうざくて、でもあんま恨めない奴なんだ。良い奴、だと思っぜ」

樹には背を向け、必死にアイツの顔と声を思い出す。

本土調査を初めて早5ヶ月。進める度にアイツの記憶が薄れていく。まるで無意識のうちに忘れようとしているかのようだ。

「生存能力高かったし、どっかで生きてるかと思っただけど、食われちゃったみたいだな」

「諦めたんですか？」

「諦めたくねえ。俺は、諦めたくないんだ。それに絶対どっかでゴキブリ並の生命力で生きてる筈なんだよ」

顔を隠すように蹲りながら言葉を絞り出す。例え、ここで挫折ようが結果は変わらない。それなら、いつそ――

「それなら皆で――」

「俺の我が儘に皆を付き合わせることは出来ない。樹だって嫌だろ？もしかしたら一生を費やすんだから」

自嘲するかのように天を仰ぐ。もうそろそろ日が暮れるためか微かだが星々が輝き始める。

時間だ。今日はこれぐらいにして帰らないといけないな。明日は復旧組のところに顔出さないとだな。

「よいしょつと。それじゃあ、またん？」

のっそりと立ち上がり、この場を去ろうとする俺の裾を掴み引き留めようとしている。探すまでもなく樹の小さい手だ。

「私は、嫌じゃないです！シャル先輩のためなら一生を捧げても苦じゃないです!!」

「ありがとう。でも、樹には夢があるんだろ？俺の我が儘に時間なんて割かないでいいんだ。

それと、その言葉は告白みたいだぞ？他の人には言わないようにな」

きつとそれは激情から出た言葉だ。そんな一時の言葉を真摯に受け止めてはいけない。人生を左右するなら尚更。

「告白ですっ!」

「ははっ、冗談じゃないみたいだな」

翠色の瞳が少し潤っているも熱意充分とばかりに俺の瞳を射抜く。揺るぎない芯を持っている瞳だ。

「恋愛つてご法度じゃなかったか？」

「私はアイドルじゃないのでセーフです。それで、どうなんですか？応えて、くれないんですか？」

「すまん」

樹の覚悟を無駄にしようという悪いが、俺では樹とは不釣り合いだ。こんな芯がブレブレな俺と一緒になってしまうては樹が幸せになれない。

「——もし、シャル先輩が自分のことを私と不釣り合いだと思ってたらぶん殴りますね」

「違うのか？」

「もう、シャル先輩は一人で突っ走り過ぎなんですよ。私はシャル先輩が隣にいてくれるだけで嬉しいんですから」

美しき舞う花と黒き勇者【上】

—— 第1章 【嚙矢】 ——

雪がはらはりはらりと舞い散る一面真っ白な空間。ただ一つ金色と黒色が降り混ざった椅子が置かれており、マフラーを巻いた青年が本を脇に挟み、椅子の隣に立っている。

「おや。別の時空軸からの訪問者とは物珍しいですね」

床があるかすらもわからない地面を歩き、座っている青年へと近づいていく者が一人。その手には一振りの抜き刀が握られている。

「共倒れは阻止しなきゃいけない。アンタなら理解出来る筈だ」

「剪定事象ですか。ですが、そこまで心配しなくとも良くないでしょうか？私が監理するこの世界も、貴方方が保護している世界も柔ではありませんよ」

ある世界において神樹によって人里の守護者へと召し上げられた?? ??。そして、それに相対するは別世界の管理者であるウィルダム・ユットマン。

「それでも、だ——ッ！」

ただの青年であればこの一振りで上半身が肉片と化し飛び散るだけだが、彼は管理者。言わば神様。この程度の攻撃など直撃しようがものともしない。

振り切ったことにより破片、さらに細かくなり砂状になって空中へと溶けていく刀。??は妙な感触を受け、すぐさま後退する。

「———そうですか。それではごうしましょう」

「やっぱ無理か」

当たった、効いていないなどの話ではない。住む次元が違う。言い表せない妙な感覚だ。??は打倒を諦め、刀を逆手持ちし自身の腹へと

「おっとお待ちを。その物騒な物はお出し厳禁ですよ」

「何でもありがよっ！っ！」

その言葉で何かが発動したのか??が持っていた刀は消え去り、結果として自死することは出来なかった。これにより第2プランであった道連れは失敗。第3プラン？ねえよそんなもん。

「それではご清聴ください」

脇に挟み込んでいた本を開くと誰の力も使わず次々にページが捲られていく。そして唐突に終わりを向え、あるページを指し示す。

「ツ———!?!? お前、まさか———」

「枝分かれた二つの世界。どちらも近からず遠からず、しかし触れ合うことはないであろう。けれど、今この時を以て覆す。

さあ、黒き勇者よ。幻想を宿した勇者よ。その胸に我らが祝辞を———」

??が走り出そうが時すでに遅し。もう誰も青年を止めることはできない。もし、間に合ったとしても止めれたかは怪しい。だが、本題はそこではない。

「乖離した世界が触れ合う」

こんな事ある筈がない。あつてはいけない。けれど、起きた。であれば見守るしかあるまい。悲劇か喜劇か、どちらにせよ碌な事にはないだろう。1mmでも良い方に転ぶことを祈っておくよ。

—— 第2章 【邂逅】 ——

あらゆる時代、場所から神樹様によって召喚された勇者が集う世界。それがこの疑似世界だ。

あらゆる時代と言っても神世紀300年間と末期の西暦からのみだが。流石にそれ以前の英傑達を喚ぶことは神樹様、つまり神々であつても至難の技なのだろう。まあ、と言つてもある特殊な条件下で一人の英雄が召喚されてはいる。

「」

朝早く起き、同居人の分含めた朝ご飯を黙々と作っている姿は正に主夫。ではなくただの中学生。名はシャルルマーニュ。

そう、彼が上記で記した英雄である。

真名シャルルマーニュ。あるいはカール大帝。即ち、ヨーロッパの父である！（ドヤツ）というのは事実であるが事実ではない。

彼は本物のシャルルマーニュではなく、ただその皮を被った元一般

人。その力は紛れもない幻想の騎士によるもの。けれど、それはただの借り物でしかなく彼本来の力ではない。

「おっはよおー！」

「おっはくむにやむにや——」

元気な挨拶、それとは真反対に眠たげな挨拶が木霊する。言わずもがな同居人（いつの間にか住み着いてた）三ノ輪 銀と乃木 園子である。どうやら、眠り続けていた園子を銀が引き摺りながら連れてきたようだ。なんならまた眠り始めている。

「おはよう。園子は顔を洗ってくるといい」

「あーい」

銀の肩に置いていた手を外し、目を擦りながら洗面所へとトコトコ歩いていく。以前、いや何度か洗面所で立ったまま寝ていることがあったが、今回はないだろうと高を括り見送る。その間銀とシャルルは朝ご飯を机へと運んでいく。

今日も今日とてシャルル宅は平和です。

時刻8:00、とあるカフェにて。至って普通な黒髪、そして誰もが一度は二度見する金色の瞳。そんな青年(?)がカフェに使う材料の下拵えをしていた。

「村正さーん！こつちもお願いします！」

「へいへい。これやった後でな」

名を千子 村正。真名は??。??。言うなれば名前のない英雄。いや、それはちよつと違うか。訂正して名前を忘れ去られた英雄としておこう。これには事情があるのだが説明が面倒いので省く。

ちなみに千子 村正の擬似サーヴァントでもある。スキルは彼自身のものしか持ち合わせていないが、そのスキルによつて村正のスキルも自由自在、とまではいかないが引き出せる。

と、言つても今はただのパテイシエである。充分な下拵えをし、オーダー通りに作るだけの者だ。まあ、朝からスイーツを食す甘党はあまりおらず暇になることが多いが、準備することは全てにおいて大切だ。

そんな黙々と下拵えしている村正の内側から一体の精霊が飛び出る。だが、そんなアクシデントがあつたとしてもその手を止める気などない。

「不味いことになつたな」

そうポツリと呟いた言葉により、止まる筈のない手が静止する。固まる、の方があつてるかもしれない。

一先ず下拵え中のスイーツに背を向け、精霊『建速須佐之男命』へと視線を向ける。

「まだ食つてないのに不味いとか言うなよ」

「いや、その話ではない。そんな事はどうでも良くなる程の話だ」

普段ならこのレベルでの会話で大笑いする二人だが、今は真面目パート。空気を読める男（自称）の二人が笑う筈もなく。

「イレギュラーは三人で手一杯だ。故に四人目は――」

「殺す、か。やれたらやる」

「行けたら行く感覚で流すな。流石にこれは看過は不可能だぞ」

「はいはい。覚えてたら殺ってやるよ」

この男の性質を理解している須佐之男はこれ以上は無駄、あるいは要件が終わった、と判断し??の体内へと入っていく。それを見届け??も下拵えへと再度着手――

――樹海化警報が鳴り響く。

「見極める、それ以上に苦手なもんはねえな」

手につけていた薄いポリエチレン手袋をゴミ袋へと投げ捨て、白く清潔感を漂わせる帽子を取る。そして次の瞬間には霊基を換装。その姿は千子。村正が鍛冶場を建てた際の装いであり、所謂第二再臨の霊基だ。一人なら野武士の姿でもいいが、流石に女兒の前での姿は、ちよつと。

――花卉が舞う。

樹海。それは神樹によって現世から隔絶された世界。しかし、樹海のダメージは現世へ還元され自然災害や誰かの不幸として現れる。だが、この世界では心配無用だ。そのような時間制限も切り札、満開

による代償もない。ゴリ押しし放題である。ただし肉体疲労はあるものとする。

「こんな朝っぱらから攻めてくるたあ、いい度胸だ」

そう悪態と共に最前線へと降り立つ御影 士郎。装いとしては左側の裾に腕が通っていない村正第三再臨の霊基である。説明は「ダルクね？多分??の三倍を要する。何もしないというのもあれなので、一先ず短めでいこう。」

西暦にて勇者と共に戦った真正正銘の勇者。他二人は厳密には勇者ではない。そして後世、神世紀では四国の大英雄と崇め奉られている者でもある。

正体は?? ??の成れの果て。須佐之男との契約によつて名と存在を神樹へと捧げ、抜け殻の肉体を残して去った者から生まれた者である。つまり、記憶喪失後に生まれた新たな人格である。まあ、??ではない??と把握して貰えればOKです。

「なにか妙だな」

次に到着したのはシャルル。それと同時に意味ありげな言葉を落とす。そんなシャルルへと御影が問う。

「妙 静か過ぎるってことか？」

「それもあるが ここまで来る際に他の者達とは会ったか？」

「！」

その言葉でようやく気づき、すぐさまスマホを取り出し他の勇者の所在を確認するも 自身以外の位置を表す点と名前は表示されない。

「俺達以外いない、つてことか」

「星屑とバーテックス共も一匹も見当たらん」

「閉じ込められた可能性がありそうだな」

樹海化が終わる条件としては迫りくる天蓋共の一掃。それがこれまでの樹海化が解けた際の例だ。一応人類滅亡の際は強制的に解除されるだろうが今は関係ない。

それを踏まえて現状を改めて見よう。天蓋なし、イレギュラー組うち二名がいるだけ。これから考えるに、閉じ込められた、そんな考えが御影の脳裏に過る。

「よっこいせつ、と」

仲良しイレギュラー組三人目の村正が加わった。おじさんか、とツツコミたい気持ちをグッと堪えシャルルが村正へと問いかける。

「お前はこの事態について何かわかるか？」

「俺もさっぱりだ。とりあえず暇だから御影、なんか一発芸やってくれ」

「無茶振りが過ぎるぞ。とりま殺しとくか？」

「そうだな、殺すか」

「殺伐とし過ぎだろ」

因果応報だろ、と思いつつ各自ぼーつと樹海の地平線を眺める。辛うじてではあるが壁が視える。あと人影も、人影？

「人か、あれ？」

「人間だろうか」

「おお、速えな」

二振りの大剣を携えて飛翔し続けながらこちらへと猛スピードで近づいてくる人影。全身黒いためあまり全貌は見えないが多分男だろう。それもかなりの強者。そして遂に――

「――お前達は誰だ？」

邂逅を果たした。

―― 第3章 【独尊】 ――

突如として現れた正体不明の黒き装いを纏った少年。シャルルは黒尽くめでカッコイイ、村正と御影は業物をじつと審美する。普通なら驚く所ではあるが、普通ではないからしようがない。もはや青年のことなど眼中にない。やっぱコイツらおかしいよ。

「おい、聞いてんのか？」

「おっと、すまない。少し
いや、かなりカッコ良さの再確認が出来た。黒は良い、とな」

「は？」

おそらく最初の問いかけなど忘れているのだろう。シャルルにとって今の優先順位は『カツコイイ』が最高なのだろう。ということなので使い物にならなくなったシャルルに代わって、審美を終えた御影が間に入る。

「俺の名前は御影 士郎だ。アンタの名前は？」

「？」

「そう御影が問いかけるも黒い少年の視線は御影と村正を歩き来している。まるで見比べるかのようだ。まあ、実際そうだろうが。」

「井嵩 優斗。一つ聞かがそこのお前とお前は兄弟なのか？」

「なあに、ただのそっくりさんだ。よく聞くだろ、世界には自分のそっくりさんが3人いる、ってな」

初対面であれば絶対に直面するであろう質問をいつもの屁理屈で返す。そんな返しではあったもののいつもとかけ離れている事象が連続して起こると、逆にその程度の問題はあまり気にしなくなってしまうようだ。慣れとは怖いな。

「ユウトか。漢字は勇者の勇か？」

「？ 優しいの優だ」

「そうか、ユウト違いか。」

遅れてすまないが、俺の名はシャルルマーニュ。気軽にシャルでい

い」

ユウト、という名前に過剰反応するシャルル。これには深い理由があつてな。こちら側の世界には勇斗という名前の主人公級な奴が三人いる。どういふこつちや。

「あ、俺は千子 村正な。偽名だが気にすんな」

「」

偽名と宣言されて気にしないのは無理だろ、とは口にせずだんまりを決め込む優斗。ちなみに本来の名前はユウト違いな名だ。文字表記するならば?? ??となる。

「んで、アンタは勇者なのか？」

「ああ」

「おい、シャルと御影集合」

「んだよ、優斗、少し待っててくれ」

「わかった」

優斗に話し声が聞こえないぐらいまで離れた村正から集合がかかる。それに従い、シャルと御影は優斗を置き去りにその場を離れる。

「そんで、なんのゴソゴソ話だ？」

ここでゴソゴソ話を挟むということは真剣な話のような気がするが、村正の雰囲気は普段と変わらない。まあ、だからと言って真剣な

話ではないという法則などないが。

「お前らは井嵩 優斗って勇者聞いたことあるか？」

「西暦じゃ聞いたことがねえ。シャルはどうだ？」

「英霊之牌にはそのような名はなかった。村正、神樹の守護者としての記憶内にあるか？」

「ないな。そもそも男の勇者は御影 士郎しか確認してない」

であれば、アレは何者か。という議題に辿り着くがこの三人で考え
ても答えが出ないとなれば、それはもう迷宮入りである。

と、そんな停滞を打破するためか村正の体内から須佐之男がよ
きつと出てくる。

「お困りのようだな？」

「ああ、お困りだ。何か知ってたらさっさと吐いてくれ」

「不躰だが、まあいい。此度は見逃してやる。話してやるからさっさと井嵩 優斗と合流するがいい」

此度だけでなく毎度見逃してくれるこの神様はほんとに荒ぶりの
神なのかと疑いそうになるが実力は本物だ。天の神如きなら物理的
に雑巾絞りが出来る。ちなみに村正と結構仲が良い。

てことで優斗と合流。優斗からして見ればおバカ三人組に小さい
ぬいぐるみ(?)が付属で帰ってきたように見える。

「内緒話は終わったか？」

「そこら辺は須佐之男から話があるってよ」

「須佐之男・まさか、建速須佐之男命か!？」

「そうだ。崇め奉れ、献上品は貴様の命でいい」

「コラ、物騒な話してないでさっさとこの状態について説明しやがれ」

物騒な話をし始めた須佐之男の頭を何処からか持ち出した丸めた新聞紙でぺしつと叩、こうとするも須佐之男の頭にヒットする前に砂状になり結果としては空振りとなった。

「井嵩 優斗、貴様はこの世界にとって別世界からの訪問者である」

「」

須佐之男の衝撃のカミングアウトに優斗が何を思うのかは彼のமிழる。まあ、案外異世界転生イツヤホー!とか心の中で叫んでいるかもしれない。

「別世界か。それならば、合点がいくな」

別世界からの訪問者であれば、この世界に一切の情報がなくとも不思議ではない。逆にあつたらあつたで恐怖である。

「そして、貴様達には殺し合いをしてもらおう」

「っ——!？」

「よしっ、俺はシャルルマーニュ、を殺すか」

「ならば殺し返すしかないな」

「よおし、村正殺すかあ」

「おい待て！……ここは普通三竦み作るところだろ!？」

村正がシャルルマーニュ、シャルルマーニュが御影、御影が村正を。となれば誰も死なずに終わるが、村正がシャルルマーニュ、シャルルが村正、御影が村正。となれば話は変わる。二対一はちよつと違う。いや、そもそも――

「日頃の恨みだ、村正ア!!」

「王の剣、受けてみよ――ッ!」

「テメエら、マジでっつ、終わったら、覚悟しとけよお、お!!」

「ハハッ！やはり愉快！世界の道理など無視だな、貴様らは！」

この光景に流石の須佐之男もご満悦。世界消失の危機があるというのにこれである。愉快すぎる。

そして取り残された優斗はその破茶滅茶な光景を観戦し、啞然とする。

隻腕だというのに繰り出される一撃が一撃がいくつもの根を切り裂き、しまいには斬撃を生み出す。そして、それに負けず劣らずの色彩。一手で終わるような攻撃を常に出し続けるという化け物っぷり。そんな攻撃を紙一重で躲し、未だ致命傷を受けてないあの不遇な男も大概化け物である。

「良かったな、小僧。寿命が一日伸びたぞ」

「ほんとにな」

今はその言葉に頷くしかない。あの三人を同時に相手取るなど無理だとわかる。一人ひとりが今まで戦ってきたバーテックスよりも遥かに強い。

30分後、樹海化は無事解けそれぞれ元いた場所へと帰された。本来ならこの世界では勇者部部室へと戻されるが今回は特例のようだ。

「はあ、疲れた。マジで、アイツら許すまじっ！」

全身切り傷だらけだが、再度ポリエチレン手袋をつけ下拵えを再開する。この程度の傷なら下拵え中に治るため然程問題ない。

とある一室、正確には村正が一人暮らししているマンションの一室にて一人の少年がリポップする。

「ここ、何処だよ」

言わずもがな井嵩 優斗。もう頭がパンク気味だというのに開放されたかと思ったらこの仕打ちである。叫ばなかった彼を褒めてやっけて欲しい。

黒き勇者は異世界転移を果たした。題名をつけるなら『黒き勇者の異世界転移 くおバカ三人組との熱々な殺し合い!?!』だろうか。

—— 第4章 【矜持】 ——

時刻7:27、村正宅にて。閉店作業、なくなりそうな調味料を買いに行ったことで普段より時間がかついているが無事帰宅。階段で四階へと上がり、鍵を差し込み扉を開ける。そして、歩き慣れた廊下を進んでいきリビングへ——

「不法侵入か？」

TVの前に置いてあるソファアームに腰かける優斗の姿がある。いつから村正の家はシェアハウスになったのだろうか。いや、前までは赤嶺と暮らしていたけれど

「待て、お前は物凄い誤解をしている。これは、なんとというかだな。気づいたらここにいたというか。多分、おそらく、神樹の仕業だ」

「保険かけ過ぎだろ。まっ、だいたい察しはつく。てかお前は樹海化が解けた後からずっとここにいんのか？」

「そうなる」

樹海化が解けたのが8:00、そして現時刻は7:30。十二時間経とうとしている。周りを見渡すに荒らされた形跡はない。それは冷蔵庫も然りだ。

「晩飯、お前も食うだろ？」

「ああ、助かる」

ちなみに優斗はずっとここにいた訳ではなく、変身して街中を散策している。そのついでに全勇者も目撃している。

「嫌いなもんは？」

「嫌いはないが、麺類は苦手だ。と言っても、お前の献立が麺類だとしても食べる」

「律儀なこった」

半ば不法侵入している身で『嫌い、やだっ！』なんてしてみる。印象最悪すぎる。

村正としてはこの世界に来る以前、諏訪で子供の面倒を見てキレかけた経験があるため素直に優斗の振る舞いに好印象である。

「じゃ、一時間ぐらいで作っからTV見るかぼーつとしいてくれ」

「わかった」

TVのリモコンを優斗の側に投げ、袖を捲りながら台所へ向かう。そして買ってきた調味料をエコ袋から取り出し、定位置に置く。

食材は鶏肉、玉ねぎ、ニンジン、じゃがいも、牛乳、シチューの素。作るのももちろんシチュー。他意はない。ただ村正が今日シチュー作ろー、程度で決めたものだ。

スッパスッパと食材を切りながら、優斗の様子を見る。どうやらTVを見つけ、ニュースを見ているようだ。顎に手を当て考え込むように見ている。

（衝突事故のニュースか　　そんな考え込むようなことはない筈だが

有象無象の死で嘆くタイプとは思えない。なら、何故？」

食材を見ずに食材を均等に切り分けていく。地味に、凄い特技ではあるが、そんなこと今は関係ない。ニュースに表示されている情報を一文字も逃さず推察する。

「――神世紀3000年7月18日。そろそろ夏休みとか言ってたな。どういう原理で作られているのか、不思議だな。この世界まさか？」

画面の隅っこに書かれている今日の日付。ご丁寧に年代も記されている。だが、今を生きる者については普通である。今を生きる者達から見れば、だがな。

「なあ、優斗。お前は神世紀何年を生きたんだけ？」

食材を切る音に負けないようにして優斗へ問いかける。突然話しかけたせいか目を一瞬見開いたが、すぐに戻しこちらへ振り向く。

「神世紀、つてなんだ？」

「やっぱり西暦か。出身地は四国のどっかか？」

「いや、近畿の三重だが」

近畿の三重、その言葉に思わず刻んでいた包丁の音が止まる。

三重県、というのが重要ではなく三重県から四国への最短経路が重要なのだ。三重県から四国、その間には壁がある。諏訪の人々を守るための壁が。

「まさかとは思うが、お前、諏訪を守護している勇者か？」

完全に行動を止め、じつと優斗を睨むかのように見つめる。そんな彼からは先程のおちやらけた様子はない。

「そういう時期もあったが、四国に移動した」

「お前一人でか？」

圧が増す。

おそらく彼は意識などしていない。声の抑揚は至って普通。だと言うのにこの発せられる圧。なにか、彼にとつての地雷に触っていると優斗は感じ取った。だが、答えを偽ることはしない。

「俺と諏訪の人々で四国へ向かった。結局、辿り着いたのは俺含め四人だけだったよ」

「残りの三人は？」

「俺の妹と、知らないとは思いますが、藤森 水都と白鳥 歌野って奴だ。」

「———そうか。良くやった、大金屋ってヤツだ」

??は誰も救えなかった。

● 宝具、筋力、機転、俊敏、技術、どれも足りない。諏訪の人々全てを助けようだなんて思わなかった。歌野さえ、水都さえ生きていれば● 結局の所、自身は約束すら守れず燃え尽きた。誰の記憶にも残らず● その生を取り零した。それが彼の独白。

● 違う世界、自分ではない誰かが彼女達を無事送り届けた。それだけで満足感があつた。そんな独り善がりな満足感を胸に晩飯作りへと再度着手した。

優斗が寝静まった深夜1:00、マンションの裏手にて村正は須佐之男と密談をしていた。もちろん見つければ大事だが、まあ、その時はぬいぐるみです。か、一人芝居の稽古中ですなどの言い訳を用意している。

「今なら喉元に振り下ろすだけで殺せるのだ。だと言うのに何故殺さない？」

「須佐之男、抑止力から派遣されたお前がここまで必死になる。そして別世界の勇者。ここから推測するには、剪定事象か？」

「その通りだ。本来なら、神樹の守護者である??が終わらせる筈だった。だが、終わらなかった」

「だからこそ、両世界の代表を殺し合わせようとしてんだろ？そんぐらいは察しがつく」

これで機転が効かないは嘘だろ、と思う者もいるが今回の件に関しては露骨過ぎた。通常ならあまり口出ししない須佐之男が今回の件に関しては逐次説明と催促をしてきた。それだけで大ヒントだ。

「であれば何故殺さない？もし、お前達が負ければこちら側の世界は碎け散るのだぞ」

「理由は単純。あっちの世界では歌野と水都が生きている」

「貴様、こんな時ですら、恋心そんなものすら知らなければ、神世紀などなかった。西暦で留まっていた筈だと言うのにっ！」

「知るか。全員が全員、人間として生きた結果だ」

「ああ、そうだな。ならば私は何も言うまい。滅びるのも栄えるのも好きにせよ」

「それを決めるのは俺達じゃない。この先を生きる奴らだ」

「ふっ、やはり、貴様は気に食わん」

「俺も、お前は気にわねえよ」

その言葉を最後とし、須佐之男は村正の体内へと入っていく。

これ以降須佐之男は出てこないだろう。人と人の戦いであればそれが世の常だ。神々は試練を課すが人を操り人形として動かせることはない。その逆もだ。

そんな人と神であるというのに、彼らは最期を共にした。最期の景色がどのようなものであったのか。きつと、涙を流すのだろうか。別れに瞳を潤すのは誰だったか――

美しき舞う花と黒き勇者【中】

—— 第5章【胡乱】 ——

翌日、昨日と同時間帯に樹海化。今回は強制的に四人集合させられたため移動の時間はなく、スムーズに話へと移る。

「時間制限はだいたい30分。神樹としてはその間に殺し合いしろよ、ってことだろうな」

「早速始めるか？」

「おつ、威勢が良いな。が、それだと勝負にならねえからな」

「やってみないとわからないぞ？」

昨日の戦いを見るに御影に手数はなく、シャルルマーニュは技術がない。ただ力任せに振るっているように優斗には見えた。だが、その力任せが究極の一に近しいためとっておきを使わない限り防戦一方となるのは気づいていないだろう。

「負けた方の世界が滅びる。と、なれば公正に取り決めなければ。後腐れなく滅びたいのぞな」

「あー無難に二本先取でいいか」

「異議なし」

「ちよつと待て。それだと優斗の負担がヤバいだろ」

「じゃあ、樹海化中に一試合。それを2、3セットでいいだろ、優斗？」

「まあ、それでいいや」

これにてルール決めは終了。このルールなら正々堂々な勝負が出来るが、もし優斗が2連勝した場合3番手は消化不良のまま消え去ることになるが、そこらへんは大丈夫なのだろうか。

「てことで俺達、作戦会議するから」

「はいはい。さっさと行け」

前日と同じく優斗から離れ、三人で固まる。作戦会議という名目ではあるが、誰に三番手を押し付けるのかという論争でもある。その間に優斗はしっかりと準備運動をし、体の動作確認をしている。

「俺が先手で情報引き絞ってくるわ」

「なら、俺が二番手じゃんけんだ！」

先手が村正、二番手はじゃんけん中。驚きのシンクロ率だな、と思いつつ刀を取り出し腕の可動域の確認。ついでに残数も確認しておく。

「——よっしやあ!!」

「ぐわああー!!」

じゃんけんの勝者は御影。つまり、村正、御影、シャルルマーニュという順で決定した。迫真すぎる叫びを過去のものとし、すぐさま立ち直るシャル。一周回ってシユールである。

御影とシャルを置き去りにし、村正いや、??は飛翔する。そして、準備運動を終えた優斗の前に着地。両者武器を構え相対する。

「一宿一飯の恩義とか俺は考えないからな」

「そんなことあ別にどうでもいい。ただ、朝飯吐かねえようにな?」

「吐かせてみやがれ」

扱かう得物は両者共に剣であり、片手剣を二刀。即ち二刀流。だが、基本の立ち回りは正反対であり、優斗は攻め特化、??は防御特化となっている。と言っても究極の一には程遠いが。

「殺す気で、いいのか?」

「ああ、構わねえ。俺が死んだらこの騒動が終わるまであの部屋を使っている。通帳は自力で探せ。引き降ろしはーシャルマーニュと一緒にに行けばなんとかなる」

「最初から負け腰だな」

「保険だよ、保険。まっ、死にたくないから気軽に行こうぜ?」

「わかった、——そのまま死んでいけ」

「ッ——!」

一瞬消えたかと思う程のスピードを何とか接近される前に視認し、頭の天辺から振り下ろされた大剣を横に飛ぶことで回避する。だが、その程度は予測済み。

「見え透いてんぞー！」

その言葉と共に優斗の大剣から黒炎が噴き上がり、??を燃やさんと伸びる。燃え移れば死は免れないだろう。例え触れたのが刹那の事であつても。

「ぐお?!炎出せるんか、その剣ー！」

ほんの数m避けそこねたのたのか服へと燃え移り、さらには骨の髄までとはならず、すぐさま消火された。

「消えた。あの炎つて消えんのか」

——主い！あの人、なんだかキモい！ちゃつちやつと倒して!!

——私も、それが良いと思う。

(雷花もか村正には何かとっておきがあるのか？俺の鳳凰みたいな、何かがあと、焰香はキモいって言わない)

——だつてえ

勇者、井嵩 優斗が振るう二振りの大剣は護燕剣・焰。もう片方は護燕剣・雷。どちらも神器を冠する武器であり、その名に負けない程の業物である。あと内部には精霊に似た者達も完備。ちなみに護燕剣・焰は焰香、護燕剣・雷は雷花という名がある。

「どうせ、もう片方の剣も何かあんだろ？」

「御名答。ほれ、報酬代わりに一発貰っとけ」

「ッ——!？」

護燕剣・雷を振るうと共に雷が空気を伝い、??の顔面目掛けて走る。電気の上はほぼ光と同じ速さではあるが、放たれた雷はそれ程の速さではない。何とかのけ反ることで回避するも——

「隙だらけだ、ぞっ！」

無防備な腹を勇者によって強化されている力をフルに利用し、殴る。そんな一撃を受け声を発する暇もなく樹海の根へと叩きつけられる。感触からしてクリーンヒットだ。

「——あー、くつつ、そ痛えな」

(綺麗に決まったと思ったが、駄目か)

衝撃で根の木片が散る中、いつもと変わらない表情で現れる??。その姿に決まっていなと思うだろうが、実際は??の内蔵はズタズタだ。何故立てているのかすら不思議な程に。

「炎と雷か。勝ち目なさそうだな」

「降参か？」

「ハッ、寝言は寝て言いやがれ。こっからだ」

痛む、を通り越し軋む腸を無視し優斗へと一目散に駆ける。

手には何の変哲もない抜き身刀。一見無策突っ込んできけるように見えるが、あの眼からはそんな気合いは感じない。故に全力で迎え撃つ。

「ハッ——！」

黒炎を前方へと解き放つが如く放つ。視界全てを黒炎で呑み込むが、黒炎が晴れたそこには??の姿はない。であれば、何処に行ったのか。それは——

「後ろか?!」

すぐさま背後からの攻撃に備え、二振りの大剣を構えるが一向に衝撃は来ない。そもそも??などいない。

「——後ろとは限んねえだろ」

「は——、ぐっ・っ!!」

声が聞こえた時すでに遅し。横腹へと強烈な横蹴りを喰らい、体を浮かしながら弾き飛ばされる。だが、この程度の一撃では決定打には届かない。すぐ体勢を整えれば——

「うおっ、らああああ!!」

「ちっ・っ」

先程まで握っていた抜き身刀とは全くの別物である刀。??の身長を優に超えるだろう大刀。それを質量と力に任せ飛び切る。

そんな一撃を負けじと大剣を重ねて受け止めるも未だ足場がない優斗が不利。徐々に押されていき、遂には突発し浅いながらも胴体を

斬りつける。

「かつ、はッ！」

根へと落下し、その衝撃で肺にあった酸素を吐き出す。当然、そんなチャンスを逃す訳がなく

「トドメだ」

目前には刀、迫りくる死、共に飯を食べた男とは思えない冷たい瞳。バーテックスを仲間と共に殺し、星屑を倒したとて彼は英雄になったのではない。ただの中学生なのである。殺し合いなど初めての経験であり、食卓を囲んだ相手に刃を向けるなど。だが、死にたくない。故に殺す。

—— 箍を外す。

「ッ、風咲あああ、!!!」

「デジャ、——ブ——」

絶対零度、その名に相応しい冷気が突如として現れた刀から漏れ出る。ここにいれば凍る、と瞬時に悟り優斗の上から飛び去るがもう遅い。氷像の出来上がりだ。

「

「はあ、はあっ！」

氷漬けになったたというのに脱出を試み揺れ動く氷像。一切の油断はなく近づき、優斗の身長程の刀を狙いを定めるかのように??の首へと当てる。

「怨むなよ」

謝罪にも似た何かを告げ、氷像の首を降ろすべく刀を振るう。

対象者は氷漬け。腕も首も動かすことは出来ず、防御も回避も不可能だ。こんな状態であれば誰もがそう思う。だが、この戦いを観戦していたシャルルと御影は一ミリたりともそのようなことは思っていない。なかつた。

氷が砕け散った

「は——？」

「」

確実に決まったと思った刀が受け止められたから素っ頓狂な声を出したのではない。その可能性も含め全力で振るった。だと言うのに受け止められた。片手でだ。

ここまでの戦いで村正は筋力も俊敏も俺より劣っていることは把握している。だが、この村正は俺の全てを抜き去っている。氷漬け中になにが。

——マスター！すぐ逃げて！それか鳳凰！

（っ、なんだってんだこの異様な感じは。瞳が青い。）

警戒を促す風咲。しかし、ここで何の情報も得れず逃げるのは悪手だ。アレに対して後手に回るのは不味い。よって、今の最善手はとっておきを使う、それしかない。

優斗の体が黒炎に覆われ、徐々に炎が鳥の形へと——

「降参だ」

「――、は？今、なんて？」

「人の戦いにこれ出しちゃ負けを認めるしかない。まだやりたい、つて言うなら続けてやるぜ」

「いや、いい」

優斗の言葉を聞き届け、青い瞳から本来の金色へと戻る。それに伴い感じていた異様な雰囲気も消え去っていく。これにて本当に初戦は終了。勝者は井嵩 優斗となった。

その後、シャルと御影が到着。怒ってはおらず、いつもの雰囲気であつたため少し気味が悪い。

「ナイス敗北だ。これで俺も戦える」

「御影も負けたら結局戦えないからな？」

「わかっている。御影、絶対に負けるなよ」

「プレッシャーかけてくん。まあ、負けるつもりはないが」

世界が減じるから負けるな、ではなく自身が不完全燃焼にならないことを第一としている彼らはやはり可笑しい。自分達の世界の行く末が決まるというのに何故――

「笑っていられるんだ？」

思わず口から溢れる。

いや、そもそもどうして俺は殺す相手の事情を、心の内を知ろうと

している？さっきの村正みたく殺せばいいだけだというのに、自分は。

どうしてもこころも感情的になっているのか。

「ん？ああ。そりゃあお前、全力だったからだろ。俺達は死力を尽くし、俺が負けた。それだけだ」

「死力を、尽くした。だあ？ふざけんのも大概にしろよ、村正——ッ！！」

黒く燃え上がる炎。自身を火種にするかのように勢いを増していき、遂には個として離れていき形容が鳥へと成されていく。

「負けは覆らないが、良いぜ。お望み通り俺の全力を受けやがれ」

「おいおい、また記憶消す気か？誰が代わりにパフエ作ると思ってた」

「俺だが？いや、そこはあまり関係ないな。やるのらば一、二分だ。それ以上は許可しない」

本筋から逸れるが、??はとっておき中のとっておき。又の名は切り札というが、ここでは別の意味となってしまうためとっておきと記す。

これまでの使用は一度のみ。その際の使用時間は五分にも満たない時間ではあったが、代償なしの世界だと言うのに彼にとって二番目に大切なものを奪い去った。

そんな代償を含んだ??のとっておき。その真意とは——

「あい了解。てことで優斗、聞いての通り一分で終わらせる」

「俺の勝利でか？」

「ああ、俺の敗北でな」

海原を統治す、天上の暴れん坊。即ち、建速須佐之男命——その代理者としての君臨である。

——第6章【光芒】——

建速須佐之男命。伊耶那美命が黄泉の国から戻ってきた際に行つた禊にて鼻を濯いだときに産まれた神であり、後に英雄として名を馳せた者でもある。何十もある英雄譚の中で最たるものとしては八岐大蛇討伐であろう。

泣きじゃくる子であり、天照大御神を恐れさせ天の岩戸に引き籠もらせる程凶暴であるが一方高天原を降りると一転し英雄としての側面を持つ。

あまりにも多彩。あまりにも自由。そんな彼だが、此度の召喚は一面面のみ現界。即ち、彼は真正正銘の英雄、八岐大蛇を打倒し英傑である。

「櫛名田比売を髪に挿し」

その一言によって霊基が再臨していく。

元の原型など一切残らず衣袴のような霊基へと変わる。その姿は正に武人・いや、武神。擬似サーヴァントと比較すると桁外れの霊基出力。元来の神格に届き得るだろう。

となる、ただの勇者には相手など務まる訳がない。であればどうするか。単純だ。ただの勇者でなければいい。

「我が身に降りよ、鳳凰！」

黒炎によって形作られた鳥が優斗の体の一部になるかのように入り込んでいく。

——黒炎が吹き荒れる

それに伴いロングコート風だった勇者服は和風騎士のように換装され、背中からは黒炎によって成された両翼が羽ばたいている。

「切り札、それがお前のおきか」

切り札、とは西暦勇者が使用する劣化版満開のようなものだ。精霊という枠に収めた神霊、悪霊の類を自身の肉体へと降ろす。使用者は多大な恩恵を得れるもののそれ相応の代書を背負わなければいけない。

（鳳凰。ただの瑞鳥を身につけるとはな。特性は炎纏いとみて良さそうだな）

切り札発動と共に叫んだ真名、そしてあの形態。そこから効力を察するにとてもシンプルな能力。郡 千景の玉藻前のような変幻自在な幻術系統ではない。それならば、攻略法は至って簡単。ただ切り刻むのみ

「」

予備動作などなくその場から突如として姿を消す。

身体強化された優斗であってもその予備動作、ましてや何処に行つたのかすらも見えなかった。この際優斗が取れる行動は防御のみだ

が――

「――ッ?!」

――血飛沫が上がる

出血部位は優斗の胸。心臓には達していないとはいえ、その傷は深く出血が止まる気配は一切ない。だと言うのに次の瞬間には血飛沫おろか傷すら塞がっている。俗に言う完全回復だ。

（鳳凰じゃない? いや、これは世界が違テクスチャうからか。はたまた火の鳥と混合されたか。まあ、いい。傷が治るだけで不死ではない筈だ。こつからも殺さないようにしなくちやな）

（なんだ今の速さ?! この状態で見えないなんて初だぞ! ますか、一瞬にして全てを抜き去られるとは。相当手加減してたな、アイツ）

互いに互いのおきについて考察する。どちらも少し観点がズレているものの本質は見抜いており、もう時期真実を知るだろう。そんな沈黙を破り、先に動き出したのは優斗。黒炎によって形成されている羽を??へと叩きつけようと接近する。

「喰らつとけっ!」

「お断りだ」

??が握る抜き身刀によって両翼は切断。樹海へと落ちるもその寸前に消失し、新たな両翼が優斗の背中から生えるようにして燃え上がる。

「生憎不死なんぞな、お前が死ぬまで戦い続けてやるよ」

「不死？不死たあ、また……デカく出たもんだ——ッ！」

振るう、たったそれだけの動作で刀が碎け散る。

??の間合いに斬るものなどおらず、空振りかと思えた。が——

「あ、——あ、——ッ！」

ずり落ちる胴体。

丁度鳩尾あたりから横に切断され、胴体と泣き別れしようとする落ち始めるも優斗の言語にもならない叫びで両断された肉体は再開を果たす。

「ッ、はあ……はあ……」

（不死という言葉に偽りはないようだな。やっぱ、火の鳥と混合していると見て良さそうだ）

今の一撃は心臓を斬り、更には胴体分離まで果たしていた。だと言うのに優斗は未だ健在。このことから不死である、という発言は虚偽ではないようだ。

「ハア、アアア……——ッ!!」

翼を用いて推進力を盛ましし、??へと接近する。そして勢いそのままに風咲を振るう。氷塊を生成すると共に叩き斬る算段だったが、??は既にいない。

「甘え」

飛翔、縦に半回転。空中で逆さまの状態で二刀、着地ざまに一刀投擲し、全て優斗へ命中する。

横腹、太腿、右上腕。どれも出血しているものの再生する気配はない。

「異物があれば再生不可、ようやくと攻略法がわかってきた」

「異物なんて抜けば問題な——」

風咲を一度元々置いておいた異空間に戻し、太腿に刺さっている刀に手をかけるも抜くことは叶わず視界が暗転する。

「やらせねえよ?」

「ッ——!?!」

顔を片手で鷲掴みにされ、そのままの状態で根へと叩きつけられる。すぐさま両手で?の片手を外そうと藻掻くもピクリともしない。明らかに腕力で負けている。

「はぁ」

「——っ、ふはぁ!」

ピクリとも動かなかった?の手が外され、閉ざされていた呼吸を再開する。その間に刺さっていた刀は粒子となり、消えていた。当然傷は完治していく。

「二分経ったか。少し考察に時間かけ過ぎたな」

実際は残り二十秒残っていたがあのまま続けば優斗が死んでいた可能性があるため断念。一番後味が良い終わり方としてはここで切るのが最善であるという?の判断だ。

「くそっ！お前、手加減してやがったな?!」

「手加減も何もなあ。コレは人同士の戦いで使っちゃいけないんだよ。須佐之男の一時顕現みたいなもんだ」

それに昨日の夜、須佐之男にカッコつけたしな、と心の内でボヤキながら霊基を最初のものへと戻す。瞳も水色から金色へと変わる。

「使えるもん全部出し切ってから死力を尽くしたと言いやがれ」

「へいへい。ほら、残り十八分残ってたんだからシヤル達と合流するぞ」

樹海化が解けるまで残り十八分。流石にこの二人で会話保たせるのは不可能。なら陽気な二人を巻き込むしかない。

と、言うことで合流。何故か刀と西洋剣の談義で盛り上がっていたがカット。そこは本題ではない。

「おっ、戻ってきたな」

「無事一分で終わったようで何よりだ」

「ああ。てことで残りは駄弁つてようぜ」

「駄弁る、って何を話すんだよ」

「さあ?」

この無計画さに流石の優斗も呆れ顔。にしても男四人とは毎度男女比が狂っている部室にいるよりかは心が落ち着く。現にシヤルはいつもより少し口角が高い。

「あく、そんなじゃ、お前らの世界線について教えろよ」

「御影頼んだ」

「時系列考えんならお前が一番先だろ!？」

「俺は農作業しかしてないから面白味ねえだろ」

「じゃあシヤル！」

「嫌だ」

「シンプルな拒絶だな！」

これが普段のテンションであればこの世界の勇者は大丈夫なのだろうか、と一人思う優斗であったとき。

「あー、もうしようがねえな。ザックリだが話してやる」

てことで始まった御影が語部の昔話。こういうのはひなたの方が向いているが生憎ここにはいない。残り二名はそもそも拒否と話にならない。

淡々と記憶喪失後、訓練、遠征、勇者王決定戦、左腕チョンパ、不祥事、草薙剣。という順に語っていき最後にこの世界でのことで締め括る。

「バーテックスって同じのが何体もいんのか？」

「そりゃあな。星屑が這い出てくるなら当然バーテックスもいる」

「どういうことだ？」

「星屑が御魂へと集まり、肉がついていく。そして御魂に基づきバーテックスは黄道十二星座を冠する生物へと変わる」

話題は転じバーテックスへと。どうやら、御影の話に出てきた二体の蠍座、スコープピオン・バーテックスが引っ掛かった様子。

「なあ、もしかしてこっちのバーテックスは人型じゃないのか？」

「マジか。そっちじゃバーテックスは人型なのか」

「そう、優斗の世界線ではバーテックスは人型であり――」

「確か、『ゲイ・ボルク』って言ってたような気がする」

「はっ」

「必殺技もあんのか。凄えなそっちのバーテックスは」

――英霊である。

―― 第7章【唯我】 ――

「ふむふむ、クーフリーン、エミヤ、ギアラハッド、乙女座は……わからん。だがまあ、ギアラハッドがただ単に人類を殺す者になるとは思えないな」

「どうやら、そっちの天の神はガラクタイじりが趣味みたいだな」

シャルが優斗の会話から真名を考察するも、人類の敵になり得ない聖人が挙げられる。そこから察するに天の神の干渉或いはシヤドウサーヴァントの可能性が高い。

「英霊？ ってのを相手してたのか。そりやあ強い訳だ」

「良く五体満足で生還してんな」

「圧倒されるか圧倒するかのどちらかだな」

「英霊を圧倒。魔境だな、そちらの世界は」

YAMA育ち、それかNOUMINのようだ。きっといつか全員多重次元屈折現象を棒切れ一本で可能にするのだろう。というか御影ならやり方すら見せて貰えればやれそうだ。

「シャルと御影を派遣したいが無理そうだよなあ」

「当然のように自分を除外してんじやねえよ」

「おいおい、何もわかってねえな。もしも、俺を英霊同士の戦いに投げ込んでみる。二秒後には俺の首が飛ぶぞ」

「村正が無理なら俺も無理そうなんだが？」

「お前は戦いで強くなるパターンの奴だから問題ない」

実際シャルと御影を派遣するとすぐさま死ぬのはシャルだろう。

究極の一から程遠い場所に位置する彼が戦ったとしても勝機はない。真名開放する間もなく退去だ。と言つても、それは英霊が本物である場合の話だ。ガラクタならば良い勝負はすると思う。

夜空が輝き始める。

「どうやら駄弁っている間に十八分潰せたようだ。ということ一回戦目の勝者は井嵩 優斗。??は生存、という甘ったるい結果に終わった。」

「次は士郎とか」

「おう。隻腕だからと言って甘く見てたら痛い目見るぜ？」

「んん。優斗、一分間耐えた対価だ。」

「御影 士郎との戦闘の際、すぐさま切り札を使用しろ」 覚えたな？ 後は知らん」

「おいコラ、なに俺の作戦潰してんだ」

「どうせゴリ押しだろ。そんな作戦に潰れるもなにもあるものか」

「わかった」

自身の切り札を実際に体験した村正が言っているのだ。御影の強さはそういう次元だと察し、頭の片隅において置く。素直に聞かないあたり思春期真っ只中のようだ、間違いない。

樹海化が終わり、恙無く夕方5時頃へ。授業は終わり部活動が盛んに活動している時期だろう。だが優斗はそんな事気にもとめず村正宅にてゴロゴロ出来ず、何故か御影と共に海岸掃除をしていた。

「いい働きぶりね、助っ人くん！」

「鍛えている」

御影によって引つ張り出されここまで連れてこられた挙げ句、助っ人連れてきた、と紹介された時は隣で笑っていた御影を殴り飛ばしたかったがグツと堪え、黙々とゴミを分別しながら回収していく。その姿に部長も好評の様子。

「まさか士郎さんにシャルルマーニュさん以外に男子の友達がいるとは？」

「昼休みぼっちのアレに」

「聞こえてるぞ、お前ら」

御影に対して散々な言い様なひなたと千景。これには御影も苦言を呈するがさつと作業へと戻る。はあ、と溜め息を一つ落とし優斗へ近づく。

「丁度人手が足りなくてな。助かった」

「助かったのはいいが、村正とシャルルマーニュはどこに行った？」

「村正は成人だから今日はパフエ作り。シャルはサバゲーの対戦で忙しいらしい」

「サバゲー……？
……実質サボりか？」

「正式な依頼だしなあ。まあ、サボりに分類されるな」

この場にはいない者は軒並みサバゲーしに行っている。人員はシャル、園子、東郷、友奈、神樹館組が抜けている。ちなみに余談ではあるが今回の対戦相手は一度シャルと園子の二人によって逆転負けしている。今回はリベンジマッチと⁴いうものだ。

「士郎が楽しげに話しているだ」と

「確かに妙ね」と

「お前らマジで、俺を何だと思ってやがる」

自分から話しかけていき楽しげな雰囲気など滅多に出さない御影のこの雰囲気には驚愕する若葉とにぼっしー。どうやら、フレンドリーな御影など見たことないようだ。

「勇者部以外に友達がない士郎」

「士郎さんですしね」と

「ソロキャン似合いそう」

「あー、わかる。哀愁漂ってそうな背中してそうだもんな」

「大乱闘起こしてやろうか、テメエら」

御影に辛辣なタマ、杏、赤嶺、中銀。これには流石の御影も半ギレ

状態。そんな茶番を尻目に黙々と作業を熟していく優斗。どうやら、彼はさっさと終わらせてこの場を去りたいようだ。

と、言うことで海岸掃除は日が暮れる前に完遂された。これで夏休みに大勢の人々が来ようとも恥ずかしくない。そんな結果の手伝いをしてくれた助っ人へ改めて礼を――

「いない。帰ったのかしら」

「彼も帰宅部のようね」

「寡黙な人だったけど優しそうな人だったね」

何故か帰宅部と断定する千景、優斗の人なりを判断する高嶋。きつと御影同様仲良くしたら良い人パターンのヤツだと思う。

そんな感じで撤収しようとするも御影探知機を有しているひなたが異変を感じ取る。

「士郎さんがいませんね」

「え。ほんとだ。ま、どうせ石焼き芋のトラック追いかけて行ったんでしょ」

「?」
「それならいいのですが」

ひなたの言葉ににぼっしーが反応し、周りを見渡すとその言葉通り御影の姿はない。だが、御影がパツと消えるのはよくある。そのだいたいの原因が石焼き芋買いに行くというためあまり心配はない。そもそも御影を誘拐出来るのは一人もいや、一人いるな。

一方その頃、帰宅部である優斗と石焼き芋齧りながら歩いている御影。目指すはもちろん村正宅、皆の推理通り帰宅している。

「やっぱ石焼きが一番だな。あつ、お前もいるんだったか？」

「いや、いい。そんなに腹は減ってない」

「そうか」

短く返し、一息で残りの芋を口へ放り込む。ほくほく顔で食べているため行儀が悪いなどはあまり口に出来ず、ただ黙って帰路を歩く。

「んつく。ずっと気になって、たんだが、優斗はどうしてそこまで強くなっただ？」

「なんだよ、その質問」

「単なる興味心だ。俺はそういうの持たずに強くなっちゃってな。なんと云おうか、あれだ。俺と同じ時代を違う視点で駆けた奴はなにを思ったのか知りたいんだ」

もし、この場に村正がいれば笑いながら御影の背中をバシバシ叩いていることだろう。シャルは知らん。

全く御影の経緯を知らない優斗にとっては不思議でしかないが、答えたところで何も減らないということまで口を開く。

「目の前で誰かが死ぬのを見たくなかった、それだけだ」

「おお、なんだか深いな」

「なんも深くない。単純なことだ」

単純Ⅱ最難関、とシャルに教えられている御影はその理由がどれだ

け険しい道のりなのか理解する。それと同時にどれだけ自分が意味のない時間を過ごしてきたのかを悟る。

「それに誰かを救うために誰かを見捨てる。そんな矛盾を抱えてすらいる」

「それは普通のことじゃないのか？」

「普通 ああ、そうなのかもな」

きつと目の前の彼は自身が見捨てられる誰かが自分であると思っていないのだろう。だから、こうやってなんの駆け引きもなく隣を歩いている。そうでなければ、そうでないのならば――

――彼は何なのだ？

「我が身に降り、――ツ！」

「フツ!!」

高速移動からの横腹への強烈な蹴り。初速から一切の減速なく根へと衝突するもそれでも尚止まることは出来ず、四つ目でようやく止まる。

――黒炎が吹き荒れる

「駄目か。村止め、俺の作戦潰しやがって」

何故、彼はこうも昨日帰路を共にした俺を殺す程の一撃を入れるのか。

情は、友情は、迷いはないのか。返ってくるのは殺意でもなく、ただ楽しいという昂りのみ。村正は殺意を感じたというのにこの異様さ。

彼が手にする抜き身刀が怪しく光る。俺を殺すべく刃は研ぎ澄まされており、血に飢えているかのように見える。

「お前は、狂ってんのか!？」

「ああ、俺は狂っている」

予想とは違い答えは肯定。

彼は狂っているからこの状態を楽しんでいるのか。狂っていると悲願しながらこの状態を楽しんでいるのか。いや、もしいい。これ以上の詮索は無理、と言うよりしない方がいいと直感が告げている。

故に、一切の躊躇なく殺す。

美しき舞う花と黒き勇者【下】

——第8章【憐憫】——

御影の手には草薙剣、優斗の手にはそれぞれ焰と雷が握られている。優劣をつけると神秘性なら草薙剣、総合的に見るとしたら焰と雷。

と、言っても所有している武器によって勝敗が別れるのなら御影は無敗ということになってしまう。だが、実際にはそんなことありえない。

であれば勝敗は何によって変わるのか。答えは知らない、だ。だって本当に知らないもん。武器、腕力、技術、判断力、環境。軽く挙げるだけでこの量だ。もちろん挙げていないものもある。

戦いとはそういうものだ。どのように優位に立とうとも足踏みのみで地面は崩れる。誰が勝つなど最後までわからない。それが答えではない及第点だろう。

「くたばりやがれっ!!」

威力の調整などせず、可能である最大火力まで高めた雷を御影の胴体へと飛ばす。その速さは村正戦の比ではなく、光の速さを超えるだろう。

「もつとだー!」

そんなの関係なし、と雷を裂きながら前進。

この際の速さはもちろん雷超え。観戦している村正が目で追えない程であり、渋々須佐之男の称号を借り受けている。

「焰——ッ！」

「ハッ！」

迫りくる御影の足留めとして黒炎の壁を生成。行手を阻もうとするが瞬きの間に何千もの斬り込みが入り、炎の壁は崩壊。

「万策尽き、——ッ?!」

消え行く黒炎の裏から翼による突きが迫るも驚きながら草薙剣で斬り落とす。そして、そのままの勢いで優斗へ肉薄する。

「ちいっ！」

が
鏢迫り合いとなり、一見均衡しているかのような状態になっている

「踏み込み浅えぞ！」

「ガ——ッ！」

少し加えている力を増しただけで二振りの大剣を突破し、斜めに胴体を裂く。そして更に更に振り終えた草薙剣を振り上げ追撃を入れる。

「ダメ押し、だっ!!」

トドメとばかりに硬直している優斗へと蹴りを入り、開幕時と同じように蹴り飛ばす。

木片がパラパラと散っており、燃え上がる黒炎すらも隠れている。そんな光景をじつと観察し、今か今かと草薙剣を強く握る。

——横から強い衝撃が加わる

「ッ——ッ！」

衝撃と共に伝わる熱。燃え移ることはないが直に当たっている左側の服が燃え滓となる。

じんわりと広がり始める痛み。左側の肋骨は全壊だろう。

痛みで朦朧とするが意地で奮い立たせる。

ギョロツと眼が顔と共に上げられる。その視点は標的へと向けられる。

「ハ？っ・・・楽しくなってきたなっ！」

「っ」

奮い立たせると言うよりは子供の感覚のようなものだろうか。ゲームしている子を寝かせようとするも今イイとこだから、と寝ない状態に近い。

これにはいい一撃を入れた優斗は困惑を通り越し、恐怖する。観戦中の村正とシャルは教育間違えたかな、と思う始末。

（スピードは俺の方が速い。なら、このまま）

「おお、おお。速えな」

御影の視界から音なく消え、周りを循環するようにして加速する。体の限界、その一歩手前まで加速し突っ込む。

「とっ——」

「」

とった、そう思った。が、その瞬間御影の頭がギョルんところらへ

と向き、視線が交差する。

そう自覚した時には遅かった。

顔面間近にそつと添えるように置かれる草薙剣。

もちろんここから急ストップなど出来ない。空中でそんなこと出来る者などいない。

「あ、えっ」

勢いそのままにして草薙剣へと入刀。即ち、真つ二つ。

ぼとりと左右に別れた体が樹海へと血飛沫と共に落下する。あまりの理解不能な出来事なためだったからか再生はなく、黒炎が唸るのみだった。

「なんだお前、自死したかったのか？」

この呆気ない終わり方に心底ガツカリなのか、いつもの雰囲気ですう優斗へと告げる。あまりの温度差に風邪引きそうだ。

その問いへと答えるべくか状況を理解し、ようやく再生が始まり終わる。だが、維持はそこまで。あまりにも体力を消費したためか切り札、そして勇者服すらも解かれる。

「なんなんだよ、お前は」

喉から捻り出されたのは解答でもなく疑問だった。

異質なこの男。昨日の印象とはガラリと変わり、ただの戦闘狂へと成り果てた男。

心の底から怖い、理解出来ないという叫びがいくつも出てくる。

「俺は御影 士郎だ。いっち番最初に自己紹介したろ」

「ちがつ、お前は どうしてこんな」

「ああ、この感覚が良くないのもわかってる。村正よりも質が悪いことも教えられた。でも、でもな。そう生きるしか出来ないんだ。気分が悪くなったら謝ろう。ただ、これだけは言わせてくれ。お前との戦いは案外楽しかった。またやろうぜ」

「嫌だ」

その答えは全員が頷ける答えであつた。

その後、村正とシャルが合流。決着までの時間は驚愕の三分弱であつた。勝者は御影、だが重症なのは御影のみだつた。

当然そのような状態で学校など行ける訳がなく即座に病院へと搬送。その際に同じクラスだつた千景と風先輩が不思議な顔をしていた。明らかに不思議に思っているだろう。だが、それがどのように転ぶかは不明。

—— 第9章【悔恨】 ——

優斗は昨日同様夕方、ではなく学校が続いている真つ昼間から歩いていた。通報されるという可能性も考え、あまり人通りがない村正宅から結構離れた海沿いの道を歩いている。

「」

考えることはもちろんつい先刻まで行っていた御影との戦い。

なんの躊躇もなく卸され、敗北を期した。だが、あまりそこは関係ない。そんなことはどうでもいいのだ。

本題はあの異質、理解し難い本能。あれは正しく狂気。自分で狂っている。と自覚している分尚質が悪い。否定しようが彼には何も届かない。全て等しく無駄なのだ。

「その不良さん、お時間宜しいでしょうか？」

「あ？」

突如としてカフェのテラスから素直に綺麗だと褒めることが出来るような女性が優斗へと話しかける。周りから見れば大胆なナンパだろうが、虫の居所が悪い優斗にとっては煩わしいと思う他ない。

「わあ、本当に不良さんだったなんて」

「用がないみたいだな。それじゃ」

「奢りますよ♪」

と、言うことで入店しナンパを仕掛けていた女性が座るテラス席に相席する。決して奢るといふ言葉に反応したのではなく、このカフェに用があっただけなのだ。存在知らなかったけど。

「貴方が井嵩 優斗、さんですね？」

「知ってるのか。大社関係者か？」

「そんなところです。名前は無視でいいですね。それでは早速本題に移りましょう」

あまりにも大雑把。あの堅苦しい大社の管轄者の雰囲気からかけ離れている。

「いや、俺はこの雰囲気を知っている。改まったような口調が大分砕けているが、それでもわかる。」

「ひなたか？」

「バレちゃいましたか？」

「学校行ってるんじゃないのか？そもそも、どうしてこの世界にいますんだ？」

「いいえ、私はこちら側です。貴方側の上里 ひなたではないと断言しておきます。」

「学校は知りません。中学校はもう卒業した身なので」

「そうか」

二日ぶりの同郷の者に会えたかと思えば、ただの勘違いであった。これは全部柚葉が悪い。

何故300年経ったこの時代にひなたがいるのかは複雑な事情のため手短かに説明する。転生した、以上。

「では気を取り直して本題です。」

「今の戦況は勝利、敗北となっていますが気分はどうですか？」

「煽ってる？煽ってるよな？」

「はあ、村正には勝ったが勝ったが実質負け。御影は何だよアイツ。どうやったらあんな性格になんだよ。親は何してんだ」

「言われていますよ、シャルルさん」

「いや、すまない。アレに関しては俺の指導不足だ」

「お前はナチュラルに入ってくんな。普通に怖えよ」

もうここまでくると恐怖すら感じてきた。

何の気配もなく流れるように空いている席へと座り謝罪する。違和感なさすぎてスールしてしまうところだった。

「はい、シャルルさん。頼まれた資料です」

「助かる」

「何の資料だ？」

シャルルのみ到手渡された封筒。結構な厚みでどれだけの内容が書かれているのか不思議でたまらない。だが、勇者に与えるということは企業秘密案件ではないことは確かだ。

「ただの企業秘密案件だ」

企業秘密案件だったわ。

まさかの予想と反対のことがくるとは思いもしなかった。狙っているまでもあるぞ、これは。

「さて、土郎さんについてでしたね。経歴お読みします」

「お、おう」

愚痴ってみたものの本当に答えるとは思っていなかった返答に思わず戸惑うが、実際気になってるが故にその提案は有り難い。

そういうことで話された御影 土郎の他者が記録した経歴。御影本人が話した大雑把なものではなく正確、正確過ぎる情報。時刻すら

も話すという奇想天外っぷり。流石という他ない。その間、シャルは
仏頂面で封筒から取り出した資料に目を通してている。

「唯我独尊、いや、唯我だけか。なんとなくだがわか、やつぱわか
らん」

「シャルルさんと村正さん、二方が理解できてないという時点で期待
はしてませんので大丈夫ですよ」

「お前、精神図太くなつたな。うざい程に」

「年月とは怖いものですね」

今現在は誰も知らないであろうが、柚葉は悪神を傀儡にする程のヤ
バさを有している。悪神が馬鹿だったという点もあるが、それでも
だ。

「それで、どうしてそっからシャルルマーニュが出てくる」

経歴はわかった。だが、シャルルマーニュの指導不足とはなんなの
か。そもそも時代も異なる二人になんの接点があるう。

「誰のためでもなく自分のために、そう言った。結果は見ての通り
まあ、本人は楽しんでいる。然程問題はないだろう」

「俺にとっては結構な恐怖体験だったか!？」

「士郎さんが楽しいなら何でもいいんですよ」

「良くねえだろ!」

なんなんだ、コイツらは御影好きすぎだろ。いや、確かに西暦の出来事を考えるとこの世界でぐらいいと思う。思っちゃうんだよな。そうこうしている間に資料を読み終えたのかシャルルマーニュが席を立つ。

「それでは、俺はお暇させてもらう」

「その資料は燃やしといてくださいね」

「ああ」

了承すると同時に封筒が燃え滓と貸す。俺とは違うよく見る赤い炎だった。しかも手から人間って手から炎出せたっけ。

「では、ご馳走になりました」

「ん？」

「？」

あれ、ひなたが奢るとか言ってたような気が。あ、シャルルマーニュがか？いやでも、その本人も困惑してるし。そんな中ひなたは困惑している俺達を置き去りにし、車で颯爽と去っていった。

「なあ」

「ああいう奴だ、気にするな。ここは俺が払っておくさ」

「助かる」

これが真の頼れる大人ってヤツか。でもまあコイツとも殺し合うのか。はあ、気分が乗らないな。

シャルルマーニュと別れた後も数時間海沿いを練り歩き、夕方頃に飽きた。うん、時間を無駄にした感が否めない。

ということで放浪を辞め帰宅途中なのだが、俺は足止めをくらっていた。別に腹を壊したとかトイレレットペーパーがないとかそういうのではない。

では何故足留めをくらっているのか。

そんなこと俺が知るか。目の前の風雲児にでも聞いてくれ。

「左側の肋骨は全壊。そのどれもが内臓に刺さっており、今現在は危篤状態だ。

医師が言うにはただトラックが衝突しただけではこうならない。そもそも学校でそのような事故はなかった」

「は」

肋骨全壊？危篤状態？

いやいや、アイツ平気そうに喋ってたろ。樹海化解けるまで駄弁ってたろ。

そんな訳、嘘か？いや、俺が知り得る乃木 若葉はそんなつまらん嘘はつかない。

どういふことだ。

「以前、摩訶不思議な事象が起きたら神の仕業だ、とシャルルマーニュ

が言っていたの思い出してな。士郎の勇者システムに記録されている戦闘映像を閲覧してみた。

これだけ言えばわかるか、井嵩 優斗っ！」

事実確認が終わるや否や勇者システムを起動。次の瞬間には抜刀。花卉が散ったことで意識を切り替える。自身の勇者システムへ手をかけるがあまりにも判断が遅かった。

刀身を露わにした生太刀を俺の首を――

「――刀を抜くには早計だ」

落とすことはなく、何者かの素手によって受け止められる。薄皮一枚斬れることなくだ。これは人間では出来ない芸当だ。

そのような芸当を可能にするのは俺と若葉の間に入るように立っている170台の鎧姿の男。言わずもがなシャルルマーニュだ。

「ッ」

「少し頭を冷やせ。」

御影はどうあれ死なない。そう信じて鍛錬でもしている」

シャルルマーニュからの反撃を恐れたためかすぐさま身を引く若葉。させない、という選択はあったが見逃し、静かに淡々と説教？のようなものを始めた。

「だがっ！」

「新たな造反神側の勇者でも殺戮を楽しむ極悪人でもない。だと言うのに、貴様はその刃を向けるのか？」

造反神 確か村正が言ってた元天の神陣営の神様か。過去から勇

者を読んだのはソイツを倒すため、だったな。

それで、今俺はその神様の手下と思われてる訳だ。なるほど、それなら納得がいく。

「つつつ、士郎にあの一撃を入れたのはどうしてだ？」

シャルルマーニユを睨んでいた瞳が俺へと矛先を変える。どうやら、少しは頭が冷えたようだ。まあ、本当に少しだけだと思うが。

そして、若葉の問いに対する答えだが、そんなもの考えなくともわかる。

「怖かったからだ。」

士郎が、帰り道と一緒に歩いた士郎が顔に笑顔を浮かべながら殺しに来る。何か、言い表せない底冷えするような恐怖から身を守るために反撃した。自衛本能、だったんだと思う」

「そつ、そんな筈あるものか！士郎が友達を殺すなど、殺すなど」

「」

自身の記憶の中にある御影 士郎という勇者の姿を思い出す。

折れず曲がらずの負けを知らない勇者。託し託し託しまくって最期には

思わず口を抑える。

嘘だ嘘だと否定しきれない。否定材料が少なく、終いには肯定材料の方が多というジレンマ。

先程までの威勢など消え、弱々しいだけの少女をシャルルマーニユと共に傍観する。

信じれない。信じたくないと思っているだろう。俺もそう思っている。だが、事実だ。

認めろ。認めて前を向くしかないのだ。だと言うのに目の前の少

女は……何を観ていた？

「どうして、士郎はあんなった？」

「俺が——」

「違う。シャルルマーニュ、お前の言葉は最後の籬を外したに過ぎない。

籬を外す、と言うのはその後には流れるモノがなければ成立しない。そして、その流れるモノとなった要因はお前じゃないのか、若葉？」

抱え込もうとするシャルルマーニュを静止し、若葉へと問いかける。若葉は俺からの問いに我に返ったように蹲っていた顔を上げた。

「そう、かもしれない。いや、実際そうなんだろう。士郎一人に全てを背負わせ、私は樂をしていた。崩れそうなことなど気づかず、私は……っ！」

「——なんだコイツは？」

このメソメソ泣いている奴が乃木 若葉？俺に何度もぶつかってきた乃木 若葉なのか？

う、うーん・士郎が強すぎただけなのか。それとも俺があまりにも信用ならなかつたのか。出来れば前者であつて欲しいが、いや、絶対前者だろ。

とりあえず、見苦しいな。俺の記憶にある若葉への侮辱に等しいぞ、この光景は。

「なに泣いてんだよ。なに今更後悔して諦めてんだよ。こっからなんじゃないのか？」

「もう、この先はないんだ……この後なんて、士郎には」

シャルルマーニュはただ傍観する。

自身が成し得なかった、導くことが出来なかった。ただ先導して歩くのみだった自身とは正反対の者の声を。

「この世界ならあんだろ！」

何事にも報いを。それが乃木の、乃木 若葉の生き様なんじゃないのか?!

「ッ——！」

心の底から絶叫する。

俺が知る乃木 若葉という勇者を。頑固で凛々しく負けず嫌い。そして決して砕けない尊い志。

俺は知っている。

若葉は再起出来る。例え、この世界が終わった後士郎の死が決定していても諦めずひた走れる。そういう奴だと心の底から思う。

「士郎は命尽きる寸前まで戦ったんだ」

「ああ、知ってる」

「左腕をなくしたし、五ヶ月の間昏睡状態に陥っていたこともある」

うおお、改めて聞くと凄いな。今回は俺だが命に関わる負傷をし過ぎじゃないか? sonだけバーテックスは強いのか?

「だが、私はなにも渡せていない」

流石にsonだけ頑張った士郎になんもなしは酷すぎる。人間がする仕打ちじゃない。後で菓子折り持って見舞いに行つてやるか。

と、そんな関係ないことを考えていると若葉は立ち直ったのか病院へと入っていった。残された俺とシャルルマーニュで顔を見合わす。うん、顔が良い。

「さて、俺達も行くとするか」

「ん．．．ああ、見舞いにか？」

「いや、そのような時間はない。全力疾走で向かう。勇者システムを起動しろ」

「わかった」

若葉が襲ってきた際に使用することはなかった勇者システムを起動。黒いロングコートを身に纏う。

この場で決着をつけるといふならそれでいい。病院以外全部ぶっ壊してやる。シャルルマーニュことな。

「よし、着いてい」

その言葉共にシャルルマーニュが士郎程の速さで飛翔。どうやら場所を変えるようだ。

てか速いな。鳳凰なら追いつけるかもだが、体力消費を考えると使えない。よって素の状態で追いかけるしかない。頑張ろ。

場所は海岸、を超えて瀬戸内海へ。このことに対して一つ申し上げたい。

「なんで手漕ぎボートなんだよ」

今現在俺とシャルルマーニュはで手漕ぎボートに乗り込みただひたすらに漕いでいる。目的地は知らん。シャルルマーニュだよりだ。

「仕方なからう。何百万もする船を使い捨てには出来ん」

「使い捨て、って帰りどうするんだ？」

「気にせずともいい。もう時期目的地だ」

そうですか、と相槌を打ち口を閉じる。

日は落ち、月が出ている。水面に月光が反射し、煌めいている。だが、暗いということもあり灯台の灯り以外はなにも見えない。もし、方角を間違えても気づくことはないだろう。

万に一つないと思うが、このまま遭難して俺達死ぬとかなったら笑ってしまう。いや、笑う事じゃないけど。

「ここだ？」

「」

オールを漕ぐ手を止め、周りを見渡すがなんら変わらない光景だ。光景からでは何故ここなのかはわからない。

「優斗、切り札を用いて上空へ飛べ」

「なんでだ？」

「疑うな。俺に戦う意志はない。もし、俺が攻撃を仕掛けたのであれば、御影と共に俺を殺しても構わない」

「」

「罨ではない。」

それは確信できる。だが、何故切り札を使わなければいけないのか。上空に飛ばすのが目的だ。そんなことをさせてシャルルマーニュに利点があるようには思えはない。それなら、まあ、いいか。

黒炎を身に纏い、剥がす。そして手繰り寄せた黒炎を鳥の姿へと変える。

「我が身に降りよ、鳳凰」

鳥が自身の体に溶けるように入っていく。それと同時に黒炎が吹き荒れる。

姿を変え、両翼を形成する。これで後は飛ぶだけ。

「俺を信じ、後に続け」

「信じるぞ、シャルルマーニュ」

些か揺れるボートを蹴り、翼を羽ばたかせる。そして更に高度を上げていきシャルルマーニュが小粒に成る程までに到達した。

「千変万化の我が剣を此処に」

突如としてシャルルマーニュを中心に輝きが放たれる。

これまでの人生で見たことがない色彩。あまりにも美しく息を忘れる程の聖光だ。

「無限の色彩よ、我が王剣よ

全て、——全てこの輝きに屈せよ！

その名は——」

三対の青い翼を羽ばたかせ徐々に高度を上げる。ある一定の高度に達したためか上昇が止まる。それに伴いシャルルマーニュの周りに十二の剣が顕現。矛先は海へと向かっている。

「王勇を示せ、遍く世を巡る十二の輝剣ツ！」

海岸を散歩していた人々、漁業を営む漁師、灯台を点検していた職員。誰もがその輝きを目にした。

それ程までの光。それは誰もが目指した——

「いやあー、無事着いて良かったな！」

「誰だよ、てかここ何処だよ」

指示通りシャルルマーニュの後を追いかけた結果、俺達は一面真っ暗な場所へと着いた。

周りを見渡していると声がしたためそちらへ視線を向けるとシャルルマーニュに似ているが、雰囲気が一変したような誰かが立っていた。

あまりにも情報過多。頭が痛い。

「俺だよ俺、シャルルマーニュだよ」

「二重人格？」

「ん、ん〜。まっ、多分そんな感じだ」

そんな感じなのか。

先程まで寡黙で頑固なお父さん、みたいな感じだったのに今はただの陽キヤだ。こんな早い身替りあんのか。不思議なもんだ。

「とりあえず進もうぜ。話は歩いてても出来るだろ？」

「まあ、それはそうだが。お前が歩かないと俺は歩けないぞ」

「おっと、うつかりうつかり。さ、こっちだ」

俺の言葉で思い出したのか道があるかすら不明な道を歩き始める。俺はその少し後ろを歩いていく。

やはり、この空間に景色などない。鳳凰を身に降ろす特訓をした場所の正反対なイメージを受ける。

「それにしてもアンタは凄いな！」

「なにがだよ」

突発的すぎる褒め言葉。これは俺でなくとも疑問符を浮かべてしまっ。

「戦いとか若葉の事とか。とりあえず、全部だ！」

うーんこの、溢れ出る陽気なオーラ。これはモテてるな、絶対に。そんな無駄な思考は捨てる。今はシャルルマーニュに着いて行く

ことのみを考えればそれでいい。

「俺も御影もああいうの苦手なんだ。前を歩くことは出来ても後ろの奴らを気遣えない」

「村正もなのか？」

「まだ二日目ではあるが村正は面倒見が良い方だと思う。料理も美味しいし。良いところに出してくれたよ、神樹様は。」

「アイツは歌野と水都以外興味ないからなあ。アイツらさえ生きていればどうでもいい、そういう奴だよ。」

「だからこそ、今回の戦いの勝敗なんてどうでも良かったんだと思っ
ぜ。もし、優斗の世界で歌野と水都が生きてなきやもつと必死に戦っ
てたろうさ。」

「それが、例え、勇者としての力を失ってもか？」

「当たり前だろ。アイツが愛してんのは白鳥 歌野と藤森 水都だ。
勇者だとか巫女だとかどうでもいいんだよ」

「やっぱ手抜いてんじゃねえか、アイツ。なにが死力を尽くして、
だ。マジで巫山戯やがって。」

「というより、どうして歌野と水都の生死を気にしてんだか。どうせ
こつちの世界でもいや、この世界は神樹内の幻想だったか。それ
じゃあ現世の歌声と水都は」

「まさか、アイツらってこの世界じゃ」

「ああ、死んでる。諏訪で三年間戦線を維持してある日を境に音信不
通となった。その後四国への襲撃が始まった」

確かに諏訪は四国の勇者が万全を期すための捨て石にされるような計画はあった。だが、
だが、村正がいたんじゃないのか。

「あんな強い奴がいてか？」

「村正は強くない。ただし対人経験が半端なく多いだけの奴だ。バーテックスに単独で勝てるような力はない。

近畿地方から四国地方への大移動。戦力は二人に対し、護衛対象は万を超える。出来る、と言える者は古今東西の英雄達の中でも指で数えられる程度だ」

「それでも、あの第二形態みたいなヤツで——」

「アレは村正のとおきの中のおき。そう安々と使える代物じゃないんだ」

「」

「二分で終わらせる、というのは延長戦だからだと思っていた。だが、そういう事情があったから使わなかったのか。

「まあ、そのとおきの後ろに本当に最後のとおきあんだけどな」

「それはもうとおきじゃないだろ」

「とおきの中のおきの上に上にととおきがある。これがゲシュタルト崩壊か。始めての経験だな。

「いや、とおきの中のおき、ゲシュタルト崩壊とか人生どう生きてたら出会うんだよ。」

「——なんか、俺の愚痴が聞こえるんだが？」

「!?」

「おっ、やっと着いたな」

俺達の進行方向から一人、濁さず言えば村正が歩いてきた。
俺は別に村正に話を聞かれたことで驚いているのではない。姿を見て驚いたのだ。

一言で形容するなら黒い煙。輪郭など見えず、ただそこにあるだけの存在。声などから村正が判断出来るというだけでこの者の正体など不明。

「ん、ああ。まあ、気にすんな。どうせこれで最後だしな。千子 村正
黒煙状態つてことで。」

と、無駄話はそんなぐらいにしてささっと用件に入ろうぜ」

「そうそう」

「そんな適当でいいのかよ」

それは流石に雑すぎだろ、という言葉を飲み込み込みシャルルマーニュがここへ俺を連れてきた理由に耳を傾ける準備をする。

「んじや、用件入るぞー」

えーまず、剪定事象が起こる」

「ちよつと待ってくれ。その剪定事象ってのは何なんだ？」

「待て早くないか？」

「剪定事象つてのは行き詰まって閉じられた世界つてことだ」

「行き詰まる」

世界も成長出来ずに思い悩む時期があるのか。いや、それはちよつと違うな。

「行き詰まった世界は監理する価値なし、ということであつ壊される」

「ぶつ壊される、つて世界がか？」

行き詰まったと思われたらぶつ壊されるつて控えめに言つてやばいな。再挑戦とかないのか。

「おう。」

てことで剪定事象が優斗の世界とこの世界の狭間ら辺のある場所で起きた」

「狭間、つてのはいくつもある並行世界？パラレルワールド？みたいなヤツで優斗の世界とこの世界が半分半分でくつついた感じの世界のことだ、と思う」

「お、おう」

丁度不思議に思っていたワードを隣にいたシャルルマーニュが説明してくれたのは有り難いのだがそんな一気に言われてもな。

一先ずまとめると、俺の世界とこの世界な1対1の割合でくつついた世界が剪定事象で潰れた。そういうことだろう。

「んでだ。この出来事を察知したこつちの神樹様が原因と思しき優斗

「世界を潰せと俺に命令してきた訳だ」

「潰せたのか？」

「いや、無理だった。」

俺にいろんな神様特攻持った英霊の要素を混ぜても殺せなかった。なんというか、そうだな。世界そのものを上から殴った感じだ」

「要約すると何万、何億と積み上げた本を上から殴った感じだ」

またまたシャルルマーニュの説明が入る。

なんかこの二人、言葉がなくなるとも通じ合ってる感じだな。同一人物かと思わせる程に互いを知り尽くしている。

「で、そんなこんなで井嵩 優斗とこちらの代表で殺り合って貰った訳だが、原因、こつちにあつたみたいだな」

「つまり俺、俺の世界はとぼっちりを喰らったと？」

「そうなるな」

「はあ~~~~~?」

「まあまあ、そう気を落とさず行こうぜ」

「こちとら結構トラウマに近いレベル恐怖体験喰らったんだが?しかも一回。賠償金要求していいよな?」

「はあ、シャルルマーニュ、お前はこれを伝える為に俺を連れてきたのか？」

「いや？ただ戦いたくなかったから他の策を探しに来ただけだぞ。まあ、ここを探すのに一日かかったけどな」

「ひなたが一日で見つけた、じゃないのか？」

「ははっ！そこは別口ってことで！」

どうやらこの場所はひなたが一日がかりで見つけたようだ。正確にはこの場所が示されている資料かなにかを

「待て、結局ここは何だ？さつきまでいた海の下に普通こんな空間はない筈だ」

「ここは簡単に言えば神樹様の内部だ。と言っても、そもそもこの世界が神樹内部だからな。中枢的なものと思っていどうぞ」

「この世界の中枢」

それならまあ納得がいく。俺も俺で神樹の中と思われる場所に行ったことあるし。まあ、こんな殺風景ではなかったが。

「須佐之男に伝達した筈なんだけどな。伝わってなかったみたいだな」

「また今回も酒のツマミにでもする気だったんだろ」

「荒ぶる神は伊達じゃないな」

名が同じだけという可能性もあると思っていたが、やはり伝承通りの建速須佐之男命のようだ。何故小型化し浮いているのかはわからないが、もしかしたら、焰香達もいけるんじゃないや？いや、あれは建速須

佐之男命だけの権利の可能性あるしな

「よし。それじゃあ優斗、お別れとするか」

「出来るのか？」

「そりやあな。じゃなきや須佐之男通してお前呼ばねえよ。意味なかつたけど」

「どうした？なんかこの世界でやり残しでもあるのか？」

「いや、やり残しとかないが。こう唐突に来られるとな。心の準備と
いうか。そういや、この世界が原因とか言ってたよな。何が原因なん
だ？」

「ここは話で少し時間を稼ぎながらその間に心の準備を済ませよう。
正直ちよつと村正の晩御飯食いたいとは思うが」

「ああ、それは御影だな。狭間の一件は御影が全員殺したから潰れた」

「人類悪、っていうのに墜ちるか堕ちないか。まあ。この世界は大丈
夫だと思うけど。そこら辺は西暦勇者に託すしかない」

「そんな奴でも天の神に負けたのか」

「まあ、アレは邪魔が入ったからな。なかつたら相打ちに持っていけ
たと思うぞ」

相打ち。いやいや、それでも充分凄いわ。一対一で神に勝つ、って
ほんとにヤバいな。

俺、よくあんな奴と戦って生還出来たな。真つ二つで済んで良かった

たあ。

「後聞きたいことはあるか？」

「あーシャルルマーニユは戦いたくないとか言ってたよな。どうして戦いたくないんだ？」

この場に到着した際にここへ来た理由とした戦いたくないという言葉はどういう意味なのか。戦うのが嫌なのか、それとも負けて死ぬ可能性があったからなのか。あまり気にはならないが最後の機会だ。聞いておこう。

「そりゃあお前、カツコよくないからだろ」

「カツコよく、なに言ってるんだお前？」

世界を賭けた戦いだと言うのにそんな幼稚地味な理由で逃げたのか？力も知恵もあるのに？控えめに言って正気じゃないな。

「ほら、アンタは別に俺達と敵対している訳でも憎んでる訳でもないだろ？そういう奴を斬るのはなく、って思ったんだよ」

「前二人はガッツリ殺しに来たけど？」

「それも別口でよろしく！」

いやまあ、御影はわからんけど村正はアンタを殺す気は一ミリもなかったと思うぜ。御影はわからんけど」

「御影エ」

あれは絶対俺を殺しに来てたろ。だって真つ二つにされたんだぞ。

鳳凰纏ってたから良かったもののそうでなければ即死だ。確信犯だな。

「あ、話終わったか。それ以外に何か聞きたいことあるか？」

「ゲームのcpuみたいな動作してんな。聞きたいことはない。俺を帰らせてくれ」

心の準備は万端。例え空間の狭間（あるか知らん）で事故つたとしても自力で行ける筈だ。確証はないけどな。

「了解。記憶とか諸々全て消えるが飛ばすぞ」

「ん？記憶消えんの？」

「おっと、言い忘れてたな。」

お前の記憶、お前に関わった奴らの記憶からお前の記憶が消される。よし、それじゃ始めるぞ」

「そんな重要な事言い忘れんなよ。はあ、叫び損じやねえか」

恐怖体験を忘れられるのはありがたいが、その経験値が消えるのは勿体ないな。御影と村正の技術を模倣。いや、あれは人間業じゃないな。素直に諦めよう。

「心配すんなって。一度灯った熱は中々冷めないからな」

「そういう事にショック受けてるんじゃないやなくてな。まあ、もういいや」

そんな会話をしている間にも村正は何かの、十中八九送る準備をしている。手には御影が握っていた剣が握られている。

一閃、文字通り空間を裂く一撃が放たれる。

どうやら俺はあの安全性の欠片もない裂け目を通らなければいけないようだ。後二時間程心の準備をしても宜しいか？

「またねかさようなら、どっちがいい？」

「さようなら、でいいさ。俺はもうあんな奴らと戦うなんて御免だぞ」

シャルルマーニュへと背を向け、村正が維持している裂け目へと歩を進める。

「そりゃあ失礼。」

それじゃ、さようなら。何度も挫けるかもだが、その倍立ち上がっていけ」

「それじゃあ挫けてないのに立ち上がらないといけないぞ」

「ははっ、それもそうだな。逆が良いよな」

「そんな何度も挫けてたまるか。俺はバーテックス倒さないといけないんだよ」

最後だと言うのに、このおちやらけた空気。もしかしたらコレが強さの秘密なのかもしれない。御影は知らん。

さてと、俺も最後にお別れ言つとくか。最後のお別れぐらいはしっかり言わないとな。

「案外楽しかった。あんな体験は一生したくないがそれ以外ならいつでももっていたいと思えたさ。」

「そんじゃあ、さようなら。お前も理不尽に負けるなよ」

「勿論だとも」

その自信満々な言葉を聞き、少し口角が上がる。そんな口元を隠すように俺は裂け目へと入った。

花結いのきらめき【30】

翌日の早朝。朝ご飯を作っていたシャルの元へ一本の電話が入る。相手は驚きのひなた。なんだか慌てた様子だ。

「こんな朝早くにどうした？」

卵焼きを上手く丸めながら問う。こんな朝早くに電話をかけていくとは一大事に違いない。

『土郎さん見ませんでしたか？』

「見ていないが、まさか、行方不明か？」

『はい……。荷物はそのままなんですが、土郎さんだけがいなくて……』

「ふむ……一先ず、俺は村正へと電話をかける。ひなた達はいつもと変わらず支度をしている」

そう言い切るや否や電話を切り、自身が使うであろう電話番号にかける。

聞いていなくとも自分のことだ。どう設定するかは容易に読める。

『もしもし、千子だ』

数コールもせず電話に出て千子の名で対応してきた。あまり千子村正を千子と呼ぶ者はいなかったな、と思いつつ要件へと移る。

「その名で対応するのか」

『苗字で反応するのが普通だろ、ってかシャルルマーニユか。こんな朝っぱらになんの用だ？』

「御影が失踪した。何か心当たりはあるか？」

・綺麗に丸めれた卵焼きを皿へと盛り付ける。そしてそのままテールブルへと運ぶ。ついでに味噌汁もほいほいつと。更にキャットフードもがららと。

『上里家が怪しいな。俺達の話盗み聞きしていた可能性が高い』

「それがどう御影失踪に繋がる？」

・「少しだけ理解出来る。が、あまりにも本人の意志を尊重しないやり

方だ。認めることは出来ねえな』

「貴様が出るか？」

村正が御影奪還へと乗り出るなら心配はないだろう。並大抵の武装集団には殺されん。自身であれば弱点を突かれるかもだが村正にはそんな弱点はない。というよりは弱点をカバー出来る程の経験がある。

『いや、俺はこれから稼ぎに行かんといけねえからな。てか御影が逃げようと思えば逃げれるだろ。お前より強え奴だぞ？心配せんでいいだろ』

「それもそうか。様子見に徹するしかないな」

『もし、アイツがそういう選択をするならそれでいい。戦力は今のところ充分だからな』

とりあえず御影のしたいようにさせる。もし、逃避を選べば西暦組は悲しむだろうが戦力としては問題ない。その場合、御影を追って西暦組が抜けたとしても不思議ではないが、それでも構わない。

村正との電話を切り、ひなたの番号を打ち込んだ。

快晴、だが今日は平日。それ即ち学校に行かなければいけない日。だと言うのに俺は――

「土郎さん、次あっち行きましょう！」

「ん、ああ」

――遊園地にいます。

いや、マジで、どうしてこうなった？ちょっと。一旦記憶を遡ろう。あー、そうだな。だいたい昨日の夜でいいか。

村正が意味深な言葉を置いていった後の数十分後だったろうか。

俺は寝てて気づいたら車に乗ってた。もう、この時点から俺の頭は追いつけなかった。

「おはようございます、士郎さん」

「おはよう、ひなた。なんか、大きくなったか？」

目覚めると隣にひなたが座ってて何故か大きくなっていった。前までは俺の胸あたりに頭があっただのに、隣のひなたは俺と目線が合うまでに大きくなっている。

「三日会わざれば刮目して見よ、ですよ」

「前の部分抜けてんぞ。それについてさつきも会っただろ」

「それじゃあ、士郎さんは三日間寝ていた、ということにしましょう」

「それじゃあ、って言わなきゃ騙せてたかもな」

雰囲気はひなたのそれだ。だが、こんなハイテンションな奴ではなかったと思う。それにこの感じは

「黒耀邸で会った、よな？」

「はい、会いました。覚えてましたか」

「ひなた、なのは確信してるんだが、もしかして、未来から来たとかか？」

「タイムマシンは今の技術じゃ無理ですよ。そうですね、説明するのなら、私は新たな生を得ました」

「あー、転生ってやつか」

「そうです、そうです」

千景にオススメされた漫画であったヤツだな。一応最後まで見たが、読みにくかったな。一ページ捲るのに数十秒はかかりすぎだ。まあ、内容は面白かった。

「まあ、解からんがわかった。それで、この車は何処に向かってんだ？」

転生、と言ってもどうしてそうなったかまでは理解出来ない。だが、知ろうとは思わない。一番重要なのはひなたかひなたではないからだ。それ以外は些事に他ならない。

「もちろん私の家ですよ」

「もしかして、今、俺は誘拐されてる？」

？

「見方によつてはそうですね。でも、安心してください。何不自由はないので」

「ああ、これヤバイヤツだ、と瞬時に悟る。しかし、車は走行を続けており逃げることは出来るな。時速60kmだろうが100kmだろうが走つた方が速い。着地さえ上手くいけば無傷で帰れる。」

「逃げでもいいか？」

「駄目です。せめて一日は私と遊んでください」

「学校が」

「私は高校生ですが今日は休みを取りました。なので土郎さんも休んでくださいね」

「何処が、なので、だよ。どういう理屈だ」

「そんな屁理屈通らんだろ。ましてや学生の本文とか諸々が関わつてゐるんだぞ。」

「一生のお願いです、土郎さん。私に、どうか貴方の一日をください」泣きそうな顔でそう懇願するひなた。つい体を後ろに引いてしまったが逃げ場はない。

「ああ、コイツ、やっぱひなただ。こうすりやあ俺が断れないのを知ってるな。」

「わかった。何処にでも連れて行きやがれ」

その後、一度上里家に上げられ高級そうな朝食を礼儀作法無視して摂り、駄弁つている間に遊園地に運ばれた。だから学校中に遊園地来ても無罪の筈。!？」

「メリーゴーランド乗りましょう！」

「馬が空を走ってる」

「凄え、馬がアップダウンしながら空を駆けてる。遊園地つてのは半端ないな。」

そんな感嘆を忘れ、止まった馬に跨がる。ひなたは俺の一個前に跨がっている。残りの馬はあまり埋まらず、ガラガラの状態で起動された。

「楽しいですね、土郎さん！」

「ああ」

あー、あれだな。一瞬で飽きるな、コレ。

いや、こうやって風を切る感覚は気持ちいいんだが如何せんこれだけじゃなあ。って感じた。

五周程した後止められ、退出させられた。

「次はアレに乗りましょう！」

「おう」

ひなたの目線の先には巨大な船。ガイドマップを見るにバイキングというもののようだ。

案内員にフリーパスを見せ、船へと乗り込む。特に座りたい場所はなかったためひなた共に一番後ろに座る。

「この乗り物、一番後ろが怖いらしいですよ」

「怖いのは苦手か？」

「苦手かもです」

「なんでここ選んだんだよ」

怖いもの見たさ、或いは好奇心。まあ、どちらにせよ――

「きゃああああ!!」

「ッ」

バイキングが起動する。前後にブランコみたく大きく揺れ動く。最高地点ではほぼ真つ逆さまの状態となり、ひなたの長い髪が俺とひなたの視界を覆い隠す。

そんな中、ひなたは喉が潰れる程絶叫しながら俺の右腕に抱きつく。

腕が折れる。なんつー力で握ってんだよ。

右腕もなくしてやろうか？って。マジでそれは結構困る。というかそんな事言わない。おかしな妄想は止めろ。

「うお」

なんだか時々無重力みたいになるな。高低差が大きいからか？エレベーターでもそういう状態が少しの間あると聞くし。まあ、いつか。頭使うのは他の奴に託そう。

と、そんなつまらない事をぐだぐだ考えているとバイキングが停止する。どうやら、これで終わりのようだ。

隣に目をやるとひなたが意気消沈して俺の右腕に体を預けている。

「おーい、ひなたー？」

「――はっ、はい！」

「終わったし、早く降りようぜ」

「そ、そうですね。そうしましよっ」

「なんとか意識を復活し、いつものように背筋をピシッと伸ばす。

俺は席を立ち、その場を後に

「どうした？」

ひなたから一向に立つ気配を感じれない。行儀よく座っているままだ。

「腰が、抜けちゃいました」

「はあ、掴まれ」

「ひゃっ!？」

ひなたの太ももの下へ右腕を這わせ、左上腕で上半身を支える。幸いあまり重くなく、片手だけでも持ち上げられる。

「あ、あの」

「あそこのベンチでいいな」

バイキングを降り、最寄りのベンチへと降ろす。終始困惑気味な表情ではあったがあれが最善だろう。腰抜けた奴の扱いなんて知るか。

「どうだ？歩けそうか？」

「」

もう動けるまでに回復したひなたは御影の問いかけに対する答えを思考する。

「ここではいと答えれば恙無く遊べるだろう。逆にいいえと答えれば御影におんぶしてもらえる可能性がある。

どちらが御影によりくつつけるか。答えは単純だ。

「すいません、まだ歩けなくて」

これまでの人生で御影についたことがない嘘を初めてつく。と言っても付き合いは精々一年程度だが。

そんなことよりも、本題はここから。御影がひなたをおんぶするかどうか、それで嘘をついた価値が出てくる。果たして

「そんじや、俺は飲み物買ってくる。ひなたは何がいい？」

「カルピスウォーターでお願いします」

「わかった。少し待っててくれ」

「そう言い残し、御影はその場を後にする。確かここから一番近い自動販売機はバイキングのすぐ側。往復八分程度だろうか。」

「はあ、これじゃあ、嘘ついただけじゃないですか。」

御影に嘘をついた、そんな罪悪感のみを受け一人溜め息をつく。どうやら、価値はマイナスのようだ。

まあ、そもそも御影がおんぶをするという選択肢を取る筈がない。右手だけで一人を支えるのは少々危ない。そう理解してるが故にひなたをおんぶしない。担ぐ、という一切イチャイチャ感が出ないものであれば出来るがな。

「——なあ、その姉ちゃん。お一人？」

座っているだけだということに見て取れる気品の高さ。そして、誰もが一度は目を引かれる美貌。

そんな少女が一人で座っているというのならば話しかけるしかない。下心丸出しで

「さつき連れがいたような気もしたがあ、まっ、トンスラしてさ。俺と周ろうぜ」

何か口で発している男を前にし、またですか、と心の中で愚痴る。ひなたであった時も、柚葉として生きている今も。こういった経験は何度も出くわしている。そして、撃退する方法もいくつかあるが（土郎さんがこちらに振り向くまで一分弱。その間、この人がペラペラ喋ってる確証はない。それに土郎さんに激しい運動をさせると治った傷が開く可能性も、悩み所ですね）

貞操の危機というのにこれである。少しは危機感を知って欲しいものではあるが、まあ、バックに上里家があるため大丈夫か。

「なあ、おい。聞いてんのか？沈黙は肯定と。おっと、足が滑った」

あまりにも雑。言い訳するなら行動する前に言うのは順序違いだろう。

男は転んだかのように見せかけ、前に倒れ込む。そうなればひなた

に寄りかかることとなるが、既にその場にひなたはいない。

「っ、なに避けんだよ！」

ベンチスレスレで衝突を回避し、横へと避けたひなたに怒鳴る。どうやら、わざと転けたようだ。

そんな男に初めてひなたが視線を向ける。

「その下卑た肉で私に触らないでください。貴方に興味はありません。疾く去ってください」

「はあ？なにいつ——」

「邪魔だ、おっさん」

ひなたの言葉に素っ頓狂な声を上げるが、次の瞬間には左へ飛んでいった。無論、帰ってきた御影の道を塞いだためだ。

「ダメですよ、土郎さん。初対面の人におっさんと言っては。悪い印象を持ってしまわれますよ」

「別にいいだろ、おっさんなんだし。それよか、ほら」

ひなたの小言を右から左へ聞き流し、右手の指の間に挟んでいるカルピスウォーターをひなたへと差し出す。両手に一本、一本と持ち運びが出来ないためこうする他ない。

「後でお金渡しますね」

「いい。こういう時は男が奢んだろ？シャルが言ってた」

「んん、っ、そうですか」

果たしてシャルルはどういう話の流れでそんなことを御影に話したのか。という疑問が出てくるが、今は謎のままにしておこう。

そんな会話をしている間に先程の男は立ち上がり、悲鳴と共に去っていった。どうやら、眠らせる程の一撃ではなかったようだ。

何処ぞのシャルルは容赦なくパンチしていたっけな。もちろんそんな一撃を受けた者はおねんねだ、永遠に。

その後、買ってきた飲み物を飲み干し、再度アトラクションを満喫しようとするが、腰抜ける、御影が運ぶの繰り返し。なんなら狙っているまでである。これに関しては甘やかす御影も御影だ。

そんなこんなで最後のアトラクションへ。あらゆる絶叫系、しとやか系を乗り越えて最後に来るものとは

「景色が綺麗ですね。」

「まだ上りきってないぞ。」

観覧車。密室に男女二人という色恋沙汰待ったなしという状況であるが、そもそも御影にそういった知識はない。どうやら、抑止力はそういう事を常識として埋め込まなかったらしい。

「今日は楽しかったですか？」

「あー、まあ、楽しかった。」

「明日も遊びたいですか？」

「いや、それはいいや。こういうのはたまにするのに限るからな。」

「そうですか。」

ひなたの目論見は失敗。やはり、御影 士郎という者を墮落させるにはこれでは不足のようだ。御影を墮落するには酒池肉林にでも溺れさせれば、いや、それでもだな。

「まっ、またいつか遊び行こうぜ。」

「っ、それは、昔の私と行ってください。きっと、喜びますよ。」

「そうか、ああ、そうする。」

もつと一緒になりたい。

もつと触れ合いたい。

もつと、——私にそんな資格はない。

何をしているのだろうか、私は。こんな甘えた何百も殺した人殺しが何を言っているのだろうか。

「でも、たまには会いにいくよ。若葉とかと一緒に。」

「ふふっ、はい、是非。あの子も喜びます。」

手放したくない。

誰にも渡したくない。

そんな黒い感情を押し込み、御影を見入る。見納めになってしまいかもしれないその顔を。

夕日を反射しているのかキラキラと耀く金色の瞳。まるで宝石のようだ。

——突如として、御影がその場から消える。

「樹海化、ですかね。」

どうやら、造阪神は御影 土郎を忌み嫌っているという情報は本当のようだ。どうしてかは判らない。知っている可能性があるのは諏訪を守護していた千子 村正と名乗る者のみ。しかし、聞いたとしても口を割らないだろう。私という部外者に情報を流す愚者ではないのは確かだ。そんな部外者に出来ることは一つ。

「死なないでくださいね、土郎さん」

花結いのきらめき【31】

迫りくる星屑を一刀のもと消滅させる。

強く、より強く。次第に威力を増し、たった一振りで何十匹が死滅する。

そして担い手に応えるべく飛び交う剣達も瞬きの間に数百と潰し、閃光のように樹海を駆けていく。

そんな状況だと言うのに向に晴れることはない星屑の雨。どうやら造阪神は御影がない今を好機と見たのだろう。大正解だよ、こんちきしよう。

「どっ、せえええい!!」

大地を揺らす程の一撃が一本の大剣から生み出される。やはり、女子力を込めた一撃は計り知れない破壊力を秘めているな。

「なんだかつ、今日、多いね!」

「だ、なっ!」

拳で破裂させ、波が打っているような剣でたたつ斬る。処理スピードはシャルルに劣るもののあまり星屑が寄つてこないため危険はない。

「シャルル先輩に群がって行きますね」

「どうやら、シャルル君を一点集中で潰すようね」

「それだったらシャルルマーニユさんの援護に切り替えた方がいいかな?」

「大丈夫です。シャルル君が負けることはないのです」

シャルル一目散に群がっていく星屑。遠目から戦場を見ている者達からしたら一目同然だ。明らかにシャルルマーニユを潰しに来ている。

だが、だがだ。その程度の物量でシャルルは打ち取れない。もし、打ち取りたいと言うのなら獅子座二、三体は用意することだな。

「シャルル、生きてっかー!」

何の装飾もない刀の二刀流を巧みに振るい、シャルルが戦っている星屑の中心地に到着したのは御影かと思わせて村正。

「無論だとも」

血肉を食ろうとする星屑を薙ぎ払いながら短く返す。どうやら、軽口を叩き合う程の余裕はないようだ。

「それじゃあ問題ねえな。俺は戻る」

「ああ」

ただ生存を確認しに來ただけなのか、確認したのちシャルルに背を向け進んでいく。もちろん背中からの奇襲も防ぎながら。

（死ぬことは100%ない。それは断言出来る。）

だが、この状況が続けば誰かが怪我を可能性も出てくる。それを視野に入れるならジュワユーズを放つべきだが、そんな隙はない。

まあ、一先ず――」

星屑を仕留めていく最中に頭をフル回転し、この状況を冷静に見定める。が、そもそも思考する暇もあまりなく早計に現状を打開する可能性を秘めている選択肢を取る。

ジュワユーズへ五大元素を収束。

自身の体を支えるためジュワユーズを根へと刺す。当然、そんな大きな隙を人殺しを第一に掲げている生物が見逃す訳がなく一斉にシャルルへとその牙を向ける。

「――我が栄光の輝きを!!」

シャルルを中心に半径100mが輝きに満ちる。

やったことは単純明快。ただジュワユーズに収束した五大元素を開放しただけだ。その破壊力は絶大であり、周囲にいた星屑は塵と化した。

ぽっかり空いた空間目掛けて飛翔。星屑の包囲網を抜ける。そして、そのまま後衛組の側に着地。

「東郷、いけるか?」

「任せて」

そんな短い言葉で通じ合い、すぐさま各自行動に移る。

変わらずシャルル狙いの星屑が何十か寄ってくるも東郷の正確無

比な射撃により悉くを撃ち落とされる。

「幻想の色彩、幻想の物語

されど——」

「！ 全員、てったあーい!!!」

シャルルから溢れ出る眩きに気づいたのか、風先輩が戦闘中の者へと叫ぶ。それにより全員がその場を離脱し始める。

「我が剣、我が勇士は君臨する！」

即ち——」

——シャルルの下。樹海の根からぬるりと得体の知れない物体が這い出てくる。

そんな光景を最も近くにいた須美が目撃した。

「シャル先ば

」

そう呼びかける時点には全容を現し、宝具発動間近のシャルルを妨害すべく体当たりを仕掛ける。

それよりも速く、一人の勇者が翔ける。

「やらせねえよ？」

「士郎くん!」

這い出てきたもの、魚座を冠するバーテックスに上下に別れんばかりの斬撃を加え、続けざまに強烈な蹴りでシャルルから離す。

「王勇を示せ、遍く世を巡る十二の輝劍ツ！」

加算されたジュワユーズ、そして本来のジュワユーズから圧倒的な破壊力を有した五大元素がレーザーのように星屑の大群にへと放たれる。

以前のシャルルごと突っ込むタイプではなく、今回は放射タイプのようだ。

「また潜りやがったか。」

どうやら、先程の連撃では仕留めきれず根への潜航を許してしまつたようだ。

魚座がいることは全員視認している。どこからどう仕掛けてくるのかわからない現状、ただ自身の真下を警戒するほかない。

「ん〜。シャル先輩、そこ」

本来槍である自身の武器を傘状にすることで身を固めている園子が何の変哲もない根を指差す。その指は移動しているものを指しているかのように常に動いている。

そんな意味不明な行動ではあるが、園子に全幅の信頼を寄せているシャルルはそこ目掛けて走り――

「――エリユプシオン！」

ジュワユーズを棍棒へと持ち替え、纏わせた地の元素と共に根を抉る。二撃目はなく、ジュワユーズへと戻す。

手負いだったのかその一撃で仕留め、撃破特有の現象が起こる。

「よしっ。ナイス園子！」

「いえい♪」

先程まで黙々と星屑を瞬殺していた者かと思わせる程の明るさで園子へとグツジョブを送る。それに応えるかのようにピースを返す。

「御影もなー」

「おう。ギリ間に合ったみたいだな」

園子同様御影へもグツジョブを送る。二重人格かと思われそのような変貌ぶりである。

と、問題はそこではなく。

「今まで何処にいたんだ、士郎!?!というか怪我は!?!」

怒鳴るかのように御影へと詰め寄る若葉。そして力一杯御影の肩を掴み、ぐわんぐわんさせ怒涛の質問攻めをし始めた。

「ちよっ、わか、」

勇者システムによる筋力増強をフルに使用した掴みを受けている御影は最早喋るところではない。徐々に顔が青白くなっていき、意識が落ちかけている。

「わあー！若葉ちゃん！士郎くんが死んじゃう！」

「落ち着けて！士郎、殺す気か!?!」

取り乱している若葉の腕を高嶋とタマが力づくで外し、中途半端な羽交い締めをし一旦落ち着かせる。その間に千景が御影へと近づき、顔の前で手を振る。

「ご臨終ね」

「生きてるわいつ！」

「ほっ」

「なんだアイツら、急にうるさくなつたな」

「仲良しだなっ！」

若葉から開放されツツコミと共に復活。その姿に杏がほつと息を落とす。

そんなてんやわんやを遠目で眺めていた村正とシャルルがほつこり。だが、それとは裏腹に御影が戻ってきたのを喜んでいいのかという葛藤もあるが。

「すまない、取り乱した」

「マジで死ぬかと思つた」

落ち着いたのか羽交い締めを外された若葉はぺこりと御影へ謝罪を入れる。そんな謝罪を手であしらいながら、肩を回す。

「それで士郎くんは今まで何処にいたの？」

「あー、ちよつと、遊園地にな」

「遊園地い？まさかタマ達が必死こいて勉強してる間、士郎は遊園地で遊んでたのか？」

まさかの居場所にタマのジトーつとした目線が御影へ刺さる。だがしかし、遊んでいたのは事実であり弁明出来ない。

「まあ、そうなるな」

「はあ、呆れた」

「いや、これにはいたたまれない事情があつてな」

「事情？なにか事故に出くわしたんですか？」

遊んでいたのは事実、だがそこに至る経緯を聞けば納得してくれる筈。しかし、それ以前に一つの問題がある。

「誘拐？されてな」

「誰にだ？」

怒気を含んだような声で御影へと問いかける若葉。きつと樹海化が解けた後誘拐した者を斬りに行くだろう。

「名前なんだっけな」

ひなたというのは理解している。だが、ひなただと答えると要らぬ誤解を招く可能性がある。そう考えると偽名を言うのもありだが、それではいつか嘘だとわかる。

「えっ。じゃあ士郎くんは名前も知らない人と遊園地で遊んできたの？」

「・・・そうなるな」

「アハハハ！よく不審者と遊べたな！タマだったらタマンないぞ！」

・タマの爆笑にむっとしたのか少し眉間に皺を寄せる。これではアイツの名誉がなくなってしまう、そう思ったのか口を開く。

「不審者、そんなもんじゃなかったさ」

「じゃあなにによ？」

「そうだな・優しい人、だったよ」

千景の問いに今まで見たことなかったような穏やかな声でそう返した。

口元は笑っているのかニヤけているのかわからないような表情をしていた。

意匠を凝らした火鉢【番外編】

12月25日、クリスマス。即ちイエス・キリストの誕生日。あまり宗教については解らないが物凄くめでたい日である。

そして、そんな日の朝には良い子達の枕元にサンタという謎深い者がその子の欲しい物を置いておく。それは勇者達も例外ではなく。「なんだコレ。火鉢？」

毎日ひなたと同じ程に早起きな御影が枕元に置かれている高級そうな火鉢を首を傾げながら審美していく。ちなみにそれ以外にも一つの包みが置かれている。

「俺宛て、で間違いないよな。」

・サンタも大変だな、火鉢を抱えてくるなんて」

・サンタの存在を信じる純真な御影は感嘆しながらも支度を始める。今日もおにぎりを作らねば、と。

その後部屋を後にし、共有スペースであるキッチンへと移動した。

「おはよう、ひなた」

「おはようございます、土郎さん」

毎朝恒例の為か手慣れたスピードで米を研ぎ、鍋へと流し込む。蓋をし、最高火力で熱していく。沸騰するまで放置だ。

一応の待ち時間が出来たため、味噌汁の味見をしているひなたに火鉢について問いかける。

「朝起きたら火鉢置いてたんだが、ひなたは何か知ってるか？」

「火鉢、ですか。いえ、なにも知らないです。シャルルマーニュさんに聞いてみてはどうですか？」

「シャルルにか。後で聞いてみる」

そこで会話は終了。各々の作業に再度着手し始める。

ちなみに今年のサンタ役はシャル、村正、ひなたとなっている。最終結果としてクリスマスプレゼントが貰えていないのは村正一人となっている。まあ、彼は大人だから当然といえば当然だが。

その後、ぞろぞろと起き出してき寄宿舎全体が騒がしくなったのは語らずとも良いだろう。

時間を飛ばし日が落ちた夜八時へ。

業務を終えた所をシャルの要請で呼ばれた村正は寄宿舎内の端っこに位置する部屋にて例の火鉢を眉間に皺を寄せながら悩んでいた。(完璧村正印のヤツだ、コレ。ご丁寧に印まで押しかがやがって。その手の奴に売れば何億すると思っただか。これもプレゼントだろうが。まあ、それなら御影に託すか)

千子 村正の『業の目』を用いた結果、この火鉢は村正印の物ということがわかった。なんなら底面に印も押されている。

印を押す、ということとは判断出来る者がコレを見れば一目で千子

村正もしくは村正一派の物だとわかる。つまり、高値で売れる。

「あー。コレもサンタからの贈りもんだろ。好きに使っていいんじゃないかねえか？」

あくまでもコレはサンタからの贈り物。貰った者のだ。なら御影が使いたいよう使うのが礼儀だろう。

暖を取るでも売っ払うでもいい。ただし、それを選択するのは御影だ。部外者である村正が決めることではない。

「使う、つてもなあ。そもそもどう使うんだよ？」

「それもそうか。普通は知らねえよな、火鉢の使い方なんて。

とりあえず火鉢を使うにはな、いろんな下準備がいる。炭とか火箸とか灰とか。ま、上げてくとキリがねえ。そこら辺は俺が買つといてやる」

「おつ、助かる」

要件が終わったのか村正は部屋から退出。一人残された御影は火鉢をそつと部屋の隅へと運んだ。

視線を引き付ける物が移動したためか本来最初に見つける筈であった一つの包みを今更になって発見した。

「プレゼントが二つ？サンタの誤送か？」

そんな勘違いをしながら包みを手にし御影も部屋を後にした。

二日後。無事必要な道具を買うことが出来た村正が寄宿舎を訪問。それに続きゾロゾロと勇者部の面々が訪れ、最終的には知った顔が全員集合となった。

全員集合、となればすることは一つ。

「へいっ！」

「よいしょっ！」

「へいっ！」

「よいしょっ！」

ぺったんぺったん。

村正がひっくり返し歌野が木槌で搗く。熟年夫婦並に息が合っているとは園子談。

ということとで急遽始まった餅搗き。つき臼は石製と力の籠もった準備となっている。ちなみに村正が大赦から無断で拝借している。ついでに木槌も。

その後代わる代わる餅を搗いていき、餅は完成。そのままきな粉をまぶして食べるのも良いが焼けば更に美味い。まあ、そこらは人の好みによって変えるのがいいだらう。

そういうこともあり、餅搗きしている者達から離れたある一角で煙が上がっている。

「餅搗きか・普通、もうちよい後にするもんじゃねえのか？」

「大抵は一月ですね。家庭それぞれだと思いますが」

火鉢で暖を取りながら搗きたての餅を焼いていく。徐々にゆつくりとだがぶくーっと風船のように膨らんでくる。それを頃合いを見て回収し、受け取っていない者へ渡していく。

「やっばきな粉一択だろ！」

「砂糖醤油も中々だぞ」

「素材本来の味というものがあるのよ」

餅の味談義はどの世代でも健在のようだ。きな粉派と砂糖醤油派。あるいはそのまま派。もう、これには関しては餅が悪い。浮気性だなあ、餅くんは。

「んく♪火鉢で焼くと一段と美味しく感じますねっ！」

「だねっ！これからは火鉢で焼いていこっか！」

「毎回、という訳にもいきませんが、準備諸々もありますが、士郎さんの目が死んじゃうので」

「——、いや、別に死んでる訳じゃねえよ。ただこうなっ。無心になるというかな」

ひなたからの言葉に数秒のラグがあつたものの反論するが説得力がラグのせいで皆無である。

千子 村正が体内にいる為か、それとも御影がそういう性質なのか。火を魅入ってしまう。時間を忘れる程に。

そんな弁明など露知らず御影を除いた西暦組は再度餅を搗きにその場を去った。残されたのは火の番をしている御影と大赦特有の白装束を着ている者のみ。計三名となっている。

「ひな、アンタも食べるか？」

「私は若葉ちゃんが気づいちやうのでダメですね。遥乃ちゃんにどうぞ」

「はいはい。よく噛んでな」

「んっ」

御影の右側にぴたりと張り付いている黒耀 遥乃。黒耀家唯一の生き残りとなっている。え、あの親父はどうしたんだって。知らない方が良いこともあるんやで。

「少し気になったんですが、士郎さん、その右手は意図してですか？」

「？ なにがだ？」

「ふふっ。いえ、なにもありません」

どうやら御影は無意識の内に遥乃を火から遠ざけるために右腕を伸ばしているようだ。これが遥乃ではなく上里 勇斗であれば一家

団欒が見れたのだろうか。勇斗はおらず。そもそも御影はひなたとの子がいるなど知る由もなく。

「!?」

「おっ、舌に合ったみたいだな」

「やつぱり、遥乃ちゃんもお餅が大好きみたいですね」

仮面をつけている為あまり表情は判らないが雰囲気からわかる。とういうよりは滲み出ている。

やはり勇斗の血縁者。味覚も似通っているのだろう。特に安倍川餅を大量に取っていつているのがその証拠だ。

「——ふむ、コレが例の火鉢か」

「うおっ、てシャルか。急に喋りかけてくんな」

「あいや、すまない。火鉢を初めて見るのでな」

そんな団欒など知らず、シャルルが現れ火鉢をじっと見つめる。あまりにも唐突に現れた為か安倍川餅伸ばしながら食べていた遥乃はそのままの状態で御影の後ろへと隠れてしまう。御影以外の男性という点もあるだろう。

「シャルルさん、お久しぶりです」

「むっ、ッ！」

ひなた いや、柚葉が喋りかけた為か砂埃なくその場から離脱。苦手意識が強すぎる。

多分すぐに戻って来るため心配はいらないだろう。

「なんだったんだ、アイツ。嵐のようだったな。アンタ、なんかしたのか？」

「いいえ？なにもしてませんよ。何故か村正さんとシャルルさんに嫌われているんです」

「謎だなあ」

村正とシャルルが柚葉を苦手とする理由は一つ。とある人物と雰囲気酷似している為である。完全なるとばっちりだ。

「そろそろ第二陣が来るか」

シャルルがこちらへ来たということは神世紀組が来るということ。その為の餅は準備万端。

その言葉を聞いた瞬間、柚葉は置物と化し遥乃は御影の背後へと周る。しかし大赦服を着ている二人は目立つ。遥乃に関しては子供ということもあり、更に目立つ。なんならほとんど隠れてない。御影の背後から色々飛び出すすぎだ。

まあ、柚葉は喋りかけるなオーラを纏っている為あまり心配はいらない。だが、遥乃はそんなオーラなど持っていない。当然――

「こんにちはー！」

「み——ッ?!?!」

結城のセンサーに引っ掛かってしまった。直ちに逃亡。それを追いかける結城。どうやら、追いかけてっこだと思っっているようだ。

「うんつつつつま!!!」

「美味しい・何百個でもいけますっ！」

「そんな訳・美味しい。私だったら千個いけるわね」

「二人共食べ過ぎは駄目よ。帰るの明日になっちゃうわよ?」

「お持ち帰り用もあんだから腹八分目に留めとけよ、お前ら。シャルに俵みたく担がれたくないならな」

危険が迫ったら最前線で戦っている若葉を俵みたく担いで離脱する男が言うのは説得力がダントツだ。流石アメリカシーゼロ勇者。

次餅搗きの番が来るのが五分後。その空き時間をただ餅を食べ、談笑して過ごしていく。そんな中友奈はずっと遊びと勘違いし遥乃を追いかけていた。

御影の子孫だからだろうか。子供の肉体だと言うのに身体を動かすことが得意な結城を軽く凌駕している。息も切らさずにだ。次世代の勇者候補だろうか。

そんなことをしているとあつという間に五分が経ち、餅搗きの番となった。神世紀組は餅を食べるのを止め、結城を回収してから餅搗きへと向かっていった。

結城から開放された遥乃は安倍川餅を食べながらトコトコ火鉢の元へと戻る。もちろん近すぎないように御影が腕を伸ばす。

「っ・っ」

火鉢の側に近づいたはいいものの全身の鳥肌が立ったのか体が小

刻みに震えている。あれ程身体を動かしたのに一滴の汗もかいていない所から考えるにあの程度の運動では不足だったようだ。

「寒いのか？」

御影の問いにびくびくしながら頷く。

その返答を見てか、御影はサンタから贈られた赤色のマフラーを外し片手で器用に遙乃の首に巻いていく。キツさぎず緩すぎない。程良い強さで。

「温かいだろ。なにせ、サンタからの贈りもんだからな」

「？」

「ん？なんだ、サンタ知らないのか？」

「サンタ・そう言えば一昨日はクリスマスでしたね。すっかり忘れてました」

サンタⅡ　　を知らない御影としては何故遙乃がサンタを知らないという事実に疑問が浮かぶ。そしてその答えらしき考えが一つ、

ありえないという考察が出来てしまった。

「まさか、プレゼント貰ったことねえのか」

少し眉間に皺が寄ったせいかわ遙乃が少し俯く。それを感じ取りすぐさま顔を戻す。

だが、これによって疑問は晴れた。が、それでも疑問は残る。

何故、こんな良い子がプレゼントが貰えてないのか。

サンタの配達ミス・なら、それは、もしかすると

「やっと合点がいった。そのマフラーは本来遙乃に届くヤツだったて訳か」

「はい？」

「？」

サンタの正体を知っているひなたとしては何言ってるんだろ案件だ。

御影はちよつと天然ボケがたまにあるため油断ならない。

「そういうこつた。そのマフラーはお前のだ、好きに使いな」

そう言い穏やかな表情で遙乃の頭を撫でる。それが心地よいのか頬を緩ませながらマフラーに口下を埋めていく。

後日、ひなたがマフラーを他の子に譲り渡したと聞いた際に涙がポ

ロリと落ちたが理由を聞き二時間後に立ち直ったのは語るまでもない。

愛しき貴方達へ【閑話】

人を食べるおっかない白いマシユマロのようなモノが現れ早一年。今日も今日とて諏訪は絶好調です。

食物を育て、畑を耕し、バーテックスを追い返す。

遊ぶとか休むなんていう時間はあまりないけれど、元々体を動かすのも土と触れ合うのも好きだったからあまり問題はなかった。それに独りじゃないし。

「つと、今日採れたぶんとしてはこんぐらいだな」

今、採れたてピチピチの野菜を入れたカゴを置いたのは私の支援者勇斗。変な経緯で出会ったが流れるままにそういつた関係になった。

何故、私の支援者なのかは解らない。ちなみにバーテックス（勇斗が言うには天蓋）を追い返す仲間でもあったりする。

「瑞々しきバツグンね。齧つとく？」

「ナスはなあ。トマトなら齧りついてもいいんだが」

トマト、そういえば確かに以前収穫したてのトマトに齧りついていたらような気がする。と言ってもさほど可笑しい事ではない。誰だつて自分の手で丹精込めて作った野菜は出来立てホヤホヤで食べてみたいものだ。言わば人間として当然の反応。

「んじゃ、炊き出ししてくる」

「ラジャー」

そう言い、ナスを自分達用に五個取り出しカゴごと運んでいく。尚、そのナス達は備蓄されもしもの時と避難者、身寄りのない子供の炊き出しとされて使用される。

しかし、最近では諏訪への避難者はパタリと途絶えている。外の生存者がいなくなったのか、それとも屋内に身を潜めたのか。出来れば後者であって欲しい。

その後、土地を耕し畑を広げていった。

整備する者がいなくなつた土地、手を止めてしまった土地。それなら有効活用しなくちゃ。

桑を何度も何度も土へと振り下ろし、掘り返していく。

手の痛みなど無視して握り締める。ママが何箇所か出来始めているが無問題。いつも通りだ。

「——うたのーん！休憩しよー!!」

土を隆起させ、掘り出そうとした桑を止める。止められた桑は土によつて支えられ手が離れようと倒れようとはしない。それを確認した後顔を上げて声がした方向へと視線を向ける。

視線の先には包みを持った麗しのみーちゃん。今日もお昼を持ってきてくれたようだ。

「りようかーいっ！」

蕎麦かな？蕎麦だろうなく。やっぱりお昼は蕎麦よね。

確か昨日勇斗が打つた蕎麦が残ってたし、十割十分の確率で蕎麦！もらつた、この勝負。っ！

力んでいた手を解しながらみーちゃんの所へと歩いてく。あと服についている土も叩いておく。

耳に鈴の音が届く。

「！うたのん！」

「運動後の蕎麦は格別よね。ということで白鳥 歌野行ってまいりますっ！」

みーちゃん、すぐ戻るからねー！」

バーテックスの襲撃。

そうとならば迷っている時間はない。早く勇者服を置いている諏訪大社に向かわなければ。きつと、勇斗はもう戦ってる。

壁を越え、迫りくる星屑を視認する。

数にして50前後、マシユマロのみで複合体はいない。この程度であれば問題なく退けるだろう。だが、油断はしない。確実に潰す。

「ハッ！セイッ！」

一振り、刀が砕け散る。感触は良かったものの未だ健在。

二振り、刀が砕け散る。これまた良い感触だったが怯まず突っ込んでくる。

「終いだ！」

三振りにしてようやくマシユマロが散る。

これには溜息を一つ。自身の筋力の低さに涙が出そうだと、そんな事ではよぼくれているも敵は止まってくれはしない。息つく暇などないものだ。

「——どつつ、せえええい!!!」

雄叫びが聴こえた次の瞬間には地響きが木霊する。そんな光景を見て本当に年若い女性かと思ってしまう。

あー、そうだな。多様性だよな。

「待った!？」

「おう、待ってた。さっさと終わらせて帰るぞ」

「オツケー・・・お昼も待ってることだしね」

「俺にもあるか？」

「あら？勇斗は食べなくても平気じゃなかった？」

「いやまあそうだが・・・水都の腕が上がってるかチェックしたいし」

「ほんとに食べたいだけよね！」

「何故バレた!？」

「むふー。勇斗の嘘を見抜くなんてベリイージーよ」

そんな雑談をしながらマシユマロを減していく。

マシユマロ50体程であれば殲滅は容易い。複合体がないとなれば尚更。と言っても刀の消費はバカにならない。

1体に三本。つまり50で150、歌野と半分ずつやったとしても75。あまりにも燃費が悪い。が、そんなこと考えてもしょうがない。目の前に集中する他ない。

その後、恙無く殲滅し危機は脱した。

毎度この程度で済めば無理なく倒せるのだが・・・如何せんそうはい

かない。今回が楽ということは次回はその分の皺寄せがくるだろう。警戒しなくては

時計の針が夕方6時を指す。日は完全に沈みきり、街頭がない所は真っ暗。当然そのような状況で畑仕事など出来る訳がなく切り上げて帰路につく。

鈴の音が聴こえたのはそんな時だった。

(一日に二度!?)

くそっ、完全に油断した。一日一回が限度じゃないのか?!

霊基を換装しながらその場を飛翔する。

全速力、勇者の身体能力には劣るものの時速60kmに匹敵する速度で人類の敵という反応目掛けて走る。

「ッ——！」

壁を越えるまでもなく天蓋共が視認出来た。それは壁の突破一手前ということ。

すぐさま刀を投擲。射出は魔力不足のため不可能。足止めぐらいしか期待出来ない威力ではあるが、ないとは大違いだ。やる価値はある。

「うおおおらあああ、!!!」

壁を飛び越えると共に俺の身長程の大剣をマシユマロの大群へと

無造作に振り下ろす。

マシユマロ特有の妙な感触を通り抜け、大地をも切り裂く。それに伴い斬撃が地を這うが複合体によって止められてしまった。やはり複合体はダルい。これでもまだ完成途中という事も含めて余計にダルい。

「赤児のまま死んでいきやがれ」

マシユマロは一切無視。複合体へとひた走る。

接敵、それと同時に何の変哲のない抜き身刀を差し込んでいく。その際複合体の尻尾のような円柱状のもので妨害してくるが、悉く掠りすらせず空気を裂く。

「炸裂しろ」

頭部らしき場所へと刺した刀を金槌で力一杯叩く。

ピシッ、と頭部から亀裂が奔っていきこれまで刺していた刀と合流する。繋がった歪んだ線によって分断していく。これまで刺した刀は述べ39本。

罅割れ、繋がりが、——碎け散る。

「ふう」

無傷で倒せるとは運が良い。間髪入れずの襲撃だったからか急搾えの複合体なのかもしれない。まあ、それならそれで構わない。次もこれぐらいで来て欲しいものだ。

そんなことを考えながら離脱。複合体一点狙いするためとは言え、前に出過ぎた。このままではマシユマロ共に囲まれてお陀仏。その前に歌野と合流する。

群がってくるマシユマロを文字通り切り開いて進む。歌野が使う藤蔓の神性を辿ればすぐだ。

「ハアアア!!!」

「おっ、う——っ、ぶねえ!!」

「やや!? 勇斗?!」

顔面目掛けてしなる鞭を紙一重で躲す。

合流出来たと安堵した矢先これである。真面目に肝を冷やした。

マシユマロの後ろから突然出てきた俺が悪いのはよく判る。判るんだが、これだけは言わせてくれ

「殺す気が?」

「あ、あはは。つい、うっかりでね。それよりも複合体倒せた?」

「なんとかかな。後はマシユマロ殲滅して終わりだ。さっさ帰るぞ」

話は逸らされたが、問題ない。ただの条件反射で出た言葉に時間は取ってられない。

歌野と並び立ち武器を構える。矛先は天蓋。決して俺の顔面ではない。そこはしっかりと確認している。大丈夫の筈だ。多分。

歌野と共に駆け出した一時間後。無事殲滅し終え、帰路に着こうとするがここで問題が発生した。いや、安心して欲しい。命が関わるよ
うな問題ではない。

であれば、その問題とは

「ふがっ」

「歩きながら寝るな。もうちよい我慢しろ」

一日に二度、これまで一度もなかった出来事なためか消耗が激しいようだ。足を動かしながらうとうととしている。勇者と言えど中学1年生、今年で13歳となる少女にはキツイだろう。

俺は肉体がそもそも人間の域を超えているためあまり消耗はしていない。人一人おんぶする気力は残っている。

「ほら、おんぶしてやつから」

フラフラしている歌野の前でしゃがみ背中を差し出す。静かに重みが来るのを待つ。

これでセクハラだとか訴えられたら負ける。そして結構凹むだろう。まあ、そんな時はそんな時だ。

「あながとく——」

何の躊躇なく全体重を俺へとかけてくる。重みと伴に柔らかい感触がくるが頭から弾き出す。そういうつもりでおんぶしている訳ではない。

煩惱を必死に弾き出しながら、諏訪大社へと歩く。一先ず歌野の勇者服を脱がさなければいけないが、水都に頼もう。呼べば来るだろう。

「」

未だ天の神が来る気配はない。そればかりか天蓋共で十分とばかりに日々襲撃されている。しかも着々と相手側に有利となっていく戦況。こればかりは手の施しようがない。

このまま長引けば敗北は必至。諏訪は潰れる。歌野も水都、それに諏訪の人々が死に絶える。そうなってしまうのは残るは四国。

四国、人員もインフラも整っている。何人が死ぬことになるだろうが必ず天の神は打ち倒せる。それ程までに人数というものは戦闘において重要だ。ましてや長期戦となれば。

なら、今打てる最善手は――

「四国勇者との合流。いやいや、なに考えてんだ俺は」

歌野と水都を見殺しにするなど論外。それはカツコよくない。そもそも嫌だ。歌野と水都が死ぬなんて考えたくもない。

天の神倒したら一緒に――、それこそ、ありえない。俺にその先などない。どのような結末になろうが、それだけは覆られない。

「アンタなら、どうすんだろうな」

そう、此処にはいない者へと愚痴るようにぼやいた。

微睡みから意識を引つ張り出す。

落ちかけていた脳を起動し、先程勇斗が零していた独り言を思い出す。

きっと彼は表情に出さないだけで余程不服なのだろう。夜逃げを考える程に。

「――のん？うたのーん？」

「んっ、なに？」

「あつ、やつと気付いた……どうしたの？ なにか考えてるような表情だったけど」

「んっ、んっっ」

言うべきか、言わないべきか。

私一人で悩んでいてもどうこう出来るとは思えない。なら、言った方が得策……かな？

とりあえず言うことにする。

「みーちゃん。もし、勇斗が夜逃げしようと思ったらどうする？」

「え、勇斗さんが……それはちよつと、ありえないと思うけど。勇斗さんが言ったの？」

「うん」

確かにあれは勇斗の声だった。その次の言葉は聴こえなかったけど……何処か継るような声だったような気がする。

「うくん……でも、勇斗さんはうたのんを——、あつ」

「？ どうかしたの、みーちゃん？」

「えつと……あつ、ほらご飯冷めちゃうよ。早く着替えないと」

「それもそうね。それじゃ、ちやちやつと着替えて行くわね！」

みーちゃんが濁した先の言葉が気にはなるが、ご飯が冷めるのは見逃せない。ホットなうちに食べるのが作った人のためになると勇斗が言っていた。

各部位の留め具を外していき、パパッと脱ぎササッと着ていた服を再度身に纏う。

「そういえば一度勇斗が覗きに来たのを思い出した。事故と言いつ張ってたけど、お風呂場でも遭遇した事あったし、もしかして勇斗は変態さんだった？」

歌野、水都が支度をしている間変態さんは何をしていたかと言うと

ぼつちで見張りだ。

諏訪大社の縁側に座り、暗くなった森を虚ろな瞳で眺める。傍から見れば死人かと思わせる程の生気のなさ。まあ、人間誰しもボーっとしている際の表情など同じようなものだろう。

そんな停滞を破るためか勇斗の体内から小さなおじさんが這い出てきた。

「もう猶予は残されていない。諏訪は放棄し、四国へ向かうぞ」

「無理。俺は諏訪に留まる」

圧倒的な威圧の中、変えされたのは拒否。

そこに怯えも恐れもない。ただ、揺るぎない決意のみが鎮座していた。

「貴様、私情で拒絶したな。その決断がどのような結末に至るかは見えていたであろう？ 聡明な貴様ならわかる筈だ」

責め立てるように勇斗を睨む須佐之男。その瞳など興味ないように何処か遠く眺める勇斗。いくら経とうが視線は交差しない。

須佐之男の言い分は正しい。それに従わない勇斗こそが悪なのは周知の事実だ。

だが、まあ

「俺は歌野と水都の為に命を賭ける。結末がどうなろうが知らん。北の勇者の勧誘に失敗した時点で覚悟は済ませてある。

悪いとは思うが付き合ってもらうぜ、須佐之男。俺が忘れ去られるまでな」

「もういい、勝手にしろ。何処ぞで霧散するがいい」

元々勇斗と須佐之男は一蓮托生。契約が始動すれば結果は同じだ。誰もいなくなる、それだけだ。

次に繋ぐため、天の神の知名度補正を完全に消し去るため。どちらも欠かすことの出来ない下準備なのだ。

故に、命を賭ける”

そう誓ったのだ。何者でもない自分自身に——
手に握られるは神刀・草薙剣。

人生で一度限りの一振り。振り終えた瞬間、我が熱は塵芥となるだろう。

ああ、——構わないとも。

自分のためではなく、愛する者の為に一生を終わらせるのだ。未練はあれど後悔はない。喩え無に還すことだったとしてもな。

俺の最期の仕事は完成体を葬り去ること。それさえすれば後は歌野に繋げれる。

きつと、歌野なら歩みを止めない。進み続ける筈だ。なら、俺は先達として——！

「——切り拓く。」

神刀抜刀・草那芸之大刀——ッ!!!」

《left》——《left》

《left》——《left》

《left》——《left》

《left》——《left》

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ、——

——忘れたくない。絶対に忘れてなんかたまるか。

あの笑顔を、あの声を、あの名前を——

そんな想いなど関係ない。世界からの強制力によって否応なしに記憶を消し去っていく。

想いなどそんなもの強大な力の前に無力でしかない。揃いも揃ってくだらないモノで全て台無しにする。いやはや人間とは御し易い。

残ったのは空っぽな肉体。棄てられたモノということとは誰が使おうが構わないな？

「——ねえ、みーちゃん。最後に我が儘聞いてくれない？」

その人、私にとって大事な人なんだ。名前とか一切知らないのに不思議な話よね。私も何が何だか解らないの。」

最早英雄はいない。立ち塞がる勇者はとうに風前の灯火。

ああ、何ともつまらぬ幕切れ。これにて人類史は途絶える。やはり、神々が治めねば人間は呼吸すらままならないようだ。

実に滑稽。櫛名田比売に会った際の土産話にもならん。早急に事を済ませ、傀儡にでも仕立ててやろう。それだけで勇者を潰すのに事足りる。

「やっぱり好きだったのかなあ、私。こんな無駄死に……いいや、それは
おあいこという事で！」

無理無茶無謀。あまりにも愚かしく、あまりにも弱々しい。これでは慰み者としての価値もない。

蛮勇として褒め称えてやるとも。だが、死ぬ。もう時期見飽きる。しなる剣ごと首を断ち、絶命させる。確認せずとも即死だろう。

やはりつまらん。この程度であれば推し測る必要など皆無だったな。なにを私は攻めあぐねていたのか。

さて、背を向け敗走した者を追うとするか。人の子の脚力では然程距離は稼げまい。

想いなどで人は救えない。そのようなモノ目障りだ。いつの時代も人間は――

「貴様もそう思うか？」

突如とし小さき者が目の前に出現する。

たったそれだけだ。たったそれだけの事だと言うのに私は歩みを止めた。

大気を迸る神性。溢れ出る力。

見間違う筈などない。コイツは私だ。

何故、どうして、そんな疑問など振り払い小さい者へと目を向ける。その者の口は笑っている。いや、嘲笑っている。

誰を？——私を

誰が？——私が

どうして？——わからない

「そうだろうな、理解出来ないだろうな。」

ハハッ、そう硬直するな。——怖気づけ、誰が貴様の前に立っていると思っている？」

——ッ!?

明らかに私を優に超える魔力量、神秘性。この小さき者に私は負ける、と本能が訴える。不意打ちしようが勝機など初めからない。それ程までの圧倒的なまでの差。

「思いがなんだ、と貴様はほざいていたな。」

実に愉快。愛しき我が妻も一笑に付すだろう。故に此度は見逃す。だがまあ、貴様は思い知るだろう。人間の底力、——思いが起す奇跡というものを」

その言葉と共にその場から小さき者は消失。察知するまでもなく感じていた魔力もパタリと途絶えた。

興が冷めた。星屑に任せ、戻るとしよう。

神代の夜明け【蛇足】

1月1日、即ち元日。ほとんどの人が家で温々している日だ。まあ、言い方を変えればダラダラする日でもある。

え？そんな日にお前は何処いんだよ、って？はは、それは――

「――フイイイイッシユ!!」

今俺は瀬戸内海にいます。

いやあ、絶好調だな！神樹の漁業補正ないって言うのにこんなじゃんじゃん釣れる。これがシャルルマーニユの幸運Aの力か？さっすが、シャルルマーニユ！やつぱ最高だぜ！

そんな感じではしゃいでいると操舵室の窓からひよこりと女性が顔を出す。

「シャルルマーニユ君、身を乗り出し過ぎないようにね。助けられる自信はないわよ」

「わかってますよ、安芸先生。そんな時は自力でなんとかするんで！」

「そうじゃなくてね、そう言えば泳いでたわね、貴方」

的外れな、と流そうとしたものの以前瀕死の状態から泳ぎで復帰した出来事を思い出し、それ以上の口出しはなくなった。

カサゴから針を抜き、水槽へ入れる。ちなみにこの船は大赦が所有している物だ。それを今日は園子に頼んで使わせて貰ってる。マジで園子には感謝しかない。

てことできつからもガンガン釣ってくぞおお！

シャルルが釣りをしている一方、シャルル宅では女子会が開かれて

いた。ちなみにペット兼家族であるクロは友奈の膝の上ですやすやしている。実に可愛らしい。

メンバーは当然勇者部のみ。何故か集合場所がシャルル宅になっているが気にすることではないだろう。シャルルの承認なしという事実を除けば。

「シャル先輩の趣味って釣りだったんですね。

あつ、一回休み。」

「おじさんみたいな趣味よね。

ん？スタートに戻る。はああああ!!？」

「大丈夫だよ、花凛ちゃん！私は一ヶ月休みだから！」

「おかしい！絶対、この双六おかしい!!一ヶ月休みとか聞いたことがないぞ、園子!？」

「ふおつ、ふおつ、ふおつ。楽しそうだなにより」

「騒がない、騒がない。今年は更に女子力高めで婚期を逃すぬ

わああああ!!！」

「ああ、お姉ちゃん落ち着いて。」

「なら、私がシャルル君と婚期封殺、——」

「須美が急死したああー!？」

もうハチャメチャ。この場を治めるなど王様でもない限り無理だろう。元日ということもあり天井突破している。

「と言っても未だ騒がしいのは風先輩のみであり、それ以外は休みとなった番を消化している。まあ、ある一名は番関係なく命尽きたが。

「それにしても、シャル先輩の趣味が釣りとは驚きました」

「あつ、戻すんだ」

「女子力に亀裂が入った姉は無視することにしたのか、最初の話題を再度振るう。それを冷静ながら銀がツツコむ。しかし、それさえも無視。この話題で一旦全員の冷静さを取り戻す三段のようだ。」

「ふおつふおつ、そうじゃよ。シャルの数少ない趣味みたいじゃ」

「私としてはそもそも趣味があったことに驚きなんだけど」

「アタシの女子力磨きみたく、シャルもカツコ良さ磨きが趣味じゃなかったのね」

「アンタと同じにされたらシャルも心外よね」

「なあにいく？」

「やっちまっ——」

「それ以上はいけない」

どうやら樹の目論見通り、一旦は冷静になったようだ。一名を除いて

まあ、それ程の話題なのだから妥当と言えば妥当だが、やはり、シャルルは傍から見れば完全無欠に近いみたいだ。

「なんだか安心するよね。シャルくんにもそういつた事を楽しめるんだ、って」

「そうね」

シャルルがこの場に入れば、友奈に対してお前が言うか？などと言いたげな目を向けるだろう。というかシャルルでなくとも向ける。

「でもでもくそれ以外にもあるよ、シャルの趣味。というより癖？」

「鏡を一日に十回見るとか？」

「え、あの髪の毛って毎回セットしてるの？」

「そんな訳ないとは言切れないのがなあ」

シャルルの癖毛は勇者部七不思議として讃州中学に知れ渡っており、何人も歴戦の猛者が挑んだが悉く散っていった。これには涙がドバドバ。

しかし、それもその筈。シャルルの癖毛は正しい霊基の姿であり、どうこうすることは出来ない。どんな事を試そうが霊基を再読み込みすれば元通り。便利なものだ。

「で？結局、シャルの癖ってなに？」

「それはねく。なんと！シャルには抱きつき癖があるのですっ！」

「——なんですって!?!」

裏技みたく明かされたシャルルの癖に誰よりも早く急死していた東郷が反応する。その目は驚愕と中学生が持つてはいけないようなモノが混ざっている。

「さっすが東郷、復活が早い。」

てか、それだとシャルに何度も抱きつかれた事があるって言ってる

辛そうだ。

「おかえ——」

シャルルの声がしてか、ソファでゴロゴロしていた園子が直ちに立ち上がり玄関へと直行する。目的はもちろんシャルルへの突撃だが、敢え無く本人の静止によって止められてしまう。

「ストップ。今、調理してきたから血生臭くなってるんだ」

「り〜♪」

「話聞いてましたか、園子さん!?!」

そんなの関係なしとシャルルに抱きつく。やはり、シャルルの乙女心に対しての理解度は0に近いようだ。

数十秒後、満足したのかようやく離れた園子と共にリビングへと向かう。シャルル入室と共に挨拶が飛び交い、それに対する返しをスパツと終わらせてテーブルにドシツとクーラーボックスを置く。中身はもちろん今回の戦利品。

「大漁大漁♪ってことで俺は風呂入ってくる。適当に時間潰ししてくれ!」

そう言い切るや否や風呂へと走り去っていった。

「嵐のようだったわね」

「まっ、潮風とかでベタバタなんですよ」

「大橋付近で転んじやった、とか?」

「よく滑る、って言ってましたもんね」

「」

・大橋付近はよく滑る。

・うんうん、五ヶ月前ぐらいにシャルルがそう言っていた。実際に転んで頭から大量出血して、一度死んだし。

って、なんで風先輩は黙ってるんですか。笑い話ですよ、笑い話。

そんな風先輩唯一の地雷に踏んだのを察してか、静観していた銀がクーラーボックスへと手をかける。

「うひゃー、ほんとに大量だ」

クーラーボックスの中身は卸された魚達と、市場で買ったのかビニール袋に入っているサザエだった。正しく海の幸勢揃い。

「わあ〜♪こつちがイカで、こつちは……？」

「これは鯽だよ、ゆーゆ。そしてこつちがタイ」

「そのちゃん、すご〜い！」

「凄かる〜」

「うんっ！」

友奈の一点の曇りもない笑顔は園子に大ダメージを与えた。

これには普段ふわっとしている園子であっても照れる他ない。あまりにも純真無垢、穢れを知らない少女が眩しすぎる。

もちろんシャッター音は途切れない。

「そ、それで、シャルル君の感触は！匂いは！温もりは?!」

ようやくシャッター音が途切れた矢先これである。

息を荒くしながら園子へと詰めかける東郷。周りも気になるのか傍観する。

そんな喧騒で起きたのか、友奈の膝上で眠っていたクロが起き風呂場の方へと歩いていった。

「ガツシリしてて〜、暖かったよ。ね、ミノさん」

その言葉で全員の視線が銀へと向けられる。東郷に関しては錆びた機械音と共にゆっくりと首が回った。

「銀？」

「いつ、いや、アレは出来心で……はい、シャルは暖かったです」

「っ！そのっただけじゃなく銀もだなんて……シャルル君を吊るします！」

「ああ待て待て！シャル風呂だから！裸だから!!」

何処からともなく取り出した縄を両手で強く握り締め風呂場へと突入しようとする東郷を身を呈して止める銀。

流石の東郷も銀による全身全霊のディフェンスを突破出来ないのか一項に進めず、その場で足踏みをするのみだ。

「園子。シャルも男の子なんだし、あんましそういうのは控えなさいよ?」

「は〜い」

「アレに思春期男子みたいな特徴当て嵌まらないでしょ。中身二十代

後半なんだし」

「年齢関係ないわよ。園子を見てみなさい。ゆるふわ系美少女よ？
ね、わかった？」

「男子ってああいのが良いの？」

「さあ？人それぞれでしょ。まっ、アタシは女子力の塊だから？視線を釘付けにしちゃう？的な」

「うざっ」

「辛辣!？」

悪ふざけを心からの言葉で潰される。まあ、正直今の風先輩はうざかった。ちなみにこの会話はボソボソ声で話しているため友奈や樹、園子でさえも聞こえていない。だが、遠目から見えていた樹ですらも風先輩のくねくねはうわっ、となったようだが。

と、そんな会話をしている間に東郷対銀が終わったのか東郷が仰向けに倒れ荒い呼吸を繰り返している。それに反して銀は呼吸乱れず出口付近の壁に寄りかかっている。体力の差が如実となった。

「どうし——た、って東郷!？」

騒ぎを聞きつけ急いで身支度したのか髪の毛がびしょ濡れの状態
で登場。

リビング出口に仰向けの東郷。もちろんシャルルに無視するとい
う選択肢はなく、膝をつき東郷へ呼びかける。

「
」
ここでシャルルの状態を思い出そう。

風呂上がり、濡れた髪の毛。シャンプーの柔らかい匂いが鼻腔を満
たす。そして顔が良い。

「はうっ」

「東郷!？」

やはりシャルルマーニユ、濡れた髪の毛と相まって色気たつぷり。
幻想代表はレベルが違う。そして顔が良い。

そんなシャルルに急接近されたためか、脳がオーバーヒートしたの
か顔を真っ赤にして意識を失った。いくらシャルルが揺さぶろうが
起きることはない。

この状態をシャルル視点から見てみるとどうなるか。

仰向けに寝ていた東郷が唐突に意識を失う。うーん、何かの病気？
或いは他の何かか。あと顔が良い。

そう、思っても仕方ない。だって元はシャルルマーニュではない誰
かなのだから。

「呼吸・ある。脈・もある。」

気を失ってるだけ？いや、脳に異常が。それなら病院に——」
最悪を想定し、ポケットに入っているスマホへと手を伸ばし——

「東郷は友奈の『彼氏できたんだ』っていう冗談で気絶してるだけよ」

「えっ、——」

「友奈さん、ここは話を合わせてください」

「う、うん？」

風先輩のナイスカバー。

東郷も意中の男子に近づかれて気絶した、という理由で救急車を呼
びたくないだろう。まあ、当の本人は気絶しているため拒否は出来な
いが。

その言葉を聞いてか、伸ばしかけの手を引っ込める。

「あー、それなら納得だな。でも、こんな所で寝たら風邪引くぞ」

そう言い、クロに頭をペシペシされている東郷をお姫様抱っこで園
子以外誰も座っていないソファアへとそつと降ろす。

「あれ？園子も寝てるのか？」

「そ、そうじゃない。てか、アンタはさっさと髪乾かして来なさいよ。」

風邪引くわよ」

「おっと、忘れてた。これじゃ人のこと言えないな」

無論園子も気絶している。

想像力が豊富な彼女だ。濡れたシャルルを見て創作が捗ったのだ
ろう。気絶という代償つきではあるがね。

花凜の指摘を受け、シャルルは風呂場へと戻っていった。

「なんたる破壊力。未恐ろしいわ」

「ほんつと心臓に悪い。銀はよく気絶しなかったわね」

「」

東郷と同じくりビングの出口付近にいた銀だったが気を失うた
いったことはしていない。あれ程近くにいたというのにだ。

これには称賛を送りたいが、生憎その本人は上の空。ボーっと床を
見下ろしている。

「？ 銀先輩？」

「えあつ、—— なつ、なに？」

不思議に思った樹の問いかけでようやく再起動したのか上擦った
ような声で返答する。どうやら、無傷とはいかなかったようだ。

「ほら、今ので二・人犠牲が出たじゃない？ それなのにアンタは気絶し
てなかったから・なんか秘訣でもあんの？」

聞こえてなかつたため再度称賛を送り、問いを付け加える。

「秘訣？ 秘訣はー、何と言うか・シャルって顔良いですよね」

「それはそう」

「だから顔だけで判断しないように、って気をつけてるんすけどねー

・つい反応しちゃうことがしばしば」

・もうなんもかんもシャルルが優良物件なのが悪い。

・顔良し、性格良し、頭良し、器良し。終いには家事も出来るときた。

なんだコレ？ 世界探してもここまでの一級品を見つけないのは至難
の技だろう。というより二次元でなければいられないだろう存在だ。

「あー、確かに言われてみればそうね。

アタシ、最初会った時警戒なんてしなかったもの。あの笑顔は
ちよつとズルい」

「そう？ 私は正体不明と強さが混ざって化け物に見えたわよ。 実際化
け物だった訳だし」

「そう、ですね。何も考えず『良い人』って判断しちゃいました」

シャルルから溢れる底抜けの明るさ。それに絆されて良い人と判
断したのならまだわかる。

だが、彼女らはそもそも警戒などしていなかった。その明るさが虚
偽のモノではないかという探りも入れずにだ。それは余りにも無防
備。もしもシャルルが『悪い人』であれば即座にバットエンド直行で
ある。

しかし、今現在そんな事になっていない。なら——

「——シャルくんは良い人だよ。」

私の押し花、笑顔で受け取ってくれたから」

自己の見解ではあるが——他人、それも初めてあった人から贈り物を貰い心の底から笑えるという人間はあまりいない。

だが、シャルルは初対面の友奈から押し花を受け取った際心の底から嬉しいと笑顔していた。

笑顔を受け取った者だから解るのか。それともあまりにも幸せそうに笑ったから解るのか。どちらかはわからない。けど、そんな人物が悪い人の筈がない。

そう、友奈は確信している。

その十分後、身支度を終えたシャルルがクーラーボックスの前に立ち献立について頭を悩ます。

ちなみに気絶していた二人はシャルルが来る少し前に目を覚ました。

「鱈しゃぶにタイの刺し身、それと——茶漬もいけるな」

もう献立を聞くだけで涎が止まらない。絶対美味しい、誰が料理しようが美味いに決まっている。

と、最初作る献立が決まったのか卸してある鱈をクーラーボックスから取り出す。取り出された鱈は三昧卸しにしており、後は献立に沿って切ることが出来る。

「寒くなってきたことだし、鍋にするか！」

「待つてましたっ！」

「白菜は持ってきたわよ」

「私はネギを」

「アタシは餅ね」

「私の、東郷さんと被っちゃった」

被ったことが悪いと思ったのか、明らかにテンションが下がった友奈。そんな友奈の機微を東郷が見逃す訳がなく、手に持っていたネギが消え失せうどんへと形を変える。

「ネギなんて持つてきてないわよ、友奈ちゃん」
「えっ、あれ」

「きつと気の所為よ。ね、そのうち」
「うんうん、わっしーが持つてたのはモチモチうどんだったよ」
「気のせい。うん、私の気の所為だったみたい。ごめんね、東郷さん」
「いいのよ、友奈ちゃん。うどんがネギに見えることなんてよくあるわ」

「これには皆苦笑い。」

ねえよ、というツツコミを必死に抑え、シャルルへと白菜を渡す花凜。ツツコミを抑えているためか少し肩が震えている。

食材を受け取ったシャルルはキッチンへと持つていき、鍋で使う用の大きさにカットしていく。そして順次切った食材を鍋へ放り込む。

「よし、少し待つか」

タイマーで五分セットし、座るためリビングへと移動。園子以外座っていないソファアに腰を降ろす。

「もちろんうどんはシメよね？」

「当たり前だろ。シメの頃には汁も美味くなってるだろうしな」

雑炊ではなくうどん。やはり四国県民はうどんをこよなく愛すようだ。ただまあ、その分糖尿病患者が多いようだが、食いすぎ注意。

「じゃあじゃあ、シャルもスゴロクどう？」

「スゴロク？」

「あっ、それは」

スゴロク、という誘いを受けソファアの直ぐ側に置いてあつた台紙に目を向ける。どうやら未だゴールしている者はいないようだ。

「ここは幸運Aの見せ所、と思つたのかサイコロを握り締め投げる。」

「6！」

予想通り最高値である6。初っ端からトップスピードではあるが、それが吉と出るかはマス目の項目次第。さて、何が降りかかるか

「6進む♪。はい、五十年休み」

「ふあっ!？」

一回などの回数指定の休みではなく、年単位の休み。そんなもの聞

いたことがないのか。目を見開き素っ頓狂な声を上げる。

「五十年、6マス目・確実にシャルだけを狙ってるな」

「え、狙えるものなんですか？」

「シャルは運が凄く良いんだよ。だから、6を出すんだろうなく、つていう勘？かなあ」

「流石、園子ね・怖くなってきた」

これには一同ガクブル。全てを考慮しての勘ではなく、一部分のみからの勘。それが今の中した。圧倒的なまでの勘の鋭さ。第六感に届き得る十二かだ。

「五十年後しようね、シャル♪」

「おう・それでもう一回五十年休み引いたらどうすりや良いんだ？」

「また五十年後？」

「それシャル一人じゃない」

「やっぱり人間を辞めるしか」

「それは絶対ダメでしょ」

俺は人間をやめるぞ、ジョジョオオ!!

そんなことをしでかすと天の神を倒した意味がなくなるためシャルルの為とは言えどすることはないだろう。ただし、シャルルは全員の死に顔を見なければいけないが

「ま、鍋食おうぜ！」

そんな重苦しい空気を吹き飛ばし、キッチンへと行き鍋をリビングへと運んできた。中身はグツグツしており、絶好のしゃぶしゃぶ時だろう。

そんな鍋をカセットコンロの上に置き、続けざまに点火する。

この後、皆でワイワイ鍋を囲んだのは語るまでもない。

なる前に部屋に帰るのが得策だろう。

共有スペースであるリビングに彼一人を残すことは気がかりではあるが、彼もすぐ戻る筈だ。そもそも何故二人つきりでいたのかと疑問に思う。

土曜日、勇者部部室にて俺は俺と瓜二つな村正の瞳をじっと見つめていた。

いや、そういう気は全くない。ただの好奇心だ。

「

「なんでえ？俺の顔に何かついてんのか？」

「いや、なんも」

「なんもねえなら見つめんな。気が散る」

そう言い再度作業に着手する。

ちなみに現在している作業とは、応援部からの依頼である旗の修繕だ。裁縫道具もなく修繕屋も先日老いとか何とかで廃業した為勇者部になだれ込んだ、らしい。実際は知らん。

てことで現在勇者部内で一番手先が器用である村正が受け持った。部長は若干へこんでた。

「はあ、悩み事でもあんのか？聞いてやつからさっさと見え」

あまりにも瞳を見つめていたせいか一度手を完全に止め、こちらへと向き直る。その顔はダルげだ。

正直見過ぎたと思うため、ここは素直に理由を話しておこう。

「村正は高嶋に瞳を今みたく見つめられたことあるか？」

「高嶋に？いや、ないが口振りからしてお前の瞳を見つめていたと。

理由はわからん。気になるんなら本人に直接聞いてこい」

「それが妥当かあ」

少しだけ期待していたが、やはり村正でもわからないようだ。

てか村正ではなく千景に聞けば良かった。高嶋のスペシャリストはあっちだったな。

「どっかで聞いたか忘れたが、金色の瞳ってのは希望を齎す、或いは事象を逆転させる。つまりまあ金色の瞳ってのは『希望』を冠する」
「希望を？」

今ん所、俺は恐怖しか与えていないが？

「まっ、元があやふやな説だ。聞き流してくれ」

「元はどこだよ」

「なあに、ただの天才だ」

そう、自分の事ではない筈なのに自分の事のように誇らしげに言い放った。

その後、村正は作業に戻ったため俺は部室を後にした。行き先はもちろん千景の所だ。少々気まずさがあるがしようがない。高嶋については千景の方が良く知ってる。

と、言うことで千景の元へと移動。場所は寄宿舎となっている。どうやら、今日は村正以外勇者部の活動はしていないようだ。

まあ、コキ使えって言ったのは本人だから問題ないだろう。

「で、今日はなんのよう？」

ゲームが趣味の千景らしく対人ゲームであるスマプラをしながら問いかけてくる。今日はガチっているようだ。

「昨日、高嶋に瞳を見つめられたんだ。千景なら——」

千景が握るコントローラーから凄まじい連打音がしたかと思えば画面にGAMESETという文字が出ている。

「高嶋さんが、貴方の目を？」

「お、おう。千景ならなにか知ってるんじゃないか？」

「コントローラーを置き、ずいっと顔を近づけてくる。」

「そうね、ただ単に貴方の目が綺麗だったからじゃない。あの時から前より輝いているもの」

「俺の目が綺麗？それならシャルも綺麗な瞳してるだろ。なんなら村正は同じ瞳だし」

「シャルルマーニュの目はなんだか怖いのよ。青い時はそこまでだけど・なんだか先を視ているようで不気味ね。村正さんは貴方と輝き方が違うのよ。錆びついてる、って言うのかしら」

「へえ、そんな違いがあったのか」

精神面が違うと同じ肉体であっても瞳の輝き方が違ってくるようだ。そしてシャル、お前、後で青い方が良いって教えとくか。

「他の理由としては考えれないけど、もしかしたら貴方が羨ましかったのかもしれないわね」

「羨ましい」

高嶋が俺を羨ましが理由が見つからない。そもそも高嶋は人を羨ましく思うような子ではない。

「今だからこそわかる。——貴方と高嶋さんは似ている」

「は？」

千景の口から有り得ない言葉が聞こえた。

俺と高嶋が似ている？性別も性格も全く異なる俺達か？そんな訳あるもんか。

そんな俺の心情を無視し、千景は続ける。

「表面ではなく根本的な部分で似通ってる。自分をひた隠して独りで戦ってる所とか、特に」

「」

確かに俺は一度も腹の底をぶち撒けた事はない。だが、それはただ単純に自分ですらも気づいていなかったただだ。

「あとは、そうね。例え話だけど。私が貴方にその目を頂戴、って言うたらどうする」

「それは——」

——ここでやると床が汚れるな。それに痛いだろうし、少し覚悟を決めないと誤って目を潰しかねない。

「今、否定する。っていう選択肢なかったでしょ。」

精々、呼吸を整えたいな、ぐらいしか思わなかったわよね？」

「そりゃあ、なあ。流石に両目は無理だが片目ぐらいならやるぞ。数週間俺が使えなくなるが、それでお前が喜ぶならいくらでもな」

「はあ、ソレ。無意識なんだろうけど、乃木さんに言わないようにね。あと上里さんにも」

「? おう」

何故、若葉とひなたに言っではいけないのだろうか。まあ、千景が言うのだから言っではいけないのだろう。肝に命じておこう。

「話を戻すけど。もしかしたら、そんな貴方が心の底から笑っていて自分の為だけに戦った姿が羨ましかったかもしれないわね」

「」

「言われてみればそうだ。」

「ダイエツトしている自分の隣で焼き肉し始めたら誰だって怒る。なんなら喧嘩沙汰になる。」

それは、悪いことをした。

「まっ、十中八九違うだろうけど」

「おい」

「だって、私でも解らないもの。高嶋さんの本心なんて。本人に直接聞いた方が早いわよ」

「やっぱそうか」

高嶋について熟知していると思っていた千景でもわからないとなると、とうとう本人に聞くしかなくなつた。

その後千景の部屋を後にし、すぐ隣である高嶋の部屋の前に立つ。

そして――

――高嶋 友奈と相対する。

場所は大社が管理している道場。そこにて俺達は道着を着用し、構える。

「武器使用禁止。用いるのは肉体のみ。これでいいな」

「うん。それじゃあ、始めよっか」

「ああ」

俺が頷くと同時に高嶋が詰める。

縮地と呼ばれるそれは初速を消し、一步目から最高速度に至る。ただ単純に一步目を失くすという技法ではあるが実用性は抜群。今回のような対人戦であれば必須級の技法である。

「セイツー！」

腰を後ろへと捻り、体重移動と共に打ち込まれる拳。

右側ということもあり如何様にも防ぎようがあるが、一つ言いたい。

とりあえず高嶋の行動を止めるために少し前に出て、俺の右腕を高嶋の背中に回す。そして体が密着するようにこちら側へと引き寄せ

る。まあ、抱き合う形になってしまいが仕方ない。

「へっ、——え？つとー、士郎くん」

「友奈、勇者システムを使ってくれ」

「あっ、そうだね。ちよつと傲つてたかな？」

「いや、そうじゃねえよ。ただ人間か紛い物かの違いだ」

花卉が舞う。

その次の瞬間には桜のような配色をされた勇者服へと換装した高嶋が姿を表す。既に準備万端のようだ。

「箆手外した方がいい？」

「大丈夫だ。打ち合っても俺の拳は砕けねえ」

以前なら砕けていただろうが現状では生半可な攻撃じゃ一切の傷などつかない。どうやら、俺はいつの間にか人間という種から逸脱したようだ。

——高嶋の姿が視界から消える。

「ハアアアアア!!!」

真っ直ぐに俺の胸へと放たれる右ストレート。まず防御なしに喰らえば致命傷は避けれない。

なら、迎え撃つしかないよなあ。

「ハ——ッ!!」

口を歪ませると同時に拳を拳で相殺——いや、カウンターとして叩き込む。

純粹な力比べとなれば、当然勝つのは俺だ。

「ッ——」

押し返された勢いをズラし、回転力へと変換させる。だいたい三回転した程で体勢を整え、回し蹴りの要領で先程のエネルギーを俺へと返す。

「じゃあ二回目は？」

「っ」

またまた防御を飛ばし、カウンターとして蹴りを高嶋へと繰り出す。

予想外にも二度目の返しはなく、衝撃そのままに後ろへと弾き飛ばされている。すぐさま顔を上げ、俺を睨む。まだまだやる気のように。

「二目連っ!!」

「切り札かッ！」

ああもう、口角が無意識に上がっちゃう。

勇者の奥の手にして切り札。バーテックスではなく、俺だけに使用するのだ。楽しみという言葉以外出てこない。

「避けないでね」

「もちろん」

避けるなんてもったいない。全て受けて立つとも。

左足を軸とし、下半身をその場に固定。右脚、右腕を防御の要として脱力する。

「千回、連続っ——勇者ああああ・パアアアアアンチッ!!!」

一目連、切り札による身体強化をフルに使用した限界突破の連続打撃。一撃一撃が致命打に成り得る威力だ。受けることは出来ない。

故に悉くを粉碎しよう。

「ッ、——フッ——ハハッ」

殴り、蹴る。たったそれだけの動作を絶え間なく繰り返し、比喩なしの千回を防ぎ止める。

その間、つい笑みが溢れてしまうが仕方ない。楽しいんだから。

——脳裏に夕空が映し出される。

いつもの光景。だと言うのに何故か嬉しくて。幸せで。自分のものではない、と自覚出来たが手離したくないという想いが込み上がってくる。

「っ。」

一瞬、コンマ一秒にも満たないような空白。そんな致命的な隙を高嶋は見逃さなかった。

確実に仕留める、——それだけを重視し、忌避すべき選択を取る。即ち——

「ッ——！」

——何も通さない左裾へと拳を振るう。

彼にとつてのは唯一の死角。そして致命的な空白が合わさり、回避は不可能。

当たる、少なくとも彼女はそう思った。

「いいなッ!!」

残り数cmとなった拳が上へと弾かれる。

何が、と視線を動かすと彼の左上腕が上げられている。つまり、彼は肘先からない腕のみで彼女の必殺の一撃を弾いたので。

あまりにも人外。あまりにも超越している。だが——

「だけど!!」

彼とは違い彼女にはもう一つある。

弾かれた手ではないもう一方の拳を握る。そして完全に無防備な彼の胴体へと——

「あははは！やっぱ、友奈には勝てねえな！」

「つかれたあゝ」

二人揃って大の字となり床に倒れ込む。

片方は稀に見る笑顔で、もう片方は心身共に疲労困憊で。どう見ても勝者と敗者が逆では、と思われる状態だ。

「でも、どうしてちよつと止まったの？」

倒れたまま御影へと問いかける。

本来なら絶対に有り得ないだろう空白。それがあつたからこそ勝てたものの、なければ勝敗は逆だっただろう。

「んゝ、アレは、なんか身に覚えのない記憶が流れて来てな。つい見惚れた、というかな」

「記憶、って村正さんの？」

「そうなんのかなあ」

脳味噌の奥底にあつた記憶が出てきたというのであれば、村正の記憶だろう。だが、証明は出来ないがそういったものではないような感じがする。横から挿されたメモリーカード、そんな感じ。

「にしても、やっぱわかんねえもんだな」

「赤嶺ちゃんみたいになると思っただけだなあ。そう上手いかないね」

「前読んだ漫画なら殴り合いで解り合ってたんだが、どうすつか」

さて、後回しにしていたここまでの経緯を簡単にまとめよう。

千景と別れた後高嶋に会ったまでは良かった。が、話してみたはいものの謎は解けず。なら殴り合うしかないよなあ！ということだ。

「うゝん。他に、——っ！」

何故か考え込んでいた高嶋の顔が真っ赤になった。

「どうした？」

「え、えつとー。付き合ってみる、ってのはどうかな？」

何を考えているんだ、この勇者は。

確かに付き合うとは他人であった人を自身のスペースに入れる事ではあるが、理解し合うという仲まで行くまでに最低でも何年かかることか。そして、そんな軽げに言うことではない。

「そうだな、付き合ってみるか」

もうやだ、この子たち。。。。

そういった行為を知らないからか、それとも元々相思相愛だったのか。まあ、一応相思相愛ということにはなるが、それは恋心か友愛かを理解出来ていないという点もある。

「それじゃあ、何しよつか？」

「付き合うって何すんだ？」

「まあ、そうなるよね。」

「本当にこの子たちは義務教育で性について学んだのか怪しい。そもそも普通の学校に通っていないため義務教育を受けたかも怪しい。」

「こういう時は村正だな」

「だね」

そう同意し、荒廃した道場を後にした。もちろん修理費は大社が受け持つ。

仲良く歩いているものの、その実爆弾を落としに行こうとしている。完全なる愉快犯である。

その後、村正が爆弾を喰らい数分硬直したのは語らずともいい。

花結いのきらめき【32】

御影誘拐事件の翌日。火曜日であるため各々いつも通り授業を受け、放課後である今は勇者部部室に全員集合していた。

全員がいるのを確認した後、風先輩が口を開く。

「じゃ、今日も活動を、と言いたい所だけどひなたから話があるみたい」

いつもながらのパターンと思わせてのたまにあるひなた連絡。つまり御役目関係に関してだ。

そんな訳で風先輩は黒板の前から外れ、ひなたへ譲ろうとするがその当の本人が中々現れない。

「あれ？ひなたがいるよね？」

思わず風先輩がそう零す。

確かに部員確認時にはいた。なんなら神樹館組を引率してきていた。が、風先輩への返答はなし。

何かおかしいと思つた若葉がすぐさま普段ひなたが座っている窓際席へと視線を向ける。

「いない・士郎、ひなたが何処にいるか知っているか？」

ひなたが定位置にいないのを確認し、その隣が定位置の士郎へ問いかける。顔は俯いており表情は何えない。

「士郎」

「ふむ」

返答も反応もない。まるで死人のようにその場を微動だにしない。あまりにも不自然。そう感じ、シャルルが席を立つ。それに全員が続き、事故現場に群がる第三者のように御影の周りを囲む。

そして先頭であるシャルルが机を横切り、御影の様子を伺おうと覗き込むと――

「ぐう」

何かを喰らったのか突如として呻き声を上げ胸を抑える。そんなシャルルを見てかすぐさま駆け寄る銀。

「どうした!？」

— 大事と認識した銀が声を荒げシャルルへと声をかける。

「と、——ッ」

「と?」

片膝ついて蹲りながら返答しようと試みるも半ばで詰まり、中々言葉にならない。

その間に他は机から身を乗り出す勢いで御影の様態を確認しようとしていた。!!!

「尊い——ッ!」

「びゅおおおお」

「はい?」

尊い、確かにそうだ。この光景を見れば誰であろうがそう思う。園子sが抑え気味のびゅおおにした理由もわかるだろう。

「——」

「寝てる」

「寝てるね」

そう友奈sが呟いた通り、御影——それとしないと思っていたひなたが眠っている。それもひなたが御影の膝に頭を寄せ、静かに寝息を立てている。所謂膝枕というものだろう。

「御影さんとひなたさんは仲がいいんですね」

穏やかに眠っている御影とひなたを見て、微笑みながら水都が呟いた。しっかりと声量を落として。

「仲は良いにはいいが」

「この二人が布団以外で寝ている場面なんてタマは見たくないゾ」

西暦勇者それぞれが仲が良いのは周知の事実だ。しかし、この二人がこうやって人目を憚らず寝るとするのはこれまでなかった。

「そう言えば、12時まで起きてたわね」

「そんな夜遅くに何をあれ?どうして千景さんは知ってるんですか」

「？」

「」

「千景さん？」

ぐいっと近づいてくる小銀から目を逸らすようにそっぽを向く。どうやら千景も夜更かししていたようだ。

「どうする？」

「頻り見守り、写真を撮っていたシャルルが全体に問いかける。このままそつとしておくか。それとも心を鬼にして起こすか。ひなたを起こさない限り話が進まない、ということを考えて起こすのが定石だろうが、起こしたくないという想い[!]が込み上がってくる。ぐ、ぐぐぐ。っ。起こすしかないでしょ。」

歯を食いしばりながら苦渋の決断をする部長。やはり、このまま起きるのを待つというのは時間的に厳しい。一先ず起こして話をしてもらってからもう一度寝てもらおうことにしたようだ。

その選択で決まり、一番近くにいた若葉がそつと手を御影へ――

「いやいや。こんな幸せそうに眠ってる人を起こすのはダメでしょ」

若葉の手がピタリと止まった。

静止されたからではない。それよりも予想外な出来事が起きたが故に手を止めた。

「休める時に休む。万全な状態を維持するには大切なことだ」

「それは同感だが、自己紹介を求めているか？」

驚愕し思考が止まっている皆に変わり、シャルルが黒板の前に立つ者へと自己紹介を求める。

面識が全くない少女が二人。一人は日に焼けた褐色肌が特徴的で、もう一人はアンダーフレームの眼鏡、そして白いカチューシャが特徴的だ。

「私は秋原 雪花、北海道で勇者やらせてもらってるよ」

「北海道はでっかいどう」

「あ、やっぱり言いたくなるよね。神世紀でも現役で嬉しいよ」

シャルルが誰の耳にも届かないようにと最小まで下げた定番ネタ

はしつかりと雪花の耳に入ってしまった。しかし、他の者には聞こえなかったらしくツッコまれることはなかった。

「北海道！ってどこ？」

「ホタテ漁で大金持ちになれるとこだ」

「へえ〜？」

「そんなアバウトな説明じゃダメよ。こう、デツカイ括りでいかなきゃ。北海道だけに」

「はい、撤収〜」

やはりおやじギャグは許されなかった。歌野が犠牲にはなったものの北海道がどうこうの話は終わりもう一人の勇者へと矛先が変わった。

これ以降、神世紀組の中での北海道のイメージがホタテとデツカイだけになるが然程問題はないだろう。

「え〜っと、それでそちらの方は？」

「古波蔵 棗だ。沖縄から来た」

沖縄と北海道、どちらも県がつかない都道府県。そんなのはどうでもよく。

新たに来た二名の自己紹介に返す形として眠っている御影とひなた以外は現状の説明とそれぞれの自己紹介を行った。

「と、いうことだけどわかった？」

「把握した。わかりやすい説明、感謝する」

未だひなたが夢の中ということもあり、今回は風先輩主導で現状&目標について説明しようだ。

理解した棗とは裏腹に雪花はなにか思い悩んでいる様子。

白鳥 歌野・藤森 水都・あ、諏訪の」

「うん？私とみーちゃんは諏訪の豊かな大地で農業王目指してたけど

どこかで？」

「えっと、畑耕したり作物育てたりしてました」

「あいやー事情が事情だから本人に聞いた方がいいかな。ほら、そ

こで寝てる？に左腕どこかで落とした？」

視線を向けてようやく気づいたのか何も通らない裾を注視する。

確かに初見で村正と御影を見分けることは至難の技だ。完全に瓜二つと言うか、同個体である。V 厳選しなきゃ。

見分ける方法は二つ。左腕の有無と雰囲気の違いを勘で気づく。

と、御影と村正の違いは今では問題ではなく、秋原 雪花が寝ている御影 士郎を指した名。その名はとうの昔に消されている名であり、知っている者へ直接彼に会ったということ。つまり、彼は北海道に行ったことがあるということになる。

「そこで眠っている者は御影 士郎であり、??ではない」

「え？分裂した？」

「士郎さんはプラナリアだった!？」

「単細胞生物なのか」

「そんな訳ないでしょ!？」

素なのかボケなのかわからない棗に花凜のキレッキレのツツコミが入る。

少し説明するとプラナリアは単細胞生物ではなく、ただ再生能力が可笑しいだけの生物だ。とある実験で三等分すると、それぞれの切断部から足りない部分が再生し、結果として三匹になった。生物は不思議。

「で、実際はどゆこと？」

「それは――」

――樹海化警報が鳴り響く

「コレが樹海化の合図か」

「こつち来て早速だけど、行ける？」

「わかった、戦闘は任せろ」

「か、かっこいい」

突然の樹海化ではあっても凜とした立ち振る舞いに樹とシャルルが思わず感嘆する。シャルルに至っては王としての霊基でやっているため違和感が半端ない。

「よし、それじゃあ士郎を起こ」――

――花卉が舞った。

愛の渡し方【千景✓】

とある日の午前、大赦内の研究室にて絶賛研究中の郡 千景は不機嫌であった。同僚である杏が凄い頻度でチラチラ様子を伺う程に。

「なに。」

デ・タを打ち込む手を止め、チラチラを超え凝視となっていた杏へと視線を向ける。その顔は不機嫌さを露わにし眉間に皺が寄っている。

「あ、え、つとー。」

まさか手を止めてまで聞いてくるとは思っていなかった杏は言葉を詰まらせる。

どう切り出すべきか、と悩み最近の出来事を思い出す。そして、以前千景本人からされた相談内容が脳裏を過った。

「士郎さんとはあの後上手くいきましたか？」

千景からのお悩み相談——そう、恋のお悩みである。

杏のその言葉に千景が固まった。周辺の空気ごと止まったかと錯覚してしまいそうだ。

「ちや、ちゃん？と伝えたわよ。」

菌切れ悪く事実を述べる。心なしかその顔は上気している。

「返事は。」

この様子では、と半ば諦めながら恐る恐る千景へと問う。だがしかし、それでは謎が深まるばかりだ。ただ振られたというだけで彼女は先程のような不機嫌にならない。気持ちが否定されるのは当たり前前な環境にいた彼女がその程度で気持ちを揺らす筈がない。

「わ」

「え？」

「——毎朝おにぎり握ってくれるわッ!!」

叫ぶように、いや、実際叫んでいたのだろう。

感情を昂らせない彼女としては珍しく机を叩く勢いで現状について暴露する。言葉だけを聞くのなら順風満帆ではあるが、杏は嫌な予感がした。

「まさか」

「ええ、そのまさかよ」

綺麗な長い髪が床に着くかと心配になる程項垂れる。どうやら、悪い予感の中したようだ。

毎朝おにぎりを握ってくれる、ただそれだけなのだ。関係は一步も前進していない。ちよつと足踏みしているだけとなった。

郡 千景、一世一代の告白は悲しきことに失敗となった。

「やはりここはストレートに行くしかないですね」

「無理」

「千景さん!?!」

「ストレートになんて、頭が爆発するに決まってるっ!」

「人の頭はそんな理由で爆発しません。言葉でがダメなら手紙っていう選択もありますよ」

「いいえ、これは絶対に言葉じゃないと」

熱意に満ち足りた目だ。折れずの強い意志をしている。

一方その頃、大赦警備をしていた御影は一箇所だけの出入り口をタマと共に駄弁っていた。

「あつつあつつの米が良かったか?」

「やっぱり塩オンリーは飽きるだろ」

「あー、それなら梅と鮭でも加えてみるか」

「塩こんぶが一番だろ!」

その後もおにぎりの具は何がいいのかの談義は続き、結構白熱した。完全に相談する相手が間違っている。

翌朝、朝弱い千景が布団内で意識が覚醒し始めた頃。昨日と同じく請け負った仕事を全うすべく御影が米を炊いていた。今度はあつつあつつになるように時間を調整しながら。

「のそり、と要約布団から脱出出来た千景がリビングを通り過ぎ洗面所へと直行する。その際御影は週間となっている日記を書いていたため千景に気づくことはなかった。」

蛇口から流れる水を手で掬い顔を洗う。水の冷たさで眠気が消し飛び、視界がクリアになっていく。そんな視界を頼りにコップに水を注ぎうがいをする。

これにて朝の身支度は終わり。今日は寝癖が殆どなかったためいつもより少ない時間で終われたようだ。寝癖が酷いときはこれの倍、最悪終わらずそのままで行くこともある。長い髪とはお手入れだけでも大変なのだ。

身だしなみを整えた千景はのそりのそりとリビングと戻り倒れ込むようにして席に座る。そこで初めて気づいたのか書く作業を止め、御影が顔を上げる。

「おはよう、千景。もうすぐで炊けるぞ」

「おはよう。」

カーテンの隙間から入り込む朝日で彼の表情は見えないがとても優しい声から察するに穏やかそうだ。何か良いことでもあったのか、と思える程ではあるが彼にとってはそれがいつも通りである。

「ねえ、士郎」

「——ん、なんだ？」

初めて名を呼ばれた、その事実に一瞬トリップしてしまうが変な記憶を押し出しながら復帰する。日記を閉じ、千景へと相對する。朝日に変わらず遮られているが彼の黄金の瞳はよく見える。

「無償の愛、ってあると思う？」

唐突に難しい質問が御影へと投げられる。

いつも武骨な言葉遣いでありながらも慈善活動をしている彼。そ

の行動の殆どがおっせかいに近い何かだと彼女は知っている。だからこそ、この質問に彼がどう返すのか気になった。

「俺はあると信じてる」

「なんで？」

彼にしては曖昧な返しだ。あると断言せず、信じている、と。まるでないに近しいものを指しているかのようだ。

「他人へ無償の愛を無条件に抱けてるのは難しい。だけど、血が通った家族とかなら抱けるんじゃないか？」

「」

「そうだったろうか、と記憶を漁る。」

確かに幸せな時間はあった。今も忘れず取ってあるということはあるから愛を感じていたのだろう。だからこそ自身はあの人達を切り捨てずにいるのかもしれない。

「まあ、俺は知らんが。きつと、無償の愛ってものは尊い物の筈だ。誰が誰に贈ろうともな」

「私が貴方に贈っても？」

「ああ。でも、俺はそれに応える自信はないし、千景に返せるかはわからないけどな」

それは違う。彼は彼なりに模索し続けている。それが愛でないと言うのなら愛なんて物は最初からない。そもそも彼は既に無償の愛を贈っている。贈り続けている。人類という団体に。

そんなヘンテコな会話をしていると台所からタイマーの鳴る音がしてきた。

「よし、握ってくるから待っていてくれ」

席から立ち台所へと向かう。毎度思うがよく片手のみであの綺麗な三角を作るのか。しかも具はしっかり中心に入っている。不思議でたまらない。

数分後、お皿に二つおにぎりを乗せて机へと運んできた。そして巻かれた海苔の部分を持ち口へと運ぶ。

「梅と鮭だ」

「道理で」

酸っぱつ、となつたのはやはり梅のせいのようにだ。一瞬だけクチバシが出来る所だった。

いつも塩のみで握る彼がそれ以外で握るのは予想外ではあったが、そういうこともあるだろう。彼にもデリカシーはしつかりあった。

「んじや、俺はタマに塩こんぶ届けてくるから」

前言撤回、彼にデリカシーなんてものは微塵もない。ドンファンだ。それも死んでも治らない類の。きつとここで矯正しようが無理だろう。なら、それ以外の対抗手段でなんとかするしかない。

「ねえ、明日からは味噌汁も作つてくれない？」

「？ そんなぐらいいなら大丈夫だが、そんな朝に食えるのか？」

「最近食べるようになったから胃が大きくなったのよ」

「それならいいが」

痛い所を突かれたが汁物なら大丈夫だろう。うん、きつと、大丈夫の筈だ。例えおにぎり二つで潰れかけてる私であっても。

彼の負担を増やす形になってしまおうが、流石の土居さんも味噌汁を飲みに来るといふ暴挙には出ないでしょう。

勝った。そう確信しても良い。

彼からの愛情は—— どうやら、私は独占欲が強いらしい。らしい、ではなく確実に。これだけしてもらってまだ欲しい。

「なんだ？」

土居さん用のおにぎりをラップで包んでいた彼が私の視線に気づいたのか不思議そうにしている。その後首を傾げながら作業に再度集中し始めた。

彼には同情しかない。こんな酷い女に目をつけられるとは。でもそれだけだ。私は私のやりたいようにやらせてもらう。拒絶されてもいや、それは耐えられそうにない。だがしかし、彼から一番はもらう。

なんとしても。

花結いのきらめき【33】

光が視界を奪ったかと思えば、次瞼を上げれば樹海と化した世界。非日常のような出来事ではあるがこれまでも何度か、というかこれが日常なため動揺はない。なんなら余裕すらある。

「御影がないな」

「あつ」

「シャルルの指摘に若葉が樹海化寸前の記憶を思い出す。

後寸前で起こすことの出来なかった。それが樹海へと飛ばされてない理由として最有力だ。

「眠っている人は除外されるみたいですね」

「流石に神樹様も睡眠中の人を戦場に出すような鬼ではない、ってことね」

杏、千景が推測しながら着実に戦闘準備を万全にしている。

一人抜けてしまったという事実は変わらないが、新メンバーである雪花と棗がいる。なんとか御影の穴は埋まるだろう。

「こうゆう感じね。最新鋭の勇者システムは一味違うね。棗さんはどう？」

「馴れが必要だな」

「まっ、そこは追々合わせるとして、やっぱ目先から」

「そうするとしよう」

棗はヌンチャク、雪花は槍を手に構える。手に馴染ませるようにして柄を握り、力の入り具合を調整していく。明らか武人のそれである。

準備万端、となった所で勇者部とは違う座標に出た村正が合流した。

「ん？なんだか見慣れない奴ら、がげえ」

視界に映った真っ白な勇者服。思わず二度見をしてしまい気づくのが遅れたのか間を空け、露骨に口をへの字に変える。そんな村正に

対し、雪花は気味が悪い程ニコニコとしながら近づいていく。

「久しぶり、??。どうどう、振られてもう一生会うことがないと思つてた娘と再開するのは？」

悪態をつがれたお返しとばかりに村正へと詰め寄り、ニヤけ顔で現し世であつた出来事を掘り返す。控えめに言つて悪魔の所業である。

「フラれた。」

「つまりつまり、村正さんが告白を雪花先輩にいゝ♪」

振られた、という言葉に反応するそういつた事に興味深々な勇者部一同。特に園子はネタが降つてきたといった感じに凄い勢いでペンを走らせる。

「ふーん、へえ。」

「し、白鳥さん？」

園子の推測を聞いたのか歌野から絶対零度に近しい圧が発せられる。これには側にいた若葉も冷や汗ダラダラだ。

「誤解招く言い方すんな。死ぬぞ、俺が」

「こつちでも最弱なんだ」

「そりやあな。じゃなきや、とつくの昔に退去してる」

もし、この世界において彼が最強になつていたのなら勇者。そして英雄達を惨殺しているだろう。まあ、そんな美味い話などなく、敗北を期したが。

「それで、アンタの名前は？俺は千子 村正だ」

元より名前を知つていた秋原 雪花を視界の外へと弾き出し、真つ白な勇者へと問いかける。ついでに自己紹介も済ませておく。

「沖繩から来た古波蔵 棗だ。よろしく頼む」

「ほんとに中学生か？」

「？」

「いや、なんでもねえ」

佇まいが中学生のそれではない。完成している、それが村正が一目見た古波蔵 棗の印象だった。全く隙がない。

「頼もしい限りだ。北海道じゃなくて沖繩に行くべきだったか？まっ、行く方法ねえけど」

「私としてはたった一人で諏訪から北海道まで来たのにびっくりだけどね。ほんとに最弱？」

「おう。紛うことなき最弱だ、——ゼツ!!」

会話の途中ではあるが抜き身刀を握り締め、雪花の背後から迫る星屑へと振るう。全てを引き出した一撃ではあったものの消滅することとはなくよろけるのみだ。

「そッー」

よろめいた星屑へ一突き。

神祕の籠もっていない村正が振るった刀ではなく、カムイ直々に託された槍はいとも容易く星屑を潰す。

武器の神秘性——それが村正を最弱へと落とす一因となっていそうではあるが、同じ武器を振るう御影は最強だ。故に武器ではなく彼の身体能力こそが原因であろう。

「手抜いてんな？」

「こんな人数いるんだから私一人手抜いても大丈夫でしょ」

「そうだろうな。だが、もしもの時は——」

「はいはい。もしもの時は全力でやりますよー」

間の抜けたような声で相槌を打ちながら確実に迫りくる星屑を殲滅していく。二人の連携がただ殺すことのみの特化したもののためか、手際良く星屑を対処している。二日三日共に戦った者達とは思えない連携の精度だ。

「」

「すっ、すごい。歌野さんに近づいた星屑が物凄い勢いで消えてる。」

「感嘆したように樹が眩く。」

「何故かはわからないが鬼気迫る勢いで鞭を振るう歌野。近づこうとする星屑共は間合いに入った瞬間破裂していく。」

その光景に目を丸くしている樹ではあるが、その樹も片手間に星屑共を文字通り蹂躪している。死神ワイヤーは伊達ではない。

その後恙無く星屑を殲滅した。

星屑を殲滅したことにより勇者部は強制的に部室へと送り返された。それは別の場所にいた村正も例外ではない。

「んじゃ、俺は戻る」

「あつ、ちよ、村正!」

霊体化していく村正を引き留めようと歌野が叫ぶが逃げるようにその場を去っていった。そんな普段では有り得ない光景を見てか水都が歌野へと問いかける。

「どうしたの、うたのん?」

「みーちゃい、いやあ、なんでも」

「村正さんが浮気したんだよね」

「園子ちゃん!」

「詳しく!」

小園子が爆弾をそつと水都に手渡す。そしてそれに食いつく中園子。目をシイタケにしながら小園子に詰め寄る。その手にはペンが握られている。

「村正さんが?それはないかなあ」

歌野をチラリ。見られた本人は気づきはしなかったが、やりとりを眺めていた他の者達はその視線の意味を何となく察した。

その後も園子sを中心にてんやわんやが続いた。

「すまん、寝過ぎした」

「問題ない」

「すいません、招集した手前寝てしまつて」

「いいって、いいって。誰も眠気には勝てないんだから」

ガヤガヤしている諏訪組+園子sを背景に御影がシャルルに、ひなたが風へと頭を下げる。そんな二人をさくつと許し、新メンバーへと向き直る。

「お前らが沖縄、北海道から来た勇者か?」

「ああ。古波蔵 棗だ。よろしく頼む」

「秋原 雪花だよ。よろしくね」

「俺は御影 士郎だ。よろしくな」

樹海化中に情報だけは耳にしたのかスムーズに自己紹介をする。同様にひなたも丁寧な所作で挨拶をしていく。

「声も顔も同じ。世界ってのは広いね」

「そうだな」

「そんなレベルの話じゃないでしょ」

ただ似ている、というだけとし流そうとするがそれはあまりにも樂觀的すぎると花凜のツツコミが入る。まあ、初見は誰しもそう思う。

「それよりも、何故寝不足だったのだ？」

ずつと置いていた疑問を眠っていたひなたと御影に投げかける。

「ストリートに行ったなあ」

「男性勇者つてのはデリカシーがないのかしら？」

「でも、気になるよね」

これでもし、そういった話が出るのであればシャルルは即座に神樹館を部室の外へと投げるだろう。飴ちゃんと共に。

「いやな、説教を受けちまって」

「二「あー」」

その言葉に西暦組だけでなく、ガヤガヤ組＋新メンバー以外の部員が納得したかのように反応する。

「すいません、つい血が昇って」

「今回に限っちゃ俺が全面的に悪いしな。心配させたのも事実だし」

「バツが悪そうに口を尖らせながら、視線を横へと逸らす。

「なんかやつちやつたの？」

今日来た雪花と棗はなんの話をしているのか点でわからず、近くにいた結城へと問いかける。棗もそれに同伴するように耳を傾ける。

「私はあんまり詳しくないけど、昨日、士郎先輩が学校行かないで遊園地行ってたんだ」

「うわぁ。不良？」

「それは、良くないと思う」

「面目ない」

新メンバーによる攻撃で頂垂れる。

少し可哀想に思いながら、シャルルは傍観する。彼が自分が悪いと思うのなら手助けは出来ない。

「しかも誘拐犯と遊んできたんだよな」

「待って待って、一気にわからなくなった。え、誘拐されたの？」

「」

「タマの一言によって謎が出来てしまった。これには二人共混乱してしまふ。全く意味がわからない。」

「誘拐されて誘拐犯と遊園地行ってきた」

「それで遊んだと？」

「おう」

「凄いな」

「神経図太すぎない？」

世界中探しても誘拐犯と遊園地で遊ぶのはこの者だけだろう。

まあ、少し特殊な状況ではあったがそれでもだ。

まあ、そんなこんやで今日の勇者部の活動は終わり、各々帰宅したのだった。ちなみに雪花と棗はひなたに案内されて寄宿舎へと向かった。

甘ったるい【番外編】

讃州中学男子生徒がソワソワし始めた週の日曜日、即ち2月13日。日数に全ての理由が詰まっている。そんな日にご存知勇者部の男子達は何をしているかと言うと

「ほへえ、コレが生クリームか。なんだか牛乳っぽいな」

とあるスーパ―にて牛乳パックの小さいバージョンを眺めている和服男子が一人。本来なら左腕が通るであろう裾が垂れている。

「生クリームは牛乳の加工品だからな」

買い物カゴを腕に提げた一目を引く容姿をした男子が一人。そのカゴにいくつものチョコが入っている。

「通りで、三つ買えばいいだろ」

500mlを三本、1.5lを購入したようだ。用途はご察しの通りチョコ作り。ちなみに御影は初のチョコ作りとなっている。

その後、生クリームを購入しシャル宅へと移動した。

「買ってきたぞ」

玄関ですら甘ったるい匂いがしていたのだ、発生源となるリビングはそれはもう凄いことになっていた。

発生源を作っているのは村正。彼もまた家から追い出されここに辿り着いた。

「助かる。そこら辺置いといてくれ」

「おう」

エコバックから取り出したパックをまな板の上に置いていく。その間、村正はチョコを叩き割っていた。

「100で」

「了解した」

計量器でチョコの重さを200ぴったしにしている村正がシャルルへと指示を出す。その指示通り、計量カップで100の線に合わせ

鍋へ投入。弱火寄りの中火で少し温める。

温まった生クリームはボールに入っているチョコ達と合流させる。そして、その熱を利用しチョコを溶かす。ヘラでゴネゴネしながら。完全に混ぜた後、なんの装飾もない型に流し入れ冷蔵庫へと入れる。だいたい一時間程入れれば生チョコの完成となる。

「つてわけだ。いけるか？」

「完全に理解した。——やってやらあ！」

ということで作り手は変わり御影へと。村正、シャルルはそれぞれ後方師匠面、保護者面をし離れた場所から眺めている。

「ふんっ！」

両手を使って真つ二つに出来ないため、チョコを浮かし、まな板に着地するように拳で叩きつける。一部が粉状になつてはしまったが何とか割れたようだ。

「・風はないな」

「物体が消失するってことはない。質量保存の法則ってのはそういうもんだ」

風によつて粉状になつたチョコが飛んでいく心配はない。ただし、粉状になつた瞬間霧散してしまつたチョコはどうすることも出来ない。

まな板からボールへ流すようにチョコを投下する。しつかり粉状の物もだ。

「182、91か」

先程やつたものは200と100だった。つまり、チョコと生クリームの割合は2：1。けれど、計量カップは端数のみしか記されていない。

「んっ」

まあ、チョコを食べれば問題ない。これでチョコの方は端数となり、当然生クリームも端数となる。完璧な作戦である。

計量カップで測つた生クリームを鍋へと投入。弱火でじっくりこごと温めていく。

温まった生クリームはボールへと流され、チョコと融合していく。

「よしっ」

これで二個目が完成。残る一つを作るのはもちろんこの男。

「さて、ここで俺が一つ完璧な生チョコを見せてあげよう」

「マジか」

「ほん？」

どうやら自信満々のご様子。村正同様の技量しか待たないこの男——てか同一人物——だが、なにか秘策でもあるのだろうか。

「ジュワユーズ——ッ!!!」

「待て待て!!!」

というところで2月14日、全男子がドギマギしてしまう日である。意中のあの娘から貰えるのか然り、モテ期が到来するだろうか然り。そりゃあもう夢が膨らむ。

とは言っても、讃州中学で一番人気は決まっている。そうだね、シャルルだね。常にカツコよくを意識している者がカツコよくない訳がなく。あと顔が良い。

まあ、当然——

「ふむ」

コレがシャルルマーニュパワーかと思いつつ、積りに積もったバレンタインチョコを持ちながら思う。正直前が見えず困っている。

「にしても大量だなあ」

「そろそろ第二波が来そうだね」

「第二波」

勇者部部室まで後少しではあるが園子の眩きによって思わず足を止める。その言葉通り、大勢が走っているかのような地響きが聞こえ始めた。

「組織的な何かを感じるな」

「いやいや、そんなこと言ってる場合じゃないだろう!?早く逃げるぞ!」

「いいや、逃げない。想いを無碍にすることは出来ない」

「それは、そうだけでも・流石に腹が死ぬと思うんだけど!」

「大丈夫だよ、ミノさん。シャルのお腹はいつつのぼた餅でしか壊れないから」

「え、アレ食べたの!?!」

「つい」

あの目で頼まれたら全人間断れない、容疑者はそう供述しており。とまあ、そんな会話をしているところらに向かってくる団体のお客様が来たようだ。ついでに部室方面から部員も。

「なんか騒がしいな、つてなんだあの人数は」

「ついに勇者部で暴動が」

「ちよ、それは洒落にならない!」

「暴動なんか起きる訳ないでしょ!」

それにしてもやはり多い。シャルルが言ったように一つの組織のような人数だ。何かの暴動と思ってしまう程に

「ン?あれは」

「どうしました、土郎さん?」

「んー、知つてる奴だ。とりま、ちよつと確認してくる」

そう言うや否や先頭へと歩いてき、あち側の代表へと対面する。

「やっぱ会長じゃねえか。なんだ、今日はなんかの集まりか?俺にはなんも来てねえが」

「「会長?」」

会長・部長的なものだろうか。しかも御影の言葉通りであれば、その傘下に御影が属している。それだけで驚異度が跳ね上がった。

「その、シャルくんにチョコ渡したくて」

「ああ、なるほど」

「・なんと言ったか聞こえたか?」

「いえ、土郎さんの声は聞こえたんですが」

「アタシは何も聞こえなかつたんですけど、ソレは」

ひなた達と御影の間には教室が一個挟まっている。だと言うのにひなたの耳は一語一句逃さず御影の言葉を拾っていた。これには小銀もびっくり。

「おゝいつ、シャル〜！」

「ふむ」

「あ、あたし達も行きましようか」

呼ばれたシャルに付属する形で風先輩を先頭に御影の元へと向かう。ちなみにシャルは一度部屋に行き、抱えていたチョコを置いてきている。

「俺になにか？」

稀に見る笑顔な御影に触れずに代表へと視線を交え、ようとするも一秒も保たず顔を逸されてしまった。そんな代表に不思議に思いつつ、返答を静かに待つ。

「どどどどつ、——どうぞっ!!」

顔を真っ赤にしながら差し伸ばされたのは可愛らしい包装をされた物、言わずもがなチョコレートであろう。

「みんな、作り、ましたっ。その、ご迷惑なら——」

「ありがとう。お返しは一人一人にした方がいいかな？」

威圧諸々を消し、砕けた表情で問いかける。

そんなシャルルを出した彼女、——彼女達に後ろのとある部員は内心穏やかではないが、何とか押し止め行き先を見守る。

「いつ、いえー！お返しとかは自己満足みたいなものなので」

「」

「お手数でなければ、一人一人」

どうやらシャルルの性格は熟知しているようだ。彼にとってはどの選択が最善かは判断できる程までに。

「ああ。これに見合うような物を贈ろう」

「~~~~っ！し、失礼しましたあ~~~~!!」

疾風怒濤とはこのこと。窓が閉じられた廊下とは思えない程の風圧を起こしたながら、彼女達は去っていった。

これだから、シャルルマーニユは。

「彼女達は？」

威圧感を戻し、隣にいた御影へと問いかける。

別に怒っている訳ではない。ただ、靈基に従い王様感を出しているというだけである。先程みたく碎けることは可能であるが、それは自身を押し殺すことに等しく、当の本人としては息苦しいとのこと。

「シャルルマーニュ、フアンクラブ、だつたけな？」

「初耳だが？」

うる覚えな横文字を何とか発音し、首を傾げる。ちなみに部としては一応成立しており、顧問もしつかりいる。勇者部という謎が多すぎる部とは違い、しつかりした部である。

「何処に部室があるんですか？」

東郷が異様な圧を背中から出しながら、御影へと問いかける。

「確か・視聴覚室だつたけな」

「では、行って参ります」

「ちよい待ち」

「はい？」

いつの間にか軍服へと着替え終わえた東郷が、戦闘時のような気迫を持ち進軍をしようとするが風先輩によって待ったがかかる。

「えーつと、いろいろツツコミたいんだけど、まず、何しに？」

「潰しにですか？」

「えっ、コレこつちが間違えてる？」

「いえ、これは東郷さんが間違ってます」

一切悪びれる様子なく答える東郷。これには問いかけていた風先輩が困惑してしまうが、過去の自分である須美によって悪と断定された。

「？ アイツらはなんか悪いことでもしたのか？」

「いいえ。でも、これからシャルル君に危害を与える可能性があるわ。集団になった以上看過出来ない」

一人で出来ないとしても十人、数百人となれば可能になる。それは良い事も悪い事も。それが集団での一番怖い所だ。

「でも、シャルくんは負けないよ？」

「でも、勝てない」

決してシャルルは負けなйдらう。だからと言って勝てるという訳ではない。

シャルルが一般人に反撃する。はい、死にます。英霊というものはそういうものだ。よってシャルルは反撃することなく勝つ、もしくは離脱しなければいけない。結構な鬼畜ゲーである。

「シャルはどう思う？」

「ノーコメントだ」

あまり自分の、シャルルマーニュのそういう場面は想像したくない。シャルザビしか認めない。異論は認めません。

一応必勝法はある。魔力放出（光）を発動し、その場から飛翔すれば逃げれる。だが、そんな能力東郷が知っている由もなく。

「私がシャルル君ファンクラブを潰します」

「どっかで聞いたフレーズ」

まるで再登場を望まれていたのに一瞬で手の平を返された前作主人公のような台詞だ。

「じゃ、俺はお前の敵だな。殺すが、遺言は？」

「まあ、待て」

何ら変わらない様子で告げられる死刑宣告。お巫山戯なしという現実にはぐさまシャルルが東郷の前に立つ。

「東郷、熱くなりすぎだ。一先ず頭を冷やせ」

「ごめんなさい」

「御影もだ。殺すではなく無力化を選べ」

「そんな実力差はない。無力化を選べば、俺が死ぬ」

「であれば耐え凌げ。増援はある」

「」

ほんの一瞬、横目で若葉達へ視線をやる。各々、その手は既に勇者システムへと手をかけている。

「あい、わかった」

ほっと胸を撫で下ろす。村正がいればもう少しい感じに治めていたであろうが、その本人は今頃歌野と水都からバレンタインチョコ

でも貰っているのだろうか。

一先ず部室へと移動。それぞれ定位置へと。

「シャルはファンクラブがある、って知ってたの？」

「全く」

「でしようね」

本人としてはいつからあるかが気になる所ではある。シャルルが一年の頃なのか、それとも二年の頃からなのか。まあ、シャルルマーニュのファンクラブであれば問題ない。同族が増えたと思えばいい。「そもそも、どうして貴方はそんな所に入ってるのよ」

千景が言う通り、何故士郎はシャルルのファンクラブに属しているのか。周りが女子だらけというのは居心地悪いだろうに。

「ファンクラブ、ってのは好きな奴を応援する所なんだろう？」

「……」

「合つて、はいるんだけど」

あまりにも清纯。勇者となるのは無垢な者とは言うが、ここまで無垢な奴はいないだろう。……

「他にも入ってそうね」

「おう。若葉のと隼のと銀のに入ったぞ」

「ンンっ!!」

「アタシのあんの」

「なにそれ、こわっ」

「私も応援しよう」

御影の爆弾発言に咳き込む若葉と少しショックな銀&小銀、そしてあまりわかかってない隼。

「ま、まあ、それは置いといて……やるでしょ、チョコ交換」

「二待ってましたあー!!」

風先輩の皮切りにはしやぎ始める園子s。その手にはチョコとメモ帳&ペンが握られている。目の前でチョコ交換をしようものならネタとされてしまうだろう、絶対に。

「ワクワク♪」

目がシイタケ。

さて、どうしたものかと全員が考えを巡らせる。対象が園子ということもあり頼みのシャルルは機能しない。なら利用するしかない。「シャルルさん、これ読んで」「ふむ。」

村正の影響か悪巧みが上手い雪花がシャルルへと一枚の紙切れを手渡す。シャルルは手渡された紙に視線を走らせ、燃やす。

「園子、渡すものがある」

「はいっ！」

元気な挨拶と共に園子がシャルルの元へと召喚される。

「場所を変えよう」

「え・うっ、うん」

9. コンマ間脳裏に浮かんだいくつもの予想。悪い方は全て除外し、良い事しかないこの先について期待してしまうのは年相応な女の子だ。当然断るという選択肢はない。

これによつてシャルルと園子は離脱。つまり、あと一人。

「あのお、園子さん？メモ帳とペンから手を外してもらつても」

「やつ！」

「やつ、じゃなくて」

「そのつちの意思は私が引き継ぐんよっ！」

「死んだ訳じゃないんだから」

完全に手詰まりだと言うのに誰も強硬手段に出てないのが勇者部らしいが、ただ一人、そんならしきなどない。

「——え、あれ、私の」

「ずっと気になってたんだ。このメモ帳に何がメモられているのか」

いつの間にか園子の後ろに立っている御影の手には園子愛用のメモ帳がそつと丁寧に握れている。

「読んでじゃうの？」

「ようやく御影に盗られたと自覚した園子が問いかける。

「読んでいいのか？」

「うん」

余程大事そうに抱えているものだから中身は読んではいけないプ

ライブートな事が書かれているのだと思っていた御影にとってその返しは予想外だった。

園子は思案する。

盗られたことはピンチではあるが、一つ気になる点がある。御影が、無垢である者があの内容を読むとどのような反応をするのか。

漫画みたたく顔を真っ赤にしてメモ帳を投げるのか。それとも続きが気になって読み進めるのか。どちらにせよ、一度も見たことない反応だ。見てみたい。

「いや、人の盗み見るのは良くない。俺も日記読まれるのは恥ずかしい」

何か企んでいる、と直感で理解した御影は好奇心を抑え、メモ帳を読むのを断念。

「急に取っつまってすまん。ほら」

思いがけない行動だったためか園子の頭がフリーズ、というかその場に居合わせた全員が固まった。だが、そこは園子。一足先に思考を復帰し、メモ帳を受け取ろうと手を伸ばす。

「今度は声かけてからとってね」

「おう」

「——あ、待ってください！」

二番手に復帰した杏が御影へ静止をかけるが時すでに遅し。メモ帳は既に園子の手へと。

「千載一遇のチャンスがっ」

「御影先輩、もう一度スパッと！」

「園子、取っていいか？」

「ん、今はダメかなあ」

「駄目みたいだ」

「そ、そうツスカ」

またまた手詰まり。もう御影の助力が期待できない以上、ここから本当に強硬手段を選択するか——

そんな白熱した知能戦をしている最中、御影は自身の鞆から小さい

クーラーボックスを取り出し、いつも使うテーブルへと置く。
「チョコレート交換すんだろ？誰もしねえって言うんなら俺がしてやる」

そう言い、クーラーボックスから人数分の何の装飾もないラッピン
グ袋が取り出された。中身は予想通りチョココのようなようだ。

「生チョコ、ですか？」

「村正とシャル監修のヤツだ、味は保証するぞ」

一番近くにあった西暦組へと渡し、北南組にも渡し、神樹館組にも渡
し、現代組にも渡す。即ち全員にだ。

「諏訪はいいとして、園子だな。誰か渡せるか？」

「あ、じゃあアタシが」

余った数は三つ。つまりここにいない歌野と水都、そして園子だ。
シャルルは作ったその日に貰っているためカウントはしない。

「全員に、って。ただのプレゼントじゃない」

「まあまあ、ぐんちゃん。美味しいよ、このチョコ」

「土郎さんらしいですね」

「なんだろう、私より上手い気が」

「なんだこの、降りかかっている粉。めっちゃシャレてるな！」

「ココアパウダー、かな？あ、固形には振りかけないでね」

全員に、では園子が期待していたようなイベントは起きない。ただ
の試食会、もしくは3時のおやつとなる。

ちなみにこの後、生チョコによって気が逸れた一瞬の隙を狙い小銀
が園子のメモ帳を奪い取り、何とかチョコレート交換が出来た。

一方その頃、場所を移動したシャルルと園子は屋上にて密着するほ

どままでに座って談話していた。

「寒いねえ。凍えちゃうかも」

「暖を取る方法はあるか？」

「ぎゅ〜」

「温かいか？」

「うん、温かあ〜い」

「そうか」

胸あたりにきた園子の頭を優しく撫でながら、雪花から渡された紙切れの指示を思い出す。

〃

〃

正直渡された時目を疑った。これで俺にどうしろと。どうして欲しいのかと。だって、真つ白だったのだ。あの紙切れは。

一先ず、あの空気が園子の原因とはわかっていた。だが、それで園子を、友を害する理由にはならない。だからこそ、安全策としてこうやって園子に付き合っているのだが。

「ずつと一生にいてね」

「ああ」

「一人で消えちゃわないでね」

「ああ」

「幸せになつてね」

「ああ」

「首を、吊らないでね」

「ああ」

俺自身について一切合切話すのは良くなかったような気がする。この子が、このような想いにならずに済んだであろうに。

やはり逃げるという選択肢を取るべきではなかった。カッコ悪い選択肢など視界の外に追い出していたというのに俺は、何故あの時あの行動を――

「」

「微かにではあるが寝息が聞こえる。

「寝てしまったか」

「どうやら園子は眠ってしまったようだ。やはり子供は風の子元気の子だな。このような寒い場所であっても眠れるようだ。」

「戻ろうか」

「そう、眠っている園子に伝え、起こさないように部室へと戻った。」

花結いのきらめき【34】

新メンバーである棗、雪花を加えた週の土曜日。勇者部は寄宿舎から然程離れていないとある空き地にて集合していた。

「戦力が揃ったことにより、こちらから攻めることができるようになりました」

「え。てことはこれまでのじゃ戦力不足だったって訳？」

過剰戦力とも言えるシャルルと御影がいても尚、戦力不足だったのであればこれから戦うことになる敵は難敵と捉える事が出来る。

「十全を期して、ってヤツだろ。このメンバーなら互いに互いの弱点をカバーしあえる」

「そうなの？」

「殲滅力ならシャルル、打点なら結城、持久戦なら雪花、逆転力なら御影」

「え、私？」

桑に体重を乗せながら立っている村正が適当に現時点での最高峰を羅列する。しかし、当てはまるとは思いついた結城が声を上げた。

「なんだ、知らねえのか？自分の攻撃に天の神特攻が入るってこと」

「特攻だと？」

「ああ。ちなみに高嶋の方も特攻乗るぞ」

「お揃いだね、結城ちゃん♪」

「だねっ♪ガンガンやっちゃうよー」

天の逆手がどれ程の倍率を持ち、どうしてそうなったかは現状あまりわからない。友奈、という名が増えている由は大赦のみぞ知る。そして、士郎というメジャーな名前が彼以外いないという事実も。

「はいはい、まだ話終わってないわよー」

「村正さん、静かに」

「おうおう、俺だけ名指しかよ」

雪花からの指摘に思わず、反論してしまうが自身が脱線させたのは事実であるため素直に口を閉じ、静かにする。ちなみに雪花はみんなの呼び方に合わせて??から村正呼びへと変更している。

「ありがとうございます、風さん。」

決戦は満月の日です。みなさん、準備をお願いします」

「満月・はいっ来るんだろうか?」

「えっと、たしか・11、ですかね?」

「・そうね。来週の水曜日が満月になってるわ」

・告げられた決戦は満月の夜。

だがしかし、そもそも満月がいつくるかわからない若葉。そして占いのお陰でそういうのを把握している樹。わかんないことあつたら検索の千景。完璧の布陣(?)である。

「四日後ですね」

「なら、——」

「訓練だなっ!」

場所を移しておなじみ廃校舎に勇者部は来ていた。やることは若葉が宣言した通り訓練。しかも団体戦という名の模擬戦である。

「グーかパーかチョキで別れま——」

「「「しよっ!!」」」

グー：須美、花凜、風、杏、棗、珠子、シャルル

パー：樹、雪花、結城、中銀、小銀、歌野、御影

チョキ：東郷、若葉、千景、高嶋、園子、村正

20人ということもあり、一班だけ1人少ないが問題はないだろ

う。そもそもの班員が強すぎる。これには千景もニッコリ。

「援護は任せてください」

「ガ、ガンバります」

「タマが来たからにはもう安心だっ！」

「ま、気負わずいきましょ」

「指揮は風に任せる」

「ガンガンいこうぜ、でいい？」

「わかり易いな。助かる」

グー班は近接、中距離、遠距離のバランスが三班の中で最もいい。しかも、タンクつきという至れり尽くせり。勝ったな。

「見知った奴が一人もいねえ」

「連携の精度を高める、つてのが目的なんだろうね。コレ」

「アタシとく？」

「息ぴったりだね、銀ちゃん！」

「え、えつと作戦は」

「私に倒された人はそば派に転職!!!」

作戦会議が意味をなしていない。歌野に関してはただ叫んでいるだけである。ああもう目茶苦茶だよ。

「うどんだ——ッ!!」

「友奈ちゃんと離れ離れに」

「あはは(うふふ)♪」

「びよおおおお!!!」

「なんだよ、この班」

パー班より酷い班があるの怖すぎんだろ。だが、個人個人の戦力ならここが一番高いとは思う。もちろん村正を除いて。

ここでルール説明を挟もう。

勇者システムを起動した状態で行い、武器もそのまま使用してもいい。が、シャルルと御影は木刀の使用となっている。ちなみにシャルルは魔力放出、疑似勇士は使用禁止となっている。

脱落条件は精霊バリアが碎けるか、棄権するか。そしてないとは思うが審判である園子、ひなた、水都によってレッドカードが出ると即

刻脱落となる。

グー班が赤、パー班が青、チヨキ班が緑のバンダナをつける事となっている。

説明終わりっ！

『えっと、もう始めていいですか？』

わいわいがやがやしているのか作戦会議しているのか判断出来ないため、ひなたがスピーカーを通して問いかける。

「グーはいいわよおー!!」

「ノープロブレム!!」

「あー、問題なしだー!!」

元氣一杯に返事している反面、本当は問題大アリな所が一つある。まあ、戦力を見たら一番だし、問題ないでしょお、の心ようだ。

『では、始めますッ!!』

『ぶっ、——ぶおー——!!!!』

「ほ、法螺貝!?!」

「みーちゃん!?!」

「ああクソっ、録音出来なかったクソ!!」

唐突のセルフ法螺貝に驚きを隠せず、思わず唾然としている中で猛烈に悔しがっている者が一人。そして、周りとは違う動きをした者がもう一人——

「ハッ!」

「ッ——!」

狙われたのは最も警戒するべきシャルル。勇者システムの身体能力向上がなければ目で追えないような速度で木刀をシャルルの胴へ振るうが、危なげながらも何とか弾く。

「フッ、ハッ、セイッ!!」

続けざまに三連撃。だが、どれもシャルルに届くことはなく逸らされる或いは防がれた。けれど、それでは終わらない。

「こういうのもいいだろ?」

「?」

御影が攻撃の手を止め、体を横にする。その奇っ怪な行動に思わ

ず、脳の回転が緩やかとなった。

急に何を――

「ッ――!?!」

「んー、人間技じゃないね」

空いた空間を通り槍がシャルルへと放たれた。しかし、間一髪の所で回避することに成功。体勢が崩れる、という致命的な弱点を晒してだが。

「そこだッ!」

当然そんなチャンスを逃すわけがなく、すぐさまシャルル目掛けて木刀を――

「うお、あぶねっ!」

物体を文字通り消滅させる矢が御影の頭があつた場所を通過し、彼方へと消えていった。

「シャルル先輩、体勢を!」

「助かった。飴ちゃんをあげよう」

「後にしてくださいっ!」

須美による援護によつて体勢を整え、御影から距離を取るため後ろへと飛ぶ。その際に気の抜けたような会話をしながら場を殺伐としないように手を打っておく。

「シャルル先輩、かくごおー!!」

「威勢がいいな、小学生!」

「ふむ・」

流石にあの大きさの戦斧をブンブンされたら御影の攻撃を凌ぐのに集中出来ない。引く、という選択もあるが、その場合標的は遠距離組へも向くだろう。

そんなことを考えていると、小銀へ白い勇者が襲いかかる。

「私が抑えよう」

「うおっと!?!」

「任せた」

ヌンチャクによる突きを二振りの戦斧を重ねることによつて防御するが、あまりの威力に後方へと押し出されてしまった。

一旦視線を逸らし、別メンバーへ。

「はあ、せいッ!!」

「ッ」

空中で横回転しながら、その勢いと共に振り下ろされた波を打つような剣。それを抜き身刀で防ぎ、蹴りを繰り出すも難なく避けられる。未だ圧倒的不利である。即ち――

「チャンスっ!」

結城が中銀と村正の攻防の隙間を縫い、懐へと潜り込もうとするが「ステイ、結城さんっ!!」

最も村正の強さを知っている歌野が結城へと叫ぶ。だが物体というものは急停止出来ない。しようとするれば慣性の法則によつて僅かなしつぺ返しを喰らうことになってしまう。

――左手に握られる刀が妖しく輝く。

「あっ」

「やばっ――!」

急いで村正の手を止めようと思案するが、その一瞬を村正が見逃すわけがない。この男がシャルルのように甘いと思つた時には敗北が決定されている。

右手に握られていた刀が砕け散る。これにより中銀の精霊バリアは消失。脱落となる。

「二人――」

すぐさま最初の標的を潰しに左手に握る刀を振りかぶるが――

「ッ――、はあ!!?」

森のある方向から射撃により、左手にあった刀が宙を舞う。無論東郷による射撃だ。だがここで一つ思い出して欲しい。――村正と東郷は同じ班なのだ。

『友奈ちゃんへの危害は赦しません』

「くくくつ、お前さあ!!」

通信機越しに狙撃手へ叫びながら、その場から飛翔。その際に刀を投擲し、足止めを行う。それにより撤退は成功。森の方へと姿を晦ました。

「すみません、脱落しちゃいました」

「ごめんね、私のせいで」

「ドンマイドンマイ！村正は顔歪めてからが本番だから注意してい

こおー!!」

「おー！」

「それじゃ、後お願いします！」

「オツケー！」

村正の対処法は知り尽くしている歌野ではあるが、その対処法が面倒くさい。

・多対一では勝てない。

・一対一に一瞬でもなれば道連れにされる可能性がある。

・技量で上をいかなければ勝てない。

このクソ仕様である。例え上の者が勝ったとしても一瞬でも油断されれば道連れにされるという。ただし、これらは全て対人戦の場合の話である。

場所は変わり森へと。

草木が生い茂っており、あまり視認性が良くないという環境で鉄がぶつかり合う音が響く。

「くっ」

際限なく降りかかる剣をずっと連れ添った愛刀で防ぐ。防御に専念するのが手一杯で、中々攻撃に転じることが出来ない現状に苛立ちがこもるがそれこそ相手の思惑のツボだ。邪念を払いつつ策を練る。

花凜を草木もろとも断ち切るという策はあるにはあるが、切り札の使用は相手にとってのチャンスでもある。精霊を降ろす際に敗北となるのは必定である。

私が士郎のような腕力を有していれば、今この瞬間にも断ち切っていた所だが、現実というものはそう上手くはいかない。

スタミナ切れを待つという策もあるにはあるが、日頃から鍛錬を欠かさないと花凜にそういった事は望めない。私が先に倒れるだろう。

そして最後の策は――

「っ！」

「な、なにっ!？」

突如として地面が隆起し、対応出来ず地面に手をついてしまう。それと同時にこの不思議な現象の原因が判った。

——糸だ。地面の中に細い、緑色の糸が張り巡らされている。

「~~~~つ、えいつ!」

地面を裂き、糸が姿を現す。それに伴い私と花凜の精霊の護りを消失させてしまった。正に神業と評価する他ない。

「なあ!?!樹、アンタコレ——!」

「凄いな」

「今回はどでかくやってみましたっ!」

元々の平坦な森など見る影も無い。小さな丘の完成だ。

「スケールのでかさ、か・なるほど」

「はあ、完敗」

今後は草木だけでなく、降りかかる剣すらも断つ斬撃を出す特訓をするとするか。

場所は戻り、スタート場所へと。

未だ木が打ち合う音が鳴り続けるグラウンド。たまに槍がシャルルへと向かって飛来するが、音速で放たれる矢によって弾かれる。

開始から数十分、——何かが砕けた音がした。

「ツ——!?!」

木刀が持ち手の上から原型を留めず、木片となり空中に飛び散った。

自身の武器が使い物にならなくなったと理解した瞬間、両者共に持ち手を捨て——拳を握り締める。

「フッ」

鎧がない顔面目掛けて拳を振るうが、軽々と躲され掴まれてしまう。そして次の瞬間には放り投げられていた。

「うおっ、と、こんな丘あったか?」

放り投げられたことにより300m程離れた小さな丘に着地。なければもつと遠くへ飛ばされていたため、このいつの間にか生えた丘に感謝。

そんなことを考えているとシャルルが爆音の着地音と共に丘に降り立つ。だが、ここには御影とシャルル以外にもう一人——
「糸、樹か」

着地した瞬間、シャルルを包囲するように糸が出現。ドームを形成し、逃場を潰す。だが、この糸は地面を通っていない。先程の花凜対若葉の際に引き揚げてからそのままなのである。

「些か汚れるが仕方あるまい」

「樹、トドメを——ッ!!」

勘づいた頃には遅かった。

？シャルルが立っていた場所から土が舞い上がり、視界を汚す。土が落ちきり視界がクリアとなった時にはそこにシャルルはおらず、糸は消えていた。即ち糸を扱う者がいなくなったことを示す。

御影の予想通り樹の精霊バリアはとある者の攻撃により消失。だが、それは決してシャルルの攻撃ではない。

「ああ、そうだ。お前は王勇に背けない。どのような状況であっても勇士でないといけない」

首元から這う金属特有の冷たさ。少しでも村正が力を加えれば首が落ちる事となる。それだけでなく、千景、高嶋がもしもの際でも対応出来るよう備えている。完全にシャルルの詰みである。

「そうだとも。だが、貴様こそ勘違いしている。俺の王勇に騎士道精神なんてものはない。」

闇討ち、騙し討ち、不意打ち——出来ることはなんでもして、友の雪辱を果す」

「降参しない、つてか？」

「無論だ」

「そうか、なら——」

刀を握る拳に力が籠もる。

その動作に審判であるひなたがマイクをオンにするが、宣言する前に園子によって止められる。これほど彼が自信満々に死刑宣告をしているのだ、何か必ず策がある。

頭上、——森の木々を抜け、黄色の勇者が乱入する。

「——どっ、せえええいつ!!!」

「わわっ!?!」

「っ、高嶋さん!」

場を乱すだけの大きさな一撃。振るう武器である大剣の大きさが大きさをためたつたそれだけで大地が震える。それは地面に落ちていた物が宙に飛ばされる程であった。

脱落者の武器は扱っていけない、なんていうルールはない。

「いいものを拾った」

樹ですら意図していなかった。自身が落とした武器が彼の手に渡るなど。だが、そこは幸運A。落ちているとわかれば後は運に任せるのみ。それで上手くいくのだから質が悪い。

「くそっ」

「糸、というものはどう動くかの演算がムズイな。だがまあ、貴様を倒すのに不足はないな」

「はっ、——ぐう」

シャルルの姿が消えたかと思えば次の瞬間には遙か上空。着地点にはシャルル——あ、終わった。

「言ったであろう? 雪辱は果す、と」

急所を外して糸に貫かれ、地面へと叩きつけられる。英霊であるが故に耐久は人以上であるため、何とか退去まではいかなくとも意識を手放すには十分なダメージであった。

「やはり、糸を扱うのは慣れんな」

「じゃあやつぱ拳でやるしかないな」

樹が勇者システムを解除したのか、粒子になって消えていく。

それと同時に御影が襲来。どうやら風対千景&高嶋には寄らずにシャルル一直線で来たようだ。そんな彼へ須美の射撃がバビュン。だが、難なく避けられる。

「須美、東郷を狙え。1時方向だ」

『了解しました』

これにより援護はない。男と男の殴り合いとなった。これは激アツ展開。

「シャル、速さ勝負でもするか」

「それでいこう。321で」

「長引く訳にはいかないという利害の一致にその案を承認し、互いに構える。カウントは呼吸を整えてから。」

「3」

「2」

「1——ツ!!」

「右足で地面を砕き、互い互いに右拳を付き出す。狙うはもちろん急所である顔面。この一撃で決めるといふ思いが滲み出ている。」

「」

「引き分けか」

「拳は精霊のバリアを砕き。拳は頬を歪ませる。」

「互いの一撃は致命傷なりうる傷を作りうるものであった。即ち、この勝負は引き分けとなった。」

「ハッ、つもらん幕切れだな。木刀などという神秘も何も無い武器を振るうが故だ。次は神剣、聖剣を振るうといい」

「須佐之男からの評価はC。そう言い切り、本来あるべき体内へと消えていった。どうやらウキウキ気分で終幕を待っていたようだ。」

「村正は俺が運ぼう」

「おう、頼んだ。後残るはてかまだ結構残ってんな」

「そうだな。だが、勝つのはグーだ」

「パーだろ」

「これにより残るは勇者のみ。須佐之男としては大変つまらない試合となった。だが、勇者を舐めることなかれ。まだまだ共に肩を並べた者がいる。」

場所を変え森付近へ。

「須美はシャルルと別れた後、未来の自分自身である東郷との戦闘を開始した。自分自身との戦い。碌なものではない。」

「南無八幡 —— 大菩薩ッ！」

「御影にも通用したその一射は触れれば物質を消失させるという恐怖の一射である。ただし、それは神秘が薄いものしか通用しないと

いう欠点はある。つまり、勇者の武器であれば防ぐことは簡単だということ。

須美渾身の一矢は傘のような物に遮られる。

「ありがとう、園子ちゃん」

「うひゃく、手にじーんとくるんよ」

やはり完全に威力を殺し切るとなればそれ相応の痛みは覚悟するしかない。受け流すとは話が違うのだ。

「大丈夫、次はないわ」

その言葉と同時に最大出力の一射が銃口から解き放たれる。標的は矢を番える須美。もちろん防ぐ術などなく、命中。これにより精霊バリアは消失。

「わっしー先輩、さっすが」

「次は棗さんを、——!?!」

影が落ちる。その事実を理解すると同時に顔を上げ、空を見上げ——否、空ではない。

「輸入道つ!!!」

燃え盛る物体が園子と東郷を潰すべく、落下を開始する。避けるという選択肢を取ったとしても範囲外からは逃れない。タマとしてはバリアを消失させるだけのつもりだろうが、アレは死ぬ。炎によつて焼け死ぬことになる。

そんな事実思わず、恐怖か諦めかわからない得体の知れない物が喉の底から込み上がる。ひゅっ、聞いたこともない声が隣から聞こえた。

——即座に聖剣を構え、口上を唱える。

「永続不変の輝き千変無限の彩り！万夫不当の騎士達よ我が王勇を指し示せ——ッ!!」

この時現場にいた園子が後に語った。すごい早口だったよ、と。それ程までに一刻を争う有事なのだ。きつと本来の担い手も赦してくれる筈だ。

聖光が限界値に達すると同時に火車の下へ滑り込む。片膝をつき、聖剣を天へと捧ぐ。

最初こそ拳骨落としたろ、とか思っていた御影だったがこんなタマにそんなジョークは通じないだろう。ゆつくり宥めていくしかない。

「盾は腕のいい鍛冶師が治すから心配すんなって。な?」

「うう、ごめ、ん、ごめん、なさいっ!」

「誰も責めちやいねえよ。ほら、とりあえず移動するぞ」

一先ず盾の欠片は御影の体内へと収納し、タマの肩を右腕で支えて立たせる。身長の関係もあって御影が少し中腰になってしまおうが仕方ない。

体を背けた状態で被害者達へと喋り掛ける。

「すまねえが今は会話できる状態じゃねえ。後でいいか?」

「構いませんよ」

「私も大丈夫です」

「助かる。それじゃ、一旦席を外す」

そう言い、観戦組がいる場所とは違う方向に歩み始めた。シャルル達はその背中から視線をずらし、待機場所へと歩み始める。

「珠子先輩、大丈夫かな?」

「きつと大丈夫よ。ただ優しすぎるだけだから」

「」

和気あいあいと会話している二人の横で一人心の内で愚痴る。あの救世主、特大の爆弾残していきやがった、と。

そんな彼らから変わり、森の中へ。

未だ交戦する風&棗vs高嶋&千景。シャルルが別れた後棗が参戦したまでは良かったが、残るパー班がいつ乱入してかわからないうという緊張感の中勢いよくいける筈も――

「わっ、せえいつ!!」

「くっ」

「ぐんちゃ――!?!」

「こちらだぞ」

ガンガンいこうぜ、を策戦としているグー班に緊張感などあるはずもなく、いつ乱入するかなど考えずに目の前の敵に突撃する。けれど、それだけでは押し切れない。両者共に決め手に欠ける。

ドデカイ一撃、それが全く予想だにしない何かが起きなければいけない。そう、例えば第三者の介入とか。

高嶋、千景。両者の背後から矢が放たれる。

「わっ?!? —— えっ」

「っ!」

突如として発動した精霊バリア。そして、瞬きではあるが思考がそちらに向いたとなれば、それは致命的な隙となる。

「そこ、だあアア!!」

地響きがする程強く踏みしめ、速度をそのままに最高火力を高嶋へと喰らわす。もちろん精霊バリアは消失。脱落となった。

「ふっ!」

横回転を入れ、勢いを増した棒を千景の防御を掻い潜り、腹へと入る。もちろん精霊バリアは消失。高嶋同様脱落となった。

これによりチョコキ班は全滅。敗因は樹が最強だったことですかね。

二名打ち倒し一息つきたい風ではあったが、そんな時間はもうない。すぐさま矢が放たれた方向へと棗共々走り出す。

「杏っ!」

場所バレは既にされていると思ひ、名を呼ぶが反応なし。脱落したか、未だ潜伏しているか。どちらかはわからないが、今はただ走るしかない。

「ッ、—— 風!」

頭上から風目掛けて放たれる槍を棒で弾く、—— が、それだけでは終わらない。しなる鞭によってヌンチャクの鎖部分を絡め取り、真上へと放り投げられる。

「っ!」

あの二人と戦術が酷似していると考えながら、着地際の際、そして空中での隙をどう潰すかに全神経を委ねる。

結城と雪花は風によって攪乱されているが、歌野の瞳は棗を射抜いていた。正しくアレは捕食者の目だ。

「この場での最適解、それは——歌野目掛けての落下である。
「リアリー？」

その選択に思わず苦笑い。だが、それに応じるしかない。ここで怖気づいて回避を選択すれば棗は戦闘に復帰し、更に混乱を極めることとなる。それならば、ここで確実に倒す。例え、相打ちであつたとしても。

「ツ——!!」

——砕け散つた。

太陽が傾き、地平線の下に埋まっていく。もう時期夜が到来するであろう時間帯だ。そうなれば、どんなに楽しい時間帯でも家に帰らなければいけない。

「おーい、しろー!」

「タマっちせんぱーい!」

訓練という名の戦闘が終わつた後でも姿を見せない土郎とタマを探すべく西暦勇者総出で廃校舎内の教室を探す。

チャットで3階にいることはわかっているが、どの教室かは伝わっていないかつた。それは単に御影の伝え忘れではあるが、こうやって廃校舎でかくれんぼをするというのは楽しいようで妙な昂りを感じながら名前を呼ぶ。

まあ、結構すぐに見つかり、階段からすぐの3年2組の教室に彼らはいた。

「あつ、土郎く——」

「しろー」

高嶋の呼びかけで皆の存在を知つた御影がすぐさま振り返り、声を出さないようにと人差し指を口につける。隣で眠っているタマへの

配慮だろう。

「タマっち先輩、眠っちゃいましたね」

「切り札で消耗したんだろ。それで、もう帰る時間か？」

いつもより数段小さい声で誰かに問いかける。

「そうよ。最終結果は——」

「バーだろ？見てたさ。やっぱ雪花は悪知恵働くな」

「見てたんですか？それなら観戦場所に来てくだされば良かったのに」

「いやあ、掴まっちまってな」

「そう言い、タマに捕まっている左裾を皆が見えるようにあげる。見るにタマの親指と人差し指で辛うじて摘んでいる状態ではあるが、彼にとつてどんな拘束よりも解き難い拘束となってしまうている。」

「まっ、帰んだろ？タマは俺がおぶって行くから帰ろうぜ。日が暮れちまう」

未だ寝息を立てているタマを背に乗せ、教室を出る準備をし始める。と言つても持ってきた物など一切なく、窓を閉める程度であった。

「ああ、帰ろう」

リーダーのその返しに従い、各々教室を出て帰路へ着く。いつも通り帰路は同じく、纏まって歩いていく。やはり、この集団が一番落ち着くな、とは全員一致の想いだった。

笑顔で昔の話を【蛇足】

8月11日、一年程明かりがついてなかった家に明かりがついた。とある理由にて家主は不在ではあるが、そろそろトリピングへと少女達・いや、彼女達が上がっていく。

「んー、やっぱ所々埃被ってるわねえ」

ここに来る以前に買ってきた物が入っているエコバックをリビング中央に置いてある大きな机にドンツと置き、部屋を一望する。やはりと言うか部屋は少し埃っぽく、人が住んでいる家とは思えない。

「ちやちやつと掃除しちやいますか」

「そうだね。シャルくん達が来ちやう前にピカピカに磨いちやおつか」

「任せて。最新鋭の掃除機を拝借・見つけたわ」

ということと掃除が始まった。時刻は8時を回ったが、いつも通りの遅さなため特に心配せず手を動かしていく。リビングを掃除した後は、ついでに他の部屋も順次綺麗にしていく。

「叡智な本は・ないわね」

「アンタは毎回確認しないとイケないわけ？」

「シャルル君がどんなものに興奮するか気になるでしょ？」

「なる」

あの誰からのスキンシップに耐えるシャルルが一体何に性的興奮をするのか。毎度毎度出てくる議題に一つ物申したい。

いや、普通にアンタらのスキンシップ危ないからね？ただ単にシャルルが我慢してるだけでヤバイからね？控えてもろて。

そんなこんなで掃除を終わらせ、初め通りリビングへと集合した。

「それじゃ、今日の主役いないけどボチボチ始めましょうか」

エコバックから買ってきたお酒類、そして肴。後鍋の具材などをテーブルに広げ、それぞれ自身の好みである飲料を入れたコップを

手にする。

「「カンパニー!!」」

夕飯より先に酒を飲む。んーこれは紛うことなき勇者ですね。

酒で喉を潤しながら食材を食べやすい大きさに切りながら鍋へ放り込んでいく。肉は高いため魚で代用。更に頭が良くなるな。

「また新しい子達が入ってくるわね」

「いうて11人ですけどね」

「サッカーできるね」

「もう酔ってる?」

確かにサッカーはできる。けど違う。そういうのじゃないんだ。決してサッカー同好会ではないのだ。ちゃんとした動機と力を持つ人を選別している。

「問題児がいなきやいいんだけどね」

「止めなさい。思い出して寿命縮むわよ」

「なにがあつたんスか?」

そう、あれは一年前。初の後輩ということやヤウキであつたが問題児、というよりは核の危険性を理解していない阿保が一人入ってきた。シャルルが普段通りの雰囲気です。注意したのも悪かつたとは思わなかった。まあうん。放り出された。

その場に居合わせていた花凜と風にとって冷や汗どころではない。

心臓が跳ねたかと思わせる程に凄い圧だった。

「まっ、今じゃ肩組む仲なんだから、問題ないでしょ」

「ほんつと、いつの間にか仲良くなつてたわよね」

「まあそこはシャルだし」

「シャルくんだから」

「シャルルくんだもの」

コミュ力Aのシャルルに死角はない。相手が誠心誠意込めて謝れば全て水に流して、次にいく奴だ。それに実害が一つもなかったし。

そんなこんなで時計が9時を回り始めた頃。誰かの帰りを示すかのように玄関の方から数名の喋り声と扉が閉まる音がした。

「ただいまー!」

「ただいま」

「お邪魔します」

本日の主役登場。9時になってようやく帰還とはブラック企業にも勤めているのだろうか。まあ、実際のブラック企業は住み込みだが。

「ようやく来たわね」

「もう。あまり根を詰め過ぎちゃ駄目よ？」

「だってよ、園子」

「ごめんなさ〜い」

「シャルルくんもね」

「俺は多少寝なくてもいけるからな」

「そうやって壊れかけのブリキみたいになったのを忘れてないでしようね？」

「面白いからヨシっ！」

「なにもヨシっ、じゃないでしょ」

「そんなやり取りをしながら空いている席に座り、鍋を囲む。日本酒である『澪』をコップに注ぐ。

「樹もついに20歳。一杯いっちゃう？」

「うんっ！」

果たして甘酒で酔うほどだった樹が今現在どうなっているのか。そもそもアルコールの耐性って成長で変わるものなのだろうか。

飲まないという選択肢もあるが、先輩であり、尊敬する人達と一緒に飲みたいという想いから飲酒を選択。どれを飲もうかと八種類ある瓶を見つめる。

「シャル先輩はどれですか？」

「俺は青いの、澪ってヤツだな。飲むか？」

「はいっ」

ということではシャルル同様青い瓶を選択。『澪』の特徴としてはジュースのように甘く、度数が少し高い。（作者は一度も飲酒したことがなく、お酒について一切知識なし）

「さてと。溜めてたヤツ見るかあ」

樹が隣で大きな瓶を持ち、恐る恐るコップに注いでる中、シャルルはテレビを起動し録画を再生する。再生されたものは平日の夜にあるような番組で、趣旨としてはローカルバス関連のものだ。

「あつ、樹ちゃん」

「は、はい？」

唐突に呼ばれ、不思議に思い顔を上げると――

「くうー！！樹と樹を見ながら飲む酒は格別ね！」

「本人いるのに?!」

テレビに樹、そして目前にも樹。樹大好きな風にとって楽園のような場所だろう。というか本人がいる時にその本人が出ているバラエティーを普通見るだろうか。

「おー、いつつん良い演技だね〜」

「おう。良いあたふたの仕方だ」

「あ、こ、コレはあ、ただあたふたしてるだけでエ」

「これは心をガシツと掴まれちゃうぜえ」

「だな。俺も心をガシツと掴まれたぜ」

「う、うう」

「やめたれ」

まあ、そんなこんなでシャルルが溜めていた樹登場会が流され続けるテレビが出来上がった所で、樹が初のお酒を飲み干した。

「んっ！ジュースみたい」

「いいだろ？まつ、度数高いから気をつけてな」

少し火照っているが、意識良好。一杯飲む程度であれば大丈夫なだろう。これが二杯三杯続けば意識が朦朧気になるかもだが、ここで限界を知るのもいいかもしれない。

「樹が、一人で起きれなかった樹がお酒を嗜む大人に、くう、泣けるね！」

「今は一人でも起きれるから！」

「おじちゃんか」

「風先輩が段々おじさんになってる気がするんだが？」

「元からでしょ」

「それは、大丈夫なの？」

「風はお酒を飲むとおじさんっぽくなるというか、涙脆くなるというか、悪いことではないが、異性がいる場でしていいものなのか。彼女の女子力的に。」

「もう、ほんと勇者部サイコー！」

「急になに、たしかに最高だけど」

「いえーい、勇者部サイコー！」

「サイコー?!」

もうほとんど呂律が回っていない頭から出てくる言葉がそれか。本当に彼、彼女らにとつて最高だったのだろう。それは間違いなく。

「それじゃっ、シャルいっちゃってー！」

「今年も〜？」

「うん。シャルくんについてもっと知りたいな♪」

ということが始まった毎年恒例の??の昔話。と言っても、去年までは全員共通の話でワイワイしていたが、いつの間にか??の自分語りとなってしまうていた。結構恥ずかしいためご遠慮したい所ではあるが、期待されているのも事実。あまり面白くない、という予防線を張って話し始める。

「え〜つと、どっからだっけな？」

「高校生からじゃない？」

「それ、アンタが寝てて聞いてないだけでしょ」

「たしか、高校で終わってなかった？」

「そうね。クレープは覚えてるわ」

「あはは。クレープのインパクトが強すぎでしたよね」

男子二人で遊びに行くとしたら、だいたいボーリングかカラオケ。それか何処にも行かずにゲーム。そんな所だろうと思っていたのにクレープ。確かに変だ。

「どうしてクレープだったの？」

「ああ、アレは二人で行けば一つ無料とかのキャンペーンだったけな」

「え、それじゃあシャルのなし？」

「流石にアイツでもそんなことしないさ。まっ、五つも頼んだ時には正気を疑ったけどな」

「五つも!? 一人でその量食べるとか何もんよ、そいつ」
「自分用に一つ、俺に一つ、ナンパ用に二つ、妹に一つ。アレは酷かった」

今思い出してもアレは酷かった。一つをその場で一瞬で食べ、もう一つを可愛い子を見つけるまで食べながら移動していた。マジで学年一位かと疑った。

「ナンパあ? 誰が?」

「俺とアイツでだな。まあ、結果は。ノーコメントにしとく」

「ノーコメントはダメだよ。ね?」

「そうね。この場での黙秘権は一切認めません」

「俺の人権はよくなるなあ」

何度目かわからない人権消失。もうこれには諦めで返すしかない。

「まあ、成功はしたんだが。成功したんだがなあ。色々想像外の出来事でヤバかった」

「具体的には?」

「自殺する予定だったらしくてな。鞆に縄が入ってた」

「んん? 流れ変わった?」

「話しが45。変わりましたね」

「アタシ以上の巻き込まれ体質?」

まあ、それ以上に予想外なのはその時に回収した縄を自分で使ったことなのだが。そんなことは彼女達に言える筈がなく。

「んで、その後なんやかんやあって初の友達になったんだ」

そのなんやかんやの間に親友との共同作業があったが、それは省く。本当にそれだけで一日が終わる程の濃密度だ。

「んーつと? その人、女性なんだよな?」

「そうだぞ? 一応ナンパした人になるからな」

「むむっ、これは」

「風が吹いてるんよ」

「え、風?」

「はい、風よ」

「わあ、涼しい〜」

彼女達の何かに引つかかったのか風が吹き出す。これが風の神エエカトル

風の神エエカトル

夜の風ヨフリ・エエカトルのようだ。

「それでそれで？他には？」

「ん〜、そうだな。あ、そうそう。二年の時の誕生日にあるゲームを貰ったんだよな」

「ゲーム？シャルの口からゲーム？」

「なにか悪い物でも食べました？」

「同じもん食ってるだろ。俺だってゲームの一つや二つないな。一つで終わってる」

f a t e、というシリーズのみしか遊んだことがないシャルルにとって、ゲームの知識は有名どころの一部分しかない。例えば髭のおじさんが星スターを取ると無敵になるとか。その程度の知識量しかシャルルにはない。

「まつ、いいや。f a t eさえあればいいや」

「フェイト。聞いたことある？」

「ないかな。西暦のゲーム？」

「う〜ん、こつちにもあるんかな？多分ないと思うけど。まつ、簡単に言えば過去現在未来の英雄が戦うアクションゲームだよ」

f a t eテラリンを見れば無双ゲーのカテゴリーに入るであろうが、f g oに視線を移せば。なんだっけ。なんのカテゴリーに入るっけ、アレ。まあ、そこは然程問題ないからいいか。

「おつ、もしかして？」

「そう、俺はこれでシャルルマーニュに出会ったんだよ」

正にアレは??にとつての運命的な出会い。あれがなければ、今こうしてここにいないと思うほどに人生を変えた出会いだった。

「そのゲームじゃ、シャルルマーニュってどんな感じなの？」

「一言で言うなら、気持ちのいい馬鹿、だな！」

「あー、なんだか解るのが癪ね」

「でも、スツゲえカッコいいんだ！誰にでも手を差し伸ばして、手を握

る。もう、ほんとにカッコいい奴なんだ」

瞳を子供のようにキラキラと輝かせながら語る彼を見てみると、如何に彼にとってシャルルマーニユという存在が特別かが伺い知れる。同時に、彼が偶にしている瞳の理由を知った。

「好きなんだね」

「おうともよ！まあでも、結局憧れは憧れで終わっちまったけどな
顔向け出来そうにもない」

首を吊った自身の姿が脳裏を過る。

その行為が憧れに対する侮辱だと理解しているが故に自身を到底赦すことなど出来ず、憧れから遠ざかる。

「アンタの頑張りを見てるなら、良くやったあー！って褒めてくれる
でしょ。アンタが言う人物像そのものならね」

「そうかな」

「そうそう。まっ、今はシメのことだけ考えようぜ」

「えっ、もうシメ?!」

「いつつん、寝ちゃったしね。そろそろ日跨いじゃうよ?」

「ほんとね。それじゃあ一回瀧してくるわね」

「おう、頼んだ」

これにて毎年恒例のシャルル誕生会を終了となった。些か規模が小さいと思われそうだが、有給を取らない限り滅多に休日が重ならない彼らにとって二日合わせるのは苦行の他ない。明日と明後日、彼らがどう過ごすかは知らないが、笑顔なら良し。

花結いのきらめき【35】

何故か理由もなく休日になった水曜日。考えるまでもなく神樹の粋な図らいとは思いますが、元より終わったら早退するつもりだった勇者部にとっては然程問題ではない。

場所は家庭科準備室兼勇者部部室。大勢が集まる所ではない筈だが、今現在この場には村正を除く22人が集合している。どういう原理だろうか。ある勇者が言うには根性らしいが、これもまた勇者部七不思議に認定しておこう。

さて、本日が満月の夜であり攻め込む予定の日なのだが、勇者部は何をしてるかと言うと

「22人 サッカーができるな」

「はい?」

「たしかにチームが二つできるな」

「えっと」

御影の意外すぎる言葉を理解できないひなた。補足するシャルル。一切話しの流れがわからない樹。

なにを思っこの会話をしているのか仏頂面な二人からはわからない。ただ解るのは脳みそが一切回転していないということだ。

「私はパス」

「私も運動は苦手なので」

勇者システムを起動しているのなら可能ではあるが、その場合ボールが弾け飛ぶか彼方へと飛んでいく。だが、起動しなければ運動自体ができない。

「これを聞き、御影がシャルへと救援を要求する。」

「シャル」

「PKでもするか?」

「よしっ」

そういうことで二人揃って部室を出ていった。残された者達はそ

んなにサッカーしたかったのかと不思議に思いつつそれぞれの作業、会話に戻る。

その一時間後、——樹海化を示す警報が鳴った。

シャルルと御影両名戻らずではあるが、前のように寝ている訳ではない。PK中であっても樹海に呑み込まれるだろう。というよりPKしに行つて一時間戻らないのはおかしい。

見慣れた樹海を一望しながら、彼らを待つ。勇者システムに搭載されている位置情報によるともうそろそろではあるが

「よっ、と」

「すまない、遅れた」

ぴよんぴよんと着地。そのような可愛らしい形容ではあるが、恐ろしい速度が出ていたが、おそらくあの速さでタックルされると背骨が折れる。

「PKはどっちが勝つたの？」

一時間にも及ぶPKの結果はどうなつたのか。今回の敵の情報より欲しいというのが勇者部の総意である。

「0-0。ボール二個破裂という結果になった」

「はれっ。破裂!？」

「サッカト部には申し訳ないことをしたな」

「あー、怒られて遅くなったと」

「いや、練習に付き合ってくれたらいいって」

逆に彼らの脚力で二個までに抑えた方が凄いと思うが、ボールが良かったのか、神樹が何かしたのか。おそらく後者だろう。御影が絡むと何をしでかすかわかった事ではない。

「んー？」

「どうかしたか？」

喉を鳴らした歌野に棗が問いかける。発声的にもなにか疑問点があるようだ。

「ちよつと、村正来るの遅くない？」

「むっ」

「そうだね、たしかに遅い。でもまつ、大丈夫でしょ。あの人の生命カゴキブリ並だし」

「それもそうね」

「むむっ」

ゴキブリ並と言われ、何故かしよげるシャルル。これに関して知らない者からしたら？ではあるが、この場で唯一知っている中銀にとつては複雑であろう。

「敵さん動きさないから、まだ待てるわよ」

「いいよいいよ。村正さんいてもあんま変わんないだろうし」

「とういか全く動いてないぞ。タマ達が来てんの知らないんじゃないか？」

どれだけ悠長に駄弁ついてもこちらに来る様子はない。集まっている場所に何かあるのか、それとも他に違う理由があるのか。

「実際知らないんだろ。今回は俺達が攻めてんだから」

御影の言う通り奴らは勇者が来ていることなど知らない。いつも勇者部が襲撃のアラームに驚くように、奴らもまた勇者部の襲撃に驚くことだろう。簡単に言えば立場が逆転した。

「てことは？」

「幻想の色彩、幻想の物語」

「されど我が剣、我が勇士は君臨する」

「即ち、——」

「淡々と紡がれる口上。」

騎士道精神を王勇とする本来のシャルルマーニュであれば、しないであろう不意打ち。だが、彼にとつてそれは友を守るためであればいとも容易く裂かれる。故に恥などない。

「王勇を示せ、遍く世を巡る十二の輝剣ツ!!」

「薄々彼は気づき始めている。」

本来であればカール大帝の助力により威力を増していた聖剣の輝きが打つ度に下がっていることに。あと五発程打てば普段と変わらない輝きとなるだろう。それ以上下がるのであれば死活問題ではあるが、現状そこまでは判らない。

だが、その威力はローランが放つ絶世の剣の約20倍。至高の13連撃という名は伊達ではなく、極光に呑まれれば瞬く間に塵と化す。

※本来（原作）の状態は13倍。そこにカール大帝の助力&威力落ちを加味して約20倍としています。威力落ちなければ26倍となっています。

「うひゃあ。ハンパないな」

着弾地点は何も残らず、未だ所々から煙が上がっている。どれ程の熱量だったかは一目瞭然であろう。

「これで終わりか？」

「キラキラしないね。まだいる、とか？」

目視できる範囲にバーテックスは一匹たりともいない。殲滅したと考えるにはいいが、樹海化が解ける前兆は現れない。

「うーん、そうだなあ。ちよつと進んでみるか」

もしかしたら目視出来ていないだけで奥にいるのかもしれないと考えたシャルルがそう提案する。

それに賛同し、和気あいあいと遠足かと思わせる程の緩さで歩き始める。ただし警戒はしておく。いつ如何なる時であつても応戦すべく武器を握り締める。

聖剣の輝きが満ちる少し前、神樹付近にて英雄は純粹悪と邂逅を果す。

神樹より這い出るヘドロのような物体。彼は村正が有する業の目を用いて宿業を見据える。いや、見るまでもないことではあるが一応の確認。

「いい、———実にいい。」

清涼、潔白、清廉、可憐、華美。汚しやすく、染まりやすい。フツ、ハハハハハハツ!!」

「清涼水よりは炭酸。冤罪はくそ。清廉は使うことのない形容だな。可憐と合う奴。水都がいけるか。華美はー、やっぱジュワユーズだろ」

へドロかと思つていた物体が人の形、より詳しく言うのなら目の前に立っている者と同じ姿形となり嗤う。そしてその真似られた本人は意味のわからないことを語りながら手に刀を取り出す。

業の目を返し、深く水底に落とす。

「いやはや、最初に私の前に立つのが勇者でも英雄でもなくただの人間とは。神樹も血迷ったか。いや、この場合は天の神か?」

「それは俺も思う。何で俺を危険を冒してまで呼んだのかただただ疑問だ。だがまあ、お前を殺すことに不足はない」

「冗談にしては酷くつまらん。

やはり、奴だ！奴は何処にいる！四国の大英雄は何処にいる！また一度殺してやろう!!此度は勇者共を眼前で慰み者として輪姦してやろう!!」

毎度思うが、コイツの自信はどこから出てくるのか。御影が草薙剣を保有し、真の力を引き出せるのを知らない訳ではないだろうに。例え、御影に泥がかかったとしても今の彼であれば弾く。相性は不利なんだがなあ。

「——貴様、今なんと?」

空気が、大地が震えた。圧倒的なまでの神秘。それに見合わない体躯ではあるが、彼によって放たれているのは肌でわかる。

「なんだ、この珍妙な精霊は?」

「はあ、お前、ほんとに神か?」

彼が言う精霊が須佐之男と気づく様子は全くない。そんな悪戯に呆れを通り越して、可哀想という感想が出そうになるがぐつと堪える。

「貴様、御影 士郎を殺したとのたまったな。であれば御影 士郎より強いのか?」

「ああ、当然だとも。私は到達者であり、ちようて——」

——悪棲だったものが液体となり飛び散った。

けれど死することはない。泥が意志を持つかのように集まってきた、元どおりの形を成す。

「ツハハ、貴様がどのような策を用いようがわた——」

「弱い、あまりにも弱い」

再度弾け飛んだ。そしてようやく理解出来た。どのような手を用いて砕いのか。——手だ。ただ握り締めた手を前に出す。それだけで弾け飛ぶ。あまりにも規格外な一撃。

「何度、——やろうが、——私は、——」

「煩い、喧しい、煩わしい」

ほとほと疑問である。このような地を這い着くばる弱者がどう奴を殺せたのか。私であっても手足の二本を捨てる覚悟をせねばいけんというのに」

「ただの不意打ちだ。天の神との戦いに横槍入れたただけだ」

「不意打ち？——ハハハハハハハハ!!正しく弱者がする技であるな!ようやく理解出来たぞ!貴様、真正銘の弱者だな!!」

??の解答に思わず手を止め、天を仰ぎながら嗤う。だが、敵にとっては致命的な隙。当然見逃すわけがなく、拳を振るう。

「弱者は貴様の方だツ!!」

「ハハツ!!そうか、そうか!では、さらばだ」

殴る、とは言えない。それはただ握った手で触れるスキンシップのようなもの。なにも傷つかない行為であった。

頬に触れ、勢いが消えた拳を払い、腕を何者も並び立たない力を以て握り締める。そして勢いなど知るかの如く、ただ投げる。

「この場に貴様のような輩は不似合いだ。疾く失せろ」

空に放り投げられただけで死ぬ訳ではない。この程度で死ぬのであればもう死んでいる。目的は殺すことではない。

「見える——見えるぞ!あそこにいるのだなっ!!待っている、今にでも——」

——悪棲の肉体を光が貫く。

「これで協力するのは最後だ、造阪神」

ボロボロと砕け散っていく肉体。最早声を出すことは不可能な体になってまで彼は夢を見ている。誰も彼も潰し、潰し、潰し潰し潰し潰し——。

友達だからこそ【友奈✓】

1月3日、新年3日目となった今日。

園子と銀は朝早くから里帰りのため出ていったため、シャルル以外家におらず、絶好の掃除日和となっている。流石に彼女達の部屋は掃除出来ないが、それ以外の細やかな場所を掃除した。

「ふう。」

ありもしない疲労感と共にソファーに体重を預ける。それを見てか、飼い猫であるクロが体をシャルルの太腿に寄せ丸まってしまうた。

「？」

クロの艶々な毛を手の甲で撫でながら時計に目をやる。

時刻は11:37分。もう時期昼時になるが、そもそも食事が必要ではない肉体だ。園子と銀がいないのであれば作る必要もないが花凜ように作ろうか。そう思い、立ち上がるうとした時だった。

呼び鈴が鳴った。

「？」

来客の予定はなかった筈だと思いつながら玄関へと足を運ぶ。最近物騒であるため警戒こそすれど、神秘が籠っていないければダメーシは受けないため警戒のみに抑える。

まあ、全て杞憂に終わるのだが

「どちら様で——」

「こ、こんにちは。」

「おつ、友奈じゃんか。どうした？」

当然の訪問者は、以外にも友奈だった。普段ならチャットでアポを取ってくる良い子ちゃんだと言うのに、今回はどうしたのだろうか。

「冬休みの宿題で解らない所があって、教えてくれないかな？」

「おう。ささっ、上がってくれ」

勉強関連だから少し様子が変だったのかと納得し、リビングへと上げる。一先ず、冷え切っている友奈のためにもココアを淹れて横に置いておく。

「何処が解らないんだ？」

「えっと、(3)の比率を求める問題が解らなくて」

「ああ、コレは $\angle A$ から垂線を——」

垂線を作り出す問題は控えめに言っただけです。それを頭良い人はささっと引くから更にクソです。どうやって見つけ出すんだよ。

(作者談)

そんなこんなで無事理解し、答えに辿り着いた。このやり方を他の問題でも応用出来るかは友奈次第ではあるが、数を熟せばいつか出来るようになるだろう。ちなみに私は一生引ける所に引く策戦を取ってました。

「ありがとう、シャルくん」

「いいっていいって。てあれ？帰るのか？」

やるべき事はやったとばかりにそそくさと片付けを行っている友奈に首を傾げる。明らか帰る準備をしている。

「？ うん、残りは私だけで——」

「また解らない所で出てきたらどうするんだ？」

「うっ、それは」

「終わるまで面倒見るぜ？俺は迷惑じゃないぞ」

「それなら、よろしくね、シャルくん」

その後、解ける問題は友奈に任せて、その間俺はクロと戯れる。解けない問題が出れば理解出来るまでつきつきりで教えた。

集中していると流れる時間がとてつもなく速い。勉強始めたのが10:40頃であったのに、時計を見ればあらず不思議12時を過ぎていた。

「あつという間だったね」

「いい集中力だったぞ。後は——うん、友奈なら出来る問題だと思うし、頑張ってたな」

「うん、頑張るっ」

とりあえず机を片付け、残りのページをパラパラと捲って確認する。この程度であれば教えた内容を使えばいけるだろう。

「さっ、お腹空いたし飯にしようぜ」

「私もお腹ペコペコだよ」

「待っててなー。すぐ作るから」

「ん、あれ？私も一緒にいいの？」

「もちろん。昼飯一人は寂しいしな」

今日の献立は友奈大好き肉ぶっかけうどん。やっぱり勉強頑張った後は好きなもん、甘いもんを食うに限る。疲れ切った脳が回復するのを感じる。

「そこまでしてもらったら凶々しいような」

「凶々しくないさ。寧ろ、俺としては友奈と昼一緒にできて嬉しいぞ」

「そっかあ」

恥ずかしそうに頬を赤くしている友奈を見つつ、うどんの上にタレを絡ませた牛肉をドン。肉ぶっかけうどんの完成である。

盛り付けが終わったうどんを二つ机へと運ぶ。一つは友奈の前に、もう一つは俺が座った時友奈と対面するように置いておく。

「おおー！」

「クロはちよつち待っててな」

猫球で足をペシペシされながら、猫缶を餌皿に載せる。それをクロの前に置くとすぐさまペシペシを止め、齧り付く。やはり食欲を抑える力はないようだ。

「いただきますっ！」

「いただきます」

元氣一杯ないいただきますに続き、俺もうどんを肉と共に啜る。肉に絡ませていたタレがうどんの汁に落ちており、若干ではあるがうどんからも甘味を感じる。

うむ、丁度いい甘さだ。目分量でさっさと作ったが、結果オーライ。

「おいふいねー！」

「よく噛むんだぞ？」

「うんっ！」

まさかの呑み込みながらの返事に驚きを隠せないが、そこはまあ友奈だし。うどんをこよなく愛す彼女の箸を止める者はいない。

その後も凄いスピードで食べていき、遂には皿の中を空にしてしまった。時間としては一分弱。風先輩に迫る速さだ。

「美味しかったあ。毎日食べたいぐらいだよ」

「毎日」

「この量のうどんを毎日」

俺はこの量であれば週一回で充分だと言うのに毎日だと？いや、香川県民としては正常なのか？

「あつ、今の『毎日』は、その違って。いや、違わないけど。えっと」

「？ 友奈が毎日して欲しいなら飽きるまで作るぞ」

食費がどうなるか、から目を逸らしながら宣言する。あの食べっぷりが見れるならいつでも作ります。見れなくても友奈が幸せなら作る。

「迷惑、じゃない？」

「迷惑じゃないって」

友奈が幸せなら俺にとって迷惑であってもどうでもいい。友が自分として生きているのに、それを邪魔するのは無粋だ。

「我慢してない？」

「してない。友奈こそ我慢すんなって。誰かを害さない限りは突っ走っていいんだから。もしもの時は皆で殴りにいくしな」

勇者部が俺にしたように、俺もそうする。殴るのは絶対にしないが絶対に止める。望まないことをやらせるぐらいなら、——考えるのはよそう。

「シャルくんは殴らないの？」

「なんで？」

「だって、私のせいでシャルくんは」

「ああ、アレか」

「瞬どれかわからなかったが、ついこの前まであった赤い紋様のことだろう。天の神の祟りと断定しているが、実の所あまりわかってない。ただ神からの祟りだとしか判明していない。本当にアレは何

だったのだろうか。

「アレは友奈が望んで背負った物じゃないんだろ？」

「うん。でも——」

「じゃあ友奈のせいじゃない。天の神の仕業だ。だから責めるべきは友奈じゃない。絶対にな」

一旦、全ての責任を天の神に投げておく。実際元の元の元を辿ると人類を滅ぼそうとした天の神が悪い。お前、犯人だろ。

「それに、辛かったのはお互い様だろ？」

「私はへつちやらだったけど、シャルくんは長く——」

「痛みは痛みだ。そこに大小関係なんてない」

痛みは・うん、生前あの時の方が痛かった。今回は聖騎士帝っていう防衛術があつたお陰で寝ているだけで何とか耐えたし、気分的には友奈より気楽だつたと思う。

「じゃあやつぱり、シャルくんの方が痛かったんだ」

「——えっ。あいや、そういう意味じゃなくてだな。ほら、痛みは痛みだし、な？」

「そう、かな？」

痛い所を突かれて思わず慌ててしまったが、なんとか屁理屈っぽいが返す。だが、痛みに優劣がないのは確かだ。

「まっ、友奈のためならなんだつてするさ。俺は死ぬ間際までカッコよく在りたいからな！」

「嫌だよ、そんなの——」

本音が聞きたい。

迷惑なんてものは考えなくていい。自分らしく迷惑をかけて怒られればいい。褒められればいい。だから、自分の意志で生きていて欲しい。

「お別れも言えないままさよならなんて、絶対に嫌だっ!!——」
「から、いなくならないで。私が、私が全部抱えるから。」

大きく息を吸ってー、吐いて——

「誰もいなくなったりしない。皆、友奈が大好きで、大切に、——愛しているんだ。」

友奈が抱えて苦しいのなら、どれだけ傷つこうが絶対に支える。きつと皆ならどんな苦行も地獄も笑いながら歩いて行けるさ」

「嫌だ嫌だ！みんながつ、私のせいで傷つくなんて絶対に——」

「友奈、わかってくれ。そうやって苦しいように、俺達も苦しいんだ。友達が一人ぼっちで傷ついている姿を見るのは」

あまりにも優しすぎるが故に自身の傷を見ず、ただ進み続ける口ポットになって欲しくない。

多数決で押し切ってはいけない。また、前回のよう押し潰してしま。だからこそ、俺が——俺が、なんだ？

今、俺はなにをしようとした？友奈の生き方を捻じ曲げようとしたのか？——それは違う。それはカツコよくない。なら、することは決まった。

「みんな、苦しいのに私だけ、こんな——」

「好きだ、友奈」

「えっ?!」

唐突すぎる告白。感情を露出していたが故に、いや、そうでもなくてもこれは驚く。それもシャルルからという事態も相まって更に混沌と化している。

「俺は間違っていた。友奈のしたいことを否定するなんて頭がどうにかなっていた。

友奈がしたいことなら、俺はなんだって応援する。だから、俺は友奈を救う」

友奈に立ちほだかる全ての障害は俺が壊す。どのような困難であろうが、俺の命尽きるまで悉くを障害なり得ぬ物体としよう。

「す、すすつ、好きというのは何でしょうか」

「そのまんまの意味だぞ」

「~~~~つ!!」

友奈の顔が茹で蛸のように真っ赤となってしまった。

いや、つい流れで告白をしてしまったが本音を言っただけなのでセーフ。断われられたとしてもいい。ただこれは友奈の生き方を曲げようとした自身への訣別だ。

「え、えっと……よろしくお願いします……？」

「おう。これからドンドン頼ってくれ！」

まさかの承諾で驚いている自分がいるが、これによって友奈のしたいことを後押し出来る。それにコレは俺の王道にも沿うしな。

まっ、頑張っていこー！

花結いのきらめき【36】

歩き続けて数十分程。やはりと言うか、何と言うか……

目の前に広がる星屑の群れ。先程蹴散らした二倍以上の数がうじゃうじゃと動き回っている。集合体恐怖症の人が見れば卒倒待たなしの光景だ。

「案の定だな」

「G?」

「っ……」

思ったことを口にしたのだろう。けれど、その呼称は聞くだけでもぞわつとするもの。東郷と須美のように真っ青となるだろう。

「ぎ、銀っ!!」

「ごめんごめん。つい」

ぽかぽかと殴られている幼い自分を見ながら思う。言っただ方が良かったか?と。そうすれば小さい須美から「いや、言ったらズガンだわ。」

「シャルルマーニュ、もう一度頼めるか?」

「おう、任せてくれ」

楽に一掃できるのならそれに越したことはない。

どの台詞にしようかな、と思いつながら少女達を巻き込まないように数歩前が出る。決めると同時にジュワユーズの柄を握り締め、輝きを放つ。

「じゃじゃ〜ん!」

「どうだい、見てくれよ俺の武器っ!」

前回と打って変わっての陽気さ。これには御影も目を見開き驚いている。というか初対面組全員驚いている。

「これこそ世界で最も陽気な聖剣、——即ちジュワユーズ!」

もんじゅわ〜、って感じだぜツ!!」

悔るなかれ。放たれるは至高の十三連撃、触れるもの全てを灼き尽

くす。絶対的で不変たる破壊力。だがしかし、その光景は幻想的で美しい。正に王たる技と言つて相違ない。

「殲滅完了、とまではいかなかつたな」

ほとんどの星屑は消え去つたが、殲滅まではいかなかつた。その理由が蟹座による盾。何枚か砕いた手応えがあつたが、本体を倒した感覚はない。

「こつからは残党狩りだな」

「そうするとするか」

「結局かあ」

目標は蟹座の打倒&残つた星屑の殲滅。

楽出来ると思つていた雪花だが、結局いつも同じになつてしまつたことにため息をつきながら槍を投げる。

何度でも武器を出せる勇者システムの特性を利用した単純明快かつ強力な戦法だ。

「シャル、蟹行くぞつー！」

「わかつたー！」

シャル&御影で蟹座、残るは星屑といったふうに分け、走り出す。最早あの二人に追いつける者はいない。

蟹座は未だ盾の後ろに隠れているが、この二人にとってそんなことは関係ない。道を塞ぐのなら切り拓くまで。

「トルナードツ!!」

「一つ、二つ、そして三つー！」

一枚は氷として砕き、もう一枚は三刀によつて碎かれる。これにより、道は拓かれた。そして現れたる根本を――

「なにっ!?!」

大きく開かれた口らしき空洞。そこから這い出たるは白い怪物、即ち星屑。何匹も何匹も岩の下にいる虫のように際限なく出てくる。

「コイツが源流か?!」

御影の推測通りコイツが星屑を生み出している大元。いや、正しくは造阪神が星屑を生産するために作り出した怪物。

本来であれば浮遊している胴体が地に接している。考察するにあ

のぶくぶくと太っている腹の中に星屑を作り出す機関或いは転送機でもあるのだろうか。

「輝けよっー!」

大元であれば、直ちに潰すに限ると考えるや否や十二勇士と共に突貫。最早防ぐ術も避けることも出来ない怪物はシャルルの攻撃を受け、弾け飛んだ。

「ッ——、爆撃開始!!」

溢れ出てきた星屑を一掃するため、すぐさま上空で待機していた十二勇士を落とす。それに伴い纏わせていた五大元素が破裂。爆風により、溢れ出てきた星屑は消滅。一匹も逃れることは出来なかった。

「ふい、焦ったあ。」

「一段落しているとこ悪いが、まだだぞ。見ろ、あの変な星屑」

「んく?なんか、禍々しくね?」

「だろ?やっぱ、おかしいだろ」

御影が指差す方向にいる禍々しい星屑。明らかに他の星屑とは違う。造阪神がアレンジしたものでしょうか。

「おっ、あつちにもいるな」

「一匹じゃねえのか」

どうやら一匹ではないようだ。いつもの星屑に紛れ、勇者達へ襲いかかっている。習性は変わらないらしい。

二人揃って観察していると若葉が禍々しい星屑を一刀両断してみせた。特に他とは違う点は見受けられないが、ただ禍々しい、と結論づけようとした時だった。

「——ふっ、増えた!!?」

すぐさま声がした方向に首を曲げる。

声がした場所では、髪が赤いため高嶋の方の友奈が驚きながら後ろへ大きく飛んでいた。予想外の出来事があったため反射的に後ろへと飛んだのだろうか。

「ふんっ!!」

いつの間にか高嶋の前に立っていた御影が力任せに抜き身刀を一人振る。たったそれだけで前方5mにいた星屑が消滅した。

「大丈夫か、高嶋？」

「士郎くんのおかげで大丈夫だよ。それよりも今の」

「どう増えた？禍々しかったか？」

「禍々しい・うん、なんか変なオーラ纏ってたよ。そして、攻撃したら口からバーテックスを出したんだ」

「やっぱか」

「禍々しい星屑は増えるとメモしながらシャルルは思考する。何故、若葉の時は増えなかったのに高嶋の時は増えたのか。」

「禍々しいでも違う禍々しいのがあるのか。それとも何らかの条件を満たさないと増えないのか。一先ず考えるのを止め、行動に移る。」

「オーラ出てるのは無視!!俺が対処する!!」

「全体に行き届くように最大音量で号令する。シャルルマーニュが有するカリスマと相まって良く行き渡り、従わざるを得ない。」

「検証するか」

「一先ず最も近くにいた禍々しいジュワユーズで斬る。若葉の時同様増えることなく消滅した。」

「若葉と高嶋での違う点・まさか？」

「若葉と俺の際の同じ点は星屑を斬ったこと。そして高嶋はジュワユーズを鞘へ収め、拳で禍々しい星屑を応戦する。もちろん、ただ殴るだけでは消滅までに至らない。」

「あらよつとー!」

「アップパーカットを星屑の腹へと叩き込み、上空へと飛ばす。すると、思った通り星屑を吐き出した。」

「打撃もしくは一発で仕留めきれなかったら、だろうな」

「そう結論づけ、増えた星屑ごと鞘から解き放たれたジュワユーズで両断する。」

「打撃形の武器を扱う奴は友奈s、タマ、歌野、棗だな。そこまで脅威とはなりえないと思うが、念には念を入れておこう。」

「禍々しい奴は一発でやれば増えないっ!!」

「すぐさま情報伝達。これで間違えていれば大事になる可能性があるが、速やかな情報共有は大事だ。誤った知識を与えない然り。不安」

を与えない然り。

その後、特に語ることもなく制圧した。

樹海化が解かれ、いつも通り教室へと戻ってきた。

初の奪還としては成果は上々。誰一人脱落せずに終わったのは良いことだ。まあ、一人サボっていた者がいるのだが。

「サボってた訳じゃねえよ!？」

「本当かしら」

ジト―つとした目が村正を射抜く。これに関してはしようがない。元々敵であったため印象最悪、信頼度が0なのだ。

「迷子になってたんですか？」

「迷子でもねえ。単に合流する前に終わってたっただけだ」

「そんなに遠い所から始まったんスか？」

「ンまあ・そうだな」

実際、彼が働いているカフェから讚州中学までの距離は徒歩で30分程ある。だが、それは英霊にとつて屁でもない距離だ。それが最弱を自称する英霊であっても。よって、別の何らかの要因があるのは明白だが彼はそれを話すつもりはないらしい。

「今の間は・」

「何かはぐらかさそうとしてる時の間ね」

もちろん、長い付き合いである水都と歌野を騙せる訳がなく。

「あー、悪かった。次はちゃんとやっから許してくれ」

事態がややこしくなる前に素直に謝罪。反省の色が全く見えない謝罪ではあったが、今の段階では特におかしな行動をしていないため許すことになった。

「それでは話しますね」

「頼んだ」

ひなたの一言により、大騒ぎ（シャルルを中心に）していた部室が静まり返る。やはり、そういった所が出来ているのは良いことだ。

「今回の戦闘によって土地を一つ取り戻せました。大戦果です♪」

「いよっしやあ!!」

「そこ、静かに」

「あ、すみません」

全員でやる代わりとばかりに一人でガッツポーズを取ったシャルルであったが、風の一撃により撃沈。周りも心臓に悪そうな顔をしているので今後は控えようと思つたシャルルでした。

「土地一つ、って香川を確保したでいいんだよな？」

「そうですね。この調子なら後三回か四回で全て取り戻せると思いません」

「今回みたいなのを三回するだけで終わるの？楽すぎない？」

今回みたいなの。つまり、シャルルがどかん。御影が

ジャキン。たったそれだけで終わった戦いなら何度やっても苦勞はない。ただ安全に戦つていれば終わる。

そんな甘い考えは後に碎け散るのだが、それはまた後のお話。

「おいおい、赤嶺のこと忘れたのか？まだ造阪神側には戦力残つてんぞ」

「赤嶺か。彼女も勇者と考えていいのか？」

「ああ。正真正銘勇者だ、アレは。と言つても、お前らみたく怪物戦特化ではなく、対人戦特化だな」

「対人戦？」

「まあ、俺みたいに楽に。いや、そもそも真正面から戦うかどうか。彼女との数少ない会話を思い出しながら考える。」

果たして英霊であった御影の仕留め方について賛同した奴が正々堂々戦うか否か。否寄りではあるが、あれは全く歯が立たない敵に対して有効であったがためにも思える。

「まっ、いいや。御影とシャルルいんなら大抵は突破出来るだろ」

「村正、もしてかしてだけど平和ボケしてる？」

脳を止めている所を見たことがない雪花にとつては信じ難い姿だ。だが、彼も英霊であり人理の防人であっても一人の人間である。そういう一面もあるだろう。

「するだろ。こんな状況じゃな」

「それはそう。ちよつとでもこんな楽し放題の場所にいたら離れたく

「ないよね」

「嫌でも帰ることになるがな」

「そつ。やっぱりそう答えるんだ」

「呆れとはこのこと。やはり平和ボケしようがなにしようが彼は??だ。例え終わりが決定しようが止まることはない。何なら決定しているからこそ走れるのかもしれない。ただ我武者羅に。」

「今ん所急かされる理由ないし、まったり行きましょ」

「ざんせーい」

「そうですね。ゆっくり過ぎましょ」

「この非日常であるが限りなく日常に近い世界から離れたくないと思うのは道理だ。それが、本来であれば数時間後に仲間が供物と捧げられると知っている和尚膨らむ。」

「」

「そんな少女らの選択に供物は口を閉ざした。」

花結いのきらめき【37】

奪還成功から時は流れ土曜日。それも来週終業式を迎える土曜日である。この頃になると既に夏休みの宿題は出し切られており、遊ぶもよし宿題終わらせるもよしとなつてゐる。

てことで寄宿舎。普段食事をしてゐる共有スペースに長机を三つ連結させ、親戚の集まりみたく勇者部一同で囲う。各々集中して宿題を解いてゐるようだ。

「辛抱タマらんっ！タマはこんな部屋出てくゾ！」

「最初に死ぬ人のセリフだ」

毎度恒例の死亡フラグをかまし、ずんどこ歩くタマ。だが、全員が集うこの場から逃れる訳がなくひなたによつて阻まれる。

「待つてください、珠子さん。夏休みを満喫するには必要なことなんです？」

「正論パンチャメモロお!!」

「せいろんパンチ。とにかく、もう少し頑張りましょう。士郎さんも唸りながらやつてますから」

叫び虚しく脱走は失敗し、杏の横へと戻つてゐた。ちなみに引き合ひに出された士郎は、ひなたが言った通り唸りながら宿題をやつてゐた。

「ぐぬ、ぐぬぬぬっ。シャル、助けてくれ！」

「ふむ」

既に終わつてゐるシャル含む中園子、そしてそもそも夏休みの宿題がない村正は指導役として回つてゐる。と言つても村正は

「村正、いいか？」

「どれだ？」

「これなんだが」

「これはー。ちよつと待つてくれ。今思い出す」

ほとんど消え去つてゐる記憶を掘り起こしながらの指導のためあ

まり効率は良くない。ただし、教え方が教師並に上手いため重宝されている。

「歌野は寝んな」

「ふがつ」

「うたのん、よだれ出てるよ」

眠っていた歌野を定規でベシツ。やはり、朝早くから農作業してからの勉強は眠くなるようだ。

・何処かの世界線で農作業してから学校に行っていたが、この様子では授業中寝ていそう。

「こんな落とし穴がだったなんて思いもしなかったよ」

「だが、これも学生の本分だろう」

「棗さん、そこ、範囲外だよ」

「なに、すまない、助かった」

雰囲気は完璧だと言うのに少し天然が混じっている。そこも彼女の魅力だと思う。いやまあ、範囲外まで突き出るのはあるあるだしな。

「応用嫌いであく。須美しい、答え教えてく」

「解らないわ。そのうち、ここ解ける？」

「ん？ここはねく、インド人が凄いなよ」

「え？インド、え？」

「どゆこと？」

「違うぜえ、そのうちい。そこはフランス人が凄いなよ」

「——はっ！たしかに！」

「だから、どうゆうことだよ」

やはり、天才同士の会話にはついていけない。遠目から眺めていたシャルルと村正も頭を傾けることしか出来ないとは恐ろしい子。

「解ける、解けるぞ。これも、これも進研ゼミでやったヤツだ」

「どうしたんですか？」

「いや、やりたかっただけだ」

「そんな抑揚のないソレ、聞いたことないゾ。タマがお手本を見せてやろう」

「なに馬鹿なことを。」

「——解けない！進研ゼミでやったのに解けない！お終いだあ!!」

「あれ？なにか。」

「ほへえ、元はそうなのか。でも、それテスト中にするのか？」

「そうだゾ」

「コラ、タマっち先輩。土郎さんにデマを教えちゃダメだよ」

「デマじゃないし。だいたいこんなもんだぞ」

確かに、進研ゼミで解いた問題だとしても本番で解けるかは別問題だ。にしても、今の声量でテスト中に叫べば即効退場だろう。

「う、ううく。」

「どうした、友奈？」

「ぼた餅よ、友奈ちゃん」

「瞬間移動？」

「シャルはわかる。けど東郷。いつ瞬間移動なんて覚えたの？」

「愛よ。愛の力は時空を超えるの」

「愛すげえな」

「す、凄い。」

愛とは「体何なのか。真相を探るため我らは剣山の奥地へと向かった。まあ、あるのは大赦本部だけだけだな。」

「だから寝んたって」

「んがっ」

「まだ始めて2時間も経ってないよ、うたのん」

二度目の定規ベシツ。この一時間で進んだ量は数学のワーク一つ。そこから一向に進んでいない。最初ハイペースでやると後々電池切れになることはわかっているだろうに。

「えっ。まだ一時間しか経ってないの？これは長丁場になる予感がするな。」

「集中すればあつという間だ」

「そりやそうだけでも。やっぱ、気が進まないよね。てことで村正さん。なんかちようだい」

「なんかってなんだよ」

「そりやあほら、美味しいものとかハグとか」

「ハグで喜ぶならくれてやる。だから、さつさと終わらせろ」
「やり〜!」

彼としてもこんな茶番に巻き込まれるのは本意ではない。出来れば、歌野の農作業をつきつきりで手伝い所ではある所を少々教えているのだ。御影が頼まなければ蹴っている。

「ほら、うたのん。雪花さんに村正さん取られちゃうよ」

未だうとうとしている歌野に水都が呟く。

「なんどすつ!?!」

「なんどすは俺の台詞だ。起きたんなら、さつさ終わらせてくれ」

「あ、うん」

情緒不安定かと思わせる程の落ち着き振りで静かに座り、シャーペンを手に取る。問題文を静かに読みながら、シャーペンを回す。手癖だろう。

「んじゃ、俺は冷蔵庫漁ってくる」

そう言つて村正はこの場を後にした。例え、彼であつても人の家の冷蔵庫を漁るなどという失礼極まりない行為をするわけが

「なんもねえ」

普通にしやがった。しかも難癖をつけるとは。これにはシャルルも天を仰ぐしかない。本当に同一人物か？

「ちよい買い出し行ってくる」

「足りませんでしたか？」

「そりやあな。シャルルや俺はともかく、お前らはしつかり食わないといけんだろ」

シャルルと村正は何も食わず飲まずであつても生きていけるが、それは英霊に限った話。本来であれば何をするにしてもエネルギーがある。つまり、飯は重要。全てにおいて最優先事項だ。

ということ村正離脱。停滞打破の効力が消えたため、ここからは何事もなく勉強できる。

「買ってきたぞ〜」

一時間後、丁度11時になったと共に村正帰還。両手には詰めに詰められた食材が入ったエコバック。量だけ見ても軽く一万はしそうな量だ。

「代金は後で——」

「いい、いい。どうせ使い道なんてないしな」

「ブラック企業勤め？」

「勤めてんなら、俺はここにいなえよ」

ひなたの提案は軽く蹴り、風先輩の問いかけを否定する。

使い道がない、というのはただ自身の趣味があまりお金がかからないというだけであり、決して使う時間がない程のブラック企業に勤めているのではない。

「台所借りる」

「どうぞ」

「シャルルも借りてく」

「なんだとっ!?!」

「すまないが御影につきつきりで動けん」

「水都、手伝ってくれ」

「うん、いいよ」

苦渋の決断ではあるが、水都を選択。真面目な水都であれば、ここで終わらずとも夏休み中には必ず終わるだろう。

二つのエコバックを提げ、水都と共に台所へ移動。食材を冷蔵庫に押し込み、献立を考える。

(生姜焼き、いや、昼には重いか。なら、コロッケでいこう。後は適当に味噌汁とかで)

献立を決め、必要な食材を取り出す。そして、じゃがいもを茹でるべく鍋に水を入れ火にかける。ついでに味噌汁用に先程使った鍋の一回り大きい鍋をセット。

「水都、味噌汁用の大根切ってくれ」

「わかった」

大根丸々一本を水都へと渡す。人数を考えると一本使っても問題

ないだろう。なんなら、足りないということもあり得る。

そんなことを思いつつ、じゃがいもの皮を剥き、丁度湧いたお湯へ投入。体内時計をセツトし、玉ねぎをみじん切りにしていく。

「うっ、うっ。」

「すまんが我慢してくれ」

耐性があまりない水都へ被害が出てしまっているが、我慢してもらえない。非常に心苦しく、本当に心苦しいが、頑張ってくれ。

「いりこあんのか」

味噌汁用の大きい鍋も沸騰したため、据え置きであったいりこを量に合わせて大量に投入。これはしっかりと二分程タイマーをセツトしておく。

「切れたよ。次はなにしたらいい？」

「目の保養になつてくれ」

「目の保養、えっ？」

「すまん、間違えた。コロツケに使う衣作つてくれ」

「う、うん？」

失敬失敬。つい体内時計に集中しすぎて変なことを口走つてしまった。てことでじゃがいもが茹で終わったため、水を切り、鍋に入れたままちよつと形が残る程度に潰す。

空いたカセットコンロにフライパンを乗せ、油と切ったバターを投入。火にかける。ちよつと溶けてきたらみじん切りした玉ねぎを投入。炒める。

よしっ、いい匂い。てことで合挽き肉を投入。潰したじゃがいもも投入。そこに調味料である砂糖、塩、こしょうを加える。

混ぜり始めたら、フライパンの上で平たく延ばしていく。延ばせたら、均等に別けていく。これでコロツケのタネは完成。

「はい、衣出来てるよ」

まずは溶いた卵に入れ、次にパン粉でコーティングする。これによつて油で揚げる準備は終了。

「それじゃ、今のを後五回だな」

「五回、そうだね、人数が多いもんね」

五回も連続して同じことをする。それは停滞を意味するが、今回は間に味噌汁作りがチマチマ入る。つまり、停滞はない。勝ったな。

時刻は針が12時を少し過ぎてしまった12時25分頃。ようやくお昼ご飯が食卓へと並んだ。もちろん同じ人が行き来するという停滞を防ぐため、各自取らせにきた。抜かりはない。

「「いただきまーす！」」

朝からかれこれ三時間も勉強続きの者からしたら、待ちに待ったお昼。脳が糖分を欲していたことだろう。やはり、エネルギー補給は何よりも優先すべきだ。

「うまいな。ひなたとは違った優しさを感じる」

「美味しいですね」

「うまいっ、うまいっ！」

「タマっち先輩、少し落ち着いて。ほら、ほっぺについちやってるよ」

「やっぱり、人数が多くなればなるほどご飯がおいしいね♪」

「そうね」

「赤味噌もいいな」

「今度からは赤味噌にします」

「いや、ひなたのも好きだぜ？」

赤味噌で作られた味噌汁を啜りながら、全体を見回す。皆、笑顔で楽しそうに食事している光景は何事にも勝る何かがある。

「いやあ、このコロッケ凄いな！」

「そうね。まるで専門店かと思わせる程の完成度。村正さんは板前だった？」

「シンプルイズベスト！コロッケ教に入信するんよっ！」

「そのつち落ち着いて。そもそもコロッケ教なんてないのよ？」

「作る！」

「もう。銀からも言っちゃようだい」

「園子、お前。天才か!？」

「銀っ!？」

いつも通り仲良し神樹館組であった。

味付けはシンプルであるというのに、この美味しさ。彼の適量が最適解なのか。それとも何か危ないクスリでも入っているのか。

「これは、中々に女子力高めね。」

「なんだか負けた気がします。」

「男子ってみんなこんななの?」

「そうなの!」

「大丈夫よ、友奈ちゃん。シャルル君みたいな人は稀だから」

「俺を珍しい生き物欄に入れないでくれ」

■世の男子全員これ程の女子力。いや、多様性だしな。一応ありえるにはありえるが、このレベルとなると相当探さないといいだろう。

「シャルのと味違うんだな」

「ん、そうだねえ。何だか少し違うね」

■同一人物であるにも関わらず味が違う。と言っても、毎回適量でささっと味付けを行う彼らからしたら、毎度毎度違う可能性も捨てきれない。真相は闇の中。

「まあ・上出来か」

「これで上出来って、満足一生出来ないでしょ」

「私としては素晴らしい一品だと思うが、違うのか?」

「少し雑味が残ってる。玉ねぎのみじん切りのスピードが遅かったか」

「タイムアタックでもしてる?」

「してないが?」

一度だけ見たことがあるゲームのTA実況動画を思い出してしまいう程のシビアさ。どうして、そこまでスティックに作っているのか雪花にとつては疑問で仕方がない。

「やっぱ、村正の料理は最高」

「そうだね。何と言うか、安心する」

「ね」

その後、じゃんじゃんおかわりされたため味噌汁と米は空になった。村正はそれを見て、料理人冥利に尽きると言いたげな顔でドヤ顔

していた。

結局、今日の勉強会で今出来る宿題全てが終わったのは数名のみであつた。

花結いのきらめき【38】

勉強会を終えた翌日の日曜日。勇者部としての活動をするため、村正以外は部室に集合していた。

ところが、最初に話されたのは次の攻め込む場所。どうやら、丸亀城付近を奪還する予定のようだ。

「斥候、か」

「はい。事前に敵の量、種類を知ることが出来れば策戦の幅が増えると思います」

杏立案の斥候。敵の視察。成功すれば多^ク大なるアドバンテージを得ることが出来るが、失敗すれば死は免れ^レいや、免れるわ。

「ですが、それはあまりにも危険すぎます」

「もし少数で行って失敗したら、一巻の終わりね」

「そうです。ですから、杏さんには悪いですが斥候という案はなしとということ」

これがもし軍隊であれば、どれだけの犠牲を出すことになるろうが斥候を出したであろう。だが、ここは違う。ただの勇者部という集まりだ。誰も失いたくない、という意見が総意である。

「斥候なら村正得意だけど」

「得意不得意という話ではない。安全を最優先とする」

「焦りは禁物、だものね」

「まったりゆったり行こう」

「それもそうね」

全員納得という良い形で会議は終了。各々それぞれがしたい、すべきことに移る。

「士郎、肩慣らしの模擬戦に付き合ってくれないか？」

「おっ、いいな。場所は・海岸だな、やっぱ」

「私もいい？」

「見学してもいいか？」

「構わないぞ。士郎はどうだ？」

「いいぞ。減るもんじゃねえし」

若葉、士郎、花凜、棗は特訓をすべくいつもの海岸へ。木刀は一度取りに帰るのだろう。流石に常に待ち合わせている訳ではない筈だ。

「では、俺達も出ようか」

「おっしや」

「そうね」

「そうしましょうか」

「僭越ながらお力添えます！」

「お姉ちゃん達はどこに行くの？」

「お料理教室よ」

「じゃあ私は味見しに行こっかな」

シャルル、風先輩、ひなた、銀s。そして味見の中園子でお料理教室へ。前五人は納得だが、味見？いやまあ、重要だしな。

「お花のお世話しに行つてくるねっ」

「ご一緒するわね」

「私もいいかな？」

「うんっ！大歓迎だよ♪」

「ありがと〜！」

「それじゃあ私も」

結城、東郷、高嶋、千景の四人で花壇へ出発。ちなみにお花のお世話はボランティア活動であり、勇者部の活動ではない。だが、しないという理由もなないためしている。

「畑が私を待ってる！」

何故ここまで持ちこたえられたのか不思議なまでの速度で部室から出ていった。農業王を目標している勇者は伊達ではない。

「みなさんはどうします？」

歌野を追いかけるのを一旦我慢し、残っているメンバーへと問いかける。

「タマは杏が読み終わるまで動かないぞ」

「防がれたか」

矛先を降ろし、冷静に呟く。その発言を不思議に思ったのか村正が詰め寄る。

「耐えた、じゃないのか？」

「わからない。だが、事実禍々しい星屑には一切ダメージが入っていない」

「今のでノーダメージ？冗談キツイわよ」

花凜の言う通りだ。バーテックスにも損傷を与える程の技だと言うのに、あの星屑は無傷。それだけでアレがどれだけの脅威なのか。考えただけでもゾツとする。

「来るぞッ！」

号令と共に武器を構える。禍々しい星屑、そしてその後ろにいた星屑は未だ無傷のため減ったとは言え数はある。そして予想できない変数。警戒マシマシである。

「一先ず様子見だな」

ジュウユーズを十二勇士ブラダマンテが扱う目映きは閃光の魔盾へと変更する。そしてシャルル目掛けて大口を開く禍々しい星屑の一撃を受け止める。

「シャル!？」

勢いを殺し切れず、体ごと後方へと押し出される。もちろん、すぐさま東郷のアシストで星屑は撃ち抜かれるが——それでも無傷。「フッ！」

であればと右脚で何の変哲もない腹を蹴るが、びくともしない。正に不動である。それどころかシャルルの脚の装甲が砕け散った。

一先ず、飛翔して離脱。禍々しい星屑から距離を取る。

「硬い。ただただ硬いな」

禍々しい星屑の特性は単純かつ強力。ただ硬い。シャルルの攻撃を防御なく受けたとしても耐えられる程に。

「勇者パンチっ！」

シャルルに蹴り飛ばされた星屑の先にいた結城がジャストタイミングで一撃を入れるが

「いッ?!」

「——友奈!!」

これまた星屑にダメージはない。逆に結城の拳にダメージが入るといふ。思わずシャルルが結城の元へと瞬時に移動し、距離を取る。

「俵が如く肩に担いだ結城を降ろし、拳の具合を念入りに確認する。」

「腫れてはいるが骨に異常はないな」

「ええっと、シャルくん。」

ぺたぺた異性の手を触るのに一切の躊躇がない所が彼らしいと思いつつも、流石に恥ずかしい少女。痛みより羞恥が先に来るとは。

「さて、結城ですらダメージを与えないとなると、これでいこう」

目映くは閃光の魔盾をデュランダルへと変更。この大岩すらも意図せず斬れる剣であれば幾ばくかの勝算はあると考え、構える。

「樹、拘束頼めるか?」

「わかりましたっ!」

片手間に星屑をスライスしている樹の左手を借り、禍々しい星屑を拘束してもらおう。樹としてはかなり強めに縛っているのにスライスされないことに驚きながら、他の星屑をスライスする。

「大天使の加護を与え給え」

名だたる英雄が集う十二勇士の中で最強と謳われるローランが愛用したこの剣であれば、或いは——

「これこそは音に聞こえし絶世の剣!」

シャルルマーニュが天使より授かり、甥であるローランへと賜った剣。三つの奇跡を持ち、何物も並び立てない斬れ味を誇る。そんな剣であれば、例え打ち破れない敵だとしても斬り伏せることができよう。

「壊れることなき不毀の極聖ツ!!」

拘束具であった糸を断ち切り、威力をそのままに撃ち込む。面での破壊力ならジュウォーズだが、個での破壊力ならば間違いないデュランダル。それ程までの威力。これで倒せないとするなら、誰であろうと倒すことは出来ない。

「なに?」

真つ二つ、——ではない。10cm程度星屑の体内を斬り裂きはしたが、そこから進む気配はない。つまり、それが限界ということだ。消滅はない。だが、ノーダメージでもない。確かに損傷を与えることには成功した。

——大きく口を開き、シャルル目掛けて走る。

「——っ、ゴリ押しに限るか」

デュランダルから手を離し、突進を避ける。手持ち無沙汰となつてしまった手を一度見て、すぐさま視線を星屑へと向ける。

やることは一つ。さらなる一撃を加える。死なないと言うのであれば、死ぬまで攻撃を加える。脳まで筋肉とはこのこと。

「はあ、——フツ!!」

急加速、目指すはデュランダルが刺さつたままの星屑。狙うはデュランダルの柄。そこを強く押し、更に奥へと差し込む。それしかない。

速度によって加わる力。自重により加わる力。その全てを殺さないように拳へと載せ、——振るう。

「ぐう。」

——砕けた。

思惑通りデュランダルは深く刺さり、禍々しい星屑は消滅した。が、それと同時に柄を殴つた右手は粉碎骨折。指の骨が腕方面へひしゃげ、骨が突き出てしまった。

人生二度目となる耐え難い激痛。骨が折れ、皮膚を突き破る。想像し難いと思つていた痛みが、まさか実体験出来るとは思つてもいなかった。

痛みに耐えるため無意識的に眉間に皺を作り、歯を食いしばる。誰にもこのシヨツキングな状態を見せないようにするためその場で蹲り、左手で隠す。

「シャルル君。」

スコープ越しに何故か蹲っているシャルルの背中を見つめる東郷。直立すら困難になる程の被害を受けたのかと不安になるが、目立った損傷はない。

シャルルへと近づくと星屑を撃ち抜きながら、ある電話番号を打つ。

『なにッ!?今忙しいんだけど!!』

電話相手はにぼっしーこと三好夏凜。最もシャルルの近くにいるという理由で選出された。

「シャルル君が蹲っているの。確認お願いできる?」

『りようか、いつ!』

星屑を退けながら返事をし、電話を切る。その場を友奈に任せ、オーラを纏っている星屑の対処をしていたシャルルの傍へと駆け寄る。

「なに蹲ってんのよ。どっか怪我したの?」

「夏凜。いや、大丈夫だ」

慣れつつある痛みを我慢し、右手を隠しながら立ち上がる。デュランダルをジユワユーズへと戻し、左手が持つ。右手では最早握ることすらできない。

「アンタの大丈夫は大丈夫じゃないでしょ。ほら、さっさと隠してる右手出しなさい」

「わかった」

何を言ったとしても変わらないため、ここは素直に見せることにした。てことで砕けた右手を前に出す。

「っ——、治るの、それ」

「樹海化が終わると同時に治る」

何故、樹海化中に治らないのかという疑問はあるがしようがない。治してくれるだけありがたいと思うことにする。

「問題ない、のよね?」

「ああ。だからこそあとの二匹は——」

「私たちがやる。アンタは下がんなさい」

——俺が仕留める。そう口にする前に夏凜が宣言する。だが、あの禍々しい星屑に有効打を与える程の火力はシャルル以外に誰も持ち合わせていない。御影の全力の一撃で凹む程度しかダメージがない相手をどう倒すのか。

「だが、あの星屑は硬いぞ」

「なせば大抵なんとかなんのよ。アンタからしてみれば頼りないだろうけど任せなさい」

頼りなくなってる。いつだって彼女らを信頼している。だが、それとこれとは話が違う。倒せないものは倒せない。彼女達は負ける。——それを信頼していない、と言う。

以前須佐之男が放った言葉が脳裏を過る。

友である者達を信用していない？違う、断じて違う。俺は信じている。彼女らの一切合切全てを信じている。だが、そんな想いを彼女達は知らない。

なら、行動に移すのみである。

「夏凜。俺は、皆を信頼している」

「急になに？さっさとアンタは——」

大きく酸素を吸い込む。

「だからこそ言おう！不遜にも大帝の名を語り、我が物として聖剣を振るった愚か者!!我が真名——」

シャルルマーニユの霊基が剥がれ落ちていく。そうして現れる黒一色の髪、鎧でも袴でもないただの服。そして金色の瞳。

「——?? ??っ!!」

英雄でも勇者でもない。ただの人間だッ！」

花結いのきらめき【39】

真名を明かした直後。誰もが驚愕している中、村正は掌の上にある物体を見つめる。

シャルルより剥がれた称号「幻想の騎士」。これを再度シャルルへと載せれば元通りとなる。だが、それを彼が拒むというのならそれでいい。その時は、シャルルマーニュに悪いが破棄しよう。だが、その前に――

「やっば、弾かれるか」

自身に着名を施そうと試みるが、結果は失敗。称号そのものから拒絶されたような気がした。一先ず、称号はしまいこの先の結末を見届けることにする。

突如として声高く放たれた暴露。シャルルの言葉により、シャルルマーニュではない誰かというのは察していた。だが、まさかシャルルの正体が村正だったとは誰も予想していなかった。

「よし、誰か武器貸してくれ」

「神性あるのいいだろ。勇者から借りろ」

「お前の刀は神性籠ってないのか？」

「籠ってはいいるが、微量だ」

素材として使っている玉鋼に神性が籠もっているにはいるが、出来る上がるものは聖剣などの類ではない。ただの業物なのだ。故に神性は勇者が扱う武器に劣る。

「夏凜、貸してくれないか？」

「はあー。ほら、上手く使いなさいよ」

未だ戦闘中なため聞きたい事を飲み込み、手ぶらなシャルルへと夏凜が扱う二振りの剣を投げる。樹海の根へと刺さったそれをシャルルが抜き、双剣として構える。

「武器受け取ったのなら、さっさと霊基変えろ。戦闘用のがあんだろ」
「おっと、そうだったな」

何故かジャージ姿のシャルルへを村正が急かす。いつものように戦闘用の霊基へと換装しようとするが

「あれ？」

「おいおい。何やって——」

一切変わる様子はない。彼が英霊として立っているのなら、村正が纏っているような霊基になるのだが、変わらずジャージ姿である。

その光景を見た村正がシャルルの隣に立つ。若干ではあるが村正の方がシャルルより身長が低い。

「どうした、村正？」

「いや、なんでもない。そのまんまで戦え」

「そうだな。そうするしかないさそうだ」

ジャージ姿のまままで戦闘開始。何の加護もなく、星屑へ迫る。速度が誰よりも遅く、一般的な成人男性より少し速い程度。村正にすら負ける速度である。

当然そうなってしまうえば、攻撃を仕掛ける前に星屑が気づくに決まっている。

彼に気づいた星屑が彼へと突進をかます。

「ぐう——、ッ！」

二振りの剣を重ねて防御するが、勢いは止まらない。両腕から軋む音が鳴り始めるが、それどころではない。痛みに負けて剣を手放せば次の瞬間にバツクンだ。意地でも離せない。

「ハッ!!」

「ッ——、うおっと」

見かねた棗が星屑を一撃で仕留める。唐突に重みが消えて体勢が前に倒れかけるが、何とか踏み止まり棗へと視線を向ける。

「大丈夫か？」

「ああ、助かった」

「その体なら剣より槍の方が良いんじゃないかな。ちよつと使つてみて」

「槍か。まあ、馴染むは馴染むが」

右腕、右手を絡ませるように構える。形に成つてはいるが、これは見様見真似の構えに他ならない。彼の技に合うものかは別だ。

ということ与实践。自身の身体能力で模倣できる部分のみで戦う。「ふんっ!!」

大きく口を開いて迫る星屑を横に薙ぎ払う。「豆腐を切るかの如く容易く斬れた。剣よりリーチがある分攻撃を喰らう可能性が少なく、先制攻撃がし易い。攻撃は最大の防御とはこのこと。」

迫りくる星屑を巧みな槍捌きで次々打倒していく。およそ二十捌き切るとそれは表れた。

「はあっ、はあっ!」

呼吸の乱れ。流れ出る汗。上気した吐息。即ち体力切れ。過度な酷使によつて肉体が悲鳴を上げている。これ以上いくと槍を持てなくなる程までに疲労してしまう。だが、それ以前に――

「あ、やべっ!」

一撃で仕留めきれない。そうなるかどうか。それはもちろん「がッ。」

「シヤル（くん）っ!!」

星屑による突進。精霊の守りなどという加護はないため、モロに受けてしまった。

足が地面から離れ、宙に浮く。そのまま弾くことも出来ず、樹海の根へと叩きつけられてしまう。先程まであった痛みに劣るもの、それでも痛い。腰がズキズキする。

「ぐう、うっ!」

星屑が離れた感触がした。そう感じ、すぐさま立とうとするも腰の激痛で上手く体を起こせない。もたもた出来ない。星屑は今にでも俺に歯を立てる。証拠に、もう大きく口を開けて俺へと迫っている。

星屑の速度はそこまで早くない。友奈も風先輩も間に合う。何な

ら東郷の援護射撃も充分間に合う。よって、ここで彼が死ぬことは万に一つもない。だが、誰よりも速くシャルの窮地に駆けつけた物がいた。

大きく口を開けた星屑を一閃。

微かに残る赤い線。たったそれだけで、どれだけの速さで駆けつけたのかわかる。？

「——ローラン。」

これまで幾度も、の戦場を共に戦ったシャルルマーニュ十二勇士。だが、それは俺がシャルルマーニュの靈基だったからだ。今になっても俺を助ける理由はない筈。けれど、彼は助けてくれた。なら、期待に答えるよう立たなければならぬ。

ジユワユーズを立つ補助として根に突き刺し、腰の激痛に顔を顰めながら地面を足で踏み締める。

彼らは覚えている。出逢ったあの日にした誓いを。故に彼の到来を心待ちにしている。そして、彼の返しに心を踊らせている。

「まだまだカッコつけるかあ!!」

こんな痛みなど屁でもないと屈託ない笑みを浮かべ、宣言する彼に応じるべく十二勇士はいつものように彼を中心に円陣を組む。

——走り出す。最早、彼は疲労などでは止まらない。痛みなど感じない。ただ、目の前に広がる害あるもの全てを滅すため走る。

斬って、斬って、斬りまくって。守るがために悉くを斬り捨てる。王勇に従う理由はない。しかし、それでも彼は守るためだけに剣を振るう。

「つば、硬いな！」

やはり、禍々しい星屑は比類なき硬さだ。絶好調の彼であつたとしても傷をつけることすらできない。十二勇士も同様に損傷を与えない。

反撃を喰らわないように即座に離脱。近くにいた正暦組と合流し、後方へと下がる。

「手詰まりだ。策あるか？」

「なんもないな！」

「元気で言うことではないだろ。このままでは一生戦い続けることになるぞ」

「うくん、そう言われてもな」

ここで速度が落ち始めたため御影がシャルルを俵のように抱える。やはり、身体能力的には村正より低いようだ。

「杏う、なんかないか？」

「内部から攻撃するのはどうでしょう？」

「内部か。難しいな。口を開けた瞬間ってのも狙うのは至難の技だし」

「誰かを囷にして狙うなら可能じゃない？」

「危険だから却下」

抱えられながら口元に手を当てながら、思索する。内部なら、というのは考えていたがどうにも狙う隙がない。実用不可能だ。

「内部を作り出す、ってのどうかな？」

「内部を作り出す」

「できるのか、そんなこと？」

途中で加わった園子による提案を受け、再度考える。

内部を作り出す、というのは表面を削る。もしくは内部で破裂させる。それだな。

「よし、それでいこう」

「マジすか」

「御影、このまま東郷のとこまで連れてってくれ」

「わかった」

いやあ、これ快適だな。最小限の揺れだから腰も痛みないし、速いしで最高。これからずっとこうやって移動しようかな。

そんなことを思っていると、いつの間にか東郷の所まで辿り着いたようだ。

「ほら、着いたぞ」

「おう、サンキュ。つとと」

降りりれはしたが、体を起こす際に少し痛みが走る。そのせいか体勢が崩れそうになるが駆け寄ってきた東郷によつて支えられたことで倒れずに済んだ。

「シャルル君、大丈夫？」

「おう、助かった」

「ジュワユーズを補助として何とか一人で立ちあれ？いつの間にジュワユーズを握ってたんだ？いや、いや、それよりも策戦について話そう。」

「東郷、スラッグ弾リーサル出せるか？」

「ええ、出せるわ。これのことよね？」

東郷の掌に何処からともなく湧くように表れた直径1.5m程の弾丸。弾丸の中では大きい部類だろうか。生憎弾丸には詳しくない。

「おつ、そうそう。それとショットガンも頼めるか？」

「大丈夫だけど、何に使うの？」

「もちろんお硬い奴に」

弾数は七発。装填可能だけ詰め込んである。想定としては一匹に一発としているが、多いに越したことはない。もしも、これで仕留めきれないとなったのならまた策戦を建てなければいけない。

「んじゃ、説明するぞ」

「始めッ——！」

一斉に走り出す。目標は禍々しい星屑。

策戦は至ってシンプル。怒涛の連撃を加えてヒビを入れる。そこにスラッグ弾を打ち込む。撃破。以上である。

ちなみに生身で攻撃&斬撃系の攻撃を扱う者は対象外となっている。つまり、棗と御影のみである。

「——っ、ハッ!!」

先発として棗が仕掛ける。ヌンチャクの棒部分で十数発同箇所
叩き込む。衝撃で遠くへ吹き飛ぶが、そこは御影。追いつき、仕掛
ける。

「貫つとけっ!!」

右手で握るは抜き身刀ではなく、鍛造に使うであろう金槌。それを
棗が攻撃したであろう箇所へ打ち込む。これもまた衝撃で吹き飛ん
でしまった。

それも込みで計算済みだ。

吹き飛んだ先にいるのはショットガンを構えたシャルルと十二勇
士。十二勇士で吹き飛んできた星屑をキャッチし、シャルルがヒビが
入った箇所を撃ち抜く。

「じゃ、お疲れさん」

引き金を弾いた。

致命的を意味する弾丸の威力は伊達ではなく、ヒビが入った箇所を
貫通し——破裂した。

スラッグ弾リーサルとは狩猟で使う弾丸だ。射程50mと心許な
いものではあるが、威力は絶大。ただ体を壊すがための弾丸かと疑う
程である。実際そうだろうか。

着弾時に内部で花が咲き誇るかのように弾頭が分散。飛び散り、内
部からズタズタにするという恐ろしい効果をしている。

内部で肉体が弾け飛んだせいか禍々しい星屑は消滅。やはり、内側
が弱点だったようだ。まあ、倒すには荒業になってしまったが。

「もう一匹行くぞー」

その後、同じようにして最後の禍々しい星屑を消滅させた。

カツコつけたがり屋の——【東郷✓】

——時折夢に見る。

薄れゆく背中。遠のいていく背中。掴みそこねた彼の手を。

常人であれば身に余る程の怒りを宿した。けれど、私はその怒りを
使うことができた。できてしまった。だから彼は死んだ。

私が殺したと同義だ。

私が招いた結果なのだ。誰が何と言うと覆らない。例え、彼が赦し
たとしても

。 。 。

——幻想の騎士に憧れた少年は思った。

“刺激が強すぎますツツツ!!”

いやさあ、最近東郷の距離が近くて。あいや、自慢とかそういうの
じゃなくてな。

何がとは言わないが柔らかいし。いい匂いするし。そしてぼた餅
美味しいし。一応俺は思春期真っ只中の中学生（自称）なんだが？↑
精神年齢もう時期30歳

危機感ないんですか？と問いかけた所ではあるが、ぐツと堪え
る。ついでに煩惱も砕いておく。

もし、もしもだが不祥事起こしたとする。シャルルマーニユの肉体
でだ。

うーん、ギルティ！俺を俺が殺しちゃうよ。いやマジで。なにシャ
ルルマーニユ汚してんだ、って殺しちゃう。

いやもう危機感持ったほうがいい。

俺が死ぬか、俺が死ぬかの二択だ。まだ生きていてえよおおお!!

おつかあー！！！！

とある日の昼下がり。俺と東郷は住宅街を練り歩いていた。まあ、ただ八百屋と精肉店に向かっているだけだが。

「逢引みたいね」

「だな」

「マジで危機感持ったほうがいい。」

顔に血が昇るのを感じ、空を見る体で顔を逸らす。シンプルに恥ずかしい。こうも情緒を動かされてはたまったもんじゃない。

せや、言い返したろ。

「俺は東郷といれて嬉しいぞ」

「ええ。私もよ」

またまた空を仰ぐ。

なんだその余裕。どうしてそんなに俺の情緒壊せるんですかあー!? とあるcmでの「どうしてそんなに大きくなっちゃったんですかー!?」が元ネタなのに、これ？俺は東郷に遊ばれてるの？

ちなみにシャルルは気づいていないが、東郷は純度100%本心かの言葉なので恥ずかしさなどない。これだから女性経験皆無な秀才は。

カップルかと思える程イチャイチャしている二人を一旦置いて、少し後ろの物陰に隠れているとある二人へ。

「びゅおおおお!!」

「そ、園子さん!? バレちゃいますよー!」

まあ、補足せずとも解るだろうが、現在進行系で尾行している園子と樹だ。本編で一度もなかったペアである。一番作者が驚いています

「じれったい。じれったいけど、そこがいいっ!!」

「本当にじれったいですよね。どうしてあそこまでいって付き合っていないんでしょう?」

何かに感激するように拳を握り締める園子に甚だ不思議な樹。あの距離感で付き合っていないなど、讃州中学の全男子が憤死待ったなしである。

「それはね、いつつん。シャルとわっしー、互いに互いの好感度がマックスだからだよ」

「?それだったらすぐ付き合うんじゃない?」

「ちつちつ。最初から好感度マックスだったら、相手からの想いの差異がわかりにくくなるんよ」

「なるほど。だから、奥手なシャル先輩と東郷先輩は想いを伝えられないんですね」

「そゆこと」

それ以外の理由もいくつかあるにはあるが、今樹が言ったものが最たる理由だろう。

というか、何故東郷からの好感度がマックスなのか。シャルルはわかる。他の勇者へも好感度マックスなのだから。もしかしてシャルルチヨロすぎ?

尾行二人から切り替わり、シャルルと東郷へ。

「どうしたの、シャルル君?前見て歩かないと危ないわよ?」

「いやあ、いい天気だなー。と思つてな」

流星に何度も空を仰いでいては不自然だ。だが、そこはシャルル。いい笑顔で何とか誤魔化す。

「そうね。こういう日は縁側でお茶を淹れようかしら。シャルル君も一緒にどう?」

「おっ、それいいな」

脳死の了承。一番疑うことを知らない男、シャルル。これには何度か疑いの覚えろよと言われた友奈ですらびっくりです。

その後、買い物を終えたシャルルは一度自宅へ戻り、食材を冷蔵庫へと仕舞った。ちなみに尾行していた二人はカラオケへと遊びに行ってしまった。

「東郷ー、遊びに来たぞー」

約束通りお茶しに来たシャルルは玄関元で東郷の名を呼ぶ。たまにこの声で友奈も来ることがあるが、今日は来ないようだ。

そんなことを考えていると、玄関先から歩いてくる音がする。

「はい、遠慮しないでどうぞ」

そんな社交辞令を聞き、東郷宅へと上がる。いつ見ても時代錯誤な和風そのものだ。趣があるとはこのことを言うのだろう。

東郷から案内され、縁側に座る。地味に地面より高くあるため、シャルルであつても丁度いい高さとなっている。ただ、地面に足がつかためスリッパかサンダル必要となる。

「はい、召し上がれ」

「おう、ありがとな」

東郷の手作りというありがたいぼた餅と緑茶。ぼた餅は言わずと知れた絶品であり、緑茶も所作丁寧に淹れられている。素材の良さを最大限を引き出しているだろう。

「やつぱ、東郷が淹れるお茶は美味しいな」

「ふふっ。燻ててもおかわりしか出ないわよ」

ということでもう一杯。いくらでも飲めるため問題はない。植えられている花を見ながら飲もう。

いやあ、にしてもこの静かで穏やかな時間いいな。何時間でもここにいれると思える。やつぱり、俺は――

「好きだなあ」

「ええ。私も好きよ」

「そっかあ――」。

大の字で寝転がる。瞼を降ろせばすぐにでも安眠へと誘われてしまう。それだけ安心できる場所を見つけたことに感謝しながら瞼を降ろした。

「寝ている？」

耳を研ぎ澄まさなければ聞こえない程に小さな寝息を立て寝始めたシャルルの鼻に自身の鼻がくつつく程急接近して、本当に寝ているかを確認する。

」。

返事はない。正真正銘眠ってしまったのだろう。

そう確認するや、確認時にも限界まで近かった顔をさらに近づけ口づけを――

「――、っ。おやすみなさい、シャルル君」

「――んっ。んー。？」

意識が覚醒し始めると同時に感じる右腕にかかる小さな重み。大の字に寝転がったため、腕は伸ばしきっている。人の家ですることではないとは思うが、眠たかったからしようがない。

「――先ず、瞼を上げなにか乗っているのか確認しよう。」

「――首だけ動かし、視線を右に移すと東郷がいた。いや、俺もなにがなんだか知らないが東郷がいた。いや、ほんとになにも知らないがうん、ちよつとドキツとした。」

「――見れば見るほど心配になる程の白さだ。だが、それも相まって美すぎる。ダヴィンチが描いたモナリザにも引けを取らない。」

「――いや待て。どちして東郷が俺の腕を枕にして寝てるんだ？俺、なんかしたっけな。」

「う、うーん」

「――何も見に覚えがない。ただ寝てたとしか」

「――経緯を考えていると、突如東郷が動いた。と言っても動いたのは右腕のみ。」

「――何か掴もうとしている。握手か？」

握手だと想定し、俺の右腕を出そうと考えたが生憎枕とされているので左手を差し出す。握手ではなく、ただ掴まているようにも見える。

「——シャルル、くん・シャルル君!？」

起きた東郷が勢いよく上体を起こす。よく見るとお顔が真っ赤である。

ふっふっ。ようやくやり返せたぜ。

「すっかり夜だな」

「え？あつ。ごめんなさい、付き合わせちゃって」

「いいって。俺としては東郷と一緒にまったりできて嬉しかったぜ」

たまにはこうやってゆっくりするのも良いもんだ。それも一人ではなく友人と共になら尚更。なにものにも代え難いものだろう。

「それじゃあ、俺は帰るぞ」

「ええ」

真っ暗になってしまった辺りを眺めつつ立ち上がる。手荷物など一つも持って来ていないため、すぐにでも帰れるが

「手、離してくれないか？」

いつの間にか両手で包みこまれた左手を見ながら、東郷へ要求する。だが、シャルルの言葉を聞いても尚ニギニギを止める気はない。

「暖かい」

「東郷の手も温かいぞ？」

何だか東郷とシャルルで表記が違うように思うが、気の所為だろう。決して加湿器を冠する者ではない筈だ。

「シャルル君、また明日ね」

温もりが去っていくの感じ、顔を上げる。その際に瞳に映ってしまった。今にも泣きそうな弱々しい瞳。何故、どうしてかはわからない。でも、見て見ぬふりなんて出来ない。

「泊まっていいか？」

「え」

ということ東郷宅にお泊り。親からの了承を得るかという壁があつたが、何故だか快く了承してくれた。なんなら一緒に夕食を囲んだ。めつちや美味しかったです。

その後は恙無く就寝の時間帯になつたのだが

「おやすみなさい、シャルル君」

「おう、おやすみ」

どうして東郷が隣で寝るのか。そういうことに俺は泊まっていとかと聞いた訳じゃないんだがなあ。いやいや、俺を信頼してのことだろう。

ちなみに布団は別々。流石に一緒に布団だったら危なかつた。

まあ、寝てしまえば問題ない。こういう時、英霊の体つてのはいいもんだ。寝ようと思えば寝れる。逃げ放題ってことだ。いやっふー

「ねえ、シャルル君」

「どうした？」

「逃げ道塞がれた者です、ども。」

まさか東郷から話してくるとは。すぐさま寝るものだと勝手に思つてた。一先ず、東郷に付き合おう。

「ありがとう。私の我が儘に付き合ってもらつて」

「構わないさ。いつだって俺は東郷の味方だからな」

天井を眺めながら応える。

俺がしたことは至つて普通だ。誰であつても友達を見捨てるなんてこと出来ないだろ？つまりそういうことだ。

「シャルル君、これからも宜しくね」

「おう。最期の瞬間までよろしくな」

何だか小っ恥ずかしい発言をしたような気がするが、さして問題はないか。本音だし。

「手、握ってもいい？」

「お安い御用」

今度はちゃんとした握手だ。布団が被らなくなってしまおうが、互いの体温で温まる。人肌はいくつになっても安心するな。

瞼を降ろし、思考を落とす。ただそれだけで俺自身が霧散する。どこまでも落ちる、落ちる——ただ一人で落ちる。

ああ、——温かい。